THE CENTRAL REVIEW

中央公論

春季大附錄號

第三十七年第[illegible]號　第四百七號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

純品質主義
鷹印帽子
タカ
フリーリノベイト（無料洗濯）

帽子に損徳あり

歐米では夏帽にウンと良いのを求めて、それが汚れゝば洗濯をして用ひますから、何時迄も新らしくて紳士の體面を傷けずに居ります。そこに進歩せる歐米文化の表象あり、又産業の優秀に赴く大原因であります。安いものは其時は買よいですが後が不愉快です。そして一夏麥稈帽子を三箇も御求めになる樣な無駄を生じます。

鷹印帽子は我國産品として世界的名聲を博してをります。それは洗濯すれば新しくなつて、長く良い體裁を保つからであります。

我國の現今は洗濯するにも完全なリノベター（洗濯法）が見當らない程お恥しい狀態です。

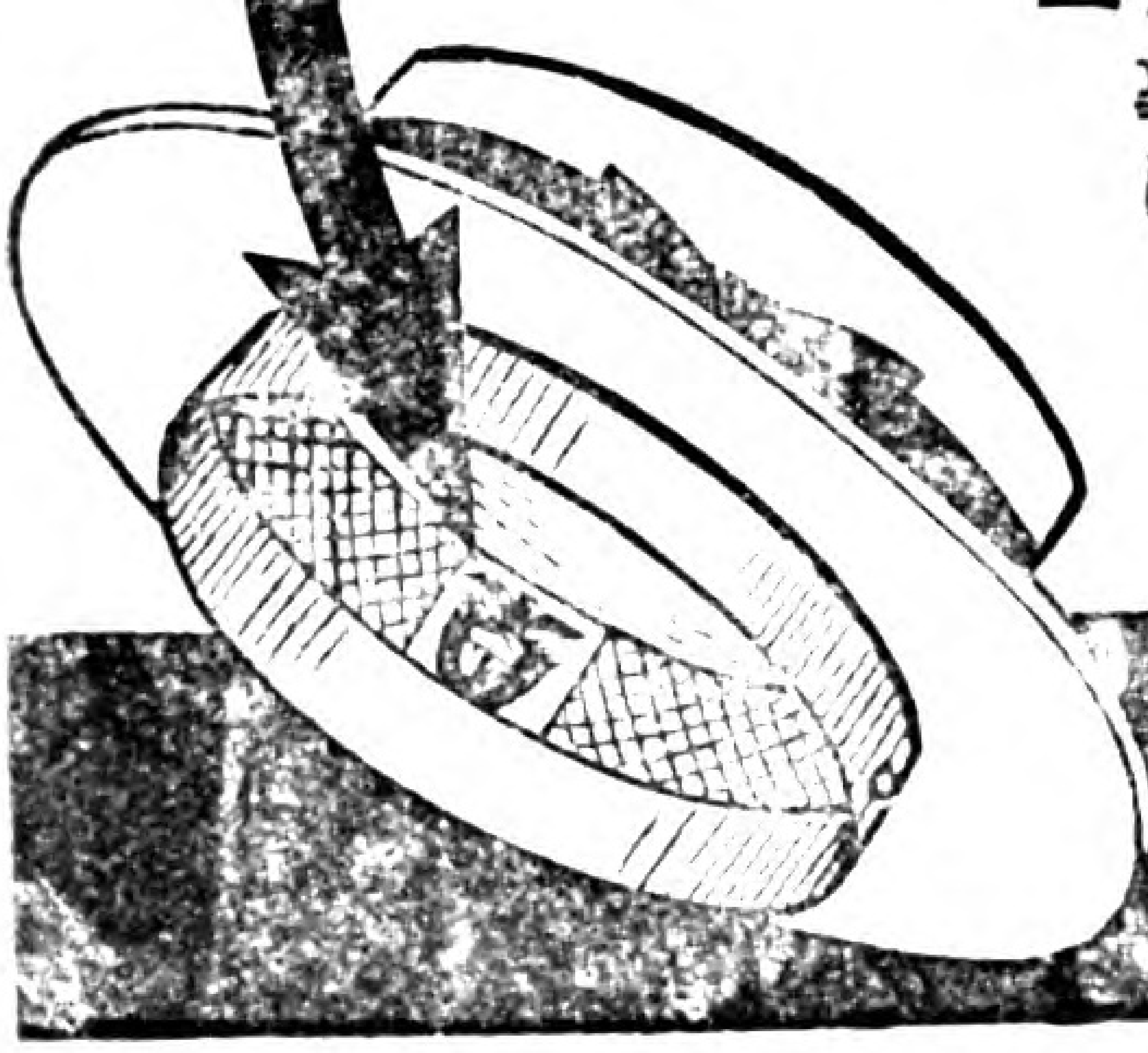
そこで弊店は今春より模範的洗濯部を開始し御愛用家直接の御要求に限り、鷹印マークのある本年度麥稈帽子より無料洗濯に應ずる事に致しまして、我純品質主義の徹底の爲めと文化啓發の上に一大貢獻せんとするに外なりません。

何卒安心して鷹印帽子の御愛用を！

是非共御遠慮なく洗濯部の御利用を！

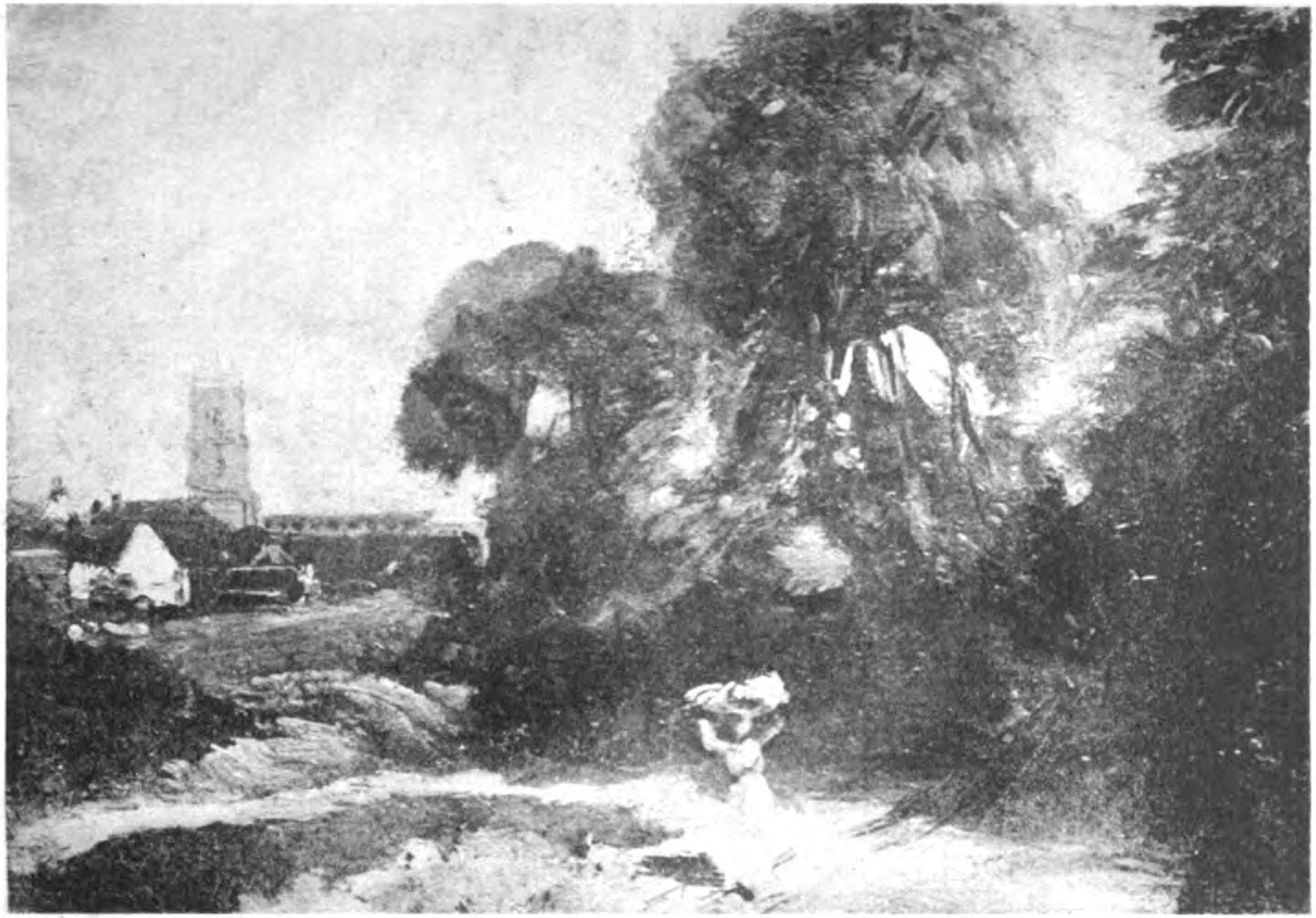
「鷹印帽子のリノベイト承所」は大阪大丸文化博覽會及各地一流洋品店帽子店に御座ります又御都合で直接弊社へ御送附になつてもかまひません

大阪　株式會社　高橋製帽所



◆說苑

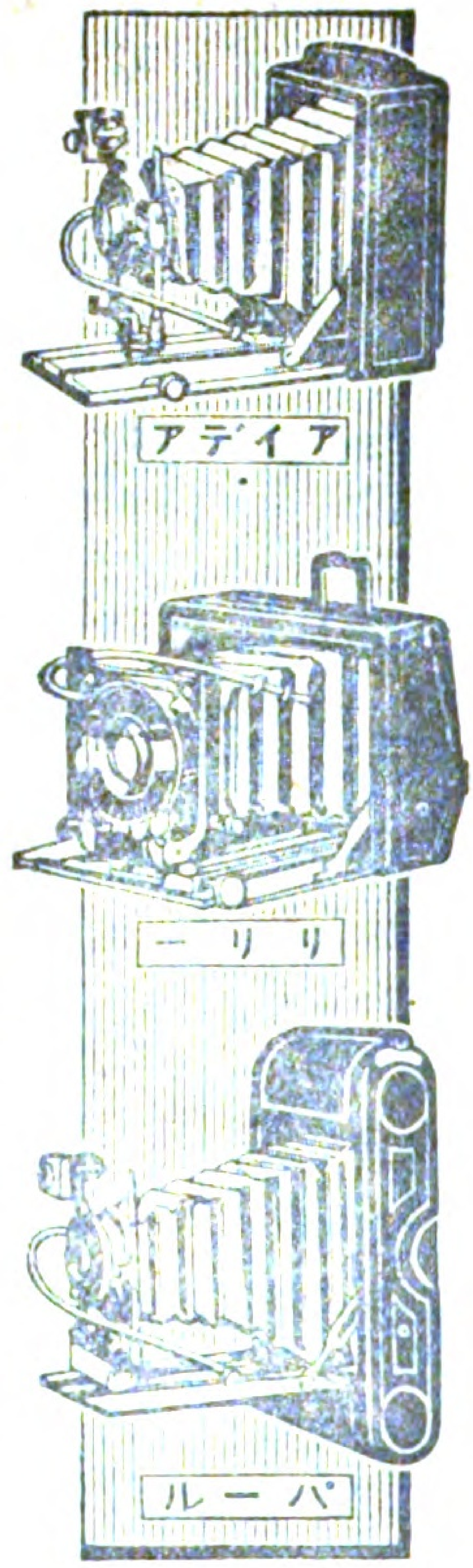

一番書きよい
プラトン萬年筆
削ずに書ける
プラトンシャープ鉛筆
体裁も
實質も
英米製品以上
PLATON
SHARP PENCIL.
FOUNTAIN PEN.
日本文具製造株式會社特製
中山太陽堂文具部發賣



VIEW AT STOKE-BY-NAYLAND CONSTABLE

◇泰西格言◇

眞の文明は遺憾なき寫眞の利用にあり



□カメラ界を風靡しつゝある理想的寫眞器

リリー、カメラ

パール、カメラ　乾板　フヰルム兼用

アイデア、カメラ　ピントも覗かる

種類　名刺形‖手札形‖葉書形（目錄進呈）

□平和博と小西の出品

□教育學藝館　寫眞器及附屬品

□化學工業館　印刷用品及インキ

□航空館　飛行機カメラ

□外國館　ホクトレンデル製品

東京本町二丁目　**小西六店**　大阪長堀橋筋支店


S.S.S
サンエス萬年筆
東京—大阪—福岡
細沼株式會社
名古屋—金澤—札幌

大正十一年

中央公論

四月一日發行

春季大附錄號

第卅七年第四號

第四百七號

如何にして今後の勞働問題に處すべき

紛亂昏迷の裡に議會も了つた。國民は漸く日比谷原頭の無意義な喧擾より其耳目を解放することを得たが、さて之から我々の頭を惱ますものは何かといふに矢張り依然として勞働問題であらう。他にも小さい問題は一起一伏送迎に遑ないことであらうが、併し何と云つても實質上我々の運命に關すること頗る大であり、形式上亦社會を震盪する底の勢を以て捲き起り來るものは、勞働問題に外なるまいと思ふ。

官憲と資本家とは、其の正理に根據すると否とを別たず、勞働者側の要求といへば徹頭徹尾之を斥けんとするや疑ない。其頑迷眞に憫笑に堪へぬが、併し所謂勞働者階級の主張が皆正理に合し總て之を支持せざる可らざるものなりやは、勞働問題に理解あり勞働者階級の境遇に同情ある者の間にも自ら議論の存する所である。此點に於て吾人は勞働運動に關する最近の傾向を、月並だが、急進主義と漸進主義との二大圈に分つことを得ると考へる。

三月の初め過激社會運動取締法案なるものが上院に提出された。天下の人翕然として其の無鐵砲を叫ぶに一致せる中に、一部の少數者の間に這の反對運動に反對せんとするものがあつたことは世人の氣付いた所であらう。其意に謂ふ。かゝる惡法の挑發に依て權力に對する反抗が遂に不可抗の勢をなし、以て社會崩壞の危機を速進せしめ得べしと。先是二月下旬普通選擧案の下院の問題となるや、この一派はまた大勢に逆行して其の通過に反對する旨の聲明を發した。尤も普選の通過を贊成せざる者には色々の種類がある。愚劣なる動機に出づる政友會一派は姑く別とするも、議會政治を信認する能はざるの前提の許に普選に反對する者の如きは、兎も角も鄭重に其の主張を聽く丈けの値はある。而して吾人の所謂急進主義者は、更に全然別個の動機より、即ち階級反撥の勢を促進するが爲めには有らゆる中間的改革を排するを便とするの立場より、普選の通過に反對するのであつた。憎い醫者を苦める爲には病人を殺した方がいゝ、中途半端の藥は最終目的の見地より觀て却て有害だといふの類である。斯うした考の人が昨今段々殖えつゝあるは大に注目すべき現象ではあるまいか。其の手段より見て直接行動派といはれ、現實を顧みぬ點より過激主義の名を得、又一擧に敵壘を挫かんと焦せるより破壞的革命派と稱せらるゝこともあるが、孰れも皆目的に突進し中間の進化的過程を無視するに於て一致して居る。

尤も我國の急進者流に果して破壞的革命主義の確信ありやは大に疑しい。破壞的革命に由て始めて彼等

の所謂新文化が生長するものだと云ふ思想が成り立つ爲には、社會の經濟的制度さへ變れば直に黄金時代が來るものと云ふ說を許すか、又は少くとも現在の悪制に惱んでゐるプロレタリアートは本來既に新文化創造の能力を十分に具有する（新しき制度の許に於て直に之を開展し得る）者だといふ前提を許さなければならない。而して所謂制度萬能論乃至唯物史觀や無產階級神聖論乃至教養無用論は、果して彼等の根本的信念となつて居るのであらうか。之は一つの大きな疑問だが、少くとも今日思想界に活くる者に對して右の假說が何等の權威をも有し得ぬことだけは言ふを待たぬ。

然らば急進主義の立場は、制度萬能論無產階級神聖論等の成立し得ぬ限り、其存在を續け得ぬものかと云ふに必しもさうではない。現に我國の今日に於て此立場は全く別の根據の上に支持されて居るではないか。そは何かといふに、勞働者階級に對する階級意識喚起の目的の爲である。即ち勞働運動發達の基本たる「階級意識の喚起」の爲には、其の社會に對する積極的意義を悟得せしむるよりも、消極的に搾取虐遇せらるゝ現實の經驗を嘗めしむる方が、遙に有効であり且遙に近道であるとせられて居るのである。斯くして我國では、鈍い者を劇藥を以て昂奮せしむると同じ樣な意味で、急進主義が採られて居る傾がある。

併し藥は時に利き過ぐることがある。階級意識の喚起の爲に用ひた急進主義といふ藥は、遂に當初の素志に反して破壞的革命を誘致し結局自他共に傷くが如きことなきを得るか。元來階級意識を喚起すること丈けなら、緩漫ながら他にもつと健實な方法がある筈だ。急いで達したる目的には時に喪失の危險あるも、確實に一歩々々履みかためて到達した目的は、やがて身に固着して離さうたつて離れない。即ち目的の眞の到達は要するに不斷の努力に在る。此の見地より漸進主義は勞働運動に於て亦一つの大なる底流たるべきであつて、又現に底流となつて居ると思ふ。

漸進主義と急進主義との孰れが國家の福なりやは、少くとも議論としては疑を容るゝの餘地はない。只此二者の孰れが近く我國に盛行すべきやの客觀的判斷に關しては、我々大に官憲と資本家とに警告を發するの必要を見る。急進主義者は、プロレタリアートの動もすれば小成に甘じて階級意識を鈍らすを恐れて中間的改革を非とするのだが、官憲と資本家とは、寧ろ反對に勞働者階級を目して隴を得て蜀を望む所謂飽くとを知らざるの徒となし、對抗の必要上何等の要求にも一應は必ず讓歩を肯ぜざらんとする。而して這の頑迷なる態度こそ實に勞働者階級を不當に激成して遂に急進主義の跳梁を促すことになるのではないか。この意味に於て、最近の勞働界の不安は、冷靜に觀て吾人は其責の大半を官憲と資本家とに歸せなければならないと思ふ。

中央公論



第卅七年第四號
春季大附録號
第四百七號

徹底個人主義者の戀愛觀・結婚觀

田中王堂

一、ルネサンス運動の歸着としての性道德の動搖

直接に、若しくは、間接に、ルネサンスに依つて創められた文化の感化の下にある總べての國民が、現に閱しつゝある體驗の中で、最も多くわたくし共の注意に値するものは、性道德に關する思想と行爲とが前代未聞の程度に、夙に、激烈なる動搖の中に投じられて居ることである。そして、これはルネサンスの理想そのものが捲き起した波瀾の終結である。尠なくともさう見ることに依てのみ、始めて、現にわたくし共が閱しつゝある性道德に關する思想と行爲との動

播の眞志向と眞價値とを理會し、測定することが出來る、其の他の見方を以てしては、どんなことをしても、其等を理會し、測定することは出來ないとわたくしは確く信じて居る。

ルネサンスは其れの機會と方便とに於ては、（ルネサンスの稱呼が示して居る如く）如何にも、復興であつたが、其れの結果と意義とに於ては、新生であつたのである。あの精神の首唱者と、あの運動の宣傳者の意思は、久しくキリスト教に依つて馴致された偏執なる道德觀と、枯乾せる自然觀との桎梏を脫して、曾てギリシヤ人の享樂した醇正なる道德觀と、豐潤なる自然觀とに復歸しようとすることにあつたとしても、其れの趨勢は、彼等の意思を超え、彼等の意思に反して全然新らしいものを䤈醸し、體現することになつた。新たに䤈醸され、體現されたものは、固より、キリスト教的のものではなかつた。が、同時にギリシヤ的のものでもなかつた。其れは、最も含蓄ある意味に於て獨り近世的と呼ばれる、又、呼ばれなければならぬものであつたのである。

實に、ルネサンスは古代生活と、近世生活とを劃する劃線となつたのである。古代生活と、近世生活との相違は、決して一方に於て粗鬆であり、簡易であつたものが、他方に至つて緻密となり、複雜となつたといふやうな相違ではなくして、生活に關する理想そのものの性質の相違、隨つて、其等を實現する方法の樣式の相違であつたのである。若し（誇張に失する嫌ひあり、事實を誤解せしむる恐れはあるが、）ニィチエの謂ふところの「價値の轉換」が人間の歷史に關して可なり許され得る程度に當て篏る場合が一度でもあつたとしたならば、其れは人間が古代生活より近世生活に徙步したこの場合に限られると思はれる。

それならば、古代人の理想と、近世人の理想とは如何なる點に於て相違するか、その相違は如何ほどに大なるものであるか。是れを詳述し、細論しようとするには、一部の文明史を藉りなければならぬことであるから、わたくしは、こ

こには、纔かに兩者の特徴を箇條書きとして、兩者の理想をして互に反襯せしめることに止めなければならない。

一、古代人に取つては、靜止が物の常態であつたが、近世人に取つては、運動が物の常態となつた。

一、古代人に取つては、物の樣式は永久に既定(finite)であつたのであるが、近世人に取つては、其等は未定、若しくは、不定(infinite)である。其等が或る樣式を有つに至るのは、獨り人間の努力に依るのであると見做されることになつた。

一、古代人に取つては、類型が實在であつたのであるが、近世人に取つては、個體だけが實在であることになつた。

是等の箇條書きは極めて概括的ではあるが、わたくし共にして是等の反襯に含まれた意義と、其等より、それぞれ、自然に發動して來なければならぬ總べての事件や、總べての制度の如何なるものであるべきかを推測する時、古代人の生活は何故にあのやうな樣式を取つたか、近世人の生活は何故にこのやうな樣式を取つてゐるかの理を髣髴することが出來ると思ふ。斯くして、彫刻が古代人の藝術であつたのに、音樂が現代人の藝術である。幾何が古代人の數學であつたのに、代數が現代人の數學である。之れと同じく、特殊の新らしき事實を一般の舊き方法に充て嵌めることに依つて、生活の統一を圖らうとした論證、即ち、演繹法が古代人の哲學であつたのに、特殊の新らしき事實のはたらき振りを忠實に觀察し、其れに含まれた共存の趨跡を整頓し、表識することに依つて生活の統一を圖らうとする實驗、即ち、歸納法が近世人の哲學である。

要するに、近代生活の理想の特徴は、一度、ルネサンスの洗禮に依つて、人間が前代未驗の程度に、夙に、自己の生活の尊貴と、自己の力量の權威とに目覺めた結果として、それまで、彼れの生活の改造を阻害した總べてのものを(其等が自然に屬すると、社會に屬するとに論なく、)靜的に、既定的に、階級的に、想像した見地を棄てゝ、其等を悉く動

的に、不定的に、個體的に、觀察し、さう觀察することに依つて、彼れの生活の價値を創造しようと志して來たところにあるのである。然し、近世人の取つた是等の三つの態度といふものは並行して存在するのではなくして、一つの見方より必然の發動として現はれる三つの補角として成立するのであるから、是等を約して、近世人の生活の理想の特徴に、そこに協同生活に入り來たる各個人の幸福を主體として、其れの要求に應じて、絶えず適當な生活條件を創造して行くところにあると言へると思ふ。近世人のこの一大理想はまだなかなか實現されるには至つて居らないのは無論のこと、其れの意味さへも十分には理會されるには至つて居らないが、こゝ、五百年の間近世人の主として努めて來たことは、この一大理想を實現して行かうとすることであつたのである。わたくしは、之れが何よりの證左として、近世生活に於て次第に發達して來た實驗科學と、徐々に確立されて來たデモクラシイの精神及び制度との二つを擧げる。

斯く個人の幸福を主體として、其れの要求に應じて絶えず適當な生活狀態を創造して行くことを理想とする近世人の努力は、この理想の實驗を標的として、生活を組織する習慣と、制度と、情操と、行爲との一切を吟味し、苟くもこの理想の實現に扞格するものが見出だされた場合には、其れを批判し、改革するに何んの用捨もあるべきではない。嘗てこの標的を以て政治は批判され、そして、現に其れが改革は行はれつゝある。嘗てこの標的を以て經濟制度は批判され、そして、現にこゝにも其れが改革は行はれつゝある。今、最後に、性道德も同じ標的を以て批判され、其れが改革に着手されるに至つたのである。

二、性道德の動搖は何を意味し、何を志向するか

ルネサンス運動も、其れの態容よりすれば、或は藝術の勃興となり、或は科學の創始となり、或は文學の更生となり、

或は信仰の改新となり、或は、下つて、政治や産業制度革命の企てとなつたのであるが、是等は凡べて單一なる精神より發し、同一の志向に依つて支配されて居たのである。つまり、人間が自己の生活の尊貴と、自己の力量の權威とに、前代未驗の程度に、夙に、目覺めた自然の結果として、新たに萠し來たつた理想を憑據として、其れの實現を自由にするために、生活を組織するあらゆる成分を改整して行つた當然の結果に外ならない。されば、是等の總べての主義は悉く汎く、遠く、人間解放の方便としてはたらいて居るのであつて、固より其の間に價値の高下は認められない。然しながら、ルネサンス運動は其の初め、當時の少數の貴族、若しくは、ヂレタントの手を通じてなされた、貴族主義の上に立つたギリシヤ文化の復活に依つて惹き起された運動であつたがために、その時、その時に立せられた目的上、爲された宣言とに至つては、次第に推移するところのあつたのをわたくし共は見るのである。其の傾向を概觀すると、大まかな比喩ではあるが、其れは一つの金字塔形を作り、其れの頂點より工を起して、次第に其れの底邊に向つて行つたのである。協同生活に入り來たる總べての個人の啓發と幸福とが目指されたのであるが、其れが目指されることがレネサンス運動の永遠に亘つて、人間の歷史に特殊の意義を有たしめたのであるが、其れの主張が藝術、科學、文學等に對してはたらく間は、纔かに少數者の生活の修養的、末梢的外面の解放が目的とされ、其れが信仰、政治、産業制度等に關してはたらくやうになるに隨つて、だんだんに一般民衆の生活の實際的、根柢的側面の解放が目的とされて行つたのである。ルネサンス運動は（前に尠しく説明を試みた如く生活と其れの道具とを動的に、不定的に、個體的に、見る見方を創造しようとする努力であつたから、）其れが理想に於てデモクラティックでなかつたならば、何物でもあり得ないのであつたが、其れが十五世紀、十六世紀、十七世紀の三世紀に亘つてデモクラティックであつたのは、たゞ含蓄に於てだけあつた。其れが現實に於てデモクラティックになつたのは、十八世紀、十九世紀に至つてのことである。今や二十世紀

に入つて、其れが更に性道徳の改善に指を染めるに及んで、ますます一般民衆の生活の實際的、根柢的側面の解放が目的とされることになり、一層現實に於てデモクラティックになつたのである。

こゝには、ルネサンス運動が政治と産業制度と、性道徳とにまで進んで以來、其れが何故に現に其れが取つた順序を取つたかの理由に限りて一瞥見を與へて見たいと思ふ。

人間が、だんだんにおのれの性情を理解するに隨つて、彼れは幸福なる生活に必須なる條件の何んであるかを發見するに至つた。其れは、協同生活に入ることに依つてのみ、始めておのれの才能を發揮することが出來る人間にあつては、各個人は、相互に、自己に對しては目的となり、他人に對しては手段とならねばならぬから、幸福なる生活に必須なる條件は、各個人が一個の目的として樂しく活動することは、同時に最も善く一個の目的たる他人をしてそれぞれ、樂しく活動せしむるやうに、協同生活の狀態を作るにあることである。そして、是れは正しき意味に於てデモクラシイの理想に他ならない。して見ると、デモクラシイは全然倫理的のものであらねばならぬ、倫理的のものとして、始めて最も汎く、最も深く、最も精しく、何等の遺すところなく滲さるべく、概括さるべきものであらねばならぬ。然るに、近世生活に於て其れが三つの段階を取り、而も、其れが政治的、經濟的、性道徳的の順序で、三つの段階を取つたのは、どういふわけであるか。

デモクラシイがおのれの理想を實現しようとしてはたらき出し、何より先きに氣付いたことは、この目的を障げる數多くの障碍が、法律と制度との形を以て存在して居たことである。デモクラシイはこの障碍さへ取り除かれたならば、おのれの理想は直ちに實現されるものと輕卒に想像し、この想像の下にデモクラシイの使命はただ個人の行動の自由を束縛する法律や制度の改廢に限られると結論した。生活に於て最も惡しきことは、個人の自由を束縛することとである。

最も善きことは、出來るだけ尠なく其れを束縛することである。この意味に於て政府は必然のものであるが、確かに必然の害惡である。デモクラシイが其れの發動の初期に方つて、斯く考へたのには相應な理由はあつた。各個人が、それぞれ、おのれに固有の才能を、それぞれ異なつた境遇に於て、異つた方法に依つて開發することが幸福を獲得する第一條件であることに目覺めて來た時に、職業の撰擇のみならず、住居の移動さへも傳統的に制限した法律や制度が、如何に彼等の眼に不合理なものと映じたかは、容易に想像することが出來る。されば、其等の不合理なる法律や制度が取り除かれた曉には、黃金の世界は直ちに實現されるものと彼等が想像したのには十分の理由はある。

然し、この見地でデモクラシイを主張した人々の一般に見逃がした一事があつた。それは斯くしてあらゆる干渉より解放された各個人は、現に、如何なる境遇に置かれ、如何なる性情を以て生きて居たかと言ふことである。彼等は智力に於て、財產に於て、社會上の地位に於て、極めて不平等なる境遇に置かれ、そして、他人の利益を犧牲としてまでも、尠しでも自分の利益を增進せしめようとする私慾を抱いて生きて居たものである。かゝる狀態に於て、各個人があらゆる法律や制度より解放された結果の如何なるものであるべきかは明瞭である。實力の隔絕せる二人の個人の間の自由契約は、その實、强請契約に過ぎぬ。眞の公正は纔かに法律的に規定されたものではなくして、實質的に保障されるものでなければならない。して見ると、個人と個人との間の關係に於て、眞の公正を成立たせる唯一の道は、彼等の各をして出來るだけ均等の實力を有たせることである。そして、實力を得るの道はいろいろある。智識に長ずるのも其の一つである。品性に優れるのも其の一つである。才幹を磨くのも其の一つである。然しながら、わたくし共が現に所有する文明の種類と、程度とに於ては、一定の財產を運用することがあらゆる種の實力を獲得することに關して、尠なくとも一つの大切なる要素となつて居る。斯くして、デモクラシイにして、一旦政治的に宣言したものを實現しようとす

るならば、其れは必然に經濟的に保障されなければならないことになる。

それでは、政治的に宣言されたものが、經濟的に保障されるならば、デモクラシイの理想は完全に實現されたと謂はれ得るであらうか。否、決して。デモクラシイの理想が協同生活に入り來たる總べての個人をして聰明たらしめ、幸福たらしむるに役立つには其れは、更に、も一つの階段に進轉しなければならなかつた。卽ち、其れは道德的になることであつた。

嘗て、ベエコンは知識と智慧との關係を論じて、知識は其れ自づからに正しき用ゐを知らぬ。其れを正しく用ゆるものは智慧であると言つた。財產は多くの善きものの材料ではあるが、同時に多くの惡しきものの材料ともなり得る。生存の保障の價値は其れに依つて各個人が、それぞれ、生れ享けた天分に隨つて、貨物の生產に、科學の研究に、藝術の創作に、乃至、趣味の向上に、各、才能をはたらかせる餘裕を得るところにあるのである。然し、彼れをしてさうなさしめるところのものは、獨り、この世の聰明と幸福とを增長する目的を以て、適宜に財產をいろいろの使途に分配し、其等の使途を公正に調和し得る道德的の形を取つたデモクラシイだけである。

既に道德的と言へば、當然、男女の間の關係も、而も、其れの最も根本的のものとして含まれなければならないのであるが、不思議なことには、從來のデモクラシイに在つては、之れに關する考慮は、全然、不問に附せられて居た。各人平等の思想を終生力說したルウソオの『エミイル』に於ても、女子は纔かに傳統的に、從順に男子に侍づくものとして取り扱はれて居るに過ぎない。米國獨立宣言の第一句として有名なる『人は平等に生る』といふ中にも、女子は『人』の觀念中に含まれて居らなかつた。事實、さうである以上は、間接に、審美的にではあつたが、あれほど、奔放に、雄偉に人間の解放を叫び、且つ歌つたロオマンチシズムの文藝に於て、女子がいつでも美しき、然し、弱き天使としてのみ見

られて居たことに、何んの不思議もない。

總べて生活に於て、根本的の、若しくは、中核的の興味より發生して、其れを支配する一つの原理にまで組織されたものは、其れが生活に取つて大切であればあるほど、それだけ、おのれの改造に對して頑强に抵抗する。斯かるものは、其れが不幸にして輕卒に誤れる方法に依つて取り扱はれる時には、其れほど大切ならざるものに比して、生活の存續と幸福とを脅かすことが、遙かに大きいからである。デモクラシイは生活の殆どあらゆる部分の組織を變形して來たのに、獨り性道德の組織がこゝ數百年の久しき間、不思議な程に一向に停立と低徊とを事として居たのは、この理由のためである。

然し、生活の他の部分の改整より自然に生ずる要求と壓抑とが募りに性道德の改整を促して止まざる以上は、一旦破壞された生活の動的平衡を囘復するために、性道德がおのれの改整を圖らなければならないのは、至つて見易き道理である。前世紀の終りより今世紀に入つて、急劇に生じ來たつた性道德の動搖の所因はこゝにある。して見ると、其れより發する現象と、事件とは、紛糾錯綜を極めて居るが、窮極、其れの所期するところのものは、決して索め難くはない。一言にしてこの志向を語るならば、過去に規定され、若しくは、沈澱された、そして、今日に於て朽廢に瀕して居る性道德に關する情操と習慣と制度とを批判し、訂正して、わたくし共の功利と、美感とに適合せしめようとするところにあるのである。この窮極の所期を達するには、そこにいろいろの方法があり得る。然し、如何なる方法があるにしても、そして其等が、それぞれ、如何なる價値を有するにしても、尠なくとも、わたくし共の理論――現代生活に處する必要に應ずるために涵養されたわたくし共の理解の光りに照らして、性道德の條件と、意義とを考案することは、之れが必須の準備であらねばならぬ。この見地よりして、わたくしは、わたくしの判斷と、情操とが正しとする視點より

戀愛と、結婚と、家庭との事實を解釋し、性道德の可能的改整を暗示したいと思ふ。

三、戀愛の本質

人間の生活は一つの流轉である。其れを構成するものは肉體にしても、精神にしても、時々、刻々に、生滅を續けて暫らくも息まない。時々、刻々に事々、物々經過し行く經驗の中に在りながら、そこに安定を求め、平衡を保つて行かうとする努力を以て人間の生活の意義は始まると言つてもよい。時々、刻々に生滅する知覺の中に安定を求めるために、知識は生じ、時々、刻々に生滅する衝動の中に平衡を保つために、理想は生じて來る。象徴主義者は藝術の職分を解釋して、其れは瞬間を以て永久を捉へるものであるとか、瞬間の中に永久を見るのであるとか、と言つたが、(大抵同じことにはなるが)之れを逆にして、永久を以て瞬間を捉へ、永久の中に瞬間を見ることはわたくし共の一切の努力の特徴であらねばならぬ。畢竟するに、わたくし共が生きるといふことはさうすることなのである、さうすることに依つてわたくし共は始めて生き得るのである。この意味に隨つて、スピノザの sub specie aeternitatis も解釋されて、始めて處世の覺悟になると、わたくしは考へる。

流轉を以て其れの特徴とする人間の生活は、二重の方法に依つて其れの繼續が圖られねばならぬ。營養がその一つであり、戀愛がその一つである。營養に依つて個人的に彼れの身體の消費は絶えず補充されなければならず、戀愛に依つて種族的に彼れの生命の斷滅は絶えず防止されなければならぬ。人間は營養の攝取に依つて、始めて或る期間に亘つて彼れの身體を保存することが出來、戀愛の滿足に依つて始めて彼れの子孫を無窮に遺して行くことが出來る。彼れに、どれ程生活を豐富にする欲望があり、どれほど文化を發達させる能力があつても、若し彼れにして瞬間にして死滅する

ならば、彼れには彼れの生活を正當にする道はないであらう。又、たとひ、瞬間にして死滅しないまでも、彼れにして子孫を殘さずして死滅し了るならば、彼れには彼れの文化を發達させる道はないであらう。して見ると、人間の性情が、現にわたくし共の見る如きものである以上、營養の攝取と戀愛の滿足とが彼れの二大本能となつて居るのは、極めて自然である。

人間は營養の攝取と、戀愛の滿足とに依つて、常に未來を對象としてはたらき、時々、刻々に、現在の自己を超越して居る。この意味に於て、兩方の本質は等しく理想的のものである。然し、どちらが一層理想的であるかと言へば、其れは、勿論、營養攝取の方ではなくして、戀愛滿足の方である。何故ならば、自己完成の本能は、前者に於けるよりも、後者に於て一層汎く、廣くはたらいて居るからである。

人間の生活に見出されるあらゆる事件の神秘を開く鍵は、其等はその初めに於て、悉く自然的、即ち不合理的である。然し自然的、即ち不合理的であるものも、發展するに隨つて、そこに潛在する固有の性質の發動に依つて、自づから一つの組織を取り、終に理想的、即ち合理的のものとなると言ふことを會得することである。この鍵はあらゆる事件の神秘を開くに大切なものであるが、特に、其れは戀愛の神秘を開くには必須のものである。世人の偏見には自然的と、理想的とを表現上の差別としないで、實質上の相違と誤解する傾があるところから、戀愛に關しても二種の極端なる見解が生ずることになつた。一種の見解は其れを卑下して自然的のものとし、之れを崇拜して理想的のものとして居る。是等の二つのどちらの見解に偏するも、戀愛の眞相は到底理會することは出來ないとわたくしは信ずる。戀愛は自然的でありながら、一層適切に言へば、自然的であるがために、理想的となり得るのである。戀愛が自然的であるのは、其れの實質の上からであつて、其れが理想的であるのは、其れのはたらきの上からである。或る人が、彼れの戀人のために

橋下に溺れたり、ヘレスポントの怒濤を横ぎつたりするのは、如何にも戀愛の理想的たることを說明するが、この事實は、同時に、其れが强き本能に根ざして居つたために、それほどまでに理想的になり得たことを證明するのである。深く地下に根を張ることに依つて始めて天に冲する大樹となることが出來るのである。

わたくしは、戀愛の『神聖』を高調するために、性欲と戀愛とを區別しようとする世の論者の所爲に同ずることは出來ない。多分彼等は自分の語つて居ることが何んであるかを理會せず、又、理會しようともしないで、たゞ狂吟的に（rhapsodically）そんなことを語つて居るのであらう。固より戀愛は人間の生活に屬するあらゆる他のものと等しく、經驗と、反省とに依つて敎育され、統一され得る。混沌たるものより整頓されたものになされ得る。然しながら、非性的に生殖する動物に在つては兎に角、性的の方法に依つてのみ生殖する人間に在つては、如何なる段階に於ても、性欲のはたらくところに、そこには必らず、戀愛の萠芽を體驗される。戀愛を離れて性欲の存在を想像することの困難なことは、性欲を離れて戀愛の存在を想像することの困難なると同一である。畢竟するに、是等の論者は今でも愚にも付かない靈肉二元觀の僻見の囚となつて居るのであらう。一體、靈とは何んであるか。肉とは何んであるか。靈といひ、肉といつても、どちらも等しくその質を同じうする人間の欲望そのものではないか。そして、たまたま、調和したる欲望に靈の名を附し、調和を經ざる欲望に肉の名を附したのに過ぎないではないか。斯く見ることの眞理なることは、靈と肉とが對立的に說かれて居るに拘はらず、靈が尠しでも肉に對して、權威を有ち得る一事に照らしても明かであると思ふ。何故ならば、若し靈と肉とが全然異質的のものであるならば、どんなことをしても、靈が肉を支配することは、有り得べからざることであると考へるからである。

生活し行くに隨つて、矛盾はおのづから生じ來たり、其等の矛盾を調和して生活の平衡を動的に維持するがために、

本能的のものを理性的と化して行くのは、人間の活動の一般特徴である。戀愛も、亦、この選に漏れない。人間が經驗を重ね、興味を廣め、欲望の數を增し、質を高めて行くに隨つて、彼れに取つて幸福であり得る條件は、だんだんに微妙になり、むづかしくなる。戀愛と、他の種の欲望の間にも矛盾は生じ、戀愛そのものの對象の間にも、數多の競爭が生じて來ると、戀愛を中心として是等の矛盾が調和されなければならぬのみならず、是等の競爭の中より選擇が行はなければならぬことになる。人間の生活は營養の攝取と、戀愛の滿足とをそれの存續の第一の、そして、最低の條件として出立するが、其れが發展するに隨つて、彼れに附與された衝動は、殆と無限に分化して行くから、其等を統一し、助成するために滿足を與へるに必須の條件は數多く、又、複雜したものとなる。無論、是等のものも、さきの最初の條件より派出したものではあるが、それ、ぞれ（比較的に言つて）獨立の中心點を取ることになる。宗教、産業、科學、藝術、道德、交友、政治生活等の追究と、完成との欲求を滿たす條件が其等である。さうなつて來ると、最初に、殆ど生活の半分以上を支配して居た戀愛は表面其れの勢力の範圍を狹められて、是等の欲望に依つて形造られる協同生活の中に入り、只、同格の一員としてはたらくことに依つて、其れに與へられた、或は、其れより期待される役目は滿たされることになる。斯くして戀愛の上に來たる變形を、其れの生活化と呼んでもよいし、又、其れの崇高化と呼んでもよい。そして、之れは普通に戀愛が文明人の生活に於てはたらく普通の狀態である。

戀愛は盲目である、といふ古い諺は、確かに其れの一面の眞理を道破して居る。或る個人が、彼れの戀愛の對象に對して爲す評價は彼れが、他の種の對象に對して爲す評價に較ぶれば、確かに主觀的である。最も强烈なる本能の發動として、彼れは彼れの戀愛を滿たす對象を探しつゝある。何物にも先きだつて、其れの欲求は滿たされねばならぬ。この欲求は（特に、そこに對象の間に競爭のない場合には、）彼れを驅つて忽ちに偶然に出遇つた最初の一人に最適者を見出ださせ

る。彼れは、彼れの憧憬する理想の實現をその中に見出だすのである。それも其の筈である。何故ならば、彼れの見出だす卓越した性質は、彼れ自身が戀の魔力に依つて、其れの中に先づ投入したものであるからである。然しながら、戀愛が既に對象を獲て其れの欲求が滿たされるや、否や、生活は焦躁の狀態より靜平の狀態に歸せねばならぬ。斯くして、一時孤立して生活の平衡を破る要素としてはたらいたものは、反つて、一層强固なる基礎の上に其れの平衡を保持する要素となるのである。

經濟學者は、利用價値と交換價値とを區別する。利用價値とは、或るものが獨立して一つの欲望を滿たす時に有つて居る價値である。交換價値とは、實際の場合に於て、有限の能力に支配されて生活に必要なる他の種の欲望を滿たす物に對照されて、若しくは、其等と協同して取るところの價値である。價値が利用價値より交換價値に進んで來ると、其れは絕對的より相對的になる。然し、さうなることに依つて、生活全體に對して一つの作用となるのであるから、價値は減じたのではなくして、反つて增したのである。戀愛の發展に關して、其れの經過は全然同一である。

その折々に異る女性に戀して行つたドン・ヂュアンの戀愛と、一人の女性に對する戀に執着して一生を終つたダンテの其れとの間に、單に戀愛としては、意義に於て何等の相違もない。前者の戀愛が虛僞のものであつて、後者の其れだけが眞實のものであつたといふとは言へない。然し戀愛を生活の一機關として作用的に考察する時には、前者の戀愛と、後者の戀愛との間には價値に於て多大の相違がある。されば、水草の如く浮動し、亂麻の如く紛紜する種の戀愛に心身を蕩揺させて一生を送ることは詩人の謳歌するところのものではあるが、合理生活を欣求する人々の實現に努むべき種の戀愛は、熾烈でありながら澄明に、敬虔にして同時にロオマンティックたるを失はず、生活の一機關として其れの全體に對して熱となり、同時に光りとなつて行くものであらねばならぬ。然し、この種の戀愛を體驗し、體得するために

は、何人にしても、之れが準備として戀愛の性質に關し、健康なる生活に於て其れが占める位置に關して、相當の知識を有し、相當の商量を費やすことを怠つてはならぬ。

四、結婚を通しての自然性の合理化

ダンテの『神曲』地獄篇に於て、パオロとフランチェスカがこの世に於て不倫の戀に陷つたがために、是れが罰として地獄に投ぜられ、ふら／＼と風に吹かれながら、相擁して永久に相手の手から離れることを許されなかつたやうに描かれて居る。フランスの批評家ミュッセイはこの一節を評して、二人の戀人をこのやうに處置することは、彼等に取つて妙しも罰にはならない、永久に離れずに抱き合つて居るといふことは彼等の本望であらねばならぬ、と言つたさうである。哲學者サンタヤナはこの意見を駁して、戀愛の事件に對しては、矢張りダンテはミュッセイの先輩であつた。この場合に於て、罰の意味は是等の二人が永久に戀愛の他、何事をもなすことを禁じられたところにある。何人にしても、たとひ、其れが戀愛であるとも、このやうに、永久に、たゞ一事を固執するやうに宣告されたならば、其れの單調なる苦痛に堪えられないであらう。これが彼等に取つて最大なる罰である。畢竟するに、ダンテは戀愛の事柄に關しては、稀有の天才であつたがために、この眞理を洞察したのであるといふ意味のことを言つて居る。こゝに、サンタナヤがダンテの志向を眞に解釋して居るかどうかは別として、パオロとフランチェスカのやうな間柄にあつても、永久に抱擁にだけに限られ、其れ以上、生活全體の共調にまで、つまり、道徳的にまで發達しない戀愛には、必らず何時か倦怠と寂寞とを感ずる時期が來るに相違ないと想はれる。

尋常の場合に於て、戀愛の意義は結婚に到つて始めて完成されるのである。戀愛は花である。結婚は實である。戀愛

に於て憧憬であつたものが、結婚に到つて所有となり、戀愛に於て候問であつたのが、結婚に到つて共棲となり、戀愛に於て快樂であつたものが、結婚に到つて習慣となつて落着く。ヘエゲルは結婚した時に『自分もこれで始めて一個の男児となつた』と語つたさうである。世の中には、いろいろの事情より、若しくは、當人の選擇より、一生、獨身生活を續けて藝術に於て、學問に於て、乃至、博愛事業に於て、卓越した貢獻を彼等の同胞の幸福のために爲す者がある。氣高き人々の靈に對つてわたくし共は感謝せねばならぬ。然しながら、社會人たる資格よりすれば、男子にしても、女子にしても、結婚を通して、彼れの人格は始めて完成の緒に就いたと言つて宜い。

男女の二人を戀愛關係にまで引き付けるものに三つの要素がある。それは、美と、快樂と、道德的一致とである。隨つて、結婚生活を支持するのにも、是等の三つの要素が與つて力あることは明らかである。然し、結婚後に於ては、是等の三つのものの相對力に於て多少の消長なきを得ない。普通の場合に於て、普通の人に取つて、道德的一致（この言葉の中には氣質や、教養や、趣味や、信仰や、職業に關する一致を含めて）が美や快樂を凌駕するに至ることも明かである。この事實は、結婚の關係をして戀愛の關係よりも一層恒久ならしむる。されば、女子は戀愛を經ずし、成り立つた夫に對して、さきの眞の愛人に對して懷いたよりも一層の愛情を懷くことは事實として往々指摘されて居る。今日、わが國に於て、成り立つ夫婦の九分通りは、戀愛關係を經由せずして成り立つたものであるが、それであるに拘はらず、彼等の大部分の關係が案外に圓滿に保たれるのはこの理由からである。

道德的の一致が幸福なる結婚の第一保障であるとすると、幸福なる結婚に導く道程の如何なるものであるべきかに就いては多言を要するまでもないやうに思はれる。（男子も女子も、廣き協同生活を組織する一員として、てんでに個人的に、社會的に幸福なる生活に關する大切なる條件の自覺に達して居る、或は、其れに達し得る能力を獲て居ると假定し

て、)其れは、一、道德的一致の何ものであるかを理解するの知識を養ふことと、二、自己と相手との間に、果して道德的一致が存在するや、否やを發見する機會を捉へることとであらねばならぬ。言ひ換へれば、聰明なる自由選擇の方法に依る一事であらねばならぬ。"To err is human, to forgive is divine."(過ちを犯すのは人間であつて、其れを宥すのは神である。)自由選擇に成る結婚にしたところで、人間の思慮と行爲との結果であつて見れば、無論、過ちなきを保障することは出來ない。然し、其れを他の二つの方法に成るものに比する時、其れが遙かに合理的であり、隨つて、其れの成績に於て良好なるべきは一點の疑を挾む餘地はない。

時處を超越し、社會の文化と個人の修養とを無視して、絕對に自由結婚が專制結婚、若しくは、干渉結婚に勝るといふやうなことはない。政治の運用に就いて見ても、協同生活の窮極理想よりすれば、合議政治の專制政治に勝ることは自明であるが、社會が或る文化に在り、民衆が或る修養しか有たなかつた時代に方つては、專制政治の合議政治に勝つて居たことは歷史の證明する事實である。人間の窮極理想よりして、結婚の方法として、自由結婚が最優のものたることはわたくしの確信するところではあるが、ある社會の文化と、或る個人の修養とを目安として、其れの價値が評價されることとなると、必らずしも其れは無制限に、最優のものであると言ふことは出來ない。それでは、そこに其れの適否を決定する標準として、何かあるか。一つある。其れは一般民衆が既に衝動として專制結婚、若しくは、干渉結婚の不合理的なることを感じて來たならば、其の時こそ、理會として自由結婚が合理的のものとして宣傳され、實行さるべき時機であるとすることである。そして、現下に於けるわが國は正にかゝる時機に在るとわたくしは確信する。

五、家庭の利益と障礙

戀愛の中に結婚の志向が假定されて居るやうに、結婚の中に家庭の志向が假定される。家庭は人間の本能の發露の結晶した極めて微妙な制度である。家庭は、普通の場合に於て、其れを組織する夫婦と其の間に生じた子供より成り立つ。夫は彼れの本能に依つて妻を護り、妻は彼れの本能に依つて夫に事へ、彼等は本能に依つて子供を育み、子供は本能に依つて彼等に頼る。家庭生活は社會生活の縮圖である。宗教的の、政治的の、若しくは、そのあらゆる種の團體にしても、悉くそれの萌芽を家庭生活の中に發せないものはない。家庭生活は社會生活の修練場である。個人間の異なる機能の協同も、先進より後進への文化の傳承も、悉くその源泉をこゝに發する。

事實、文字通りに、一つの家族の一つの社會であつたことは、わたくし共がユダヤや、ロウマの歷史に於て見るところのものである。普通に生活を維持するに必要なるあらゆる種の產業は一つの家庭の內に於て營まれ、其れを繼續して行く教化と訓練とも家庭の內に於て行はれたのである。夫は牧し或は耕し、妻は織り或は炊いた。又、子女は從順に父母の手傳ひをすることに依つて、自づから、彼等の生活を維持するに必要なる德と技藝とを學んだのである。かういふエコノミイから、家庭は夙に一つの制度となり、其れの支配者として家長の職權なるものが馴致されたのであつた。一つの家庭の中に包容するのには不便であるほどに家族の數が膨脹し、その中より次第に新しい家庭が分裂して來るやうになつても、久しい間、社會を構成する單位は家庭であつて、個人ではなかつた。そして、家長は依然として社會に對して、彼れの主宰する家庭の權利と義務との絕對代表者であつた。

然し、人間の文化は何時までもこの狀態に留まらなかつた。社會に於ける職業分化の進行と、個人に於ける自己意識の發達の傾向とは、相俟つて各人をしてだんだんに自己の幸福と完成とに不都合の多いものとして家庭單位の制度を嫌ひ、其れに代へるに個人單位の制度を以てしようと志さしめて來た。家庭の組織は深く人間の本能のエコノミイより發

生し、成長したものであるから、わたくし共が今日逆睹し得る以上に人間の性情の一變せざる限り、或る樣式に於て無期限に存續するかも知れぬ。然しながら、其れが今日のまゝである限り、其れが個人の要求に背き、個人の才能の啓發を妨げて居ることは事實である。專制主義の精神に依つて養成された家庭の習慣と傳統とは、個人主義の理想に依つて改造さるゝ必要は確かにある。そして、其等は改造されて現代の社會生活に適應するのみならず、進んで其れの發展に貢獻し得る個人の品性の培養園たり、休養場たらしめねばならぬ。其れで、如何にせば家庭の利益を保存しながら、出來るだけ其れの障碍を排除することが出來るであらうかが、わたくし共に取つて當面の問題である。

個人の幸福と完成といふことを中心理想として見られた時に、今日現存する家庭の含む缺陷は二重であつて、其れの一つは親子の關係に就いてであり、他の一つは夫婦の關係に就いてである。

わたくしは、先づ親子の關係より考察を始めよう。

正しく小兒を教育することは神か親かに限られる、と云ふやうなことを嘗てルウソオは叫んだ。この目的を達するためには、確かに家庭は巧妙な制度であると言はねばならぬ。然しながら、家庭が小供の教育に役立つのは、彼等が其れの鞠育と保護とを必要とする時期に限られねばならぬ。あらゆる動物は、小禽より野獸に至るまで、親が小供の面倒を見るのは、彼等が親の鞠育と保護とを必要とする時期だけである。彼等が一本立で生活する時期に達するや否や、彼等は全然親の眼界の範圍の外に脫し去つて了ふ。こゝに自然のエコノミイはたらいて居るとわたくしは思ふ。人間の家庭と雖も、未來の種族を鞠育し、教育することを目的として教育されたものであるならば、何故に、自然のエコノミイを現在其れがして居るよりも一層參照しないのであるか。今日の時代に於ては、他日子供が社會生活の中に獨立して行くためには、家庭の與へる教化と、修養とは不十分である。子供が或る年齡に達し、自づから學問と、職業と、交友とを

選擇するやうになつて以後は、彼等に對する親の意思と、彼等自身の理想や趣味との間には、鴻溝の劃されて居ることは顯著な事實である。『親の心子知らず』といふ諺があるが、『子の心親知らず』と云つた方が、一層適切に現代の趨勢を言ひ表はすことが出來ると思ふ。世人は、親の注意の尠なきに過ぎるがために、戕害される子弟の多いのを語るが、彼等は親の專制の、若しくは、干渉の多きに失するがために、反つてどの位多くの子弟の品性と才能とが毀損されるかに氣付かぬやうである。わたくしは是れが最も不幸な實例を、ミル父子の關係に於て見るのである。

現代に於て、個人は社會生活の單位である。各個人に幸福なるべき社會生活を實現させるには、成りたけ彼等の幼なき時代より彼等をして公正に相互を理會せしめ、成りたけ親密に相互に交際せしめることが肝要である。然し、今日に於ても、猶ほ、社會は異なる階級に分たれ、一つの階級の上に立つ家庭と、他の階級の上に立つ家庭とは、何の大した理由もなく、たゞ傳統の奴隷として、偏見と憎惡とを以て互に見合つて居るのであるが、其等のいづれの家庭に屬する子供も、その空氣の中に成長し、その空氣を通してのみ、他の家庭に屬する子弟を斜視するがために、彼等が相當の年齡に達するまでに、彼等は彼等の屬する家庭の偏見と憎惡とを吸收し、終には、眞價に依らずして、纔かに偶然價に依つてのみ他人を評價することになつて了ふ。この事實が、どれほどまでに現に社會に於て彌漫し、跳梁して居る異なる階級間の、延いて、異なる個人間の反目と軋轢との源泉をなして居るか解らない。家庭といふものを全廢することが出來ないならば、出來るだけ多く家庭より子供を解放して、家庭の背景を離れて、單に協同生活の中に生れた子供として、彼等をして共に遊戲し、共に旅行するやうにせしめ、さうすることに依つて、彼等の間に同情と相助との精神を發生せしめることを怠つてはならぬ。

次に、尠しく夫婦の關係に就いて考察して見よう。

今日運動と呼ばれて居るものは、數多くある。然し、其等の總べてを發生した動機が、出來るだけ協同生活を組織する個人の幸福を平等ならしめんとして、これまで行はれ來たつた公平の觀念を改釋し、さう改釋された公正を實現することを其れの根本動機として居るならば、婦人解放運動が其等の最優なるものであらねばならぬ。然し、さうであるとした時に、わたくし共はこの場合に『解放』なる言葉を如何に理會すべきであるか。たとひ今日男子と女子との間に見出される相違の或るものが、過去に於て女子に不正であつた社會組織の中に於て、男子の横暴に依つて馴致されたものであるとしても、自然のエコノミイより、無期限の未來に至るまで、彼等の間に見出される生理的の、隨つて心理的の相違が全然拭却されて了ふとは想像出來ない。して見ると、どんなに大膽に、廣汎に、『解放』といふ言葉を理會するにしても、其れは、當然、婦人として彼等を解放することであつて、婦人たることより彼等を解放することであつてはならない。つまり、婦人の解放に依つて實現さるべき男女の間の平等の理想は、意義に於ける平等であつて、外形に於ける平等であつてはならない。儼たる事實として個人の間に才能の相違の續く限り、人才主義が眞理である通り、儼たる事實として男子と女子との間に性の差別の存する限り、異能主義も亦眞理であらねばならぬ。永遠に亘つて、現に、偶然、男子の取つて居る職業と、彼等の滿たして居る機能とに憑據して、女子を解放しようとする如きは斷じて彼等の歡喜と、幸福と生長とを增す道ではない。

男子と女子とを、意義に於て平等にすることは聰明なる公正の命ずるところではあるが、前者と後者とを形態に於て平等にすることは嚴肅なる事實の許さぬところである。産兒と育兒とは、永遠に、自然に依つて女子にだけ課せられた負擔である。現にわたくし共が見るやうな男子と女子との間に存在する形態に於ける不平等はこの一大事實に根柢するのである。されば、どうにかして、この負擔が男子と女子との間に均等に頒たれない以上は、兩者の間に實現され得る、

隨つて、眞面目に望まるべき平等は、意義に於けるものでなければならぬ。

然し、かう考慮したところで、今日の家庭制度が、婦人に取つて、(隨つて、結局、男子に取つても、)決して滿足すべきものでないことは現代の生活の理想に目覺めたわたくし共の良心の其れに對して反撥と憎惡とを禁じ得ない一事に照らしても明らかである。其れは、男子も女子も形態に於ける不平等を誤解し、惡用して、其れをして意義に於ける不平等にまで墮落せしめたからである。

それならば、或る形を以ての家庭の存續を是認した上で、如何にしたならば、一旦失はれた男子と女子との間の意義に於ける平等を恢復することが出來るか、其れは、男子の側に於て、理會と謙抑とを增し、女子の側に於て、聰明と勇氣とに長ずることに依つて、女子が育兒と家政とに費す時間と勤勞とを合理的の範圍に限るやうに努めることである。そして、さうすることに依つて、妻をして、一、修養の志と機會とを有せしめ、二、(或る意味に於て、)財產上の獨立を獲せしめ、三、政治と、法律と、社會施設とに關して之れが改廢の權能をはたらかしめることとである。

自由結婚を合理的のものとして肯定する者は、同一の根柢に立つて、自由離婚を肯定せねばならぬ。固より、男子も、女子も、結婚するに方つては、等しく十分愼重の態度を以て其れに臨まねばならぬ。然し、其れが人間の思慮であり、行爲である以上は、時に過誤あるを免れない。誤つて取り結ばれた同棲生活が、既に經驗に依つて、其れの關係者の幸福と彼等の品性の完成とに重大なる障碍となつて居り、其れを續けることが、障碍を小ならしめるよりも、ますます大ならしむる虞のあることが認識された場合に於て、双方の合議よりして、其れを解くことは、道德的であり、其れを續けることは不道德的であるとわたくしは信ずる。そして、女子が、今日彼等が在るよりも、一層賢く、一層强く、一層多く生計の保障を獲るに至らば、離婚の決行は一層自由にして、一層容易なものとなり、そして、其れは、男子の利益

に歸するよりも、女子の利益に歸することが多いとわたくしは信ずるものである。今日に於て、わが國の女子の大部分が、(彼等の利益より、その必要あるに拘はらず、)離婚を以て自分に對する恥辱と一向に想ひなして居るのは、たまたま、彼等の無智と無力とを表白するに過ぎない。

已に家庭の制度が、男子と女子とが生存し行く上のエコノミイと實利とより自然に結晶し、沈澱したものであるからには、この見地より、其れの志向は改釋され、其れの規定は改整されねばならぬ。家庭の構成に關して、立てゝ居る現行法律の『合法的』と不合法的の差別の或るものは、聰明に、大膽に廢棄され、若しくは、修正される必要が確かにある。

六、性道德の改善方法としての『直接行動』に對する批判

それの志向を是認すると、せざるとは別として、今日、何人と雖も其れの存在を認識しなければならない一つの重大なる傾向がある。それは直接行動の其れである。わたくしは直接行動なる言葉を解釋して、其れは一層優れた狀態を實現する目的の下に、秩序ある手段を以て現狀を改造しようとはせずして、組織されざる、そして、發作の行動に依つて、一向に現狀を打破しようとする意圖とするものである。經濟組織を變更する計畫に就いて言ふならば、サンヂカリズムの如きは、是れが好適例の一つである。

頃日、一人の論客あり、ベルグソンの哲學と、ソオレル等のサンヂカリズムとの間に、密接の關係のあることを證明しようと試みた。彼れの見るところに依ると、兩者の間の一致點は、兩者が等しく、兎角、構成、若しくは、組織を卑んで、ベルグソンに在つては直接與料を、ソオレル等にあつては直接行動を、尙ぶところにあるのである。この論者の論證には牽强附會の點もないではないが、時を同うし、國を同うして、是等の二つが出現した事實に依つても、その間

に一脈の靈犀相通ずるもののあるのを信ずるのには、決して一概に架空として排斥し難きものがある。バアトランド・ラッセルが、別に獨立して、社會改造の原理は、組織された衝動たる欲望を壓抑し、衝動そのものをして自由に發動せしむるにあると力説して居るのも、哲學に於ては直接與料に、政治に於ては直接行動に、頼ることに依つて、始めて生活改造の曙光は見らるべきであるとする、この傾向に對する一つの響應とすることが出來る。

今日、直接與料と直接行動とに頼つて生活改造を圖らうとする氣分は、決して哲學と、政治とだけに限られては居らぬ。否、哲學と政治とにはたらいて居るくらゐであるから、生活の或る他の部分に於てもはたらいて居るであらうといふことは、容易に推測出來る。そして、わたくしからすれば、性道徳の動搖の現に其れが取つて居る形を取つた如きも、この一般傾向の一つの發現に過ぎない。

それでは、どういふ理由で、どういふ行き掛りからして、直接與料や、直接行動が鼓吹されるに至つたか。フランス革命の硫黄洗禮の慘禍を十分に味つて以來、世人は、破壞の時代、破壞の可能なる時代は既に去り盡して、これより建設の時代は永遠にこの世を支配するものと考へて居た。『革命(revolution)より寧ろ進化(evolution)!』が警語であつた。それであるのに、どうしてこの廿世紀の初頭に於て、思ひがけなくも生活改造の希望として革命が叫ばれることになつたか。そこには相應な理由があると、わたくしは思ふ。

いつの時代に於ける、如何なる國民にしても、從來彼等が自分の生命を保障し、幸福を增進するために工夫された生活の機關が、だんだんに固定し、朽廢して、眞に空洞となり、虚僞となり、この空洞と虚僞との程度が彼等の力で塡充することも出來ないし、又、匡正することも出來ないまでに進み切つたことを覺つて來ると、是等の機關と彼等の理想との間の矛盾の苦痛より逃れようとして、彼等は二つの道のどちらかの一つを擇ぶことになる。其の一つは出來得るだ

け世間の交渉より逃れ、自己の中に沒して、そこに、單に想像力に依つて築かれる安住の境地を求めることになる。かうなると、この世に於て、賴るべきものは、國家にもあらず、社會にもあらず、自分と苦樂を共にする同胞にもあらずして、たゞ、神だけである。斯くして神秘主義は醞釀される。他の一つは、或る形に於ける國家や、社會や、自分と苦樂を共にする同胞とが、自分の生存に取つて全く價値のないものであるとまでは考へないが、尠なくも、現在の其等は全然その本來の機能を失つて了つた、其等をして、その本來の機能を發揮せしむるには、其等は悉く一新させられなければならぬと考へることになる。斯くして、虛無主義は化成される。是等の二つの考へ方の中で、前者は遁生的であり、女性的であつて、後者は現實的であり、男性的であるが、どちらにしても、生活の現狀に對する懷疑と絕望とより來たることは同樣である。そして、現代に於ても、神秘主義者が見出される如く、古代と中世とに於ても、虛無主義者は見出だされたが、特殊の意味で、神秘主義者は古代と中世との所產であり、虛無主義者は現代の所產であることは事實である。是れは主として、是等の二つの文化の相違より生ずる個人の心理の相違である。

人間の向上と發展とは、懸かつて混沌を整頓して、其れに秩序を與へる構造の一事に限られねばならぬ。卓越して、デモクラシイの主張は其れであつた。然しながら、不幸にして、其れの努力が足らなかつたと言ふよりも、寧ろ、中途にして、詳しく言へば、十九世紀の後半に到つて、橫道に逸して了つたために、反つて、少數者に誤れる恩惠を與へると同時に、多數者に不當の苦痛を課する道具となつて了つた。そして、さうなることに依つて、前者と後者とを等しく墮落の淵に陷れるのであつた。一時は社會より特權階級を一掃するの志願を以て起ち、そして、其れが正當におのれの意義と使命とを理會したならば、事實に於てさうすることが出來たと信ぜられ得るデモクラシイも、更に新たな特權階級を創造し、其れを擁護することになつた。既に公正なることを其れの特徵とするデモクラシイにしてさうであり、

さうであることの外に出ることが出來ないのを見た世人の多くが懐疑と絶望との餘り、(冷靜なる理性よりすれば、無論、輕率であり、淺慮たるを免れないが、)構造を其れの主張とした從來のデモクラシイに反抗して、破壞を其れの主張とする虛無主義に爲に一の光明を見出ださうとする決死の態度を取るに至つたのにも、十分に同情すべき根柢はある。然し、くれぐれも、誤れる構造を改造し得るものは、獨り正しき構造のみであることをわたくし共は體認せねばならぬ。從來のデモクラシイの淺薄と偏頗とを深化し、訂正し得るものは、獨り深遠にして公正なるデモクラシイだけであることを體得せねばならぬ。

今や、奇しき運命に飜弄されて、從來のデモクラシイの抱擁に洩れた總べての階級に屬する女性は(第四階級に屬する總べての人々と共に)競ひ立つて、久しく失はれ來たつた彼等の生存への權利と、幸福への權利とを恢復しようと努め、悶いて居る。そして、彼等の或る者は現在の法律と、制度と、習慣とを呪詛する結果、一切の構造を見限つて、端的に直接行動の道に出で、破壞に依つて彼等の目的を達しようとして居る。然し、是れは果して賢き、そして、長久の術策であらうか。

わたくしの考慮の中には、同胞の、そして、人類の幸福と言ふことと、其れを增進するに如何なる方法が最も尠なき犧牲を以て、最も多くの効果を實現し得るかと言ふこととの他に何物もない。されば、漸進と急進との區別の如きは、否、保守と破壞との區別さへ、其れ自づからにわたくしには何等の意味をも有たぬ者である。漸進が何時でも急進に勝つたものでないことは、破壞が何時でも保守に優れたものでないのと同一つである。二つの理想、二つの方針、二つの設備の間の相對價値を批判するわたくしの標準はたゞ一つである。其れは、社會の文化と個人の聰明と及び德性とを、其等が現に在るまゝに取り、其等の孰づれの一つが比較的に尠なき犧牲を以て、比較的に多くの効果を實現し得るかと言ふこ

とだけである。

凡べて生長の理法は構造であつて、破壞ではない。構造の必然の經過として、其れの進行の中に破壞は體現するが、其れにして意義あるものたるには、其れの樣式と方向とは構造の方便として制限されて居らねばならぬ。そして、社會の文化と個人の聰明とを其等が在るまゝに取る時、殆ど總べての場合に於て、想像力に依る生活改造は感情の統一に止つて、破壞に終り、知力と意力とに依る生活改造は事實の整頓にまで熟して、構造を成就することを、わたくしは人間の性情と彼れの過去の經驗とより知る者である。

歷史に徵するに、總べての新たなる運動と、新たなる改革とは、其れが如何なる種のものにしても、その端を孤獨なる或る個人の思想の中より發しなかつたものは一つとしてない。彼等は悉く彼等の理想の殉難者であつた。然しながら後世より彼等の事業を觀るに、其等の成績に於て雲泥の相違のあるのはどういふわけであるか。其れは、一方のが構造を包含せざる破壞であつたのに、彼の一方のは構造の準備としての破壞であつたからである。

ザラツストラは彼れの事業の象徵として、常に鷲と蛇とを伴つたのであつた。彼れは鷲の如くに勇敢に、蛇の如くに聰明なることを彼れの生活の理想としたのであつた。

日に、月に生じ來たる人間の新らしき要求を滿たし行つて、動的に、作用的に性道德の改釋と改造とを圖らうとする者は、亦、ザラツストラと等しく、鷲の勇氣を以て現在の狀態を破壞すると同時に、蛇の智略を以て其れを更に優れた狀態に整理するの覺悟と考慮とを怠つてはならぬ。この忠言は、決して急進を避けて、漸進に就けと言ふのではない。たゞ、急進にしても、漸進にしても、それぞれ、その必要ある場合には、聰明に急進なれ、若しくは、聰明に漸進なれと言ふことなのである。

天才主義と現代の政治及び社會生活

大山郁夫

一

『中央公論』の新年號に寄せた私の論文『現代文化生活に於ける天才主義』に於て、私はまづ、『天才主義』が現代に於ても尚ほ一種の迷信の形式を取つて跋扈してゐる事實を述べ、次にそれを承けて、何故に『科學萬能』を謳歌してゐる現代に於て、さうした迷信が依然として維持されてゐるか？　といふ疑問を掲げ、更らにこの疑問に附帶して、『何故に民衆の時代』と呼ばれてゐる現代に於て、少くともさうした迷信的意味に於ける『天才主義』と同類項に屬するものと見るべき『偉人崇拜』が、依然として盛に民衆の間に流布されて居るか？　といふ疑問を掲げた。そのうち、第一の疑問に關しては、私は同じ論文に於て、近代生活の不安の諸相と近代式迷信との關係とを說いたことに依つて、一應それに對する私見を提供して置いたつもりである。がしかし、第二の疑問に關しては、私はそれに對する答案を後日に保留して置くことにした。で、私は今、本文の筆を執るに際して、先づこの點から私の論述を開かうとして居るのである。

『偉人出でよ！』とか、『天才出でよ！』とかの叫び聲が、社會の各方面に於て間斷なく擧げられてゐることは、今も昔と少しも變はつてはゐないのである。そして我々は、さういふ素樸な要求が、諸新聞紙に依つて日々反響せられて居るのをさへも、容易に聞き取ることが出來るのである。如何にも今日に於てはさうした言葉が、或る少數のサークルの人々の耳には、可なり時代錯誤的な響きを與へて居ることは事實である。がしかし。世間の大多數の人々からは、さうした言葉も、今尚ほ依然として、何かの尤もらしい意味を包含して居るものとして傾聽せられてゐるのである。

殊に、或る『顯要』なる社會的地位を占めて居た人々が、暗殺

とか自然的死とかのために世を去るやうなことが起つたとすると、さういふ人々は、直ちに新聞紙に依つて極度に偉人化され超人化されて、その生前の業績を誇張的に讃美した記事が、雪つぶてのやうに一齊に世間に向つて撒布せられるのである。そして、かういふ場合に於ては、さういふ人々が從來或る點に於て公衆の批難の標的となつて居たやうなことがあつた事實などは、恰かも全然忘却されたかのやうに看過されるのが、普通のことになつて來て居るのである。私は既に前掲の私の論文に於て、暗殺された原敬氏を中心として此點に觸れて置いたが、その時から本文執筆の時(二月中旬)までに僅か二個月ばかりを隔てたに過ぎない間に、大隈侯や山縣公のやうな、所謂政界の『大物』の老死が順々に引き續いて起つて、そしてその度毎に、同樣のことが型の通りに繰り返されて來て、それに依つて、『偉人崇拜』の精神がまだまだ如何に深く公衆の間に根を張つてゐるかが、我々の立場からは『もう澤山!』といひたい程までに、又しても又しても證明せられたのである。

尤も、山縣公の死の場合に於ては、その國葬費に關する豫算が議會に於て提出せられた日に、衆議院に於て二人の代議士が國葬反對の聲を擧げたといつたやうなことがあつた。そして多くの人々は、この事件は時勢の推移を反映してゐる一現象だといふ風にそれを解釋しようとした。いかにも、この觀察には相當の道理があるものゝやうに、私には考へられる。であるから、私は私が本文を終へるまでには、この點に關しても私の意見を多少述べてみようと考へてゐる。が、茲で私が差し當つて言ひたいことは、この事件に關して誰れにでも一應不思議に思はれなければならないことは、あの場合に二人の代議士が國葬反對の聲を擧げたといふ事實よりは、寧ろ國葬反對の聲を擧げたものが唯これらの二人に止まつたといふ事實である、といふ一點である。いふまでもなく、あの場合にさういふ行動を取つたものが唯これらの二人に止まつたといふことは、それが如何に異例であつたかを示してゐるものである。そしてまた、それが如何に異例であつたかといふことは、如何に議院内の大多數が、今尙ほ依然として、『偉人崇拜』の幻影に取り憑かれてゐるかの事實を――若しくは、如何に彼等がそれに取り憑かれることを餘儀なくされて居るかの事實を――さながらに反映して居るものでなくて何であらう! 殊に我々が、現在衆議院の殆んど全部を構成してゐる各政黨は、曾て久しく『藩閥打破』を高唱した經驗を持つてゐるばかりではなく、多年『政黨嫌ひ』で通つて來た山縣公の頭上には、特に手きびしき批難を浴びせかけて居たといふ事實を顧るときには、我々は一層痛切に、『偉人崇

拜』の幻影が、この際如何に彼等の理性の判斷を痲痺させて居るかを怪まない譯には行かないのである。しかも、彼等がかうまで『偉人崇拜』の幻影に魅せられてゐるといふとは、畢竟するに、少くとも彼等が彼等自身の因つて以て立つ所の足場として居る國民の或る部分が、今尙ほ彼等と同樣に、若しくは時としては彼等以上に、『偉人崇拜』の幻影に魅せられて居るといふ事實を反映して居るものでなければならぬ。であるから、私は今此點に少しばかり私の考察を向けようとしてゐるのである。

二

『民衆の時代』といふ言葉は、多くの人々に依つて、如何に抑へ難き感激を以て話されて居ることよ！ そしてまた『デモクラシー』といふ言葉は、最近に於て、如何に急激に社會の各層に滲透して行つたことよ！ 人々は、今こそ街頭の群衆が全社會生活の進路を導く力を握る時節が到來したのだ、と考へるやうな心的習慣を、暗々裡に形成しつゝある。殊に政治生活の方面に於ては、民衆運動が一切の問題に關する最後の決濟者だとのやうに、一般に考へられるやうになつて來てゐる。若しくはさういふ風になつて來ようとする傾向が明かに見えて居る。

けれども、實際上に於ては、少くとも政治上の民衆運動が、今日に在つても尙ほ依然として、黑幕の背後に動いて居る比較的少數の策士連の傀儡として利用せられて居る事實の眞相を知るときには、『民衆の時代』といふ言葉に感激したり、『デモクラシー』といふ言葉に陶醉したりすることには、何等の實質的根據があるものでないといふとが、直ちに判明する筈ではなからうか？ 如何にも、民衆運動の上にも、或る種の威力が段々と加はるやうになつて來てゐる。そして、今日に於ては最早、如何なる政治家といへども、それを全然無視することが出來なくなつて來てゐるばかりではなく、寧ろそれを相當に重要視しなければならなくもなつて來てゐることも、爭ふべからざる事實である。しかしながら、民衆運動のさうした威力も、直接には民衆のための眞の利益を産むといつたやうなとにはならないで、寧ろ或る種の野心家連の喰ひ物となるといつたやうな結果に導いてゐるのが、寧ろ常例となつてゐるのではないか？ 兎に角、民衆運動は天から降つて來るものでもなければ、地から湧いて來るものでもなく、またそれが民衆の自覺の裡から自發的に出て來ると言つたやうなことも、將來のところではどうであらうとも、少くとも今日までには決してなかつたことでもあり、しかも現在に於てさへ殆んど全然ないことでもある。すなはち從來に於ては、民衆運動といふものは、大抵の場合、或る種の政

治上の目的を達成しようとする比較的少數の策士連が、細心に仕組んだ筋書に依つて、時としては少からざる財貨をさへ用ひて、兎に角多大の煽動的努方を發した上で誘發したものである。そしてそれらの策士連は、自分達のために何等の效果をも豫想しないでさういふことを企てるほども、それほども自家の利害の打算に盲目なものではないのである。

かう考へて來ると、今日に於ても尚ほ多くの熱心家たちを感激させ陶醉させてゐる『民衆の時代』とか、『デモクラシー』の時代とかいふ言葉は、それらを現實問題として見るときは、その實質の甚だ缺けてゐるものであり、從つて大體に於て名義上のものであるに過ぎないものであるといふことが、誰れにでも容易に判らなければならない筈である。換言すれば、さうした言葉は、今日のところでは、明らかに內容の空虛な、むしろ或る單なる一片の概念を構成して居るにすぎないものと見るべきものである。それにも拘らず、さうした言葉が、たゞその表面上の蠱惑的な響きによつて、現代人の大多數者の血を沸き立たせてゐる效果を擧げて居るところを見ると、我々は必然的に概念崇拜の迷信が現代に於て全然跡を絕つてゐないどころの騷ぎではなく、それが尙ほ活きた力として目ざましき働きをしつつあるといふ事實を承認しなければならなくなるのである。

我々のかういふ考へは、更らに『天才主義』とか『偉人崇拜』とかの幻影が現代人の大多數者の上にその執拗なる魅力を投げ掛けて居るといふ事實を眺めるときには、一層强められない譯にゆかないものである。といふのは、斯うである。――

三

デモクラシーと天才主義！それは極端と極端との對照ではないか？いふまでもなく、『平等』の概念をその主要構成要素の一つとしてゐるデモクラシーは、特に『差別』の一點を　調する天才主義とは、既にその出發點に於て、根本的に相容れない或る物を包含してゐるのである。が、假りに若し强ひてデモクラシーを『天才主義』の繩張りの中に引摺り込まうとするならば、――さういふことをする必要の有無は別問題として、――それは無論、デモクラシーは或る限られたる範圍內に於ける特殊の人々だけを『天才』と見るといふ點からではなくて、寧ろそれとは全然反對に、デモクラシーは世間のすべての人々を一樣に盡く『天才』と見るといふ點からでなくてはならぬ。といふのは、少くとも最も單純なる形式に於けるデモクラシー――第十八世紀に於て行はれてゐたそれのやうな――の主張は、『各人の能力の絕對的平等』といふ假定を以て、その前提條件としてゐる

ものだからである。であるから、この嚴重に限定せられたる意味合ひに於てならば、『デモクラシーもまた一種の天才主義だ』と言へないではない。けれどもそれは、單に理論上さういへるといふだけの話であつて、實際問題とは何等の交渉のないものである。實際問題としての所謂『天才主義』といふものは、決してそんな概念を指して居るものでないどころではなく、寧ろ全然それと反對の概念を指して居るものなのである。詳言すれば實際問題としての所謂『天才主義』といふものは、先づその出發點に於て、人間の素質の上に於て、所謂智愚賢不肖と言つたやうな先天的差別を認めて掛かつて、そして少數の優秀者を大多數の凡庸――若しくは『衆愚』――の上に標置して、特に前者に對しては、『天才』とか、『偉人』とか、『超人』とか『エリーテ』(elites)とか、その他考へ得られる限りの美名を與へることに依つて、彼等を社會的崇敬の對照たるに相應はしく裝飾しようとするのである。

しかしながら、若し『天才主義』が單にこれだけの範圍内に踏み止まるものであるならば、――そして若しそれが『天才』とか『偉人』とか、『超人』とか、『エリーテ』とかいつたやうな言葉を單に修辭上の問題として取扱ふのに止まるものであるならば、それは尚ほ必ずしも、デモクラシーの名で概括せられてゐるすべての種類の主張と根本的に相容れないものとは限らないものと言へよう。尤も、私が前にも言つておいた通りに最も單純なる形式に於けるデモクラシーの主張は、『各人の能力の絶對的平等』の假定の上に基礎づけられて居るものであるから、それが如何なる意味に於てでも各人の能力の上に於ける先天的差別を認めようとするやうな思想と兩立しないものであることは、いふまでもないことである。しかしながら、『自由』とか『平等』とかを客觀的の實在とは見ないで、單にさういふものを將來に於て實現すべき理想として標榜するといつたやうな主張もまた一種のデモクラシーの思想から流れて出た要求だといふことを妨げないのである。そこで、若しデモクラシーの主張がこれだけのものに止まる限りは、それは無論、『各人の能力の絶對的平等』といつたやうな前提を離れても尚ほ成り立ち得るものである。そしてまた事實上に於ても、今日に在つては、如何なる意味に於けるデモクラシーを主張する人にしても、最早『各人の能力の絶對的平等』といつたやうな、現實の事實に適合しないやうな、第十八世紀式の架空的假定の前提の上に立つて居るものは殆んど見當らないと言つていゝ位なのである。假りに若しさういふ人が稀れにでもあるとすると、それは餘程狂妄な思想の持主でなければならない筈である。しかしながら、如何なる主

にせよ、苟しくもそれが適當にデモクラシーの名を以て呼ばれるものである限りは、それは、社會の大多數者が、如何なる意味に於てゞにせよ、或る特殊の少數者の集團の支配の下に置かれるといつたやうな状態を寛容することが出來ないものでなければならないのである。社會に於ける或る特殊の集團が全然支配者の地位を占めて、その他のすべての集團や個人が全然被支配者の地位に置かれるといつたやうな組織に對しては、少くとも主義に於てゞも挑戰することが、各種のデモクラシーに共通する唯一の特徴である。『政治的デモクラシー』にせよ、『經濟的デモクラシー』にせよ、『社會的デモクラシー』にせよ、縱しその表面上の主張の上に於て如何なる相異點を示して居るにせよ、この一點に關しては、いづれも皆その揆を一にしてゐるのである。それは、あらゆる種類のデモクラシーの根本基調である。それを抜きにしては、如何なる種類の主張も、最早デモクラシーの名を以て呼ばれることが出來ないものになるのである。

さて、デモクラシーをかういふ意味に解釋するにしても、苟しくも『天才主義』といふものが、私が上に掲げた範圍内だけに踏み止まるものである限りは、それは必ずしも、かの最も單純なる形式に於けるそれを取り除けにした以外の各種のデモクラシーの主張と相牴觸するものだとは限らないのである。ところが、生憎にも、實際問題としての『天才主義』は、到底さうした範圍内だけに踏み止まることを承知するやうな生ま優しいものではないのである。それは、もつと大膽な、そしてもつと無遠慮な態度に出て、さうした範圍内を遙かに超脱して、結局箸にも棒にも掛からないやうな突飛な要求を平氣で提出して居るのである。詳言すれば、今日に於て最も廣く行はれて居る『天才主義』――それは必ずしも個々の場合に於て『天才主義』といふ名で呼ばれて居るには限つて居ないが、其内容に於てそれと同質のものをいふのである――は、私が本誌の新年號に寄せた私の論文に於て指摘して置いた通りに、例の『天才』とか、『偉人』とか、『超人』とか、『エリーテ』とか、何々とかいつたやうな言葉を、單なる修辭上の問題として取扱ふだけには止まらないで、さうしたものを眞の意味に於ける超人間的實在ででもあるかのやうに取扱ふのである。從つてそれは、さういふ『天才』なり『偉人』なり何々なりの職分を、恰かも或る超自然力から特別に賦與せられた職分でもあるかのやうに言ひ立てて、そしてそれを全然非科學な、『無より有を生ずる』といつたやうな意味に於ける『創造的』といふ言葉に依つて性質づけるのである。尙ほまたそれは、かうした根據から更らに一歩を進めて、『天才』なり『偉人』なり何々なりの生涯の業績(achievements)を神秘化し

夢幻化し、全然人間業を離れた仕事の記錄を彼等の各々に附與し、そして、かくすることに依つて、有形的若しくは無形的意味に於ける社會的支配力としての優越地位を彼等の各々に歸屬せしめようとするのである。かうなつて來ると、『天才主義』は最早、如何なる意味に於けるデモクラシーとも、丸切り反りが合はなくなつて來るものであることは、誰れに言はせても、無論の話である。

私が上に屢ば用ひた『偉人崇拜』といふ言葉は、かういふ意味に於ける『天才主義』の別名とも見るべきものであり、少くとも、それと同類項に屬する人生觀と見るべきものである。ところで、かういふ意味に於ける『天才主義』若しくは『偉人崇拜』は我々が我々の日常生活に於て絶えず見聞して居る通りに、殊に所謂政界の『大物』などが暗殺とか自然的死とかに依つて世を去つたやうな場合に於て新聞雜誌や一般世人の行動または話頭などの上に表はれて居るところのものから我々が承認しなければならない通りに、それは『民衆の時代』だとか『デモクラシーの時代』だとか呼ばれて居る現代に於ても、まだまだ何時までも大に幅を利かせて居て、少しも衰退しさうな徵候を見せてゐないのである。かういふ矛盾が日々繰返されて居て少しも怪まれないといふことは、現代に於けるデモクラシー謳歌の傾向が、概念崇拜の範疇を一歩も踏み出して居ないといふ事實を的確に物語つて居るものでなくて、何であらう? この一例から見ても、概念崇拜の幻影が、如何に執拗に現代人の大多數者の眼を眩惑せしめて居るかを、我々が充分に認知することが出來るのである。

四

『天才』の出現を神秘的現象と見做す樣な解釋は、人間の知識的發達の尚ほ幼稚であつた時代に於ては、どこにでも行はれて居たものである。モーゼがイスラエル人に、またソロンがアテネ人に、それぞれの法律を與へたのは、彼等が直接に神託を受けてしたことだといはれて居る。ローマの傳説に於ては、ヌマ王が女神エケリアから助言を得たことになつて居る。イスラエル人は、彼等の王たちや豫言者たちが、エホバからの啓示に滿たされてゐたと考へた。それは我々に、我國の傳説に於て和氣清麿が宇佐八幡の神託を授かつたことなどを聯想させるに充分である。神話やお伽噺の中の英雄や智者やは、常に神助に依つて奇蹟を演ずることになつて居る。殊に、原始時代から現代に至るまでの人類の集團生活の運命を決する上に於て重大な要素となつて來た戰爭若しくは征服に於ける『天才』若しくは『偉人』が

或る超自然力と結びつけられて居るやうな例話の如きは、各國の『歴史』に於て、數へ切れないほどに語り傳へられてゐる。神武天皇の金鵄の挿話や、伊勢の神風のやうな奇蹟が、決して我國の『歴史』の獨占物でないことは、改めていふまでもないことである。

人間が自分の知識で說明が出來ない萬有現象を、或る超自然力の作用に歸してしまふといつたやうな考へ方は、最も安易な解釋法であるだけに、人間の自然に對する理解が尙ほ幼稚であつた時代へ溯るほど、それが盛に行はれてゐたのは、無理もないことだといはなければならぬ。原始種族の社會生活に於て、迷信が絕對的支配權を揮つてゐた趣きがあるのは、全くそのためであつたに相違はない。

『文明とは人間が自然を征服することだ』といつたやうなことは、今では言ひふるされた一個の套語となつて居るものである。しかし、一派の社會學者が言つて居るやうに、『文明とは人間が自然を理解することだ』といふ方が、おそらく同樣の考へを一層無難に言ひ現はしたものだといふとが出來よう。いづれにしても、かうした標語は、いくら善く見たところで、單に眞理の一角だけを示唆して居る位のものにすぎないのだから、我々が無論さういふものに全幅の信賴を置くことが出來ないことは事實である。それどころではなく、初めから疑つて掛かれは、『文明』といふものからしてが、甚だ不可解なものに見えて來るのである。が、普通一般に承認せられて居る用語例に從へば、『文明』の概念の裡には、『自然的資源及び自然力の利用』といふことが、少くともその一要素を構成してゐるものと見ることが出來るのである。それ故に、この點から『その自然的資源及び自然力の利用』の先決條件としなければならない『自然に對する理解』といふものを、少くとも『文明』といふものゝ一要素とすることは、普通一般に承認せられてゐる用語例の上から見るときには、別に無理がないことゝ思はれるのである。

人間の自然に對する理解が進むだけづゝ、迷信が科學に依つて排除せられるのといふことは、或る一面から見れば、たしかに事實である。それは、科學は人間の自然に對する理解の試みに於ける努力の結晶だからである。（かういふことゝが自然科學に關して言へ得られるとは、誰れにでも容易に承認が出來るとだと思ふが、しかし私達の立場からいへば、更らにまた、人間現象若しくは社會現象といふものも畢竟自然現象の一部と見られるものであるから、從つて社會科學に關してもまた、同樣のことが適當に言へ得られると考へられるのである。）この意味に於ける科學が進步するだけづゝ、それだけづゝ萬有現象に關する超自

力的解釋や、その一種の變形物である形而上的解釋が廢たれて行くといふとは、それを一つの傾向として見るときは、たしかにその通りだといふことが出來るのである。そして、この意味からいへば、コントが人類の思惟の方法の進歩の段階を、神話的時代、形而上學的時代、實證的若しくは科學的時代といふ風に順々に排列したことも、その根本に於ては正當だと考へられるのである。

　しかし、かういふことは、どこまでも一つの傾向として見てさうだといへるまでの話である。で、實際上に於ては、『科學の時代』と呼ばれて居る現代に於ても、各種各樣の迷信が盛んに行はれて居ることは、我々の周圍を見れば、その實例が無限に、且つ隨處に發見し得られることである。しかも、かうしたことは、單に『無識階級』と呼ばれる人々の集團に於て見られることであるばかりではなく、科學を尊重することを教へられて居る筈の所謂『知識階級』と稱せられる人々の集團の間に於て見られることでもあり、更らにまた、一世の指導者を以て自任してゐる所謂『權力階級』と稱せられる人々の集團の間に於て極めて普遍的に見られることでもある。

　我々は、我國の權力階級の人々が、迷信としても餘りに低級な種類の迷信に囚はれて居る實例を、引切なしに見せつけられてゐる。將官級の軍人たちが大本教に凝つたり、大臣級とやらの政治家たちが穩田行者式の『神樣』に伺ひを立てたりするやうなことは、決して稀有の異例と見做すべきものではないのである。觀音像が彼等の身邊の安全の保障のために携帶されたり、易斷先生が彼等の運勢をトするために顧問とせられたりする樣な滑稽さへ、始終新聞記事に愛嬌を添へてゐるとではないか？最近に於て、山縣公の國葬の日取りの決定に關して、友引とやらの日柄がどうのかうのと、或る顯官が言ひ出して騷いだといつたやうな事實が報道されたのは、彼等の頭腦の程度を計る尺度が、また新たに一つ加へられたものと見て、興味のある一挿話である。

　かういふことを考へて居ると、我々は、原始社會に相應はしさうな『天才』若しくは『偉人』に關する神秘的解釋が、現代に於ても尙ほそのまゝに、若しくは幾分變つた形式に於て、盛んに行はれてゐることを怪しむことが出來ないのである。しかのみならず、カーライルの英雄論とか、エマスンの偉人論とか、ニイチェの超人論とかに於て見られる通りに、古來の幾多の思想家たちが、神秘的解釋から出た『天才主義』の上に、如何にも壯嚴に見える上塗りを施したやうなことが、これにどれだけ有力な根據を藉したかは、到底測り知られないものがあるのであ

る。

しかしながら、かうした神秘的解釋は、決して『天才』に關する唯一の解釋だとはいへないのである。殊に第十九世紀に及んで、自然科學の方面に於ける研究方法が次第に社會現象に關する說明の上にも適用せられる傾向が生じてからは、『天才』に關する様々の新しき解釋――それは或る意味に於て科學的解釋と呼ぶことが出來る種類の――が、次々と出て來るやうになつたのである。で私は、それらの中の主要なるものの上に一わたり目を通して見ようとしてゐるのである。だが、それを試みる前に當つて、尙ほその準備として述べて置きたい二三の要點があるから、私はまづその方から差し掛ることにしよう。

五

私は茲で筆の序に、ホッブスの人間能力平等觀に注意を向けよう。彼は矢張り、第十七世紀のイギリスの空氣を呼吸して居た思想家だけあつて、すべての人間の能力は根本に於て平等であることを信じて居た。がしかし彼は、すべての人間がすべての點に於て同等の能力を惠まれて居るものと見たのではなくて、或る人間は知識に於て優り、或る人間は腕力に於て優るといふ風に、人々によつて各々その長所短所を異にしてゐるものであるが、それらを搗き混ぜて平均すれば、結局各人の能力は平等といふことになるのだ、と斯く考へて居たのであつた。

しかしながら、知識とか腕力とか　若しくは精神上の能力とか筋肉上の能力とかいつたやうなものは、それぞれに異がつた範疇に屬してゐるものであるから、その間に於て完全なる比較を行ふことが出來るものではないのである。しかのみならず、一トロに同じ精神上の能力と言つたところで、矢張りその種類の異るに從つて、相互間に精密なる比較が成立たないものであるし、それから各種の筋肉上の能力に關してもまた、同様のことが言へ得られるのである。それ故に、右のホッブスの說には、思想史的興味が饒かに含まれて居るには相違ないが、しかし現代の科學的思惟に慣らされてゐるものに取つては、それは到底眞面目に承認が出來るものではない。

かういふ點から考へれば、各人の能力が平等だとか、不平等だとかいふやうなことは、各人が銘々に具へて居るすべての種類の能力の分量を比較の基點としては、決して言ひ得られるものではないのである。しかしながら、これに反して、或る特定の單一種類の精神上の仕事若しくは筋肉上の仕事――もつとも、純粹に精神上の仕事とか、純粹に筋肉上の仕事とかいつたやうなものは、事實上滅多にあるものではなからうが、しかし、或

る仕事が特に精神上の要素をより多く要するとか、若しくは特に筋肉上の要素をより多く要するとかに從つて、それらを別々に右の兩樣に呼び分けることが出來るものとして——を比較の基點としてならば、各人のそれに對する適應力の多少に依つて、その能力の優劣を判定することが出來るのである。そして、私の考へるところでは、これが各人の能力が平等だとか不平等だとか言ひ得られる唯一の場合である。

で、かういふ風に、或る特定の單一種類の——『精神上』の、若しくは『筋肉上』の——仕事を比較の基點として言ふ場合には、各人の能力が平等だなどとは決して言ひ得られないどころではなく、常に多少の差等がそこに存してゐるものであり、且つまた時としては、——若しくは最も多くの場合に於ては、——非常に著大なる差等がそこに存して居るものだと言はなければならないのである。そして、『天才』とか、『秀才』とか、『凡庸』とか、『低能』とかいふやうな區別も、普通の用語例を離れて、或る嚴密なる意味に於ていふときには、矢張り或る特定の——單一種類の『精神上』の、若しくは『筋肉上』の——仕事を比較の基點としての場合に於てのみいひ得られることである。

ところが、普通の用語例に於ては、右に揭げた『天才』から『低能』までの言葉は、言はず語らずの裡に、大體上、所謂『精神上』の仕事に關聯して用ふべきものとされてゐるのである。すなはち、或る個人が或る特殊の『精神上』の仕事に對して普通の標準以上の能力の所有を示して居る場合に於ては 彼はその能力の程度に應じて、それ〴〵に『天才』とか、『秀才』とか呼ばれるべきものだと考へられて居るが、さうでない場合に於ては、縱し彼が所謂『筋肉上』の仕事に對して如何に優秀なる能力を示して居るにせよ、『天才』とか『秀才』とか呼ばれるべきものでないのは勿論、寧ろ場合々々に應じて、或は『凡庸』とか、或は『低能』とか呼ばれるべきものだと考へられて居るのである。

けれども、前にも言つた通り、『精神上』の仕事とか、『筋肉上』の仕事とかいふのは、唯便宜上の區別にすぎないものであつて、決して嚴密なる區別ではないのである。嚴密なる意味に於ていへば、普通『精神上』の仕事と稱せられて居るものでも、或る程度に於て筋肉上の働きを伴はないものは殆んど考へられないし、また普通『筋肉上』の仕事と稱せられて居るものでも、或る程度に於て精神上の働きを伴はないものは殆んど考へられないのである。それ故に、この曖昧な區別を根據にして、『天才』とか『秀才』とかを『凡庸』とか『低能』とから區別しなければならないのだとなると、その實際上の適用の場合に於て、殆

んど豫測の出來ないやうな支障が無數に出て來なければならないものであつて、殊に或る種類の仕事に對する優秀なる才能の如きものは、これを『天才』または『秀才』の部類に編入すべきものかどうかといふやうな疑問が、際限もなく起つて來る虞れのあるものである。

六

假りに右に述べたやうな支障が毛頭生じて來ないものとしても、それでも尙ほ『精神上』の仕事と『筋肉上』の仕事との區別を『天才』または『秀才』とその然らざるものとを區別する標準とすることに依つて、或る種類の能力を『天才』または『秀才』の部類に編入し、或る他の種類の能力をその部類から排除しようとするやうなことは、甚だしき專斷的な處置だといはなければならぬ。少くとも、强ひてさういふことをしようとする人は、それに對して何人をも首肯せしめるに足るほどの有力なる理由を提供することを要求せられても、決して文句がいへない譯である。ところが、さういふ理由が果して提供され得るものであるか？　といへば、少くとも、私の關する限りでは、私はそれに否定的の答へを與へる外はないと思ふのである。今もしこの問題に關して『人生に對する効用といふことを以てその理由とすることが出來る』といふ人があると假定すれば、我我々はそれに對して、『精神上の仕事にせよ、筋肉上の仕事にせよ、どちらにしても人生に効用のあるものもあれば、ないものもある』と答へることが出來るのである。或はまた、『道德的見地からの判斷といふことを以てその理由とすることが出來る』といふ人があると假定すれば、我々はそれに對しても前同様の答へをすることが出來る外に、『道德的』といふことは、時代に依り、集團により、個人に依つて、多種多様に解釋されてるものだと附け加へることが出來るのである。或はまた、『文明の進步に對する貢獻といふことを以てその理由とすることが出來る』といふ人があると假定すれば、我々はそれに對してもまた前同様の答へをすることが出來る外に、『文明』とか『進步』とかいふ概念の中に盛られて居る内容についてもまた、人々に依つてその解釋が非常に違つて居るものだといふことを指摘することが出來るのである。かういふとの外に、別に他の考へ附かれる限りの如何なる理由を持つて來ても、そこには必ず何かの缺陷が發見されるのである。といふやうなことは一體何に基因するかといへば、それは畢竟、單に『精神上』の仕事に對する能力だけを『天才』とか『秀才』とかの觀念の基礎に置いて、そしてすべての種類の『筋肉上』の仕事に對する能力をば全然それ

から除外しようといふやうなことが、初めから無理であつたのだからである。

が、斯ういふ風に、單に『精神上』の仕事に對する能力だけを『天才』の標識にしようといふやうなことには何等の有力な理由がないにも拘らず、それが不思議にも、今日に於て最も普通に行はれて居る解釋となつてゐるのは、果して何のためであるか？　それは、私の考へてるところによれば、主として現代思想を風靡してゐる理知崇拜及び概念崇拜の傾向から來てゐるものであつて、そしてまた、この理知崇拜なり概念崇拜なりは、第十八世紀の啓蒙思潮からその筋を引いて來てゐることが、決して少くないものなのである。いづれにしも、現代人の思想の基底には、言はず語らずの裡に、知識的若しくは道德的若しくは審美的等の方面の仕事が、筋肉上の——若しくは或る意味に於ける『生産技術』上の——方面の仕事とは比較にならないほど優ぐれた本質を含んでゐるものと考へられるやうな傾向が、强く流れて居るのである。それ故に現代人の最大多數者は、『天才』といへば、そのもの自身の本質上、さうした廣い意味の精神的方面に現はれて居るものに限られるものであるかのやうに、本能的に思ひ込んで居るのである。けれども、實をいへば、さういふことは、決して『天才』そのものゝ本質から來てゐるのでも何でもなく、全く右の如き現代人の思想上の習慣から來て居るものに外ならないのである。或は多くの人々の中には、『天才』の『才』は、その言葉の用例上、『筋肉上』の能力よりも優ぐれて居るものと觀念されての『精神上の』能力を標示して居るものであるから、從つてまた、『天才』といふものをも、『筋肉上』の仕事よりも優ぐれて居るものと觀念されての『精神上』の仕事の方面にのみ現はれるものと見るのが至當である、といつたやうなことを主張しようとしてゐるものがあるかも知れないが、しかしながら、さういふ考へは、畢竟するに、原因と結果とを履き違へた種類の意見だといはなければならないのである『才』といふ言葉にさういふ用例が生じたのは、——若しくは、『筋肉上の能力よりも優ぐれたものと觀念されての『精神上』の能力といふものを標示するために『才』といふ言葉が用ひられるやうになつたのは、——さういふことを觀念する思想上の習慣が先づ形成された後のことだと言はなければならないのである。

サー・ウィリアム・ハミルトンの愛誦句だといつて、ウォードがその著書の一つの中に引用してゐるものに、"On earth there is nothing great but man, in man there is nothing great but mind."（地上には人の外に偉大なものはなく、人には精神の外に偉大

なものはない）といふのたゐるが、【註一】これは實に、極端なる理知崇拜の讃歌とも見るべきものである。かういふ理知崇拜が、現代人の——殊に現代の知識階級の——思想上の習慣の核心となつてゐるものであることは、我々が我々の日常生活に於て、絶えず體驗して居ることである。

七

私は前段に於て、精神的能力の優越の肯定の風潮が現代人の思想を支配してゐることを述べたが、しかし、この點を更らに精確に表現すれば、『それは現代人の思想をも支配して居る』といふ風に、『も』の一字をその適當の場處に追加しなければならないものである。といふのは、理知崇拜の心的習慣は、いつのほどとは知れないほどの久しい以前の昔から今日に及ぶまでの間に、ずつと引續いて行はれて來たものだからである。『手足の勞働は士君子のまさに恥づべきものだ』といふやうな思想は、我々東洋人の頭に久しく滲み込んで居るものであるばかりではなく、世界の各部に行き渡つて居るものでもあれば、それはまた單に、さういふことを臆面もなく公言することが出た古代に於て承認せられて居たものであつたばかりではなく、さういふことが表面に於ては或る程度に於て攻擊を受けるやうになつて來た現代に於ても尙ほ、少くとも暗々裡に、多くの人々の心に或る反應を及ぼして居るものでもある。

古代ギリシアに於て、理知の優越の肯定が、プラトーやアリストテレスなどの手に依つて、極度に强調せられたことは、玆に改めて細說するまでもあるまい。殊に後者に至つては、その『政治學』の初卷に於て、右の立場から奴隷制度に對する辯護論をさへ遣つて居るのである。そして彼は、その議論の一部分に於て、『自然は自由人と奴隷との身體の上に差別を置かうとして居る。といふとは、一方を勞役に適するやうに强健に形づくり、他方を直立的に、勞務には適しないが、戰爭と平和とに處するための政治的生活に役立つやうに形づくつて居ることに依つてでも判る』といひ、次に、『疑ひもなく、神々の姿が人々のそれと異がつて居る樣に、人々が縱し唯その姿態だけの上に於てなりと互に相異して居るものとすれば、劣者階級が優者階級の奴隸とならなければならないことは、誰れもが承認することであらう』といひ、更に一轉して、『若し人々の身體の上にさへ相異が現はれて居るものとすれば、その精神の上に猶更ら多大の相

【註一】 Ward, Lester Frank: Pure Sociology, 2nd ed., New York 1919, p. 496.

異がある譯である』と說き、最後に、『それ故に、或る人々が生來自由人であり、或る他の人々が生來奴隷であるといふことと、並びに、後者に取つては、奴隷となつて居ることが、結局自分自身のためにも都合の好いことでもあれば正しいことでもあるといふことは、事理明白なことである』と雄辯に結論して居るのである。

右の最後に引用した文句に含まれて居る趣旨は、近代に於てさへも、アリストクラシーの辯護者達に依つて、際限もなく繰り返されて來たことであるばかりでなく、現在に於てもこの思想を是認してゐる人々が、決して少くはないのである。かの門閥の支配を基調とするアリストクラシーの思想の如きは、少くとも理論的には、既に早くから致命傷を負はせられたにも拘らず、知能の支配を基調とするアリストクラシーの思想だけが、かういふ風に比較的に永い生命を持續して居て、しかも理論的にもまだ最後の打擊を受けて居ない樣に見えるのは、一寸考へると如何にも不思議に感じられることである。しかしながら、更らに一層不思議なことには、デモクラシーの名の下に提供せられて居る多くの思想の中に於ても、その根を洗つて見れば、その本質に於て全然知能本位のアリストクラシーに過ぎないものも決して少くはないといふ一事である。ブルジョア・デモクラシーと呼ばれてゐるものは、どういふ形式を取つて居るものにせよ、そのすべてが皆、民衆の投票に依つて所謂『選良』を擧げて政治上の指導者若しくは管理者たらしめようといふ基礎觀念の上に立てられて居るものである點に於て、まさしく、假裝したる知能本位のアリストクラシーに過ぎないものである！かういふものが、現代に於て、デモクラシーの名に於て主張され、支持され、共鳴されてゐるといふのは、一體どうした譯であらうか？

それに就いて第一に考へられることは、知能本位のアリストクラシーは、理論上に於てこそは、相當に廣い範圍に於ける人々に依つて支持せられて居るのではあるが、民主的思潮が少くとも感情的にでも盛に謳歌せられて居る現代に於ては、それが苟しくもアリストクラシーの名を保留する限りは、到底一般民衆の間に於て共鳴を購ひ得る見込みがないところから、さてこそ、デモクラシーの概念の假面を着せられ、その上にデモクラシーの道具立てを以て裝はれて、思想市場へ投げ出されたものである。所謂デモクラシーの概念とは、『自由』とか『平等』とか、『相互的牽制』(checks and balances) とか、『公衆の抑制』(popular control)とか、『民衆のために民衆の手に依つて行はれる民衆自身の政治』とかいつたやうな名目に依つて表現せら

れて居るものであつて、またデモクラシーの道具立てといへば、普通選擧權若しくはそれに近き公衆の選擧權とか、陪審制度とか、イニシアティーヴとか、レファレンダムとかいつたやうな、右のデモクラシーの概念を具體化するための政治的機關若しくは政治的制度だと一般に盲信せられ居るもののすべて若しくはその或るものから成立つて居るものである。デモクラシーの名の下に假裝せられたる知能本位のアリストクラシーは、實際上に於て、かういふデモクラシーの概念及びその道具立てでその外面を粉飾されて、世間に押し出されて居るものである。

假裝されたる知能本位のアリストクラシーは、かういふ風に、如何にもデモクラシー式にその外面を粉飾されて居るものであるが、しかし、それがその主張の根本に於ては依然として知能本位のアリストクラシーとしての本質から離れるとの出來ないものであるといふ位のとは、幾分でも注意深き觀察者の眼には、明らかに見え透いてゐることである。それにも拘らず、それは近代に於ける政治思想の主潮として今日までその勢力を持續して來てゐる程も、それ程も民衆の間に廣く根を張つてゐるものである。かういふことは、一體如何なる原因に基いて居るものであるか？　それは疑ひもなく、一つには、デモクラシーが現代に於ても尙ほ概念崇拜の範疇を一歩も出て居ないものとなつて殘つて居るといふ事實から來てゐるものであるが、しかし、その根本原因として考へられるものは、理知崇拜が今尙ほ現代の民衆の思想上の習慣の最要部を構成して居るといふ事實である、といはなければならないのである。

現代に於けるこの概念崇拜なり、理知崇拜なりは、少くとも直接には、第十八世紀の啓蒙思潮の遺産である。當時の主要なる思想家たちは、社會組織及び政治機關の改造に關しては、熱烈なる希望を理知の向上といふことの上に懸けてゐたのである。彼等の考へたところに依れば、人間は本來、圓滿な、調和に充ちた社會生活を營むことが出來る性質を、自然から――若しくは神から――惠まれて居るものである。從つて、人間が自然の法則に從つて生活する限りは、さういふ幸福な社會生活が人間界に實現されるべき筈である。しかるに、實際上に於て人間界に實現されてゐる社會生活は、それとは全然反對に、不幸に充ち、缺陷に充ち、醜惡相に充ちて居るものである。人間社會がかういふ『不自然』な狀態に陷つたのは、一體何のためであるか？　それは、今の人間どもが無知なためである。無知なために、自然法を誤解してゐるからである。それ故に、社會生活をその本來の軌道に立ち歸らしめようとするには、先づ自然法を闡明し、それを社會全般に宣傳し、民衆をして理知の眼を見開

かしめ、自然法を正解せしめることを先決問題としなければならないのである。ところが自然法を闡明するためにも、先立つものは理知であれば、民衆をして自然法を正解せしめるためにも、矢張り先立つものは民衆の、民衆の一人々々の理知である。――と、かういふ風に、彼等は彼等の考への緒を手繰つて行つたものである。

そこで彼等の各自は、一方に於て、彼等自身が自然法だとして理解して居るものに從つて、社會生活の指導原理としての樣々の概念――『自由』だとか、『平等』だとか、『正義』だとか、『人道』だとかいつたやうな種類の表現で標示せられた樣々の概念――を、思ひ思ひに捏ね上げたと同時に、他方に於ては、さうした概念――若しくは理想――の宣傳に依つて、民衆の、民衆の一人々々の理知の眼を喚び覺まさうとした。彼等は、さうした概念の指導に依つて、そしてさうした理知の命令に從つて、熱心に社會改造を行はうとした。彼等はその熱心さの餘りに、生活が概念を導くのでなくて、概念が生活を導くのだと考へ、生活が理知を支配するのでなくて、理知が生活を支配するのだと考へた。斯くして彼等は、おのづと概念崇拜や理知崇拜の深みの方へ陷つて行つたものである。

八

この概念崇拜及び理知崇拜は、今も尙ほ現代人の最大多數者の思想感情の基底に蟠踞して居て、そこからあらゆる方面に向つて、その見えざる勢力を縱橫無盡に振うて居るのである。現代はデモクラシーの時代だといつても、それは概念としてのデモクラシーの時代である。そこでは、たとへば、デモクラシーの標語の一つであるところの『民衆のために民衆の手に依つて行はれる民衆自身の政治』といふやうなことも、唯概念として受容れられて居るのにすぎないのである。そこでは、さういふ標語が誇らしげに語られて居る傍らには、其本質に於て理知の優越の肯定の上に基礎づけられたる知能本位のアリストクラシーさへが、縱し『民衆の抑制』(popular control)といふ保障に依つて條件づけられてにせよ、理論的に承認せられて居るのである。しかもそこでは、知能本位のアリストクラシーといふものまでが、それを條件づけるために設定せられた『民衆の抑制』の保障と共に、いつのまにか全然概念化してしまつて、何等の實際上の効果をも持たないものになつて來て居るのである。換言すれば、現在のデモクラシーの政治の下に於ては、實際上の支配權を握つて居るものは、無論民衆自身でもなければ、民衆

が『推擧』した『選良』——この『選良』がまた如何に概念的のものにすぎないかは、各國の、そして殊に我國の、議會政治の實況を見れば直ちに判明することである——でもなく、それは實に、デモクラシーの概念の中に何等の地位を占めて居ない所の經濟的利害關係であり、この經濟的利害關係を具體的に代表して居る政治的社會的經濟的特權階級そのものである。

しかし、第十八世紀の概念崇拜及び理知崇拜は、今日に於ては、單に概念化せられたる『民衆』の優越の肯定の上に基礎づけられたる政治的デモクラシーや、その下に於て承認せられて居るところの、理知の優越の肯定の上に基礎づけられたる知能本位のアリストクラシーばかりではない。さうだと考へてしまふのは、右の概念崇拜や理知崇拜が現代思想の上に及ぼしてゐる影響を極度に過小視する結果になるものである。が、事實上に於ては、右の概念崇拜と理知崇拜とは、相互的に密着して一體となり、現代思想の樣々の方面に向つて、その無限大の影響を及ぼして居るのである。今この點に關して、手當り次第に幾つかの例證を擧げれば、所謂『文化價値』の優越の肯定の上に基礎づけられたる文化主義の如き、『人格價値』の優越の肯定の上に基礎づけられたる人格主義の如き、『英雄價値』(?)の肯定の上に基礎づけられたる英雄主義若しくは超人主義の如き、『藝術價値』の優越の肯定の上に基礎づけられたる藝術至上主義の如きものは、いづれも皆概念崇拜と理知崇拜との混合物としての特徴を多分に示現して居るものである。もつとも、これらのすべてのものは、その根柢に於ては、私が上に政治上に現はれてゐるものとして取扱つたところの、知能本位のアリストクラシーと共通の基礎の上に立つてゐるものであるから、適當にその名の下に包含せられるものと見ても差支はない。が、唯さうすることにすると、『知能』の意味を著るしく擴大して、知識的、道德的、宗教的、及び審美的等の諸要素はもとより、その他の一切の『文化』的若しくは『精神』的諸要素をも含むものとする必要がある。

この意味に於て、私が本文で問題にして『天才主義』の如きも、知能上のアリストクラシーの一つだと見ることが出來るのである。そしてこの點に於て、それは概念崇拜及び理知崇拜の産物である。私は、本文の初めの方で、『デモクラシーの時代』といはれて居る現代に於て、或る特殊の個人の優越の肯定の上に立つ『天才主義』が依然として存續してゐるのは、一應不思議な現象のやうに見えると言つたが、こゝまで書いて來ると、最早その說明が充分に附いたものと見ることが出來ると思ふ。すなはち、現代のデモクラシーそのものが概念崇拜及び理知崇

拜の產物であつて、しかもその中には知能上のアリストクラシーの政治的表現さへが含まれて居るものであるから、それが同じ知能上のアリストクラシーの他の表現である『天才主義』と兩立するのは、別に不思議でも何でもないことだと言へよう。

かういふ風に、『天才主義』を、廣い意味に於ける知能本位のアリストクラシーの一內容と見る時は、それが『筋肉上』の能力よりも優ぐれたものとして觀念されての『精神上』の能力の範圍內に於て『天才』を發見しようとする傾向を示して居るのは、少しも不思議とすべきことでない。それ故に、この傾向は、單に『天才』の神秘的解釋の上に立つて居る『天才主義』に於て現はれて居るばかりではなく、『天才』の科學的解釋の上に立つて居るそれの上にもまた現はれてゐるのである。それは恰度、迷信の說明に科學的解釋が應用されて居るのと同じことである。で、科學的說明方法に依つて『天才主義』を主張して居る人々は、なるほど彼等が觀念して居る『天才』に對してこそは科學的說明を加へては居るが、しかし彼等の觀念して居る『天才』そのものは、理知崇拜を基調とする概念の產物である。從つて、彼等の『天才』もまた『世の光』であつたり、『地の鹽』であつたり、『文明の恩人』でありするやうな『偉大』な素質を具へたものとして萬人から仰視されなければならないものとされてゐるのである。これは、一つには、『精神上』の能力を『筋肉上』の能力よりも優ぐれた本質的價値を持つて居るものとする臆說からも來て居る事であるが、また一つには、或る一つの特殊の仕事にすぐれた能力を示して居るものは、如何なる仕事にもすぐれた能力を示し得るものといふ假定からも來てゐるのである。縱し、さうでなくとも、或る特殊の一つの仕事に對して優ぐれた能力の所有を示して居るものは、縱し彼がその一つの能力の發達のために他のすべての能力の發達を犧牲にしたことが判つて居る場合に於ても、從つて彼が他の仕事に對して何等の能力を持つて居ないことが判つてゐる場合に於ても、彼は唯その特殊の一つの仕事に對して優ぐれた能力の所有を示して居るといふ理由だけで、一般の天才主義者たちに依つて、萬能の非凡人であり超人であるかのやうに取り扱はれて、『世の光』とか、『地の鹽』とか、『文明の恩人』とかの地位に祭り上げられるべきものとせられるのである。そして、彼をさういふ『光榮』ある地位に引上げるための用をなしたところの或る特殊の一つの仕事は、常に『精神勞働』もしくは『精神勞働』と假定されてゐる種類のものでなければならないのである。それ故に、天才義主者たちの眼から見れば、普通の工匠が凡庸であれば、藝術上の『天才』が超人であり、機械を取扱ふものが凡庸であれ

ば、發明上の『天才』が超人であり、鶴嘴を握るものが凡庸であれば、企業上の『天才』が超人であり、『鋤後の人』が凡庸であれば、『王者の師』が超人であり、『田を作る』ものが凡庸であれば『詩を作る』ものが超人である……と言つた調子である。

しかし、私は前に『天才』に關する神秘的解釋に觸れた時に、それに關する科學的解釋の代表的のもののいくつかを検討して見ると言つたなりで、まだそれに手を着けないで居た。が、今が恰度いゝ潮合ひになつたと思ふから、次に極めて簡單にそれを試みて見よう。

九

『天才』といふ現象が多少とも科學的觀察の對照とせられかけたのは、比較的に新しい時代のことであつて、今少し明確にいへば、第十九世紀の後四半期頃からのことゝいつてよからう。そして、この方面に向つて先鞭を着けたものは、私が今知つて居る範圍内に於ては、イギリスの人類學者として、且つ優生學の創設者として知られて居るサー・フランシス・ガルトンである。兎に角彼は、『遺傳的天才』(Hereditary Genius, 1st ed., 1869; 2nd ed., 1892) とか、『イギリスの諸科學者』(English Men of Science, 1874) とかの如き、この問題に對して最も多くの示唆を含む書物を著はした人である。

ガルトンは、右に擧げた書物の一つの名で誰れにでも見當がつくであらう通りに、『天才』の素質を遺傳に歸したのである。かういふ見方は、必ずしもガルトンに始まつたことではなく、科學的說明なしにならば、何時とも知れない程の昔からあつたものであつて、そして、それはまた、極めて自然な見方でもある。『天才』は神がこの世に送つたものだとか、『天才』はその當人の守護神の加護に依つてその能力を與へられたものだとかと言つたやうな神秘的解釋に第一に取つて代はるのは、かういふ『天才』遺傳觀であると推定するのは、決して無理な臆斷ではあるまい。といふのは、血統は重んずべきものだといふ考へは、少くとも父權的家族制度が打建られた昔から存續して來たものだからである。我國に於ても、『瓜の蔓に茄子はならぬ』といふやうな諺が昔から傳はつてゐるが、かういふものもまた、一種の『天才』遺傳觀を表明したものと見ることが出來るのである。もつとも、さういふ見方に對して、たとへば『王侯將相豈種あらんや』などゝいふ格言に依つても言ひ表はされて居る通りに、『天才』と見られてゐるやうな能力は一に努力の賜ものだといふやうな考へ方もまた、昔から相當の程度に於て行はれて來たのであるが、しかしそれは決して、『天才』を遺傳

に歸するやうな、極めて自然な見方を壓倒するまでの勢力を得たものではなかつたのである。

第十九世紀に於て生物學が著るしく發達するやうになつてから、遺傳の科學的觀察にも次第に目鼻が附いて來て、殊にその後半期に於ては、この方面に於て次々と新發見が行はれるやうになつた。殊に顯微鏡や寫眞術などの改善と共に、細胞の研究が、それらのものを利用することに依つて益々精密になつて行き、從つて、それを基礎とする遺傳の法則の説明もまた、益々有力なる科學的根據の上に置かれるやうになつた。

けれども、遺傳の研究の進歩の歴史を語るやうなことは、私が有効に企て得ることでもなければ、また企てようとして居ることでもない。私は茲ではたゞ、一般の遺傳の研究の進歩が、『天才』の遺傳に關する科學的解釋に對して持つて居る關係を指摘すれば、それで事が足りるのである。この點からいへば、あらゆる生物のうちで特に人間の場合に於て、遺傳といふ現象は、單にその體質とか容貌とかいつたやうな外的諸要素の上に起るばかりでなく、氣質とか能力とかいつたやうな内的もしくは精神的諸要素の上にも起るものであるといふ事實に關する認識が、『天才』の遺傳に關する學説に對して、最も直接なる關係を持つて居るものである。最も氣質とか能力とかの遺傳が説かれる場合にも、それらが或る外的諸要素——特に腦細胞の組織と密接なる交渉を持つて居るものだといふことが、縱しそれと明示されてゐない場合に於ても、常に豫想せられて居るのが通例である。

一〇

それからまた、統計が盛んに一般の社會現象の説明に應用せられるやうになつたことも、『天才』の概念の構成に貢獻したことは無論である。いはゆる『大量觀察』の上に基礎を置く統計は、その觀察の對照にせられる多數の同種類の事物のうちで、その大部分に共通するタイプを具へて居るものを常態的(normal or average)のものとして、さういふものから懸け離れた特殊のタイプを、その共通のタイプ以外に、若しくはその通のタイプの代りに、具へて居るものを變態的(abnormal)のものとする慣例を有して居る。統計學者ケトレーは、統計に關するこの慣例を社會現象の觀察に應用して、或る社會的集團に屬するすべての人々のうちで、右の意味に於ける共通のタイプを具へてゐる人々を『常人』(average man)と見做す慣例を作つたといはれて居る。普通の用語に於て『凡庸』(mediocrity)と呼ばれて居るものは、此意味に於ける『常人』の別名である。す

なはちそれは、或る特殊の社會的集團中に於て、主としてその能力の點に於て、その集團を構成する人々の間に於て最も普通に見受けられるタイプを具へてゐる人を指すものである。この意味に於て『凡庸』といふのは、その能力に於て常態的である人を指するものである。そして、『天才』は『低能』とか『白痴』とかと同樣に、『凡庸』に對しては『變態的』である人に關するものである。唯『凡庸』を中心的位置に置くときは、『天才』は一方の極端にある位置を占めるものであるのに反して、『低能』とか『白痴』とかは、それぞれに、他方の極端に近き、若しくは他方の極端にある地位を占めるものである。たゞ天才主義者たちは『天才』の場合に『變態的』をいふやうな呼び方を用ふるのを嫌やがつて、『超常態的』(supernormal)といふやうな言葉を代用しようとし、從つて、『變態人』といふ代りに、『超人』などといはうとするのである。そして、前にも言つた通り、彼等の『天才』は『精神上』の能力に於て凡庸を超絶する人を指すものとせられてゐるといふ事實から推せば、『超常態的』とか『超人』とかいふ言葉が彼等の間から來たのもまた、彼等の理想崇拜のためだといはなければならないのである。

二

更らにまた、ダーウィニズムに於ける生存競爭、適者生存、及び不適者淘汰の學說もまた、『天才』の概念の構成の上に或る影響を投げ掛けたものとすることが出來るのである。ダーウィニズムが第十九世紀の後半期に於ける社會學說の上に絕大の影響を及ぼしたことは、一般に熟知せられて居ることであるから、玆で細說する必要はあるまい。がしかし、社會生活を以て、個人と個人との間の、若しくは集團と集團との間に生存競爭場裡と見做すやうな見解が、その學理的根據をダーウィニズムに發見したといふ一點は、私が今取扱つて居る問題に直接に交涉を持つて居ることであるから、私は是非こゝで、それに關して一言を費さなければならない。

この見解に從へば、社會生活と稱せられる生存競爭場裡に於ては、そこでの適者である個人なり集團なりが、結局勝利者の榮冠を戴く優强者の群れを構成するものであつて、そして不適者である個人なり集團なりが、早晩淘汰の運命を免れることの出來ない劣弱者の群れを構成するものである。で、『天才』なるものは、この見解に於て、最も卓絕なる地位を與へられて居るものである。卽ちそれは、右の意味に於ける生存競場裡の適者である個人、若しくは適者である集團の指導者だとせられて居るものなのである。ところが一般の天才主義者たちに取つては、斯

らいふ優强者を代表する『天才』は、例の彼等の理智崇拜の心的習慣から來た必然的歸結として、『筋肉上』の能力に於ける優强者でなくて、『精神上』の能力に於ける優强者だとせられてゐるのである。換言すれば彼等に取つては、『地を嗣ぐもの』は、最早『柔和たるもの』ではなくて、『優ぐれたる頭腦を持つもの』である("Brute force must yield to mind force,...... in order that not the meek, but the brainy may inherit the earth."〔註一〕

かういふ風に、『天才』を以て生存競爭裡に於ける優强者——知能上の——と見做す考へ方は、自由競爭主義を基調とする資本主義的人生訓と、完全に共鳴するものである。けれども、そこはその代りに、『天才』を『世の光』とか、『地の鹽』とか、『文明の恩人』とかとして嘆美しようといふ考へ方とは、根本的に相容れない或るものをその裡に包藏して居るのである。が、唯ひとつ、それが『理知崇拜』の産物として、現代思想の上にその地位を占めて居るといふことだけは、爭ふべからざる事實である。

〔註一〕 Denley, James Quayle: Sociologye its Development and Applications, New York, 1920, p. 329. 本節及び次節に於ける事實の敍述中には、この書、並びに Ward, L. F.: Applied Sociology, New York, 1906 Kelsey, Carl: The Physical Basis of Society, New York. 1916 に負ふところがあること序に附記しておく。

二

前に述べたやうに、ガルトンは、『天才』の素質を全然遺傳に歸した。この點は、彼の優生學の根本觀念と密接の關係を持つて居るものである。が、私は茲では、それに觸れて居る餘裕を持たない。彼はまた、『天才』の範圍の限定に關しては統計的方法を用ひて、それは一定の時に於ける人口の百萬に對して二百五十人ほどを算へるものだとした。かういふ風に、彼は『天才』の限界を非常に狹いものにして、しかもそれが一定の特殊階級に於てのみ發見され得るものと解釋され得るやうな說き方をした。彼はまた、彼が『天才』としての婦人について何も言つて居ないところから見ると、『天才』は唯一定の特殊階級の男子の間に於てのみ發見され得るものと考へたらしいのである。それからまた、彼は『天才』の成長に關聯して環境の影響を無視しはしなかつたが、それを比較的に輕視したのである。そしてこの點は、他の多くの學者の間に於て、烈しき反對論を喚びさましたことである。

アメリカの社會學者ウォードは、その『應用社會學』(Ap-

pical Sociology）に於て、ガルトンの『天才』論に鋭き批評を加へて、殊にガルトンが『天才』の成長に關して環境を除りに輕視して居る點を批難した。尤もウォードも、ガルトンと同樣に、『天才』の素質が遺傳から來るものであることを認めたが、同時に如何なる『天才』の素質も適當なる機會の下に置かれなければ、順當に育つものでないことを指摘した。この點から彼は、『顯在的天才』（actual genius）と『潜在的天才』（potential genius）とを區別し、後者を以て『天才の素質』といふ意味に解した。で、彼に依ると、『潜在的天才』若しくは『天才の素質』は、決して或る特殊階級に限つて存在して居るのではなく、又すべての階級に通じて同じ割合に分布されて居るもので あるばかりではなく、男女の間に於ても矢張り同じ割合に分布されてゐるものである。が、今日の社會に於ては、無産階級に屬するすべての人々、及び各階級に屬する婦人らは、その固有の能力を充分に發達せしめ得る機會を持つことが出來ないと言つたやうな不利益な狀態の下に置かれてゐるのであるから、彼等の間に於ける『潜在的天才』は、終生他人にも自分達にも心附かれない間に、闇から闇に葬られてしまふものである。けれども、彼等にも彼等の能力を守り立てる機會を持たしめるやうに社會的環境を改造せよ、さうすると、彼等の間に今は眠つて居る『潜在的天才』も、それがために直ちに喚びさまされて、やがて『顯在的天才』となつて社會生活の向上のために一層多く貢献するやうになるであらう。——

ウォードは、遺傳及び環境——それはガルトン自身が nature and nurture といふ一句で象徵的に表現したものである——に對する科學的、殊に生物學的考察に依つて、右の見解を立證しようとした。がしかし、彼がこの見解に到達したまでには、フランスの學者ヘルヴェシウス及びオーダン等のこの問題に關する學說から示唆を受けた程度も非常に多かつたのである。或は寧ろ、彼は實質上、殆んど彼等の立場を布衍したのだといふ方が適當なのだかも知れないのであ〻。そして彼は、『天才』の限界をガルトンよりも一層廣く見て、社會狀態の現狀の下に於ても『顯在的天才』として算ふべきものは全社會の人口の千分の一に達するものと見ることが出來るが、社會狀態が改善されてすべての階級に屬する男子らがその能力を充分に發達させることが出來るやうな時節が到來すれば、『顯在的天才』は現在の百倍を算へるやうになるであらうし、更らにまたすべての階級に屬する婦人らが同樣に解放される時節ともならば、その上にまだ百倍が加へられて、結局現在のそれに二百倍を算へるやうになるであらうと說いた。

ガルトン及びその追隨者らと、ウォード及びその支持者らとの間に於ては、『天才』の成長と環境との關係についての見解の上に根本的相異が示されたが、しかしながら『天才』そのものの價値を謳歌する點にかけては、兩派の人々は全然共通の立場の上に居つたものである。次にウォードは、無產階級の人々や一般の婦人たちのために、各自の能力の開發に關しては、社會の現狀の下に於て特權階級を形づくつて居る人々と同等の機會を持たしめるやうに社會狀態を改造すべきことを要求したけれども、しかし彼の趣旨は、無論、生活のために生活を改造せよといふのではなくて『天才』顯現の道を開くために生活を改造せよといふのであつた。それはこの點に於て、文化價値のために生活を改造せよといふことや、人格價値のために生活を改造せよといふのと、つまり同じ筋路を辿つたのであつた。それ故に、それは結局一種の概念崇拜及び理知崇拜の產物でもあり、從つて廣い意味に於ける知能本位のアリストクラシーの表現でもあつた。

三

『天才』價値謳歌の部類に屬する思想系統の上に一瞥を與へた私は、玆では更らに、それとは全然反對の思想系統を覗いて見なければならぬ。

これに關聯して第一に我々の念頭に浮んで來るものは、イタリアの刑法學者ロンブロゾーの『天才』價値否定說である。彼の考へ方を追つて行けば『天才』といふものは『超常態的』のものといふよりは、寧ろ『變態的』のものだといふのが、呼び方としても一層適切である。彼は『天才』を以て、癲癇とか發狂とかと同樣に、一個の病理的現象として取扱つた。彼は犯罪を身體的及び精神的退化の現はれとして見做したと同樣の根據から『天才』をも健全なる『凡庸』に對する變態的現象とし、社會的頽廢の諸相を反映するものとした。それ故に、彼の見解に從へば、社會の進步といふものは、決して變態的な、頽廢的な、不健全な『天才』に依つて發作的に實現せらるるものでなくて、それは寧ろ自然的進化の理法に依る一般の『凡庸』の漸進的向上といふやうな、無限に遲緩な過程に依つて行はれるものだ、といふことになるのである。

ロンブロゾーの『天才』の評價に同意すると否とを問はず、ガルトン流の『天才』遺傳說の缺陷を認めることは、さして困難なことではないと、私には考へられる。それは樣々の點からさういへるのであるが、今はその詳論を後日に保留することにして、私は玆に唯そのうちの一二點だけを例示してみようと思

ふこの點に關しては、私の疑問は、先づ第一に、『天才』といふ言葉の意味から始まるのである。『天才』を或る特殊の仕事に對する特に優秀なる超凡庸的能力として見るにしても、どういふ種類の仕事の能力に關してさう言ひ得られるかは、全く見る人の主觀に依つてのみ決まる問題だといはなければならないのである。たとへば、一方に於ける現代の理知崇拜者らの眼には、科學とか、哲學とか、藝術とか、政治とかの方面で『不朽』の業績を遂行したものがたしかに『天才』として映ずるに違ひない通りに、他方に於ける腕力の讃歎者らに取つては、傳說の朝比奈とか樊噲とかが古今の大『天才』だとのやうに考へられようし、また更らに、昔の孟嘗君式の人々になると、鷄鳴狗盜の輩の間に『天才』を發見しなかつたと、誰が保障し得よう！　また縱しこの問題が解決せられたものといふやうな、假定すべからざることを我々が勝手に假定するにしても、或る特殊の仕事の能力に關して、其の如何なる程度までを『天才』の部類に編入すべきか？　といふやうな問題については、それに萬人を首肯せしめる程の標準がある譯でもなければ、またその程度を測定するための確實なる客觀的尺度があるといふ譯でもないのである。

しかのみならず、或る特殊の仕事に對する能力の遺傳といふやうな言ひ方も、可な曖昧に響くものとして考へられるのである。今手短かにその一例を擧げていへば、假りに音樂に對する能力の遺傳といふやうなことを言へば、さういふことは、音樂的能力といふものが他のすべての能力から獨立して存在してゐて、そしてそれが一定の法式に從つて遺傳せられるものだといふ事を意味するのであるか？　それとも、或る種類の遺傳的能力は、他のすべての――若しくは他の或る限られたる種類の――仕事にも向くと同じやうに、音樂にも向くといふやうなことを意味するのであるか？　かういふ諸點に關しても、『天才主義』の主張の中には、まだ說明し殘されて居るものが極めて多く發見されるのである。

右に述べた點から布衍して、我々は又斯うも考へて見なければならぬ。――すなはち、それは、前にも一言したことではあるが、或る人が或る特殊の一つの仕事に對する能力を異常に發達せしめるためには、他のすべての仕事に對する能力の發達を犧牲に供するやうなことはないか？　といふ一事である。ロンブロゾーが『天才』を癲癇や發狂に配せしめたのは、この點から見て、我々を深く考へさせる。昔から『天才』と見なされた人々の中には、或る一面に關して異常の能力を示したと同樣に、他の多くの方面に關して驚くべき性格の缺陷、若しくは極度の能

力の缺乏を發露したやうな實例は、數限りなくあるのである。リンヅトンはその著『社會病と退化』(Lyndston, G. F.: Deseases of Society and Dygeneracy) に於て、西洋諸國に於けるその多數の實例の長い黑表を掲げて居るが、我々は尙ほその上に、日本及び支那のを無限に繼ぎ足すことが出來る。かうして我々は、『天才が戶口から這入ると、健康が窓から逃げる』といふ警句【註一】の裡に、『天才』價値否定の有力なる根據が含まれて居ることを見逃がすことが出來ないのである。

一五

『天才主義』に對する他の一つの難點は、それが『天才』の『創造的』能力を極度に謳歌したさの餘りに、個々の『天才』が完成した事業の基礎的材料としての、若しくはその準備的段階としての役目を務めた所の、既存の事物とか、既存の業績とかを無視若しくは輕視する傾向に陷つて居ることである。新發明とか、新發見とかの歷史を檢べてみても、但しは新學說とか新原理とかの展開の跡を尋ねてみても、我々は常に、多くの先行者の失敗が一二の後至者の成功の踏臺となつたり、或る時代の進步が次の時代のそれ以上の進步の刺激となつたり、或る種類の業績が他の種類の業績を示唆する糸口となつたりしたやうなことが、寧ろ最も普遍に起つたことであるのを發見するのである。しかるに『天才主義』は動々もすれば、個々の『天才』の事業の完成といふことの輝やかしさに眩惑されて、意識的に若しくは無意識的に、その隱れたる基礎を發ばくことを忘れたり、その永き準備の過程を辿ることを怠つたりして、唯それを完成したといふ幸運を惠まれた個人だけの行爲を、特別の大文字を以て記錄しようとするやうな傾向に陷り易い危險性を帶びてゐるものである。

それからまた、右の場合に關聯して尙ほ、或る特定の二人若しくは二人以上の研究家たちが、同じ種類の發明、發見、若しくは新學說の創設などを、僅かの時日を隔てゝ完成若しくは發表した場合などのことも、我々の聯想に上ぼつて來るのである。かういふ場合に於ては、その僅かな時日の隔たりが、それらの當事者たちの各個の幸不幸の上に、非常に大なるギヤップを持ち來たす契機となることがあるのである。我々は、其の一例として、チャールズ・ダーウィンとサー・アルフレッド・ラッセル・ウォレースとの進化論上に於ける同種類の貢獻と、それに關するこれらの二人者の別々の名聲の上に於ける差異とを思ひ浮べるこ

【註一】 Kelsey, op. cit. p. 236.

とが出來る。更らにまた、學術上若しくは技藝上に於て多大の價値のある業績を完成しながら、適當なる紹介者を得なかつたために、その名もその事業も共に、空しく草莽に埋められるといつたやうな、隱れたる篤志家の場合などのことも、當然のことゝして、我々の考慮の中に入り込むのである。もとより我々は、『天才主義』がさういふ不公正を意識的に行つてゐるものだといはうとして居るものではないが、しかしながら、それが顯はれたる事業の完成者の禮讚に沒頭してゐる背後に於て、如何に多くの犧牲者の永久に認められることのない事業の殘骸が靜かに横はつて居るかといふことは、我々が當然知つておかなければならないことである。

個々の『天才』が或る事業を完成した以前から久しく社會に既存して居た事物や業績やが、その事業の基礎的材料となり、その準備的過程となつたものだといふ意味に於ても、我々は『時代が天才を作る』といふことを主張することが出來るのである。がしかし、我々はまた、同樣のことを、それとは全然別樣の意味に於て主張することも出來るのである。それは、斯ういふ譯である。――

或る特定の個人が、その本質上に於て別に取立てゝ言ふにも當らないほどの事業を完成した場合にも、當該時代の人々の大多數の知識とか、信仰とか、態度とか、嗜好とか、人生觀とか、思想傾向とかに依つて、その事業の效果が非常に卓絶したものと認められる場合には、その個人は忽ち偉大なる『天才』として祭り上げられるものである。けれども、その代りに、次ぎの時代に於て、多數の人々の知識とか、信仰とか、態度とか、嗜好とか、人生觀とか、思想傾向とかの上に或る變動が生じた場合に於ては、さういふ個人が同時に、突然『天才』の陳列棚から衝き落されるといふやうなことも、現實世界に於ては、極めて普通に起つて來ることである。蛟龍が蚯蚓の形に萎縮するといつたやうな調子で、昨日の『天才』が今日の『凡庸』に早變りすると言つたやうなことは、歴史上に於ては、決して稀れに見られることだとはいはれないのである。

中世紀に於て星占術や錬金術の達人と謳はれたものとか、『哲學者の石』を求めたとか、不老不死の靈藥を煉つたとか誤信されたものなどは、無論當時の『天才』であつた。だが、近代の科學的智識が最早さうしたものを信用することを我々に許さなくなつて來た今日に於ては、彼等は或る意味に於ける欺かれたる善意の――惡意の、と言ふ方が當るものもあつたかも知れないが――犧牲者だと見られる位が關の山である。我國にても、先き頃盛に騷がれた例の萬有還銀法の發見者なども、矢張

り同様の運命に陥る虞れの全然ないものであらうか？　私は無論、それに對して何等の斷案を下し得るほどの知識を持ち合はせて居るものではない。だが私は、さういふものゝ一切に對しては、兎に角宗教的信仰の態度を以て臨まないやうにするのが安全だ、とだけは適當に言ひ得られることを信ずるものである。

曾てイギリスの歴史に於て一個の『奸雄』で通つて居たクロンウェルの如きものは、カーライルが彼に熱狂的讃辭を捧げてからこのかた、多くの人々に依つて一個の『偉人』として渇仰されるやうになつた。これは前の例とは反對の場合であるが、しかしながら、それでもそれは、『聖人』とか『英雄』とかの名聲の運命の旦夕を計り難いことを思はせるには充分である。まことに、時代は『天才』を活殺する。しかも『天才主義者』の偶像の名簿の中には、さういふ不安な名が無數に登錄されて居ることは、掩ふべからざる事實である。

また私は、本文の初めの方で山縣公の死に觸れておいたが、彼もまた、我國の自治制度の制定者として、若しくは我國の徴兵制度の創設者として、多くの人々から、或る意味に於ける『天才』として見られてゐるのである。もつとも、私自身としてはこれらの制度がそれぞれに制定された當時に於ける我國の内外の政情とか、その間に處した彼の閲歴境遇とかから考へて、別にそれらを『天才的』な特別の頭腦の產物だとは思はないのであるが、しかし、それかと言つて私は、彼が多數の人々から、一種の超凡脫俗的創造力の持主として仰がれて居る事實に對してまで、私の眼を塞がうとして居るものではない。しかのみならずこの事實の結果として、何か特別の價値があるものとは私にどうしても考へられない彼の至極月並的な短歌までが、世間で非常に珍重がられたり、またどの位の造詣があつたかは知らないが、どうせ素人藝だつたらうと、先づ第一段には推定されなければならない彼の築庭術とか能樂とか對異性的情事とかに於ける技能までが、一部の人々に依つて、丸で天變地異でもあるかのやうに、無暗に騷がしく吹聽されて居る事實をも、私は充分に承認する。けれども、さういふことが、彼を『天才』に見立てるために、どれほどの意味のあることだらう！　それから事實上に於てもまた、彼はさういふ點から『天才』扱ひにされて居るのではなくて、むしろ、彼が他の根據から『天才』扱ひにされて居る故に、彼に關するさうした點までが囃し立てられて居るのである。しからば、他の根據とは何であるか？　といへば、それは、彼が自治制度の制度者であつたといふ事實をも含んで居ようが、しかし主としては、彼が微兵制度の創設者であり、軍閥の親玉であつたといふ事實に關聯して居るものであ

る。成るほど、現今の我國に於ては、反軍閥熱の勢焔が可なり猛烈に擧げられて居るし、また、軍國主義呪咀の聲が相當に高く聞かれて居ることは事實である。が、それにしても尙ほ、我國民の多數者の心理に於ては、帝國主義的意識が全然死に絕えて居なくもあり、また日淸日露兩戰役の追憶が尙ほ活きて居もするのである。それ故に彼の死は、一方に於ては、例の二名の代議士の國葬反對の聲に依つて代表せられた國民の一部分の批難的感情を喚び醒ましはしたものゝ、大體に於ては、それは『偉人』の死としての取扱ひを受けたのである。そして我々はあの際、若し彼の死が十年も早かつたら、それは更らに幾倍の光榮を以て包まれたらうといふやうなことをも、自然と考へさせられたのである。が、之に反して、今後幾年かの後、世界全般の上に亘つて現今進行しつゝある社會的變動が一段落を告げた曉に於て、我國民が始めて冷靜な態度に立歸つて、我國の軍國主義の功罪の總勘定をしなければならないやうな破目に陷つた場合ともならば、我國民の彼に對する評價は、果してどういふ風に變化するであらうか？　私は今茲でかういふ判り切つたことの豫言に耽るよりは、寧ろ『時代は天才を活殺する』といふ前言を繰返しておくことにする。

私は最後に、『天才主義』に最も直接的の交渉のある『理知崇拜』の傾向を評論することに依つて、『天才主義』の現代の政治及び社會生活に對する全意義を明かにする積りで居たが、本誌の新年號から今月號へかけての私のこの問題に關する考察は、既に餘りに長くなり過ぎた感じがするから、私はその殘りの部分を、私が『大觀』の四月號に寄せた論文『知識崇拜の迷信と階級意識』に讓ることにした。このことを特に茲ゝ斷つて、私は一ト先づ本誌に於ける私のこの問題に關する論述を打切ることにする。

一九二二——三——一三

禁酒法其他の道徳的立法の成績に徴して法律と社會心理及び時代思潮の關係を論ず

東京帝大法學部教授　高柳賢三

一

私は千九百十五年の夏初めて北米の地を踏んだ。丁度サンフランシスコに萬國博覽會が開催せられて居つたので私は一週間をその見物に費した。赤毛布の私には總てのものが珍しく私の頭腦に刻まれる。世界各國及び米國各州の農業、工業、商業の狀況は數多い出品と之に附隨した說明書と、統計表とに依て明瞭に私の眼の前に開展された。それ許りでない。此博覽會には米國に行はれて居る色々な宗教運動や社會運動などが各々其代表者を送つて各自の主張綱要をば、或は圖解し或は、統計表に作つて分り易く說明して居つた。そしてパンフレットを頒布して居る許りでなく、說明者が立ちどまる人に詳細な說明をやる。アメリカに於ける色々な舊い新しい運動が一堂に開展されて居る狀況は私に非常なる興味を惹起したのであつた。その中に「酒場反對同盟」(Anti-Saloon League)と云ふのがあつて私は之に就て詳細な說明を聞く事を得た。說明者は中老の婦人（オールド・ミス）であつてアルコールの人體に及ぼす生理的影響、アルコールと犯罪との關係、アメリカに於けるアルコール使用反對運動の歷史と現況、各州各都市各地方に於ける酒場禁止法の現況などに就て特に私の爲めに小一時間を費して統計表、圖解等を示しながら懇切なる說明をして吳れた。私は之に依てアメリカに於ける禁酒運動の大要を理解する事が出來た。

サンフランシスコ市を去つて私はトランス・コンティネンタルの列車に乘つてボストン市に向つた。列車は一時間約二十五哩の快速力を出してアメリカ平原を橫斷する。車臺の完備した設備は可成り動搖する列車內にあつて尙ほ安樂な汽車旅行を續ける事を許した。食堂や喫煙室では色々な種類の酒が供給される。上戶黨はウイスキーのグラスを片手に地方政治（ローカル・ポリティックス）に就て盛

に氣焔を揚げる。ハイカラな婦人は甘いベルモットを味ひながら文藝を論じ音樂を語る。ピユーリタンはアイス・ウオターを飲みながら世間話に餘念がない。列車内のバーは中々の繁盛である。處が列車が一度びドライ・ステートを通過すると酒倉の鍵は固く閉されてカラード・ジエントルマンのテイツプもこの鍵を開かせる力が無い。禁酒法に就て各州皆な法律を異にする事は兼ねて聞いて居つたが列車が禁酒州を通過する際に固く酒倉を閉ぢる状況は私に驛馬を變へる毎に法律を異にする昔しのフランスの状況を思ひ出さずには居られなかつた。

私はボストン市の對岸ケンブリツジ市に宿を定めてハーバード大學で勉學する身となつた。ハーバード大學の所在地であるケンブリツジ市は『乾いた町』(dry town)であつてバーは一軒もなく又料理店でも酒を出さない。之に反しボストン市は『濕つた町』(wet town)であるから自由自在にあらゆる種類の酒が求められる。ケンブリツヂ市に住む上戸黨の人達が一杯やらうと云ふ時は穴潜り――地下鐵道(サブ)――でボストン市へ現はれる。これと似た現象は決してボストン丈に限られて居るのではない。大學の周圍一哩以内にバーを開く事を許さぬと云ふ様な規則はアメリカでは極めて普通であつた。又住宅地(Residential Quarter)でロカル・オプションの結果「乾い」て居る地方も數多くあつた。これは住宅の附近に酒場があると云ふ事は住民の風儀上面白くなく又兎角靜謐を害する傾向がある。一個のニユーサンスであると云つて宜いからである住宅地で「乾く」方に投票する人の多いのは怪むに足らない。

私はアメリカ滯在中に度々バーのお世話になつた。但し目的は酒を飲むのではなく便所を利用するのである、西洋には日本の様に澤山の共同便所がない。それで町に出て用を足すには必ずバーを利用するのが彼地の慣例になつて居る。バーに入つて行つたからと云ふてビール一杯でも奮發する必要は少しもない。用が濟んだらずつと歸つて來て差支なく又バーの店番も少しも怪しみもしない。當り前の事と思つて居る。私はバーの内の状況を見て色々な感想に打たれた。バーの前に立つてウイスキーやブランデイを飲んで居る人には勞働者が多い。本人は非常た上機嫌であらう。然し彼等が額に汗して得た一日の勞銀は大部分バーに貢いで了ふ。彼等の留守宅には妻子が泣いて居らう。彼等の家庭的平穩が破られる許りでなく妻子は生活に脅かされやがては離婚遺棄等に依る一家離散の悲劇が演ぜられよう。私が屢々訪問した家庭裁判所や少年裁判所などの光景がありありと私の眼の前に浮ぶ。バーはこんな想像に耽つた私の胸に非常な嫌惡の感を起させた。家庭の破壞。不良少年の發生。犯罪の

誘起。——社會の最も恐ろしい出來事はこのバーに責任の大部分を歸すべきであると考へた。私はバーを呪はざるを得なかつた。私はアメリカのある州で Civil Damage Act 又は Dramshop Act の名の下にバーで酒を買つた爲めに泥醉者の妻子その他扶養を受くる人が損害を被つた場合に於てバーの所有者に是等の人に對する損害賠償の責任を被はせて居る立法を設けた趣旨を諒とした。

私はアメリカで度々教授の家庭に招かれて夕食のお馳走になつた。そしてヨーロッパに於けると同樣な場合と異つてテイブルの上に酒が出ない。飲料は必ずアイス・ウオタアである。あのアイス・ウオタアは空氣の乾いたアメリカで飲むと格別に美味しい。到底ボルードやライン・ワインの比ではない。アメリカ人がアイス・ウオターを好むのを私は怪しまない。各國には『國民的飲料』(National drink) がある。ドイツは麥酒フランスは葡萄酒イギリスは whisky and soda 日本は酒であらう。アメリカの國民的飲料はアイス・ウオタアである。或人はコック・テールだと云ふが私は寧ろアイス・ウオタア說に賛成である。ヌーヴオ・リッシュの家庭の內は知らないが兎に角教養ある中流の家庭でお客をする時に酒を出さないと云ふ處にピューリタン式の sense of propriety が生きて居る事を感じた。此處に將來のアメリカの中堅となるべき有望なる子女は育てられるのではあるまいか。私は窃かにアメリカの爲めに祝福を祈つた。

アメリカの教會は社會的に非常に活動する。私は日曜毎に教會へ行つた私はアメリカの宗教——教會の空氣の內に現はれた宗教には深刻味が足りないと云ふ印象がアメリカを去るまで去らなかつた。深い痛烈な宗教的經驗の聲はアメリカの教會の教壇から之を聞く事が出來なかつた、私は反て舊世界のスコトランドやアルプスの雪の消えないスウイスの教會に之を聞いた。然しアメリカの教會の說く宗教が極めて道德的であり人間的である事又その宗教が著しく社會化されて居る事兎もすると教會の空氣が上品な社交クラブ式である事はアメリカの宗教の私に與へた印象である。然し反面に於てこの意味でアメリカの教會は社會統制の機關として頗る有力に働く。一般民衆は教會の態度に依て非常に動かされる。教壇から叫ばれる處は禁酒問題などに觸れる事が少なくない。飲酒が善良なるアメリカ市民として恥づべき事であると云ふ感念は教會の影響の下に養はるゝ事が少なくない。禁酒運動を主唱する團體としては Good Templars や W. C. T. U. や Anti-Saloon league などがある。然し是等の團體の運動が成功するに到つた土臺にはアメ

リカの諸教會の禁酒問題に就て民衆に與へて居つた隱れたる力を見逃がす譯に行かないと考へた。

アメリカが參戰する前には禁酒問題に就て隨分議論があつた。元來禁酒問題はアメリカとしても隨分古い。既に千八百八年ニューヨーク市に禁酒會が出來た。禁止立法に就ても既に千八百四十五年からニューヨークで酒の販賣を禁止する法律があつた。然しこの法律は千八百四十七年に廢止されて了つた。千八百五十一年メーン州で制定した禁止法は今日まで廢止されないですつと効力を繼續して居たのである。それでメーン州が一番古い『乾いた州』と云ふ事になつて居る。禁酒運動は初めは個人の問題として、從て飲酒の惡癖——(drink habit)に關する問題として論議されたが漸次社會の問題として取扱はれるに至つた。從て運動は酒業(drink traffic)に關する、問題としても論議さるゝ樣になつた。禁酒論者は酒と貧困、犯罪、精神病、遺傳、死亡率等との關係から禁酒立法の必要を論じた。之に反對論者は禁酒立法は憲法の保證する個人の自由を害するとかアメリカの經濟上から云うて不都合を來すとか失業問題が起るとか云つて反對したもんである。禁酒論者でも之に就てどう云ふ抑制方法を採つたら宜いかと云ふ事に就ては決して一致して居らなかつた。戰前のアメリカに實際行はれた立法的抑制方法は大約四つに分つ事が出來る。第一は『乾いた州』にする事で州全體としての禁止である。全國禁止が實施せらる迄には二十も許りの州が此種に屬した。カンサス州丈では大成功であると傳へられて居るが多くの禁止州では殊に大都會で公然バーが開かれて法律と實際との離隔が甚しかつた。第二は地方選擇主義(local option)で各州の小行政區域でその住民の投票に依て酒場を禁止する。この法は可成り成功した。區域が小いのと輿論の結合が強いので法律の執行から容易に行はれた。第三は酒場免許に高い手數料を取る(High license System)と云ふやり方で、ある地方ではこの方法で可成り酒場の數を減少したけれども全體として見ると餘り成功しなかつた樣である。その失敗の理由は人民の非難する商賣から税を取つて之を財源に使ふと云ふのは不都合ぢやと云ふ感じからである。それでこの主義をとつた地方では禁酒論者と酒場營業者とが聯合して法律に反對すると云ふ奇觀を呈した。第四は官有主義である。(dispensary system)即ち酒の販賣權を一切官有とするのである。サウス・カロライナ州で嘗て行はれて居つた。そして『社交場としての酒場』を廢止した。然しこれも第三の主義と同樣な理由から巧く行かないで千九百六年に地方 擇主義に變更され更に千九百十九年には全州が『乾いた州』に變つた。

アメリカの參戰はアメリカの經濟生活に色々な變化を來した。食料品の節約と云ふ問題がその內で一番高唱された。『肉なし日』(meatless day)や『小麥なし日』(wheatless day)が一週に一回宛定められる、各市民の自治的愛國心に訴へて是等が可成り宜く守られた。當時の人氣役者であつた食糧大臣フーヴァー氏に因んで『フーヴェライズ』(Hooverize)と云ふ新しい英語が作られて『食糧を節約する』と云ふ意味に用ひられる樣になつた。食糧の節約に伴つて酒の釀造は有用な穀物を浪費するものだと云ふ禁酒論者の所說が戰爭のお影で可成り早く輿論を動かすに到つた。千九百十七年八月十日に米國議會を通過した食料品管理法 Food Control Act が蒸溜酒の輸入を禁止し且つ食料品を蒸溜酒の作製に使用する事を禁止したのはこの戰爭輿論の發現である。然し運動は之れ丈で止まらなかつた。禁酒論者は全國を此機會を利用して『乾かし』てしまはなければ、と考へた。この考が勝を制して千九百十七年十二月十八日米國議會の決議で採用したアメリカ憲法修正案は各州に批准を求め千九百十九年の一月ネブラスカ州が批准を了へたので全國の州の『三分の二』と云ふ聯邦憲法改正の法律要件が完備してアメリカは全部が『乾く』事となる事に定まつた。之れが所謂聯邦憲法第十八修正であつて、『本條の批准より一年後合衆國及び合衆國の管轄の下に立つ領土內に於ける酒の製造、販賣、及び運送、と輸入輸出とを禁じ』又『米國議會及各州は適當なる立法に依て本條を施行すべき競合權限を有するもの』とした。右の聯邦憲法第十八修正が批准せらるゝに至るや禁酒論者は更に一步を進めて州議會及び聯邦議會に於て嚴格な施行法の制定に運動を進めた。之に反し酒造業者側では施行法制定に就て各州の人民投票(レファレンダム)を求めた。輿論の力に依賴して緩和された施行を得んと欲したのである。同年七月一日から戰時禁酒法が愈々實施さるゝに至つた。そして此法律は『戰時中の禁止は戰爭終止後軍隊解散のあるまで繼續すべきもの』で『その日附は大統領之を定むべきもの』となつて居つた。同年十月二十八日有名な『ヴオルステッド法』Volstead Act が大統領の拒否(ウィトー)に拘らず聯邦議會を通過し戰時禁止法及第十八修正の施行規則を定める事になつた。そして是等の法律で云ふ酒(intoxicating liquor)とは『二分の一パーゼントのアルコールを包含する飲料』の意味に法律で定めらるに至つた。

戰時禁酒法、ヴォルステッド法及び憲法修正はアメリカ獨特の違憲立法問題と云ふ事から是等が違憲立法なりや否やと云ふ點でその効力問題に就て爭はれた。州權と聯邦權との限界問題、個人の自由と國家の命令權との限界などに關する政治學上

の根本問題はアメリカ憲法の解釋と云ふ一個の法律問題の形を取つて州裁判所や、聯邦裁判所などで盛に論議された。然し結局は合衆國最高裁判所の判決で總ての異論が排斥されて是等は總て有効と云ふ事に定まつて了つた。アメリカ國民は名義上に於て古今無比の『酒を飲まぬことを主義とする國民』となつた。勿論是等の法律は酒を飲むことを禁止はしないが製造、販賣、運送、輸入を禁止するのは成るべく飲ませぬ事を意味するは疑ひない處であるからである。

私は二年間のヨーロッパ留學を終へて歸朝の途上再びアメリカを通過した。ニューヨークの幾多のバーやカフエーやレストラントやカバレーは或は閉され或は開いて居つても『柔い飲料』Soft drinks 丈を賣つて居る。如何にも落莫の感に堪へなかつた、汽車の中でもジンジャ・エールやルート・ビーヤやニヤ・ビーヤなどの『柔かい飲料』それから二分の一パーセント以下のアルコールを含んだ味の無いビールが盛に賣れて居る。

外面的にはアメリカは酒を飲まぬ國民となつて居る。內面的には矢張り酒を飲む國民として止まるか。よし未だ濕つて居るとしても濕り氣が以前より少いと云ふ事が出來る如何か。之れは一寸批判するに苦む問題である。第一正確な材料がない。禁酒論者は樂觀的考察に傾き反禁酒論者は悲觀的考察に耽るからである。私は某法科大學の教授を訪問した。談偶々新しい禁酒法の効果の問題に及んで彼はその家庭で私用の爲めに葡萄酒を作つて居ると云ふ。そして外國人たる私に公然と之を言明する。之れは確かに法律違反であるに違いない。そしてこの人は法律學の立派な先生である。禁酒法は確かに善良なる市民を犯罪者としたと考へた。シカゴの町の散歩をしてデパートメント・ストアの前に立止つて、內を眺めると家庭用葡萄酒釀造器が公々然と商品として陳列されてあつた。カリフオルニヤの葡萄が禁酒法制定に拘らず無比の賣行であると云ふ話を聞く。金持が子々孫々に傳へる事の出來る位多くの酒をその穴藏に貯へて居ると云ふ話を聞く。勞働者は惡性のアルコールやオピアムやコカインを飲用して健康を害して居ると云ふ事を聞く。サンフランシスコの日本旅館では日本酒は『お茶』の風を粧つて盛に土瓶から茶碗に注がれて居るのを見る。

私の得た情報は斷片的ではあるが非常に悲觀的であつた。然しながらそれは經過時代の止むを得ざる現象であるかも知れない。未だその成績に對しての判斷は容易にすべきであるまい。更に十數年の後に至つて初めて公平なる批評をするdataが集まるであらう。

私はアメリカの制度の研究者として又法律學の研究者として

禁酒立法と云ふ一個の興味ある試みに關連してアメリカ人の社會心理と二三の法學の根本問題に就て下に若干の考察を試みる事を許され度い。

二

アメリカの禁酒法に關聯して先づ頭に浮ぶのはピューリタニズムである。禁酒と云ふ事はすべてのピューリタンの贊成する處であらう。元來キリスト教は必ずしも酒を飲む事を禁止して居らない樣に見える。イエスが奇蹟に依て酒を作り出した新約の物語はイエスが必ずしも飲酒に反對した樣にも見えない事を示して居る。又イギリスの古い小說などに牧師さん達が酒に醉つて蹣跚く千鳥足の光景などが描寫されて居る處から見てもヨーロッパのキリスト教徒の間に飲酒が必ずしも禁止されて居らなかつた事を示すものであらう。然し日本でキリスト教と云へば禁酒禁煙の教と一般に考へられて居る。これはピューリタニズムの影響の勝つたアメリカ宣教師に依てキリスト教が日本に傳へられた結果ではあるまいか。それは兎に角として禁酒法を考へる時に私にピューリタニズムを思はずに居られない。

元來ピューリタニズムはイギリスに起つたのであるがピルグリム・ファーザースと共にアメリカに渡つて非常な潜勢力をアメリカ人の生活とアメリカの宗教アメリカの社會アメリカの政治アメリカの經濟組織アメリカの法律の背後に潜ませて居る。それは少しく洞察力を有つた眼光を具有してアメリカに生活すれば直きに氣の附く處である。姉崎正治氏は去年の冬へボン講座主催の講演でピューリタン氣風とアメリカの政治及び經濟組織との關係を說かれた。私は此所にはピューリタニズムとアメリカの法律に就て二三考へて見たい。ピューリタニズムは三つの點でアメリカの法律と干涉を有つて居る樣に思はれる。その一はその個人主義的色彩である。その二はその禁欲主義的色彩である。その三は法律過重　義的色彩である。

ピューリタニズムの個人主義的色彩はアメリカに於けるピューリタニズムの歷史から云ふても當然の歸結である。アメリカに於けるピューリタニズムの祖であるピルグリームファーザースはイギリスの國教に反抗して宗教的良心の自由をアメリカの新天地に求めた。彼等が教權や國權に對して個人の自由を主張するのは彼等自身の生命そのものであつた。又彼等の宗教的信仰の內容は新約的であつたよりも寧ろ舊約的であつた。彼等の信仰は神と人との垂直的な關係を重んじ人と人との平面的關係に對し割合に冷淡であつた。各人が其良心を通じて聞き得る神の聲に忠實ならん事が人の第一の本務である。人と人との關係

それは大切な關係である事は勿論であらうが必竟それは第二位題である。第一の本務の爲めに第二の義務を斷ち切るのは止むの問を得ざる事であると彼等は考へた。ある意味で神に對する忠實の宗教で人に對する愛、慈悲、の宗教ではなかつた。ピューリタニズムが個人主義的色彩に豐富であつたのはこの宗教的信仰の傾向から見て蓋し怪むに足らない。

ピューリタニズムの個人主義的傾向は當時の歐米時代思潮であつた政治的解放を目標とした個人主義、それからアメリカ特種の現象であつた開拓者の氣分に伴ふ個人主義と結合してアメリカの法律の上に非常な個人主義的彩光を與へたのであつた。十九世紀のアメリカ法がヨーロッパ以上に個人主義的傾向の著しかつたのはその奥にピルグリム・ファーザスの活きた精神が傳統的にアメリカ人に傳はつて居つたからである。

ピューリタニズムの個人主義はアメリカ聯邦憲法と各州の憲法に不磨の根柢を築いた。『私有財産の不可侵』『契約の自由』『過失なければ責任なし』と云ふ歐米に於ける十九世紀法の三大原則はアメリカでは憲法上の保障を得て之に反する法律命令は刑事的規定たると民事的規定たるを問はず皆無効であるとされた。即ちかゝる規定は憲法違反だから無效だと裁判所が宣言したのであつた。これは所謂アメリカ憲政の一大特質である『司法權優越』の法理に基くのである。そして又憲法の解釋と適用の任に當つた裁判官自身の血の中にもピューリタニズムの血が通つて居つた。従て彼等は滿腔の同情と熱誠とを以てピューリタン式の憲法を擁護した。かくしてピューリタニズムの個人主義はアメリカの法律に不磨の影響を殘して居る。アメリカの資本主義的經濟組織は此の基礎の上に無比の發展をなした。個人的利益は微より細に入つて分析せられ保護せられた。現今ではアメリカの法律も世界の大勢に順應して『社會化』の方面に向つて着々とその步を進めつゝある。『太郎は共和國の爲めに苦まねばならぬ』"John Doe must suffer for the Commonwealth's sake." と云ふ古いイギリスの法律格言は新しい二十世紀式の意味を帶びてアメリカの社會に復活しつゝある。全部の力は一部の力を抑壓する。國家は社會利益の保護者として個人の自由を制限する。然しながらピューリタン的個人主義は未だ死滅しない。何等かの新しい衣裳を着けて將來もその力を現はすであらう。と私は觀察する。私は戰時中のアメリカに於ける政治的の言論自由問題に關する論爭の中にピューリタン式考方の復活を見た。又ハーヴアート大學のチヤフイ教授の近著「言論自由論」Chaffee, Freedom of Speech. 1920) 國内にも新しい衣裳の下に隱れたピューリタン式考方が屢見えて居る。アメリカ研

究者は徒らに盛に高唱される「社會化」の名に眩惑せらる勿れと私は云ひたくなる位である。歷史的の根柢の深い國民的精神は容易に消滅するものでない。

次に私はピューリタニズムの禁欲主義的傾向と法律との關係見方に付て考へて見たい。此點に就ては二方面から觀察する事が出來ると考へる。

第一にピューリタニズムの禁欲主義的傾向はアメリカの立法にその面影を刻んで居る。アメリカの立法には隨分重過な倫理的義務を法律で課して居るものがある。一例を擧げるとアメリカの諸州に數多くある『青い法律』(Blue Laws)がそれである。此れは安息日嚴守法である。日曜日には商賣をやつてはならん。日曜日は總ての世俗的活動を止めて祈禱と靈的安靜とに之を費す可しと云ふのがピューリタン式考方である。勿論現代のアメリカ人には衞生と云ふ方から云て一週間一遍休息する方が宜いと云ふ方の考も存在して居る。然し又同時にピューリタン式禁欲主義の面影も見られないでもない。それでこの禁に違反して日曜日にやつた取引は法律上無効と云ふ事になる。只必要缺くべからざる取引と慈善のためにするもの〻二つ丈は例外とされて居る。日曜日だからと云ふて斷食をする譯に行はぬ。故に料理店は店を開いても宜しい。又藥屋が閉されては日曜日に病氣になつた人が困る。それでドラッグストアは日曜日でも開く事が許される。ドラッグストアが開いて居るからアイスクリームは買へる。アイスクリームもアメリカ人に取つて或は『必要缺くべからざる物』かも知れぬ。日曜日に取引を休むと云ふ『青い法律』の主旨はアメリカで可成り能く守られて居る樣に見受けられた。然し『休む』と云うても現代のアメリカ人に教會に行く事を强いてもそれは駄目である。多くのアメリカ人に取つて日曜日は身體の安息日で精神の安息日でない。日曜日にはあの百二十頁もある大形のサンデーペイパを讀みながら安樂椅子に倚る人もあらう。公園を散策する人もあらう。戸外に遠足に行く人もあらう。然しこれは元來ピューリタン式の安息日の意義から非常に離れたものと云ばさるを得ない。そこである州では極端に日曜日にベースボールなどの遊技をやる事を禁止した處さへある。然し此所までいくと現代の輿論との離隔が甚しくなつて來て行はれ惡い。兎に角「青い法律」の中に私はピューリタニズムの禁欲主義の面影が刻まれて居るのを見るのである。『青い法律』で想ひ出すのは『青空法』(Blue Sky Laws)である。之れは『青い法律』とは全然違つた事柄を取扱つた法律なので無智な投資者を保護する爲めに他人の爲めに投資するを業とする者に非常な責任を負はせて居る法律であ

る。無智な投資者を保護するのは宜いとして營業者に課する責任の程度が過重なのは道德的義務を法律で强行すると云ふピューリタン式考方の發現の一つである。然し私が此所に問題として居る處とは關係が薄い。

第二にピューリタニズムの禁欲主義は隨分深くアメリカ人の輿論に浸み渉つて居る。從て禁欲主義の立法に就て政治家が公然反對する事が出來惡い。出來るにしても餘程の勇氣を要する。それで禁欲主義の立法は割合に容易に議會を通ると云ふ現象を呈する。嘗てローズヴエルトが「酒に醉つた」と云はれたので名譽毀損として訴訟を提起して勝訴したと云ふ事を聞いたが、日本なら別段『酒に醉つた』と云はれたつて政治家の名譽を毀損するなどゝは一般から考へられて居るまいがアメリカのピューリタン式の輿論は政治家の日常生活に期待する處が多い丈けにこんな事が政治家に取つて大問題となるのであらう。ローズヴエルトもそんな理由で默過する譯に行かなかつた。この話はアメリカの輿論が非常にピューリタニズムである事を示して居る。兎に角政治家も禁止法反對と云ふ態度に出ると一般からその德操に就てまで疑はれる恐がある。それで政治家が內心では不贊成であつても表面は贊成すると云ふ事になる。禁酒立法殊に非常に困難と一般から考へられて居つた聯邦憲法の改正が割合に安々とアメリカで通過して世人を驚かせたのはこ邊の消息をも見逃す可きではあるまい。

第三にピューリタニズムの法律過重主義とアメリカの法律との關係も亦甚だ密接なものがある。元來ピューリタンは個人行動の自由を以てその信條の骨子とする。政府とか法律とかで個人の行動の自由を束縛する事はその最も嫌惡すべき筈である。然し他の一方にピューリタンにはその獨特な人性の罪惡觀の上から法律規則を好むと云ふ傾向がある。この二つの傾向は一見頗る矛盾したものゝ樣に見える。如何に之を說明するか之れは宗教心理學の研究者に委して私は此處には說かない。私は只このピューリタニズムの法律過重主義がアメリカの法律との交渉に於て如何に現はれたかについて一言したい。

第一に公法の範圍に於ては行政官の行動を成る可く法律で束縛して個人の自由を保障せんとする傾向となつて現はれて居る。アメリカの法律は『行政官の自由裁量』と云ふ事を嫌ふ事が甚しい。これはピューリタン式法律過重主義とピューリタン式個人主義との競合的影響である樣に見える。勿論近來の傾向は反動を來して居る。各州に於ける警察權 (Police Power) 理論の發達、裁判所の『行政官の自由裁量』に對する寬容的態度、民衆の行政府に依賴する傾向などは新しい反動的傾向を示す顯著

なる徴候である。然しながら未だ舊來のピューリタン式法律過重主義が消滅したとは見られない。

第二に刑法の範圍に於ては所謂『罪刑法定主義』となつて現はれて居る。此處にもピューリタンの個人主義と法律過重主義とが、競合的に働いて居るのを見るのである。この方は裁判官を法律で縛ると云ふ事に依て個人の自由を保障せんとする考に基くのである。この點でも近來の傾向は反動を來して居る。『不定期刑』『少年裁判所』『家庭審判所』などのアメリカに於ける發達はフランスのサレイユ教授の説いた『刑罰の個人化』であつて法律過重主義に對する反動であると見る可きである。然しながら未だアメリカの刑事法が『裁判官の裁量』に全然依頼するには到らない。スター・チエンバーに關するイギリスの經驗は彼等の記憶に強く刻まれて居る。ピューリタンの血は彼等の内に流れて居る。彼等は『自由裁量主義』でもない『法律過重主義』でもない新しい Synthesis を將來に於て創造するであらう。

第三に訴訟法にはその複雜な形式的手續となつてピューリタニズムの法律過重主義が現れて居る。これは刑事訴訟法民事訴訟法に共通な現象である。ドイツのイエリングは『形式と自由とは双兒である』と云うた。ピューリタンも訴訟形式を複雜にする事に依て裁判官の專斷を防止し個人の自由を防禦せんとしたアメリカに於ける訴訟が他國に於けるよりも一層訴訟法の細かな點に就て爭はれると云ふ事はアメリカに生活して彼地の裁判所の模樣を熟視した者の能く知る處である。この點に就ても近來の傾向は反動を示して居る。『訴訟手續の簡易化』は近來のアメリカ司法界のモットーである。『小額裁判所』の發達はその一徴候である。然しアメリカの辯護士協會や司法協會などの異常なる活動法律學者の熱心な主張にかゝはらず改革が遲々として行はれないのは尚ほピューリタン式法律過重主義の精神の存續を物語るものである。

第四次に私はアメリカに於けるイギリス法繼受の歴史に於てピューリタニズムの法律過重主義の現れを目撃する。アメリカの法律は大體に於てイギリス法を母法とすると云うて差支ない。ある地方ではフランス法やスペーン法を繼受したけれど皆イギリス法に依つて壓倒されて了つた。處でイギリス法の法源としてはコンモン・ローとエクイテイとがある。兩者相補つてイギリスの不文法の體系を成して居つた。イギリスでは一八七三年の裁判所構成法の一大改革まではコンモン・ローとエクイテイと云ふ二つの法律體系は別々の裁判に依て運用されて居つた。コンモン・ローが形式的で法規の嚴格均等な適用を特色と

したに對しエクイテイの方は實質に着眼してコンモン・ローの形式主義を緩和し具體的正義の完成を特色とした。セルデンの有名な『コンモン・ローには尺度がある。エクイテイは各大法官の足の長短で異る』と云ふたのはエクイテーの特色を寫實的に道破した言とされて居る。エクイテイでは『裁判官の自由裁量』と云ふ事が其特質であつた。そこでアメリカに於てイギリスの法を繼受するに當つてコンモンロー丈を繼受するかエクイテーをも併せて採用するかゞ問題であつた。多くの州に於て兩者を併せて採用したに反しピユーリタニズムの旺盛であつたニユー・イングランド地方ではエクイテイに反感を持つて居つた爲めに仲々エクイテー裁判所と云ふものが出來なかつたと云ふ法律史的事實の中にピユーリタニズムの法律過重主義の力が仄見える。エクイテイは判裁官の自由裁量を特色とする。ある意味で『法律に依らざる正義』を行ふのである。法規を過重するピユーリタンが之を蛇蝎視したのは了解するに難くない。それ許りでない。エクイテイを採用した州でもエクイテイを著しく法律化した。ある意味で『エクイテイの骨化』(Ossification of equity)と云ふ現象が起つた。これはイギリスでも起つたのであるがアメリカでは殊に甚しかつた。又その原因は必ずしもピユーリタニズムのみに依つたとは云はれないけれどピユーリタニズムの法律過重主義の精神は確かにその一原因をなして居る。現代はこの點でも反動を示して居る。先に述べた少年裁判所家庭裁判所、小額裁判所それから近頃出來た勞働裁判所などはある意味でエクイテイの復活である。然し未だ一部分丈である『法律に依る正義』はピユーリタンの殘した强い深い傳統である。アメリカは將來の裁判形式に就て決して『法律に依らざる正義』の内に解決を見る事はあるまい。新しい衣裳の下に『法律に依る正義』が生れるであらう。

第五にピユーリタニズムの法律過重主義はアメリカで法律の過剩生産と云ふ珍現象を生み出した。アメリカの各州皆な法律が異つて居る。我が國で云ふ民法だの商法だのと云ふものに當る法は各州でそれぞれ異る。その各州の議會が又毎年非常に多くの成文法を制定する。アメリカ全體で毎年制定される成文法の數は數千を下らない。法律案として議會に提出される數はその又何倍かになる。それで法律の過剩生産と云ふ事があらはれる。これは確かにピユーリタニズムの法律過重主義から生れた現象である。其結果として法律家―裁判官も辯護士も學者も是等の成文法を知る事が出來ぬ。アメリカ全體に就て知る事が不能な許りでなく一州丈でも大變ある。アメリカの法律學校でも判例法の研究に專らであつて成文法の研究は怠つて居る。無理

もない。又裁判官は成文法を無視して判例法で判決を下す事がある。人民も成文法の多きに苦んで是等を輕視する傾向が出る。判例法と成文法とを比較して質に於て到底成文法は判例法に及ばない。あゝ法律が毎年制定されるのでは良い法律の出來よう筈があるまいと思はれるのである。然しこの點に於ても現代は反動的に各州の成文法の統一とその質の改善とに對する努力が行はれて居る。前者の例としては學者と實際家との協力によつた模範的商事統一法が各州で採用されつゝある事實がある。後者の例としてはウイスコンシン州の Legislative Reference Bureau の活動やシカゴ大學のフロインド教授が前例を破つて『立法學』と云ふ科目を法科に置くに至つたと云ふ樣な事實に現れて居る。然しながら今尙は成文法の過剩生産と云ふ現象はアメリカ特有の現象たるを失はぬ。そしてその淵源は主としてピューリタニズムの法律過重主義にある。

以上述べたピューリタニズムの特質である個人主義禁欲主義法律過重主義の內で禁酒法に就て特に著しいのは禁欲主義と法律過重主義とである。私は禁酒法問題を考へながらその社會心理的基礎としてのピューリタニズムに就て考へざるを得ないのである。

三

アメリカの禁酒法を見て私はアメリカ人の事に於て世界一たらんとする氣魄を考察せざるを得ない。アメリカ人には覇氣が豐富である。アメリカ人が『世界一』と云ふ事を好むのは既に云ひ古された處で事新しく云ふ迄もない。アメリカ人は屢々『アメリカで一番大きい』と云ふ可きを『世界で一番大きい』と云ひ『アメリカ一の學者』と云ふべき處を『世界一の學者』と云ふ。私の見た處ではアメリカ人の此氣魄は開拓者的氣分と密接な關係がある。パイオニヤの生活は個人の能力と個人的勇氣とを働かせる事に依て無限の資庫が自由に開かれる事を彼等に示した。彼等は人生に對し非常に樂觀した。『跳ばぬ先に見よ』Look before you leap" と云ふ戒めよりは『見ないで跳べ』"Leap before you look" と云ふ方が彼等に氣に入る。又この方が開拓者の生活に相應した行き方であつたのだ。躓けば起き上れば宜い。失敗つたら再び試みれば宜い。開拓生活の實際は此種の人生觀に裏書をした。アリメカ人の進步主義、努力主義、何事に於ても世界一たらんとするの覇氣は開拓者の生活に負ふ處が多いものとは私は考へて居る。この考方は個人に就て顯著である許りか愛市心、愛州心卽ちアメリカ人の所謂 local

patriotism にも現はれる。又アメリカといふ國家としてもさゝである。アメリカ全權のパリ媾和會議での遣り口にしても今度のワシントン會議に於ける軍縮制限に就ての大膽な發案振りにしろこのパイオニヤ式考方の色彩が顯著である樣に私には見える。この考方は又アメリカ人の理想的な社會改良運動に於ても顯れる。アメリカ全國を世界一の模範的國家とする事これは確かにアメリカ人の心胸を躍らせるに足る。禁酒と云ふ事に就ても先づアメリカを禁酒國とする事は禁酒論者の覇氣を滿足せしむるに足るのである。之に依てアメリカは範を世界に垂るゝ事が出來る樣になると彼等は考へる。

然しアメリカの法律との交渉に就てはアメリカ人の此氣魄から來る結果は必ずしもアメリカに取つて良好なものと云へぬ。新しい思ひ就き新しい發見はどしどし新しい法律の形を取つて法令集の中に現はれる。未だ定説とならない處でも盛に法律として議會を通過して法令集の中に載せられる。只實際には行はれないでも法律の形となつて現れた丈で非常な滿足を民衆の心に與へる。

只アメリカは四十幾つかの州に分れて居るので是等の實驗的法律もその害が割合に小部分で濟む。ある州で新奇な法律を作れば他の州は之を注視してその運用が巧く行くかを見る。巧く行けば之を模倣するのである。之のやり方をアメリカの法の間に『犬に與へて見る』(try it on the dogs)と俗稱して居る。又止めるのも早い。成文法の朝令暮改は平氣である。只道德的立法の廢止丈はアメリカでも困難である。然し何の事はない。廢止が困難ならば民衆は之を守らない丈である。

アメリカ人の此氣魄は試みの立法を豐富ならしめる。煙草の害はニコチンよりも紙の燃えるのから來ると云ふ說に基いてアメリカ南方の六つ許の州では葉卷煙草葉煙草は許しても紙卷煙草の賣買が禁止される。優生學が高唱されると早速婚姻法が改正される。立法の内容の千差萬別なる、そして比較法學者に取つて趣味の多い事アメリカの如きはない。然し外國の研究者には趣味を味はせよう、又各州法律を異にする爲めその害は極限されよう。然しながら成文法の威信は地に墜ちさるを得ない。行はれない法律が法律の形で本の中に印刷されて居る事は法の威信の上からは望ましい事ではない。然し又その好い方面は科學の進運に伴つた法律が實驗される機會を多くする事である。一得一失は數の免かざる處である。

禁酒法は矢張り試みの立法であつた。ローカル・オプションとして一都市一地方に試みられる。一州が全部乾く。第十八修正に依る聯邦憲法の改正までには二十七州が乾いた。そして最後

に全國禁酒となつたのである。禁酒論者から云へば實驗濟の制度なのであらう。それは兎に角アメリカの禁酒法の背後にアメリカを道徳的に世界一たらしめんとするアメリカ人の社會心理が働いて居る事を見逃すべきであるまい。

四

禁酒法を眺めて私はアメリカに於ける民衆の法律觀と法律家の法律觀との對立及び禁酒立法の背面に潜む民衆法律觀の發現を考察せざるを得ない。

禁酒に關する聯邦憲法の改正は法定の手續を完了したもので少くも形式上は民衆輿論の結晶と見る可きであらう。

元來アメリカには二種の法律觀が有力な對立をなして居る。一は即ち素人の法律觀非法律家の法律觀（政治學者や經濟學者の法律觀も私の云ふ素人の法律觀非法律家の法律觀の部門に入る）のであつて他は即ち法律家の法律觀である。素人は法律を主權者の命令であると見る。法律家は法律を理性の結晶であると見る。前者は成文法が法律の典型的なものと見る。後者は判例法を典型的な法律と考へる。此二つの異つた見方にはそれぞれ歴史がありそして兩者の衝突は現實の實際問題となつて現れる。

ある意味でオーステインの有名な法律主權者命令說即ち法律は主權者の命令であると云ふ學說はアメリカの素人法律觀となつて殘つて居る。專制的色彩のあるオーステインの學說が自由平等を理想とする人民の法律觀となつて殘つて居ると云ふ事は一見不可思議の樣であるけれど少しく注視すれば之れは決して怪むに足らぬ事が分る。勿論アメリカでは主權者と云へば君主ではない。人民である。人民が主權者である。君主の主權はアメリカでは人民に移された。それでアメリカの民衆は人民の多數決に依つて成立した法律、人民の代表者が人民に代つて制定した成文法は法律の最も典型的なものと考へる。人民が主權者であると云ふ政治的確信は色々な事に現はれる。早い話がかの私刑（リンチ）がその一例となる。黑人が白人の婦女を辱める。白人の群集は激してその黑人を捕へて私刑に處する。これは一種の原始的刑罰 Primitive justice と見る事も出來よう。又一時の感情に馳られた無意識な行動に過ぎぬと論じ去る人もある。又アメリカ人の野蠻性を表白したもので東洋人の方が西洋人よりも野性が少い一層開化して居るのだと云うて獨り嬉しがる觀察者もある。然し私は更に深くこれを注視した。そして文明人であるアメリカ人に此事あるには相當な理由があるに違いないと考へた。右の黑人が普通の裁判手續を踏む事になると裁判の遲延がある陪審官が無罪と宣告する恐がある。そこで人民は

「正義の淵源」(Fountain of justice) たる主權者であるから直接にその主權を行使して「迅速な確實な正義」Quick and Sure justice を犯罪者の上に加へるのである。無意識的にこう云ふた心理がアメリカ民衆の上に働く。勿論私刑の心理は更に一層複雜である。これは私も認める。然し人民主權と云ふ政治思想の履き違ひも一つの有力な因子である樣に自分は考へる。

法律家――辯護士と裁判官とは法律を理性の結晶と觀ずる。主權者の命令と云ふオーステインの考方はアメリカでは昔から法律家には受け入れられなかつた。アメリカの法曹間ではオーステイン自身の著書よりかオーステインの批評家の著書の方が多く語られる。之には二つの理由があらう。第一は彼等の訓練が判例法で爲されたと云ふ事であるアメリカの大學の法科で敎へる處は主として判例である判例の背後に內在する合理性の探究これが總ての法律家の經過する訓練である。成文法の研究は法科でなされずして反て經濟科や政治學科や社會學科でされる事に現になつて居る。アメリカの法律家が法律を理性の結晶であると見てコンモン・ローに不變の合理性を求める事は此點から見て自然の勢であると云はねばならない。第二は憲法に背反した成文法は無効であると云ふ憲法慣行上の傳統である。成文法が理性の法則 Law of Reason に反する場合には常に無宣告せられる慣例に親む彼等の法律觀が益々コンモン・ロー合理性を尊重し成文法を輕視する。

言ひ換へるとアリメカに於ける非法律家の法律觀は政治的である。デモクラシーの考、人民主權の考から出發する。之に反し法律家――殊に裁判官の考方は歷史的であり哲學的である。コンモン・ローの普遍的合理性から出發する。

この根本的な法律觀の差異の結果はかうである。人民は法律さへ議會を通過して法律となれば自ら行はれるものと誤信する。その運用の可能性を顧みない。裁判官は新しい立法の精神を理解しないで新立法の適用を違憲の名の下に拒絕する。又新立法を適用する場合でも制限的に狹義に解釋して行く。これはアメリカの實際である。二個の法律觀の鮮かな衝突は裁判官呼戾し(Recall of Judges) 及び判決呼戾し(Recall of Judicial Decisions) に關する立法採用贊否論と云ふローズヴェルトとタフトとの間の政治的論爭の形を取つて現れた。

私は禁酒法を眺めてアメリカの非法律家の法律觀が强い形で現はれた事を思はざるを得ない。法律の合理性とその運用可能性とに着眼する法律家階級の殆ど一致した强い反對に拘らず禁酒法 アメリカ全國に布かれたのを見て私は法學研究者として

無限の興味をその間に發見するのである。

五

アメリカの禁酒法に就て考へる時私は禁酒法が暗示する現代法の趨勢と云ふ事を看過する事が出來ない。現代の生活はあらゆる方面に於て過渡時代の徴候を表はして居る。『生活の改造』が唱へられる。『哲學の改造』と云ふ事が叫ばれる。『倫理學の改造』も唱へられる。『經濟組織の改造』『政治組織の改造』、『社會組織の改造』が高唱される。時代精神の標語は『改造』にある。古い制度古い學説に保障された古い時代精神は衰退しつゝある。新しい時代精神は新しい制度と新しい學説とを生み出さんと努力して居る樣に見える。新しき統合 Synthesis が何であるか、それは未だ神樣達の懷に隱れて居つて人間の眼には能く見えない。然し何等かの形に於て新しい文化が生れ出さんとしつゝあるは疑ふ可くもない。生みの苦しみを世界各國の人心に私は認めるのである。

法律はある意味で社會思想の表現である。社會思想が激變しつゝある間に法律のみ獨り靜止して孤獨を守る筈は無い。事實上各國の法律は今や大變革の途上にある。法律學者は現代の法律變遷の趨勢を指して現代は法律社會化の時代にあると云ふ。所謂社會化の意義に就ては之を用ゆる人に依て多少の差異はあらう。然し舊い法律が時代の新しい精神に合はなくなつたのを認めて之を新しい精神に適應せんとしつゝある現象であると概言するを得よう。何が古い精神か何が新しい精神かそれは例へば歐米と東洋とで趣を異にする事がある。例へば個人主義と云ふ精神は西洋では舊い精神であらうが日本や支那では新しい精神である。然しながら時代精神が法律の改造を强く要求して居る點に就いては洋の東西を分つべきでない。

法律の內容は時々刻々と變化する。如何なる時代でも靜止した法律を私は考へる事は出來ない。然しある時代に於ては法律の根本思想は動搖しないで變化は只だ其の根本思想の具體的發展と部分的改善との形に於て現はれる。他の時代には法律の根本思想其者が動搖し出した爲めに法律の上に激變が生ずるのである。現代の『法律の社會化』と云ふ趨勢は寧ろこの第二の部類に屬すべきものであると私は考へる。

現代の法律變遷に似たる現象は法律の歷史に之を求める事が出來る。舊くはローマの昔に起つた、ローマの市民法 Jus Civile はローマ市民丈に適用される法律であつた。然るにローマが一大帝國となり外國人との取引が增加しギリシヤの哲學思想が輸入される樣になつて古い市民法は新しい時勢に合はなくな

つて來た。法律の改造が必要であつた。ローマ人は大帝國の支配に屬する各民族法の比較とギリシャ思想殊にストア哲理の影響の下に萬民法 jus gentium と云ふ雄大な法律を作り出して永く範を後世の歐大陸に垂れた。この市民法より萬民法への推移史に私は丁度現代に似たる現象を見るのである。同じ様な現象はイギリスにも起つた。ルネサンスに醒めた新しいイギリス人に古いコン・モンロー丈では充分に正義の實現が不可能だと分つた。エクイテイと云ふ別個のシイステイムが發生して兩者の融合に依つてイギリスの法律に普通的價値を與へた。ローマ法系に勝るとも劣らざるイギリス法系と云ふ世界的法系は之に依て確立した。十七八世紀の大陸法にも同様な現象を私は目撃するのである。

是等の變遷時代に共通な一つの特質は法律の内に倫理的な道徳的な分子が侵入して來る事である。ローマ法にはストア哲學の道徳觀が入つた。イギリス法にはエクイテイを運用した大法官（初めは僧侶）を通して『キリスト教的良心』が侵入した。十七八世紀の大陸法には自然法學說を通して『自然法的道義』が入つた。そして現代の法律の中には新しい道徳觀念、新しい正義觀念は新しい政治學說や經濟學說を通して着々と侵入しつゝある。そしてかゝる時代に共通な現象は法律を道徳に合致せしめんとする熱心の餘り道徳的なものを總て法律に依つて強行せんとする傾向である。ローマ法が『感謝』を法律的義務としたるが如き、イギリス法が『受託者を (trustee) を聖人扱ひしたる』が如きは皆かゝる時代から發生したのである。

アメリカも矢張り法律社會化の流れに掉して居る。私は法律史的背景と現代法律の趨勢に照して禁酒法を眺めて非常なる興味を覺ゆるのである。

六

以上で私はアメリカの禁酒法が暗示するアメリカ人の社會心理の考察を終へた。然し私は更に一歩進んで禁酒法の背後に横はる道徳と法律との關係如何と云ふ一般的なそして根本的な問題に就て法律家の立場から考へて見なければならない。蓋し禁酒法の様な道徳的立法の是非を論議する根本前提が此古くして常に新しい問題の解決に依る事が少くないと考へるからである。

法律と道徳との關係を法律史から考へて見ると原始法時代即ち法律が未だ發達しなかつた時代には宗教、道徳、法律、は相並んで社會統制の力を有つて居つたけれど未だその分界が充分に明かになつて居らなかつた樣である。然るに法律が稍や發達する樣になると法律と道徳とは別々な行動規則の規律として

發達した。ローマの市民法時代やイギリスのコンモンローの時代は正しく之れである。從て法律と道德とを嚴格に區別して『法律は法律、道德は道德』と云ふ考へ方が著しかつた。處が法律が社會統制の手段として狹少な範圍に限られた時代が去つて世の中が法律の力に依頼する事が多大となるに至つては法律は永く非道德的（unmoral）で押し通す譯に行かなくなつた。法律の内に道德が取り入れられる事が法律の活力を維持するに必要であつた。ローマでもイギリスも此現象が起つた。學者の所謂ローマに於ける『自然法時代』『萬民法時代』と云ふのは即ちそれである。イギリスの衡平法――エクイテイ――の發達は此消息を物語る。そして同樣の現象は十七八世紀歐大陸に於ける自然法時代――一層具體的に云へば傳統的なローマ法の近代化時代にも起つて居る。この時代には道德的な義務を法律上の義務と見る傾向がある。道德と法律との關係は著しく密接な關係を有するに至る。然し時勢は着々と進歩する。そして道德的分子で豐富にされた法律は再び骨化する。歐洲大陸の母法となつたジヤステイニヤンの法典はそれである。『エクイテイの骨化』と「コンモンローとエクイテイの合體」（fusion of law and equity）と云ふ現象に現はれたイギリスの十九世紀後半の法律狀態はこれである。歐大陸諸國の各法典はそれである。日本の民法典も亦お多分に洩れぬ。然るに現代は又その反動として再び新しい道德觀念が法律に侵入しつゝある。Social justice の觀念は駸々として現代法の内に入りつゝある。新しきエクイテイの時代である。法律社會化の時代である。かゝる時勢に掉す法律々は法律と道德との關係を如何に觀察するを可とするか。非法律家は新道德の實現に就て法律からどれ丈期待して差支ないか。問題は法律家にとつても非法律家に取つても頗る重要である。

私は一轉して法律と道德との理論的考察に移り度い。私はこの點に就て法律學派の中に於ける哲理派と分析派との此問題に關する鮮かな二大對立を見逃す譯に行かない。哲理派の哲理的考察は道德觀念が法律の内に取り入れらるる經過時代に起る。そして哲理的考察の旺盛なのは歐洲大陸殊にドイツである。その特質は道德と法律との密着を高調するにある。之に反して分析派の考察は道德觀念と法律觀念がある程度まで融合した法律靜止時代に起る。そして近代に於ける分析的考察の本家本元はイギリスである。その特質は道德と法律との區分を力説するにある。

哲理派の所説の特質は道德と法律との密着を高唱するにある。然しその關係そのものゝ考へ方には色々ある。十七八世紀

の自然法學者は道德的規範は當然法律的規範であると考へた。この考へ方は當時の法律の自由化と國際法の設立とに取つて尤も有力なものであつた。十八世紀の終カントに至つて道德も法律も共に無上命令卽ち個人の自由が他の個人の自由と調和するが如き自由の普遍的原則の現れで之を主觀的に見れば道德であり客觀的に見れば法律であると考へた。ヘーゲルになると少し變つて來る。ヘーゲルは道德は自由の理想的規準であるに反し法律は自由の可能的規律であると考へた。稍や道德と法律との對立的な考察方法が顯著である。國家命令說の發生は彼の學說に影響したらしく見える。降て十九世紀の終頃から發生した所謂社會哲理派の考方に共通な點は法律を概念上道德の下に置く傾向にある。エリネツクは法律を『最少限度の道德』と考へて居る。卽ち法律は一定社會の缺くべからざる最小限度の社會統制であるに反し道德は頗る望ましき所なるも缺くべからざるものでないとする。イエリングは法の目的は利益保護にありとなし利益の評價は道德であるとする。從て法律は道德を前提とすると云ふ考方である。シュタムラーは法は社會理想に適應すべきもので、この理想は法の外に發生し法の尺度となる。法は社會理想實現の手段に過ぎぬとする。コーラーは政治道德法律は文化發展の爲めに働く力であつて法は文化理想を目的に置くべきだと唱く。シュタムラーの社會理想もコーラーの文化理想も廣義の道德である樣に思はれる。是等の社會哲學派はその社會心理派であると社會功利派であると新カント派であると新ヘーゲル派であるを問はず法律を道德の下に置き從屬的のものと考へる點に於て一致して居る樣に見える。私は十九世紀の終頃から起つた『法律の社會化』の運動と是等の學說との關係を考へて頗る興味ある事とするのである。

分析派の特色は法律と道德との差異を高唱するにある。分析派の說く處も必ずしも一致しない。然し兩者を區別せんとする努力に於ては一致して居る。通常分析派の學者に依て兩者の區別として揭げらるゝものは、

(1)道德の規律せんとする客體は思想と感情とである。法律の規律せんとする處は行爲である。思想と感情とが法律に依て考量せらるゝのは只行爲の性質を明かにするために附隨的に行はれるのである。

(2)道德の目的は個人的性格の完成である。法律の目的とする處は個人相互の關係と個人と國家との關係の規律とである。

(3)道德的規範の適用は事情と個人とに依て異る。法律的規定の適用は一般的であり均等である。

(4)法律家の活動との交渉に就ては道德は立法者に對する理想

であり法律は行政官及び殊に裁判官に對する規範である。

法律と道德との關係に就ての哲理派と分析派との對立は以上の如くである。然らば現代に棹す法律家は如何に兩者の關係を觀るべきであるか。

私は哲理派の言はんとする處にも充分の同情を持つ。然も分析派の偉大なる功績も亦之を放擲するに忍びない。私は哲理派の思想の内に法律の性質を無視して道德的の規範を直ちに法律的規範と視するの誤に陷る危險性を認めざるを得ない。私は分析的學派の學說の内に法律を時代の道德と著しく離隔せしむる危險性を認めざるを得ない。新しい時代は新しき見方を要求する。過去の學說の教へた眞理を總て收取した新しい思想體系の創造を要求する。私は一面法律と道德との性質の差異を飽々明かにしつゝ他面兩者の能ふ限りの融合を計る事が少くも現代法律家の任務であると考へる。この根本的態度を持しつゝ私は近代の裁判に於ける法律と道德との密着な三つの場合に就て考へて見たい。

第一に近代法に於ける法律と道德との接觸點は裁判官の立法と云ふ問題にあらはれる。三權分立の思想の下に於ては裁判官の機能は法を作るものでなくして單に法を適用するに過ぎぬものとする。分析派の學者が道德は立法者の指針であり法律は裁判官の指針であると云ふのは三權分立の根本思想から生れたのである。これにも一面の眞理はある然し事實は此點に付て分析學派の理論を裏切つて居る。不文法國であるイギリスやアメリカで裁判官が法を創定して居る許りでない。成文法國たる日本の裁判官も法律適用の假面の下に法を創定しつゝあるのは疑ふべくもない。勿論立法者が立法する場合と裁判官が立法する場合とは自ら其間に差異はある。立法者は過去の法律の制限を受けずに自由に立法する事が出來る。又立法者は將來に對してのみ立法する。過去の事實に對する立法は許されないのが原則である。之に反し裁判官は成文法と判例とを基礎として過去の事實に法律を適用する形式に於て法律を創造する。然し裁判官は必竟將來に對し立法者と同樣に自由に立法する事になるのである。そして此の『自由を行使』する時に指針となるものの一つは時代の道德觀念でなければならない。かう云ふ理由から裁判官は時代の道德的精神に鋭感でなくてはならぬ。然し又裁判官は獨斷に依らずして成文法と判例に依て裁判すると云ふ處に一種の妙味がある。法の確定性と云ふ一般的利益は之に依て保存される。フランスに起つたジエニー一派の新自然法の學說と所謂自由法學者の所說は司法的立法と法の適用に對する理想の表現であるとする時に大に意味がある。然しこれ丈では充分でな

い。過去の判例の類推に依て裁判すると云ふ處に裁判官の『思ひ付き判決』を防止する一般的利益の保護がある。

第二に道德と法律との接觸は裁判官に依る法律の解釋及適用に當つてあらはれる。十九世紀の裁判官は法律の機械的解釋適用に依つて裁判の専斷を避け法の確定性を維持せんとした。然し現代の法律思想では寧ろ公平に合した具體的の正義を裁判官が實現する事の要求が強い。裁判官が法律の文句に餘り拘束されずに具體的正義を解釋適用に依て實現する場合には裁判官は時代の精神を洞察するの明がなければならない。左樣でないとその解釋及び適用は専制と獨斷を生み出す。私は裁判官の倫理的教養の切なる事を感ずるものである。

第三に道德と法律との接觸は法律が裁判官に許した『自由裁量』の行使に付て起る。法律は總べての場合に就て規定する事は出來ない。大體の原則を定めて置いてその他は裁判官の自由裁量に委する事が多い。刑法に於ける科刑及び執行猶豫などの場合の自由裁量はその著しい例である。民法に於ける『公の秩序善良の風俗に反する行爲』とか『善良なる管理者の注意』とか云ふはその適例である。又近頃我邦の裁判例で認められて來た『權利濫用』の法規の如きも決局は廣い範圍の自由裁量に依て決せらるゝ問題なのである。法的安全と具體的正義との調節を完うする樣に此の與へられたる自由裁量を行使するには裁判官が基準となる可き時代の道德的觀念を充分に理解する事が必要となる。

以上は裁判官丈に就て述べたのであるが立法者と行政官が裁判官と同樣に時代の道德觀念に鋭感でなければならぬ事は特に論ずるを俟たない。

然し道德と法律とは必竟同一物でない。法律は色々な理由で道德と手を離さねばならぬ場合がある。此點は素人法律觀の見逃し易い點である。第一に規則から成立つ法律と云ふ以上如何に巧妙に運用したにしろある場合に道德的觀念道德的解決と合致せない事があるのは止むを得ない。正義實現の手段を法律に求める以上此缺點は固有的なものであつて避くべからざるものと云はざるを得ない。之を避けようとするには法律を全廢止せねばならない。そして吾等の過去に於ける歴史的經驗は法律に依らざる正義』の危險を有力に物語るものである。法律に依らざる正義執行の危險な事は法律發達の歴史そのものゝ中に暗示されて居るのである。第二に法律はある場合に個體的正義を犠牲にして迄も確定的な成り形式的な規則を設ける事が社會全般の眼から見て必要である場合がある。特に著しいのは商法の範圍に於てゞある。例へば手形取引に就ては實體的正義より

も寧ろ形式的確實の方が必要である。形式的確實が保障されぬ限り近代の商業取引に缺く可らざる手形取引は行はれるものでない。又財産法及び契約法でもある程度の確實性が必要である。現行の財産法契約法には改正を要すべき點は多い。現代の道義觀念と著しく背反た個所が頗る多い。然し又自分の働いた結果として得た財貨を何時奪はれるか分らず、或る事業を營まんが爲に他人と契約した場合に、その契約の結果が不分明では近代的の企業は成立しない。こう云ふ理由から財産法と契約法とは種々の法的確實性を必要とする。又刑政と政治との密接な關係に關するイギリスのスター・チエンバーの記憶は吾々にある種の確實性を刑法に就ても要求する。かかる場合には法律の解決は必ずしも道德的解決と同じには行かぬ。勿論運用の妙に依つて法的安定の要求を害せざる範圍で道德に近づける事は出來る。然し具體的正義に執着して社會が法律から要求する他の重要なる機能を傷くべきではあるまい。第三には法律は道德と全然關係のない事柄を解決する事を要求される。例は『左側を步へ可し』と云ふ規則がそれである。イギリスや日本では左側となつてるが他の歐米諸國では多く右側となつて居る。道德的にはどちらでも宜い。兎に角何等かの規則が定まつて居れば交通の秩序が保たれる。又例へば甲の所有して居つた時計を乙が盜んだ。そして乙は之を盜品であると云ふ事を全然知らない丙に賣つて逃走して了つた。甲は丙が自分の時計を胸に掛けて居るのを見て返還を請求する。丙はいや之は自分が金を拂つて買つたのだから返さないと云ふ。法律はこの場合時計の所有權が甲にあるか丙にあるかを決定しなければならぬ。道德的には甲にも丙にも非難の打ち處は寸毫もない。然し法律は甲か丙か何れかを所有者と定めねばならない。この時に法律は『所有權の保護』と『取引の安定』と何れを保護せんかと云ふデイレンマに陷る。甲に與へれば取引の安定が傷けられる。丙に與へれば所有權の保護が充分でない。此問題の解決は倫理學者をいくら繙いても之を發見するを得ない、第三に法律が道德要求に合する事の出來ぬのは法律と云ふメカニズムの性質上の制限から來る。又第四に社會心理的制限と云ふ外部的事情から來る。この第三と第四の點は最も重要な點であつて然も現代の非法律家が見逃し易い點であるから私は次に少しく之に就て考へて見たい。

七

私は曰ふ。法律の歷史はある意味で道德的觀念の絕えざる侵入の歷史である。歷史法學派の人が『道德は將來の法律 Potential law である』と考へるのはこの意味の眞理を包藏する。

法律は過去に於て道德觀念の侵入に依てその內容を豐富にして來た。そして現代は正に法律の內に道德觀念の盛に侵入しつゝある時代である。或は立法で、或は判例で社會正義その他の新しい道德的觀念は着々と法律に取り入れられんとしつゝある。法律家も非法律家も新しい思想新しい道德を法律の形に表はさんと努力し又之を要求する。私は大體に於てこの運動に賛成である。然しかゝる時代に伴ふ弊即ち法律に依賴し過ぎるの弊が起る事を見るのである。法律そのものに對する不滿は法律の力を過信した反動として起る事が多い。法律は『萬病に効能ある賣藥』ではない。法律が有効に活動し得る範圍を考察する事が現代の様な時勢に特に必要であると私は考へるのである。

道德的要求をすべて法律が滿足する事の出來ないのは法律が有効に活動する範圍に制限があるからである。其制限は二つの方面から來る。其一は法律と云ふメカニズムの能率から來る、其二は法律は自動的に執行されるのでなく必意人間が執行すると云ふ事實から來るものである。執行者が人間である以上色々な外部的事情殊に輿論に依て動かされる事が多い。社會心理的原因がその主なものである。法律の社會心理的制限である。

第一に先づ法律と云ふメカニズムの能率から來る制限に就て考へて見よう。

近代の法律は可成り精巧なメカニズムとなつた。從て現代の法律は可成り強い社會統制の力を持つ樣になつた。之を古代法に於ける法律のメカニズム及びその古代社會の統制力とを比較して見ると實に今昔の感に堪えない位である。然し近代の法律と雖も必竟メカニズムに過ぎない。その構成を分解して見ると寧ろその貧弱なのに驚く位である。法律は個人、國家、及び社會の要求を保護するために人格、權利、義務、責任、の各觀念を使用する。是等は法律と云ふメカニズムの楔子をなしこれを中心として法律體系と云ふ細密な組織體が組立てられて居る。そして之を保障する爲めに國家の權力で刑罰、特定履行、金錢賠償豫防などの制裁を使用する。現代の法律と云ふメカニズムは必竟之れ以上に出でない。將來は更に此メカニズムの進步があるであらうが現在はまづこれ位である。これ位で人事關係の全般を規律せんとするから無理が起る。又公衆が餘り多くを法律から要求するのは愚かである。道德上では保護す可き筈の要求が法律で保護されてないのはこの法律と云ふメカニズムの能率に基くものが隨分ある。法律が一番保護し易いのは財產である。財產上の損害となると多くの場合に市價と云ふものであるから金錢で賠償すれば殆ど完全に保護される。又特定回復も可成り容易に行はれる。處が所謂人格權とか親族權とか云ふ範圍

に入つて來ると法律に依る保護が著しく困難になつて來る。刑罰で威嚇がしてある程度まで一般的に人格權親族權の侵害を豫防する事は出來よう。然し一旦侵された權利は到底恢復する事は出來ぬ。覆水盆に返らざると同樣である。殺された人は生きかへつて來ない。折られたる足は元の樣にたらぬ。傷けられた名譽は謝罪廣告位では拭はれない。汚されたる婦女の貞操は元通りにはならぬ。法律は是等の場合彌縫的に金錢賠償と云ふ窮策を用ゐる。『萬事が金の世の中ぢや』と茶化して了へばそれ迄であるが然し冷靜に能く考へて見ると隨分人を馬鹿にしたものぢやとも考へられる。法律と云ふメカニズムの無能を遺憾なく表白して居るものである。夫婦相互の權利義務や親子間の權利義務に就て稍もすると道德的要求と法律的保護とが一致しないのは法律の無能を表白するものである。近代人の特に銳感な『心的安全』mental security と云ふものを充分に法律が保護出來ないのは保護し度くとも『證據方法』と云ふメカニズムが微妙に働かないからである。法律のメカニズムの發達は法律技術の發達で各國の法律家の非常に苦心して居る處である。そして將來ある程度まで發達改善はしよう。然し必竟法律はメカニズムである。世人は餘り多くを法律から期待してはならぬ。法律家は餘りにその運用する法律の力を過信すべきでない。

第二に法律は人に依て初めて動くと云ふ點そして之を運用する人は血の通つた人間であると云ふ事から來る法律の制限に就て考へて見よう。

この點から來る制限はアメリカの禁酒法の樣な刑事法の執行の場合に殊に著しく現はれて來るのである。そして又アメリカの樣な輿論の力の非常に强く働く國に殊に顯著であるから、私はアメリカで刑事裁判を例に取つて其の描寫を試みよう。

アメリカで犯罪(重い犯罪)が犯されてから犯人が處罰されるまでの經過は大體下の如くである、

1. 犯人の捕縛がなければならぬ。第一捕縛と云ふ事が容易でない。犯人の方も仲々人智が發達して來る。アメリカでは自動車の使用の增加が著しく犯人捕縛を困難にした。犯人は犯罪を犯して置いて自動車でずつと遠方に逃れて了ふからである。又犯罪搜査の方法として指紋法が發見さるれば犯人の方では手袋を使用すると云ふ具合になる。それ許りでない。警官は警察所長の方針に從て活動する。そして所長はアメリカの樣な國では投票者の意向を窺ふ必要があるので不人氣な刑事法は執行を躊躇する。この邊の消息は近頃出版されたフオスデツク氏の米國「警察制度論」Fosdick. American Police System (1920) に詳しい說明がある。又各警察官の手心と云ふものも考へねばな

らぬ。テイップを貰うてその儘にすると云ふ事も間々ある。

2.豫審判事（magistrate）が之を豫審陪審員（Grand jury）へ廻す。こゝにも豫審判事の手心が働く。

3.檢事（Public Prosecutor）が豫審陪審員に事件を呈出する。檢事も手心をやる。

4.豫審陪審員は有罪決定（indictment; a true bill）を言渡す。豫審陪審員も刑事法に不贊成だとかその他の理由で握り潰ぶす事が隨分とある。

5.檢事は公判廷で辯論をやる。檢事が一寸間違へばそれきりになる。又檢事は不人氣な法律の場合には加減をする。殊にアメリカでは檢事は選擧で行はれるのだから檢事の方針と投票者の意見と合致すると云ふ事が選擧される前提要件である。極端な場合にはある檢事が法律を執行するや否やと云ふ事が檢事選擧の目標になつた事さへある。從て檢事は頗る輿論に銳感である。又田舍の檢事は檢事となるのは檢事としてその地方人に人氣を得て置いて後で辯護士となつて一儲けする準備と考へてやる人が多い。大都會では公職に付く例は知事となる階段として檢事となると云ふ人が隨分と多い慣例になつて居る。從つて公衆に不人氣な法律を執行する事を躊躇するに到るのは當然と云はねばならぬ。

6.裁判官は審理陪審員（Petty jury; trial jury）に對する訓令（a charge to the jury; Summing up）で當該事件に適用さるべき法律を述べる。裁判官も多くの州では選擧に依て擧げられる。そしてその任期も短いのが通常であるから裁判官も選擧民の意見に無關心である譯には行かぬ。ある法律が不人氣な場合には之を狹義に解釋し之に反しその法律が人氣がある時は廣義に法律を解釋する。

7.審理陪審員が有罪と決定（verdict）せねばならない。陪審員は素人であるから殊に法律の執行に不贊成な場合には法律い如何を問はず無罪にして了ふ。今度の禁酒法でも審理陪審員が無罪と決定する傾向が隨分と多い樣に傳へらる。ゝある法律に對する輿論は陪審員の決定中に鮮かに現はれて來る。

8.裁判官が審理陪審員の決定に基いて科刑（sentence）をする。こゝにも裁判官の手心は働く。

ある人が監獄に送られるまでには以上の手續を經過せねばならない。そして此連鎖中の一人でもその任務を怠れば法律は不執行に終る。警官、檢事、豫審陪審員、裁判官、審理陪審員共に皆な血の通つた人間である。皆な法律を執行すると云ふ大切な任務を負ふて居るにしても必竟人間である。そしてアメリカの樣な輿論の力の強く働く國では殊に之に無關心である事を得

ない。以上は刑事法に例を取つたがその他でも同樣である。輿論に反する法律は行使する事が困難である事が明であらう。又此事はアメリカ特有な現象ではない。各國共に同樣である。只法律執行者の心理を動かす事情は國情に依て異ることのあるのは勿論である。

八

法の生命はその執行にある。行はれない法は名は法であつても實は空文に過ぎぬ。以上述べた樣な事情から法の有効な活動範圍は非常に限定せられるのである。行はれざる法からは二つの重大な結果が生れる。その一は法律と實際との離隔でありその二は遵法心の衰退である。

法律と實際との離隔はある程度までは止むを得ない。法律の文言が靜止して居るにかゝはらず實際がどしどし進歩してある程度まで法律と實際とが離隔するのは何れの法制でも起る現象であつて實は之に依て法律そのものの進歩が起る。然しながら法律と實際とは成る可く近接する事が法の理想でなければならない。私は法律と實際との差異が以上私が述べた制限の爲めに起つた事を幾多の例證を揭げて説明する事が出來る。然し此處には只面白さうな數個の例をアメリカに取つて置かう。

離婚と云ふ問題は現今歐米各國で社會問題として非常に論争されて居る。一面はキリスト教と云ふ傳統的勢力と他面はファミリーの維持と云ふ社會的考察との上から協議上の離婚と云ふ事は許されてないのが原則である。離婚は一定の法定の原因に基いて裁判があつた上で初めて之を爲す事を得ると云ふのが大體歐米の法律である。日本の樣に協議上の離婚——實は夫の自由意志に依る離婚——は之を認めぬ事になつて居る。然し法律がかう嚴格であつても實際はさうは行かない。アメリカに住んで居る人は毎朝新聞紙で相當に名の知られた人に關する離婚記事が大きな活字の見出で飾つたアメリカ式なセンセーショナルな書き振で報道されて居るのを見る。そしてその原因はと見れば多くは『過度の虐待』(extreme cruelty)である。『姦通』と云ふ事は割合に少く『過度の虐待』と云ふのが多い。實に姦通があつた場合でも辯護士は辯護士道德の上から大抵『過度の虐待』と云ふ事にして了ふ。當事者の將來の名譽に關する事重大であるからである。然しこの『過度の虐待』と云ふのが曲物なのであつて實は『共謀離婚』がその名の下に行はれるのだ。兩當事者は前以て離婚する事に約束して置く。離婚後の財産關係などに付てもちやんと定めて置いてそれから當事者の一方は『過度の虐待』と云ふ相手の主張に異議を申立てない事とする。そ

して『裁判所の離婚』と云ふお儀式をする。『過度の虐待』と云ふのは實は『氣質が合はぬ』(Incompatibility of temper)と云ふ事を徹ふ假名である。そして一般の人も立派な紳士に『妻に對し重大な虐待を加へた』と云ふ醜い履歴があつても平氣なものである。彼の社會的名望は之に依て少しも傷けられない。民衆は『裁判上の離婚』と云ふお儀式の眞相を熟知して居るからである。協議上の離婚は許されぬと云ふのは印刷された法律である。實際は盛に『共謀離婚』が行はれて世人は平氣で居る。裁判所の『共謀離婚』(collusive divorce) は許さぬと云ふ方針もこの慣行を防止するに足りない。不法行爲に就いて『過失がなければ損害賠償の責任がない』と云ふのは本に書いた法律である。然し例へば工場主と勞働者との關係――勞働者がその職務の執行中怪我をした場合――に適用される場合になると實際は法律と離隔する。今では多くの州では『勞働者賠償法』(Workmen's Compen ation Acts) で工場主に過失のあつたと否とを問はず責任がある事にして居るけれど未だかゝる法律が制定されぬ州又はこの法律の適用範圍外に置かれた雇傭關係に就てこの種の場合には實際上は無過失責任が行はれる。裁判官は陪審員に對する訓令に於て『工場主に陪償責任を課するには工場主に過失があつた事が必要である』旨『を法律』だと宣言する。陪審員はかゝる怪我は事業から當然起るものでその事業をやつて行く人が責任を負ふべきが公平であると考へる。過失があつてもなくても『過失あり』『責任あり』と云ふ決定を與へる。この種の不法行爲に就ては過失主義に空文である。無過失責任が實際の生きた法律である。

私は又『法令集』の法律と實際との離隔を自動車に關する法律に就て見る。自動車に關して到る處に『速力法』(speed laws)と云ふものがある。アメリカの大都會で自動車の後から自動車の速力よりも早い『モーターサイクル』で警官が追つて居るのを彼地に往つた人は目撃したであらう。あれはこの『速力法』を執行せんが爲めである。然し實際に就て調べて見ると、『速力法』違反で罰せられるのは只だ極端な場合丈である。例へば『法令集』の速力限度が十五哩とあれば『二十五哩』を越えない限り捕縛しないと云ふ了解が自動車乘と警官との間にある。又アメリカの大都會には大抵『自動車は停止した電車を追ひ越してはならない』と云ふ規則がある。然し實際上は警官の前でこの規則を破つて居るのを幾らでも目撃する。警官は別に之を捕縛し樣ともせない。

避姙に關する立法がそれである。アメリカの避姙立法は色々になつて居る。ある法律は避姙器械の賣買廣告のみを罰する。

又ある法律は避姙に關する智識を與へる事をも罰する。或は避姙方法を使用した者を罰すると云ふ極端のもある。然し實際は少くも第二第三の種類に就ては餘り執行されない。富者の出生率が少ないのは反面に於て此法律の行はれない事を物語るものである。兎に角「産兒制限」と云ふ問題に就て可成り贊成を表する輿論が形成された場合には避姙防止を目的とした立法の効果は只避姙に關する智識を高價にして貧民――産兒制限の最も必要な階級と考へられて居る――が之を得る事が出來ぬと云ふ結果に終る。結果はそれ丈に止まらない。墮胎の増加を來す。勿論墮胎はアメリカでも非常に重大な犯罪となつて居る。然し實際上アメリカでは墮胎訴追は稀である。只墮胎罪が刑事法廷に問題となつて現はれて來るのは墮胎手術が失敗して母が死亡した場合丈である。墮胎手術失敗の詳細が新聞紙を通じて公衆の面前に曝け出されると公衆はその恐ろしさに驚いて墮胎罪の嚴格な執行を要求する。然しそれも一時だけである。そしてこれは手術が失敗した爲めに起るのであつて手術が行はれる爲めに起るのではない。又墮胎罪を重く罰すると云ふ結果として信頼すべき醫師は墮胎手術を拒絶する。從つて墮胎手術は怪し氣な藪醫者の手で行はれるか又は素人手術の増加を來す事になり、死亡率が非常に殖えると云ふ副産物を齎す。それは別論として避姙罪に就ても又墮胎罪に就ても法律と實際との離隔が甚だしい事は顯著である。

私は例をアメリカ丈に採つた。然し法律と實際との離隔は日本でも隨分ある。兎に角行はれない法律の結果は法令集の中に掲げられた法律と生きた法律との離隔を甚だしくすると云ふ事は各國共にその趣を同うする。

行はれない法律の第二の結果は遵法心の衰退と云ふ事である。イギリスのダイシーはその名著「法律と輿論」の中に「法律が明白にその目的を達しない場合には反つて輿論を法律の非難たる原則自身に反對せしむるに至る事がある」と述べて居る。行はれない立法殊に趣味とか道徳とかに關する立法は特にこの傾向が著しい樣に見える。これは社會心理學の研究問題である。行はれない法律丈に就て遵法心がなくなると云ふ丈なら未だ忍ぶ可きであらう。然し法律全體に對し侮辱的態度が輿論に發生する事になるとその結果は恐る可きものがあるかも知れない。アメリカの禁酒法の場合には殊にそれが顯著である。「禁止された果實は甘い」と云ふ格言も一面の心理的の眞理がある。今まで酒を飲まなかつた人が禁止せられた爲めに飲む樣になると云ふ事が隨分ある。法律に違反した酒の私醸が行はれる。酒の密賣が行はれる。警官の收賄と脅喝とが發生する。陪審員の法律

無視が始まる。行はれない法律が公衆の遵法心を衰退せしむるに至るのはありうべき事である。この點も充分に考察に價すべき問題である。

九

然し道徳的立法に關する問題は以上丈の考察丈では充分ではない。全然他の方面からの考察が必要である樣に私は思はれる。元來法律は輿論の結晶丈ではない。國民大多數の確信丈ではない。法律には輿論其者を一定の方向に向けると云ふ指導的機能がある。この點に來ると古來論争を絶たない法律學上の根本問題に觸れて來る。ある法律家は宿命論 determinism の人生觀から法律は輿論の發現であり國民大多數の確信であると觀て法律の指導的機能を非認又は輕視せんとする。他の法律家は主意論 voluntarism の人生觀から法律を社會統制の有力な手段として考へ法律の機能を social engineering であると考へる。從つて法律の指導的機能を是認し之を高唱せんとする。前者を法律悲觀說と云ふ事が出來るなら後者は法律樂觀說と稱する事を得よう。

私は私の研究の結果大體に於て法律樂觀說に同情する。又輿論より進んだ法律に依て民衆が新しい輿論を形成する樣になつた事があつたのは法律史上稀な事ではない。我が現行民法典や商法典の内容は當時の輿論の結晶だとも國民の確信であつたとも云ふ譯に行くまい。是等の法典の規定する處はある意味で輿論よりも進んだものであつた。そして是等の法典が一面に於て日本國民の慣行と背反した結果行はれない条文が多數に生じたと云ふ方があるのは認めるけれど然し他面に於て日本の輿論を指導して日本の文化發展に貢獻したものであると私は思ふ。同樣な例はインドでも起つた。インドに採用されたイギリス法は國民の輿論に基いたものではない。然しイギリス法に基いたインド諸法典がインド人の商事道德商業慣行を改善するに至りインドの文化に貢献した事は愛國者タゴールでさへも之を是認せざるを得なかつた位である。それ許りでない。イギリス自身の商法の歴史にも同樣の現象が見える。此意味で我が國に於ける陪審法案に就ても指導的立法として之を辯護する事が出來よう。

然し法律に關する主意的な樂觀的な態度を是認しても私は先に述べた通り法律の有効な活動限界の考察と云ふ『懷疑』的態度を失はぬ事が必要だと考へて居る。この意味で法律悲觀說の内に眞理の一片が潜んで居る。餘りに輿論と國民の慣行よりも進み過ぎた立法は『行はれない法』が法令集を飾る丈になり反動として遵法心を衰退せしめると云ふ結果を齎すであらう。

具體的の場合に輿論より進んだ立法をすべきや否やと云ふ問題は私の考へでは必竟立法者の政治的眼光（Legislative statesman-ship）に歸する。然しそのステーツマンシップは充分にその企圖せんとする立法から來る色々な複雜した結果を研究豫見して然かも全局に於て國民の福利を增進すると云ふ確信に基いたものでなければならない。單純な『眼光』丈では困る。

私はアメリカの禁酒法制定に幾分此種の政治的眼光を認める。或は彼等の政治的眼光は誤つて居るかも知れない。少くも今迄アメリカから來る報告は私を寧ろ禁酒法に就て悲觀説に傾かせる。然しながら是等の報告は單に過渡時代の現象を物語るものかも知れない。之に對し公正な學者的な批判を加へるには更に將來の經過に俟たねばならぬ。輕々に論じ去る譯には行かぬ。

私は一の學究であつて政治家ではない。アメリカの禁酒法を兎や角批判せんとするのが本論の目的ではない。又私は我國民を教へんなど﹅云ふ偉い男ぢやない。只私は法學の研究者として此面白い立法が暗示するアメリカ人の社會心理と二三の法律學の根本問題とに就て二三の考察を試みた丈である。（完）

英國文化の基調

内ヶ崎作三郎

一　一昔前のロンドンの第一印象

思ひ出せば十一年の一昔、西比利亞、露西亞、獨逸、和蘭を經て、私は倫敦の地を踏んだのは、一九〇八年、明治四十一年の九月末であつた。朝早く船をクインスボローの埠頭に捨て﹅、あはたゞしく汽車に乘りて、朝霧のか﹅れる平和なケント州北部の牧場と村落との間を東より西に縫うた。永い永い海陸の旅をへ、事なくして目的の地に着いたといふ氣強い心は、見るもの、聞くものに、躍り上がる喜びを感じた。ヴイクトリア停車場から、その頃は珍しくもなかつたハンサム馬車に搖られて、

西ロンドンの閑靜なる宿をさした時は、鐵蹄の音もいと輕やかに、凱旋將軍のやうな誇りを覺えた。宿には既に先着した先輩がゐたので、旅裝を改むると直ぐに、ロンドンの初見參に出掛けた。グラットストンが嘗てロンドンを見物するには乘合馬車の二階に限ると或る外人に教へたといふことであるが、私も矢張りこの安値にして賢明なる方法をとつた。馬車は逞しい二頭の馬に挽かれた。コックオー訛の車掌の太い手から赤い切符を受取つて、二階の一脚に腰を下した。まづ右にみゆるは音に聞くハイドパークの公園、次にみゆるはマーグルアーチ、やがて派手なオックスフォード街、美しい店の並ぶボンド街、チヤーリングクロッスから、ストランドの通を拔けて、折しも初秋の強い日影の下に巍然として晴れたる空に聳ゆる聖ポーロ大寺院の前に馬車を下りた。それからそれと足の續かん限り多くの驚異を眼に寫し、心に刻みて、夜おそく宿に歸つた。寢臺に横はりたれども、疲れてゐる癖に、容易に臥ることが出來なかつた。古い言葉でいへば感慨無量といふべきであらう。ロンドンの第一印象は私を直ちに夢の國に促すにはあまりに強かつた。無理にねつかふとしても心は容易に承知せぬ。むしろ心はます〲冴え渡るのみである。それとなく耳うち傾くれば、世界第一の都會の眞夜中の沈んだやうな、微かな聲が、此處に佇み、喜び、悲しむ七百餘萬の生命の脈搏のやうに聞ゆるではないか。

英國の偉大はいふだけ野暮の話。これを慕ひ、これを學ばんとしたればこそ、日本海の怒濤を凌いだではないか。落日の莊嚴と暗黑の神祕とのみ支配した、荒寥たる西比利亞の大平原を横切つたではないか。言葉の不自由な露西亞の旅を敢てしたではないか。後髮ひかるゝ伯林の燦然たる文化に急いで別れを告げたではないか。長崎の出島の物語以來、あこがれてやまなかつた和蘭をも星明かりの下に素通りしたではないか。さてその英國の首都の半日の印象は豫期したよりも遙かに強大なものであつた。私は今更のごとくこの大國民の歷史を考へてみたり、將來を想像してみたり、之に對して我が祖國のまだ〱なすべき事、改むべき事、進むべき事の可能性の無盡藏なることを思ひ起して、呑氣な私の心が妙に冴えて寢付くことが出來ず、曉になつて少しくまどろむことをえた。かゝる事は三四晩續いた。十二歲の秋に、山の中の故鄕を離れて、仙臺に遊學した時、不思議にも四五日の間は夕方になると、我知らず涙が頰を傳はることがあつたを想ひ出して、三十男が、矢張世の人もするといふ思鄕病にかゝつたのかとも考へた。しかしこれではなかつた。思鄕病でなく、憂國病であつた。樂天的の私はロンドンの

初見參で全く愛國の至情を胸中に宿したのであつた。

それから一九一一年、明治四十四年の六月末まで、アルビオの岸、アイシスの流れのほとり、古學者の常春藤のからむ窓の中、ダービシヤーの山美しく水清き處の野營生活、春猶寒い蘇國の旅、湖州に於ける二週日の湖水めぐりと山のぼり、私に政治的興味をそゝつた二回の總選擧、エドワード七世の崩去に示されたる大國民の眞精神、ジョージ五世の戴冠式にあらはれたる大帝國の威力などが、今猶忘れかぬる思ひ出での節々である。不思議な記憶の寶庫にはかゝるフイルムの種のつくるといふことはない。

私が英國に過した最後の日即ち一九一一年の六月二十八日の日記には左の如く記してある。

『今日はいよ〳〵聯想ゆたかなるこのロンドンと最後の握手をする時である。午前五時半頃にめさめて、よく〳〵の人々に暇乞ひの短い手紙を認めた。手輕な朝食をもすました。七時十五分前にタキスが來た。自動車は往來猶繁からざる路をかけ、ハイド、パークの綠色を右にながめながら、マーブル、アーチをふりかへりみつゝ東南へと走る。程なくテームス河畔にいで、ヴイクトリア、エンバンクメントに沿うて飛ぶ。眞正面の朝の空に屹立するはいふ迄もなくウエスト、ミンスターの國會議事堂である。兩側にはこれも戴冠式を偲ばしむる旗差物の飾り立て賑かなるウオーターローの橋の上より、波靜かなるテームスの流を見下した。一瞬一瞬に消えゆく歷史的建物の名殘り惜しさよ。聖ポーロ大寺院の大天蓋よ、ウエストミンスター寺院の飛閣よ、議事堂の尖塔よ。爾が物語る大國民の過去の史蹟にほれ〳〵して絶東の一遊子は幾度か爾の影を踏みたりしぞ。爾は雄辯なる大英國民の史家である。寡默なる英人は祖先の功業を人前に吹聽するを好まない。されど爾は最も有力なる説明者である、代辯者である。僕は英國民を敬愛する。西北歐小群島の民族にして、領　四海に洽く、その國語の傳はる處、自由獨立の精神を鼓吹せざるはない。憲政の模範は爾の專有する所。紳士の風格は爾の誇りとする所。地方自治は爾の永く經驗したる所。爾の淑女は教養ありて品位高い。爾の製品は堅實にして、爾の商賣は信用を重んずる。あゝ精力旺盛なる民族よ、義俠博愛の人に富む國民よ。あゝ爾は永へに健在なれ。あゝテームス河畔の尖塔と飛閣よ、爾、心あらば僕の告別を受けよ。』

歐洲大陸の旅からロンドンに歸る人、米國を經てロンドンの客となる人は、誰でも申し合したやうに、ロンドンは住みよ

く、英國はなつかしいといふ。言語が比較的によく使へるためでもある。英人が禮儀を重んじ、親切ではあるが、あまり餘計な人の世話をせぬといふこともあらう。此處に見逃すべからずして多くの人々が氣に止めぬ一つの原因は島國的雰圍氣が日本と英國とに共通であるといふ事實である。私は世界を東洋西洋とに區別するは餘りに大まかであると考へる。むしろ大陸と島國と區別するが適當な場合もある。島國日本に生れた人々が島國英國に氣持よい印象を與へらるゝは少しも不思議でない。三年の英國留學は私をして島國文化を根本的に研究するの必要を痛切に感ぜしめた。

二　大戰爭の開始際における英國の將來に對する豫言

一九一四年、七月、慘憺たる大戰亂が突發して、英國も亦その大なる渦の中に卷き込まれると、その運命に對する豫言は多くの人々の話頭に上つた。英國々民は爛熟した民族、下り阪の國家、落日の餘暉である。新興の國家、元氣旺盛の民族　旭日の堂々たる獨逸の敵でないと斷言する人も少くなかつた。私は之と意見を異にした。

大戰爭の開始と共に、私は小著「英國及英國人」に筆を染めた。その結論の一節に私はかく斷言した。

『大英帝國はこの大戰後には更に大なる望みと力とを以て發達することゝ考へる。その感化と影響の及ぶ所には自由の思想と人權の擁護とが伴ふであらふ。よしや萬一、獨逸帝國の大失敗のため、大英國をして益々その威勢を振はしむる杞憂なきにあらざれども、思想家や宗教家の努力はこの富强の民を率ゐて人道的世界的使命を果さしむることを、吾人は信ずる。若しこの事がないならば、大英帝國は早晩瓦解を免れざるべく、この使命が忠實に思考せられ、實行せらるゝ時、大英帝國は更に大なる光榮を荷ふであらう。世の人往々にして、英國民の威力は正に絶頂に達して、既に夕日のごとく西の空に傾いてゐると斷言すれども、吾人は之に與することが出來ぬ。英國文明は島國文明である。その特色は過去を重んじ、傳說を尊ぶことである。英國民は之を以て保守的民族と稱せられる。しかし十九世紀の初頭から、英人は理性に照して、その政治と教育と、宗教と、文藝と、實業とを改造せんとする努力を示した。選擧權擴張はこれでないか。教育上の自由はこれでないか。新大學の設立はこれでないか。新文藝の勃興はこれでないか。新宗教の運動はこれでないか。社會政策の斷行はこれでないか。愛蘭自治法案はこれでないか。傳說

の英國は七轉八倒して合理的英國たらんとしてゐる。而してその努力は空しくない。見よ、二十世紀の英國文化は新鮮にして生々とし 色彩を放つに至つたでないか。故に吾々は英國民は既に絶頂に達した老朽國ではなくして、更により高く登り行かんとする大國民であると斷せざるをえない。」

かく述べたる後、私は開戰當時の英國の政治、宗教、文學、軍事、新聞等の中心人物を抽出して、私の論鬪の根據とした。そして結論は次の言葉であつた。

「故に吾人は英國は今や傳説を擺脫して、新に理性を纒はんとする過渡時代にあることを斷言する。英國は多くの批評家の言ふやうに、衰運に瀕しつゝあるに非ずして、更に進化し、飛躍せんとしつゝあるのである。アングロ、サクソン民族の使命は未だ終らない。日英同盟は偶然の政治的結合でない。東の島帝國は西の島帝國より更に學ぶ所がなくてはならぬ。日本は眞の英國を解せずして獨逸にのみ師事するやうになつた。獨逸の文化は偉大である。大戰後も吾人は之を尊敬せねばならぬ。しかしながら日本が英國の文化に對して、近頃不正當なる理解を與へたことは將來償ふことをせねばならぬ。彼は西の隻眼、我は東の隻眼、その文化相互に補ひ助け、東西兩眼協力して、世界の文明の發達と人道の進歩とに大貢獻をせねばならぬ。」

私は大正三年の秋の判斷としては我ながら大出來であつたと快心の微笑を禁ずることが出來ぬ。同時に大戰の進行中、私は一種の責任感を抱いてゐた。聯合軍の旗色の悪い時は眞に深い苦しみを感じた。しかし在英三年、多くの青年學徒と交を訂し、又社會各方面の觀察の歸結に私をして決して絶望せしめなかつた。大隈內閣の出來立ての時であつたと思ふ。獨逸からの新歸朝の某氏が盛に英國を攻撃するので、獨逸に對す敬意に存してゐるものの、餘りに英國を見くびりたる態度に慊たらずして、私は英國の辯護をやつた。大隈侯は珍しく默して若者の言ふ所を傾聽せられた。いよいよ戰爭の大詰めとなつた時、老侯は私を顧みて、あの時の君の議論は中々猛烈だつたねと言はれて、莞爾としてほゝえまれたことであつた。

三　大戰後の英國の外觀

一昨年の第二次世界一週の旅に上つたのは、ボストンに於ける自由宗教世界大會に出席するのが主要なる目的であつた。戰後の米國の狀態を觀察したい爲であつた。しかし英國を中心として戰前の歐洲と戰後のそれとを比較研究してみたい希望が、私をして無理して迄も旅程に上らしめた強い衝動であつた。勿

論英國の師友と久し振りに邂逅し、戰死したる友を弔し、十年間の久濶の情を述べたいといふやさしい懇願が心の一隅に根城を構へてゐた。そして、グランドキヤニオンの大自然の驚異、大統領の選擧の活劇、ニユーヨークの不夜城を見たる眼をそのまゝに大西洋に浮んだのは十一月十八日であつた。獨逸より英國が分捕つた五萬噸のインペラートールは丸で浮べる城その物であつた。石炭を節約したために巨人の歩みは遲々たるもので、十晝夜を灣流の比較的溫かい空氣の中に送つて、やうやくサウザンプトン港外に碇泊した。ハドソン河の十四丁目の埠頭に横附になつてゐた巨船は干潮のために、進退の自由を失ひ、雨霧の中を迎えの小蒸汽船に乘つて、日が暮れてから上陸した。米國のプルマンカーに見慣れたものには英國の地方列車は大分見劣りがした。この朝一寸立ち寄つた北佛海岸のシエルブルグの晴れた空と比較して夕靄に包まるゝ島國の秋を不思議だと考へさせられた。しかし米國のやうに空氣が乾燥せず、濕氣があるので、何となく我々島國人にスツクリ合ふやうな感じを懷いた。狹い室には兩側に四人づゝも腰かけた。ウオーターロー停車場に着いた時は雨は霽れたが空は墨を流したやうに暗い。ニユーヨークから同行したN君と、船中で懇意になつたグラスゴーの辯護士のB君とストランドの一ホテルにタキシーを走らした。テームス河上の同じ名の橋を超ゆれば、間もなくホテルに來た。幸に室の都合が出來て、落ちつくことゝなつた。B君にさそはれて、N君を誘ひて夕食を取るために外に出た。もう十時過ぎで、雨あがりの闇夜であるから人通りもあまりない。氣のせいか街が馬鹿に暗い。ライオンの可なり大きなレストラントに入る。音樂もある。給仕の女も客も馬鹿に落ちついてゐる。米國に比べるとすべてが小仕掛けである。とにかく一通り胃腑の慾を滿足せしめたから、薄暗い道を散策する。トラフアルガー・スクエーアに出る。石の獅子の足臺の上の中空に立つネルソンの銅像は十年前と異る處はない。國民議堂は夜目にもガツチリとみえる。多くの劇場からは人を吐き出してゐる。十年前のロンドンが殆んど何の變化もなく私の前に現れてゐる。十年といふ長い時が消えて一九一一年の六月末から一九二〇年十一月末が何かの不思議なる魔力で結び付けたられたやうに見ゆる。たゞとある靜かなる小さい廣場に來ると、これは初見參の女性の銅像がある。微かな街燈の光りの下で讀めば Edith Cavellの文字がありありと見える。あゝ、これだ、白耳義で銃殺された英國の看護婦のエデス、カヴェルは。大戰爭の記憶が新に頭を擡げる。十年のすき間を一飛びに越ゆることが出來ぬと觀念する。私は無言で滑べる足もとを危みつゝ宿にかへつ

た、

翌日は日曜であつた。カノン、イングの說教があるといふので B君とN君を誘うて、聖保羅大寺院に行く。聖樂の音が廣い、暗いゴシックの大伽藍の中に漂うてゐる。何處となくしんみりとさせられる。イング博士は英國國教內の謙派(ブロード・スクール)の思想家の隨一である。しかしその聲は四壁に反響してよく聞えぬ。ゴシックの大寺院は禮拜する處で、說教を耳かせるにはよくないと感じた。廣い堂內には火の氣がない。イング博士も風邪である。會衆にも咳拂ひが頻りに起る。たゞ私は久し振りに落ちついて禮拜の氣分を起したことを感謝した。

日曜のシテーは閑靜なものであつた。我等は中世記時代のシテーの古壁の名殘りをみたり、古風な教會で和蘭人が集つてゐるのをのぞひたりした。戰前と同じく普通のレストラントが店を閉さしてゐるので、私達はシテーの外で食事をした。

ホテルの寢臺に火の氣がない。劇場に火の氣がない。教會に火の氣がない。皆石炭節約のためである。何處でも鼻風をひいて、咳をする人が多い。十二月上旬、オックスフォードのホテル・ランドルフでシマエルマス學期名殘の舞踏會があつたらしい。火の氣のあるかなしかのパーラーに薄着の夜會服にふるえてゐる若き婦人達を見て氣の毒に堪えなかつた。

チヤーリング、クロッスの郵便局にゆくと、右の手首がなくて、左手でスタンプを押す局員をみた。ストランドの小さい活動館に入つた處が、丁度に無名兵士の遺骨が齎さるゝフイルムであつた。私の側にゐた青年は淚を流してゐた。私に見られると思つてか橫を向いた。私は貰ひ泣きをした。左手のない青年が、外套の袖だけを左のポケットに押し込んで步くのがある。撞木杖に倚つて步く人が多い。オックスフォードの母校の給仕長のC君はズボンをまくり上げてその左脚をみせた。彈丸の痕跡が幾つもあつた。彼のエーブルの戰爭談はもの凄かつた。

シテーの王立取引所の前にはロンドン出身の戰死者紀念碑があつて、花環に埋まつてゐる。ホワイト・ホールには十一月中旬に除幕式を行つたばかりの無名兵士の紀念碑が國旗に圍まれ、花環に包まれてゐる。ウエストミンスター寺院に入れば無名兵士の骨を埋めた本堂の石の床の近くには幾百の老若男女が深き思ひに沈んで腰掛けてゐる。勝利の悲哀のシンボルが到る處に眼を惹く、

女の巡査がゐる。女の事務員ばかりの郵便局がある。少女の電報配達がゐる。戰時中の婦人の活動の面影が殘つてゐる。婦人の服裝が著しく質素になつたやうだ。年頃の婦人の容貌が落ちたさうだ。商店でも、工場でも、會社でも、料理店でも、ホ

テルでも、なりも振りも構はずに一心不亂に働いてゐる婦人達には感服せざるを得ない。十年前には停車場の食堂にさへ氣品の高い顔が女給仕人の中にあつたやうだ。十年の時は私の批評眼を高くしたのか。否々、五年の大戰爭が婦人をして容貌と服裝とに特別の注意を拂ふことを忘れしめたのであらう。

乞食が多いやうだ。小泥棒もふえたやうだ。失業者の數は殖える一方だ。失業者の行列が通る、例によつて靜肅なものだ。

戰爭中ロンドンには殆んど新しい大建築がなかつた。修繕さへも遠慮したと聞く。たゞハンサム馬車が殆んど消えて了つた、乘合馬車の代りに乘合自動車が走る。十年前には兩者併用であつたが、今度は乘合自動車のみとなつた。

靜かなオックスフォードにも大した變化がなかつた。一九二〇年の秋の新學年から婦人の入學を許したことゝ、馬車鐵道の代りに乘合自動車が用ゐられてゐることが目立つた。電話は矢張りない。メソポテーシャの河添の散歩路、クライスト・チャーチの牧場も少しも變らない。

變らぬは自然のみでない、建物のみでない。人々の職業にも變化はない。オックスフォードの母校のスチワードのS君は依然として變らない。寄宿舍の世話をする老婦人はもう十六年勤めるといふてゐる。母校の寄宿舍は戰時中病院に宛てられたさうであるが、そのベットの中に横はると色々のことを想像させられる。給仕のC君は給仕長に出世してゐる。ブロード街のお得意の本屋の主人も番頭も變らない。小僧さんは出征軍人であつたが、戰爭が濟んでまた古巣に歸つて來てゐる。ロンドンの洋服屋の裁縫手も十年前と變らない。ウイリヤムス博士紀念圖書館の給仕は四十年勤續だといつた。萬法流轉といふ世界に萬法停滯といふ現象があるやうに思つた。

さて、冬である。霧が深い。午前十時位までは薄暗い。午後は三四時頃から暮れかゝる。日中の光線はコダックのために餘りに薄い。下手な私の取つたものは皆駄目であつた。午後三時頃に大英博物館の中はソロ〳〵暗くて、用意のよい人は懷中電燈を照してガラスの蓋越しに古文書を讀んでゐるもある。

しかし、この不便な、暗い、しめつぽいロンドンが何處となく人を引きつけるのは不思議である。米國からはじめて英國に渡つたN君最初の數日は不平だら〳〵であつたが、次第にロンドンは住みよい處だと白状した。十二月中旬に巴里に向ふ時はロンドンは氣に入つたと言つた。

ニューヨークは一週間もあらば見物すべきものは一渡り見物し得られるやうに思ふ。ロンドンは毎日見物に出かけても一年ではあらゆる名所舊跡を探ぐる事は出來ぬらしい。ニューヨー

クは一度で人を威嚇する。ロンドンは噛みしめると味が出て來るやうに思ふ。私はストランドのホテルに二三日を送つた丈で、後はエッセキス街のＬ館といふ倶樂部に滯在した。一旦踏み出せばテンプルで、シテーの入口である。南に半丁も降ればテームスのヴイクトリア・エンバンクメントである。ロンドン大學のキングス、カレッヂには近い、キングス、ウエーの大通も近い。ホルボルンに近い。チヤーリング、クロッスに近い。正にロンドンの中心である。そのために少からざる便利があつた。或日の午後、エンバンクメントをウエストミンスターまで歩いた。其右側に並立する、大ホテルや、大邸宅や、諸官署を仰いで英帝國の底力のあるに驚いた。

四　大戰後の世界に於ける英國の地位

大戰後、北米合衆國が一躍して世界最強最富の國家となつたことは誰しも承認することを躊躇せぬ現象である。流石の英國もその下風に立たねばならぬやうに見受けられる。米國が國際聯盟に加入せぬからといつて之を膺懲することもえせず、華盛頓會議には英國から進んで參加するといふ勢である。日英同盟は弊履のごとく棄てられて四國協約が立所に出來上つた。これ米國の覇業が正に成就せんとしてゐるを證するものだといふ見方がある。一應尤の觀察である。

先づ誰でも考ゆるのは大戰の結果として殆んど世界の富の大部分が米國に集中したことであらう。或る經濟學者の統計によれば、一九一四年、六月三十日から、一九二〇年、六月三十日までの六年間、米國と歐洲各國との取引に於て、前者は百八十億弗の貸方になつてゐる。之を時價に換算すれば四十億磅以上に達する。この巨額は大戰突發の際英國が世界各國に投資してあつた資本全額に匹敵する。されば英國が百年位を要して蓄積した在外財産を米國は僅かに六年間に儲けたのである。米國は世界一の成金國である。さればニューヨークは世界に於て最も重要なる金貨市場である。世界は皆米國の債務者である。ロンバート街の金權は既にウオール街のそれに壓倒されてゐることは火を睹るよりも明白である

然るに英國側をしていはしむれば、ロンドンは必ずしも世界金融の中心たる特權を失つた譯ではない。米國は富を有してゐるが、英國ほどに對外投資の術を心得ぬ。對外投資は單に債權を意味するばかりでなく、世界到る處に於ける商事的企業の管理能力と投資金額の利子を超過するコンミッションを意味するのである。又ニューヨークに於てはロンドンのやうに發達してゐる割引市場を有してゐぬ。依つて世界の銀行はロンドン

を中心として取引するを便利と感じてゐる。又戰後ロンドンのシテーに於ける顯著なる變化は株式銀行が外國語を使用するに至つたといふことである。これはロンドンに於ける外國銀行と英國株式銀行との間に取引が行はれてゐることを語ると共に、後者が外國の大都市に發展して來たことを暗示する。かゝる理由で、經濟界に於けるロンドンの地位は未だ鼎の輕重を問はるゝ迄には至らぬらしい。

政治的に考察すれば歐洲に於ける英國の勢力は戰前に比して却つて大を加へた。競爭者獨逸は一敗地に塗れて、今後四五十年間は再起の望みがない。露西亞は渾沌として、一寸先は眞暗闇の姿である。佛蘭西の對獨熱は中々冷めずして英國の後援を要求してゐる。佛蘭西に壓迫せらるゝを苦にする獨逸は寧ろ却つて親英的氣分を示さんとしてゐる。歐洲大陸に對する英國の强みが今日ほどに充實してゐることは歷史上珍しいことである。然れども一方には米國や日本の勃興が心配の種子であるが、華盛頓會議はこの苦勞の雲を一掃した。

愛蘭問題は獅子心中の蟲であつたが、ロイド・ジョージ內閣が之を解決した。埃及の獨立も多少の條件付にて許可せられた。遠からずして印度に於てもガンデー氏その他の愛國者の素志が貫徹するであらう。異民族統治に於ける英國人の才能は依然として顯著なるものがある。

大戰の結果として大英帝國は寸分の領土を減ぜざるのみならず、舊獨領の大部分を委任統治の任に當り、メソポタミア及びパレスタインをもその委任統治の權限のうちに加へられた。

勞資問題は最近の英國が最も苦い經驗を甞めたのであるが、その解決は比較的圓滿に行はれてゐる。ストライキが度々企てられたに係らず、勞働者は直接行動に贊成するものは少く、議會に於ける勢力を扶殖して、自己の主張を貫徹することに熱中してゐる。共產主義的傾向は日に〱强くなりつゝある。次回の總選擧には三分の一以上の議席は勞働者の所有に歸するかも知れぬ。しかしこの最も困難なる問題は割合に圓滿に解決せられてゆくらしい。

宗教界は稍々寂寥を感ずる。大戰中の疲勞より全く回復してゐない。しかしフレンド派の如きは中歐救濟のために立派な事業を經營してゐる。各教派の中に心靈復興の兆候もきざしてゐるらしい。宗教哲學や比較宗教に關する名著もある。

教育界は文部大臣フイツシヤー氏の普通教育刷新案たる新教育令が實行されかけてゐる。必ず良好の結果を生ずるであらふ。

文藝界に於てはエーチ、ジー、ウエルス氏の活動は世界的影

響を及ぼしてゐる。華盛頓會議に於ては彼の意見は各國全權委員以上の重きをなさしたと噂されてゐる。新聞雜誌の調子も戰前に比して遜色はない。劇壇に於ては戰爭の反動として輕佻なる音樂入れの喜劇がます／＼流行すれども、一方には沙翁物も上演せらるるし、ドリンク・ウオーター氏のアブラハム、リンコルンのやうな眞面目の劇も相當の成功を奏した。

　このやうな見地からして、私は英國文化の將來を悲觀しない。捲土重來の意氣が潜んでゐるやうに思ふ。

五　一九二一年の人口調査に現れた回復力

　大戰爭が英國の人口に及ぼした影響は之を認めざるをえない。例へば一九一一年の國勢調査の際の人口は左の如くであつた。

英蘭	三千四百四萬五千二百九十人
威勒	二百二萬五千二百二人
小計	三千六百七萬七百九十二人
蘇蘭	四百七十五萬九千四百五十五人
愛蘭	四百三十九萬二百十九人

一九二一年の國勢調査の一部分が昨秋發表せられたが、之によると、

英蘭及威勒　三千七百八十八萬五千二百四十二人

にして一九一一年度に比して百八十一萬四千七百五十人の増加である。

蘇國　四百八十八萬二千二百八十八人

にして辛うじて十數萬人を増加した丈に止る。愛蘭の人口調査は發表せられない。内亂のために不可能であつたらう。英蘭及威勒に於ける男子に對する女子の超過は一九一一年には百十七萬九千二百七十五人であつたが、一九二一年度には百七十二萬八〇二人となつた。之に蘇蘭と愛蘭との超過數を加ふれば約二百萬人の婦人超過數となるであらふ。これは英國に於ける最も困難なる社會問題の一つであつて、之を解決するは容易ならぬ事であらふ。

　又人口增加率に就いて左の表が興味がある。

	(英蘭及威勒に於ける出産數)	(死亡數に對する出産數の超過)
一九一四年	八十七萬九千九十六人	三十六萬二千八百五十四人
一九一五年	八十一萬四千六百十四人	二十五萬二千三百六十一人
一九一六年	七十八萬五千五百二十人	二十七萬七千三百五人
一九一七年	六十六萬八千三百四十六人	十六萬九千四百二十四人
一九一八年	六十六萬二千六百六十一人	五萬八百人

一九一九年　六十九萬二千四百三十八人　十六萬八千三百三十五人
一九二〇年　九十五萬七千七百三十二人　四十九萬一千六百五十二人

一九一八年は戰死者の數最も多かつたことを示してゐる。一九二〇年の成績は一九一四年を超ゆること數等。英國民生活が順調に復し、更に發展の氣運に向ひつゝあることを語るものである。猶英蘭及威勒の戰死者は約五十六萬人である。

英國民がかくして戰爭の打擊から着々として解放せられんとしてゐるやうに觀察せらる。

依つて英國の研究は島國日本にとりて戰後更に興味を加へてゐる。我が國の國是は智識を世界に求むるにある」獨、佛、米、露、伊、支の文化の取るべきはよろしく取るべしである。しかるに是等の國家と民族は大陸に存在するが故に島國日本と相容れざる點も少くない。獨り英國は國體、人種、文化等に於て我が日本と共通の分子を多く有する。等しく共に島國文化の所有者なるがためである。依つて日本としては英國文化の進化の跡を討究して、參考とすることが無益でない。かくいふは必ずしも英國の手本に盲從せよといふのではない。たゞ氣候、風土や地形や人種や、歷史や共通の點多い英國を參考とすることの利益の少からざるを暗示するのみである。しかるに古い英國は凡てが歷史的に進化し、發達して來たのであるから、俄か勉强で理解しかぬる事相が少くない。忍耐と秩序ある勉强が伴はなければならぬ。これ私がこの小篇をものとして、管見を陳べて、同好者の栞となさんとする所以である。

六　島國文化の特徴

『もし英國人が、最も近い海路によりて、大英國より北日本に旅立つ時には、外形も自然の産物も、自國とは大に相違ある多くの國々を通過する。地中海の陽氣な島々、埃及の砂漠と椰子樹、アデンの不毛の岩地、錫蘭のコヽアの森、マラッカ、シンガポールの虎潛む藪、呂宋の沃野と火山、臺灣の森林、支那の禿山等相次いで眼に映ずる。終に一萬三千哩の廻り遠い航海の後に、日本の函館に達する。彼は今や歐洲及び北亞細亞の全幅員によりて、平原、山岳、荒寥たる砂漠、氷れる高原の殆んど果てしなき連續によりて、その出發點から隔離せられてゐる。しかも彼が新しい國土の內地を訪れると、多くの見慣れたる物に遭遇して、恰かも故國の近くに歸つて來たやうに思はれる。森や野には至る處に小雀や、茅潛や、鷦鷯や、鶺鴒や、雲雀や、駒鳥や、鶲や、頰白や、雀などが巣籠りしてゐる」或者は殆んど英國の鳥類と相異なく、或者はその區別を說明するために實際的鳥類學者を必要とする位であ

る。

これはチャールス、ダーウインと共に進化論創唱の名譽を分つたアルフレッド、ラッセル、ウオレスの著「島の生物（アイランドライフ）」の冐頭の一節である。

凡そ島に二種ある。一は大陸的島と呼ばるゝもので、日本、臺灣、英國、ボルネオ、スマトラ、ヂヤヴア、セリベスの如きもので、比較的新しい時代に、大陸との聯絡を失つて海中に孤立するに至つたもので、その周圍には百尋以下の海を有し、且つ當然大陸に接近してゐるものである。一は大洋のたゞ中に存する離れ小島で、火山の爆發のためか珊瑚岩かで出來てるものである。

大不列顛及び愛蘭が千餘の諸島と共に歐洲大陸の西北に存するは日本が幾千の群島の盟主となり亞細亞大陸の東北隅に存すると同じである。日本の方が十六度も南の方に位するが、前者はメキシコ灣の灣流に洗はるゝやうに、後者は黒潮の感化を蒙る。前者は歐洲文明の繼承者たるやうに、後者は亞細亞文明の大成者である。保守的にして進歩的なること、舊物を保存すると共に新物を攝取すること、諸人種の雜婚が圓滿に行はるゝこと、大陸のごとく極端より極端に赴かずして中庸の路を進まんとすること、大陸の人々の如く社交的ならずして、口不足で、外國語を操ることが巧みでないことなど共通の點である。私は昨年二月ロンドンを立つに先じて、「インクヮイアー」誌の主筆との會見（インタービュー）に於て述べた。

「大戰後、歐洲大陸の思想と政策はやゝもすれば極端より極端に走らんとする傾向がある。これは大陸文化の特色である。然るに島國文化は折衷主義にして中庸を重んずる。戰後の混沌期にはその使命甚だ大なるものがある。日英は文化的に同盟して世界人類の幸福のために努力しなければならぬ」

大陸の思想が島國に輸入せらるゝ時は、知らず識らずの間に修正が加へられる。島國の濕氣多い環境は一種のぼかしを與へる。大陸の文化には荒削りの面影がある。之れに仕上げをつけるのは島國文化の使命である。

七　海——英國民の環境

昨年ロンドンにて「日本の政治史に及ぼす海の影響」といふ書物が出版せられた。英國海軍々令部のボラード海軍中將の著である。好漢好漢を知る。西の海國は東の海國の研究に熱心なるは怪しむに足らぬ。依つて我々も英國民を知らんとするにはその環境の海について考察せなければならぬ。太平洋上に國船を浮べてゐる日本民族は、三百年間の誤れる鎖國政策に禍せ

られて、海を忘れてゐる者さへも、その仲間の中に見出すことがある。されば海國日本の同胞に對しても海を知らずして英國人を理解することが出來ぬと提言するは、我々自身に向つての一種の警告とも響くであらふ。

海は自由であるとバイロンは歌つた。しかしそれは科學の進歩の賜として、巨船を波濤の上に浮べて、はじめて提唱せらるべき言である。未だ巨船の造られなかつた昔は、海は制限であつた、抑壓であつた。微笑むやうな漣にのせられて、セルト人も、チユートン人も、ノルマン人も、英國の濱邊に引き寄せられた。されど北海より吹き襲ふ北東風の狂ひに猛る日は、天地晦冥、飛雪紛々、海の姿は夜叉のごとく、惡魔のごとく、傍若無人の振舞を敢てする。かゝる時は海は自由の表徴でなく、壓制の記號となる。狂熱奔放の思想がしばらく胸中に潛みて、强て表現を求めぬ傾向を帶ぶるに至る、島國人が島國根性と呼ばるゝ原因の一つは屹度此點にあるらしい。

森林山岳は障礙で、海は公道と目せられた時代はあつた。沿岸交通が漸く發達しかける時である。しかし海峽を横切ることさへ冒險であつた。造船術が進歩して、危險の度が少くなつてからも、海上の交通の便に由る人々は比較的に少ない。要するに大陸と島との間を往來する人々は少い。一人の漁夫が海上の生活を繼續し考へても、數人の家族は陸上の生活に執着する。一人の海員に對して數十人もしくは數百の農民や牧畜者が控へてゐる。從つて島國人は大陸人のやうに社交的になりえない。口重である。口不足である。御世辭か下手である。佛國人に比して英人は著しく非社交的である、丁度日本人よりも支那人や朝鮮人がより多くの社交性を有してゐるやうに。

人の心は秘密と神秘を隱してゐる。自分の心さへもわからぬ折がある。況して、誰か他人の心のすべてを理解し得るものぞ。されど島國人、特にこの秘密を多く藏してゐるやうに觀察せらるゝ。海の神秘と本體とをつき止めることが不可能であるごとく、島國人の本音は容易に大陸人には別りにくいらしい。日本人の心がわからぬとよく外人はいふのを聞く。英國人も同一の批評を受けてゐるやうだ。これは海の環境と關係があるらしい。

弱き者に對しては海は檢束であるが、强い者に對しては海は不斷の誘惑である。海のあなたの利益が蜃氣樓のごとく想像の心眼に描かれる、狂瀾怒濤はものかは、破船沈沒はものかは、乘るか反るかの腕ためしに一生一代の大賭博を斷行する猛者連が奮然として冒險の途に上る。英帝國の建設は主としてこの健兒によつて行はれた。

『爾の祖先の精靈は
浪のなかより現はれむ、
甲板はその榮の庭
海原はそのおくつき。
ブレーク、ネルソン斃れし處、
爾の心は雄々しく躍る、
暴風はものかは吹かば吹け、
戰はあらびよ時長く、
暴風はものかは吹かば吹け、
爾は千波の上を飛ぶ。』

これ十八世紀の詩人トマス、キャンベルの英國の水夫を激勵したる名句である。英國の歷史を知る者はローレーや、ドレークや、ハドソンや、クックや、ネルソンや、近くはチャツトランド沖の英雄、ビーティを忘るゝことが出來ぬ。

英國人が漂遊性を有し、世界の果より果まで足跡を印してゐるも亦海の環境と關係があらふ。西洋人中世界的旅行を最も多く行ふは英人と米人とである。我々日本人も著しく世界漫遊者の數を增した。これも同じ理由に基く。英人はこの漫遊と冒險との間に、世界の要地を見わけた。ジブラルター、マルタ島、ポート・セード、アーデン、シンガポール、香港等東西交通の要害は皆英人に占領せられ、管轄せられてゐる。彼はこの種の地の利を相するに驚くべき才能を發揮した。百年以前の蠻烟瘴霧に鎖ぢこめられたシンガポールは今日では東洋第一の重要地帶である。十九世紀の半まで海賊の巢であつた禿山の香港は、今や綠樹鬱蒼として極東の蓬萊山の稱を恣にしてゐる。我々は英人の功業を妬むよりも、彼等の先見の明に學びて、彼等以上の叡智の所有者となることを念とすべきである。

八　氣候——英國民の環境

太平洋に黑潮の環流があるやうに、太西洋に灣流の環流がある。南方の溫かい海水が西はフロリダ、東はイベリア半島と西北アフリカの大陸の岸を洗ふ。アゾアース諸島のほとりから灣流の大きな分派が出て、東北の方向に走りて、愛蘭の西海岸から蘇蘭の西北海岸をかすめる。又アゾーアスの諸島のほとりに氣壓の高い區域があり、イベリア半島からアフリカの西北部の氣壓も概して高い。アイスランドに近い太西洋の西北部の氣壓は低いのは通常である、そこで英國に迫る海面風は西から來るのである。濕氣があつて冬は暖かで、夏は涼しい風である。英國が北半球の同じ緯度のいづれの國土と比しても氣候が溫和なのは之に基く。要するに雲と雨との賜である。太西洋上より英

國に運ばれて來る濕氣を含む空氣はくもり勝である。英國の空は雲に蔽はるゝことが多い。雲は冬には毛布であり、夏には日被である。

冬、地球が足搔きを早めて冷くなり、夏の中に貯へた暖さを浪費する時、雲は熱の放散を制限して、比較的に溫い雨と凝らしめる。そして熱が放発される。勢ひ濕つぽい、霧深い日が續く。夏には雲は太陽を蔽ひ、多量の雨を供給する。夏季の蒸發力は盛であるから從つて溫度が低くゝなる。概して英國の七月は涼氣で雨勝である。

エール大學のハツチンソン教授はその著「氣候と文明」とに於て、文明を培養するに最もふさはしい土地は西歐諸國である、英國、西北佛蘭西等はその代表である、夏暑からずして冬寒くなく、年中働き續けることが出來るからだと述べたことを思ひ出す。日本の氣候——少くとも東海道に於ては——の基調は春といつてよい。冬のうちにも晴れ渡る春日和がある。之に反して英國のそれは冬である。私は十年あまり前に八月の夏休みの間、オツクスフオードの書齋に石炭をたいた經驗がある。

冬が陰氣で長い。生理的適者生存が行はれて、生理的に弱い者の代りに強い者が生き殘つて、今日のやうな英人を現じたとも見られる。この陰氣の自然に堪ゆるためには人間が進んで鈍感とならざるをえない。英人の鈍重と氣候との間に何等かの關係があらう。各種の運動の必要も生じて來たらう。英人の運動熱は遊食の資本家の贅澤三昧であると判斷するも一つの見方であるが、やゝ皮相觀たるを免れない。

英國の霧は名物である。一昨年の十二月から昨年一二月にかけて霧が實に深かつた。ロンドンのデーリー、ニユースが社說で霧を論じた程であつた。霧の中の寺院や高塔や、自動車や、勞働者や、一切のものが神秘化されて見えた。英人の沈着は先祖以來霧の感化を蒙つたためであるまいか。啻に上流の人が落ちついてゐるばかりでない。勞働階級に至るまで沈着である。

一昨年の十二月三十一日の夜、同宿の一英人に誘はれて、午後十一時半頃に聖ポーロ大寺院の前の廣場に行つた。非常な人込みである。鉋屑で造つた喇叭を賣る、天狗の鼻の樣な赤い面を被つてゐるもある。あちらこちらで小さい團體が人波の中に押されながら歌つてゐるもある。蘇國の生れの若い婦人達の數名の一組御國訛りの歌につれて足拍手面白く踊つてゐた。外には街上の踊りは見えなかつた。私は多少の興味を以て、今に十二時の鐘がなるかと、大寺院の高塔を仰いだ。中々鳴らない。鳴つたらばこの大群集は何をするだらうか、歌ふであらうか、亂舞するであらふ。見ず知らずの人々が握手でもするか、接吻

でもするかと、心待ちに行つてゐた。愈々十二時の鐘が鳴りはじまつた。

古きを鳴りいだし、新しきを鳴れ入れよ、
樂しき鐘よ雪ふる野邊に鳴り渡れ。
今年は過ぎゆく、過き行かしめよ、
詐りを鳴りいだして、眞を鳴り入らしめよ。

私はテニスンのイム・メモーリアムに名高い Ring out, wild Bells, to the wild sky の第二節を思ひ出して、この名篇はかゝる夜の感想であるかとも考へた。軈がて鐘が鳴り收まつた。こはそもいかに、歌ひ出すものもない、踊り初むるものもない。新年御目度うの挨拶もない。群集は默して各々の家路につく。私はやゝあつけに取られた有樣であつた。私は友人と一緒に長蛇のやうにストランドを西に流るゝ混雜の中に投じた。

私は英國に革命らしい革命が起らず、光榮ある革命などゝ稱する進化作用が行はれた理由の一つは氣候にあるやうに感じた。勞働運動が勞働組合と議會を中心として着々として進んでゐるも幾分か氣候の影響であると考へた。そして私は英國文化の一問題を解決しえたやうな氣樂さとを懷いて、一九二一年の元旦に目覺めた。

霧は凡ての輪郭を隱して了ふ。英人が純理論者になれないのもこの事に關係があるらしい。實用主義も實際主義も此處より胚胎してゐるかも知れぬ。勿論陰鬱なる氣候荒寥たる島國と戰ひて人生の戰鬪に餘裕の少ない時を送つた歴史は英人をして極端論者、急激主義者たらしめなかつた有力なる牽制力であつたらう。

猶此處に記臆せねばならぬことは英國の氣候の變化に富むことである。霧の間に幾分の晴天もある。そうかと思へば寒さが立ちかへる。

『何たる美はしき天氣ぞ。丸で冬の中の夏。餘りにぬくいので火をやめてからもう四日。火爐は空でも、私はぬくい氣持でゐる。』(一八四三年一月三十一日、後のブラウニング夫人、エリザベス・バーネットの日記)

『今年のやうな不健康な冬を記臆したことがない。——雨勝ちで、もやが多くて、僅か雨も降るし、鬱陶しい——全くやり切れない。』(一八四八年一月二十八日、ミス・ミットフオードの日記)

『我々は眞に愛すべき理想的初春にめぐりあつた。森にはアネモネやプリモローズに咲きあふれ、庭には水仙やポリアンタスが一杯だ』（一八八四年三月二十日、カンタベリーにて、エム、エス、ホルランドの手記）

『眞に厭ふ朝だ。雪が降る、雹が降る、その間にきら〳〵と朝日がちらつく。地は一面に白く、一天凍れるやう。こんなごつたまぜの天氣に眞平御免。不親切極まる、凍瘡が出來る。おまけに、白くて、冷くて、不愉快なるは、自分の一番に嫌ふもの、卽ち見え坊で、冷刻な、馬鹿な、美しくて、しかも心も情もなくて、人形のやうな眼鼻立ての婦人のやうである。」（一八二六年三月二十六日、ウオーター、スコットの日記）

『私は春のこの黄金日に庭をぶら〳〵してゐた。山鳩は藪の中にホロ〳〵と鳴く、蛙は池の中で鳴く、蜂は麝香草の中に唸る』（一八四五年四月二日、フイツゼラルドの日記）

『我々はクリスマス以來五度の冬に出つくはした。そしてこの二三日前までは春の面影も見えなかつた。』（一七七一年九月九日、ホレース・ワルポールの日記）

『この朝は散策に暑すぎた。これからはかゝる焼きつくるやうな時は散策をやるまい。先達大疾風がやつて來て、果實には大抵日切りをつけたのに、このやうな熱い日が、果物を熟せしむるとは滑稽の感がする。』（一七一一年五月三十一日、スウイフトの日記）

『ウイリアムは冬櫻の木を切つた。何といふ寒さ。蘆や香蒲（がま）や柔かい若芽を出したばかり大葉などは泣き出しさうである。』（一八〇〇年六月九日、ドロシー・ウオーヅウオースの日記）

『非常に暑い。ウイリアムは森にゆつて詩を訂正した。』（同年七月二十八日、同じ日記）

氣候に變化あるは英國及び日本の特色である。西南よりは太西洋の暖かい風が吹く、東北からは冬にはナイフのやうな剃刀のやうな寒い風が襲うて來る。この兩反對の融合、調和、反撥、衝突のあることに氣候に變化が伴ふ。恰かも日本で太平洋

の黑潮と北氷洋の親潮と相爭ふ如きものである。若し我が海岸に太平洋上から颶風が襲來しないとすれば夏の氣候は餘ほどに激しいものに違ひない、この變化が我が國の或頭腦に刺戟を與へた。英國の氣候に變化があることが、或る人々に變化に傾く氣分を促がし、進化に對する暗示と鞭撻とになつてゐると思ふ。英國の氣候が極端ならざるやうに國民性も極端でない。しかしその中庸が停滯せずして絕えず進化するは變化性に富む天候の賜と斷定するはあやまつたことであるまい。

九　英國民の人種的考察

人種の研究は世界に於て今猶ほ不完全の狀態に停滯してゐる。英國民の成分も從來はケルト族に屬するブリトン人がアングルスやサキソンスなどいふチユートン民族と混合して現在の英國民族が出來上つたといふ說が行はれた。古代英國に先住民族がゐたが、新に侵入した大陸系の人種が之を征服するなり、懷柔するなりして現今の英人と稱するものを造り成したことは事實である。マジソン・グラント等一派の學者は歐洲の人種を地中海種、アルプス種、ノルデック、卽ち北歐種と區別する。此說に從へば紀元前二〇〇〇年——一八〇〇年の黃銅時代に地中海人種は希臘、伊太利、北阿弗利加の西北海岸、イベリア半島に擴がり、更に東北佛蘭西に進み、その一部は英國海峽を橫切つて英蘭及び愛蘭に移つた。當時小亞細亞から中歐を含んで、佛蘭西の東南一帶に散布したアルプス人種は北伊太利、及び北西班牙、西北佛蘭西に點在し、英蘭及び愛蘭にも其痕跡を留めた。

紀元前千八〇〇年——一〇〇〇年の間に、大陸系の北歐種とスカンヂネヴイア系の北歐種は英國及び愛蘭に移住して、地中海人種と共に混處した。アルプス種は英蘭の東南隅に屛息するのみとなつた。その時は丁抹より北獨逸にはスカンヂネヴイア系の北歐種が根據を据え、大陸系の北歐種はアルプス種及び地中海種中に散布した。

紀元前一〇〇〇年より紀元一一〇〇年迄の間にスカンヂネヴイア系の北歐種が大移動を企て、英蘭及び蘇蘭の東半分及び愛蘭の沿海一帶は殆んどその占領に歸し、地中海種は氣息奄々たるものとなつた。スカンジネヴイア系の北歐種は大陸に於ても大發展をなし、大陸系北歐種、アルプス種の中に割込んだ。

現在の狀態いかゞといへば、スカンヂネヴイア系の北歐種は英國、蘇蘭及び愛蘭の大部分を占め、地中海種は威勒(ウエールス)を主なる本據として英蘭、蘇蘭、愛蘭に痕跡を殘してゐる。北歐種はスカンヂネヴイア半島、バルチツク海沿岸の芬蘭、露西亞、

獨逸、和蘭、白耳義、北佛蘭西に定住してゐる。地中海人種は地中海沿岸、地中海諸島、伊太利の東南部、北阿弗利加、西班牙、葡萄牙等に定住する。

北歐種の特色は長頭、長身、皮膚が白皙、金色もしくは褐色の毛と碧眼を有することである。長頭なれども頭蓋骨はやゝ小さい。眼も毛もやや黒みがゝり、皮膚は多少淺黒い。身長は北歐種より稍々低く、筋肉と骨格とも稍々弱い。

アルプス種は圓頭にして、身長は中位、骨格も筋肉も頑丈である。毛髮及び眼の色彩は甚だ黑いが。西歐洲のアルプス種中には多くの碧眼もしくは灰色の眼を見ることが珍しくない。

地中海種は感情や、想像に豐かで、北歐種は常識に富み、實用的才幹を多量に所有した。兩者の結婚は英國人をして折衷主義の本能と要求とを具備せしめたのであらう。

北歐種中のサクソン族が發達せしめた政治的自由は近代に至つて歐洲大陸の優良の人種を引きつけた。多くの猶太人が流れ込んだ。佛蘭西のユーゲノー教徒が歸化した。獨逸人が同化した。伊太利の志士も隱れ家を英國に求めた。

ロスチヤイルド家は猶太人である。ビーコンスフイルド卿もそうだ。パレスタインの總督サー・ハーバート・サミユエルも猶太人であらう。ゼームス・マーテノー及 その妹のハリエット・マーテノーはユーゲノー教徒の子孫である。カーヂナル・ジヨン・ニユーマンの母は佛蘭西人である。十九世紀の大詩人ロセッチは伊太利亡命の愛國者の血をうけた。

ハヴエロック・エリスはその著「英國の天才」に於て、史上著名の英人千三十名を國民傳記字典より拔き取つて、それを人種別に分けて次の結果を得た。

英蘭人	六百五十九名
威勒人	二十八名
蘇國人	百三十七名
愛蘭人	六十三名
大英國混合種	九十七名
大英種及外國人混合種	四十六名

最後の四十六名を分類して重なるを示せば左の表が出來る。

英佛雜種	十二名
英獨雜種	八名
英、和蘭雜種	五名
英伊雜種	三名
英フレミユシユ雜婚	二名
蘇佛雜種	二名

人種の複雜は多くの利益を英國人に與へた。世界大帝國の發

展と維持のために多くの才能を各方面に供給する便益を有してゐる。サクソン人に征服せられた威勒がロイド・ジョージを出し、和蘭系の南阿聯邦からスマッツ將軍現れて、英國の危急を救うたではないか。傲慢不遜の如く見える英人もいざとなれば中々融通がきいて、自家存立のためには被征服者の子孫の命令にも服する。英人が理解しにくいといふのは此點である。日本も此點を學ぶ必要がある。維新の改革の際に、握手した勝海舟と西郷南洲を有する日本は此一事に於て英國に追蹤されぬ理がない。

十　形式、秩序と繁榮との根柢

有史以前の事件はしばらく措いて問はない。紀元前五五年には羅馬のシーザーが英國を征服した。紀元四四九年から數十年に亙りて北歐民族の來襲が始開された。紀元九世紀にはデイン人の來冦があつた。一〇六六年にはノルマン人の征服が行はれた。

然れども爾來八百[illegible]十餘年の間、英國は未だ嘗て外敵に國土を蹂躙された例がない。西班牙の無敵艦隊も太西洋の藻屑となつた。和蘭人も失敗した。ナポレオンも一衣帶水の英國海峽の金城鐵壁以上の要害な事に嘆息した。最後に獨逸のカイゼルが匙を投げた。而して最近約二百年の間、愛蘭を除いて、內訌がなかつた。外敵の接近せなかつたのは英國の孤立的位置が然らしめたものである。內訌の勃發しなかつたのは英國憲法の運用よろしきをえたに外ならない。英國々民性が盲目滅法の事を敢てせず、石橋を叩いて渡る用意周到を具備するも國內の平和を維持するに力があつたであらう。

この政治的安定は不思議なる英人の性格を構成するに與つて力がある。獨逸人は亂暴だといはれる。しかし三十年戰爭やナポレオン戰爭の慘禍を蒙つては上品な民族になるは甚だ困難である。禮讓にかけては世界第一の稱ある佛蘭人も大革命の血の海を越え、ナポレオン戰爭や普佛戰爭や大戰爭を經ては、昔日の品位を維持するは並大抵の骨折ではない。英人は幸にして過去八世紀半の平和なる環境によりてのんびりした、落ち着きある生活を享樂した。そこで、形式と秩序とに對する趣味が自然に生じて、今はその第二の天性となつたのである。

大ロンドンの發達と繁榮も英國が永く外敵侵入から免疫せられてゐたといふ事に原因を有する。この事實は英人をして國防に專念せずして、餘力を他の方面に傾注するをえしめた。又ロンドンはその大陸に於ける競爭者たる、アンテワープ、ロツテルダム、ブレーメン、ハンブルグ等に比して多くの利益ある地

位に立つた。ロンドンは大なる港、貨物集散地、銀行事業の中心となつた。而して産業革命は海上貿易に於ける英國の位置を確定し、蒸汽船及び鐵艦の造らるると共に、この方面に於ける世界の指導者となることが出來た。然れども大戦争は幾分かロンドンの位置を搖つた。鼎の輕重を問ふ者が太西洋の彼方に現れた。英國の將來は大なる興味をそゝるのである。

十一　都會生活の偏重と有產階級

産業革命以來都會は益々發達した。大ロンドンはいふ迄もなく、港や工業市は異常なる進歩を現じた。英蘭に於て、一九一九年には人口十萬以上の都市はロンドンを除いて四十二の数に達した。この外に人口五萬以上の都會は四十七もあつた。その重なるものは八十六萬餘のリヴアープール、七十七萬餘のリヴアプール、七十四萬餘のマンチエスター、四十七萬餘のシエッフイールド、四十三萬餘のリーヅ、三十六萬餘のブリストル等である。而もこれにはグラスゴーや、エデバラーや、ダブリンなどが加へられぬのである。

多くの社會問題はこのために發生した。都市の暗黑面が増加した。しかし英人が一般に人品がよくなつたのは都會生活の結果である。田舍には剛毅撲朴がある。閑雅悠揚はない。

英國人は大戰前世界一の富源の民と目せられた。戰後この御株は米國に奪はれた形だが、その底力は他から輕侮するを許さない。

經濟學者クランモンドの統計によれば、一九一九年度英國民全體（人口を四千六百八萬二千人とみて）の總財産を二百四十億磅である。税務局の調査によれば、英國民の富の總額は大戰前に比して四十億八千萬磅を増加してゐる。而しこの巨額の三分の二を占有したるものは三十四萬人である。百萬磅以上の富の所有者の總數は二百八十人、その富は大戰前に比して二億磅を増加した。是等の富豪の富の總額は五億九千萬磅にして、戰後國民全體の富の殆んと十二分の一に當る。又十萬磅以上の富の所有者は一萬三千人ある。是等の富豪は戰後國民全體の富の四分の一以上を所有する。過重利得税（一九一八年三月末日に渡る年度の）は二億二千萬磅にして、所得税全額よりも多い。

一九一九年度英國政府の調査に基けば人口を四千五百萬と假定して、百三十磅乃至十萬磅の年收所得者は五百三十四萬六千人に達する。一人の所得納税者は平均四人半の家族を代表するとして、家族全員は二千四百二十五萬七千人となる。然らば殘餘の約五百萬の家族（即ち二千一百萬人）は百三十磅以下の年收入によりて衣食すると見なさゞるをえない。

英國は金持國だといつても、富豪の數は少くない。多くの人々は日夜營々として生活のために勞作してゐる。英國文化が爛熟せざる一原因はこの事實である。

又富豪の子弟の多くは力作を尊敬するやうな空氣の中に教育せられる。特に富豪や、高官や、政治家などの組織するソサエテー(社交界)に於ては一藝一能を有する男女でなければ幅が利かぬ。遊戲でも、娯樂でも、運動でも、文學でも、何でも一つの方面に拔んずることが必要條件である。單に富豪なりといふ理由で歡迎せられない。

されば英國の富を以てその爛熟と凋落を豫言するは早計である。否、大戰爭のために英國の上下の社會が著しく純化せられたと思はるゝ點も少くない。

英國の政府は社會奉仕の事業に投ずる金は少くない。一九二〇——二一年度の社會事業費の豫算は左の如くである。

戰爭年金	一億二千三百二十三萬六千磅
老年者年金	二千五百九十七萬四千磅
勞働省及失業者補助金	二千五百九十九萬九千七百磅
保健省及健康保險	一千七百五十六萬九千磅
鐵道協約金	二千三百七十一萬五千磅
パン補助金	四千五百萬磅
住宅補助金	六千八十八萬五千磅
公立教育費	五千七百五十三萬四千磅
除隊兵の教育、訓練、植民費	二千七百一萬三千磅
懲治院精神缺陷者のため	百二萬二千磅
炭坑補助金	一千五百萬磅

大戰爭のために不具となりて、聯合王國に於て、年金を受くる人員數は百七十萬人、之と關連して、手當を受くる妻子の人員數百八十萬人に達する。又海軍士官の寡婦二千二十二人は一九二〇年度に、十一萬二千磅の遺族扶助料を與へられた。又陸軍省は一九二〇年——二一年度に於て二萬以上の人員に對し、半給、年金、手當、心附として五千七百萬磅を支拂つた。

之によりても、英國政府は國民の富を利用して、社會政策を實行してゐることが解る。

英國でホスピタル(病院)といへば勞働者もしくは下流の人々のための療養所のことである。即ち産業の負傷兵の休養所である。主として篤志者の寄附や慈善團體の應援のもとに經營せられてゐる。或る地方の都會にては費用の七割五分迄勞働者が擔當してゐる。ロンドンにては勞働者の負擔は一割に過ぎない。英國及び威勒に於ける病院の總數は二千六百にして、十七萬八千の寢臺を有する、その中七百の病院と九萬四千の寢床は

貧民救濟法の支配を受けるものである。ロンドンの諸病院丈で、一九一九年度の費額は二百十萬磅で、約二十萬磅の不足を生じた。英國及び威勒の病院全體の一年の費用は彼是六百萬磅に達する。

この外に勞働者區域に大學植民地等の社會事業が經營せられて、勞働者の幸福と健康と品性のために少からざる努力をしてゐる。勞働者教育協會や大人學校(アダルト・スクール)などの運動もある英國の勞働運動は健實なのは國民性にも基くことだが、同時に有産階級の好意と政府の努力とを無視することが出來ぬ。

十二　公共學校の學風

英國の教育は近頃民主化され、殊に現今の文部大臣フイッシャー氏の新教育令は一層此方面に向つて一生面を開いた。しかし中世紀以來の學風が今猶大なる潜勢力を有する。卽ちPublic school 公共學校である。さてこの學校は私立であつて、莫大なる基本金を有するを常とする。就中、エートン、ハロー、ウインチエスターが有名である。有名なる教育家トマス・アーノルドによりてラグビーも名高くなつた。特にエートンとハローは貴族の子弟を教育する學校で、我が學習院に匹敵する學校である。是等の公共學校は勉强を强ゐない。羅甸語と希臘語を少しやつて、クリツケツトや、フートボールや、ボートの爲に大なる時と力とを費すやうにも見受けられる。この長所は自由と訓練の統一、學生間の社交律の寛大なることである。又一面から言へば公共學校は中流上流の子弟に便教育を施す所である。この學生々活に忍耐、自立を奬勵し、又容易に立腹しない、廉潔の性格の發達を助長する。いはゞゼントルマンの道場である。しかしその短所は個性と天眞爛漫と愛嬌ある醉狂などの源泉を堰き止むる傾向も有することを認めねばならぬ。

公共學校の卒業生は、やがてオックスフォードや、ケンブリッヂに進む。大英帝國の政治や、外交や、宗教や、教育や、産業や軍事等を支配する者多く此階級の人々より現れる。英國紳士が時には僞善と呼ばれるが、兎も角にも、その體面を維持するは公共學校の訓練に負ふ所が多い。

オックスフォードやケンブリッヂの教育はより一層自由にして世界的である。パブリック、スクール出の青年の地平線は段々大きくなる。しかしその時代の訓練によりて出來上がつた性格そのものには大なる變化はない。要するに十分教養ある英人の膽力が据つてゐることを注意すべきである。

私は英人がオックスフォードやケンブリッヂのやうな大學都市を發達せしめたことを頗る賢明だと思ふ。一はテームス河の

流域にあり、一はカム河畔の平野にあるが、美しい庭園、高雅にして古色蒼然たる建物、社交と運動と靜思と勉學と相交錯して　種獨自の社會が現出されてある。近代工業都市の雜沓と誘惑とより超越して、品性と智識と聰明への追求が行はれてゐる。大學生々活は人生の華美の時代、深刻なる印象の時代、友情の時代である。その心靈をして多方面の光を攝取せしむる時代である。英國文化の一面はかゝる古學府によりてはぐくまれてゐる。

十三　個人主義と自治的精神

北歐種(ノーヂック)は長い寒くして陰氣な冬の間に省察し、思考する習慣を得たのであらふ。それが個性の自覺――個人主義的傾向となつて現れたものであらふ。エーリングが「アリアン民族の起源」に於て、古代日耳曼民族は木造の家を建てゝ森の中に往んだ時、火事を恐れて家と家との間に十分の間隔をとつた。獨立の思索即ち個人主義的傾向がかくして次第にあらはれたと論じたのを思ひ出す。家庭生活が尊んぜられるのも長い冬の壓迫に對する消極的反抗心からであるかも知れない。

日耳曼民族は從つて自治の精神を發達したらしい。つまり、自分の事は自分でやる、人に迷惑をかけぬといふ意氣から生じたのであらふ。いづれにしても會議や選擧の如き形式が行はれたと傳へられる。日耳曼人中のサキソン種が英國に侵入してから次第にこの氣風を發揮したごとく思はれる。

希臘のデモクラシーは都市に於てのみ發達した。しかし小數者が政權を共有することを考へたけれども多數は奴隷となつて使役せられなければならなかつた。羅馬のデモクラシーはブルジョアに對するプロレタリアットの勝利にして、「法の前の平等」といふ思想を生んだことは世界の文化に對する一大貢獻である。選擧制度、代議政體、多數黨の勢力、其の行政府の管理等を以てデモクラシーは更に數歩の進歩を遂げた。これは英國民が世界に誇り得べき偉大なる寄與である。選擧權の擴張も議會の改造も英國風に徐々として實行されて來た。而も現在のデモクラシーは決して完全のものでない。例へば多數黨の横暴を極むるごときは何を以て抑制すべきや。或は比例選擧の議論があり、過激主義の主張もある。英國のデモクラシーは是等の新思想に對して如何なる方針を立てゝ進むか、頗る興味のある問題である。

個人の自由を尊重する英人は言論の自由を主張し、擁護した、徴兵制度に反對して義勇兵制度を維持した。大戰中一時この主張が破棄されたが、戰爭の終結と共に義勇兵制度が復活した。

この自由主義は宗教にも行はれ、教育にも適用せられた。

基督教の「神の國は汝等の心の中にあり」といふ主張は個人の價値を増し、宗教改革は心靈を解放して法王と教會と儀式との羈絆から切斷したことは個人主義、民主主義、自由主義を促進せしめた原動力の一つであることを承認せねばならぬ。又英國に於ける保守、自由の政治思想は宗教上にも同樣の背景を有するを看過してはならぬ。

十四　文學に現はるる自國批評

お國自慢と愛國心は世界の各國民の附き物である。英國にも英國第一を高調し、何でも英國世界一だと自惚れてゐる男女は少くない。然れども第一流の思想家と文豪とは常に自國に反省と悔悟と精進とを促がしてやまぬことである。米國人は戀人の如く自國に愛着すれども、前に述べたるが如き種類の英人は自己を省察するごとく自國を批判するのである。

今を去る三十三年、一八九七年六月二十二日にヴイクトリア女王の六十年祭が盛大に行はれた。有史以來の大帝國の榮華と光榮の限りが誇示せられた。歡樂と得意と慢心とを懷いて多數の國民が狂歡亂舞してゐる時に警告の聲が響いた。

雜沓と絶叫の聲は消え――
王侯宰相は別れゆく――
されど爾の昔しながらの犧牲、
謙虚にして痛悔せる心は存す。
萬軍の主なる神よ、我等を離れざれ、
恐くは我等忘れむ、我等忘れむ。

我が海軍は遠き使ひに消えてゆく――
砂山と岬頭に燈光は沈む――
見よ、昨日の一切の榮華は
ニネヴエーとタイルと運命を同じうす！
萬國民の判官よ、我等を許し給へ、
恐くは我等は忘れむ、我等忘れむ。

これこそ當時の青年詩人キツプリングが自國批判の聲であつた。

マコーレーも嘗て、ローマの廢墟を弔ふ如き感想を以てロンドンを悲しむ後代の人あるべし　全盛時代の英人に冷水をあびせた。

カーライルは絶えず罵倒と譏謗とを時事問題に傾注した。

現代に於ても第一流の思想家や文豪は英國の諷歎者でなくして、攻撃者である。ショーの聲を聞け、ガルスワォーゼィの言ふに耳傾けよ、ウェルスの主張を研究せよ。思ひ半に過ぐるものがあらう。

英國文化の頼みの綱は卽ち是れ。曲學阿諛の徒、便巧口舌の輩が、勝手に熱を吹いて自國讃美の管絃樂を奏し、衆愚が之に合唱する時は英國文化の墮落の時と知るべきである。

若し英國の思想家が一齊射撃をして自國批評するから、英國の將來與し易しと觀察するは大なる誤解である。殷鑑遠からず、前獨逸皇帝にある。英國の實力を誤測した政治家や、記者や、軍人は我國にも少くないから、カイゼルのみを笑殺する譯には行かぬ。

十五　英國文化研究の興味

私をして英國文化研究に興味を覺えしむる第一の原因は前に述べた如く、島の日本は島の英國を理解することによつて、一層よく自國を理解し得るがためである。英國の史的研究、我が國の將來に多大の光明を投ずるであらふ。島の日本の國是は島の英國の國是を參照とすべきである。私は大陸に發生したる思想や運動の長所美點を學ぶには人後に落ちざる積りなれども、島國といふ先天的條件の下にあることを一刻も忘れてはならぬ。

私をして英國文化の研究に興味を覺えしむる第二の原因はその內容や成分の如何にも複雜なることである。

『英人の複合的性格は混合的起源をほのめかす。英國の事物は悉く相遠かり、相反する要素の混雜である。言語が混合してゐる。人名に異れる諸國の起原を泄すものがある、――三つの人種と三つか四つの國民――思想の潮流が相搏つ、瞑想と實際的熟練、活動的知力と死せるごとき保守主義、世界的企業と慣例因習　侵略的自由と慇懃なる法律とに對して辛烈な階級立法、戰爭と事件のために全世界に散在したる人民と一人も殘らず思鄕病にとりつかれたる人民、極端の國、――貴族　新憲章要求者（チャーチスト）、ダラムの僧正達と赤裸々の炭坑夫、――除外例を非難することなくして、何物をも賞揚することが出來ず、一方に讃辭の一齊祝砲を放たずしては何物をも痛責することが出來ぬ。』

これはエマソンの英國觀であるが、流石に面白い見方である。矛盾と撞着と平氣に雜居して、或事柄については妥協と提携とが實現せられてゐる國民である。古いものから新しいものが生れる國柄である。

しかもコンコルドの哲人は『英國は實際の諸國民中の最善者である。それは理想的の骨組でない。それは修繕や、附加や、間に合はせ普請を有する。異つた時代に造られた建築である。而も諸君が有する貧弱なる最善である。』と述べたのは正眞正銘、掛値のない告白である。エマソンのこの判斷は大戰後の今日にも適用することが出來ると思ふ。

第三の原因は英帝國の將來に對する好奇心である。自國の百倍の領土を有するこの不思議なる國家と民族の將來は大なる謎である。埃及に獨立を承認して、印度を英國は如何に處分するであらうか。濠洲の將來如何。新なる研究項目は無盡藏である。

第四の原因は英國王室と民主主義との調和がいかにして維持され行くかといふ嚴肅なる事實である。戰爭中はいふ迄もなく、戰後、英國王室は一層國民の崇敬の中心となつたやうにも觀察せらるゝ。大陸の帝國とか王室とかいふものは却つて振はないが、英國王室の繁榮隆昌之と逆行してゐるは大に研究の餘地がある。特に日本人として研究の對象とすることは極めて緊切である。

要するに、日英兩國は文化的の理解がなければならぬ。四國協約が成立して、日英同盟は消滅しても、兩國間の友情は繼續せらるべきである。

* * * * *

一昨年、三月二十三日、夜十一時、我等を載せたる加茂丸は、波靜かなるマラッカ海峽に於て、我が攝政宮殿下の御召艦を奉迎し、且つ奉送した。紀元節の夜、ロンドンを去りて、大陸に向ひ、二月末、マルセーユから海に浮んで、母國に急ぐ遊子にとりて、異國の海上に將來の國父陛下の有史以來、破天荒の御外遊、御渡英の御旅路の祝福を祈り奉ることをえたるは過分の冥加であると感激した。君ケ代と萬歲の連續で春の夜の海の閑寂を破りて、程遠からぬ南の方を進みます御召艦と行き違ひ申し上げた。猶私は船橋に獨り立ちて、御艦の帆檣、帆柱、最後に微かな黑烟が西の水平線のあなたに隱るまで、御見送りを申上げた。長い海陸の御旅程の上に天の恩寵を祈つた。私一人の胸中では殿下の御使命の甚だ大なるものあるを理解しえたかの如く考へ得たからである。

英邁なる攝政宮殿下の英國の御印象は甚だ美しきものがあつたと拜承する。東の島の日嗣の宮は西の島の文化の光りを十分に味ひ給つた。私は心から御成功を祝し、萬里の航程、恙あらせず、御歸朝あそばされたことを感謝した。

英國の皇儲殿下は遠からずこの島を訪ひ給ふ。東西兩皇室の

御親交ますます深くなるであらう。九重の奥の歡待はいふも愚かなれども、我々國民は日本文化が聰明慧智なる遠來の名殿下によりて理解せられ、批判せられんことを冀ふ。彼、我を知り、我、彼を知る事である。文化の默契である。國民性の靈交である。

英國皇太子殿下の代表し給ふ西の島帝國文化の研究に關するこの蕪文一篇を捧げて、殿下の御來訪を歡迎する微意を表する。

戰前及戰時のインターナショナル

林　癸未夫

一　第一インターナショナルの瓦解まで

一八三六年に巴里に滯在してゐた各國の社會革命家が集つて一つの秘密結社を組織したが、其同志は政府の壓迫によつて間もなく逮捕又は追放せられた。其後十一年を經て、倫敦に流寓してゐた此結社の殘黨を中心として共產黨が組織せられ、翌年の一八四八年にマルクスとエンゲルスの合作になる『共產黨宣言』が發表せられ「萬國の勞働者よ、團結せよ」といふ最後の一句により、力強く社會主義者國際運動の曉鐘を鳴らした。

然るに此共產黨は幹部間の意見衝突のため、少數派であつたマルクスは一八五〇年に中央委員を辭し、次で黨の本部を獨逸のキヨルンに移した後、幹部七名は捕縛投獄せられ、黨其者も亦一八五二年に解散した。

一八六二年倫敦に於て萬國大博覽會が開催せられた時、佛蘭西から一群の勞働者を選拔して、見學のために渡英させやうといふ議が起つた。之はリオンの一新聞の發起したものであつたが、ナポレオン三世が此計畫を贊助したので、國費の補助を受けて實行せられることになつた。此佛國勞働者見學團の一行が倫敦滯在中、英國勞働首領等の主唱によつて、八月五日に英佛

獨白四國の勞働代表者の懇親會が開催せられることになつた。其席上に於て英國代表者は一つの國際的勞働團體を組織することに就て列席者の考慮を求めたが、其理由として彼等の陳述した意味はかうであつた。各國勞働者間の意見を交換すべき永續的の一機關を有することは、社會經濟の眞想を明にし、勞働問題の解決を速めるために便利である。將來の勞働關係を如何にすべきかに就ての勞働階級の方針を決定するためには、吾等の間に國家的にも將國際的にも强固なる團體組織を有することが必要であると。

右の提案は列席者一同によつて熱心に贊同せられ、直に其實行委員を選任して宣傳及組織の準備に當らしめることになつた。

併しながら此計畫に對する最初の一障碍は、佛國の法律が此種の團體組織を禁止してゐることであつた。然るに此法律は一八六四年に廢止せられたので、同年の九月二十八日に英佛獨白伊及ポーランドの代表者が倫敦に集會し、其處で正式に國際勞働者聯合會(The International Workingmen's Association)の組織を決議した。之が所謂第一インターナショナルの起源である。

右の倫敦會議は次に開かるべき創立總會に於て決議すべき綱領及會則を起草し、且總會の準備をなすための委員五十名を選擧した。此委員は各參加國の代表者を網羅してゐたけれども、過半は英國人が占めてゐた。然るに事務の進行するに伴れて、委員間の主張に種々なる相違のあることが次第に分つて來た。獨逸委員たるマルクスやエクリウスは最も急進論者で、且委員間に最も勢力があつた。佛國委員中のプルードンは生産組合を以て社會改造の基本とし、ブラングヰは政治的革命を以て唯一の手段とし、ジュール・シモンは教育を通じて理想の實現を夢みてゐた。又委員中にはマッチニの如きブルジョア側の民主主義者もあれば、ランゲやビュッヘルの如き講壇社會主義者もあつた。無政府主義者もあれば、單なる自由主義者、博愛主義者といふべき種類の者も交つてゐた。殊に英國委員の大部分は穩健論者に與してゐた。

右の如き委員間に於ける意見の相違は會の宣言案を議するに當つて益々明瞭になつた。宣言書の起草はマルクスとマッチニの同志たる英國のウオルフとが擔任したが、マルクスは飽くまでも階級鬪爭に重きを措き、ウオルフは主として人道主義に據らうとした。そこで結局宣言案が二通造られたが、委員は多數決でマルクスの案を採擇することにした。茲に於て從來は漠然たる社會改良家の集團であつた本會の輪廓が餘程はつきりとし

て來て、其旗幟は明にマルクス流の社會主義的色彩を帶ぶることになつた。從つて本會に於けるマルクスの地位は普通の一委員に過ぎなかつたけれども、(會長以下の幹部は當時勞働組合が最も發達してゐるといふ理由で、英國人が之を占めた。)實質上會の中心人物は彼であつた。

倫敦會議の翌年ブラッセルで發會式を開く豫定であつたが、宣傳が未だ十分でなかつたのと、白國政府が之を妨害する態度を示したゝめに中止となり、其翌年即ち一八六六年九月三日ゼネヷに於ていよ〳〵創立總會を開催した。此最初の總會の出席者は歐洲各國の代表者六十名であつた。決議事項中最も重要なるものは嚢にマルクスによつて起草された本會の宣言書であつたが、著しい反對もなく可決された。其内容は歷史的に重要であるから左に其全文を譯出する。

惟ふに勞働階級の解放は勞働階級自身によつて實行されなくてはならない。又勞働階級解放のためにする鬪爭は、勞働階級が或特權又は利益を壟斷せんがためにする鬪爭ではなくして、同等の權利と義務とを賦課するために總ての階級を廢止することを目的として行ふ　のである。

生產手段即ち生產資料の獨占者(資本家を意味す)に勞働者が經濟的に倚賴してゐることが、あらゆる形に於ける屈從、社會的不幸、精神的墮落及び政治的隷屬の基礎をなすものである。

從つて勞働階級の經濟的解放が窮極の大目的であつて、政治運動の如きは唯此目的のための手段たるに過ぎないのである。

此大目的のためにした過去のあらゆる努力が失敗に歸した原因は、各國内に於ける各種勞働團體の結合が不十分であつたことゝ各國間に於ける勞働階級の友愛的聯合が缺けてゐたことであつた。

勞働階級の解放は地方的又は國家的にあらずして社會的の問題である。それは現代的の社會狀態を具備する一切の國々を包括する問題である。從つて其解決は最も進步したる諸國の實行的及理論的の協力に俟たなければならぬものである。

目下歐洲の各工業國に於ける勞働階級の覺醒は、新なる希望を喚び起すと同時に、過去の過失を繰返さないために嚴に相警め、今尙連絡なき諸運動を密に結合することの必要を感ぜしめる。

上記の如き理由に基き此勞働者最初の國際會議は次のことを宣言する。國際勞働者聯合會並に之と志を同くする總ての團體及個人は、眞理と正義と道德とを以て、彼等相互間、並に

人種、宗教、國籍の如何を問はず一切の同胞に對する行爲の基礎となすべきことを承認する。本會は各人が自己並に其義務に忠實なる總ての人々のために、人として且市民としての權利を要求するを以て各人の義務なりと認める。義務なき所には權利なく、權利なき所には義務も亦ない。

右の宣言書の外に本會議で決議された重な事項は、本會の會員資格を勞働者に限ること、八時間勞働制を要求すること、勞働組合の國際運動を聲援すること等であつた。

國際勞働者聯合會の第二回會議は一八六七年九月瑞西のローザンヌで開かれた。列席者は七十一人であつた。此會議では國家社會主義者が氣勢を舉げて運輸及通信機關の公有を主張し、獨占事業に反對するの決議を通過せしめた。又生産組合運動は勞働者を二分し、有利なる地位に在る一團が不利なる地位に在る一團を壓迫する結果を生ずるといふ理由で非難せられた。

第三回會議は一八六八年九月白耳義のブラッセルで開かれた。出席者百人。多數を以て土地及鑛山の公有を可決した。

第四回會議は一八六九年九月瑞西のバーゼルで開かれた。出席者八十人で、バクーニン等の率ゐる無政府主義者が、新に入會を認められて參列した。本會議の政治的議案では急進派が勝を制して、僅少の差を以て勞働者の任意的生産組合を非認するの決議を通過したが、經濟的議案では穩和派の主張が容れられて、同盟罷業を是認すると同時に、勞働争議解決の最良策として仲裁和解制度を推賛するの決議をした。

第五回會議は一八七〇年巴里で開會の豫定であつたが、普佛戰爭のために果さなかつた。其翌年の巴里コムミューンの騷動は國際勞働者聯合會の煽動に基くもの丶やうに一般から認められたけれど、事實は數人の會員が之に參加してゐたといふ以上に、會としての直接の關係は何もなかつた。それにも拘らず、此騷動のために第一インターナショナルは殆ど瓦解してしまつた。先づ英國の會員が全部脱退した。次で會員間の意見が、將來の國家及社會組織の根本義に就て二つに分裂して到底和容れないことが明になつた。一方にはマルクスを先驅とする社會民主主義、他方はバクーニンを棟梁とする無政府共産主義が即ちそれであつた。マルクス派は資本の公有と組織的な共同生産を旨とする社會主義的統治は强力なる中央權力機關なくしては實現し得べからざるものとし、バクーニン派は斯くの如き制度を以て恰も暴君と奴隷との相關係を、一層堪ふべからざる形に於て復活するものであるとし、何等の權力の存在しない無政府狀態を以て人類生活の極致とした。

か丶る論爭の間に第五回會議は一八七二年九月和蘭のヘーグ

で開かれた。出席者は六十五名であつたが。バクーニン自身は捕縛される危險があつたので參加しなかつた。本會議は激烈な論爭の後バクニーン一派の會員一部を除名するの決議を通過した。此決議によつて本會は內部の異主義者を驅逐することができた代りに、會共者の勢力も亦漸弱となつた。然るに更に本會に致命傷を與へたものは獨佛會員の感情の衝突であつた。元來本會の創立に最も力を竭し、且會員中の最も多數を占めてゐたのは獨逸人であつたが、彼等がマルクスの反對にも拘らず、アルサス及ローレンの併合を是認する意志を發表したゝめに、佛蘭西の會員は甚しく憤慨して終に連袂脫會するに至つた。かくて本會は事實上玆に瓦解したのである。

第一インターナショナルはかくの如く、僅々數箇年の間に數回の會合を催したゞけで亡びたのであるが、當時世人は其實勢力を餘程誇大に評價してゐたらしく思はれる。アウグスト・ベベルの自傳によると、第一インターナショナルの會員は當時僅に一萬に足らず、其資金の如きは殆ど皆無であつたに拘らず、或ブルジョアの新聞はインターナショナルは歐洲全體に亙つて百萬の會員を有し、豐富なる大資金を蓄へ、ストライキを援助するために、何處へたりとも立所に數萬金を發送することが出來ると記し、相當知識ある人々すら、此種の記事を讀んで其實實を疑はなかつた。普佛戰爭後ビスマルクが二度までも歐洲の列强に通牒を發して、社會主義の鎭壓を目的とする國際會議の開　を企てたのも、全く右の如き誇張の報告に欺かれて、風聲鶴唳に脅されたものと思はれる。

二　第一から第二への過渡期

第一インターナショナル瓦解後の十年間は無政府主義者と社會主義者との軋轢と、同じ社會主義者中の急進派と漸進派との不一致のために國際運動は纏りがつかなかつた。それでも的の會合は大抵每年又は隔年に何處かで行はれてゐた。其中でも一八七七年九月に白耳義のガンで開かれた社會黨會議には、英獨墺及瑞西から四十八名の參列者を糾合することができたが、格別の成果を見ずに終つた。

一八八三年に至つて穩和社會主義者の團體たる佛蘭西社會主義勞働者協會（Fédération des travailleurs socialistes de France）即ち普通に Possibilists と呼ばれる一派は、英國の勞働組合と氣脈を通じて、十月の終りから十一月の始にかけて、巴里で非公式なる國際會議を催した。出席者に七十九名で大部分は英佛兩國人であつた。其席上佛蘭西側の代表者は頻に政治的手段の必要を力說したが、英國側の代表者は之に反對し

て、唯單に勞働組合運動を通じてのみ前進するの方針を固執したので、結局どちら着かずの妥協的決議を通過するに止まつた。

次で一八八六年八月の下旬に巴里で催された國際會議には、英佛兩國以外獨逸、墺太利、匈牙利、白耳義、瑞典、諾威等からも社會黨員又は勞働組合員が馳せ參じて、總計百七十名といふ未曾有の盛會であつた。併しながらかくの如き參列者の增大は、英國の勞働組合主義と大陸の社會主義との懸隔を一層顯著ならしめるに至つた。獨逸代表者の如きは口を極めて英國勞働組合の姑息なる態度を罵つたが、英國代表者は之に答へて、徒に煽動的なる空論を弄ぶことの非を說いた。併し會議の形勢は英國側に不利であつたので、彼等は議事未了中に退場し、其後で決議された事項は、十四歲未滿者の就業禁止、八時間勞働制、夜業禁止、災害豫防、最低賃金、勞働者團結權の承認等の事項を含む國際的勞働立法の制定を要求するの件と、一八八九年七月を期して巴里に再び本會議を招集するの件とであつた。

然るに一八八七年九月スワンシーで開かれた英國勞働組合會議（トレード・ユニオン・コングレス）は、一八八九年の巴里會議の先を越して一八八八年に倫敦に國際會議を招集することを決議した。しかも此倫敦會議では前の巴里會議の覆轍を踏まないために、各國の勞働團體に加盟してゐる者のみの參列を認めて、空論家の社會主義者を排斥するの計畫を立てた。此英國勞働組合の提案は墺獨兩國の社會民主黨を尠からず憤怒せしめ、自國の勞働組合に對して此會議に參加しないやうに勸告せしめたので、此兩國からは一人も出席しなかつた。此會議は同年の十一月上旬に開かれ、英吉利、佛蘭西、和蘭、白耳義、丁抹、伊太利の六箇國から百二十三名の代表者が參列し、最初の勞働組合國際會議であると聲明されたが、其實大陸からの出席者は大部分社會主義者であつた。而して其決議事項の中には國際間の平和を維持するために、各國とも軍備を制限し、戰爭の防止を圖るの必要を高唱した。

以上二回の國際會議によつて、社會主義と勞働組合とを一つの運動に結束することが困難であつて又双方のために利益でないことが明瞭にされた。其結果此兩者が次第に分離して、一つは勞働組合國際聯合會となり、一つは第二インターナショナルを形造るに至つた。

第二インターナショナルの起源は通常一八八九年の巴里會議に置くことになつてゐる。併しながら此會議は次に說くやうに、分裂したる二箇の會議であつて、これが一つの國際團體に結合したのは、一八九一年のブラッセル會議からであつた。

佛蘭西の穩和社會黨（ポシビリスト）は一八八九年七月十四日から、巴里に開

際會議を開催するといふ案內狀を各國に發送した。然るに此案內狀には出席者に對して自國に於ける所屬團體の信認狀を持參することを要求する旨を記してあつた。此一事が端なくも急進派の連中をして自分等を除外せんとする策略であると思はしめたので、彼等は進んで此會議に出席を拒絕すると同時に、彼等の同志を糾合して別箇の國際會議を招集することを決心せしめる動機となつた。

右の兩派の感情の衝突を融和するの目的を以て、獨逸帝國議會に於ける社會民主黨員の斡旋で、一八八九年二月二十八日にヘーグに於て、獨逸、佛蘭西、白耳義、和蘭及瑞典の五箇國から各二名づゝの代表者が集つて、相談會を催したが交渉は終に不調に了つた。其結果急進派は穩和派と同日に同じ巴里に於て別の國際會議を招集することになつたのであつた。

(一)和穩派（ポシビリスト）の會議

穩和派の會議に列席した者は總數六百五十二名で、內四百七十七名は佛蘭西、四十二名は英吉利、三十五名は墺太利、六十六名は匈牙利、三十一名は其他の諸國からであつた。英國參列員中の十七名は勞働組合議會（トレードユーニオン・コングレス）の代表者であつた。最初の議題は勞働者保護立法の促進で、勞働時間の短縮、婦人及少年の保護、夜業の制限、日曜日の休業、最低賃金法の制定等が熱心に要求された。次に本會將來の運動方法としては次のやうな意味の決議案が是認された。

一、各國に於ける社會主義者團體を恒久的な關係の下に結合するの必要を認むるも、各團體の自國內に於て取るべき手段に就ては、其自主權を保持し、他の干渉を受けないこと。

二、總て勞働組合は國家的及國際的なる聯合團體を組織すること。

三、各國に委員を置き、他國との連絡を維持し、互に勞働者の社會的及經濟的狀況を通報し、且之を翻譯して關係部面に配賦するの任務に當らしむること。

最後に本會議は、原料及食料品の獨占及勞働者の搾取を目的とする總ての資本的結合を禁止すべき法律を制定することを、各國政府に要請すべきことを決議した。

(二)急進派（マルキシスト）の會議

急進派の會議に臨んだ者は三百九十一名で、其內二百二十一名は佛蘭西、八十一名は獨逸、二十二名は英國、其他は白耳義、墺太利、匈牙利、露西亞、和蘭、瑞典、諾威、丁抹、瑞西、波蘭、西班牙、葡萄牙、ルーマニヤ、ボヘミヤ、ブルガリヤ及米國からであつた。注意すべきは英國の勞働組合員は唯穩和派會議にのみ臨んだのに、同國の社會主義者は双方に參加したこ

とである。開會の劈頭、無政府主義者の妨害によつて一紛擾を醸したが、彼等を退場せしめてから後の五日間は、各國參列員の現況報告を聽くことによつて費され、最後の一日に於て殆ど討論なしに左の勞働者保護法制定要求の決議案を通過した。

一、八時間勞働
二、十四歳未滿者の就業禁止及十四歳以上十八歳未滿者の六時間勞働
三、連續作業を必要とする工場以外に於ける夜業の禁止
四、衛生上有害なる一切の工業に女子の就業禁止
五、女子及十八歳未滿者の夜業禁止
六、總ての勞働者に對し一週三十六時間の連續休暇
七、健康上有害なる工業及作業方法の禁止
八、交代就業法の廢止
九、物品を以て賃金の支拂ひに代へる制度の廢止
十、苦役制度（スウエチング）の廢止
十一、私立職業紹介所の廢止
十二、官吏及勞働者選出委員より成る工場監督官の設置

次に激烈な討論の題目となつたのは、和蘭の一代表者より提出せられ、佛蘭西代表者の一部によつて支持れさた總同盟罷業（ゼネラル・ストライキ）案であつた。本案は社會革命遂行の一手段として或は戰爭防止の一方法として必要のあつた場合には、國際的總罷業を決行すべきことを申合せやうとするものであつたが、結局多數を以て葬り去られた。

軍備縮少に關して次の意味の決議が通過した。「支配階級及所有階級に奉仕する所の常備軍の存在は、民主主義及共和主義の政治と兩立せざるものであつて、專制的、官僚的及資本主義的統治の表現であり、且反動的クーデターと社會的壓制との機關である。侵略的企圖の結果及原因たり、又國際的葛藤の不斷の脅威たる常備軍は速に之を撤廢し、之に替ふるに民主々義に基く防衛的及平和的政策を以てし、且掠奪と征服とのためにあらずして、獨立と自由の擁護のためにする全國皆兵組織を實施しなければならない。」

最後に特筆すべきは翌年五月一日を以て國際的示威運動を行ふことの決議であつた。曰く「國際的一大示威運動を試むべき日を定め、世界各國各都市の勞働者が一齊に立つて、八時間勞働其他本會に於て決議したる總ての事項を實施すべき公權の發動を要求しやう。而して米國勞働聯合會は既に一八八八年五月一日のセント・ルイス總會に於て、一八九〇年五月一日を以て此種の示威運動を行ふべきことを議決したがゆゑに、此日を以て併せて國際的示威運動を行ふの日と定める。」

無論此決議は單に一年限りの意味であつたが、後に至つて恒久的に改められたのである。

三　第二インターナショナルの結束

第二インターナショナルは一八八九年の巴里に於ける穩和派と急進派との二會議に其端緒を拓いたものではあるが、此兩派が合して一團體に纏つたのは一八九一年のブラッセル會議からであるから、此ブラッセル會議を以て新社會民主主義の最初の會合と看做すのが寧ろ當然である。

ブラッセル會議の出席者は勞働組合と社會主義の兩派の者を包括してゐた。其總數は約三百七十名で、內百八十七名は白耳義、六十五名は佛蘭西、四十名は獨逸、二十八名は英國からであつた。

此會議に於ける最も主要な問題は、プロレタリヤの國際的團結の形態を如何にすべきかといふことであつた。白耳義代表者及佛蘭西代表者中の少數派によつて主張された意見は、勞働者は總て其國籍を無視し、單に「世界の勞働者」として相團結すべきものであるといふ『共產黨宣言』以來の純マルクス主義であつて、其實行手段としては先づ各國に其國の勞働者を代表する一委員會を設け、各國委員が聯合して、國際委員會を形造り、之によつて各國の運動を統一しやうといふ案であつた。然るに之に對し英國代表者及佛蘭西代表者中の多數派によつて主張された意見は、資本の國際的團結に對抗するには、勞働の國際的團結を以てしなければならぬといふ根本觀念に就ては異論はなかつたが、其實行の順序としては先づ各國に於ける勞働組合の發達を促し、之を制限する所の法規を撤廢せしめ、總ての勞働者は必ず何れかの組合に加入し、各所屬の組合を通じて先づ國家的聯合團體を形造り、此聯合團體が相寄つて國際的事務局を設け、各國の狀況報告を交換し、更に機の到るを俟つて國際的聯合團働を組織したいといふに在つた。かくて討議の後結局左の意味の決議が通過した。

現下の經濟組織並に勞働者の政治的權利と生活狀態とを飽くまでも低劣なる地位に据置かんとする支配階級の願望に鑑み、ストライキとボイコットとは勞働階級のために必要缺くべからざる武器である。即ち此武器によつて、第一には勞働階級を物質的に將政治的に誅求せんとする敵手の努力を妨害し、第二には公民社會に於ける勞働階級の社會的及政治的地位を出來るだけ改善する。

併しながらストライキもボイコットも兩刃の劍である。若し之を不適當な場所と時とに於て使用するならば、却て勞働

級の利益を傷けるものである。此故に本會は勞働者が此武器を使用せんとする場合には、先づ良く周圍の狀況を顧慮せんことを勸告する。殊に本會は、勞働者が此鬪爭に勝利を得んがためには、先づ勞働組合を組織し、其數の優勢と其資源の豐富とを保持せなければならないことを確信するものである。

右の如き見解に基き、本會は勞働者が勞働組合組織の强力なる支持に依るべきことを勸告する。併しながら勞働階級の國際的中心團體を組織することは、甚だ願はしいことではあるけれども、目下直に之を實行することの不可能なる種々の困難の存することを考慮し、本會は先づ各國の勞働者が大同團結（ソリダリチ）に至る一般的楷梯として、各國每に勞働團體の中央事務所を設置し、勞資間に葛藤の生じた場合には直に之を各國に移牒し、以て適當なる方法を講ずるの便に備ふべきことを勸告する。

同時に本會は勞働者の團結權を制限せんとする各國政府及傭主等のあらゆる企劃に對し抗議するものである。團結權擁護のために、本會は團結を制限する一切の法令と、此權利の行使を阻害する一切の刑罰との全廢を要求するものである。

次に本會議は、前回の急進派會議に於て決議したる「五月一日（メーデー）」の示威運動を自今每年繰返し行ふことに改むると同時に、此意義も前回決議の如く、單に八時間制其他の勞働者保護立法の要求のみでなく、「勞働者の要求と其大同團結とを社會に公表」すべき、階級鬪爭の宣言」として行ふべきことを決議した。

次に戰爭防止の一手段として攻勢的總同盟罷業を行はんとする和蘭代表者からの提案は拒否されたが、その代りに「軍國主義を廢棄して國民間の平和を確立せんとする一切の企劃は、軍國主義の害惡の經濟的淵源に溯らなければ、畢竟失望であり且徒勞である。」此故に「人間が人間を搾取することを根絕せしむべき新社會組織を創造することによつてのみ、唯軍國主義を廢棄し、恒久的平和を樹立することが出來るのである。從つて戰爭の廢止を希ふ一切の人々は、眞實唯一の平和團體たる此インターナショナルに加入すべき義務を有する。」といふ宣言案を可決した。

最後に箇數賃金制（ピースウオーク）と苦役作業（スウエチング）の廢止及婦人の社會的及政治的權利を男子と同等にすべき兩決議は可決されたが、次回を米國シカゴに開催しやうといふ案は否決された。

四　無政府主義者の排斥

第二インターナショナルの第三回目の會合は一八九三年八月チユーリヒに於て、又第四回目の會合は一八九六年倫敦に於て開かれた。チユーリヒ會議の出席者は英、佛、白、獨、墺、伊及瑞西からの二百九十六名であつたが、其前にブラツセルに開かれた豫備會議に於て、無政府主義者を除外することを申合せてあつたに拘らず、若干の無政府主義者が强ゐて參會したので、之を議場外に放逐した。次の倫敦會議には英、佛、白、獨、墺、匈、瑞西、伊、ルーマニヤ、ブルガリヤ、ボヘミヤ、波蘭、和蘭、丁抹、瑞典、西班牙、葡萄牙、露西亞及米國の十九箇國から參列したが、會議の劈頭に於て無政府主義者排斥の是非が問題となり、三日間に亙る大激論の後、終に多數決を以て彼等の加盟を許さないことに極つた。

此二回の會議に於ける主要なる決議事項の內容は、要するに前の巴里及ブラツセル會議の決議の趣旨を別の言葉を以て繰返したに過ぎなかつた。即ち之を簡單に纏めて述べるならば、一切の生産手段、土地及分配機關を公有することは窮極の理想であるが、其目的に到達する順序としては、先づ勞働者の團結を强固にし、勞働組合の國家的及國際的運動を通じて、立法的手段に訴へることが何より肝要である。從つて勞働者間の政治的意見の相違によつて、經濟的鬪爭のためにする共同活動を阻害されるやうなことがあつてはならない。又勞働組合員を訓育して、社會民主主義の眞理を宣傳することを怠つてはならない。女子に對しても組合加入を許容すべく、又男女の同一作業に對しては同一賃率を支拂ふべき主義を認むべきである。ストライキ及ボイコツトは勞働運動上必要缺くべからざる手段であつて、一國にそれが起つた時には、各國擧つて之を援助するの方法を講じなければならない。八時間勞働法の制定、苦役作業の廢止、團結權制限法令の廢止等は最急要の立法政策と認める。關稅、消費稅及輸出稅の廢止も亦必要である。戰爭の最大原因は資本家の經濟的利害の衝突に在つて、勞働階級の生命と健康とは、絕えず之がために犧牲に供せられつゝあるがゆえに、各國勞働者は一致して資本主義の軍國的壓迫に反抗しなければならない。

五　社會黨員入閣是非論

第二インターナショナルの第五回會議は一九〇〇年巴里に於て、第六回は一九〇四年アムステルダムで開かれたが、此兩會議に於ける興味の中心は、社會主義者がブルジョアと共に同一政府に立つことの是非に關する論戰であつた。各國に於ける社會主義運動の發生以來、社會黨は如何なる場合にも他の政黨と

提携しないといふのが一種の不文律として遵守されてゐた。貴族富豪は自己の信奉する主義の敵である。從つて敵によつて組織せられ又は支持される政府に入つて官職に就くといふことは、畢竟敵に通ずるものであるといふのが彼等多數の信念であつた。然るに社會黨中の穩和分子はかくの如き主張を以て餘りに偏狹に過ぐるものとし、時と事情とによつては政府に入つて、ブルジョアと事を與にすることが、自派の目的を達成する一手段として有効なることもある。從つて絶對に之を忌避することは策の得たものでないと論じた。佛蘭西に於てはポシビリスト、獨逸に於ては「修正派」に屬する人々がそれであつた。

此問題が火の手を揚げる動機となつたのは、一八九九年佛蘭西社會黨の領袖ミルラン（現大統領）がワルデック・ルーソーの内閣に入つて商務大臣に就任したことであつた。殊に此内閣員中には巴里コムミューンの鎭壓に功のあつたガキフエーの如き、平素社會主義者の仇敵視する人物も交つてゐたので、ミルラン及ジョーレ等によつて組織されてゐた獨立社會黨に贊否兩派に分裂し、贊成派はジョーレ、反對派はゲスディー共牛耳を執つて苟くも相讓らなかつた。そこで此問題を一九〇〇年の第二インターナショナル總會に提議して會員全體の輿論に訴へることになつたのであつた。ジョーレもゲスディーも出來るだけ多數の同志を糾合して此會議に臨んだために、佛蘭西の出席者四百七十三名、其他の諸國三百九名、合せて七百八十二名といふ空前の大集會となつた。

然るに議論はかなり沸騰したが、結局獨逸のカウツキーによつて提出された姑息な妥協案、即ち社會黨員が他の政黨によつて組織された内閣に入ることは、本會では未だ曾て正式に禁止も承認もされてなかつたのであるから、之が是非は各國社會黨自らの決する所に一任すべきであるといふ決議の通過によつて一應結末がついた。

然るに此問題は形を變へて次の一九〇四年のアムステルダム會議に再び提起せられた。それは一九〇三年ドレスデンに於ける獨逸社會民主黨の總會に於て、修正派から社會黨員の任官を許容すべき旨を提議して否決されたために、復もや此問題をアムステルダムに持込んで來たからであつた。此會議ではベベル、ジョーレ、ヴァンダーヴェルド、フエリー、アドラー、アンシール、ゲスディー等の錚々たる連中が交々意見を戰はせたが、中にもジョーレは是認派の棟梁として、社會黨員入閣の戰術（ダクチックス）として必要なる所以を力説し、共和國と專制國との間には政情に著しい相違があるから、佛蘭西に於て適當なる戰術も他國に於ては必ずしもさうでないことを述べ、佛蘭西に於ては

ミルランの入閣以來、諸種の社會政策、勞働保護立法が大に進歩しつゝある事實を指摘した。

之に對してベベルは否認論の首將として、妥協政策の不可なるを主張し、獨逸に於ては社會民主黨が徹頭徹尾政府反對の態度を固執せるがために、却て佛蘭西に於けるよりも一層社會政策促進の効果を舉げつゝありと論じ、且曰く政府の形態が共和であらうとも、專制であらうとも、それが資本家によつて支配されて居る以上は、勞働者の利益に反して、其權力が行使されることを免れるわけには行かない。吾等はジョーレ氏及其同志が佛蘭西共和國に忠實であらんことを希望するけれども、若し階級鬪爭が勞資の兩立を許さゞるに至つた場合には、直に本來の非妥協的態度に復歸せらるべきを確信するものであると。かくして採決の結果、ベベルの主張が五票に對する二十五票、棄權十二票(參加國各二票宛の投票權を有す)を以て是認せられ、ジョーレも亦自今此決議を服膺すべきことを聲明した。

一九〇〇年の巴里會議の決議により、各國に於ける社會主義運動の情報を交換し、且總會の事務を處理せしめる目的を以て、國際社會主義事務局(The International Socialist Bureau)をブラッセルに設置することになつた。

六　對勞働組合政策

第七回會議は一九〇七年に獨逸のスツトガルトで開かれた。これは既往の第二インターナショナルの總會中最も重要視すべきものである。出席者總數八百八十四名で、内獨逸から二百八十九名、英國から百二十三名、佛蘭西から七十八名、墺太利から七十五名、露西亞から六十三名、ボヘミヤから四十一名、波蘭から三十名、白耳義から二十七名、匈牙利から二十五名、米國から二十二名、瑞西から二十二名、瑞典から十九名、丁抹から十七名、伊太利から十三名で、其他はセルビヤ、ルーマニヤ、ブルガリヤ、和蘭、諾威、芬蘭、西班牙、濠洲、日本、アルゼンチン及南阿からであつた。

此會議の重要な問題は總會の決議權、移民、對勞働組合政策及ゼネラル・ストライキの四つであつた。第一の問題は、從來の會議に於ける議案の採否は、參列國に平等に二票宛の投票權を與へて、其多數決によつたのであつたが、それは各國の實勢力を無視して却て不公平であるといふ苦情が出て、いろ／＼研究された結果、將來各國の投票數を左の如く定められた。

英、佛、獨、露、墺　各二十票

伊太利　十五票

米國	十四票
白耳義及瑞典	各十二票
瑞西、丁抹、波蘭	各十票
和蘭及匈牙利	各八票
西班牙及諾威	各六票
土耳其	五票
セルビヤ、ルーマニヤ、ブルガリヤ及アルゼンチン	各四票
其他の諸國	各二票

第二の移民問題に就ては、各國とも無制限に他國の勞働者を出入せしむべきであるといふ説と、亞細亞人の如き特殊の國民は制限すべしといふ説とあつたが、結局人種的差別は之を非とし、單に勞働組合にあらざる移民のみを拒絶すべきであるといふ決議が採擇せられた。

第三の對勞働組合政策は未だ曾て附議されたことのない新問題であつた。元來各國とも社會黨運動と勞働組合運動とはほゞ同時代に起つたものであつて、其初めに於ては此兩運動は互に唇齒輔車の關係を保つてゐたのであるが、其内英國と米國とに於ては勞働組合運動の方に重きを措くやうになり、佛蘭西に於ては社會黨運動の方に力を注ぐやうになつたので、此兩運動は次第に隔離する傾向を示して來た。獨逸に於ては社會黨と勞働組合との關係は、他の諸國よりも一層密接であつたに拘はらず、ビスマルクの社會民主主義鎭壓條例の勵行は、自然勞働組合をして自衛上社會黨から遠ざからしめるに至つた。其他の諸國も大抵類似の狀態にあつて、大體に於てインテリゲンチヤは社會黨に與して政治的方面に活動し、勞働者は組合に加入して雇傭條件の改善に努力するといふことが當時一般の傾向であつた。然るに此會議に於て、佛伊米三國の急進派は、左の如き現狀を以てプロレタリヤの大同團結(ソリダリテー)を阻害するものとし、すべからく勞働組合を社會主義化するの急務なることを痛論したので、三國の漸進派は之に反對し、英獨其他の參列員も概ね漸進派に聲援したため、終に十八票に對する二百十二票の大多數を以て次の如き決議案が通過したのであつた。

勞働階級の政治的鬪爭も經濟的鬪爭も、プロレタリヤをして理智的、政治的及經濟的從屬關係から完全に離脫せしめるために、等しく必要とする所である。併しながら社會黨の任務は專らプロレタリヤの政治的鬪爭の方面に在り、勞働組合のそれは主として勞働階級の經濟的鬪爭の範圍に限られて居る。かくの如くにして社會黨も勞働組合も等しくプロレタリヤの解放のために重要なる役目を果すのである。此故に此兩

者は各々其本質に應じて擔當する所の任務を定め、其範圍内に於ては完全なる獨立の活動をなすべきものである。けれども、又一面に於ては兩者の切實なる協働に俟たなければ、到底成功することを得ない階級鬪爭の分野が、着々擴大されつゝあることも疑ふべからざる所である。從つて兩者の關係が密接であればある程、プロレタリヤの鬪爭は一層有利でもあり有効でもあるのである。

本總會は各國に於ける社會黨と勞働組合とが親密なる關係を結び且之を維持することが勞働階級の利益であると確信する。此兩者は相互に道徳的の援助を與へ、其鬪爭に際してはプロレタリヤの自由のために必要なる助力を致すべきである。若し手段の適否に就て意見の相違を生じた場合には、互に所信を討はせて協定を遂ぐべきである。勞働組合は社會主義的精神によつて指導せらるゝにあらざれば、勞働者解放の戰ひに於て、其目的を成就すること能はざるべく、又社會黨は勞働者の生活狀態の向上改善に關する勞働組合の努力を援助し、立法機關を通じて勞働組合の要求及運動を加勢するを以て、其任務としなければならない。(中略)

本總會の信ずる所によれば、勞働組合が社會主義的理想によつて鼓舞されるならば、壓制と搾取に對する彼等の抗爭は一層有利なるべく、彼等の組織は一層鞏固を加へ、彼等の共濟制度は一層發達し、彼等の罷業資金は一層増加し、經濟生活の現狀に關する彼等の理解は一層明晰となり、彼等の犧牲的精神は一層振興せられ、彼の熱心は一層増進するであらう。

(後略)

七 ゼネラル・ストライキ問題

スツトガルト會議に於ける今一つの重要問題は戰爭防止策としてのゼネラル・ストライキの可否如何といふことであつた。此前の一九〇四年のアムステルダム會議は丁度日露戰爭の最中に開かれたので、「各國の勞働者及社會主義者の領解と一致の行動とが世界平和の根本的保證たることを認識し、本會は露西亞の專制政治が戰爭と革命とのために常に脅威されつゝある現在に於て、資本主義並に其治世の罪惡の犧牲となつて苦みつゝある露國及日本のプロレタリヤに對し、本會の友愛的挨拶を送る。本會は各國の社會主義者及勞働者が平和の監視人となり、全力を擧げて戰爭の擴大を防止せんことを希望する」旨を決議し、日露兩國の參列員が演壇上に握手して、互に何等の敵意をも有たないことを示した時には、破れるばかりの大喝采を博した。然るに日露戰爭後間もなく有名なるモロツコ事件が起つて獨

佛兩國の關係が危機に瀕し、各國とも軍備の充實に焦慮して、何時大戰爭が勃發するかも知れないやうな氣分が次第に濃厚になつて來たので、スツトガルト會議は既に每回繰返された「軍國主義と帝國主義に反對する諸決議を確認し、併せて軍國主義に反對する戰ひは、一般的階級打破の戰ひと手を携へて進展すべきものであることを新に宣言」し且「戰爭は支配階級が自己の利益を增進し、プロレタリヤの注意をして階級鬪爭以外に轉向せしめ、併せて彼等の國際的團結を防止せんがため、國民的偏見を利用する」ことによつて發生するものなるがゆゑに、「戰爭は畢竟資本主義の本質の一部」をなすものであつて「資本主義が倒壞するか、さもなくば軍備擴張の結果として人力と財力との上に賦課される犧牲が、到底國民の堪へ忍ぶべからざる程度に上り、國民自身が起つて之に反對し、資本主義を一掃するに至らなければ、到底之を根絕することのできないものである。此故に軍隊の大部分を構成し、且最大なる物質的犧牲を拂ひつゝある勞働階級は當然戰爭の敵である。戰爭は實に社會主義的基礎の上に新經濟組織を創造し、總ての國民の大同團結を示現せんとする、勞働階級最高の目的に背馳するものである」といふことを高唱したのであつた。

此決議の趣旨に對しては何人も異論はなかつたが、唯現實に開戰の危機に臨んだ時、各國の勞働者は如何なる態度に出づべきかといふ實際問題に就ての議論が興味の中心であつた。就中戰爭防止策として各國勞働者のゼネラル・ストライキ斷行の提案が最もやかましい論點であつた。

ゼネラル・ストライキ問題は既に一度、一八九一年のブラツセル會議の際、和蘭社會黨の領袖ニユーウエンヒユースによつて提案されたが、當時此案は無政府主義の宣傳と曲解されたので、議場で冷遇せられ、別にウヰルヘルム・リーブクネヒトの提出した軍國主義反對の決議のみが採擇せられた。

其翌々年のチユーリヒ會議に於て、ニユーウエンヒユースが再び此提案をした時、リーブクネヒトは戰爭は國民の多數が社會主義者となつた時始めて之を根絕することを得べきものであつて、ストライキの如きは只少數の不幸なる犧牲者を邪神(モーロク)の壇上に捧げるに過ぎないと論じて、再び之に反對し、佛蘭西參列員の多數が之を支持したにも拘らず重ねて否決せられたのであつた。

然るに此主張は容易に放棄されなかつた。スツトガルト會議に先立ち、佛蘭西社會黨總會は此問題を討議し、ジヨーレ、ヴイヤンの如き穩和派も亦之に贊成したために、ゲスデイー等の反對はあつたが、多數を以て可決せられた。其結果此問題はス

ツトガルトに移され、此度は　蘭西社會黨の名を以て提案されるに至つたのである。其提案の趣旨は軍國主義は「專ら勞働階級をして政治的に且經濟的に資本階級に隷屬せしむることを目的する國家の武裝」であるからして、外國の攻撃から國家の獨立を防衛するがためには、强制兵役制度の施行によつて勞働階級を武裝せしめることが必然の結果となる。此故に各國の勞働階級は「議會の反對、輿論の喚起、ゼネラル・ストライキ、叛亂其他一切の手段を盡して、社會主義者の國家的及國際的活動により、戰爭の防止に努むるを以て其義務となすべきである」といふにあつた。

此提案に反對の急先鋒は獨逸の社會民主黨を代表するベベルであつた。彼は先づ『共產黨宣言』に於ける「プロレタリヤは祖國を有たない」といふ一句を否認してから言つた。「祖國は本來支配階級に屬するよりも、より多く無產階級に屬するものであるがゆゑに、吾等は祖國に對して戰つてゐるのではなくて、支配階級の利益のみを擁護するが如き祖國の現狀に對して戰つてゐるのである。文化生活は祖國の言語を用ひて、完全なる自由と獨立とを基礎とする場合に於てのみ唯之を發達せしめることができるのである。此故に他國の支配を受けつゝある人民の努力は、常に自由と獨立のために致さるゝのである。更に彼は實際問題に入つて、戰時獨逸に於てゼネラル・ストライキを行ふが如きは絕對に不可能であつて、若し之を行はゞ社會民主黨は叛逆罪の汚名の下に其存在を失ふに過ぎないであらうと結論した。

佛蘭西のジョーレは之に答へて、吾等の希望は祖國の破滅にあらずして、祖國を無產階級の利益のために改造せんとするに在る。無產階級の利益は無產階級自身によつて開拓されなければならぬ。從つて戰爭は無產階級が全力を奮つて之を防止すべきものであるとし、「萬一獨佛間に戰端が開かれた時、兩國の勞働階級が自己の慾求のために、其力を極度に使用することとなしに、資本家の福利のために相殺傷するが如き事態を、吾等は玆に認容することができるのであるか。」と叫んだ。

此兩派の主張は到底相容れなかつたので結局「本總會は軍國主義に對抗する勞働階級の活動方法に就き一定の樣式を示すことはできない。何となればかゝる活動は時に應じ又各國社會黨の內情に據り必ず變化すべき筈のものであるからである。併しながら軍國主義と戰爭に反對する勞働階級の努力を極力昂進協調するを以て、吾等の義務としなければならない。」といふ妥協的の決議を通過するに止まつた。

然るに此問題は未だ決着に至らないで、次の一九一〇年のコ

ーペンハーゲン會議に於て再び上議された。此會議の參列者は八百九十六名といふ空前の多數で、各國社會黨の右翼に屬する人々が比較的多くを占めてゐたために、失業者救濟、消費組合といふやうな地味な論題が寧ろ熱心に討議されたが、其中に交つてゼネラル・ストライキ案が英國のケア・バーデイーと佛國のヴイヤンの名を以て提出せられ、復もや獨逸の社會民主黨に挑戰するの形となつた。先づ英國のラムゼイ・マクドナルドは原案に贊成して獨逸の反對論を攻擊し、獨逸のレーデブールは之を反駁したが、今度は之を否決もせず又妥協的決議にも變形しないで、各自宿題として研究し、更に一九一四年八月二十三日にウヰンナに開會の豫定なる次の總會に於て討論することに定めたが、此ウヰンナ會議は開會前數週間前に勃發した大戰のために終に實現しなかつたのである。

八　開戰前の非戰運動

「萬國の勞働者よ團結せよ」といふ標語を發して、數十年來プロレタリヤの國際的大同團結を企圖し、資本主義を以て共同の敵とし、軍國主義を否認し、極力戰爭を回避すべきことを高唱しつゝあつたインターナショナルの言論の實價が試驗せらるべき時は次第に近づいて來た。コーペンハーゲン會議の翌年モロッコ問題は再び歐洲外交の危機を誘發して、獨佛英三國の社會主義者が其「インターナショナル魂」を發揮すべき機會が提供された。一九一一年七月四日、伯林の社會民主黨機關新聞『フオルウエルツ』は「モロッコに於ける資本主義的利益を擁護するために國民の血を流さんことを欲する武斷派」に對して抗爭するために、社會主義者の大集會を催すべきことを提言した。其後數日を經て佛蘭西の社會黨から獨逸の同僚に對しスツトガルト會議に於ける決議の趣旨を實行すべきことを求めたるに對し、獨逸の社會民主黨は之を承諾すると同時に、「モロッコは佛獨兩國勞働者の骨には値しない」と附言した。越えて八月十七日倫敦に於て勞働黨及勞働組合議會(トレード・ユニオン・コングレス)の聯合示威運動が催され、平和を要望するの意志を表明した。九月三日伯林に於ては十餘箇所に於て開戰反對の大集會が催され、約五十萬の會衆が參列して、帝國主義の害毒を攻擊し、社會民主主義はあらゆる手段を竭して戰爭に反對すると宣言した。是等の諸運動が各國の政治家と軍人との上に如何なる効果を有つたかは固より不明であるが、ともかくモロッコ問題は外交上の手段によつて解決せられたのであつた。

續いて起つたバルカン戰爭はやゝもすれば歐洲列强をも渦中に捲込みさうな形勢を示したので、之が防遏策を講ずるために、

一九一二年十一月瑞西のバーゼルに於て第二インターナショナルの臨時會議が開かれた。それは戰前に於ける最後の總會であつた。而して「國際的社會主義運動の最も重要なる任務は獨佛英三國の勞働者の擔任する所なるを以て、各自其政府に要請して露墺何れに對しても其援助を拒み、バルカンの葛藤に對しては一切無干渉主義を取り、嚴正中立の態度を維持せしむるやう」努力すべきことを盟約した。

幸にもバルカン戰爭は歐洲の大火とならずに濟んだが、併し歐洲列強間の軍備擴張熱は之がために一層亢進した。獨逸政府は一九一三年に陸軍常備兵十三萬六千人を增員するの案と、其財源として所得稅、相續稅等を增課する案とを議會に提出して協贊を求めた。當時社會民主黨は陸軍擴張案には擧つて反對したが、增稅案の贊否に就ては議論が二派に分れ、フォッシャー、シャイデマン等の多數派は此案を以て彼等多年の主張たる直接稅本位に　るの第一步なるがゆゑに之を是認すべしと言ひ、少數派のガイエル、レーデブール等は他方に於て軍備擴張に反對しながら、其財源たるべき增稅案に贊成することは矛盾するから之を否認すべしと唱へた。惟ふに多數派の眞意は國民に人望ある陸軍擴張案に反對することによつて、次の總選擧に黨員の減少することを虞れて黨略上不徹底な態度に出たので、シャイデマンの如きは同年夏の社會民主黨の總會に於て「非軍國主義の宣傳は既に消滅した。新に軍備擴張反對運動を起すことは最早不可能である」と公言した位であつた。

當時佛蘭西の社會黨は三年兵役制に對して勇敢に戰つたが、固より之を抑止すべき力は有たなかつた。記憶すべき一九一四年の夏に入つて、サラエボに於ける墺國皇儲の兇變は各國政治家の神經を極度に過敏ならしめた。しかも其年の八月下旬には墺國の首都に於て、第一インターナショナル誕生後滿五十年を紀念すべき國際社會主義者總會に於て、戰爭防止策としてのゼネラル・ストライキ案に最後の決定を與へるべきプログラムが既にできてゐた。此總會の準備として佛蘭西の社會黨は七月十五日から三日間會議を開いてゼネラル・ストライキ案を討議したが、「各國勞働者の自發的ゼネラル・ストライキは、民衆に對する非戰宣傳と相俟つて、勞働者の手中に存する戰爭防止策中最も有効なるものと信ず」る旨を、千百七十四票に對する千六百九十票を以て可決し、之を以てウヰンナ會議に臨むつもりでゐた。

然るに此決議後一週間を經ない中に、墺國の最後通牒はセルビヤに向つて發せられた。大戰亂は忽ち危機一髮の裡に切迫した。此形勢の劇變に於いて、國際社會主義事務局は七月二十九

日ブラッセルに獨佛英露伊白等の社會黨領袖の協議會を催し、八月二十三日のウヰンナ會議を繰上げて、八月九日巴里で催すことに變更し、主として大戰防止の手段を議すべきことを申合せた。其夜白耳義勞働黨の「戰爭に反對する戰爭」の大示威運動が行はれ、英國のケヤ・ハーディー、獨逸のハーゼ、佛蘭西のジョーレ、露亞のルーバノウヰッチ、白耳義のヴンダーヴエルド其他各國社會黨の名士連が各々雄辯を競うて軍國主義の罪惡を數へ、各國勞働階級の團結を說き、自由と正義と人道とのために此戰爭を防止することの必要を痛論熱唱して止まなかつた。

戰爭反對運動は獨りブラッセルに止まらず、開戰前一週間內に歐洲各國の社會主義者や勞働團體によつて行はれた類似の運動は恐らく數百を算へたであらう。先づ戰爭の火元たる墺太利の社會黨は、各大都市に於て大集會を催し、殊に帝國議會に於ける一團は激しく政府の武斷的外交政策を攻擊し、「如何なる必要も、如何なる特權も、國家が平和的解決の道程より脫出することを許すべきものでない。平和は人道の至善であり、諸國民の理想である」と論じた。ブダペストの一社會黨機關新聞は「戰爭の叫びは唯惡魔の口から出づる」と宣言した。

獨逸に於ても多數の都市で戰爭反對の氣勢が揭げられた。社會民主黨は七月二十五日宣言書を發して、熱烈なる語氣を以て獨墺兩國の政治家を非難し、「獨逸政府は極力墺太利政府を制肘して平和を維持するに努むべく、萬一破廉恥なる開戰を防止することができないならば、獨逸は必ず武裝して戰渦に投ずることを避くべきである。獨逸兵士の一滴の血潮たりとも墺太利の支配階級と帝國主義的營利業者の慾求の犧牲として流されてはならない。」と痛論した。又『ウオルウエルツ』は墺太利の最後通牒を攻擊し、かくの如墺國の企圖を未然に抑止しなかつたといふ理由で自國政府を非難し、よろしく英國の提議に係る四大國の調停會議案を容るべきであると論じた。ヴルテンベルグの社會黨は平和維持のためにゼネラル・ストライキをも辭せないといふ決議を發表した。ハンブルグ、ライプチヒ、スツットガルト、ブレーメン、キョルン其他の大都市に到る處盛なる非戰運動が行はれたが、殊に首府伯林に於ては七月二十九日の一日だけでも約三十の非戰的集會が催され、其一つには約七萬の大衆が參會して、警官隊のために解散せしめられた。

佛蘭西の社會黨も亦最後の瞬間まで參戰反對の努力を弛めなかつた。七月二十七日にはセイヌの勞働組合聯合會が戰爭反對の大示威運動を行ひ、警官隊と衝突して社會黨代議士の一人が拘引せられた。翌二十八日には社會黨は長文の宣言書を發し、

「今や憎るべき罪惡は世界を脅威してゐる。吾等はインターナショナルと努力して之に抵抗しやう。かくの如き罪惡の可能それ自身が全政治組織の破滅である。」と叫んだ。

英國に於ける事態も亦同樣であつたが、唯戰爭反對の理由として擧げた所は主として專制主義の露國との提携を嫌惡したからであつた。七月三十一日インターナショナルの英國委員はハインドマンによつて起草された宣言書を發表し、政府に强要するに中立の維持を以てし、露國の侵略主義と專制政治とを後援するなからんことを警告した。其後八月四日の英國宣戰の日に至るまで、連日勞働黨と社會主義者との聯合示威運動が行はれ、アーサー・ヘンダーソンやケヤ・ハーディー等も「露國の成功は世界の呪詛である。」と力說した。

伊太利、露西亞、和蘭、白耳義、瑞西等の諸國に於ても社會黨の非戰運動は連日熱心に行はれた。

併しながら是等一切の努力は畢竟徒勞であつた。第二インターナショナル成立以來幾度か繰返された戰爭反對宣言の累積は、各國民の傳統的なる愛國心の熱焰によつて、一瞬の間に灰となつた。インターナショナルはリエージュの陷落と共に崩壞した。而して各國の勞働者は彼等が多年呪詛して息まなかつた資本主義的國家を擁護するための戰場に於て、いたましくも同國の兄弟と相殺戮しなければならなかつた。

九　戰爭を是認したる各國の社會主義者

開戰は一朝にしてインターナショナルの精神を奪ひ去つてしまつた。吾等は各國の社會主義者が如何なる態度と言葉とを以て、此戰爭を是認したかを一瞥しなければならない。

八月三日、獨軍の先鋒隊がリエージュ砲撃の眞最中、白耳義の社會黨は次のやうな宣言書を發表した。「軍國主義者の暴戾に反抗して祖國の中立を防衞し、祖國の存立を擁護するは、歐洲に於ける民主主義と政治的自由の根源に忠實なる所以である。……併しながら吾等はインターナショナルに屬する。吾等は合法的なる個人及國家の防衞と矛盾せざる限りに於て、友誼的且人道的でなくてはならない。」かくて國際社會主義事務局（セクレタリー）主事たるヴンダーヴェルドは内閣の一椅子を占め、其率ゐる社會黨を擧げて、最後まで政府に忠實であつた。ゾンバルトは其著『社會主義と社會運動』の中でかう述べてゐる。「ヴンダーベルドは我軍が白耳義に侵入するや否や、眞に吾等に對して熱烈なる愛國心の煽揚を開始し、諸國を巡訪して蹂躙されたる祖國のために同情を喚起し、『獨逸の野蠻』に對する憎惡心の激成に努力した。」

獨逸の社會民主黨は帝國議會に百十の議席を占めてゐたが、八月三日議員總會を開いて最初の軍事豫算に協贊を與ふべきか否かを討議した時、ハーゼ、リープクネヒト等十四名だけが之に反對し、其他の議員は皆之に贊成した。後に非戰派に轉じたベルンシュタインの如きも當時贊成派に屬してゐた。カウツキーの如きは議員ではなかつたが、黨の領袖として非戰論を主張した一人であつた。併し結局黨議によつて除外例を許さず與黨一致白票を投ずべきことに申合はせた。其翌日院内總理ハーゼは帝國議會の壇上に自黨を代表して、「内氣な娘が男に抱擁されるのを嫌ふやうな態度」を以て贊成演説を試みた。彼は社會民主黨は決して開戰の責任を分擔するものではないが、「吾國民の獨立は露國の勝利によつて危殆に陷るであらう。吾等は此危險から遁れ、祖國の文化と獨逸とを擁護する義務がある。此故に吾等は戰爭を是認する。此危機に當つて獨逸國はすべからく吾等に信頼すべきである。」と述べ、更に之に附け加へてから言つた。「自國の獨立を防衞すべき權利を承認すると同時に、他國の征服を目的とする戰爭に反對するのがインターナショナルの基本教義である。吾等は此教義を保持せんとするものである。此故に吾等の敵が講和の意志を表示すると同時に戰爭を終熄し、速に平和を恢復して善隣の誼を結ぶことを念としなければならない。」

佛蘭西の社會黨は八月六日代議院の戰時豫算に協贊を與へ、領袖のサムバーとゲスデイーが入閣した。そして「國民は祖國の生存と名譽のためのみならず、自由と、共和と、文明のために戰ふものである。吾等は帝國主義の壓制と戰爭の慘禍から世界を救濟して、恒久の平和を望み、萬人の權利を尊重せんことを目的として戰ふものである。」と宣言した。八月二十八日の社會黨總會はサムバーとゲスデイーの入閣を是認し、更に數箇月の後領袖アルベール・トーマは軍需大臣の要職に就いた。

英國の獨立勞働黨は開戰後直に宣言書を發して政府の外交政策を攻撃し、其後に至つても非戰論を更めなかつたが、ハインドマンの率ゐる英國社會黨の一部は早くも戰爭是認に傾いた。勞働黨に屬する下院議員は八月六日の其の自黨會議では、此戰爭を以て列強間の勢力均衡を目的とする各國政府の陳套なる外交政策の犯せる誤謬なりとする決議を可決し、其趣旨を院内總理のラムゼー・マクドナルドが下院に發表することに申合せたが、同じ日の夜に至つて多數の黨員は急に意を飜して之に反對し、其爲にマクドナルドは進退に窮して院内總理を辭し、アーサー・ヘンダーソンが之に代つた、而して數日の後勞働黨は首相アスキスの提案を容れて、志願兵募集計畫の實施に協力するこ

とになつた。

勞働組合議會(トレードユニオンコングレス)の中央委員は九月に宣言書を發して、此戰爭は「自由にして拘束なき民主的政府の保持のため」にするものだと言ひ、十月十四日下院勞働黨の多數派は「獨逸の勝利は歐洲に於けるデモクラシーの滅亡を意味し、勞働階級の政治的及經濟的發達は之がために破壞されるであらう。」と聲明して自派の態度を辯護した。

かくの如く列强の社會主義者が各々祖國の自由と獨立の擁護を名として、戰爭を是認することに忙しかつた間に、只獨り異彩を放つたのは露國の議會(ヅーマ)に於ける十四名の社會民主黨員であつた。彼等は飽くまでも戰爭を非認し、軍事豫算の票決には棄權して退場した。八月八日の議場に於て彼等は大膽に「露國の勞働者の感情は全歐洲のプロレタリヤと共に在り。」と聲明し、戰爭は各國支配階級の膨脹政策の賜物なるがゆゑに、プロレタリヤは團結して此攻擊から世界の文明を擁護しなければならないと痛論した。かくて數箇月の後彼等の仲間の五名は軍隊に叛逆を宣傳したといふ理由で逮捕された。

十　徐々に覺醒したるインターナショナル魂

戰爭によつて國家主義の魔睡劑を頓服せしめられた各國の社會主義者は、戰爭の長引くに伴れて徐々に其惡夢から覺めかけて來た。しかも之を覺すことの必要は先づ中立國の社會主義者によつて感ぜられた。開戰後一箇月を經た頃、米國と瑞西の社會黨員によつて企てられたインターナショナル會議の計畫は、其最初の試みであつたが、無論交戰國の同僚からは一顧も與へられなかつた。開戰の翌々月國際社會主義事務局はブラッセルからヘーグに移されてユイスマンが其主事となつた。翌一九一五年の二月英佛露白四箇國の社會黨會議が倫敦に開かれ、ケヤ・ハーデイーが之を司會して、資本主義的帝國主義を攻擊し、獨軍の白國侵入は獨立國の生存權を蹂躙するものであつて、獨逸帝國主義の勝利は歐洲の自由と民主主義の破滅を意味するがゆゑに、吾等は獨逸國民を敵とせざるも、獨逸政府とは飽くまでも戰はざるべからずと宣言し、白耳義の領土保全及損害の賠償、波蘭の獨立、各國に隸屬せる諸民族の自決を以て平和の基礎とすべきことを要求し、且最後に「吾等は勝利によつて各國民間放の事業を完成するまでは、此戰ひを繼續する決心を有するものであるけれども、併しながら同時に防禦のための戰ひを侵略のための戰ひに變形せんとする計畫に對しては極力反抗せなければならない。何となればそれは必ずや新葛藤を造り、新憂患

を醸し、各國民に軍備と戰爭との二重の災禍を蒙らせるに至ることと疑ひないからである。」といふ意味の宣言書を發表した。

獨逸、墺太利、匈牙利三國の社會黨も亦一九一五年四月ウヰンナに會議を開いたが、之は唯戰後に於ける國際關係の基礎として、强制的仲裁制度、外交政策の民主化、軍備の制限及民族自決權等を主張したに止まつた。

マルヌの戰敗後、獨逸の社會民主黨中の非戰派に十七名に增加したが、それでも一九一四年十二月の第二次軍事豫算には、リープクネヒト一人を除くの外は全部協贊を與へた。此リープクネヒトの行動は大に物議を醸し、勞働團體の首領たるレギーンの如きは彼を除名すべきことを强硬に主張した一人であつた。然るに翌年の二月には普魯西議會に於ける社會民主黨員十名中六名までが非戰派（リープクネヒトも其一人）となり、公然議場に於て戰爭反對の宣言を朗讀した。三月には第三次の軍事豫算が帝國議會に提出されたが、其當時非戰派は既に三十名に增加し、其大部分は票決を棄權して退場した。其後間もなくリープクネヒトは社會民主黨から除名せられ、五月一日には多數の勞働者集會が官憲によつて禁止せられ、ハーゼは院内總理を辭してエーベルトが之に代り、政府は非戰派の公開演說を禁じ、印刷物を押收し、家屋搜索を行ひなどとして、容捨なく社會民主黨中の少數派に壓迫を加へた。それにも拘らず多數派は飽くまでも政府擁護の態度を改めなかつたので、社會民主黨は截然二派に分裂し、互に罵詈を交換するやうになつた。六月十九日少數派の領袖たるハーゼ、カウツキー、ベルンシュタインの三名は連署して一篇の宣言書を公表し、開戰當時社會民主黨は此戰爭を以て防禦的のものだと信じてゐたが、今やそれは帝國主義の侵略行爲であることが明白になつたから、吾黨にして其主義に忠實であるならば、速に態度を一變して戰爭を支持することを止むべきであると聲明した。而して八月下旬の第四次軍事豫算の審議に際しては、非戰派が又もや三十六名に增加した。

其翌月即ち一九一五年の九月に瑞西のチムメルワルドに於て、開戰後最初の交戰國社會主義者會議が開れた。此會議に參加せし者は佛蘭西からは二名、獨逸からは十名の左翼社會主義者で、其他は波蘭、ルーマニヤ、ブルガリヤ、和蘭及スカンヂナビヤ諸國からであつた。英國の獨立勞働黨と社會黨とは代表者を送る意向であつたが、政府が旅劵を與へなかつたゝめに果さなかつた。而して此會議は國民間の戰爭を終熄せしめる手段として、速に各國に於て階級鬪爭を鼓吹すべしといふ意味の決議をした。

第二の社會主義者國際會議は一九一六年の四月に瑞西のキエンタールで開かれた。出席者は佛蘭西から三名、獨逸から七名、瑞西から三名、其他は伊太利、瑞典、セルビヤ等總計約四十名であつたが、交戰國から來た者は何れも個人の資格で、正式に所屬の黨派を代表した者は誰もなかつた。レニンは露國の、カール・ラデックは普領波蘭の同志を代表して又之に臨んだ。獨逸のハーゼ、カウツキー、ベルンシュタインも亦招待されたが、ベルンシュタインは回答を送らず、ハーゼ、カウツキーは此會議が國際社會主義事務局の催しでないといふ理由で出席を謝絕した。

キエンタール會議に於ては獨佛代表者間に戰爭の責任に關して激論があり、又レニン、ラデック等の極左派と瑞西代表者との間に意見が衝突し、インターナショナルと此會議との關係に就ても異論が出て、喧騷の裡に數日を經過したが、それでも最後には、世界各國の無產階級に對し、階級鬪爭を鼓吹し、國際戰爭の終熄に努力すべきことを勸告する意味の宣言を可決し、レーデブール(獨)ブールデロン(佛)レニン(露)の名を以て之を公表した。

瑞西に於ける右の二會議は參列者が獨佛兩國とも社會黨中の少數派に屬する者のみで名實共にインターナショナルの總會と見るべきものでは固よりなかつた。各國社會黨の多數派は國民一般の愛國的熱情に煽揚されて、まだかくの如き會議に臨むの用意を有たなかつたのである。然るに戰爭が意外に永續して交戰各國民の慘苦ますます加はるに伴れ、各國の多數派も次第に此大戰の眞意義を彼等固有のプロレタリヤ的利害から冷靜に打算しなければならないことに氣づいて來た。而してこれは又彼等の敵愾心を幾分かづゝ緩和して行つたので、インターナショナル魂復活の希望は戰爭の中頃から次第に芽ぐんで來たのである。

一九一六年八月ヘーグで中立國の社會黨會議が催されて、滿場一致インターナショナル總會開催の計畫を進捗すべきことを決議した。而して一九一七年の初め國際社會主義事務局をヘーグからストックホルムに移して、瑞典社會黨の領袖ブランチングが其主事になつたので、其年の六月ストックホルムに於て、和蘭及スカンヂナビヤ諸國の社會黨幹部が主催者となり、非公式なるインターナショナル總會の準備會議を開くことになつた。英國の勞働黨及佛蘭西の社會黨は此會議に出席を拒絕したが、獨逸では社會民主黨も、それから分離した獨立社會民主黨も等しく之に贊同して、多數派からは總理エーベルトを初めシャイデマン、ミユラー、バウエル、ダビッド、レギーン等の幹

部連中、少數派からはハーゼ、カウツキー、ベルンシュタイン等の中心人物が打揃つて準備會議に臨んだのであつた。

此會議では主として來るべき總會の議題たるべき講和條件に就ての意見を交換したのであるが、獨逸多數派は「吾々は合理的なる講和を要求する。即ち開戰に對する責任の穿鑿は一切之を水に流し、賠償金は一切支拂はない。各國の領土は開戰前の狀態に復歸する。但アルサス・ローレンは獨逸聯邦の一員とし獨領波蘭には單に母語の使用を公許し、愛蘭、埃及、印度、モロッコ、芬蘭、トリポリ、朝鮮々各々獨立せしめる。」といふ頗る自國に有利な主張をして、中立國の社會黨員を啞然たらしめたが、之に反して少數派は「民主主義的精神を以て平和を克復し、正義を確立するがためには、飽くまでも戰爭の責任を究明するの必要がある。又吾々も原則としては無併合無賠償を主張するが、歐洲の地圖は民族自決主義を基礎として之を改訂することを要する。即ち波蘭の獨立を承認し、アルサス・ローレンは人民投票の結果に任せ、白耳義の受けた損害は開戰當時の獨逸政府の聲明に從うて其復舊の責に任ずる。」と主張した。

此準備會議は各國が獨逸社會民主黨の意見を知るための好機會でもあつたが、それよりも獨逸の多數派社會黨をして其思想に一轉化をなすの必要を痛感せしめるために一層有効であつた。彼等は此時開戰後初めて海外の空氣に觸れて、如何に獨逸が中立國の間にも不評判であるかを明にし、從來の態度の維持し難いことを悟つたのであつた。此間の消息はシャイデマン自らが此會議後間もなく『フォルウェルツ』に寄せた一文によつても善く察せられる。其一節に曰く、「今回會議に出席して見ると、意外にも我國は反動主義の巨魁として四方八方から非難せられ、之に反して英米佛は世界平和の擁護者として讃美されてゐる。……吾々は現在以上に殺戮を繼續するに忍びない。今回のストックホルム出張の結果として、吾々の確固たる信念となつたものは、獨逸も民主主義化しなければ到底駄目だといふことである。……吾々は斷言する。我國の政治を大々的且急進的に改革することは實に刻下の急務である」と。

然るに此ストックホルム準備會議と殆ど同時に、露國勞兵會政府は、同年の八月十五日を期してストックホルムに世界各國の社會黨及勞働團體總會を招集したいといふ正式の案内狀を各國に發送した。其結果國際社會主義事務局の計畫しつゝあつたインターナショナル總會は、自然露國政府の招集した會議と同一のものとして開催せられる譯になつたのであつた。

露國政府の案内に對しては、英國の勞働黨は夙にインターナショナル總會の準備會議にも出席を拒んだと同樣に、初めは之

を應諾するの意志を有たなかつたのであるが、其後間もなく軍事内閣の一員であつた勞働黨の領袖ヘンダーソンが英國政府の代表者として露獨間の單獨講和を阻止する目的を以てペトログラードに差遣せられた。然るに此旅行はストックホルム會議の反對者であつたヘンダーソンをして、其熱心な贊成者に改宗せしめた。彼は歸英後、英佛からの參加なしに、露獨の社會黨員を會商せしめることの危險を說き、單純なる意見の交換に止めるといふ條件で此會議に參加することの有利なることを勞働黨内部に說いた。其結果八月十日の同黨特別總會は五十五萬票に對する百八十四萬六千票の多數を以て、ストックホルム會議參加を可決したのであつた。然るに政府は此決定を以て國家の利益を裏切るものと認め、旅劵の下附を拒むと同時に、首相ロイド・ジョージは公然ヘンダーソンの不信を攻擊したので、彼は直に辭職した。其翌月彼はブラックプールで開かれた勞働組合議會に於て先例なき熱心なる歡迎を受けたが、其時の演說の中で彼はかう言つた。「將來勞働階級の國際運動は武力戰爭のみならず經濟戰爭をも不可能ならしめるであらう。殊に吾々が過去三箇年間の苦き經驗を記憶するならば、誰しもかゝる力の必要を感じない者はないであらう。」と、而して議會は中央委員をしてインターナショナル總會の實現に協力せしむべきことを決議し、且此種の會合に出席する者に旅劵を下附せざる政府の態度を激しく攻擊したのであつた。

十一　聯合國社會黨及勞働組合會議

各國政府の干涉によつてインターナショナル總會の開催は到底不可能であつたので、一九一八年の二月倫敦に於て聯合國の社會黨及勞働組合會議が開かれた。此會議に代表者を送つたのは、英國の勞働黨及勞働組合議會、佛蘭西の社會黨及C・G・T、白耳義の勞働黨、伊太利の社會黨であつた、露國の過激派政府は此會合がインターナショナルの主義に一致しないといふ理由で、穩和社會黨員の參列を許さなかつた。又米國勞働聯合會は案内狀の遲着を理由として參加しなかつた。

此倫敦會議は『戰爭の目的に關する覺書』と題する長文の宣言書を發表した。其内容を略述すると、先づ民主主義の確立、帝國主義の非認、國際聯盟の成立、軍備の撤廢を要望し、講和條件としては獨逸が損害賠償を承認すること、アルサス・ローレンの所屬は住民の一般投票に依ること、波蘭の獨立回復を許すこと、墺匈國、バルカン、トリエスト等に就ては民族自決主義を以て版圖の改訂を行ふこと等を擧げ、又戰後に於ては保護關稅又は資本合同等による國際的經濟戰爭の再現を防止するの

方法を講じ、勞働者保護法を國際條約を以て一定し、且食料品及工業原料を國際管理の下に置き、各國の必要に應じて之を分配するの制度を設くるの必要を力説してゐる。而して最後に將來のインターナショナル會議復活の希望を聲明してかう言つた、「勞働及社會主義諸團體の國際會議は、相互の誤解を一掃し、平和の障礙を除き、世界のデモクラシーに對し有益なる奉仕をなすことができるであらう。」而してかゝる會議を開催するに必要な前提條件として、各交戰國の勞働及社會主義諸團體は一樣に「領土の割讓を行はず、刑罰的賠償金を課せず、各民族の自決權を尊重することを以て、一致の講和條件と認め、正直に且隔意なく是等の主義を實行する必要になる保證を、各自國の政府より獲得するために最善の力を竭すべきことを表すべきである。」

併しながら獨逸の社會民主黨は、右の如き前提條件を充すべき何等の意志をも公表しなかつたがゆゑに、倫敦會議の希望したやうなインターナショナル總會は實現せられるに至らなかつた。

一九一八年四月米國の參戰と同時に、從來とかく意志の疏通を缺いでゐた英佛兩國の勞働團體と米國のそれとの間に、戰爭の目的に關し隔意なき領解を遂ぐるの必要が一層痛切に感ぜられて來た。二月の倫敦會議にヘンダーソンからゴムパースに對して米國勞働聯合會の參加を懇請したに拘らず、ゴムパースが之を容れなかつた裏面の理由は、倫敦會議が勞働組合と社會黨との合同會議であつたといふことが、徹頭徹尾社會主義嫌ひのゴムパースを疑惧せしめたからであつた。然るに倫敦會議の決議は、彼が想像して居つた程左傾的ではなかつたので、彼の意もやゝ融けたものと察せられる。而して同年の九月倫敦に於て再び聯合國勞働組合及社會黨會議が開催された時には、ゴムパース自ら數名の幕僚と共に、大西洋を越えて之に臨んだのであつた。

此二度目の倫敦會議に參加した各國の團體及其代表者數は左の通りであつた。

一、英國		
勞働黨(會員二、五〇〇、〇〇〇)	參列代表者	二十四
勞働組合議會(同四、一三〇、〇〇〇)	同	十八
一、佛蘭西		
社會黨(下院議員一〇〇)	同	六
C・G・T(會員八〇〇、〇〇〇)	同	六
一、伊太利		
社會主義者組合(同一二、〇〇〇)	同	三

〇〇) 同 一
黨 同 五
一、白耳義
社會黨(會員二五〇、〇〇〇) 同 六
在佛勞働者組合 同 二
一、希臘
一般勞働聯合會(會員六〇、〇〇〇) 同 一
一、セルビヤ
社會黨(會員二五、〇〇〇) 同 一
一、ルーマニヤ
國民委員 同 二
一、露國(途中故障ありて出席不能)
社會革命黨 同 四
社會民主黨 同 一
一、米國
米國勞働聯合會(會員三、〇〇〇、〇〇〇) 同 五
一、加奈陀
商工及勞働評議會(トレード・エンド・レーバー・コングレス) 同 一

此會議に於ける興味の焦點は、飽くまでも極右翼を固守しやうとしてゐる米國勞働聯合會と、戰時中徐々に左傾した英佛兩國の勞働團體とが、果して如何なる程度まで協調し得るかといふことであつた。

先づ最初の「本會はカイゼル及其輔弼の士を以て、戰爭の開始並に獨軍により實行せられたる破壞、虐殺及憎むべき非人道の發頭人と認め、カイゼル及其同志が全然其地位より排除せられたる後にあらざれは、平和を議すべからざるものたることを固執す」といふ決議案は、卽座に平和を議することを欲する一部の極左派から反對せられたけれども、大多數を以て可決せられた。

次に露國革命に對する左の同情的決議案がヘンダーソン、ロングエイ、ヴンダーヴエルド其他英佛伊白及セルビヤ五箇國の代表者九名の名を以て提出された。

(一)本會は自國の帝國主義を殲滅したる後、尙獨逸の帝國主義に對し頑强なる抵抗を續けつゝある、露國の勞働及社會主義諸組織に對し、深甚なる同情の意志を表明する。

(二)若しブレスト・リトヴスク條約にして成立せんか、露國革命は其効果を失墜し、世界の民主主義の將來に重大なる影響を及ぼすであらう。聯合各國の勞働者は、露國民の完全なる自由を保證しないやうな平和條件を承認することを拒絕すべきであ

る。

(三)民主的露國を援助せずして、帝政復興を目的とする反動的・傾向に同情し、過激主義に抗敵すると揚稱して、其實社會主義と民主主義とを抑壓せんがために、露國に干渉を行はんとするが如き惧るべき危險に對しては、聯合國の勞働者はすべからく防衛の手段を講ずることを必要とする。

右決議案の第一及第二の兩項に對しては何人も異論はなかつたが、第三項に對しては米國代表者から反對が出て、終に左の如き漠然たる意味に修正せられた。

(三)本會の信ずる所によれば、目下聯合國政府が露國民を援助せんとする努力は、專ら秩序ある永續的世界平和の裡に自由と民主主義とを保持せんとするの純眞なる希望に出づるものである。かくの如くにして露國革命の幸福なる果實は永久に確認せられるであらう。

次に大統領ウヰルソンの十四箇條及本年二月の倫敦會議の『戰爭の目的に關する覺書』を以て平和の基礎條件と認めるといふ決議案は、英國の獨立勞働黨員のニーショウが、戰爭の罪を獨逸の侵略的意圖のみに歸するの不合理なるを指摘し、聯合國政府も亦帝國主義的精神を包藏せる點に於ては、敵國と選ぶ所はないと放言したゝめに、激論を惹き起したけれども、無論大多數を以て通過した。

此處までは英佛米三國代表者の多數の意見は總て一致したが、右の決議案の後半の一節、卽ち獨逸社會民主黨が本年二月の倫敦『覺書』の中に聲明したる前提條件を承認しない間は、彼等はインターナショナル總會の開催に障礙を設くるものであるといふ一節に至つて、三國代表者の意志は一致を缺いだ。佛蘭西のロンゲエーは獨逸社會民主黨が倫敦『覺書』の條件を承認することを以て、インターナショナル總會の前提とすることの不可なるを說き、無條件の總會卽開を主張した。之に反してゴムパースは『覺書』の條件を以てしても尙不十分であるとし、獨逸社會民主黨が其專制的政府に對し、公然謀叛の態度に出た場合に於てのみ、唯彼等と商議すべきものであるといふ修正意見を提出した。併し最後に多數を以て通過したのは、英國代表者の大部分と佛蘭西代表者の右說によつて支持された原案であつた。

此倫敦會議後二箇月にして大戰は終熄した。かくて戰時中屢々計畫されたインターナショナルの復活は竟に一回だも實現せずして平和は到來したのであつた。

世界經濟上より見たゼノア會議

法學博士　堀江歸一

難産を極めたゼノア會議

三月十五日の新聞紙はゼノア會議が愈々四月十日を以つて、開會されることに決定したと云ふ羅馬電報を掲載して居る。私は此電報を信じて、餘程規模の大なる會議の近く開催されるに至ることと考へる外ないのであるが、本來の筋道から云ふと、此會議位い難産のものは類が少ないであらう。本年一月聯合諸國を代表する最高會議がカンヌに開かれ、數個條の決議を取極めた當時に於ては、ゼノア會議も餘程順調に進行するものと考へられたが、第一此會議に對して、最も熱心なる支持者であつた佛蘭西のブリアン内閣が倒れて、ポアンカーレ内閣が之に代り、第二獨逸に對する聯合諸國の態度に就て、英佛兩國の間に意見の衝突があり、第三對露通商の開始や、露國過激派政府の承認に就て、聯合諸國に意思の疎通を缺いたり、第四會議主催國たる伊太利に最近政變の起つたりした種々の事情は相重なつて、會議の成立を妨害し、遂に遷延今日に至らしめた次第である。然し曲りなりにも今回會議の開會されるに至つたことは、先ず賀す可きもののようであるが、俗に難産の赤兒は育て憎いと云ふが如く、ゼノア會議の前途にも大なる困難が横はつて居ることを知らなければならぬ。就中其最も著しいものは、最初から此會議に對して、不卽不離の關係を取つて居つた北米合衆國が此頃に爲つて、會議に對する參加を拒絶するに至つた一事である。

尤も合衆國のゼノア會議に對する態度は甚だ不定のものであつたが、同時に消極的であり、受働的であつたことは、論を俟たない。卽ち歐洲諸國の方で會議の準備が進捗し、經濟復興に關する多くの方策が議せられるに至ると、合衆國は之に對抗して、合衆國の對歐債權を帳消しにするような計畫を議する會議には參加しないと云ふ意を明にし、次いで合衆國は歐洲諸國をして獨逸賠償債務を以つて、合衆國に負ふ債務を償還せしめ

ることを許さないと云ふ趣を公にし、着々歐洲諸國がゼノア會議開催を機として、合衆國に求めようと期待して居る所を峻拒する態度を取ることに於て、先手に出たのである。或は今日までの處、聯合諸國は合衆國から援助を受けると云ふ點に望を繋いで、ゼノア會議を希望したものであるとしたならば、合衆國の態度鮮明に依つて、將來の希望は盡く一空に歸したものとしなければならぬ。抑も合衆國は何故斯る卒氣ない態度に出でたのであらうか。

歐米經濟上の關係

此點に就ては、私は歐洲に於ける一部の政治家や、財政家の言論の今日まで甚だしく不謹愼であつたことを咎めざるを得ない。蓋し歐洲諸國は對同盟諸國の戰爭に臨んで、多額の債務を合衆國に負ふこと〻爲つた。或は海外に對する支拂を決濟する必要に基いたものもあり、或は軍資金の財源を調達する急に迫られたものもあり、理由は其れ〲違ふが、歐洲諸國は此合衆國に於ける募債が成立したればこそ、彼の如き長期の戰爭を成し遂げるを得たのである。而して合衆國が諸國に對して屢次公債に應募し、敢て難色を示さなかつたのは、自國の商品に對する販路を擴張するとか、相當の金利を以つて、國內に過剩を告げ來つた資金の運用を謀らうとか云ふやうな純然たる商業的精神に出づることもあるが、同時に世界文明の敵である獨逸を壓倒すると云ふ聯合諸國共同の目的に殉する公共的精神の發露した結果に外ならない。果して然らば歐洲諸國は戰爭の終熄した今日に於ては、如何なる苦痛に堪へても、對米債務を償還する方針を立て、合衆國の殉道的所業に酬ゆる所がなければならない筈であるのに、諸國は對米債務棒引き說なるものを主張した。其理由とする所は第一歐洲戰爭に關聯して生じた對米債務は世界平和を維持する必要に出で、敢て起債國自身の利益を目標としたものでない以上は、債權國に於て必ずしも其償還を要請する理據を持たない、第二合衆國の立場から考へても、對歐債權を棄却して、歐洲の財政の整理され、國民經濟に餘裕の生ずる機運を早くする方が軈て合衆國自身の利益に副ふ所以であると云ふ二點であつたが、斯る理由を耳にした合衆國民は之に對して、如何なる感を懷いたであらうか、貧すれば鈍すると云ふ諺も左ることながら、餘りに歐洲諸國民の利己的であるに一驚を喫せざるを得なかつたであらう。斯くて以上の言は毫も合衆國を承服せしめることが出來ず、却つて其反感を招くに至つたのも異とするに足らない。

何故合衆國は斯く對歐債權の放棄に反對したかと云へば、其

理由の一ツは債權の巨額なることである。即ち對歐債權の總額は今日百十一億弗に上る。是れは合衆國に取つては、一個有力なる國民的資産であつて、其適用處理の宜しきを得たならば、以つて合衆國の國力に幾何の進展を來すか、測り知る可からざるのみならず、又歐洲諸國に對して、將來外交的壓力を加へるに就て、有力なる武器と爲る可きものである。然らば合衆國が將來歐洲諸國が繁榮と爲つて、自國の物資に對する需要を増進するかも知れないと云ふ不定であり、又未知數である利益に對して、確定現實の利益を棄てると云ふことは、合衆國の何としても承認す可からざる所である。又合衆國の有する對歐債權には政府に屬するものもあれば、民間資本家に屬するものもある。前者は屢々募集された自由公債の收入の變形であり、自ら合衆國政府に取つて、自由公債の負擔を輕減する資産と爲つて居るのであるが、今此債權を棄却したならば、獨り自由公債と云ふ純粹の負擔ばかりが殘存するに至るであらうし、又民間所有の債權を其所有者に棄却させる場合には、合衆國政府自ら內國債を發行して、外債所有者に之を交付したければならない次第であつて、自ら國庫の負擔を増加するに至らざるを得ない。議會が果して斯る負擔を増加する計畫に贊成するかどうかも、問題であると共に、內國の外債所有　が外債の代償として、內國債を領收することに就て、故障なきを得るかどうかも、亦他の疑問に屬するのである。

合衆國財界の一轉機

合衆國が歐洲戰時、盛に聯合諸國に資金を融通し、結局合衆國自ら聯合國に加盟して、戰爭に從つた際には、此勢を以つて進んだ曉に、此國には如何なる變化を生ずるであらうか、人をして殆ど測り知る可からざるの感を懷かしめた。然るに戰爭が終熄し、三四年の歲月を經過した今日に爲つて見ると、合衆國は戰時餘りに對外的發展にばかり突進したことの輕卒なることを考へ出したようである。戰時諸外國の爲めに應募した公債社債の如きも、市場に於て必ずしも盡く消化した譯でなく、種々の方面に浮動して居り、一時の投機熱に乘じて、工業が企劃されたり又、軍需工業の繁昌したりしたことは、自然農村の荒廢を招き、彼の農産物の豐富なることを誇りとして居つた國が今日は外國から原料品や食料品の輸入を仰ぎ、殊に其輸入する數量が年と共に多きを加へるの趨きがある。

此一事は自ら合衆國の官民を刺戟し、今日に於ては農村を振興して、富源の開發保全を謀らうとする者が餘程強くなり、此方面に資金を要すること、少なからざる次第である。此事たる、

合衆國としては頗る平凡の政策であるやに見へるが、國策としては、自ら價値の大なることを認めなければならぬ。ローズヴエルトの如き人であつたならば、如何なる方針に出て、世人の膽を奪うかも知れないが、斯る離れ業を演ずるよりも、今日の合衆國は平凡の道を踏むことを得策とする、随つて歐洲復興に要する資金を調達すると云ふようなことは、全く合衆國民の念頭を去つたように思はれる。

上述の理由に據つて、私は始めから合衆國の對歐債權棄却に對しては、一向に望みを屬さなかつたのであるが、今や合衆國は判然態度を決定して、ゼノア會議其ものに參加せざるに至つた。卽ち同國は啻に對歐債權の棄却に反對するばかりでなく、歐洲諸國に財政上の援助を與へることにも、贊成を表さないのである。然も歐洲諸國は今日何ものを最も熱烈に要求して居るかと云へば、其一ツは外國にクレヂツトを得、之を基礎として、自國の産業に必要なる原料品や、機械を購入し、斯くて經濟的復興の業を成就させようとするのであるのに、クレヂツトを與へる餘裕を有する點に於て、世界を通じて、唯一の國であると云へる可き合衆國に裏切られては、殆ど絕望の外はない、斯る形勢を見越して、ゼノア會議に參加することを拒絕した合衆國が賢明であるか、合衆國の援助に絕望して、憂悶する歐洲諸國が痴愚であるか、私の讀者に向つて、判斷を仰がんとする所である。

ブラッセル會議の再現か

千九百二十年歐洲諸國はブラッセルに國際財政會議を開催したことがある。代表者を派遣した國は相當の數に上り、又佛のジード、英のピグー、瑞典のカッセル、伊のパンタローニ、蘭のヴヰセリング諸氏の如き、諸國に於ける一流の學者が專門委員と爲つて、其れ〴〵意見書を送付し、財政、通貨、外國爲替等に就て、十數個條の決議を公にしたが、是等の內で、實際に多少の効果を及ぼしたのは、財政上の見地から、軍備縮小、軍事費削減の必要を主張した一事だけであつて、華盛頓會議の如きも、餘程多くの程度に於て、ブラッセル會議に動かされたと見る可き跡がある。然るに其他の決議は何れも立派なものであり、又時勢に適切なるものであるに拘はらず、今日に至るまで、一として實行の緒に就くを得ない。何故に然るかと云へば、今日國際間の關係に於て、或は通貨を整理しようとか、或は爲替の恢復を謀らうとかする以上は、必ず財力に餘裕ある國が之に乏しい國に援助を與へなければならぬ。合衆國を參加させたゼノア會議に於ては、諸國は合衆國を此般の援助者たらしめる目

算であつたのに、其れが今日の如く合衆國に逃げられては、諸國は何とするであらうか、結局はブラッセル會議と同じく、貧乏人ばかりの會合であつて、如何なる名案妙計が工風された所で、畫ける餅と同じく、何等口腹を充すに足らないのである。

對露通商と露國政府承認

既に歐洲諸國にして合衆國に財力上の援助を受ける望みに乏しいとしたならば、此事は自ら歐洲の經濟的復興を妨げざるを得ない。然し諸國は今後何年の歲月を費すとしても、復興に必要なる計畫を樹立しなければならぬ譯であるが、此點に於て諸國が今日爲しつゝある所は果して正しき軌道を歩んで居るかと云へば、私は種々の問題に觸れて、疑惑を持つことを禁ずるを得ない。歐洲今日の經濟的疲弊を招致したに就ては、種々の原因があるが、就中其有力なるものは、戰爭に基く富源の壞敗、斯くて生ずる物資供給の不足である。然らば諸國は何事をも差措いて、先づ國民の生產的能力を恢復し、又此能力の適用される場所を廣めることに就て、力を致す可き道理である。然らば諸國は何故に露西亞を今日の如き混亂の儘に放置し、其富源を閉塞して居るのであらうか。露西亞在來の混亂に對しては、其原因の一部は過激派政府の破壞的政策に在りと見られよう、然し同時に他の一部は聯合諸國が過激派政府の政治に反對し、同政府の自然に倒壞する勢を促す爲に、露國に對して一種の經濟的封鎖を行うて居ることを以つて、其の原因であるとしなければならぬ。過激派の政治が如何なるものであるかは、別問題とし、其善惡の孰れに在るとした所で、兎に角露西亞全土を今日の如く荒廢するに任せ、本來の農業國に於て、却つて住民をして饑餓の慘狀に陷らしめるが如きは、人道上の見地に於て、許す可からざる所であると共に、物資の供給に甚だしき闕乏を感じ、何としても之を補充し、其豐富を期しなければならぬ歐洲の現狀を考量したならば、經濟上の關係に於て、不得策の甚だしきものであることは、何人と雖も、之を知るに難しとしないであらう。聯合諸國が露國と自由に交通する爲めに、過激主義に感染する虞れがあると云ふ、此一事は從來諸國をして對露關係の復舊に躊躇せしめる原因と爲つて居るに相違ないが、過激主義が如何なる程度まで歐洲諸國の實際問題と爲つて、既存の制度を撼搖するに至るやと云ふことは、當時に於ける諸國民心の趨嚮に依つて、定まる可き問題であつて、必ずしも露國との交通の如何に依るものではない。若しも斯る窮屈なる考を以つて、國際間の關係に臨むものとすれば政體の異同に依つて、國交の方針を取捨しなければならぬ結果と爲るであらう。斯る

道理の如きは、國際間の通義として、許す可からざる所である。

或は歐洲諸國なり、合衆國なりに於て、勞働者の政治上並に社會上に於ける勢力が歐洲戰爭中と同樣に强大なるものであつたならば、彼等の反資本主義的勢力は必ず實際に其鋒鋩を露はし、露國政府の承認問題に關して、國民的運動を起し、斯くて自國政府の此問題に對する態度の決定を進捗せしめるかも知れないが、戰後各國共に商工業の沈衰甚だしく、勞働組合の如き、從來の通り組合員に就て、充分なる醵金を徴收することの出來ない一方に、不成効なる同盟罷業の續出した結果、組合の資金の消耗したる高も自ら多く、隨つて此不景氣時代には、殆ど活動を斷念し、奄々たる氣息の下に、生存を續けて、將來の復活を期する外に、殆ど他あるを知らない。隨つて政府が如何に資本主義に左袒して、露國排斥の手段を敢てしても、勞働者としては、之を如何ともするを得ない、此一事は確に諸國をして露國政府承認、對露通商開始の機運に一頓挫を來さしめつゝあるの原因としなければならぬ。

獨逸賠償金問題

今日歐洲經濟社會の復興と最も密接なる關係を持つのは、獨逸賠償金支拂の方法並に程度を如何にす可きやの問題である。始めヴェルサイユ講和條約に於て、聯合諸國の對獨賠償金條件が決定され、次いで賠償委員會に於て、事の細目の協議される場合に、賠償金の過大であつて、獨逸に之に堪へる實力を缺き、斯る賠償金の支拂を獨逸に强ゆることは、結局獨逸を苦しめ、又聯合諸國自身にも何等の利益を與へるを得ないと云ふ見地に於て、其修正を必要とする意見を懷いたのは、少數の識者と社會黨の指導者位に止まり、他は盡く獨逸を根本的に倒壞しようと云ふ考や、出來る限り獨逸から賠償金を絞り取つて、聯合諸國の財政困難を救濟しようと云ふ望みを棄てず、遂に千三百二十億馬克の賠償金を算定するに至つたのである。然し一方に獨逸を倒滅しながら、他の一方に獨逸から巨額の賠償金を徴收しようとすることは、何としても矛盾した話であつて、前者を期圖する以上は、後者を斷念しなければならず、後者を達成するからには、前者を一擲しなければならぬ。即ち聯合諸國にして獨逸から償金代用の公債を受領し、之に對する元利金を金貨の形で得ようとか、年々金額の定まつた金貨を獨逸に支拂はせようとするからには、獨逸國内に無限の金の產出され、又は調達される見込みのない以上は、必ず獨逸の輸出貿易を振興し、輸出超過に依つて、獨逸に有利なる貿易差額を得さしめな

ければならぬ。而して獨逸に之を得させるには、聯合諸國は

第一、獨逸に向つて、原料品の類を豐富に供給し、少なくとも戰前に於けると同一の規模に於て製造工業を振興させ、

第二、漸く復興するに至つた獨逸の諸産業が其製造した物資を海外に輸出する場合には、諸國は進んで之を迎へる態度に出る

ことの二點を以つて、對獨經濟政策の要訣としなければならぬ。蓋し戰前獨逸の製造工業は相當の程度に於て、繁昌を告げて居つた一方に、經濟的自給生活を實現する必要も亦多數の人士に依つて、主張されたに拘はらず、獨逸工業の需要する原料品や、補助品の大部分は實に諸外國や、其殖民地に就て供給を仰いで居つたものである一方に、既製品の販路も亦專ら諸外國に向つて擴張されたのであるから、獨逸をして貿易上、有利なる差額を得せしめるには、以上の二要件は極めて必要とする所であり、殊に鹽酸加里や、鐵鑛の産出地であるアルサス、ローレインが佛蘭西に奪還された今日に於ては、更に必要の程度を加重したものと云はざるを得ない。然るに是等の點に就て聯合諸國の爲し來つた所は果して如何であらうか。或は獨逸に對しては原料品の供給を制限するとか、或は獨逸の輸出品に對しては、獨逸自身をして相當に重率の輸出税を賦課せしめるとか、或は獨逸の物資が聯合諸國に輸入された場合には、爲替相場の低落に相當する輸入税を加重するとか云ふような手段は聯合諸國の今日まで盛に試みる所であり、其上に講和條約の規定に依つて、獨逸の船舶を收用したり、年來の蓄積に係る原料品を占領したことも亦少なしとしない。斯くて獨逸の貿易は其伸張す可き所まで伸張しない、輸出超過に依つて、償金を支拂ふだけの有利なる差額を得られない、然も償金支拂に伴ふ負擔は國民經濟を壓迫して、國民生活の困難を甚だしからしめて、已まないのである。

斯る形勢の獨逸經濟社會に殺到するに至ることは、ヴエルサイユ講和條約當時から、聊か前途を豫見する明ある人士の論斷を憚らなかつた所であつたが、今や果して之を實證する時期に到達した。獨逸政府が此生きた材料をゼノア會議に提供して、列國の批判を求め、斯くて自國に有利なる解決を得ようとすることは、同國政府代表者の熱心に期圖する所であつて、此點からゼノア會議に最も大なる望みを繫いだものは獨逸であると云つて差支ないかも知れないのである。

英佛兩國の意見異なる

然しながら此問題こそ、實に英佛兩國の間に利害の分岐する

所と爲るのである。前記の對露通商開始問題なり、又は露國政府承認問題なりに對しては、英佛兩國共に略ぼ同一の地位に居ると見られよう。露國に包藏された富源を開發し、又之を利用する點に就ては、兩國共に同等の利益に浴するであらう、更にレーニン政府を承認する代償的條件として、同政府をして外債に關する既往の契約を遵奉せしめたならば、英國が歐洲開戰後に應募した公債に就て、安んずるを得る如く、佛蘭西は開戰前露國に融通した債權を擁護するを得るであらう。隨つて過激主義を背景とする思想の傳播される危險さへ杜絶する見込みが立てば、對露問題に就ては、兩國の態度に一致を得ることを難しとしないが、對獨經濟問題に至つては、斯の如く爲るを得ないのである。

獨逸が講和條約に於て、武裝解除を強いられ、軍國から一變して、今日の民國と爲つたことは、或は獨逸國民の意思に反した所業であつたと解されるかも知れない。然も其意思と云ふのは、武裝解除以前或は其當時に於ける國民の意見であつて、今日の共和國民から見たならば、以前帝政の下に、極端なる軍國主義の信條に依つて、國民の思想に於て、將た行動に於て、持たなければならぬ自由に束縛の加へられたことを馬鹿々々しく感ずるに相違ない、恰も封建時代の武士が人切包丁を棄てゝ、町人と爲り、自由の天地に生活を求めて居るやうな感想こそ、今日の獨逸國民の持つ所と解される。隨つて將來獨逸が軍國として軍事上の實力を恢復し、隣國の平和を脅威するが如きことは假に世界諸國の目を偸んで成し遂げられるとした所で、到底自國民の許さゞる所に屬する。然らば佛蘭西の如き獨逸の何ものに對して、恐れるかと云へば、恐れ可きもの〻あるを知らない譯である。或は獨逸人の堅忍なる性質は幾年かの後には、今日物資の缺乏に依つて、經濟上に蒙つて居る困難なる局面を打開して、再び經濟上の强國として、雄を世界に稱するに至るかも、測り難い、其際に最も大なる打擊を蒙るものも亦佛蘭西に外ならないから、今日戰敗國たる地位に居る時に乘じて、飽くまでも其再起の力を奪うと云ふのが佛蘭西の意圖であつて、斯くて國民の輿論は期せずして獨逸に向つて、强硬と爲り、少しでも政府の方針が英國と協調して、對獨態度を緩和しようとするように傾けば、國民の力を以つて政變を促す。政府も亦此勢に引摺られて、依然たる對獨硬を擬ふものであるとしたならば、獨逸の經濟を復興し、獨逸特有の產業を恢復させ、獨逸の爲めに利益を收めさせるばかりでなく、世界をして共に其惠を頒たしめようとするが如きことは、之を望まれないのである。ゼノア會議が開かれて、世界の經濟に光明を導くか、又は依然

たる暗黒を續けるか、刮目して見る可き所と思はれる。左るにても陸軍縮小に關する國際間の協定の成立する勢に對して、妨碍するものも佛蘭西であり、又ゼノア會議に於ける對獨問題の解決を困難ならしめるものも亦佛蘭西であるとしたならば、世界の人士は此國に對して、如何なる感を懷くであらうか。私は佛蘭西國民が數十年前の昔に受けた戰敗の怨恨や、恐怖から脫するを得ず、不自然極まる方法で、之に當らうとする態度や、意思を陋とするものである。

純然たる經濟問題は如何

上記諸問題以外に、ゼノア會議に付議されると想像されるものは、

第一、如何にして國際間の爲替相場に安定を保たせるか、

第二、諸國に於て價値の低落した通貨に對しては、如何にして價値の上進を期するか、

第三、諸國に於て産業を復興するに就て、必要なる資金は如何にして之を調達するか、

第四、一國が他國から物資を輸入した場合に、之に對する決濟は如何なる方法を以つてするか、

と云ふが如き諸點であつて、是等の問題が討議される場合には、自然對米債務の棄却論や、合衆國に對する援助要請論が蒸し返されることであらうが、斯の如きは今や一片の空論である。斯くて諸國は諸國だけの限られた資力を以つて、解決を試みなければならぬ次第と爲るが、其場合に如何なる方策があるであらうか。上記諸問題の如き、抽象的に考へたれば、之を解決するに格別の困難あるを見ない、唯必要條件として認められるのは、金又は金に引換へらるる資金の存在する一事であつて、其要件さへ充たされたならば、兌換制度の復興も容易であり、又或る時期に復興されることが大體に於て、決定する以上は、今日の如く價値の低落した不換紙幣や、銀行券も自然金貨の價値に接近し來るであらうし、通貨の價値さへ、上進し來つたならば、爲替相場も安定を得ることゝ爲るであらうし、外國から信用を得ると云ふ問題も左して難事と思はれない、唯合衆國以外の國にして今日他の諸國に金貨を融通したり、又信用を許與したりする餘裕の財政上に備はれる國が何處にあるかと云ふことに爲れば、問題の解決は再び暗黒裡に陷らざるを得ないであらう。之に多少の光明を與へるものは、即ち財政に出來る限りの緊縮を加へる一事であつて、之を除いて他に何等方策の存することを知らない、斯くてゼノア會議は佛蘭西の好惡如何に拘はらず、結局諸國をして陸軍縮小の必要を認めしめ、又之

を實行するに至らしめるのではあるまいかと思はれる。

前途における一點の光明

今日歐洲諸國に於ける經濟紊亂の禍根は實に不換紙幣の濫發之に伴ふ通貨價値の低落に存するのであつて、此事實は既にブラッセル財政會議に於て、論究されて、餘地あるを見ない。而して此種の不換紙幣は如何にして今日の如く濫發されたかと云へば、固より戰爭中軍事費に對する財源の調達を容易ならしめることが第一次の原因であり、戰後に至つて、財政が整理の緒に就かず、公債や借入金に依賴しなければ、歳計の均衡を維持し難き狀態に居り、而して公債の募集や、借入金の調達に遺漏なからしめることが不換紙幣濫發の第二次的原因と爲つたのである、

既に紙幣濫發の原因が如上の點に存し、而して濫發の事實は動かす可からざるものであるとする。然し金紙の價値に於ける差の消滅するまで、紙幣を回收し、銷却し、收縮するに就ては、多少の困難が伴ふ、斯くて紙幣の現在高は今日の儘に措く、又は今日に近き高に措く、而して一方に之に相應するだけの金貨を或る方法即ち他國の援助に依つて吸收する、戰時の數年間から今日に至るまで、紙幣價値低落の爲めに騰貴した物價を基準とし、此物價に依つて律される種々の關係を根據として、通貨を金貨の基礎に移すと云ふことは、過渡時代に於ける變動や、此變動に處する困難を寡小ならしめる道であると信じられた。然も今日の如く他國殊に合衆國の協力に依つて、金又は金に代る可き資金の得られることが絕望に屬するとすれば、諸國は退いて自己の力に依賴し、以つて紙幣整理の計畫に就かなければならぬ。自己の力に依つて、紙幣を整理すると云ふのは、何事を意味するか。從來不換紙幣の濫發された原因たる、要するに政府が收入に超過する經費を支辨する財源を得るの必要に胚胎した次第であるから、紙幣整理の第一步は經費を節約して、收支の均衡を得ることに在りとしなければならぬ。而して經費の緊縮は何を以つて最も有效とするか。海軍縮小の如きも、固より其一法たるを失はないが、既に此事は華聖頓會議に於て、協定の成立を告げたし、又幾ら海軍を縮小した所で、其結果として財政に餘裕を生じるのは、歐洲に於て英吉利、佛蘭西、伊太利の如き、所謂海軍國を以つて目された國だけであつて、敢て他に及ぶを得ないが、陸軍であれば、如何なる小國も其整理に依つて、財政上に有利なる影響を受けるし、大國の更に然るを得るは佛蘭西の陸軍經費が海軍經費の三倍半であり、伊太利の陸軍經費が海軍經費の二倍三であることを以つて、其一斑を類推し得るであらう。私は考へる、歐洲幾億の民生が生

きるのも、苦むのも、一に財政難の禍根である軍事費に對する縮小の行はれるや否やに繋がるのであつて、此一事が斷行されず、依然たる舊態が續けられたならば、一方に經濟の困難の加重すると共に、他の一方に思想の險惡を甚だしくすること、幾何であるか、測り知る可からざる次第である。ゼノア會議をして有意義のものたらしめるには、陸軍縮小の聲を盛にすることそ、共第一義とす可きものであつて、實行の不可能である經濟救濟の小田原評定を重ねるのに勝ること、萬々であると信じられる。

唯歐洲諸國の經濟社會の混沌たる間に於て、英吉利の經濟狀態だけは多少復活の曙光に接したものゝ如くに見受けられる。昨年中の輸入超過が前年來に比較して、著しく減少し、國民をして對外債務の決濟に苦しましめざるに至つたことの如き、英米兩國間の爲替相場が一高一低の間に於て、常に英國に有利に變動しつゝあるが如き、共に恢復の徴候として、顯著なるものである。英國の世界に領有する殖民地中、印度の如きは統治上に困難を覺へるようであるが、其れでも尚ほ本國に對して、特惠關稅制度を布くことを辭さないし、他の殖民地に至つては、戰時中却つて增進した經濟的實力を擁しつゝ、本國に對して、出來得るだけの援助を惜まざる譯であつて、此一事が英國の經濟恢復に資することの著しきは論を俟たない。然し經濟は國際間に共通す可きものであつて、一國なり、少數の國なりの孤立することは、到底許され可きものでない、英國が此地位に據つたとした所で、他國の利害關係を見殺しにするような態度を取つたならば、果して如何なる結果を生ずるであらうか。他國の苦むと共に、英國自ら亦苦む所以たらざるを得ない。經濟上の方面から着眼して、關係諸國の利害の共通することは、吾人の一日も閑却す可からざる所に屬するのである。

高橋內閣の後を繼ぐ者・繼ぐべき者

高橋內閣瓦解のあと

法學博士　吉野作造

○

昨今の政界は、高橋內閣を近い中に壞れるものと觀て居る樣だ。この議會が濟んですぐ倒れるか、臨時議會後まで持ち堪へるかは、唯時の問題だとされて居る。するとそのあとは如何なるか、少くとも憲政の常道からいへば如何なるべきであるかの問題が起る。

併し今日の政界を憲政の常道を以て律するは、瀕死の病人に常人の養生法を勸むるよりも無理な話だと思ふ。經濟學の講義が株式界の波瀾に處するに差當り何の役にも立たぬ如く、今日の政界の判斷に憲政論を說くは、僕の厚顏を以てしても猶甚だきまりが惡い。

見よ。今日の政界の波瀾は、一體其の當に起るべき所より起

つて居るのかどうかを。今日の政府に幾多の失政あるは蔽ひ難い。道義上此のうへ永く其地位に留り難き程のボロを出して居ることも明白だ。併し政府は直接に此點を責められてもがきあがいて居るのではないではないか。綱紀肅正といへば名は甚だ立派だが下層無賴の徒が俺の顏をどうすると詰め寄するのと、著しく其性質を異にするものではない。人を試驗するに、其實力によるに非ず、御辭儀の仕樣がどうの、物の言ひ振りがどうので、及落を決められるのだから堪らない。事柄の發端既に斯の如し。何を以て爾後の發展を憲政の常道を以て判斷することが出來やう。

○

憲政常道の理論上の觀察は別として、事實この先き政界の成行はどうなるものか。斯う云ふ觀測を誤りなく讀者に告ぐるの資格は、遺憾ながら全然僕に缺如して居る。政界時中の有象無象の活躍は、大變面白さうだが、今のところ僕の生活に頓と何の關係もないのである。

併し友達などからちよい〳〵聞くことはある。試みに最近さる友人の勿態らしく告ぐる所を其儘書き列ねて見やうか。

○

貴族院は、もと民間勢力の代表たる衆議院に對する防坡堤として政府の傀儡たらしむべく作つたものであるけれども、政界の進運が、自ら下院に多數の根據を有するものに非る限り政府の要路に立つこと能はざるの形勢を馴致し來るに及び、一轉して政黨的政府に對する舊官僚系の有力なる牙城となつた。其處で政府に取つて貴族院操縱といふことが新に重要な仕事の一となる。而して目今貴族院に於て政府の諸般の御用を勤むるものゝ研究會であることは言ふを待たない。政府が研究會をして恒に後援を繼けしめ得るの緣因が實に有形無形の利權並にその希望であることも、疑ない事實である。

斯くして研究會に政府の御用を勤むることゝなつたとして、そんなら政府は自由に上院を操縱することが出來るかといふに必しもさうは往かない。多數の勢でヒタ押しに押せぬ所に、上院の下院に異る特色がある。然らば其理由は何處に在るかと云ふに、(一)上院には政黨的色彩を入る可からずとの傳統に制せられ、研究會も露骨に政府に盲從し得ぬこと、(二)上院に在ては沿革上の理由其他により、少數派議員の意見も相當に重きを爲すこと、(三)從つて政府に於て重大なる失態を暴露するが如きことあらん乎、研究會も不本意ながら政府反對派議員と或る點まで行動を共にせざる可からざる羽目に陷ることあること、(四)政府の失政餘り甚しきに至るときは、研究會と雖も體面上一時政府反對の旗幟を翻さゞるを得ぬ事情あること(勿論その態度は強いものでなく、時としてまた容易に元に引き戻るの危險あるのだが)等を擧ぐることが出來る。

斯う云ふ事情であるから、政府の上院操縱は、譯はない樣で六づかしい。政界の小姑といふ言葉は、いろ〳〵の意味で當つて居ると思ふ。政府のすきに乘じて無暗と威力を示したがる惡い癖などは、その最も著しいものであらう。

○

であるから、政府が結局下院に堅實な多數を作り、其の堅確性を民衆多數の道德的後援の根據に据へて、勇敢に上院の批判に對抗するといふ男らしき態度に出でざる限り、詰らぬボロを見せさへせねば、一ト通り操縱はつく筈である。原首相は此點に於て遺算なきを期し、可なり巧妙な關係を研究會との間に結んで居た樣である。然るに茲に端なくも、中橋文相の昇格問題で政府は飛んでもない大失態を演じて仕舞つた。政府反對派は得たり賢しと此のすきを突つ付き、前議會に於ては、研究會の

幹部までが一種内閣糺彈の聲を發せねばならなかつたことは、人々の知る所である。

貴族院に内閣を取つて代らんとするの意志なきは、去年も今年も同じであると觀てい丶――政變あれかしと冀ふ人のあるは無論だが。大體としては、たゞ政府に威力を示せば滿足する。故に前議會に於て、原前首相の爲に謀るに、一番安全な途は、中橋文相を更迭せしむることであつたと思ふ。斯くして上院の鋭鋒を外らし、一時其威力に屈したるの態度を示せば、少くとも政治的難關としての昇格問題は消滅したであらうと察せらる丶。けれども政友會の事情は之を許さなかつたのである。

政友會は、人も知る如く、利害で集つた烏合の衆である。精神的に堅い團體であるなら、文相一人の處分は何等動搖の理由とならない筈だが、清濁併せ呑む昔の僧院の如く、我が許に投じ來る者は理を非に枉げても保護するといふので集つて居るのだから、失態があればある程之を極力保護するといふのでないと、黨員が安心しない。斯くして黨の結束上、原前首相は中橋文相を斬ることが出來なかつたのだ。それは中橋文相に遠慮したといふよりは、天下の黨員の思惑を憚つたのである。其道に依らずして勢力を獲た者は、とかく斯んな馬鹿な所に任侠振りを見せねばならぬものだ。原氏の爲には聊其情を諒とするが、之が今日に禍を貽すの種となつたことは致方が無い。

斯う考へて見ると、今度の波瀾は謂はゞ前年の問題の持ち越しである。高橋首相は大に之に惱んで居るが、原前首相だつて生きて居たら之をどう始末したか分つたものではない。

○

貴族院に於ける昇格問題の難關は、原前首相の承認した政友會内閣の債務である。而かも家子郎黨は這の債務の正直な辨濟を面目として承知出來ないと云ふ。原氏はどうかかうか一時をごまかしたが、高橋氏に至つて彌縫し切れなくなつたのは、必しも兩氏のタクチツクの巧拙の問題ばかりではないと思ふ。今日までの經過に依れば、高橋首相は一旦債務を辨濟して仕舞うとしたらしい。果して家子郎黨は一大事出來と盲目的に騒ぎ出した。中年に迎へられた養子だけに遂に首相は見事この牽制に屈したので今度は上院が承知しない。こゝに今次の大波瀾が起る。元來高橋氏としては、綺麗に舊債を辨濟して新規に自分の思ふ通りの内閣を作るべきであつた。一蓮托生も連帶責任も、自分の思ふ通りに内閣を改造してからの話だ。それを現内閣は前内閣の繼續だの、原氏以來の結束を機械的に墨守するのが政黨内閣本來の主義だのと云ふ俗説に累せられて當初の決心を翻したのは、返す〴〵も殘念である。政黨内閣――連帶責任――

一蓮托生――之等は內閣の首班としての總理の資格十分揃つてからの上の話だ。他人の作つた內閣の頭に据へられて其儘で押し通せといふのは、丁度代りに出た野球の選手に前任者の服裝道具その儘でやれといふに同じく、能く考へて見ると本人の爲では無論なく、又政黨の爲にも國家の爲にも決して得策ではないのだ。此點に於て政友會の偸安や實に及ぶ可らざるものあるが、高橋氏亦大に去就を誤つたと思ふ。

○

政界の波瀾は貴族院から起つた。併し貴族院に內閣を取つて代らんとするの意思もなく又其の實力もないことは明白だ。假りに貴族院中の官僚系が內閣を組織したとしても、政友會が下院に一敵國を作る以上は、之が爲に新內閣の惱まさるゝ程度は現內閣の貴族院に苦めらるゝの比ではない。故に官僚系にして本當にも一度天下を取りたいと云ふ野心があらば、もつと政友會に對して生溫るい態度を取る筈だ。殊に今頃官僚內閣の出現するは白晝の幽靈同樣尸惑ひの甚しきものなるだけ、政友會の可なり立ち入つた後援を確實に博めぬ以上は、誰も物數奇に之を作るものはあるまい。

さうすると貴族院の連中は憲政會邊と結托して後繼內閣を作る樣なことはあるまいかと云ふに、之はどうも考へられないと思ふ。現在の上院多數派は、不幸にして憲政會と緣が遠い。否容易に接近し難い歷史的關係にも在る。加之萬一憲政會が天下を取ると云ふ事になれば、政友會は極力其出現を妨止するだらう。日本の樣な變態的政界に於ては、天下を取りさへすれば容易に多數を作れるのだから、敵に內閣を明け渡すことは政黨に取つて實に致命傷だからである。

そこで、政友會は早晩崩れるとして其の後を嗣ぐものは憲政會だらうと觀ずるのは、所謂憲政常道論の御目出度い信者のみであつて、我々には殆んど其實現を想像することすら出來ぬ。而かも政變は近き將來に於て到底避く可からずとせば、考へ得べき今後の發展は、(一)政友會內閣が一部改造の結果上院より一二の閣僚を拔くことに依つて收まるか、又は(二)普選をやらぬとか其他の條件を容れて政友會と妥協し、他日また之に天下を讓るの默契を以て官僚內閣を復活するかでなければならぬ。而してこの二つの孰れに落ち付くかは、議會後に於ける政府の跡始末の手際如何による。政府の隱れたる壓力は今でも上院に於て中々重い。政友會それ自身さへ隱忍して一時多少の移動に甘ずれば、まだ〳〵天下は持てると思ふけれども、驕兒往々時勢を味識せず、猪突却つて自ら事を誤るの恐なきかと危ぶまれる。いづれにしても、斯んな風に政界の發展して行くのは、憲政

の常道に外るゝは勿論、吾人の理想より見て寧ろ慨歎すべき狀勢であると謂はねばならぬ。上下兩院を通じ議員諸氏にも少し眞摯に時勢を觀る人はないものか知ら。

○

以上友人の慨然として說く所を憶ひ出すまゝ書き列ねて與へられたる問題の答とする。

高橋內閣の末路と其後繼者

法學博士　堀江歸一

近頃私に取つて頗る痛快に感じられることは、高橋內閣が愈々壇の浦に推詰められて、四苦八苦の狀に陷つたことである。私は別に高橋內閣の首相である高橋子なり、他の閣員なりに何等の私怨を挾んで居る者ではない、彼等に對しては私は全然沒交渉であるのみならず、高橋首相に就ては、其怪異なる容貌に對し其脫線的言動に對し、餘程一種の溫かい感情さへ持つて居るのであるが、何分にも彼等の揃いも揃つて、無經綸であり、加ふるに一黨一派の私利を眼目とした政治を行い、斯くて社會の綱紀を紊亂して、憚らない態度を見て、何としても許す可からざることと考へ、一日も早く斯る內閣の倒潰することを祈つて已まなかつたのである。唯下院に絕對多數の黨與を擁し、上院に硏究會を懷柔して居つた爲めに、如何なる秕政を行つても、攻擊の矢面に至つて、平然たるを得たのであるが、今や天下の物論は彼等をして何時までも斯る態度に居らしめることを許さゞるに至つた。私は一種の厄拂いをする感を持つものである。

高橋內閣が近く倒潰する運命に立ち至つた直接の原因は高橋首相が上院の豫算委員會に於て、中橋文相の進退に關し、云ふ可からざることを辯じ、後に曖昧裡に之を取消さうとした失態から、學校昇格の豫算案を不成立に陷らせるように爲つたことに、端を發するが如くに見へるが、是れは唯反對派の議員に乘ず可き隙を與へたゞけの話であつて、內閣倒潰の根本原因は實に原內閣組織以來最近に至る秕政の總勘定を付けなければならぬ破目と爲つた一事に外ならない。原內閣から高橋內閣に掛けて、經濟財政上の施設が悉く宜しきに適せず、殊更に投機熱を煽揚したり、恐慌を呼び起して見たり、恐慌後の不景氣を甚だしくしたり、今や國民生活は兩內閣の禍する所と爲つて、慘憺たる狀態に陷つて居る。而して原內閣をして多年に亘つて、斯る亂暴狼藉を極める經濟政策を敢てするに至らしめた發頭人たり、張本人たる者は即ち高橋是清子其人であるのに、人もあら

うに、野人を擧げて、首相の重任に置くとあつては、世人の反感が高く、内閣に對して彌が上に高きに至るのも亦當然としなければならぬ。現に先年物價問題に就て原內閣に決議を突き付けた貴族院各派の如きも、全然異なる意見の下に、貴族院の決議を無視した高橋子を首相として、見るに就ては感情の穩かならざるに至ることも、怪むに足らない。

或は高橋子にして、容貌風采の怪異であるが如くに、人物に亦珍奇とす可き所があつたならば、首相に爲つたことを機會として政府の政策なり、政友會の綱領なりに、一大刷新を加へたかも知れない。或は斯うしたならば、現在の政友會議員の內には反對論を試みる者があるかも知れない、然し彼等に多數黨を離れて、何事かをする勇氣があるであらうか。假令い或る頭數を失つたとしても、高橋子の力で、黨弊を刷新したならば、必ず一部の同情や、贊成を博し得たかも知れない。然し彼の如きは、要するに一個の平凡人である、官吏としては投機事業を目論んだり、銀行家としては、蓄財に勉めたりする位が關の山であつたと見へ、仲々斯る拔本的刷新などは思ひも寄らず、只管幹部と稱する四五の輩に擁されつゝ、原氏の遺策を奉じて行く間に、一場の失言から、內閣倒潰の機運を早めたと云ふことは何とした間違であらうか、政友會から見れば悲慘であるが、私共から云へば、滑稽であつた。作內の適り役者に由良之助をめさせたような感を懷かざるを得ない。思ふに原氏が生きて居つた所で、政友會今日の頽勢は之を如何ともするを得なかつたであらうが、原であつたら、引き際には少しは綺麗な所を見せたかも知れない、高橋に至つては、恰も芋蟲が群り寄る蟻に攻め苛まれると同樣の醜態を演出して居るのであつて、此事は高橋が蓄財以外に何等取柄のない人間であり、又高橋の左右に居る者の愚なることを示すに足りるのである。

或は貴族院の力に依つて、內閣を倒潰することを不可なりとする者がある。然し政友會の今日衆議院に擁する多數の如き、政權と政權の下に左右される金權とに依つて、不自然に作り上げられたものであつて、民意と何等の交渉を持たない、却つて國民眞實の意思は貴族院の人々に依つて代表されると云ふ變態の起つて居る場合には、內閣倒潰に就て、變態の生じることも亦已むを得ざる次第である。

或は世間には高橋內閣をして華聖頓會議の跡始末をさせよう、隨つて臨時議會も此內閣の手で當らせなければならねと主張する者もある。成る程華府會議當面の責任は原內閣から高橋內閣に引繼がれたものであつて、全權の人選の誤まつたことも、七割標準を主張しながら、之を撤回したことも、陸奧保留に熱

中して、却つて英米兩國により有力なる軍縮を保留する口實を與へるに至つたことも、盡く高橋内閣の失政の條目と爲る譯であるが、華聖頓會議に依つて成立した海軍協定は世界公知の事實であり、又之を實行する細目まで、協定されて居る以上は、高橋内閣でなければ、實行し得られないと云ふ議論は何としても成立す可きものではない。斯の如きは政友會邊りで無理に内閣の壽命を延さうとする計略ではあるまいか誠に以つて奇怪の沙汰である。

偖高橋内閣が倒れるとして、何人が後繼者に爲るであらうか。純理から云へば、在野黨たる憲政會に政權の移るのが當然であるが、果して如何であるか、私の如きは加藤高明と云ふ人の民衆に觸接しない態度や、爵位に制されてか、衆議院に議席を持たないことや、在野黨の首領でありながら、時の問題に對して、具體的に意見を發表しないことを以つて、甚だ物足らぬ感を懷くのである。憲政會は何故モット政黨首領に適する人物即ち知識に於て、人格に於て、勇氣に於て加藤子に勝る人物を擧げて、總裁の地位に置き、一方に門戸を開いて、其人を謀り政權掌握の準備を講じないのであらうか、私の不可思議に考へる所である。

固より今日世間が後繼内閣の首相候補者として普通に擧げて居る人々即ち前記の加藤なり、後藤なり、田なり、又時に擧げられる山本なり、犬養なりに就て、仔細に觀察したならば、人物に、政見に、既往の經歴に幾多不滿の點の伴ふことは免かれないが、政友會内閣をして愚圖々々に局に當らせるよりも、誰れでも宜しい、新内閣を組織して政弊の一掃されるのが増しである。隨つて私は次の内閣組織者に對しては、

第一、政友會を基礎としない、即ち早速衆議院を解散して、政友會を少數に切り崩す手段を取ること、

第二、經濟財政に關しては、略ぼ政友會と正反對の政策を取り、國民負擔の輕減、經費の緊縮に重きを置くこと、

第三普通選擧を遂行すること

の三要件を主眼とし、之を實行するに堪へる人、又其れだけの力を持つ人を擧げたいと思ふ。此眼目さへ極まれば犬養氏が出で、陸軍整理をやるも可、尾崎氏が局に當つて、徹底的軍備縮小を行ふのも亦可なりとし、私は文筆で出來るだけ政府を助けて、其志業を果さしめたいと考へる。

國際と思想がわかる内閣へ

杉森孝次郎

時の内閣の政治能は、時の國民の政治能と見てい〻。極端なる専制政府でさへも、あるひは往昔の露、獨その他が示したやうな専制君主であつてさへも、眞に國民の意思にそむいた現象では決してなかつたのだ。幼稚な政府、時代錯誤の内閣は、幼稚な國民、時代錯誤の國民の投影でもあるが、創作でもある。

現在のわが政府は、過激社會運動取締法案を提出しえた政府だ。思想に對する理解に於いて、現在のわが政府がなんであるかは、ほゞ明白だ。しかしながら、もしもこの案が、ついに衆議院をまでも通過して、法令とされるやうなら、國民は、思想に對する國民自身の理解力をそれによつて示したのだ。

わが國民自身の政治能がいちじるしく低い。たとへば普選にしても、眞に國民の要求といふべくあまりに論據薄弱の現狀ではないか。政治能の一側面は理想であり、他側面は技術であるが、現在のわが國の政治的理想は、その政治的技術が低いよりもはるかに、はるかに低い。政治的技術の上にもわが國の現在は遺憾多きものであるに相違ないが、技術の原則としての政治的理想そのものが、技術、方法の批評を無意義に思はせるほどにも不足だ。その徴候は、國際盲と思想盲とに併發してゐる。

國民がもうすこし國際と思想に目とあたまをはたらかせるやうにならなくては、内閣の推移も、新生面の展開とはほとんど沒交渉な事變にすぎなくなる。直接に政府の役人を、すこしでも政治能高き役人に更迭させる用意と努力は常に必要だ。同時に、しかしながら、國民全體の政治能を高める努力が、一層根本的に必要だ。急がばまわれといふ俗諺は、日本が今日、持ちがひある政府を持つための方法論だ。國民の政治的理想にせよ。選ばるべき役人、議員は、自然に選ばれて來よう。

動機が私で、結果が公な政治家と政治的行動とがある程度に可能だ。その反對に、動機は公であつても、聰明缺乏ゆえに、結果は我見にもとづく獨斷、それにつながる公害である政治家と政治的行動ともある程度に可能だ。この兩態のいづれもが、國家、社會が政治と政治的行動とに期待する條件を滿たさない。しかし、萬やむをえない場合には、國民は、動機は多少不純であつても、結果が公利である限りに於いて、その動機の持ちぬし、その結果の創作因としての政治家や政治家的行動を器具として、手段として使用する聰明をも要する。内外的情勢が制度、觀念、又び廣く實行の三方面にわたつて、國民の政治的

進歩をあまりに激しく妨害しつゝある今日のわが國の如き場合に於いては、一時の橋渡しとしての目的に於いて、實行力ある進歩的英斷政治家に一役を演じさせる可能をも算外に措くべきでない。しかし、國民が、器具を持てあまして、却つて器具の支配下に立つやうな弱者であるならば、上述の可能は算外に措くべきだ。曾つて佛國民は、ナポレオンを器具として自由と秩序を獲得し、ナポレオンの器具とされて自由と秩序を再び失うた。近年來の英國民は、ロイド・ジョージ氏を器具として戰勝し、いくたびかロイド・ジョージ氏の器具とされる危機に近よつては巧みに回避し、超躍した。ロイド・ジョージ氏が英國民を手段とした分量と、英國民がロイド・ジョージ氏を手段とした分量とを比較して、ロイド・ジョージ氏が英國民の器具として使用された程度の方が優勝だ。

國際がわかり、思想が見え、隨つて今頃過激社會運動取締法案のやうなものをば、不用意にも、過失にも提出しないだけの政治能ある政府が、眞の日本が今日切實に要求する政府だ。

政局如是觀

文學博士　三宅雪嶺

現内閣が原前首相のまゝならば、第四十五議會が終つてから總辭職し、仲繼ぎ内閣を造るべき順序であつたらう。原氏は何人にも口外せず、誰を首相に奏薦するの意であつたか、之を明かにすべくもないが、事に依つては、徳川公がよからうと考へたらしい。華盛頓會議の全權委員にした時、其準備と察せられた。之れとて自ら噯にも出さぬ所であつて、公自ら一言半句も聞かず、良い加減の取沙汰としても、良い加減の取沙汰が必ずしも良い加減と限らず、原氏自ら世間の意外に敏感なのに思ひ當つたらう。

徳川公は全權委員として餘り首尾が好くなく、今となつては、原でも之を奏薦し難いと思はれるが、近頃首尾の好い者は多くなく、所謂不死身の原として、却つて其處で意地張り、之を奏薦したかも知れぬ。徳川公も首相とならぬ間、如何はしく思はれるが、愈々大命が下れば、それ相應に締が付く。如何に内閣を組織するか。貴族院で研究會、衆議院で政友會を基礎とし、原に對する留守役として、貴族院から多く閣員を選出し、政友

會から一二若くは二三を加へるであらうか。來るべき議會に德川首相が八方に應酬し得るかどうか。貴族院議長の如く高飛車にて濟まず、衆議院でしどろもどろになりはせぬか、多少の疑あるけれど、何が何でも、多數で押へ付け、質問打切り討論終結と云ふので、何とか位置を維持する事が出來よう。寺内伯が首相職を勤めた所から觀れば、德川が勤まらぬと云へぬ。

然し、德川公が果して首相職を御承けしたであらうか。自ら意ありながら、いくらか足許を考へぬではない。既に幾年も議長を勤めた以上、それきりで引退するよりも、首相で御奉公納めすると同時に箔を付けようと考へる。考へるけれど單に留守番を勤めるでは物足らず、首相は首相らしくせねばならず、さう行けるかどうかに掛念がある。自ら信ずる所はあつても、他からいろ／＼忠告をし、畢り危きに近寄らぬに越した事ないとなるでないか。

高橋新首相は原前首相突然の横死で大職に膺り、抱負よりも餘儀ない次第であり、長續きを期待しなかつたが、案外事が順調に運び、世間受けも良く、貴衆兩院でも惡くなく、之れならば一つ思ひ切つて首相振りを發揮しようと考へ、一部改造を行ひ、兎角障りになる瘤を除かうとした。實は智慧付けられた所あるが、其處まで得意の狀態で進んだ。慢心が起る時は即ち蹶く時であつて、うつかり足を踏外づし、何とか取直したけれど、痛みが出來た。強ひて長續きせば、貴族院に於いて[illegible]の首括りが烈しくなりはせぬか。政友會内でも面倒が持上り、大抵の所で切上げるに若くはないと心付いたらしい。仲繼ぎ内閣を作つて一先づ息を拔き、次ぎの總選擧に多數を無くせぬやうにと望むのが賢こい。

其處で誰を後繼者とするかとなれば、順番は矢張り德川公である。債券が下つたやうでも、他に誰が之れ以上かと云へば、見出し難い。唯德川公は原時代に首相を勸める意あつても、今日如何であらうか。高橋總裁では原總裁ほど政友會を纏める力無く、肝賢の動力は岡崎氏邊から來たりする。野田氏は態よく纏めるものの、岡崎を差置いて何うする譯に行かぬ。岡崎氏は自ら入閣し難い事情があり、それで實權を操らずに居れぬ。德川公に忠告する者は其邊で避ける方が可いとしはせぬか。其處で家達公の代りに賴倫侯が誂ひ向きの候補者になつて居る。舊紀州藩の關係と云ふほどでなくとも、賴倫侯ならば岡崎氏と直接の關係がある。鎌田氏も控へて居る。貴族院は將來の格式を重んずる方であつて、研究會も賴倫侯を重んじ、其の大命を拜する場合、自らの勝利の如く感ずる所がある。其處で札が落ちさうになれば、研究會は表面大人しくして裏面で何かの思惑が

あり、已をどうして呉れると云ふやうな者がいろ／＼ある。頼倫侯は普通の大名育ちと違ふにしても、其邊を締めて行けるかどうか。衆議院で彌次を飛ばされ、何程之に堪へ得るか。政友會でも餘りに岡崎系の力が露骨に現はれ、不快に感ずる者が無いか。頼倫侯は政局に乘出すの意あつても、豫め困難を察し、自ら其の任でないとして辭退しはせぬか。若し頼倫侯が引請ければ、事實上鎌田と岡崎との內閣となる。之れで別段に不思議なけれど、今の事情が之を許すやは覺束ない。

他に誰が候補者か。何にしても貴族院に重きを置[illegible]としては、爵の高下も關係無いとせぬ。公爵ならば一層可いとし、將來は兎も角、今日直ぐと引請け得さうなのは、德川を措いて他に無い。侯爵の方では黑田とか細川とか、いくらか目指さるのがあるにせよ、いよ／＼の場合となつて故障が起らうとする。伯爵となつては群雄割據、吾れこそはと思つて、彼ならばと一致するのが無い。幅利き連はそれ相應に才能あるにしても、自ら首相として他を統率する柄でない。小笠原伯は現に勅參であるが、平大臣でもなければ、首相はいよ／＼隔りがある。勅參にならぬ方が興味がついて居るかも知れぬ。林伯は一部から嘱望されて居るが、先づ平大臣からといふ所である。野心滿々たる伯爵は可也あり、滿更ら才能無いでなければど、偖て誰が首相を承まはるかとなれば、悉く此座惜しむべしと云ふ連中である。首相になれば首相と見ゆるにせよ、首相に登るまでの梯子が無く、急に梯子を作るに困しむ。今の處、大木伯が割合に宜い。

伯爵で群を拔き、一度び出でて何等かの波瀾を政界に捲起すかに察せられるのは、權兵衛山本伯であり、彼自ら一世を睥睨し、腕の鳴るを覺えぬでない。政友會で山本ならば曾て一つ屋根に棲まつた事があり、思ひつかぬのでなく、特に苦手の山縣系が衰へたので、之を引張り出せば可ささうであるが、山本は前の惡名を[illegible]ふに努めず、それで急所を衝かれさうに見えるのみならず、彼自ら仲繼ぎ內閣や留守居內閣を引請けるを快とせず、自ら首相たる以上、權兵衛一流を發揮せねば氣が濟まぬ。全く向ふ見ずでなく、無遠慮でなければど、現在の政友會の束縛を受けるなど、眞平御免、我が爲す所に同意せば來れ、さなくば分離するも已むを得ぬと云ふ所がある。彼は首相として高橋氏より世界を觀るの眼識があり、之に處置し得るけれど、其處まで運んで呉れる者が無くては、其儘で過ぎる外ない。高橋首相が之を後繼者に推薦するなど、事が聊か縣しい。若し何とか話が着けば、次いで豫期せぬ政變の起るを覺悟せねばならぬ。

樞密院議長が公侯爵に限るかに見えて居つたのが、清浦子で結構間に合ふとなつては、時代の變化したのを認め得、延いて

貴族院から首相を出すさへ、爵に構ひなく行けぬ事もなからう。子爵にも男爵にも可也の人物がある。首相とせば首相らしく見えよう。既に前原首相が無爵首相の例を開いては、貴族院から無爵首相を出しても差支へなからう。今こそ鎌田氏は貴族院で政友會の御用を承つて居るやうでも、原又は高橋が首相たるに倦ぶれば、彼が首相となつたとて、何の怪しむべき事なく、或は鎌田の方が良いやうな事もあらう。貴族院でも有爵者より無爵者の方が實力あるでないか。

誰が首相たるかは、誰か現首相で奏薦し、又は元老より奏薦するかと云ふのであつて、何處に首相たるの才能を具へる者があるかと云ふのではない。首相職は誰でも勤まると云へぬにもせよ、全國で一人か二人しか勤まらぬと云ふほどのものでもなく、何十人と卽座に見出す事が出來、唯大命を承ける順序になつて居るかどうかと云ふに過ぎぬ。加藤憲政會總裁にしても、種々の事情で首相職に就き得ぬだけで、首相職が勤まらぬのでない。犬養國民黨總理にしても、夢にも首相たり得ないやうであるが、首相として從來の首相に對し、餘り見劣りがせぬ。岡崎氏の如き、首相製造人を以て居らうとする。首相として何を爲すか、國家社會に何程貢獻するかと云ふに至り、事が難しくなるけれど、首相職に就くだけは左程の事なく、之れよりも困難なる位置が他に幾つもある。時勢が時勢たらば、四十代の人、三十代の人で結構勤まるのである。今の時代でそれが首相まで經登るには十年二十年、更に多くを費さなければならぬ。問題は人よりも時代である。



博覽會と松坂屋
松坂屋は擴張されて大層廣く便利になりました。品物も澤山になつて益々お買ひ易くなりました　博覽會のおかへりには是非……
四月の行事
◇春衣大賣出し
◇よせぎれ見切反物賣出し
◇特製袋帶陳列會
◇特製五月人形陳列
◇新型夏帽子賣出し
東京上野
松坂屋いとう呉服店



無産階級に生れて

高須梅溪

本篇の手記者より

私は生れ付いての不幸者だ　今迄長い間、貧乏に惱まされて、うんうん呻吟きながら辿つて來た生涯のうちには、何一つ幸福らしい影を見出すことが出來なかつた。煤烟と黃金とが渦巻いて居る大阪の中心に生れて、ある志を立てゝ東京へ出る迄、約十九年間、貧乏生活、勞働生活のうちに喘いで來た。

私の一家は、五歳の時、人に欺かれて破産した。それ・同時に父は不治の腦疾に惱み始めた。母は間もなく、私を殘して、此の世を去つた。爾來、私は無産階級の子として、周圍から、烈しい壓迫と冷めたい待遇とを受けて、再度 死を決したことがあつた。學校も強ゐて高等小學二年で退學させられた。而して勞働と飢えに疲れる日が長く長く續いた。

それ等の生涯は、極めに平凡であるかも知れないが、多くの無産階級のうちに居る若き人々の共鳴を得るだらうと信ずる。殊に貧乏のどん底に呻吟きながら、少數の友人と共に、黃金が唸りつゝある世界に於て、靈的に少しでも自己を淸め、大阪をも淸めようとして起したニユー・ムーヴメントは何等かの暗示を人々に與へるだらうと思ふ。

それに大阪のローカル・カラーが未だ何人によつても、本當に描かれて居ない今日、私が先づ純粹の大阪人として、曾てしみじみ體驗して「金の悲劇」や、性慾の惱みや、灰色の生活空氣や、大阪特有の奇異なロマンチツクの世界を描き出

すことは、筆が拙いながらも、未だ大阪の都會情調を知らぬ人若くは、現に大阪に生活しつゝある人たちに幾分のフレッユな興味を與へるだらうと考へる。

東京へ出てからも、私の生活難は容易に滅じなかつた。外部から烈しく迫る苦い運命の壓迫と內部から私を責める孤獨の悲痛とが、四十三歲の今まで絕えなかつた。一日でも、落着いた心持を味ふた時がなかつた。學校生活、新聞雜誌者生活、浪人生活を通じて、無產者の惱みが續いた。其の間に三人の愛兒の病死、親戚の不幸、知友の零落などの悲劇が少からずあつた。左樣した生活の一斷面をも、合せて率直に記したい。

私の目がけて居るところは、結局、人生の眞實そのものだ。他に何ものもない。私と同じ苦みを甞め、同じ惱みを經驗しつゝある若き人々の前に捧げるつもりで、虛飾なしに此の一編を書いた。其の表現が、どの程度まで成功して居るかは、今考へ居る餘裕がない。唯私としては、最善をつくしたつもりである。序に云ふが、上編は、四歲頃から十二歲で小學校を退學する迄、中編は小僧生活から、郵便局書記になり、傍ら青年文學會を組織して、十九歲の冬、東上する迄、下編は上京後から今日迄の生活苦を描くつもりである。

（上篇）

（第一）灰色の幼年時代

薬種問屋の子

私の生涯は、一家の破產から始まる。大阪の船場と云へば、東京の日本橋通か、本石町あたりに當る宜い場所であるが、其の船場の心臟（ハート）にあたるとこに道修町と云ふのがある。東西七八町の間、薬種問屋ばかりが軒をならべて、紺暖簾を垂れた家の中から強い薬の匂ひを年中漂はせて居るところだ。私が生れた故鄕は其處だ。

私の家は、薬の神だと云はれて居る神農さんの筋向ひにあつた。父は、近江屋萬助と云つたが、近萬で通つて居た。近萬と云へば、薬種問屋のうちでも、一番、手堅いと云はれて居た。家は大阪式に薄暗くて、左程廣くなかつたが、それでも、店と仲の間と奥、それに土藏一棟と二階があつて、女中、番頭、小僧らを置いて、何不自由のない生活をして居た。祖父や、祖母は別に近所に小さい氣の利いた家を借りて住んで、大抵、家のことに干涉しなかつたので家庭は平和だつた。

父の前半生は、どちらかと云へば幸福な方であつた。父は平凡だが、正直で、勤勉で、誰れにも腰が低くて、親孝行の方であつたから、仲間の人々にも愛せられて居た。身長がすらりと高くて、額が廣くて、口が引締つて、鼻筋が通つて居た。一見したところ、誠實で、氣品の高いところがあつた。後で氣付いたことだが、何處となく、先代左團次の素顏を思はせるやうな點があつた。

だが、父には致命傷にちかい、一つの大きな缺點があつた。それは、極めて神經質で、正直過ぎて、何でもないことを氣にしたり、一寸して商業上の損失にも人知れず心をいためるやうなところがあつた。それは、啻に父に取つて、非常な不幸であつたのみならず、近江屋の一家に取つても亦此の上もない不幸だつた。父の後半生に於ける悲慘な、生きながら白い墓の中へ葬られたやうな淺間しい境涯も、私が早く社會の怒濤に揉まれて、苦しい呻吟き聲を揚げるやうになつた不運も、實は父の性格に蛇のやうに附き纏うて居た大きい缺點に基づいたのである。

〔一〕

私は明治十三年四月十四日に生れた。生れた最初から極めて弱かつた。神經質で、小膽で、馬鹿正直なところは父に似たが、勝氣で、潔癖で、割合に我慢の強いところは母に似て居た　私の幼時は、蒲柳が弱くて、非常に瘦せて居た。大抵の人は家のものに向つて「このぼんぼん（幼年者）は到底育たんやろ。」と云つたさうだ。

父は心から私を愛した。父は自分の家の宗旨（眞宗）を信仰して、毎夜、店の用事が濟むと、自分で燈明をともして、佛壇の前に座つて、勤行を怠らなかつたが、どう云ふものか、天滿宮を尊信して、時々、朝早く、商賣繁昌を祈るため、四歲の私を背負うて氣輕に參詣した。私はおぼろ氣ながら、當時のことを覺えて居た。何でも、冬の朝だつた。私は父の背中によりかゝりながら、長い長い天神橋を渡り始めた。橋の上には銀のやうな霜が一杯に降つて、灰色の霧が重く蒸汽船の碇泊して居た淀川の上をこめて、鼻の先きが千切れさうに寒かつた。私は覺えず、小さい首を縮めて、父の背に固くしがみ付いた。やつとのことで、橋を北へ渡つてしまうと、私は始めて救はれたやうな氣がしたことを覺えて居る。それから間もなく、天滿宮へ參詣した。其の時の幼い眼に映つたのは、樓門の左右に安置してある矢大臣で「百人一首」中にある大宮人のやうに溫和しさうな顏をして矢を持つて泰然と座つて居た。

父は、また冬のシーズンに催ほされる神農祭に私を背負うて出かけたことがあつた。其の神社は、大きな藥種問屋の間にはさまれた狹い、美しい石疊を敷いた路次のやうな奧にあつた。參詣人で一杯になつて身動きの出來ない間を人の波にもまれてゆくと、社務所に二三人の世話人が詰めて居て、父の背によりかゝつて居た私の小さい姿を認めると、笹の葉に付けた小さい張子の虎を一つくれた。それは、長さ二寸ばかりのもので、全體を朗かな黄色で塗つて、耳の裏と割合に大きな口とを丹紅に染めて、光るやうな黑色で、勢よく波紋が描いてあつた。笹を振ると、虎が呑氣さうに左右へ首を振つた。それが小供の眼に珍しくもあり、可笑しくもあつた。

二

私は斯うして、父には能く愛せられたが、母に愛せられた記憶は一つも持つて居なかつた。母はどう云ふものか、小供をうるさがつた。誰れもが愛する小供を家に置くことを好まなかつた。それで私が生れると、長男であるのに、直ぐに田舍の方へやつて、養育させようとした。けれども祖母が最初の孫が可愛い一心から、何處までも、手強く母の考へに反對した爲め、私はやつと家に置かれた。だが母は私のことを、大抵、女中任せにしたきりで、私の存在を忘れたやうにして居たことが多かつた。だから、私は母の手に抱かれたり、接吻されたり、頭を撫でられたりした記憶を丸で持つて居ない。母は小供のことについては、最初から極めて冷淡で、わが儘であつた。

其の後、私の次ぎに弟妹が生れると、母は甚だ不機嫌で直ぐに田舍へ養育料を附けて、里子にやつて了つた。當時、貰ひ子に附屬した金を貪つて、營養不良の下に人の子を死歿させるやうなことが、大阪附近の田舍で往々行はれて居たらしいので、私の弟妹は、最初から金のみに目を着けて居た冷めたい鬼のやうな百姓の手に渡つて早く死んだ。私は一度も弟妹の顏さへ見ることが出來ずに永遠に別れたので、自分には最初から、弟妹がないのだとひとり思つて居た。ところが大分、後になつて、不圖、祖母からそれ等の話を聞いたときは、夢のやうに此の世からあの世へ消えていつた憐れな弟妹たちの運命を悲まずには居られなかつた。

一體、母は何となく、異端者のやうなところがあつた。順慶町のある呉服屋のひとり娘で、當然、養子を迎へて、家督を繼いでゆかねばならない身であつたのが、どうしたわけか、私の父の許へ嫁したのである。其の後もわが儘をして來た癖が時々出たが、才氣と勝氣とで、それを補つて居たので、父は一度も、

母のわが儘を叱つたことがなかつた。時には一歩を讓つて、母のするまゝに任せて置いたことも少くなかつた。

私は母から閑却されて居たが、幸ひ祖母や、祖父は、海の底から見出した一個の寶珠のやうに、私を鍾愛してくれた。祖父は私の父に輪をかけたやうな善人だが、私の四歳の時に亡くなつたので、私の胸には、極めて淡い印象しか殘つて居らぬ。其の容貌は、今も大阪に生き殘つて居る叔父と同じやうであつたと思ふ。其の叔父は、色が白くて顏立が優しくて、目の下に小さい黑子(ほくろ)が一つあるが、それらをしなびたやうにしたのが祖父の風采だつた。いつも、私が行くと、默つて、長火鉢によりかゝりながら、にこにこして居た。元來、祖父は、播州赤穗の武士であつたが、維新改革と共に大小を投げ出して、大阪へ出て、藥種屋を開業して、いくらか成功したのである。青年時代には、一時、寺小屋の師匠見たやうなことをしたこともあつた。其の隱居してからの道樂は、そつと人知れず、貧しい人たちに金品を施すことだつた。ある凶年に米價が非常に暴騰した時は、聊かの資財を快く投げ出して、數十俵の米を買ひ入れて、窮民を救ひ上げることに力めた。だが其のことは誰れにも告げなかつた。祖父は、一種の隱德家であつた。

祖父が歿してから間もなく、私は祖父の幽靈を二度、夢に見たことがあつた。それは町中が死の沈默に入つたやうに眠りこけて秋の雨がしとしとと降り注ぐ夜更け時分であつた。私は、奥の間で父に抱かれて寢て居るうちに、うとうと眠氣を催ほして來た。間もなく、私の身體は、飛行機に乘つて上空に上るやうに、いつの間にか二階へ釣りあげられた。不圖、室の一隅を見ると、暗いところに青白い顏の祖父が、白つぽい衣を着て、淋しく笑つて居た。而して痩せて骨ばかりになつた手をのばして、そつと私を抱かうとした。私は何だか氣味が惡かつたので、默つたまゝ、いやな顏をした。祖父は靜かに首肯いたかと思ふと、一寸私を抱いて直ぐ手離した。急に私は風船球のやうに、ふわりふわりしながら二階から何處までも下へ下へと落ちていつた。それは、恰度、深い谷の底へ無限に身も心も沈み行かうとするやうな氣分だつた。私は俄かにあせつて、懸命な力を出して、踏み留まらうとして、あつと大きな聲を揚げると、始めて目ざめた。四邊には、黄いろい行燈が、ぼんやり瞬いて居る丈で、雨の音が、しとしと夜の秘密を囁くやうに、屋根の上に聞えて居た。私は何故、こんな淋しい夢を見たのか、今にわからない。

祖母は、祖父とちがつて、快活で、負け嫌ひで、平生、踊りや、酒を嗜んだ。祖母の晩酌はいつ頃から、始つたのか、知らないけれども、私の幼少時代に既に祖父とそれを樂んだのであらう。其の酒量は、可なりにあつたが、平生は二合を越えたことがなかつた。醉ふと家族を相手に賑かに話すのが好きで、いつも膝の上へ手拭を載せて、ゆつくりとちびり、ちびりうまさうに酒を飲んだ。斯うして祖母は、七十八歳で死ぬ迄、一日も酒をやめたことがなかつた。風邪を引いても酒、胃腸をいためても酒、頭痛がしても酒と云ふ風で、病氣の時には酒を藥の代りに飲んで癒(なほ)つたほどだ。

祖母はどんな場合にも愚痴をこぼしたことがなかつた。若い時分踊りを好んださうだが、私が物心付いてからは、祖母が浮かれ出して踊つたのを一度も見たことがなかつた。それでも、陽氣に騒ぐのは好きらしかつた。父が破産する迄の祖母は、大體幸福な人であつた。家業は繁昌する、生活には餘裕が出來る、孫は生れる、三人の子は、何れも立派に成人すると云ふ風で、運命は祖母に對して快く微笑して居るやうに見えた。

祖母には、女子一人、男子二人あつた。私の父が其の長男だ。次男は父と一緒に長い間暮らした叔父である。長女は、後妻となつて、南久寶寺町の大きな木綿問屋に嫁して居た。此の三人は私の叔父や祖母に對して從順であつた。祖母が私の父を「助一」と呼ぶと、父は「ひえー」と妙なアクセントを附けて、鄭重に答へるのが常であつた。父は祖母の云ふことには一度も反對したことがなかつた。どんなことでも、大抵、祖母の云ふ通りにした。

一家の破産と咀はれた親子

ところで、平和な暖かい空氣に滿ちて居た私の家へ突然、破産の大洪水が襲うて來た。それは、父が隣家の同業者に欺かれた爲めであつた。父は自分が正直なところから、どの人も彼れに對して正直で、裏切るやうなことが絶對にないと確信して居たらしかつた。腹の黒い男が、父に媚びて、父を欺からうとして、そつと罠をひろげて待つて居ることを夢にも知らなかつたのだ。

其の腹の黒い男は、隣家に居た。始終心やすく、私の家と交際して居たが、中々、油斷のならない奴だつたと家で祖母が私に話した。其の男は、最初父に取り入るために、先づ私を愛してかゝつた。隔日若くは毎日、いろいろ立派な玩具を買つてくれたり、美しい、うまさうな菓子などをくれた。だが、どう云ふものか、私は隣家の夫婦を心から好まなかつた。彼等は私を

自分の子のやうにして、時々其の家に連れていつてくれた、私の好きさうな晩餐を馳走したこともあつた。それでも、私は尚ほ彼等に親む氣になれなかつた。眞の愛と虚僞の愛とは、自然、無言のうちに小供にも直覺されたのであらう。

　それに、私は隣家について、一つの恐ろしい記憶を與へられて居た。そのことは、夢だつたか、現實だつたか、當時の私には區別が付かなかつた。ある夏の夕、隣の奥座敷に私がひとり寢ころんで居た時、小説のうちにあるやうな猫の怪を見たのだ。それは多分、夢のうちに見たことだらう、鼠色の壁に大きな猫の顔が、ぱつと映つたのだ、其の顔は血塗れになつて、ぎらりと光つた大きい眼をくわつと開いて、私を鋭く睨みつめた。猫の身體の毛はそれと同時に銀針のやうに一齊に逆立つた。而して強さうな牙を現はし、尖つた爪を出して、今にも一氣に私に飛びかゝらうとする兇猛な姿勢を示した。

「あつ」

　私は、餘りの恐しさに聲を立てようとしたが、其の時に限つて、痰で咽喉がつまつたやうになつて、どうしても聲が出なかつた。身體を動かさうとすると、ぴつたり釘付けにされたやうで、少しも自由が利かなかつた。猫の顔は見れば見るほど次第に凄味を加へてくるので、私は思ひきり、烈しくもがいて、聲を出さうと力めた。其の時、自分が發した聲で、不圖、吾に歸ると、猫の顔はふつと消えてしまつた。私はびつしより全身に冷めたい汗をかいて居た。

□

今から考へると、私が隣家で、左様した凶夢を見たのは、一家の破産を豫言する惡兆であつたやうだ。それから、間もなく、私の父は、隣の男に欺かれて、三萬圓ばかりの缺損を引受けさせられたのだ。商賈のことは、父がひとりで承知して居たから、其の間にどう云ふ經緯があつたのか、後になつても、一向、話を聞かなかつたが、唯隣の男に欺かれて、大きい損失を生じたことは確かな事實だつた。

　其の時、小膽な父は、一時にくわつと驚いて、逆上して、氣が顚倒して　まつたのだ。冷靜に落着き拂つて、前後の處置を執らねばならぬ場合だつたのを全く忘れて、突然眼の前に大きな地震が起つて、家がくづれかゝつたやうに思ひつめてしまつたのだ。今まで正直に働いて得た財産を三萬圓背負ひ込みのために、すつかり投げ出さねばならぬ破産狀態に立ち至つて、他にも迷惑をかけるであらうことを苦にして、氣が變になつたのだ。

もう其の時の父は、正氣の父ではなかつた。

「巡査が來ます、あゝ靴の音がする。」

と云つて、妙に巡査を恐れ出した。而して疾風のやうな勢で、街の方へ驅けて行かうとした。私の母や、叔父が驚いて、父を留めようとすると、父は烈しく暴れて、母を突き飛ばしたさうだ。それ以來、父は何かひとり高聲で喋つて、起つたり、坐つたり、いらいらして、少しも、落着かなかつたさうだ。

一家の支配者であるところの父が、一時、正氣を失つたので、私の母は、叔父と相談して、すべての財産を潔く債權者の前に投げ出してしまつた。其の時、隣の男は、もう家をたゝんで、何處へか姿を隱して居た。流石に勝氣な母も、涙にくれ乍ら、物狂はしい父や、未だ一家の悲みを知らぬ私らを連れて、安土町の裏長屋へ引越した。それが私に取つて、苦い、悲しい人生の行路が始まる序幕であつた。

（二）

安土町の家は、道修町のにくらべると、非常に見すぼらしかつた。下の間は三疊と八疊の二間しかなかつた。二階には、六疊位の室が一つあつた。西向きの家で、庭が申わけばかりに附いて居た。北の隅に玩具のやうな小さい、薄暗い納屋があつた。私の一家のものは、塵溜に捨てられて、世の中から忘れられた人のやうに其處に起臥して居た。私は、以前にくらべて、急に家が小さくなつて、奉公人たちが居なくなつて、何だか、淋しいと思つたけれども、一家の破産も零落も丸でわからずに、毎日外へ飛び出して遊んで居た。

其の時分、父は暫く病院に這入つて居たので、私は時々、父のことを思つた。だが、何處に居るのか知らなかつた。母は以前と同じやうに、少しも、私を愛してくれなかつた。いつも、叱り付けてばかり居た。母の愛は、其の片影すらも、私にわからなかつた。ある日、私が母に何とも云はないで、近所の小供らと一緒に馬場(ばんば)――大阪城の附近の野原――へ遊びに出かけて、草など摘んで、夕ぐれ頃、家に歸ると、母は眞赤に怒つて

「何故、默つて遠いところへ遊びにいつたんや。」と云つて、直ぐに私を細引きで、ぐるぐる卷きに縛つた。私は母の手ひどいやり方に、くわつとなつて反抗した。私は、泣きながら母を罵つた。

母は一層、怒つて、私を引きずるやうにして、薄ぐらい納屋の中へ押込めて、外から固く戸を締めた。

「馬鹿ッ、阿呆！」

私は鋭く叫んで、地團太を踏んだ。私は全身の力をこめて、

戸を開けようとしたけれども、それは駄目だつた。挽臼や、繩や、漬物の樽などが置いてあるところへ蹲踞つて、火の燃え付くやうに泣いた。それでも、母は中々、私を許さなかつた。私は終に泣き疲れて、繩がちらかつて居た上へ座つて、ぼんやりして、時の經つのを待つて居た。凡そ一時間ばかり捨て置いてから、母は始めて戸を開いて私を許してくれた。

それ以來、私は母に對して、淡然と敵意を持つやうになつた。ずつと後になつて、考へると、母の胸の奥には、私に對する愛の閃きが仄かに光つて居たのであらうけれども、五歳の私には、それを理解するだけの力がなかつた。母の顔を見ると、何となく、重い壓迫を感じた。「母が居なければ、どんなに宜いだらう。」とさへ思つて、母の存在を呪つた。それでは自分の愛兒に對して殘酷にすぎた母、母の暖い愛の手に唯の一度も抱擁されたことのない子の悲しい日が續いた。

〇

母は子供に對しては、冷淡に傾いたけれども、自分の家に對しては根強い執着を持つた。病める父が家に居らない間は、父に代つて、一家の生活費を作ることに懸命になつた。順慶町の生家から呉服物を借りて、それを甲斐々々しく、風呂敷に包んで背負ひながら、知己の許をかけ廻つた。其の行商から得た利益で、兎も角、生活を支えた。

「お雪はん(母の名)はえらいもんや、ひとりで山田の家を立てゝゆきなはる。」

親戚のものは、斯う云つて、私の母に感心して居たさうだ。

其の夏、母は私を祖母の手に預けて、骨休めのため、暫く生家へ歸つた。生家の人たちは、久振に歸つた母を歡待して、手製の牡丹餅を作つて、母に勸めた。母は喜んで、それを少し餘計に喰べた。それから、機嫌よく安土町の家へ歸つてくると間もなく、痢病に罹つて、まだ二十五歳ばかりで、急に死んでしまつたのだ。

母が病床に倒れた時、一家は重い悲嘆に沈んだ。其の悲みの中で、ひとり、喜んだのは、私ばかりであつた。私は母が最期の呼吸を引取らうとした際にも、一滴の涙をこぼさなかつた。

「お母はんが亡くなりやはつたら、悲しいやろ。」

と傍から親戚の一人が私の頭を優しく撫でゝ、云つた時、私は氣むづかしく眉をひそめて首を左右に振つた。

「あんな奴は死んだ方が宜いやないか、早く死んでしまへ。」

と私は怒鳴つた。母の愛を感じないで、母の嚴冷のみを知つて居た幼年の私の單純な心には、母の死を望まないまでも、冷

めたい母の手から一日も早く解放されて、もつと暖い、やさしい人の手に抱かれたいと云ふ望みが、不知々々動いて居たのだ。だから、いたましい母の死は、却て私に母の壓迫から免れる序幕のやうにも考へられたのだ。私は成人の後、當時のことを思ふと、苦い懺悔で胸が一杯になる。成程、私の母は、潔癖で、癇が強くて自分が生んだ子を嫌つて、母らしい愛を表面に見せなかつたが、それでも、母は矢張母だ。何處かに私のことを思つて居たのだ。

「早く死んでしまへ。」

此の鋭い一語を私が臨終の母に浴びせた時、母も流石に心持よくなかつたにちがいない。私は今もそれを思ひ出す毎に、母に済まないことをしたと云ふ深い懺悔に心をずたずたに責めさいなまれる。母と私とは、どう云ふ悪縁の下に生れたのであらう。不幸な母であり、不幸な子であつた。

母が愈よ呼吸を引取ると、母の義弟が、剃刀を持つて、黒く長い美しい髪を涙のうちに剃りこぼつて、綺麗な坊主にしてしまつた。其の時、靜かに經帷子を着せられて横に寐かされた母の顔を見ると、すつかり土氣色になつて凄かつた。今まで呪ひの眼でぢつと母を見て居た私は、新たに恐怖の色を浮べて、少し離れたところから、母の顔をも一度覗いた。

恐怖の夢、歡樂の夢、哀愁の夢

母が世を去つてから、私は祖母の手一つで育られるやうになつた。私の父は、母の歿後、大分、病氣がよくなつて病院から歸つて來たが、腦の働きが全く鈍つて、道修町時代のやうに、敏活に商賣をすることが出來なかつた。無能力な痴呆のやうになつてしまつて居た。

「私の金を返しておくれやす、そりや貴方(あんた)の金でごわへん、私の金でごわす、貴方が私を欺して取つたんや。」

父はこんなことを折々ひとり言のやうに喋つた。父の胸は、隣の男に欺かれた殘念さと金に對する強い執着とで一杯になつて居たのだ

私の祖母は、父のひとり言を聞くと、

「何を云つてるのや、萬助、しつかりしなはらんか。」

と聲を勵まして叱り付けたさうだが、こればかりは、中々、やまなかつた。だが、其の他は、普通の人と外見上變らなかつた。唯食事の時に、急いで、飯を口へ入れて、いつもがつがつ餓えて居る人のやうに、何でも、貪り喰べるやうな醜いノが漸たに出來た丈だ。

父は、別に何もせずに、ぶらぶらして居たので、毎日、私の

遊び相手になつてくれた。父は繪を習つた經驗がなかつたけれども、一體に器用であつたので、小さい手帳へ章魚が鉢卷きをして踊つて居るところや、青い波の上を帆かけ船が走つて居るところや、赤い提灯がぶらさがつて居る氷店などを描いてくれた。

「お父さん、今度は馬を描いてんか。」

父は默つて、筆をさつさと搬んで、立派な髯をはやした軍人が肩を怒らせて、駿馬に跨り乍ら、勢よく駈けてゆくところを描いた。

「それから山を描いてんか。」

父は首肯いて、富士山の頂上から旭日がぱつと出たところを描いた。私は斯うして、時の經つのを忘れた。

私は、また繪本を見るのが好きであつた。だが、其の日の生活に追はれて居た私の家では、一冊の繪本を買つて貰ふ餘裕がなかつた。道修町の時代からあつた古本を押入れの中から取り出して、僅かに新しい繪本が得られない淋しさをまぎらした。それ等の古本のうちには「百人一首」や「三世相」や「義經一代記」などがあつた。どれも、これも手垢のあとが着いて、表紙が破れさうになつて居た。今も私の頭に印象されて居るのは「義經一代記」のページを繰つてゆくと、牛若丸か、多勢の木葉天狗を相手にして山上で劍術を戰せて居るところや、水の滴るやうな、濃艶な折鶴姫と親し氣に何事かを語り合つて居るところだ。錦絲で織り出されたやうな牛若と美姫との戀！　私には、未だそれがわからなかつた。

二

其のうち、安土町の裏長屋へ引越してからの最初の冬が來た。其の時分、私が知つたのは、大福餅と燒芋の味であつた。大福餅は、一個五厘だつた。大きさは、炭團ほどあつて、薄平たくて、鹽氣の多い餡が這入つて居た。私は木枯の吹く夜、堺筋にある饅頭屋へ駈け付けて、店頭の平たい、圓形の鐵板に十個ばかり載せて、ほかほかと火で暖めてある大福餅を一つ買つたことが度々あつた。それを懐ろへ入れて歸つて、未だ暖味の殘つて居るのを、ぽつぽつ喰べるのが、樂みだつた。

其の時分、私は毎晩、祖母に抱かれて、奥の間の薄暗い行燈に照らされて寐た。夜が更けると、夜警の拍子木の音が遠方に聞えて、犬の吠える聲が妙に私の神經を刺戟した。私は天井を見つめ乍ら、ぢつとそれ等の音に耳を立てた。突然、鼠ががさがさと荒れる音がしたかと思ふと、暫く四邊が靜まり返つた。其の時、二階には誰れも居ないのに、段梯子をとんとんと靜か

に下りてくる人の足音が、はつきり聞え出した。

私は急に恐しくなつて蒲團の中へもぐり込んだ。今にも、襖を颯と開けて、誰れか山賊のやうな顔をした男が、突然出て來て、私等の枕許にぬつと起つのではなからうと、小さい心臟をどき付かせて居たけれども、別に何者も出て來る樣子がなかつた。だが、倒の足音は、少し遠ざかつて、消えたかと思ふとまた前のやうにはつきり繰返された。何だか太い杖をついて、何者かが段梯子を下りてくるやうにも聞えた。姿が見えぬだけに、却て恐しさが増して來た。祖母は、左樣したことを知らずに鼾聲をかいて安らかに寐て居た。

其の後、毎夜、例の怪しい足音と杖をつくやうな音が聞えた、其の都度、私は蒲團を頭からすつぽり被つて、呼吸を殺しながら、小さくなつて居た。後で、其の事を祖母に話すと、

「貴郎のお母さんの魂が歸つて來たのやないか。」

と云つた。母の魂とか、幽靈とか云ふことについては、私にわかりやうもなかつた。だが青年になつてから、私は後に殘して置いた小供のことが氣にかゝつて、母が其の靈を現はしたのであらうと思はれた。けれどもあの怪しい物音か、眞に何であつたかは、今日もわからないのである。

其の冬、私の一家は、生活の上で全く行詰つた。長い間の居喰ひ貧り喰ひで、金はなくなる、家財は減る、此の上は乞食になつて街頭にさまよふか、それとも、一家がばらばらに離散するかのほかに方法がなかつた。祖母は、其の事を非常に心配して、田島に嫁して居る私の叔母（父の妹）に相談した。叔母もそれには同情して、自分の臍くり金の中からいくらかの資金を融通して、何處へか煙草店を出すことにしてくれた。そのため、私の家は、急に安土町を去つて新町へ移つた。

□

新町邊の空氣は、道修町や、安土町とは、すつかりちがつて居た。其處には、近松や、西鶴によつて描かれた古い傳統の誇りを持つて居た遊廓があつた。夕霧伊左で名高い吉田屋があつた、梅忠の濃艶なロマンスを思はせるやうな情調が豐かに流れて居た。それに角藤定憲が「豪膽の書生」や「戰爭餘談上野曙」を上演して始め　當時の民衆に壯士芝居を見せた新町座、あつた。

私は、勿論未だ左樣したことを知らなかつたけれども、一體の空氣が安土町に居た時よりも、賑かで、陽氣だと云ふことだけはわかつた。私の家は、問屋橋筋を二三軒、東へ這入つた北側にあつた。御茶屋（東京の待合に當る）や、貸座敷のあると

ところとは、三町ばかり離れて居た。新町座へは一町半ばかりあつた。家の両隣りは、大きなうどん屋だつた。筋向ひには蒲鉾屋、眞向ひには、金物屋があつた、而して問屋橋筋へ出ると、極彩色の玩具箱をひつくりかへしたやうな美しい小賣店が澤山軒を列べて居た。

左様した場所で、私の家は、見すぼらしい、小さな煙草屋を開いたのだ、其の時分は、未だ紙卷煙草と云ふものがなかつた。店には、長方形の大袋や、小袋に入れた煙草が、ずらりと箱に入れて列べてあつた。奥の方に据えた大きなガラス戸棚の中にも、一杯、煙草が詰つて家中、其の匂ひが漂うて居た。叔父や、父が交代に店に坐つて居たが、叔父は若いに似合はぬ怠け者で、一向、商賣に身を入れなかつた。毎日、講談本のやうなものに讀み耽つて居た。私の家が此へ來る迄、叔父は、一時、東京へ出て居たが、思はしいことがなかつたと見えて、無一文になつて歸つて來たのである。

煙草屋も、有望な積りでやつて見ると、開業匆々、余り繁昌しなかつた。豫定したやうな利益がなくて、喰ひ込む方だつた。だが六歳になつた私は、一向、そんなことを知らずに、思ふ存分に遊んだ。其の遊び友達のうちには、蒲鉾屋の吉やんが居た。吉やんは、色の白い、愛らしい子で、私よりは、一つ二つ年上だつた。朝晩、魚ばかり喰べると見えて、吉やんに近付くと、魚の香がぷんとした。吉やんは、頭髪を今の角刈のやうにして、頬のあたりが、ふつくらして居た。物を云ふと、時々吃つたが、それが私に可笑しくて堪らなかつた。

吉やんは、時々、私の家へ遊びに來た。二人は、いつも、芝居の眞似事をして、立廻りなどをやつた。と云ふのは、手近なところに新町座があつて、時々、少しばかりの小遣ひを貰ふと見物に出かけたからである。其の頃から、私は可なりに芝居が好きだつた。私が見たうちで、後に纏つた印象がおぼろ氣ながら殘つて居るのが三つあつた、其の一つは今の實川延若が未だ延次郎と云つた時代に小供芝居の座頭になつて、新町座で旗揚げをした時のことだ。延若は、彼れの得意の出し物として、中幕に三七信孝の馬斬りを演じた。それは、恐らく延若が十一歳位のことであつたらう。

其の時、延若が、黒羽二重の着物を着流して、悠々と花道へ出て來た時の態度や、眼の配り方に寸分の隙がなかつた。殊に其の眼に力があるやうに思はれた。私は勿論、それが何と云ふ俳優であつたか知らなかつた。後で「あれは、延次郎や」と教へて貰つた。それ以來、延若は、私が一番好きな俳優となつた、

□

其の後、私は新町座で「妹背山」や「吃又」などを見たが、特異の印象を受けなかつた。それよりも、私を驚かしたのは、西洋手品の一座だつた。彼等が呼び物としたのは、女の磔付けで、劇場の表にはそれの大きい看板を出してあつた。それから想像して、私は深い好奇心を持つて居た。いろいろの奇術が濟んで、磔付の場になると、束髪に結つて濃く化粧した若い洋装の女が舞臺の眞中に現はれて、十字架を背後にして起つた。それが磔付けになる女主人公だらうと私は想像した。だが、其の女は極めて落着き拂つて、可憐な眼を見物の上に注いで居た、

「さあ、これから皆さんに磔付けの場を御覧に入れまあす。」

と云ふやうなことを云つて、歸天齊正一のやうな男が、洋服を着た二人の若者に命じて、束髪の女を十字架の上に手きびしく縛り上げさせた。場内の見物は、憐れな犠牲者の最期を見るやうに全く靜まり返つた。それから歸天齊某師が、相圖をすると、二人の若い男は、きらりと寒むさうに光る釼を以て、左右から、女の胸をグサと突いた。本物のやうな血がたらたらと流れ出て、純白の洋裝が鮮かに眞紅に染つた。それと同時に、女の顔は急に青ざめて、眼をふさいでがつくり首を垂れた。小供の眼には、それが確かに呼吸を引取つたやうに見えた。

「あの女は死んで了つたのだ。」

私は左様思ひつめて、手に汗を握つて、ぢつと見て居た。若い男は手早く十字架から女を引き下して、四角な棺の中へ入れて、上から嚴重に釘を打つた。其の時歸天齊某師は、直立不動の姿勢で棺の方へ斜めに向つて、ピストルを差向けた。臆病な私は一體、どうするのだらうと胸をどき付かせて見て居ると、何だか分明らぬ咒文のやうなことを口早やに唱へて、ポンと一發放つた。

それから一分と經たないうちに、私が死んだらうと思つた女が、元のやうに、いきいきした表情をして、新しい服裝で花道へ現はれた。

「不思議だんな。」

隣の男が、感嘆の叫びを揚げた。私はどうしてあの束髪の女が棺の中を抜け出したのか知らなかつたので、殊に不思議を感じた。私が西洋手品の面白味を知つたのは、此の時からだ。

今一つ私の頭に印されのは、其の頃の芝居に行はれて居た古風な習慣であつた。其の頃、芝居がはねて、客がぞろぞろ木戸口を出てゆく時分を計つて、座方の若いものが二人、一人はおかめの面、一人は、ひよつとこの面を被つて、黄や赤い手拭で

頬被りして踊つた。

ドン、ドコドン、カカン、

ドン、ドコドン、カカン、

他のものが、斯う云ふ調子で、鐘太鼓を賑かに叩くのにつれて、左右の尻を輕く振つて、ひよつとこ踊りをやつたものだ。私はそれが好きで、木戸を出て、半町ばかりも歩いてからも、ドン、ドコドン、カカンと云ふ調子が耳の底にこびり付いて離れなかつた。左樣した時、花やかな陽氣な芝居の情調から遠ざかつて、暗い、淋しい家へ歸つてゆかねばならぬかと思ふと、私の心は深く沈んだ。もう今夜の歡樂は、これでおしまひなのか、あとには何もないのか、左樣した哀愁に沈んで、名殘を惜んで、空に澄んで居る月を仰ぐと、私の眼からは涙がほろほろとこぼれた。幼年の日の悲み、私は、それを何とはなしに、芝居の夜の歸り道に始めて味つた。

□

吉やんも、矢張、私と同じやうに、芝居へ能く出かけた。それで、ある日、向ひの金物屋の鶴ちやんと云ふ女の子や、其の弟を私の家へ集めて、立廻りの眞似をした時は、太い棒切れや、貫ぬきなどを持つて、暴れたので、平生、何も云はぬ叔父が怒つて、私の頭をひどく打つたことがあつた。それでも、私は意地になつて、一層、暴ばれた。

鶴ちやんは、何となく、センシユアルな、インステンクチヴなところがあつた。ある日、薄暗い二階で、鶴ちやんと一緒に寢ころびながら、繪本を見て居ると、私は不思議に性欲を感じた。目鼻立が小さくて、少し瘦せて居た女の子ではあつたが、自然に魅惑の力があつた。私が異性に對する最初の感じは、此の時、始めて起つたのだ。私は吾知らず、鶴ちやんの手を固く握つた。

けれども其の翌日になると、もう鶴ちやんのことを異性として考へなかつた。矢張、吉やんに對するのと同じやうな具合で、鶴ちやんを見た。鶴ちやんも、私に手を握られ時のことを、けろりと忘れて居た。私らは、未だ春機發動期には、大分、距離があつたのだ。

だが、私は玆に卒直に告白する。私が自然に頭をもたげようとした性欲に惱まされはじめたのは、それから、四五年の後であつた。姉もなく、妹もなかつた私は、自分と同じ年頃の異性に接する機會が殆どなかつた爲め、どんなに淋しさを感じ、どんなにやる瀬ない思ひに沈んだか。内氣で、恥かしがりで、自分の感情を直ぐに外に發露するよりも、ぢつと内部に蓄へて居

た私は、異性を求めながら、却て異性から遠ざかつた。それ等のために、性慾に於ける悩みが、内に鬱屈して、非常に私を苦め、私の健康を害し、はては私を變態性慾にまで引きずつてゆかねばやまなかつた。其の最初の萠芽は、鶴ちやんと二階で遊んだ時の刹那に閃めいた感じから來たと云つて宜いのだ。私は性慾の上からも、執念深く、咀はれた子であつた。

(第二) 南久寶寺町

田島家の人々と船場情調の話

私は七歳の時、砂場大阪西區新町附近——の小學校に入學した。其の前に祖母が亡き母に代つて、私に假名を教へてくれたり、學校用品などを買つてくれた。私は、松竹梅が藍と金とで描いてある新しい墨を濃くすつて、硯の中に浮んだ銀色に光る墨汁をたつぷり筆に含ませたので、半紙へ字を書くことが好きだつた。

學校へ入學したのは、學期の始めか、それとも終りか、はつきり分明らなかつた。學年試驗の少し前位であつたらう。身體が弱くて、頭ばかりが並はづれて大きく、青白い顔をして居た私が、博多の帶を締めて、黒羅紗の前掛をした姿で、ぼんやり、教場のうちを見廻はして居たであらう様子が、今日思はれる。

私が入學すると間もなく試驗があつた。教師は、一同の生徒に向つて「ハトトマル」と書くやうに命じた。私に何の素養もなかつたなら、恐らく、非常に狼狽えて泣き出さんばかりであつたらうけれども、家に居た時分から、平假名も、片假名も大體覺え込んで居たので、直ぐに半紙へ「ハトトマル」とすらすらと書くことが出來た。

後で、學校から歸つてから、祖母から聞くと、近所の下駄屋の三ちやんは、一年間、通學して、假名をすつかり教へて貰つたのに、どうしたのか、僅かに「ハトト」の三字しか書き得なかつたさうだ。下駄屋の細君は、私の祖母に向つて「お家のぼんぼん(子息)とちがつて、三公の不成績には困ります。」と云つて、頻りに滾したさうだ。

私の好成績は、いつの間にか、親戚の人たちにも噂された。其の當時、長女を喪つて、非常に淋しがつて居た南久寶寺町の叔父は、私の叔母とお話し合つて、家庭の寂寞をいくらかまぎらすため、暫く私を田島の家へ引取つて、世話しようと云ふことになつた。間もなく、私は父に背負はれて、田島家へ至つた。玆で私の運命は、宜い方へ轉回しさうに見えたが、それは、

はかない幻影に過ぎなかつたことが後でわかつた。

□

南久寶寺町と云へば、船場の中にあつて、小間物問屋の多いところであつた。東京ならば、日本橋の横山町と云つたやうな場所だ。田島の家は、其處で木綿問屋をして、傍ら、郵便局——その時分の郵便受取所——をやつて居た。

新町の片隅に住んで、かすかな煙草屋をして居る家の子が、俄かに中産階級の部に數へられる家へ來た當坐は、狹い小川の魚が大海へ泳ぎ出たやうな感じがしないでもなかつた。田島の家は、店だけでも、私の新町の家よりも、遙かに廣かつた。店は二間に仕切つてあつて、一方では郵便事務、一方では、商賈をやるやうになつて居た。廣い土間には板を敷いて、木綿が山のやうに積み重ねたまゝ置いてあつた。大阪商店の特色に數へられるところの揚げ店——疊一枚足らずの廣さで店を仕舞ふ時は引上げるやうになつて居る——に紅から色に塗つた結界を立て周らして、老舗らしい、半ば剝げかゝつた紺暖簾に屋號「万を大きく染め拔いたのを、軒下から垂れて居た。

田島の家は、店のほかに仲の間、玄關、奥の間、庭園、土藏などがあつて、二階は殊にだゞつ廣く大きな物干もあつた。物干から一段高い屋根に火の見があつた。——火事があると、此へ上つて見るやうにしてあつた——臺所は、立派に出來て居た。天井が隨分高かつた。流し元の附近に、深い井戸があつた。其の隣りには私が生れて始めて見たと思はれるやうな大きな竈が据えてあつた。

私は最初の二三日間、ぼんやり日を送つた。勿論、私は始めて、此の家へ來たのではなかつた。以前にも、折々、誰れかに伴れられて、來た記憶があつた。其の時分は、未だ美しい從姉が生きて居て、能く私を可愛がつた。從姉が特に私を愛したのは、義理の母——私の叔母で田島の後妻——への關係からでもあつたと後で知つた。從姉は、お八重と云つて、其の頃、十八九歳であつた。先妻の腹に出來た長女で、其の性質は、聰明に過ぎて、細かいことにも能く氣が付いた。叔母は、從姉のことを話す毎に、一番、私を愛して居たと云ふのだが、私の印象には、唯一度、其の柔かい膝へ乘せられた時の感じが、幽かに殘つて居るだけである。

「清ちやん。」

と私の名を優しく呼んで、彼の女の痩せた白い大理石のやうな美しい頰を私の頰に當てた時、私は何とも答へないで、ぢつと從姉の顏を見上げた。面長で、目鼻立がはつきりとして居て、

月の下にあるかないかわからないほどの黒子（ほくろ）が、ぽつりと一つあつた。

從姉の膝に乘つて居ると、暖かい、やさしい、すがすがするやうな呼吸（いき）が、私の顔に感じられた。其のかすかな呼吸の音さへも耳に這入つた。私は小供心にも、從姉に對する一種のなつかしみ味を起した。

從姉と略ぼ同じ位の程度で、私を愛したのは、田島の隱居であつた。隱居は、奈良の人で、大阪へ出てから、毎日、茶粥を啜つて懸命に働いた人だ。貧乏のどん底に居た田島の家を再興して、大阪一流の木綿問屋にしたのは、皆隱居の力であると聞いた。隱居の印象？　それは殆ど私に殘つて居ないと云つて宜い。隱居の長男であるところの田島の叔父の赤い顔をもつと白くして、疱あばたのあとが少しあつたやうに、おぼろ氣ながら、思ひ浮べられる。冬の時分、海老茶色の毛糸の首卷きなんかして、前へ首を縮めるやうに、火鉢にしがみ付いて居たことがあつたやうだ。何分、四五歳位の時のことだから、これ以上の印象がない。

それでも、兎に角、これ丈、記憶して居るのは、私が當時、坊主の眞似をすることが好きで、それを隱居が喜んでくれたからだ。何故、私が僧侶のすることを度々眞似たのか、今日では、それが不思議で堪らない。けれども當時、祖母が月に二三回、必ず私を連れて常圓寺へ參詣したことを思ふと、其の理由は自然わかる。常圓寺へ行くと、私はいつも、祖母の膝によりかゝつて、四邊の光景にぢつと見入つたものだ。其の時、私は佛堂の莊嚴な様子や、稍薄暗いところに光つて居る黄金佛や、大きな蠟燭立てや、燦爛とした花瓶に活けられた新鮮な花の色や、かすかに風にゆらぐ燈明の澄んだ光りなどに、神秘的な美しさを私の小さい胸に印象された。それから左様した佛堂の中央に座つて、青い法衣に紫の袈裟をかけた和尚が、佛の前に朗かな涼しい哀調を帶びた聲を出して、三部經を誦するのが、自然、私の宗教的情操を挑撥するやうにも感じられた。

何にしても、私は不知々々、寺院の神秘的な、もの淋しいうちに悲みがあり、悲みの底に一味の法悦が湛へられて居るであらう空氣の中に溶け込んだのだ。それで私は、未だ一度も、正式に教へられたことがないに關らず、いつの間にか、三部經をすつかり覺えて了つたのみならず、常圓寺の和尚が、説教をする時の文句や、調子までも諳（そら）んだ。

私は家へ歸ると、大きな萌黄色の風呂敷を袈裟の代りに肩から胸へかけて、床の間に座りながら、説教の仕方を眞似た。和尚のやうに、行儀よく、きちんと座つて、三部經を暗誦した。

田島の隠居は、それを知つて居たのである。

だから、私が田島へゆくと、

「和尚さんが來やはつたぜ。」

と隠居は柔かに、きげんよく笑つたものだ。そして私を奥の床の間に座らせて、説教の眞似をさせて、有難さうにぢつと耳を傾けたものだ。其の時、私は、

「佛說阿彌陀經、如是我聞……」

とやりだしたことを覺えて居る。說教の方は、どんなことを喋つたか、殆ど記憶に殘らないけれども「朝に紅顏あつて、夕に白骨となる。」と云ふやうなことを物知り顏に得意になつて云つたさうだ。いつか、私に叔母が後で私に話してくれた。

其の後、間もなく、田島の隱居は、安樂に世を去つた。ところが、私が坊主の眞似をすることは、いつか、常圓寺の和尚にも知られて了つた。

「此のぼんぼんは、本當に覺えが宜いな、寺の養子にしたら、必度、えらい坊さんになるやらう。」

こんなことを、ある時、戯談半分に私の祖母に話した。祖母は、私が物覺えの宜いことをほめられたので、ほくほくして居たが、常圓寺の養子云々のことは、勿論、戯談にちがいないと思つて居た。ところが、和尚は、段々、私の樣子を見て、宗教的天才の素質がどこかにあると思ひ込んだのか、今度は、眞面目になつて、私を寺の養子にしたいと云ひ出した。寺には、私よりも二三歳上の長男が居たのだつたが、それよりは、一段、私の坊主の眞似をするところに傾倒したのだ。流石に和尚を尊信して居た祖母も、これには、困つた。それでなくとも、唯一の孫として、自分の眼の中へ入れたいやうに思つて居る上に、西野の長男であるのだから、常圓寺の話は、直ぐに斷つた。

それ等の事情を知つたのは、私が十二三歳の時分になつてからだ。祖母が、私に常圓寺の養子一件を話すと、

「坊主の養子？ そんなことは死んでもいやや、誰れが坊さんなぞになるもんか。」

私は噛んで吐き出すやうに云つた、なぜ私が幼少時代に坊主くさいことが好きであつたのか、未だに私にわからないのである。

□

田島の當主千右衛門は、其の父が努力家で世の中の辛酸を嘗めつくしたのとはちがつて、最初から、船場のぼんちとして鷹揚に育つて來た人であつたから、木綿問屋をして居ても、一向、商賈の呼吸を知らなかつた。それに偏屈で、お世辭を云ふことと

を嫌つた。其の代りに腹の底は極綺麗で、正直であつた。人を欺すよりは、能く欺される方であつた。一寸見たところは、宜い感觸を何人にも與へなかつたけれども、信用されるところはあつた

　私が田島家へ厄介になるやうになつた時分は、叔父の千右衛門は、五十の坂を二つ三つ越えて居た。風采は上品で、顔のすべてが整つて居たが、眞赤な酒に醉つたやうな色をして居て、近眼だつた。いつも、人を見る時は眼を細くする癖があつた。叔父の樂みは、唯其の二人の子女の上にかゝつて居たのだが、長女のお八重が肺病で亡くなつてから、大分落膽して居た。それに、長男の島次郎は、當時十九歳か、十八歳位で、堂島の仲買人の店へやつてあつたので、叔父は、何だか急に家の中が淋しくてならなかつたのだ。そして叔母が身體が弱くて、全く子を設ける望みがなかつたところから、一層、寂寞を感じたのである。

「せめて小供がひとりでも居たら……」

　と云ふことから、私が田島の厄介になることに定つたのだ。だか、叔父は、其の晩年、呼吸を引取る少し前に私に向つて、始めて叔父らしい愛を示してくれたが、少年時代の私に向つては、表面暖かい愛を示したことが、一度位あつた丈で、他は寧ろ冷淡なやうに私の眼には見えて居た。何れかと云へば、晩年、私に對して稍信賴し始めた時の叔父を別とすると、私は餘り叔父を好まなかつたのである。小供心に私は叔父を氣むづかしい、偏屈な人だとのみ思ひ込んで居た位である。

　叔母は、お菊と云つて、其の時分、三十八九歳であつた。極内氣な、柔順な性質で、どんな時、どんな場合にも出しやばつたことがなかつた。良人の云ふ通りになつて居た。義理の子に對しても、眞實の子に注ぐやうな深い愛情を傾けた。だから、田島の家は、一度も風波の起るやうなことがなかつた。

　叔母は、美人と云ふ方ではなかつた。健康も優れないで、いつも肩が凝ると云つて、按摩にもませて居た。だが、顔色が白くて、目鼻立に難がなかつたし、一體に溫和しく、上品に見えたから、木綿問屋の妻女として、恥かしいところはなかつた。

　叔母は流石に私に對して、暖かい愛を持つて居た。自分の弟の子で、而も五歳で母に別れて、貧乏と寂寞との中にひよろひよろと育つた私のことを思ふと、私が憐れに思へてならなかつたのであらう。私は何となく、叔母が、自分の眞實の母のやうに感じられたことがあつた。叔父を恐れて、自分から近付かうとしなかつた私も、叔母には、最初から親んだ。それほど、叔母は宜い人であつた。誰れが見ても、憎めない穩かな、柔かい

ところのある女性であつた。

當時、私が一番、好きなかつたのは、叔父が、私を呼ぶ時、

「清公！」

と厄介物だと云ふやうな意識を以て、私の名を呼び捨てにすることであつた。私は西野清之助だから、單に「清之助」と呼ばれることは、左程、いやでなかつたが、勞働者が其の子に對して云ひ放つやうに「清公」と云はれるのが、どうも面白くなかつた。

それに叔父は、私に向つて、打解けて、快く笑ふやうなことがなかつたので、私は叔父に甘へると云ふやうなことを一度もしなかつた。淋しく育つた私は、田島へ來て、一層、陰氣になつた。何だか、心の底に抑へ切れない暗鬱なものが横はつて居るやうに感じた。だが、其の時分の私は、勿論、それをはつきり意識したわけではなかつたのだ。

私の學友と人形淨瑠璃の話

私が田島の家から、博勞町の小學校へ通ふやうになつた頃は、もう尋常二年生となつて居た。當時の讀本は、漢字ばかり多くて、大分むづかしかつた。其の最初のページには、世界の五大人種のことが述べてあつた。

「凡そ地球上の人種に……」

と書き出して「亞細亞人種、阿弗利加人種 亞米利加人種、歐羅巴人種」と云ふ風に數へ立てゝ、劃の多い字が行列して居た。だが、私は記憶力が宜かつたので、どうにか苦痛を感じないで濟んだ。

其の後、私が一番の成績で、三年級に進むと、もう讀本の體裁や内容がすつかり變つて居た。二年級の時分は、黄色な表紙で、内容はすべて薄い日本紙を用ゐて、木版刷の薄汚いものであつた。ところがは、三年級のは、Kと云ふ本屋で出版したもので、表紙が薄樺色で内容は全部洋紙を用ゐて、「ナショナル・リーダー」にあるやうな插畫が入れてあつた。文字も、大分、優しくなつて、漢字よりは、假名の方が多くなつて居た。

其の時分、私の學友となつたのは、眞向ひの眼鏡屋の息子である。高原龍次郎と云ふので、私は「龍ちやん」と云つて居た。龍ちやんの家は、店前へ大きな眼鏡の看板を出して居た。私らはそれを「天狗さんの眼鏡」と云つて居た。店員や、若主人が澁ぬりの四角な箱を前へ置いて、眼鏡の、玉を磨いたり、すかして見たりして居るのが、私には、何となく、奇妙に思はれた。

龍ちやんは、まん丸い顔で、色が白かつた。そして眼が少し奥の方へひつ込んで居た。稍粘液質の方で、時々、寢小便をす

る癖があつた。學校の成績は、いつも中位であつた。だが、私は龍ちやんが一時好きであつた。何でも、二三度、龍ちやんの家へ遊びに至つた。

龍ちやんは、いつも、私を土藏の中へ伴うて遊んだ。私は、餘り土藏を好まなかつた。重苦しい音がする戸を開けて中へ這入ると、しめつぽい、冷めたい空氣が、何だか別の世界へ來たやうな感じを與へた。土藏の中には、眼鏡の玉や、いろいろの原料が一杯に積んであつた。

ある時、私が龍ちやんと土藏で遊んで居ると、粋な藝人のやうな若主人が來て、

「土藏を閉めまつせ、早う出なはれや。」

と云つた時、龍ちやんは狼狽したやうに、私よりも先きへ出て了つた。私は龍ちやんよりも遲れたので、或は此の儘、戸を閉められて、外へ出ることが出來ないだらうかと思つて、泣き出しさうにしたが、やつと、勢ひを付けて、土藏の外へ出た。すると、若主人が手に持つた鍵をがちや付かせて、がらがらと土藏を閉めた。私はほつと鬼の口から逃れたやうに安心した。

土藏について、私は、恐しいやうな、淋しいやうな、神秘的なやうな感じを抱いて居た。油屋の久松が、土藏の中へをし込められて、お染が、夜に入つてから、久松を尋ねて行くところは、芝居で人形振として能く演ぜられるが、それは、餘程、後に知つた濃艶な場面である。左樣した白熱化した戀と土藏とを結び付けて考へることは、八九歳の私には不可能だつた。

私は、叔父の家の土藏にも、時々、這入つたことがあるが、番頭とか、小僧とかが、私と一緒に居てくれないと、何處からか、妖怪か、幽靈が出てくるやうな心持ちがして、二階に上つて居る時などは、番頭が先きに下りると、逃げるやうに階段を飛び下りるのが常であつた。其の土藏の二階には、正月に用ふる金屏風や、お雑煮の膳椀や、箪笥、長持の類などが一杯に列べてあつた。どれも、これも、しめつぽい、冷めたい空氣のうちに寂然と横はつて居た。

ある箪笥の上には、「法然上人一代記」などの和本が積み重ねられて居た。左樣かと思ふと薄暗い二階に不圖、艶めかしい浮世繪などが見出された「田舎源氏」などのロマンスに結び付けた枕繪などがあつた。文學好きな傾向が早くからあつた私は、それ等のものに手を觸れて見た。そして枕繪などから、性慾の世界へ出てゆくことを、自然に暗示されたのである。だから、私は土藏を恐れたけれども、また其處には、美しい秘密があるやうな氣がしてならなかつた。

大阪の商家の小供は、土藏の中で能く遊ぶことがあるが、ま

た餘りに烈しい悪戯をすると、懲らし目のため、唯ひとり土藏へ押こめられて、半日位、薄暗いところに置かれることがある。私のやうに氣が弱いと、一種の恐怖を感ずるので「土藏へ入れるぞ」と云はれると、慄え上る程だつた。

□

龍ちやんのことから、いつか土藏の話になつて了つたが、龍ちやんは、一度、私を羨ませたことがあつた。それは、天長節の日であつた。學校の祝賀式へゆくのに、彼れは、大人と同じやうなフロック・コートを着て、黒いネクタイを付けたものだ。いつも、のんびりした顔をして居た龍ちやんが、急に大人らしく引締つて見えた。

其の日、私は叔父が、特に私のために誂へてくれたらしい水兵服を着て、赤い靴下をはいて學校へ出かけようとして居たが、龍ちやんのフロック・コートを見ると、私も、何だか、フロツクが欲しくて堪らなくなつた。水兵服の小供らしいところが、どうしても、私の氣に入らなかつた。私は學校へ出かけるのが、いやになつた。けれども自分の父でない叔父の家に厄介になつて居ることが、おぼろ氣にわかつて居たので、私は、どうも、水兵服は好ましくないとは云ひ得なかつた。幾度か、外出を躊躇した後、近所の人たちに見られるのが氣恥かしく思はれて、駈け足で横町まで至つて、ほつと吐息した。其の後、私は再び水兵服を着ようとしなかつた。龍ちやんのフロック姿が立派で、私の眼に何となく、勝ち誇つた凱旋將軍のやうに見えたからである。

其の時分の生活中で、私の頭に一番はつきり印象されて居るのは、盆と正月前後のことである。大阪のローカル・カラーが、最も鮮かに出て居るのは、夏祭と十日戎と節分などであつた。

私は少年の時に見た夏祭の印象から記して行きたい。田島の家は、博勞町の稲荷神社の氏子であつた。其の頃、稲荷の附近は、船場の中で、一寸した賑かな場所になつて居た。其處には、彦六座（今の稲荷座）と云ふ人形芝居があつて、年中、大抵開場して居た。彦六座を中心に各種の飲食店や、寫眞屋や、揚弓店などが、ちらほら見えた。田島では隔月一回位、必度、彦六座へ出かけた。其の都度、叔母は私を同伴してくれた。

大阪は近松以來、淨瑠璃の本場であるが、八歳頃の私には、其の妙味も何もわから筈がなかつた。私の印象に殘つて居るのは、開幕の最初の光景や、情調である。幕が開くと、「いよほー、何々太夫様へ、何々太夫様へ東西々々、東西ーい」と東京言葉とちがつた柔かい、のんびりした調子で、少し困

が拔けたらしい老人の聲かと思はれるのが、揚幕のうちから斯う呼ぶと、賑かな、陽氣な三味線の音がし始める。それが不思議に人形淨瑠璃と調和した大阪特有の氣分を漂はせたものだ。

語り物や、太夫のことも一向、私には分明らなかつたが、山が高座へゆるぎ出したかと思はれた大隅太夫の巨軀だけは、流石に小供の注意をも惹いた。だが、更らにそれよりも、一段の注意を呼んだのは、太夫が一段語り終つて、舞臺が變ると、彼等は座つたまゝ、背後の衝立と共に、ぐるりと後へ廻つて、新しい太夫が低頭した形で現はれる仕掛がしてあつたことだ。そして變つた衝立に大きい松と旭日とがあつて、鶴が二三羽が居るところが描いてあつたことも、私の眼に印象された。

人形芝居の方は、當時、桐竹紋十郎や、吉田玉造と云つたやうな名人が居たのだが、それも、私にわからなかつた。私は唯ぼんやりと舞臺に現はれる人物を見て居たに過ぎなかつた。唯小供の頭にも、直ぐに分明つたのは、赤鬼や、青鬼の出る『大江山酒顚童子』の芝居であつた。酒顚童子が巨人像のやうに座つて、眞赤な顏をしながら、朱の大盃を傾けた姿や、丹碧に彩られた羅生門の前で、渡邊綱が、鬼と戰ふところなどは、誰れの說明をも待たないで、私にも分明つた。

「鬼の印象? それは、『今昔物語』とか『古今著聞集』とか云つたやうなものを知らなかつた時分のことだから、ある緣日の夜店で一度見たことのある覗き機關から類推して、鬼のことだは、おぼろ氣ながら、私に分明つて居たのだ。

覗き機關と云ふと、もう今日の少年には、わからないにちがいない。それは、大人の茶碗位の大きさがある顯微鏡のやうなものを、いくつも丸い穴へはめこんで、其の向ふに、地獄極樂の圖などを置いて、それを擴大させて見せたものだ。圖は幾枚もあつて、一つ宛、說明してゆく毎に、變つた圖を出して見せるやうになつて居た。

地獄、極樂などの覗き機關は、天王寺の彼岸詣りの人々、或は阿彌陀池の釋尊降誕祭に甘茶を貰ひにゆく人たちをあて込んで興行したものだ。私が、それを阿彌陀池の境内で、祖母と共に見た時は、可なり大きな紙の人形を外に起たせて、内部のぜんまい仕掛けによつて、自然に胸にかけてある鐘をかんかん鳴らすやうにしてあつた、それに高く揭げ出した看板には、極樂と地獄の圖があつて、赤鬼、青鬼などが出て居た。鬼についての最初の印象は、斯うして、覗き機關から得たのである。

彥六座で見た鬼は、人形のもあつたが、羅生門のところで、渡邊綱と戰ふ時は、人形使ひが赤鬼、青鬼の面を着て、太い鐵棒を持つて現はれた。棕梠のやうな頭の赤い毛、爛々と金色の

光りを放つ眼、紅炎の燃え立つやうな裂けた口、黄な虎の皮の褌などが、私には、恐しいよりも、寧ろ陽氣な、滑稽な感じを與へた。私は、鬼が出てくると、無暗に可笑しかつた。

殊に物忌みだと云つて家に籠つて居た渡邊綱のところへ、叔母がはるばる田舍から尋ねて來て、綱が羅生門で斬り取つた鬼の片腕を見せてくれと云つて、綱が辭するのも聞かず、到頭、眼の前へ出させた瞬間、ぢつと見入つて、突然、片腕を掴むと同時に、鬼の正體を現はすところは、私に片唾を吞ませるほど面白かつた。そして鬼の人形が、美しい裃を着けた人形使ひと一緒に一筋の張金を渡つて宙乘りをしながら、土間の上の天井を荒れ廻る具合が西洋手品の幻術などを見るのと同じ位の感動を私の頭に與へた。

大阪のローカル・カラーと年中行事の話

閑話休題、さて稻荷神社の祭は、大抵七月中旬に行はれた。其の日は、町内の氏子たちが、簾を垂れたり、幕を張つたりして、休業した。軒毎に提灯を出すことは、東京と少しもちがわないけれども、其の形は、神社のと同樣に、大きかつた。それに、大阪特有の習慣とも云ふべき細長い提灯を別に立てる家が多かつた。それには御神燈と書いてあつた。それを出すのは、男の子がある家に限つて居た。男の子が二人あれば、それを二つ出した。三人あれば、それを三つ出した。其の提灯は、長さが二尺、周圍が六七寸あつて、上下の輪の部分は、朱塗りや、黑塗りにしてあつた。提灯を支える長い棒は、螺鈿を用ゐて、裝飾してあつた。宵祭の時、一家のものが、男の子たちを伴れて、稻荷神社へ參詣する際には、小倅らに細長い提灯を持たせて出かけるのである。左樣した人々の群が、涼しさうに瞬く提灯の光りを薄青い夕の色のうちに見せてゆく姿は、賑かに美しかつた。

夜に入ると、すべての町の提灯や、神燈がぱつと輝いて、簾を垂れた揚げ店で、將棋をさしたり、碁を打つたりする家が多かつた。私も亦揚げ店のところで、番頭らと一緒に涼んで居ると、

「二輪加ぢや、二輪加ぢや。」

と呼ぶ吞氣さうな聲がした。不圖、其の方を見ると、裃を着て、チヨン髷の鬘をすつぽりと頭へ被つた二人づれの若い男が、田島の揚げ店に近付いて來た。番頭の一人が、彼等を呼び留めて、二輪加を所望すると、彼等は、飄逸な態度で、立ち留つた。

其のうちの一人が、

「寳藏へ忍び入り、奪ひ取つたる此の短刀。」

と云つたやうなことを雁次郎そつくりのしや枯れた聲で云ふと、今一人の男が、それにもつれかゝつて、一寸した臺詞の受け渡しがあつて、一方は逃げようとする、一方は後を追ひかけようとするところで、輕い落ちを取つたのだが、其の文句は、すつかり忘れて了つた。

夏祭には、神輿の渡御があつた。それは、東京と變らなかつた。も一つ「あばれ神輿」と云ふのがあつた。それは、東京のとは少し趣がちがつて居た。全部、殆ど金を纏めた燦爛としたもので、四方に垂れ下つて居る鈴や、瓔珞のやうなものが、動く毎に鏗鏘の音を發して、ちやりん、ちやりん鳴つた。

それから「あばれ太皷」と云ふやうなものがあつた。大阪では、これをも「あばれ神輿」と云つて居る人もあるが、私は「あばれ太皷」と名付けて居る。それは、東京の樽天王と云つたやうなものに四人の男が乘つて、

どでどん、どんどん。

どでどん、どんどん。

と力を入れて、中央に据えた大きい太皷を叩くのだ。其の男たちは、荒い棒縞の浴衣を着て、太い綱襷を十文字にかけて、紅絹で作つた四角な頭巾のやうなものを被つて居た。彼等は、各自太い短い棒のやうなものを持つて、左右へ首を振りながら、調子を取つて、道に立つ見物の少年の心臓に勇ましく響くやうに、力強く太皷を叩くのだ。其の都度紅い絹の頭巾が、搖れる。

よいささ、よいささ。

と一人の指導者のやうな年寄男が、渋團扇を盛んに振つて、「あばれ太皷」を舁ぐ若き人たちの氣勢を煽り立てると、「あばれ太皷」は、華美な浴衣を着て、汗の瀧を流して居る數十人の若者や、眞鍮の小さい鈴を腰に付けて、きりつと鉢卷をした少年らと共に右へなだれかゝるやうに急走したり、左へ怒濤のやうに押寄せたりして、狭苦しい町の中を縱横に暴れ廻るのだ。私は、呆氣に取られたやうにして、路傍で、ぢつとそれ等の光景を見て居たものだ。

「あばれ太皷」と共に大阪のローカル・カラーを象徴するのは、東京の屋臺に似た「だんじり」である。東京の芝居好きの人たちは、左團次や、延若の『團七九郎兵衛』の狂言を見て、長町裏の場で、舅を殺した團七が「だんじり」の調子につれて、頬被りしながら、半ば喪心したやうに歸るところを見られたであらう。

ゑらいやつちや、ちやうさゝ。

ゐらいやつちや、ちやうさゝ。

の聲に交つて、

ちきちん、こんこん。

ちきちん、こんこん。

と「だんじり」の囃子が、遥かに聞える場面は、誰れの心をも強く打つ。だが、芝居では囃子だけで「だんじり」を見せない。それは一寸、説明し難いが、全部、立派な木で作られて、いろいろの彫刻がしてある。屋根の正面には、龍の頭や、獅子の頭を彫つて其の眼には水晶の玉が鏤めてあつた。下部には、竹に虎などを彫つてあつた。「だんじり」の中には、鉦や、太鼓を吊るして、威勢の宜い若者が、囃子をするにつれて、「だんじり」に付けた太い紅白だんだらの綱を數十人の男が徐々に引く。其の囃子がゆるやかな時は「だんじり」も徐行する、囃子が急劇になると「だんじり」も走り出すのである。少年の心を快く揺り動かすやうな「だんじり」をどの位、私は喜んだらう。けれども内氣な私は、其の賑かな空氣の中へ加はることをしないで、いつも、「だんじり」が見ゑなくなるまで、ぢつと見送つて居たのみであつた。

□

夏祭が過ぎると、町が急に淋しくなる。それを補ふのは、少女たちの「をんごく」であつた。「をんごく」は、いつ頃から始つたのか、わからないが、大阪特有の遊びで、今は全く廢れたけれども、私の少年時代には、何處でも流行つた。町内の少女たちは、何れも日の暮れるのを待つて「をんごく」の夜に深い憧憬れを持つた。彼の女らは、湯浴を終ると、綺麗に化粧して、さつぱりした浴衣を着けて、夕の町に集るのだ。多いのは十二三人、少いのは六七人、一列を作つて練り出すのである。

彼の女らは、手に赤いほうづき提灯を一つ宛携へて、巷を照らしつゝ、

をんごくなはゝや、なはゝやよいよい、なはよいよい。

と美しい聲で合唱して、附近の町を廻り歩くのである。今のやうに電燈や、瓦斯がなかつた薄暗い巷に、彼の女らの姿が浮彫りのやうに、明るい色彩を見せると、生きた浮世繪そつくりであつた。其の時分の私は、勿論、左様したものに左程の興味を感じなかつたけれども、彼の女らの合唱の聲が、次第に私の家から遠くなつて、かすかに流れてゆくのを聞くと、私は妙に何とも知れない哀愁を感じた。

夏の終りが近付くと、盆のシーズンになる。朝早く

「お柄へ、お柄へ」

と呼び步く聲が淋しく私の眠つて居る枕許に聞える。田島の家では、魂祭りを始めて、精靈棚へ胡瓜を細工した馬、茄子に四本の棒をさして牛の形をした物、青い團栗位の大きさのある柿や新芋などを備へる。そして、うら悲しい看經の夜がくる。叔母が、かんかん鐘を叩いて、ひとり、佛壇の前で、念佛唱へるのが聞える。

町内では、盆踊りが始まつて、横町のある家の廣い葡萄棚の下で、若い男女が、三味や鐘太鼓の調子につれて踊る。

とつてん、ちんりん、とつてん、ちんりん。

と囃すと一同が、

よをいとな、よいよい。

と云つて、ぐるぐる葡萄棚の下を廻り步くのである。北のうちには、紺法被など着て、頰被りをした島田髷の美しい女も混ぜつて居た。

盆が過ぎると、暫く小供の注意を惹くやうな年中行事もない。だが、年の暮れから、正月前後にかけては、流石に心を浮き立たせるやうなことが多かつた。殊に小供心に強い印象を與へるのは、十日戎の夜である。それは毎年一月十日、近松の『今宮心中』に因緣のある今宮と云ふところで、戎神社の大祭が行はれるのだ。一月の喜び、新春の元氣は、此の祭りの上に溢れて居た。

大阪は、商人ばかりの土地だから、福の神だと傳へられて居る今宮の戎を「戎樣」と云つて、心から尊信した。十日戎の日は、緣起を祝つて、宗右衛門町や、新町や、北の新地などの花柳界から寶惠籠を出す、大抵の商人は、家族を連れて、福運を授かるために戎神社へ參詣した。それで戎橋筋は、參詣の人たちで一杯になつたものだ。

私が、田島の店の番頭につれられて、始めて戎神社へ參詣したのは九歲の頃であつたらう。其の日、道頓堀川にかゝつて居る戎橋を南へ渡ると、もう身動きが出來ないほどの雜沓であつた。其の時、私は、不圖、寶惠籠の一團に出つた。

寶惠籠と云ふのは、普通の駕籠を紅白だんだらの縮緬で飾つて、梅花や、櫻の造花を處々に插してあつた。駕籠の中には、島田に結つて、濃化粧をした十八九歲の藝妓が微笑しながら乘つて居た。

「寶惠籠ほい、寶惠籠ほい。」

と鉢卷きをした駕昇きの男が、前後から、元氣さうに云つて、群衆の中を分けて步いた。左樣した美しい駕籠と女とが暫く續いた。私らは、それから、尙ほ南へ進んだ。難波邊から、いろいろの店が出て居た。一尺以上二尺位の棒のやうに長く引

のばした紅白の飴を賣つて居る店や、玩具の木槌と可愛い福口とを賣る店や、笹へ小さい大福帳、黄金の小判、寶の槌などを付けたのを釣つたり、列べたりして、

「來年の吉兆は此處やで。」

と元氣よく、鉢巻した若い男が、客を呼んで居る店も少からずあつた。其の店の間をゆく參詣人は、數へ切れぬほどで、砂塵が白く舞ひ上つた。

何故か知らないけれども、大阪の市民は、戎様は聾だと信じて居た。それで、彼等は大小の木槌を買つて、神社の裏手へ至つて、とんとんと堂を打つた。田島の番頭も、木槌を一つ買つた。そして私の身體を高く持ちあげて、

「さあ此の槌で叩きなはれ。」

と云つた。私は群衆の波のうちに漂ひながら、幽かに輕く堂を叩いて、戎さんの名を呼んだ。だが、それは福を授かるため、に戎さんに參詣をしたことを知らせるのだと云ふことが未だ私にはつきり分明らなかつた。小供心に面白半分で叩いたのだ。

十日戎が過ぎると、節分がくる。大阪では其の日、妙な習慣が行はれることになつて居た。各神社や家の中で豆撒きがあつて、また鰯を膳に備へ付けるとは、何處も同じであらうが、薄汚い、零落したやうな男が「厄拂ひまへう、目出たいので拂ひまへう。」と云つて、町をゆくのが、小供の見た眼にも、滑稽染みて居た。其の夜、氏神へ參詣する女は平生と一風變つて居た。老婆が島田髷に結つたり、少女が丸髷に結つたりした。そして白い鳥の羽の簪を買つてさした。大阪市中の少年は、人々の雜踏の中にまぎれ込んで、不意に其の鳥の羽の簪を奪ふものが少くなかつた。それは、罪惡でも何でもなくて、其の日に限つて、公然、許されて居た一つの風習だつた。簪を拔き取られた女も、別に怒つたり、驚いたりするやうなことはなかつた。

それから、節分の夜には「枕はづし」と云ふ悪戯も行はれた。それは、少女のうちで、寢姿がわるくて、度々、枕を外すものが、行儀よくなりたいと云ふ心持ちから出たのだ。左様した少女は、店番が居ないとこへ出かけて、家の内の人を呼ぶのだ。

「枕はづしは要りまへんか」

と聲かけて、内のものが、それに返辭すると、其の夜から、自分のわるい寢癖を他人に賣つたから爾後、行儀がよくなると云ふ迷信を固く本當にしたものだ。「枕はづし」を賣ると云ふことが、どうしても、大阪らしい情調を帯びて居るやうに思はれる。

それ等の年中行事は、十三四歳頃迄の私の生活と切り離して考へることの出來ないものだ。そして、それ等のことが、田島

の家と結び付けられて思ひ出されるのは、船場には、大阪固有の特色が一番よく保存されて居るからである。

大阪二輪加と田島の番頭の話

叔父の家に居た時分、近所の友達を自分の家へ伴れて來て遊ぶことは、殆ど許されなかつた。龍ちやんを一二度、同伴して歸つたほかに叔父の借家に住んで居た知人の子と時々、店へ出て、木綿が堆かく積んである上を飛び廻つた位のものだ。だから、時によると、店の番頭の居るところへ出かけて、彼等に戯れかけたりして遊んだことも少くなかつた。

其の時分、二十五六歳位の番頭が二人居た。一人は、郵便局の事務を執つて居た。一人は店務に執掌して居た。郵便事務を處理して居たのは、久七と云つて、色白の面長だつたが、金壺眼で、右耳の下に小さい黒子が一つあつた。久七が笑ふと、口邊にはつきり笑渦が漂ふた。彼れは、癇性で、少し指の爪がのびると、いつも、歯で喰ひ切つて居た。

彼れは、暇つぶしに時々、私の相手になつてくれた。將棋や、五目ならべを教へてくれたのも、私を腹の上へ立たせて、兩足で高く私の身體を差上げてくれたのも、いろいろの字を説明してくれたのも彼れである。大體、私は彼れが好きであつた。けども或時、彼れと小僧らと共に、將棋を投げ合つて戯れた時、彼れが他の小僧に向つて投げた王將が、どうしたはづみか、飛球のやうに烈しい勢ひで、こつんと私の頭へ當つた。不意の打撃と痛さとで、私はわつと泣いた。彼れは、驚いて、わび入つたが、其の時ばかりは、彼れが憎かつた。

「僕が田島の本當の子でないから、こんなひどいことをするのだ。」

私は小さい瘤が出來て、がんがん痛む頭を抑へながら、左樣思ひつめた。私は二三日、久七に逢つても、すねた顔をして物を云はなかつた。けれどもいつの間にか、久七に對する憎みを忘れて、また以前のやうに親んだ。久七が椅子に腰かけて、事務を執つて居る其中、不意に其の膝へ飛び上つたり、後とから、久七の肩にすがり付いたりした。久七は、別段、うるさがらないで、にこにこし乍ら、私を彼れの跨の間に挾んだこともあつた。

久七は、稗史類を好むと見えて、日曜で事務が閑散な日は、『三國誌』などを讀んで居た。左樣した時に、私が店へ行くと、『三國誌』のページを繙して、關羽、張飛、玄徳、曹操などの武者繪を見せてくれた。私が好きなのは、長橋の上に突立ち上つて、敵を睨み返しつゝある鍾鬼のやうな張飛と青龍刀を振廻

して、どの敵にも負けない強味を見せた髯の長い關羽とであつた。玄徳は、好きでもなければ嫌ひでもなかつた。だが、曹操だけは、何となく好まなかつた。

「曹操は支那の奸雄や、中々ゑろをまつせ、な、ぼんち。」

と久七は曹操のことを詳しく説明してくれたが、矢張、曹操は、私の蟲が好かなかつたのである。性格が單純で、強い一點張の張飛などは、小供に一番わかり易かつたので、自然、好きであつた。

久七は、また芝居が好きらしかつた。私を千日前へ連れて行くと云ふことを口實にして、折々、こつそり、二輪加を見物したものだ。其の時分の千日前は、薄汚くて、ごちやごちやしたところであつた、幼稚な見世物や、安芝居が、軒並にあつたけれども、小屋が狹くて、場内へ這入ると、ぷんと一種の異臭を放つところさへあつた。觀客が布く坐布團なども、垢光りがして、じめじめしたのさへあつた。私は小供心にも、千日前を宜いところだとは思はなかつた。

けれども團十郎や、すき鍋（二輪加師）や賀樂、たにしなどの二輪加は、久七に伴れられて、時々見た。その小屋は、川上一座のへらへら踊りの小屋の隣りにあつたと覺えて居る。

私は久七と一緒に平土間から二輪加を見た。だが、今日、回想すると、殆どこれと云ふ印象がないのである。唯女形になつた男が、時々、黒い毛脛をむき出して、男の地聲そのまゝで怒鳴つたり、暴れたり、白粉を塗らない顏に一杯青い髯のあとが見えて居て、丸髷のボテ鬘が無暗に光つて居たりしたのが、印象されて居る位のものだ。

それに開幕劇とも云ふべき口上茶番だけは、筋も、結構もない當座の出鱈目だけに小供にも大方わかつた。それは、チョン髷の鬘を被つた下廻りのものが二人、舞臺へ出て、拍子木で、平たい板をがちやがちや機械的に時々叩きながら、双方に輕口を連發し合ふのである。右の男が先づ口を開いて、間の拔けたやうな、人を馬鹿にしたやうな調子で、

「あんた阿呆と云ふこと知つてるか。」

と云ふと、左の男が、ぬらくらして、捫まへどころのないやうな調子で、

「知らんな。」

と答へる。

「阿呆の見本が眼の前に居るがな。」

「何處に？」

「其處に」

左の男は、眼をきよろ付かせて四邊を見廻はすのである。

「わからんか。」
「宜えか、ボテ鬘を被つて。」
「うん　ボテ鬘を被つて。」
「それから、色が黑うて。」
「うん、色が黑うて。」
「頭のところへ髯をもじやもじや生やして。」
「うん、頭のところへ髯をもじやもじや生やして。」
「それ丈かいな。」
「否、未だあるね。」
「それから如何や。」
　右の男は、エヘンと一つ咳拂ひをした。
「二輪加が好きで、毎日輕口ばかり云つて。」
「妙やな。」
「家へ歸ると、女房に鼻の下をのばして。」
「ふーん。」
「涎を牛のやうに垂れる男や。」
「そんな阿呆が日本中にあるやろか。」
「其處に居るがな。」
「一體、誰れのことや。けつたいな。」
「つい眼の前やがな。」
　右の男が、左の男の迂闊々々して居る際を見て、扇で一つ、ぽかりとボテ鬘を叩く。見物は、一齊にどつと笑ふ、と云つた風のものだ。斯うした口上茶番は、もう廢れて、今日は何處にも見ることが出來ないのである。恰度、私のあど氣ない少年の日が再び歸つて來ないやうに。

□

　二輪加の思ひ出にもつれ合つて、瓢逸に描かれ出されるのは、叔父の家のポストの前で落語をよくやつた大道藝人の倅である。私の眼に映つて居るのは、散切頭の、色の赤黑い、二十七八歳の男　ある。全體の容貌は、左程卑しくなかつた。少し顴骨は出て居たが、一見、樂天的で、放浪を喜ぶやうな、少しも屈托氣のない樣子をして居た。着物は、一寸垢ついて居たけれども　見苦しくて、不快の感じを起させるほどではなかつた。
　彼れは月に一回位、必度、黑いポストの前に起つた。小さい拍子木を持つて、輕快な口調で滑かに何か喋り出すのである。彼れの周圍に集るのは、大抵町内の小供ばかりであつた。大人の姿はひとりも見えなかつた。けども彼れは、邪氣のない少年に向つて自分の落語を聞かせることを心から喜ぶやうに、時々、

形容を混ぜて、一寸した短かい話をした。私は、どんなことを話したか、すつかり忘れて了つたけれども、彼れの前に起つて居る時は、彼れの口の動き具合、眼の働く樣子、何でも彼でも、夢中になつて見入り、聞き入つたものだ。そして彼れは、話を濟ませると、田島の家や附近の店先へ立つて、一寸、輕く拍子木をちよんちよん片手で鳴らして、輕く辭儀した。どの家でも、五厘か一錢、けちなところでは、一厘錢を二三枚やつたものだ。其の世離れをした、のんびりとした大道藝人も、今日は、もう大阪に見られなくなつた。

久七のことから、二輪加や、大道藝人の話になつて了つた。久七のほかに、今ひとり居た番頭のことを少し述べたい。それは徳助と云つた。いつも頭髮を五分刈りにして、若いのに兩鬢のあたりに可なりに目立つ白髮があつた。顏の色が黑いのに、唇が思ひ切つて厚いので繪で見たアフリカの土人を思はせるやうなところがあつた。だが、身長は相當に高くて、肉附きも宜かつた。

私は、徳助を餘り好まなかつた。眼がどんよりして居て、何處かのろ臭いところがあつたからだ。だが、徳助は、私を愛して、時々外へ伴れて出てくれた。汁粉や、餅菓子などを私に馳走してくれたこともあつた。それから、ある時、彥六座の前にある寫眞屋へ私を伴れていつて、一緒に寫眞を撮したこともあつた。

其の寫眞が、私の幼年時代に於ける唯一の記念だ。華奢で、弱さうで、ぼんちらしい顏をした私が、椅子に腰かけた徳助の膝によりかゝつて映つて居る。徳助の白髮も、はつきり映つて居る。それにしても、徳助は、どうして居るだらう。私と寫眞をうつしてから、間もなく、田島の家を出て了つて、杳として消息を聞かない。

田島の家には、小僧かごろごろして居た。山口縣から來て居彼れはる十吉と云ふのが一番悧巧で、きびきびして居た。彼れは後にアメリカへ渡つて、田園を開拓したさうだが、相當の成功を收めたところで、突然、客死したと後で聞いた。十吉は、猿のやうな顏をして、其の言葉には、田舍訛りがあつた。

田島の支配人は、每日、道頓堀の家から、通勤して居た。叔父とは遠緣のもので、以前は油の行商をして、貧しく暮らして居た。ところが、氣が利いて、惡賢いところがあつて、巧みに叔父に取り入つたので其の信用を得た。そして一躍して、木綿問屋の支配人となつたのである。

私が一番嫌ひなのは、此の支配人であつた。野村彌三郎と云ふのが、彼れの姓名だ。叔父は、佛のやうな人であつたから、

一切の店務を彼れに委ねて、少しも干渉しなかつた。野村は、それを宜いことにして、帳面をごまかして、大分彼れの私腹を肥して居たさうだ。それでも、叔父は、巧みに彼れのために説き付けられて、帳面を調べなかつたから、野村は、次第に増長した。外へ出ると、自分が田島の主人であるやうな風をしたさうだ。

野村は、叔父に對して、いくらか頭を低くしたが、其の他のものには、傲然として、威張つて居た。ある日、私が晝餐を喰べて居ると、野村は私の次ぎに坐つて、矢張、喫飯して居たが、私の箸の持ちやうがわるいと云つて、其の鋭い眼付で一寸私を見て、

「此の子は、行儀を知りまへんな。」

と叔父に告げた。其の調子は、厄介物だから、少し位、手厳しく云つてやつても宜いと云つたやうな心持を明かに見せて居た。私は默つては居たが、嚇(くつ)となつた。私は、頭から彼れが私を侮つた態度に強い反感を抱いて、ぢつと支配人の横顔を睨みつめた。眼から、涙がぼろぼろこぼれて、膝をぬらした　私は箸を持つたまゝ、暫く考へ込んだ。

「嗚呼、自分の家に歸りたい。」

私は斯う思つた。けれども貧しい家には、不治の腦疾を得た父と、働いても、働いても、生活の餘裕を得ない叔父(父の弟)が居る丈で、どうにも仕様がなかつた。それでも、私は歸りたかつた。

(第三) 貧乏の犠牲者

勞働者の町の話

不圖、眼ざめると、冬の日は、もう暮れようとして居た。夕暮の色は、病床の邊を這ひ廻つて、町の方から、豆腐賣りの聲が淋しさうに聞えて來た。寒い風が、障子に當ると、がたんと音がして、障子それ自身さへも、寒さに其の神經を顫はせて居るやうだ。私は、其の障子の破れた紙の色をぢつと見つめた。それが平生なら、白く見えるのだが、どうしても、黄色に見えた。そして眼が、ともすると、眩暈しさうになつた。

それは、私の十歳の冬のことだ。二三年、厄介になつて居た叔父(田島)の家から、自家に歸ると間もなく、流行感冒に罹つて、床に就いた儘、動けなくなつたのである。久振で、自家へ歸つた私が急に病んだのを見ると、祖母は非常に心配した。直ぐに附近の醫師に診察をして貰つて、流行感冒だと知つた。それ以來、私の看病に當つて、私が苦しさの餘りに無理なこと

を云つた時も、祖母は私を撫でるやうにして、優しく扱つてくれた。其の爲めでもなからうけれども、病氣は次第に快くなり出した。

其の時分、私の家は、いつの間にか、新町を引拂つて、阿波座と云ふところへ引越して居た。新町の家は、極めて見すぼらしかつたけれども、四邊が賑かで、明るい氣分に包まれて居た。ところが、阿波座は、暗い氣分が漂つて居て、一體に物味しかつた。同じ西區のうちでも、新町だと云ふと「宜いところだんな。」と誰れも云ふが、阿波座と云ふと、誰れも、場末の町に對するやうな感じを抱いた。中には、其の邊の一部を貧民窟の稍宜い部分のやうに見て居るものさへもあつた。

十歳の私は、阿波座を左程、劣惡な町だとは思はなかつた。けれども新町とか、南久寶寺町とかを久しく見て居た眼には、どうしても、陰氣な、暗い氣分が漂うて居るのを感じないでは居られなかつた。其處には、勞働階級の人が多く住んで居た。私の家の隣りには、車宿と鍛冶屋とがあつた。車宿の人々は薄汚い服装をして居たが、大抵晩酌を缺かさないで、食物に奢つて居た。彼れ等の樂みは、酒を飮む事、うまい物を喰べる事を除いて何もないやうに見えた。それほどに彼等は、單純な、無邪氣な人々であつた。

鍛冶屋は、朝から晩まで、二三人の男が眞黑になつて働いて居た。彼等が鐵槌をあげ下ろして、鐵と鐵と相搏つと、火を發するばかりであつた。

トッテン、カッチン。

トッテン、カッチン。

此の音が、絶間なく私の耳に這入つた。

鍛冶屋の向ふ側には、大工や、いろいろの職人が居た。私の家の附近は、左様した階級のもので埋まつて居た。そしてどの家も、塵埃にまみれたやうに黑ずんで汚かつた。私の家も、矢張、其例に洩れなかつた。全體が、非常に燻んで居た。

私の家は、もう煙草店をやめて、叔父も、病父も、陶器職人になつて居た。それに、叔父は、いつの間にか妻を迎へて居た。家の中は、新町よりも稍廣かつたが、店の半ばは、土間にして了つて、其處に陶器を燒く窯が据ゑてあつた。そして疊が敷いてある方は、毎日、外から通つてくる二人の若い女工が、仕事をする場所になつて居た。

奥の間では、病父と叔父とが、手傳ひに來て居る中年の男と三人で、丼や、皿や、茶碗などに描かれた繪を丹念に彩色して居た。それ等は、皆支那の方へ輸出するので、陶器の繪は、銅版を利用して、紙に印刷したやうな具合に浮き出て居た。叔父

らは、左樣した繪を紺靑や、朱や、淡紅や、綠の繪具で彩つてから、窯へ入れて、燒き付けるのだ。私の眼には、それが珍しくもあり、また美しくも見えた。

私が流行感冒で寢て居たのは仲の間で、四疊半位の廣さしかなかつた。私の病氣が大分輕快になつて、粥を喰べたり、水飴を甞めたりするやうになると、私は、祖母が借りて來てくれた繪本『忠臣藏』などを讀んだが、それにも飽きると、叔父や、病父の仕事をするのを、ぢつと眺め入るのであつた。

私が見た丼や、茶碗には、支那情調が鮮かに浮び出て居た。其の時分、私には　僅かな歴史知識しかなかつたので、はつきりしたことはわからなかつたが、私の眼に觸れた繪は、寒中親に好きな鯉を喰べさせたいと思つた子が、河上の堅氷を打破つて、躍つてはね上つた鯉を捉えて居るところだつた。も一つは、夏の夜、群る蚊に親の身體の血を吸はせたくないと思つた孝子が、ひとり、丸裸になつて、多くの蚊に刺されて居るところであつた。それから孝行な夫婦が金の釜を堀り出して天に向つて感謝して居る樣子や、關羽が靑龍力を揮つて、敵と戰つて居る姿などを描いたのもあつた。

時によると、桃や、牡丹花などの繪を付けたのもあつた。私は、支那人が何故、桃や牡丹花を好むのか知らなかつた。それは千年の長壽を意味する象徵であり、これは、富貴を現はす象徵だと云ふことが、わからなかつた。けれども叔父や、病父が淡紅で先づ牡丹花を彩り、次ぎに其の葉を濃綠で彩るのを見て、何となく、單純な美しさを感じさせられた。

不治の腦疾で、痴呆のやうになつた父は、默々として、陶器を彩つて居た。私は父がどの程度まで腦力を破壞されたのか、五六年前まで商人として、どの位、仲間に敬愛されたのか、左樣したことを考へるだけの能力が未だ私になかつた爲め、父の今の生活が、實際、悲痛のどん底に近いものであると云ふことを意識する迄には至らずに濟んだが、それでも、父の後姿を見ると、何か知ら、淋しいやうな、悲しいやうな思ひが、幽かに浮き上つて來た。

だが、父自身は、過古の恐しい損失も、隣人にひどく欺かれた禍も、昔の相當な生活にくらべて、餘りに貧し過ぎる今日を考へて見るやうな樣子が少しも見えなかつた。陶器職人としての夢のやうな日を夢のやうに送ると云ふことに甘んじて居るやうに見えた。そして毎月末に叔父から貰ふ四五圓の小遣を貯蓄するのを樂むやうであつた。

私が二三年振で、自家へ歸つて來たことは父にも、幾分の喜びを與へたやうだつた。父は、默々として、割て

「能く歸つて來たな。」

とも云はなかつたけれども、其の正直さうな眼には、明かに喜びの色が浮んで居た。そして私が寢て居ると、父は心配さうな顔をして、私の額へ冷めたい手を當てるやうなこともあつた。知的に破壊された腦の所有者、一時狂はしくなつたことのある父にも、流石に親子の愛だけは、はつきり、意識されるやうに見えた。私は默々とした父の私を見ると、何だか、抑へ切れないやうな一種のなつかし味を覺えた。

其の後、私の病氣が大分よくなると、今度は、南久寶寺町時代のやうに、近所に友達が居ない淋しさを感じて、毎日、退屈した。私には、少しも勞働者の子を嫌ふ心はなかつた。寧ろ彼等に接近したいと思つたが、内氣で、不活潑な私は、火の玉のやうに元氣があつて、暴れ廻る彼等の中へ、突然、這入つて交際してゆくだけの力がないやうに思はれた。彼等が、街上で、飛んだり、跳ねたりして居るのを見ると、内心、びくびくして、先づ怯ぢ氣が先きに立つて、仕様がなかつた。

それで私は、いつも祖母を遊び相手にして家の中に居ることが多かつた。私は繪本『忠臣藏』を見てから、左様した本が頻りに借りて見たくなつたので、ある日、其の事を祖母に話した。祖母は

「それは、河内屋へ行くと、澤山あるさかいな、明日、連れていてあげまつさ。」

斯う云つた、其の日になると、夕暮時分に祖母は私を伴れて、家を出た。

河内屋は、私の家の遠縁のもので、其の頃、長堀と云ふところに住んで居た。其處には、長堀川が青く流れて、五六町の間は、大きな材木問屋が軒をならべて居た。河内屋の家は、左様した間にはさまれた細長い身を入れるばかりの路次の一番奥にあつた。それは、世の中の事を一切忘れて了つた隱者が住むやうなところであつた。

家は、三疊と六疊の二間しかなかつた。私は、祖母の後に踵いて、小さくなり乍ら、上り口のところに起つて居た。奥の方をそつと覗くと、三方に大きな書棚があつて、古本がぎつしり一杯に積み重ねられて居た。

祖母の顔を見ると、河内屋の老主人は、快く「よう來たな、まああがりなはれ。」と云つた。年は、五十五六位で、元氣の宜い、赤ら顔の男で、どこかに天狗の面を思はせるやうなところがあつた。市井の商人らしくない、脫俗した點が見えた。

祖母が私のことを話すと、

「左様か、それは感心な子や、家には本が幾何でもあるよつて

な、遠慮はいらへん、どれなと持つて歸りや、貸賃は一寸も要りまへんぜ。」

と快く云つてくれた。私等は河内屋の奥の間へ通されて、書棚の本を漁つた。どれも、これも、借りたくて仕様のないやうな本が多かつた。だが、他人の前へ出ると、妙に小さくなる癖が私にあるので、自分の思ふ通りのことを河内屋の老主人に向つて云ひ兼ねた。そして其の時『將門一代記』や其の他十數冊ばかりの繪本を借りた。

祖母が、一つ二つ世間噺をしてから、河内屋を出ると、早く歸つて、それ等の繪本を繙ひろげて見たくて氣があせつた。往來を歩きながら、私は其のうちの一冊を風呂敷包の中から取り出して、繪のあるところを見た。

其の當坐、私は毎日、繪本に親んで、いろいろの空想を胸に描いて居たので、少しも退屈しなかつた。それに夜になると、祖母が私を伴れて、毎晩、土佐堀の稲荷神社へ參詣するので、其の往復の途中、巷の燈火や、賑かな居などを見るのが樂みの一つとなつた。

影繪と妖怪の話

其の時分、私は夏に入つてから、始めて影繪の趣味を知つた。それは、土佐堀の稲荷社へ行く毎に、新町の吉田屋の横にあつた寄席の前を通ることになつて居たからだ。未だ活動寫眞がなかつた時代であるから、影繪(幻燈)が、私等の好奇心を挑撥する唯一のものであつた。そして其の寄席の前を通ると、凉しい燈光の下に、物凄い幽靈の繪を描いた立看板が出て居た

私は最初、其の幽靈の看板を見ると、恐しくて、目をふさいだ。けれども始終、見るうちに、幽靈のことよりも、影繪の方に心をひかれて、一體、どんなものを見せるのだらうと云ふ好奇心が、强く頭を擡げ出した。そして何かなしに一度見たいと思ひつめると、祖母から、小遣を貰つて、ある夏の夜、唯ひとり、其の寄席へ出かけた。

中へ這入ると、もう數十人の小供が詰めかけて居た。影繪を撮す時間がくると、今まで明るく、煌々と場内を照らして居た大きなランプ――未だ電燈、瓦斯がなかつた――を突然、消して四邊を眞暗にした。

暗黒の恐怖のうちに、小供らが、がやがや云つて居ると、舞臺の正面に垂れ下げられた白い幕の面にぽつと影繪が映つた。それは、崇傳寺馬場の仇討を最初から終り迄見せたのであるが、始めは、豫備知識がないので、何だか、さつぱり分明らなかつた。けれども現はれた人物が、どれも、これも、錦繪の中

から抜け出たやうで、ひよつこり動いたり、歩いたりするのが、非常に珍しかつた。見てゆくうちに、私の熱中の度は次第に加はつた。最後に遠藤兄弟が、返り討ちにされて、全身に矢の雨を受けながら、兄は弟を呼び、弟は兄を呼ぶところが、私に悲痛な印象を與へた。

「今度は、火事の始めから終り迄を御覧に入れます。」

と幕中から云つた時は、今まで左樣した變化のある映畫を一度も見なかつたので、片唾を呑んで待つて居た。やがて、かんかんと半鐘を鳴らすと同時に、河岸の二階の家から、黒煙が徐々に上つて、ぱつと火の舌を吐き出す場面を見せた。其のうち、屋根が燒け落ちて、河の中へ火が映る、黒い人影が無數に火事場へ向けて急いでゆくところが映つて、半鐘の音が高くなると、見物の小供らは、吾知らず、

「眞實みたいやな。」

と云つた。私は、どうして、斯う眞實らしく映し出されるかが分明らなかつたので、何だか、一つの驚異に出逢つたやうな感じがした。

それ以來、影繪が好きになつて、四五日經つと、又出かけた。今度は『四谷怪談』の通しで、髮すきの場から、蛇山庵室の凄いところを見せた。今から考へると、それは映畫からして小供じみて、一種の可笑味が附き纏うて居たが、其の時分、私には、左樣したことを考へるだけの餘裕がなかつた。私は面白くもあり、恐しくもあつた。『四谷怪談』の影繪が終つて、唯ひとり、阿波座の家へ歸つてゆくのが、無暗に恐しかつた。寄席を出て一町ばかり北へ行くと、小さな橋がある、其の邊は眞暗で、橋の下を覗ると、黒い水が流れて居る。不圖、何心なく、怪談の印象を胸に浮べると、今にも、あの看板に描いてあるやうな幽靈が、不意に現はれて、私を追ひかけはしまいかと思つた。私はぶるぶる慄えて、夢中に橋の上を駈けて渡つた。

□

それから暫く私は影繪を見に行かないで、貧しい、薄暗い家のうちにぢつと燻つて居るうちに秋が來た。私は夜になると、ランプの下で、叔父や、病父や、手傳ひに來たTと云ふ人が、靜かに陶器を彩つて居る樣子を見て居ることが多かつた。

Tは人品の立派な男で、三十四五歳の働き盛りに見えた。色が白くて、眉目が秀麗で、何となく、宜い身分の出であるらしく思えた。云ふことも卑しくなかつた。仕事をしながら、折々、面白い話を叔父に聞かせた。叔父は無口な方であるから、いつも受け身になつて、相槌を打つ方であつた。

ある夜、Tは不圖、彼れが記憶して居る怪談を始めた。傍らに居た私は、怪談と云ふと、直ぐにぞつとする癖に、一方では、抑へ難い好奇心が起つた。Tは、ちらりと私の方を見たかと思ふと口を開いた。

それは、斯う云ふ話だ。其の一つは、海坊主につき纏はれたロマンスである。あるところに居た若い男が、平生無鐵砲で、悪戯をするのが、好きだつたが、ある時、不圖、古狸を殺して、それを味噌汁にして喰べた。

「君、古狸を喰べて見給へ、中々、うまいで。」

と彼れは、其の友人に向つて、古狸を見出したことから、それに一撃を加へたこと、味噌汁にする迄の料理の苦心と云つたやうなことを得意氣に喋つた。

「えらいことをしたな、用心せぬと、復讐されるか、わからへん。」

友人のひとりは、斯う云つて注意したが、彼れは無頓着なところから

「大丈夫や、そんな阿呆なことがあるもんか。」

と否定して了つた。其の男は、非常に釣りや、投げ網が好きで、折を見ては、友人と一緒に出かけたり、自分ばかり、行くこともあつた。ある秋の日である。彼れは夕刻時分から、近所の川へ船を浮べた。それは、古狸を殺した場所に近かつた。夜に入ると、月が空に出た。それが時々、黑い、意地のわるさうな雲に呑まれたり、吐き出されたりした。

彼れは、空を仰ぎ乍ら又、勢よく河面を見渡して、颯と網を打つた。暫くしてから、具合よく、網をひき上げようとすると、突然、大きな黑い海坊主の頭がひよつくり水の上に現はれた。

「こりや可笑しいぞ。」

と見て居ると、それと同じやうな頭が又一つ現はれた。終には海坊主が五つ六つ行列するやうに出て、船の進退を妨げた。彼れは癇癪を起して、海坊主の姿を鋭く睨んだ。けれども中々立消えさうでなかつた。彼れは狼狽てゝ、網を引寄せると、網の中には魚一つかゝらないで、海坊主がぬつと出た。

流石、無頓着であるところの彼れも、それには眉をひそめた。そして突嗟に考へ付いて櫂を手にとると直ぐに水面を叩き付けた。けれども海坊主は、消えなかつた。どうにも仕方なくなつたので、船を岸によせて、家に歸らうとすると、海坊主の姿は始めて無くなつて居た。それは、古狸の遺族が彼れに復讐したのだと後でわかつたと云ふのである。

海坊主と云ふことが始めて聞いた私は、何だか薄氣味がわるかつた。一種の恐怖が、私の神經を鋭く刺戟した。それでも、

あとの話が聞きたいので、ちつと我慢して居た。

□

今一つの話は、狐に欺された滑稽な男のロマンスであつた。ある田舎に住む若い男で、妙に悧巧振る癖を持つたのが、狐狸の話などを聞くと「俺は左樣なものに欺まされない。」と云つて、それ等の動物に玩ばれる人たちのことをひどく笑つた。

笑はれた人々は、却て其の悧巧振る男が狐に欺されるであらうことを心配して居た。ところが、ある日、其の男は用事のため、狐が澤山居ると云ふ野を通ることになつた。

「あの邊は、狐がよう出まつせ。氣を付けなはれや。」

と其の細君が特に注意した。

「そんなこと、心配せんと置いときいな、あれは阿呆に限つてばかにしよるのや。」

彼れは、昂然として斯う云ひ放つて家を出た。其の癖、内心では、かすかな恐怖を感じて、警戒した。狐が澤山居ると云ふ野原に近付いたのは、夕暮頃だつたが、別に一匹も姿を見せなかつた。もう大丈夫だと思つて、不圖、向ふを見ると、結婚の行列が靜かに來た。其の中に居る花嫁は、島田に結つて、美しく化粧して居たが、慄ひ付きたいほど、鮮かな姿だつた。能く考へると、其の顏は、何處かで一度見たやうな氣がした。

彼れは、それに興味を感じて、そつと其の結婚の行列の後を追ふた。二三町ばかりゆくと、門構への立派な家があつて、花嫁らは、其の中へ這入つた。も一度、顏を見たいと思つて、四邊を見廻すと、黑板塀のところに小さい穴が開いて居た。其處から一寸覗いて見たがわからなかつた。彼れは焦燥つて、何處か宜いところはないかと見ると、今一つ大きい穴が開いて居た。それは、彼れの頭を突込めるほどだつた。其處から邸内を一瞥すると、眼の前の座敷で、花嫁花聟が居列んで、三々九度の盃が始つて、高砂の謠ひが聞えた。それを宜い氣持ちで眺め乍ら、いつ迄も、其處へ居たが、誰も咎めようとしなかつた。彼れは美酒に醉つたやうな心持ちになつて到頭、穴の中へ頭を突つ込んだ。

「もしもし如何しなはつたんや。」

誰れか大きい聲で、耳許に怒鳴るものがあつた。驚いて、振返ると、一人の農夫が、彼れの前に起つて居た。はつと思つて、恍惚の境から、吾に返ると、立派な家も、花嫁花聟も、すつかり眼界から消えた。そして自分が荒れはれた神社の石燈籠の中へ、見事に首を突込んで居るのを見出した。彼れは、開いた口が塞がらなくて、苦笑した。彼れは見事に狐にかつがれて、見

知らぬ農夫に注意されたのである。

猿の話は左程恐しくは無かつた。けれども海坊主のことが、未だ頭に殘つて居て、夜が更けてゆくと共に、冷めたい空氣が身に染むやうに思はれて、一寸首を縮めた。それでも私は未だ何か話を聞かうと思つて、眠らうとはしなかつた。枯れ〴〵になつた虫の聲が、床の下で聞えた。其の年の秋も、斯うして老けてゆくのだつた。Tは、くしやみ一つして、輕く身慄はした。

金に執着した父と貧乏に苦められた叔父の話

其の頃、叔父は、以前にくらべると、餘程眞面目になつて、家業を勉强して居た。それは、妻を迎へて、身が引締つた爲めであつた。叔父の妻は、容貌が引立たなかつたけれども、道修町の薬種問屋に長い間、下女奉公をして居たので、中々、働き好きで、氣象がしつかりして居た。

　私に取つて、それは新しい叔母であつた。叔母は、强ゐて誰れの機嫌をも取らうとしなかつた代りに、これと云ふ素振をも見せたことがなかつた。私に對しては、當らず、觸らずの態度を執つて居た。私を愛するでもなければ、愛しないのでもなかつた。私も叔母に心からの親みを感ずることが出來なかつたが、別にいやな女だとは思つて居なかつた。だが此の新しい分子が加はつてから。家庭のうちに小さい風波が起らないではなかつた。それは目に見えないほどの感情の衝突だつたが、小供の私には、左樣した微妙な作用までも分明らなかつた。私は寧ろ平氣で居た。

　叔父が、家業に身を入れ始めてから、瀬戸物問屋の方でも、叔父を特別に信用した。仕事はどしどし殖えてゆくばかりで、少し景氣を持直した。それを機會に一家は、阿波座から、西横堀の衛生試驗所に轉宅した。其處は阿波座にくらべると、ずつと明るかつた。奥の間のガラス障子越しに西横堀川の水が見えた。向ふ河岸には、材木問屋の物置き場が續いて、大小の材木を林のやうに立てならべて居た、水に浮かんだ材木の筏や、萬人足が七八人で、大きな材木を引上げて居るところなどが眼に入つた。道頓堀の方へ下る船、淀川へ出る船が、ぎいぎい櫓の音などさせて水の上をすべつて至つた。

　家の附近は、大抵瀬戸物問屋であつた。叔父も小さい店先へ少しばかりの瀬戸物をならべて陶器商をも始めた。そして仕事は、奥の間で私の父と一緒にやつて居た。父は、阿波座から此へ移つても、祖母や、叔母のやうに、格別、喜ぶ色も見せなかつた。矢張、毎日、默々として、仕事を續けて居た。阿波座の

時には、未だ私に氣付かなかつたのだが、父は日に一度位、何かひとりで呟く癖が出來て居た。能く聞いて見ると、

「早く金を返してお呉れやす。もう一寸も待つて居るわけにゆきまへん。」

と云ふやうなことを誰れを相手にするでもなく、云ふのであつた。私はもう昔のことを忘れて了つて居るだらうと思つたが、矢張、父は過去の大きい損失が、悔ゐられ、惜まれて、それに對する愛着が根强く殘つて居たのだ。其の取返しの付かない思ひ出で、胸が一杯になると、頭髪を掻きむしりたいやうになつて、ひとり呟くのであつた。

其の時分、父の樂みは、私に對する愛と月末毎に叔父から貰ふ小遣ひを貯へてゆくことであつたが、金錢に對する執着が、餘程病的に昂進して居た。自分の僅かばかりの金を古い紙入に突込んで、古い剝げかゝつた奥の簞笥の一番上の引出へ深く秘めて居た。そして誰も、それに手を觸れることを好まなかつた。

叔父も、能く其の事を知つて居た。けれども陶器職人としての收入は、略ぼ定つて居るばかりか、時には不出來だと云つて問屋で工賃を差引かれたり、仲間のものに金を貸せと賴まれたりするので、月末になると、時々困つた。左樣した場合は

「兄さん、少しの間、貸しとくなはれ。」

と賴んで、私の父が深く秘めて居る貯金の半ば位を借りることがあつた。それは、僅かに十五圓位に過ぎなかつたが、病的に金に執着して居た父に取つては、可なりにいやなことらしく見えた。それは、小供の眼にわからぬことだつたが。ある日、左樣したことから叔父と私の父とが、摑み合つて、烈しく爭つたのを見て、私も小供心に父の胸の中が少しわかつて來たのである。

二人が喧嘩したのは、叔父が約束通り、私の父へ借金を返へさないので、父が先づ怒つた爲めであつた。父は、ある日、それを叔父に督促したのだが、無口の叔父は、

「もう暫く待つて貰へまへんか。」

と云つた限りで、自分の苦しい經濟狀態を父が納得するやうに話さなかつた。それを父の病的な心では、もう返濟しないのだと早合點したのだ。父は嚇となつて、立ち上つたかと思ふと、勢込んで、叔父に摑かゝつた。叔父も、負けぬ氣になつて、父を擲り付けようとして、立ち向つた。二人の手は、もつれ合ひ、觸れ合つて、烈しい爭ひの嵐を生じた。終に二人は、組合つて、どうと疊の上に倒れたところへ、祖母が來て、やつと引分けた。

私は、恰度、其の側に居たのだが、不意のことで、一時に悲

しくなつて、ぼんやりして了つた。それに、小供の力では、到底、二人の間に分け入るだけのことも出來なかつた。私は起つて、狂路々々するばかりであつた。金を中心とした兄弟の爭ひ！私はまざまざと小供の時にそれを見たのである。

斯う云ふ風に父は金に强く執着したけれども私には、折々小遣錢を與れた。私が尋常四年を卒業して、高等一年に進級した時も、快く入用の敎科書を二三册買つて與れた、もうこの時は、大部分の金を叔父に用立てゝ、殘餘が僅かしかなかつた。だが、子のためだと思ふと、父は、どんなことでも我慢出來るやうに見えた。私は小供ながら、それが痛々しかつた。

大方空虚に近くなつた財布！　父が一番樂みにして居た貯蓄が、もう僅かになつたと云ふことは、ほかに何一つ、これと云ふ道樂のない父には、どんなに淋しいことであらう。私は、父が氣の毒になつて來た。

□

私は父の心持ちをぼんやり察したが、一方では、殆ど父へ借金を返したことのない叔父を憎むことが、どうしても出來なかつた。叔父は元來、祖母と私とを扶養しなければならぬ義務があつたわけでないけれども、私の父が無能力者同樣になつて居ることから、私等をも世話して居た。それに叔父は好人物で、兎角、仲間の人たちに欺され易かつた。泣付かれて、金を貸しても一度も返さないやうな目に度々逢はされて居た。それでも、叔父は怒らなかつた。いつも、默つて、愚痴さへもこぼさないで居た。

叔父には、これと云ふ道樂がなかつた。何處へも遊びにも行かねば、酒さへ飲まなかつた。朝早く起きて、彩色した陶器を窯の中へ入れて、それを眞赤な火で燒きあげる。夏などは全身から、たらたら汗を流して居た。冬は割合に樂だが、それでも窯に近付くと、猛暑かつた位だ。斯うして燒上げのことに甚だかゝるのが常であつた。午後は、仕事をしたり、問屋へ出かけたりして、一日、十五日の休みのほかは、せつせと働いた。それでも、中々一文の金も出來なかつた。一つは其の收益が少いのと、人に借倒されるのと、生活費が相當に要つたにも依るのであらう。月末になると、苦しさうに、叔母に衣類を持たせて、質屋へ行かせたり、久寶寺町の姉の許に泣付いていくらかの金を借りたりして、やつと支拂を濟ませると云ふやうな、みじめな有樣であつた。毎日精出して、働いても、働いても、經濟上の苦みから拔け出ることが出來なかつた。始終、貧乏神に附け覘はれて居た。

だが、叔父は、地藏さんのやうな善人で、それを憤る丈の奮發心や、反抗力も起さなかつた。それが定つた自分の運命だとあきらめて居るやうだつた。別段、あせることもしなかつた。いらだたしい色をも浮べなかつた。久寶寺町の叔父千右衛門はそれを見て「意氣地がないよつて、あかん。」と憤慨した。

同じ陶器職人でも、叔父に始終、厄介をかけて居たYと云ふ男は、意氣地なしを通り越えて、極めて呑氣であつた。年頃は、三十二三で、快活に能く喋つた。一寸した話をしても、それを面白さうに聞かせる技巧を持つて居た。平生怠け者で、酒好きで、賭事が上手で、始終、のらりくらりして居た。叔母は、Yが彼の女の良人を欺して、金を借りて、一度も返さないので、Yを嫌つて居た。それでも、Yが來て話すと、つい其の輕い口に乘せられて、貸した金の催促をもしようとしなかつた。

其のうち、Yは叔父のやうに眞面目な生活が出來なくなつて、いつの間にか、陶器職人をやめた。そして團十郎の一座に加はつて、二輪加師になつた。勿論、下廻りの格で、未だ藝は未熟であつた。だが、Yは寧ろ得意らしかつた。

其の後、Yは、自分の戸籍を叔父の許に預けて了つて、旅から旅へ二輪加師となつて流れ歩いた。彼れから、時々消息して來たが、それには、別に珍しいことも、書いて居なかつたやうだつた。彼れは二輪加師となつたことを少しも悔ゐないで、それを樂むやうだつた。不景氣とか、興行の不首尾とか云ふことも、左程、彼れの頭を苦めないやうだつた。

今から考へると、陶器職人の仕事に見切りを付けて、一生、世の中を茶化して暮さうと決心して、自分を戯畫化して、二輪加師となつて了つた彼れの心理は、餘程變つて居たに違いない。私は彼れが家へ來た時、唯一度彼れのあばた面を見た。そして其の爽かな、はつきりした聲のうちに、何處か頓狂なところがあつたやうに聞いた。彼れが來ると、家の中が急に明るくなるやうに賑かだつた。それ以上、私は彼れについて何も知らなかつた。

小さい學友の話

私は自分の家に歸つてから、時々、貧乏のつらさを味つたが、唯一つ幸福なのは、誰れも、私の頭に抑壓の手を加へないことであつた。久寶寺町の田島に厄介になつて居た時分のやうに、横柄な支配人に侮られたと云ふやうな不快を見ないことであつた。私は自由に本を見た、自由に遊んだ。

其の時分、私は南久太郎町の高等小學校へ通ふやうになつて

居た。其の學校は、私が曾て尋常科を修めた博勞町の學校にくらべると、遙かに規模が大きかつた。私と同じやうに高等一年になつた生徒のうちには、各所の尋常小學校から集つて來た少年が居た。高等科に入つても、東京のやうに袴を着けたものは一人も居なかつた、誰彼の差別なく、前垂をかけて、小さい商人のやうな風をして居た。

私は、尋常科を首席で卒業したのだが、此へ來ると、三番目の座席へ置かれた。首席に居たのは、船田と云ふ可憐な女の子のやうに優しい少年であつた。次席は、小池と云つて、北久寶寺町の醬油屋の長男であつた。

私は、どう云ふものか、小池を好かなかつた。それは、彼れが小柄な癖に妙に大人ぶつた態度をするからであつた。船田とは、最初から意氣が合つた。彼れは、小學教師の子であつたが、家には相當な資産があつた。氣品のある秀麗な容貌を持つて居て、頭腦がはつきりして居た。

此の二人のほかに淺山、西野、山田、下田、立石など云ふ學友が出來た。淺山は、學校の小使の子で、背がひよろ長くて、瘦せ切つて居た。私等は、淺山のことを「お骨」（骸骨の意味）と命名した。少し離れて彼れを見ると、恰度高く伸びた枯木のやうに思はれた。

「お骨さん。」

私等は、故らに淺山を怒らせる爲めに、左樣呼びかけた。淺山は「お骨」と云はれると、自分を侮辱されたやうに眞赤になつた。彼れは、其の細い火箸のやうな手をにゆつと出して、私等に突撃してくる姿勢で、追ひかけて來た。私等は、尙ほ「お骨さん」を連呼しながら、逃げ廻つた。

偶ま淺山に追ひ付かれることがあつても、淺山は、私等の肩や、背を輕く打つ丈で、手荒いことをしなかつた。彼れは、極正直な、一本調子の少年だつた。いつも、裾の短かい着物を纏うて居たので、其の細い兩足が脛のあたりから、ぬつと出て居た。

西野は、下駄屋の長男で、小柄だつたが、凛々しい顏をして、敏捷だつた。彼れは、今なら、野球などに熱中したであらうと思はれるほどの運動好きであつた。相撲にかけては、誰れも彼れに及ぶものがなかつた。それは、いくらか柔道を知つて居たからでもあつたが、彼れと取組むと、大抵のものは見事に投げ付けられた。彼れは學業の方では、博勞町の小學校以來、十二三番位のところをうろ付いて居たが、相撲にかけては、いつも一番だつた。

船田や、淺山は、私と同樣、相當の文學趣味を持つて居たけ

れども、西野は、讀んだり、書いたりすることを餘り好まなかつた。學校の方が濟むと、定つたやうに、本願寺別院の廣い庭へ出かけて、私等と戰爭ごつこをして遊んだ。

本願寺別院は、南と北の二つに分れて居たが、私等は、南の別院へ能く出かけた。此の別院へは、最初、祖母に伴れられて來たことがあつた。それは何でも冬の朝だつたと記憶する。大きくて、天井の高い本堂へ這入ると、正面の立派な佛壇に黃金の阿彌陀佛が光つて居た。今あげたと思はるゝばかりの燈明が朗かに瞬いて居た。香の烟が白く、横になびいて、朝の参詣者の稱名の聲が謐ましやかにいくらかの哀調を加味して聞えた。

私は祖母に蹤いて、佛壇に近いところで跪拜した。

南無阿彌陀佛。

南無阿彌陀佛。

祖母は、斯う心から稱名した。がらんとした本堂の空氣は寒かつた。だが、私は此の靜かな、俗世と全く隔離した宗教の世界へ來て、一種の淋し味を帶びた崇嚴の氣が、何となく、身に泌みてくるのを、おぼろ氣に感じた。

祖母と一緒に本堂を出て家へ歸る途中、私が氣付いたのは、本堂の前に一本、大きな銀杏の樹があることだつた。それは肥大した巨人のやうに突立つて居た。葉がすつかり散つて、枝ばかりが裸身のやうに見えた。其の翌年、秋になつて、友達と來た時は、黃ばんだ銀杏の葉が、はらりはらりと珠玉のやうな淸い砂地に落ちてくるのを見た。私等は、根氣よく其の葉を拾つた。大分遊んでから歸らうとすると、燃えるやうな夕日の色が、ぱつと銀杏樹を照らして、すべての葉が小さい金の扇のやうに、燦爛と輝いて居た。

□

それ等の思ひ出だけでも、私は別院がなつかしかつた。それに今一つ、私に深い印象を與へたものがあつた。それは、別院の北方にある拔け道で、一寸見ると、丸で石のトンネルのやうになつて居たところだ。其のうちには十數段の石階があつた。それを通り拔ける時、不圖、上を仰ぐと、靑い苔が一面に生えて居た。水の雫のやうなものがぽたりと滴れさうで、四邊はぼんやり薄暗くなつて居た。

其の石のトンネルの中で、聲を出すと、直ぐに反響した。

「わあ。」

と云ふと、其の聲が、石門全體に響き渡つて、

「わあ。」

と答へた。私はそれが面白いので、其處を通り拔ける時は、

必度、腹の底から大きい聲を出した。

「馬鹿！」

「馬鹿！」

石門が直ぐに答へた。

「擲すぞ。」

「擲すぞ。」

私はひとりで可笑しくなつて、次第に石階を登つていつた。

「うふわはは、」

「うふわはは。」

反響した聲も笑つた。いつの間か私はもう石階を登りつくして、ある妖怪傳說のある便所（雪隱）の近くに起つて居た。其の邊は、恰度、本堂の横になつて居て、北の方は樹がこんもり茂つて、人通りが稀れなことも少くなかつた。また誰れも其の邊で遊ばなかつた。一體が陰氣だつた。其の爲めでもあらうか、雪隱の中に大きな古狸が住んで、其處へ這入ると、冷めたい毛だらけの手を下からぬつと出して、人間の臀部を撫で廻はすと云ふ噂が高かつた。

ある人は、また其の古狸が、時によると、老婆に化けて出て、附近に遊んで居る小供を巧みに欺して何處へか伴れてゆく、其の小供は再び家へ歸つて來たことがない。それは大抵、夕暮時分に出るのだと云ふので、私は非常に其の古狸を恐れて居た。實際は何でもなかつたのであらうけれども、小供の時は、左様した妖怪傳說が不思議に恐しかつた。

私が別院の廣い庭などで遊び疲れて、夕暮頃に横堀の家へ歸る時、例の石門を拔けるのだが、其處で大きい聲を出す樂みを思ふと同時に古狸の居る雪隱のことを胸に浮べると、直ぐ恐怖の念が、むらむらと起つた。私は大抵、駈け足で、雪隱の附近を夢中に通つた。時によると、折わるく、石段を拔けて登つてくる老婆などの姿を夕暮頃に見ると、それが古狸でなからうかと思つて、胸をどき付かせたことさへもあつた。

私は、西田などと一緒に別院の庭で、折々戰爭ごつこをした。庭には芝生が綺麗に生えて居た。蘇鐵や、芭蕉が丈高く伸びて居た。四邊は掃き清められて一本の塵もなかつた。時々、勤行の始まるのを知らせる半鐘の音が何處からか聞えて來た。

普通の小供は、其の庭の中へ入れないさうであつたが、敏捷な西田は、いつの間にか、其處を自分の遊び場所のやうにして居た。私は西田に誘はれて、始めて其の庭へ至つた。最初、私は別院の僧たちに叱られはしまいかと思つて、内心びくびくして居た。けれども小供のことだから、寛大に見て置からうと思つたのか、誰れも叱るものはなかつた。

私は其處で西田らを始め、七八人の友達と敵身方に分れて取組み合つた。其の中で、一番强いのは西田であつた。彼れは、いつも一方の大將となつた。彼れの組に加はると、必ず勝つた。私は大抵、西田の組に居たが、時には、自分が大將になつて、西田を敵にしたこともあつた。

西田は、ひとり充分の餘裕を持つて居た。一生懸命になつたり、狼狽てたりしなかつた。彼れに抵抗するものを巧みに突き飛ばしたり、投げ付けたりした。見て居るうちに四五人のものに打勝つほどの敏捷な働きをした。私は性來、負け嫌ひなので、一度でも、西田を敵として勝ちたいと思つてが、それは無駄であつた。私の部下のものは、一溜りもなく、西田に倒されて、後に私ひとり殘ると云ふ有樣だつた。西田は流石に私だけには柔かに當つて、無暗に突き飛ばすやうなことをしなかつた。けれども双方、取組むと、大抵、私の負けになつた。

小說稗史に感溺した話

私が西田と一緒に遊ばない時は　西横堀の材木屋附近で遊ぶことに定めて居た。其處には、立石と云ふ同級生が居た。彼れは、眼が小さくて、團子鼻で、色が赤黑かつた。學校へ行く時は、毎朝、立石を誘つて出かけた。

私らは、學校から歸ると、材木屋の横町や材木小屋の中で、立石らと遊んだ。其の邊の氣分は、私の家の周圍とまたちがつて居た。何處を通つても、木の香がした。前も後も、材木ばかりで、小屋の薄暗いところには、挽子が大きい鋸で、太い木を挽いて居たり、鳶口を持つた人足が、材木を搬んだりして居た。

私は、時々、材木小屋へ友達と這入つた。濕つぽい木の香が濃厚に渦卷いて居た。空氣は冷めたく、光線がかすかに通うて居た。細かい木屑が一杯に地上に散らかつて、踏むと、下駄のあとが附いた。小屋の奥へ行つて、戸を開けると、材木を層々積み重ねて、岡が出來て居た。其の材木の岡に登ると、西横堀川が見えた。

此の邊の夜は、極めて淋しかつた。橋の袂に柳が糸垂れて、うす暗い軒燈が、ぼんやり地を照らして居る材木小屋の邊は、何となく、古狸でも居るやうに思はれた。それで夜になると、私は、成るべく足を早めて、逃げるやうに、明るい巷へ出ようとした。

だが、立石は、材木屋の子であるだけに、其の邊の淋しい樣子を何とも思つて居なかつた。夜分も、外へ出て遊んで居ることもあつた。彼れには、私のやうな神經質なところは、なかつ

た。多血質で、いつも明るい顔をして気軽に誰れとも遊んだ。生の力が、水々しく、彼れの全身に溢れて居るやうに見えた。

其の時分、私らが玩具のやうにして居たのは「めんこ」と「べつたら」とであつた。「めんこ」は、木を六分角に切つて、其の表面に俳優の紋を紫、赤、青などで刷り込んであつた。其の大きなのは二寸四方位あつて、普通の「めんこ」を幾十枚か手で割つて取れるやうに、はつきり割れ目が附けてあつた。「べつたら」は、今も東京附近の田舎へ行くと、小供たちが持つて居るが、ボール紙で作つた丸いカルタのやうなもので、表面には、大石良雄とか、赤垣源蔵とか、堀部安兵衛とか云ふ風に赤穂四十七士の討入姿がざつと印刷してあつた。

私らは「めんこ」や「べつたら」で、立石らと勝敗を争のを楽みにして居た。「めんこ」を使ふ時は、溝——それは東京のやうに始終水が流れて居ないで晴れた日は乾いて居た——に近いところへ、私たちが集つた。そして「めんこ」を地上に高く積んで、先づ私が一枚の「めんこ」をもつて、上層の一枚を巧みに溝の中へ跳ね飛ばすと、勝ちになるのである。だが失敗した時は、他のものが代つて、矢張、同様のことを繰返するのだ。其うち、自然、一二回で勝敗が付くのである。

「べつたら」で勝敗を争ふ時は、各自が一枚づゝ、それを手に取つて、地上で打合ふのである。私が充分力をこめて、相手が地に置いた「べつたら」の表面を烈しく打つと、それが裏返るのだ。だが、裏返らない場合は負けになるかも知れなかつた。今度は、相手の方が、また私と同様のことをする。直ぐ勝敗が決せられると云ふ風で、今の都會少年の眼から見れば、稚拙なものだつた。だが、人間が本能的に持つ所有慾は、先づ斯うした方面に現はれて、私等は其勝敗に夢中になつた。勝つた時は、凱旋将軍のやうだつたけれども、負けると、萎れ返つて、默つて居るやうなことがあつた。

□

雨が降ると、私は大抵、家に引籠つて、小説稗史の類を少し宛、讀んだ。其の時分、私の祖母は、針仕事の餘暇に大阪版の粗末な通俗小説を毎日定つたやうに讀んだものだ。『弘法大師一代記』とか『山中鹿之助』とか『岩見武勇傳』と云つた種類を好んだ。私も祖母の影響を受けて、それ等の小説を手當り次第に見た。

だが、其のうちで今も忘れられないのは『西遊記』である。それは、私を不思議なロマンチックの世界へ導いた。妖魔、幻術、危難、奇績と云つたやうなものが交互に出るのを呼吸もつ

がずに貪り讀んだ。孫悟空が自由自在に重い金棒を振廻はして、悪魔と戰ふ樣子や、一本の毛を吹いて無數の分身を空中に現はすところなどは、殊に氣に入つた。

私は、色慾にのみ耽る猪八戒を好まなかつたけれども、美しい女王に化けた蜘蛛の精が妖術を巧みに使つて、沙悟淨などを苦めるところが好きだつた。『西遊記』は、其の時分に讀んだ丈で、其の後、一度も手にしたことがないけれども、深い印象が今も殘つて居るのである。

私は『西遊記』を卒業すると、馬琴の『弓張月』や八犬傳』を讀んだ。『弓張月』では、蒙雲とか云ふ妖僧が、術でいろいろの不思議を見せるのが、奇怪に思はれもしたし、面白くもあつた。『八犬傳』では、芳流閣の上で、犬飼現八と犬塚信乃とが烈しく爭ふところ、犬坂毛野が女裝して仇討ちをするところなどが劇的である丈に私の注意を強く集中させた。

それ以來、私の小說熱は、著しく昂騰した。私は座摩神社の緣日の夜には、必ず出かけて、小說の古本を一二冊買つた。度々行くところから、古本屋は、いつか私の顏を覺えて了つた。

「ぼんち、どの本が宜しうおます。」

と彼れは、にこにこして私を迎へてくれた。悲しいことには、貧しい家の子には、僅かばかりの小遣ひしかなかつた。精々、十錢か、十五錢の本を一冊買ふ位のものであつた。それ等の本は、粗惡な用紙を使つた上、ページとページとの間へ古新聞紙をさし入れて、一寸手に取つて見ると、極めて分厚く感じられた。だが能く調べると、いくらも、ページがなかつた。大阪版の小說には、それが多かつた。其のうちで、私が買つたのは、いろいろあつたが、記憶に殘つて居るのは、矢張、極度にロマンチックな『三國妖婦傳』であつた。玉藻前に化けた妖狐が艶色で人を魅して、不思議を現はすところが『西遊記』などと別の感味があつた。

其の後、私は自分の持つて居る本を讀みつくすと、何か新しいものが讀みたくて仕樣がなかつた。今度は、友達から、本を借りるやうになつた。淺山は、私と同樣に小說が好きであつた。彼れは、矢張、貧乏のため、思ふやうに本が買へない悲みを持つて居た。私は彼れと逢つて互ゐに貧乏からくる不自由を心から咀つた。それで、彼れと私とは、境遇、嗜好を同うするところから、私の『西遊記』と彼れの『眞田三代記』とを交換して讀むことにした。

其の時、私は始めて淺山の家を訪ふた。彼れの家は、狭苦しい路次の中にあつた。小さいマッチ箱のやうな家が、ごたごたと十二軒ばかり列んで居た。何でも、東の方から三軒目の、北

側に彼れの家があつた。折よく、淺山も、彼れの姉妹も居たが、二間しかない家の中へ私が座り込む餘裕さへもないやうに見えた。私は戸口に起ちながら、淺山と話した。そして『眞田三代記』を借ると、直ぐに路次を出た。

其の歸途、私は矢張、小說を借るつもりで山田の家に立寄つた。彼れの家は、學校の筋向ひにあつた。大きな木綿問屋で、町内でも屈指の資産家だつた。山田は、其の家の長男で、私らと丸でちがつた贅澤な生活をして居た。彼れが靜かに勉强するために、特に書齋として、一室當てがつてあつた。

私は其の書齋へ導かれた。新しい机や、本箱の前に山田は、にこにこして座つて居た。山田は何處となく、大人君子と云つたやうな風を備へて居た。鹿兒島の生れであるところから、私は彼れを「西郷さん」と呼んで居た。色白の丸顔で、眼が二重瞼になつて居た。頭の毛が少し縮れて居たが、明るい南國の人らしい表情をして笑ふと、頰のあたりに笑渦が出來て、何とも云へない愛嬌があつた。私は山田が溫柔であるのに附け込んで、時々無理なことを云ひかけたが、山田は一度も怒つたことがなかつた。彼れは、どんな時、どんな場合にも、春の風のやうに一種の和氣を帶びて居た。

私は、山田から度々、本を借りた。私が學校で山田に逢つて「斯う云ふ小說を貸してくれ。」と云ふと、山田は快く承知して、翌日、必ず學校へ持つて來た。それほど、彼れは私に厚意を持つてくれたが、何處となく、親み難いところが一つあつた。それは、どう云ふ理由か、私にも、はつきり分析して見る丈の考へも出來て居なかつたが、今考へると、プロレタリアートの空氣を生れながら、呼吸して居た私と早くからブルジョアの空氣の中に生活して居た彼れとの間に何となく、ぴたりと一致し難い傾きが明かにあつたのだ。

其の時分、私は山田が、何でも、思ふ通りに小說や、稗史を買ひ入れることの出來ることを心から羨んで居た。それが、漠然と一種の反感ともなつて、私の胸に蟠つて居た。それで私は山田が讀んで居る本でも、借りたくなると、掠奪するやうに取上げて、借覽したことさへもあつた。山田も流石にそれだけは快く思はぬらしかつた。

私が山田を訪ふた日、彼れは、一九の『東海道膝栗毛』を讀んで居た。私はそれが讀みたくて堪らなかつたけれども、いくらか遠慮した。學校で彼れに對するやうな我儘もしかねて居ただが、其の時は、山田も、向ふから自發的に

「これを讀んで見なはれ、中々、面白うおまつせ。」

と云つて、快く『膝栗毛』を貸してくれた。私は喜んで、そ

れを借りると、早く讀みたい衝動に迫られた。私は直ぐ山田の家を出た。

月光の下に自殺を計つた話

斯うして、私は小說稗史に耽つたけれども、學校を怠けるやうなことは、唯の一度もなかつた。私の知識慾は、ロマンチツクな傾向を愛する情熱と併行して燃えて居た。高等一年になつて敎へられる新しい學科のどれにも、フレツシユな興味を感じて居た。地理、歷史、理科、英語などは、殊に私が好んで修めた學科であつた。

私が始めて、英語を習ふについて『ロングマン』の第一讀本を見た時、其の表紙の海老茶色のクロースや、ページの最初にあつたアルハベツトの配列や、網目木版の猫や、鼠の緻密な繪などに異國情調をそゝられた。私は幾度も、幾度も、第一讀本を繰返して、其處に小供らしい愛着を感じた。

私等に英語を敎へてくれた專任敎師は、若々しい人であつた。身長が西洋人のやうに高くて、顏の色は、印度人のやうに黑かつた。洋服を具合よく着て、花やかなネクタイを締めた風采は、一體にハイカラらしかつた。

一番始めに、英語敎師から綴字を敎へられて、やがて猫とか、犬とか云ふ簡單な名詞を敎へられた時は、すべてが珍しかつた。私は躍り上るやうな好奇心を以て、貪るやうに早く覺えた。學校からの歸途、私等は、未だ覺えたばかりの名詞や、一寸した挨拶の言葉などを話し合つて、素破らしい學者になつたやうに思ひ込んで居た。

其の頃は、地理、歷史、理科などの敎科書が丸で無かつた。地理の時間には、敎師が古びた地圖を正面へかけて、鞭で五畿內の山河や都會などを指點して敎へた。恰度、いが栗のやうに描かれた山や、蚯蚓のやうに這ひ廻つて記されて居た河などが妙に私の新しい興味を地圖の上に起させた。

歷史は、敎師の口授をすつかり筆記した。長髓彥とか、土蜘蛛とか、當麻蹶早と云ふやう云ふやうな變つた名が面白かつた。私は、日本武尊が女裝して、賊魁を刺された話、また草薙劍で、賊が放火した中を勇敢に切り拔けられた話に共鳴した。それから仁德天皇が大阪市民を愛せられた話は、高津神社へ參詣して、高臺から、遙かに市街を眺めたことがあるだけに深く感動させられた。

理科の時間は、私に取つて、一つの大きい驚異の世界であつた。宇宙の引力の話などには、眼を瞬つたものだ。遠心力、求心力と云つたやうなことが、丸で新しい魅力を以て、私を喜ば

せた。植物の雌蕊や、雄蕊とか云ふ極めて平凡なことも、それを聞いた最初は、矢張、不思議な謎が一つ解かれたやうに思はれた。私の知識慾は、いきいきと動いて、何でも、新しいことを知りたいと云ふ熱意に躍つて居たのだ。

だから、私は學校で敎へられること丈では滿足しなかつた。私はいつか東京のK館から發行されて居た『小國民』を讀み始めた。それは、今日の少年雜誌にくらべると、體裁も內容も、餘程劣つて居たが、未だ左樣した種類では、僅かに『少年園』や『幼年雜誌』位しかなかつた時代であつたから、『小國民』さへも、私等には、大きい喜びだつた。

それには、富岡永洗が描いた極彩色の武者繪が一枚、口繪にしてあつた。動植鑛物などの話には、西洋網目木版を用ゐて、今までの日本繪とは、丸でちがつた趣を見せて居た。私は、僅かに一冊見た丈で、もう『小國民』の愛讀者になつて了つた。『小國民』が發行される時分になると、私は南久太郎町にあるK館の支店へ出かけた。そして新刊の『小國民』が未だ出來て居ないと、何だか落し物でもしたやうな一種の物足らなさを感じた。だが、私は左樣した場合には、根氣よく、其の翌日も亦學校からの歸途K館支店へ立寄るのだつた。偶然、宜い按配に今少し先きに東京から着いたばかりの新しい『小國民』が店に出て居ると、私は飛びあがるやうに喜んだものだ。それほど私は新知識に渴して居た。

斯うして　貧しいながら、夢のやうに、穩かな樂しい少年の日が、暫く續いた。

□

西横堀の家で迎へた冬と夏とは、特に印象が深かつた。私の一家は、すべて早起の方で午前五時前後には、もうそろそろ床を出ると云ふ風であつた。唯私が一番遲れて起きることを許されて居る丈であつた。冬は大抵午後八時頃に寢たが、朝は小學校へゆく時間が近付くまでは、矢張、床の中に居て、眼を醒ましながら、空想に耽つて居ることが多かつた。

私が寢て居る奥の間には、ガラス障子がはめてあるので、東からさし込む朝の光りが、障子を透ほして、室內に流れ込んだ。露の深い朝は、ガラス障子が直ぐに曇つた。頭を枕に載せながら、天井を見つめて居ると、ぎいぎいと櫓の音が枕許へ通つてくる。近所の運漕店の船が荷物を積んで出發しようとする氣配がして、櫂などをがた付かせて居る音が聞える。船頭が何だか私にわからぬ鼻唄を歌つて居るのが耳に這入る。隣の饅餠屋の細君が裏口へ出て、川の水で、米を洗つて居る音がする。朝

を喜ぶ雀の囀も寒さうに聞える。

それ等の物音を聞きながら、私は外の寒さを恐れて、蒲團の暖か味をなつかしく思つて、容易に床を離れない。其のうち、太陽の赤い光線がぱつとガラス障子に當る、室内は以前より明るさを加へる。もうそろそろ學校へゆく時間が近付いたなと知つて居ながら、尚ほ床から出ないで居る。

「清やん、もう起きや。」

朝の禮拜をすませた祖母が　斯う私に言葉をかける。

「うん」

私は生返事をした丈で、矢張起きない。太陽が東の空に稍高く昇つて、金色の光りを投げかけて、室内が眩しい時分になると、私は始めて床から離れるのだ。すると、祖母か父かが來て、私に着物を着せて、帶を締めてくれる。私は唯人形のやうにぢつとして居る丈だつた。

臺所へゆくと、叔父は、其の側にある窯で陶器の繪を焼き付けて居る。窯に入れた火は眞赤になつて、火氣が強く其の邊の冷めたい空氣を暖めて居る。私は、此の火が何よりもなつかしかつた。井戸水でざつと口を漱いで顔を洗ふと、直ぐに窯の前へ至つて、暫く兩手をかざすやうにして火に親んだ。此には冬がないやうに思はれる程ど暖かだつた。私の青白い顔さへも火氣でほてつて、酒に醉つたと同樣に赤くなつた。

夏は川を前に控へて居るので、いつも涼しかつた。夜は物干臺へ出て、祖母と一緒に軒に鳴る風鈴の音を涼しく聞き乍ら、冷めたい川風を迎へた。午下は、家族のものが、皆午睡を貪つたが、私は裏口へ通ずる石段を下りて、河岸へ出た。そして其處で魚を掬つたり、蟹を捕へたりして、時の經つのを忘れた。

横堀へ來てから、最初の夏、私を驚喜させたのは、陶器神社の祭禮であつた。それは、瀬戸物問屋が多いところから、毎年一回、陶器の神を祭つて、商賈繁昌を祈るのである。此の祭は、大阪でなければ見られないローカル・カラーを帶びて居た。他の祭禮は「だんじり」と稱する屋臺風のものを出すとか「あばれ神輿」を出すことに定つて居たのだが、陶器神社の祭は「造人形」をして見せるのが、一つの大きい特色になつて居た。

それは、東京の團子坂で秋に見せる菊人形などと同じ趣のものだつた。大阪では、夏祭に造人形をして見せる風習が古くからあつた。靱神社の祭にも、干物問屋が干魚ばかりで人形を造つて見せるのだ。陶器神社のは、皿とか、鉢とか、盃などを用ゐて人形を造るのである。それは、藝術的なものと云へないかも知れないが、見た眼に優美な感じを與へた。

勿論、造人形と云つても、顔だけは、矢張普通の人形と同じ

ものを用ふるのだが、衣裳だけは、すつかり瀬戸物の色彩を配合して、人物の個性にふさわしいものに造りあげるのだ。それ等の人形は大抵芝居か、稗史に因緣あるものに限られて居た。「戻橋」の鬼女とか「菊畑」の皆鶴姫とか「十種香」の八重垣姫とか「戻駕」の禿とか云ふ風のものだつた。五條の橋に於ける辨慶と牛若、皿屋敷に於ける鐵山とお菊「太十」に於ける初菊と重次郎と云つたやうなものもあつた。錦手の皿、九谷燒の盃と云つたやうな各種のものを巧みた集めて、どんな色彩でも現はすことが出來る技巧を見せて居た。

大阪の人たちは、左樣した造人形を見るために、小供らを伴れて、西横堀に集つた。暑熱の高い時分は、割合に人通りが少いけれども、夕刻が近付くと、もう身動きさへ出來ないほどの雜沓を極めた。私は、それ等の人々の中に混じつて、人形を見て歩いた。提灯や蠟燭の光りを浴びた人形は輝かしくなつて、晝間見たよりは、一段の美しさを加へた。私が美に憧憬れる心は、陶器神社の祭によつて、いくらか植え付けられたにちがいなかつた。

其の祭のある間、私は毎夜、人形を見て歩いた。私の頭の中には、人形を透ほして、いろいろのロマンスの斷片が印象された。私は可憐な美少年の牛若が强さうな辨慶に打勝つた勇氣をどんなに嘆賞したであらう。また打萎れた花のやうなお菊を苦めた鐵山の殘虐をどんなに憎んだであらう。燦爛と輝く兜(かぶと)を手にして、狐火と共に狂ふ八重垣姫の濃艶な姿に錦繪の夢を見るやうな幻の美をどんなに深く感じたであらう。私は、次ぎの夏にくる新しい祭と共に新しい造人形が待たれた。

□

貧しいながらも、淋しい幸福の日が過ぎてゆくうちに、私に取つて、大きい苦難が起つた。性慾の惱み？ それも淡く感じて居た。空想のうちに描いた初戀の對象が得られないもどかしさ、それも、いくらか私を憂欝にした。だが、それよりも一生の運命を悪い方へ向けようとする迫害が先づ私を强く苦めた。

私の家庭では、學問を無用のものだと思ふ人たちが多かつた誰れも彼れも學問の尊い價値を知らなかつた。私の父は、私の前途や現狀について考へる丈の能力を絶體に無くして了つて居た。自分の子がどんな長所を持つて居るのか、何を志して居るのか、左樣したことには全く無關心だつた。それに父自身の悲痛な生についてすらも、また今後、どうなつてゆくであらうかと云ふことさへも、考へ得なかつた。それで私の運命を宜い方へ開いてゆく保護者の手を缺いて居た。

父が左樣な風であるため、田島の叔父叔母や、私の祖母などが父に代つて、私の前途について干渉するやうになつた。祖母は讀書好きだつたが、私の長所については全く盲目だつた。祖母は一概に田島の叔父らの云ふことを過信した。田島では、私を商人に仕立てるが宜いと云ふので、祖母も亦其の積りで居るらしかつた。

けれども私は商家に生れて、船場の空氣を吸ふたに關らず、商人となつて、算盤を彈くことが、どうしても、いやで堪らなかつた。

「俺はどうしても學者になるのだ。」

斯うひとりで決心して居たが、私の周圍はそれを無視してかゝつた。

「商買人になるのは、高等二年まで行けば、それで結構や、高等を卒業させると、人間が生意氣になつていかん。」

田島の叔父は、いつかこんなことを祖母に向つて云つたさうだ。私は其の無理解な言葉をどんなに執念深く咀つたか知れなかつた。

「俺は高等小學を卒業する迄、どうしても學校へ行くんだ。」

と一心に思ひつめて居た。だが、誰れひとり私の心のうちを理解してくれるものがなかつた。

「學問したかて、儲かれへんぜ。」

最後には、斯うした冷語を頭から浴びせかけられた。私は小供ながら、それをどんなに憤つたか！

其のうちに祖母は、どう定めたのか、十三歳の秋に私に向つて學校を退學しなければならぬ事情を述べた、そして何處かの商店へ丁稚奉公をするやうに勸めた。私の好きな祖母ではあつたけれども、此の時ばかりは、私も眞赤に怒つた。

「私は奉公なんかいやや、やつぱり學校へやつてんか、え、學校へ。」

私は手强く反抗して、祖母に斯う哀願して見た。だが、學問の價値を知らない祖母には、それが無用のことのやうに思はれたと見えて、どうしても、贊成しなかつた。矢張、私を商人にしようと思つた。

「私たちの家も、今はこんなに貧乏してるけれど、道修町に居た時分は、中々よかつたんや、お前の父があんな風になつたよよつて、どうもならん。どうしても、お前が家を再興するのやぜ。わかつたか。」

祖母は、眼に淚を浮べて、優しく、私を諭さうと力めた。祖母に泣き付かれて見ると、私も、それ以上、反抗する丈の力がなくなつた。私は唯泣いた。

それから、間もなく、私は學校を退いて、田島の家へ店務見習のため、一寸預けられることになつた。勿論、實際は、小僧同樣に追ひ使はれるのであつたが、私には、それとはつきり云はなかつた。

口

田島の叔母が私を迎へに來たのは、恰度九月十三夜だつた。私は二三年、叔母の手で育てられたので、何となく、母のやうに慕つたのであるが、此の夜に限つて優しい叔母が怖かつた。

貧乏!

私は、貧乏を咀つた。好きな學校をやめ、親しい學友に別れて、心に染まぬ小僧見習になるのは、何と云ふ悲しい運命であらう。私の才能が商人にふさわしくないのに、强ゐて、不適當な方面へ、私を向はせようとする人たちは、鬼か、惡魔か。つまりは貧乏なからだ、家に金がないからだ。もう二三年、私を學校へ通はせる餘裕がないからだ。私は勿論、はつきり左樣は考へなかつたが、貧乏と云ふことだけが、何となく、私に情ない感じを與へた。

もう私はもがいても、あせつても、貧乏の壓迫と周圍の無理解とから逃れ得ない境涯に落ちて居た。私は、ひとり物干臺へ出て、ぢつと頭を垂れて居た。私の父は、私が殘虐な咀ひの下に小羊のやうにつれられてゆく危い瀬戸際にあるのを一向、知らない樣子で、何かひとり奧の間で呟いて居た。私は父の横顏を見やつて、ほろりとなつた。

其の夜の月は、はつきり大空に澄んで居た。其の淸い光りは、人の心の底まで照らすやうに思はれた。私は、ぢつと其の光りを仰いだ。月は貧乏の犧牲となつてゆく私を憐むやうに見えた。そして涙にぬれた眼には、月が茫と見えて、輪が懸つてるやうに映つた。

私は、更らに四邊を見廻した。川の上には筏や、運漕船がぢつと横はつて居た。向河岸の材木小屋が月に照らされて、夜の水蒸氣のうちに浮むやうに見えた。其の月光にそむいた半面には、陰影を宿して居た。私は不圖、西横堀へ來てから、折々、川の邊で遊んだ樂しさを思ひ出した。

夏になると、私は船の代りに盥を浮べて、川の眞中へ出て見たことがあつた。午後の滿潮時刻に裏口の戸をあけて出て、河岸に近い淺瀬の藻の中や、石の蔭に隱れて居る手長蝦、鮒などを掬ひあげようとして失敗したことがあつた。石垣のうちに泡を吹いて居る爪の赤い蟹を摑まへて、玩具代りにしたこともあつた。すべて樂しい思ひ出の多い西横堀の家を離れねばならな

いのか。

もう、其の時、全身の血は頭に逆上して居た。私はふらふらとなつて、吾知らず、物干臺の欄干(てすり)によりかゝつた。

「もう此世に生きて居たくない、一思ひに死んで了ひたい。」

私は小さい胸に平和な何の惱みもなさ相な死の國を思ひ浮べた。其處には、貧乏の苦みも、無理解な周圍も、一切ないやうに思はれた。私の手は、自然に植木鉢の中にある小石を五つ六つ取つて左の袂へ入れた。川の下を見ると、水は滿々と湛えられて、岸を洗つて居た。月光が、映つて、金粉を撒布したやうに碎けて流れて居た。それを見つめて居ると、私は何となく、死の誘惑を感じた。私は物干臺から半身を前方へ出して、眞逆樣に水中へ飛び込もうとした。

「未だ死ぬのは早い、も少し我慢しろ。」

何處からともなく、左樣叫ぶ聲がした。私は急に生の意識に戻つた。其の時、叔母や、祖母は、私の危機をも知らないで、中の間で茶を飲みながら、何かひそひそ話して居た。私は重い氣分に囚はれながら、涙にぬれた目で、大空の月を見上げた。そして唯ひとり悲し氣に呟いた。

「俺は生きる、決して死なぬ。生きて働くのだ、最後まで働くのだ。」

巴里の近狀を觀て

荒井陸男

「こゝが地中海ですか？　何となく氣持が違ひますね。……いよ／＼白ん坊の國に來たわけですね。これからが本當の洋行氣分を味はれるのです。」

「地中海は好いが、印度洋の貿易風(モンスーン)に負けずに船が揺れるのは聊か閉口だ！」

こんな會話が今、我々の船の中で交はされてゐる。「ミノトール」で名高いクリート島も昨日後にしてしまつた船は、舵を左に右に曲げながら、あの美くしい藝術の國イタリーを北に見て、狹いメッシナの海峽を拔けようとしてゐる。乘客の彼れ此れは、兩岸の景色が變轉するにつれて、右顧又左眄、頻に手を

罵す者、双眼鏡を持ちあるく者、甲板上は俄に喧びしく、えらい景氣となつた。しかし折悪しくも曇り模様のことゝて、有名なエトナの大山は霧と雲とに鎖されて見るを得なかつたが、それでもメシナやレジオの町は、手に取るやうに近く見えた。鐵棒に長かつだ鐵路に、とつくから飽いてゐる人々は、山の下を走る汽車の煙を見ても、きや〱と云つて喜んでゐた。さうして、マカロニや、泥棒や、マルコニー、シーザーを話題にのせながら、談論はそれからそれへと移り進んで、イタリー文藝の成り行きなどにも説き及ぼす者があつた。遂には、口角泡を飛ばして、天晴れの物知り振りを發揮する向きも、見かけないでもなかつた

しかしそれも一時間ばかりで、此の面白い水道を通り抜けてしまふと、再び單調な波の中に我々は取り巻かれて、次の日には由緒ある物語に富むコルシカとサルヂニアの間にさしかゝつたが、ナポレオンの逸事も、マゴのお話も持ち出さうとする人は一人も居なかつた。——明日はもうマルセイユに着くといふので、大抵の人は上陸の準備に忙しく、雑談どころの餘裕もないのであつた。途中であまり消費し過ぎたと云つて、縞の財布の輕くなつたのに、愚痴をこぼす位が關の山で、支那海や印度洋あたりでやたらに出た、熊公や八公にも共通性のある戀愛論などは、何時となくサルーンの話から虐待されて、その影を光に失つてしまつた。君は何處のホテルに行くのかとか、言葉が解らないからパリまではよろしくたのむとか、なか〱皆の心持が小うるさく緊張して來る。誰れにしても、落ち着く先の不安恐怖より、少しでも免れたいものとあせり出すのがまさ〱と見え出して來る。人間といふ奴は實に變なものだ。とにかく碧い眼の玉で赤い毛の生へた背高童子の棲息してゐる國だもの珍妙不思議聊か警戒を要す位は両面考へているらしい。だがしかし斯うなるとやり切れないのは、幸か不幸か私の如く、三度も同じヨーロッパに出かけてゐる奴である。餘程の歐洲通とでも思はれて、無闇矢鱈に質問されるので、その應答だけでもなかなか忙しい、恰かも船中に於けるトユーリスト・ビユーロー出張員の感がある

斯くして兎に角、船はマルセイユに着いた。着くには着いたが、例に依つて有名なBistral——これはマルセイユ附近の一帶に吹く強烈なる東北風で、古來常に航海者を煩はすところ先きの大戰中我が驅逐艦などもミストラルには盛んに苦しめられ人命など奪はれた事私の目撃した事實である。マルセイユには「ミストラル」と呼ぶ料理屋まである——が、猛威を逞うしたので、十數隻の他の船と共に、呼べば答へん的の市街を眼の

商に見ながら、港外假泊の止むなきに及んだのは、聊か我が神戸の港を思はせて恐縮の次第であつた。幸にも、翌朝はすつかり風が收まつて、未明には奧深く港内の岸壁に繋留されることが出來た。船中に日を暮すこと四十餘日の間に、入魂の友となり合つた我々は、殆ど全部マルセイユから上陸したのだが、マルセイユで一泊しようといふ吞氣黨と、直にパリに行かうとする氣早黨とに二分された。――船の中では、トーマス・クック〳〵と叫んで來る案内人、それに兩替屋、宿屋の客引き、稅關吏、いやはや上を下への大混雜で、ぐづ〳〵してゐると横面でも擲り倒されさうである。

私等は吞氣黨の方に加はつて、ぼつ〳〵上陸した。船から出て行くと、型の如くに直に稅關で荷物檢査を受けねばならぬ。こゝではしかし、日本の稅關と異つて、荷物などを悉く開いて見せる世話がなく、煙草や酒類の有無を訊す位なもので、一個位荷物を開いて見せれば、ろくに檢べもしないで、檢査濟のマークをつけてくれる。つゞいて他の荷物も示さうとすると、もう宜しいと云ふ。こんなところは至極簡單で、日本の港に着いた時よりも頗る愉快である。ただ、船中で非常に大切に保管をして來た奈良漬の大樽三個について若干の稅金を課せられたのは、一寸恐縮の體であつた。

私に取つてマルセイユは、幾度となくお目にかゝつた所で、さう珍らしさうな氣もしなかつた。しかし、戰時中、各國兵士の展覽會でも開かれてゐるやうに、種々なる國の軍人の容貌、服裝等に接したものが、今は勿論そんな光景は一掃されて、完く戰前の常態に復してゐることを知つた。そこで私は、五六人の一行に加はり、先づ〳〵上陸氣分を味はんものと、當地第一流の大ホテルに自働車を乘りつけて、それから例のマルセイユ名物なるブイヤベツに舌皷を打ち鳴らし、久しぶりでフランスらしい感じになつた。殊に私以外の人々はすべて、初めて西洋の陸地を足で踏むこととて、なか〳〵好奇心を動かして盛なものである。その、歐洲文明接觸の最初の第一印象たるや、皆一樣に奇想天外的で、まことに面白いことである。料理店、カフエーなどの給仕男なるギャルソン達の人相風采を眺めながら、日本に來たなら大臣位の顏には見えると、とんだところで敬意を表する人もあれば、何奴も斯奴も美くしい髯を生やしてゐるのを目にして、ラテン人種は最も豐富なる毛根の所有者であると云つて、人種學上に於ける一の斷定を下さうとする人もある。しかし、彼等の頭だけは却つて除外例であるらしく、頭の禿げた先生が矢鱈に多いと呟く人もある。またフランスの婦人が、をしなべて豫想以上に小さなことも、多くの人に取つて驚くべ

きことであつたらしい。

此の一行中、或る者はリオンへ、或る者はスイスに向つて、翌早朝の汽車でそれ〳〵に出發したが、私のみは夜行を待つてパリに出發した。マルセイユからリオンを經由してパリに達する約七百哩の鐵道は、佛都より地中海を越えて佛領アルゼリー、チユニス、さてはモロツコ等に接續すべき立派な幹線であるから、速力も早く、乘り心地も極めて好い。但し戰時中、軍隊輸送の爲めに甚だしく一般の旅客を虐待したこともあるが、それも今では何等の憂き目を見ず、氣樂な寢臺車に一夜を過すことが出來た。たゞ、汽車は夕べに發して朝に着したので、ロームの清流もリオンの町影も見ることを得なかつたのは、多少の遺憾である。

大陸の夏の夜は明けるに早く、暮れるに遲しである。午前九時といふに、地中海方面よりの汽車の到着驛たるガール・ド・リオンに入り込んだ時は、パリは白晝の雜閙に湧き立つやうになつて居た。思ひ起す、今から三年前のことである。戰時のことゝて、ベルタ(ドイツ軍長距離砲の俗稱)の爆音を耳にしながら、頗る心膽を寒からしめつゝ、重い荷物を引き摺りながら、この停車場までやつと着いたのはいゝが、これを運ぶべき車もなければ人間もないといふやうな、物のあはれさを味はつた私には、今度はまた非常に氣持よく感ぜられた。赤帽は充分に居るし、自働車、殊にタキシーは驚くほど澤山にある。旅客が何等の不便も恐怖も感じないでパリに入られるといふことは、前の經驗のこびりついてゐる私に、「パリはよく救はれたものだ！」と、直ちに思はせたのである。千九百十八年六月四日頃の、此の都の危急を思ふと、恐らく今でもパリの人は感慨なしに居られぬであらう。

しかし、此のガール・リオンの停車場で、又も相變らず馬鹿氣た眞似をすると思つたことは外でもない。例の税關吏である。出口に立つて、一々旅客の荷物を御苦勞樣にも訊問してゐる。これはお互に、意味のないことに面倒臭い仕事である。斷つて置くが、パリではその市として別に又税關があつて、田舍から安直なる食料品などを窃に持ち込む者に税金を課し、パリ市内の物價の均等を圖つてゐる。その爲めに、地方よりパリに入るべき數ケ所の停車場の改札口に、それ〳〵見張の役人を置いて、御苦勞にも旅客の荷物に對して何が容れてあるかと訊ねるのである。旅客の方では無論、異口同音に、自分達の着物類である位なことを答へる。それで見張人は、「ボン」とか何とか云つて、滿足らしく無事に通してしまふのである。鞄などを開けさせられてゐる人は、私の數度の通過中、一度として見たこと

はない。隨分好い加減な仕事である。そんなことなら、いつそのこと全廢するに限ると思はれるが、矢張りやつてゐるところがフランス式なのであらう。

パリの市街に入り込んでの私の感想は、殆ど全く以前と變りはない。何しろ疾つくに大都會として完成されてゐるのであるから、東京市などの如く、一二年經たぬ中に、何處の町が取拂はれたとか、又は何處の野原に大建築が出來たとかいふやうなことは、全くない。私の見た二三年前も十年前も、また今日も、少しも異つたところはない。ノートルダムの塔に高く聳くマすヤの鐵も、セーヌの流れも、パンセレヌの森も、皆同じである。横町の肉屋にも、十年前の肉が、よくも腐らずその儘吊してあるものだと不思議に感じたほどに同じである。

——少し逆轉するが、マルセイユからの汽車の中で特に面白く感じたのは、フランス人の面白い氣質についてゞある。一體、こゝの汽車で一等室は、一室内に一方へ二人宛、向き合ひに四人腰掛けられるのであるが、それに三人坐つて居て、一人分の席が空いてゐると、外部から新しい他の客が空席を求めて一人そこへ入り込まうとする時、決して最初から乘つてゐる人の方からは、一人空いてゐるなどとは言はないのである、先方から問はれると、空いては居ないなどゝ嘘はつかない。止むを得ず、空いて居ると答へるけれども、自分達の方から進んで言はないところに、旅客心理があつてなか／＼面白い。またフランス人はターランデール、即ち英語のドラフト若しくフレツシユエア。——新鮮な空氣である。——これがきらひな人間である。英人などゝ比べるとまことに面白い、イギリス人だと、汽車に乘ると直に窓でも開いて、新しい空氣を入れようとするのだが、フランス人は却つてそれを厭ふかのやうに、夏の眞盛りでも窓をしめて、若し外の人が開けでもすれば、妙な顏をするやうである。それだからといふと變な推論になるが、フランス人にはイギリス人のやうに赤つ面が居ない。そこで、フレツシユエアのきらひな國民は、隨つて赤つ面でないと言へるかも知れない。日光のあたらぬ椽の下にはへた胡類の如きである。

尚ほ、汽車の中で、今度西洋に來て驚いたことは、食堂などで、食事が終ると盛に煙草を喫ふことで、「禁煙」と書いてあつても平氣でやつて居る。殊に驚いたのは、妙齡の婦人が我々にマツチを貸して呉れといふやうなことを平氣で口にすることである。汽車と限らず、一般に煙草を喫む婦人の多くなつたことは、たしかに戰後に見る現象である。それから、外國人と見ると、やたらにチツプを貰ひたがることも、戰前にはあまり見ないことであつた。流石に自國人に對してはそんなことはないや

うであるが、外國人に對する態度が餘程違つて來た。これ等は戰前と戰時とを目擊してゐる私に取つては、非常な變化の生じつゝあることを思はせる。その爲めに、何となく警戒が生じて、パリに着いたらどんなに變つて居るであらうかと、思はず懐中物を一寸觸つて見る氣が起つたりなどするのであつた。しかし幸にしてそれも杞憂で、何うやら斯うやら無事にパリ市街に乘り込むことが出來たのは何よりであつた。

ところで、パリに着いてから當分の問は、住宅難になやまされたのは、私の左まで豫期しないことであつた。何しろ着くや匆々、家探しをやるのが大變なさわぎとなつた。新聞の廣告を見ても、とても我々の借りられるやうなアトリエなどありさうにも思はれない。若し適當なアトリエを探し當てゝ呉れた人には莫大なお禮をやるといふやうな懸賞廣告ばかりである。普通のアパルトマンにしても同樣で、探した者には家賃の一割を謝禮するなどゝいふ類いのばかり眼につく。戰爭中には、カルチエラタンの如き、獨逸の長距離彈が落ちた爲め、近所一帶は忽に逃げる人が殖えて、盛に貸屋札を貼つてあつたものだ。それは一度ではなくて、何度も彈丸が落ちるとその度每に貼札が多くなつたものである。そして、澤山の住民がリオンやマルセイユ等へ避難したものである。實に千九百十八年の五六月の頃の如き、續々として避難するものばかりで、其處にも此處にも貸家だらけであつた。家屋を借りるのに新聞廣告に依るといふやうなことは、夢にも想はなかつたのである。さういふ有樣だから隨つて家賃も無論安かつた。それが戰後、殊に最近では、家主がどし〳〵家賃を上げるので、政府も放任して置くわけに行かなくなつて、制限の法律を出して、不當な家賃を貪る者は制裁を加へ、場合に依つては獄に投ずることにした。戰時中は家族に出征者のある場合、家賃を拂はなくてもよいといふやうな特別令さへあつたものが、今度はまた惡家主懲罰の令を出さなくてはならなくなつた。けれども何處も同じで、狡猾な人間は法網をくゞることに巧みだから、面白いことに、家主達の方でもなか〳〵考へて、暴利を取る手段を盡して居るやうである。例へば、內國人よりも外國人に貸したいと希望する人が非常に多いといふ如きもそれである。それだと外國人だけに事情にも通ぜず、さう容易に奸手段を發見されはしない。無論、五百フランの家賃を一千フランなどにすることは出來ないが、契約書には五百フランと明かに書いて置いて、その外最初に手數料として五百フランを支拂はせるのだから、借りた方では結局一千フランの家賃を拂つてゐるのと同じことになるのである。こんなずるいことをしてゐるフランス人はなか〳〵澤山あるらし

い。私の現在の住居の如きも、幸に苦心をして探したのに、同様な奸手段に依つて高い家賃を支拂はねばならなかつた。それと今一つ、最近驚いたことは、戰後に於ける一般社會道德が非常に變つた點である。とり別けて、我々の住むカルチエラタンの近邊の如きは、昔から金持が跋扈するなどいふことなく、多くは學者、藝術家氣分で、外國人に對しても、商店で買ひ物をしたところが掛け値などをするやうなことは絕對になかつた。まことに何事にも氣持のよいコスモポリタン氣分であつたのだが、今は決してさうではない。若し少しでも外國人らしく見えて、言葉などがをかしいと、當然のことのやうにして貪らうとする。これは畢竟、戰爭の影響を受けてフランス人その者が貧乏になつた爲めでもあらうから、大に同情すべきであらうが、現に角事實は斯んな風で、私が數年前に居た時のやうな安易で氣樂な心持にはなり得ないのである。しかしそれには、外國人にも大に責任があると思ふ。殊にアメリカ人などが、レートの關係で大に金を撒き散らし、惡化させた結果なども考へて見なくてはなるまい。此の間のこと、私の友人でT氏といふ海軍軍令部を代表して列國通信會議にやつて來て居る人が、或る日フランス遞信省の書記官と、タキシーに同乘して或る目的地に向つた。勿論その日の要務は全くT氏にあつて、フランスの書記官はそのT氏を援ける爲めに同行したのであつたから、タキシーの賃金はT氏が當然支拂べきであつた。そこで、タキシーのメートルを見ると、三フラン五十サンチームと出て居たから、T氏は餘分に五フランを渡した。そして、お釣錢を取らずに皆呉れてやつたのである。すると、それからといふもの書記官は非常に機嫌が惡い。最初は何うした理由か解らなかつたが、だん〵〵語るところによると、タキシーの運轉手には、チップをやるならせい〴〵五十文も呉れてやればよい。斯くの如く不當な金を與へることに依つて、外國人等は我々フランス人をスポイルしてしまふのだとの話である。そして書記官の機嫌が何うしても直らなくて、遂に用務の方も思ふやうに捗らなかつたとのことを聞いた。まつたく、斯くしてパリジヤンをスポイルするのは、景氣のよささうな粧ひをしてゐるやうな、或る成金國民に依つてであることをつく〴〵感じて居る。それと同時に、此の書記官の言つたことは、此のあはれにも疲弊したフランス國民が、しかも猶は一面に氣慨を失はざることを示す、まことにたのもしい言葉である。

それから又、パリに來て文學美術にたづさはつたことのある人達は、何れもあのパンテオンからサンセルマンの、あのブールバールを思ひ出すであらう。あの邊は、如何なる風采をして

步からが、少しも隙はない別天地であつた。學者、文學者、藝術家達の、ゆつたりとした、現代の生活とは全くかけ離れたやうな、とてもロンドンやベルリンでは見られぬものが見られた。然るにそれも、今ではブルジョアに依つてかき擾されてしまつて、道行く人の姿の如き殆どすつかり前年とは變つてゐる。そこを通る青年は、昔のやうに時代おくれの破れ帽子に、剝げちよろけの天鵞絨服で、兵隊靴をぼか〳〵鳴らしてゐるといふのではなくて、コルセツトを嵌めたやうに腰の緊まつた洋服に、ポケツトから絹のにやけたハンケチを一寸のぞかせて、競馬の騎士の持つ鞭のやうに細つそりしたステツキを小脇にかゝてゐる。おまけに、××××××めさせるやうな犬を連れてゐるやうな人間が多い。女にしても、一着の外套に一萬フランを投ずるのが普通で、昔の藝術家街は全く斯ういふ連中に依つて俗化、惡化されてしまつてゐるのである。殊にそれ等の多くは外國人である。あのいやな鼻聲で、とんちんかんのフランス語を使ひながら、大きな鼈甲眼鏡のやうなものをかけて歩くアメリカ人などが最も多い。その爲めに、もとの氣分といふものはすつかり失はれてしまつた。ソルボンヌの附近の方も、今は斯ういふ外國人が多くて相當に成金振りを發揮して、昔の氣持のよかつたものを失つてしまつた。

パリについて著しい最近の現象としては、盜賊が非常に多くなつたことである。私がマルセイユからパリに着いて間もないことであつた。パリ・マルセイユ間の客車の中で、伏面の强盜が一等客の室を襲つたのである。斯ういふことは、アメリカのロツキー山を越えるといふやうな場合にあるべきで、あの大陸の最も交通の頻繁な、そして鐵道警察の行き屆いて居るべき筈のP、L、Mの直行列車の中で、起らうなどゝは誰れが考へ得よよぞ。しかもそれがリオン・デヂオン間の僅かの時間に行はれたのである。やり方も非常にドラマチツクで、突然一等室の中へ三人の伏面した曲者が立ち現はれ、その二人は、車室の内側の出口前後より固めて旅客の逃走を防ぎ、他の一人は客の中央に立つて、型の如くピストルを擬して强迫したのである。その客の中には、或るフランスの砲兵中尉と大尉とが居たし、又マルセイユ出身の代議士も一人居た。固より代議士などは震へて、早速兩手を擧げて降伏してしまつた。大尉も同樣に、一たまりもなく戰はずして降參した方であつた。たゞ一人、件の砲兵中尉のみは、猛然としてそのピストルを擬してゐる賊にかゝつて行つた。そして賊が一方の手に持つてゐるナイフを奪ひかけた。けれども、惜しい哉、他の手に握つたピストルに射ち殺されて、彼の青年中尉は非業の死を遂げてしまつたのである。

後に至つて彼の代議士は、中尉が起つて抵抗してゐるにも拘はらず、大尉はこれに加勢して賊に當らなかつたことを大にひやかしたが、まつたく若しあの際大尉も加勢したならば、賊の難を蒙むることもなく、中尉も亦あたら生命を賭するに及ばなかつたであらう。――此の勇敢なる中尉の後日物語として傳ふるところに據れば、彼れは、Mago の物語で有名なコルシカ島の出身である。由來コルシカ人は非常に敵愾心に富み、復讐せでは止まぬ人間であるさうなが、しかも此の青年士官はその物語の主人公Magoの孫に當つてゐるとは、洒落ではない、それだからこそじつとして降服せずして抵抗したのだと、人々の話柄に上つた次第である。斯くて三人の賊は、乘客の財物を思ふ儘に掠奪して汽車から逸走した。何しろやり方が非常に巧妙であつた爲めに、此の容易ならざる犯人も、容易に發見することが出來なかつた。

その後、數ケ月に亘つて、探偵小說以上に巧妙にして行き屆いたフランスの探偵法に依つて、何等の遺留品も證據物件もなかつたに拘はらず、遂に犯人を突きとめることが出來た。卽ち犯人等は共にパリに入つて居ることを知つたので、警察は全力を擧げてこれに當つた。その結果は又以外にも、こゝに一場の活劇を演じて、パリ繁華の中心に於いて小戰鬪を開始するに至つたのである。尤もそれに先つて、三人の中一人だけは、カルチエラタンで捕へられたが、他の二人はプラース・デュ・テルネのカフェーに居るところを襲ひ、數人の警官がこれを捕縛しようとしたが、彼等もさる者、かねて數種の武器を携へて居て直ちに抵抗したから、忽ちにしてカフェーの内外に小市街戰を演出した。が、結局、遂に二人を射殺してしまつたので、落着となつたのである。後に二人の賊の武器として五挺のピストル、その他短刀等大へんなものを發見された。また此の戰鬪の爲めに、某といふ有名な探偵部長も射ち殺されたのである。

これについて今一つあはれな挿話がある。それは最初にカルチエラタンでつかまつた賊についてゞある。彼はフランス人を父とし、ギリシヤ人を母とした、醫者生であつた。もとその父は醫師であつて相應に世に知られて居たが、彼の幼時に死んだので、母なる人は、一人息子を立派な醫師に仕立てやらうものと、フランス語を外人に教へたりなどして、苦學をせしめて居たのである。それが後に至つて何うしたのか、一向母の許へも寄りつかなくなつてしまつた。そこで母は息子の身の上を案じつゝ、年を取つて行く中に、戰爭があつたりなどして、だんだん不運を重ね、遂には往來で車を引いて野菜を賣り歩く身となつてしまつたのである。然るに最近に至つて、此の不孝の子

が殺人强盜の重大犯人であつたことを知つて、大に悔いたといふ話である。——何れにせよ、斯くして稀有の汽車犯罪は終を告げた。

序に一言するが、一體、フランスのみならず、歐米諸國では罪人などを捕へる場合に、必らず生かしてとは考へない。それよりも捕へる方の身に怪我などがあつてはつまらないと思ふから、やたらに射ち殺すやうなことをやる。これもその一例として此の間の出來事であるが、或るブールバールに、午前八時に三人組の强盜が入り込んだ。それは大きい寶石商の店であつた。賊等は悠々と構へて思ふ存分の仕事をなし、その一人は寶石の容れてあるところを開いて奪ひ取る間、他の二人は小銃を把つて巡査に抵抗して盛に射撃をして居た。折惡しく巡査等は一人もピルトルだに持たなかつたから、これを何うすることも出來ない。その中に賊等は自働車に乘つて、乘つてからもぽん〳〵撃ちながら逃走して、遂に雲を霞に消えてしまつた。誇りとするほどに巧妙なる探偵術を有してゐるフランス警察でも、この三人賊は今尙ほ發見されないのである。

物凄い犯罪談をした序に、現にパリの諸新聞が、ワシントンのコンフエレンスと同樣なる大事件として、新聞紙面の大部分を費して、市民のセンセーションを起しつゝあるランドル事件といふ近來稀有の犯罪を語らう。ランドルとは人の名で、パリに住む紳士にして相當の年輩の男で其の風采などは實に堂々たるものである。それがこれまで、新聞廣告に依つて結婚を求め、金のない求婚者は拒絕し、金のある者のみと結婚して結婚後これを燒き殺したといふ大疑獄である。事の眞相は目下審判中であつて保證の限りではないが、しかし新聞紙の傳ふるところに依れば、驚くなかれ十人の婦女を、ストーヴにて燒き殺して灰にしてしまつたといふのである。その大部分は既婚の婦人にして、中に數人の妙齡の處女も含んでゐる。最近、近所から、肉を燒く臭氣が洩れるとか言ひ出して檢擧されてゐるが、ランドルは剛愎の人間と見えて、なか〳〵言を左右に托して實を吐かないらしい。固よりこれといふ確證がある譯でもないし、また燒き殺された筈の婦人が生きてゐたりなどして、事件はます〳〵所謂迷宮に入つて、世の探偵好奇心をそゝつてゐる。兎に角新聞では每日、ポンチなどを出して大騷ぎである。原首相の死なども、そのおつき合ひ位に紙面に書かれて居る次第である。尙ほ犯罪ではないが、最近リオンに於いて支那の留學生が暴動を起した椿事もあるがこれは項をあらためて語ることゝする。

次には少々、パリに來て居る日本人に就いて一言したい、一體、目下パリには非常に澤山な日本人を見かける。パリ始まつ

て以來の多數であらう、技術に關係ある人間のみでも百人に近く、それに陸海軍の軍人、外交官、資本家の馬鹿息子などを加へると五百人位は居ることであらう。現に、近來日本人俱樂部などの出來たのも、そんな結果であると思ふ。斯う多くなつて來ると又、日本人についても以前のパリと餘程趣が違つて來る。先づ、前には日本人同士が往來などで出逢ふと、必らず言葉をかけ合つたものであるが、今では全くさうではない。「日本人に他鄕で出逢はれると、さぞ嬉しいでせうね」など丶內地の人は言ふであらうが、今ではパリの市中で日本人に出逢ふと、お互にさう思ふ。何となく氣持の惡い、見つともない、いやな者に逢つたやうな氣がして、何となく避け合ふのである。その爲めに向ふから日本人が來るのを見ると、わざ／＼遠廻りをして、道をよけるといふやうな妙な心理狀態になる。殊に、我こそはパリジヤンなりと、和製の、澁紙のやうな顏に、服裝だけはハイカラで、當世パリの色男を氣取つて居るのだが、遺憾ながら、折角の服裝も御面相と全くつり合はない。こんな日本人に出逢ふと、今度は、これまで得意げにすまして歩いて居つた私自身も變に氣恥かしくなつて來て、自分もあんなに變ちきりんで見つともないのかと、痛み入つてしまふのである。こんなことを言ふと腹を立てる人もあるか知れないが、實際だから仕方がない。

殊に日本人について思ふことは、實に日本人といふものは、堅くて冷たくて石のやうな、少しも生殖氣分のない人間だといふことである。日本人の澤山集まつたところなどへ行つても、一度位は話をしたことのある人だと思ふ人でも、遠くの方ですまして坐つて居て、お互の間に親しみなどは少しもなく、まことに殺風景なものである。人類から生殖氣分を取り除いた者の會合で、固いこと、詰らないこと夥しい。形や態度の惡いのは、これは生れつきで仕方がないとしても、せめて氣分だけなりと柔かに、溫かで居たいものだ。しかもさうした日本人先生の言ひ草が面白い。曰く、「僕達はフランスの氣分が嫌ひだ。」「ヨーロツパの女などを貰ふ氣にはならぬ」とある。實に恐れ入つた譯である。仰つしやるまでもなく、ヨーロツパの女などに、先方から細君になつてあげようなど丶いふ篤志な女があつてたまるものですか。彼等が若し日本人の女などになるとしたなら、それは彼等に取つて自棄酒を吞むのと同じ心持なのだ、自分から棄て鉢になつて、彼等は自棄酒をあふるのだ。日本人たるもの、たまに自棄酒の肴位にされてゐるに過ぎないもの、それを知らずに、お刺身かきんとんのつもりで大きい口をきくのは、をかしくてたまらぬ次第だ。わざ／＼日本人を色男に持たなくて

も、こつちに本物の色の白い男が澤山あるのだらうぞと思ふなら御自身で鏡を持つて來て御面相を拜見するがよい。これで色男たる資格が果して何處にあるだらうか。尤も、場合によると日本人にくつついて來る女もあるかも知れないが、それはヨーロッパ人に相手にされない者が、顴骨の飛び出た、でれでれ黨をなめに來るのであつて、西洋の女を貰ふの貰はないの段ではない、そんなことは言ふまでもなく先方でよく心得て居ると言ひたくなる。シカシ間違いの起らぬ様に一寸つけ加へて置くが今私の述べているのは内部の比較を云々するのではない外部に現はれたる人相風采である。先づ人を觀るには人相風采が最初の印象物である。先づ玄關口である格だ。次ぎに感ずるのは、音聲とくる。これが先づ廊下である、それから其の音聲を以て語り出すところの言語と人相との細密なる連絡運動によつて、其の内部奧座敷たる知識格を知り得ると云ふ順序である。だから一寸逢た位では驚くべき想像力と觀察力の所有者にあらざる限り、奧屋敷などは、どんな物だか中々わかりかねる。だから今こゝに引出したところのヨーロッパの色男や色女も奧座敷は、どんなものかまるでわからない。同時に、不景氣な玄關口の所有者たる日本人も、其の奧座敷となると、或は堂々として金色燦然たるものかもしれない。だからヨーロパ人は見掛け程豪そうなものではなく、日本人は見掛け程に馬鹿らしいものでもなささうであろう。

一般に日本人はフランスへ研究に來て、一體何を感じて居るだらうか。中には悠然と構へ込んで景氣のよささうな顏をして、太平樂を並べてゐる先生も見受ける。ヨーロッパはもう末期に近づいた。これからは日本のものだなどと、大きいことを傾る徒意になつて人に語つて居る。しかしさういふ御本人、聞けばヨーロッパの新聞もろくろく讀めず、滯在十五日と稱する間、何を研究して居たのか知らない、言ふところだけは兎に角大きい、我々には、ヨーロッパのことはすつかり解つた、これでは全くヨーロッパに將來學ぶところはないとの仰せである。又或る先生は、一寸來たばかりで、ルーヴルは時間さへかければ出來る。日本は日本でやるがよいといふやうなことを口にするが、成るほどそれにも一理はあるだらう。けれども、日本は日本で全く違つた方面に向ふなら別問題として、日本人が同じやうにキヤンバスに油繪具でやつて行くなら、如何に全く違つた歩き方をしたところで、同じ方角で、歩き道も同じであつたとしたなら、とても問題になつた話ではない筈である。自分が嘗て此の「中央公論」に、『特殊國及び特殊人』といふ題目で書いた時、それに對していろんな人からいろんな批評を受けた。中には自分以上

の考を以て共鳴して呉れた人も多かつたが、また中には大に曲解して甚しきは自分を賣國奴であるかの如く罵つた人も幾らかあつた。しかし自分が日本の現狀について批評を加へたからとて何も日本を頭から罵倒することを快しとするものでも何でもない。却つて自分は大に愛國者氣分を發揮して、我が日本の爲めを思つたからこそ、あんなものを書いて見る氣になつたのである。これは恰も建設のために破壊が必要な場合のあると同じで、缺點を指摘して知らしめて後それに對する改良が起るべきだと思つたから、殊更にあゝいふことを述べたのである、我々はまだ〳〵當分の中は口を酸つぱくして日本國の短所缺點について言はなくてはならぬと思つて居る。今の程度ではまだなか〳〵社會生活の程度などが低過ぎるから、大にこれを國民に訴へてその反省を促し、何とか外の國と相撲の相手位になれるやうになりたいのである。だから自分の一言一句は國を思ふの情から迸り出でゝ居るつもりである。たゞ徒らに好んで罵倒を恣にして居る如く思はれることは、自分は甚だ遺憾な次第である。そして、自分がまた、盛に西洋臭い氣分を促すのは、これが今の世界に於ける日本の狀態として最も都合のよいことで、斯くして世界的同化氣分を採用するのが、國民に取つて幸福が最も多いと信ずるから、自分は飽くまでもこれを主張するのである。

サロン・ドートンヌ

此の十月に入ると、毎年の佳例としてサロン・ドートンヌが開かれた。そして今年も、繪畫や彫刻と共に、様々なる家具（ファーニチャ）が澤山出品されて、寢臺や椅子のやうなものもあるが、中には火の出るやうな電氣仕掛の道具も出品した者がある　しかしこれは、火事になつては困るといふので出品を拒絶されたとの話である。それについて一奇談がある。御存じの人も多からう、パリには「プランタン」といふ有名な大百貨商店（マガザン）がある。それが、此の春の或る朝火を失して全燒してしまつた。「プランタン」とは蓋し和譯して「春」といふ意、そこでだ、次には「サロン・ドートンヌ。」「ドートンヌ」は言ふまでもなく「秋」である。春に「春」が燒けたから此の次の秋には「秋」だ。それだから火災の危險のあるものなどの出品はあぶないと、委員達が眞面目になつて拒絶したか何うかは知らないが、兎に角出火の虞れある爲めに出せなかつた品がある。愛嬌の多い、洒落たつぷりの滑稽交りで、眞面目な問題を解決しつゝあるところは何處までも佛蘭西式で、とても外の國では見られぬ珍現象である。又此の「サロン・ドートンヌ」へ、活動寫眞をも入れようとの話もあつたが、見せるのには場所を要するといふのでこれも立ち消え

になつたらしい。多分來年あたりは、何處かの美術展覽會に活動寫眞も出品されるかも知れない。

――尙、今年のこのサロンの出品は、非常に嚴選であつたとの話であるが、中には大へん上手なものと、下手なものとがあつて、等しく畫家と稱する中にも、こんなに優劣の差があるものかとつく〲感心させられる次第であつた。日本人の畫も澤山あつて、出品した程のものは悉く入選したかと思はれるのである。何れにせよ、日本畫家の盛んな意氣は大に賞すべきである。

支那人の暴動

最近、北京大學から佛國リオンに連れて來て佛國政府で留學させて居る支那學生間に一の暴動が突發した。元來これは、佛國政府が米國あたりの眞似をして、佛國の金で勉强をさせてやるといふので大勢連れて來たのであるが、學資の途に窮し、リオンの工場に通はせて、そこで働きながら學校に通はせて居たのである。然るに最近物價が高くなるに反比例して世の中は不景氣になり、加ふるに退役軍人などが澤山仕事を求める爲めに、職業難が佛蘭西でも近頃甚しくなつた。その影響を受けて支那の留學生達にも、仕事の賃金を減らしたり、甚しきは解傭するなどいふやうなことになつたに、最近また支那と佛國の合辦であつた中法實業銀行といふのが破産したりなどしたので、留學生達は大に憤慨し、初めの約束と違ふと言つて、學生監督と談判をしたが、遂に要領を得ないのでます〱憤慨した結果、リオン大學にある留學生部の事務所か何かを占領して、遂に留學生全部でそこへ立て籠つたのである、佛國では由々しき一大事であるとばかり、軍隊を派遣してこれを鎭壓したが爲め、留學生等も力及ばず降服してしまつた。そこで政府は、彼等を皆獄に投じて壓制を加へた。これに對して佛國の諸新聞紙は樣々の報道をした中にも、最も有名な一新聞たる「ル・マタン」の如き記事の最後に附け加へて曰く、「此の捕虜共を何う處分したらよからうか？酢漬(ヴィネガー)にでもして置いたらよからう」と書いて居つた。最も冗談半分ではあるが支那人たる者憤慨せざるを得ないのである。それでも、最近、ごた〱の後、兎に角解放されたらしく、皆支那へ送還するとかいふ噂である。暴動好きの支那人が、今では西洋へ來てやつて居るといふのは、まことに世の中の變りつゝある一話柄として面白いことだと思ふ。

女の髯

佛蘭西に來た日本人が、誰れにしてもこれを見て奇異に感ぜ

ずに居られないことが一つある。それは、佛蘭西の婦人の口邊に髯、口々と生へて居ることである。勿論一般の婦人が髯を生しているとゐふのではない稀に見るのである。その稀も中々あつて數の多い方にかなり近い稀である。これは佛蘭西婦人に限らずヨーロツパの女に共通であるらしい。日本でならば相當の資本家の髯位なものを、若い女の鼻の下に見出すことが多いのは、何と思つても奇異千萬なことである。中には妙齢の婦人にして、口上口下共に、約一寸に餘る鯨髯が口々と生へて、如何にも物凄いのがある。私はそれを、或る若い佛蘭西の婦人に談し、我々はこれをあの最もリフアインされて居る筈の佛蘭西婦人に見ることに於いて最も不思議に感じるといふと、その婦人も大に笑つて、「それはこれまでちつとも氣附かずに居たことである」と、その人も今更の如く氣附いて腹を抱へて笑つたのである。そして「何故剃らないのか？」と訊ねると、その理由は知らないが、恐らく剃つても又生えるので面倒臭くて打つちやらかして居るのだらうとのことであつたから、私はさう言つた。「生えたらば又剃ればよいではないか。黑いよりは青い方がずつとビユーテイをスポイルしない筈である。殊に然らば、ビユーテイスポツトなどゝ言つて、わざ／＼おめかしに殘して置くほくろの上に、二三本ひよろりと生やしたなどいふのが非常に多い。あの位は一寸、指先で拔けば何でもない、何を苦しんでビユーテイスポツトに非ビユーテイなる毛を生やして置くか。口邊の黑いやつは剃刀でそり、ほくろの毛は拔き去ることを私は大に佛蘭西婦人に、その美を增すためにおすゝめする。日本では到底見ることの出來ない現象である」と語ると、その婦人はます／＼吹き出して、堪へ切れぬ笑ひ轉げて居た。

日本人會

パリにも日本人會といふのが近頃出來て、貧弱ながらもそこに食堂の設備があり、日本食を食はせるをである。パリ市中には多くの日本人が居るが、數百萬の白ん坊の中に交り込んで居るので、普通の場合にはさうまで眼に立たない。それが此の日本人會の內部に入るといふと、悉く黃色坊ばかりなので、著しく日本人といふものが眼立つのみならず、日本人の特色といふやつが、よかれ惡しかれ種々の點で我々に氣附くのである。先づ例へば、日本人といふ人種は、馬鹿に食事が早い。食ふのか吞むのかわからぬほどまるで手品でも使つて居るかのやうに、瞬間にして食事を喫し終る。今テーブルに着いたかと思ふ間にもうお茶を喫んで立ち去らうとして居るので、何心なくその食膳の上を覗けば、列べる數々の食物はすつかり平げてしま

つて居る。まことに奇術師のやうな早業である。あれでは味もなにも夢中でわかるまいと思はず餘計な心配をしたくなる。これが西洋人の食事であると、まるで何をしてゐるのか解らぬやうにのらくらして、天井を眺めながら、或は外部を通る人間を見ながら、心を娛しませ、眼もよろこばせつゝ、或は語り或は笑ひながら、まるで一口づゝ味はうやうにして食事をしてゐるのである。それと反對に日本人はまるで泥棒でもして居るやうにこそこそと、詰らなさうに食つて居る。情けない話であるが、これも從來の長い習慣は止むを得ないことであらう。テーブル飾りなく、音樂なく、食事は房事と同じやうに、こつそり人にかくれて内所でやるものゝやうに考へて居たのだから仕方がないとしても、パリの日本人會に行くと、全くそれと同じ空氣の中に在るので、苦痛ばかり感じられて、食事の味も何もあつたものではない。たまにこゝへ來て傍で食事をして居る私自分まで泣き出したくなつてこそこそと食つて逃げ出す始末である。

又これは私自身の統計であるが、眼玉の大きい人間は、同じ日本人でもさうではないやうだ。にこにこと他人と對して眼をつかひながら、ゆつくり構へ込んで、樂しさうに食事をする。食ひ方もゆつたりして何處となしに藝術味がある。殊にサーヴする人も同等な行動があつて、萬事一つの空氣の中にをさまつて居るものと見ると、甚だ興味がある。反對に目の小さいのになるとたまらない、どうも人間は眼玉の小さいのより大きいはうが萬事につけて氣持ちのよい事が多いようだ。某警察官の經驗談によると刑事犯人なども眼玉の小さいのに悪いのが多いと云ふ事を聞いた事がある。しかしこんな事を述べている御本人の眼が聊か小さいはうに類するようで恐縮であるが。

元氣のいゝ女

又日本からやつて來た何れの人も、パリの女の何處かにチヤームされない人はあるまい。口でこそ言ふと言はざれ、必らず誰れしも、パリジアンヌの美しさを、心の奧底から感ぜずに居る者はない筈である。これには、パリ女そのものゝ美しさもあるだらうが、それよりも、これまで日本で、本當の女らしい女を見たことがないからである。要するに日本では、女に人間性の充滿といふものを發見することが出來ない。乾凋びたミイラのやうなものを女だと思つて見て來た日本人が、パリに來て人間性の充滿した女に接するのだから、大にチヤームされるのは無理のない話である。而してこの人間性の充滿といふことは何處から來るかといふに、それは多年の間の美的修養なども無論

あるだらうが、何よりも第一に身體の健康といふことに基くものと言はねばならぬ。實にパリの女の美くしいことの最も主要なる要素は、その身體の健全であるが爲めである。美人の第一條件は健全といふことである。それには五體が完全に發達して、各部の調和が取れ、肉つき、肉色等に申分がないといふことが必要である。ところが日本の女は、その身體がまるで駄目である。日本の女は悉く病人ばかりかと思はれるほどに弱々しくて、身體の發達が不充分不完全で、まるで成つて居ないのである。とても西洋の女と體格、健康などの點では比較にも何もなつたものではない。日本の女を見て居ると、病院で治りかけの患者が、醫師の許可を得て、僅かの散歩を取つて居るかのやうで貧弱極まつてゐる。こんな女では、とても西洋のやうに男と手を携へて濶歩するなどゝいふことは出來るものではない。從來日本では病的な女を以て美人の典型であるかの如く考へたりなどして來たが、これ等も大に間違つて居ることで、今後の美人は所謂衞生的美人であつて、そして活潑に運動をする、身體の發達の整つた女でなくては駄目である。實に美人の根本義は健康體であるといふことを忘れてはいけない。顏や姿は第二であつて、健康が第一でなくてはならぬのだ。パリに來て、ぴんぴんして居る、男も及ばさる女の多いのを見るとつくづく感心する。以前から女は、日本などの女よりも遙に力も強く活動的であつたが、戰後は殊に然りで、何をやらせても男に負けないやうなえらい女が多くなつた。從つて女だと言つても、男のやるほどなことは何でもやる。勿論煙草も喫めばお酒も飲む、ゴルフ、テニス、玉突すべて男と競爭をして、敢てひけを取らぬのである、現に今年のオリンピック大會にも、游泳に於ける如き男の選手も女の選手に及ばなかつたといふやうなレコード破りの女も澤山あるのだ。とにかく戰爭後女の運動が盛大になつた事は夥しいものである。テニス、ボートレース位は戰前から在つたものだがフツトボール、ボクシングなどの女選手などはあんまり聞かなかつた。巴里では最近英國から遠征して來た婦人運動家フツトボール選手とパリジヤンの婦人選手との大仕合があつた。勝利の榮冠は殘念ながら英國側にとられたが、仕合の猛烈なる將に龍躍て虎嘯き的の光景で、とても女の競技とは思はぬ程で、群がる男子の見物人はぼんやり呆氣にとられてそれを視ていたのである。最近の新聞紙の傳へるところに依ると、アメリカの若い夫人で、單身アフリカに飛び出し、獅子を七頭、河馬を五六頭、それに虎を二三頭も射止めて持ち歸つたといふすばらしい女もある。尤も斯ういふ人も別に珍らしいわけでなくて、西洋にはざらにあると言へばざらにあるのだ。日本では

せい〳〵德川義親侯が南洋へ虎狩りに行つたといふので新聞で盛に騒ぎ立てた位なもので、比較になつた話ではない。又フオーブス夫人といへば、アフリカを最初に横斷した女丈夫として知られるが、この人最近、或る冒險性に富んだ大佐と結婚したさうだから、これからの活躍は一層思ひ知られるものがある。その他、この次のオリンピック大會に出でゝ男子を凌がうといふイダシヤネル孃と呼ぶ體育家がある。孃はアメリカの、五十五階位な屋根の上で鯱鉾立ちの離れ業をやつて、喝采を博したことのある外、種々なる運動競技にすぐれて、賞牌など無數に得、常に男流運動家をして後へに瞠若たらしめて居る。一々こんな婦人の名を擧げたら「中央公論」の原稿が無闇に長くなり、爲めに他の諸大家の名論卓說を載せる餘地がなくて、却つて恐縮するほどに無限に豊富なのである。

遺產の話

西洋について今一つ面白いことは日本と財產の關係が餘程違つてゐるので、その爲めに素寒貧の一書生が、自分も豫期せざる間に、一夜にして大富豪となるといふやうな突飛な例が頗る多いのである。それは卽ち財產の關係である。今こゝに或る金持があつて死んだとする。その人には親も子も親類もないといふやうな場合が屢々西洋にはある。さうすると、新聞に廣告をして、この人に一番近い人は申出でろ、さうすると財產の相續に與かるであらうといふことを發表する。若しその人の緣者が何處かに居るとすると、その廣告を見てやつて來る。全く思ひがけないやうな人物が、何處からかぬつと現はれてその家へやつて來る、そして讓り受け手のなかつた巨萬の富をその人がそつくり受け取るなどいふやうな、實に喜劇的なことが少なからず行はれてゐる。自分も知らない中に大金持になるなどいふ珍現象は、日本では先づ見られない圖であらう。

先年、大戰中に英國のキツチナー元帥が死んだ當時のことである。元帥は非常な金持であつたが、御存じの通り細君はなかつた、從つて子供もなかつた。そこでその莫大の財產は副官にやると言つて居たのだが、不幸にしてその副官も共に死んだのである。そこで、元帥の死後、遺書を開いて見ると、その遺產をやる人の名が書いてあつたが、それは皆他人であつた。ところが、こゝに元帥の爲めに一人の姉さんがある。しかも元帥はその姉さんに對して一言も遺產のことを言及してない。つまり肉身の姉さんには一文も讓らないことになつてゐるのである。關係者等は不思議に考へて何故であるかと聞いた。ところが姉さんの答もまた奇拔である。曰く、「それでよいのだ。私は貰は

たいことになつて居るのだ」と。そこで更によく事情を訊すと、此の姉さんは元帥の生前、幾度となく元帥からちよい／＼補助をして貰つて居たらしい。そこでもう別に元帥から別に貰れる筈もないと、遺言狀に書いてないことを別に不思議とも何とも思つて居ないのである。キツチナー元帥も、自分の姉にはこれまで盡すべきだけ盡してあるのだから、それでよいと思つて居たのだ。これが日本なら、元帥もその儘で濟まさなかつたであらうが、第一姉さんが不服である。全く斯んなことでも、西洋の方が都合よくさつぱり出來て居るやうに思はれる。尤も遺產といふことについては非常に重大視されて居て、これは狀師の手に握られて非常な秘密が守られ、法律上の手續を經なくては何人といへども開くことが出來ないやうになつてゐる。實に人間の一生中、遺書を造るといふこと それを保護するといふことは、最も大切なるものとされてゐるのである。これ等も、日本人に取つては一つの奇異な事實であるに違ひない。

男女の交際・流行等

次に何人にも直ぐ氣の附くことは、男女間の交際の自由で、その爲めに營むつ 居る歐米人の幸福といふものも少なからさることである。西洋では男女の交際が子供の時から行はれて居る爲めに、青年男女の間に勝手に話を交はしたり、往復をしたりすることが何等の不自然でもなく、又た窮屈でもなく行はれるのである。勿論日本と同じに、或る遊冶郎などが、だらしない女や料理屋の下女のやうなあやしい女と關係を結ぶ如き例も澤山あるけれども これは日本にもあることで、例外と見なくてはならぬ。その外の、普通の中產階級以上の、教養ある人達の間は容易に自由な交際が出來るやうになつて居るのである。女も男に對しては非常に馴れてゐるから、男に會つても何等のおそれなしに、交際されるのである。だから男が女を訪問すると、大へん愛嬌たつぷりで、よく來てくれた、あなたの來るのを待つて居たといふやうなことを誰れにでも云ふ。さうすると、日本の男などは、先方の女が意外に親切で、やさしく言つてくれるものだから、つひその意味を取り違ひたりなどして思はぬ失敗をすることが多い。日本では若い女が、餘り知りもしない男に會つたとて、非常にうれしいなどゝ、むき出しに言つて、手をかたく握るといふやうな例は先づないのだから、これは少々何うかしてゐる位に、西洋の女からやさしい言葉の一つもかけられると、直ぐ勘違ひをする、それ故、一二時間一しよに散歩でもしてお茶でも喫むと、いきなり日本式の突進を試みる。すると今度はあべこべに、女の方から說教でも喰かされ

て、男子が女子に對してさういふ失禮なことをするものではないと、耶蘇坊さんのやうな口調で手ひどくやられるか、さうでなくばすつかり、暫鐵砲を喰はされて、もう二度と交際などは出來ないのである。日本人などは、この爲めに往々失敗することがあるのも、平素男女交際が不自然に出來てゐる爲めである。

日本の女もたしかに西洋風に電車とか汽車とかにも乗らず、椅子にも腰掛けないで、せい〳〵昔流に百人一首でもよんで、ほとゝぎすが何うかしたとか、琴の音を丸窓を通して響かせて居る位な時代なら、蹴出しのところからちらほらと赤い色が見える位なところで丁度よいのだが、今では一寸外へ出ても電車があり、自働車があり、又靴を穿いて飛び廻るし、昔の大工のやうな着物を着て、ローマ字を書き、ビフテキを食ふやうになつては、これでは貧弱な細根大根の如き足では、如何に赤い蹴出しを見せつけられても、通力を失ふ久米仙人がありさうに思はれない。これまでの日本の女は、それでも兎に角浮世繪に見るやうに、顏の工合などもよく調和して居たかも知れないが、今ではまつたく釣合が取れない。折角よく出來た調子やデツサンが妙なものに變化した爲めに、全體の調子が取れず、それで矢張り苦心をしてやつて居るといつた繪畫と同じである。今までの日本婦人の生殖味でも、バイブルでも持ちさうな堅いものになつては致方がない。ところが今は釣り合つて居るから、例へば椅子に腰掛けて、片方の足に他方の足を乗せる爲めにスカートなど釣つて、奥深く見えて、何とも言へぬ美くしい足の恰好になる。あの足を見てゐる氣分は到底日本では見られないものである。「足なる哉、歐羅巴人の足なる哉」とつい言ひたくなる。やゝもすると薄い靴下を透して青筋の見えるなどいふ氣持は何とも言へぬ趣がある。深遠なる藝術價に此の足にありだ。日本人は大抵皆パリの女を見ると、斯ういふ生殖氣分を感じて居るであらうが、それでなか〳〵口に出しては言はないがそのくせ顏では中々感じているらしい、しかし私はこんなことはなるべくどし〳〵言つた方がよいと思ふ。西洋の女の足の如き話をし出すと、日本では餘りよい氣持を感じないかも知れないが、それは見ない人のことで、見た人は實にたまらなくチヤームされるであらう。西洋では禮式になるほど足は長く見えるやうになつてゐるのだ。なるべく足に氣をつけさせるやうに、靴を殊更に足を見せるやうにし、又ダイヤモンドをつけたりなどして居る。萬事がこれ式である。凡そ人間に取つて、何が一番たのしみだからといつて、死からの恐怖、不安を除いた、生殖の充實から來るもの位愉快に感じるものはない筈である。そしてこの論

快な感じを滿足させるのには、なるべく×××に近いところを以てするのが一番である。故に燕尾服などいふものも、その爲めに出來てゐて、×××××の所在がわかるやうに造られてゐるのである。ナポレオンあたりの服裝、或は昔のローマの着物の如きは、皆その××××××を見せるやうに出來てゐるのである。それがこれを見てゐる女によい感を與へるのである。最近の歐洲新流行の衣服はやはりそれを目的としたもので、男も女も、×××××××を、きつかりはつきり知らせるやうに出來てゐる。現代の混亂した日本の如きは、大にこれを學ぶべきである。最近のイヴニング・ドレスは、乳の外緣から裸出してゐるし、又背中は大半をむき出しにしてゐる。

序だから流行のことに及ぼすが、右の次第であるから流行の型などは決して一二にきまつてはゐない。まことに變化が多くて、自分達の生殖氣分を何うして味はうかと考へてゐるから、それの爲めに流行が非常に變ずるのである。日本にはたとひ流行があつても、今年は袖が一尺長くなつたとか、帶が細くなつたとか、或は全くなくなつたとかいふやうな大きい變化は少しもない。それが西洋では絕えず根本的に變遷するので、實に流行のうつり變りの激しいことは驚くばかりである。衣服の色の如きでさへも、毎年變つて行つて、現に此の夏は黃色と水色と赤とが流行して、如何にも一九二一年の眞夏らしい感じのものであつたが、此の秋には少し黃味を帶びたものが流行した。そして又冬になると冬で、黑とかブリューとか、冬らしい感じの色になつて行く。實にパリの氣候と關係したやうな、まことに心持ちのよい色である。その色が根本になつて、形もまた同じやうに變つて行く。男の洋服でも同樣で、今では日本では洋服の方が和服よりも安いと一般に言はれてゐる。しかしこれは日本の洋服がまだ本物ではなくてまがひだからで、それで安價に得られもするのであるが、しかし正裝を造るとなると、雲泥の差である。外套のみでも二萬フラン、約四千圓を出さなくては人の前に着て出られるやうなものは造れないのである。實に、和服より洋服が安いといふのは、流行も何も知らない人達の言ふことである。今しかし、私が斯うして書いて居ることは、何も別に着物に依つて西洋を持ち上げ、日本をけなさうとして居るのではない。たゞ兩者の違ひだけを正直に述べて居るに過ぎぬのである。

一般の佛國人が日本國を知れる程度

私は最近某處で佛蘭西國內の中學校又は女學校及び師範學校等で用ゐられる佛國地理の教科書を見た、此の地理の教科書は

日本に於ける文部省の國定教科書の格であつた。だから全佛蘭西の青年が中等教育を受けるにあたりて世界に於ける地理上の智識を得るものと見て差支へはない。ところでこれが中々面白い。先づ委しく自國の事より始まる、それからだん／＼と隣接せるヨーロッパの諸國に及ぶ何れも日本の中學生の學ぶヨーロッパの地理よりは委しくかいてある、次ぎに南北亞米利加、加奈陀より亞弗利加等の順序となり最後に亞細亞洲にくる。亞細亞はヨーロッパに比して頗る簡單である、そこで日本の事はどんなふうにかいてあるかと思つてよく注意して見る、相應に奇拔である、曰く「日本(シャポン)と云ふ國は五つの島から成立されている、其の首府は江戸若しくは東京と呼ばれる、人口は二百萬である、其の他京都大阪名古屋等の都會は東京と共にニッポンと云ふ大きい島にある、鹿兒島は九州と云ふ島にあり函館はエゾと云ふ島にある」と書いてある。

　して見ると佛蘭西の教科書では日本(ニッポン)と云ふのは單に本洲の意味で全體をまとめてJAPONと勝手にきめこんで居るらしい、實に苦笑の至りである、「それから外國人との貿易港は横濱神戸長崎函館等が擧げられてある「絹穀物等は外國に輸出される」までは別に可笑しくないが最後に大變だ。「日本人(ジャポンネー)と云ふ國民は非常に勤勉で忍耐強い國民である、教育の方に中々力を盡している。毎年學校が一つづゝ增加する（日本國中に一つづゝ增加するのか東京のみであるかよくわからない）

　而して其の國の軍隊はとてもヨーロッパ人の想像も出來ないものである（これも想像も出來ぬ程弱いものか強いものかこちらが想像出來かねる）此の國には鐵道もあり電氣もあり電話もある」冗談じやない。

　これが日本に就ての佛蘭西中等教育に、注ぎ込むところの地理上の智識であるからたまらない。だから日本には電車があるかとか日本は年中夏の様に熱いのだろうだとか、奇怪を極めた尋問がかなりの顔付きの先生から發せられるのは別に不思議はない。

　日本では中學程度に使用する教科書でいかに遠隔な佛蘭西とは云ひながらこんな呑氣なものはなからう。小學校の生徒でも佛蘭西の地理とまでは、行かなくとも教師かなんかの話位に佛蘭西を引き出す事はあるだらうし、それに雜誌に新聞に口演にカフエーにかなりに佛蘭西を引合いに出しているから、佛蘭西かヨーロッパに在て共和國である位は百も二百も承知である。

　ところが佛人の日本を知る事前述の如しなのだからかなわない、勿論專門に東洋を研究したりしている高級教育を受けつゝある人々は論外である。なにしろ日本の事情をかいた白色人は

多く英米にあつた、だから英語國民は佛人よりも比較的多く日本を了解している、ところが日本人の方ではとにかく五大國の一つだしかなりに自惚れ氣分もあるから我れこそは當代の新進氣鋭の國民なりと佛國に乗り込むでも相手の方では支那人か安南人位に受け入れるのだから恐入る。

とにかく如何に考えても我々日本人は今少し國民の生活程度などを宣傳させる必要がある。勿論、程度以上にすることは無用だが。今のところでは實際の程度以下であるから困る。國字などの甚だしく六ケ敷いのなども外國人に國の文化程度を知らせるのに頗る不便である。

夢のはなし

はるばる歐羅巴にきている日本人が度々日本に急に歸つた夢を見るものだ、夢物語りなどは一體全體證據もなんにもなくつて、一人で勝手な出鱈目でも云ているようで實際夢を見た人は白いかも知らないが、自分になんにも關係のないそれを聞かされる者はかなりに迷惑なものだが、日本から來たあんまり多くの人々が同じ様な夢を見るからなんかそこに妙な心理狀態があるものらしく一寸此處に紹介する。我慢をして聽いてもらいたい。夢の序幕は人々によつて色々違うだろうが、とにかく突然日本に歸た事に成る。神戸か東京あたりに安着してしまう、それでまだやりかけの仕事など澤山のこして來て何にも出來につたものはないし、急に歸朝したのを大に後悔している、これは大變と許りに再び旅行券の請求をしたが、どうしても渡してくれない、或は又船賃を拂ふ金がたりない、どうしたらよかろうと大に苦境に落ちて困つている、しかしなんとか出來ぬものかなと惡戰苦闘の眞最中に眼が覺める。吃驚してあたりをきよろ々々見廻すと巴里の自分の部屋に違いない。なんだ夢かと呆氣にとられる。

先日或る場所で數人の我が同胞畫家と文藝に關係のある人が集まつた事がある。其時に夢の話が出た。その中の或一人が、「先日急に日本に歸て驚いた」夢を見たと話し出す。すると他の連中が曰く、

「あゝ日本に歸る夢かちつとも珍くはない。皆なよく見る夢だ」「うん吾輩も見たよ。此間も此の夢の話しがある處で出、不思議に皆んな見るものだね」と云て笑た。「僕などは三四回もそんな夢を見た、そうしてまたくる事が出來なくつてうなされたよ」

こんな話しが盛んに出た、無論此の夢物語りの經驗は私も持ている、とにかく日本と云ふ恐ろしく遠方の國で風俗人情習慣い絶體的に相違した處に棲息していたのだからアメリカや、ス

カンチネビヤあたりから游學しているものとは、なんと云ても心理狀態に大なる差がある。

彼等は佛蘭西語と云ても同じ横文字であるから日本人の漢字の竪文字から佛語其他の文字に入るよりはどの位氣樂に行くかしれない。ところが日本人となると、日本でかなりに勉強した位の程度でも數ケ月も過ぎた後でなければ、人間らしく話せない、だから當分の間は樂しみも悲しみも不思議なる事もなにもかも自分と他人との間に細密な連絡がたい、人間でありながら、

しかも立派な教育を受けていながら、人間界に孤立して一種の動物にでもなつたようなものである。それに毎日の食物着物萬事が月と鼈式とくる、今の世に最も巾のきく金はだん〱に少なくなる。孤燈淋しきホテルのベットに靜かに橫わつた時に今まで人間共通の喜怒愛樂を自由自在に感得して來た故國を偲ばざるを得ないわけだ。それが不幸にしてその夜佛蘭西料理でも食い過ぎて腹の皮のつぱつたまゝで寢た時には、早速目的を達せずして日本に歸た夢を見るのである。だが夢位のところならまた愛嬌があつて罪がないが、これが少し狂てくるとセーヌ川に投身したり、剃力で腹を切たりなんかする事になる例は澤山あるが、個人に對して差しさわりがあるから此處にはあげない。ところが此の夢は我々階級のあまり懐中の景氣のよくない連中に多いようだ、少なくとも、留學生程度の見る夢らしい、景氣の好い資本家階級の人にきくと、そんた夢は私はみません、と云ふ。多分蜂腰楚々たる巴里美人とでも暖術の樂みに耽ている時に遠い日本から自分の妻君が飛行機に乘て來て、鬼のような顔に角を立てながら、頭の上から爆彈でも落した夢でも見ることではあるまいか。

巴里に於ける亞米利加の勢力

佛蘭西人の話によると、巴里に入込んで永住せんとするところの外國人が、毎月增加してくる。其の爲に、アパルトマンは益々拂底してゆく、家主は巴里人　貸したがらず、爲替相場の關係で比較的高價をも意とせずに借りたがる、外國人を狙ふと云ふ始末である。料理屋に行ても、ホテルに行ても、自働車に乘ても、巾のきくのは巴里人にあらずして、外國人である。わけてその中でも、米國人が第一である。オペラでも寄席でも、上等の席は米國人のためにこしらへられた樣に見られる。巴里人はその脚下に眞黑な口髯げをなぜながら、憮然として拜見している。ループルの美術館に入ても、地下鐵道に乘ても、公園に出掛けても、何處にも此處にも鼻聲の氣持の惡い。耳鼻咽喉科の醫師でも呼びたい樣な氣がする。亞米利加英語の發音を矢鱈に耳にする。實に巴里稀有の一大事件である。クリスマスの

レーグサイ、ファンファンで、ラワイエツトの如き、大きなでカザンでは米佛同盟でも出來たかの如く、米國の國旗を無數に飾りたてゝ、亞米利加人に愛嬌をまいている、まるで亞米利加のコロニーのようである。新聞に亞米利加との親善氣分を盛んにかく。日本と亞米利加との問題などが起ると新聞は日本よりも亞米利加に親しみの多い様な文句を並べる。兎に角大變な亞米利加の景氣である。どうしても亞米利加人たるもの鼻をうごめかし肩身を廣くして、ずつとそり身にならざるを得ない。亞米利加の御陰で、戰爭に勝たのだから仕方がないじやないかと、

佛蘭西人に云ふと、いやそうではない、丁度勝ちそうな時、獨逸のへこたれた時分に、亞米利加が入つてきたのだから、そう云はれても致方がないが、我々たしかに亞米利加の力をかりずしても獨逸を敗かす事は出來たのであると言ふ。

亞米利加人に云はせると、丈夫きの如くであるが、否、そんな事はない亞米利加が金と力を借さなかつたら佛國は今は存在していないだろうと云ふ、とにかく亞米利加の大軍が背後より遠く海を越へて、雲霞の如くにをしよせてくると云ふ事が、どの位戰場にある佛蘭西兵をして強からしめた事は、何人も否定する事が出來ぬであらうと云ふ。兎に自分の他より受けたものは割引して考へ自分の他に與へたものは割增して考へているのだから面白い、しかし今私は此の爭いを何れが公平なる議論であるかを、斷定すべく興味は持たない、たゞ巴里の中產階級以下が外國人の横暴に憤慨して、甚だしく彼等の生活に一種の僻見を持ている事を、氣の毒に思ふのである、そうして彼等巴里人は如何なる狀態の生活を送くりつゝあるかは他日委しく改めて筆をとる事にする。(完)千九百二十一年　十二月廿日

如菩薩調伏

井上啞々

往時靈山は女人禁制たり、その不淨を忌むに出る。今や高野山頂絃歌湧き、芙蓉峰上私語喃々たり。女に七日の障あるを以

て、相場師は緣喜を擔いで近けず、畫師は彩色の汚染を恐れて斥く。今や堂々として神宮に衣し、淨境を踏みて憚らず、神威傾きたる乎、佛力衰へたる乎、否な女權の神佛を凌駕する故也。

女神と雖も猶火を防ぐの魔力あり、高師直顔世御前の行水姿に戀慕を生じ、粂仙人洗濯女の白脛を見て通力を失ふも宜なる哉。××××の秘術を盡すと雖も、皮羽織は自若として×××××を數へ、女と漬物は腐らざるを樞として、梅干婆は茶飲友達たるを辭せず。

亭主を尻に敷き、宿六を頤に使ひ、大盡を掌に弄び、關取を肱に突き、坊主を目に殺し、大屋を鼻に扱ひ、觀音を爪に潰す。行くとして可ならざる無し。若し夫れ女將の機嫌を損はゞ、惚れた藝者も出た許りの挨拶を受け、お鍋の憤怒屢々小僧を空腹に泣かしむ。世話は干渉に失し、親切は深情となり、背中を叩くは祝儀の多寡に依り、腕を抓つて紫痕を留むるは散財の如何に據る。貧富に待遇を變ふるは掌を翻す如く、箒を逆に立て、下駄に灸を据ゑ、鹽花を撒く。箸あるも匙なく、鹽あるも醋なく、主婦慳し、客羞慚を懷くは貧客の至る也。吐哺握髮、屐を倒にして迎ふるは富者の來る也。かの老翁を夫として厭はざるは貪婪なるが故にして、愛人を得るに及んで十年同棲の夫を捨つること弊履の如くなる、亦以てその輕薄なるを察す可し。

先づ見合の厚化粧に半面の黑痣を隱すあり、或は白粉剝落するに及んで黝黑にして雀斑ありと雖も、男子の寬大なる、他の長所を認めて之を許す。近時女子に斷髮の風ありと。結髮錢を省き、勞と時とを節し、利便多し。かの唐蜀黍の如き毛の所有者に至つては、寧ろ之を剃つてくり〳〵坊主たるを得策とす。兒童衞生展覽會に於て、無智階級の女を表せる人形の髮は日本髷なるに徵し、文部當局の理想は洋風摸倣に在るを知る。全國の女子協心一致して自ら髮を束ねて他を煩はさゞるに至らば、かの家庭紊亂の頭目女髮結の廢業となり、自ら結ふに便々として半日を費さゞるに至つて、家務の進捗見るべきものあり。婚禮に高島田を結ふが如きも亦當然廢す可き風習たらずんばあらず。斯くして日本の女子は大に向上發展して、參政權の獲得に努力すべく、始めて新しき女の尊稱を甘受す可し。同時に家庭は花も實もなく、味も香もなく、愛嬌も色氣もなく、恰も不毛の地に住むの感慨ある可き乎。美貌郡を抜くと雖も、その聲の鼻に抜けるに於て東北の女はお座が醒め、訛音蠻聲殆ど禽獸と語ると異るなきを慮り、庄司氏は夙に廓言葉を工夫せるに非ずや。

古來農夫が野天に於て密會し、甘き歡樂の夢を逐ふたるは事實也。かの農村の盆踊の如き、これ公然男女が密會せんが爲めに行はれしものにして、帝國ホテルの舞踏會とは稍其趣旨を異

にす、而も其結果に至つては甚だ異ならず。露地に於けるは女中に多く、ベンチに於けるは女學生に多く、便所と墓地と、戸棚と土藏とは、境遇に從つて撰擇を異にす。御會式に托し、御籠に乘じ、屢其事あるは、祖師門跡を侮辱するものにして、教會堂に於けるは基督を輕蔑せるもの也。衆人稠座には面を伏せて低聲に語り、人の間に對して忽ち耳朶を染め、頓に答ふる能はさるの羞耻を裝ひ、女同士の座に於ける大膽不敵の大口と、夜陰に乘じて活躍する露骨の行動とは、之を聽く者、之を見る者、忽ち眼を掩ひ、耳を蓋にせずんばあらず。白晝に卑怯にして、暗夜に勇猛なる、恰も梟の族に似たり。これその夜の職業に適應せる所以也。蠻人の風習に賓客の枕席に妻を侍せしめ、邦俗に本願寺樣のお胤を得べく娘をお伽に出すあり。落胤と私生兒多き我國は世界に冠たり。眞に我子の我子たるを知るは、父に非ずして母なり、既に秦始皇は呂不韋が邯鄲の美姫に生ませたる子なり、秀頼を三成の兒と爲す者あり。淸盛は忠盛の子なるや否やを知らず。胎兒の父を物色して、砂糖の利きたる男に强いて押附ける藝妓あり。旦那の子は權助の子なるやも知れず。お腹樣の勢力廣大なるも、老女の之に對抗して下らさるは、その秘密の鍵を握るが故也。榮御前の政岡の冷靜なるを見て、鶴千代と千松とを掏り換へたりと做すは、偶々女性の瞞着に長ずるを自ら語るものに非ずや。道に姦せられて口を噤むの女、据膳をして口を拭くの女、天邇淑女貞婦を裝ふて罪を蔽はさるは尠し。陰陽は天地の根にして、夫婦は人倫の本なり。或は鶺鴒に範を取り、或は禁園の果を盜み、只管伉儷の儀を行はんとす。破鍋に閉蓋を想ふ、亦宜なる哉。由來夫婦の道は子孫繁榮を基とするが故に、三年にして子無きを去るは當然也。而も種の惡しきか、畑の荒れたるかを知らず。二世の契と言ふも、旬日にして破鏡の嘆なきにしも非ず、相性の宜しからさるか、××の適せさる乎。子有るも去るは鼻に附きて、疊の新しきを好む心と等しきか。子無きも去らざるは鼻の下を延ばして他愛なきに由るか。合せ物は離れ物の見地より論ぜば、子の有無は問ふ所に非ず。子は鎹と云ふも、七人の子は爲すとも心を許す可からざるは女也。凡そ女にして男の誘惑に應ぜさるは殆んど稀なり。小兒の聞かんと欲するお伽噺に依つて、その性情を判ず可く、甲は鳩の話を好み、乙は鬼の談を望む。女は萬口一齊穴隙を鑽り、踰を踰ゆるの話材を主張す。蓋し欲せさる者は、欲するの切なるを蔽ふて、自ら然らさるを他に向つて僞るなり。抑も姦通とは何ぞや、我夫ならぬ男に肌を許すこと也。定まる夫を袖にして、仇し男に心を寄する也。心を寄せさる女ありや、唯矩を踰ゆると、踰えざるの差あるのみ。

七去の教の中に嫉妬は去るとあり。これに從はゞ天下の女は擧げて去らざる可からず。子長じて妻を娶る、母は乃ち姑たり。姑にして嫁を悪まざる者ありや、假令大に悪まずとも、缺點を剔抉して自ら快とす、その有力なる味方に小姑あり、鬼千疋の名ある所以也。出戻り娘に至つてはその辛辣なる戰慄す可し。燒餅は狐色を貴ぶ、眞黒焦なるはどら燒と雖も食へず。袖口に紅涙を拭ひ欷歔して郎君の無情を訴ふ、郎君たる者焉んぞ得意滿面たらざるを得んや、恰も按摩の凝肩を和げ、纎手の癢痒を搔く快感に等し。浮氣を恨んで二の腕ゝ抓るは猶可なり、猿の如く引掻き、猫の如く喰付くは暴も亦極まる。況んや狂亂逆上して武者振り付き、叫喚怒號するに至つては、千軍萬馬を往來せる古強者と雖も三舍を避けん也。この狂態を演ずるは下流に多く、上流は情を矯むるの極ヒステリーに惱まさる。夫の外出に際し其褌を縫ふの妻あり、或は××に印して後の證を留め、消えて跡なきを責むるあり。或は雪隱佛に祈り、戰場に臨んで空しく小田原の汚名を蒙らしむるあり。女は×××して敵の乘ずるに便なるを以て、西土に×××を施すものあり、之を貞操帶と名く、主人外に出づるに當り之に鎖す、侍者××を作り之を×××××、主人之を覺らず、女の大膽なる以て知る可し。支那の宮中に宦官あり、皆宮刑を施せるもののみ、而も醜聲の洩るゝを防ぎ難し。

かの縁切榎に願を懸けて相思を割かんとするは女なり、丑の刻詣に至つては悽愴身の毛もよだつ許り也。深更神社の老杉に藁人形を當て、五寸釘を打つは、己れならぬ女を呪咀する也。頂に鐵輪を冠り、口に炬火を含み白衣にして胸に明鏡を懸くとかや。深夜之に逢着せば堂々たる男子も悶絶す可し。妻と權妻と同居す、表は相親しみ而も兩者の髮は蛇となつて相嚙む。此に於てか舜の娥黄女英を操縱せる手腕に敬服せずんばあらず。

古來悪妻に惱まされざる者やある。劉孝標に悍室あり、王敬通に忌妻あり、或は臙脂虎として恐怖し、或は獅子吼として辟易す。五代の王鍔、賊黄巢來襲すと聞き、右左に問ふて曰く、黄巢南より來らんとし、夫人北より來らんとす、之を如何。右左答へて曰く黄巢に降るを可とすと、妬婦の獰猛なるを知る。臨濟に妬婦津あり、牛込に燒餅坂あり。ソクラテスの妻は悍馬の如く、リツプバンウインクルは遁れて山に入る。呂后に頭の上らぬは漢の高祖にして、漢は呂氏に依つて衰へ、政子の尻に敷かれたるは源頼朝にして、源氏は政子の爲めに正統絶ゆ。

女子相迎送して仇敵を見るが如し。甲婦に向つて乙女の非を問へば、非を擧げて長を說かず。女教師美貌の持主を忌んで、教育に公平なる能はず、老女の心理も軌を一にす、青春の情を

葬送して一生異性を知らざるの結果は性情偏屈に傾きて他人に接する能はず、常に他の親睦を悩んで之を妨げんとす。昔某家に老女あり、その性驕慢岩藤の評名あり、主君の寵妾に嫉して之を監視し　夫人孕むに及んで岩田帯を締さしめず、遂に難産にて死去するに至る、惨酷も此に至つて極まると雖も、斯る類は大名の家に珍らしからず。妻の世を悲観して死を決するや、その頑是なき幼児を誘ひ、死出の道伴れと爲す者多きは、己の死後、夫の再び娶るを知り、且その必ず後妻の不仁にして吾兒の虐遇せらるゝを豫覺すれば也。されば繼母繼子の相善からざるは、生母の死後の子に遇ぎたると、後妻の先妻を嫉むの念厚きと、兩々相待つて然る也。稲氏曰く後妻必ず前妻の子を惡むと。某士亡妻を追憶して曰く、存生中は性の鈍、容の陋を忌みて輕んず、死別して遺兒を見るに及び、始めて亡妻の貴ぶ可きを覺り、美婦を見ては其眼の險なるを怖れ、賢婦に逢ふては其性の剛なるを畏れて止まずと、予十一歳にして慈母に死別し、八萬地獄に陷り、苦楚辛酸共に嘗む。

男女共に辨財天に參する時は別離の嘆ありと、以てその妬神なるを知る可し。鬼子母神好んで人の子を捕へて喰ふ、佛之を戒めんとして千人の子の一人を隱す、鬼子母神狂氣の如く、顔容忽ち鬼相と變ず、佛乃ち其子を還し與へて嚴訓す、鬼子母神愕然として其非を悟り、長く幼兒の守護神たるを誓ふと。鬼子母神の修行ありて、その性情なき者に貰子殺しあり、養育料を騙取せんが爲めに、私生兒を貰ひ受け、或は餓殺し、或は餓死せしむ。姙婦の腹を割く鬼婆あり、墮胎を業とする惡婆あり、男にはとても出來ぬ殘忍なり。

家庭の不和を攪亂する者は、頻繁に家庭に出入する者也、その最たるを女髪結と爲す。西家に來りて曰く東家の主婦俳優買を好むと、更に東家に至りて曰く西家の娘私生兒を生むと、共に虛説なるを覺らず、隣家の弊を聞き窃に平生反目の溜飲を下ぐ　後に牡丹餅稲荷鮨の贈答に依つて確執融くるに及び、結髪奴の讒誣を怒るも既に遲し　東西家を異にするは猶可なり、甚しきは主婦に耳語して曰く乞ふ戒めよ、妾過日日比谷公園に遊び、主公の少婢と袂を連ねて歩むを目撃せり云々、或は曰く南軒の若旦那美貌橘屋に酷似す、貴婦に意あること久し、何ぞ之を憐まざる云々、主婦の心緒亂れて糸の如し。美貌の下女主人の寵を迎へて小間使に進み、更に外妾に出世し、機あつて正妻となるものあり。内縁の妻と雖も長く側近奉仕すれば令夫人の尊稱を受くること難からず、看護婦の患者と通じて病を増惡せしめ、モデルの畫伯に狎れ、女給の重役と戯る、男の甘言に欺かれたるか、始より淫を以て金に代へんとせるか、未だ遽に之を斷ずへからず。

閨秀にして年少の男子を愛する者多きは、これ擒縱自在なるに依るか、活氣横溢せるに據るか。かの喜樂のおきんの伊井を愛し、猿冢の女將の又五郎を愛し、則天武后年六十七にして張兄弟を愛し、淀君の修理を愛し、王侯と庶人を問はず、老女の少年を愛するの例屈指に遑あらず。抑も女子の下賤弱少を愛する、古に在りては八重垣姫の花作蓑作に惚れ、皆鶴姫の奴虎藏に惚れ、おその大工六三に惚れ、お染の小僧久松に惚れ、今に在つては夫人の書生と奔り、令嬢の運轉手と逃げるの類、これシッペンハウエルの女子を論じて人間と獸類の中間に位する動物と說き、性情小兒に近しと述べし所以にして、女子の低能を立證して餘りあり。執念幽靈となるに反して二を命ずれば一を忘れ、粉屋の手間取の如く濃粧を好んで、耳に垢溜り、爪延びて熊鷹の如し。猫を重んじて、人を輕んじ、雷を恐れ、地震を恐れて、白晝帝都に蔥引を行ひ、鬪湯を濫費すること瀧の如くして、カステラは黴の生えるまで食せず、××××られて悔ゐず、××を賣つて恥ぢず。古今東西幾千萬億の人類あり、節婦、才媛、烈女、賢母良妻なきに非ずと雖も、其數に於て晨星の寥々たるに等しく、之を要するに心操男子に近く、一言之を蔽さば所謂變生女子也。

鄉に歸つて村芝居を見る

田中貢太郎

——貝殼蝸殼青海苔の附東風の吹く——

芝居小屋の中からは人寄せの太皷が、ドン、ドン、ドドン、ドン、と云ふやうにゆつくりした調子で鳴つてゐた。眼をあげると小屋の周圍には、五月幟のやうな幟が彼方此方に立つてゐる。それは芝居をやつてゐる者がこしらへた自分の名を染め拔いたもので、皆風何某と必らず風の姓を入れてあつた。それには赤の眼立つのや、淺黃の眼立つのや、紅からの眼立つのや、思ひ思ひに染めた幟が潮氣を含んだ冷たい風にひらひらと飜つてゐた。その幟の竿には、御符細やネルのやうな物を包んだ紙包を澤山縛りつけてあつた。小屋の背景には赤茶けた丘陵があ

つて、太鼓の音が板に突き當るやうな反響をかへしてゐた。空には鼠色の魚の鱗のやうな雲が流れて、西に廻つた陽がその際間から滲んだやうに薄紅い光を落してゐた。

それは陰暦の正月二日であつた。まだに陰暦で本當の正月をやつてゐるこの村では、その三ケ日の休み日を當て込んで、長い間かかつて稽古してゐた芝居を實演しかけてゐるところであつた。其所は村を東から西に貫いた郡道に沿うた所で、表通には古い雨戸や古板を立て並べて假塀をこしらへてあつた。それはその向ひにある飲食店の故の屋敷跡で、入口となつた所には、左側に高い臺を設けてそれに幕を張り、三四人の顏を見せてゐた。その顏の一つで横に平べつたい赤い頬の張り切つて、何時も笑つてゐるやうに上齒か下齒を見せてゐるのは、幼な友達の貞吉であつた。貞吉は水兵に行つてゐて日露の戰後に金鵄勲章を貰つた男で、地曳網を曳き、畑へ行く暇には、百舌を飼ひ、眼白を飼ひ、小魚を釣つて、何の不平もなしに天年を終らうとしてゐる樂天家である。

『おい、木戸錢が入るかのう。』

私はにつと笑つてその顏を見あげた。

『おう、もどつたか、木戸錢は二十錢ぢや、うんと出してくれ。』

『狂言の木戸錢は、五錢と定まつてをるぢやないか、高うなつたのう。』

私は冗談を云ひ云ひ五十錢札を出すと、貞吉は釣錢と木戸札をくれながら、

『米が五十錢になつちよる、高いとも高いとも。』

木戸の見附には雨戸を一枚立てて、それで中が見えないやうに目隱しをして、其所に一人の男が腰をかけてゐた。それも知合の菊さんと云ふ、もう四十七八の眼の周圍に柔かみのある男であつた。菊さんは曾て蕎麥屋をやつて、大正屋と云ふ屋號をつけてゐたことがあるので、村の人は菊さんに大正屋と云ふ渾名をつけてゐた。その菊さんも昔芝居をやつて、それが女形になつたことが私の記憶にあつた。私は木戸札を出して、

『ヤア、今度はやりませんか。』

と云ふと、

『これは、お歸りなさいませ、何時お歸りなさいました。』

菊さんは一方の手で木戸札を取り、一方の手を襟に捲いてゐた黒い毛糸の襟卷の端にやつた。菊さんは何時か私の友達の楠衞と一緒に東京へ來て、茗荷谷の私の家で二三日逗留したことがある。

『今朝歸りました、狂言があると云ふきに、見にやいかんと思ふて……、始まりましたか。』

『さうでございます、もう一幕濟みました、皆ようやりますきにのうし、見さやつて遣はされ、』

老婆と小女とが木戸札を持つて來たので、邪魔をしてはならないと思つて、そのまま中へと這入つた。其所は通路から一段低まつた沙地で、女や子供の多い看客は、その上に藁莚を敷いて坐つてゐた。それは附近の家家から借り集めたもので、その莚は農作物を乾し、魚を乾すこの村の生活に缺くべからざる道具である。

正面の舞臺には日の出に鶴を畫いた古い木綿の幕を引いてあつたが、その日の出に用ゐた赤い繪具の色が褪めて黄ろくなつてゐた。屋根には藁を葺いてあつた。丸太や古板や雨戸を借りてこしらへた舞臺の、向つて左側の花道となつた所には、その後の板壁に大きな文字を黑黑と書いた紙をごたごたと貼つてあつた。それは贔負贔負から贈つた纏頭で、一金幾圓嵐何某丈へと書いたものである。

客は起つて遠くの方の人と話をしたり、人と人との間を行つたり來たりする者もあつて雜踏してゐた。その雜踏の中で重詰の辨當を喫つたり、酒を飲んでゐる者も見えた。子供は菓子を喫ひ、甘藷を喫ひ、若い男達は椎の實を喫つてゐた。甘藷と椎の實は、この地方の遊樂日に無くてはならぬ物であつた。狹の蒸のやうな甘藷の皮を口で剝ぎながら、ちやうど牛が草を嚙むやうに、それを嚙み嚙み甘い砂糖汁を吸ふてゐる子供を見ると、私は三十年前の自分の姿を其所に見だしたやうで懷かしかつた。椎の實は煎つて皮のすこしはじけたのを齒でぱちりと割つて、その二つに割れた中から白い中實を舌の先で旨く取つて、殼を捨てて喫ふと共に、すぐ後の實を齒に持つて行つて嚙んだ。それは支那料理で西瓜の種を嚙むと同じやうな趣味のあるものであつた。その甘藷も椎の實も、菓子と一緒に木戸の後から假屋に作を向けて並んだ店に賣つてゐた、それは葭簀の日覆をしたもので、椎の實はその店先の涼爐に小鍋をかけて煎つてゐた。火に溫まつた椎の實はポンポンと云つて彈けて飛ばうとするのを、小盃で押へ押へしながら焦げないやうに掻きまぜるのであつた。

『大椎の安賣、ぬくぬくの大椎』

私が少年の時には、鎭守の秋祭や相模などでは、こんな賣聲をして賣つてゐたものだ。

私はふと場内の右左に眼をやつた。假屋の屋際には彼の幟が飛び飛び立つてゐるだけで、四邊がぱあとして押しづまりのないやうな感じがした。右側の小屋の方に寄つた假屋の外に、彭金色の大きな蜜柑の實がぽつぽつ喰付いた木が見えた。それは橙の木であつた。その橙に並んで小さな赤味の强い蜜柑の見え

る木もあつた。空には依然として鰯雲が流れてゐたが、それが幾等か薄くなつてゐた。私はなんだか物足りないと思つた。そして、それは自分が少年の時に見た村芝居は、囲ひに添うて棧敷を架け並べてあつたからだと思ひだした。四本の柱に桁を入れて、その上六七尺の所に十人ぐらゐ坐れるやうな床をこしらへたもので、それは皆芝居をやつてゐる家に架けて、親類や知人を招いて芝居を見せながら御馳走するためのものであつた。私も芝居の度に彼方此方の棧敷に招かれて、割子の辨當の御馳走を喫ひながら芝居を見たものであつたが、この芝居は明治三十四年頃、地主や有志のかうした娯樂の必要のない人人のこしらへた、風俗改良會と云ふやうな會から干渉したために、昨年までやることが出來なかつたが、昨年から又やりだしたとその日私に話した者があつた。時代意識はかうした半農半漁の海岸村にまで及んでゐた。

右の後の方に坐つてゐた看客の一團から笑ひ囃す聲が起つた。それは皆二十歳前後の若衆の一團であつた。と、其所から茶の鳥打帽が飛んで、すぐ前に落ちた。落ちたかと思ふと又飛びあがつて、そして再び近くへ落ちた。笑ひ囃す聲は盛に起つた。その鳥打帽は鳥のやうに又其所から飛んだが、今度は遠く左の方へと行つた。すると胴の屈んだやうな若い男が笑ひ笑ひ起つて、その帽子の落ちた方を見て何か云つて指をさした。と、學校帽を着た男の子が起つて、若い男の方を見ながら、手にしてゐた帽子を投げ返した。若い男はそれを旨く宙に受けた。笑ひ囃す聲がまた一頻り起つた。

私は椎の實のことを思ひだして、一軒の店先へと行つた。小さな顔をした店の亭主は、見覺のある顔であつたが思ひだせなかつた。私は木戸錢の釣の中から十錢札をだして一合の椎を買つた。それは鍋から傍の小桶の中に移したばかりの温いものであつた。私は急いでそれを齒に持つて行つてばちりとやつてみた。皮が二つに割れて昔ながらの中實が舌の先に乘つた。

私は後の方の莚のない所を彼方此方と歩いた。見覺のある顔が、彼方にも此方にも見えてゐたが、挨拶が面倒であるからなるたけそれを見ないやうにして、椎を喫つたり煙草を飲んだりした。その日は村の信用組合の三周年の紀念の祝宴があるとか云つて、友達なども大半それに行つてゐるので、私は靜な自分一人の氣持に浸つてゐることが出來た。

太皷が何時の間にか止んで、場内がひつそりとしてゐたが、間もなく拍子木がチョンチョンと鳴りだして、一人の男が出て幕を開けて行つた。私は足を止めた。××市の芝居小屋から衣裳と一緒に借りて來た道具ですつかり背景をこしらへた舞臺に

は、春のすんなりした若い女房が座つてゐた。向つて右になつたところには、上下に座が出來て、下には黒い筒袖を着た男が二人ばかり舞臺の方を見て坐り、上には小紋のある白い肩衣を着けた男の半身が見えて、其所から淨瑠璃が聞えて來た。赤黒い肥つたその片手に撥があつて、それが急がしく動いた。

『……堀江、堀江と國國へ、鳴響きたる猪名川が、角力の内は夫婦連れ、女に堀江の假住居　店は初日の飾物　半紙、毛氈、莨盆、羽織、脇差、取廻はし、酒は杉ばへ米俵……』

門口となつた所には、赤い酒樽をはじめいろいろの物を置いてあるので、關取千兩幟だなと思ひながら、猪名川の女房に扮した男は何人だらうと、その顔を見詰めたが、判らなかつた。その内に花道から尻はしをりで股引を穿いた町人風の男がやつて來た、それも私には判らない顔であつた。

『さて積んだの、見事、何んぢや、羽織、脇差、米もある、えらひ張込みぢやの、いや又二三年以來の角力に、滅多に負けたことのない猪名川、したが今度角力には、千田川が病氣故、はづむまいと思ふたが、思ひの外強いはづみ、そりや此皆……』

と、島の内の七兵衛は輕い調子で獨白をやりだした。私はそんな科白よりも猪名川の女房に扮した男と、七兵衛に扮した男とを知りたいと思つて、その顔を見てゐたが判らないので、その顔の型が何人かに似てゐはしないかと、その二人の顔容に似てゐる知合の人を記憶の中から物色してみた。そして七兵衛の方には幾等か似たやうな顔の人があつたと思つたが、それも何人であつたと云ふことは思ひ出せなかつた。

『……町内の贔負に肩も猪名川が、鐵ケ嶽陀右衛門と……』

の淨瑠璃で、白い顔と赤い隈取りをした顔とが花道からやつて來た。私は又その顔を見たが、その二人も判らなかつた。自分の故郷の村には、自分の知つてゐる人ばかりが昔のままに生活してゐると云ふ感じを持つてゐた私は、すがつてゐる物を取つて突き放されたやうな驚きと淋しさを感じた。私は僅に十五六年の時間がこんなにまで烈しい推移を見せるものかと思つた。そして私は故郷の繼子になつてゐるやうな氣がした。

『猪名川アー、ええエーぞウー、』

『女房はアないイかアー、好房にイ見せたいイねやアー』

それは彼の若衆の群の中からであつた。それは皆傍に來てゐる女達に聞かすためであつた。看客席から舞臺へ向けて、紙に包んだ物を投げあげる者があつた。それは御召綿やネルの包みであつた、包みは二つとなり四つとなつて役者の傍に轉がつた。親類や知合から投げたもので、それは舞臺の世話人がて、隅の方の邪魔にならない所へ持つて行つて積み重ねた。

『これや女房ども、留守の内へ、今日の角力割は持つて來なんだか。』

猪名川は受け唇になつた長い顏で一生懸命に科白を云つてゐた。若衆の中からは笑ひ聲がしてゐた。

『鐵ケ嶽の好きやんも、見に來ちよるウぞウー。』

彼方此方の者が、舞臺へ向けてゐた顏をちよと若衆の方へ向けて笑顏をするのが見えた。私はすぐ輕い氣持になつた。私の眼の前には少年の時の場面が浮んで來た。木の臼を臺に置いて座をこしらへた舞臺の前には、松脂を焚き、上には心の片燃がして火屋の片側がくすぼつた五分心の釣洋燈を點け、他にも針金で釣したカンテラの火も一つぐらゐ置いて、其所で平生著を著た男が拔書の紙を見い見い稽古をしてゐた。其所には芝居の仲間で雇ふて來てゐる振付がゐた。振付の多くは老人であつた。その老人は部厚な根本を片手に持つてゐた。

(ツン、ツン、チツ、テン、ツン、シヤン、)

振付はかう云ふやうに調子を取りながら、それそれ所作をさしたり、自分でもまたそれをやつて見せた。それでも出ない者があると、傍へ行つて手を取つて人形を踊らすやうにして教へた。

舞臺の前の暗い所には、夕飯の後でその稽古を見に來た村の人が立つてゐた。舞臺の周圍は皆畑であつた。その見物の中には人の女房も女も交つてゐた。若い男は稽古よりもその女に眼を注けてゐた。

(もつと、松を焚け、)

女房の脊には嬰兒もゐた。

(子供を泣かすな、)

(乳を喫はせ、)

(間違へて子供をひねるな、)……

私の耳にはその騷ぐ聲と女の笑ひ聲が聞えるやうであつた。その芝居の稽古は二ケ月も三ケ月もかかつてやつたものだ。今日の人達もさうした努力を拂つたものだらうと思つた。私は又舞臺の方を見た。

『むう、そんなら何か、踏まれても、打たれても、云ひ分はないと云ふのか。』

鐵ケ嶽が反身になつてゐた。私は芝居には興味はなかつた。私は彼方此方と歩いて、後の方に立つてゐる人人の横顏を覗いてゐた。

『……さんぢやありませんか。』

私の名を呼ぶ者があるので、ふと見ると、左の犬齒が紫がかかつた唇から露はれてゐる高麗犬のやうな顏をした老人が立つてゐた。それは長い間阪神航路の汽船に乘つてゐた山本と云ふ

人で、私の家とは懇意にしてゐた。
『やあ、山本の翁さんですか、暫くでした。』
『あんまりかはつちよるきに、違やせんかと思ふたが、やつぱりおまさんぢや、あしもこんな老人になつたが、おまさんも年が寄つたよ。』
山本老人は幾等か酒を飲んでゐやうな口振で、眼に子供子供した光を湛へて私の頭髮の薄くなつた額から、白毛の交つた顋髯のあたりを見た。
『他の者にはなれえでも、老人にはなれますのうし、』
私が笑ふと、山本老人は大聲を出して笑つた。
『さうよ、老人になるには、苦勞はいらんのうし、』
『やつぱり船にをりますか、』
『もう、から、老人になつちや、何も出來んきに、とうから船をおりて、同姓の造船場で世話になりよる、』
その造船所の主人は私と學校友達であつたから、すぐ思ひだした。私はその老人とまだ暫く話してゐた。そして人が動きだして、私の體も山本老人の體もその人と人との間に挾まれるやうになつたので、氣を注けてみると、芝居は終つて幕を引いてあつた。
彼の若衆の群のあたりには、椎の殼が雨のやうに降り、甘藷の殼が雪のやうに飛んで大騒ぎをしてゐた。
次の幕は俊寛島物語であつた。私は木戸から左寄になつた後の進に坐つてゐた。私は更紗の蒲團の上に胡座を掻いてゐた。その蒲團は私の右隣に坐つてゐる勝喜が貸してくれたものであつた。勝喜は私の家の前隣の青年であつた。昔の芝居の稽古は多くその勝喜の家の物置の中ではじめた。その時には勝喜の祖父が淨瑠璃をやつた。無論勝喜の父親はその役者の一人であつた。
『おまん、蒲團に坐りつけちよるらう、』
から云つて自分に敷くために持つて來てゐた物を貸してくれた、その勝喜も、紙に包んだ色元結をかけて熨斗を添へた御召縮を三束ばかり持つてゐた。
芝居は來現の手下の盜人達が、掠奪して來たお安と小搦を長櫃の中から引きだしたところであつた。私は一眼見てお安に扮してゐる男が、自分の友達の鐵太郎であると云ふことを知つた。
『おう、鐵ちやんぢやのう、』
私は勝喜の顏を見た。勝喜の姉が鐵　郎の細君となつてゐた。私は鐵太郎が昔その芝居でやはりお安になつたことを思ひだした。その鐵太郎の家は、私の家から西へ二軒目の雜貨店で、其所には麹屋と云ふ屋號があつた。

「芝居アー、えェぞォー、」

　御召縮が舞臺に投げられだした。遠くの方から投げた縮は、舞臺まで屆かずに中途で落ちて帽子を冠た頭に當り、結び立ての髷に當つた。髷に當てられた女は、小さな驚きの叫びを立ててから、周章して頭に手をやり、それから縮を拾つて忌忌しさうに投げた。それでもまだ舞臺に屆かないと、そゝが落ちた所の人が又それを投げてやつた。中には蜜柑を投げる者もあつた。盗人の手下に扮してゐる滑稽な身振の上手な間額の小男は、それを拾つて剝きだした。

「……口でまだまだ巾さんより……、」

　千日堂の來現に扮した男は、幕の開いた時に、勝喜から松本と云ふ私の學校の友達の息子であると敎へられてゐた。その顏の格好は父親そつくりであつた。その來現がその時上手の障子を開けると、花のやうな上臈が脇息に凭れて座つてゐた。

「槌イ、たまるかアー、」

「めつぴんぢやアねやー、」

　それは彼の若衆の群からであつた。私はそれを聞いて私の家の後隣の槌喜であると云ふことを知つた。その槌喜の生れた時、物堅いその父親は、

「つちのへに生れたきに、つちきと付けたいが、槌と云ふ字は、どう書きや、」

　と云つて聞くので、私はその槌と云ふ字を書いて見せた。その槌喜が三つ四つの時には、よく私の家の裏口からよちよちやつて來た。そして何時か葡萄棚の下に据えてあつた手洗鉢を突き落して碎いたことがあつたが、すこしの間にもう芝居をするやうな青年になつてゐたのであつた。私はつくづくとその顏を見た。その顏は槌喜のすぐ上の兄と何所か似てゐる所があつた。

「……とにもかくにもその女子を……」

　槌喜の上臈がさう云ふかと思ふと障子が締まつた。鐵太郎の所作は一度やつてゐるだけあつて何所か落付があつた。それに痩せてひよろ長いその體は女房姿にはふさはしかつた。とにかく、お安にしろ來現にしろ、上臈にしろ盗人にしろ、又はじめの幕の猪名川にしろ、猪名川の女房にしろ、鐵ケ嶽にしろ、素人は無論素人であるが、體のこなしや手足の所作が昔から見ると非常に小折れがしてゐて、私が見慣れてゐたかうした芝居とは雲泥の差があつた。それに顏や手先の色も昔とは違つてゐた。私は太閤記の初菊の節くれ立つた指に皸が切れてゐたりするやうなことはもうないだらうと思つた。

「皸へ振袖がひつかかるやうなことは、もうないらうのう、」

　私は勝喜の顏を見て笑つた。その私の心の奥から一層烈しい

笑ひが湧きあがつた。私は貝殼の喰付いた船板を敲いたやうな舞臺に、刀を差した女とその子供のやうな女との立つてゐるのを見た。

(……谷の戸明けて鶯の、梅見付たるほほ笑顏、まぶかに著たる帽子の内……』

それは忠臣藏の山科の段であつた。淨瑠璃に連れて小浪が、母のとなせの顏を見てちよとしなを作つて、

(あの力彌樣のお屋敷は、まふ爰かへ……)

と云ひかけて拔衣紋になりかけると、長い間の勞働で焦げた脂ぎつて眞黒い肩のあたりが露はれたが、それに續いて拐で詰めた拐蛸がにゆうと見えた。と、同時に小浪に扮した男は、

(わしや恥かしい、)

と衣紋を直したので　拐蛸がすつぽりと隱れてしまつた。…

私は込みあげて來る笑を耐へてゐた。舞臺では盜人達が雷跡を持ちだしたり、紐で何か切つたりして大騷ぎをしてゐた。

『あのチヤンの一號はどうしよるぞ、』

私は思ひだして勝喜の方を見た。

『紺屋の手間かよ、あれや、浦戸で竹輪をしなしよる、今はええ幕らしをしよるぜよ、』

『さうか、』

チヤンの一號とは紺屋をしてゐる私の友達の家へ染め男に來てゐた者のことである。人が好くて茫漠とした所があつたから、皆が馬鹿にして付けた渾名であつた。それを一號と云ふのは、その紺屋に古くから番頭格の染め男がゐたが、その男に東の自分の村へ置いてあつた生意氣盛りの若衆があつて、その時分父親の所へ來て一緒にゐるやうになつたので、村の者は何時の間にかそれを二號と云ふことにして、彼を一號にしてしまつた。そのチヤンの一號は、額の大きな平べつたい男で、それがやはり芝居の仲間になつて大閤記の光秀をやつたが、例の竹槍の所作のところになると、稽古用に構へてある小さな柝を取つて刀で切る眞似をし、それからそれをしごゐたが、一度しごくと左の掌を開けて、それにぱつと唾を吐く眞似をした。それを仲間の一人が、見てゐて、

(何故あんなことをするぜよ、)

と聞くと、

(竹槍ぢやから、棘があるらう、それであやつてみたが、えええぢやらうがよ、)

と、さも一新機軸を出したのを誇るやうに云つた。その晩ちやうど其所へ遊びに行つてゐて、舞臺の上にあがつてゐた私は、今にそれを忘れずに覺えてゐる。

『二號の方はどうしたらう、』

『船へ乘つてをつて、米國で逃げたと云ふことぢやが、判らんきにのうし、』

勝喜は芝居の方を見ながら云つた。舞臺では來現の使賞が、德壽の小辨を膝に抱きあげてゐた。

『……これが我子の德壽が、どりや顔みせい、ほほ、おお、幼顔覺あり、うう、そして母は何としたやい、ささ、これ、泣かずに、ちやつとちやつと云ふて聞かせ……』

私はその芝居の後に出て來る有王と龜王とのことを思ひだした。

『有王と龜王とは、何人ぞ、』

『――と、――とぢや、』

勝喜は二人の名を云つたが、皆私の知らない者であつた。

『せんには、楠衛と銀とがやつたのう、』

花道から切り結んで來た二人が、舞臺の中へ來ると引拔きをやつて、繪のやうな色彩を見せたことが思ひだされたが、すぐその楠衛と銀とには、すこししたなら逢へると思つた。私は坐つてゐるのが苦しくなつたので、下駄を履いて脊後へ行つて立つた。

其所には明るい陽があつて、物のむれるやうな匂がした。なんの匂であらうと思つてゐると、脊の方で變な物音がした。驚いて振返ると、其所は牛小屋になつてゐて櫟の木の横緯を入れた小屋の中には、黄ろな牛が立つてゐて、それが長い舌をだして緯を嘗めてゐた。私は牛の邪魔をしてゐるやうな氣がしたので、左脇へ寄つて向ふを見た。舞臺にはもう有王と龜王とが出てゐたが、有王になつた方の顔はしやくんだ顔で、龜王になつた方の顔は小さくふくれた顔であつた。私は裏切られたやうな氣がした。

芝居小屋の外の通路の上は、寄合に出て來た人で一ぱいになつてゐた。その中を醉つぱらつた男が大聲に話しながら、仲間と手を引き合つたり肩に手をかけあつたりして歩いてゐた。それは皆信用組合の宴會から歸つて來た者で、その前の飲食店の土間の中にも、その人人が立て込んで騷いでゐた。これもその一行であらう、通路に向いた其所の二階にも數人の醉つぱらひの聲がしてゐた。すぐ近くの麥畑の縁にある便所へ行つて來た私は、煙草を吹かしながらその人群の中を歩いてゐた。と、後から私の左の肩先に手をかけた者がある

『おい、――、』

その聲で隣村から私の隣へ養子に來てゐる勝と云ふ友達であ

ることが判つた。私は振返つた。勝は地藏眉の平生のにこにこした顔をしてゐた。

『楠衛と銀とがお前をとめまはりよる、行かう、』

『行　ても好い、』

『來た、楠衛と銀を呼ぶ、』

『ビールを飲みよるか、』

私は笑ひながら勝の顔を見た。

『飲みよるとも、今日は飲むぜよ、』

勝は大きな口をして笑つた。それには意味があつた。勝が何時、初めて東京へ來たことがあるが、その際のこと、汽車の中でこれも初めてビールを買つてみた。ところで、それを飲む器がないので、夏蜜柑を買つて中實を拔いて器をこしらへ、それに注いでみると泡が出た。泡を吐くからには腐つてゐるに違ひないが、味をみずに捨てるのも殘念だと思つて、傍の人へ見えないやうにとそつと泡を吹き除けて、飲んでみると苦味がある。そこで勝は、これは蜜柑の皮だから苦いだらうが、どだいが腐つてゐるから仕方がないと諦めて、とうとう捨ててしまつたと云ふ逸話を持つてゐるので、何かと云ふと皆がそのことを云つて勝を冷かした。……

『おう、――か、』

小柄な眼の黒い楠衛の顔が横合から出て來た。

『おお、楠衛か、今朝もどつて來た、』

『會で何人かに聞いた、ようもどつた、銀もおぬしをとめよる、行かう、』

楠衛は近年この地方に盛になつた胡瓜の栽培を手廣くやると共に、又その胡瓜を買ひ魚を買つて、京阪地方へ輸出もする働手であつた　私は楠衛の後から行かうとして見ると、勝は傍にゐる者の首に手を捲きつけて大聲に何か云つてゐた。

脊の高い茶の立縞の羽織を著た男が、人中を押し分けて木戸の方へ行かうとしてゐるのが見えた。それは銀十郎であつた。

『おい、山西、山西、何所へ行きや、』

楠衛が呼ぶと銀は此方を振返つたが、すぐ私を見付けた。

『おお、これは、』

『ああ、今日もどつた、』

『さうぢやとのう、ようもどつた、お前を探しよつた、』

『山西、何をうろうろしよれや、早う行かんか、』

山西とは銀の家の商標であつた。それは山形の畫の下に西と云ふ文字を入れたものであつた。

銀と楠衛とは先に立つて、飲食店の内へ這入つて行つたが、人が一ぱいでとても酒などすぐに出來さうにもなかつた。

『いかん、いかん、寅吉さんくへ行かう、彼方へビールでも持つて行かう。』
『よかろか。』
『何がかまや。』
『そんなら行かうか。』
楠衞と銀とが相談をはじめた。其所へまた一人の知合の顏が見えた。それは山根と云ふ商店の主人であつた。
『おお、これは、ようお歸りになりました。』
楠衞が數本のビールを持ち、銀が罐詰や蜜柑を持つて、山根さんも一緒になり、飲食店を出て、木戸から西へ一軒置いた次の小さな家の雨戸を開けて貰つて這入つた。
『酒を飲む所がないきに、借して貰らはにやアいかん。』
楠衞は雨戸を開けてくれた土間に立つてゐる女に云つた。それは私も知合の女で、勝喜の父親の後妻であつた。
『あていは、これから出て行くきに、人を這入らさんやうにしておほせよ。』
其所は楽屋への入口になつてゐた。
『さうか、それや悪るかつたよ。』
物堅い銀が恐縮して云つた。
『山西が又心配しだした、かまんよ、此家で飲みながら番をしよれや、何人が這入つてくれや。』
楠衞はもう狹い室へあがつてゐた。
『さうもいかん、此所が楽屋の口になつちよるきに。』
『またなんでもないことをむつかしう云ひだした、楽屋の口になつてをつても、木戸の口になつてをつても、かまんぢやないか、なんでもない、そんなことを云はんと、早うあがらんか……、――、さあ、あがれ。』
楠衞は笑ひながら私の顏を見た。
『あがらうか。』
私があがると山根さんも續いてあがつた。その時女は戸外へ出て戸外から雨戸をぴつしやり締めた。
『武市あがらんけよ。』
山根さんが銀の方を見て云つた。武市は銀の姓であつた。
『勝はどうしたらう。』
銀はやつとあがりながら云つた。
『あれや、醉うちよるきに、何所かへ行たらう、來る、來る。』
楠衞は飲食店からビールと一緒に持つて來たコップを配りかけたが、三つしかないので、ふと考へたやうに、傍の壁によせかけて据えた小さな戸棚の上に眼をやつた。其所にはかぶせ蓋の膳箱があつた。楠衞は體をねぢ向けて、その膳箱の蓋を開

け、中から一つの茶碗を取りだした。
『此所にええもんがあるて。』
杯が揃ふと楠衛はビールの口を取つて、私のコップから先に注ぎはじめた。その傍で山根さんが密柑を剥いてゐた。
『鐵の狂言を見たが、お前らアは、やらんか。』
私は銀の私を見て云つた。楠衛は鑵切を使うて鑵を切つてゐた。
『おお。』
銀はもうそんな馬鹿馬鹿しいことは、思ふてみたこともないと云ふやうな顔をして頷付いた。
『明日あたり、何人かに、役を貰ふてやつてみたいと思ふちよる、山西やらうか。』
楠衛が威勢の好い聲で云つた。
『む、う、やれ、お前や、やれ。』
『あれぢや、女房が恐いぢやらう。』
楠衛は切つた鑵を眞中に出してから、茶碗のビールを飲みだした。
『楠衛と銀とが、有王鬼王になつたことを覺えちよるが、あの時分にや、若かつたのう。』
私はさつき芝居を見ながら思ひだしたことを又思ひだしてゐた。
『あの時分にや若かつたが、もう、いかん、のうし山根さん。』
銀はおづおづした口振で云つて、山根さんの顔を見た。
『今から老人になつてどっすれやア、おぬしがやれア、そつくりやるぞ、やるか、どうなら、女房が恐いぢやらう。』
楠衛はかう云ひ云ひ私にビールを勸めた。
『やれ、おらうア、さつき飲うちよるきに、うんとやれ。』
私はそれから一頻りビールを勸められた。私は楠衛が芝居をしてゐた頃、ある年上の女に關係して、問題を惹起したことを思ひだした。その時若衆仲間は楠衛の家へ集つて、善後策を考へてゐた。
（おい、楠衛はをるか、云ひぶんがあるが。』
女の亭主の兄になる人が這入つて來るなり、手にてしゐた刀をいきなり疊に突き立てた。私達は顫ひあがつて奥の室へ逃げ込んだ。私はそれを思ひだした。
『今でも刀を持つてやつて來る人があるか。』
『刀か、あれや恐かつたねや、皆顫ひよつたきに。』
楠衛は他のことのやうに面白さうに云つて笑つた。
『あの時分には、お前らア面白かつたらう、銀もやりよつたきに。』

私は銀のちよとした臆氣な情事を思ひだした。

『なんちアちやないことを……』

銀は苦笑してそれを打ち消すやうにした。

『近頃はおとなしいか。』

『もう、お前や……』

銀の氣持はよく判つた。銀には女に養子が出來てもう孫があつた。私はこんな眞面目な男をからかふのは悪いと思つた。

『さうかのう、お互に年がいたきに、それでも楠衛は、まだなかなかえらからう、夜遊びに行くか。』

私は話を楠衛に移した。

『楠衛はなかなか、まだ……』

銀の言葉は何時も短かつた。

『いくとも、いかいで寢れるか。』

さう云つて楠衛は又銀をからかつた。

『砂地で喧嘩したきにのう。』

私は思ひだしたことがあつたので、楠衛の方を見た。それはやはり楠衛達が芝居をしてゐる頃のことであつた。ある夜、ぶらりと知合の女のところへ遊びに行つてみると、その女は隣の子供を一人連れて、隣部落へ芝居の稽古を見に行くと云つてゐるので、私も行く氣になつて一緒に出かけて行つた。

場所は住吉池と云ふ大きな池に臨んだ松林の中で、その林の中にある住吉神社の拜殿がその舞臺になつてゐた。芝居の盛んなその土地では、社を建立する時からそれに使へるやうに意を用ゐてあつた。木連格子を除つて左右の蔀を外すと、拜殿は舞臺になり、そして右側の繪馬堂はその樂屋となると云ふ用意であつた。

その夜は宵闇であつた。舞臺の左右には篝火を焼いて、薄暗い光の中で二人の若衆が稽古をしてゐた。芝居は摩耶ヶ嶽で、顔の巾の狹い男が菊姫になつてゐた。短い袷の袖では振袖の稽古が出來ないので、兩方の端へ手拭を繋いでであつた。枠の大きな眼鏡をかけた振付が根本を覗きながら、

（初めておちやつたその時から、いとしらしうて屹として、明け暮れ心眞澄鏡……）

と浄瑠璃をやりながら、

（それや肩へかける、それや口へ啣へる。）

と云つて、その振方を教へてゐた。菊姫の傍には、色の眞黑い仁三郎が胴鞄の煙管を抜いて、篝の火でこつこつと煙草を喫んでゐた。

見物人は舞臺の前へ藁を敷いて坐つてゐた。そして土地の女と若衆は、芝居はそつち除けにして後の暗い所で巫山戯てゐた。

私達三人は、繪馬堂に寄つた方の莚に坐つてゐた。そこへ私の町内の若衆の一人がひよつこり來て私を呼んだ。私はその若衆と一緒に繪馬堂の後の暗い所へと行つた。楠衛はじめ五六人の年上の若衆が來てゐた。

(一緒に遊びに行きよつて、一人抜けて女を連れて來るは、不都合ぢやないか、今度から一緒でないと、何處へも連れて行かんやうにするぞ、ええか。)

楠衛が云つた。私は馬鹿馬鹿しかつたが年上の若衆の云ふことであるから、詮方なしに承知したものの、考へてみると如何にも殘念で堪らないから、翌晩になると、又女の所へ行つて、隣の子供も連れ、三人で又砂地へと行つた。そして密に心配してゐると、果して楠衛達が七八人でやつて來た。私はまた繪馬堂の傍へ呼びだされて散散に叱られた。

その後で皆が一緒になつて芝居を見てゐる内に、芝居に天狗の楠衛達二三人がそれを冷かした。それに他の町内からも若衆が來てゐて、砂地の女にからかつたので、双方とも土地の若衆の怒を買つた。それと云ふ間もなく、舞臺にゐた者も見物してゐた者も總立になつて向つて來た。私も傍杖を喰つて二つ三つ撲られたので、いきなり相手に武者振付いた。その相手は丁字髷に結ふた大きな親爺であつた。

そして、別れ別れになつて歸つて寢てゐると、若衆が來て門の外から呼んだ。仕方なしに起きて出てみると、楠衛をはじめ宵に喧嘩を賣られた若衆が十二三人、月の射した道路の上に蹲んで、砂地へ復讐すると云つてゐた。それは砂地の本芝居の日に、村の若衆が隊を組んで住吉神社に參詣に行くか、それともその日に××市から役者を雇つて來て芝居をするかと云ふのであつたが、結局後者にして村中の若衆へ檄を飛ばし、砂地の本芝居の日を聞くと、三日の後であると云ふので、大急ぎで準備をして役者を雇ふて來た。芝居の前夜などは蕭蕭と降る雨に濡れて、徹夜して假舞臺へ莚を釣るしたりした。……

『おぬしが、教師の試驗が三日か四日目にあると云ふて、困つちよつたのう。』

生意氣に漢詩を作り、酒を飲み、劍を舞はして得意がつてゐた貧弱な自分の姿がちらちらするやうであつた。

『おい、其所から這入つちやいかんがのうし。』

銀はその時雨戸を開けて這入つて來た老婆に云つた。

『あしは、用事があつて、行きよる、行きよる。』

老婆は土間を抜けて裏口の方へ行つた。と、それと行き違ひに、裏口から女が出て來て、雨戸を開けて出て行かうとした。

『後を締めちよいとうせ。』

銀は座一つでも間違ひがあつては相濟まないとでも思つてゐるやうに、人の出入に注意した。芝居の方からは鐘や太鼓の音がしてゐた。

『山西を番人にしちよけや、心配はない。』

楠衛が笑つたところで、又裏口から一人のそりとやつて來た。

『おお、此所を借つて飲みよるぜよ。』

銀が云つた。それは鐵心と云ふ其所の女の父親であつた。もうすつかり老人になつて頭も眞白になつてゐた。

『やあ。』

私が俯向くと、

『これは、――さんでございますか、ようお歸りなさいました』

云ひ云ひ鐵心君は上へあがつて、

『私が年が行くはずぢやアよ、おまさんでさいそれぢやア。』

へうきんな芝居好きの親爺で、何時も芝居の眞似ばかりして女達を笑はしてゐた記憶がある。

『今度はやりませんか、皆やりよるらしいが。』

楠衛がそれに口を入れた。

『やる、やる、もうやるちやらう、寺小屋に出るきに。』

『私も今度がやりじまいぢや、これが冥途への土産ぢやア。』

鐵心君は胡座を掻いて足を出し、手にしてゐた白足袋の新しいのを履きだした。芝居をする用意であらう。

『まだ、まだ、そんなことはありませんよ。』

私はかう云つて、その足袋に履く赤い皺のある顫へるやうな指先を見てゐた。

舞臺には電燈が點いてゐた。借り集めた釣洋燈を點け、またその上に百目蠟燭を板の先に點けて、役者の顔のある所だけ明るくしてゐた昔の脉を引いた芝居とは思はれなかつた。私は楠衛達と並んでそれを見てゐた。

芝居は寺小屋であつた。源藏の女房は私の知らない人であつた。

（……男の肩に堺重、文庫机を擔はせて、利發らしき女房の、七つばかりな子を連れて……）

松王の女房が子太郎の手を引き、下男を連れて花道からやつて來た。私はその女房が見たやうな顔だと思つて考へた。

『大正屋アー。』

『えエぞウー。』

私はなるほど菊さんであると思つて見てゐた。楠衛は自分のことのやうに一人で藝の評をして傍の者に聞かせてゐた。

（……機嫌紛らす折からに、立歸る主の源藏、常にかはりて色青ざめ……。）

源藏は普松と云ふやはり私の傍の桶屋の亭主であつた。

『たるやアー、やれよウー。』

（……かかる所へ春藤玄蕃、首見る役は松王丸、病苦を助くる駕乘物……。）

駕から出た松王丸は、鐵心君であつた。

『鐵心やれエよウー。』

『おトウやアー。』

『女房悦べ、悴はお役に立つたぞ。』

松王丸が二度目に出て來たところで、私達は其所を出て、暗い中を西の方にある牛肉屋へと歩いた。

生溫い風がすこし出て、波の音がざあざあと聞えてゐた。

『この日和なら、何かをるかも判らんぞ。』

『さうぢや、明日は一網引いてみてもええのう。』

向ふから來た二人連が私達と擦れ違つて行つた。

蝸牛角上語

村松梢風

列車内の事件

是れは、東海道線上り列車の二等室で、私が目撃した事件である。

沼津で、子供を伴れてはいつて來た男がある。縞の着物に縞の羽織、絞りの兵兒帶、茶色の鳥打帽子を冠つた、年頃卅五六の、ちよいと苦み走つた、まあ相場師とでもいつた容子の男だ。はいつて來て車内を見廻したところが、何處にも空席がない、處が、たつた一人、新聞紙を顏の上に載つけて、座席の上で長々と足を伸ばして寢てゐる男があつた。そこで彼の男は、寢てゐる男の側へ行つて、輕く腰のあたりへ手を掛けながら、

「もしもし、憚りですが少々。子供を伴れてますから、子供だけ

掛けさせて下さいませんか」と云つた。

すると寝てゐる男は、新聞の下からジロッと相手の顔を見上げて

「餘所の人を起したらいいだらう」無愛相に答へた。

彼の男は、ぐッと癪に障つた様子だ。それは無理もない。寝てゐるのは其所ばかりだから。――併し、どうするかと思ふと、これはまた手厳しかつた。

「勝手にしろい。頼まねえや」

恁う云ふが早いか、彼の男は、羽織をくるッとまくつて、寝てゐる男の顔の上へ、どつしりと腰を掛けた。寝てゐる男は驚いた。そして、しやもが首を締められたやうにジタバタやり、やうやうのことで起き上つたが、其の顏は眞赤になつてゐた。見れば相當の商人らしい風體である。

「何をするッ!」と呶鳴つた。

「何?文句があるなら外へ出ろ。喧嘩なら、幾らでも相手になつてやらあ」

と彼の男は、世話口調で、啖呵を切つた。寝てゐた男は、何處迄も引け目だつた。理窟が通らぬ上に、腕力でも、敵ひさうもない。で、仕方がないから、目をもがもがやりながら黙り込んだ。さうかうするうち、汽車は動き出す。偶然の仇敵同志は、無言の儘並んで腰を掛けてゐる。車中の視線は悉く二人に向つて注がれた。それでも一人は平然としてゐるが、片方はさうはいかなかつた。見る眼も氣の毒なくらゐだつた。到頭其處に居溜まれなくなつたと見えて、棚から旅行鞄を卸し、隣室の方へ乗り替へてしまつた。

事件は是れだけで、前後を通じて物の五分間と經たぬ間の出來事である。併し、其の間に、此の二人の男に對する傍觀者たる私の氣持は數回變化した。一番最初には、無論寝てゐる男の暴慢な態度を憎んだ。そして、彼の相場師體の男の疾風迅雷的な行動に胸をハッとさせ乍らも、非常な痛快さを感じた。相手の面上へどつしりと尻を卸した瞬間から、ならず者口調で啖呵を切る迄の、寸分隙きのないドラマチックな緊張が、悪代官を斬り殺した國定忠次に對する同情と讃美――さういつた氣持を、私は彼の男に對して感じた。が是れは、兇暴な者を憎む人間が、より以上の兇暴を彼に加へて、快哉を叫ぶものだ。感情の矛盾と、人間の慘忍性の發露である。併し、其の次ぎの瞬間に、私の心持は轉換した。私の同情は、現在の弱者に轉じた。男の面上に尻を据えられる程の凌辱に對して、文句も云へず手出しも出來ずにゐる商人體の男の、無念といふより以上の、己れ自らの人格を認めることが不可能に陥つた場合の其の苦痛を

想ひ遣つた。彼の落ち度が、恁んな殘酷な酬ゐを覿面に持つて來ようとは、彼自身に想像しなかつたことだ。彼にも、彼だけの生活がある。他人の侵入を許さない自己がある。――さう思ふと、私は憤怒と羞恥とでわなゝいてゐる其の男が哀れになつた。さうして、是れ程酷たらしく他人の魂を蹂躪して平然としてゐる男が憎くなつた。彼の行爲は、獨り彼の商人體の男に對する凌辱ばかりでなく、人間其のものに對する凌辱である。私が彼を憎み彼を呪つたのは當然である。處が、最後にもう一度私の考へは變つた。片方が隣室へ乘り替へてしまつた後に、平然として煙草をふかしてゐる相場師體の男を見ながら、「彼は果して衷心から平然としてゐるのだらうか？」といふ疑問が私の心に起きて來た。「否々彼は平氣でゐるのではない。平氣らしく裝はふとして苦心してゐるのに相違ない」と私は考へた。彼の顏には、心もち蒼ざめた緊張が漂つてゐるのが見られた。彼はまさに煩悶してゐるのだ。自己の行爲を顧みて良心の呵責を受けてゐるのだ。他人の人格を蹂躪した後で、最後迄快くてゐられる道理はない。彼は必ず後悔してゐる。縱しんば彼が意識的に後悔してゐなかつたとしても、或は勝利者としての誇りをさへ感じてゐたとしても、其の心の隅の何處かに、自ら勇氣付けなければ滿し切れないやうな寂寞があるに違ひない。其の寂寞こそ軈て彼自身の心を憂鬱に導くところの、一かたまりの雲である。是してゐる彼の魂を針の尖きでチクリと刺すやうな疼みが、最後には其の魂を大きな腫物のやうにはれ上らせる疼みとなるのだ。侮辱を加へられた方の男は、自己の落ち度を十分に悟ると同時に憤りを忘れることが出來るけれど、人を虐げ侮辱を加へたところの彼は、反省すればする程悔恨の念に責められなければならないのだ。彼は、いつになつたら、此の事件を思ひ出しても疚ましく感じない時が來るだらう？氣の毒な人間は、隣室へ逃げて行つた男ではなく、私の前で平然として煙草をふかしてゐる男である――。

私は、大體是れだけの心理の變化を經驗した。たつた五分間の事件に對してでも、人間の心もちは恁んなに變化するものだ。だから、もつと大きな、そして現れ／＼が碌に知りもしない事柄に就いて、輕々と是非の批判を下したり、好惡の感を表明したりすることは、甚だ危險に陷り易いと思ふのである。

鳥の辨

畏友田中貢太郎君がいつぞや本誌へ寄せた隨筆に食味の事が云つてあつた。それは、或る友達に引つ張られて田中君が仲見世の金田へ鳥を食ひに行つた。其の前に友達が頻りに吹聽する

ところでは、金田の鳥は日本一うまい、といふのだ。處が、行つて食つて見ると大いに失望した。つゆに、非常な苦心がしてあるといふがそれ程に思へない。第一肉がこわい、非常な老鷄だ。鳥は若鷄に限る。一體食味などいふものは、各人の口に合はなければ駄目だ。それを、田舍で芋ばかり食つてた奴が東京へ飛び出して來て二三年も經つと一廉の食通顏をして、看板だけに惚れ込んでヤレ何處の何がうまいなどと云つてるのは滑稽千萬だ。――と大體恁ういつた議論だつたと思ふ。

田中君の云はれたことはまことに尤もだから、別に異議を唱へるわけではないが、何を隱さう其の時同君を金田へ引つ張つて行つた友達といふのが私なのだ。私自身は正直金田の鳥を鳥では日本一と信じてゐるのだが、それが偶々先輩田中君の推奬を博することが出來なかつたことを、其の日も甚だ遺憾に感じた次第だ。恁ういふわけのところへ、私自身が芋黨の一人なものだから、後段の半可通に對する頂門の一針が、まさしく私自身の腦髓へ美事に打ち込まれたのだつた。處で、一本お面を取られた後で、負け惜みの減らず口をたゝいて見ると、田中君が老鷄だと云つてけなした金田の鳥は、同じ家で經營してゐる養鷄場で一定の期間だけ飼養した鷄を順々につぶしてゐる鳥である。孵化してからどれだけの時日を經過した時が一番肉の味がよくなると多年の經驗に依つて信じてゐる處に從つて、年中同じ鳥を客に提供してゐるのである。一體鳥は餘り若鷄よりも中齡の鷄の方が肉は稍こわくなるが味はひに於て遙かに勝つて來るといふのが、普通に知られてゐることだ。併し、田中君は若鷄に限ると云はれゝばそれまでだ。其處で同君の、食味といふものは各人の口にあふ處を以て最上とするといふ議論であるが、是れも確かに眞理である。けれども、爰に一つの問題が生じる。さうなると、料理といふ專門の技術に對する批評の標準を何處へ置いたら宜ろしいかといふことである。

「翁草」といふ隨筆に恁んな話が書いてある。三好長慶に仕へた庖丁人坪内某といふ者が信長の手に生捕られて年月を經た後、賄頭市原五右衛門から、出頭人菅谷九右衛門を以て伺ふことには、囚人坪内ことは流石三好家の料理人、鶴鯉の庖丁はもとより、七五三饗の膳何んでも法式を心得てゐる。何卒囚人を御免遊され、御料理人に召加へて載き度いと願ひ出た。信長、さらば試みに今宵の料理を申し付けて見よとの御意だつたので、其の晩の御料理は坪内自ら調味して御膳を差し上げた。處が、信長が其の料理を食つて見ると一向うまくない。短氣な信長だから以ての外の腹立ちだ。すると坪内が其の事を聞いて恐れ入つて云ふことには、何卒今一度仰せ付け下さるべく、其の

上御意に叶はぬことがあらば、いか樣の御成敗を受くるも苦しからずと願つた。此の由を言上すると、其の通り仰せ付けられた。其處で坪内が又謹んで調味して奉つた處、其の鹽梅魚鳥の取り合せ悉く御意に叶ひ、信長の機嫌が大いに直つて、「實に天晴の料理である」と口を極めて褒稱して、直ぐ樣召出して祿を賜つた。然るに、後に坪内が密かに云つたことは、初めの料理は三好家の鹽梅で、後に御意に入つたのは、第三番通りの鹽梅に仕立てた、といふのだつた。三好家は代々足利家の風儀に習つて、萬事に向上な家風で、料理なども風流の事ばかりだつた。三番通りの料理といふのは、遙かに下等な田舍仕立ての庖丁鹽梅を云ふのだつた。

信長に云はせれば、後の料理の方がうまかつたことは事實である。けれども、此の場合我れ〱は、料理の事では、織田信長よりも、坪内某に多くの信用を傾けなければならない。尾州清洲の田舍侍の家風よりも、執權三好家の家風を以て一段向上したものと認めるよりほかはない。だから我れ〱が分相應の食味を云々する場合でも、自分自身の危なつかしい味覺を頼る前に　古來の多くの都會人の洗練された趣味と感覺とが一致した處に向つて、敬意を拂つて掛る方が、先づ無難だらうと私は思ふ。

主觀ほど尊いものはないが、又主觀ほど危險なものもない。其の尊く危ない主觀に安全を持たせるのが經驗だ。經驗が乏しい者が主觀的に物を觀ると、其の標準は多く個人にだけしか通用しないものになる。文藝の作品に對する批評が矢張りさうである。新聞に載る創作の月評を讀むと、甲が傑作だと云つて推奬してゐる作品を、乙は取るに足りない駄作のやうに云つてくさしてゐる。丙が面白がつてゐる點について、丁は全然興味を有つてゐない。いつたいどつちの云ふことが本統だらう？と迷ふのは私一人ではあるまいと思ふ。十人十色とはよく云つたものだ。併しそれでは困るではないか。萬人に共通する眞理を土臺にして、作品の價値を正當に理解し批評して呉れる批評家といふものは有り得ないものか。無論そんなことはない。其處で誰れしも考へる。現在の多くの批評家が、批評をするだけの力量を具へてゐないのではないかと。此の疑問は不幸にも往々にして的中する。全體批評程六ケ敷い事はない。多くの作家と同じ程度に物を考へ、理解し、而して大局に亘つた批評を下すといふことは、學問及び人生に對して豐富な蘊蓄がなくては出來ない仕事だ。經驗の漉し網を潜つてゐない主觀でばかり物を云ふのは、批評ではなくて單なる評判記である。髮結さんの家で役者の品評をするきいちやんみいちやんの饒舌と同列である。新

進有能の士は、學問なり創作なりに沒頭することにして、批評は老巧圓熟の人に譲るべきである。槍を振るつて拔け驅けの功名に敵の兜首の一つも取り、あはよくば大手の登龍門を乘り越さうといふやうな野心滿々では他人の働きの批評は出來ない。失禮だが中村星湖氏あたりの大家が折り折り批評されてるのを見ると、批評の當否は別問題として、將官級の軍監が小高い丘の上から小手を翳して、敵味方の働きを眺めてゐるやうで、我れ〳〵局外中立の者でも何んとなく心強く思はれる。

神か・人間か

或る人が、本居宣長に就いて、恁んな話をして私に聞かせた。

或る日宣長の家で、二三の門弟達が寄つて師の噂を始めた。そして、先生の學問と人格とに話題が移ると、彼等はすつかり昂奮してしまつた。世間の、否、古來のどんな偉い人物を持つて來て見ても、うちの先生に勝る人間は無いのだつた。それは全く、何等の個々的感情を交へない正直な評價である。彼等は、それ程の偉人に日常咫尺し、親しく薫育を受けてゐる自身の光榮を考へただけでも、感激しずには居られなかつた。

「先生は人間ではない。神だ」と一人が叫んだ。

「さうだ、君の云ふ通りだ。先生はまさしく神だ」と一人が言下に應じた。

師に對して「神」の稱號を奉ることは、事實彼等の氣持から云つて不自然でもなければ、誇大でもなかつた。寧ろ當然であつた。玆に人間以上の人間が存在してゐる場合に、それを神と呼ぶことに何んの不思議があらう？彼等は頻りに「先生は神だ〳〵」と云つて話してゐた。

其の隣りの部屋では、ひとりの年の若い下婢が夜なべの糸つなぎをしてゐた。彼女は此の松阪在の出家育ちで、健康な體に適はしい正直な心を有つてゐた。其の下婢の耳に、「先生は神だ〳〵」と云つてゐる門弟達の話が聞えた。下婢は顔色を變へて其處へ出て來て、

「あなた方は今うちの旦那様のことを神様だとおつしやつてゐたが、それは本統のことですか？」と云つた。

「本統だとも、うちの先生は神様だよ」と、一人の門弟はまだ感激の醒め切らない面持ちをして答へた。

すると下婢は急に泣き出した。門弟達は非常に驚いて、

「お前は一體何が悲しくて泣くのか」と云つて尋ねた。

「わたしはゆうべ神様を足で蹴飛ばしたのです。わたしの足はいまに曲つてしまふでせう」

恁う云つて下婢は益劇しく慟哭した。

一寸落し咄めくが、私はそんな意味で玆に書いたのではない。此の滑稽な挿話に依つて、私は始めて人間としての本居宣長に觸れたやうな氣持がした。彼の門弟達が「先生は神だ」と云つたやうに、私も、彼に對し、何んとなく人間以上のもののやうな感じを以て是れ迄觀てゐた。私は先年勢州松阪に遊んで、今では舊城趾に移されてあるが昔通りの原形を保存してある本居宣長の住居を觀た。そして、彼が古事記傳の著述をした二階の四疊半の書齋へもはいつてみた。彼が座右に使つた道具の數々をも見た。竈には使つた儘の釜が掛けてあつた。風呂場も見れば雪隱までも見た。本居宣長といふ小兒科の醫者を家業にした國學者の日常生活の名殘りが、其處には眼に觸れる限りあつた。彼も我れ〱と同じ人間であつたといふ證據は、十分過ぎる程あるのだつた。それにも係はらず、其の時私の眼に現はれて來た宣長は、矢張りどうしても、人間以上の宣長であつた。過去の偉人を追慕する時、我れ〱の心に映つて來る其の偉人は常に一種の偶像である。それは正直な我れ〱の感情がつくり出すところの怖るべき幻影である。我れ〱は其の幻影の前に跪伏するの愚を避けて、直ちに偉人の實體に觸れなければ駄目である。

下婢の足で蹴飛ばされた神様の話は、此の意味で、人間本居宣長の姿を、我れ〱の心にはつきりと見せてくれるものである。

陰囊の辨

少々手前味噌で恐れ入るが、私は今年になつてから、陰囊に關する物語を二つまで書いた。一つは大阪朝日へ、一つは大阪毎日へ書いた。大阪人士は定めし、村松といふ男は妙な物に興味を有つてゐる男だと思つたことだらう。處で、簡單に其の筋を記すと、一つは、元和年間、駿府在庵原郡瀨名村といふ處に百姓源右衞門といふ者があつて、稀代の大陰囊を持つてゐた。其の事が駿府の大御所の耳にはいると、それは近頃珍らしい物だ、早速一見に及ぶから、城内へ連れて來いといふ仰せだ。其處で代官を以て當人へ其の趣きを申し聞かせた處が、此の源右衞門といふ爺いが頗る剛直な男で、自分は此の陰囊のために難澁してゐる。それがために悴夫婦にも苦勞を掛けてゐる。其の一家の歎きの種の陰囊を他人の慰みに見せることは厭だ、たとひ大御所の仰せだらうが眞平御免だと云つて頑として應じない。家康も失望したが、無理に引つ立てゝ來て觀るわけにもいかない。其の儘に打ち過ぎて、或る時其の地方へ鷹狩りに出掛

け、突然水吞百姓源右衛門の家へお立寄りになり、其方が陰嚢を出して這つて廻つただけの地面を下し置かれるに依つて上意に從へといふ仰せである。すると源右衛門ハツと畏まり、恐れ氣もなく其 偉大な陰嚢を出して手足の續く限り這ひ廻つた。家康は約束通り田畑數十町歩を源右衛門に與へた替りに、自己の願望を滿たし、此の世に望んで遂げられざることはないといふ信念を得て、大いに幸福を感じた。といふのだ。今一つの方は、明和安永の頃、東海道戸塚の宿に名代の大陰嚢の乞食があり、陰嚢の上で鉦を叩き念佛を唱へて往來の人から合力を受けてゐる。其處へ和蘭陀の使節ヨハンネスなる者が行列を立てゝ通り掛り、此の體を見ると、元來が醫師のことなので、これは陰嚢の水を取れば苦もなく全治する病氣だから自分が治療をして遣らうと通辯を以て云つた。すると乞食が喜ぶと思ひの外、お志しは忝いが、自分は何んの藝もなく此の陰嚢のお陰で今日錢を得て樂に暮らしてゐる。今此の陰嚢が人並みになつては却つて飢渴に及ぶばかりだ、陰嚢こそ俺の寶だから眞平御免を蒙りますとはね付けて立ち去つてしまつた。玆に於て、基督の愛を唯一の信條にしてゐる醫師ヨハンネスの夢幻的人生觀が破られ、彼の哲學の根柢が思はずグラ付き出す。――といふ筋である。前者は、其の土地の口碑を基として書いた物。後者は「理齋隨筆」に載つてゐる話からヒントを得て、百年前日本へ渡來した一異國人の眼に映じた世界と、其の思想生活の一端とを表現して見ようと試みたものだ。が、書きぶりは何によつてなつてゐない。

處で、此の二つの大陰嚢の話を書くにあたつて、私が疑問を抱いたことは、稀代の大陰嚢、或ひは名代の大陰嚢とあるそれらの陰嚢の大きさはどれ位あつたらうか、といふことだ。それがはつきりと想像されてゐないことには作品に實感が伴つて來ない。よく世間に病氣が陰嚢へはいつたといつて大きな陰嚢をぶら下げてゐる人がある。がそれらは大きいといつた處で大抵一升德利位のが止りだ。併し、德川家康を以て態々觸を揭げしめた程の大陰嚢、或ひは東海道の名代と云はれた程の大陰嚢は、そんな凡庸な代物ではなかつたに違ひない。そこで私は種々誇大な想像をめぐらし、水ならば一斗入り位の陰嚢を空想した。其の氣持で書いた。處が、其の後に至つて「想山著聞奇集」を繙いて見ると、是れにも大陰嚢の事が載つてゐた。江戸市ケ谷田町四丁目に賣卜渡世をして住んでゐる海野黄山といふ者の隣家に、病氣が陰嚢へはいつて段々大くなつた者があつた、其の大さ米五斗を袋に入れた程で、形が圓くて、足を前の方へ組んで座してゐると、頭より陰嚢の方が少し高く、前から見ると身

體は陰嚢に隠れて見えなかつた程だ。だから外の仕事は出來ないので、陰嚢と胴との間から手を差し伸べて脇腹へやり、自由に草履草鞋を造つて商ひ、それで糊りを立てゝゐた、と書いてある。是れを讀んで私は一驚を喫してしまつた。一斗入りといふ處が私としては精一杯誇張したつもりだつたのに、其の五倍掛けの實例が現はれて來たのだ。私は恐れ入つてしまつた。すでに一斗入りの陰嚢を想像することが許される以上、それの五倍の陰嚢が無いといふことがどうして云へよう。併し、一斗入りの陰嚢ではまだ／＼身體に附屬した陰嚢で格別不思議もないが、それが米五斗入りの陰嚢となると、陰嚢の方が主で、身體が却つて陰嚢に附屬してゐるらしくなつて、想像して見ても、奇怪な、氣味の悪い物になる。私が前の物語を書くに當つて、せめて二斗入りか三斗入り位ゐ陰嚢を架空して筆を執つたならば、其の作は必ずや一段の効果を讀者に與へたに相違無い。それにつけても、現代人がいかに現實に拘泥し、常識に囚はれてゐるかといふことを、私自身が證明してゐるのである。

誇張で思ひ出したことだが、由來江戸つ子は誇張が巧みだつた。一つ二つ例を擧げて見ると、今の參謀本部の處に屋敷があつた加藤肥後守が頗る立派な表門を普請した。それは舊記に出ると、奥行十間餘の矢倉門で、小さい馬ほどある金だみの扉五頭を彫刻し、屋根は丸瓦に一つ／＼金の桔梗の紋を付けで、夜中も耀くばかりだつたとしてある。流石の江戸ツ子も是れには度膽を抜かれたが、どう其の立派さを形容したかといふと、當時、加藤家の門が餘り光るので品川沖の魚が大分死んださうだ、といつて評判したのだつた。同じやうな話は、明治の初年に、始めて瓦斯燈といふ物が九段坂の上、今の偕行社の前の處へたつた一つ建てられた。さア是れが東京中の評判で、「明るいのなんのと云つて、夜九段坂へ行つて見や、江戸中が一と目に見える」と云つたものだ。

臭氣止め

昨年の春相州の或る温泉へ行つて其の土地の一流の旅館へ投宿した折のこと、雪隠へ行くと、雪隠の天井から長い長い紐が下げられ、其の末端にセルロイド製の小さな籠が付いてゐて、中に臭氣止めが入れてある。蹲むと、丁度其の籠が鼻の先き二寸位の處へ來て、宙にぶら下つてゐる。餘り近いので鼻がムツ／＼してくる。うるさくてかなはないから、次ぎの時は別の雪隠へ行くと、此處にも矢張り同じ物がぶら下つてゐる。仕方がないから紐を手繰つて其の臭氣止めの籠を高い窓の棧へ上げて置いて、用を足して出て來た。翌朝はいつて見ると、元の如

く直してある。又窓の上へ上げて來た。今度行つても、矢つ張り同じことだ。どうも一々上げるのが面倒で溜まらない。到頭觀念して、其の後はうつちやつて置いた。處が、最初は氣にもなつたが、慣れて來れば左程でもない。それに、何しろ鼻の側だから、厭でも吸ひ込む。臭氣止めの効力としては、無類だ。其處で私はつら／＼考へた。是れはまさしく現代思想の傾向を語つてゐる。物の全價値を擧げさせるのが經濟の主眼だ。體裁などを云ふのはそも／＼舊思想であると。其處で、もう少し科學思想が發達して來ると、雪隱へ行つて、鼻の穴へ臭氣止めを挿し込んではいるやうになるであらう。

大島紬

一二年前から、文士の家庭を專門に顧客として大島紬の類を商つて歩く男がある。洋服の脊中へ大きな風呂敷包みを脊負つて、それからそれと紹介狀を貰つて廻つて歩いてゐる。私は淺念乍ら貧乏で未だに一反も買へないが、文壇だけを相手にして結構渡世になるさうだ。文學の盛大まさに極まれる今日の時世であるから、呉服商人の一人や二人寄生蟲が出來た處でそれはちつとも不思議でない。唯、近年いかに大島紬が流行するかといふはなしである。電車へ乘らうが、活動寫眞へ行かうが、帝劇へ行かうが、牛屋へ上らうが、男といふ男が、女といふ女が、殆んど大島紬を着てゐる。まさに世を擧げて大島紬の流行に投じてゐるかの觀がある。大島紬といふ物は、私が斷る迄もなく、丈夫で高尚でまことに宜ろ敷い着物である。流行るのも無理はない。が、私は其の流行に就いてはもう一つ別の觀察を持つてゐる。それは何うかと、云ふと大體、大島紬は織り絣で、色氣もほゞ一定してゐる。撰擇と云つた處で、品の高下は別として絣の大小と一寸した形の相違位のものだ。先づ大同小異だ。此の撰擇の簡易なことが、大島紬の流行を導いた大きな原因であると私は考へる。簡易といふことは現代人の生活に必須の要件である。働くにも、飯を食ふにも、芝居を看るにも、遊興を試みるにも、一切萬事簡易々々と叫ぶ。だから着物を求めるにも、大島紬だと柄や色氣の見立てに精根を費す世話がないから、ついそれに手が出るのだ。是れが流行の端になる。そして今日の如く、商人でも官吏でも、請負師でも文士でも、藝人でも會社員でも、或ひは奥さんでも令嬢でも藝者でも看護婦でも、猫でも杓子でも、見境ひも絲瓜もなく、大島紬を着るやうになつたのだ。折角大金を投じて買つた物をくさしては氣の毒だが、出來撰擇の簡易な物に碌な物はない。大島紬は丈夫で高尚だからふだん着に着るといふ人は別だが、一張羅のよそいき

にしこ、歸つて來るが否や皺をのばして簞笥の抽斗へ入れて置く着物としては、餘り榮へないものである。着物は體溫を保つために着る物ではなく　つてゐる。すでに裝飾であるからには、相應の好みと意匠を持たせなければ面白くないわけだ。

餘程前のこと近松秋江氏が何かへ書かれた隨筆に、別れた奥さんが香の物をおいしく漬けた事や着物の柄の見立てが上手だつた事などを追囘した後で、さて當時は何事も意に滿たぬ事ばかりで、着物の見立ても人任せでは不安心なので、木綿着物を買ふのにも自分で呉服屋へ出掛け、あれかこれかと撰り好みをしなければ氣が濟まぬ性だから、とかく心を疲らせる事が多くて困る、といつたやうな氣持を綿々と例の文章でのべてあつた。いかにも秋江氏らしいと思つた。文學者だからと云つてあながち特殊な生活をしなくても構はないが、してゐる仕事の性質から云つても、多少は個性を發揮したがる傾向がありさうなものだと思ふ。處が近頃はさうでなく、文士までが猫や杓子の眞似をして、金時計をぶら下げ、大島紬の着物を着て得々然として歩いてゐる。それが、デモクラシーだと云へばそれまでだ。

十返舍一九

昨年の秋頃、文學博士藤村作先生が「膝栗毛の作者と其の時代」といふ標題で朝日新聞へ研究を發表された。博士としては、僅かに其の蘊蓄の一端を示されたのに過ぎまいけれど、我れ〳〵後進にとつてはことごとく金玉の文字であつた。其の中に、十返舍一九の性格に關する考證があつた。私は新聞の切り拔きを失くしてしまつたので、ほんの概略だけしか覺えてゐないが、それは、從來世に傳へられてゐるところの十返舍一九なる人物は、天性滑稽洒落な性格で頗る奇行に富み、絶えず諧謔を弄して人を笑はせてゐた、といつた風に信じられてゐた。が果して右の如き人物であつたかといふことに就いては疑問がある。或ひは却つてそれと反對の性格であつたかも知れないとて、駿府の或る米屋の主人が曾て一九と同行して四五日旅行をしたことがあつたが、一九は口數が尠くて宿屋へ着いても行燈の側で手帖へ物を認ためたりしてゐてまことに陰氣で面白くなかつたといふことが、自身の手記だつたか人に話したのを聞いた人が書き留めた物だつたかに殘つてゐるのを、引證されてゐた。私は博士の卓見に敬服すると同時に、自分も曾て其の説を裏書きするやうな一つの話を聞いてゐたのを思ひ出した。

それは私が郷里の古老から聞いた話である。遠州の私の生まれた村に接してゐる「森」といふ町がある。袋井で汽車を下り

て、秋葉街道を北へ向つて三里はいつた處の、郡衙などのあるちよつとした都會だ。私は此の町の高等小學へ三年迄行つた。其の森に「釜七」といふ鑄物家があつた。家業は鑄物師で、代々山田七郎右衞門と稱し、日本鑄物師總代工といふ格式を有つてゐて、舊幕時代にはなか〱やかましい家柄だつた。有名な京都智恩院の梵鐘なども初期の頃の七郎右衞門が出掛けて行つて鑄造した物で、銘に歴然と其の名が殘つて、ゐるさうだ。現今でも其の家は金物屋を營んでゐるが、時世の變化と共に家運が衰退して、到底昔日の面影はない。處で、これは其の何代目かの釜七の時分のことである。

丁度其の頃、十返舍一九が「東海道膝栗毛」を著はして大評判を取つてゐた。古來膝栗毛ほど廣く讀まれた小說は無いさうだ。老若男女を問はず爭つて讀んだ。一九の文名は隆々として日本全國に轟いてゐた。彼はそれからそれと膝栗毛の續篇を著はした。併し、此の道中記體の小說を書くためには彼は屢々旅行をして實地の觀察を豐富にしなければならなかつた。或る時彼は江戸を發して東海道を上つて來た。すると其の事を知つた森の釜七の主が、是非一度十返舍先生に森へ駕を枉げて戴き度いといふので、途中に待ち受けて懇請すると、一九は快く承諾して態々森へ寄り道をしてくれた。そこで釜七を中心に當時森の旦那衆と云はれた人々が集まつて、一九のために盛大な宴を張つた。さて、一同は一九に初對面である。一其の席へ臨む迄は「十返舍先生といふ人はどんな人だらう？」とめい〱想像を廻らしてゐた。併し、人々の想像はおほよそ一致してゐた。それは、兎に角あの膝栗毛の作者であるから必ずや滑稽洒落な非常に面白い陽氣な人には相違あるまいと思つてゐたのだつた。處が、實際に會つて見ると大いに當てが外れた。一九は、彼等の想像とは全く正反對の人物だつた。其の時人々の眼に映じた一九は、まだそれ程の齡でもないのに白髮がいつぱいで、顏には深い〱皺が刻み込まれてゐる、寂しい容貌の人だつた。そして、正面へ座つて、扇子を額へ當てゝ差し俯向いてゐる。盃を差すと受けて呑む。こちらから何か聞けば快く親切に話して吳れるけれど、話し掛けなければ何時迄でも沈默してゐる。非常に靜かな陰氣な人だつた。一同は大いに豫期に反し「此の人にしてよくあの滑稽な小說が書けたものだ」と不思議に感じた。——といふ話だ。私に話した古老は、當時の釜七の子か孫に當る人から直接聞いた話だと云ふから、先づ間違ひはないだらうと思ふ。

私は藤村博士には一度もお目に掛つたこともなかつたけれども、幾らかの資料にもならばと思つて、其の時此の話を簡單に

手紙の中へ書いて博士の許へ差し上げたのだつた。すると折り返し博士から「好個の材料である」といふ返事を載いた。

藤村博士の所論の如く、十返舍一九の性格が世に誤り傳へられてゐるのであつて、事實は其の正反對の性格を有してゐたのであると確定すると、非常に面白い問題だ。（何が故に斯く誤り傳へられたかといふことに關しては、博士の研究に俟ち、歴史の専門家でない私は筆を避ける。）併し、私は何等の資料に依らずとも、一九は必ず在來坊間に傳へらるゝが如き性格ではなかつたといふ確信を持つことが出來る。およそ大なる藝術家であつて、滑稽洒落な快活な性格を有つてゐた人は、東西古今を通じてあつ　例しがない。洒落を飛ばしてアハアハ笑つてゐるやうな人間に、人生の奥底が解る筈がない。作品はどんなに陽性なものであらうとも、それを書いた作者の心は何時でも冷たく澄んでゐなければならない。冷靜と陰鬱とは藝術家の魂に貝殼のやうに靑ざめてこびり附いてゐる。どうともしがたい其の惱みと寂しさが、やがて悲劇になつたり喜劇になつたりして現はれるのだ。「神樣御自身の外には誰れにもお禮を云はずに濟むやうにして、神樣から一片の麵包を頂いた人こそ幸福である」と云つて死んだドンキホーテの作者の日常生活は決して滑稽に富んでは居らなかつたに違ひない。日本の洒落本の開山で遊蕩文學のオーソリチーである山東京傳は決して粹な人ではなく、酒は一杯も呑まず、年中一枚の垢だらけな着物を着て、湯にも這入らず月代も剃らずに、不景氣な顏をして靑樓に居續けをした。一九に限つてが、彌次郎兵衞喜多八の如き人物であつたといふ道理が無いのである。

いつの世でも、寂しきは藝に生きんとする人々である。

矛盾

世の中には隨分矛盾した事がある。我れ〳〵の日常生活は殆んど其の矛盾の連續である。併し、多くの場合自分自身では矛盾だと氣が付かない。其の氣の付かない處から第二の矛盾を生んで行く。是れを第三者の眼から見ると甚だ滑稽に見える。矛盾は、喜劇の根本要素である。此處に一人の作家があつて、平凡な人生の斷片から其の中に有るだけの矛盾を剔抉して示した物が即ち喜劇である。人間の生活が一から十迄論理的に運ばれる時代が來ると喜劇といふものは無くなる。が、そんな時代は全世界の人類が悉く神樣に早替りしない限り來ないから、從つて人生に矛盾が無くなる時はなく、喜劇作家が飯の食ひ上げにもならないのである。――話しがちと大袈裟になり過ぎたが、私は玆で喜劇に關する議論を試みようとするのではない。ほん

の簡單な、ごく罪の無い滑稽を一つ二つ御紹介するつもりだつた。

昔、さる好事家があつて、頗る自慢の一軸を秘藏してゐた。或る人がそれを見せて貰ふと、辨慶が楠正成の處へ、兵糧米を借り度いと云つて寄越した書面だつた。そこで、見せて貰つた人が、是れは大きな時代違ひだと云つて笑ふと、持主が大いに憤つて「だから世に珍らしい物なのだ」と云つて、益大切にして仕舞つて置いた。次ぎは越後國の某家に、餘程古くから、三國一の寶として秘藏してある手紙があつた。紙なども大分傷んでゐたが、幸ひと文字だけは殘つてゐた。江戸の或る好事者が行つて懇望して見せて貰ふと、其の文言は「拙者此ごろ風引申候藥一二服可被給候以上、月日」とあつて、偖宛所には、耆婆殿まゐる、釋迦より、としてあつた。

自己の姿

或る木彫の老大家が斯う云つて話した。

「妙なもので、初心の者に像を彫らせると、其の面貌が必ず自分の顔に肖た物を作り上げる。佛像でも、神體でも、女の顔でも、或ひは動物の顔までが、よく／＼見ると彫つた人間の顔に肖てゐる。此の程度の藝はまことに幼稚である。それが、相應に腕が出來てくると、今度は自分の顔に肖なくなる。出來上つた顔が皆別々になる。處が、更に進歩して堂に入つた者になると、矢つ張り自分の顔に肖てくる。五百羅漢を彫り上げて、其の中に一つとして同型の顔はない筈だが、それをよく／＼見てゐると何處となく、彫つた人間の顔になつてくる。藝も、此處迄達しないうちは本物とは云へない」

私は此の話を非常に興味深く聞いた。餘の事はしばらく措いて、文章の方でも矢張り同じやうであると思ふ。就中小說だと一番判りがいい。極く未熟な人の作品を讀むと、其の作家自身の感情や思想が極めて露骨に現はれてゐるのが多い。讀者は時によると、作家以外には誰れ一人興味が持てさうもないところの饒舌を、辛抱して聽かなくてはならないやうなことがある。次ぎに稍熟練した作家の小說を讀むと、概してソツがなく器用にすら／＼と書けてゐるから、めつたに書物を抛り出させるやうな失態はないが、其の替り斯ういふ作家の作品から個性を求めようとしても、それは口上言ひの口上に感激がこもつてゐないと云つて非難するのと同じ結果になる。最後に、優れた、圓熟した作家の小說を讀むと、我れ／＼は再び作品をとうして、作家の姿を胸裡に彷彿せしむることが出來るのである。併し此の場合の作家の姿は、極めて自然なる方法に依つて作中の人物

と融合したるところの作家の二重の映像である。

自己に發し、自己から遠ざかり、最後に再び自己に歸るのが、有らゆる藝術の道程であると見える。

品の出し方

或る處へ、當代美術界の大家が四五人集まつた時、談偶々藝の品といふことに及んだ。

「わざは教へることが出來るが、品は教へやうがない」と一人が云ふと、他の人々もそれに相違ないと云つて同意した。

すると、其の中にさる高名な金彫りの老大家がゐて、

「いやそれは造作もないことだ」と云つた。

「それでは、あなたは如何して品の出し方を教へますか」と訊ねると、

「至極簡單な事です。それは見えない箇所を深切に仕事をするやうにさせるだけの事です。例へば煙草入の金具を作る場合でも、裏の隱れてしまふ處まで十分に仕上げをさせるのです。さうすると自然に品が付いて來ます」

と其の人が答へたので、一同は成る程と感心した。

一寸した事のやうだが、云へない言葉である。

狐と木魚

名工の苦心談めいた話が續いたから、序でにもう一つ、だが今度は莫迦に面白い話を書いて、此の稿を止めることにしよう。

靑木昆寬といふ刀劍の目貫を作る細工人があつた。（多分文化文政頃と思ふ。忙がしいので正確な年代を調べてゐられない）若いのに腕がよいので、大層評判の細工人だつた。此の人が新宿に馴染の妓があつて折り〳〵通つた。が何しろ人間が粹で、男は好し、そこへもつていつて莫迦に金ばなれがいいと來てゐるので、非常にもてる。或る晩も昆寬先生遊びに行くと、相方は大喜びで側へ附き切り附いてゐて「昆寬さん〳〵」と云つてチヤホヤしてゐる。すると丁度其の隣り座敷にも一名客がゐたが是れが合憎同じ妓の馴染客だ。片方がもてれば、片方は閑ときまつてゐる。おまけに隣り座敷で自分の相方の聲で「昆寬さん〳〵」とやつてるものだから、どつも胸糞が惡るくてたまらない。で到頭我慢し切れなくなつて大きな聲で云つた。

「なんでえ面白くもねえ。狐が木魚を叩きやあしめえし、コンカンコンカンで喧ましくつて寢られねえや」

其の聲が筒抜けに隣り座敷へ聞えたので、昆寬は思はず噴き

出してしまつた。が即座に彼は、狐が木魚を叩くとは面白い圖だ、氣が付いた。

「よし、一つ彫つてやらう」

彼は寢ながら其の圖を考へて、翌朝家へ歸ると直ぐに仕事にかゝつて、狐が木魚を叩いてゐる目貫を一つ作り上げた。それは自分乍ら佳い出來だつた。

昆寛は其の次ぎに新宿へ遊びに行く時其の目貫を持つて行つて「おい、こんな物を拵へたからお前に遣らう」と云つて相方の妓に呉れてしまつた。相方は、昆寛が腕のいい細工人だといふことだけは聞いて知つてゐたが、其の目貫に何れ位の値打があるかといふことは無論判らう筈はない。大した物とも思はずに貰つて置いたが、暫らく日を經てから御内所へ用があつて行つた序でに「お客さんから恁んな物を貰ひました」と云つて樓主に見せると、樓主は驚いて、「是れは大した物だ」と云つて、即金三兩で買つてくれた。

——三月十日——

東京初上り

生方敏郎

1

ブルジョワもプロレタリアートも青息吐息の、打つゞく不景氣の、唯一つ、取つて置きの挽回策として、春から東京に平和記念博覧會が開かれる。それがまた、とても大かく空前絶後の大規模に催されるとやら、日頃記事の種不足に苦しむ都下の新聞屋さん達が、特別書き入れの種として、はたまた銘々販路擴張の好餌として、毎日々々にぎ／＼しく寫眞入りで書き立てる。汽車から十五里、山又山にかこまれたA村の村長さんの杢右エ門殿は、明治元年生れ、年甫めて五十五の中老爺ではあるが、憚

り乍ら正眞正銘の明治ッ兒、つい先年まで青年團の團長をさへつとめてゐた位の新らしさだ。去年の冬、長男に嫁をとつてから、家事は萬端若夫婦に一任し、朝から爐邊で一日後れの新聞を朗讀する氣樂な身の上

「エエ……トウ……若アわかア若槻氏に突つ込まれエ、だるだるだるま宰相はア、但し連帶責任とオ云ふことオとを、一蓮托生オいちいち一蓮托生とはア……」

悠してゐるところへ村會議員の何がしくれがれ等ボツ／＼訪ね來り、米の賣方の話から養蠶はき下しの話、肥料のはなし議會の話とつゞく中に、しまひは博覽會の話に落ちる。村からも五六人は見物に上る者があるといふ。そこで杢右エ門老も老妻と末娘とを伴ひ、出京することに決定したが、由來、年寄は急つかちなものと、昔から極めてある例に洩れず、これまで絶えて一度も自分の國境の外へ出なかつた杢右エ門老も、さあ一度上京すると決心したが最後、矢も楯もたまらず・旅裝をとゝのへ、大きな乾柿を一連手土産に持つて、まだ博覽會の開會前三日といふに、村を出た。乾柿一連といへば十個づゝ刺した串を横に五つ並べて上に五つ重ねたものだ。數にしても二百五十個である。外に餅が五升搗きと黒胡麻一升、自慢の蕎麥粉が、これも二升。こんな重荷を作男の背造にかつがせて、まだ夜の明けきらぬ中に村を出た。村境の道端に立つ道祖神と馬頭觀世音にお暇乞をし、急ぐほどにガタ馬車の有る町まで來た。

三里がほどはガタ馬車の上に、それから電車で又三里、やうやく汽車に乘り込めば、汽笛一聲高く鳴つて、雷さまよりも恐ろしくお芋夫人をたまげさせた。考へて見れば、高いやうで安く、安いやうで高いのは汽車賃、三十里の道をわづか四時間半位で一行は日暮れに上野ステーションに着いた。

赤羽あたりから乘り込む男女の顏容でも着物でも、國で見る人々とは、全く人種が違ふやうだと、老夫婦は不安な眼付で眺めた。田端まで來ると、氣早な人々は、棚から荷物を下ろし、身仕度をする。杢右エ門も荷物を纏めた。

上野驛に着くと、人々に遲れぬ樣に杢右エ門の一行は急いで慌てゝ下車した。乾柿は杢右エ門が持ち、お芋夫人は餅の袋、おとめ孃は黒胡麻と蕎麥の包みと各手別けして、而かも黒い絹張のパラソルを片手に携へた。杢右エ門は聲を勵し

「お芋、そんなに急がねえでも。もうこゝまで來てしまへば東京だ。慌てずにゆつくり歩べ。おとめも、そんなに急くなよ」

「おとつさんこそ、急いてるくせに」

右の夕、キ道の長いこと。そして電燈がそこにもこゝにも點いてゐる。改札には何といふ大變の人だらう。我れがちまんが

ちに押しつくらをして、やうやく出口を出やうとすれば、切符を何處へ藏つたか、片手に重い物を下げて左手で、そこらぢう探すがチョツクラ一寸出て來ない。あんまり大切にして財布の中へしまひ込んだのだ。驛夫は苦笑して

「何うしました」

と急き立てる。

そこをやうやく通り拔けると、まるで國會議員の選擧の時のやうに、何處を何うして集めて來たか、數へ切れないほど澤山の人力車がズラリと並べてあつて、小氣味の惡い車夫がウヂョ〳〵ゐる。

「旦那、お供しませう。そこで切符を賣つてゐますよ。何地です」

と車夫が訊く。

しかし、三人で人力なんかに乘たらば、何んなに大いことを吹つかけられるか知れたもんでねえ。それにステンショの車夫にはポンピキだのモウロウだの惡漢が多いと聞いた。李右エ門は、構はずズン〳〵そこを過ぎた。自働車が何だいもそこに在る。見れば向ふにゴー〳〵と音をさせて來た電車が上の階に青い火花を散らして止つたところだ。

東京は萱の中、雨が降つたと見えて、ステーションの前の廣場もグチャ〳〵ぬかつてゐて、急げば跳が上り相で、おとめ嬢もお芋夫人も、生憎低い下駄と來てゐるから、仲々早くは歩かれない。やうやく電車道へ辿りついて、さて何地へ行く方の電車に乘つたものか、と思ふ間もなく、止つた電車はチリン〳〵ガタ〳〵と出て行つてしまう。

やうやう人に訊いて線路の向ふ側の電車に乘つて、廣小路まで行つて乘り換へればいゝと分つた時には、今度は何うしたものか、電車が來ない。待てどくらせど一臺も來ない。忽ち人は山のやうに溜つてしまつた。

「また脫線かな」

「チエツ、何うしやがつたかな。こんなことなら廣小路まで歩いてしまつた方が、よつぽど早いや」

などとつぶやきつゝ、行つてしまう人も少くない。李右エ門は

「俺も、廣小路まで歩くとしべいか」

と泥るみを歩き出した。丈の高い三階の料理屋や旅館が軒を並べ、恐ろしいやうだ。中には又達磨の鉢卷した形を屋根の上に飾り立てた滑稽な家もある。右手は山で、便所の傍に碑が建つてゐるのが、夜目にもそれとし著い。

「忠魂之碑、乃木希典書……ウム、こりやあ、はあ、乃木さん

の……ふうーン、これお芋、待て、これを見ろ。乃木さんだ。乃木さんだ」

感心して立つてゐると、ブッブッブウツ、ピウーウと恐ろしい音と共に二つの目玉を光らせた自働車が泥をはねかし乍ら、驅けて來る。

山下から廣小路までの道幅の廣さ！兩側の家のイルミネーション！　三人は全く夢心地で辿つた。

何度も／＼人に訊いて、大塚行の電車を待つ、とうとう松坂呉服店の前。

娘はショウ・ウヰンドウを眺めてゐるが、杢右エ門老は今にも崩れて上から押かぶさつて來さうな松坂屋の高い／＼建物を仰いで、小氣味悪く思つてゐる。青い巾を腕に卷いた交通巡査の世話の焼けること！　骨の折れること！　電車が出たり自働車が行つたり人が通つたり自轉車荷馬車さて人力車。お芋夫人の眼はくら／＼する。

大塚行に乗らうとすれば、一人も乗らない中から滿員だ。次のを待つと又滿員だ。　前からも後からも滿員の上に又乗り込む。勞働者は後の臺にブラ下がる。　繪に描いた天女のや　に美しい、と驚いた眼でお芋夫人が先刻から見惚れてゐた奥さんが、前の方から何うか恁うか乗つた。

あの奥さんさへ乗つたのだから、いくら田舎者だとて、乗れないことが有るものか、といふ氣に成つて、杢右エ門は、連をはげまし、乗らうとすると、車掌は意地悪く鎖を張り

（もう乗れません。後から直ぐすいたのが來ます）

と云つて遮る。

いくら待つても、果しが無い。

待つてゐた洋服　紳士が、それでも深切に

「お爺さん。少し待つてると、こゝから引返しの車があります。それになら乗れますよ」

と教へてくれた。地獄で佛さま。

その引返しの電車にも、やうやくの事で乗り、乗り過ぎぬやうに

「大塚仲町はまだですか」と何度もくどく周圍の人々に問ひ、これでお無事に仲町　下車した。

坂の上から護國寺の方を見ると、今度はまた眞暗闇だ。いよ／＼護國寺前まで來ると、一寸先も分らぬほど暗い。こりや、もう來過ぎて、東京を出てしまつたのぢやないか、と不安に成る。

交番で訊いて郵便局の裏と教へられ、やうやく甥の家まで漕ぎ付けた時は、生き返つたほど嬉しかつたが、グッタリするほ

ど精も根も盡き果てた。やれ〳〵。

2

甥　でも、よく家が分りましたなあ。
お芋　はあ、とつても骨を折りました。電車に仲々乗れないでねえ。
甥　さうでしたらう。こんなに澤山荷物を持つてさ。東京の人だつて、あの込んだ電車に容易のことぢやあ、乗れやしませんよ。
花子（甥の嫁）ほんとうに、まあ、大變でしたわねえ。一寸、電報を打つといて下さると、上野まで迎ひに出ましたのに。
杢老　電報を打つたら、びつくらすべえ、と思つてな。博覧けえを見物に行くくれえなこんで、皆をたまげさしても悪かんべえと思つてさ。ほんに前から何時の汽車でいぐと、委細手紙でも出しとくと、よかつたになあ。それも年い取ると面倒で。
甥　電報なんかに驚きやあ、しませんよ。この通り今も原稿の催促が電報で來たところです。
杢老　さうか。俺がい電報が來りやあ、村中の者が、何事か、と訊きに來る。
甥　うん、そりやあ、さうと、伯父さん、夕飯はまだでせうな。
お芋　はい。まだだけれど、私達はもう一向欲しかあないから、何　お構ひしないでおくれ。まだ、ちつともお腹がすいてゐないから。
花子　でも、まだでございませう。伯母さん。そんな水臭い。御遠慮なんか、東京へ來てなさるものぢや、ありませんよ。
お芋　遠慮は申さないけれど、本當にお腹が一ぱいだから……
甥　オイ、親子丼か何か、早く出來るものを。何でもいゝ。註文してこい。
お芋　あの、それなら、何卒止しておくれ。私は頂かない。鶏の入つた物は。
花子　伯母さん。おきらひでしたかね。
杢老　なあに、これは酉歳の生れだから、昔者は迷信で自分の年のものは喰べないのさ。
花子　オヤ、さうでしたか。ではお蕎麦でよろしうございませうか。
杢老　あゝ、何でも結構だ。
花子　ぢやあ、さういたしませう。
（と下座敷へ行く）
杢老　まだ土産も出さなかつたつけが……これは内でこしらい

た柿だ。それに、餅を少しと胡麻と蕎麥粉を持つて來た。
甥　いや、それは何うも澤山、いろ〳〵恐れ入ります。
お芋　いゝえ、本當に詰らない物を少しばかりで
甥　こりやあ、兎に角、珍らしい。柿　一々買つて喰べると成ると、家にゐた時分の樣には喰べられませんよ。うん、餅のことを云へば、これは粟餅ですか。
お芋　いゝえ、白い餅ですよ。お前の手紙には、あは餅が欲しい、とあつたけれど、東京の人にあは餅に喰べられまいと思つて、白いのを搗かせて來たのだよ。
甥　なあに、あは餅は輕くつて結構ですから、誰も悅びますよ。その中、泉がく寺へいらつしやるでせうが、あの門前にも、たしか粟餅を賣る店がある筈です。
お芋　へええ、粟餅をかね。
甥　さうですとも、東京の人は却つて田舍趣味のを物悅ぶのです。京阪とちがひ、東京は田舍から發達した都會ですから、料理でも何でも田舍風です。京阪の料理は立派な傳統のある茶料理ですけれども、東京の物は、壽司だとか、鰻だとか、天ぷらだとか、そばだとか、はま鍋だとか、さういふ類のものです。
（そんな話をしてゐるところへ女中がそばを運んで來る。つゞいて花子も來る）

花子　さあ、何卒。おとめさん、伯父さん、伸びない中に召し上つて下さい。
杢老　ちやあ、遠慮しずに、頂かう、
（それでもお芋夫人は二三度辭退してから、やうやく箸を採る）
杢老（喰べ乍ら）うん、こりやあ、何といふものだね。
甥　天ぷらでせう。
杢老　天ぷらはこの腐つた樣な團だらう。この麵類は、さうめんとも付かず、そばとも付かぬが。
甥　それが東京流のそばです。澤山饂飩粉が混つてゐるのでせう。大分、國のそばとは違ひますよ。
杢老　ちやあ、そばの繩入ちふところだな。
お芋　なあに、おいしいよ。伯父さんは、口が惡いから何處でもこんな遠慮なしばかり云つてさ。
花子　およろしければ、伯母さん、どうか澤山召し上つて下さいまし。
お芋　もうお辭儀なしに澤山頂きました。
花子　伯父さん、お風呂は如何でございます。唯今加減を見て參りましたら　丁度いゝ位に沸きましたから。
杢老　今喰べたばかりだから、私は寢る時貰うことにしやう。

雪隱は何地だね。
（杢右工門老人花子に案内されて下の便所へ行く。話が杜絶えて靜になつた時、はねつるべの軋むやうな音聞ゆ）
お芋　はて、今の音は何ですね。
甥　雉子の鳴く聲です。
お芋　私も、何うも雉子らしいと思つたけれど、何處か近所に雉子を飼つてゐる家があるのかね。
甥　なあに、この傍の山にゐる雉子が鳴くのです。月が出るのでせう。夜明けと暮れ方と月の出る前とには、いつでも鳴きます。
おとめ　（驚いた顔をして）雉子の鳴く様な山が近くに有りますの。
甥　えゝ、村にゐる時だつて、そんなに雉子の聲を聞くことは出來ますまい。東京つていふところは妙なところで、様々な小鳥もゐますしね。さうさ、先には植物園の近くにゐたので、矢張あの時も雉を聞いた。それから五位鷺は毎晩鳴いた。豐川見ると分りますが、この家の傍は山で下を小川が流れてゐる。そこへ鶺鴒もよく來るし、秋は終日百舌が鳴いてゐた。春は又鶯が家の庭へ來て囀ります。全く田舍の人の想像しないことでせう。

お芋　さうすると、もう此所は、東京の端なんだね。
甥　端に端ですけれど、まだ郡部にはなつてゐない、市内なんですがね、一つは護國寺が近いからです。誰も東京へ一寸來た者は、淺草だの人形町だの賑かなところばかり見て歸りますが、實は恁ういふ山や森　んか澤山有るところが、東京の特色なんです。まあ、明治神宮へ行つて御覧なさい、田舍にだつて、あんな田舍々々したところは有りませんから、あの裏の代々木の練兵場の方まで、ずゐぶん廣いところが原つぱだの林だのです。小石川の砲兵工廠を御存知ですか。造兵ともいふ…………
おとめ　えゝ、村からもあすこへ來て職工をしてゐる人が有るでせう。え、お母さん。
甥　あの砲兵工廠は元水戸侯のお屋敷だつたので、あの中に後樂園といふ廣い幽邃な庭が有つて、それこそ山の中へ行つたやうな氣がするところです。私が御案内しますから、今度はお母さんも御ゆつくりなすつて、成るたけ、いろんな所を御見物なすつたらいゝでせう。
（杢右工門便所から歸つて來る）
杢老　ひどい雪隱だ。ポチヤーンと音がして尻へハネがひつ付いた。あんなに肥を溜めずに、もつとマメに汲み出したら何うだな。金持と何とかは、溜るほど汚くなると云ふ諺があるのを、

お前も知つてゐへえ。

甥　東京の人は便所には、始終弱らせられてますよ。仲々汲取人が來ないものだから……それに内のは、一穴と云ひましてねえ。田舎には無いことですけれども、小便と大便と瓶が一つしか無くつて、場所は別々でも下で一緒に成るやうに出來てゐるものですから、あんなにガシヤ〳〵してゐるんです。

杢老　さうか。成程東京には珍らしい物が有る。だが、あれでも困るだらうから、明日朝、私が一寸汲み取つてやらうよ。

甥　いや、もう二三日の中に汲取りに參りませう。それに、内にはひしやくだつて有りやしませんから。そんなことより、明日何所か見物なすつたら宜いでせう。まだ博覽會が開けるまで二三日間が有りますから。

杢老　何處から何う見物していゝか、一向此方には分らないから、お前、よく道順を考へてくれ。

おとめ　お母さん。三越へも行くでせう。

甥　左様、三越も御婦人方は何れ一日見物しなければなりますまいが、明日は、明治神宮としたら何うですかね。でなければ宮城前から日比谷芝公園泉丘寺と行つて、歸りに銀座へ廻つてもいゝ。又は淺草向島方面も十分一日見物する物はある。

お芋　何れがいゝかねえ。

杢老　さうさ。九段は遠いかな。

甥　えゝ、九段も有りましたね。併し、あすこは近いから、何時でも一寸行つて來られます。

おとめ　矢張、明治神宮がいゝわ。九段は私この前來た時見たから、何うでもいゝわ。

甥　あゝ、此前來た時！　うん、修學旅行で來たね。女學校の先生に引つぱられて。明治神宮はあの時參拜しなかつたかい。

おとめ　あの時分、まだ無かつたんですもの。

甥　さう、〳〵、ちやあ、伯父さん。明日は明治神宮になさい。

杢老　さうしやうかな。ちやあ、肥を汲むのは止してか。

甥　おあいには、大分未練が有りますね。あはハヽヽヽ……

皆々　あはハハハ……

3

幸ひ今日は朝から近頃に珍らしい好天氣だ。甚松の案内で、杢右工門老人の一行は午前十時頃、明治神宮へと志し音羽の家を出た。同じ音羽の通りも、昨夜見たのと今日晝見るのとでは、まるで別の土地かと思ふほど違ふ。家の前の小路を出たところに立派な新らしい建物が有るのは、警察署だ。

杢右衛門老　成程、うまい所へお前も陣取つたな。警察が直ぐ前で、門番をさせとく様なものだから、安心だな。

甥　誰もそんなことを言ひますよ。その代りうつかり自分の家の前で立小便も出來ません。

杢老　立小便なんかしないでも、泥棒よけに成ればいゝわさ。

甥　それもさうです。しかし、矢張、燈臺下暗しとやらで、夜遲く朝鮮人の飴屋が押賣りに來て動かなかつたり、して困ることが有ります。家の前の空地にも、もう直き普請が始りませうが、さうして土方や左官が出入するやうに成ると、彼等の中には屹度一人や二人の盜人が交つてますから、油斷が成りません。

お芋　新聞で見ると、博覽會が初まるので掏摸が東京へ入り込んだなんて書いてあつたけが、東京も恐ろしいところだね。村なんかぢや、私が覺えて、この年までに泥棒に入られた家は一軒もないが。

甥　村の方は山の中で逃げ道が有りませんからね。ところが、東京は、伯母さんの仰言る通り、だん／＼物騷に成つて困ります。

杢老　社會主義者が不穩の宣傳ビラを抑へられたと新聞にあつたが、東京にはキビの惡いものがゐるな。

甥　そのキビの惡い社會主義者には、誰にも盜んで行かれないやうに、刑事さんが何時も附き切りです。だから渡りつこありやしません。そんなに大事にしないでもよさ相なものですが、あれも日本の　寶ものと見えます。

杢老　不穩の宣傳ビラたあ何んなものだらう。

甥　なあに下らない文句です。だが警察の私の家の門の中まで、配布して行くのですから、その宣傳ぶりの巧妙と熱心とには、驚かされます。内容は不穩でも何でもない、常識的のものです。彼等やサンガー夫人の演説などより、ずつと不穩なのは代議士とか府會議員市會議員とかいふ人類ですが、何故あの連中には刑事が附かないものか不思議です。人を撲るの盜むの脅迫するの、と、そんなことばかり商賣にしてゐるのですのに。何うです。何とか云ふ大阪選出の代議士は、貴族院議員を脅喝したてえぢやありませんか。

杢老　ゼイ六に脅喝されるなんて。またよく／＼のへボ男も有ると見えるな。

甥　まさか脅されもしますまいが、何しろ對手が惡いです。大阪の××を代表して來てゐるといふ奴ですから。罪は選出區民に有ります。

杢老　どうも議員の種がづでい惡くなつたやうだなあ。鐵道を敷くにや、どうでも政友會になつて置かないと駄目だちゆうて

んで、何でもはあ、印をつけと云ふから、私を始め、みんなが政友會へ這入つたがな。

甥　政友會の直接行動家、鳩一さんの邸もこの通りにあります。議會もまだあるでせうが、見物しますか。

杢老　いや、よしにすべえ。議員の醜態は見られたもんでねえちうから。

　こんな話をしながら行く中に、赤い大きな門の前へ出た。境内の、ひろ〳〵と脊の高い松や銀杏が高く聳えてゐるのが見える。

甥　これは護國寺ですよ。例の大隈さんと山縣公の墓が出來たので、ここも東京新名所の一つになりました。

杢老　ほう、大隈さんの墓があるかい。ぢや、私も一つ參詣して行くとするかな。

　一行が門へ向つて行くと、大勢の子供と一緒に門前の廣場で遊んでゐた多くの鳩が、羽ばたきして、門の屋根へ逃げ上つた。お芋とおとめは珍らしさうにそれを見上げた。石の段々を二十ばかり上ると、本堂が向ふに見える。彼等の前にも引續き多くの人々が歩いてゐたが、誰も本堂へは參詣しずに、右の方へ斜かいに鋪石の上を行く。立札には「大隈家墓地はあちら」と記してある。この多勢の人達はみんな大隈さんの墓へ參詣に行くのだ。間もなく右側に大きな門が廣く開いて、形のいゝ石の燈籠が二つ程見える。人々は皆其處へ這入つて行く。奥には正二位大勳位侯爵大隈重信之墓と記した白木の標杭が立つてゐる。花が澤山飾つてあり、前の奠座の上には一錢銅貨や五錢の白銅やが澤山散ばつてゐる。十錢の小額紙幣が微風に吹かれて、少しづゝ動いてゐる。今にどこかへ吹き飛ばされてしまうであらうに、勿體ないものだと、お芋は頻りに氣を揉んで見てゐた。杢右衛門は首から紐をかけてある財布を取り出し、穴明き白銅を一つ奮發した。お芋もおとめもどちらも一錢宛奠座の上に投げる。そして皆手を合せて丁寧に拜んだ。後から來る人も皆賽錢を上げて拜む。

杢老　えれいもんだなあ。お墓へ賽錢が上るちうんだから。もう神に祭られたも同樣だ。

甥　何しろ、もう二ケ月から經つてゐるのに、まだこの通りの參詣人があると云ふのですから、素晴らしい人氣があつたものですなあ。夜でも參詣人があるさうですよ。あの墓の側の燈籠に夜は灯がつくのです。

杢老　大藏卿の昔から大隈さんは何しろ政界の大立物だつた。百廿五歳生きるちつて威張つてたちうが、こんな豪傑でもまさか自分の思ふ通にや行かねえで、到頭亡くなられた。

名刺受に名刺を入れて歸る人々もあつた。それを見て、甚松は

甥　年始にでも來たやうだなあ。

中にも松葉杖を突いた靑年は、人目を惹いた。

甥　大隈さんが生きてゐたら、あの人をどんなに歡迎したでせう。足の惡い人が訪ねて行くと、大隈さんは必ず會つて、義足を附けて歩く方法を敎へたり、なか〳〵深切なものだつたさうです。昔なら早速脚氣の神樣にでも祭られるところでせうねえ。

先きに參詣をすませた子供をつれた夫婦連の參詣人は「あなた、序ですから、山縣さんの方もお詣りしませうよ」と私語き乍ら、なほ奥の方へ行く。

甥　ああ、僕等も山縣さんへお詣りしませう。もうすぐそこですから。此處には三條さんの墓も確かある筈です、探せばぢき分る筈ですが。

おとめ　もうそんなにお墓詣り許り、私厭やだわ。折角東京まで來て、

杢老　馬鹿を云ふな。たゞの墓にお詣りするのぢやなし、偉い人の墓にお詣りするのだ。

甥　さあ、偉人だかどうだか知りませんが、とにかくみんな官位の高い人々で、生きてる間は、とても寄りつくことも出來ないから、それで先づ誰も死ぬのを待つてゐたと云ふ譯でもないでせうが、墓になつたところでお詣りが出來るから、それで我々も先づ山縣さんに近づくことが出來ると云ふわけです。また行つて見たいと云ふ氣が起る譯でせうね。

山縣公の墓所はなか〳〵廣く、天幕を張つた小屋が二つもある。先づ白木の棒杭には従一位大勳位功一級元帥公爵山縣有朋之墓と記してある。花もなし、お賽錢も上つてゐないが、その代り兩陛下攝政宮殿下その他の人々から贈られた大榊がある。その前にはピカ〳〵光る矛が二本立つてゐる。一行は先づ敬禮をして

杢老　うん、立派なもんだ。

と見惚れてゐると、側のテント張の小舍の中に机を置いて控えてゐた袴をはいた人が

「これへどうぞ御姓名を」と云つた。机の上には前の參詣人の名刺が幾枚も置いてあつた。杢右衛門は名刺を持つてゐないので、帳面に姓名を認めると、

「どうぞお所をその肩へ」と墓守の人が云つた。そこで甚松はみんなの住所姓名を認め、歸らうとすると、

「どうぞあちらでお休み下さい」と丁寧なものだ。墓の正面と

向ひ合つた天窓の下には、椅子やテーブルがあつて、おせんべいが誰でも勝手に取つて食べられるやうに山盛りにしてある。土瓶や茶碗もあり、誰でも勝手に飲める。

杢老　やれ〱有難いこんだ。我々見たいな土百姓が從一位大勳位功一級公爵樣のお茶を御馳走になれると云ふのだから、全く夢のやうな話だ。これこそ國へかへつての一番の土産話だんべえ。

4

大塚仲町から市内電車に乘り、終點で山手線に乘換へ原宿までの切符を買つた。この山手線電車もなか〱込んでゐた。出口は中の口からと云ふことが勵行されてゐると云ふ評判だつたが、まごついて兩端の口から下る人も見受けられた。一行は立ち續けでゐたが、代々木まで來て漸くお芋夫人だけ腰掛けることが出來た。腰掛けたと思ふと、直ぐに原宿で下車するのであつた。ステーション前の廣い路は、目渡す限りボタ餅大の石ころが敷き詰められ、歩きにくいのなんの、お芋夫人が遲れ勝ちになるので、杢右衛門は後を振返り、どうしてゐると聲をかける。お芋はこごんで下駄の齒にはさまつた石を指で引き出してゐる。そんなことで向側に何か土産物を賣る店が見えたが、それを覗きて行くさへも困難であつた。茜松は杢右衛門と後れた婦人連を待ち乍ら

甥　伯父さん。これが例の南參道です。この廣い道がずつと青山まで續いてゐます。

杢老　何しろ、大した道だな。うん、豪い道をつけたもんだ。

甥　この道ですよ。市會議員と市の道路課の小役人とが砂利屋と馴れ合つて大金を胡麻化したのは。その罰で、今、皆なもつそう飯を食つてますがね。

杢老　さうとも、神さまの道を食ひ物にするなんて、途方もねえ大惡人に、何で罰が當らずにすむものか。

甥　全くですよ。それが口火に成つて瓦斯會社の疑獄も持ち上つたわけです。神罰ですね。

と語る中、お芋おとめも追ひ付き、一緒に成つて橋を渡れば、稍右手に大きな白木の鳥居が眼に入る。茜松は案内顔に

茜松　あれが一の鳥居です。

お芋　まあ、大きな鳥居だこと。いく抱へあるだらう。

杢老　ふん。ええ物だ。村の馬隱れ杉でも、こんな位なものだんべえ。

六間か八間もあるやうな廣い道には、細かい小石が敷き詰めてある。端い方を歩けば、そんなに歩きにくゝない。若い男が

ブラ／＼歩き乍ら、少し大きい石が有れば拾ひ集めて取つて行く。塵一つない。紙屑一枚落ちてはゐない。道の兩側は松や檜やまき榊その他の樹木が澤山植えてある。中には樹齢百年以上の大木も時々見受けた。

川が有り、石橋が架つてゐる。右の橋の柱に神宮橋と彫つてある。擬寶珠は唐金だ。

杢老　橋は見事だが、川の水は少ねえな。もつと水を澤山流せねえものかな。

と橋の上から川を眺めてゐる。甚松は

「五十鈴川はいゝですね。周圍はこんもりした杉の大木だし、水は滑し、本當に伊勢は神々しいが、せめてこゝもあの萬分の一位にも行くといゝのだが。如何せん、道一本　けるにも砂利を誤魔化さうといふ連中のやる仕事だから。

お芋　ほんに勿體ない話だねえ。

杢老　こゝも年數が經ち神さびて來ねえではな。

甥　桃山御陵へ伯父さん達も是非一度御參拜なされたが宜うございます。あすこの木はまだ若いで　が全く盡く松で、道は白い細かい砂を敷きつめ、歩くとサク／＼音がして、そりやあ好い氣持です。一種俗界を離れた氣持に成れますよ。

左へ曲つて二の鳥居をくゞり、更に又右折すると、正　はもはや明治神宮の總門だ。左に御手洗がある。大きな石の底から絶え間なく水が噴き出てゐる。參詣の人々は、こゝで口をすゝぎ手をたつてゐる。

杢老　參詣人を先刻から見てみると、私らみたいな田舍者が多いやうだな。

甥　矢張、國の礎は、何と云つても田舍だといふ氣が、いつもこゝへ來る參詣人を見ると起りますよ。都會の人は、デモクラシーだの普通選擧だの勞働運動だのと口だけ騷いでゐますが、いざ鎌倉と云ふ段に成ると、矢張田舍の人でなけりやあ、切り開いて進むことが出來ません。矢張、何といつても、田舍の人は底力を持つてゐますからね。

杢老　いや、讃めてくれるのは有難いが、近頃は田舍者もさつぱり生意氣に成つて　いざと云ふ時、役に立ち相な人間が本當に幾人有るか、考へてみりやあ心細い話だあさ。

立派な總門をくゞると、左手にお札を下げるところが有る。冠をかぶり緋の裝束を着けた神官が控えてゐる。そこを過ぎて、いよ／＼神殿に近づくと、左側に帽子外套手荷物等を置く處が三つほど置いてある。人々は皆外套帽子等を脱ぎ、そこへ置て神殿に登り參拜してゐる。

内殿はまだずつと奥の方に見える。一行は恭しく禮拜して、

神殿を下る。

境内に腕に金條の入つた洋服を着た老人が徘徊してゐる。何かの役人であらう。殺風景な顔をして参詣人をぢろ〱見るので、田舍の連中は氣詰りといえ、右側の小門から出てしまつた。そこには大きな榊が霜にあたらぬ様小屋掛などがしてあつた。人々の休息するやうに捨ベンチも有り、辨當の竹の皮やら新聞紙を捨てる空箱も幾つか置いてあつた。その中に又廣い北参道へ出て、少し行くと寶物殿への道しるべも有つた。

杢右衛門が

「腹がへつて來た。早く外へ出て何か喰べやう」

と云ひ出したので、一度に皆な空腹を感じ出し、默つてずん〱道を急ぐほどに、又大鳥居が見えて來た。

道の右側に屋根などのある業々しい額があり何やら書いてある。見れば

本社境内に於て
魚鳥捕ること
草木折ること
右固く禁止ス　東京府

と認めてある。

杢老（は笑つて）賄賂取ること、砂利食ふまじきこと、とは流石に斷つてないわい。

門を出れば、鐵道の土手に添ひ、新たにつけられた狹い道に向ひ、小さい飲食店　土産品を賣る店が並び、参詣歸りの客を呼んでゐる。店には、金ピカの盃や德利、貝細工、聖護飴、せんべい等をひさぎ、又飲食店では安價で、まづい親子丼壽司汁粉等を食べさせる。

そこを通れば代々木驛へ間もなく出る。もう、今日は此位にして休息しやうといふので、日はまだ有るのに赤羽へ歸つた。老人連のこと故、仲々見物に日數がかゝる。

5

第三日目は朝から一行は家を出て、江戸川まで歩いて、そこから綿糸堀行の電車に乘つた。此電車は込まないから、皆樂々と腰を下ろした。江戸川といふ以前は花の名所の一つであつた沿岸も、今はコンクリートに固められ、片側は電車が走るので殺風景な所と化してしまつたが、水は豐に流れ夏は納涼の猪牙舟に棹す學生や子供で、川は可也賑ふのだ。

忽ち九段下へ來たので、わざ〱一丁場の爲めに乘換へるのも面倒なれば、こゝで電車を乘り捨て、九段坂を登ることにした。坂の右側には赤い煉瓦塀を取り廻した偕行社の廣い建物が

あり、高い所に石とセメントで築き上げた、高燈籠が立つてゐる。左を見れば田安橋、その向ふの田安門へ兵隊の列がぞろ〳〵這入つて行くところだ。橋の上からは神田下谷日本橋等が遠く見渡せるので、子供を連れた若奥さんや、學生や道草を喰つてる小僧や赤ン坊をおんぶした女中や、田舍から來た人々など、何れも欄干に倚りかゝり、午に近い陽のぬくもりを脊中に受けつゝ、眺めてゐる。杢右衞門の一行もこゝへ來て

お芋　まあ、いゝ景色だことねえ。

おとめ　この前、見た時と、あんまり變りはないわ。お母さん、あの頭の圓い尖つたのがニコライよ。

茜松　あれがいとう松坂です。廣小路の。

お芋　どれ〳〵。へへえ、あれかねえ。

茜松　それから、それ、ずつと右へ寄つて、あの恐ろしく高いのが、多分三越でせう。

おとめ　まあ、三越が見えること。本當。

茜松　本當ですとも。誰が嘘を吐くものですか。三越と聞くと、婦人は眼の色を變へるから、滑稽だ。

杢老　着物が可愛いからだ。着物が可愛けりや三越まで可愛い、は、恰度、坊主憎けりやあ袈裟まで憎いの反對だあな。あはハハハハハ。

茜松　あの一番端の、そら石垣のそばに高く見える上の平べつたいのが、海上ビルディングでせう。それから三越の左に少し寄つたところが三井物産らしい。その前が日本銀行でさ。

おとめ　東京ステーションは見えない？

茜松　もう少しのところだが、そこ迄は視野へ這入つて來ないな。さうは問屋が卸さない、てえのは、大方こゝらの事を言つたものでせう。

杢老　この下を通り拔ける電車は何處行だ、

茜松　英國大使館から半藏門の方を廻つて、青山へ行くのと新宿へ行くのと、そら直ぐこゝで別れて市ケ谷から四谷へ出て、新宿へ行くのとあります。

杢老　成程。こりやあ、橋の下をくゞつて、向ふへ威勢よく飛んで行くところは仲々壯觀だ。お前とこの坊やが電車の玩具を澤山集めて悦んでるのも、無理はないわえ。

茜松　さあ、伯父さん、こつちへいらつしやい。ね、この角に劍の形を立つてゐる碑が西南の役西郷さんの戰の時の紀念碑です。明治十二年に建てたもので、山縣さんが詩だか何だか作つたと見えて從四位勳一等陸軍中將山縣有朋としてある。

杢老　どれ何處に。

茜松　それから伯母さん。あれが陸軍大將川上操六といふ人の

銅像です。威張つた顔をしてゐるでせう。その此方、オイおとめさん、こつちへいらつしやい。これが品川彌次郎の銅像だ。無暗と銅像を建てたもんだな。

お芋　どれ何處にさ。

茜松　まあ、こんな銅像は東京にはまだ幾らもありますから、そんなに一生懸命見たくらいゝですよ。こちらへ、いらつしやい。

杢老　これ〳〵、茜公、そんなに急ぐな。

茜松　おとめさん。あの火の見櫓を御覽。それからあれが蒸氣ポンプといふものさ。あすこは消防署と見える。それから、これ、この鳥居を御覽。黒いけれど金の鳥居ですよ。こんなのが此所には、たしか三つかあります。

杢老　いや成程、これは大きい。大きい。周りが何の位あるか。この板が三尺幅と見て一い二う三い、皆で六枚あるから十八尺。三間あるな。高さも大したもんだ。

茜松　おとめさん。この石の獅子を御覽。

おとめ　オヤ、これ獅子ですか。私、犬ころかと思つた。ずゐぶん可愛らしいのね。あら、この獅子老人ですのね。

茜松　何故ですか。

おとめ　でも齒が兩方の端に一枚づゝしか無いもの。

茜松　あはハハハ……年老の獅子はよかつた。ありやあ、牙ですよ。あはハハハ……

お芋は兩側の石の春日燈籠を數へ乍ら歩いた。

お芋　丁度こゝまでで十基あるね。

といふ時、又銅像の前へ來た。銅像は素敵に高いところにあつて、チョン髷を結ひ、ぶつ裂き羽織を着て二本長いのを差した人だ。手には双眼鏡を持つてゐる。杢老は像の直ぐ下の撰文を讀んでゐる。

おとめ　この人の眉毛はずゐぶん伸びてるのねえ。それとも眼がくぼんでゐるのかしら。

お芋　可怕い顔付の人だね。なんといふ人やら。先刻から、何の人も、銅像に、あんまり好い男はないねえ。

杢老　これ、何事だ　バカ女。娘の前だに、氣を付けて口を利きなさい。

お芋　でも、皆な怕い顔付の愛嬌の無い人ばかりだもの。

杢老　國家に功老の有つた豪傑ばかりだ。好い男の何のと、役者ぢやありやしめえし、女に可愛がられる様な男に、國家の大事が何が出來る。娘の前だに、氣を付けろ。

茜松　いや、ほんとうに、伯母さんの仰言る通り、銅像の顔が力み過ぎてますよ。もつと温和な顔にこしらへても、誰もバカ

にする者は無いのにさ。だが八幡太郎や義經も銅像にすると、まあ、この位の男ぶりでせうね。あはハハハ……

お芋　遠眼鏡を持つて、何處を見てゐるのやら。

甚松　大方、上野の博覽會でも、見やうといふんでせう。あはハハハ……

杢老　何だ。噫是兵部大輔贈從四位大村益次郎君之像也矣か。ふん、君は長州の藩士……戊辰之役終り功を以て祿千五百石を賜はる。ふうん。

甚松　この位で、少し急ぎませうか。まだ先きがどつさり有りますから。

又もやお芋の數へる石燈籠を兩側に十ほどづつ行くと、道を隔てゝ先刻と同じ黑い金の大鳥居がある。明治十九年建之としてある。一行は構内へ入り社前に敬禮した。杢右エ門老人はパチ〳〵と柏手を打ち又恭しく叩頭をした。貴族の者は昇殿して參拜するを許す、と注意書がある。

お芋　太郎作どんの家の孫平もこの中にゐるの　ね。南無阿彌陀佛。〳〵。〳〵。

杢老　久兵衛の舍弟の八之助もこの中にゐるのだ。パチンパチン（柏手を打つ音）

お芋　新田の半松がとこの總領、馬五郎さんもこけえ來て神樣になつてゐるだあね。南無阿彌陀佛。〳〵。〳〵。

社を庭の方へ歩き乍ら

杢老　ほんに馬五郎が死んでから、もう三十年にも成る。生きてれば私とおつつかつつの年だになあ。子供の時分にや、きんがあ揃いで二人一緒にくいず掘きに行つたり、魚捕りに行つたりした仲だつけが、平壌でチヤン〳〵坊主の鐵砲玉を中てられてしまつた。打つ殺しても死なねえほど、餓鬼の時分から達者な奴だつけが。あゝあ、老少不定、人の命ほど分んねえもなあねえ。

お芋　馬五郎さんの妹のお冬さんは、私と學校が一つ級だつたが、中で一番綺麗好しでさ、村中の若い衆にヤイ〳〵言はれたつけが、あの人もとう〳〵去年流感で死んぢまつた。ほんに間の惡い人達だよ。

杢老　久兵衛がとこも可愛相なもんさ。八之助は死ぬ。伜は何處へか突つ走る。身上はへらす。正直な、良い男だが。

おとめ　甚松さん、あの鐵砲はに。

甚松　日露戰爭の時、旅順でブン捕つた速射砲だ。これで何人日本軍がやられたか知れやしないんだ。若し之が人間なら、何の面下げて、此んな所に平氣でゐられるのぢやないのだが、機械だからこそ平氣でゐるのさ。

お芋　あゝ、旅順で死んだ孫平は、屹度〻の鐵砲で殺されたんだ。お竹さんが之を見たら、まあ何んなだんべえ。他人の私さへ涙がこぼれるもの。

（お芋袖口にて眼を拭ふ。）

甚松　伯母さんも伯父さんも、さう氣が弱くちや。とても此中の物は何も見られやしません。あすこに見える遊就館には日清日露兩戰役の紀念品が澤山あるのだが、この分ぢや、あゝを見たら堪りますまい。

お芋　あゝ、さうだ。もうお父さんも私も、そんな物は見ないでもいゝよ。

甚松　ぢやあ止しませう。實は私は田舍から人が來るたんびに案内するので、見てもちつとも珍らしくないのです。

おとめ　あの家は神主さんの家ですの。

甚松　あれは能樂堂です。その向ふの空地で花相撲が先には時々ありました。

おとめ　あら、噴水ですね。あれは金太郎でせう。この池はいゝ池ね。

甚松　あんまり好くもないが、このベンチに腰かけて、かうしてゐると、呑氣でいゝ。

6

九段坂を下り、江戸川方面から來た洲崎行電車に乘つて一行は大手町で乘り變へ、東京驛前を過ぎて、馬場先門で下車した。

甚松　東京驛も大きな建物で一見する價値は有りますが、今日はさうしてゐられないから、こゝから宮城前を拔けて櫻田門から日比谷公園へ出ませう。

杢老　なるほど、あれが陛下のお城かい。立派なものだな。

甚松　さうです。あれに見えるのが有名な二重橋です。こゝから彼處まで、歩くとずゐぶん有りますよ。向ふのが桔梗門です。

お芋　いゝねえ。この廣々とのう〳〵してゐてさ。

おとめ　いゝ松原ですのね。

甚松　向ふに楠公の銅像がありますよ。しかし楠公の遺跡なら、矢張神戸の湊川神社です。光圀公の建てた嗚呼忠臣楠氏之墓の碑ですね。職人の鑄た銅像なんか、見たつて仕方がありません。

櫻田門の頑丈相なこと、その石垣にも一行は驚かされた。そして兩方に美しい堀を見乍　幅の廣い美しい道を通つて、日比

谷公園へ這入つた。

春といふも名ばかりの三月初めの事だから、花壇には、別に見る可き物もなかつた。池に居る鶴を見て、杢右エ門夫婦はしばらく感心して立ちつくしてゐた。音樂堂の前から松本樓の前を素通りして、心字形をした池の泉水を見た。天を仰いで立つ青銅の鶴の嘴から、高く噴き上げて散る飛沫は見る眼にも寒く思はれた。水禽は足に暇なく水掻きを働かせてゐる。

つゝじの山に登り再び前の廣場を見て甚松は

「大隈さんのお葬式とか、何かの市民大會とか赤十字の大會とかいふやうなものは、いつもこの廣場で開かれるのです。秋の末に成ると菊の品評會があるのも此所です」

などゝ説明したが、これぞといつて見る物も無いから、直に有樂門を出て再び電車に乗る爲めに交叉點へ戻らうとしたが、杢右衛門が空腹を訴へるので、三橋亭へ這入つて、壽司を取なり、極めて簡單安價な午飯をしたゝめた。

一行は再び三田行の電車に乗つて南へと向つた。甚松は電車の中から、

「あれが愛宕山です。伊勢へ七度熊野へ三度、あたご樣へは月參り、といふ小唄が有るでせう。あれですよ。あすこにある高い石の段々は寛政三馬術の一人眞垣平九郎が馬に乗つたまゝ登つたといふので有名です。人間が登るにも中々容易でない石段です。」

といふ中にお成門といふ停留場へ來た。甚松は

「門も無いのに、車掌が「オナリモーン」と呼ぶのを聞くと變ですが、先には赤い門が昔のまゝで殘つてゐたのです。それを電車が通るやうに成つて取り拂つたので、罪亡ぼしの爲めか何うか、名前だけ保存したわけですが、本當ならオナリモンアトと跡といふ言葉が一つ要るところですね。あゝ、これが増上寺の山門です。」

などゝ、説明した。

杢老　増上寺を拜觀しやうか。それそお靈屋(たまや)があるちうこんだつけが。

甚松　伯父さん。止しませう。徳川時代から遠くなかつた明治の世には、またこの増上寺も東京名所の一つでしたけれど、もう今日ではこんな寺は無意味です。生ぐさ坊主が參政權獲得の運動をする俗地と化してしまつたのですから。昔こそ徳川家は公方さまだが、もう今日では我々と同樣の人だし、先祖の家康としたところが、當時の大成金といふだけの話ですから、若し増上寺のおたまやへ參詣すると成ると、岩崎彌太郎の墓へも參詣せねばならぬ理屈でせう。玉蟲の厨子なんていつたところ

で、詰らんものです。だから増上寺は抜きにして、まつすぐ泉丘寺へ參りませう。四十七士の方は德川時代には賊徒だか兇徒だか、兎に角都を騷がせて處刑を受けた人々だが、世が變つた今日と成れば義士といふわけです。」

などと氣焰を上げる中に、はや三田の終點に着いた。車を換へて更に泉丘寺へと急ぐ。

7

札の辻から先きの沿道の此所彼所、人の軒先に老若男女の群が、何か人待ち顏に立つてゐるのが見受けられたが、泉丘寺前で一行が下車した時は、道には通れないほどの人垣が作られ、騎馬に跨つた兵士が一人、他に步兵が三人、警部が三人巡査が二人ほどで、道路を警戒し、やゝもすれば前へのめり出さうにする群集を「後へ後へ」と制してゐる。

お淨　何だらうねえ。茂松。

杢老　大變な人出だ。何事がおつぱじまるかの。

茂松　はて。何方(どなた)かのお通りと見えます。

傍の人　攝政の宮殿下のお通りです。

茂松　伯父さん。攝政の宮殿下がこれからここをお通りになるのですとさ。

杢老　何と。攝政の宮殿下がお通りになる。さうか。こりやあ、今日は何といふ幸せな日だんべえ。うらん。ありがたいことだ。〱。

傍の人　何う云ふわけで、攝政の宮殿下は、こんなに御人氣が有るのでせうね。私なんか、もう三十分も前にこゝへ來たのですが、殿下の御通り遊ばすといふ噂を聞きましたので、他に急用が有るのですが、それを打捨つといて、こゝで立ちん坊して御待ち受けしてゐるのです。こゝにゐる、この田舍からおいでたお爺さんお婆(ばあ)さんも、矢張その時分からこゝに立つてゐるのですよ。

杢右衛門老人の一行は、そのまゝそこへ足を止めた。後から追々人が來て、前へ〱とたかり人垣はだん〱厚く成つて行く。

「もつと後へ」

と靜かに言つて、時々警部さんが來る。そして

「まん中が前へ出すぎてゐる」

と手で押すやうな眞似をすると、皆ぞろ〱後へ退るが、しばらくすると、いつしか又前へのり出す。今度は兵隊が來て

「もう直きお通りですから、成りたけ後の方へ」

と小聲で注意する。巡査は

「向ふ側の方がいゝ」
と人々に教へる。學校歸りと見えて、多勢ゐた女學生の二人ほどが向ふ側の支那燒栗屋の前へ移住すると、それに倣つて、あとから二人三人くらゐづゝ、電車の途切れ目に向ふ側へ移る。中でも水色の毛糸の帽子を冠り、淡紅色のジヤケツを着た娘二人が際立つて眼につく。おとめとお芋は殊に珍らしく、それを見守つてゐる。

鐵の細棒を積んだ荷馬車を引いて來た馬子が、警部さんの注意を受けて、道を泉丘寺の方へ轉じやうとするので、群集が騷ぎ立つ。東京の人は自働車のブウ〳〵通るのは平氣な癖に、馬一疋を何うしてあんなに皆怖がるのかと、お芋は不思議相に見てゐる。

腕に青い布を卷いた交通巡査がオートバイに乘り、けたゝましい音を立てつゝ、さも得意相に澄ました顏をして通る。

もう間も無い、といふ豫感が誰の胸へも來たので、そろ〳〵脫帽する。襟卷を取る。

自動車が低い速度で品川の方から來た。「お供の方々だな」と思ふ中に、更に又立派な自働車が二臺つゞいた。

皆々敬禮する。

自動車が過ぎてしまふと、人垣はばら〳〵に崩れて、銘々思ひ〳〵の方へ散り〳〵に成る。

杢右衛門の左わきにゐた田舍の爺媼は、その周圍の俄に動き出したのを見て
「殿下はまだでせうか」
と杢右衛門に訊いた。杢右衛門は
「いや、今お通りなされたのが殿下でございますべえ」
と答へた。茜松は、この老夫婦は一時間も前から玆に立ち盡してゐたのを知つてゐるので、心中氣の毒に思ひ
「眞中の自動車にお召しになつて、軍服を召して大きい緣なしの眼鏡を懸けたお方が、殿下でした。」
と話し懸けた。老人は、如何にも殘念相に
「うつかりして居ましたので、つい拜みそこねました」
と老媼と共に嘆息した。

一行は直に泉丘寺へと向つた。門には「萬松山」の額が懸つてゐる。門の內外に金ピカの盃、德利、貝細工、繪葉書などを賣る貧弱な賣店が軒を並べてゐる。門の直ぐ前の右側の休茶屋に「御茶漬」とあるのを、茜松は近頃珍らしいことだと思ふ。そして
「伯父さん。あの障子に御茶漬と書いてあるでせう。田舍では珍らしいことではないでせうが、近年東京には、茶漬といふ字

は、よほど珍しいものに成りました。徳川時代には、江戸の至るところに茶漬店といふのがあつた相で、先達て麻布の大和田といふ古い鰻屋へ參りましたら、そこの主人が文政頃に出來た鰻屋と茶漬店との古い番附を見せてくれました。その番附の中にある大黒屋だの神田川だの前川だの竹葉だの又た大和田だの、鰻屋の方は大分今日まで未だ殘つてゐるのに、茶漬店といふものは殆んど全滅してしまつた。それは主に交通機關の發達した爲めだ。といふやうな話がありました。私はその時、それを文明史的に觀て、面白い一說だと思つて記臆してゐます」

と語つた。

門を入つた右側に、又も流行の銅像が立つてゐる。元祿時代に流行つたらしい極めて近かい羽織を着、袴はつけず着流しで、卷物を攫げて持つてゐる形だ。

「ふゝう。大星由良之助の像だな」

と杢右衛門が感心して仰ぐ。

「へえ、由良之助ですか」

とお芋夫人にも、大石良雄より由良之助の方が勿論通りがいゝ。

樓門がある。そこには泉岳寺の額がかゝつてゐる。その正面の突き當りが、本堂であるが、誰もそこへ行く者は無い。「義士之墓」とある道標べを見て、皆左へ曲る。一行の後にも先にも參詣人は陸續として群を成して來る。茜松は

「まあ、實に大變な人だなあ。いくら義士でも、斯う迄多勢參詣人が有らうとは、全く想像しなかつた。大抵田舍の人のやうですがねえ」

杢老　さうだ。私みたやうに、博覽會見物のお客だんべえが、私等の東京にゐる馴染は、まづ四十七士だからな。

茜松　私も出京した時、直こゝへ來てみましたが、それ以來二十年も御無沙汰してゐました。矢張東京にゐれば、いつでも來たければ來られると思ふので、何處の名所も、格別用でも無ければ、行かずにしまうのです。

こんな話をし乍ら、左を見ると、質、拜觀の切符賣場があるので、切符を求めて、右の段々を登る。右側の小さい松の樹の根元に、水溜りがあり、首洗井戸と立札がある。

「はゝあ、おい、婆さん。高師直の首を洗つた井戸だ」

と杢右衛門は、お芋夫人に注意する。

「ずゐぶん汚い井戸ねえ」

おとめも覗き込む。

石段の上の木戸口に人がゐて、參詣料を一名一錢づゝ徵集してゐる。

「お線香をお上げに成る方は、別に一錢いたゞきます」

といふ　皆々線香の束に火をつけたのを持つて、墓地へ這入る。

この小高いところにある墓地の其所此所には松や樫などの常盤木が高、生ひ茂つて、薄暗い感じがする。墓の數は澤山あるし、人は多いし、線香の烟は濛々として、艶つぽい樣だ。

先づ淺野内匠の頭及び奥方の墓が入口に在つて、之は大きく、義士の墓は小形で高さ二三尺のものだ。本名と戒名と行年何歳といふこととが彫り付けてある。

誰　皆石塔の文字を讀み、線香を上げて拜み乍ら行く。

「この戒名には、何れも皆、刄の字と劍の字と入れてある」

などと、感心して呟いた人も有つた。

李右衛門も頻りに石塔の字を讀んで

「まだ年の若いのに、何うだ行年二十七だの行年二十四だのといふのがある。惜しいことをしたもんだなあ」

と嘆息する。甚松は

「大石瀬左右衛門二十七、近松勘六なんか二十四位でしたらうわ。矢頭余茂七も可也若いと思つた。爲永春水の一夕話を讀むと、大に艶つぽい話が澤山あるが、その筈だなあ」

と之も嘆息する。

お芋夫人は

「そんなに若い人が澤山あるのに、何故切腹なんぞさせたものだらうねえ。まあ、その親達の心持は、何んなだつたか」

と、もう袖口で眼元を拭いてゐる。おとめは

「あら、何うしたらいゝだらう。」

と突然頓狂な聲を出した。皆、おとめ孃の方を振り返る。お芋夫人は

「何うしたのさ」

「線香が、みんな成つちまつたの。私ずゐぶんケチにして、すこうしづゝしか上げて來ないのに」

甚松　兎に角、數が多いから、一本や其處らの線香で足りつこあるものか。

おとめ　でも、まだ大石良雄まで行かない中に無くなつちまつたんですもの。誰の上げるのも、こゝまで來ると、無くなつてるわ。私ばかりぢやないのですから、いゝわねえ。

大石良雄と主税の墓は　別に小さい小屋懸けをした中に在つた。中は薄暗くて、ハッキリ讀まれない。

8

寶物の庫の中は薄暗かつた。義士の手紙などが掲げてある。

杢老　見事な手蹟ぢやあねえか。これ、おとめよ。これを見て置け。

甚松　成程、うまいもんだ。はゝあ、これが堀部安兵衛かな。その隣の前原伊助も能筆だ。

おとめ　まあ、これ鷲堂さんを習ひ込んだやうだわ。

甚松　これぢやあ、皆な浪人しても習字の先生で立派に喰つて行ける連中だ。今時の習字講習會の先生達より、よほど巧い。

お芋　まあ、これは何だらうねえ。ぼろ〳〵の布があるが。

杢老　武林唯七の襦袢の袖だ。ふん、刀もある。この矢の根は何うだ。いや、こりや、さま〴〵の物があるな。

おとめ　この大石良雄遺愛の瓢は、小石川の家の二階の炭取にそつくりだわ。あれを、もつと古ぼけさせただけのものよ。

甚松　どれ〳〵。成程いかにも、よく似てゐる。おとめさん。あれはね。宇都宮から來た青年に貰つた品なんだ。夕顔の心を取つて乾し固めたもので、宇都宮の名物だ。宇都宮の町を通ると、あれを賣つてる店が澤山あるとさ。

おとめ（小聲にて）これも屹度坊さんが宇都宮から貰つたのでせう。おほホホホ……

杢老　う、あれ見ろ。う、みんな禮をしなくつちやいけない。

甚松　何です。伯父さん。だしぬけにさ。

杢老　そら。あの額を見ろ。忠節可仰。御物書とあるわ。ふうん。忠節仰ぐ可し。か。

寳物庫を出てから、甚松は

「皆さん。あの汁粉屋で粟餅を喰べませう。紀念の爲めに。」

といふと　杢右衛門は

「さあ、私は東京まで來て粟餅を喰はねいでも、家で始終喰べてゐるから、何か變つたところ案内してくれ」

といふ。おとめは後から

「お父さん。〳〵」

と呼ぶ。

杢老　何だ。

おとめ　小野寺十内の煙草入。

と誰かの落して行つた安つぽい煙草入を洋傘の先きで引つ掻き上げて見せる。

杢老　何だ。バカ。

おとめ　おほホホホ……

甚松　おとめさん。この竹は何だか知つてるかい。

おとめ　知らないわ。

甚松　大高源吾の賣り歩いた竹の枯れのこりさ。あはハハハ…

……

門前の汁粉屋で、皆々汁粉や團子を喰ひ、上野行電車に乘つて銀座まで來ると、もうそろ〳〵暮れかゝる。一行は新橋の手前で下車して、新橋を渡り、博品館前を過ぎ、尾張町三丁目から向ふ側へうつり、夜店を冷かす。この邊は、東京の街でも取り分け目抜きのところとて、何れの商店も有名な家ばかりで、店飾り綺羅びやかに、舗石の上を行く人々の群は、肩と肩と擦れ合ひ踵と踵と接するばかりの繁昌。杢右衛門親子は殆んど夢を辿る心持ちで、お互ひにはぐれぬ樣に用心しつゝ歩く。お芋とおとめとは、そゝろ歩きの若い女の派出な作りと美しさに見惚れつゝ行く。

もう既に京橋を渡らうといふところまで來ると

「いよう。君。君ぢやあないか」

と呼ぶものがある。何處の世界に君といふ姓名の男があるか。こいつ餘程慌て者だと思ひ乍ら、甚松はその聲の持主を見ると、身にはルパシユカといふ洋服を着て、顔には大きな丸い鼈甲眼鏡を懸け、氣の利いた中折帽子をチヨコンと頂き、長い髪はその帽子の外まで食み出してゐる。左の小腋に黒革の折かばんを抱え、右手には華奢なステツキを突いてゐる。一寸活動寫眞の喜劇役者チヤプリン君と云ひ度いところで、大正ハイカラのチヤキ〳〵である。

「うん。君かい」

と甚松も君といふ名で間に合はせてゐる。

「久しく會はなかつたぢやないか。何か面白いことでもあるかね」

「何も面白いことが無くて困つてゐる。君は今夜は?」

「田舍のお客を連れて東京見物をしてゐるのさ。君は?」

「これから、ダンスの稽古に行くところさ。」

「呑氣だなあ。景氣がいゝな」

「呑氣でもないけれど、丁度暇潰しにいゝからね。今夜八時に會ふ約束の人があるんだけれど、それまでボンヤリ待つてもゐられないし、何處で待つにしても夕ダぢやすまないだらう。そんな時ダンスは頗る經濟的に暇潰しが出來ていゝよ」

「さうか。近來ダンスが大流行だとは聞いてゐたが、君等もやつてゐたのか。ぢやあ丁度いゝ。君に少しお賴みがある」

「何。その賴みといふのは」

「あすこに立つてゐるのは、僕の田舍の親類の者さ。あの伯父なんと來た日にや、明治兒のチヤキ〳〵だなんて威張り乍ら、今度はじめて博覽會を見がてら、上京したんだ。達士は居ながらにして世界を知るんだなんて、之まで田舍にばかりゐた變物なんだ。で 一つ君に案内して貰つてそのダンスを見せ度いと思

ふのさ」

「さうかい。おやすい御用だ。僕と一緒に來たまへ」

恁んな事で、ダンス見物の相談は何うやら纏つた。彼等は最高ハイカラさんが案内するまゝに、明るい所や暗いところを曲つたりくねつたりして、去る稍暗い通りに向つた左側の丈の高いビルデイングの扉を押して入つた。嶮しい山の坂を登るやうな勾配の極めて急な階子段を三がい迄登り詰めると、もうそこが舞踏室と見えて、中から活潑な音樂が洩れて來た。

9

室は長方形で割合に廣く、疊を敷いたら三十枚や四十枚は入らうと思はれる位、すべて板の間で、周圍は白壁、天井も白色だ。片隅に青い幕を下ろした樂屋のやうなところがあり、その周圍に幾つかの椅子腰掛と、中に石油ストーブが置いてある。ストーブをかこんで若いハイカラな青年達が烟草を吸ふもあり、ダンスを見てゐるもあり、蓄音器をかけるも有つた。

色彩は餘り無い白壁白天井の部屋のこと故、造花の櫻や藤などで、少しは裝飾してあるが、若しそこに四人の年若い美人がゐなかつたならば、如何に殺風景を極めたものであつたらう。併し乍ら、幸ひそこには四人の美人がゐて、交々男と手を組み體を接して蓄音器の音樂に連れて、小鳥の戯れる如く、叉蝶の舞ふが如くに踊つたから、誠に春風駘蕩たるものがあつた。若しこの踊りをせめて一時間も繼續したならば、青年達の魂が羽化して登仙するばかりでなく、見物人たる杢右衛門老人の一行も必ずや恍惚として天人の國に遊ぶの思ひがあつたであらうに、蓄音器の悲しさは、僅か五分で常にその歡樂を打ち切るのであつた。

暫く見てから、案内人のハイカラ君も、中の美人に一禮して、共に手を組み五分間ダンスをしてから、

「さあ、もう要領は分つたらう。まだ他にポルカだの何だの手もあるがね。大抵こんな程度のものだから、この位で外へ出やうか」

といふので、外へ出た。杢右衛門老人は

「今のは、何ちう踊りですがんすえ」

と訊いた。

ハイカラ君　あれはワルツと云ひますよ。

杢老　あれが西洋の盆踊でがんすか。

ハイカラ君　左様、お座敷藝でなく、大廣間で多勢一緒に男女混合で踊るところなんか、或は盆踊かも知れませんね。あはハ

甚松　だが、手は握りつ切りだし、足も〃跨に開かないから、盆踊ほど活潑に行かないやうだ。何うも我々には盆踊の方が面白いな。

ハイカラ君　ところが、あれをやつてみるとね、傍觀者の知らない味がある。あの踊る時、胸をつい〳〵と突き出して、女の乳のところへ當てゝやるんだ。何うだい。

甚松　成程、安價なる享業が出來るといふ譯なんだね。

ハイカラ君　それで暇つぶしに持つて來いでさ、少しは運動にも成るしね。獨身者には、何よりの遊戯だね。それに萬一西洋人と交際する必要が起つたとしてみたまへ、二十世紀の日本人がダンスは知りません、ぢやあ通らないやね。と云ふやうな大義名分が有るだらう。盆踊りは、その反對に警察の方でやかましいや。あれには大義名分が無いからさ。

李老　いや、何んなに管區(かんく)(警察官)が追つぱらつても、盆踊りは止まねえね。あつちの森で追拂はれゝば此地の原さ行つてやる。私らも若え時分には、さんざやつたものさ。なあ、お芋。

お芋　いやだよう。お父さんは。娘の前でさ。考へてから口をお利きなさいよ。

　その中に李右衛門は空腹を訴へ出した。

「私は何か喰ひ度く成つて來た」

甚松は笑つて

「伯父さん、また初まりましたね。だが、もう日が暮れてから大分に成るから、皆なお腹がすいだでせうね。ところで何を喰べませう。君、君も付き合ひ玉へ。まだ八時までは時間があるから」

　ハイカラ君も一緒に晩餐をやると云ふので、何處かいゝ所はないか、と探し乍ら大通りを歩いて來た。甚松は

「さあ　今夜の食事は何にしたらよからうなあ。正午(ひる)は壽司だし、おやつ代りに汁粉をやつたし、先達ての晩蕎麥を　げたし、今度は西洋料理にしませうかね。伯母さん。何うです、西洋料理が召し上れますか。それとも四つ足はいけませんか」

　と仲々食事には心を碎いた。だが李子夫人は鷄の他は、何でも差支へなしと、いふことなので、西洋料理に決つた。甚松が

「しかし、何處がよからう。ね」

　とハイカラ君に相談すると、ハイカラ先生は

「さうだね。これから日本橋迄行つて村井銀行の地下室の食堂へ入ると、あすこのサッパアは安くて腹をこしらへるには十分だが、わざ〳〵行くのが面倒だね。筋向の星(ほし)アイスクリーム・パアラはコーヒーはうまいが食事は出來ないし、向ふ側の北日本は別嬪さん揃ひで大に客を引いてゐるが、定食は安價で同時

に甚だしく貧弱だ。この第一生命の東洋軒にしたら何うかね。この建築物を見玉へ、向ふの星製藥會社と背較べして立つたのだ。丁度富士と八ケ嶽と背較べしたといふ、昔の傳說みたいに。近來東京の建築物は無暗と背較べしてゐるが、今に何うする氣だらう。兎も角、こゝの七階の食堂へエレヴエーターで御案内するだけでも、いゝ土産話に成らうぢやないか。」

といふので、一行そこへ入ると、杢右衛門をはじめ、お芋おとめは、その廣々した素張しく高い天井を眺め

「ほんに、眼がくらむ樣だ」

と正直なことを云ふ。甚松は得意顔に

「伯父さん、これからエレヴエーターにお乘りなすつたら、それこそ本當に眼が眩みますよ」

と秤かす。折から上から降りて來たエレヴエーターは金の□子戸を開いて、一行を入れ、ボーイがボタンを押すと、それは音も無く恰も烟草の煙の昇天する如くに易々と、ずん〳〵上へ〳〵と登り七階へ來てぴたりと止つた。先刻のダンスには少しも驚かないばかりか、盆踊りには到底及ばないと見下してゐた杢右衛門も、このエレヴエーターの奇想天外的なのには全く度膽を引つこ拔かれた。しばらくは三人とも物も言へない。甚松はいよ〳〵得意で

「何うです、伯父さん。妙でせう。三越へ行くとエスカレーターといふものが有りますが、こいつは、もう一層妙です。自分の立つてゐる階子段がずん〳〵登つて行くといふ仕掛ですからね」

と、未だ手品の種は幾らでも有るといふ顔をする。

「全く、魔法のやうだね」

とお芋夫人も感嘆して云ふ。

偖て一行は食堂のすぐ近、八階の休憩室で暫く休み、それから七階の食堂へ來て食事を取ることにした。こゝでは杢右衛門老人大に元氣を恢復し、西洋料理はすつかりお氣に召して、

「オイ、今の牛の糞の燒餅の代りをくれ」

とてビフテキを註文し、又お芋夫人は

「赤ン坊の吐ど」

のお代りとてコキールの再註文をしたり、又手洗ひの水を飲んでしまうなど、多くの滑稽談あれども、管々しければ省く。

そして小石川へは自動車で歸らうといふので、ボーイに命じて置くと、ボーイは間も無く自動車が參りましたと告げに來た。

一行はエレヴエーターで下りた。お芋夫人は

「あゝ、おつかない」

と杢右衛門にすがり付き

「何するだ。子供の前で」と叱り付けられた。

自動車は一行を乘せて、猛獸の如く吠吼しつゝ、暗い街を疾驅して瞬く中に音羽の家へ彼等を送りつけた。

10

夜中に降つたが、朝はきれいに霽れて、いゝ鹽梅と、その翌日も上天氣であつた。どうもぢつとしてはいられない。杢右衞門がしきりに博覽會の開くのを待ち侘びてゐるのを見て、甚松は「まあ明日に成れば博覽會も、厭でも應でも初まりませうから、今日は一つ淺草から向ふ島へかけて御見物なさるがいゝでせう。」

といふ動議を出した。

「さうかい。では、お前に任せるから、何處でも面白いところへ連れてつてくれ」

と杢老は氣は強くも、東京ばかりは一人ではゞかれない。況んや女共を引率して見物させることなど思ひも寄らぬ。

しかし、花子は

「家の人の案内ぢやあ、何處も面白いところは見られませんよ。私が這入らうといふところは、何處も「こんなところは田舍者の見るところだ」と云つたり、又は「僕はもう何度も見てゐるから飽きた」か言つて逃げてしまひますからね、駄目ですよ」

といふ。甚松は躍起 成つて

「そりやあ、お前のやうに氣の利かないところを大口あいて見てゐられるも か。その代り肝腎なところは、僕は決して見落さない」

「それでも、昨日わざ／＼泉岳寺まで行き乍ら、義士の木像を見落してしまつたぢやありませんか。今日は氣をつけて細かく見なきや、駄目ですよ」

「餘計なお世話だよ。昨日木像を見ないで早 歸つたばかりで、ハイカラ君に廻り合ひ、おかげでダンスを見物したぢやないか。さあ、早く出懸けませう」

と細君の口には敵し得ないと見えて、甚松は家を飛び出した。電車は大塚から乘れば、廣小路で乘りかへても又は廐橋手前で乘り換へても何方でもいゝのだが 乘り換へ切符を利用していとう松坂屋を見物する爲めに廣小路で乘 換へた。

一行はもはやエレヴエーターには、二度目の經驗だから左迄驚かなかつたが、まづ四階へ上り、子供部の玩具や可愛らしい洋服や帽子等から見始め、陶器や塗物など一々細かに見て三階二階と順々に見乍ら下りた。お芋夫人は何かと細々したものを

買つたらしい。そして杢右衛門初め、皆なその女店員の別嬪さん揃ひなのに驚かされた。お芋夫人は小聲で

「まあ、女の番頭さんの綺麗なこと。本當に田舎ぢやあ餘程大家のお嬢さまでも、恁うはいかない。だが、こんな立派な家を建てて、あんな美しい女の番頭さんを多勢置いては、かかりが多いから、品物も仲々安くは有るまいねえ」

と私語くので、茜松は

「そんな様にも思はれますが、しかし、小さい店のやうに、客をハメル事はありませんから、少しは高くも安心し、買ふことが出來ますから、我々みたいな何も知らない人間には、却つて三越白木や恁ういふ大店の方がいゝですよ。それに恁ういふところの販賣政策が何うか知りませんが、品に依つては大變ない物があります。ドロップの罐なんか菓子屋　此所とは三割方も違ひ安く買はれます。」

茜松は食ひしん坊だけに、菓子の値段はよく知つてゐる。

だが下足で下駄をよごされたのには、おとめさんは少なからず閉口した。東京へ來て買つたばかりの美しい鼻緒は泥でメチヤ／＼にされてしまつた。昨夜の夜中に降つて朝晴れた雨の爲めに道がまだぬかつてゐたところを步いて來たには相違ないが　下足の取り扱ひが惡いからであらう。茜松は自分のことなら懸け合つてみるところだけれど、面倒くさいので、おとめの愚痴も聞かぬふりし　電車道へ急いだ。

淺草行の電車は直ぐ前に止つてゐた。それに乘り一同雷門前で下りた。石を敷き詰めた道の兩側の商店には、田舎人の買物慾をそゝりその巾着を叩かせるやうな、見かけのいゝ價の安い品が多かつた。こゝではおとめさんが時々立止つて道草を食ふので、杢右衛門さんも茜松も大に弱らせられた。今半といふ牛屋の三階が右側の仲見世の屋根の上に聳えて見えた。

一寸八分の觀音樣の門番を一丈五尺の仁王さまが勤めるといはれる、その氣の利かない役割りをつとめるプロレタリアート階級の佛像が、いかめしい顔をして仁王門の下の網の中にゐた。巨人傳説を偲ばせるやうな大きな草鞋が幾つもかかつてゐた。

右に五重塔が聳え、正面には十八間四面の觀音堂が悠揚迫らざる形に据えられてある。豆を拾ふ鳩の群、豆を賣る露店、どれも田舎人の眼に珍らしかつた。堂に登つて先づ驚かされるのは、新橋と記した大提灯だ。見たもので無ければ想像がつかない。茜松は

「私はこないだ横須賀へ陸奥といふ軍艦を見に行きました。それは三萬何千噸、殆んど四萬噸有るといふ山の樣な大艦です

が、初から大きいものと想像して行つた爲めに、そんなに驚かされませんでした。ところが提灯といふものは元來小さい物とばかり思つてゐるものですから、初めて上京して此處へ來た時、大に驚かされました」

と述懐する。お芋夫人は

「本當に、ほんに、まあ」

などと、感投詞を連發して、天井を仰いでゐる。源三位賴政と猪早太とを描いた菊地容齋の筆になる大繪馬を、本右衛門は物も言はずに見とれてゐる。

餘程してから、漸く氣づいて、本右衛門夫婦はお賽錢を投げて觀音樣をおがむ。

おびんづる樣を皆撫で廻し、それからお札を買ひ、序に御くじを引いた。何れも相談した樣に小吉であつた。

「おみせ。おや、おとめさん。君のは縁談ととのふとあるぜ。もう直きお嫁さんになるといふ診宣だよ。嬉しいだらう」

「あら、いやだ。私ちつとも嬉しかないわ。だつて私一生お嫁になんか行かないつもりですから」

「嘘ばつかり言つて。今嬉しい相な顔をしたくせに」

などゝ堂の外廻りの椽側で巫戯てゐるのを、人々がぢろぢろ見て通る。

「私、小便が出たく成つたが、この邊に便所は無かんべえか」

本右衛門が茜松を呼んで訊いた。おとめは

「また初まつた。お父さんはいつでも私は腹がへつた、つていふのと、小便が出る、といふのが極りよ」

と笑つた。茜松は心得顔に

「いゝ便所を御案内しませう」

と先に立ち案内した。本右衛門は、暫くは中へも入らず、イんだまゝ

「はあ、これが便所かな。私は西洋の神樣でも祭つてあるところかと思つた。これを便所にして置くのは勿體ない」

と云つてゐた。

池に添ひ、一行は活動寫眞その他の興行館の前を過ぎ、池を一廻りして、花屋敷に入つた。そこの人形の大仕懸なのと山雀の藝と西洋操りと瀧と大蛇と動物とは、少なからず皆を悦ばせた。

茜松は

「もう、大分昼を過ぎたが、皆なお腹がすいたでせう。鰻に不贊成でなかつたら、駒形の前川まで行くといゝのだが、あすこまでは一寸あるから、田舍向に安くて繁昌する「やつこ」へでも這入りませうか。それとも天ぷらにでもしますか」

と訊いた。衆議鰻に一決して「やつこ」へ入つたが、仲々待た

され、鰻丼に有り付いたのは一時半過ぎた頃であつた。

「蒲燒だと永く待たされるし、それに價も丼の方が安いのです」

と甚松は、もう田舍客の東京見物を案內することには馴れたものだ。

11

吾妻橋から川蒸氣に乘る。小松島まで往復十五錢だ。往復二枚買つて四人で使ふ。船を待つ間川を眺めてゐると、さて樣々の船が通る。大きな筏の眞中に筏師は腰かけて、煙管をくはへ、口からパク〳〵と白い煙を吐きつゝ、橋の下を滑り拔ける。橋の上を見れば、ほとんど引つ切り無しに人が通つてゐる。吾妻橋の鐵橋は、五大橋の中一番先に出來たが、仲々見たところも美しい。ブラングインのエッチングにでもあり相な景色だなど〻甚松は瞑想に耽つてゐた。その中にけたゝましい音出させて、川上から蒸氣が着いた。中の人々が舟からドヤ〳〵をて上り切ると、棧橋の上の客が入り代りに中へ乘り込んだ。渡し船のやうに、後から〳〵三人五人づゝ客が來て、船は間も無く滿員に成ると、ゴトン〳〵音を立てゝ動き出した。

乘客は、と見ると、郡部の人々、百姓らしい男女も大分交つて、自ら市內電車に乘つた時とは趣がちがひ、又漫々たる隅田川の波の上を緩く搖られつゝ、沿岸の景色を眺め乍ら行く快さは、又格別だ。甚松は多くの客が乘り込んでも餘裕綽々たるこの小舟を見ると、先達て友達が「小袋と小娘は油斷がならねえと云ふことが昔から云はれてゐるが、船と云ふものが矢張然うだ」と語つたのを思ひ起して、一人で微笑んでゐた。

船は一度言問に着いて、客を乘せたり下したりして又動き出した。大學の艇庫を見ては、花の盛りの頃のボートレースを思ひ浮べて、樂しい學生時代の追憶に今を忘れてゐると

「オオ、甚公、あれは何だな」

と李右衞門が、御殿作りの邸を指す。

「あれですか。あれは大倉喜八郎の別莊ですよ。高官の人々を招待して、怪しからぬ御用商人的の御馳走をすると謂はれたのはあの御殿です」

恁ういふ中に、多くの殺風景な工場の烟突が見えて來る。ブルジョアの邸とプロレタリアートの工場、現代を縮圖にした景色はこれだ。業平がいざ言問はんと呼びかけた昔から、明治のつい先達てまで風流閑寂を好む文人墨客の爲めに保存された江戸の名殘であるかのやうに思はれた向島の成れの果が、此景だ。變れば變る川の淵瀨は、たゞ飛鳥川ばかりのことばはない。な

どゝ、甚松は默々として瞑想にふけつてゐた。

その中に、船は小松島へ着いた。こゝにはつひ先年架けた白鬚橋が、虹の如くと言ひたいが、實は芋虫の如くに横はり、橋詰に白鬚橋株式會社があつて、通行人から二錢づゝの橋錢をとつてゐる。

やがて、土手の道へ出る。この道は、漢學者たどが墨堤十里などゝ嬉しがつたところで、永く櫻花の名所だつたが、今日歩いてゐると、實に風と砂塵の名所の如くに思はれる。少し戻つて白鬚まで來ると、丁度祭日と見えて、おかぐら殿でかぐらをやつてゐた。その下には大きな傘をさして飴屋が店を出してゐる。尚ほ少し戻つて左に入り百花園で休息した。まだ花は咲いてゐないが、甚松はこゝに秋の百花園を空想した。こゝへ今日寄つたのは、伯父に樂燒を燒いて見せ度い爲めである。

休み茶屋にかけてゐると、女中がおきまりの菓子と茶を持つて來る。此代が一人三十錢だ。樂燒をやく小家には、德利盃菓子器壺一輪差等、轆轤で形を作つただけの原料がある。それと繪具を取り寄せて、思ひ／＼の繪を描く。杢右衛門は河童と月とを皿に描く。甚松は蛙と泡ぶくとを茶碗に描く。おとめは菓子器に梅に鶯を描く。おとめの繪が一番うまい。杢右衛門の繪が尤も飄逸だ。甚松の繪が極めて意味深長だと彼は一人で決めた。杢右衛門は

「お前の繪は何だな。」と訊く。

「これは蛙が泡ぶくを吐いたところです」

「さうかい、私には、それが蛙が屁をこいた樣に見えるがな。」

「冗談を言つちや困ります。これに上藥をかけて燒いて屆けてくれますよ」

「この通りの色が出るかな」

「あんまり變りませんね。青なんかよく出ますよ。だが、伯父さん、東京は淺草の花屋敷から、直ぐ又恁ういふ寂びたところへ來られゝすれば、又この川を渡れば向ふは吉原です。こゝには、秋の夜、虫放ち會をやつて、靜に虫の音を樂まうといふ人々が集るのに、このすぐ先きの工場は、勞資戰爭の修羅場と化する。まあ、そんな ところが、東京の住んで倦きないところでせうね」

甚松は大得意で、東京の自慢をした。

先刻の言問で、家庭の者共の爲めに言問團子を土產に求め、すぐその土手下から渡し舟に乘つた。所謂竹やの渡はこれだ。お茶屋の娘らしい、黑繻子の襟のかつた着物を着た若い女が、紫色の船べりに腰かけてかうもりをパツ／＼さす。職人は中へしやがんで煙管に刻み烟草をつめ掌の上に吸がらを叩いては、又火

をつける。水はピチャ〳〵舟べりを打ち、眺望ひろく、蒸氣の時より又面白い。甚松は

「伯母さん。あれが有名な待乳山です。月に風情の待乳山と夕暮の文句にありませう」

と前の森を指す。

舟が岸に着けば、棧橋から間も無くこの森に行ける。そこには聖天さまの祠がある。一同石段を登りこれへ參拜した。甚松は

「これが、東京の神様佛様の中で、一等お賽錢が上る佛様だ相です。」

と說明した。吉野橋から電車で歸宅した。

12

いよ〳〵今日から平和博覽會も開會される運びと成り、發會式がすめば、午後二時からは、一般民衆の入場を許可するといふ。朝から、不忍池畔で打上げる花火のドカン〳〵といふ音が、音羽の甚松の家の方までよく聞えた。杢右衛門は例の老人の急つかちから、頻りに行かうと促すので、甚松も

「では御案内しますが、もう直き十二時ですから、おひるでも召し上つてからにしては何うです」

「なあに、出懸けた先でやらう」

「併し、上野まはりの飲食店は、今日らは何んなに込み合ふか、注文してから一時間やそこら待つ氣で無いと、迚も口に這入りやしません。伯父さんみたいに直ぐと「私は腹がへつた」と來るのぢや、實にあゝ云ふ場所では厄介ですよ。」

と甚松が言へば、花子も調子を合せて

「伯父さん。本當に內で召し上つていらしやつた方が、ようござんすよ。今日みたいな日に迚も上野附近では召し上られませんよ。こないだも廣小路へ參りました歸りに、あすこ松榮壽司がおいしうございますから這入りましたら、勘定する時に成つて氣がつくと、何うでせう、材料騰貴に就き値上げ致候なんて張紙がしてあるのでせう。憎らしいぢやありませんか」

と憤慨する。甚松は

「それでも、あすこのはまだ材料を落さないだけいゝさ。中には材料を下げて價を上げる家さへあるんだ。だから博覽會開期中は、上野で浮つかり食事は出來ない。この前の大正博覽會の時、揭げ出しへ這入つた時のことをお前覺えてゐるか。さんざ待たされた上句に、食べもしない物までうんと附け掛けされてさ。混雜してゐる時だから、言つたつて分りやしないし、お前が頻りに忌々しがつた、あの時のお前の顏付つたら無かつたぜ。

ほんとうに二タ目と見られない顔をしたつけ」
「何んな顔だつて、ようござんすよ」
と花子は膨れ出す。杢右衛門は
「これ〳〵、喧嘩は止しにさつしやい。私が降參して午飯を喰べて行ぐことにするから」
大塚仲町からは、折よく上野萬世橋と札をかけた電車があつたので、一行それに乘つた。博覽會の開會日でも、この線ばかりは終點に近いから、電車には樂々のれた。
上野へ近づくとドカン〳〵といふ花火の音が益々よく聞こえて來る。もう上野で下りると先夜初めてステーションへ下車した時の賑ひよりは、又一層の大混雜で、杢右衛門は何處へ足を踏んごんでよいやら、殆んど見當も付かぬ位であつた。上野の山へ登る高い石段を下りる人、上る人、まるで蟻が砂糖の塊にたかつたやうに見える。甚松は
「これから、眞直行けば博覽會の會場ですが、私達もあの石の段々を上つて上野第一等の名物西郷さんの銅像を見ませう」
と云ひ、丘の上へ案内した。
「あら、何うしたのでせう」
とおとめ孃は、銅像を見てゐる。
「誰のいたづらだ。西郷さんは痂かきみるやうだぞ」

「紙の玉を吐き付けたものでせう。見つとも無いことをしたものだ」
と甚松も見てゐる。
お芋夫人は小さい聲で
「ねえ、お父さん、去年迄ゐたボンつくの作男に似てゐるね。眼玉ばかりギヨロ〳〵してゐる助藏どんにさ」
とさゝやく。杢老は
「バカ。西郷さんと云や、維新に一等の豪傑だ、伊藤や山縣なんざあ西郷さんの前に出りや小僧ツ子みたいものだちうぞよ。作男と一つにされて堪るもんか。西南戰爭に賊になつて城山の土と消えたけれども、それでも贈正三位陸軍大將だ」
「でも、あの様子は小作人みたいぢやないかね。大將だちうに服も着ねえで、あんな不器用な犬を引つぱつてさ」
とお芋夫人は少しも感心しない。
その中に、おとめは甚松ともう、崖の上の柵の垣のところへ行つて、遠く市街を眺望してゐた。甚松は
「あの背の高いのが淺草の十二階ですよ。そのすぐ右に見えるのが本願寺の屋根だ。觀音様の五重塔の頂邊が少し見えるが、分るかね」
などゝ説明してゐる。

一行は、緣臺にお毛氈を布いた多くの休み茶屋を左右に見つゝ過ぎて、淸水堂の後の彼岸櫻の傍を通つた。蕾みは大分膨らんでゐるが、まだ咲かない。

「井の元の、櫻あぶなし酒の醉ひ、といふ秋色女の俳句があるので秋色櫻といふのです。さあ淸水堂へ登つてみませう」

と茜松が先に立ち堂に登る。樹々の枝の間から不忍の池、辨天堂博覽會の第二會場が見える。平和塔はすぐ眼の前に高く立つてゐる。杢右門夫婦は鰐口を交々力一ぱいたゝいて、堂へ入り、銀貨を投げて手を合はせた。

これは千手觀音を安置した御堂で、東鄕平八郎大將の書いた額が上つてゐる。又明治四年に居合の開祖日比野雷風の献上した繪馬、上野の戰爭を描いた素敵に大きな繪馬などが、懸つてゐる。正面は晝間なのに蠟燭が照らし、片隅には結願の人々からの人形が澤山飾られ、尼だか僧だか分らぬやうな 人間ばなれした顏付の坊主がボンヤリ立つて博覽會の方を見てゐる。

13

この堂を下りて、櫻の間を少し行けば、上野戰爭に死んだ人々の墓碑があり、多勢の人々が參詣してゐた。茜松は

「この先きが、第一會場で、その奥に博物館、動物園、圖書館美術學校音樂學校などがありますが、これから平和塔の下の平和橋を渡つて、池の端の辨天さまへお參りして、花火でも見物しませう」

と云ひ、一行は彼の後に從ひ、平和橋を渡つた、橋の上から見下ろすと、諸國出品の賣店の前は、まるで人間の頭を敷きつめた樣に眞黑に人の頭ばかりで路面は少しも見えない。橋の前には龍宮館がまだ出來上らず、大工がガチ〳〵叩きつけてゐた。池に向つて右手に北海道館が見え、その後ろに怪異な裝飾の滿蒙館がグロテスクな臺灣館と押し並んでゐる。ハイカラな洋服紳士、ハイカラな奥さん、洋服姿の可愛い坊ちやんお孃ちやん、田舍のブルジョアの一家族、田舍のお爺さんお婆さん、やつれた顏の洋服細民和服細民、丁稚女中貴賤上下老若男女ゴチヤクチヤに押し合ひへしあひ行違ふ。別けても人眼を引くのは下谷あたりの藝者が三四人づゝつながつて行く、小意氣な裝に潰し島田の仇姿、銀杏返しのお茶屋の姐さんも伴つて行く。その山を大工さん左官さんが忙し相に別けて行く。荷物を乘せた馬力が無理矢理通る。いやもう大變な混雜だ。

ドンヨリと曇つた空にドカン〳〵引つ切り無しに打ち上げられた花火の中から、鳩が飛び出し羽ばたきしつゝ、民衆の大喝采を後に何れへか飛んで行く。つゞいて上るは流星か星下しか、

黒黄いろい煙は空にさま〳〵の形を描く。

花火の音の合間〳〵にドタ〳〵ドカ〳〵といふ音のするのは水上飛行機だ。池畔へ立つ群集を押し分け、一行前の方へ押出して見ると、飛行機のやうな翼を付けた屋臺船が、池の上を這ひ廻つてゐる。

それも見飽きるまで見て、白煉瓦の足を踏ん跨いだ、小さい頭の支へ相な樓門をくゞれば、正面は辨天さまだ。鰐口が慾張つて二三つ迄も並んでゐるから、三人一度に拜めるわけだ。杢右衛門らは太い綱を握りゴン〳〵〳〵と鰐口を鳴らして、お賽錢をコツン〳〵と投げて拜む。社の裏へ廻ると、右手に飛行協會が陣取り、輕氣球に綱を付けたのが十二三間ばかりの高さに上げてある。その又傍には子供が「取つておくれ」とせがみ相な赤いゴム風船の大きいのがふは〳〵浮いて上つてゐる。杢右衛門

「あれあ、何だな、甚松」

「あれは、輕氣球ですよ」

「私も、さう思つたが、形が變だから、訊いてみたんだ」

「まるで血を吸つた蛭みたいだわね」

とおとめも口を出す。甚松は

「あれ、御覽なさい。伯母さん。あの寶船をさ」

「ほんに、よく出來てゐるねえ。あの船の舳にあるのは何の形だねえ」

「龍頭鷁首と相場がきまつてますから、大方龍の頭の形でせう。いくら辨天さまの前だからと云つて、よくもあんな古くさい飾物をしたものだ。實に眼ざはりですね。大正の聖代だといふに、も少し何とか新らしい工夫があり相なものです。さうかと思ふと、つちや足袋の廣告塔なんか、あんな大きな物を立てさせるなんて、あんまり見物をバカにし利用しすぎてます。だが、伯父さん、何うです。この觀月橋は。渡つてみませうかね。」

と、この石橋を向ふへ渡り、又引返して花火を見てゐた。傍でフロツクコートを着て胸に花の徽章を付けた若い男と、紋付の羽織に袴を着けた田紳態の男と立ち話をしてゐる。

甲　何うだい。先刻の混亂はさ。實に、はや、醜といふものだね。

乙　いや、全く、醜態も醜態。實に呆れて物が言はれない。押すやら踏むやら怒鳴るやら、客も客、委員も委員だ。

甲　案内状を出して人を召待して置き乍ら、渡す可き記念品の準備もなく、呼ぶには呼んだが、こんなに來やしまいと思つて記念品の數を少く作つたといふ辯明だ。こつちは田舍者で正直だから、來いといふからには、わざ〳〵汽車賃を拂ひ忙しい日

を都合して上京したのに、あの始末だ。

乙　實際だ、御馳走もあのやうに禮儀も無けりや順序もなく、まるで餓鬼道から日づけに來たやうなブヤツ勝ち騒ぎでは、咽へも口へも通りやしない。それに、見たまへ、この通り羽織の紐も何も何處かへ失つてしまつた。

甲　私なんかシルクハツトをわざ〳〵新らしく買ひ込んで來て混亂にまぎれて叩き落され、さん〴〵に踏み汚されて、この通りだ。それはかりぢやない。府會議員が博覽會々我物顏に振舞ふ横暴ぶりは何うだ。あれぢやあ出品人が不安に思ふのも、從業員が不平を起すのも無理は無い。我々地方人と違ひ、東京市民はもつと頭が進んでると思つたのに、揃ひも揃つて、あんな醜類ばかり府議員に選擧するたあ、何事だう。全くこのまゝで行けば、こりやあ平和博覽會ぢやなくつて喧嘩博覽會だ。

こんな對話が耳に入つたので、杢右衛門老人も甚松に

杢老　オイ、今の話を聞いたか。府會議員の醜態にも困つたものだな。

甚松　えゝ、府會議員とか醜議員とか私會議員とかいふものの情態が現在のやうであるのは、選擧法が間違つてゐるのと、選擧民が無智蒙昧との結果です。私も、前の大正博覽會の開會式に出席しましたが、その時にも可也呆れました。この上野公園は從來宮內省で管理して來たのですが、それを帝室から東京市へ下さるゝのだ相ですが、その後が今から思ひやられます。大方辨慶橋の埋立事件の二舞をやるとか、汚い家をゴタ〳〵建てるとか、商人から收賄するか、何うせ又疑獄物でせうよ。だが、そんな事を考へるゝ不愉快に成りますから、これから博覽會の中でも見物しやうぢやありませんか。さあ、もう大分時間がおそいが、何の道ざつと見るにしても、もう皆なは歩き切れまい。何地から先に見やうか。モシ〳〵、あなた方は山を御覽に成つたのでせうね。

甲　はあ、一寸、ほんの一寸覗きました。

甚松　何か、特別に面白い物がありましたか。

甲　さうですな、第一會館の這入つたばかりのところに、眞珠の塔が有りましたが、これは大變な物です。塔はすつかり貝細工で、頂の大きな玉をはじめ、四方の風鈴の中の玉など皆眞珠で、軒にもまるで灯燈を吊したやうに眞珠を下げ、地面の眞砂子が又こと〴〵く眞珠です。價が三十二萬が千圓といふのです。

甚松　成程、他にまだ何かお眼に止りましたか。

乙　染織館に諸國の織物がありまして、あすこは婦人がたに面白からうと思ひます。三越出品の人形の意匠は、餘り感心しま

ん。それと向ひ合ひにある白木の人形も面白くありませんが、高島屋出品のダンスをしてる人形は青年達の興を引いてますし、松屋出品の「平和」と題する人形も評判が宜うございます。それから第二會場の朝鮮館臺灣館滿蒙館南洋館などには、可也珍らしい物があります。

甚松　萬國街は何うです。

乙　それはまだ始まつてませんでした。

甚松　美術館なんか、まだ飾付もすんでゐない、全く怠慢な話です。伯父さん。何處から見ませう。

おとめ　染織館から見たいわね。

杢右衛門　いや臺灣館あたりから見たら面白さうだ。

甚松　そいつは困るな。兩方一度には見られない。では、兎も角、順序ですから、第一會場から這入らうぢやありませんか。

漸く評議一決して第一會場の切符賣場へ行つてみると、そこの女が

「もう、時間がありませんから、こゝはしまつてしまひました。向ふへ行らしつてお買ひ下さい」

といふ。向ふの切符賣場へ行くと、そこでも同じことを言つて斷り、奥の賣場へ行けといふ。奥へ行くと、そこでも斷られ、前の賣場で何故買はなかつたといはれる。杢右衛門老人とうとう業を煮やしてしまひ

「えゝ、面倒な、たゞで這入らうといふのぢやあなし、いろんなことを言つて何處でも賣らない。意地の惡い阿魔チョだ」

と憤慨する。甚松は

「伯父さん。もう這入つても時間が無く直ぐ追ひ出されるでせう。だから切符を賣らないのです。皆さんは、これだけしか見ない中に出されては、高いの何のと直き云ふから、それで賣らないのです。それに、まだ品物もよく整つてゐないやうですから、今日は他所を見て、又明日でも出なほして、悠くり見に來るとしませう」

と和めた。そしてそこから直ぐ裏手に在る東照宮へ參詣した。

鳥居を這入つて兩側には春日燈籠が澤山並んでゐた。甚松は夕方の外光にすかし、漸く石に彫刻してある文字を讀んだ。

「はゝあ、何れも當時のお大名が奉納したものだ、本多佐渡守次が小笠原信濃守だ。酒井雅樂守もある。時代は芝居ですな」

「九段の燈籠より形がいゝ」

と杢右衛門も感心して見てゐる。

「五重の塔はいゝわねえ」と叫んだのはおとめ孃だ。甚松も

「谷中の天王寺の五重塔でも、淺草寺の五重塔でも、みんなない

ゝ。堂が赤くて屋根が綠で、それに形に均齊美があるから、私も塔は好きだ。奈良へ行つた時、汽車の窓から法隆寺の塔があんまり好い形に見えるから、わざ〳〵俥を雇つて見に行きました。あすこのは小細工はちつとも無く、遠方から見て典雅で崇高なことでは、他に類が無いでせう。」

東照宮に到るところに細かい彫刻などがしてあり、昔は成金ぶりを示した痕が見えるが、今は柱の赤い塗りも剝げ、翌朝の花魁の顔のやうに淺間しい。賽錢も大隈さんの十分の一ほども上らない。併し、この境內は、何といつても靜かな點が何より好い。

動物園を見やうにも、もう時間がおそかつた。ころ〳〵歸らうといふので、又池の端の賣店の方へ歩みを運んだ。賣店はまだ品物も置かず大工が入つてガチ〳〵叩きつけてゐるところが幾らも有つた。その中に

「あれ〳〵仕懸け花火」

と誰かゞ叫んだ。

觀月橋の方に大きな仕懸け花火が今を盛りと燃えてゐた。丁度、藤棚から數多の花房が垂れてるやうだ。それが水に映じた美しさ。

その中に、池の周圍の高い建物に全部電燈がついた。平和塔の上にも池塔の上にも、その他の廣告燈にも電燈がついた。

おとめ　まあ、綺麗だわねえ。

お芋　まるで野火みるやうだ。

杢老　バカ。野火ぐれえなことか。古人の云つた不夜城たあ、こんなものだんべえ。

その中に、晝間から曇つてゐた空は、ポツ〳〵雨を落して來た。

「いや、降つて來たぞ」

と人々の黑い影は俄に動き出して、大塚行電車の乘場には忽ち人の垣を築くのであつた。

平和博覽會を見る人の爲めに

東京府建築技師　小倉強

六ヶ月も上野の山を見ない人は其變り方の甚だしいのに驚くであらう。實にや現代建築の粋を集めた大小建築が山を越え、池をめぐつて雜列せられたのである。

正門から平和館へ、平和塔を潜つて第二會場へ、あわたゞしき人の群れは驚異と幸福とを感じつゝ進みゆくのである。

更に驚くべき夜の光景。平和塔の塔頂に輝くダイヤモンドは月の光をあざむくべく、不忍池畔の大サーチライトは天空を五彩にいろどるべく、投光器より放射する光の交錯は建築を白堊の如く浮び出づる、春の夜の朧を若きも老いたる人も夜の光を浴びて若葉を潜つて歩みゆくのである。平和よ、平和よ、と口許りとなへる事よりも、先づ見る人に平和の概念を與へる事の必要を感ずるのである。威壓的な正門を造る事をよして、五つのくゞりのある櫛の齒の様な正門を造つた。入口の兩側には惠比壽と大黒の像を配置した。門を潜れば高三十五尺を越えるセーダのおちついた形の樹を通じて平和館　眞正面に見える。地をめぐる花壇には、シネラリヤやチューリップが今を盛りにさいてゐる。白と黒との大理石を築き上げた大噴水は五吋のパイプから雄大な瀧となつて噴出する。更に、池に對立した十本の柱の上にはいたづら盛りな子供等、思ひのまゝの遊び事をやつてゐる彫刻がかゝつてゐる。マリを蹴るもの、鷲を捕へるもの、十人十態のいたづら姿を母なる像が靜かに眺めてゐる。

魚の口より噴く細い水は交叉して漣を起す。

平和館は一般觀覽人に解放した集會場である、唐草模様のある入口の兩側に平和の女像が物しづかに立つてゐる。此の靜かな池のほとりに彳徊去るに忍びない時に突如として起る管絃樂の響きは程近き音樂堂に奏する樂の音である。やゝ傾斜の木の間に建築した、綠の色の屏風型の音樂堂は音樂は音響學からいふても、聽衆の氣の落つく點からいふても、一異彩であらねばならぬ。ベンチに腰をおろして、春の暖い光を浴びて輕い喜悅と感激を感じながら聞とれる人々の群を見る。

靜かな水、草花、子供、婦人更に音樂、之等を綜合した平和館の一帶は第一會場の平和の中心地でなければならぬ。第二會場の中心は外國館前の廣場である。木造のアーチを以て構造した夏蜜柑を四つ割した樣な音樂堂を中心として、白いベンチが配列せられる。桃色の壁の中心から起る爽快な樂の音は、凡ての人の罪惡を腹の中からつかみ出して、生れた許りの本心に立歸らせてゐる。此所の花壇は圓形の噴水池をめぐつて美しく造られてある。彫刻臺には三人の子供が音樂につれてダンスの姿であり、鷲とペリカンの口から出る細い噴水は子供をめがけて水鐵砲である。

平和を紀念する博覽會は、見る人の心に平和を與へる事によつて更に一層の意義をもたらすのである。例へば以上のプリンシプルを以て全會場の配置、設計に腐心したのである。

上野公園は大きく別けて山と池とになる。山は靜寂の趣あるべく、池は濶達の趣あるべく、山は土と空と、池は水と空との間を大小の建築が並び立つてゐる。

一體博覽會といふものに二通の意義がある樣に思はれる。一つは文化の大きな進歩の階段を博覽會によつて概括的に紹介する事、一つは各々專門的、明細に渡つて發達の比較紹介をなす事である。博覽會を見る人々の立場も此二つに分れる。前者は漫然として陳列館をさまよひ歩き、讃美と驚嘆に時を移し、或は餘興場に滿腔の喝采を浴せる人々である。此の人々は博覽會其ものの大きなアトモスフヰヤーの內に大いなる喜びを感ずる人々である。十年も待ちにまつた博覽會の氣分を漫然と味はんとする人々である。此人々のためには、雜多な建築と、陳列品と餘興場と飲食店とを必要とする。色彩にしていへば、靑と赤と黃と紫と綠と、音にして云へば飛行機の爆音と、管絃の音と蓄音器の音と種々雜多な音の交錯である。整調よりも破調であり、沈靜よりも興奮である。池の東邊に並んだ、朝鮮滿州臺灣等の特設館の空にふんぞり返つた屋根の形態と丹靑の極を盡した建築を見る人は一、氣に瞑想は破られて博覽會氣分に沒入する事に氣がつくであらう。

後者は著しき文化の跡を心靜かに比較研究する人々の群れである。諸種の製品の前に立ちもやらず眺めいつてゐる人々である此人達には靜かな建築の形態と色と、統一的な陳列品とを必要とする。アツトラクションを目的とした廣告的陳列よりも、研究的に並べた陳列品に目をそゝぐのである、形の整調、色彩の統一、刺激の無い感覺等を必要とする。正門を潜つて左右の製作、化學工業館の前に佇む人は此感を深くするであらう。我々は此博覽會の計畫の最初に當つて孰れをとるべきであつたか。我々

の理想は前三分に後七分の混合を標準として進んだ。元來馬や鷄まで出品しようとする綜合的博覽會である。概括的に此博覽會は後者の氣分を背負つて立つたのである。專門的文化の博覽會、例へば衞生博覽會或は電氣博覽會といふ如きに於ては系統的陳列や配置をなし得やすいのであるが、綜合的博覽會になるとデパートメントストアの如き、破調、雜然たる光景に逹することは已むを得ない事である。

恐らく今回の綜合的博覽會を完全に完成せんには現在の五倍以上の設備を要する事と思はれる。

試みに上野公園の敷地面積と建築の面積を比較するに、第一會場の四萬五千坪に對して陳列館、興行物、飮食店等建築の面積は約一萬二千坪を數ふる。

第二會場は二萬五千坪（不忍池を除く）に對して建築總面積は七千坪である。敷地と建築坪數との割合は四對一の割合で隨分きりつめた窮屈なものである。豫算に制限があり敷地の狹隘があつて、然も出品申込は陳列能力の幾倍もある事によつて建築配置と出品陳列が窮屈なのは已むを得ないのである。其所に特設館の意義が大に發揮され、成功するものである。北海道、樺太、朝鮮滿　の如き、羊毛館文具館の如き、其特色を發揮して餘りあるのである。陳列館としては第一會場に、製作工業、化學工業、染織工業、建築環系、衞生、美術、水產食料、農業、園藝、教育社會の諸館及牛馬、鳴禽等を陳列する動物館がある。第二會場には、外國品製品、機械動力、航空交通、林業鑛產の諸館がある。特設館の重なるものとしては第一會場に羊毛館文具館文化村等あり、第二會場には、北海道、樺太、滿蒙、朝鮮、臺灣、イギリス、アメリカ、イタリー、スイツツルの諸館及作友館等がある。各分類に從つて特種の建築と陳列をなしてゐる。

こゝで博覽會の大體の計畫と要領を述べ終つたので、こゝに平和博覽會を見る人のため建築を中心として大體の說明を述べ樣とする、淸水觀音に西鄕銅像はなつかしき昔の儘の姿を横へて博覽會の雜鬧を知らぬ顏の靜止である。

博覽會の關門は是邊より始まる。最初左側に聳えたつ高塔は平和塔と名づけ其下は屈曲の道路となり全會場の中心である。第一會場の山と第二會場の池畔とを勾配道路によつて完全に連絡してゐる。橋を渡つてゐた小學生の群れは「平和だから段がないのだ」と囁く。高さ實に百四十尺。基礎には百本の松丸太を打込んだ。アメリカ松の巨木を縱横に組みたて、外部は色漆喰塗とした。上階まで階段を設けて各階に望をほしいまゝにする。

塔頂には、ダイヤモンド型に厚硝子を鐵骨で組立てゝ載せて

ある。工事期間僅かに三ケ月を出でず、工事の進捗はまさに建築界のレコードを示すものである。

平和塔を左に見て先づ一喫する人は正門に至つて始めて親しみを感ずるであらう。左右の切符售場と藤棚と、そして装飾柱に吊されたる美しき紅提灯を見る。正門は感覺的構想を避けて雄大しかも、親しみ易き調子をとつた。門を潜つての廣場、池の左右に建つ製作工業、化學工業館は瀟洒なる形と色を以て先づ觀者の氣分を美化する。平和館は建坪二百坪、二階に廣大なる棧敷を設け一千人を容れる集會場である。クリーム色の布天井に、輕快な感じを與へ、舞臺の周りのプロセニアムの色彩に華かさを感ずる。講演、活動寫眞に多く用ゐられる。

平和館にはいつた人は、ひとりでにおちついた氣持に歸つてゆく。平和館を出でゝ美術館に至る前に道を左に曲げて有名なる文化村を訪れてみなくてはなるまい。是れ改良住宅の實物出品で、建築學會が斡旋して、改良住宅建築業者が競つて出品した十四棟である、或は二階建てに或は平家建に、木の間を縫ふて配列してある。現代の生活に適應すべく新しく考案せられたもので、生活の様式を大體椅子式とし、居間食堂寝室等腰掛生活の様式をとつたもの多く、臺所、便所等從來等閑に附せられた個所に充分なる研究をとげてゐる。更に外觀の輕快と瀟洒とは日常生活の樂しかるべき事を暗示し立去りがたき人の多きを見るであらう。家は生活の本據地で幸福の園であり活動の源泉地でなければならぬ。よき家を持つ人は、よき殼を持つ蝸牛の様なのどけさである。贅澤に走らず利便と快樂とを目的とした文化村の住宅は一軒三十坪以内、建築費も一坪二百圓を越えざる程度のものである。我國、最初の試みとして重大なる意義をもたらす事と思ふのである。更に元に返つて、屏風の如き音樂堂を過ぎ個人の特設館をすぎて行けば美術館と衛生蠶絲館がある。

美術館は一千坪の大建築で、全部頂上採光で、壁は海老茶色の布を張り、沈靜の氣にみちた、美術の鑑賞室である。中央のホールには圓形の池がある上には五彩の燈籠が銀色の環をつらねて吊してある。池には水蓮を浮ぶべく其のまわりには白堊の彫刻をかこんで草花を配置する。靜かな鑑賞から息づいて館外を出る人は、淺草方面を一望に見わたす雌に立つ事が出來る。こゝには飲食店の配列が奇觀を呈してゐる。美術、蠶糸、衛生をみた人は必ず左に曲つて、南洋館萬國街の賑々しき通りを經て動物舍を訪れなければならぬ。其處には住宅にも似たる木造の輕快なる家屋が幾棟となく配列してあるのを見る。

木造下見板にクレオソート塗で屋根は美麗な紙が塗つてある。牛馬豚羊や家禽に至るまで時期を替へて陳列せらるゝので

ある。疲れた體には先づ輕快なる食事を必要とする。美術館前通りに軒を並ぶる飲食店の吊提灯の影に輕い疲れをやすめる事が出來る。やがて水產食料館、農業館をへて南行すれば前回に老大な圓屋根の建築がみえる。是は協讃會の演藝館で五百六十坪を數へ、二階は棧敷を有する大建築である。兩花道付座席はすべて椅子式とし、室内の色彩形狀共によき調和を呈してゐる。收容人員一千人、絕えずプログラムを換へて、此處等一帶興味の中心地である。道を隔てて東京市自治館がある。木造二階建タイル張の半永久的建築であつて、階上を迎賓室にあて、市其他講演展覽會陳列をなす等平和館と對峙して二大集會場である。

第一會場も、もはや終りに近くのであるが、必ず園藝館、教育社會館を見逃してはならない。チューリツプの花が咲き出てた様な園藝館の眞紅の屋根と、綠の壁とは、美しき花園の眞中にたつてゐる。顧みれば種々雜多な觀覽物に長き途を忘れたかの觀がある。六ケ月前の上野公園に遊んだ人は其の變り方の甚だしきに驚くであらう。

第二會場は不忍池を圍んで美しく配列せられてゐる。眼界は濶達である。光景は雜多である。觀月橋の向ふに聳えたつ光の塔は平和塔と對して第二會場の中視界の中樞である。高さ百二十尺、木造の漆喰塗の七階建であつて、老大なる杭打地形を施し平和塔にも比すべき難工事であつた。各階にヴエランダを有し、昇つた人は不忍池の全景に恐らく驚嘆するであらう。塔頂に輝く赤青白の裝飾は石膏に色付したもので春の野に咲きいづる蓮華草にも似てゐる。第二會場は視覺の紛糾である。水上飛行機の爆音や、橋を渡る人々の鬨の聲、又は動力機械館のエンジンの物凄き音である。計畫最初に於ても、此會場には機械動力、林業、鑛產の如き荒つぽいものを配列したものである。池をめぐる柳の芽が吹いてやがて蓮の葉が茂る頃は、水の面を吹く微風にヴエランダーを立ち去り得ない人が多い事であらう。是は池周圍全體に渡つて巾五間の張出し工事を施した。杭打ちの上厚板を敷き上にコンクリートブロックを敷きつめた爲めに雨の日の泥は避け得られるのである。

朝鮮、滿洲等の異國情調に浸る人は其陳列館の巧妙なる陳列を見逃してはならない。美しい女が居たといふ第一印象だけでなしに更に鑑賞眼をみがいて殖民地の產業、文化の發達に目をそゝがなければならない。幾多の同胞が勞苦の跡に得た美しき收穫よ。居ながらにして各殖民地の概況を見るを得るは此上なき機會でなければならない。

音樂堂の周圍は實に第二會場の悅樂境である。半球を二つ割にした金色の音樂堂、內部は桃色の布が張つてあり、介殼狀のヒダの間には電燈がかくされてある。靜けき管絃の響に疲れを休めてゐる幸福な人々を見受ける。

かくして實にも大規模の平和博覽會は美しく展開せられたのである、此建築、此高塔、此陳列に大日本全國は勿論、殖民地、外國に至る迄に文化の粹を上野の一廓に集めた觀がある、準備一ケ年、敷地の測量を行つたのは春まだ淺き去年の三月頃であつた。以來粉碎的努力を以て斯くも完成したのである。努力の跡を思へば眞に感激の淚を禁じ得ないのである。風よ、雨よ、育くまれた此文化の中心を搔き亂す勿れ。見る人々よ、凡ての不幸を去れ、十人の子供の彫像は永遠の春を教へて躍つてゐる。平和館の鐘は今しもなり響くのである。織りなす人の群に幸福を祈つてやまない。(了)



詞華

明治神宮參拜

白鳥省吾

省吾は田舍からのお客のお供をして
これで四度目の明治神宮參拜をした、
こんどのお客は東右衞門爺さんだ、
代々木驛に下りて線路下の霜どけ路を踏み
裏參道から寶物殿通りをゆく。
兩側のおびただしい樹に驚いた東右衞門は、
『この樹は後で植えたのでがすか、前からあつたのでがすか。』ときいた。
省吾は初めてよく見ると、みんな名の知れないいい樹が多ながら靑々と茂つてゐる、
『こんなに揃つてるわけがないから、もちろん後から植えたのでせう』と言ひかけて、枯草のなかに野生らしい一抱

へもある櫸を見つけたので、『もつともあの櫸などは前からあつたのでせう。』と言ひ足した。
『何しろ大したもんだちやね、よくもこう集つたものだ。』と東右衛門は呆れる、
『ほんとうですね、どの一本を庭に植えても素晴らしいもんだ。選りに選つていいものを各地から奉納したのでせう、
そら、木の札が下がつてゐますよ、沖縄縣有志とか廣嶋縣青年團とか……』
『なじうよして運んで來たもんかね、そんなに遠くから。』
路はやがて廣々とした眺望に出た、
魚も住まぬきれいに澄んだ大きい池
それに架る花崗石の二つの橋
なだらかな傾斜をした豹の皮のやうに美しく刈りこすだ芝生、
その遙か向ふの平池に薄赤い甍をして鳳凰のやうに蹲まる寶物殿。
省吾は見なれた景色ながら『いいなあ！』とわざとらしく聲をあげると、東右衛門も
『こう二つ橋のあるのは二重橋を形どつたのですぺ。』とうまいことを言つた。

寶物殿を拜觀して出ると、
二人の若い西洋婦人がまるで野原でも散歩してるやうな悠揚な態度で
高く饒舌りながら池の方に行つた、
この清淨な境の味ひ、傳統の尊さは

やはり日本人でなければ感じ得ぬだらう、
『紅毛人』『南蠻鴃舌』などいふ言葉を用ゐた吾等の祖父時代の心持も想像される、
まして此處では世界主義、無政府修義、コスモポリタン、住宅難、プロレタリア……などいふ文字がこの世にあらうとは思へない。
寶物殿を拜觀して感に堪へた東右衛門は
『なんと申上げていゝか何しろ立派なものだ、馬具までも黄金づくめのあの御鳳輦、それにあの御服裝の立派さと來たら、まるで目がつぶれるやうだ。どんなもんでがすかね、ああいふのを御召しになりたいと天子樣が仰しやるのでがすべか、それとも下々の者が決めて差上げるのでがすべか。』
溫かい午後の日光
廣々とした黄褐の芝生の果ては微かに煙りその眞中に灰白の帶をひいた路を
三々五々遠くゆく人影も美しい、
おゝ明治神宮！
いくら廣くとも廣過ぎはしない
いくら立派でも立派過ぎはしない、
『春さきなどはどんなによかんべ、綺麗でそして眠くなるほど廣々してる。』
盡きぬ喜びにくどくどといふ東右衛門の言葉に交つて、
槇の林のなかでみそさざいがチッチヤ、チッチヤと啼いてゐた。

浄らかな明治神宮本殿の大廣前には

カラコロと賑やかな日本の履物の音がする、會社員、女學生、盲縞の爺さん婆さん、洋裝の子供、新婚の夫婦、獵虎の毛皮の外套をきた商人、水兵、

みな同じ感激に心の浄まる表情をしてゐる、

「何ごとのいましますかは知らねども」

有難さに拜殿の前で伏し拜み

投げる銀錢、銅錢、おひねりは地上の星のやうに散亂する、

おゝ明治神宮、

檜造りの古風な建築、屋根は檜の皮を細かく疊み込んだ氣品、

背景の青空に浮彫される古松の參差たる姿。

去りがての東右衛門を促して鳥居を出た省吾は、

共に再び振り返り神々しい全景を眺めて恍惚とする。

元旦には雪降りにもかゝわらず十萬人の參拜人があつたそうだ、

今も砂利を踏んで新しい參拜人が頻りなく來る。

花崗石をくり抜いた大きい御手洗鉢には滾々と清水が溢れて、

人々は先づ其處で漱ひしたり手を洗つたりする、底にはたくさんの賽錢が沈んでゐる。

やがて省吾と東右衛門は二番目の大鳥居の下に來た。
臺灣の亞里山から持つて來た檜で作つたといふ
驚嘆すべく大きい鳥居の二本の丸柱、
その頂上にはやはり檜を削つた二つの角材がやや弧をなしてどつしりと重つて居り、
眞中に十六菊桐の御紋が金色に光つてゐる、これは全く靑空の下に唯一の晴れやかな國、純粹な日本の美だ。
省吾はこの前もしたやうに鳥居を撫でて見た、
東右衛門も『大きいなあ』と言ひながら仰いだり撫でたりしてゐた。

想華

北國春信

相馬御風

（一）

ずいぶん永く御無沙汰致しました。

例年の通り舊暦の正月六日に相當する日に營む筈にしてゐました良寛和尚の法要も、今年は何かと不慮の出來事が相次いで起りました爲めに、延期に延期を重ねまして、漸くのことで昨日午後三時から例のお寺で營むことが出來ました。只今かうしてあなたへ御無沙汰のおわびかたがた何かと近況をお知らせいたす氣になりましたのも、あなたの御好意にそむいて良寛忌を延期してゐました心苦しさからやうやく免れる事が出來たからです。どうぞ惡からず思召しくださるやうお願いたします。

丁度舊暦の正月六日にあたりました日に電報であなたのお訃をいたゞきましてから、もう三十五日たちました。

降りうづむみ雪のそこのともしびのしづかなるらむけふのまとゐは

昨夕あなたの此のお歌を改めて人々と共にありがたくうれしく拜誦しました際にも話し合つたことですが、眞にしみじみと良寛和尚と云ふ人を偲びますには、どうもさうした深い雪の中での方が最もふさはしいやうに思はれるのです。

　むらきもの心たのしも春の日に鳥のむらがりあそぶを見れば
　霞立つながき春日を子どもらと手毬つきつつ今日もくらしつ
　子どもらと手毬つきつつ此里にあそぶ春日は暮れずともよし
　この宮の森の木下に子供らと手毬つきつつくらしぬるかな
　飯乞ふとわがこしかども春の野に菫摘みつつ時をへにけり
　うたやよまむ手毬やつかむ野にやいでむ心一つを定めかねつも
　路のべに菫つみつつ鉢の子をわが忘るれど取る人はなし
　鉢の子をわが忘るれども人とらずとる人はなしあはれ鉢の子
　良寛僧が今朝のあさ花もて逃ぐるおん姿後の世までのこらむ

かう云つたやうな歌にあらはれた良寛和尚の姿や心を想ひ浮べたり味つたりしますことも、無論私達にはうれしい事ではあります。しかしどちらかと云ふと私達は一方にかうした和尚の生活の一面を知りつつ、更にあなたもよく御存じの國上の山の山腹の草庵裡に孤坐して、ながい〳〵冬の間を深い雪の底にうもれて暮らしてゐた良寛和尚の姿と心とを想ひ味ふことに、一層深く心を惹きつけられるのです。

〇

あしひきの國上の山の冬ごもり、日に日に雪の降るなべに、ゆききの道のあとも絶え、ふるさと人の音もなし、浮

世をここに門さして、飛驒のたくみがうつ繩の、たゞ一すぢの岩清水、そを[illegible]にてあら玉の、ことしの今日もくらしつるかも。

さよふけて岩間の瀧瀬音せぬは高嶺のみ雪ふりつもるらし

○

生涯懶立身。騰々任天眞。嚢中三升米。爐邊一束薪。誰問迷悟跡。何知名利塵。夜雨草庵裏。雙脚等閑伸。

○

玄冬十一月。雨雪正霏々。千山同一色。萬徑人行稀。昔游總作夢。草門深掩扉。終夜燒榾柮。靜讀古人詩。

○

孤峰獨宿夜。雨雪思消然。玄猿響山椒。冷澗閉潺湲。窓前燈火凝。牀頭硯水乾。徹夜耽不寐。吹毫聊成篇。

○

よもすがら草の庵にわれ居れば杉の葉しぬき霰ふるなり

やまかげの眞木の板屋に音はせねど雪のふるよはさむくこそあれ

柴の戸の冬のゆふべの淋しさを浮世の人にいかで語らむ

しらゆきの日ごとに降れば我やどはたづぬる人のあとさへぞなき

跡なくて里にもいでずなりにけりおぼしめしませ山住みの身を

いまよりはつぎて白雪つもるらし道ふみわけて誰かとふべき

どう云ふものですか、私達にはかうした場合の良寛和尚の生活の姿が、最もなつかしく思はれてなりません。隨て私達がたま／＼寄り合うて和尚を話題にして語り合ひますのにも、やはり雪にうもれた冬の夜――わけて榾火を焚きながらの爐邊のまどゐが最もふさはしく思はれるのです。おそらくあなたもさうした私達のまどゐを期待もしてくだされ、何かとその光景や情趣やを御想像くだすつてあのお歌をお送りくだすつたのでありませう。

みんなみのここの濱びを□□□り行き久爾美の禪師を思ふ日のけふに（三字電文不明）

かうした今一首のあなたのお歌も、おそらく私達が最もなつかしく思つてゐるやうな良寛さまのお姿を思ひ浮べられた上の御作だつたのでありませう。

然るにさうしたあなたの御期待や私達自身の切なる望みも、全く思ひがけない大きな出來事の爲めにすつかり裏切られてしまひ、此の北の國にさへもほのかな春の光のさしそめた今どきになつて、漸くのことで法會を營むやうになりましたことは、かへすがへすも遺憾な事におもひます。

（二）

それにしても、昨日のまどゐはかなりしめやかにいきました。午後正三時に始めると云ふ固い約束がしてあつたのでしたが、「田舍時間」は爭はれぬものでして四時半になつて漸く人の顏がそろひました。例によつてあなたのと、百穗さんのと、それから龜田鵬齋のと、此の三幅の良寛像が本尊さまでした。供物も例年の通り「稚子饅頭」を第一として、良寛さまの生前最も好んでゐられたと云ふものを取り集めました。會衆は二十一名、坊さんは二人でした。讀經も手近にあるだけのものを集めて揭げました。お經は此度は特にこちらから賴んで修證義を讀んで貰ひました。修證義は良寛和

尙が生涯を通じて最も熱心に讀まれたと傳へられてゐるお經だからです。しかもその中の「愛語」についての一節は和尙みづからこれを謹寫して特に親しかつた人に與へて座右の銘たらしめたと云ふほどに因緣の深い聖語だからです

「衆生を利益すといふは四枚の般若あり。一には布施、二には愛語、三には利行、四には同事。是れ則ち薩埵の行願なり。其布施といふは貪らざるなり。我物に非ざれども布施を障へざる道理あり。其物の輕きを嫌はず、其功の實なるべきなり。然あれば則ち一句一偈の法をも布施すべし、此生佗生の善根を兆す法も財なるべし、財も法なるべし。ただ彼が報謝を貪らず、自らが力を頒つなり。舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり。治生產業固より布施に非ざることなし。

愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し、顧愛の言語を施すなり。慈念衆生猶如赤子の懷ひを貯へて言語するは愛語なり。德あるは讚むべし、德なきは憐れむべし。怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり。面ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を樂しくす面はずして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘ず愛語よく廻天の力あることを學すべきなり。

利行といふは貴賤の衆生に於きて利益の善巧を廻らすなり。窮龜を見病雀を見しとき彼が報謝を求めず唯ひとへに利行に催ほさるゝなり。愚人謂はくは利他を先とせば自からが利省かれぬべしと。爾には非ざるなり。利行は一法なり、普く自他を利するなり。

同事といふは不違なり。自にも不違なり。他にも不違なり。譬へば人間の如來は人間に同ぜざるが如し。他をして自に同ぜしめて後に自をして他に同ぜしむる道理あるべし。自他は時に隨ふて無窮なり。海の水を辭せざるは同事なり。故に水聚りて海となるなり。」

良寛和尚が特に熱心に讀みつゞけられたと云ふ以上の數節は、わけてその場合の私達の心にしみじみと感じられたのでした。そして更に

「設ひ百歳の日月は聲色の奴婢と馳走すとも其中一日の行持を行取せば一生の百歳を行取するのみに非ず。百歳の他生をも度取すべきなり。此一日の身命は尊ぶべき身命なり。貴ぶべき形骸なり。此行持あらん身心自からも愛すべし。自からも敬ふべし。我等が行持に依りて諸佛の行持見成し、諸佛の大道通達するなり。然あれば則ち一日の行持是れ諸佛の種子なり、諸佛の行持なり。」

と云ふ一節に及んだ時に、私達は直にかの良寛和尚の歌の

いかにしてまことの道にかなひなむ千とせのうちの一日なりとも

と云ふ貴い一首を、今更のやうになつかしくおもひ浮べたのでした。

（三）

讀經は一時間ほどで終りました。獻詠の披講をしたり、寺の方丈が手料理の齋を食べたり、何かと良寛和尚についての話を交へたりして一同が寺を辭したのは、夜の九時過でした。朝からちらついてゐた粉雪がまだなか〳〵止みさうに見えませんでした。一旦すつかり霽れた大地も、いつの間にか又眞白な雪に蔽はれ、昨日あたりは何となくほの紫に春めいて見えた木々の枝や梢も、ふたゝび雪に包まれて闇の底に顫へて居るやうに見えました。久しぶりで不思議な快さを覺えた大地を歩む自分の足音も、今夜はまた聞かれなくなりました。

「また冬に戻るのでせうか。」こんな事を呟やいた者もありました。

「まさかそんな事もありますまいて。何と云つても、もう三月の半ばに近いんですからね。」から誰かゞ應じました。

「梅の花ちるかとばかり見るまでに降れどたまらぬ春の淡雪――何でもかう云つたやうな良寛さまの歌がありましたつけね。」から誰かゞ話をつゞけました。

「でも、今日は良寛さまの法要にはふさはしい日でしたね。あんまり延び〳〵になつて困つたと思つてゐたんですが。」

「まつたくさうでしたね。しかし、それにしても先月の半ば頃のやうなああ云つた深い雪の中で今日のやうな集りが出來たのでしたら、どんなにしみ〴〵した氣持になつたでせうね。」

「それはさうでしたらうが、何しろあの騷ぎでしたからね。」

「しかし、どうです。今年くらゐ雪の早く消えたことは滅多にありませんでしたね。降つたのにも呆れましたが、こんなに早く消えようとも思ひませんでしたね。一丈四五尺もあつた雪が、まる半月とたゝぬうちにすつかり消えちまつたんですからね。」

「さうですて。今から考へて見ると、あの時の事なんか、まるで夢のやうな氣がしますよ。親不知のあの現場なんかでさへ、此頃はもう殆んど雪なんか無いほどでせうからね。」

「その事についてなら、私もつひ二三日前しみ〴〵考へたことがあります。」私もつひ皆の話に釣り込まれてから言葉を挾みました。そしてこんな話をしました。

それはつひ二三日前の事でした。私は手傳ひの人を一人頼んで、雪の爲めにこわされた庭の木柵の修繕や樹木の手入れをしました。五六年の間私みづからの手で丹精こめて小さな苗から育て上げた櫻桃や柿や楓などが、まつたく目もあてられぬほどに無慘ないたみやうをしてゐるのを見まして、私は今更のやうにこんな小さな植物の上にまで及んだ雪の災

害に驚かずにはゐられませんでした。そしてそれと同時に私はかうして育つに處を得なかつた爲めにつひに伸びやかな生を營むことを得ずに終る樹木の運命を、あはれまずにはゐられませんでした。私はその時ふと一茶の『日陰花』と題した文章を思ひ出したりしました。

「高井郡六川郷六かはの里、山の神の森にて栗三つ拾ひ來りて、庭の小隅に埋め置きたりしに　つや〳〵と芽を出して嬉しげなりけるを、東隣にも家に家をつくり足しぬるからに、月日の惠とゞかず、雨露の潤ひうとければ、其年やをら一尺許伸びけり。しかるをこの國のならひ、冬になれば、東より西より南より北より、家の大雪をひた落しに落しこむからに、恰も越の白山一夜に兀と漏出たるに等しく、其山に薪、水を運ぶ道つくるに愛宕山の石壇のぼるが如し。漸く二三月ごろ、おしなべて長閑なるに、隣々の脊戸畠は草木青み渡りて、花もまれ〳〵咲けるに、彼山はいまだ眞白妙に風冴えて殘寒を欺くけしきにて、やや卯月疑さけ虫の歌を圃に張るころ、山鶯の折しり顏に鳴けば　雪の消え口より見るに、哀れなるかな、栗の木末は根際よりほきりと折れてしまひぬ。人ならば直に無常の烟と立昇るべきを、古根よりそろ〳〵青葉吹て、辛うじて一尺ばかり伸びけるを、又前のごとく、家の雪を落し込れて、ほきりと折れ、年々折れ〳〵て、ことし七年の星霜を累ぬれど、花咲き實入るちからもなく、されどこの世の緣つきざればも果ずして、生涯一尺許にて、生きて居るといふばかりなるべし。」

私自身の丹精のしかたにも至らぬ所があつたからとは云ひながら、あまりにあはれな庭木の有様を見まして、私は一茶の哀れんだ此の栗の木と同じ運命を私自らの育てた木の上にも痛感せずには居られませんでした。しかも私はその場合矢張前の月の初旬に此の土地で大雪崩の爲めに、殆んど此の世での出來事とは思はれぬほどのむごたらしい死にやうで死んだ百人もの人達の不幸な運命にさへ想ひ及んで今更のやうにはげしい戰慄を覺えずにはゐられなかつたのです。

そして私は手傳ひの人とその事を話し合つて、暫くは仕事も何も忘れて茫然と庭の隅に立つてゐたほどでした。

けれども、その時でした。私の手傳ひをしてくれてゐた男が、突然こんな事を云つて私を驚かせましたのは。

「旦那さま、それから見ますと草と云ふものは、丈夫なもんですね。あゝして鐵の棒でぶんなぐつても死なゝいやうな頑丈な若い男共が九十人も一かたまりになつて雪崩に押し潰されたり、このやうに木と云ふ木が殘らず積もつた雪に折られたりしてゐるのに、どうですそこいらの草は。路の邊までいつも通り立派に頭をならべとるぢやござりませんか。妙なもんですねえ。」

何と云ふ意味の深い觀察でせう。そして何と云ふ痛切な嘆息でせう。私はこのやうな男から、かうした味のある言葉を聞かうなどとは、全く夢にも思はなかつたのでした。

私がそんな話をしますと　誰かゞ私のうしろからそれに應じて云ひました。

「まつたくですね。何とかかんとか云つて威張つて見たところで、吾々は雪にさへかなはないいくぢなしなんですからね。」

「いかにも」誰かゞ又それに合槌を打ちました。

雪は容易に止みさうにもありませんでした。暗い裏町を一列になつて歩いてゐる私達の外套も帽子も、いつの間にかほの白く見えるやうになりました。それは良寛和尚のことをしみ〴〵想ふにはいかにもふさはしい夜ではありましたが、しかしかうして春が來たかとおもふとは又しても雪が降り、やつと暖かい日ざしを浴びることが出來るやうになつたかとおもふとは　又しても寒い北風が吹きすさび、幾度ゝ幾度も後戻りして容易に春になりきらないわびしさは、毎年のことではありますが、誰しも一様にもどかしく感ずることなのでした。

梓弓春になりなば草の庵をとく訪ひてまし逢ひたきものを

と云ふ良寛和尚の歌も、おそらくかうしたわびしさの底から湧き出た純眞な人懐しさのあらはれだつたのでせう。「春になつたら……」——何かにつけて雪國に住む私達の間に取り交はされる此の「春になつたら……」と云ふ言葉のうちには、まつたく説明しがたいほど複雜なそして急促したおもひが含まれてゐるのです。

それで、兎に角私達が此の數年間冬の間の最も樂しい行事として來ました良寛忌法要を今年もささやかながらかうして營なむことを得たのですから、此上はただもう待たれるのは春です。「春になつたら……春になつたら……」私達はこれからなほ幾度その言葉をお互の間に繰り返すことでありませう。

(四)

私達は此の冬ぐらゐ冬の怖ろしさを感じたことは嘗てありませんでした。正月の殆んど半ばは、一日として止むことなしに雪が降りつゞきました。家々は全く雪の中に埋められてしまひました。家の中は硝子戸のある狹い「明り取り」から射す仄かな雪明りの外は全く晝夜の別なき闇が閉ぢこめてゐました。平地に積つた雪の深さは一丈ほどでしたが、その上へ屋根からおろした雪が積み重なりましたからたまりません。一時は全く穴居同樣の有樣で、外へ出ますには門口から二丈餘もある高い雪の山へのぼらなくてはならぬわけでした。それでも妙なものでして、どんなに深い雪の上でも踏みかため踏みかためされますと、いつしか堅い立派な道がつきました。お互に自分より先に歩いた人の足跡を追うて歩くやうにしてさへ行けば自分も雪の中へ埋まらずに行けますと同時に、それが又いつとなしに堅い立派な道を固めることにもなるのでした。雪道に限つて、自分だけ別の道を歩くと云ふことが何よりの禁物なのです。

先ゆきし人の足あと消えてなき白雪の上をひとりわが行く

時にはかうした壯快な氣持で歩くやうなこともないではありませんでしたが、しかしそれは道筋の明らかにわかつてゐる場合のことでして、多くの場合それはたまらなく心ぼそい、そして危いことでした。

深い雪の上を歩きますには、私達は多くの場合藁の深沓を穿きました。此の藁の深沓を私達は「スンブク」と呼びならはしてゐます。更にそのスンブクにカンジキと云ふ直徑一尺ほどの丸竹の輪に井字形に藁繩を張つたものを結びつけて歩くこともありました。私は毎朝學校へ通ふ子供たちの爲めに、門口から街道までの間の道を踏みに出ました。朝ごとに一尺以上の新らしい雪が昨日つけた道の上に積つてゐました。

わら沓をはきたる足に踏む雪の鳴るおとも今はしたしくぞある

こんな歌を以前よんだこともありましたが、まつたく藁沓を穿いた足で力強く踏みつける度にギユギユと雪の鳴る音は一種快い感じを與へるものです。

やがて形ばかりの道筋が出來ますと子供たちはころげるやうにして吹雪の中を出て行きます。

わがつけし藁沓のあとの細みちを子らはいで行くその雪みちを
ひとしきり吹雪おこりてうづまけば子らはちぢかむ雁木(ガンギ)の下に
子等あまた呼びかはしつゝ雪みちをおくれ先だち學校へゆく
吹きつのるあらしの中をいで行きし子らがちひさき雪の足あと

これも皆舊作ですが、かうしてながい冬の間を毎朝子供たちを學校へと出してやるのは、毎年のことではありながらもいつも新たないとしさを感じないでは居られぬことでした。しかし、深い雪に降りうづめられた生活のわびしさを最も

身にしみ〴〵と感じますのは、何と云つても夜でした。夜になりますと雪がどんなに積つて道が絶えても踏み出る氣がありませんから、隨てそれを踏みわけてまで訪ねて來るほどの人も滅多にはありません。また深い雪の中では、外界の物音は何一つ聞えません。荒れ狂ふ吹雪の音さへきこえないものです。たゞさうした寂然とした沈默の底に、微かに凄い響を立てゝ居るのは、波の音だけです。思へばかうした靜寂な天地の一隅の薄暗い電燈の下の炬燵に親子五人が毎晩のやうに頭を寄せ合つてわびしく暮らして來た冬籠りの期間は隨分とながゝつたやうな氣がいたします。

しかも、今年の冬は何と云ふ慘ましい凶事の多かつた冬だつたでせう。あなたも新聞紙上で御承知のことゝ思ひますが、先月三日の夜親不知で一時に九十人もの人達が雪崩の爲めに慘死しました事件の如きは、就中私達の心に時ならぬ打撃を與へた大事件でした。此の事につきましては私はお話したい澤山の慘ましい話や悲しい話や美しい話を持つて居りますが、あまりに其の當時の光景の印象が慘まし過ぎましたので、當分のうちは私にはとてもそれを口にしたり筆にしたりする氣にはなれないのです。何しろ壁のやうに突立つた山の四百尺も高い山腹から深さ二三丈もあり廣さ一千坪ほどもあつた大雪崩が、二百人近くの人がごちや〳〵とかたまつて乘つてゐた列車の上へ落ちて來て、何もかも滅茶々々に打潰してしまつたのですから、其の結果は申すまでもなく悽慘を極めた有樣だつたのです。しかもそれは霙を含んだ怖ろしい西北風の吹きすさむ眞暗な夜の出來事だつたのです。私は今自分で何事をもお話する氣持になれませんから、私の友人で此の町の町長であるN——氏が死體發掘に行つた時の印象を書いて私に見せてくれた散文詩風の印象記をお目にかけることに致します。

○

油煙の濛々と立つカンテラの淡い光をたよりに

崩雪に埋つた人々を搜してゐる消防手の群。
怖ろしさと無氣味さに心は戰きながらも
セツセとシヤベルを動かして
線路に積んだ十數丈の崩雪を掘る

無言の――引き緊つた其の顏に
いつ來るかも知れぬ崩雪の不安が
漲つてゐる。

シヤベルの尖つた先端は
堅い／＼崩雪に研ぎ澄まされて
掘り返す度に物凄く燦めく。

横ひたきに降る霙は冷く
沖から揚げる疾風に重い法被の裾を吹きまくる。

親不知の夜半
北海の怒濤の磯打つ音のみが彌高い。

あけに染つた崩雪の中から
粉微塵となつた車體と交つて
脚の折れた死體や頭の碎けた死體が
重なり合つて掘り出される。

まだ凝結し切らない血潮が
薄黒く口からも鼻からも流れ出る。

蓑を着た四十男の胸がはだけて
臓腑の露出してゐるのもある。

車體の破片を焚く焦臭いにほひ
明滅する其の火影。

暗いトンネルの中へ搬ばれた數十の死體
凍てついた淺ましいその姿。

縋りついて泣く妻も子も見えで
闇を縫ふ二條の鐵路が寂しく光つてゐる。

かうして堀り出された九十の死體の中には、私の知り合ひのも幾つも幾つもあつたのです。何と云ふむごたらしい慘ましい事だつたでせう。今もひ出しても、私はたまらない戰慄をおぼえるのです。

雪の災害は此の空前の大慘事を第一して、その他にも幾度となく人々の心を愕かしました。此の冬中に雪崩の爲めに慘死をとげた人の數だけでも、一々數へ上げたらば大したものだらうと思ひます。

雪！　雪！　それほど怖ろしい殘虐な災害をすらも醸し出した雪！　まつたく一時はどうなることだらうかと云ふやうな不安に私達が朝夕襲はれてゐた雪！　如何なる人間の力を以てしても鐵道の開通すら一時は全く不可能であつたほどの雪！　それがどうでせう。今ではその消え方の不思議に私達を驚かしてゐるのではありませんか。見渡すかぎりの地面に、一丈も二丈もの深さを以て積つてゐた雪が、家一軒流すほどの洪水にもならずに。いつの間にか――まつたくいつの間にか、すつかり消えてしまつたのです。降り積る時には、唯一人としてそれを氣にかけない者のなかつた雪が消える時には誰一人どうしてそれが無くなつたか解る人がないほどに、いつの間にかこつそりと消えてしまつたのです。

そして久しぶりで露はれた大地には、到るところに若草の柔らかな芽が、いさゝかの傷も受けずにうれしさうな顔をの

ぞかしてゐるのです。無論親不知のあの惨事のあつた場所でも、他の場所と同じやうに憐れな人間の血に染つた雪崩の消えて無くなつた跡に、去年と同じくさま〴〵の若草が柔かな芽を出すでせう。かうしてまた今年も春がやつて來るのです

　さうです。何と云つても春はもうすぐそこに來てゐるのです。そして冬の怖ろしさがひどかつただけそれだけ、人々はいつもの年よりは一層もどかしい思ひでそれを待ちこがれてゐるのです。けれども、いよ〳〵春が來、夏が來ますと、人々はまたいつもの年と同じやうにいつとなしに冬の苦しさや怖ろしさを忘れてしまひます。そしてまた新らたな氣持で次の冬を迎へます。かうして北國に住む人々は永い一生を安んじて同じ土地に生活しつゞけてゐるのです。

「雪の少ない正月は何となくさびしい。」

時にはこんな嘆聲をさへも發する年があるほどに、彼等の多くはむしろ雪に親しみをさへも持つてゐるのです。

　何と云ふ不思議な自然の攝理でせう。

（五）

御無沙汰のおわびのつもりで、何かと埒もないことをなが〳〵と書きつらねて、又しても失禮を重ねたやうな氣がいたします。どうぞおゆるしください。

あなたの方はもうすつかり春でせう。桃や梨の花の咲きますのも、數日のうちでせうと羨やましく思ひます。こちらはまだ早咲の梅さへも蕾の皮を破りません。北日本アルプスの連山をはじめ南の方一帶を立ち圍んでゐる高い山々は申すまでもなく、つひ手近い小山まで依然として深い雪に包まれてゐます。それでも三日に一度ぐらゐ青い空と日の光と

山々の姿とを見ることが出來るやうになりましたゞけでも、ありがたい氣がいたします。海も三月に入つてから時折凪ぐやうになりまして漁師たちは喜んでゐます。凪いだ海の果てに眞白な能登の岬と佐渡の山とが、時折見える日さへあります。雪の水の流れ注ぐ川口には、幾百といふ鷗の群が集つて餌をあさつてゐます。砂濱も日中は陽炎の立ちのぼる事さへあるやうになりました。去年の秋友人に貰つて來ましたチヤボがもう卵を生むやうになりましたのも、此の春の小さな樂しみの一つです。

ではこれで筆を擱かせていたゞきます。近いうちに又何かと申上げます。切に皆様の御健康を祈ります。

（三月七日——十三日）

時論

法學博士　吉野作造

○勞働運動家の議會政治觀

日本勞働總同盟の機關に勞働と云ふ雜誌がある、之を以て日本勞働者全體の傾向を代表せる者と謂はゞ固より異論もあるだらうが、該同盟が日本に於て最も古い歷史を有し且各種の勞働者を包含する最大の勞働組合と觀るのは差支なからう。然らば其機關たる勞働が今日の議會政治を如何に觀るかは決して輕々に看過すべき問題ではない。

勞働の三月號の巻頭に『勝てば官軍』と題する小篇が出てゐる。此中に議會を評して『決して言論の府でもなく、道理の通る所でもなく、腕力暴力の横行する世界である。多數が唯一の武器である。多數さへあれば邪も正、非も理で押通される所である……議會は最早國民の聲を代表する所ではない。民衆輿望を繋ぐ所でもない。金や權力や其他種々の方法で當選を贏ち得た議員さん達が、勝手な熱を吹き氣樂な氣焔を揚げ、乃至議院構内の警察權の及ばざる所に於て武勇を競ふ所である。國家の進運・世界の大勢・社會民心の推移とは全然沒交渉の境地である』と述べて居る。

勞働者を馬鹿にして居る議員連中が、却て勞働者から斯程までに見縊らるゝといふのは、實は單にこれ丈けの問題ではないと思ふ。

尤も右の議論の本旨は、議會政治といふものは本質的に駄目なものだと云ふに在るのか、たゞ目今の議會を駄目だと云ふだけなのか、稍明瞭でない。『國民が議會を信頼せざる結果は果して何うなるであらうか』と憂へて居るところを見れば、前途の改善に多少の囑望を置いて居るらしくも見ゆるが、目前の政弊を醜陋とし成る丈其渦中より超然として居らうといふ態度から察すると、少くとも感情の上では勞働者階級の興味が段々議會政治より遠かつて行きつゝあることは疑ひないと思ふ。

○

今日の議會の不眞面目なる理由を勞働者階級は何處に認めて居るか。鑛山勞働者三月號に於て赤松克麿君は之に一つの答案を與へて居る。この雜誌は全日本鑛夫總聯合會の機關誌である。從て前の勞働者と同じ意味に於て代表的のものと見ていゝだらう。赤松君は之に『議會と普選と勞働者』といふ一文を寄せ、今の議會は『有産階級の遊び場所である』といふ事に不眞面目の原因を置いて居る。有産階級の間には『根本的に相爭ふべき理由が無い。』たゞ『政權が欲しい』のだ。故に眞劍にならないと云ふのである。之もよく勞働者の感情を現はして居る言葉だと僕は思ふ。何となれば、今日の議會は徒らに爭の爲に爭ひ、大事な國利民福の問題は殆ど之を放擲して顧みないといふは疑もなき事實であるからである。

尤も理窟をいへば、有産級階間には本質的に互に爭ふべき題目のない筈のものか、又無産階級の天下になれば同じく下劣な遊戯氣分で公事を弄ぶことが絶對に無くなる筈のものかは、大に疑がある樣にも思ふ。元來僕は餘り勞働者諸君の大集會に出席した經驗は乏しいが、新聞の傳ふる所などに依ると、隨分不眞面目なものも往々あるやうに聞えて居る。不眞面目と云ふことの原因に於ては、もつと深く反省攻察して見る必要があるのではあるまいか。——單に有産階級の事としてゞなく又無産階級の爲の問題としても。併し孰れにしても、有産階級が賤むべき動機の下に公事を弄んで居るの事實は、隱すことは出來ない。

赤松君は所謂議會政治否認論者ではない樣だ。普通選擧についても『普選其物が惡いのではない。普選が喰ひ物にされるから癪に觸る』と說いて居る。結局は議會を勞働者で占領したい、夫には先づ勞働組合を作ることが必要だ、之が立派に出來なければ、普選の利器を與へられても、議會政治を旨く運用することが出來ないと云ふのが君の立場の樣である。細い說明は略されてゐるが、大體の趣旨には僕等にも首肯かれる。

併し赤松君の樣な筋の通つた考方を多數の勞働者も有つて居るかどうか。やゝ疑しい。赤松君の考へてゐる樣に、勞働者をして議會政治の使命に敬意を拂ひつゝ、暫く普選問題を高閣に束ねて純勞働運動に全力を傾倒せしむるを得るためには、今日の議會は餘りに墮落して居ると思ふ。

今日の議員の中、もし自分達が全人口の五パーセントの選擧を受けたことを誇となして無産の勞働階級を眼下に見降す樣なものがあらばそは大なる過である。

○

前に引き合に出した勞働三月號に佐野學君の『政治運動所感』

といふ一文がある。之は議會政治の効能について赤松君とは全然別個の見解を述べて居るものだ。或る意味に於ては議會政治の本質的否認とも云へやうか。佐野君は外に代々の機會に最近頻りに同じ様な意見を公表されて居る。玆に引くのが其中の代表的なものではないが、勞働團體の機關誌に寄せたといふことに一つの意味を有たせて、特に之を引用する。

佐野君の説に依れば、どうせ普通選擧が實行されたとて、中流階級の代表も勞働階級の代表と並んで續々出るだらう。すると矢張り議會制度の鍵を握るものは資本家階級であるから、結局議會の爲し得る最大限度は社會政策であると云ふのである。社會政策以上を期待し得ぬといふ所に、本質的の缺陷を認めんとする議論と謂つてよからう。此説を承認する爲には幾多の前提を先づ許さねばならぬと思ふが、之等の議論は今之を避ける。只少くとも所謂「勞働運動」の窮極の目的といふ觀點から、普通選擧の施行の上に直接多大の期待を繋ぐ可らずといふこと丈は疑ない。かゝる期待をおくのが正しいかどうか、期待通りに運ばないからとて直に普選を駄目と謂つていゝものかどうかも、議論の餘地は大にあるが、とにかく勞働者階級の目前の渇望を醫する力に乏しきことだけは隱すことは出來ぬ。佐野君の説は、この點に於て容易に勞働者階級の首肯する所となるものだらうと思ふ。

現に同誌は他の個處即ち『勞働界時評』を報ずる小欄中、選擧權について『吾はそんなものはどうでもよい、勝手にせよと云ふのが、今の勞働階級の本心である』と白状して居るのである。

○

所が書いて來てゐる中に、大阪の新聞は、關西勞働總同盟とやらで、其首腦者たる賀川、久留兩氏に、普選運動に參加したるの故を以て、除名の決議をせんとして居るとか又は詰問糾彈せんとしてをるとか報じて來た。話に多少の誤傳はあらうが、とにかく、今や勞働階級は、自ら團體として普選運動に參加せざるのみならず、關係者の個人の資格に於てする運動にも、極度の制裁を以て臨まんとしてゐる形勢は明白だ。

議會政治に對する勞働階級の一般の心理は、之を可とするものにも、之を否とする者にも、輕々に看過す可らざる大問題であると思ふ。之に細心の注意を拂つて、さて議會の有樣を觀ると、正しく活火山上に於ける亂舞狂踏の狀態ではないか。

過激社會運動取締法案を難ず

○

過激社會運動取締法案なるものが貴族院に提出されたと聞いた時、僕はその餘りに馬鹿々々しきに啞然として言ふ所を知らなかつた。其後福田博士、牧野博士、末弘博士等の先輩友人が、口に筆に其の不當を難じて政府案をして完膚なからしめたので、僕は此上蛇足を加ふるの必要もなからうと思つて暫く沈默して居た。然るに最近の報道によると、貴族院の委員會は實質上無意味な多少の修正を加へて之を通過したといふ（三月十四日）。而してこゝに到るには、裏面に政府側の非常な運動乃至壓迫もあつたと云ふ噂さへある。考へて見ると、所謂國體の尊嚴を維持し民風の振興を圖るに博徒に頼んだと見られ、又浪花節をさへ力としてゐる政府の事だ、時代錯誤の誹に付ては疾うの昔に免疫して居るのであらうから、この取締法案の如きも、本氣になつて通す積りなのだらう。尤も此稿の世上に出づる頃は何とか鬼の付いて居る事ではあらうが、政府の態度が斯うである以上、僕等とても此儘默つて仕舞ふ譯には往かない。

○

尤も此種の問題を取扱ふには、議論は何處までも公平でなければならない。民間二三の運動に神經を過敏ならしむる政府の嗤ふ可きが如く、政府の態度に過度の昂奮を感じて常規を逸するも亦愼むべきだ。必しも所謂穩健なるを期するの要はないが、公平の態度は飽くまで之を失つてはならない。

そこで、僕は先づ第一に、此度の法案は單純な抽象論として全然無用の規定だとする議論には無條件に與みしないことを一言しておく。無條件といふ意味は、全然必要だとは無論考へて居ないからであり、抽象論として必しも無用の規定でないと云ふのは、今度の法案の所罰せんとする事項は、從來の刑罰法規に夫々規定があつて洩す所がない、新法案は謂はゞ屋上屋を架するものだと云ふ說に服することが出來ないからである。新法案の所罰の目的とせる事項は、先きの原案も修正案も、世評に喧しき通り實に曖昧を極むるものである。而して曖昧を極むるなりに、其中の重なるもの——社會の實務と密接の交渉ある類のものは、旣に刑法其他の刑罰法規に罰せられて居る、新法は更に其所罰の範圍を擴張し、且つ概して特に之を重く罰せんとする所に特色を示して居る。斯かる刑事政策上の必要が儼存するか否かは、大きな問題だが、只新法案が相重複せる無用の規定

ではない、理論上刑罰法規の系統中に於て一個獨立の地位を占め得るものたることだけは、爭ふことは出來まいと思ふ。

○

然らば新法案の所罰せんとする事項とは何か。修正案に依れば次の三項になる。

(一)朝憲ヲ紊亂スル事項
(イ)ノ宣傳又ハ勸誘並ニ其應諾。
(ロ)ヲ實行宣傳又ハ勸誘スル目的ヲ以テスル結社集會又ハ多衆運動。
(二)暴動、暴行、脅迫其他類似ノ不法手段ニ依ル社會ノ根本組織ノ變革ノ宣傳又ハ勸誘。
(三)(一)ノ(イ)及(二)ノ未遂、其豫備其援助並ニ其惡意ノ受諾。

以上のうち常識上情狀の重しと認めらるゝ種類のものは、既に刑法、出版法、新聞紙法又は治安警察法等で所罰せられて居るから、新に本新法案に依て罰せらるゝことになるのは、前述の事項を內容とする研究の發表並に其鼓吹の類である　觀なければならない。之等の事柄は、從來は概して刑罰法規の問題とするの必要なしと認められて居つたのに、今回新に之も所罰事項の中に包含さるゝことになつた譯である。加之從來所罰して居た事項でも、今回は特に之を重く罰することが出來る樣にしたのである。然らば斯くせねばならぬ新なる理由は一體何處にあるのだといふ疑問が起る。

そもそも新刑罰法規の發布又は所罰事項の擴張は、特に愼重なる用意を必要とする。よくよくの理由なき限り、輕々に之を發布すべきものではない、而して一旦之を發布する以上は、不當なる適用に依て無辜の苦痛を人民に與へさらんが爲め、其規定は極めて嚴格に、出來るなら列擧的又は制限的なるを要する。法は徒に罪人を作るを目的とするものではない。盡して漏さゞるよりも、無辜を罪する勿らんことに深き意を用ゐねばならぬのである。此點に於て新法案は、立法技術上無類の惡法であることは、既にそれぞれ專門諸學者の指摘した所である。

右の點は姑く恕するとしても、一體今日斯んな法律を作る實際の必要があるかといふに、僕も亦多くの識者と共に斷乎として其無用を唱へ且つ寧ろ其有害なるべきを叫ばんと欲する者である。

○

本法案發布の理由として山內司法次官の各新聞紙に發表せしめた一文は、既に多くの人の批評に上つた。無用の樣だが之を繰り返して見るとかうである。『近來外國ノ社會主義者ト連絡ヲ執リ、我國體ノ基礎ヲ破壞センコトヲ宣傳スルノ徒漸ク增加

シ。而カモ其ノ運動方法巧妙ニシテ、現行ノ法律ノ缺陷ニ乘ジ、頻リニ運動ヲ爲スガ爲、殊ニ之ヲ取締ルノ方法ニ於テ缺如スルハ勿論、外國ヨリ注入スル資金豐富ナルガ爲、運動漸ク組織的トナリ、此儘放置スルノ危險ナルハ言ヲ俟タナイ』と。議論で行き詰ると之は一個人の意見だ政府を代表するものではないと逃げるのが政府者の常だが、山内君が堂々と官名を冠して發表せしめたものだから、姑く之を政府の提出理由と見做しておく。

所謂危險思想家の巧妙なる運動が現行法律の缺陷に乘ずとの前提にも多少の異議があるが、しばらく之を許すとして、何故之を今日に至り、俄に取締るの必要を認むるに至つたかと云ふに、山内司法次官は明白に、外國の社會主義者と連絡を取り其の豐富なる資金を利用して運動漸次組織的となるからだと斷言して居る。運動の漸次組織的となるの危險は、もと外國との連絡に關係なくしても起り得るけれども、當局者 特に此點に重きを置き、之を主たる理由として此種の例外法を制定せんと欲するのなら、法文中特に外國との關係を有する者のみを所罰するの趣旨を明白に揭ぐべきではないか。牛肉屋から買つた牛肉が怪しいとおどかして、食膳の食べ物一切を取り上げると云ふのは餘り非道いと思ふ。尤も當局者に於て、外國關係の有無如何に拘らず取締りの必要があると云ふのなら、其旨を正面からまた明白に宣明する所がなければならぬ。貴族院に於ける質問應答は無論之に觸れぬではないが、例に依ていゝ加減の蒟蒻問答で、僕等の腑に落ちる底のものではない。

更に一歩を進めて考へると、外國との關係に依て過激運動が組織的になり進みつゝあるといふは、一體本當の事實かといふに、僕は大に之を疑ふのである。之に就ては當局者の判斷の基礎に根本的の誤謬がありはしないかと思ふ。(一)彼等は西洋の所謂世界革命の陰謀(？)を馬鹿に恐ろしく誇大に視て居る。所謂プロレタリアートの社會改造運動が、其の世界的に行はるゝを成功の主たる要件とするは疑を容れぬが、之を今日に實現せんとする狂熱者流は、何處の國にもさう澤山あるものではない。猶太人がどうの、ボルセヴイキイがどうのと、無暗に怖るゝのは自ら聰明と自信との缺如を告白するものである。加之、(二)彼等はまた之と連絡する我國一部の過激派の勢力を、餘りに大きく見過ぎて居る。政府より危險視さるゝ連中のうちには、雜多の種類あり又幾多の階段あり、其間必しも一致せず、中には可なり烈しく反目してゐるもある。之等の事實を彼等は併て精密に省慮研究したことがあるだらうか。中岡艮一が原首相を暗殺したからとて直に全國無數の鐵道從業員を警戒すると云ふ

が如く、偶然の外的目標を狩しうするものを特徴視して、獨り退いておそれおのゝくのは餘り見つともいゝ圖ではない。少くとも僕の聞知する限りに於て、自己の運動に外國の資金を利用した者は、我國に於て其數極めて少く其額も亦大したものではない。加之之等の一派は、例へば勞働運動に從事して居る者の如きに在て中心勢力たり得る者では斷じてなく、寧ろ種々の理由よりして、多くの人々より事を共にするを避けられて居る連中である樣に思ふ。分り易くいへば、勞働運動者仲間中の少數な特殊部落が、やつと外國側の誘惑に陷つたといふ程度のもので、之が基となつて近き將來の日本に一個憂ふべき過激運動が勃發すべしなど觀測するのは、滑稽の至であると言はねばならぬ。

更にも一つ僕の傳聞する所を飾る所なく告白するを許すなら、之等の一派が外國より得たる資金の幾何が、果して實際の宣傳用に使はるゝかといふに、大半は各目の生活費乃至飲食費となりて消え、殘額の半が被服新聞費となり(以上二者を合して運動費といふ)、最後の二三割が宣傳ビラに化けるのだといふことである。元來の額が少いのに、其の極めて僅少なる部分のみ本來の目的に使用され、夫れも宣傳ビラの撒布位では考へて見れば大したものではないではないか。餘り當局[illegible]狼[illegible]さ加減が大げさなので、からかひ半分にやつて見るものもあると觀て居る人もある。

○

尤も外國資金の利用に關係なく、近時人心の傾向險惡に赴き一種の過激思想が漸次組織的運動とならんとすと説くのなら、僕と雖も一考の價なしとはせぬ。單純に斯うした心配はないかと尋ねらるれば、何人もあると答ふるの外はなからう。

しかし、假令どんな心配があるからとて、憂ふべき形勢を將來に誘致する所因を爲すものを、前以て一切處罰すべきかといふに、さういふ譯にはゆくまい。若し之がいゝものなら、下々の風紀を惡くするの種となるからとて、紳士紳商の花柳の遊をも罪せねばならぬ。勞働者の直接行動論を刺激す[illegible]最大の原因として、何を措いても不仕鱈な議員連を一々刑罰に處するの必要があらう。刑罰法令は斯んな遠い道義上の責任までを追究すべきものではない。併しとにかく、一つの思想が基となりて段々實際運動に具體化して行くのだから、何の邊から刑法の制裁を以て臨むべきかのくぎりを附けることは必要だ。之等の論究は專門の法律學者に讓るが、只疑のない點は[illegible]刑法の問題[illegible]なるべき形態にまで進んで來た程のものは、現行の刑罰法規では十分に之を取締つて洩す所がないといふことである。

然らば、今度の法案は[illegible]斯かる事態を生ずることあるべきを豫

想の下に、之が主たる原因を爲すと認むる事項を、豫め處罰せんとするのが主意だと謂はねばならぬ。例へば親の教育がわるい、其結果子供が後來殺人をやるかも知れぬ、故に今の中から親を罰して置けといつた樣なものである。尤も政府は、危險思想の宣傳勸誘等を以て危險なる組織的運動の唯一の又は少くとも最も主要なる原因と觀て居るのかも知れぬ。放火に付ては豫備をも罰する如く、唯一の原因なら之を豫め何とかするといふも一の政策たるを失はぬが、併し本問題に關しては、思想を唯一の原因と觀るの正しきや否やが大に疑しきのみならず、又之を威壓することに依て全く實際の弊害を防ぎ得べしと思ふのは、大なる誤りである。何方へころがつても、政府の立場には秋毫の理窟もない。

○

此種の問題の取扱に威壓手段の極めて反目的的なるは、古來隨分と言ひふるされた事である。之れ程分り切つた事を止められぬとは、大臣や議員が淫樂に耽つたり賄賂を取つたりするのと同じく、人情の弱點といへば夫れまでだが、さりとは餘りに聰明を缺く仕打ではないか。威壓の結果が却つて無用の激昂を來すものだといふ例は、現に最近政府自ら經驗してひそかに耻ぢて居るべき筈だ。例へば最近在野黨の諸氏は、普選問題に大に民衆的威力を示さんとしたのだが、其結果徒らに警察官を過度に昂奮せしめ彼等をして、殆んど普通の理性を喪失するまでに至らしめたことは公知の事實である。僕も現に幹部の地位にある警官が全然理非の判斷を失つたと認むべき二三の暴状を目擊して居る。併し之を以て政府を責めるのは公平でない。況んや警官自身をや。是れ皆人は誰れでも威壓に遇うと反抗するものだといふ活きた證據を示すものに外ならぬ。その反對に温良な民衆とても同じ事、官憲の威壓に接すれば、掌を反すが如く兇暴状態に昂奮する。政府當局にしても少し眞面目に國家の將來を憂慮し、も少し我執の小慾から離れ得るなら、も少し筋の通つた方策に出づる筈だと思ふ。過激社會運動取締法案などいふ時代錯誤は、疾うの昔に陰を潛めた筈だと思ふ。

○

更にも一つ當局者に考へて貰ひたい事は、今日の所謂危險思想は、本質上威壓の出來るものかどうかと云ふ點である。威壓は政策上よろしくない。本質上威壓の出來ぬものを威壓する時に更に一層よろしくない。八時間以上寢ては不可ないと云ふが如きは、强制するよりも强制せずに行はれしむる方法を可とするが、本質上强制し得ぬことでない。が若し全く寢てはいかぬといふことになるとそは不能を人に責むるものと謂はねばなら

ぬ。酒を飲むなといふは、六かしいが全然無理を強いるものとはは云へぬが、女色を絶てといふは或は人性の自然に悖る無理注文とも謂へやうか。之と同じく、昨今の所謂社會運動が、詐欺や賭博と同じく人性の弱點に發する疾患なら、感心していけぬ事もないが、僕等の観る所而して多くの識者の一致する所は そは人類本性の醒覺に發現する自然の要求だと信ぜられて居る。本性に發源するから共共價で道徳的價値ありとは云へぬかも知れぬが、兎に角、當局者の之等の方面に關する見識の極めて淺薄低劣なるは、最早蔽ひ難い事實である。而して之等の連中が、意氣昂然として起つて社會の積弊を救ふと云ふ。藪醫に病人を托するよりも危険な話ではないか。

○

最後に僕の最も憂ふる所は、本法案其もの丶不當なことよりも之が不當の適用に依て益々民心を激昂せんこと是である。朝憲紊亂といひ、社會主義といひ、言葉の意味は極めて不明である。山内司法次官は、無政府主義、共産主義に甚だ學理的ではないが、兎に角、一種の定義を附して居る。併し乍ら、無政府主義、共産主義の名に依て唱へらる丶ものは、あれに限つたのではない。或る用例に從へば、僕も敢て無政府主義者であり、共産主義者であり、社會主義者であり得る。甲の内容を有する者を、只無政府といひ共産といふ名字に拘泥して之を乙の内容を有すと誣ひ、以て徒に人を罪せるの例は、我邦に於て斷じてなしと誰か云ひ切ることが出來るか。加之、今日の如き變轉の時代に於ては、甲の是とする所乙を否とし、理非の判斷は丸で顚倒してゐる。詐欺や泥棒の惡事たるは、天下何人も之を疑はない。思想問題に至つては、普通の判斷人に依て相表裏するが故に、之を裁判の問題としては、須らく專門家の鑑定に待つべき性質のものではないかとさへ考へて居る。然るを實際は裁判官獨自の淺解する頭でどん／＼裁斷されるのだから堪らない。世人が本法案の發布に對して特に激昂するは、寧ろ此點についてゞあらうと思はる丶。

行政執行法とやらに、自殺の恐ある者は警察に檢束して之を保護するといふ規定があるさうだ。普選運動の八釜しくなつた頃、兼々目をつけられて居た或る人は、保護を名として檢束された。警察では君に自殺の恐れがあるといふ。本人之を否定すれば、自分には分らぬものだと抑へつける。又檢束は翌日の日沒に至るを得ずといふ規定がある。翌日の夕方になると、巡査が附いて裏門から表門に廻され、又もや檢束される。一旦放つた奴を、新にまた檢束したといふ理屈に合はすのである。人民保護の規定が、現に斯の如く適用されて居る今日 誰れか濫

社會運動取締法案の遂に一切の自由思索に對する箝口令たらざるなきを保護し得やうぞ。

聞く所に依ると、該案は司法省の發案に係るとか。軍人が軍政を專擅して二重政府の弊あり、司法官亦司法行政を壟斷して、今やモンテスキューに依て道破せられたる三權混同の政弊は、我國に起らんとしつゝある。僕は敢て茲に國民に警告する。我國は軍閥を抑ふると同時に又司法閥の謹愼を要求せねばならぬと。司法官が法律を立案し之が通過を迫るの情弊は、近代立憲國に於ては既に久しい昔話となつたのに、圖らざりき、第二十世紀の今日、事新しく之を今日の我國に復活せんを見んとは。

要するに、本法案は其自身に於て無類の惡法である。而して其の適當に運用せられざるべきを懸念するの理由あるに依て、國民の之を呪詛するは當然だと考へる。既に一部の過激なる連中は、之を以て權力階級の挑戰と爲し、有らゆる手段を以て之に對抗すべきの決意を固めたとか。之等の連中の勢力固より言ふに足らずといはゞ夫れまでなれど、徒らに民間の不平を刺激せしの結果、之等の輩に圖らずも跳梁の機會を與へた事は、到底償ふことは出來ない。

之れでも政府は横車を押し通して國家を不測の深淵に陷れるを辭せないか。

小題小言四則

○

先き頃の新聞に、後藤東京市長の提案が折角の苦心にも拘らず市會でにべもなく排斥されたと云ふ樣な記事があつたと記憶する。男爵の提案が何れ丈け良いものか、市會が何の見る所あつて之を拒んだか、細いことは知らない。又此噂に多少の誤傳なしともかぎらない。が、之等の點はどうでもいゝとして、僕は此噂から圖らずも次の樣な事を連想した。

東京の市會議員が出來滅茶苦茶に市長を窘めるとは兼ねて噂に聞いて居た所だ。歷代の市長みな之が爲に苦んだといふ。そこで少しでも落ち付いて經綸を行はんとせば心ならずも有象無象の御機嫌を取らねばならぬことになる。其結果は重立つた者の我儘增長を寛過し、果ては其間から幾多の腐敗事件をも起すことになる。之ではならぬと革新の斧鉞を取らんとすると、忽ち議員の包圍攻撃を受くる。斯くては到底帝國の首都として恥しからぬ經營の出來やう筈はないとて、特別市制を布かうとか都制にするとかの議論もあるのだが、之も已むを得ない話だとはいへ考へて見れば本邦自治制の汚辱といふべきではなからうか。

併し市制を今の儘にして全然改革の途はないのかと云ふにさうではない。僕等から云はせれば譯もない事なのだ。夫だのに從來此途を取らなかつたのは如何いふ譯かと云ふに面倒だからであつたと思ふ。どうせ政治といふものは面倒な仕事だ。日本の政治家は由來面倒であるべき仕事を楽にやりたがる癖がある。之れが諸々の弊害を生ずる基だ。そんなら其の面倒な方法といふはどんな事かといふに、市民に訴ふる事に外ならぬ。即ち市長が其提案に自信あり市會議員の反對に理由なしと認めなば、之を堂々と市民に訴へて、市民をして議員を牽制せしめればいゝのだ。之を外にして自治制の許に於ける協動の目的を完全に到達する途はない。事は面倒だが成功は確實疑がない。故に僕は譯もない話だといふたのである。

後藤男は市長就任以來頻りに市民に接觸することを力めて居るやうだ。蓋し之を大にして市民に訴ふるは、啻に議員牽制の効あるのみならず、又市民其ものを教育する所以でもある。後藤男の最近の努力は主として後者の目的に出づるものであらうが、も少し露骨に具體的の實際問題に就ても市民の前に意見を公表されてはどうか。假にやり出したら一寸物議を釀すかも知れぬが、兎に角　公然市民に訴へ、市民を覺醒して議員を牽制せしむる外に適當の道はなからうと思ふ。

○

今度の議會の問題に上つた普選案の中に『議員候補者ハ選擧期日前一個月以内ハ戸別訪問ノ方法ニ依リ選擧運動ヲ爲スコトヲ得ズ』といふ一項がある。戸別訪問の陋劣なるは言ふまでもないが、之を法條の禁止事項とするは思はざるの甚しきものである。甲といふ候補者が選擧期間際に町を歩いた。圖らず入懇の友達の家を過ぎり、其人に見付かつて一寸這入れと勸められた。迂つかり反對黨の人の目にとまり告發されたとしたらどうする。斯くて吾々は其煩に堪へぬ事になるだらう。戸別訪問は陋劣である。併し人を私宅に訪ね懇談する事それ自身は、必しも惡事でなく、又之を絕對に禁止するは不當に人の自由を拘束するものである。

戸別訪問の濫用に依て苦む者あるは事實だ。併し羹に懲りて鱠を吹くは識者の慎む所。斯の如きは須らく世上の道德的制裁に委すべきだ。之を法律の禁とする結果は、徒らに犯罪を多くするか、又は法を空文に終らしむることゝならう。否私かに僕の懸念する所は、夫の饗應接待の制裁と同じく所謂官憲の手心によりて之が却て反對黨顚覆の利器に供せられないだらうか。よし然らずとするも、斯の如きは無覚無用有害の規定に相違ないと思ふ。

○

帝國議會における質問應答に於て、政府者に誠意のないことは言ふまでもないが、質問者にも隨分頗珍談なのが尠くない。速記錄を一讀しても判る樣な陣笠の愚問は措いて問はず、有力なる領袖の質問の中にも、一寸人の氣付かぬ事ではあるが、次の樣なのがある。一つの例を以て示さう。氣の毒だから名は出さぬ。大臣級の地位にある人だといふ丈けを明言して置く。此人先き頃同一の質問演說中、前段に於ては國防の事は他國に諮らず獨立に決めべきものだのに、海軍協定の如きに參加して他國の制肘に甘んぜるは如何と質し乍ら、後段に至り、海軍協定を爲せる以上陸軍縮小の協定に進むべきは當然の順序なるに、此方は無結果に了り、軍備縮小の事業を斤始ならしめた責任は如何を叱して居る。之を別々の命題とすれば理窟は通るが、一體此人は軍備縮小の國際的協定を是とするのか否とするのか分らない。陣笠の揚足取りなら之でも差支なからうが、苟くも一方の頭目として立つものなる以上、自分の質問の中にも自ら一貫せる見識を包藏しなくてはなるまいではないか。

斯くして我國議政壇上には、堂々たる領袖の議論の中にも隨分下らぬ無駄が多い。此事は上下兩院を通して異る所はない樣だ。

○

終りに新刊書の二三について一言しやう。

この月僕の机上に展べられた本の山で最も教へらるゝ所の多かつたのは、福田德三博士の『社會政策と階級鬪爭』であつた。內容の紹介をする遑はないが、現代の社會問題につき深い研究を遂げんと志す人に取つては、此書は是非ともなくてならぬ本であらう。又之から此種の問題を究明する人は、此書の所說を中心として議論するを便とすると云ふ點に於て、動す可らざる權威と認るべきであると信ずる。

之に續いて社會改造の經濟的方面の諸問題の研究に志す人に取つて、森本厚吉博士の『生存より生活へ』、森莊三郎博士の『勞働保險研究』、木佐木勝學士の『消費組合運動』も看逃すことは出來ぬ。三氏共に大學の講壇に於て令名の高い人、而して以上の著は夫れ〴〵諸氏の專門に屬するものである。固より其蘊蓄の一端に過ぎないだらうが、我々は十分の信用を置いて安心して其教を聞くことの出來ることは疑ない。

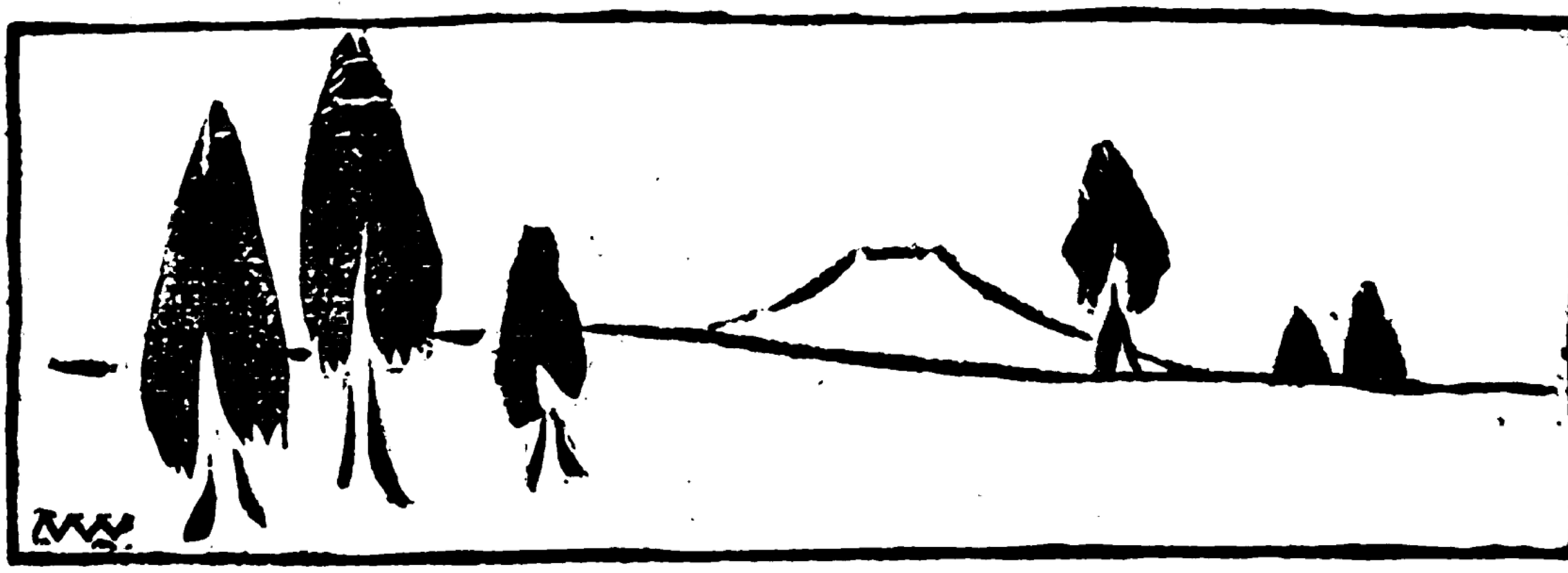
同じく社會改造の理論に關する社會學的歷史的研究の貴重なる世界的文獻にして、信用ある新進學士に依りて翻譯されたものが僕の机上に二つある。一は河村又介學士の譯に成れるアントン・メンガーの『國家社會論』、二は內藤吉之助學士譯のフリ

ードリヒ・エンゲルス著『家族、私有財産及國家の起原』、三は新明正道學士譯のプルードンの『財産とは何ぞや』即是である。原著のことは云ふ必要はあるまい。譯者は皆僕の親友で其學力文才には平素敬意を表して居る所、而かも其飜譯には可なりの苦心を重ねた事をも知つて居るから、是亦十二分の信用を置いて可なるを信ずるものである。兎に角貴重なる名著が、信用するに足る學者の手によりて飜譯せらるゝことは、喜ぶべき現象である。

友人の近著の中でまた一言紹介の辭を呈するを適當と思ふのは法學士佐野學君の『露西亞經濟史研究』と泉哲教授の『國際法概論』とである。前者は學士多年の心血を注いだ力作たるの點に於て學界の尊敬に値すべく、後者は最近國際思想の一新に伴ひ新に起れる又起り得べき諸問題にも普ねく論及し、而かも世界の新機運と歩調を一にするを忘れざる點に於て一種の特色がある。

北一輝氏の『支那革命外史』も亦或る意味に於て有益な研究資料だ。同書の大半は第三革命勃發の當時起稿されたもので、其頃一部の稿本を贈られた僕は、支那革命運動の本體につきて大に啓發せらるゝ所あり、特に著者を訪ふて親しく教を乞ふ所さへあつた。僕が聊ながら支那革命史の研究に志したのに實に此書の刺激に因るものである。此意味に於て本書は僕に取つて深き思ひ出の種である。只著者の結論には大に服し得ざる所があるが、詳評は別の機會に讓るとして、兎に角本書は、支那革命の正史としては餘りに偏僻の觀察に富む樣ではあるが、自ら革命の渦中に投じた人の記錄としては、無上の價値ある參考書たるを一言して置く。著者は元來奇矯の天才、生來の熱情筆端に奔溢して、讀みものとしても興味津々として盡きざるものがある。

中央公論第卅七年秋季大附録



家うちの話

宇野喜代之介

一

『……それは、叔父の、身から出た錆と言へば、それ迄だけれど。私は、あのお祖母さんの心が氣の毒になるのですよ。五十にもなる子のことを、未だにあゝ案じてゐる母の心と云ふものが。……叔父も今となつては、何かと心細いのねえ。郷里から戻りに、無理々々二晩も、泊められたけれど、それは狹い陋い家なのねえ。私は、この人もとうとう此處へ陷ちこんで了つたかと、氣の毒な氣がしました。今の細君と言ふのは何に構はず働く一方の女らしいけれど、あの器量好みな人がと思へば、それも氣の毒の氣がして。……だけれど、叔父にしろ、細君にしろ、こつちへ厄介になりたい氣は、それは充分にあるのよ。……』と、これも五十を幾つか越えた、病身な小柄な寡婦が、總領娘の辰子に話續けてゐる。――彼女は、こんど大學を終へた長男と亡父の郷里を訪ねて、昨日やつと戻つた處なのである。そして、今日もまだ、思ひ出す儘に其土產話のさまざまが絕えないのである。

彼女は、浮浪人だつた亡父の、遠い西にある郷里を、今度初めて訪ねて來た。寡婦になつてから十幾年か多數の家族を扶養する辛苦に疲れて、他に何の裕りもなかつた彼女は、此頃やつとらくな境涯を惠まれ相に見えたのである。長く待つた長男の修學も終つた、これからこそ、長い辛勞も酬ゐられるであらう、其麼氣持が、今度の旅も彼女に果させたのである。――だが、まだ猶、過去から未來へかけた世帶苦勞の絶へぬ彼女の胸には、珍しかつた名所古蹟の記憶のみが充されるわけに行かなかつた。貪慾に滑稽な程、其思出の一つ一つを誇張して、話して見ても、まだ猶、彼女の胸に殘るものは、最後には、世帶苦勞のいぶせい色に染つた思案なのである。――今、この寡婦の口に乘つた、叔父と云ふは亡夫の弟である。兄のあとを追つて、國を出てさんざ兄の厄介にもなつたけれど、遂にまだ轉々と、東京あたり彷徨いてゐる。兄の死後、久しく其遺族の許に寄り付く事もなかつたのを、丁度、寡婦の總領娘――今話相手になつてゐる辰子――の夫婦が、暫らく東京ぐらしをした時分、思ひがけなく、貧乏同志、往復が初まつたのである。そして、わけて辰子の夫の時造が、氣の善い男なので、辰子と叔父の間よりも、時造と叔父の間に、親密が結ばれ相だつたのである。其後、辰子夫婦は、間もなく東京を引揚げて了つたのだけれど、そんな行掛りで、叔父の出入も親しく初まる事になつた。――で、今も、寡婦は其情誼的な氣性で、亡夫の兄弟を世話するのも、甥や姪の一つの義理なのだ、そんな風に考へたりして居るのである、そしてそれは、此度の旅を一緒にして以來尚強くなつた。

が、姪の辰子は、其叔父に就て、かなり高を括つた見極めを懷いてゐる。

『兎も角、郷里へ歸つた所で、どう仕樣もないのですよ。そら、跡をとつてる、叔父の家族と言ふが、ご覽』と寡婦は投げ出されてゐる寫眞に指をやつて、『十、十一、十二、十三人もある。それで、子供が七八人よ。まるで、自家の子供達が育ちざかりだつた頃のやうよ。分家の弟と云ふのは、家族こそ少ないけれど、隨分貧乏だしね。あの狹苦しい山

の中で、何をするにしてが、成立ちはしないさ。だからこそ、家の父さんだつて、早く國を飛び出して了つたのさ。それを、今になつて、又家へ歸らうなんて、――叔父も思へば氣の毒なのさ。』

さう言つて、寡婦は、義弟の姿を哀に思浮べる。そしてまた、彼女の胸には、これと同時に、自分の夫の記憶が蘇り大きく思ひ浮んで來るのであつた。彼女が夫の郷里に滯在したぢゆう、何かにつけて左樣であつた樣に。

『でも、人には人それぞれの器量と言ふがあるものなのだからね。まあ出來るだけは盡してやるがいゝ、他人の爲にも、ね。これが、いつもうちの父さんの遣り方だつた。』

寡婦は、今、こんなことも言ふ。

『家では、會計日の度每に、あんなに忙しいのですから、叔父さん達が來て下されば、都合はいゝのですけれども、目上の人を使ふなんて……』と、辰子は、眼を伏せて、赤兒の寢顔を見戍りながら應へる。

『さう。――だけれど、そこには、私と云ふものがあるからね。』

寡婦は、義姉の威嚴で、かうも言つた。そして、自分が若い嫂だつた頃の、其義弟から受けた不快なあしらひを、遠い遠い夢のやうに思ひ浮べるのである。

『叔父だつても、考へて來てゐるだらうからね。いつまでも、若い時の氣持では、ゐないだらうからね。』

『さうね。それは、さうでせうね。』

辰子は、まだ考深く、低く呟いてゐる。

かうして、二人が、割合風通しのいゝ部屋に、氣樂な浴衣姿で話し合つてゐる時、十八位の、眼の恐ろしく大きい娘が店の土間に入つて來た。――それは、もう可也暑い夏の日であつたけれど、娘は、いかにも身嗜みのいゝ姿で、靜か

に二人の方を眺めて來る。

『ご苦勞さん。——』寡婦が、いゝ機嫌で聲をかける。『若し、歩るくに暑かつたら、夕方にするといゝ。』

娘はそれには殆ど應へないで、袱紗をのせた盆を、寡婦の傍に押して、

『——義造さん處で、お話においで下さいつて。——』と言ふ。

『——と、あと二軒、序でに行つて呉れるか、ね。そのほかは、母さんが自分で行くから。では、お、其處の箪笥の前にある。それを取つて頂戴。それからあの棚に上げといたお札を添へて、』

と、寡婦は、その盆に袱紗をかけたりして、

『一つは、山田屋さん。一つは、秀夫さんところ、——ねえ、辰子。山田屋へは、あれだけでいゝだらうね？』

『澤山でせう。——別に何も。』

『山田屋と、——？』

『秀夫、角の店よ、——』

娘は頷いて土間に下りる。

母の寡婦と、辰子は、その傘をさして靜かに出て行く娘の跡を、二人して見送つてゐる。——だが、その時、姉の辰子に、或捉へ難い疑はしさが、湧いて消えるのであつた。

彼女は今、思ひきり黒い、妹の瞳に、或影の動くのをちらと認めた氣がしたのである。それは、妹が、母に物を問ひかへした時にふと波立つたものなのであるが、——辰子は、その視線を妹から明るい外面に轉ずる時、自然と波の樣に沈んで行く、自分の或警戒がましい氣持を見戍りながらまだ、

『俊子は、あゝ靜かだから恐ろしい。』謂はゞ此麼ことを、胸に囁いてゐるのであつた。

だが、母の寡婦が今懐いてゐる感情は、まるで別なものである。――彼女は、ふと旅先で見た或寺の莊嚴な金の佛像を思浮べてゐたのである、勿論それは、自分の娘と何の係はりのない事でもなしに。彼女は、今又、その時の話を、娘に語りたいと思つたりする。

『おばあさん！』

だが、まだ彼女が其話を初める前に、娘の俊子と殆と入れ違ひに、この聲が、店先から響いて來た。

『おばあさん！』

彼女は、いき〳〵と其聲の方に身を向ける。――そこには、愛らしい幼い者が、曳かれた手を離して、彼女の方へ叫びかけてゐるのであつた。寡婦の皺んだ眼ぶたからも、子供らしい瞳のかゞやきが、それに應へてゐた。

彼女は、彼女の膝を目がけて突き進む、五才程の其兒の力を、辛うじて受けとめて、兩腕の中にしつかり抱きしめる。

『強い、強い。』

跡から、小柄な併し元氣な、親父の時造が座敷に上つて、そこに胡坐をかく。そして、汗を拭ひながら、

『なか〳〵暑いですねえ。』と言つたが、直ぐ又次の考に沈められた樣に。

『おい辰子、桃が冷してあつたらう。』

『母ちやん、桃。』

寡婦の膝からも、同時に叫ぶ。

『おゝ、時夫や。』と寡婦は、頤をしやくる樣に頸を反らせて、膝にあばれる孫を抱き締めながら、『――ねえ、お祖母

さんが、いゝお土産をあげる。——さつき、東京から着いたのよ。——だがね、泣いたり惡戲したりする人にはやらない。時夫はどう？——お祖母さんのゐない跡、泣いたり吼えたりしてゐたつてぢやない？……』

『噓だい、噓だい！』

『いゝえ、きかなくて、きかなくて。』

と、辰子は、鼻翼に汗を浮べて眠入つてる赤兒を下にそつと下ろして、立ち上る。

『噓だい！噓だい！』

『靜かにおし！赤ちやんが起きて了ふ。』

『なんだい、時夫の馬鹿野郎。』

傍から、親父の時造が、ひよいひよいと倅の頭を啄いて、そつぽを向きながら、

『毎日泣いてばかりゐやがつて。』

と調戲ふ。

『なんだい、父ちやんの馬鹿野郎。』

浴びせかける樣に、時夫は罵り返して、寡婦の頸玉に嚙り付く。

『こらつ！』と寡婦は睨む眞似して、『そんな口をきく。——父さんもいけないね。——其麼、馬鹿野郎だなんて、言葉を敎へて。——さあ、時夫や、あの鞄を持つておいで……』

『鞄？』と、時夫が立つて行く

『……こらつ！……よし、よし、……さう言ふ事をきかないんなら、……祖母さんの開けてやるのも待たないで。……』

だが、時夫は部屋の隅で其鞄を、とう〳〵ぶちあけて、がらくたものを投げ出し初める。
『こらつ！……』寡婦も、今度は立上つて行く。そのうちに、時夫は、一寸手に餘る程な大きな、平たいボール箱を取出でる。そして、逃げ樣とする處を、
『この兒が！……』寡婦が、むきになつて抑へ付ける。そして、遮二無二その箱を奪ひ取つて、自分の座席へ戻つて了ふ。
『なんだい、なんだい！』時夫は、べそを掻いて、寡婦の方へいぢれ掛つて行く。
寡婦は默つて、箱を膝に置いて、少時時夫を睨んでゐたが、
『……これから、其麼ことしないか！』と、もう泣き相な時夫に、自分の方から妥協して行く。そして、その箱を開いて見せる。
『辰夫や、お茶！』辰子が、二階の方へさう叫んで、桃の鉢を捧げて來る。
もう、時夫は、箱から取出された、玩具の汽車で夢中になつてゐる。
『父ちやん、父ちやん、』彼は、直ぐにもその機關車のネヂを捲けとせがむのである。
『時夫や、まあちいつとの間、さうしてお置き。さあ、桃をあげる。』
辰子が、かう言ふけれど、諾かうともしない。仕方なしに、叔父の時造が、ネヂを捲いてやる。傍から祖母の寡婦が得意さうに說明を加へながら、自分でもブリツキの梯子形を組合せて、楕圓形の線路につくる。
『さあ。これが線路よ。——この上へ、それを三つ繋いで、——さう、さう、……そおら、走る、走る……』
時夫は、もう一生懸命である。ネヂが弛んで、汽車が怠け出すと、幾度でも、それを捲かせる。汽車は、やけの樣に

ガチャガチャ性急に尻あがりの調子で、一散に走るだけ走つては脫線して了ふ。時夫には、それが面白いのである。親父の時造は、とうとうそれに飽きて棒はなくなつて了ふ、すると今度は、祖母の寡婦が代つて、捲き手に傭はれる。

『赤ちやんが起きて了ふ。』

母の辰子は、かう故障を言つたけれど、つひには斷念して了はなければならない。そして、あきらめた樣に、自分も其滑稽な空車の回轉を眺めてゐる。

『ふうむ。』

いつのまにか、其處へ、瘠身な十五程の少年が立つて、この遊びを見戌つてゐたが、馬鹿げたと言ふやうに鼻息を漏らして、其處を去らうとした。

『辰夫や、桃。』

辰子が、仰ぐやうにして、彼を呼び止めた。そして鉢の中から、桃を取つて差し出す。彼は、それを受取ると、又立ち去らうとする。

『さうさう、辰夫や。』

今度は、寡婦が彼を呼び止めて、

『兄さんがお前に本を吳れた——その鞄の中にあるよ。』

辰夫は振りかへつて、鞄の處へ立ち寄りながら、

『兄さんは、何時來るかね？』と訊ねる。

『多分、明後日。』

『ふうむ。』

さう言つて、彼は又二階へ上つて了ふ。

『さあ、さあ。――もうお廢し、また後で、ね。』寡婦も、とうとう、自分の土產物に恐れを感じだしたやうに、時夫をすかしいて玩具を收はせようとする。だが、時夫は、まだ諾かうとしない。こんどは、その大きな箱をかゝへて、ひとり店先の方へ離れて行つて、自分からそれを動かさうとするらしい。

『仕樣のない奴。』

三人の大人は、呆れた樣に、唯笑つて、鉢の桃に手を出す。

『ねえ、あなた、』と辰子は、思ひ出したやうに、『美佐子、もう戾りさうなものですねえ。』

『うむ。』

時造は、桃を噛りながら應へる。

『礦山へ行くだけの用だつたの？』寡婦が口を挿む。

『えゝ。』

『日盛りなので、何處かに憩んでゐるのだらう。』

『さうねえ。』

『何かね、會社の所長さんが轉任になるつて話、それは本統なの？』

『噂だけらしいですね。』

『まあ一二年は、大抵動かない話でしたのねえ。』斯う言ひながら、辰子は、時造の同意を求めようとする。

『うむ。』

『大抵大丈夫でせう。』

『さう。さうならば、結構だけどもねえ。』

『あの人が變つた處で、此方で正當にやつてさへすれば、心配ない話なんですけれど。』時造が負け惜みの樣に言ふ

『でも。上の人が變ると、何かと又變つて來るものさ。』

かうして、三人の大人の話は、また世帶のことに移つて行く。

やがて、遊び飽きた時夫を肩車に乘せて時造は又どこかへ出かける。土産ものゝ配りを終へて、俊子が戻つて來る。

そのあとから、彼女に一つか二つ上の年頃の娘が、忙しく、その肥つた身を汗にまみらせて、傘さしかけて外から、戻つて來た。——娘は、座敷へ上るなり、立つた儘で、額から顎から吹き湧く汗を、小さいハンケチで拭きながら、拭きあへないで、

『暑い、暑い、』と呟いてゐる。

『まあ、あの汗。』

『美佐子は、それに、あんまりせか〳〵と歩くからよ。』

『だつて。』と、もう、娘の頰や瞼は、感情の變化を示して來る。

『さあ、いゝから、着物を脫いで、身體を拭いておいで。』

『あゝ暑い暑い。』と娘は、無躾けに呟きながら勝手へ通る。そして、水波むひしやくの音が、がたごとと鳴る。

『息がつまつて了ひ相だつた！』

夕方、もう母の寡婦は、ふだんの丹精者らしい身仕度で、家の内外の用達に忙しくしてゐる。そして、勝手場で夕飯の仕度にかゝつてる娘達に指圖を與へたり、商賣のことで時造と言ひ爭つたり、近所の人と立ちどまつては、今度の旅の話、近く戻る倅の恭助の話、——いかにも、饒舌な、がさつな、男氣性の寡婦に歸つてゐるのであつた。だが、夜となれば、又、凉み臺に集まる近隣の女達に圍まれて、まだ胸に新しい旅の話を持ち出して、話の中心となつてゐる。孫の時夫を膝に抱きながら、彼女は流石に胸廣い氣持なのである。そしてまだ拔けきらぬ旅の疲れや氣疲れから早くも眠氣に捉はれて、話しながらも遂とろ〳〵として了ふ。その間も、併し、娘達に笑はれながら、彼女は、何か愉快な幸福な思にあやされてゐる。

二

數日後。それは、すつかり夏になつた、光のまぶしい晝であつた。友人の久田の家を出た、井口恭助は、其友人と或池の畔の並木道を歩いてゐた。

背の高い步調の靜かな久田の傍に、恭助はいつも頭を垂れ勝ちに、時をり土を蹴るやうな足どりて、久田に足並を揃へてゐる。

『では、どうしても、教師になるのは、嫌なのかね？』久田が靜かに訊く。

『自信はなし、好んでもゐないんだからね。——と云つて、外に道があるのでもないが。强つて、好まない道を採つた處で、何になるとも思ふのだ。だからね、』と言ひかけて、恭助は分りきつたこと！と云ふやうに、輕く『仕方ないさ。——當分、あてのない身體を、自家に横たへるんだね。幸せなことに、そして又氣の毒なことなんだけれど、阿母や兄

貴が、まあ暫らくは休養してそれから何でもやるがいゝと言つて呉れるんだから——』

彼は力のない鼻息と一緒に語を終つた。

久田は、どこまでか靜かないたはるやうな調子で、——

『さう、——暫らく家にゐられるのも、善いか分らないね。——出來るならば、さうする事が、君にとつて一番いゝとも、僕は考へてゐたのだがね。——勿論、さう長くと云ふわけではないに、ね。』

と、少時口を噤んで、『——君が、家にゐられる事で、君の母さんや妹さん達に、又善い助けの出來る事もあるだらうし………それに又、そのうち、君が善い作を仕上げたり、世間に出る氣持になれたりすれば、此上ない事なのだからね。』

恭助は、それに唯輕い頷きを與へる丈けであつた。二人は暫らく口を噤んで歩く。

『あゝいゝ空だ。』

久田は、仰いでから呟く。

『いゝ風が來る。』

彼は、帽子をとつて、それを胸先にあてゝ樣にして、

『どつか、憩まうか？』

默りこんでる恭助が、それに頷きを與へる。そして、二人は、木蔭の石を選んで其處に腰を下ろした。

『君の方の海は、美しくなつただらうな。』

久田は暫らくすると、池を眺めながら、言ふ。そして又獨語のやうに、『あの夕方ころの美しさは今も忘れないね。』

とつけ加へる。

彼は、脱つた帽子の縁を弄りながら、其頃の記憶を思浮べてゐた。そして又、其頃の自分を今の自分に思比べても見た。——それからもう數年になる。今の彼には、生活の上にも仕事の上にも、相當自信がある、欺かれぬ幸福がある。だが、數年前の慘めな氣持！それが、自分を此孤獨で顧みられぬ恭助にも親しませ、彼の郷里までも訪ねさせたのであつた。——久田は、そんな事を思ひながら、屈託さうな恭助の首筋を見凝めて、いつか苛立たしい氣持にもなる。だがその苛立たしさに、自分を委せきるには、情誼と反省が餘りに多く彼のものであつた。そして彼の幸福も苛立たしさの氣持も、淡い悲みに曇らされて行くのである。

彼は、此ひどく貧乏な境涯を通して來た友人が、今自立出來る時になりながら、自ら進んで社會的な勞役に服さうとししないことに、或不滿を感じなくはなかつた。だが、此友人の殆と世間向きでない氣質に就ても、知つてゐた、又、「何の爲に」を考へぬ義務への獻身が最上の道德でないことも。尙、彼自ら、道を歩む上で、此友人よりか幾分便宜な富有な境涯に置かれてゐるのを思ふと、相手に要求するよりも、出來るだけ親切な思遣りを廻らしてやる事が、自分の氣に叶ふ事なのであつた。大抵の場合、溫厚な彼は、さうした自分の氣持を見失はなかつた。それだけに、彼は苦しい反省や苛立たしさや悲みの中に取籠められることが多いのであるけれど。——今日も、石のやうに動かぬ此友人を前にして彼は幾度か、そおつと吐息したい氣持なのであつた。何故自分の幸福が、彼の爲にかうまで曇らされねばならないのだらうか？彼は此麼事も、考へて見る。

『だが、要するに口實なのさ。』突然と、恭助が、呟く。

久田はちよつと呑み込めないで、相手を見戍つた。

『口實は幾つかあるさ。だが、結局、口實に過ぎないんさ。――自分が、自ら進まないのは進めないからで、不明と無力の證左に過ぎない、進んで苦まうとしないのは、優柔不斷――それ丈けの話さ。』

恭助は、自ら嗤ふ樣に言ふ。久田は、それに應へなかつた。だが、

『また、最善を欲ふからさ。』と、靜かに口を挿む。

『欲ふ事が强ければ、進む筈よ。』

『が、それは實行家の事さ。尠くとも、迷ひの狀態が、放されてゐる筈だ。わけても、吾々にあつては、ね。――本統に迷ふ事が出來るならば！』

『ふむ。――兎も角、慘めだね。』

恭助は呟いて、憩み石から立上る。

『本統に迷ふ事が出來るならば！さう思ふよ、僕は。』

久田は、遠くへ視線を投げて言ふ。その、細い澄んだ眼には、慧い理知的な取捌きが、瞬くのであつた。二人は又少時默りこむ。

久田は眼を伏せて、帶の間の時計を見た。

『出かけるか？』恭助が反射的に訊ねる。

『さう。』

久田は、眼で應へて立上る。そして、浴衣姿を揃へて、並木の蔭を歩き出した。

『さう、さう、』

久田が、輕く微笑みながら言ふ、

『此間、山下から手紙が來てね。いつもの調子の。——彼の町でね、それが面白い話さ、——彼の町で、彼の爲に、卒業の祝賀を兼ねた歡迎會が開かれたのだつて、さ。花火が揚がつたり、有志の歡迎の演説があつたり、記念品が贈呈されたり、それから、夫子自身の講演もあつた話だぜ。——』

『ほう、——うまく、やれたか知ら？』

『其處のところは、書いてなかつた。』

二人ともに、一緒に高く笑つた。あの昂奮し易い、正直者の山下が、どんな事をやつたか——其想像が、二人を刺戟したのである。

『君の町ではどうかね？』

久田が、同じ輕い調子で言ふ。

『さあ。……』

恭助は、面白くもない調子で呟く。

二人は、やがて、ひどく人の込みあふ或山下の電車待ち場に入つて行く。

と、久田が、更まつた調子で、

『では、君も、秋の頃までには、ちよつとなり、出て來るだらう？』

『あゝ。』

『其頃は、山下も東京だね。』

『君は、——夏ぢゆう？』

『一月程、あつちへ行くか分らない。』

『さう。』

『……では、——』

久田が慌しく、電車の方に、走り出して行く。恭助は、電車の中からもう一度帽子を上げる久田に會釋を返して、暫らく其處を動かなかつた。

全く獨りになると、彼は、人ごみを避けて街下の方へ歩み出した。そして、何か思ひついた樣に、左に折れて、樹木の多い坂路を登る。——樹木を濕つた土を吹き通す風が、瞬間彼の氣持を爽やかにした。彼は何事も考へないやうであつた、そして氣づいた時、歩みを止めてゐた。

賢い、幸せな奴だな！と、久田に就て、そんな事を思つてゐたのである。——度み深く躊躇しながら、戀人の送る微笑と幸福を享けてゐる。——恭助は、自分が、執拗く、其幸福な友人の姿を追ひつめてゐるのに、先刻から氣づいてゐた。彼は、久田の家を一緒に出るとから、あの溫厚な友人を自分の沈欝な氣持で、窮め通して來たのを、思ひ返したのである。そして、今更の樣に、羞恥に捉はれだした。——朗らかにありたい！この、いつもの叫びが、彼の胸に突き上げて來る。——自分の若さはどこへ飛んで去つたのだ、自分の性ほどに虐げられたものがあるだらうか。

恭助は、いつも來て蹲まる大樹の根元に腰をかけて、塵煙に埃れた都會の上を見下ろしながら、自分の考へに捉はれてゐた。

彼は自分の胸に、滿されるものゝあるのに氣付いて久しかつた、それでゐて、それをどう滿すべきか、無知と無氣力

に支配される事も既に長いのであつた。——貧乏な學生として、幾年の間、自分を虐げながら、何を求めて來たのであらう。……そして、いつも手にあるものは、薄汚い部屋、悔、貧乏、偏僻な郊外、圖書館、牧場、榮えない日々、……今修學の時が終つて了つても、有るものは唯、恐れ、——無氣力、不決斷、……その外の何であらう。——「實に遅つくさい！」から嘲笑つた、友人の山下の言葉が、適切に自分の背に記されてゐる。……

國へ歸つて歡迎の花火が揚つたり祝賀の宴を張られたりしてゐる、山下の盲目ながら生き生きとした生活しぶり。——戀愛に陷ちた、そして戀愛を失つた。耽溺の生活に狎つた、そしてそれを離脱した。惡疾に取憑かれた、そして第二の一層惡い惡疾を得るまで自棄的な歡樂の毎日が續けられた。少女を愛した、そして又忘却した。父と爭つて絶縁した、そして又一層の悲歎と借債とで其父を悩ました。さうした、馬鹿げた併し生き生きとした生活が、彼には、寧ろ羨まもれするのである。——それに比べて、うぢ／＼地を滑るやうな、自分の存在は、何んであるだらう？……

靜かな夕方が、街上の空にからりと擴がる頃、恭助は森の臺地を下りて、叔父の家の方に歩いてゐた。

そこには、家裏や家脇に、限りなく蚊やバチルスの湧く下水や沼地の露出してゐる、或汚ない街の裏手であつた。踏み損ねると泥をはぢき相な溝板を踏み、窮屈な家と家の間を拔けて、猫の額程な庭を控へた棟割長屋の前に出る。恭助が、そこに自分を見出した時、彼の叔父は、蚊遣り火を焚く七輪を庭に持ち出したりして、娘の戻りを待ち草疲れてゐる處であつた。

『——叔母は今、何か買物に河岸へ出かけた處だ。——』叔父は、團扇を下げた儘家へ入る。そして、椽先に水を滿したバケツを指して、

『身體を拭くといゝ。』と言ふ。

恭助は言はれる儘に水を使ふと、叔父の座つた火鉢の脇に腰を下ろす。——そこの、小さい茶簞笥の上に、嘗て叔父の養女だつた、恭助の姉の寫眞が、飾られてある、その寫眞の中には、叔父の幾人目かの妻が一緒に撮られてゐる、今はともに故人なのであるが。恭助も叔父も、ちよつと其寫眞に眼をやつた。

『どうしても、今夜立つかな？』

叔父が、恭助を顧みて訊ねる。

『えゝ。』

『さうか。もう二三日どうだな。卒業式とか云ふに間に合はせては？』

『同じことです。』

『ふうむ。ちつとも、遠慮することは要らないでの。』

『えゝ。でも、同じことですから。』

『ふうむ。』

叔父は、人の善い好意的な氣持に溢れながら、それ以上慫めることが出來ない。

茶簞笥の中に、何かを搜りながら、

『もう叔母が戻り相なものだが。』

と呟いたりする。

叔母が、やがて戻つて來た。——何か買物を新聞紙に包んで、これを抱へた儘。彼女は、家へ入りなり、街での巷談や、自分の買物に就ての憤慨を喋々喋り立てる。

恭助は、その思ひきり醜い平顔を、仕方なしに見戍つてゐた。

叔母は、さう喋舌りながらがたくさ夕の仕度に掛つたけれど、猶喋舌りながら、話は、いつか恭助に對する露骨な追従になつたりして、

『……うちの叔父さんは、そりや什麽に恭さんを賴つてゐる事か。いつも、あんたの話ばつかり、』と其麽ことを言ふ。

『だけども、私だちのやうなものが、恭さん處へ行つて、よくお世話になれるか知ら？——私は、叔父さんによくさう言ふのですよ、もう齡が齡なんだから、あんたも……つて、』

と、共しれ〳〵喋舌り散らす叔母を、叔父は唯、にや〳〵人の善い眼で笑つて、鞣の頭を輕く搖振つてゐる。

『恭助、こんな物は、どうかな？』

その内に、叔父は、思ひ出して立ち上つて、商賣用の鞄を取卸す。

『古緞子の端片で、わしが、特別につくらせたものだから。』

さう云つて、袋物や小間物の品から、小さい財布らしいのを取出して、

『なか〳〵善いつくりだがなあ。』

『さう。』

恭助は、手に取らされたのを、興もなげにひねつて見る。

『善かつたら、持つてくと善い。』

『さあ。——』

『……貰つてらつしやいよ。これから、恭さんなど、又要る時がありますわ……』

叔母が、傍から口を入れる。

『うむ。善かつたら持つてくと善い。』

だが、恭助は、それを叔父の手に戻しながら、妙な事を考へてゐるのであつた。——それは、火鉢の前で袋物を光線に翳したりしてゐる叔父の額の兩角に、むつくり膨れ上る靜脈と、彼の後頭の下が丘の様に一段高くなつてる、それを見戌りながら、丁度それと同じものが自分の形相にもある事を、思出したからなのである。彼は、それが叔父と自分との性格的相似を示すものゝやうな、妙な想像に捉へられだしたのである。で、彼はこゝに長く座りこむのが厭な氣がし出して來る。

だが、少許の酒に醉ひだすと、叔父の話は長かつた。——彼は、ぐづ〲郷里の親類どもの不實を罵つたりして、秋までにはどうしても一儲けして、自分は恭助の家の近所へ引移ると云ふやうな事を、繰返し〲言つてる。

『どうぞ、時造や辰子にも宜しく云つて呉れ。嫂さんも親切に言つて呉れたが、——わしも、いつまで若いつもりでゐやせん。……』

いつか彼は、叔母の前の見えも忘れて、醉ひ泣きを初めたりする。

『登代子にも、今度わしが會へば、寄つてよく言ひきかせて來る。——どんな事があつたとて、親姉妹を向ふにするつて云ふのは、いゝものぢやない。後悔する日が屹度來る……』此度は、叔父は又此話を持ち出す。

登代子と云ふのは、恭助の直ぐの妹なのであつた、彼の家が窮迫した時犠牲的な結婚を強ゐられて、今は子を一人抱へたまゝ或町へ逃げ去つてゐる。——叔父は其妹の事を思出して、今、自分の大切な寶かのやうに言ひ立てる。恭助は埃つぽい薄暗い部屋の中に、この落魄した叔父を見まもりながら、これらの人々が、——その中に自分も立ち雜つて、

——一家に寄り集まる日の事を、恐れながら、考へてゐるのであつた。

やがて汽車の時間が來ると、叔父と叔母は一騒ぎして、恭助を停車場まで見送ると云ふ。どう辭退しても、もう醉ひしれてる叔父は、それを諾かうとしない。星一つ見えない夕立空となつた夜を、彼はよろめきながら甥の片身に寄りかゝつて外に出る。

彼は、今自分がどんなに嬉しく醉つてゐるかと云ふ事や、此頃は此麼場合でない以上決して此麼に醉つたりする事はないと云ふ事や、叔母はあれでがさつな奴だけれど働きものだからと云ふ事を、途々甘へる様に、若い甥に語りつゞけて行く。そしては、屹度秋までには、一儲けして、恭助の家の方に行くと繰返すのである。——恭助は叔父を扶けるやうにして歩きながら、靜かに唯頭を垂れてゐた。

三

恭助がこんどの汽車で戻る。その期待が、家ぢゆうを揺り動かしてゐた。——

『疲れたらうね。』

『暑かつたらうね。』

『美佐子、寸時行つて、氷を言つておいで。』

『幾つ？——さう、さう。』

妹弟だちに出迎へられた恭助は、輕く微笑みながら、席に坐る。

『俊子、兄さんに手拭を濡らしてお上げ。』

彼は、それを止めようとしたが、その儘、視線を他に轉じて了つた。停車場まで出迎へた、弟の辰夫が、汗みづくの肌を拔いていきなり襯衣で脇や背を拭きまわしてゐる。其場景が、彼を知らず微笑ましめた。その彼のほゝゑみを見とめて、母の寡婦が又、

『まあ、辰夫は、どうだらう！』と自分も微笑みとける。

『東京は何時立ちました？』

と、義兄の時造が、問ひかける。

『昨日の晩。』

『M――へは寄らなかつた？』

『えゝ、汽車を乘りついだ丈け。――吉本の處へ寄るつもりでしたけども、ね、――』

『さう。』

『東京は暑いでせうね。』

『えゝ。――さうさう。』と思ひ出したやうに、恭助は、『叔父さんが、皆さんに宜しくつて。何か土産物を呉れたですよ、其籠にある。』

『だめ、だめ！時夫が駄目ですよう！』

美佐子が、そこへ表てから走込んで來る。跡から、甥の時夫が、腕を上げて彼女に追ひ懸る、だが彼の胸は、恭助に對する羞恥と好奇心とで、躍つてゐるのであつた。

『時夫！』寡婦が鋭く叱つりける。

美佐子は片身で甥の亂打を受止めながら座敷に上つて、どさりと膝を揃える。

『本統に——美佐は……』

『時夫、お辭儀！』

『もう忘れて了つた？』

『三つの時でしたね。』

恭助は、此座の空氣に揺られるやうな氣持で、時夫を見ながら訊ねる。

『おや！——愼坊主が……』寡婦が店先を指さす。そこには、時夫に一つか二つ上の子が立つてゐるのだ。

『近所の小供が皆お前を待つてゐるんですよ。いつかの夏、毎日海へ連れてつたつてね。』

『さう。——お上り！』恭助は、興もなげに、さう聲をかける。聲をかけられると、子供はいきなり踵を返して自家へ走出して了ふ。

寡婦も辰子も時造も皆笑ひこける。

『俊子、お茶を淹れてゐるの？』

『はい。』俊子が盆を捧げて出て來る。

『美佐子、その籠の中に菓子があるよ。』

『時夫！さう父さんに絡まり付かないで、此處へ來て、ちやんとお座りなさい。こんどは、きかない事をすると、叔父さんがゐますからね。』

『恭さん、あんたは川殺生が嫌ひ？』

間を置いて、時造が斯う訪ねる。
『いゝえ。――餘りした事もないが。』
『うちでね、トアミを造らせたの。運動にみんなと出懸けるといゝ。』
『とれる？』
『いゝえ。まるで初學ですからね。』
時造が恥ぢる樣に笑ふ。美佐子や寡婦が、それに幾らか冷嘲を帶びた調子で笑ひ添へる。やがて、寡婦が話をかへる樣に、
『恭助、お前の部屋を綺麗に掃除させて、置きましたよ。』
『さう。』
『二階の裏座敷。あそこが、一番涼しくつて、一番靜かですからね。』
『うちでは、どこか外に家を借りるがいゝと言つたけれど、どこにも思ふやうな處がないんですもの。』辰子が又、何か言ひ足りぬ樣な氣がして、口を挿む。
『えゝ、えゝ。』
『却つて家の二階の方がいゝ位なものさ。』
『唯時々、家のごたくを見る積りならば。』
と時造が笑ふ。恭助も笑ひを含んで、
『では、――部屋で憩ませて貰ふかな――』

と、氷水のコップを下に置いて、立たうとする。

『あゝあゝ、それにね、』と時造が、『いつか、私が礦山へ行つた時、大きな檪の臺がありましたからね、指物屋の店に、——あんたの勉强する机代りに善いと思つて、買つときました。まだとゞかないけれど、荷馬がつけて來る筈だから。——あんたは、高い机が好きでしたからねえ。』

『美佐子！』と寡婦が、叱る樣に、恭助の手提鞄を指して、

『兄さんに持つてお上げ。』

『いゝですよ。』

恭助はそれを辭退したけれど、

『いゝ、僕が持つ。』辰夫が、それを引つさらつて、先きに立つ。

『では、』恭助は、義兄の夫婦に會釋して、二階に上る。

『机はこゝでいゝの？——これを本立ての代りにね、——あの重い行李は、まあ本が一杯詰つてゐると見えて、重い事重い事。其隅に上げさせときましたよ。……まあまあこの棚は、……美佐子に、ちやんと拭いときと言ひつけたのに……』

寡婦は、恭助の傍から、部屋の中を見まはしては、呟いてゐる。彼女は、もう朝の中から二度も、此處を見廻つたのであるが。——

恭助は開け放たれた窓に立つて、窓外の綠の稻田と樹木の繁つた岩山を眺めた。其山際に添つて、大木の槻が森をなして、爽やかな風に繁葉をなぶらせてゐる。

恭助は、そこから視線を轉じて、碧りの空を仰いだ、微かに海の濤波のけうとい響が聞える樣に思ふ、海は彼にとつ

て、懐かしいものなのであつた。彼の胸に、少年頃の記憶が甦つてゐた、それは淡い遠い夢の樣であつた、それに次いで直ぐ憂鬱な青年的の記憶が來る。——そこには、此家を取周つて行はれた、幾つも幾つもの貧苦の悲しい場面があつた。

窓に立つと、左手に、大きな杉皮葺のゐずくまつた建物が、其片端を示してゐる。これは、恭助の父が死ぬ少し前に建てた、小さい劇場であつた。そして、他の總ての生活方法が、貧しく力のない此寡婦から奪ひ去られた時、辛うじて家族多い一家を支へるに、大きな助けをなしたものなのである。恭助は、其建物の內外に行はれた、樣々な實生活上の悲劇も喜劇も數多く知つてゐた。どんな偶然に依つて、人間の離合や生活が支配され勝ちなものであるかを敎へられたのも、屢々其處に於てゞあつた。今は其記念深い建物も、雨漏り多く朽ちかけて、改築するか廢棄されるか外に仕樣もなくなりかけてゐる。

『美佐子！』と母の寡婦が、彼女一流のきづい聲で、『雜巾を持つておいで！』——

辰夫は辰夫で、兄の傍に膝まづいて、肘を窓に張りながら、輕快に梢の上を掠めては飛ぶ、燕の去來に眼を奪はれてゐた。

彼には、さうしてゐながら、兄と連れ立つて野や海べを歩きまはる、愉快な場面が想像されるのである。彼は、この兄の歸宅を、どんなに待ち兼ねてゐたであらう、心私かに。家の者どもの兄を待つ氣持を輕蔑しながら。——寡婦の末子に生れた彼は、隨分甘やかされてゐたが、又貧窮な儘に、隨分投げやりにも育てられた。そして今迄は其投げやりを欣んでゐるやうにさへ見えた、二三年前まで彼は、兄の恭助が戾つても、他人を見るやうな無關心さであつた。が、今の彼には、周圍のものへの苦々しさと、內に湧く自立心から、今度戾る兄丈けが、賴み甲斐あるものゝやうな、心持ち

がされてならなかつたのである。
今も、彼は明るい窓外の空を眺めながら、兄に對する限りない親愛と尊敬に滿されて、この兄の前に、自分の埒もない考きり浮ばない頭が羞かしく、何か立派な善い考がなあ、と其麼ことが思はれる。だけれど、彼には、
『氣持がいゝなあ。……』
と、矢つ張り、こんな言葉きり出ないのである。だが、彼はわけもなしに、頻りと氣が勇むのである。
恭助は其辰夫を顧みて微かにほゝゑむ。
そこへ、いつも淑やかな俊子が、母の傍に立つて、やはり外を眺めて居る。
『涼しい風ねえ……』母の寡婦は左樣云つて、又俊子に、『――お雜巾は？』と訊ねる。
『美佐子さんが、……』
『お前さんは今日お師匠は、お休み？』
『えゝ。』
美佐子が、水に冷やした雜巾を提げて、上つて來る。
『その棚をお拭きと言つといたに！』
『だつて、俊子が拭く筈でしたのよ。』
『いゝから、お拭き……』
美佐子は不快相に、拭ひはじめる。
『美佐も俊も、それは、意地惡くなつて、ちつとも、言ふ事をきかないんだから。――これからは、善く兄さんに話を

して貰ふがいゝ！』寡婦は、恭助に訴へる様に、又どこか氣を通ずる様な調子で、言ふ。
『兄さんが、家庭教師になららか知らむ？』
恭助は冗談らしく、さう言つて、顔を顰めた。そして、窓から腰をはづして、汽車の中で讀みかけた書物を、机の上に投げ出して、その傍に身をもたせる。
母と、俊子も、美佐子も、外を眺めて。座りこんでゐる。辰夫は、兄の向ひ側に廻つて、部屋隅の姿見鏡に寫る自分の顔に見いつてゐた。口元の引緊つた眼角の鋭い彼の顔の傍に、兄の何處となく沈欝な横顔がある。辰夫は、それを兄に氣付かれずに、或尊敬を以て、そおつと見戍りながら微笑んでゐる。
『母さん？』彼は、不意に、鏡の方を指しながら、呼びかけた。
ふり向く寡婦の、老い皺んだ顔が、その中に寫る。
『何なの？』
俊子と、美佐子が、其後ろから顔を覗かせる。それらが折り重なつて、俊子のぢつと見凝めゝ瞳と、美佐子の秀でた眉と、――二つの若々しい處女顔が、微笑み合ふ鏡の中の顔の間に際立つた。ふと振り向いた恭助は、自分の顔も其中に見出でると、慌てたやうに直ぐ脇向いて了つた。
『ふゝむ。』と辰夫が鼻で笑ふ。
母の寡婦は、皺んだ顔をなでながら、
『母さんも、年をとる筈さね、お前だちを十一人も生んで……そしてまあ、誰のお蔭でさう育つたと思ふの？』と言ふ。
彼女は辰夫の瞳を見まもつた。その稍々開いた唇と、人生の勞苦を堪へた人にのみある、慈愛と哀愁の深い瞳が、思

はず辰夫の無意識的な心に映つた。彼は、知らず母から面を背けて、
『十一人？』と訊く。
『さうさ。育つたのは、八人だつたけれど、……だがどの子だつて、一人、しんみに親を思ふものはないのさ。』
寡婦は、幼兒にさとす樣な優しい調子で、かう言つて、誰にともなく寂しい笑を洩す。
そこに居るどの子供達も、罪を感じるものゝやうに、暫らく默りこんで了つた。
そこへ、階段を踏む足音が聞えて、辰子が上つて來た。
『まあ、みんな揃つて、』
少し氣壓されるやうに辰子は立止まつた。その腕には、まだ赤兒が眠つてゐる。
恭助は其處に寄集つた家族のどの顏からも視線を外らして、何かを考込んでゐる。
『これは善い風が吹く。お茶をこゝで淹れると善かつたのね。』
『ねえ、辰子、』と寡婦は、今とはまるで係はりない氣持に掠はれて、『そら、其處に積んである横木よ、自家のに遊びないいちやない？』
『さうですねえ。』
『構ふことない。こつちへ持つてこさして置かうか。』
『さうねえ。』辰子は曖昧に應へる。
『芝居小屋には、留守番がゐなくなつたの？』と恭助が口を挿む。
『えゝ。この頃ひよう取りの口錢がいゝので、來手がないの。……だからね、うちでは、東京の叔父さん達が來たら小

屋の留守居になつて貰はうかとも言つてゐるの。』

『なんだつてするだらうさ。……叔父は、恭助に何と言つてゐた？來るつもりらしい？』

『えゝ。秋頃までには是非つて。』

『叔母さんてが中々きくりやだつてね。』

『ふゝむ、さうかも知れない。』

『厭あな奴さ。』辰夫が、突然さう言つて、ぷいと立ち去る。

『何なの？』恭助は、それを合點出來なかつた。

『我儘屋！』と辰子が、辰夫を見送つて、呟いてゐる。『少し、奇なのよ。――これから些つと、兄さんに教育して貰ふが善い！』

『本統に、今もそれを言つてたのさ。』

寡婦が、かう口挿む。辰夫は、矢張り二階の自分の部屋で、歌を唄ひ出した。辰子は、それに向けて言ふつもりで、

『これから、無暗とお友達をつれこんだりすると、きかないから！……此間も、さうよ、四五人して踊るやら跳るやら……』

さう辰子が口說いてゐる時、下から、

『辰子！』と時造の呼ぶ聲が聞える。

『伎子、行つて御覽。』母が促す樣に言ふ。

『ねえ、恭助。』と辰子は、まだ立つた儘、話頭を換へて、『そこへ、下にある棕梠の鉢を持つて來てはどう？涼くつてい

ゝでせう。』

『さうねえ。』

『辰子！辰子！』時造の聲が繰返される。

俊子が立つた跡から、辰子も、下りて行く。

『何をしてゐるんだい！店を空つぽにして。』時造の苛々しく叱り付ける聲がする。

母の寡婦は、下には拘はりない樣に、

『美佐子。――お前も、兄さんが來たから、自分の心にきいて、色々兄さんにはかゝつて見るがいゝ。昨日も言つたけれど、……』心もち娘を睨み付ける樣に言ふ。

恭助は、少時默つてゐたが、

『――色々、だん／＼に、聽かせて貰ふかな。……疲れたから、今日は、憩ませて貰はうか。――』と獨言のやうに呟く。

『あゝ、それが善い。』母の寡婦は、直ぐ又調子を換へて、『美佐、兄さんに床を敷いてお上げ。――敷布は？綴ぢて置いたの？』

彼女は、もう一わたり部屋ぢゆうを見まわつて、階下に下りて行く。

美佐子は、兄と獨りぎりになると、靜やかな態度で、押入から夜具を取出したりする。――夜具は、總て、恭助の爲に新しく調へられたもので。

『蠅がうるさくつて、』と美佐子が、呟きながら寢床を敷き延べる。恭助は、少し下痢の氣味かと思ひながら、其上に、輕く脚を伸べる。そして、姉妹中で一番我武者な此妹から、いつも優しく恭敬な態度を惹き出せる自分が、妙なものに

思へたりするのであつた。

美佐子は足音を憚るやうにして、下に下りて行く。恭助は手を差伸べて、机上の本を取つて見たが、間もなく眼を瞑つて了つた。

夕方、俊子が電球を換へに來て、

『兄さん、お湯がわきました。』と言つて、去る。燈の光の柔かく溫かに行き亘る部屋の中に、仰向いたまゝ、恭助は今見た夢のことを思出してゐた。——

それは、妙な夢であつた。——どことも知れぬ大きな森の中である。恭助はそれを、さつき久しぶりに見た、田中の槻の森から來たものだな、と思つた。何樹とも分らない大木が、さん／＼と繁葉を風に煽られてゐる、その中で、一本成育しきつた樣な、太い古い幹が、苔のついた樹皮に蔽はれて、もう綠葉の枝も少なく立ちはだかつてゐる。其樹の根元に、自分が蹲まつて、何か考へこんでゐるのである。小鳥が驚く程澤山、綠葉隱れに歌つたり、樹から樹へ跳びうつつたりしてゐる。それを注意ぶかく見ると、總て平凡な雀の群に過ぎない。唯形が大層小さく、囀りだけが非常に姦ましくつて、靑葉の加減からか羽色が幾分靑みがゝつて見える。見ると、森の中には、木隱れに、小さい白木の祠がある。その祠前で、何かを啄ばんでゐたと思ふ小鳥が、丁度自分の頭上を掠めて飛び去つた。考から頭を上げた彼は、その跡を見確めようとして立上る。すると鳥は、直ぐ自分の蹲まつてゐる樹の上に飛びこむのであつた。そこには、樹の天邊に近い處に、大きな洞が空いてゐたのである。好奇心から、少し立ち離れて空洞の中を覗いて見ると、——醒めてから思へば少し辻褄の合はない事なのであるが、——其中には、まだ深山の雀が群れ棲んでゐる。それらは、親の口から餌を啄ばんで貰ふ程の子供でもないらしい、だが兎に角、非常に飢ゑてゐるものらしく、亂雜でそして騷がしい事この

上もない。一羽飛び去つたかと思ふと、又一羽飛びこんで來る。ほんの生れたばかりの子雀もゐなくはないらしい。どれが親なのか大將なのかも分らない。一體、彼等が爭ひ合つてゐるのか、養ひあつて居るのか、樂んでゐるのか、憎み合つてゐるのかも、ちよつと分らないのだ。それを眺めてゐると、非常に苛立たしくなつて來る。そして、自分で馬鹿げてゐると思ひながら、その中を攪き亂してやりたい氣持になり出した。で、あたりに石か、樹の枝かを搜し廻つて見たが、一向投げつけるに都合のいゝ物もない。仕方なしに、あたりを見廻はしてゐるうちに、自分から其大樹の幹を攀ぢ登らうと思ひ付いた。勿論その幾抱へもある大樹に攀ぢることは、容易でない、幾度かその幹に腕をまはして脚を足搔いて見たが、またずるずると下にこけ落ちて了ふ……それを、まだどこまでか繰返さうとしてゐるうちに、何かの拍子で、――戸外の物音からでも、――ふと眼が開いて了つたものらしい……

他愛ないと、彼は思つた。だが、其無益な木登りを繰返す自分が、滑稽ながらに妙に頭に殘つてゐた。少しぐつたりした氣持で、下へ下りて行くと、浴衣がけの時造が、湯上の元氣な顏で、座敷の柱に背をもたせて、胡坐をかいてゐる。そして其大將電燈の明るい部屋の中に、時夫や寡婦の落付いた平和らしい顏も並んでゐる。勝手では、辰子や美佐子が食事の用意に忙しいらしい。

『恭さんお湯。』

『恭助、お湯。』

『兄さんの浴衣は？』

かうした聲が、殆と同時に、義兄や母や姉から響いて來る。

恭助は、和やかに、明るい座敷の人々の方へ立ち進むと、平和な底溫い雰圍氣が、彼の身の周りをも取包んで來るや

うな氣がするのであつた。

四

『どうです、恭さんも、今度の興行の時、やつて來て見ませんか。――それは面白いですよ、あんな氣持のいゝ興行はないですね。殆と、豫想のはづれると云ふことがないですからね……』

時造は、恭助と晩酌の膳に向ひながら、こんな稼業上の話を、元氣に話してゐる。

『何しろ、會社で、礦夫の娛樂の爲にする芝居なんですから、木戸を高く取るわけには行かないが、其代り一晩に千五百以上の入りは疑ひないですから。』

『さう。』

恭助も、時造も、もう善い機嫌になつて、二人とも赧い顏して杯を交してゐる。

『辰子、何だつたね、この前の時は、仲店の賣場と木戸の揚高と、どつちが上なのだつけね?――さうか、――ねえ、恭さん、それに仲店の賣揚が、とても此處の小屋などの比較ぢやないんだから。兎に角、木戸と仲店の揚高を双方合せると、一興行でかなりの純益になつてゐるわけなのでさ。』

『礦山の小屋さへ、今の順でずうつと、家で請負つてやつて行ける樣だと、家も隨分樂なのだけれどね。』

脇から、辰子が口を挿む。彼女は、男二人の晩酌が終つた後の食事の菜を、火鉢で煮たりしてゐる。

『今の所長が變りでもしなければ大丈夫さ。――そりや、私だちを信用してゐて與れましてね。この間も、井出君どうしたい、いつそ礦山へ一家中引移つて來ては!なんて冗談を言つてゐたけれど、』

『さうさう、時造。』と、座敷の隅に身を延べて、孫の時夫に足裏をふませたりしてゐる寡婦が、聲をかける。『所長さんへつけとゞけする物を、忘れないで、美佐子にでも持たせてやるがいゝね。毎日毎日忘れてゐるけれど、』

『さうだ、さうだ、辰子、明日こそ忘れないで、とゞけなければいけないぜ。――お母さん、あの位の品物で、いゝでせうかなあ。』

『いゝさ。澤山だともね。』

『私は、もう少し金高のするものがいゝと思ふのですけどもね。』辰子が呟くやうに言ふ。

『さうか。では、もう少し品のいゝのと交換して來るか。――氣張る處は、氣張つて置かなければ、損ですかねえ。』

時造は、量の少ない晩酌で、すつかり元氣になつて、慌しく食事を終へて了ふと、眞赤な顔で太平相に脚を投げだして、其處に居並ぶ義妹達や伜の時夫に、子供のやうな冗談や調戯をしかけたりする。

『まあ、ちよつと、ちよつと、俊子の髪を見せて御覽。――それは、何髷つて言ふんだい？ちよん髷？』

『まあ、厭やあだ。』

こんな事を言つて、明るい、平和なさゞめきが家の中に漲ぎる。その傍で、やはり酒氣に頬を染めた恭助が、事無げな顔して微笑んでゐる。

『時夫、時夫、駄目よ、そんな處を踏んでは、お祖母さんの脚の骨が折れて了ふ。』

座敷の隅では、寡婦が孫を相手に、こんなことを言つてる。

『時夫や時夫や、早く來て御覽。――お祖母さんの脚は、姉さんが揉んで上げると言ふから。――母ちやんが、善い處へ連れて行つてあげるに！』辰子は、明日の恭助達の膳に用意したい何かを、店へ見に行かうと思つてゐるのである

『行かないの？』

『行かなきあ、父ちやんが、おんぶして行つて了ふぜ。』

親父の時造が、此麼冗談を言ふ。すると、時夫は、やつきとなつて、母の背中を目がけて走つて行く。

『やいやい、父ちやんだ父ちやんだ！』

『どれ、姉ちやんがおんぶするかな！』

脇から叔母の美佐子が、又此麼からかひをする。時夫は、甘へた氣持から、いきなり美佐子の背中を叩いて、母の背に飛びついて了ふ。

『この！この！……』

『おい、辰子や、あの角の魚屋に行つて、賴んどいて御覽――此度、明日の朝か、晝に間に合ふやうな魚が來るに違ひない。』

『さうねえ。――』

と、云ふ鹽梅に、晝も夜も、恭助にとつて平和な、祭日のやうな氣持を慾る日が、續くのであつた。彼を取めぐる、かうした温かい親切な空氣にほだされて、恭助は、幾日か幾月か、賓客でもあるやうな、面新しい氣持で、家に起居するのであつた。朝日をさまして、下に下りると、もう全かり掃き清められた小座敷に、朝餉の用意がしつらへられてある。彼が爽々しい氣持で、食事を終るひまに、二階の寢床も机の上も、綺麗に取片附けられて、窓の障子が明け放たれてある。部屋に籠つて、暫らくごろ／＼してゐると、茶時の使が彼を呼び下ろす。さうして、此處には、狭い町ながらの名物になつてるたべものが、今日はこれ明日はそれと、吟味されてある。……

恭助は、かうした家の空氣を、遠い幼年頃の記憶以來、久しぶりに經驗するやうに思つた。この空氣やこの親切なもてなしが、何處から來るものなのか、――彼は、或操つたさを感じながらも、自然と亦、その空氣なりもてなしなりの中に、鷹揚な態度を振舞ひたがる、自分自身の心理を見ねばならなかつた。只管に冊づく妹達の好意は、彼に心苦しいものでありながらも、彼女達がして吳れ相なことだと思ふ豫想が、幾度か彼の伸ばす手や動かす脚を差控へさせるものなのであつた。

『俊子、俊子！兄さんの下駄は？拭いてお置きと言つたがね。――早く、持つておいで。』

『恭助、辰夫がゐるでせう、あの子に出させないよ。――辰夫！辰夫！兄さんの郵便を出しておいで！』

さうして、弟や妹達は、獨樂のやうに、くる〳〵と彼の手先や足元を走り廻るのであつた。そのうちに、母の寡婦と辰子は、又恭助の着物に就ての相談をし出したりしてゐる。

恭助は、風通しのいゝ自分の室に籠つて、半ばは机に向つて書物を讀んだりしてゐるが、半は机の前に仰向いて晝寢をしたり、爲すこともなく眼を瞑つてゐるのが仕事のやうであつた。そのうちに、例の大きな柳の箱が運びこまれて、その上に、小形な原稿紙がきちんと展べられてあつた。いつのまにか、『臆病者』と見出しが付けられたけれど、その儘、幾日も幾日も、それの書き進められることはなかつた。

毎日、西の山巓に輝かしい雲が湧いて、海べに、――礦山からも、村々からも、――人の出盛る頃となつた。恭助も麥桿帽を被むつては、海に出かける日が多かつた。

だけれど、彼は並木や砂塚の蔭に、唯寢ころんでゐる。――小さい時から、彼は海べの好きな子であつた。海べに來て、獨りで波に戯れるのが、何よりも彼の欣びなのであつた。十八九の頃、彼は晝も夜も、此海べに佇みそして彷徨ふ

のが、慣ひであつた。そして、今も猶、――かうして、此海べに人馴染なくころぶしてゐる。さうした自分を、恭助はまだ瞭り自分に知る事が出來なかつた。

いつの年か彼は、毎日近隣の子供を引連れて、子供の樣に此海べに遊耽る事があつた。だが今は、時をり、學校から戻ると彼の跡を追ふ辰夫の外に、近よる者もない。顔を見知る町の者も、親しみ近づいては見るが、彼との默坐に長く堪へぬものゝ樣なのである。

或日の午後、泳ぎ疲れたらしい辰夫が、唇を顫はせながら、並木の方へ遣つて來た。そして兄の姿を捜めた。邊に見えなかつた。兄の姿が、並木の奥にあつた。並木の奥は、大きな松の幹と樣々な下蔭に蔽はれてゐるが、長い長い區劃が共同墓地なのである。そして、恭助達の親父の墓も其處にあつた。辰夫は、兄が親父の墓に詣つてるのだと思つた、そして自分も衣物を引掛けて、其方に近づいた。

恭助は、弟の姿を認めて微笑みながら、此方へ進んで來る。

『歸る?』

『いんえ、どうでも――』

『まだ暑いだらう。――此處は日かげで、涼し過ぎる位だけれど。』

恭助はさう云つて、砂塚の一つに腰を下ろす。辰夫も其傍に座つた。

『お墓に詣つてた?』

『僕が?』恭助が無意味らしく問ひ返す。

海も空も、美しく澄み渡つてゐた。そして岸波の音が、けうとく響いた。二人ともに、默りこんで、前手の海を遠く

詰めてゐる。

『僕あね、……訊きたい事があるんだがなあ、兄さんに、――』

辰夫が遠慮しい〳〵口を開く。

『何？』

『ねえ、――父さん家のことさ。』

『ふむ、』

『叔父さんが、跡をとつてるつて、――そして、まだ祖母さんがゐるつて？』

『さうだ。』

『子供が澤山あるつて。ねえ、寫眞も見たけれど。』

『七八人、ゐたね。――』

『そして、貧乏かい？』

『うむ。――まあ貧乏だ。きたない百姓家さ。』

『だが、金持の親類もあるつて？』

『知らないね！』と言つたが、恭助は、吐き出すやうに、

『けちん坊の慾深さ！』と附加へる。

『ふうむ。』

『そんな事きいて、どうする？』

辰夫は應へない。恭助も少時默つた。
『登代子か一度逃げてつた事がある。』
『僕もきいたけれど』
『今でも行きたがつてるとさ、時々、國の叔父の處へ便りをする話だ。』
『ふうむ。』
『だが、今では駄目さ。』恭助は、斷言する樣に、『もう子はあるし、叔父の方だつて、此方への手前呼べはしない。』
『登代子姉さんを、こつちへ呼ぶつて、義兄さんが言つてた。――』
『ふうむ、――』
『僕あね、』――と、辰夫は言惡さうにして、
『なんだか、家にゐるのが厭なんさ。』
『――どうして?』
恭助が顧みる。
『だつてね、』と、辰夫は甘へる樣に、『――勉强したいんですもの。……來年になれば、姉さんらが中學に入れるつてけれど、僕あ、何だか厭やあだ、……』
『世話になるのが?』
『うむ。』辰夫は瞭り頷く。
『だが、……それは、父さんの鄕里へ行つた處で駄目さ。』

『うゝむ、――さうぢやないんですけれど、』

辰夫は何か氣持が瞭り言へないで、少しべそを掻いた樣な表情をしてゐる。

『お前は、父さんの顏を覺えてゐたかね?』恭助が、氣を換へた樣に訊ねる。

『いゝえ、――ほんの微かあに、』

『さうか。』

恭助はかなり暫らく默つてゐたが、

『僕は、ね、』と相手構はずな調子で語り出す。――『ひと頃、父さんの郷里くにを、寶のやうに思ひ樂んでた頃があつた、――今は大抵死んで了つたけれど、母さん方の親類が、みんな厭あな强慾な奴ばかりだつたからね。』

『ふうむ。』

『だがね。――今度行つて、僕あ、郷里の自然だつて、人だつて、さう好きにはなれなかつたよ。大抵、もう二度と行くこともないだらうと思ふよ。――あそこの山だつて、川だつて狹くるしい瘦せつまつたもののやうな感じきりしなかつた。土地の者だつてさうだ。それに比べれば、自然だけは、こつちの方が遙かに好い。……』

『ふうむ。』

『だが、人間は……』恭助は獨言にたつて少時默つてたが、『――ねえ、お前は、母さんの妹に、早く死んだよなお叔母つてあつたのを知つてる?』

『いゝえ、』

『さうか、――その人がね、此麽話があるのだ、お嫁に行つた先の人がみんな家柄自慢の一族だつてね、で、およね叔

母さんも負けない氣で自分方の血統や系圖やを色々訊した事があるつて。僕は忘れて了つたがね。母さんの父方も母方も相當由緒のある出だつて、その叔母が忘れるなつて僕に聽かせたものさ。――だが其頃から僕は既に母方の親類が皆嫌ひだつた。强慾で下品で……僕は、祖父さんだつて祖母さんだつて、眞から好きになれたのは、あの人達がほんの死ぬ間際の頃だつたよ。やつと無慾偏頗のない、佛のやうな人柄になられて、ね。』

恭助は熱心になつて話してゐた。それは、辰夫の氣持には、さう係はりのある事でもなかつたけれど、彼も知らず、識らず、兄の調子に惹き入れられてゐるのであつた。

『僕は身贔屓の考方か分らないけれど、家の父さんや母さんは、一族のうちでは、まあ優秀な方の人なのだと思ふよ。だけど、その人達でさへも、――一體この世で、何をして行つた、或は行くものなのかねえ？……』

彼は此處迄云つて、口を噤んだ。自分が今子供の辰夫に分りもしない事を口にしてゐると氣付いたからなのである。だが、彼の頭には、畧かうした考が、殆と言葉になつて浮んでゐたのである、――『唯稼いだつて、儲けたつて、子を澤山殖やしたつて、その澤山の子を單に扶養したつて、結局何なのだ？……勿論、そこからどんなものが生れるか、それも知れない、又どんなに深く測つた處で死が不意に來る事もあるし、又幾ら深切に測つておいても、後の者に限られた性來のあるものなのだらうけれど、……だけれど……』彼は、色々爲散らして死んだ父を思つてゐたのである。

『おい。辰夫。ねえ。……』恭助は、急に調子を換へて、

『家で初めて、此處へ來た時の事を知つてるかい？――』

『いゝえ。――』

『僕は覺えてゐるよ。父さんの腕に抱かれて初めて、此處へ來た日の事を。僕は三つ四つだつた。其日の事きり記憶に

殘つてゐるのだ。潮風の低く吹く、梅雨の頃でね、丁度あの並木の斷間あたりだ、波の音の鈍い海べに僕達が立つてゐるのだ。父さんの腕には僕さ、母さんの懷ろには登代子だ、そして父さんの腰と母さんの腰に手を挿んで立つてゐるのが辰子姉さんなのだ。其日、僕だちは、M——町から此處へ辿り着いたのだよ。其頃は汽車もなかつたのだらう、M——町で失敗した父さん達は徒歩で此處まで流れて來たのだ。其時の陰氣な風景の中で、僕は、濕つぽい砂地に餌をあさつてゐる黑い烏の姿が、唯一羽瞭りに眼の先に浮んで來るんだよ。……其日が、僕だちの家の、此處での歷史が初まる最初なのだ。……それから、父さんと母さんが什麼に丹精したものか、僕達の姉弟がどんなに殖えたか、どんなに金が溜つたか、そしてどんなに貧乏して行つたか、大抵聽いて知つてゐるだらう。……そこにぽつんと、父さんの頓死つて、穴が開くのだよ。……それから又、母さんの奮鬪の歷史が初まるのだ。その間に僕達の姉妹が、順々と人身御供にあがつて行くのだがね……』

恭助は妙に執拗く話を續ける、——

『眞先が辰子姉さんさ。でも、あの人が先づ眞先に我意を張つて家を飛び出した。次ぎが登代子さ。次ぎが、房子。旅先で死んで了つた。次ぎが、美佐、……みんなそれぞれ手を負つてゐるよ。——先づ無事なのは、僕だけか知れないね、はつは。』

恭助が急に笑ひ出した。辰夫は、其意味が瞭り分らぬ儘に、妙に薄氣味わるくなつて、兄の方は餘り見まいと努めてゐる。

『だがね、長い間には、家の樣子も隨分變つて行つたものさ。一度家を飛出して行衞の知れなかつた辰子姉さんが、あゝ家の柱にならうとは、誰も豫期はしなかつたのだからね、——この先、まだどう變るかも知れないさ。だけれど、さ

う悪くのみ變るつてわけでも、ないだらう、ねえ。――』恭助は、半ばおどける樣な調子で口を噤む。だが、少時すると、いたはる樣に弟を顧みて、優しく、

『辰夫、お前は、何になるね？』と訊ねる。

『さあ、――僕あ、知らないや……』突嗟の事で辰夫は斯う言つたが、『僕あね、礦山の技師にならうかと思つてるんさ。……』

『ふうむ。』

『でも、……僕あ分らないや。……』

『――兎も角、兄さんのやうな、怠けなぐうたら人になつては、駄目だよ。』

恭助は、さう言つて、脚元の貝殻を拾つて明るい砂地に投げつけたりする。辰夫は稍々哀しい顔付で默てゐる。

『おい、戻らうか？』恭助が促して、立ち上る。辰夫はまだ話したい氣もあるのだけれど、一緒に立ち上つて、

『僕あ、愈々つてば、苦學だつてする。』呟く樣に言つて、思ひきり石を遠く投げる。

『ふむ、――』

兄は、自分に惠まれた或偶然に就て思つてゐるのであつた、だがさうした偶然を心待てと、弟に諭す勇氣は、彼のものでなかつた。と云つて、苦學を弟に勧める事も出來ない。

彼は、途々、並木の蔭に咲く濱撫子の花を摘んで、それを小さい花束に束ねながら靜かに歩いてゐた。辰夫は其傍に口を噤みながら何か、苛立たしい氣持なのである。

さうして、二人が、家に戻つた時、思ひがけない光景が、そこに名殘を留めてゐた。

辰夫は詰らな相に、直ぐ又外へ飛び出して了ふ。恭助は束ねた花束を弄りながら、しばらく其母親を眺めなければならなかつた。

店先の間に、大きな戸棚を背にして、赤児を抱いた辰子が座つてゐる。彼女の神經質な顔が、今日一層青ざめて、稍々打伏せに、唇を噛んでゐる。それと稍々斜交に座る、母の老皺んだ口元にも、明らかな昂奮が印されてゐる。——

『……私だちがゐて、此家をやつてるのが不服なのだらうから、私だちが、何處かへ行けばいゝのだらうから……』辰子の唇は、昂奮に顫へて來る。

『辰子、もうお廢しと言つたら！』

『私は、自分が家を出たが惡いと思ふからこそ、——縱し足りない亭主だつて、働いて呉れるのを善いとして、我慢して……家の爲を計つてゐるのです……丁度、恭助も家にゐる處だから、お前達で家をやつて行くがいゝ。美佐子は、さうすれば、氣持が堪能するのだらうから……』

辰子は、恭助の店先に立つたのを意識して、こゝまで言つたけれど、それ以上言ふ勇氣がない。母の寡婦は、寡婦で何か憤らしい氣持を、どこに吐いていゝか分らないのである。だが、——土間に立つてる恭助の姿を見ると、彼女の心は、解け溢りながらも、自然と微笑まずにはゐられない。

『疲れたゞらう？』

『いゝえ。』

辰子も亦、其聲をきくと、むつつり仕切つてゐるわけに行かない。そして、その蒼ざめて堅くなつた顔を、不自然に恭助の方へ向ける。恭助に取つても、それは見るに苦しい氣持なのであつた、彼は微笑まうとして、直ぐ又堅くなる自

分を意識する。

恭助は、今言つた姉の言葉に或狼狽を感じながら、だが何氣なく座敷に上る。

『時造が時夫を連れて、海に行つたの。會はなかつた？』

『いゝえ、――』

『時夫が無理にせがむので、』

『さう。』

寡婦は、さう話しかけるけれど、其場に漂つた白けた氣持を繕ろひきれない。

『兄さんにお茶。――そして、瓜が冷してあつたでせう？』

辰子が奥の俊子に聲をかける。

恭助は、さうした母や姉の調和的に振舞はうとする態度に、何か不快な、屈辱に似た氣持を感じさせられるのであつた。だけれど、その氣持の欝を晴らす爲に、それらの好意的な氣持を挫く、何か皮肉な調子を示す事も、自分に許せることではなかつた。彼は、沈む氣持を意識しながら、事無げな表情で、硝子の瓶に投げ入れた、花束の花を眺めたり、挿し盛梅を直したりして居る。

茶を啜りながら、やがて、母の寡婦は、恭助に此麼ことを言ひ出した、――

『いつか暇があつたら、美佐子に よく話してお呉れ。どうも、我儘で仕様がない。氣に入らないと、誰に向つてゞもぽんぽん、見境ひなく當り散らして……』

辰子は、それを庇ふやうに、

『何なのでせう、美佐子は、家にゐて働くのが、何か私だちの爲ばかりにするやうな氣がするのでせうから、いつそ言ふまゝに、外へ出すがいゝのですよ。』と、まだ白けた調子で言ふ。『外へ出て見れば、どつちが無理か分るでせうから。――私の考へでは、裁縫でも仕込んで、どこか善い處へ緣づけた方がいゝと思ふのだけれど、當人がそれを望まないのですし……』

『あれだつて、靜かに話せば、さうではないんだけれど、燃え立つと理も非もないのだから、……』と、寡婦は撫めるやうに言ふ。『だが、――ねえ、恭助、M――の吉本の方は、もう見込みないのか知らね？この間から、訊かうと思つてゐたのだつたけれど。』

『さう、もう他に嫁を捜してゐる話でしたからね。』

『さう。』

『駄目ですよ、美佐子には、あんな家、とても窮屈で！』と辰子が言ふ。

『さうかねえ。』と寡婦は惜しさうに呟いてゐる。

恭助は默つてゐた。――吉本と云ふは、恭助の親しい友人の家なのである、そして美佐子は、其處の兄弟の一人に娶される筈で、暫らく其家に行つてゐた、だが、とう〳〵落ち付く氣持にならずに戻つて終つたのである。美佐子は、其處に行く前數年、同じ町の或醫師の處に傭はれて、看護婦の資格を得てゐた。で、今も、彼女は人々の危ぶがるのをきかずに、外に出て自立的な生活の道を開きたいと希つてゐるのである。――

『勝手にさせるといゝのですよ。――』

辰子はまだ氣の和ぎない様に言ひ放つ。

恭助は茶を啜ると、いつもよりか言葉少なく、二階に上つて了ふ。——そして、湯から戻ると、いつも例のやうに、机の前に暫らく轉寢するのであつた。

夕方、下に下りると、燈のともつた明るい部屋に、晩酌の膳が用意されて、平和さうな時造や寡婦や辰子の顏が其處に彼を待つてゐるのに變りはない。わけて、人々の面ては、苦い不機嫌の後、一層和やかに柔らかく輝やいてゐるやうにも見えるのである。恭助は言葉少なかつた、だけれど其言葉は優しかつた。

『どう今夜の酒は？』時造が、口を窄めて杯を口へ運びながら恭助に訊ねる。

『さあ。——』

『あの店で自慢の酒なのよ。』脇から辰子が口を入れる。

『さう。』恭助は優しく又哀しく應へるのである。

五

時造は稼業の事で、數日忙しく走廻らねばならなかつた。——彼の世話する、礦山の劇場で、月央ばの興行が、すつかり手順違ひになつたのである。で、M——町T——町S——町と、忙しく走り廻つて、でも期日の三四日前になつてやつとそれを整へる事が出來たのである。

彼は元氣で、やゝ得意でもあつて、其日の最後の汽車で家に戻つて來た。

『やつと決まつたよ、S——町で十太郎に會つて、ね。お囃まで入れて、十五人程の座だ。急に寄せ集めて組織した割に、立派なのが出來たよ。それにお前、何と云つても、かゝりが非常に安いのだもの。——だから、却つて善かつた位

のものさ。前のよりか……』

時造は、身を投げ出して、――急ぎに夕餉の仕度にかゝる辰子へ、此麼話を仕出す。家は、辰子の外誰もゐない。靜かな晩である。

『みんなはどうしたね？』

『海ばたへ――』

『ほう、――恭さんも？』

『えゝ。』

時造は、辰子が食事の用意に忙しい間、下に置かれた赤兒を抱き上げて、左利きの不器用な手つきで、「よい、よい、よい！」などとあやしたりしてゐる。その親父の、ちよんぼり口髯を生やした口元を、赤兒は、まだ鈍さうな目付きで、まぢり〳〵と眺めてゐる。

『よい、よい、よい！……時夫もかい？』

『えゝ、お祖母さんにおんぶして。――ねえ、あんた、この間味噌へ入れた魚、殘つてゐましたの、上がる？』

『あゝ、――』

膳に向ふと、直ぐ醉ふ時造は、眞赤な顏になつて、――辰子と赤子の顏を眺めながら、何か愉快で氣が伸び〳〵して堪らないのである。

『美佐子も、俊子も？』

『えゝ。』

『ぢやあ、聯隊編成だね。』時造は愉快さうに笑ふ。『ねえ、艮丁、こんどの興行が終つたら、おいらに單衣物が一枚欲しいな。』

『平生着ですの？』

『うむ。』

『よそ行きは、此間反物を求めたんですけれどね、仕立に忙しくつて。――さうさう、今日C――の姉さんからハガキが來てゐた。』

『何だつて來たい？』

『見舞ながら、來るやうに、つて。』

時造は、片手に箸を取りながら、ハガキを讀む。『――ふうむ。兄貴の病氣はどうなのかねえ。見舞に來いつて言ふんだから、惡いのだらうねえ。だが、一體誰の字だらう、これは。意味もよく分らない。』

『淑子さんでせう。』

『下手な字だねえ。――弟さんが家にゐたら一緒に連れて來て與れつて。何の用だい、おきゝしたい事があるつて――』

『病氣見舞に寄越して欲しいつてんぢやないですか。――姉さんか、義兄さんの前に對して、さ。』

『さうかなあ。――恭さん行くだらうか？』

『行くでせう、――』

さう言ひながら、二人は、てんでに妙な事を思ひあつてゐるのであつた、――と云ふのは、今病んでゐる、時造の姉の亭主と云ふが、或賑やかな稼業の男なのだけれど 又非常に富有なのである。で、其男には殆と身寄りがなく、姉にも時

造の外、親近な者がない。だもので、姉は此頃、頻りと時造を頼りにし出してゐるのだ、それで、近頃の此家の裕りある生活も、幾分は其お蔭を蒙つてゐる事なのであつた。だから、今も時造は、又辰子は、C——の兄貴に就ての或不祥事を、自づと思ひ合つたのである。そして又、それればかりでなく、もう一つ彼等の想像を喜ばす、一つの事情が其處にあつた。それは、兄貴夫婦にある、我儘に育てられた養女に纏はることなのであつた。いつか其娘に婿を取つたりしたのであるが、それが又、不縁になつてゐるらしいのである。そしてC——の姉が、時造の義弟をその跡にと思ふ意志が、有り相な様子でもある。その事も、いつかの閑室話から、今又思ひ起してゐるのであつた、だが口にする勇氣はない。

『行くとすれば、……今度の興行の終つてからだな。……行けば屹度、いつか話の資本金の事も姉さんから話があるんだらうけれど、……まあ、あんまり宛にしない事だねえ。宛にしてるやうな顔すると、邪推ばかりされていけない。氣の善い人なんだけれど、どうしてあゝ疑ひ深いのかねえ。』

時造は杯を口に運びながら、此麼ことを言つてる。

『金を溜めすぎたからだよ。——本統さ。——もとはあんなぢやなかつた。だが、全く金の有る所には溜るものさ、ね。今では、お前、姉さんの名になつてる貯金ばかりが、幾萬とあるだらうねえ。同じ名では、税金がどうだとか言つて、色んな名で積んでるんさ。私の名なんぞのもあるんだよ。——だもの、お前、疑ひ深くもなる筈さ、ねえ。』

辰子は、それを聞きながら、いつか來た姉の贅澤な服裝を思出したりして、薄ら笑つてゐる。——

『だがねえ、兄貴の病氣も、どうしたものだらう。——直腸癌で助かるものつては、ない話だけれど。——死ぬ死ぬ言はれるものは、案外長生きするものだからね。』

時造は、食事が終ると眞赤な顔して、身體を疊に投げ出して、此麼話をしてゐたが、いつかとろ〳〵と眠に落ちて行

く。辰子は、この自分よりも遙か年上な、恐ろしく氣の善い夫を見戍りながら、わけもなしに、自分が此男と仲善くなりだした頃のことを、此頃稀らしく思出してゐるのであつた。――其頃の分別ない若さからは、もう十幾年の日が經つて了つてゐるのだ。

辰子が獨りで其麼ことを思つてゐると、母の寡婦や娘達が、若やいで賑やかさうに、海から戻つて來る。

『おや、時造が戻つて來ましたね?』

『えゝ。』

寡婦は敷居を跨ぐと直ぐもう、世帶氣持に支配されるやうな面持で、

『話は、うまく決つたらしい?』

『決つた話でした。』

『僞だらうか?』

『そんな風でしたが。――』と辰子は、もう餘かり寢こんでゐる時造を搖さぶつて、『よう、お起きなさいよ、みんなが戻つて來ましたよ。――お茶がはいるし……』

時造が、兩腕を差し伸べて起きようとする頭つるへ、時夫が飛びかゝつて、

『父ちゃん、お饅頭!』と怒鳴る。

『いやな子ねえ。』

さう云つて、辰子は苦笑しながら母達の買つて來た、菓子の包みを解いて、茶盆にのせる。

美佐子が茶を淹れる。

『恭助は？』

『今、先生と會つて何か話しながら來る。——海ばたは、涼みの人が、それは大變なのよ。——時造、都合善く恰好なのが見つかつたつてね？いつ乘込みの話？』

と、娘達の相手になつては若やいだ調子になり時造や辰子に對つては分別額の六ケ敷くなる寡婦が、澁つたい眼の時造と、茶を啜りながら話してゐる、そこへ恭助が戻つて來る。

『お茶は？』

『欲しくないな。』

『先生は、何の話？』

『同窓會があるつて。』

『出よと云ふの？』

『あゝ、歡迎も兼ねるんだとさ。』

『出るかい？』と辰夫が口を挿む。

『勘辨して貰つたよ。』

さう云つて、恭助は二階に上つて了ふ。

『變人ね。——』と辰子が呟く。

『恭さんも、もう些つと人なかへ出ると善いんですけれども、ね。』

『C——の姉さんが、恭助も一緒に、うちを日鎌に來いつて——行くか知ら？』

『さあ、――行くだらうさ。』

寡婦は、亡夫の郷里を訪ねた時の、不得要領だつた恭助を思ひながら、さう言つて、

『C――の兄さんの病氣はどうなの？』

『どうせ思はしくはないんでせうけれど、』

時造は又ごろりと眠む相にしてゐる。

恭助は二階に上つて、机の上に置かれた山下からの手紙を手に取つた。――山下は、もう又東京に上つてゐた。田舍は彼に取つて、「餘り退屈過ぎた」のである。彼は、月々の補給を拒んだ田舍の親父の事や、東京でこれから取掛らうとす創作の事や、又氣を揉まねばならぬ就職口に就てのいまいましさやを書き記して、最後に又、「貴族的で政略家」の久田に就て思ひ切つた批難の筆を運んでゐる。

恭助は讀みながら微笑んでゐた。いつも何かへ憤懣を洩さずにゐられない山下の面影が偲ばれたのである。今夜堅苦しく歡迎何を謝した自分の「邪心」と祝賀の席上で堂々講演をやつた山下の「無邪氣」が對比される。恭助は同じ机の上に置かれた、自分の書きかけの原稿を手に取つたけれど、眉をしかめて投げ出して了つた。そして、窓に立つて、空に播かれた漣雲の薄い波目を、靜かに移る月に眺めいつた。空は水色をなして、月の姿も、海べに眺めた時よりは薄白く褪せて來てゐた。彼は、かうした眺めに見いる時、よく稚い戀に惱んだ年頃の自分を思出でる。だが、今は、其處に身を浸す氣持でもなかつた。併しなほ、彼は暫らく、その窓際を離れなかつた。そして、彼は此麼ことを思つてゐたのである、――境遇の壓倒と自分の氣弱さから、自分の最初の戀情は虐げつくされて了つたのだ、そして其後、自分の寂寞な一人勝負の數年が過ぎた、そして第二の戀情は束の間の友情と死に依つて止めを刺されたのだ、自分には、さうし

た世界が終に惠まれないものなのであるか？自分には、さうした感情的素質が稀薄なのであるのか、自分の美しくない容貌がそれを裏づけてゐるのではないか。或は、貧寒な生立ちの中に、總ては萎蹶して了つたものなのだらうか。だけれど、若しも自分の天性が熱性的であるならば、それらの事情は、無いに等しいものではないのか。矢張り自分は、寂しく影薄く生れ付いたものなのではないのか。……

彼が此麼ことを思つてゐる時、家裏に片端の見える杉皮葺の芝居小屋の片隅に、佇む人の姿が見える氣がした。彼は自分の氣持が湧かすであらう、其麼幻を嗤つた。そして又、幾らか薄氣味わるく、そこを避けようとした。だが彼は薄靄に流れる青白い光の中で、まもなく消えた人の影を、もう一度見た樣な氣がした。――彼は薄氣味わるく、又輕い吐息をはいて、其處を離れて 自分の寢具を投出し初めた。

そこへ、辰子の言付けで毎晩兄の寢床を用意に來る美佐子が、やはり寂しく屈託げな面持で上つて來る。そして言葉少なく、兄の寢衣を敷いて、下りて行く。恭助も寂しい氣持で、浴衣を寢衣に着換へるのであつた。

六

『よろし！それで全部だ。』

時造が叫ぶ。彼の頬から額から汗が瀧のやうだ。

『いゝかい！』馬夫が叫ぶ。

『まだまだ、お菓子の箱が――』美佐子が、これも汗だく／＼で走つて來る。

『なあんだい！』

『だつても。』

馬夫は、呟きながら、山の様な積荷の上へ其荷を括り付ける。

『大丈夫？』

『大丈夫だとも！』

『時造、――では、さつき通りの話でいゝのですね。』寡婦が、洋傘の尖を叩きながら、外出姿で店先へ廻る。

『えゝ、さうです。』

『さう。――』と頷いたが、そこへ二階から下りた恭助を認めて、

『ではお留守居を頼みますよ。』

和やかに微笑みかけて、すた〳〵と歩きかける。

『今夜戻る？』

『いゝえ、――向ふから時造や辰子の方へ廻るから――』

恭助は頷いて、其寂しげな併し健げな母の姿を見送つてゐる。

『やあ、お待ち遠。――荷物は？――さう、馬車へのせた？』

時造が、用の濟んだらしい顔で、店先に腰かけてた男に聲をかける。男は、退屈した容子で立ち上る。その伊達な風體が、旅の役者らしいのだ。

『さう、さう』

一旦家を出た時造が、又何か思ひついて戻つて來る。

『美佐子！美佐子！』と閾際から叫んで、『あのねえ、お前でも辰夫でも、來る時に、地半紙を五帖。忘れずにだよ！』

『はあい！』と奥で、長柄の箒をさげた美佐子が叫んでゐる。そして跡ぶすくさと、『兄さんが寄つて、持つてけばいゝに！』

『忙しいんだよ！』時造は言捨てゝ行つて了ふ。

美佐子は、出て來て、繩屑や紙片の散つてる店先を掃き出し初める。

『おも行くの？』

『えゝ、そして俊子と入り交りですの。』

美佐子が、くさ〳〵した調子で、ぶつつける様に云ふ。今朝もう、辰子や俊子や時夫まで、役者だちの一座と、礦山の劇場へ先發したのである。――極りきつて、月の央ばと初め二回、興行の度毎に、この騷ぎなので。だけれど、今は一家を支へる主要な生活資源がこゝにあるので、その度毎に、一家出拂つて、二里程奥の礦山まで出懸けなければならないのである。わけても、今は一家の主脳を司る時造と辰子の、此日の緊張と督勵ぶりは、なか〳〵容易な事ではないのである。

美佐子は取片付けが濟むと、店の見える座敷に茶ぶ臺を据えて、茶の用意をしながら、家脇の恭助に聲をかける。恭助はひつそりした家の氣配を喜びながら、入つて、茶を啜る。

美佐子は、それも終ると、裏の椽に出て、髮を梳き初める、その間も、彼女は何か苛々しいのである。

『小父ちやんは、今日、お留守居？』

から聲をかけて土間に立つのは、隣家の寡婦であつた。

『え〻。』
『小母さん、お茶。』と美佐子が、髮の根元を括つて上へ釣しながら、叫ぶ。
『有難う。――美佐さんは、これから?』
『え〻。』
『小母さん、お茶。』恭助が言ふ。
『まあこれは。――』と寡婦は、腰をかけたが、猶勸められて、上へ上りこむ。
『小父さんも、鬱晴らしに、お出かけなさればい〻に。』
『本統に、兄さんも、いらつしやれば善い。』
恭助は唯笑つてゐる。だが、彼は、今朝氣輕相に、寡婦へ茶を汲みながら、此麼ことを話し出す、――
『――でも、これで、僕だつて、もとは相當家の平併をしたものなのね。此頃まるで、物臭さになつて了つたけれど。――かうして家にゐると、一つ一つもとの頃の事が思ひ出される。……僕も、もとは、母さんと、よく方々の芝居小屋へは円掛けたものだつたよ。家の芝居小屋でも、仲店の番や下足番は、隨分したものだつた。……それが此頃、骨惜みになつたことは!……』
『だつても、此麼ことしないつたつても、善い身なんですもの、ねえ、美佐子さん。』
『でもないさ。』と恭助。
『澤山月給でも取つて、皆を樂させておあげなされば、……』
寡婦は、髮を結ひ終つた美佐子に、話しかける。美佐子は、當惑げに笑つてゐる。

恭助は笑ひながら、氣樂らしい顔付で眞意を蔽つて了ふ。其内に、寡婦の話が、近所の醫學校を出た息子の話や工學士になつた知人の話に移つて行く。恭助は或、感情を以てそれを聽いてる美佐子の少女らしい顔を脇から見戍りながら、漸々と沈默におちて行く。その頃、寡婦の上の娘が忙しさうに走つて來て、「母さん、お客さま」と、寡婦を引つ立てゝ行くのであつた。――

あと、美佐子と恭助は、又ひつそりして了ふ。美佐子は、結ひ立ての頭を下げて、婦人雜誌の口繪か何かをめくつてゐる。

『もう出かけねばなるまい?』

『えゝ――』と應へて、美佐子は暫らくもぢ〳〵してゐたが、『わたし、ね、』と兄の顏を見て、又、下を向いて了ふ。そして、もう、彼女の眼には、涙が溢れて來るのである。

『何?』恭助が、靜かに、少し感傷的に訊ねる。

『わたし、』と美佐子は又句斷つて、『いつ迄兄さんや姉さんに厄介なつてゐるのも氣の毒ですからね、――どこか、他へ行きたいと思ひますの。――』

『だつて、――どうして?』

美佐子は胸が詰つて、直ぐ應へられない。恭助も暫らく默りこんでゐる。

『私は、我武者羅者で、家の子供だちの躾けにも惡いと言はれるのですから――』彼女は、無念相に、又羞らひながら言ふ。

『だけれども、お前――』と言つたが、恭助は、妹を見凝めて暫らく口を噤む。

『ふうむ。――いろいろ、僕も考へてはゐたのだけれどね。いつか、母さんの話では青木の方へ戻る話にならないか、と云ふ口ぶりだつたけれど、――今では、向ふで嫂を捜してゐるし、僕自身、それに賛同する氣持でもなかつた。寧ろあの事では、僕が自分の計らひ過ぎた行爲を、羞ぢてゐるのだけれど。でも、あの爲に、お前の性情が、どう變つたとも思へないのだが、ね。――併し、僕は、かう考へるのだ、お前はお前の其氣質をもつて、又他へ嫁ぐなり、獨り住むなりしなければならないのだ。そのことを、自分でも、ようく考へて見ねばならない。――』

『兎も角、僕も思つてゐたことなのだが。お前は、此家に長くいつ迄もゐると云ふわけには行かない。他へ嫁ぐか、お前の思ふ樣に外に出て働くか、なのだ。僕は、その何れに贊同していゝものか知らない。全く知らないのだ。』と話しながら、熱心になつて、『いゝ處があれば嫁ぐも善いと思ふけれど、どんな處が善いものか容易に知ることは出來ない。半ばは、お前の意志に依ることなのだけれど。――また、外へ出て働くと云ふことにも、母さんや姉さんの思ふ樣な危險がなくはないのだ。だから、傍から、僕はどう指示していゝものかを知らない。悲しい氣持なのだけれど。

『で、若しも、お前が飽迄、外へ出て働きたいと言ふならば、その意志だけは、こんどの興行でも終れば、母さんや姉さんに通してはあげよう。……だけれども、今の處お前の手が拔ければ、此家でも困るではないのだらうか。……』

『いゝえ。』と美佐子は、低く遮つて、『でも、いつか義兄さんは、他人の方が却つて使ひいゝと仰有つたし、俊子もゐることですし、』

『さう言へば、さうだけれど、』

『それに、叔父さん夫婦が來る話ですし、登代子姉さんを呼ぶが善いと、義兄さんは言つてられるのですから、』

『うむ。――さうもなれば、お前は、閑になるだらうけれど。――だからと言つて、そんな形勢からひがんで身を退け

るのだつたら……』

『いゝえ。さうぢやない、ですけれど……』

『ふうむ。――よしよし。その内、母さんに善く話しておいてあげようけども、ね、』恭助は、自分の抑えきらない氣持を羞ぢながら、さう言つて、『だけれど、若しお前がさう、自分を厄介者のやうに考へるのだつたら――僕は、僕自身をどう思ふべきのかね？はつは』

から附加へて、美佐子をいたはる樣に、そして又自分自身に苦笑を浴せかけるのである。

美佐子は、それに對しては、何も應へなかつた。――

『さあ、餘り暑くならうちに、出かけるが善い。――先刻、義兄さんが言つていた用事を、忘れないで、ね。』

美佐子は、やがて、洗立てのさつぱりした浴衣に着がへて、荷物の風呂敷を背負つて、どこか寂しげに、家を出る。――途すがら、彼女は思ふのであつた、――自分は、大勢の家族のうちで何とはなしにあの兄が一番好きだ、何故さうなのかは、自分でも知らない、だけども、あの兄と自分とは、凡そ隨分異つた性質に産れたものだ。どうして兄は、あゝしてあんなに靜かに落着いてゐることが出來るのだらう、自分は、それに比べると何と言ふがさつ者なのだ。さう思ふと、彼女は自分が悲しくなつて來る。――だけれども、自分は、どうしても、あの家に居て落ちついて、姉や母の言ふやうに、他に嫁ぐ氣持にはなれない！一ころは、さうした母や姉の慫めに從ふ氣持でもあつたのだ。だが、矢つ張り、自分には、まだ其麼人の嫁になどなる資格がないのではないか。折角、兄の好意から、吉本に嫁がされる筈であつた自分は、どうしても其處に居つくことが出來なかつた。その後だつて、自分の身に何が備つてゐるだらう？矢つ張り自分は……矢つ張り……美佐子は、暑い日中を、荷物を背負つて、汗だくだくと急ぎ行くのである。そして、さう身を

落しめて考へ廻らしてゐるうちに、ふと又混雜しながらも、家の人々とゐることの心易さが、夢のやうに柔らかく胸を取罩めても來る。彼女は其幻に捉はれる瞬間、眼に湧く涙と顏を流れる汗とを一緒くたに、浴衣の袂でぬぐひまわして又せか〱と、山手の道を急ぐのであつた。

七

恭助は、家ぢゆう全く獨りになると、靜かな明るい部屋に茶ぶ臺を前にして、日の暑さもさう氣にしない樣に、煙草をふかしながらいつまでか、つくねんと座つてゐた。そして、何か、思ひ浮ぶまゝに消えるまゝに、思ひ耽るのであつた。――

彼は、今、貧しい學生としての下宿住ひの窮屈さ見窄らしさに比べて、どんなにか悠長に、何處かに甘へてさへも、此處に起臥してゐる自分を思つた。彼は記憶にある幾年此方、家に歸る度に常に、此處の貧しさにも拘はらず、尊貴なるもの丶如く取扱はれた自分を思つた。だが、其頃の自分は、其取扱ひに慣れるには、良心が尖り過ぎてゐた、或は自分自身の暗弱が、其座に悠然と坐るには、餘りに苛立ち過ぎてゐた。今は、それが、どうであらう?

自分の良心がルーズになつたのであらうか。自分自身に或信頼が置けるやうになつたのであらうか。或は、此家の幾分の裕かさが、自分に此悠然さを許すのであらうか。――兎も角も、自分自身が、今、漂はされた舟の如く方向を失ひ動もすればルーズな氣持に身を委せようとするものなことを、欺くわけには行かない。こんな存在は、今更ながら、何を意味することなのだ?

道を求め、自立を得ようとして、悶く丶も躓きながら今日まで來た。そして今全く、弛緩狀態に陷らうとしてゐるの

だ。自分は、こゝから、どう動きを取れば善いのであるか。――去年の今時分まで、自分は農夫になつて了はうと思つてゐた。焦燥から獲た病の豫後、眞に自由な蟠りない生活を今度こそと希ひながら、自分は共農夫生活を、どんなに待ちこがれてゐたであらう。併しそれも、今は、許されぬものなことを、見ねばならなかつた。嘗て鋤犂の經驗がなく、一畝の土地も有しない自分は、妹の美佐子が嫁づく筈の吉本の一家を心あてに、親しい友だちとの田園生活を想ひ描いてゐた、だが、美佐子の緣談を中心とした複雜な氣持の問題が、自分の最初の決心を阻礙して了つた、加之、農夫生活に投じようとの意志が、未だ全心的でないことを、知らねばならなかつた。自分には、惱ましくも嘗て放たることのない、一つの執心がある、それは我の確立、我の表現、それであつた。その道が、いかにし最も善く成就されるか？此執心が、いつまでか自分を、迷はしめてゐるのである。――

自分は、自分の內なる素朴な世なれない粉飾ない性格の一面に氣づいてゐる。と同時に、現在の自己意識に確認される丈けの自己に滿足できない或氣持がある、現在の自分を、――それは內なる素朴さへも暗く蔽はされ勝ちでゐる、ー斯くの如きものとし、それに屈從して了ふには、尙多くの若さと野心とが有る。生立や境遇や宿劫的阻礙に依て虐げられ、未だ伸びることの出來ない、內なるものが存在する。さうした者が、己を迷はせ同時に己に希望を懷かしめる、止み難き執心なのである。

仲間の多くが、護られた長い修學の後、飛び立つやうに社會へと身を投げ拔手を切らうとする中で、爲すなきものとして、迷へる者として、自信なきものとして、此貧しく慌しい家に、而も貧しく追ひ立てられてる人々の尊重と親愛を偷んで、ぬく／＼と座りこんで居る自分！加之、動もすれば、その自分に自分、も亦幸福な仲間と同じく、社會の據ゑ膳に座り、社會のお裾分けに預つて、紳士ぶりを擬ねようとする心意さへ、湧かなくはない。寧ろそれが、素直な正直

な道なのではない。かとさへも囁くものがあるのだ。何たる哀れさであらう。

恭助は、それこれを思ひながら、――數日前、義兄や姉の勸めに從つて、前齒の隙は薄幸の兆だからと、其處へ金齒をつめさせる事にした、自分を思起した。のみならず、彼は、猶幾所にか金を詰めさせることにした自分の心狀を思つて思はず、右手の指で自分の齒ぐきに觸れて見た。そして、――自分の遊惰心も享樂心も許すことなしに、尚又自分の社會的な義務心をも拒むこと多くして、焦燥りつゝ來た自分の、今見出でる境が何であるかを、もう一度思ふのであつた。彼は、さうした影の如き自分の存在に比べるならば、自分の母にしろ姉妹にしろ、彼等の方がどんなに自然で素直で正直であるだらう？とさへも思ふ。だけれど、その彼等が又どこに行き着くものだらう？さう思ふと、彼は其處にも、さう積極的な氣持の應へは見出でられない氣がする……。

恭助は、かうして半ば獨りを樂むやうに、美佐子の用意して行つた晝の餉も忘れて、座りこんでゐた。午後暫らく過ぎると隣家の寡婦が、又冷やした果物をもつたりして、談しに出かけて來る。恭助は、もう晝前の氣輕さは何處かに見失つて了つて、唯默々と受け應へてゐる丈けであつた。寡婦は、稍々間の拔けた形で暫らく談してゐたが、盡きやうとする雜談の末に、

『……今、角の秀夫さんが、家の前を通りましてね、……中々はいからさんで……』と其麼ことをきつかけに、その齡にませた少年の事で、「家の俊子さん」にも少し氣を付けておゐでる方がいゝ、と思ふのだが……と、其麼話を仕出す

『……實は、辰子さんも、それに氣付いてらつしやるのですよ。――こんな事、小父ちやんに言つては、どうかと思つたけれど、矢つ張り小父ちやんから、俊子さんに靜かに仰有る方がいゝと思ひまして、ね。……兎に角、若い年ごろの人だちだから、さうして又、俊子さんがあゝおつとりしてゐる人ですしね、……秀夫さんもあれで惡い子ぢやないけ

れど、何と云つてもまだ、……』

と寡婦は、少しむつつり聽く丈けの恭助の前で、一旦談し出した事でもあり、ずる／＼と喋舌り續けて行く。恭助はどこまで行つても、稍々迷惑らしく、又羞らひながら、耳を傾けて聽いてゐる。――寡婦は、ずる／＼喋舌つくした末が、どこか手持無沙汰の形で口を噤むのであつた。

『みんな年ごろですからね、――』恭助は自分にも厭な言葉で、寡婦の話や氣持に、簡單な括りを付けるやうに、此麼ことを言ふだけである。――やがて、寡婦は、話つきたやうに立ち去る。恭助は、其跡で、かうした事に對する、周圍の好奇心や監視的な眼が、どう効果を及ぼすものか、又其年頃の戀愛の意味がどこにあるのか、そんな事を思つて見たりして尙しばらく座りこんでゐたが、それにも飽きた樣に、家裏の方に出て行く。

何處からか戻つて來た辰夫が、慌しく小聲をすまして、

『厭になつて了ふなあ。』とべそを搔き相な顏しながら、又今夜の手傳の爲に、用もなげな兄を羨みながら、足早やに家を出て行く。

恭助は其姿を哀に見やつてゐた。

まもなくそれと行き違ひに、俊子が礦山から下つて來る。

『辰夫に會つた？――』

『え、――いゝえ。』

俊子は、突嗟の間に、少し曖昧に應へて、裏手へ通り拔ける。恭助は、會ふ筈だがなと思つたけれど、其儘にして了ふ。

俊子は着がへをすると、間もなく、夕方の仕度にかゝる樣子であつた。——

恭助と俊子と、二人ぎりの夜は、靜かになつた。俊子は、蚊遣を焚きながら、急ぎの縫ひものにかゝる。其傍で、恭助は寢そべりながら煙草をふかして、本を開いてゐた。彼は一旦自分の部屋へ引揚げたのだけれど、又直ぐ下に下りて來たのである。だが、開いた本を讀み入るやうにも見えなかつた。

海から吹く風の微かに涼氣を通す夜であつた。間もなく、霧ごもりに、月が高く登つてゐた。恭助は、展べた布の上に火熨斗をかけたりする、俊子の靜かな物ごしを眺めながら、此妹に潜められた熱情的な性質に就て、思つたりしてゐた。——まだ幼い頃、其姉の一人が彼女の人形の着物をそおつと他に流用したりしたのを見付けて、温柔な彼女が火の樣になつて、其姉に獅嚙みついたりした、其麼記憶が思浮んで來た。恭助は、俊子が幼い頃里子にやられてゐた爲もあらう、美佐子などよりは此妹に親むことが少なかつた。だけれど、今夜、彼は此妹が哀れに愛しまれるやうな氣持なのであつた。——が、彼は、それを、どう表現して善いのか知らない。唯靜かに、傍から彼女を見戍つてゐるだけなのである。

俊子は針を運びながら、靜かに兄に、話しかける。——

『今夜は、乾度、大變な入りでせうね。』

『あゝ、お月夜だし、ね。』

『もう小屋が、一杯になつてゐるでせう。それは、早いから押寄せるのですから。』

『家ぢゆう、六人行つとるわけかい？』

『えゝ、——それに、赤ん坊と、七人ですわ。』俊子は輕く笑つてゐる。

『今夜こそ乾度、仲店は繁昌ですよ。氷屋もすると云ふし。』と彼女は、何か美しいものでも想像するやうに、優しく

静かに言ふ。

『仲店は、家一軒なの？』

『えゝ。──姉さんや美佐子さんや辰夫の外に、貴子が三人もゐるでせう。それは〳〵賑やかなものですのよ。坑夫のおかみさんや子供なんて、まるでお祭りに來たやうな氣持なのですのね。そりや、役員の人だつて飯場頭だつて、坑夫だつて、みんな麦酒や正宗の瓶を並べこんで、酒盛りしながら、芝居を見るのですもの、──娯みなのでせうねえ。』

『さうねえ。』

『兄さんも、一度行つて御覧になるといゝ。──ふゝ、だけれど、喧嘩が怖うございますの。もう、少しの事に、罵りあひ、撲り合ひなのですもの、一度なんて……』

と、俊子は、礦山の夜に有り勝ちな血塗れ騒ぎの恐ろしさを、優しい併し眞から恐怖を感じたやうな調子で、細々と話する。

『其晩は、匕首を持つたり棒を携へたりして、坑夫がぞろつと芝居小屋を取卷くつて騒ぎなのですもの、役者と坑夫の喧嘩でしたのよ。……兄さんや母さんは、そのなかを、仲裁に馳け廻るのでせう、私や辰夫や姉さんやは、桟敷の隅に小さくなつて顫へてゐましたわ、もう白らぐ〳〵夜のあける頃まで。……あれが厭ですのねえ。……入りがあつたり、仲店の商ひのあるのは嬉しいけれど。』

恭助はそれを聽きながら、自分の一家ぢゆうが、打揃つて生計の營みの爲に、不健康な夜を更かしてゐる態を、瞭りとそして哀しく思ひ浮べた。囃の太鼓や、人々の騒擾が賑はしく響いてゐる、芝居小屋のさまが、目の前に浮んで來る。そして、其無意味や混雜を嫌忌しながらも、又其騒擾や音響に惹り立てられて、今夜も明日の夜もと、其中に半ば夢中

で捲き込まれてゐる、——さうした過去の自分の記憶も思出でられる。……今もまた、さうした同じ空氣の中で、辰夫や葵佐子や其他の一族が、忙しく働き廻つてゐるのだ。さう思ふと、恭助は、流石に哀れな氣持になるのであつた。俊子は、話が盡きてもうとろ〳〵と眠さうにしてゐる兄に、寢床を展べてやつての後までも、急がねばならぬ縫ひものゝ仕事にかゝつて居た。そして時をり、彼女は彼女で、自分自身の悩ましい思に胸を締めつけられるのである。

——夕方、礦山からの戻りに、秀夫と出會つて話してゐるうちに、弟と行き違ひになつたらしい。ふいと兄に訊ねられた時は、本統に困つて了つた。と、稚ならしく其麼ことも思出される。俊子は、本統に秀夫が好きで堪らなかつた、その好きさが、何處まで募るものか、自分でも分らない。秀夫が、年よりかませた、そして自分が思つてゐる外の素振りも見せることもあるのを、彼女は覺つてゐるのだけれど。其麼時の厭な氣持は、直ぐ掻き消されて、愛しい氣持になつて了ふ。彼女には、それがせつない位なのであつた。

とは云へ、彼女達の間柄は、まだほんの他愛ないものに過ぎない。秀夫が些細の俸給からくすねて、何か髮の飾りでもを俊子に贈るならば、俊子は俊子でそれに當惑しながら、又何かを愛人に贈り返さねばならないと心を使ふ、そして男のものを購めるにも、其店のものから心を見透かされる様な氣がして、購める處にも迷ふ、と云ふ程のものなのであつた。——だが、さうした罪がましい氣持に壓倒される程の稚ならしい戀情なのであつたけれど、彼女の胸には、いつのまにか辰子や近隣のものゝ監視的な眼に對しては、本能的な反抗の氣持が燃ゆることが多いのである。

今度も、姉さんは、此急ぎの兄の着物の仕事がなかつたならば、私を此處へ殘して置きはしなかつたのだ、——と、俊子は、そんな事も思つて見る。彼女は、さう思ひ悩みながら夜半過ぎまでも、ぢつと仕事にかゝつて、其縫ひものを時々[illegible]てに仕上げて了つた。そして疲れて、妙に頭だけが冴えて、後架に立つ頃、家裏つゞきの田圃には、海からの

霧が一面に押し寄せてゐて、傾いた月の夜がもう朧ろに朧ろに更けてゐた。俊子は、その物音ない靜かさに耳を澄ませて、暫らく裏の縁先に佇んでゐるのであつた。

八

翌る日の朝、早く、時造は元氣な容子で、鑛山から自轉車を走らせて來た。その自轉車には、まだ寢ぼけ顏の時夫がハンドルに確かり掴まつて、一緒に乘せられてゐる。

時造は寢不足の蒼い顏をしてゐたが、非常に元氣らしく見えた。――

『それはえらい入りでしてねえ。四時ころには、木戸を〆切つて了つたですよ。――それに、仲店が大繁昌で、幾つも品切れが出來て仕舞つて、――』と、店の間に胡座をかいて、木戸の揚りや仲店の賣揚の勘定を初める。

小さい角の手提鞄から、紙屑のやうな小紙幣や砂礫を崩すやうな銀銅錢が、疊の上に打ちあけられて、それが四角な札の束となり、幾本もの錢棒に取片附けられて行く。その手仕事が、時造に取つて、如何にも得意でさうして愉快らしく見える。

『實に、こんな小錢の扱ひなんですからねえ、木戸に座つても、慣れないうちは、隨分間違ふものですよ。慣れて了へば、殖えるとも、減る心配はないのだけれど。』と、又、

『おい！俊子。勝手の方が終つたらね、大急ぎで、停車場まで行つて吳れ。今朝上る荷馬車に積んでやるのだからね――』と叫ぶ。

伜の時夫は、父が投げてやつた銅錢を拾つて、一人で近所の菓子店に走つて行く。

『恭さん、お小使ひは？』

時造は、調べのついた札束や錢棒を再び鞄に收めながら、言ふ。

『いゝえ。』恭助は、先刻から義兄の錢勘定の容子を眺めてゐたが、むつつりした調子に少し苦しい笑みを見せて、應へる。

『――あんまり氣持のいゝ、景氣のいゝ興行場なので、色々蝕つかむ奴がゐましてねえ。こんどから、會社で主にやるつて話もするらしいですけれど、なあに、會社の役員や飯場頭に、半年と續くものですか、こんな煩さい世話が。だけれど、新しい入札請負つて事になると、又それを覘ふ仲間が出て來ますからねえ、――』と此麼話をしながら、時造は朝の食事が終ると、仲店の賣品を調へるので、あの店この店と馳け歩いて、それを荷馬車に積込ませて、又礦山へ自轉車を走らせる。

佼子は、今日又美佐子と入れ交りになる爲に、恭助の晝の用意を濟ましたりすると、積み殘された賣品を背負つて、日の漸やく暑くなる頃、礦山へ上つて行くのであつた。

さうして、其夜の興行が終ると、又、翌る朝辰子や辰夫や時夫や母の寡婦や、佼子や、一家ちゆうのものが一仕事を終へた滿足と疲勞の感情に滿されて、賑やかに話しながら、家に戻つて來る。そして其人々と一緒に、手提籠や三味線袋やさまざまのものを擔いだり提げたりした、旅の役者の一群が、ぞろぞろと、押歩いて來る。――その役者連は、次ぎの乘場の確定する迄、二三日の間を、此處の芝居小屋でつなぎの興行をやらうと言ふのである。

常住の離合に慣れた彼等は、時造の手で急に一座に纏め寄せられたのであるが、又主宰を司るものが出來て、跡一場所二場所、暑い興行場のある限り繼續して見ようと云ふ話になつた。そして丁度、時造の處に、衣裝一切があるので、

母の寡婦を説き落して、暫らく一座の後見なり先乗役なりを頼みこむことにしたのである。辰子の反對があつたけれど人の善い時造も寡婦も、それを拒はりきる事が出來なかつたのである。

ひつそりとしてゐた家の四邊が、又騒がしくなり出した。朝の間から、美佐子が掃除し廻はつた樂屋や役者部屋に、役者の調高い聲がひゞき、家中家脇を出入りする彼等の音聲や足音が、さは〳〵と四邊に騒立ち初めた。

『茶碗が三十？それからお小皿幾枚？』

『蒲團は？――樂屋が十枚？それから、五枚に七枚。二階は？』

役者の手ざうよや、夜具の配布が初まるのである。恭助のゐる部屋の隣にも、一座の頭梁らしい役者夫婦が、假の居を占めた。

『さあさあ、道具師さん！ちよつと手傳つて呉んな！』

『おいおい、大急ぎ。役場までだよ、此次ぎの汽車で、願ひを濟ませて來るんだから。』

『ちよつ、ちよつと、待つた。――其幟は裏口へ廻して呉んな。餘まり見つともねえや。――よしよし。幟竿はもう要らないよ。幟の方が、これつきり無いんだからね。』

『おうい、席看板を上げるんだよ、誰か手を貸して呉れよ。――仕様がねえ奴等だな！』

と、其裏騒ぎの中に、今夜からの興行の手配が全つかり付いて了ふ。そのうちに、晝と朝と一緒の食事が出て、衣裳屋の着物を借りた男が、町廻りの車に乗つて、太鼓を叩きつける。殘つてゐる連中は、直ぐもう蒲團を枕にして寢いる奴がある。樂屋の隅に圓座をつくつて博奕を初める奴等がある、火の無い爐を圍んで他愛ない話にはずむ連中がある、そしてそれにも飽きると、善からぬ野心で町の茶屋小屋を覗きまはる者や、小供のやうに雑魚網をかゝへて飛び出す者

や、――中には、小さい太神宮の棚を飾つて燈明を上げたり茶を啜つたりしてゐる、神妙な仲間もなくはないのである。總てそれらは、各自の竈と閨室に籠りすぎてる四隣の町人に取つて、見る度毎に新奇な、何か心を慫るものゝやうでもあつた。そして、これらの光景を眺めながら、井筒の傍に佇む近隣の人々も少くはない。

恭助は其日、自分の部屋に、一人の客を迎へてゐた。それは、此近隣の海水浴場に避暑してゐる、――恭助が大學頃知合ひだつた、――今は知名の、青年作家の一人であつた。

『やあ、色んな好い材料があることでせうなあ。――』こんな事を言つて、其青年作家は、何ごとにも好奇心の働く眼で、隣室の役者の方を壁ごしに覗いたりする。

恭助は、珍らしくもない容子で、かうした旅から旅を歩く仲間に行はれる、様々なスキアンダルス――子女の誘拐や、拐帶や、同性情事や、平氣な離合遁走や、その他の様々な生命の浪費とでも言ひたい出來事や生活の態について、物うさうな話を續けるのであつた。

『――けれど、此頃の僕には、どうしたことか、それらの事が、それらの事を仕出かす彼等の存在が、まるで無感興になつて了つたのですよ。――と云つて、何處へ、自分の全心を集注すべきのか、薩張り見當もつかないんだけれど、……』恭助は、屈託相に、こんな事を言つて、生々と創造の慾に滿ちてるらしい詩人作家の風體をまぢ〱眺めてゐる。――その間にも、姉の辰子の心づけで、弟の許への賓客を歡待する酒食の膳が、あれこれと運びこまれるのであつた。そして、主人も客も、いつの間にか、ほろ醉ひの機嫌になつて、赧い顔を見合はせてゐるのであつた。

下では、辰子が、さうした心遣ひをしながら、又役者達との應待や、店々への支拂のことに忙しいのである。そしてそれらの事が一先づ片が付いて來ると、母や妹達と一緒に團欒をつくつて、茶を淹れたりしてゐる。

『まあ、思つた程のことはなくも、相當にはなつてますのね。――何と云つても、仲店の儲けは、きいものですわ。食べもの商ひと云ふのは、割のいゝものですのね。……だけれど、お母さん、こんどの一座には、出來るだけ深入りしない樣になさいましよ。あゝ泣きこまれて見れば、仕樣ないものゝ……』

『分つてゐるよ。お前、乘場の決まつてる處だけで、あとは解散するのですからね。』

『それが豫想通りに行けばいゝんですが、ねえ。――間もなく風祭りになるつてな話で長びくんですから。』

『大丈夫さ。』

寡婦は請合つた樣に言つてゐる。辰子も、今は話を換へて、

『美佐子。――山三へ行つて、お前や俊子のにする浴衣地を貸して貰つておいで。――母さんも、一反、どう?』

『私は、いらないよ。』と寡婦は、ぼそおつと言ふ。『父さんの郷里へ行く時につくつたしね。』

『だけど。……』さう言つたが、母の氣性を知つてる辰子は、『ぢやあ、まあ、お前達のだけ借りておいで。――』と言ふ。

美佐子は、元氣に、走り出して行く。

さうして、彼女が浴衣地を自分の手にさげたり、店の小僧に背負はせたりして、戻つて來る、その間のことであつた。――勝手口で、辰夫と何か言ひ合つてゐた俊子が、突然ひいつ!と悲鳴を上げた。そして直ぐ、音を嚙み殺して治まつて了つたけれど、まだ容易に、啜り泣きの音がやまない。それに、辰夫の罵りが、尙續いてゐる。

『どうしたの? 何をしたの?』

赤兒を抱えた辰子が、立つて行く。

俊子は、兩腕を額の前に組合せて、泣顔を隱してゐる。勝手の上框に、青いいら〳〵した顏付の辰夫が、立つてゐる。

『辰夫！姉さんを打つたりして、何です！』と彼女は睨み付けて、『礦山にゐるうちから、意地わるばかりして、何が不服なの？』

『勝手にしろい！』

辰夫は、母の寡婦まで立上つて來相な形勢を見て、ぷいと裏手へ出て了ふ。

『本統にきかなくつて！俊子、俊子も　そんな、――もう、泣くのはお廢し　』

辰子は、ぷり〳〵して座敷へ戻る。

辰夫は、埒もない事で、唯氣持がいら〳〵してゐる許りに姉の頭を撲り付けたりしたのを、後悔しながら、自分で自分が悲しくもなつて、仲間の川干しの方へ走る。その間も、彼は悔ひながら、又屈しきれない、反抗的な氣持を味ふのであつた。

『糞つ！馬鹿どもが、……』

美佐子が戻つて、浴衣地が展げられると、辰子や母の寡婦や俊子や、役者の細君連まで相寄つて、品柄や直段の評定が初まる。そこへ、時造が、自動車で、威勢よく戻つて來る。彼は、興行の跡片附けや會社への支拂勘定を濟ましてゐたのである。彼も一座に加はつて、反物の評定が終ると、思ひ出した樣に、

『さうさう。今、齒醫者の處へ寄つたら、齒が出來てゐましたよ。――ほら、私のは、かう入れて貰つた。』と、齒齦を現はして、入れた金齒を指ではぢいて見せる。

『婆さんのは、今齒醫者が、持つて來て、工合を見るつて。』

『それは丁度いゝ。――C――町行に間に合つて。』と辰子が、夫の金歯を眺めながら呟く。

『C――へは、何日頃出かけるね?』と、母の寡婦。

『さあ、こゝの興行が終ると直ぐ。さもないと、次ぎの興行の心配が來ますからね。――だけれど、恭さんの都合は。どうか知ら?』

『あれは。いつだつて、いゝでせう。』

『さう。』

そんな話の處へ、顏を赤くした青年作家と恭助が、下に下りて來る。そして賓客の作家は輕く會釋して、外に出る。恭助は、妹だちが各自に選んだ浴衣地を眺めたりして、醉ひ苦し相な面持である。そこへ、又、齒醫者、――正しい免許のない入齒師なのであるが、――が、出來上つた恭助の入齒を携へて、やつて來た。

『鹽梅がどうかな。――』

と、彼は、太い指で、恭助の隙いた前齒や下齒の小さい隙間に、金の齒型を、ぐいぐいと押し詰める。そして、赤い顏を顰めてゐる恭助に、

『さう、いゝ工合らしいですな。』と口腔の中まで覗き込むやうにしながら訊ねる。

家族中が寄つたりたかつたりして、その讃賞や批評やが初まる。恭助は、羞かしい氣がして、自分の部屋に上つて了つた。

だけれども、自分の部屋に入ると、彼は又そこの姿見の前に立つて、齒齦を現はしたり齒並を喰ひしめたりして、一生懸命に、工合を取つて見るのであつた、そして彼には、羞恥心と同時に、或滿足の湧くのを禁じえなかつた。――彼

は、自分の容貌がどんなものであるかを知つてゐた、そして其自意識の爲に一頃は隨分と惱まされた、だが其後幾年かそれさへ忘れられ勝ちな孤寂な生活が續けられて來たのであつた。だが、今ほんの僅か飾られた自分の姿を鏡の中に見た時、彼は此麽ことも思ふのであつた、自分にも斯うして、段々紳士ぶりが出來ないものでもないのか？これ迄の自分には、さうした餘裕がなかつたのだ。そんな欲望の湧く餘裕さへなかつたのだ。だけれど……彼は、その次ぎの考に、自分を羞ぢねばならなかつた。――

暫らくすると、恭助は、今去つた知人の詩人らしい風體を思浮べながら、いつもの様に麥稈帽を被つて、海べの方に出かけてゐた。

その跡から、いつの間にか、辰夫が、兄の姿を認めて、追ひかけて來た。彼は親みのこゑを上げて、兄を呼んだ。恭助は優しく振りかへつて、弟の近づくのを待つた。そして、寢不足の靑い顔の神經質な瞳の光る辰夫の、洗ひ晒した短くなつた單衣姿を、哀れに美しくさへも見るのであつた。

それから數日經つて後である。――

母の寡婦は、此處を立つ役者の一座と一緒に、O――町へ乘らねばならなかつた。

「では、Cの姉さんや皆さんに宜しく。――時造は、いつ頃？さう、三晩位泊つて來る？……恭助は、戻りに東京に寄るのですね。……では、叔父に會ふやうだつたら、どうぞ宜しく、叔母にも、ね。……」

と、彼女は、一日か二日おくれてC――の病兄を見舞ふ筈な、時造と恭助に、此麽ことを言ひ置いて、いつも離さぬ洋傘を片手に掴んで、身の周りのものを入れた手提鞄を重さうに提げて、自分の旅に出るのである。

「時夫は？――さう、あれに見つかると又跡を追はれるからね。……」と寡婦は、又姿の見えぬ孫のことも口にしなが

ら、役者達の跡を追ふのであつた。

役者だちの出立した後の家は、まの拔けた樣に、ひつそりとなる。時造も辰子も、十日近く引續いた奔勞から、やつと脫かれた樣な氣輕さに浸つて、どこか寂しく靜かな氣持で、今夜の夕餉のものゝことなどを思ひ合ふ。

『鷄でも買はせておいでよ。鷄がいゝ。』と、時造は其麼ことを言ひながら、又、『――だけれど、家のお母さんの丈夫なのには、あきれて了ふねえ。……』と思ひ出したやうに、言つたりする。

『本統に。――こんどなども、お母さんさへ厭だと仰有れば、濟んだことですのに。』と辰子も言ふ。恭助は脇でそれを聽きながら、相變らず意味の分らない薄ら笑ひをしてゐる。だが、彼の胸は、此家に暫らくでも、母がゐないのだと思ふと、何とはなしに、支柱を去られたやうなうら寂しい氣持に襲はれもするのであつた。そして、其氣持は、同じやうに、美佐子や俊子や辰夫の面持の裏にまでも、讀まれるものゝやうな氣がした。

『おい、辰夫。お前も、跡片附けかね？』

恭助は、まだ貸した道具の收納や跡片附けにかゝつてゐる弟や妹達だちに、こんな言葉をかけたりして、やがて、自分の部屋に上つて行く。辰夫も他の妹達も、兄のさうした心づかひを、どんなにか親み深く思ひ受けるのであつた。そして、ひそまつた家のうちに、――靜かな滿足した氣持さへもつて、取圍む夜の膳は、母なしに彼等にとつては又寂しく、哀れな氣もするものなのであつた。

時造と恭助は、いつもの晚酌を酌みながら、靜かに、こんどの旅立ちの話をしたりしてゐる、――辰子は、その傍でいつもの樣に、二人の酒食の世話である。

『C――の兄貴が、もう少し話が分る男だと、私も行つて、色々いゝ相談があるのですがねえ。……』

と、時造は、疲れて、もう全かり醉つてゐる。そして、義妹や義弟達が、食後、灯の下に寄り集つて、なにかさゞめき合ふ頃、彼は其座敷で、手脚を投げ出してぐつすり寢入つてゐるのである。

『恭助。――ちよつと待つて、あの着物を着て見て頂戴。』と辰子は、二階へ引揚げようとする恭助に、C――へ行くので新調した着物を引被けさせて見たりする。

『丁度いゝ。――ねえ、美佐、丁度あふわね。』

辰子は、眠つたい赤兒を脇に置いて、こんどは物さしを取つても見たりする。

九

時造と恭助が　見舞のものを携へて、二人俥を竝べてC――の姉の家に着いた時、病氣の兄貴は留守であつた。

『兄さんは、其麼に出あるいて、大丈夫なんですかねえ?』

時造は、いつのまにか姉の前に胡坐をかいて、氣輕く扇をあふぎながら、話してゐる。

『えゝ。――大丈夫でもないんでせうけれど、ねえ、ちつとでも善ければ、家にぢつとしてゐられる人ぢやないんだから。――』

姉は、少し訛のある調子で、かう應へる。

『まあ、兎に角、出あるける位の元氣なら、結構ですけれど、ねえ。――』

『さうねえ。』

姉は、金縁の眼鏡の奥に、用心深さうな眸を光らせて、白い齒並を見せて微笑みながら、

『でも近頃は、大層宜しい容子なのですがね。』と恭助の方を見る。
『さう。』恭助は、着なれぬ紋服姿で、ちいつと、時造の傍に座つてゐるのである。
『それは、醫者も、不思議がつてゐる位なのですの。――このごろは、まるで醫者の方は當にしないで、催眠術とか云ふのに凝つてゐるのですけれど。』
『ほう。――』
『あんな事、本統に效くものなんでせうか？』脇手から、姉の傍に坐つた娘が、かう問ひかける。
『さあ。――どんなものかねえ、恭さん。』
『さあ。――』
恭助も、答に窮して、時造を顧みる。
『父さんは、そりあ、信じてゐるんですの。』
『さう。』
恭助は、さつきから窮屈さうに坐つてゐながら、いつか、娘の相貌をほゞ讀んで了つた。だが、娘がちつと視線を彼に向けると、知らん顔して、物靜かにさう應へる。
『不思議な樣な話でしたわねえ、母さん。』と娘は、母を顧みて言ふ。『本統に不思議な氣がしますわ。』
『何しろ、どの博士に見て貰つても、此春きり保たないと云はれた病人が、あゝしてゐるんですからね。――却つて、生き伸びるのかも分らないんですの。』姉は、さう言つて、又秘密さうな瞬きをする。
『ふうむ。――兄さんは、あの氣性だから、病氣に勝つて了つたのかも知れないですなあ。』

時造は、又平氣で、慌しく、扇をあふぎ立てる。恭助は、窮屈な紋服姿にうづくまつて、重患で寢つきりと想像しながら來た病人が、案外元氣で飛び廻つてゐるらしい樣子を思つたりすると、ひとり、何か困惑の氣持が胸に動き出すのでもあつた。――

『旦那さんは、篠井さんに居らつしやいました。直ぐお戻りなさいますつて。』

使の女中が戻つて來る。

『さう。』と姉は、引取つて、時造に、『では時造さん、裏の座敷がいゝ。――淑子、片づけさせて置いたでせうねえ。』

『えゝ。』

娘は立つて、二人を案内する。立つと、懐胎してゐるらしい娘の姿が、微かに眼につく。そして、恭助は、其處の部屋に轉がつてゐる、メリンスの着物を着せた大きな人形に眼を止めて、時造のあとに續いた。

『恭さん、お湯に行つて來ようか？』

二人になると、時造が言ふ。

『さう、直ぐなの？』

『えゝ、直ぐ、此裏よ。』

二人が、身がるな浴衣に着かへて、外へ出ると、女中や下僕らしい者が丁寧に送り出して呉れる。そして、時造も恭助も、まだ薩張りすきな湯槽の中に伸び伸びと、身體を伸べてゐると、病氣見舞と云ふよりも、自分自身の保養に來たやうな、閑散な靜かな氣持になるのであつた。

家事の奔勞から離れて、時造は如何にも呑氣に、氣樂ならしい。恭助は、相不變、さうした自分の氣持を、どう處理

したものか分らぬらしくも見える。

『實にひつそりとしたものねえ。』恭助が、四邊を見まわして言ふ。『これで、夜になれば賑はうのでせうねえ。――』

『そりあ、もう、夜通しだもの。――ねえ、そら。』と時造は、湯窓から首を出して、『其處から、ずうつと向ふまでが貸座敷なのよ。兄貴だちが、此間まで住んでゐたのは、それ、それでさ。――一番大きくつて高い棟。』

『さう。』

『さうねえ、――何しろ、一月三千圓の純益は缺かないつてんだから。――人の娘を買つて來て稼がせる商賣も、大きいものねえ。』

時造は、稍々聲を低めながら、恭助の背に廻つて、背中を流したりし初める。

『それは、もう全かり人に讓つて了つた？』

『いゝえ、まだ〱。――讓るなり、貸すなりした處で、大したものなのでせうが、ねえ。――兄貴が亡くなつたら、到底姉さんや淑子の手では遣りきれないでせう、だから、私だちに來て遣らないかつて、話もあるんですけれど、ねえ……』

『ふうむ。』

『長くやるべき業でもないんでせうがねえ。』

『ふうむ。』

そんな話をしながら、二人は、湯から上ると輕い氣持で、まだ滯まり返つてゐる廓の中を一めぐりして、姉の家に戻つた。部屋には、もう酒の用意などが初められてある。

『やあ、――よく來たの。今、行つて挨拶するわい。』
男のかすれ聲が聞える。時造だけ、さつきの姉の居間に立寄つたのである。
恭助は、膳の取まわしをしてゐる娘に鳥渡會釋して、靜かな庭先を眺めてゐる。
『湯はいかゞでして？』
『えゝ、まるで、すきでした。』
時造が斯う應へて、恭助の傍に立つ。
『やあ、どうぞ、初めて呉れ――』
かう云つて、角顔のいかつい、がつしりした軀つきの男が、――病氣やつれも、さう目に立たずに、やつて來る。
『酒がいゝか。麥酒がいゝか。』
彼は、時造に此麼ことを言ひながら、座について、恭助に雜作のない挨拶をする。
『さあ、どうぞ、樂に、らくに。』
その角顔に、大きな口がぎゆつと裂けて、眼の濁りきつた、だけれど、ぐゆつと高い鼻に氣品と特異な力を保つた、風貌を、恭助は脇手から見戍つてゐた。
『――ふうむ、景氣はいゝかい？この景氣だもの、少しのだゝたなくつちやあ、話にならねえなあ。――』と時造を相手に、片肘を膳にもたせた無作法な態で、杯を口に運ぶ。
『時造も、随分、走り廻つた末だから、これから些つとは、辛抱しなくつちやあ、――ねえ、あんた、人間では信用が第一ですからなあ。』と、此度は恭助に話をむけたりする。

恭助はだんまり口ごもつてゐたが、

『でも、家は、近ごろ、兄さん一人で遣つてゝ呉れますから、――』と眞面目くさつた顔で、此麼ことを言ふ。

『ふうむ、さうでなくちやあ。――阿母さんばかりあてぢやあねえ。』

時造は、その兄貴の前には、まるで小倅のやうにあしらはれて了ふ。

『どうか、是非、兄さんも一度、私の方へやつて來て下さい。――家も、此頃は、幾らか樂ですよ。――』と、彼は、でも、媚びと猾智の捏き交つた調子で、此麼世辭を言ふ。

『うむ、是非わしも、行つて見たい。……だが、なあ、何よりい汽車と云ふ奴が病氣にこたへるので弱るよ。』と、急に不快相な眉をしかめて、『――何しろ、お前、この頃は幾分善いんだけれど、もう死ぬ苦みなんだからね。氣の弱い奴ならとうに駄目になつてゐるさ。わしは娘にも婢にも世話燒かせずに、何から何までしてゐるのだが、一ころはお前、尾籠な話が、夜幾十度となく厠へ立つ、其度毎に血の塊が絞るやうな苦しみで下ると言ふのだ。……まあお蔭で、近頃は幾分いゝのだけどもねえ。』

さう言つて、彼は又、禁じられてる杯を口へ運ぶ。そこへ、娘が酒のかはりを運んで來る。兄貴は、その娘の方を顧みて、

『だが、この頃は、自分の病氣の心配ぢやねえ。これのことで、な、――』と、愛情のこもつた調子で、『また自分の病氣がわるくなる程なのさ。』

娘は、酒肴の皿を換へて、靜かに去る。

時造も、恭助も、もう善い加減に醉ひだしてゐる。

『實に婿らんが惡くてねえ、――』

と兄貴は、時造から恭助へと、視線を廻らせて、『ねえ、飛んだよた野郎を背負ひこみましてねえ。』

『どうしても、うまく行かないんですか？』と時造が口を挿む。兄貴は、それに頓着なく、

『初めは、何なのです、――つまり、仲に立つた野郎に、說き落されたんですがねえ。私は、最初の婿で懲り〳〵してゐるので、二の足を踏むし、娘も好んぢやゐなかつたのですがねえ……』と、婿運のわるい話を、續けて行く。――

『でも、どうしたつて、駄目な野郎なのですよ。娘と二人東京に出して、少し勉强させようと思へば、やあ芝居だ活動寫眞だ寫眞機だと、其麼ものにばかり凝りやがる。家にゐては、其處の木戸を開けて遊びにやらないつてば、あの娘を唯の身でもないのに、踏む蹴るつて奴なんですから。――で、思ひきつて緣を切らうと思つてる處へ、向ふから飛び出して、どこかへ身を隱しやがつたのですよ。そして又、近頃ちよい〳〵と娘を誘き出さうとしてゐやがるんです。私は彼奴の養子籍を拔いて與れ樣と思ふのですがね、惡い奴がついてゐやがつて、私のいのちを計つて、四の五のと言つては事を遲らせてゐるんです。つまり、わしが死ねば跡は厭でも養子のものになるつて腹なんですな――私は、無學で法律は知りもしないが、其麼わけのものな相ですなあ。』

『さあ。』

『私は、あんたが大學を卒業なさつたつて話をきいて、な、さうした事柄に就て、いろいろお訊きしたいと思つて、な。』

さう云つて、恭助に杯をさす。

『さう。』恭助は、杯を受けたけれど、もう自分の頰のほてりが氣になつて仕方ない程、息ぐるしく醉つてゐる、

『でも、よく修業されたものですなあ。いつか、時造にも話をきいたけれど、いや感心なことですなあ。大學を卒業するまで、そりあ容易なことぢやない。――だがもう心配ないなあ。』

獨吞込みのやうに喋舌つてゐる。恭助は、氣持だけは苦々しさに滿されて來てゐるのだけれど、軀にまわつた醉ひから、思ふ樣に物も言へない。

『僕は、……法律の方のことは、まるで、知らないのですけれど、……』

さう云つても、兄貴は、まだ、自分の獨合點を去らない。仕方なしに、時造が、口を挿んで、恭助は法律の方を學んだのではないのだと言ひきかせる。

『ほう、さうかい。――では、何をですい？……ふうむ。――』

時造が、答に困まつてゐる恭助に代つて、雜誌や新聞に原稿を書いたり小說を書いたりする方なのだと云ふやうなことを言ふと、

『ほう。――大分、金になるつて話ですなあ。善い景色を見て歩いたりしながら。』と此麼ことを呟く。

恭助は、變な思惑違ひから來る失望や、相手に對する蔑視の氣持に、身を委ねまいつもりもあつて、――

『だけれど、友だちの中には、辯護士をしてゐる者も、一二なくはないんですけれど。』と獨語のやうに呟く。

『さうねえ、恭さんの友達のなかに、その方の人があれば、好都合だけれど、なあ。』

時造が脇から取做すやうに口挿む。

『なあに、六ケ敷いことはない、いくらでも片は附くのだけれど。――中に立つてゐるをしやがる奴に、鼻を明かせて吳れたいと思つて、な。』と、兄貴は、最後の杯を乾して、

『まあまあ、鬼に角二三日悠くりして行つて下さい。折角、見舞に來て下さつたものだ、私もこの近所あたりならば、一緒に案内が出來るし、嬶もどこかへ案内して上げたいつて言つてゐた、——丁度祭りもあるしな。』

こんな事を言つて、もう一度、時造と恭助の杯に酒を滿して、表てへ立つて行く。

殘された二人は、そこに滿たされた杯を最後にして、二人とも醉ひ苦し相な顏をして、食事のものを口に運ぶ。その間も、時造は、

『あの通りの兄貴なんですからねえ。——』と、恭助に呟いたりしてゐる。

『あれでゝ、金儲けに就ての機敏さと來たら。居眠つてるやうな風で、人の話をきゝながら、ちやあんとぴんからきり迄の算當が立つてるてんですから。……』

二人が食事を終へて、膳の取片附けられた所へ寢ころんで居ると、立ち交つて時造の姉が入つて來る。これから、夜の稼業の帳場へ出かけなければならないのだと言つて、話しこむうちに、自然と、いかにも秘密話らしい調子になつて埒もない何かにの話を、時造の前に並べ立てる。夫が、今あんな病氣でも猶、あの關係した女を近所に圍つておいて、一日の大半はそこで過してゐるのだ、と云ふやうなことまでも話して、——愈々追ひ立てられるやうに、忙しく、立上りながら、

『——ねえ、こんど、あんたの戻る時、一緒に、鄕里へ墓參ながら行きませう。もう二年越、鄕里へは行かないのですよ。丁度いゝ機會でしたわ——』と、そんな事を云つて立ち去る。

時造と恭助は、其處に寢そべつてゐると、二人とも遂ひとろ〳〵と眠いつて了つた。そして恭助が、ふいと充血した眼をあげて、何か氣羞かしい樣に四邊を見廻した時、部屋には燈がともつて、すつかり夜になつてゐた。時造は、まだ、

いかにも快ささうに寝入つて居る。——恭助は、漸く賑はひを増して行く外の氣配に心をとめながら、自分の此度の旅の不得要領な意味を、思ひ墜ちたりしてゐた。

やがて時造も、ぽつかり眼をさます。そして寝床に入るには、早過ぎる時刻を、暫らく街でも散歩して來ようと言ふ。恭助も誘はれる儘に、潮風の低く吹く街の通りを一わたり歩きまわつて來た。廓の中は、今愈々賑はしく、晴夜の四隣から押寄せて來る人波が、夜の海鳴と入交つて、灯のともつた妓樓の軒から軒を押巻いてゐる。

『そこが、兄貴の家の店ですよ。』

時造が、通り過ぎながら指して見せる。軒の高い鐵の格子の中に、華麗な衣裳を着かざつた厚化粧の女だちが、取すまして居並んでゐる。恭助は、羞恥から、慌しくそこを見過ごして了つた。家に戻ると、姉も兄貴も留守で、娘だけが兄弟の居間に蒲團を延べて、大儀さうに寝ころぶしてゐる。その傍らに、例の大きな人形が抱きこまれてゐた。時造と恭助は、そこに鳥渡話こんで、直ぐ自分だちの部屋に引揚げる。

時造は、寝床に身を延べると、殆と同時に鼾になつて了つた。恭助は酔が醒めて來ると意地わるく頭が冱えて、容易に寝いることが出來なかつた。四邊の靜まるにつれて、廓通りの賑はひが、瞭り手に取るやうに聞えて來る。三味の音、媚笑、醉ひどれ、叫び、笑ひ、唄ごゑ、亂れる足音、——それらが、眼に見るやうに浮び上つて來る。嘗て、此世の夜が、淫靡な息ぐるしい吐息や囁きに充ちてゐるやうな幻覺に、惱まされる事のあつた恭助は、今亦、さうした世界が餘りに耳近く又眼に近く花開くのを感じた。そして彼は、寧ろ惱まされるよりも、驚きと樂みに似た感情で、暫らくは眠に入ることが出來ないのであつた。

いつのまにか、隣室には、時をり苦しげな呻きを立てる、病人の兄貴が、寝ぐるし相に寝がへりを打つてゐる。恭助

の眼の前には、幾つか幾つか淫靡な幻影が、消えては又現はれてゐた。そして此取籠められた夜の世界の中で、疲勞と昂奮から息ぐるしく喘ぐ氣持になりながら、愈々寢入ることが出來なくなつて來る。彼は、ともすれば、其妄想の中に大きな人形を懐いた此家の娘が、いつの間にか入つて來るのを、羞ぢなければならなかつた。――それは、瞳の黒い、物言ひのきつぱりした、だが知慧の輝きのない額と潤ひのない表情をもつた、化粧上手な娘であつた。――不快に、そして悲しく、疲れて、彼は、眠られぬ寢床の中に寢がへりを打つてゐる。廓の騒ぎは、夜の靜まりきつた頃、一きは其神經質な甲高い叫びを上げて、漸く、重たい大戸のたゝる音と一緒に、ひつそり夜の曉の方へと沈んで行く。――その頃、恭助の胸にも、一つの哀な追想が、しんめり胸の奥から湧き上つてゐた。まだ、大學に入つたばかりの、二十か二十一の年頃である。その頃、性慾の策勵と、自瀆の屈辱の感情に驅られて、悲壯に似た氣持をもつて、ひとり廓の夜を彷徨ふことがあつた。そして、遂に初めて、女の體を知つた翌る朝、ある丈けの金を女の前に投げ、そこに悲しく膝まづいて、逃げる様に其娼家を走り出した。そして、まだ日の登らぬ或大きな林の中を、犬の様に蹲まつたり彷徨つたりしてゐた。その日のことが、思ひ出でられて來たのである。その日、彼は、日のさ中になつても、まだ埃のまき上がる街の衢を、歩きまはつてゐた。その年頃の、盲目ながら純粹な愉悦と彷徨の氣持が、今寢ぐるしい彼の頭に湧き浮んで來たのである。

恭助は、悲しい氣持になつて、其年頃のことを思出でゝゐた。その頃の彼には、さうして商賣の女を識つても、まだ傷けられることなく生きてゐる、彼に取つて神聖な、初戀の女の像があつた。だが、それは、いつの間に消え去つたものなのであらう？再び戀情を燃え立たせる機會も、性慾を充足させることもなく、其後幾年の埃臭い孤寂な生活が、自分のものであつた。そして今見出でる自分と云ふものは、――さう思ひ到ると、彼は、惨めな行き場のない、自責の感

情に迫ひつめられて來るのであつた。彼は、翌る日、もう匆々と、此處を立ち去つて了ひたいとも思ひ羞ぢつゝ、いつか深い眠りに入つてゐるのであつた。

だが、翌る日も、其次ぎの日も、彼は其處を去ることは出來なかつた。時造と彼とは、一日は姉に連れられ一日は兄貴に連れられて、そのあたりの名勝や古蹟を案内され廻はつた。そして其度毎に、身重もな娘が、一緒に連れ立たないと云ふことに、淡い不滿を感じる自分を見、そして羞ぢた。四日目の朝、姉と一緒に彼等の郷里へ立つ時造と、東京へまわる恭助とは、荷の仕度を整へて、姉の身仕度の出來るまを、自分だちの部屋に待ちながらゐた。そこへ、どこか寂しげな娘が入つて來た。そして、今父の處へ來てゐる男が、例の養子離縁の話をしてゐる處なのだ、と其麼ことを言つた。

『お父さん、――時造叔父さんに、色々のこと話しまして？――先の夫のことや……』

娘は、齡にませたしつかりした、だが何處か情緒に缺けたやうな調子で、時造に訊ねかける。

『うむ、――大體は、ね。』

娘はちよつと默つてゐたが、相手を見つめるやうにして、

『父さんは、先の人が、父さんを嫌つたり脅かしたりしたやうに、話してゐらしたでしよ？……だけれども、さうではないんですの。……父さんが、あの人を嫌ひ拔いたのですのよ、どうしたわけなのか知らないんですけれど。』

『ふうむ。』

『そりや、あの父さんの事ですからね、隨分ひどく罵つたりいぢつたりなさるんですの。だもので、先の人は、私に一緒に死んで呉れと云つて、拔身をもつて迫つたのですのよ、私が驚いて、表てへ逃げ出した處を、そこへ父さんが飛びこんで來たのですのよ、だから、父さんは、あの人が、父さんを殺さうとしたのだと仰有るけれど……さうではないんで

すの……』娘は、さう言つて、少時口を噤んでゐたが、恭助の方を見たりして羞らひながら、何か思ひついて、立上る。

そして、違ひ棚の上から箱を取つて、中から曳出した紙片を、時造の前に置く。

『戀だなんて、嘘ですけれど。』彼女は、此麼ことを呟いて、又自分の處に座る。

時造は、その古びた新聞紙の切拔を、自分と恭助の前に押しやつて、默讀をしだす。「戀の黑髮――云々」と、馬鹿げた田舍新聞式の見出しで、幾つか續いた讀物なのである。

娘も、流石に面映ゆいやうな顏で、傍に控へてゐる。記事は、この娘がどんなに美人で淑やかであるかと言ふことに書き起して、その父がどんな來歷の强慾者であるかと言ふことや、彼がどんな魂膽で其養女の戀人である先夫を追つて今度の金滿家の息子である第二の養子を迎へようとしたかと云ふ事、追はれた娘の戀夫は今どんな哀な境涯にゐるかと云つた事が、長々記さつてゐるのである。誰か好事家が、これを切拔いて、娘に送つたものなのか、朱のインキで圏點を打つたりしてある。――

『私、もう何處かへ行つて了はうかと思つたのですの。――ですけれど、父さんは、今あゝした病氣でせう。長い間育てゝ頂いた御恩を思ふと……』

『そんな、詰らぬ事。』時造は、切拔きを措いて、押やるやうに言ふ。

『ですけども、ね、私、ほと〳〵厭になつて了つて……私ほど、不幸せなものは、ないと思ひますわ……』

『なあんの、……あんたなどは、これからの事よ……』時造は、この娘が什麼に、我儘一杯に寵愛されて育つたかを思ひながら、

『昨日、兄貴にも言つたのですよ。淑子さんが可愛いゝんなら、財產の一萬や二萬のことはどうでも、此場合一日も早

く事を分けて了つたがいゝでせうつて、話を。子供だつて、何ならば此方へ引取ることにすれば、話は一層早く決まるんぢやないですかつて、ね。』
『ですけども、ね…… 向ふには向ふで、悪い奴がついてる話でして、ねえ。……』
『なあに。――その話は、又、恭さんが、知つてる辯護士に委しいことを相談して上げると云つてゐるから、――』
『さう。』彼女は、鳥渡恭助を見て、それから又時造の方に向きながら、『本統に、私の味方つては、一人もないのですからね。――さうなのよ、叔父さん。』と云ふ。
恭助は、うぢ〳〵、と躊躇を示してゐたが、
『多分、色々ときいてお知らせ出來ると思ひます。』と、更まつた調子で言ふ。
そこへ、時造の姉が、濃い仕度で、やつて來る。そして、留守中のことを、何かと娘に言ひ含める。
『母ちやん、――この間言つた、あれを、お土産に忘れないで買つて來て下さいね。』
娘は此麼ことを、子供のやうに甘へた調子で言つて、表てへ去る。
『あんななりして、子供で仕樣がないの。』姉は、媚びられたやうに笑ひながら、――帶の間から、紙に包んだものを取出して、
『時造さん、これね、何も土産ものを買はないからつて、うちで……』と差出す。
『いゝえ。――』
『いゝから、取つて置いて頂戴。……私からは、又別に、ね……』と例もの、秘密な調子になる。そして恐縮さうに時造がそれを受納すると、姉はいそ〳〵した調子になつて、

『うちでは、何をしてゐるのか知ら？もう話も濟みさうなものに……どうぞ、恭助さん、またゐらして下さいね。混雜してゐて何でせうけれど。……』と彼女は、恭助が引受た役目のことは、會得してゐない容子で、こんなことを云ふ。

『おい、淑子や――』から、叫ぶこゑが聞えて、兄貴が煙草入をさげながら、元氣に入つて來る。『やあ、遲くなつて……もう時間だらうな。どうですい？恭さん、時造の戻るまで、家に泊つてらしては？』

『いゝえ。――』

『兄さん、――私はさう悠くり出來ないから、墓參が濟めば、向ふから直ぐ戻ります。』

『さうかい。……そりや、どうも、お飽相ばかりして、な。』

『いゝえ、――では。兄さんもお大事に。』

『あゝ。』

『例の話のことは。』と恭助が更まつた調子で挨拶する。『――僕が問ひ合せて、手紙でお知らせするなり、自分で來て、お話するなり致しませう。』

『どうぞ、宜しく。――』兄貴は、氣にも止めない調子で言ふ。

『時間ですよ。』と娘が、促かして來る。

恭助と時造と、時造の姉と、三臺の俥が入口の處に並ぶ。さうして、兄貴や、娘や、召使の者だちが、そこに居並ぶ。どんなか拍子で、俥は恭助を最先にして、走り出した。恭助は、車の上で會釋して、帽子を頭にのせながら、この二三日ひどく癖になつてる、ひそかな眉のしかめ方を、最後にもう一度繰返した。――が、殿りを務めた時造は、何か氣持よささうに、輕く帽子の緣を仰向けて、空を仰ぎながら、前の俥の姉と、車上の話を取交はしてゐる。

十

恭助が、友人の山下の宿を訪ねた時、山下は、でも割合に風通しのいゝ部屋で、身體を投げ出して、氷水を吸つてゐた。

『ねえ、——もう一つ、このお客さんに。』

山下は、呼ばれた女中に斯う言ひ付けて、神經質らしく、清潔なハンケチで、青い額の邊を拭ふ。

『暑い。暑い。——君は、いつ出て來たね？』

『むゝ、こつちへ來て、二三日になる。』

恭助は、やけに扇子をあふる。

『實に暑い。暑さが急に戻つたんだね。』

『暑い。——何かい、引續き、こつちに居る？』

『いゝや、十日程。』

『さうかい。』

『どうだい、元氣は？——』

『むゝ、——弱つてゐるよ。』

山下は、その睫毛の長い眼を瞬かせて、悲し相に微笑む。

『君は、どうだい？——何か書いた？』

『うゝむ。』
『相不變だなあ。――』
恭助も仕方なしに、笑つてゐる。
『でも、君はいゝねえ。田舍に悠くり、御輿を据ゑてゐられるからなあ。』
『でもないさ。』恭助は淡白に言ふ。
『僕の親父は、僕を捉まへて、眞正面から斯う言ふのだ。ねえ、――お前のやうな奴は弟妹の示しにならないから、一日も早く立つて欲しい、と。だから、なあに、こんな田舍など、僕の方で御免だと言つて、呉れたよ。』
さう言つて山下は、此度は、子供のやうにから〳〵と笑ふ。
『だけれど、お蔭で八方塞がりさ。もうどこからも、融通できないんだよ。仕方がない東京で、職を求めてゐるのだが半年一年待たなければ、みんな駄目らしい。――今や、その間が六ケ敷い狀態なのだからねえ。』
『むうゝ。――久田から、ちよつと聽いたけど、ね。』
『仕方がない、こんどは、僕も田舍へ出稼ぎに出かける積りだよ。』山下は斯う呟いたが、自づと反抗的な氣勢になつて
『なあに、田舍に二三年ゐたつて、どうとも爲るもんぢやないさ。――却つて、僕のやうな飛び上り者には、善い勉強が出來るよ。』
『うゝむ。』
『僕も、君の樣に、暫らく、勞動力を養ふよ！』山下は、稍々粗野な調子で、かう言つて、どこか空虛な笑を爆かせる。
恭助は暫く默つてゐた。

『が、何と言つても、久田には叶はないさ。』山下は、神經質らしく、眼鏡の玉を布で拭きながら、――『彼は幸福なものだねえ。』

『うむ、數日うちに、約婚者（フェルローブナ）んとこへ行くつて、ね、』

『ふうむ。――だが、ねえ、僕は、彼が今月どこかへ發表したやうなものを書いてる以上、彼を輕蔑してもいゝ！』と眼鏡を眼にあてながら、叫ぶ。『彼には、カリカチユアきり書けないんさ。――自分で採つりながら、それに殊勝らしい涙を灌いでゐるんさ。一圖な氣持がどこにあるかね？……』

恭助は、唯曖昧に、微笑んでゐるに過ぎない。山下も少時默つてゐたが。

『だが、僕だちの仲間で、本when的に信用できるのは、君一人だよ！』と、突然こんな事を言ふ。『唯、君は、何故もつと大膽にならないんだい？もう些つと、發潮すると、いゝんだがねえ！』

小柄な彼は、ピンピンと跳ねる樣な調子で續ける。恭助は、恐縮さうに、汗を拭ふ。そこへ、女中が氷水を運ぶと、山下は、

『あゝ。――それから、こゝへ電話をかけて置いて頂戴。』と紙片を渡して、『もうお戻りになりましたかつて。いつお伺ひすれば、宜しいでせうか、つて。』

そして又、恭助の方に向かふと、

『ねえ、僕は、どうしても、久田とは合はないよ。あんな貴族的な男とは！』

『でもないさ。』

『――あゝ、僕は、折々本統に思ふよ、金が欲しい！と。――』

『それは、僕も思ふね。』

恭助は、氷水を啜りながら、言ふ。

『ふう。——さう思ふ丈けでも、君は一進歩だ。』山下は、其惱ましさうな瞳を上げて、惡戯さうに叫ぶ。

『だつて、君——僕だつて、』

さう言つて、笑ひ合つてる處へ、また女中が上つて來て、名刺を差出しながら、

『山下さん、お電話の方は、まだお戻りなりませんて。——』

『さう。——久田だね、』と少し不快さうに恭助を見てから、『——お通しして頂戴。』

『君と約束がしてあつたの？』

『いゝや、——確かには、——今日大抵、僕が君を訪ねるとは言つたけれど。』

久田が靜かな足どりで、廊下を歩んで來る。

山下は不快相にしてゐる。久田は輕く會釋して部屋に入ると、大きな身體を懶さうに、胡坐をかく。そして、三人とも少時沈默を續けるのであつた。

『井出、——例の辯護士君を訪ねた？』

久田が、恭助にむけて、口を開く。

『いゝや、まだ。』

『——辯護士つて？』少時して、山下が、仕樣ことなしに口挿む。

『む、ふゝ。』

『井出がね、百萬長者になるつて話なのさ。』
久田が、その細い眼をちらと笑はせて、註を入れる。
『ほう。――』
山下は、久田のさうした調子が、氣に入らないのだつたけれど、仕様ことなし、わざと自分も冗談らしく聲を上げて笑ふ。
『ふふ。』
『そして、美人の細君を持たうと言ふのさ。』
『――どうなんだね？――本統かね？』
『ばか。』恭助が笑つた。
『其麼迄でも、落ちてゐないかねえ。』
『駄目さ。――落ちてゐるのは、大抵腐つてゐるよ。』
『ふふ。』今度は、久田がまぶしい相に笑ふ。
『少しい位の腐りは我慢するよ。――だが、一體どんな話なんだい？』
山下が子供のやうに促む。恭助は、本氣にもなれずに、簡單な話をする。
『さうか。其父子の後釜に据はる野心なのかい？』
『はつは。』
『はつは。』

久田も恭助も、笑つて了つた。

『おい、井出、僕ならやるがねえ！』

山下がやつきになる。

『ばか。——自から問題が違ふんだよ。』

『では、せめて、借款だけも申込め。』

恭助は笑つてゐる。

『お互ひに、潔癖すぎて、ねえ。』久田が、註を入れる。

『そして、貴族で、ねえ。』山下が叫ぶ。

久田は、皮神經から、傷けられた様に、默つて了ふ。

『だが、金のありかなんて、妙なものさ。』と恭助が、感に堪へたやうな調子で言ふ。

少時默りが續いてゐると、山下が、

『久田君は、いつ出立かね？』と、幾らか調和的に口を開く。

『二三日うちに。』

『君の幸福を祝さうかね。』山下が、素直に言ふ。

久田は默つて、悲しいやうな、又見下したやうな、微笑みを返すのであつた。

暫らく經つて、久田が、

『出ようか。』と言ふ。

『うむ。――まだ、少し暑いかね。』

『ちよつと、失敬。』さう言つて、山下は、そこを去る。二人になると、

『もう。用意は出來た？』

恭助が、ちよつと間を置いて、訊ねる。

『あゝ、大體。――大したことはないんだからね。――君は、その頼まれたと云ふ原稿を引請けた？』

『あゝ。――それを書き上げて、例の話の復命をC――の親類にやつて、それから家に歸るよ。』

『この分では、東京はまだ暑いだらうぜ。』

『失敬々々、――』山下が戻つて來る。

『今日會ふ筈の人が留守なので、先刻から幾度か電話をかけてゐるのだがね。やつと戻つて來た相だ。……君がたは、出る？……井出は、宿が決つてるのだね？……さうか。』

山下は外出の服裝に着がへて、暫らくたつと、三人並んで外に出る。

漸く暑さの去る、明るい夕方であつた。

『どこか、少し散歩して、一緒に夕飯をやるといゝがね。』恭助が計るやうに言ふ。

『さうね。』

だが、山下は、默りこんで歩いてゐる。

『五時半――と、』

彼は時計を見て言つた。

「僕は今日失敬しよう。」

「どうして?」

「時間がないからね。――忙しい相手なのだ。――就職のことの話を頼んであるのだ。」

「さう。」

恭助も久田も、山下の少し矯情に似た自己主張の態度に、それ以上逆ふことが出來ない。

暫らく三人離れ離れの氣持で、歩くと、或電車の停留場に來て、山下はきつとして、別れの帽子をあげる。そして直ぐ、來合せた電車に乘つて了ふ。乘ると、もう、取殘された二人の方は顧みることもなく、混雜の乘客の中に入りこんで行く。

恭助と久田は、默まり、濠端に添つて、道を拾つた。――

「山下は、本統に田舍へ行くのかね?」

「さうらしいね。」

「どこかの學校だね?」

「あゝ。」久田は靜かに應へる。

「さうだ。」彼は、獨語のやうに續けた。「僕は、彼の無意識を實に尊重する、――と同時に又、隨分危ない氣もするのだ、――だから、彼が田舍の刺戟のない境になづんで了ふことを、恐れもするのだ。」

恭助はそれには應へずに、首垂れて歩いてゐた。

「彼は、君とは又凡そ違ふ。ちり〳〵堪へて進むに堪へない氣質だ。それだけに案外脆氣いもする。ことに依れば、自

分の持つて生れたものさへも、破壊しさうな氣がするのだ、——運命は、さう偏頗なものでもない氣がするけれど。』

『さうだ、ね、——尤も、意識したり自覺したりして、自ら支へようとした處で、それも亦六ケ敷いものなんだらうがね。』

茶助は、何とはなしに、自分自身のことに引付けて、かう呟いた。

『だが、又、山下の意識の世界と云へば、彼の無意識的な自由さに比べては、随分鄙俗な、通常的なものなんだからね。——』久田は、靜かに續ける。『彼は、僕を非常に貴族的で政策のある男のやうに言ふ。だが、僕がどうしてさうなのだらう？……僕の生活など、彼が無茶苦茶に贅澤やる程、とても贅澤のできるものではないのだぜ。——唯、それは、僕達には、生立を取めぐつて、様々な好都合が、どれだけか僕達を惠んでゐるには相違ないだらうさ。だけれど、……』

『それは、さうだ。』茶助が、遮ぎるやうに言ふ。『——だけれど、勿論それが、最後の頼みではないのだからね。——』

『うむ。——』久田は頷くやうに言ふ。

『それは、ねえ、』彼は、又、自ら顧みるやうに、『——君の周圍や境遇のことを思へば、そりあ、僕たちのと比較にはならないさ。悪境遇とか悪周圍とか、謂はゞ貧乏因果の波瀾と云つたものは、現在見える處でのみ測れるものでもないんだからね、——だが、だからと言つて、僕たちにとつての出發點は、やつぱり自分自身にある筈なのだ、からな……』

『さうさ。』

二人は、線端の緣草の伸びた土堤を下りると、霧のほんのり罩めて灯のまたゝき初めた街の人ごみの中に入つて行く。そして、二人は、街路樹の葉の繁りすぎて寧ろ佗しげに並ぶ路上に、もう滅切り人あしの減りだした頃、二人とも酔

ひ疲れて、別れの手を握り合ふのであつた。——それから二日經つて、久田は、彼の愛人の許に出發した、其の夜の汽車を見送るものは、恭助だけであつた。心待ちされた山下の姿は、遂に見られなかつた。

恭助は、妙な處から頼みこまれた原稿を、久しぶりの氣持で下宿の一室に籠つて、書き上げた。それは彼の中學頃の友だちが創めた半ば宗教的な雜誌であつた、彼はそこへ、自分の現在の行き場ない氣持を、端的に書いたものを、寄せたのである。彼は、自分に言譯けしながら、其稿料を受取ると、もう一度C——町の例の縁戚を訪ねる爲に、東京を立つた。彼は、その知人の辯護士から得た、分りきつた答を傳へる爲に、わざ／＼C——町まで出かける必要のないことを、充分に知つてゐた。が、或牽引が、彼をおづ／＼と其處へ導きもどしたのであつた。

其日の夕暮、併しながら、彼は又東京への汽車の中に、自分を嗤ふ自分を見出でゝゐた。例の人もなげなC——の兄貴が、どんなにして向ふ方の辯護士達の裏を掻いたか、どんな有利な條件で養子離緣の問題を既に解決してゐたか、恭助は殆と理解することとなしに兄貴の得意話を唯耳に聽き取つて來た、そして今又胸に思ひ浮べてゐるのであつた。そして彼が、其處を辭さうとする時、兄貴と其妻とは彼に對する禮心を、いつもの紙に包んで、押しつけ樣とした。それを彼は眉をしかめて押し戻し押し戻して、つひに受取らなかつた、その妙な不自然な場面を、養女の娘が、勝手の寢床からちらちらと認めて、寢返りを打つて了つた、彼女は其日屈託さうに、例の大きな人形を寢床に抱えこんで、臥つてゐた、——恭助は、今、その場面をも、獨り羞かしく思ひ浮べてゐたのである。

其夜、彼は山下の宿を訪ねた。だが、山下は數日前無斷で下宿を出たまゝ、まだ戻つてゐなかつた。恭助は、彼に置手紙を殘して、翌日、郷里への汽車に投じてゐた。——心安さと或屈辱に似た氣持とが、寂しく彼の胸に動くのであつた。

十一

時造が家に戻つたのは、彼と恭助とが家を立つて、六七日目の夕方である。

彼は相不變元氣に、――殊に今、一層元氣な樣に見えた。家を立つ時輕々と提げられた彼は、今、重く、さまざまの土產物に膨らんでゐる。そして、彼の胸にも、幾つかの土產話が蓄へられてゐるのであつた。

「どうぞ、辰子にも宜しく――」さう云つて、彼と鄕里の停車場で汽車を別にした、姉の、一切彼に賴らうとしてゐるらしい氣持が、快く思ひかへされる、

「もう、私だちは、何と云つても、唯二人の姉弟なのですからね――」

姉は斯うも言つた。混沌とした、秘密の多い家にゐては、まるで曖昧らしい彼女も、彼と唯二人になれば、――わけても親達の墓に詣でた後の氣持では、――姉弟らしい眞實で何かと語り合ふのであつた。その姉の面影は、時造が別れて汽車に一人になつた後までも、彼を追ひかけて居た。そして彼の胸には、思ふまいとしても、いのちを近く限られてゐる兄貴の死後が、賴もしく思浮べられる。

「姉さんは、兄貴がなくなつたなら、俺達に、どうしてもC――町近所へ來て欲しいと言ふのだ。さうなれば、俺達のどんな後ろ押しでもしてやらうと言ふのだ。――兄貴は、元氣ではゐるが、どうしたつて、あと一年と保つ身體ではないのだからね。」

時造は、病人の兄貴の前にゐる時の壓迫される氣持は忘れたやうに、家に戻つて辰子との閑談話のなかにも、此事を賴もしげに語るのであつた、

『こんどは、でも、兄貴も流石に色々と親切だつたよ。行つた二日目かには、私と恭さんを連れて、伜で不動さんに詣つたりして呉れた。……これは、兄貴が土産物を買ふ代りに呉れたのだ。だが、土産ものは、みんな姉さんが別に買つて呉れたからね、そして別に金で、これだけだ、……』時造は、人の善いだけに、總てを思出でゝ話する時には、總てが好意と親切に滿ちてゐたものだつた樣に話がなる。

『ねえ、辰子、それから此麼話が、姉さんからあつたのだ。――恭さんを、淑子の養子にどうだらうと云ふ話なのだ。これは、兄貴も、内々はその氣があるらしいのだ。』

彼は、實際は直接印象として胸にはない臆測までも足して、口にして了ふ。そしては、娘自身も其家庭もが決して恭助とは恰適しないだらうと云ふ氣はありながらも、さも望ましい事かのやうな、さも實現できるかの樣な話になる。

『恭さんさへ、その氣になつて呉れゝば、家のものゝ爲にも、總てにいゝのだけれど、ねえ――』

『さうですのねえ、――』

『だが、まあまあ、恭さんには、あんまり急には言はないがいゝだらう。』

最後には、自分の氣持を自分から打消すやうな調子に呟く。そして、彼と辰子とは、しばらく、C――町の娘の淑子に就ての評定に耽り初める。――辰子は其娘の凝つた姿の寫眞を一度見ただけのことなのであるが、――その話でも、娘のそれらしい缺陷には觸れ合ふのであるが、二人とも其娘の評價に就て、最後の斷定では、それとなしに、好意が寄せられて了ふのであつた。

『淑子も、こんどは辰子と時夫に會ひたいから、是非一度よこして呉れつて、言つてゐたよ。――』時造は、C――町の姉の一家について、悉く好感をいだいてゐるものゝやうに、此麼ことも語るのである。

辰子も、時造が齎らす土産話から、——わけても若い娘の淑子を中心にして、——C——町の富裕な姉の一家を想像することは、快いものなのであつた。そして、時造がさま〴〵と語る話をきゝながら、彼女は彼女で、時造だちが今度厄介になつた禮を兼ねての、何かいゝ贈物が此近在にないものであらうか、と此麼ことを思つてもゐる。

『まだ、アワビが取れるか知ら？——こなひだ中までは、取れたがね。——あれなら善いな。……さうなあ、兄貴に食べられないとすると。だが、どこか又遣ひものにだつてなるさ、兄貴の方でねえ……』時造も一緒に、いゝ氣持で、その相談に乘つてゐる。

『さうねえ、みんな、眼も口も肥えてゐる人なんだから、却つて、つまんない物が珍らしいかも分らないのねえ。』

辰子は、時造が戻つた夜から二日たつても三日たつても、その事を心から氣に留めて考へてゐるのである。

時造は家に戻ると、一日二日立つて、又、礦山の劇場の興行物に就て氣を配らなければならなかつた。そして其奔走の爲に、直ぐ家を留守にして、S——市の方へ出かけた。それと入れ違ひに、母の寡婦が、例の一座の興行先から、忙しく家に戻つて來る。

『どうですの？……今日あたり、うちで鳥渡寄つてつて見ようと言つてましたけれど、……うまく行つてますの？』

母が戻るなり、辰子の談はそれになる。

『まあ、どうにか行つてるのだけどもね。』寡婦が、少し困つた樣に言ふ、まだ十日足らぬ旅先なのだけれど、もう幾らか疲勞の影が目に立つてゐる、『——次ぎの乘場に困つてゐるのさ。……で、又泣き付かれて、ね。是非、今度一度だけ、此處の小屋を借りる樣に、姉さんに頼んで貰ひたいつて。……私も困つたけれど、ねえ。』

彼女は、十日でも五日でも生活を一緒にしてゐると、其一座が自分の身うちのやうな氣もするのである。

「……それは、母さんの意見に無理と逆ふんでもないんですけれど、此處だつて見込みはないんですよ。喰ひ込まれる丈けの話ですよ。」辰子は、きつぱりと言ふ。

「だけども、ねえ。……こんど此處が駄目ならば、どうせ解散になる座なのだから。投げちやつてもいゝのだけれど。……もう二三回つないでれば、秋の風祭の興行も來ることとなのだしねえ。……」

「それも、其時になつて見れば、案外そつちこちと散つて了つて、全で新しく組織する方が増しかも知れない位でせうよ。」

「それは、まさか、さうでもないさ。今これだけ、私に泣き付いてゐて、……」

「でも、母さん、さうでもないものよ。――あいつ等の口と腹と來たら……」

「でもねえ、此處だつて、初めから安札でも播いてしたら、食扶持位ゐ取れない事はないだらうさ。」

「さうねえ。――」

辰子は遂に、不服ながら折れて了ふ。そして、その話が、さうと、決まりが付いて了ふと、話は、こんど、又、C――町を訪ねた時造だちのことに移つて行く。

「兄さんの容態はどうだつたい?――」

「さうねえ、割合に元氣だつた話ですけれど……」辰子は左樣言つて、立つて簞笥から土產の品を取出したりして、「みんな、姉さんが買つて呉れたのですつて、――兄さんが土產を買へと言つて呉れたお金には、手をつけさせずに、……ねえ、これは、時夫のにつて、これは、私……品は何でせうか、ねえ……」

「さうさ。」母の寡婦も一緒になつて、近頃めつきり衰へだした眼に、品を手にして横縦弄つて見たりする。

「それから、ね――」

と、辰子は、品物を下に置いて、茶を淹れさせたりしながら、

「姉さんが、——」と、又、恭助を養子に欲しい話のあつたことを持ち出す。辰子は、それが出來る相談だと思つてるのでもないが、出來れば望ましいことだと云ふ氣持に促されて、ちよつとでも、口にして見たい。

「なか〳〵しつかりした娘な話ですけれどね、——恭助に合ふ性質かどうか分らないんですけれど、——でも、初婚でないんですからねえ……」

「それは、世間に隨分ある話なのだから、……何だけども、ねえ……」

寡婦も、不即不離の言葉のうらで、その話を全く拒みきるわけでもない。

「だが、先の養子は？」

「籍を拔くのですつて、ね。——その話で恭助が、東京のお友達の辯護士の處へ行つたやうな話ですのよ、——」

「ふうむ。」と、口を噤みながら、寡婦の頭には又、味のある想像が浮んでも來る。

母と姉の、此麼話を聽きながら、傍にゐた美佐子は、姉や母達の氣持に、或慊焉さを感じなくはなかつた。だが、彼女も亦、あのぽつねんとした兄の傍に、華美な（彼女はさう想像した。）婦人を想像する不似合さを知りながらも、自分だちの身近かに嫂として、さうした婦人の入つて來るのに、何か若やいだ樂しい夢に似た思も慫られるのであつた。

「が、多分、あの兄さんはそれを承知しないことだらう。」彼女は又、淸い勝利にも似た氣持で、此麼ことも思ふ。——彼女は、いつになつた處で見かどめの付きさうもない自分自身の事を思へば、いつも苛々と寂しくなつて了ふのであつたけれど、兄のことで、さうした話につれて浪々のことを想像したりすれば、また柔らかな甘い情緒が、彼女の胸にひゞいても來るのである。

東京にゐると云ふ便りの一度あつた儘で、まだ戻らない恭助のことが、何かに連れては、家ぢゆうのもの丶噂の種になつた。そしては、いつも筆不精で、氣紛れで、いつ歸るとも知れずに歸つて來る人なのだからと、——それとなしに毎日毎日、家のもの丶心待ちになつて居るのであつた。わけても、母の姉妹が引率れた一座と一緒に家へやつて來てからは、旅から旅を歩く何の縁もない役者達までが、家の兄さんはまだお戻りなりませんかい？と聴いたりする程に、話の端々にも、恭助の消息が、家ほとりの人々の口に乘るのであつた。

　そこへ、或日の午後、東京の叔父と、彼れに連れられた姪の登代子が、思ひがけなく、此家にやつて來た。いつも人の善ささうなにたにた笑ひの叔父が、紺の大風呂敷を提げて入つて來る。そのあとに、三つか四つの子を背負つた、色の蒼ざめた登代子が、影のやうに從つてゐた。——

　その日、喜輔も時造も、各自の奔走に忙しく、家には留守であつた。

『時造は？……さうかい。丁度、時造がC——からの戻りに寄つて呉れた相なが、商賣に出て、留守してゐてな……阿母は？……』

　叔父は、[illegible]相に座る登代子を顧みながら、言譯らしく此樣ことを言ふ。

『わしが、な、商賣に出だ先で、登代子に出會つてな。——身ひとりで、子を守り育て丶やつて行くのは、容易ぢやない。家ともまるで音信なしになつてるやうな事は、心得違ひな話だと言ひきかせて、な……』

　かう言ふ叔父を、しつかりと見凝めながら、辰子は、

『え丶、え丶、』と頷いて、——靜かに、見窄らしい姿の妹を見守つて、『うちでも、さう言つてゐたのですよ、——家では、いくら手があつても、足りない位なのですからね。他人の手をかりて遣つてる始末なのですからね。……登代

子さへ、家にゐて遣る氣ならば、……私なども、旅でさんざ苦勞した覺えがあるけれど、女ひとりで子を抱えて、やつて行くなんて、それは容易なことぢやないですよ。いくら身を落せば、と云つた處で、ねえ……」

彼女はいつか自分の述懐に陷ちて行く。

登代子は、背にゐて眼を醒ました子を、紐をゆるめて膝にまわして抱へ上げ、やはり眼を伏せた儘、子を抱きしめて――姉に向つては、一言ものを言はない。

「さうだ、とも、な。」叔父が、辰子の言葉を引受けて、登代子にさとす樣に頷いてゐる。

「さうだとも、な、旅にゐて苦勞したものでなければ、その味は分らない――」

登代子の膝にゐる、眼の大きな額の張つた男の子は、見慣れぬ四邊を見まわして、叔父から辰子へと視線を轉じては又しつかり、母の乳房を握りしめて、共胸に噛りついて了ふ。――その柔らかな、狹苦しい胸先のうちが、彼の親み深い唯一の世界ででもあるが樣に。

「俊子!」と、辰子は奥に呼んで、茶を淹れさせる。そして、登代子の親子を互に見守りながら、「――登代子、着がへでもして、悠くりするがいゝでせう。母さんは、今夜は早く戻るでせうからね。――叔父さんも、どうぞ、ゆつくりなさつて。」

叔父は、提げて來た大風呂敷を引寄せて、

「登代子、――着がへをするといゝ。」さう言つて、らくな居ずまゐになる。

俊子が何處かで貰つて來た色花を、瓶にいけて提げて來ると、登代子の傍に下りた男の子は、それを珍らしさうに、眺め眺めてゐる。

「本統に、花の好きな子でしてね。」登代子が初めて、呟くやうに口を開く。

『親父は、どこへ行つたか、とう〳〵分らないの？』辰子がぽつんと訊ねる。

登代子は又恥ぢて顔を伏せる。

『でも、此子は親父似なのか知ら？――』

『さうなあ、――』と、その親父を知らぬ叔父が、引受けるやうに言ふ。そして後架へ立つしらく、そこを離れる。

辰子は、叔父がゐなくなると、一層親しい併し又嚴しい氣持に引緊められて。

『着がへをして、悠くりするといゝわ。母さんは夕方戻るし、うちでも明日は戻るだらうからね……心配することはない、みんなお前を案じてゐるのですからね。……まあ、これまで、獨りで何をしてやつてゐたの？……』さう語るうちに、いつか涙になつて居る。

登代子も亦涙を浮べて、何も應へることが出來ない。

『人は、氣の善いだけでは保てないものよ、些いつとは、氣の强いところがなくつては、ね。』

登代子は、それから一二時間たつて後、もう仕事着姿になつて、店のあたりを掃除したり、勝手の水甕に水を汲みこんだりして、健氣な働きぶりを示してゐた。そして、足手纏ひになる男の兒は、守りする俊子の手を振りもぎつて、母の身體に押し近づかうとする。そしては、哀な母の叱責に睨みつけられながら、頑執拗く母のほとりを慕つて、泣きやまぬのであつた。――

『本統に、この子は、この子は――』登代子は仕方なしに、妹の俊子へさへ氣を兼ねながら、子を打つ眞似しつゝ子に近づいて行く。

夕方おそくなつて、母の寡婦が戻つて來た。そして、義弟の膝に遊んでゐる男の兒を認めると、直ぐ總ての意味を知つた。

『まあ、綺麗な花だ。お前が活けたの？』

寡婦は、其處にゐる俊子に、此樣ことを言ひかけながら、今自分の胸に、母なる自分に背いて去つた娘に對する憤りの氣持の殆ど湧いて居ないことに氣付いて居た。寧ろ一層哀切な氣持が、――その娘に對してと云ふのではなく、――彼女の胸をせぐつて來る。彼女は、直ぐ本能的に、この孫の兒が自分の手になづけられて育たゝなければならないのだと云ふ氣さへもする。だけれど、その神經質らしい孫の腦頂を見戌りながら、又微かな惜しみに似た氣持の動くのを感じた。それは、彼女を背いて去つた娘の記憶が喚び起されてゐたからである。……

まもなく、恐縮しきつた登代子が、――姉の辰子と叔父に護られて、――上被の仕事着を脫いて、母の前に蹲まつた。母の言葉は極めて言葉短かであつた。そして總てを、姉と叔父の意に委せて、と云つた、さりげない容子を取繕らうのであつた。――もう、夜の芝居の用意が忙しく、呼びこみの太鼓が打ちつけられて居る。

『さあさあ、早くご飯を濟ませて、仲店の仕度でもなさい！』彼女は、稍々苦々しげな調子で、そこに居並んだ娘達に指揮を與へる。そして、辰子と義弟だけになると、また、

『本統に、意久地なしで、いまいましい氣もするのだけれど、……もう少しはきびきび出來ないものか、と思つて、ね。……あの子供が、あゝ足手纏ひになつてゝは、到底も駄目……』と、呟くやうに嘆息する。彼女は、今よりも一層窮迫だつた頃のことを、起して、色々いまいましくもなるのである。――

その間に、俊子は、夕餉の膳を仕度する、美佐子と登代子は、芝居小屋の仲店へ賣品を運ぶので、忙しく燕のやうに、

店の軒を出入りしてゐる。

『登代子さん！その箱を持つて頂戴。それ、それ、そのブリツキの鑵よ！』

せつかちな美佐子が、姉を叱り付けるやうに喚いてゐる。

『純造！――こつちへ來ておゐで。――今母ちやんは、ご用が濟むと、こつちへ來るからね。』

薄暗い外に立つて、母の往き來を見戍つてゐる男の子に、寡婦はいらいら叫びかける。そして、又、

『時夫や。――お前は、これから、純造と一緒に遊んでやるのですよ。お前は兄さんなんだからね。――』と、ひとりで遊び耽つてゐる辰子の兒に、言ひきかせたりする。

『だけれど、あの兒は、慧敏さうなのねえ。――とても、此ぽんさんなんて、叶やしませんわ。――』辰子は辰子で、自分の兒に引比べて、こんな事を言ふ。

『さうなあ。――あの兒は、そりあ、中々賢い。――』

と、先刻から登代子に對する寡婦の叱責を、自分の身にも響けて場の悪さうにきいてた叔父が、口を挿む。

『だけれど、あれの頭の恰好が、それは、あれの親父にそつくりなのねえ。』と、寡婦は呟くやうに、こんな事を言ふ。

それから、數日たつて後である。

例ものやうに、前觸れなしに、恭助が、家に戻つて來た。辰子の外は、母も妹達も、芝居小屋の方に出かけて、留守であつた。辰子は、蚊帳の中に、赤兒を眠らせてゐた。

生温るい娑りの風の吹く夜で、家脇をほんの時をり、劇場に入る客の足音がきこえる。そして又時たま、太皷の音が鈍く響いて來る。恭助は少時姉と話すると、立つて芝居小屋の木戸の方に出かける。そこの裏に据はつてゐる母に挨拶

ぜうと思つたのである。

思ひがけぬ叔父が、母と話してゐる。

『やあ。』

『おう。戻つたの？――時造は？一緒でなかつた。』と母が微笑みかける。

『いゝえ。』

『今日又M――町まで出かけたのだけれど。』

恭助は、母に挨拶すると、直ぐ家に引返す。叔父も其後に従ふ。だが、家に入ると、眼のさめた登代子の子の純造が劇しく泣き出してゐる。辰子が、折角眠りかけた赤兒の眠を紊されて、いらいらしく、純造をすかし撫めてゐる。純造は純造で、辰子の不機嫌を讀むと、其神經質から一層切なく悲しく泣き亂れる。そのうちに、

『あゝ、あ、――まあ、純造は、泣き小便を……』と、辰子が驚いて、聲を上げる。

純造は、一時、駭きと自責から泣きごゑを抑へつけたけれど、自然と襲つて來る恐怖と寂しさとから、又力のないかすれ泣きの聲を立てる、そして時經るまゝに又、聲高な泣きごゑとならうとするのである。――

『さあ、さあ、外へ出て、いつこするのよ。』

辰子は仕様ことなしに、純造を外へ抱へ出して、丁度來合せた恭助に、

『恭助。――どうぞ、登代子を呼んで頂戴。』と叫ぶ。

恭助は、登代子が家に戻つたのを、初めて知つて、又木戸口に走り戻る。

『登代子を呼び出して下さいつて。――』

「また泣き出したの？——仕様のない子ねえ。癇が強くつて……」寡婦が呟きつゝ、内へ通ずる。

「登代子、叔父さんと來たんですか？」

「さう。」

慌しく走り出して來た登代子は、兄の恭助を認めて、恐縮さうに、併し又親愛の眸で、頭を下げて通りすぎる。

「恭助、少し見て行かないの？」

「さうねえ。——疲れてゐて、——餘り入りがないの？

「もう少し來相なものだけれど。——」

恭助は、番案の傍に立つて、母と立話を初める。

「兄さん、ちよつと御覽にならない？」

かう云つて、美佐子が、仲店の品切れ物を外から運びながら、聲かけて行く。

小屋の内からは、役者のおどけた臺詞と、觀客の笑聲が、さう賑はしくもなく、響いて來る。——やがて、恭助は氣の變つた樣に、

「ちよつと見ようかな？」と云ふ。

「あゝ、——」と寡婦は、話の途ぎれた退屈さから、直ぐ下足番の男にこゑを懸けて、脫ぎかけた恭助の下駄を始末させる。

小屋の内は、觀客がまるで少なく、一人々々數へられる程の疎らさである。がらんとし過ぎた小屋の内に、敷物も舞臺の飾りも役者の衣裳姿も、すべてが見窄らしく、露はすぎる。そして全體を照らす燈の濁りじみた明るさが、小屋ち

ゆうを陰氣なものにさせて居る。

舞臺は今、何か戀の場面らしい。老耄らしい役者が、眞白に塗りたくつた振袖姿で、舞臺の正面に、袂を口に抑あてゝ俯いてゐる。その傍らに、意地わるさうな婆さんが、きまりきつた型で、娘を折檻してゐる處なのだ。

恭助は恥かし相に、それを横眼に見ながら、妹だちのゐる店臺の蔭に入つた。

『面白いの？』

彼は、熱心に見つめてゐる俊子に、かう聲をかける。彼女は、兄を見上げて會釋したが、少し顏を顰めて又舞臺に注意を向けて了ふ。恭助は、土間や棧敷を見まわしたりしてゐるうちに、直ぐ店臺の前の處に、弟の辰夫の姿を見出した。彼は、もう半ば眠りこけやうとしながら、まだ其處に座りこんでゐる。

『美佐。――それは、辰夫ぢやない？――行つて寢むやうに言ふと善いぢやないか。』

『氣紛れやで駄目ですの。――今夜は、ひまだし、登代子さんも居るからと云ふのに、――其癖あゝして、半分眠つてゐるのよ。――辰夫さん！辰夫さん！』

さう云ひかけながら、美佐子は、店臺の賣品を並べかへたりして居る。だが、辰夫は、身も向けない。

どんなか拍子で、小屋の内からは又笑聲が湧く。見ると、舞臺には今、振袖姿の娘きりが、猿芝居のしぐさの様な、何か愁嘆を演じてゐるのだ。――恭助は殆と何の興味も持たずに、退屈らしく、又木戸口の方へ引返して行く。

『おや、もう戻る。』

番臺の上で、眠氣を催ふしてゐるらしい、叔母が、聲をかける。

『えゝ、――お先へ。』

恭助は、重たく晴んだ空を仰いで、家に入る。こゝには、眠さうな叔父が、辰子と登代子を相手に茶を飲んでゐる。
恭助は、そこで茶を一杯すゝると、自分の部屋に引揚げる。
「ちよつと掃き出しませう。」と、おづ〳〵登代子が聲をかける。
「あゝ、恭助、」と辰子が呼び懸けて、「役者がゐたりして、蚊帳が一杯ですからね、今夜は叔父さんと一緒の蚊帳にして頂戴。――」
恭助は、殆と應へもせずに、二階に上つて了ふ。――彼は、登代子の敷並べる寢床の、上敷きの端を伸べたり、枕を出す種の勞作を手傳ひながら、
「子供は眠つたかい？」
「えゝ、――」
二人は、それつきりか言葉を換さない。登代子は、寢床を敷きのべると下へ下つて行く。恭助は疲れて、寢床の上に眼をつむつた。――やがて、叔父が上つて來て、彼の傍に身を横たへる。
「いやな蒸しやうだのう。――雨になるかも知れないな。」叔父は、恭助を話相手に欲しさうに、呟いてゐる。
だが恭助は、それに少しも相手にならうとはしなかつた。――彼には、今、此老いかけた叔父に對する限りない侮蔑の念が、萌してゐるのであつた。嘗て眞摯に、家庭的な悲み多い勞苦に盡瘁するの努力と眞面目を缺いた、叔父の、虚弱なそして何處か浮薄な性格に就て、彼は或憤懣の情をとめる事が出來なかつた。彼には今夜立ちかはり見た自分の姉妹や母達の辛勞の容子が、一方、彼の胸に思浮べられてゐる。そして又、いまだ一家を保つ氣持も定住心も崩すことのない自分自身にも思到らねばならなかつた。彼は憂欝であつた。そして、言葉重くあつた。――

叔父が稍々禿げた腦頂と、削げ落ちた頬とを見せて、眠りに落ちてゐる頃、——もう夜半に近く、芝居の打出しの太鼓が亂れ鳴つて、家路を觀客の足音と話聲が、暫らく聞えては消えて行つた。その跡に、芝居小屋の邊には役者達の呼びが聞え、階下には、もう眠たげな家族の音聲が、暫らくのま、ごと〳〵聞えて居た。——その中には、寢惚けた子供達の泣ごゑも立交はる。恭助は、淺い眠りから覺めて、それらの氣配に寂しく耳とめて居るのであつた。

十二

叔父は間もなく東京に立つた。——秋にでもなれば、自分達も、此近隣へうつりたい氣持なことを、義姉の寡婦や時造に繰返し〳〵言つて。——そして、登代子と兆子の純造は、暫らく此家に立留まることになつて。

恭助が二階の一室に籠り勝ちなことに、變りはなかつた。彼はこの頃或書肆から引請けた賃仕事の、或翻譯に從つてゐた。そして家族のものが、朝起きるとから夜睡に就くまで、彼に冊づくことにも變りはなかつた。だけれど、この家うちに於ける彼の位置は、崇められた儘に、理解されぬ儘に、その孤獨を増して行くやうに見えた。夕方、下に下りて時造と晩酌を交はすことも、變りなかつたけれど、お互ひに話の展開される餘裕が少なくなつて、時造の訣も恭助の極まりきつた應へも控へられ勝ちに、唯早く醉ひそして最後の杯を早く措くことが希はれるやうに見えた。妹だちの彼に對する神妙さにも、言葉少ない外々しさの態度が加はつて來るやうに——尠くとも、恭助自身には考へられるのであつた。

彼が、C——町から戻つて後、例の養子緣組の話が、たつた一度、恭助の前で、持ち出されることがあつた。——

「辰子さんが、初婿でもあれば、ねえ——」辰子が、まるで乘り氣ではないやうに、へゝゝら笑ひをしながら、恭助の氣

をひいて見る。

恭助は唯曖昧に笑つてゐた。

「そんな例は、いくらでもあるさ、ね。——唯其當人さへしつかりして居ればねえ……」母の寡婦も、傍から此麼ことを言ふ。

「さうね。——」と、恭助は猶一層高く笑ふ。そして瞳だけが、何かを訊すやうに、母の顔を見つめてゐるのであつた。

辰子も、母の寡婦も、それつきり、さう乘氣でもない話のやうに、笑ひ紛らして了つた。そして其話は、再び恭助の前に持ち出されることはなかつた。——だが又、恭助が東京で書いた例の原稿の載つた雜誌を、或氣持からC——の娘に送つたことに就ては、家ぢゆうの誰も知るものはなかつた。

恭助は、それに對して、其娘から理解も返事も豫期してゐるわけではなかつた。そして結果は、彼の豫期の通りであつた。

海べに、漸く秋が來た。空の美しい晝や、曇の雲が低く秋雨の細かに砂地を濡らす夕や、恭助はひとりして海べに佇んだり其あたりを歩きまはることが多くなつた。そして、時としては、幾日も幾日も、机上の仕事には手を付けることなしに、どこか當もなく歩き廻つて來ることもあつた。そして、家に戻つては、疲れて氣も失せた樣に、机の前に仰向いてゐる。——

登代子と純造が加はつてから、階下の家族の毎日は、何かにつれて、些やかながら波立つことが多くなつた。そして何よりも目に立ものは、家族の誰にも縋りどころなく漂ふやうに働き廻はる登代子の見窄らしい姿と、その母を慕つてやまぬ純造の癇癖な容子とであつた。

『まあ、まあ、何と云ふ娘なのだか？』

勝氣な母の寡婦には、手のろい登代子の遣り方が業を煮やして仕方ない。――彼女は、暫らく率ゐて歩いてた役者の一座が、とうとう一度もうまい興行に突當ることなく、解散して了つたので、今又、家に戻つて來たのであるが。

『さう甘やかしてゐるから、いつ迄經つても、純造が手を離れやしない！』

彼女は、登代子をさう叱り付けながら、何かと純造を賺しすかしては、自分の手になづかせうと努める。そして自分が外出する時には、これ迄の習慣を逆へて、時夫の方は叱りつけるやうにして、純造を自分の背中に呼びよせては、連れて歩かうとする。だが、神經質な子の純造は、容易に其祖母に手なづくことがなかつた。そればかりでなく、叱り付けられたり働き疲れたりして凋れてゐる母の懐ろに縋りついて、まだ泣き止まずにゐながら、祖母や叔父叔母達を、恐れと嫌厭とで、見戍りあかぬこともあるのであつた。

そして、彼の爲に差出された祖母の背中は屢々、やつぱり元のやうに、彼の從兄の時夫に依つて占められて了ふ。割合淡白な、氣の善い時夫は、いつも小躍りして喜んでは、祖母の背にゐ、町のそこゝ近在のそこゝと運ばれて來る。その無邪氣さが、祖母の寡婦にとつて、深い愛と慰撫の氣持を呼び起すのであつた。――純造は、時たま、母のありどを忘れて、靜かな俊子の背に、野や畑道を樂み歩いてゐることもある、又激情的な叔母の美佐子に、時としては、手ひどく叱り飛ばされることがありながらも、氣紛れに其叔母の跡を追はうとして見ることもある。だが、大抵の場合、寂しく不安な彼にとつて、母の登代子の身近かのみが、心安らかな眠所なのゝ様に見えた。

『どうして、まあ……此子は。』

と、母の登代子自身さへが、喫きに打たれて、膝に抱えあげた純造の顔を見戍る事がある。――『さあ、さあ、……

もう、ちやんちやんして、時夫さんや愼ちやんと、遊ぶのですよ……』

でも、左樣言はれても、彼は容易に頷くことがないのである。子供の仲間さへも、今は漸やく、彼を加へることに、…さう喜びをもたなくなつてゐる。氣のいゝ誰彼が、小母の賴みに媚びられて、善意にあふれて、純造を仲間に呼ぶことがあつても、それは屢々いらいらしげな純造の眸に娟り返されて了ふのだ。

さうして、時とすると、母の登代子自身、始末に餘つて、ヒステリカルに、さう縋り付く純造を、叱り罵りつゝ、打つて打つて打ちのめさないではゐられなくなる。

そして涙に溢れて猶縋り付かうとする純造と、蒼ざめてヒステリカルになつてる登代子の形相とが、相絡はつて家ぢゆうの心を掻き亂すことも、さう稀でない。

『登代子。いゝ加減におし。――そんなにせつかんした處で、子供ぢやないか。――そんなにしては、又角が立ちますよ。――』

見かけた辰子が、立つて來る。

でも、登代子は、平生の優柔に似ず、泣きすがる子を平手打ちにぴしやり〱撲りつける。子供は、今や、怯えきつて全身を顫はせて、兩掌を開いた腕を、頭上に――丁度何ものかへ救ひを求めようとするが樣に――差し伸べて、その神經質な蒼い瞳を頰を、涙に溢らせてゐる。

『何と言ふことだい！』と祖母の寡婦までが飛び出して來る。『其麼、子を撲つたりして、みんな、自分がだらしのない癖に！』

登代子は、今、睨みすくめられた獸のやうに、昂奮しきつた瞳を何處に据ゑるともなく、ぢいつと立ち竦んで了ふ。

その傍に、漸く其處に捲き起された光景を會得した樣に、だん〳〵泣きを止めて、啜泣きに返る純造が、此度は祖母や叔母の視線を恐れて、哀れな母から愛染の一瞥を得ようと、おづ〳〵母を見上げてゐる。

「――なあに、ね、今日は大層機嫌よく、時夫や、愼ちやんと遊んでゐたのですよ。……だけれど、子供の事ですからねえ、……何か奪ひ合ひでも初めたのでせう。……そのうちに、時夫と純造の撲りつこが初まる、私が時夫を叱り飛ばして追つてやる、純造は、阿母の跡を追ひだす、だもので……登代子が氣を惡くしたのか知れないけれど、」

辰子は、矢張り事の仲裁に來た隣家の女主人を捉へて、此麼話をしてゐる。

祖母の寡婦も、叔母の美佐子や皎子も、哀な純造母子を見ながら、どこかむつつりした顔付で、その場を眺めてゐる。時夫や其他の子供達は、風に吹き掠はれた小鳥のやうに、どこかにひつそりと陰をひそめて了ふ。

その場の空氣が、稍々に鎭まつて、人々が立ち去つて了ふ跡、姉の辰子の撫め言葉をきゝながら、登代子は、しみじみと自分が哀れになつて、冷たい涙を呑むのである。泣き疲れに疲れた純造は、今は打凋れた容子で、叔母の皎子に手をひかれて何處かへ連れ去られる。――さうして、登代子は多分彼女の洗ひもの〻場所に、辰子は店の座敷に、寡婦も亦其傍らに、それ〳〵馴れた居場所に立ち戻つて行く時、各自の胸には、まだ心からの歎き心からの苛立ちが、收まりきつては居ないのである。……

かうして不意に捲き起される嵐が、二階にゐる恭助の處にも、まざ〳〵と傳はつて行く。だが、大抵の場合、彼はその嵐の中へ下つて行くことはない。その中に下つて行きたい衝動の動かないのではない、だが、もぢ〳〵と自分をどう身動かしすべきか、分らない氣持に打勝たれて了ふのである。若し又、その嵐の名殘がまだ明らかに殘る中に、下りて行くならば、彼は誰に向けるともなく、微笑みを投げて、ふいと其儘外に出て了ふ。――さうした嵐の態は、彼にとつ

て、遠い遠い時以來彼の胸に記憶されてゐるもの丶樣な氣がする。一室に籠つてゐても、その顏をまざ〳〵と思浮べることが出來る。そして其度毎に、眞新しい胸の痛みが繰返へされることなのである。——

或日、——時造も母も妹たちも大概留守で、登代子だけが子を守りながら、例もの洗ひものをして居る筈であつた。これも、赤兒をかゝへた辰子が、そおつと、恭助の部屋に上つて來た。

『勉强なの？——』

『いゝえ。——』

恭助は書物を押し除けて、まるで客人を迎へるやうな靜かさで、座蒲團を姉の方に押して遣る。

『靜かな日ねえ、——』と辰子は、蒼つた田圃の光に眼をなげながら、『——少うし、相談したいことがあつて、ね。』

と言ふ。

『何か？——』

『うむ、』と彼女は、少時躊躇を見せてゐたが、『——これなの。』と言つて。帯の間から、少し氣取つた封筒に入つた手紙を取出す。

『——讀んで御覽。』

恭助は、それを手に取つた。そして、「戀しき——樣」と云つた書きざまの、表書きを見ると、心もち顏を赧めながら、でも靜かに中身を取出して、それを讀んだ。——それは、他愛もない、妹の俊子の處に來た、艶書なのである。

『お前は、秀夫と云ふ子を知つてゐる？』

『いゝえ。——顏だけは知つてゐるが。』

さう云つて、恭助は、姉を見戍る。

『母さんに話すれば、唯がみ〳〵と言ふ丈けのことですからね、——』辰子は神妙に、恭助を見かへして、言ふ。

『さう。——』

『この事は、こなひだ中から眼に附いてゐたのだけれど、——私から言ふのも變な氣がしてゐたし、ね、お前さんに頼むにしても、……』さう言つて、彼女は、恭助の下に置いた手紙の方に眼をやる。又少時して、

『——、私は、隨分氣を付けてゐる氣だつたのですけれど、ね。出入りの多い、まして、女の多い家族なのですからね。——娘子の妹だちに、妙な噂でも立つては、母さんに濟まないし、世間にも羞かしい氣がする。そして、又、……』と少し口ごもつて、『私の例もあることなのだから……』

さう言つて、辰子は微かに羞らひを見せる。

恭助は、その姉の眞面目な顔付を、寧ろ美しいものに見た。——そして、彼女の娘だつた頃のことを思出でゝゐた、彼は其姉のことで學校にゐてよく顔を赧くする事があつた、小學の終つた後も、少しの美貌と濶達な性情の彼女は、時をり或種の評判をふり播くことがあつた。その度毎に、恭助は或羞恥屈辱を感じなければならないのであつた。この姉が爾を睽つて、時造と一緒に家を飛び出した時、恭助は、もうそれに同情の持てる年に達してゐたけれど、それにしても旅を出あるいて來て後の、どこか克己的な少し嚴しすぎる風格の辰子が時々示す、或種の美しさは、恭助自身のルーズな氣持とは離れて、又彼をうつものなのであつた。——今も亦、赤兒をいだいてゐる姉の、どこかストイカルな面持が美しく彼に映つた。

『だけども、ね、』辰子は、考深さうな眼つきで、『——わけても、私は、俊子のことは、あれがあんな淵柔しい落付

いた子ですからね、……出來るならば、と此麼ことを考へてみたのですよ、恭助が出世した時に、お友達の善い人にでも世話して貰へば大層いゝ事だ、とね。……だから、今此麼ことで、妙な風說でも立てられたりしちや御覧、……」と歎く。

恭助は、少し當惑の形で、應へに困つてゐる。

「それに、ね、私の見るところでは、あの秀夫と云ふ子、ね、さう好い子だとは思へないのよ。――また、お前、何と云つても、十圓か二十圓足らずの月給きり取れない身でゐて、……」

「さうねえ、」と恭助が、澁つたい口を開く。

「手紙など、少し生意氣らしい處もあるけど、幼稚で面白いのねえ、」さう言つて、少し笑ひながら、

「だけども、俊子はあんな子でせう。だから、向ふで此麼ことを言つても、受け付けないかも分らないのね。」

「だけど、それは分らないことよ。――もう一度ならず、私や隣りの小母さんなどの眼に餘ることもあつたのですから……」

「さうかねえ。――もちろん、自分の感じに欺かれる場合も、わけて此事では有り勝ちなんでせうがねえ、――かと云つて、裁判官のやうに傍から聽いたり裁いたりするのも、考へものなのだからなあ。……」

恭助はさう言つて、又讀むわけでもなしに、手紙を手に取上げて見たりする。

「だけども、お前からならば、俊子も、屹度靜かに聞きわけて、自分の考も言つたりすると思ふのよ、――」

「さうですかねえ。……兎に角、折を見て話しては見ませうが、ね。」

恭助は、少し媚びられた様に、口を噤む。

辰子も默つて、しばらく、二人ともに、外の靜かに明るい秋の風景に眼を投げてゐる。

「それから、ね」

辰子は、話題をかへたやうな調子で、

「いつか恭助にも話しようと思つてゐたのですけれど、ね、……登代子や英佐子やのことにしても、今の儘にして置くわけにも行かないと思ふのね。――」

「さうねえ。――」

「いゝ處があれば、嫁入らせるとか、婿を取るとか、……母さんも、近頃は、さう考へてゐるやうだけれど、……でも親つて妙なものなのよ、――あんな淋しい人で居て、唯、家に子ども達を集めてさへ置けば、それで樂しい氣持がしてゐるのねえ。……」

「まさか、」と恭助は、笑ふ。

「いゝえ、さうなのよ。――」辰子は、眞面目になつて主張する。「案外愚痴なものなのよ。」

「さうかなあ。」

恭助は、さう笑ひながら、自分の母が、自分を初め子ども達の顔を居並べて、どこか樂しげな容子を、思浮べても見る。

「だけども、其癖随分がみ〳〵と叱つたり怒鳴つたりするぢやないの？」

「さうよ、だけども、それは性分でねえ。」と辰子は簡單に説明する。

「それから又、貧乏癖がついてゐるからさね。」と恭助は微笑む。

「さうねえ、――それは、どうしたつて左様なるわ、私だちだつて――」

辰子は、今日、暢びやかな氣持で、何でも恭助の前に話の出來さうな氣がする。

「だけども、うちの者つて言つたら、母さんの氣性をうけたのか父さんがさうだつたのか、皆、妙に勝氣な氣性があつてゝ人の話や勸めを素直にきけないんですもの。――だもので、人に賴んだり話したりして置けば、幾らも善い緣だつてない事はないのだらうけれどね、そんな氣持にようなるものがないのだから……」

辰子は此麼ことも喋じて、やがて、下に下りて行く。恭助は、ひとりになると、自分の孤寡な人なじみの出來ない性質について思つたりした。そして、その性質の出處がどこにあるのだらう、と其麼ことを考へても見た。それから、それ〳〵に異る姉弟だちの性格とそれが招く運命と云つたことについても、思ふのであつた。その二三日たつて後、彼は靜かな夜、機を見て、俊子を、自分の部屋に呼んだ。――

俊子は、いつもの樣に、物しとやかに座つて居る。

恭助は、問ひ出でるに困つて、もぢ〳〵とそれに觸れて行つた、そして俊子が眞實相手を愛してゐるのかどうかを訊ねた。俊子は、流石に羞ぢてゐたが、少時して靜かに應へて、

「えゝ。――」

恭助は、その低い併し確かな答をきいて、妹を見戍つたゐた、彼の頰も、羞らひから赧く染まるやうに思はれた。

「ふうむ、――そして……强いられたとか、……唯醉つてるとか、――そんなでもない？」

彼は、靜かにいたはる樣に訊ねる。

「いゝえ。……」

俊子の顏へは、誠實であつた。

恭助は、妹の其眞摯な面持を眺めて、彼女の言葉つゞくのを待つてゐる。俊子は、低く併し熱心に、語りつゞけた、——

『……わたくし、兄さんに丈けは、お話して、相談したいと、思つてゐたのでしたが、……忙しくしてゐましたし、羞かしい氣がして、……』と、少時語を句切つて、『……わたくし、家の皆さんに隱して、濟まないことだと、思つてゐたのですけれど、……』

『それで、——』と、兄は、導くやうに言葉を挿む。

『わたくし、どうしても、あの人と一緒にならう、と、思ふのですの。——』彼女は、愈々低く、併し愈々熱心に、かう呟く。

『いま直ぐ、と言ふのではないんですけれど。——』

『ふうむ。』

二人は、暫らく口を噤み合つてゐた。が、靜かに、俊子の方から話を繼ぐ、

『わたくし、……あの人に强いられたと云ふ氣持は、少しも致しません、……』

『ふうむ。』

『……わたくし、……羞かしい氣がするのですけれど、……學校の頃から、あの人が好きでした。——』

『ふうむ。』

恭助は、妹の熱心な顏を見戍りながら、唯靜かに頷いてゐる。俊子は、今は、何でも、羞かしさに堪へて語らうと思ひながら、愈々顏を首垂れがちに、——

「……唯、好きな人だと思ふだけで、何と云ふわけもないのでした、けれど……」

だが、彼女は、だん／＼と、拷問にかけられてる樣な胸苦しさに堪へなくなつて來た。）

「それで、……」

恭助は熱心に而して神妙に、問ひかける。だが、倭子は、首垂れただけで、應へることが出來ない。

恭助は、少時倭子の答を待つたけれど、答はつひに來ない。

「ふうむ、——此麼こと、傍から裁判官のやうに問ひ訊すたちのものでもないんだらうけれど、ね……でも、自分の考にばかりも頼れないことが多いのだからね。」

恭助は獨り言のやうに呟く。倭子は、素直に頷きの容子を示して、暫らく默つてゐたが、——しほらしい面持で、又靜かに語り出す、

「わたくし……あの人から、思ひがけない、——本統に思ひがけない、（彼女は、かう繰返した時、胸のなかで、——でも、私はあの人が私を嫌ひではないとは思つてゐたけれども、什麼に私を好きなのかは分らなかつたのですもの、と其麼ことを考へてゐた。）手紙を貰つた時には、どうして善いのか分りませんでした。……何だか、厭やな氣もした樣に思ひますの。……」

「ふうむ。」

此時、倭子は、思ひきつて何もかも話したいと思ひながら、妙に口重くなつて、自分の思つてゐることが言ひ落しになつて了ふのに氣が付いてゐた。——彼女は、自分が小學の頃秀夫を好きではあつたが、それは唯何でもない氣持なので、卒業して家にゐる樣になつてからは、胸の底にその氣持は消えなかつたにしろ、他に自分の心を占め累らはすもの

が幾つかあつて、その一つの思ひに丈け氣を捉はれてゐるわけではなかつたのだ、と云ふ事を、遂に言ひ落して了つたのである。が、それを言ひ補ふ機を見出だすことが出來ない。で、その儘に、先を續けた。——

『……ですけれど、もう一度、手紙を頂いた時には、……わたくし、默つて了ふことが出來ませんでした。……』

『ふうむ。』と、恭助は、漸々熱意を増して、耳を傾ける。俊子は、又しても襲はれる、氣重い羞かしい氣持から、少時口を開けないのである。

『――どんな返事をしたの？』

俊子は、猶少時、應へられなかつたが、肩をすぼめる樣にして、

『わたくし……あの人を好きだつたと言ふことを、隱すわけには行かないと思つたのです。――』と言ふ。

『ふうむ。』

俊子は、ぢいつと體の血を押縮めるやうにして、又默りこんで了ふ。

『よし、よし、――』恭助は、少時すると、引受けたやうに、かう言ひ懸ける。彼は、もう自分の内に或想像が略浮んではゐるし、この上俊子を犯人のやうに問ひ訊すに堪へなかつたのである。

『よし、よし、僕達は、お前の愛情を殺せと言ふわけではないのだが、ね。――愼みの必要と、充分の覺悟の要ることを、言ひたいのだよ。――』

『わたくし……』と言ひかけて、俊子は又續けることが出來ない。――少時して呟くやうに、『……ですけれど、色々と、分らないことは出て來るのですけれど、……』

『ふうむ、――』

『ですけれど、――皆さんに、心配かけるやうなことは、したくないと思つてをりますんですの。……』

『よしよし、――』

恭助は再び引受けるやうに言つて、

『若しか、必要があれは、兄さんが向ふの人に會つて上げても善いさ。……だけれど、外からの干渉が善いとばかりは言へないし、ね、……』と、矢つ張り彼は、勝手の違つた所へ踏みこんだ様な、不自由さを感じながら口を噤む。

俊子は、今自分が愛人からどんな態度を一番望んでゐるのかと云ふ事が、今暫らくは母の耳に兄から傳へる事は待つて欲しいと云ふ事や、自分は決して母や姉妹に背く意志を持つものでない事や――總ての氣持を、兄の前に言ひたいのだけれど唯胸に繰返してばかりゐるに過ぎない。だが、彼女には今、内に湧く愛情の慾のかしと、と同時に、兄に對する信頼の情の増し昂まることを欺くことは出來なかつた。

やがて彼女は、靜かに兄に促されて、下へ下りて行く。そして母や姉の視線を避けながら、いつもの淑やかさで湯に入る道具を携へて、隣家の風呂に出かける。恭助は、その跡から後架に立つたけれど、自分の部屋に戻ると、訊問役の厭やあな氣持と、問ひ詰めるに不徹底だつたことから來る或歯がゆさの氣持に包まれて、暫らく仰向いてゐた。その間も、併し、彼の胸には、或駭きに似た感情が動くのであつた。――そこには、自分に惠まれぬ經驗や自分に乏しい性情に對する、感傷的な讃嘆の氣持も交つてゐた。みんな我强い、外からの拘束には結局從ひきれぬ姉弟だちなのだけれど多くは惡境遇や無教育や遺襲の爲に荒々しくされ陰暗になり過ぎてゐる、その中で、さうした境を超えて光を惠まれたものが一人あつた、謂はゞ、此麼氣持が、彼に湧いてゐたのである。その純情の注がれた對象の當否は別にして、その純情の泉んだ胸こそは、尊重されねばなるまい、彼は、此麼ことも思つた。だけれど、どうして其尊重の實をあげるべ

きのかは、まだ彼の孤獨な胸に委しく湧いてゐないもの丶やうであつた。

『まあ、さう案じないが善いでせう。——そのうちに又、どうか言ふ考をしなければならない場合も、あるでせうけれど、——兎に角、もう少し俊子を信じて見てゐらつしやい。』

二三日たつて、恭助は不服さうな辰子には斷う言つた丈けで、總ては自分が呑込んでゐるからと云ふやうな顏をして居た。——が、その後、秀夫と云ふ少年を見かけたりすることがあつても、彼は、何か氣の進まぬまゝに、進んで其少年と話し合はうとすることも、ないのであつた。俊子の物淑やかな態度には、その後も、さう變りのないやうに見えた。そして、今は一番彼女に馴染み出した。登代子の子の純造が、時をり彼女の背に負はれて、靜かな秋の日和の中に見受けられたりした。

十三

薄寒い靜かな夜であつた。——

『叔母さんも、お酒を呑むのですねえ。』

と、美佐子が、驚いた樣に、母の寡婦に語つてゐる。

『醉つて、何だか厭なことを喋舌つてゐましたわ。』

『そして、叔父さんを、お前お前と呼び捨てにするのですねえ。』

俊子も一緒になつて、傍から口を添へる。

二人は今、近頃家裏に移つて來た、叔父の處で、湯を貰つて、上つて來た處なのである。

『さうかね、――叔母も飲んでゐるの？』寡婦は、少し不快相に呟く。

『でも、流石に、東京を立つ時には、幾らか用意して來たものと見えるのね。――割の善い日傭仕事があると云つても出ないで、さうしてゐられるのだからね。』

『さうなんでしよ。――それに、此間の興行の時だつて、勘定違ひをして損した樣なことは言つてるけれど、中々喰へないもんだと思ひますわ。』脇手に、赤兒を眠らせてゐる辰子が、口を入れる。

『でも、叔母さんは、東京にゐた頃の方が、身體が樂で、割に合つたやうなことを言つてゐますのね。』

『さうなの？』

『だつて何處にゐたつて、あれ以上樂してはゐられないさ。――月に五六日忙しい思ひをしただけで、跡はあゝして毎日湯をたてたり、お酒を飲んだりして、遊んでゐられるのだもの……』辰子は嗤ふやうに言ふ。

『でも、心意氣の悪いものと云ふは、どんな善いことがあつても、愚痴を云ふものなのさ。』と、寡婦は、娘達を撫め顔に、此麼ことを言ふ。

そこへ、純造を抱えて、やはり湯上りの登代子が、すが〳〵しい面持で、入つて來る。

『善いお湯でしたわ。――姉さんに、いかゞですつて。――』

『さうねえ』と辰子は、赤兒の傍に身を伸ばして、大儀相に言ふ。

『お前、そんな大儀がらずに、入つてお出でよ。――少しつゞけて、あのお湯を立てさせて、入つて見るがいゝのよ、温まれば屹度善いのだから。』

寡婦は、働き手の辰子が、此頃腰の冷えや背骨の痛みを訴へてゐるので、かう勸めるのであつた。

『登代子——叔父さん處では、まだお酒を飲んでゐるの？』辰子が訊ねる。

『いゝえ。』

登代子は、純造に着換へをさせて遣りながら、應へる。

『今、ご飯になつた様でした。』

『さう。——入つて來ようかな。』

『今、時夫さんが、いつの間にか來て、叔父さん處の水盤を弄つたりしてゐますからね、一緒に家へ戻らないのと言つたけれど、又叔父さん處でご飯を食べるのだと云つて、諾かないんですの。——』

『仕様のない子。』辰子は叱るやうに呟く。

『餘り裏へは、遣らない方が善いね。』

『えゝ。だけれど、叔母さんが、わるくちやほやするゝので、善い氣になつて、——』

美佐子は、湯上りのすが〳〵し相な顔して着物を着換へさせて貰つてゐる純造を見守りながら、

『近頃、純ちやんは、餘り行かなくなつたのね。』と言ふ。

『でも、此子は、叔父さんが好きなのよ。』と、辰子が少し嗤ひを含んで言ふ。

『この間、叔母さんのことを惡口言つたり噛みついたりしたので、すつかり寵愛をなくして了つたんですよ。』登代子は、いつか嫌になつた、誰かに媚びるやうな調子で、自分の子を嗤ひながら、純造の着換へをし終る。そして寂しく、苦笑ひをするのであつた。

純造は、頬に血の上つた美しい顔して、母の傍に座る。この頃彼は、祖母や叔母達のゐる處では、餘り母の膝を慕は

ぬやうにすることを、學んだのである。

『辰子、お湯へ行つてお出で。そしてもう一度、時夫も入れてやるといゝさ。』かう言つて、寡婦は、裏へ入つていつたが、

『美佐でも、彼でも、少し私の脚を揉んで頂戴。――どうも二三日だるくつて〳〵。』と呼びかける。

『さうさう、美佐子、』と辰子が、赤兒の傍を立上りながら、『お前は、停車場の此間の處へ行つて、返事をきいて來てお呉れ。そして戻りにお母さんに、按摩を頼んでお出で。』

『按摩は要らないよ。少しだるい丈けの事なんだもの。――』寡婦が呟く。

『いゝから、――私も揉んで貰ふ。』

辰子は、斯う言つて、後架へ立つ。

美佐子は、ぶつすりとして、外へ出る。そして辰子が、奥に入つて母の傍に座る。

辰子が戻つて來て、登代子に訊ねる。

『お湯は綺麗だつた？』

『えゝ、今夜は割合に綺麗でしたわ。』

『さう、――何だか、あの叔母さんが、汚ならしい様でねえ。』

辰子は、ぢれ〳〵此麼ことを言ひながら、湯入り道具を提げて、土間に下りる。

登代子は、出て行く姉を見送つて、ひとりになると、眠さうにしてゐる純造に寢床を敷いてやつて、自分も其傍に横になる。まだ、いつもの習慣で、寢入るまで暫らくの間は、純造が母の乳房を握つてゐないでは、きかないのである。

――登代子は、さうして居ながら、注意しつゝも、いつかうと〳〵として了ふ。其淺い眠の中でも、彼女は慌しく忙しい夢に訪なはれるのであつた。

純造は、いつの間にか平和にぐつすりと寢入つて了ふ、その傍で、半ば乳房を露はにした登代子が、時をりうゝ、うゝ」と吾知らず呻きを立てたりしてゐる。

いかにも用事なげに、時節に合はぬ程厚着をしてゐる時造が、外から入つて來て、人氣ないあたりを見まはしたが、登代子に聲をかけて、

『おい、辰子は?』と訊ねる。

登代子は、はつとして、

『今、お湯へ。』と呟く。

『さうかい。――』彼は又、上へ上りもせずに出て行つて了ふ。

登代子は、後しばらく、うと〳〵として居たが、思ひ切つた樣に立つて、縫ひ裁ちものゝ仕事をひろげる。――靜かな夜になつて、哀な虫のこゑが、乏しく、地にしみ通る、そして時をり、佗しい風の音が、家戸を搖ぶつては通り過ぎる。――彼女は、自分が此處に來てから、一月に餘る日の事を、自づと思つて居た。彼女には、純造を抱へて此處にゐる生活が、どこまで續けられることか、どう道の開けることか、まるで考へることが出來なかつた。自然と彼女の胸に浮ぶものは、純造の氣むづかしく自分を追ひ縋る姿である、それを苦々しく叱りつける母の寡婦の姿である、同じやうに癇癖を起して純造を撲り付けることさへある時造の姿である、其中におどおどと落付くひまもなく立ち働く自分の姿である……彼女には猶遡つて、父の在世頃からの自分の不遇な位置が思浮んで來る、父の死後好まぬ結婚を强いられ、

子を產み、又家を飛び出した自分の姿が思浮んで來る……そして今、かう家に戻つてゐるけれど、未來に描かれるものは再び此家を退去する自分の哀な姿なのである。……

『どうかね？――皆は？――』

かう言つた丈けで、どこか食後の散歩から今頃戻つた兄の恭助が、默つて、登代子の傍を通り拔けて、二階に上つて了ふ。登代子は、その寂しげな――彼女には、總てが唯寂しいものに映るのであるが、――兄の姿を、心に追ひながら既に幾度か幾度か思つた樣に、此兄に自分の身のことを計らうかとも思つて見るのである。だけれど、もう幾度か幾度かの事の上に、今度は暫らく會ふことのなかつた間に親みもいもとの樣ではなくなつて了つて居る樣な氣がする。それに兄の靜かな勉强を、自分のことで妨げたりしては、とも思ふのである。そして、彼女は、矢張り自分ひとりの胸に、總てを包んで了ふ。

やがて、肩を揉ませながら眠入つた母の傍から俊子が立つて、登代子の傍に自分も一緒に縫ひものゝ仕事を取出す。時をり、風の吹きすぎる靜かな時が經つて、慌しく美佐子が外から戻つて來る。そして彼女は、少時何をするでもなく身を横ざまに座つて、道々思つて來た事の續きを、思ふともなしに思つてゐるのであつた。

『姊さんは？……さう、……按摩はゐなかつたのよ、こつちへ來なかつた？』

『いゝえ。――お母さんは眠つて了つたわ。』

『さうなの？――』

話が途ぎれると又、美佐子は自分の思に返る。――眼の前の灯の下に居る、靜かな二人の姊妹が、自分はそれにどんなにか親みたいのだけれど、矢張り親みきれない、身の外の人なのだ、と其樣ことも思ひながら、――そして彼女の思

ふ事は寂しかつた。彼女は、此頃に、よく家を出ることを思つてゐるのである。……登代子も來た、叔父の夫婦も來た、家のうちは混雜を增すばかりで、手は有り餘るのだ、自分のやうな者は、こゝに居て時々人の氣持を紊したりすることは要らない筈なのだ、兄も姉も氣ぶりこそ見せね、さう思つてゐるに相違ない。さうなのだ。そして、家も今は、夏や春の頃程に、裕りのある生活ではないのだ。それから來る氣障さもあらうけれど、此頃兄や姉は、自分だちに隨分厭やあな顏を見せる事がある。自分はそれさへ何處々々までも堪へて此處にゐる必要があるいであらうか。……彼女は、此處を離れて行く先の廣い廣い世の中を見る、どうにかなる事なのだ、どうにでもなればなる迄の事だ、此麼絕望的な勇氣が胸を突いて來る、そして彼女の胸は燃えるのである、だけれども、その最後を鎖すものは、又、寂しく賴りない幻なのであつた。……

『どうだつたね?』

湯上りの姿の辰子が、奧に入りながら、美佐子に訊ねる。

『もう暫らく待つて下さいつて。』

『何だつて言ふの?』辰子は、妹達の處に座ると、不機嫌らしく美佐子に言ふ。

『もう暫らく待つて下さいつて』

『どうしてだつて?――』

辰子が訊ねる、美佐子は應へない。

『家でも困るのですからつて、よく話したの?』

『いゝえ。』

『どうして？……唯さうですか、はいつて歸つて來たの？……駄目な娘ねえ。……』
『だつて、——』
『あんな狡い奴なのだから、是非々々つて迫らなければ駄目ぢやないの。』
『だつて、此前隨分と言つたのですもの。』
『でもねえ、——』
辰子は、自分の不服な氣持の始末に困つて、口を噤んで了ふ。
『俊子。——田代では何と言つたの？』
『この七日まで待つて欲しいつて。』
『仕様がないのねえ。』
辰子は呟きながら、洗つた髪の束ねにかゝる。——そして、此頃のめつきり不景氣になつた世間や、その煽りを食つて興行の方もさううまく行かない自家のことを思つて、くさ〳〵とした氣持になるのであつた。
叔父の處で、湯のあと暫らく話こんでた時造が、寢入つた時夫を腕に抱へて、戻つて來る。そして、四人の姉妹だちが靜かな夜の灯で、それ〳〵の仕事をしたり物思ひに耽つてゐるのを、哀れなものにも見ながら、用意されてあつた寢床の中に、時夫を抱へこむ。その傍に、自分も寢こんで、少時靜かなまぢ〳〵とした眸で女達の方を眺めてゐたが、ふいと、
『おい、辰子！』と聲をかける。『今、叔父さんに、談してきたがね、行つても善いやうな話だつたよ。』
『さう。』

『たゞ、あの鑛山の芝居小屋に二人ぎりではさびしいだらうつて言ふのだけれど、何ならば、もとの定番が暫らく一緒にゐれば、いゝのだからね。』

『さうよ、それ位なことは。』

『寂しいには寂しいさ。何と云つたつて、東京住ゐをしてゐた人達が、あんな山の中へ行くのだからね。——だけど。』

『だつて、身上ずくの事なんですもの。』

『さうさ。——だからね、私は叔母さんにさう言つたよ。此方へ來て思ふ程いゝ稼ぎがないつて嘆息なさつてる話だけれど、鑛山の小屋の定番は、どうですつて、ね。そこなら定番料も拂へるし、色々金にはなるのだからつて。——叔父さんも、目下の者の近くで、あんまりぼろも晒したくないんだらうから、そつちへ行くのを、寧ろ贊成の形だつたよ。』

『あの人のは、いつだつて、反對するつて事はないんだから、——』辰子は嘲ふやうに云ふ。

『うむ。——それでねえ、』と時造は聲を高くして、『叔父さんは、出來るならば、登代子が一緒に礦山の劇場へ行つて與れゝば、大層いゝが、と云つてるんだけれど、ねえ——』と相談する樣な口ぶりで、言ふ。

『向ふへ行けば、鑛山の長家あたりを商ひして歩るく便宜はあるし、そのうちに、得意でも殖えれば表店だつて張れるだらうから、と云ふのだがね。』

『さあ、——それは、登代子の意見次第ですけども、ねえ、』と辰子は、『だけれど、あの叔母さんと、登代子が、うまくやつて行けるか知らむ?』

『さあ。』

登代子は、それを聽きながら、どうとも應へをしない。

『さうさ、――あれで、叔母さんは、しつかり者だからな。――だが、兎に角、登代子も一應考へて見て御覽。母さんの意見もあるだらうけれど、』

時造は斯う言つて、話すだけを話終ると、眼を瞑つて了ふ。そして間もなく眠りに落ちる迄、この頃うまく行かない稼業上の事や、それに對する應急策の事が、くる〳〵彼の頭を去來してゐるのであつた。

まもなく、一眠りした寡婦が、又起き出して來て、眠さうにしながら冬着の用意を急いでゐる娘達に、もういゝ加減にして寢るがいゝ明日又早く起きるのに、と慫めながら、自分は一時、やはり布をいぢつてゐる辰子の傍に談しこむ。――

『……さうねえ、餘り間近かにゐれば、いろんな氣まづい事も出て來るものだからねえ。――それがいゝかも知れない。叔父や叔母にとつても、割に合ふ事なんだし、……』

寡婦は此麼話をして、叔父夫婦の礦山の方へ移るのに反對はしなかつたけれど、登代子を叔父と一緒につれさす事には、まるで反對の意見であつた。

『私も、色々考へてゐるんですよ。――第三坑の方が、大層ひらけて商賣も盛る話ですからね、其方へ店を出してはどうかしらと。家はいくらも建てゝ貸す人があるしね。仕入は大抵此町で出來る事だし。――だけれど、それにした處で登代子が、もう少しはつきりしなくては、ねえ……此頃は皆で氣を付けるから、幾分よくなつたものゝ、まだ〳〵純造があれでは、ねえ……』

彼女は此麼ことも言ふ。そして又、寡婦と辰子とは、二人で、礦山の劇場の興行と興行の間がまるで遊びになつてゐる家の狀態をどうにか直さなければならないと、其麼話もする。――そして久しく懸案になつてゐる、此家の二階で小旅宿の營業を初めては、と云つた話が新たに持出されるのであつた。

『唯、その資本なのだけれど、ね。』

『えゝ、でも、愈々さうするとなれば、又どうか話の出來ない事もないでせうが、――うちでは、まあ來春まで我慢せよ、と云つてるのですけれど、……』

『さうねえ。』

かうして、二人は娘だちが各自の寝床に入る後までも、ひそ〳〵と世帯話や近隣の噂話を續けてゐる。

十四

間もなく、叔父が印半纒に形の崩れたソフトをすぽんと被つて、頸から釣つた小太鼓を叩きながら、興行の度毎に、鑛山の長屋中を歩き廻る、其妙なスタイルが見られる樣になつた。そして、叔母は叔母で、姪達の仲店に手傳ひしたり役者達の賄方を請負つたりする。――二人は、時造や辰子の勸めで、とう〳〵鑛山の芝居小屋の定番役を引受けたのである。

『その內、又資本でも溜れば、鑛山の鑛夫だちを相手に、商賣を初めるもいゝ。それには、鑛山に行つてた方が、顏も賣れることだらう。』と、寡婦も、其寥言葉で、二人を說きすゝめるのであつた。

叔父も叔母も、それに逆らひきるわけに行かなかつた。二人は、もつと樂な割のいゝ仕事のある、そして姪甥達の親切に取まかれた、周圍を想像して、東京を引揚げて來たのであつたけれど、來て見ると總てが、彼等の豫想のやうには行かなかつた。一つには、急激に襲つて來た世の中の不景氣の影響もあるだらうけれど、どの姪もどの甥も、半ば厄介者らしい彼等二人に對つて、親切な愛想のいゝ容子を示すものは、殆となかつたのである。その氣持の反響は、わけて

も、誰　彼も他人ばかりの、叔母にとつては、きつく響くものなのであつた。

彼女は、若い甥や姪のいづれもが、叔父の夫婦に對して侮蔑の眼を向けてゐるのを感じた、そしてそれは、彼女の妙な反抗心を慫るものであつた。その爲に彼女は、義姉の寡婦に勸められる日傭とりの仕事にも出澁り、夫を相手に酒を呑んだり、その上に、あまり働きのない夫を罵つたり嗤つたりする事に依つて、自分自身に欝を晴らさうとする事があつた。さうした彼女の心理には、又、唯一人の味方と思ふ夫に晩酌の酒を惜むことをしなかつたり、子供心に遊び場所の殖えたのを欣ぶ時夫や純造の氣を迎へたり、甥や姪の氣嫌を取ることに依つて、自分の不安な心境に、或安心を得ようとする氣持の働く一面もなくはなかつた。

が、兎もあれ、醜い容姿とがさつな物ごしをもつた彼女は、その事だけに依つても、目下の若者だちから、尊崇の意をかち得ることは六ケ敷いやうに見えるのであつた、そして此土地に來てから一月と經たぬうちに、彼女と夫の叔父とは、左遷の意味のかなり明らかな時造達の所遇に、飽迄反抗の意志を示す氣力もないのであつた。——

『まあまあ、來たものだから、半年位は辛抱しようと思ひまして、ね。——』

叔母の彼女は、いつのまにか馴染になつた礦山の坑夫や職工達と、酒づき合ひの上で、此麼述懷話をすることもある。

『時造なども、叔父のわしに、こんな太鼓廻りまでさせるとは、理義を知らぬ話なのですが、な。——今當分は、何も言ひませんよ。言ふべき時が來れば、言ひますけども、な。』

叔父も、酒の氣のある間は元氣で、此麼氣焰をあげる。だけれど、月の初めと月の央ばと二三日宛忙しい思をする事の外は、人里離れた山麓の芝居小屋に、する仕事もない彼は、時々杖にすがる様にしながら、のそり〳〵と辰子や時造の家の方へと下つて行く。そしては、少し許りの酒を振舞はれたりして、好惡の感の瞭りとしない顏をして、又山の寂

しい芝居小屋へと戻つて來る。――そして其度毎に、彼の時造や辰子や義姉の寡婦に對する、それとない反噬の氣持は小屋へ歸つてしばらくの間新たにされることとなのだけれど。

「まあまあ仕方がないさ。あれ丈けの人柄で、氣働きのない男なのだから。――」

寡婦は、此麼ことを言つて、義弟の歸つたあとでは、娘達に撫めるやうに言つてきかせる。

「なか〳〵、あんな芝居小屋の定番役などする者はないんですからね、まあまあ、叔父さん達がゐて吳れて、有難いんですよ。――そりや、誰がやつた處で、あれだけの建物を拭き掃除するんだから、さうさう綺麗と云ふわけには行かないさ。先づ〳〵あれで、結構な方ですさ。」 時造も、叔父叔母に就て湧く不平のこゑを、此麼風に、說き撫めてゐる。

でも、興行の度に目に觸れたり、時々聞えて來る叔父叔母の山の芝居小屋での生活のさまに對つては、若い姪や甥だちの眼は、自然と批評的な、そして又嘲笑的なものとなる樣に見えるのであつた。

恭助は、――他の姉妹達も、大概さうであつたのであるが、――叔父叔母が自分の家裏に來て以來、殆と一度も彼等としみ〴〵話込むこともなかつた。時をり、湯貰ひに出かけたり、散步の道に立寄つたりしても、大抵其日々々挨拶を取交はすに過ぎない。叔父叔母達が、礦山の方へ移つてからは、猶のことであつた。叔父も叔母も、一家の最上權が其手にあるのだと思つてゐる、恭助の、さうした態度は、彼等に或威壓と、却つて又或心賴りを感じさせるものでもあるのであつた。何故なら、他の家族のもの達の見え透いた偏頗心多い態度よりも、恭助の無關心や冷淡の中には、何かゞありさうな氣がされたからである。だがそれも、かなり當のない期待で、實際眼に見ねばならぬ無關心と冷淡の態度は屢々叔父や叔母に、心寂しい氣を起させるものでもある。でも彼等は、恭助に就ては、觸れてはならぬ至尊のものに對する樣に、餘り口にすることがなかつた、そして又口にする時は、彼等自身捉へ難い內奥ではどうあらうとも、非常に

頼もしい様な信頼しきつてゐるやうな口ぶりとなる。

『恭助さん丈けは違ふ。』姪や甥達から反感きり從られる叔母も、どこかで此麼氣がして居るのである。

『どうだな、――近頃、菌が又大分取れる樣だ。一度遊びに來ないかな。靜かな處で、勉强も出來るぜ。――あゝ、是非一度。寂しいけれど、なか／＼善い處だ。』

叔父は、時をり下つて來た時、酒に身を溫めて歸り仕度をしながら、此麼ことを言つて、恭助に從めても見る。が、恭助は此頃、漸々に、散步にさへも家裏を離れて遠く出かける事は稀れになつて行くやうに見えた。そしては、引受けた翻譯の賃仕事を急ぐことが多かつた。もう漸く冬に入る頃である。其頃、彼は一度、東京に上ることがあつた。――

それは、友人の山下が、とう／＼田舍へ學校の敎師として赴任する報知を、同じ友人の久田から受取つたからである。悲しい報知、――と、優しい久田は書いて寄越した。恭助には、久田程の純情深い思遣りのあるわけではなかつた。だが、孤寂な生活に慣れた者にとつては、時として幾分の好意をでもふり灑げる機會が、一種の欣びとなる事がある。恭助は、幾つかの反省の後で、つひに山下を田舍へ見送る爲に、上京を決定する氣になつたのである。

彼は金に換ふべき翻譯仕事の原稿を携へて、家を立つた。其夜、久田と山下と、三人相寄つて、山下の夜行の汽車の立つまで、或靜かな休み處の一室に、杯を換したり話し合つたりしてゐた。山下は其夜、少し沈んだ調子で、言葉少なく、杯を銜んでゐた。そして、久田や恭助の好意を感謝したり、將來の鼓舞を希つたりして、その惱ましげな眼を瞬いてゐた。

久田は、恭助と二人して山下の宿を訪ねる途中、優しく山下の爲に涙を拭ふ程であつたけれど、三人相會つて後は、

平靜な調子で、樣々な大人らしい注意を忘れなかつた、そして山下の行先の町にゐる知人に宛てゝ紹介の手紙を書いたりしてやる。山下は、汽車の時刻が迫つて外に出ると、熱心な面持で、二人の友人の手を堅く握つた。

山下が、其睫毛の長い眼に潤みを湛へて、車室の窓から二人を見かへりながら去つた後、久田と恭助はしばらく、薄暗い街の通りを歩いて居た。そして殆と一言も言葉を交はすことがなかつた。と、其夜久田の處に泊る筈であつた恭助が、急に、失禮しようと言ひ出した。

『だつて、どこへ？』

『でも、——叔父のとこへ泊る。』

恭助は、其叔父が既に自分の家の方にゐるなのに、かう應へた。

『さう。——今から、いゝ？』

『あゝ。』

二人は言葉少なく別れて了つた。二人はお互ひの寂しい氣持を二人ゐる事に依つて強いて紛らさうとも思はなかつたのである。

そして恭助は、暫らく、明るく賑やかな公園地内の娛樂地域の人波に揉まれ歩いた後、場末の汚ない宿屋の一室に身を横たへてゐた、彼は、其夜寂しい樣々なことを思ふ前に、疲勞から直ぐ眠入つて了つた。そして翌る朝、冷たい寢床に眼を醒ました時、まだ汽車に搖られてゐる山下のことを思出した。

その日、恭助は街に出て、彼の翻譯を金に換へた後、一日埃の街路をうろつき廻つてゐた。そして、久田には電話をかけただけで、M——町まで行く夜の汽車に投じてゐた。彼には、都會の騷擾が、やはり愈々自分に嫌惡きり與へない

もの ゝ様な氣がして。

その汽車で、或小さい驛に着くと、彼は全く思ひがけない、友人の吉本と乘合せになつた。――それは、彼が中學の頃から大學の初めまで一緒だつた、親しい男なのであつた、そして妹の美佐子が娶はされる筈であつたのは、此男の兄だつたのである。恭助自身、この男とは生活を一緒にしようとも思つた、其農園の主人なのである。二人は、恭助が大學を出て以來、まだ逢ふことがなかつた。

『うむ、ちよつと、此近くの農耕地見物に出かけた處さ。』吉本は、元氣に、其輝く瞳をあげて、言つた。――『君は? 元氣?』

『あゝ。』

『――皆で、時をり君の噂をする。是非出かけて來給へ。……美佐子さんも變りなしかね?』

『あゝ。』

『……兄も近頃、細君を貰つてね……一時は、又、兄の生活が亂れさうで心配してゐたけれど、お蔭で――』

吉本は、話す丈け話すと、後惜みのないやうな容子で、汽車に揺られながら、直ぐ寢つて了ふ。恭助は、いつもの癖で、容易に眠入ることが出來ない。

『さうかねえ、山下君を送つて來られた? いや、君だちの道は、中々難險だからねえ。……』吉本は、眼が醒めると又から話し出す。

『そこへ行くと、僕達は、暢氣なものだなあ。……』と笑つて、話が盡きる頃、彼は又眠の方へ陥ちて行く。

さうして、汽車がM――町に着くと、幾度か無益に、恭助を自分の家に誘つたけれど、

「では、此度、その内に出直して來給へ」

さう叫んで、まだ薄暗い廣場の方に消えて了ふ。恭助は、人のゐない待合室の隅に腰かけて、乘繼ぐべき汽車の出るまで、其處に待たねばならぬのであつた。

彼は、いつも腹藏を開いては來た吉本の性格と、いつも胸襟を開くことのない自分の氣質と、その二人が或種の尊敬を拂ひ合ひつゝ來た可也長い交友について、ぼんやり考へながら、いつか轉寢の夢に入つてゐた。そして、眼を開いた時外套の襟を立てゝ寒げにゐる自分自身の姿を哀れみながら、今見た夢を寂しく思かへしてゐるのであつた。――それは餘りにも瞭りとした夢であつた、それ故に却つて信用できないのであつたけれど、――妹の俊子が、或朝ひよつくり自殺をしてゐたのである。そこは、恭助の姉弟達が子供のころ學んだ小學校の高い石段の蔭なのである。家族の者だちや隣家の人々が馳せつけて、その死骸を取めぐつて泣き悲んでゐる、恭助も亦其處に立ち加はつて、唯一つの事を一心に思ひ悔んでゐるのである、俊子が其死を企てる前に、何かを彼に話してゐた、彼はその意味を了解しなかつた、その自分が悲しまれるのである。……恭助は、妙な氣がして其夢を思ひ返してゐた、自分が俊子に對して何か非常に濟まぬ事をしてゐるかの樣な胸苦しさが湧いて來る。だけれど、其夢の中で、俊子の自殺した日の日附が、三月十一日と瞭り記されてゐて、それが俊子の誕生日だつたと云ふまで、分つてゐる、恭助は俊子の誕生日は知らなかつたけれど、その餘りに明瞭すぎる記述が、夢に對する信賴を却つて減らして呉れるやうな氣もするのであつた。

そんな事を思ひながら、又うと／＼とする中に、彼は夢とも云へぬ、朧ろなものゝ中で――おい、おい、と、今別れた筈の妙な外套の旅姿をしてゐる吉本に、呼びかけられたりして居る。疲れて居るのだな、と其麼ことを思ひつゝ、彼はもう一層、外套の中に身體を縮めこんで、腰掛の隅に脊を押しつけるのであつた。夜明けの汽車の立つまで、まだ暫

らくの間を、其處に待たねばならないのである。

十五

恭助が東京から戻つて、十四五日、——鑛山の興行で、時造や辰子を初め一家のものが家を留守にして、出かけて戻つてから、三日か四日目の事であつた。或夕方、登代子と其子の純造の姿が、突然、此家から見失はれた。

母の寡婦や辰子が、その疑ひを持ち出したのは、夕方、もう日の暮れ暮れのことであつた。その日の晝、いつもの些細なことから美佐子と登代子が罵り合ひを初めて、母の寡婦にひどく叱り付けられた事實がある。だけれど、母も辰子も、初めは容易に、登代子母子の出奔にそれと氣付くことが出來なかつた。で、此頃家にゐて餘り頼り處のない登代子が時をり出かけては話込む知人の家に、今日も出かけて喋舌つてゐることなのかと、母や姉は不快相に嘆息しながら、辰夫を使に立てゝ見た。だけれど、今日一日登代子の姿はそこに見えなかつたと言ふ。——母や姉妹だちの心は、そろ／＼不安になり出して來た。

が、登代子の出奔は、今度が初めてゞもないので、餘り騒ぎたてたくない意志もあつて、母や辰子は、靜かに捜し出さうと考へるのであつた。もう、すつかり夜になつても、登代子と純造の姿は見當らない。一二の者は、最終の汽車を見張るために、次ぎの停車場へ急がされた。——話をきゝ付けた、極く近隣の人々が心配さうな顏で見舞に來る。

『なに、もうあれの癖なのですから。』

寡婦は、わざと事もなげに此麼ことを言ふ。

見舞の人々が戻つて了ふと、寡婦や辰子は、今更のやうに、登代子がどうして斯う家を、飛び出したものかを、談し

合ふのであつた。恭助も、下に下りて、その座に加はつてゐる。

　默り不快がつてる辰子は、今日の晝間の話をもち出して、それとなく美佐子の粗野に批難を加へたり、此頃一生懸命に働いてた登代子に同情よせたりして、

「でも、あの子を抱へて、お勝手から洗濯から、よくやつては居たのですよ。」と、此麽ことを言ふ。

　美佐子も、母の寡婦も、責めを感じるやうに默つてゐたが、――

「でも、何も、今日のあれんばかりの事を角にしなくとも、……」母は口を開くと、ぶり〳〵此麽批難を言はずにはゐられない。

　彼女には、何よりも、相變らずな登代子の意久地ない氣性や遣り方が、いま〳〵しくて堪らないのである。そして又今夜の彼女には、唯默まりと事件を審理してゐるやうな恭助や辰子の態度もが、何か腹立たしい氣持なのである。――そして又、その氣持は、美佐子の方にまで翻つて行つて、彼女の美佐子に對する苦々しい氣持を、募らせもする。

『碌々、何の働きも出來ない癖に、喧嘩などばかりしてゐやがつて、――』彼女の美佐子を見る瞳には、此麽ことが語られてゐる。

　母の寡婦には、今夜、何かかにかゞ氣に障つて仕樣ないのである。

　そのうちに、登代子に就て、意外なことが分つて來た。それは、先刻辰夫が使に立つた、知人の家の細君から洩れた事なのであるが、――數日前、登代子に宛てゝ書留の郵便が屆いてゐたと云ふことなのである。其細君も思懸けぬことだつたけれど、登代子の名のある事なので受取つて置いたが、差出人の名は遂ひ記憶しなかつたと言ふのである。登代子は、子供に着物を造りたいので、先にゐた處で人に縫ひ物賃や仕事の手間を其儘にして置いたそれを、送つて貰つた

のだと言つてゐたと言ふ。

『――なに、ひよつとすれば、それは、純造の親父からかも知れない。』母の寡婦は、其場を取繕らうやうに、此麼ことを呟いた。

だけれど、それが登代子の別れた夫からでない事は、寡婦も辰子も知つてゐた。そして又、知人の細君の言ふ事にしろ、怪しい處がある。眞實、その書留の金が、どこから屆いたものなのか、家ぢゆうの誰も、確かに知ることは出來なかつた。

唯、母や辰子の臆測に依れば、それは多分、もと登代子が此家の柱でやつてゐた頃、二階に暫らく下宿して居た、人の善い小役人がある、其男からなのであらう、と云ふのであつた。其男とは、登代子は、一時變な噂の立つた事もあるのであるが、その眞僞は別としても、其男が大層親切に登代子親子の事を見てゐて吳れるのは眞實なのであつた。彼は結婚して暫らくになるけれど、子供がないので、純造を養育してもいゝ、其麼話のあつた事もある。

で、人の善い母の寡婦は、其小役人に今も信賴を置いてゐるので、若し登代子が其處を賴つたものとすれば、却つて安心な氣もしなくはなかつた。彼女は、今夜、若しかすれば、登代子が純造を連れて河か海へでも飛びこみはしないかを、漸々恐れ出してゐたのである。――が、登代子と其男との間に、性的な醜事を想像し易い辰子は、若し男が此度其麼金を送つたりしたとすれば、隨分不埒な振舞だ、と其麼風に思ふのであつた。

恭助は、それらの事を聽き終ると、自分の部屋に引揚げた。彼も亦、其小役人を知つてゐた、そして好んでゐた、だもので、若し登代子が其處を賴つたとすれば、安心出來ることの氣がしたのである。そして、此想像が、多分眞實であるやうに思へたのである。――彼は、登代子と純造が見えなくなつたと聽くと同時に、不祥な想像を描かぬわけに行か

なかつた、そして又、いつか見た俊子の自殺の夢の事が思浮んで、彼の胸は不安を增したのである、だが、今は其麼想像が、想像に過ぎない事のやうな氣がしだした。そして彼は、若し實際登代子が、例の小役人の處を頼つたものとすれば、自分からも依賴の手紙を書いてもいゝ、さうも思ふのであつた。

だが、彼は獨り思つてゐると、登代子と純造が家に戻つてから一月二月の間、殆としみ〴〵と談し合つた事もない自分が、責められても來る。彼は、眼に絞り出されたやうな涙を湛へてゐた。併し猶、彼の心には、金輪際動かぬやうに物を見凝めてゐるものがあつた、そして彼は、何故登代子が此家を出奔したかを問ひつめようとして居る。彼は、責めを何處に持つて行つていゝのか知らなかつた。——だが、最近の一つの事實として、恭助はいつの間かに、此麼話を聽き知つてゐたのだ。

それは、此間の興行の時の事であつた。何かの事から、時造が癇癪を起してゐる矢先、純造が母を追ひ慕ふ姿に一層氣を素されて、とう〳〵純造の頭を叩きのめして了つた。その時登代子は其處にゐなかつた、叔父や叔母は寧ろ純造の喚きが面惡くがつて、時造の打擲には批難の色も見せようとしなかつた。純造は一層悲しく泣き喚いて母を慕つた。それを見兼ねて、役者の一人が、彼を登代子のもとに連れ去つた、——と云ふのである。その話を、恭助はいつも登代子と爭ふ相手の美佐子から、深い同情で話してきかされたのである。恭助は善意に滿ちて一家の善きを計らうと努めてゐる時造に、そんな事件で批難の矢を浴せる不快を思ひながら、此頃働き疲れてか、神經質になつてか、或は家長としての心意からか、動もすれば家族の誰彼に、押かぶせる樣な態度に出る時造の姿を、自分の前から打消すことが出來ないのであつた。

其夜最終の汽車で、時夫を連れて近隣の町まで出かけた時造が、戻つて來た。それと一緒に、次ぎの停車場まで、登

代子と純造を見張りに出た人達が、甲斐なく引揚げて來る。

『登代子が居なくなつたのだつて？』

時造は、家に戻ると、意外な樣に、――又例の記憶から來る心苦しさは蔽つて、母と辰子に問ひの顏を向ける。

『え丶、』と辰子は、まだ不快がつてる面持を消さずに、――今日どんな騷ぎがあつたか、又どんな企みが登代子にあつたか、それを夫に告げて聽かせる。

『ふうむ、――では、先から其氣はあつたものなのだね。――』

時造は此麼ことも呟く。だが、彼はまだ誰にも話しない事で、今度の登代子の出奔の動機に就て、或疑ひを懷いてもゐるのであつた。――と云ふのは、彼は、此家によく出入りする役者の一人が、登代子と可也親密さうな素振りを見せることのあるのに氣付いてゐた。それに就て、時造は、いつか登代子にそれとなく注意した事もあるのであるが、――それが此度の出奔に何か關係あるのではあるまいか。此麼疑ひなのである。だけれど、彼は、閨室話に、辰子に話して見る外、誰にも言ふ勇氣はなかつた。

其夜、母の寡婦も美佐子も俊子も、それ〴〵に何か哀な悲しい氣持に包まれて、各自の寢床に入るのであつた。弟の辰夫までも、平生登代子とも純造とも、さう親み合つてゐたわけでないのであるが、急に其母子が哀れになつて、自分も此麼家は早く飛び出して了ひたいと、わけもない憤ろしさを感じたりする。そして、時造と辰子迄、お互ひの氣持の中に、何か物の挾まつた樣な、氣まづさを感じ合ひながら、その閨室に入るのであつた。そして夫婦ともに、自分達の子の時夫にまで、何か投げ遣りなよそ〳〵しい態度きり振舞へない。

『まさかに、馬鹿な考など、起しやしないだらうなあ。――』何と云つても、氣の輕い時造は、辰子に此麼ことを呟か

ずには居られないのである。

『そんな事。』辰子は打消すやうに言つて、夫の氣輕さを矯める樣な眸をしたりする。——

その後幾日か經つても、豫期された登代子と純造の消息は、どこからも屆かなかつた。M——町に出る用事のあつた母の寡婦は、其處からつでを賴つて、例の小役人の方に搜りを入れて見たが、そこへ賴つた樣子もない。そのうちに、何處からか、妙な噂が、登代子に就て傳へられて來た。それは、町の者が或驛で、登代子を見かけたのであるが、その時見知り越しの或役者が一緒だつたと言ふのである。辰子と時造は、その噂が案外眞實らしいことを、二人の間に承認しようとして居た。だが、母の寡婦は、容易にそれを承認しようとしない。——恭助が、それとなしに聽き知つた丈けの處では、此麼事實だけは、嘗て有つたのである。例の、時造がひどく純造を叩きのめした時、登代子に非常に同情して、純造を登代子の處へ連れ去つて彼女を撫めてやつたりした役者のあつた事や、その役者が登代子にのみでなく純造を大層可愛がつて居たと言ふ事や、それよりも以前に、登代子が或役者と親愛らしく振舞ふことで時造とか辰子とかから注意を受けることがあつた事。それ丈けの話なのであるが、その二つの場合の役者が同一人であつたかどうか、恭助の控へめ勝ちな探索の耳には、瞭り分らない。

そのうちに、其役者との關係は、唯この家を飛び出すが爲の方便で、矢張り彼女は小役人の處を賴つて落ちついたものなのだ、と其麼想像もされ出した。それは、母の寡婦が、憚り勝ちに、恭助に談して見た事なのであるが、恭助は、登代子にそれ丈けの大膽があつたかどうか分らなかつた。そして、母の名でした、例の小役人への照會に對して、小役人からは、こんど登代子は全るで自分方へは姿を見せないとの返事があつたのである。——だけれど、例の書留郵便の出處は、それを受取つて呉れた知人の細君の話を綜合して見たりして、どうも、其小役人からのものらしいのである。

登代子と純造の蹤跡に就ては、その後、その儘にして、餘り探索することもなしに過ぎて居た。それから可也後のことである、辰子が或確かな處から、登代子が全く意外な處に落ちついてる話を聴き出して來た。――それは、もと矢張り此家の芝居小屋に定番をして居た、子澤山な貧乏な一家があつた、それが色々不義理を重ねて此町を立退いて、今横濱あたりに潜んで勞働に從つてゐる、其處に、登代子母子が頼つて居ると云ふのである。

此意外過ぎる報知は、だが疑ふ餘地のないものであつた。何故なら、其一家の息子の一人が、矢張り家を逃げて、辰子の知つてる縁戚に泊つてゐる、その息子が、委細を談したのであるから。登代子が、其處の娘と一緒に、今紡績の會社に勤めてゐる事や、純造は其間其處の母の手に託されてゐる事や、又其處の主人がやがて顏向けのなる時が來れば、登代子を連れて此町に來ると云つてゐる話の事まで、その息子の男が語つたのである。

だが、どうして登代子が、町の誰もか殆と知りも爲ない其一家の潜伏所を知り得たものか、どんな積りで其麼貧しい處に頼つたものなのか、まだ明らかにはならなかつた。

『よくよくな奴だ。』母の寡婦は、此話をきいた時、腑甲斐ないと云ふ氣持と哀みとから涙を垂れてゐた。――辰子と時造とには、登代子が唯一人で家を出たものとは、どうしても思ふ事が出來なかつた。矢張り、一時の臆測の樣に、その道伴れには役者があつたのであるが、どんなか關係で登代子一人になつて、其處へ辿り着いたものなのだと思ふのであつた。が、母の寡婦だけは、幾分それと違がつて、――登代子は矢張り例の小役人を頼つたものなのだ、尠くとも家を出る時は其積りだつたのだ、だが向ふへ行つて家庭的の事情から其處に頼る事も出來ずに、思ひがけない其麼處へ泣きこんだのであらう、と其樣に思つて居る。

後で又、辰子が例の息子の男から聞きこんだ事實なのであるが、――登代子が、どうして其一家の行先を知つたかと

云ふわけは、丁度其息子の頼つてゐる縁戚に、登代子が何か用事で出かけた時、其出奔した家の主人からの手紙が其處に屆いてゐたとか、其封筒が落ちて居たとか云ふのであつた。その縁戚と丈け、出奔した一家の者は音信を通じてゐたものなので。

かうして、此れ丈けの事實は聽き集められたのであるが、まだ、眞實、登代子がどうして此家を遁げ出したものか、明らかにはなり切らないのである。恭助は、兎も角、これ等の事だけでも聽き知つた時、埒もない親子の家出の裏に、此麼委曲のあつた事に、いさゝか駭きを苛めるのであつた。そして貧しき者の落ちつく先が貧しい者の處な事も、彼の胸をうつた。――

『實際、どう言ふ了見なものか分らんな。』

登代子の家出を聽き知つて、礦山から下りて來た叔父か、時造と晝酒の杯を交しながら、此麼ことを言つた。

『叔父さんや叔母さんと一緒に、礦山の劇場へ行く氣になつてれば、善かつたのか知れませんのねえ。』

辰子が、幾らか皮肉な調子で、此麼ことを言ふ。

『むゝ。』叔父は、流石に少し傷けられて、口を噤む。

『だが、大體、――家の兄妹と云ふものは、實に思ひ遣りがないんですからねえ。』

酒氣で稍々元氣になつてる時造が、恭助や美佐子を脇に置いて、口走る。

『それは、全くさうなのよ。』

辰子が他人事の様に、直ぐと應へた。

恭助は、辰子と時造の顏色を見比べながら。せゝら笑ふ様に頰の肉を動かして、默つてゐた。だが、その事で屡々非

雖を浴せられてる美佐子は、沸として、傷けられた顔付で、其處を立ち去らうとした。

『直ぐあれだ。――』

辰子は冷やかに呟く。美佐子は、默つて、立ち去つて了つた。その時は、恭助も、姉の妙な冷酷さ――とさう感じた――に露はな不快の色をなした。

『あんまり變なことは、言ふものでないぜ。』

彼は、突然斯う言ひ放つた、そして何處を見凝めるともない險しい眼をしたが、直ぐ自分の憤りを恥ぢるやうに、兩頰を赤く染めた。

辰子も、むつとしたが、流石に女らしく、其視線を遠くへ外らせて了ふ。時造も叔父も、思ひがけぬ恭助の其言葉調子に、稍々白け返つて默りこんだ。――恭助は、さうして居ると、眼に熱い涙が溜つて來る、それを氣にするやうに、ふいと立つて、自分の部屋に引揚げて了ふのであつた。――

『恭助は、うちで一番の美佐子贔負なんだから。』辰子は、まだ此麽ことを呟いてゐる。

時造も叔父も、間抜けた樣に、默つて、酒を酌んでゐる、だが時造には、流石に憤りに似た氣持が、彼の額の靜脈を青く膨らせてゐるのであつた。

『まあまあ、家ぢゆう仲善くするが、一番ですなあ、――』

叔父だけは、てれ隱しのやうに、掌で額をこすりながら、膳にのせた儘の杯から、口吻で酒を啜つたりして居る。辰子は、この叔父からも、苦々しい氣持を唆られて、視線をふいと他に轉じて了ふのであつた。

だが、其時、誰も、――其處にゐる三人も二階に上つた恭助も、先刻から勝手場の隅に蹲まつてる美佐子の處で、何

が行はれてゐたかを、氣付いてゐるものはなかつた。
(それは言ふべき程の事でもないのであつたが、)——時をり家の裏手へ出て來て、餌をあさる隣家の鷄が、今日も、人けの少ないのを見とつた樣に勝手場の上まで押上つて來た、それを隅に蹲まつてる、美佐子は、幾度か手で追ひやつてゐた、だが幾度しても立ち戻るので、立つて追ふのが懶いまゝ、片手で淚の顏を抑へながら、片手で其處にあつた、七輪の下敷にする鑄物の鐵を、鷄の方へそおつと投つたのである。それが轉げて餘りに圖々しい鷄の體に觸れたものか、鷄はぶいいざまに片翼を擴げて、慌しく下に跳び下りた、そして鳴ごゑを續けて、家蔭の方に逃げ去つて了つた。その時、美佐子は少し滑稽でもあつて、いゝ氣持でそれを見送つてゐたのであるが、——直ぐ又、妙なことが氣になり出して來た、それは、鷄が逃げ去る時に跛をひいて居はしなかつたらうか、と思ひ出したのである。美佐子は不安になり出して、靜かに昇り口を下りると、鷄の逃げた家蔭の畠地の方へ下駄を引ずつた。鷄は、向ふの家隅の、仲間が蹲まつてゐる處へ行つて何か草の中をあさり廻つてゐる。でも、美佐子は、まだ不安な氣がして、しつしつと聲を上げて、其鷄を追つて見た、——鷄は神經質になつた樣に、慌てゝ其處を跳び立つ、見ると、さう跛でもないのである。美佐子は、自分が可笑しくなつて、何も忘れたかの樣に、輕い氣持で又下駄を家の方へ引ずるのであつた。……

十六

『何でも、自分ひとりで切廻してやつてる氣になりやがつて、……』
今から次の宿のＳ——まで、稼業のことで出かける母の寡婦は、丁度散歩に出た恭助と一緒になつて、——まだ憤りの調子で、此麼ことを語つて居る。

「少しのことには、自分達が戻つてから何もかも善くなつた様なことを言つてるけど、――この頃の態は何なのだ。父少しでも景氣がわるくなると、直ぐにも家の潰れるやうな狼狽へ方をしやがる癖に、……なあに、あいつ等が家を出るなら出たつて構ふものかね。あいつ等が旅を放浪き歩いてる時分、もつともつと厄介ものがあつて、もつと景氣のわるい時分にだつて、あたし獨りで脊負つて立つて居たのですから、……』寡婦は、悲しく口惜しい樣な調子にもなつて、――『まるで、あたしが家屋敷を賣つたり娘達を追ひ遣つたりして、まるで能なしに暮して來たかの樣な、口ぶりをしやがる。……若しも、あたしが人から信用なくして居たら、誰があいつ等に、あんな興行の世話を託んだり、身を入れて呉れたりするものかい、……此前の興行の時だつて、さうなのよ、あたしが少し馳け歩いてゞも、自家で役者を集めるがいゝ、こんどは木戸だつて廉いのだし、懸りばかり懸けた處で益もないのだからと言つたに、諾かないであんな事して、あたしは態あ見やがれと思つてゐた、――あたしのする事つてば、何だかだと批難をうつて、最後には、母さんはそれだから、家の子達が皆な我儘なんだとかかとか言ひやがる、……』

寡婦は、恭助に訴へるやうに、今も稼業の事や何やで言諍つて來た婿の時造に對する、潜んでる不滿を、それからそれと語りたいのである。

『でもねえ……それは、さうなのよ。唯氣の善い正直な男なのだと思ふし、辰子があゝして子供二人もあるのを、今更どうし樣もないと思つてるのだけど、ね……何かと云へば、C――の姉、C――姉つて、C――へ行くな、行つたつて構やしない、どれ丈け頼りになるのか知らないけれど。……あたし丈けは、父さんの墓のある處だから、こゝに居なければならないのだから……』

彼女は此麼ことも言ふ。そして、夫を失つてから長い長い勞苦の跡を思ふと、今更のやうに涙が流れて來る。彼女は

長い間賴りにして來た、そして未だどうなるものとも分らない、倅の恭助を前にして、何もかも歎きつくしたい氣持なのである、だけれど、默々と項垂れ勝ちに歩いてゐる恭助を見ると、それも出來ない。——彼女には、家が、う些つと裕福ならば、此子も、もつと氣輕に自由に、他のお友達の樣にも出來ることとなのだらうにと、其麼ことさへ思はれるのである。

『だがねえ、あんなに澤山の子供を抱へて其上に年寄達まであつて、あたし獨りでやつてた頃のことを思へば、今なんて何でもない事さ。——いくらだつて遣つて行けない事はありやしない。』

寡婦は、最後には自分の嘆息を打消して、恭助を慰めるやうに、元氣な言葉を使ふ。そして、道の別れ目に來ると、

『海の方へ行くの?……あんまり寒くならないうちに、戻ると善いね。…まだ〳〵風邪が流行つてる話ですからね…。』

さう云つて、恭助を顧みて、すた〳〵と歩み去る。そして海添ひの松並木の道に通りかゝると、いつもの樣に思ひ出して、道に立ち止まつては、墓地の彼女の亡夫の墓の方に、ちよつと掌を合せて、又すた〳〵と急ぎ足になるのである。

恭助は、この頃眠りの足らぬぼうとした頭を、暫らく海べの風に晒して、又家へ戻つて行く。——

もう西の山脈から吹きおろす風が、寒く野を吹きさらつて、草枯の目にたつ冬に入つてゐた。山と海の間の狹い平地にたつ、小さい町も、野や山の寂れると同じやうに、寂れるらしく思はれた。そして猶此年は、秋から冬に入る頃にかけて、惡性の感冒がはやり出して、此町にさへ、もう數百の患者が數へられるのである。——恭助の家でも、その話を他人事らしく話してゐるうちに、腕白な辰夫を初めに、時夫美佐子と、とう〳〵風邪にやられて了つた。そして、最初寢ついた辰夫が、最後まで一番ひどくやられて、ほんの此頃、やつと快癒の方へ向つたが、まだ起き出すと、ふら〳〵眼まひのする位なのである。

『辰夫、おい、――さう食べたがると、今度は胃腸をやられるよ。』

珍らしく其枕元に座りこんだ恭助が、此麼兄らしい注意をする。

『もう大丈夫ですよ。――でも、何と言はれても、食べたいんだからな。』

『仕様のない奴！』

辰夫も、果物を噛りながら苦笑してゐる。

『ねえ、』と彼は、思ひついた樣に、『僕、熱にうかされて、譫言を言ひましたつてねえ。』

『うむ。――俊子さんが來て、さう云つて僕をからかつた。――どんな譫言を云つた？』

『ふふ、――僕は、よくも知らないよ。――母さんが言つてたけれど、お前は、大層、純造の事を心配してゐたつてねえ。』

『さう？――熱のなかで？』

『さうさ。』

『どんな事を言つて？――ふうむ。』

『どんな事を言つたのかね。――なんでも、純造々々つて、呼んでたつて言ふよ。』

『さうなの？――變なものねえ。』辰夫は、神妙らしく頭を傾けたりして、『……だが、登代子姉さんは、一體どうしたのでせう？』

『さあ。――』

さう云つて、もう立ち去らうとする恭助を捉へて、

『ねえ、――もう些つと話してつて頂戴な。今日は誰もゐないんですもの。――』

恭助は、又座りこんで、

『喋舌り過ぎて、惡かないかね？』

『そんなこた無いさ。』

辰夫は腕白らしく、寢床の上に仰向いて、

『――僕あね、寢てゐて此麼ことを考へたんですがね、……』

『なんだい？』

『――耻かしいな。……夢のやうな話なんさ。……僕あねえ、寢てゐて、鑛山の技師にならうなんて考が、まるで馬鹿げて來ちやつたのさ。――いつそ、お寺の小僧にでもならうと思ふんですよ。……』

『ふふ、』恭助は笑つてゐる。

『だつて、ね、其夢を二度も見たぜ、昨夜も其前の晩も。――何だか、ばかに靜かな奧深い山でねえ、――毎日そこの庭掃きをして居るんさ。和尚さんがいゝ人でねえ、毎日毎日お經を讀んだり、お話をして呉れたりするんさ。色んな鳥が來て鳴いたり、珍らしい花が咲いたりしてゐて、そりや愉快な氣持のいゝ寺なのさ。――』

『そんな寺へ行きたいんだね？』

『うゝむ、ぢやないけど。――どうせ、其麼寺は此近所になんてありあしないからね、どんな寺だつて善いさ、いゝお寺に僕がしますからね。――其方がいゝ氣がするんですもの。技師になつた處で詰らないや。』

『でもないさ。技師にならないつたつて、外に働く事があるだらう。寺の小僧もいゝが、もつと元氣な仕事が、ねえ、』

『詰らないや。……店の小僧よりも、寺の小僧の方がいゝでせう。』

『さあ。』と恭助は笑つて、『――店の小僧の方がいゝかも知れないな。』

『どうして？』

『どうしてつて――』恭助は、辰夫の餘り小供らしい想像や見解が可笑しくもなる。

『ねえ、どこの店の小僧を見たつて御覽よ。使はれるつて厭な事ねえ。――御馳走も碌に食べられず、思ふ事も勝手にし得ず、厭やあな人にお世辭言つたり、眠くつたつて勝手に眠る事も出來ない。』

『ふゝ、』

『僕も、學問さへもつと勉强できれば　兄さんの樣に好きな本を讀んだり、書いたりして、いくんだけども、なあ。』

辰夫はさうかと思ふと、此麼ことを言ふ。

『さもなければ、僕は、師範學校の試驗を受けようかと、思ふんですよ！――先生は厭だけれど。』

『うむ。』

『ねえ、』と辰夫は、熱心な調子になつて、『僕、本統に色々考へてゐるんですよ。――いつ迄も、此麼家にゐるの、厭やなんですもの。』

『うむ。』

『だけども、どう仕樣もないんだものなあ。……學校の先生は、師範學校の試驗を受けよ受けよつて言ふんです。僕もさうしようかと、思つたりするんだけれど、……』

恭助は、暫らく默り返つてゐたが、

『さうなあ。――』と言つて、『その試驗を受けて見てはどうかね？……そこを出たからつて、生涯教員と限られたわけゝないだらうし、な。天賦と努力で、どうなるものかも分らないんだからな。又、どうもならないつたつて、一生懸命ならば、會得する處があるさ。……寺の小僧もいゝけれど、ちよつと出來ない相談の處もあるし、な。……』

彼は、此麼消極的な勸めきり云へない。辰夫は、兄から其樣に言はれて了へば、又何か氣の拔けたやうな氣持もするのである。

『だがね、お前の前で此麼こと言ふのも變だがね、屹度お前は、進んで道の拓ける奴だよ。何かしないではゐない奴だよ。……』

恭助は、又微笑みながら此麼ことも云ふ。そして、やがて、自分の部屋に上つて了ふ。――辰夫は、いつまでゝも兄と談したい處なのを、兄に去られて了つて、唯兄の最後に言つて呉れた言葉を、甘へるともなしに幾度か幾度か、胸に汲みかへして居るのであつた。

『だが、あんな師範學校なんてに入ることの外に、仕樣のないものなのかなあ。――』彼は、何か口惜しい氣持もする。

すると、今日は誰もゐない筈の座敷の方で靜かに物音させる氣配が聞える。辰夫は少時耳を澄ませてゐたが、

『おい、美佐子姉さんかい？――』と呼びかける。

『……なに？』

美佐子の案外物靜かな聲が應へる。

『何でもないがねえ、……』

しばらくすると、美佐子が、辰夫の枕元に近づいて來る。彼女も、病み上がりの青白い顏で、そのいら〳〵し易い眸

のあたりに、却つて衰へから來る纖やかな美しさが、現れてゐた。

『もう歩いても平氣かい？』

『もう平氣よ。――唯、まだ些つと冷汗が湧いたりすのね。――あんたは？……』

美佐子は、珍らしく弟をいたはる樣に、身をこゞめて彼の青い額に、手を當てゝ見たりする。

『熱はちつともない樣ね。』

さうされると、辰夫は、何だか哀れつぽい甘へたい樣な氣持になつて、自然と眼を瞑つて居る。――このきかん坊が病氣してから柔順しくなつたことは、と美佐子は、少時そんな事を思つて、

『まだ、方々の家で寢てゐる人が澤山あるらしいのよ。大切にしないと、いけないわ。――俊子も、頭が痛いつて言つてたけれど、どうしたらう？どこかへ行つたの？』

『礦山へ使に遣られたらしいぜ。』

『さうなの？――』

『だが、辰子姉さんは、どこへ行つたい？』

辰夫は、立ち去らうとする美佐子に問ひかける。

『姉さんは丸屋でお湯に入つてる。藥湯で感冒の豫防になるつて。――義兄さんも時夫もゐたわ。』

『ふうん。』

美佐子は、辰夫と話が途切れると、又何か箪笥を開けたり押入を開いたりして、がたこと音を立てゝ居る。そしてしばらくすると、又何處かへ出かけて行つたらしい。

辰夫は、ほんの少しばかり覗く事の出來る狹さうな空を仰ぎながら、唯一人投げ棄てられたやうな、寂しい氣持で寢床に仰向いてゐるのであつた。――恭助は二階の自分の部屋に入ると、近頃精を出してゐる、翻譯の賃仕事の机の前に座つた、だが、彼は今直ぐその仕事に向ふ氣持でもなかつた。そして、何か考を纏めるもの丶様に、立つて、靜かに部屋の中を歩き初めた。

部屋の隅に、稍々埃を浴びた姿見の鏡が立つて居る。彼は暫らく其前に立つて、自分の青ざめた顔を見つめた。此夜ごろ、彼は熟睡の出來ることが稀なのである。時とすると、うつつ攻めに會ふやうに、夜半の寢床に眼ざめて、邊りの氣配や階下に眠る人々を瞭り意識しながら、自分丈けが總てから切斷されて了つた様な、孤獨な胸苦しさに襲はれる事がある。その行きばない氣苦しさに壓倒されて、危ふく叫びを發しようとする、だが、其叫びも音となつて口腔から突走ることはないのである。彼は、しばらく其氣苦しさに押迫られて、これは明日まで生存が續けられるのだらうか、と其戀恐れさへも感じながら、夜着の襟に苦しく首を埋めてゐる。――その氣苦しさの記憶が、今も鏡の前に、瞭りと思出でられるのである。その夜半の恐れは、翌る朝ともなれば、大抵忘却のなかに還つてゐるのだけれど、若し又白晝自分に立戻る時は、自分の存在に對する羞恥と疑惧をわかすものなのであつた。彼は、自分の凝視から遁れようとする怯懦をゆるすこととなしに、ぢつと鏡の中の自分を見戍つて居る。捉へ難い悲みに似た表情が、その面に搖いでゐる。……

彼は、靜かに唇を開いて、その齒を窺した。そこには、自分がいつか塡充させた金の入齒が、總て取除れてあつた。彼は、さうした、自分の子供らしいしぐさを嗤ひながら、又部屋の中を歩きまはつて居る。――もう收穫の終つた野が寂れて、向ふの槻の木の森も、その黄葉を振ひ落さうとしてゐる。その槻の木の森を見ると、時々、夏この家に居つた日の午後、書齋のをりに見た、あの夢のことが思ひ出される。木の根元に蹲まつて、古木の梢に巣くつた群鳥に氣つい

たり、その巣を棄さうとしたりした、夢の中の自分の姿が思浮んで來るのである。現實の自分には、その力もない、彼はふと其麼ことを思つた。そして、——この頃、近いうちに此家を立去りたいと思描いてゐる、自分の計畫を、又思出でゝゐるのであつた。

——兎も角、それまでに、幾十かの金を整へて置きたいのだ、精力をすり減らす安賃仕事の翻譯も、その爲なのであるが、それから、又此處を立つまへに、出來るならば仕上げたい戯曲があるのだ。そして、しばらく、あの青木の農園の近隣に住まはせて貰はう。自分を内から衝き動かすもの、自分を内に支へるものが何であるか、未だ知悉しない。だけれど、無自覺な混雜と奔勞の中にではなく、悠久でそして美しい自然の中に、暫らく身と心を養はせて貰はう。やがて、其間に、心の進路は認められることであらう。……謂はゞ此麼氣持が、此頃の彼に萌してゐる。今も彼は自分に宣するやうに、此考を繰返して實行に狐疑し易い自分を促がさうとするのであつた。彼は、かうした考を内に働かせてゐると、いつもの癖で、直ぐ机の前に戻る氣持になれなくなる。

そんな自分の習慣なり氣質なりを氣にしながら、彼は窓脇に立つて、帶をきつく締め直したりして居たが、又とたくと階段を下りて行く。これから、また、海や野のあたりを歩いて來たいと思ひ出したのである。——

それから、二十日近くも經つてからである。家で一番あとに風邪にやられた寡婦が、でも割合に輕くて、少し衰へを見せながら、數日前から起き出してゐた。家では、無理に賴まれた小屋貸の興行が、明日乘込み初日を明けると云ふので、先乘りの數人が泊りこんだりして、その寡婦までが忙しい思をして居る矢先である。

恭助は、下の混雜には係はりもなく、窓に立つて、靜かな日さしの寂びた野と、一抹雲の遠く走つた水色の空を眺めてゐた。彼は、遠い田舍に行つて一二度便りのあつた儘此頃暫らく音信のない山下の事や、近いうちに婚禮の式を擧げ

るときいた幸福な久田のことを、思ひ出してゐた。そして、漸く漸くに、舊衣を脱ぐが様に、それらの友達とも拘はりなく、何處とも知れぬ自分自身の歩みの中に沒入して行く氣持の自分を顧みるのでもあつた。彼は、苛立たしく悲しく叫びを上げてゐる山下の聲を聽くやうな氣もした、だが、其友の叫びも、遠くそして靜かになつて行くであらう、恭助はそんな事を思ふのであつた。——さうして、彼が猶、靜かな野を眺めて立つ時、家裏に近い田面に遊び戯れてゐる、弟の辰夫と甥の時夫の姿が目に止まつた。

セト燒の車をつけた、淺い四角な箱に、時夫を乘せて、辰夫が遮二無二と田の面を曳きまはして居るのである。雨手をあげて嬉び叫んでゐる時夫のこゑが、こゝまでも聞えるやうな氣がする。病後の衰へも去つた、愉快相な辰夫の表情も、手に取るやうに映つて來る。だが、暫らくすると、辰夫は疲れたやうに身を投げだして、車の曳紐を地面に投げ棄てゝ了つた。時夫は、車の上で、もつと曳け曳けと立ちせがんで居るらしい。辰夫は、仕様ことなしに、もう一度立つて曳き出したが少しも興味のないやうに、直ぐ又投げ出して、田の畔に寢ころんで了ふ。仕方なしに、こんどは時夫自身が、危なさうな手つきで、下りて自分に車を曳きまはし初める。辰夫は、せゝら笑ふやうにして、だがまだどこか愉快相に、甥のしぐさを眺めてゐる。……この意味もない小さい景觀を、恭助は熱心に見戍つてゐた。そして自分も愉快相に微笑むのであつた。——彼は、もと非常に子供の好きな氣質をもつてゐた、どんな憂鬱な時でも無邪氣な子供の遊びを見ると、自分を忘れて微笑むことが出來た、それなのに、此一二年頃に子供が嫌ひなもののやうに、子供に近寄られるのさへ厭ふ氣持が募つてゐた。そんな事を思ひながら、彼は又ふと、行衛の知れない純造の事を思ひ出した。今も猶、誰からも親まれることなしに、母親のみ慕つてゐるかも知れない彼の事を、哀れに思ひながら、靜かな夕方の景色に誘ひ出されて、彼は下に下りて行つた。——

戯れすぎた時夫が、今は、わい〳〵泣き喚きながら、空の箱車を引摺つて、家裏から戻つて來る。恭助は、行きずりに其滑稽な甥の頭を撫でゝ微笑みかけた。だが泣き喚いてる甥は、その愛撫には眼もくれずに行き過ぎて了ふ。その跡から、辰夫が、詰らな相に、口笛を吹きながら戻つて來る。恭助は、彼にも優しい微笑みを示した。辰夫も寂しい笑ひでそれに酬ゐた。恭助は、なほ自分の胸の靜かな働きに傾倒するものゝやうに、落ちついた足どりで、家裏の方に出て行くのであつた。

そして、彼が家に戻つて來た頃、家には燈がともつて、まだ明日からの興行の準備に忙しいらしい二三の男が店先に何か仕事をしてゐる。恭助が、そおつと二階に上らうとすると、俊子が近よつて來て、

『――美佐子さんが、今日まだ戻つて來ないのですよ。』と囁くやうに言ふ。

『どうして？――』

恭助は、さう問ひ返したが、俊子は用事を控へて店を憚るやうに、急いで去つて了ふ。恭助はその儘、自分の部屋に入つた。……若し、美佐子が何處かへ出奔したものとすれば、……此頃わけても病氣の後いかにも靜かに物淑やかだつた彼女が、どうした事なのだらう？彼は其麼ことを思つた。だが、さう思ふ直ぐ跡から、彼は一昨日の美佐子と辰子の、かなり執拗い確執の場面を思ひ浮べるのであつた。だけれど、それが原因で、美佐子が出奔を企てたとは、彼にはまだ思へなかつた。――

その確執が、どんな動機からその場合生じたのか。いつも二階にゐる彼は矢張り委しく知らなかつた。だが、その風のけはひが、彼の耳に屆いた頃は、辰子がかなり昂奮して、とうとう美佐子に打擲まで加へてゐたものらしい。

『出て行け、出て行け、お前のやうな者に手傳つて貰つて、恩を被せたやうな顔をされるよりは、他人にゐて貰つた方

がい。』

辰子は自分自身の行爲に火を焚きつけられて、この様に叫ぶのであつた。母の寡婦が、其處へ出て辰子を撫めたり、美佐子を叱つたりしたけれど、辰子も美佐子も　その夜になつても翌る朝になつても、まるで柔らいだ氣持を示し合ふ事がなかつた。その上、この頃妙に不機嫌な時造まで、いかにも不愉快な眼付きで、家内のものを見まはすのである。

その不穩な空氣を感ずる母の寡婦も亦、事なげな容子を振舞ひきれなかつた、彼女は、どうしてか辰子に向つても時造に向つても、妙なそつけない態度きり示せなかつたのである。そして却つて、美佐子を見たり叱り付けたりする時の中に、苦々しい氣持こそ表てだつてゐるけれど、或哀憐の氣持が、ひそかに動くやうに思はれるのであつた。

今日になつてもまだ、稼業の上の忙しさで紛らされてこそゐれ、全く不穩の氣が和ぎきつてゐるわけでもない樣であつた。今朝、美佐子は、母の寡婦に叱りつけられて、暫らく通つたり休んだりしてゐる針師匠のところへ出かけたのであるが。――

『でも、それにしても、どうして、美佐子が……』泰助は、さま／＼の氣持の交錯から、彼女の出奔の動機や發意を簡明にしきれないのであつた。

夕飯に下へ呼ばれて行つて見ても、つまらない顏した時造が獨酌をしてゐる丈けで、辰子は興行の方の男と話してゐて、食事の方へは構ふ暇のない容子、そして奥から出て來た母の寡婦が、泰助の膳を見廻つてやるのであつた。――泰助が、時造と交はす盃を早く切りあげて、食事を終へて二階へ引あげる迄も、誰も美佐子の出奔の事に就て、話るものはなかつた。

泰助は、自分の靜かな快い氣持は、全く壞られて、この家にさ迷ひ出した低氣壓に、氣を塞らされてゐるのであつた。

其夜、悦子と辰夫だけが、大人だちの氣持には拘はりない樣に、小さな不安に包まれて、美佐子の針友達の家へ訊れに出かけたりしたが、今日午前縫物の師匠の處に見えただけだつたと言ふことであつた。

『あゝ駭いた、駭いた！』

かなり夜遲くなつてから、辰子が座敷にゐて、此麼叫びを上げる。

『今日のうちに、此麼に始末の出來る筈がありませんわ、ね。——このあひだ迄、幾度言つても、あんなに投げ遣りしておいて。……』

彼女は、まだ、簞笥や押入を掻き廻してゐる。

『みんな、勝手に家を飛び出して了ふがいゝさ、——』やがて、辰子は、悲しくいまいましい調子で、此麼ことを投げやりに呟く。そして、氣ぶせい容子で、赤兒の傍に、身を伸べて添乳をするのであつた。

『だけれど、いつのまに、着物や何かを持ち出したのでせうねえ。……しよつちゆう、家にゐるものが氣づかない筈はないんだけれど。』彼女は、まだ諦らめられぬやうに、呟いてゐる。

『尤も、あれを家を置いてどこかへ緣付けるがいゝつて言ふのは、あたし一人なのだから……』

『餘計なこと默つてゐろ！……』

時造が、脇からいら〳〵しげに、辰子を嗜(たし)なめる。

母の寡婦は、先刻から、默りこんでゐたが、

『——だけども、ね、誰も好んであれを外へ出すがいゝとは言ひやしないのよ。——たゞあんな氣性の子なので、誰の言ふこともきかないんだから、言ふ儘にさせるより仕方あるまいと思つただけの事なのだから……』

と少し悲しく應へる。

『いゝえ、――誰が惡いってのでもないんですけれど、ね、――家を守つてゐる私だちが到らないから、みんなの氣に入らないのでせう……』辰子は、いつかヒステリカルな涙を垂れて居る。

寡婦も時造も、少時默つてゐたが、

『おい、時夫、――父ちゃんにおんぶしな！』時造は、さう言つて、眠さうにしてゐる倅の時夫を、奪ふやうに脊に負つて、ぷいと外に出て了ふ。

寡婦と辰子は、あとに殘つて、默り合つてゐる。――

『勝手にしやがれ！』

誰に叫ぶともない苛立たしさが、寡婦の胸には湧くのであつたけれど、彼女を鍛へた長い勞苦が、今も亦彼女から、唯苦々しさの涙を絞る代りに、漸く漸く思ひやりの柔らかい情緒を湧き上らせるものゝやうであつた。そして彼女は、赤兒の傍に凋れてゐる辰子に、

『辰子、お前、――さうしてゐないで、湯にでも温まつて來て、やすむがいゝぢやないの。……』と聲をかける。そのあとから　胸苦しい涙が湧いてゐるのであつた。

辰子は應へもせずに、しばらくその儘寢そべつて居たが、ふいと立つと、湯の道具を持ちに奥へ立つ。だが、彼女は奥の隅の方に寂しげにゐる俊子に聲をかけて、母に寢床の用意をしてやるやうにと命じたりして居る。

もう大分、夜遲くなつてから、寡婦は、靜かに恭助の部屋に上つて來た。恭助は、大きな辭書を膝に据ゑて、彼の仕事に耽つてゐる。

『まだ勉強なの？』

母は、憚るやうに、入つて來る。

『えゝ。』恭助は、手許の火鉢を脇へ押して、靜かに母を迎へた。ひどい冷性の彼は、もう夜に、火鉢を要りだしたのである。

『まあまあ小さい文字で。——蟻の匍ふやうな、……』母は繪書をのぞいて、賴もしげな又褒め讃へるやうな調子で言ひながら、座りこむ。そして、恭助の氣をうかゞひつゝ、今日美佐子の姿が見えなくなつた事を、談し出すのであつた。——

『……どこへ行つたものか知ら？——Sさんの處（もと美佐子の主人だつた醫師）では、まさか無いだらうねえ。……と云つて、……美佐は、何かそんな事を、お前に仄めかした事は無かつたらッか、ねえ。……』寡婦は、控へ控へ、こんな事を言ふ。

『いゝえ。——』

恭助は、ぶすりと應へる、彼は、母の調子で、階下の者が皆、美佐子の事で恭助を嫌疑してゐるのだなと云ふ氣がしたのである。

『……何處か知らむ？』寡婦は、恭助の機嫌を損ねた事を恐れる樣に、音を潜める。『……兎も角、Sさんで知り合になつたお醫者か友達の處かも知れないと、私は思ふの。……』

恭助は默つてゐる。寡婦は、少し投げた樣な調子に變つて、——

『……今度は、どこへ行つたつて構やしない、ほつたらかして置かうと思ふのだけれど、ねえ。……私は、舊のお正月

でも經つて、家が暇になつたりすれば、姉や時造に話して、どつか善いお醫者にでも診せようと思つてゐたのですよ。……それなのに、……』と口を噤む。そして默りこんでる恭助の顏を見戍る。彼女の胸には、自づと嘆息が溜つて來るのである。

『……もうもう構やしない。……本統に、我儘な子ばかり揃つて、……あたしは、ね、もう辰子でも時造でも、家を出たいと言ふなら、出るが善いと思ふのですの。……私がどう思つた處で、仕樣のないものなのだから。……何も、私が慾德ずくで、あれ等を家に置くと云ふんではないんですからね。……あたしも、もう……』

彼女は、涙ぐもつた聲になつて來る。

恭助は、母の老い顏を見戍りながら、執拗く働く自己是認の氣持を消し兼ねつゝも、亦、哀な面目なげな氣持に取柔れて、頭を俛れるのであつた。

『義ッさんや姉さんが、此處を立ちたい意志でもあるんですの？……』

『でもあるまいけども、ね。……あたしも、もう色々面倒臭くなつて。……』寡婦は、哀れに、脆い調子で應へる。

恭助は、母の寡婦が今、どんなにか、彼からの慰藉と勵ましの言葉なり眸を欲してゐることを、知つてゐた。だけれど、彼の母を見守る瞳には、僅かに、辛うじて見分けられる光のある丈けのやうであつた。

恭助は、唯靜かに母を見戍つて居る。母も亦それに應へて、恭助を見戍る、哀れに微かな光の閃めいて消えて行く。

『もとの事を考へれば、今だつて、私一人でもやれない事はないのですからね。……』

『さうね。』

二人は、さう云つて、つゝましやかな音聲で受け應へたけれど、その儘少時、默りこんで了ふ。

『美佐子のこと、ね、』

しばらく經つて、恭助は火箸で火鉢の灰を掻きならしながら、

『……さう心配な處へ行くこともない、と思ふのですが、ね。……いつか、此麼ことを言つてた事がありましたよ。勿論そこへ行くとも何とも言つたわけではないのですけれど、――大層久しぶりで、川島の婆さんに會ひましたつて、ね。』

『さうなの？……』と言つて、淸らかな調子で訊ねる、『……いつ時分？』

『さうね、もう一月にもなりますか。――あれは、大層なつかしがつて話してゐましたよ。十年ぶり位ゐですつて、ね。――川島の婆さんの事ですから、例の調子で、大分泣いたり笑つたりして、なつかしがつた事なのでせう。』

『ふん、ふん、――』

寡婦は、頻りと頷く。

『こゝを立つてから、隨分方々流れ歩いた話なのねえ。――でも、近頃は、やつと樂になつたつて、……』

『ふん、ふん、――さうな話。近頃は、何でも、娘が産婆の免狀を取つたとかつて……』

『ですつて、ね。』

恭助は其處で、ぷつんと口を噤んで了ふ。

『……では、屹度、さうに相違ないのよ。……あの婆さんは、あれでゝ、美佐子のことは、自分の子のやうに可愛がつてゐたんですからねえ、……だけれど、あれだつて娘だつて、一通りの奴ぢやなし、ね……』

恭助は、それには、應へない。

寡婦は、少時、話の盡きた様に默りこんでゐたが、

『――若し、川島の婆さん處ならば、向ふから何とか言つて來るでせう。……兎も角、少しの間ほうつといて見ませうか、ねえ。……』さう言つて、立たうとする。

『さうねえ、――一日二日したら、どこか跡がつくでせう。僕は、そんな氣がするけれど。』

『さうねえ。』

寡婦は、危ぶみながらも、さう應へなければならない。そして、

『……お前さんも、さう餘り根をつめないがいゝのねえ。……』と、親愛と媚びの調子を上づからに入り交らせて、下に下りて行く。

恭助は其直ぐ跡から、後架に立つて、又、机の前の仕事に向ふのであつた。

十七

美佐子の行先は、まもなく、人々の想像どほり、川島の婆さん處なことが分つた。

美佐子が家を出て數日立つと、川島の婆さんの娘の名で、手紙がとゞいた。それには 突然美佐子が賴つて來た驚きが先づ述べられて、自分方では極力美佐子の歸家を勸めたのだけれど、彼女がどうしても諾き入れない、で若し又他方へ走つたりすれば當人の爲にも氣の毒であるしお宅へも濟まない事なので、當分自分方にお留め申すことにしてある。色々のお宅の事情や美佐子さんの氣持もお聽きしたゆゑ、若し御當人の意志どほりにさせる思召ならば、足らずながら自分方で出來るだけのお世話は仕様と思ふ。若し或は、自分方にまるで御信用がならないと思召す事ならば仕様もない、

お宅の御意のまゝに、云々。と大體其麼意味が記されてある。

姉の辰子は、川島の婆さん達の過去や現在の風聞に就て、聽き知つてゐるので、美佐子を其處に托したりする事には絕對反對の意見だつた。寡婦も亦、美佐子を他に托するとすれば、川島の婆さん達の手を經ずとも、いくらも出來る事なのだからと、——一度自分から、川島の婆さん處を訪ねたりして、美佐子の意志もよく聽き直さうと言ふ意見であつた。だけれど、寡婦は何故か氣の進まぬまゝに、五日十日と其處へ出かける事を、延ばし延ばしてゐるのであつた。

登代子と純造が去り、美佐子がゐなくなつても、まださう家族の少ないと云ふわけでない、此家に、月の初めと央ば礦山の興行の忙しさのあるに變りはなく、その間々の暇と不經濟を防ぐために、何か商賣を初めようと云ふ話も、まだ話のまゝであつた。——母の寡婦は、時々借りられる芝居の衣裳に付いて出、時造は時夫を肩車にのせて、いかにも閑暇らしく近所へ出かける事が多く、家にゐる辰子は、この頃引續いて、腰や脊筋の痛みを訴へる日が多かつた。

そして、いはゞ礦山の劇場番に祀りこまれた叔父の夫婦は、そこの寂しさをかこちながら、まだ東京へ引揚げる勇氣もなしにゐる。時とすると、叔父の夫婦を、また此家裏に引移らせる話も、時造や寡婦の間に湧かなくはなかつたが、氣むづかりな叔母との交渉を思つたりすると、その話の斷行も沙汰止みになり勝ちなのであつた。

かうして、冬の老けると一緒に、此家のけはひも、どこかうらぶれて潜まり返つて行くやうに、思はれた。——或寒い併し空の冴えた日の午後である。

俊子が、いつもの靜かな容子で、恭助の部屋に上つて來た。そして、兄が閑かどうかと訊ねながら、靜かな容子の中に、何か思ひつめた眸を秘めて、そこに座る、

「今日は閑。——隨分寒くなつたのね。——野も山も、裸になり出して來た。」

恭助は、髪も髯も伸びたまゝの蒼ざめた顔で、火鉢を俊子の方に押してやる。

俊子は、それに手を伸べて、默りこむ。

『何か、用事?』

俊子は、少し羞らつて、默つてゐたが、

『……少し、おねがひが、あるのですけれど。……』

『……』

恭助は默つて、妹を見戍る。俊子の大きな瞳は、自然と縮むやうになつて、數度横ざまに忙しく動くと見えるうちに又自然と黑く大きく、力のある眸に還つて行く。

『兄さんから、お世話さまでも、母さんに話して頂きたいと思ひまして、ね。……』

『ふうむ。』

『そして、――母さんから……又、あの人の家へ話して頂きたいのですが、……』

俊子は、さう言つて又、項垂れた肩をすぼめるのである。

『で、――』恭助が、同じやうに首を垂れながら、促がすやうに訊ねる。

『……』彼女は、一層肩をすぼめるやうにしてゐたが、『……直ぐ、どうと云ふのではないのですけれど、……』

『ふむ。』

『私、かう考へるのですの。――』

俊子は、氣を變へたやうに元氣に、そしてちらと兄を見上げて、言ふ、――

『あの人――來年檢査なのですけれど、……檢査の終つた後……若し取られたら、徴兵から戻つてから後に、ね……』

恭助は、妹を見戍りながら、頷く。

俊子は、幾らか氣が樂になつた容子で、

『さうして、私、また此事も考へてゐるのですけれど、……』

『何？』

彼女は今又、先刻とは稍々異つた意味の羞かしさに捉はれてゐるのである。――だが、

『……これは、自分の事なのですけれど、……若し何でしたら、私は私でお裁縫なり何なりして、……自分だけの身過ごしは出來るつもりですから、……それ丈けの事は、母さんのお陰で、身に備はつたのですから、……さうすれば、――二人が、二人で、やつて行けない事はない、と思ふんですけれど、…………』

『さうねえ。――』

恭助は、娘のさうした實際的な考方に、やゝ駭きながら、さう應へるのであつた。

『だが、――これらの事、みんな、向ふでも承知なことなの？』

『……えゝ。』俊子は口ごもつて、『さうする話をしましたんですの。』

『ふうむ。――』

恭助は、これまで時をり、俊子が苛々した容子や蒼ざめて何か考へこんだりしてゐる容子を見うける事がありながら彼女としみじみ話する事もなかつた事を、今更の樣に羞ぢながら、頭を垂れ初める。少時して、

『では、――向ふの人は、向ふで、親さん達に話をする筈なのだね？……』

『えゝ。』

『ふむ。——では、豫め向ふの容子も分る筈なのだね、こちらから申入れる前に、ね。』

『えゝ。』俊子は稍々首垂れ勝ちに應へる。

『だが、……』と、恭助は氣づいた容子で、

『向ふの親から、此方へ申入れる話ではないのだね?』

『えゝ、』俊子は、一層低く應へる。

『さう。——』

恭助は、直ぐ話頭を換へて、

『……では、——兎も角、僕から母さんに話はして見よう。——今夜にも。僕も、時々さうは思つたのだつたけれど、母さんがどう言はれるか、多分、さう反對もなさらないだらう。——だが、此方の母さんが承知した處で、向ふの……が、それは、向ふの人の話で、容子はわかる事なのだね?……』

『えゝ、——』俊子は聲音低く、『唯、あの人の兄さんや姉さんが澤山ゐて、其人達がそれぞれにしつかりして遣つてゐられるので、父さんや母さん丈けの意にばかりも行かないのですつて、……』

『ふうむ、——でも、家だつて、母さん一人の意見にもなるまいが、ね、』

『さう。』

『だが、それは、さう心配もないさ。』と彼は輕く言つて、『——だがねえ、それとして、假りに誰も彼もが、承諾して見たところで、それで直ぐ決着したと云ふ問題でもないらしいからね。』

恭助は、最後に、眞摯な調子になつて、眉をあげて、妹を見凝める。——

倭子は頷くやうに、項垂れて聽いてゐる。

「僕には、言へる資格もない事なんだけれど、……唯好きな人と一緒になつた、嬉しい欣ばしいと云ふ丈けの問題でもないらしいからね。——問題は、寧ろ、猶其先にあるらしいな。僕はさう思ふよ。……」恭助はかう言つて、冷やかに妹を見戍つたが、直ぐ又可笑しい程靜かな調子になつて、「……だけれど、お前は、屹度それに善く堪へるだらうよ。靜かに而して恐れずに、生きる覺悟が大切だね。……」と、さとす様に言ふ。

倭子は、項垂れて、肩をすぼめて座つてゐる。彼女は、今、どこまでか此兄に縋りたい氣持と、愛人を思ふ情熱とで苦しく胸を燃やすのであつた。——

二人の沈默が稍々長く續く。

「もうそろ〳〵夕方の仕度だね？……」

恭助は立つて、かう呟く。

そして又、裸になり出した山際の槻の林を眺めながら、自分の此家を立つ日の事を思浮べるのであつた。彼は、まだ家の誰にも、それを話してなかつた、今も、此妹に其氣持を露はさうとしながら、又、差控へて了ふのであつた。——

倭子も立つて、少時外を眺めたけれど、靜かに、兄に會釋して下に下りる。

恭助は窓に倚つて、外を眺めてゐた。——彼は、倭子の未來に就て、どう考へていゝのか知らなかつた。だが、倭子の性格が拓く彼女の道に、光を認めようとする氣持も、欺きれなかつた。——彼の思は、又自分自身の事に戻つてゐる。

この頃、彼は翻譯の賃仕事を略ぼ終つて、十數日戯曲の創作にかゝつてゐるのである。だが、それは思ふ樣に進まなかつた。そして、幾度か不眠の夜が續いたり、絕望的な氣持の湧く事も、多いのであつた。今も亦時として、例のうつゝ攻めのやうな胸苦しさが、夜中に襲ふ事がある。だけれど、この頃の彼には、靜かな思に耽る時、何か安らかな、うら委せた樣な氣持も、胸底に動くのである。――恭助は、今窓に寄りながらも、さうした氣持を、心になつかしんでゐた。

其日、彼は久しぶりで外の散步に出た。そして、寒い風の吹き通す海べあたりを歩いて夜に入つて家に歸つた。夕飯を終へて、自分の部屋に上りながら、彼は、母を呼んだ。昔の俊子の話を、彼女に傳へようと思つたのである。迂濶な話だけれど、母にとつて、俊子の其出來事を聽くのは、今初めてなのである。彼女は、この頃つぎ〳〵に嘗めさせられる悲傷事の後に、今又此出來事を、悲しく耳傾けて聽くのであつた。彼女は、聽きながら、無念にも似た悲みの感情に襲はれて來る。――

彼女に取つて、氣荒らな粗忽な美佐子と對比して、妹娘の俊子は、それを思ふ度に思正しい物淑やかな氣持にさせられる。謂はゞ敬畏の對象とも云ひたいものなのであつた。それは、慌だしい彼女の生活では、忘れられ勝ちな存在であつたけれど、靜かに心の休む時、微笑と慰めとを常に送るものなのである。彼女は、他人からは割合に褒められる自分の娘達の中で、わけて俊子の淑やかさに就て話しされる時、いつも羞らうやうな表情で、唯微笑むのが常なのであつた。そして彼女も、姉娘の展子がさう思描いてゐた樣に、出來るならば、俊子は恭助の處に置いて、片附けて貰ひたいものだ、と思ひ樂む事もあつたのである。

彼女は今、恭助の用心深い、控へ控へ話す話に引きしかれて、「だけど、お前！」と神經的な異議を時々挿みながらも、漸々と說き伏せられる方に傾いて行く。

『それは、ね、母さん、──全く六ケ敷い話に相違ないさ。起らずに濟む事だつたら、起らないで呉れたが宜かつたかも知れない出來事ですさ。……だけども、まあ、今となつては、俊子を信用して、あれの意志を徹させて見る事ですか、ね。……そして、出來る丈けあれ達のあとを見守つてやりませう。……尤も、向ふの子が、全るで見どころないものとすれば、考へものだけれど、それでさへ、今のところ、まあ俊子の眼を正しいとするより外ないんでせうか、ねえ……』

恭助は、微笑を含みながら、語り繼ぐ。

母の寡婦は、遂に解けきれぬ感情を懐いて、

『さうねえ、──だけれど、私には、さう潔く思ひきれないのですよ。──それは、私だつて、いつ〳〵迄も自分の我を張らうと言ふのではありませんさ。……これ迄だつて、さうだつたのですからねえ。……幾ら私が言つて聽かせた處で、諾く子供達でもなし。……だけれど、こつちでさう賴つた處で、向ふの親達が、どう云ふものかも知れず、──私もさうさう人の笑はれものには、なりたくないんですからねえ、……』

こんな嘆息をもらす、思ひかへすと、彼女は、殘念で、どうしても思ひきれない氣持なのである。──

『だけれど、ねえ、母さん……一應、向ふへ當つて、申しこんで見ますか？……』

恭助は、母の心を見透かす樣に、かう促がしても見る。

『さ、ねえ。……兎も角、姉や時造にも話しなければなりませんよ。……』寡婦は、思ひついて、『──こゝへ、辰子を呼んで見ますか。』

『さうねえ、──でも、今夜は廢しませう。明日にも、母さんなり僕なりから話しませうや。──』恭助は言ふ。

『……だが、どうも私には、あの秀夫つて子が、さう善いとも思へないのですからね。……そして又、またあの子だら

のなさで、ねえ、お前……」彼女は、思返す度に、又話の初めへ戻らうとする。

だけれど、――子と親に生涯を捧げ盡した彼女の道心には嘗て許されない此出來事に對つても、今は崩ほれ勝ちな彼女の胸は、いら〳〵しく憤りの氣持を爆けさす事もないのである。

「……兎も角、辰子や時造に話して、意見をきいて見ませうよ。……」彼女は、最後に悲しくさう言つて、恭助の處を立上る。

恭助は、老いた母の姿を哀れに見た。――だが又、援けなしに境遇の倒壓と戰つて、瞭りとした個性を生かし得る少數の者、そんな事を、誰に就てともなく考へて見るのであつた。――さうして、机の前に仰向けになつてる、彼の稍々窶れた蒼ぎたない面持には、いつものやうに、自失に似た冷靜が立ち戻つてゐるのであつた。

それから、幾日か經つて後、恭助の姿が、彼の友人の吉本の處に見出でられた。――

遠く地平を限る山々の、くつきりと浮び上つた蒼である。山々の或ものには、頂きに既に、雪が仄かに光つてゐた。森と人家の點綴する、起伏の緩やかな平野が、眼に近く開くその一劃に、綠と代赭色鮮かな松の林に圍まれて、吉本の農園は手入れの行とゞいた平和な姿を露ほしてゐた。

今は寂しい冬の畑に、地を飾るものは、午後の日をはぢく、打開いた青菜の廣葉だけであつた。物音の、靜まり影の鮮かならうとする時刻を、人々は、松の林を背に受けて新しく建つ家の大工仕事に忙しい。皆、元氣な働き盛りの若い人達であつた。手拭に頭を包んで棟木に跨がり、大きな槌を振ふ人の姿も見られる。陽にやけた肌を露はに家の周りに積むらしい石を片寄せてゐるものも、叫びを上げて、町へ出る仲間の跡を追ふものも、林の中から唄ごゑをひゞかすものも、――その、見られる人々の、仕事に我を忘れて立ち働くさまには、華美こそなけれ、靜かに湛へ溢れる欣びに似

たものがあつた。

この、緩い勾配をなしてゐる、耕つた農圃と、それに續く廣野の眺めを收めて、母家は小高い丘に立つてゐる。その庭先に、吉本と恭助は、手製の木椅子を据ゑて話してゐる。吉本も、野に立ち働く人々と同じ仕事姿に土足であつた、彼は今日割合に寡默に、併し自信に滿ちた態度で、話してゐる。――話は、もう終に近いのである。

恭助は、いつもの稍々沈欝な氣持に、緊りつめた氣持と、輕快を裝はうとする心意を見せて、自づと吉本の瞳に見入るやうになつては又自然な微笑みを湛へたりする。彼は、話しながら、相手から視線を外らして打伏し勝ちな、自分の瞼を、氣にする樣に見えた。

『――では、さう決定するね。』と、吉本が訊ねる。

『あゝ、あれで結構だ。――兎に角、借りる事に爲といて呉れ給へ。――六疊に三疊、それに湯殿、一人住みには丁度いゝだらう。風呂を自分で立てる位の勞働は、僕もする。』

恭助はさう言つて、苦笑ひした。

『自炊の道具で、不足なものは、又貸して貰へるね?』

『あゝ。そんな事は、大抵僕の處で用が達りるだらう。――君さへ好かつたら、食事には、僕達ん處へ來て呉れても、いゝんだがね。』

恭助は、その友の親切には應へなかつた。

『まあ、其麼話は、君が來てからでいゝ。――君の勉強の都合で、さうしたい時に、さうし給へよ。女手が多いんだからね、僕んところには。――』

『有難う。時をり散步に出かけて來るよ。――君方の働いてる處や、生活の平和さを見せて貰はう。』恭助は、さう言つて、知らず、下を向いた。だが、直ぐ又思ひかへした樣に、頭を上げる。

『さあ、こゝまであの家から何分だらう？』

『二十分、――なら、大丈夫。』

『丁度散步には、いゝ道のりだね。途中も、野や林の氣持いゝ處があつて、愉快だ。』

『住み馴染むと、馴染む程、趣深いものだよ。僕達も足かけ五年になる。これから、そろ〳〵色んな勉强もしたい處だつた、君が近所に來て吳れゝば、いゝ刺戟にもなつて、有難いな。』

さう云ふ吉本に、恭助は親みの眸を返した。

『――で、大抵、もう半月もすれば、來れる？』

『うむ、――その積りなのさ。今書きかけてるものを仕上げてからと言ふ氣もあつたけれど、まだどうもうまく行き相もない。――その仕事の方の豫定は、變へて終ふつもりなのだ。』

『うむ、――小說？』

『戲曲。――書きたいんだけれど、まだ手におへないらしいね。』

『さう急がなくも、いゝさ。』

吉本は淡白に言ふ。恭助は、さうした慰めの言葉を、苦しく胸に落すのであつた。

『さうも思つてゐるのだがね、……』彼は立つて、『……では、宜しくお願ひする。皆さんにも宜しく、――どうせ行李一つの身上なのだけれど、荷は、君の處へ送る事にするからね。……』

『善いとも。――では、――』

吉本も立つて、松の林のはづれまで出る、緩やかな坂路を、見送るのである。

『これから暫らくは、仕事の閑な時になる夜々は、爐端で君の話を聽いたり出來る。樂みだよ。――君は、矢つ張り、僕だちの處に來て呉れる人だつたね。』

彼は、林から街道に出る口に立つて、愉快相な蟠まりのない調子で、恭助に微笑みかける。恭助は、少し心苦し相な眸で、帽子を脫る。吉本は、その曇りない瞳で、もう一度、信賴深く相手を見戍るのであつた。

恭助は一人になると、暮れ足の早い冬の日の、風の滅切り冷えだした野を急ぐ。急ぎながら、彼は又、吉本の別れ際に言つた言葉を胸に繰返して見るのであつた。――

彼と吉本とは、凡そ性格の非常に異ふ二人であつた。中學の頃から、吉本は大抵の事、腹藏なく恭助の處に來て打ちあけるのが例であつた、而かも恭助のそれに酬ゐるものは、沈默と傍觀だけであつた。それにも拘はらず、友人の殆と少ない恭助にあつて、吉本だけは中學以來一人とも言へる親友なのである。だが、その友情には、溫かく打ち解け合つた氣分よりも、相互に容易に許さぬ眞摯の氣持の勝るやうに思はれた。それは一つには、恭助自身の氣質から來るものでもあつたらう。此頃漸く其圓滿さを增す吉本の態度には、恭助を理解し難い者として見きはめようとするよりも、恭助をいたはり懷かしまうとする情緒の立勝つて來てゐる樣に見える。だけれど、恭助自身は、まだ／＼その狷介を脫しないのである。彼には、まだ吉本の樣に、太平に、朗らかに物に對する事が出來ない。而かも、今更彼を賴らうとする。嘗ては自分の氣持に拘はつて、彼と生活を共にする約を破つた、その自分が、今又彼に身を屈する事なのであらうか？――恭助は自分の狷介な氣質が、自分に物惜みを强いながら、而かも亦、辛うじて身を寄せらる邊として、此吉本の近

脚を運びとらしめた、その苦しい心理を行み迴るのであつた。そして、逞ましく、併し又脫ぎきれぬ我執の胸をいだいて、淺い谷間の蹊を、町の方へと急いでゐた。

十八

恭助が近いうちに。家を立つ積りなことが、家ぢゆうの者に知れると、皆それ〲に悲しいやうな氣持を懷かされるのであつた。

母の寡婦は、猶暫らく家にゐる積りに見えた恭助が、どうして左樣先に立たうとするのか、會得できなかつた。だが強いて止むべき言葉も知らないのである。

『もう暫らく家にゐて、保養するがいゝのではないかね?』彼女は、寂しく悲げに、だが危ふい調子で、かうも勸めて見る。

『家にゐて、勉強が出來ないのならば、どこか近所にゐるがいゝのではない? さうすれば、身の廻りの事に、何かと氣をつけてやる事も出來るけれど、——遠くへ行つては、思つても、さう行かないものよ。』

姉の辰子は、斯うも言ふ。彼女は彼女で登代子に去られ美佐子に立退かれて何か自分達に責めある事のやうな氣がしてゐる、そこへ、今又恭助のさうした話に出會ふ。それが、辛らくせつない氣持を湧かすのである。

『家のものは、皆何故、かう他人らしい氣持なのであらう?』彼女は、ひとり寂しく、此麼ことを思つても見る。

時造にとつても、恭助の態度は、どこか當てつけがましい氣持のされる事なのであつた。自分達の努力なり好意なりに、ぷいと白眼を示された樣な胸冷たさを感ずる。そして彼は、恭助の家を立つと云ふ話には、殆と言葉を挿むことな

しなかつた。殆ど無感動な、默認的な態度きり示して、――自分達もいつ迄、人に酬ゐられる事なしに、此家を守らうとするものではないですさ、と自分の胸に呟いて見る事もある。

恭助には、人々のさうした氣持を讀むことが辛らかつた。彼自身、何故この、自分に對つて好意と尊敬に滿ちた家を立たうとするものなのか、瞭り言葉にすることは出來なかつた。又、自分の行く先が、いつ迄どの樣に、自分を住まはせて與れるものかも知れないのであつた、彼の氣持も、今更ら世に放出されて行く少女のやうに、悲しく不安なのである、その上に、好意と尊敬を懐く人々に、その好意と尊敬を蔑しろにする所作を示す、その事が既に彼には可也苦しい事なのである。――だけれど、解き難い問題に向つて氣むづかしくなる少年のやうに、彼は唯氣むづかしく、憂鬱な面持に取包まれて、人々の優しい思ひやりに酬ゐる外ないやうに見えた。

「いつ立つた處で、同じやうなものですからね、――」彼は、その言葉の印象が人々にどう映るかを考へないでもなく此樣ことを呟く事もある。

だが又、流石に、自分の氣欝さを恥ぢでもするやうに、輕く快活に振舞つて、甥の時夫や弟の辰夫と、寒い冬晴の日を　磐山の叔父達のゐる芝居小屋まで遊びに出かけたりする事もあつた。――

さうして、恭助の家を立つ氣持が、どうしても動かし難いものな事が、有耶無耶ながら人々に堅く傳へられて了ふと母の寡婦や辰子達の配慮は、こんど、家を出て後の恭助の生活の不自由さの上に、實際的に働らかされるのである。恭助が家に戻つてから、忙しいまゝにまだ手入れの終つてゐなかつた、冬の物や春へかけての物や、新たに調達されなければならないものに就て、彼女達の相談が繰返される、俊子と辰子とで、その仕事を急がなければならない。

恭助は、今又彼の出立と云ふ事を中心に、冬寂れた家の中に動き出した、此景氣を、親みと、同時に濟まない氣持と

で、見まもるのであつた。それは、彼を家に迎へる時程うき／＼と輕快なものではなかつたけれど、同じ靜かな喜悦と思遣りとに滿ち溢れたものであつた。——赤兒を守りしながら、辰子が恭助の着物の尺を取つて、俊子に差圖してゐる、俊子は神妙に、夜長な夜を遲い時刻迄、兄の旅衣を、縫ひ急ぐのである。夜は殆と針目の通らない母の寡婦迄が、その傍に、恭助のシアツや股引の繕ろひに忙しい。さうした夜の階下に、——もう遊び疲れた時夫や父の時造は、不覺に眠入つてゐる。——時として恭助も亦、母や姉を相手に、暫らく話込んでゐる事もある。さうした時、人々の心は、互ひに和み、うるはつて居る樣に見えるのであつた。

「——ねえ、恭助も、いつ迄さう獨り身ではゐられないだらうがね。」

辰子が、優しく少し微笑みながら、此麼ことを言ふ。

恭助は、いつもの樣に、唯薄ら笑つてゐる。彼の心も、柔らかなのである。

「この人は、どんな積りなのかね？——」

母の寡婦が、傍から、矢張り好機嫌に、口を挿む。彼女は、今、問ひ訊す氣持でもないのである、そこには何か自分にも分らない期待の果がある樣な、心頼みが自づと湧いてゐる。

「本統のことよ。——恭助。——いつかも、豊岡の小父が言つてたけれど、恭助さんさへ其お積りなら、一萬二萬の財産の處からならば、幾らも嫁のお世話が出來なくはないんですかつて。——財産なんて別にしても、性質のいゝ娘ならば、ねえ……」

辰子は、例のＣ——町の娘の事は忘れた樣に、此麼ことを言ふ。

「さあ。」恭助は又笑ふ。

「獨り身でゐるよりも、それは二人の方が却つて經濟なものよ。」――獨り身つては案外かゝりの懸るもの……」母も、一緒になつて、

「それにお前、この頃の娘は、嫁になつたつて、身一人の養ひは出來る程のものが多いし、さ、ね。」

と云つた話を、倹子は、傍で聽きながら、針を運んでゐる。――彼女の、いつか兄を通して母に托した事は、母自身ではなしに人を介して、向ふに通じられたのだつたけれど、向ふの方が案外頑なで、倹子や秀夫の意志を容れようとしないでゐるのである。彼女にとつても、今兄に去られる事は、寂しく頼りを奪はれる事の氣がするのであつた。だけれど彼女には、時々自分で自分を抑へられない悲傷の時はあるにしろ、靜かな信念の動かぬもの丶樣に見える。彼女は、まだ猶自分達の意志が必ず徹ふと云ふ事を疑はないのである。紊れ心の中からも、自分自身の誠實に對する自信が彼女を慰めるのであつた。そして又、彼女は今狹いながらも自分の家内で、自分の意志や誠實が、強ち蔑しろにもされてゐないと思ふ欣びを、私かに懷けるのである。事實として、美佐子も登代子もない此家では、子のある辰子を助けて、倹子の存在は、缺く事の出來ないものであつた。それに猶、彼女の氣質が人々に薰染する自然の順應が、此度の出來事にあつても、彼女をさう笑ひものには仕果てなかつたのである。――

「それにしても、ね、」

と、辰子は話頭を換へて、恭助に、

「登代子のことさ。――」と、漸つと近頃行衛の分つた、其妹の事を話出でる。

『あんな處に、頼つて、どうして居るか。純造を連れて、あのごたくさした家内のうちに、善くやつてゐられるかどうかねえ。――あの息子の話では、大分廣い家のやうな事を言つてたが、何に、實際は、六疊とか八疊の間の座敷に、六

七人の家内がうよ〳〵して居るのだつて話よ。」

『本統に、どんな氣がしてゐやがるのかね。――構やしない、此度は懲りて懲りて懲り拔く迄やつて見るがいゝさ。」

母の寡婦は、糸の通らぬ針を灯に翳しながら、いま〳〵しげに呟く。

『だけども、あれも可哀想ですのよ。……今度、恭助が東京へでも出たら、ちよつと行つて見て呉れると善いのね。神奈川つては、橫濱の直ぐ町つゞきだつて、さね。』

『さうねえ。――』恭助は、懶いやうに呟く。

『……美佐子や登代子がゐなくなつて、何と云つて寂しい氣のする事があるのに、こんど又、恭助が行けば、家が寂しくなる許りですよ。……ねえ、母さん、矢つ張り、叔父さん達に家の裏へ來て貰ひませうか。さうすれば……』辰子は何か賴りない氣持で、此樣ことも言つて見る。

『さうねえ、……』寡婦には、未だ他に考へのある樣に言ひ澁つてゐたが、

『さう、さう、……此度恭助が、吉本さん處へ落ちついて、M――町の方へ出かける事があつたら、忘れないで、美佐子の容子をきいて貰ひたいのね。……あたしが、M――町へ出る日が、いつ頃か分らないからね。……』と言ひ出でる。

今度は、辰子が、默りこむ。

美佐子の事は、寡婦が川島の婆さん處を訪ねると言つてゐるうちに、突然、美佐子のもと奉公してゐたM――町から、美佐子の自筆で、――其町の或醫者の處へ來て厄介になつてゐる旨と、誰か家の者が町へ來る事があつたら訪ねて欲しい意味の事が記されて來たのである。其便りがあつてから、まださう久しくはない。

『さうねえ、行つて、詳く容子をきいて見ませう。』

さう應へながら、恭助は、もう拘はりないものにならうと思ふ此家の事が、まだ何處までか自分の脊に付き、尾をひいてゐる事なのに、思ひ到るのであつた。

そこへ、もう一度寢こんだらしい弟の辰夫が、眠さうな眼付で下りて來る。そして、母や姉に叱られたり笑はれたりしながら、寢間着姿のまゝで、矢張り肉親だちの夜話に聽き入つてゐる。彼も亦、何か寂しく、賴りない氣持なのである。——

母の寡婦は、恭助の出立する前に、十幾年かになる亡父の法要を、家うち丈けで靜かに營みたいと言ひ出した。——木碑の朽ちて形のなくなつた儘、石碑に變へて建てたいと希ひながら、まだその希ひを果す事の出來てゐないのを悲みながら、彼女は、その忌日には恭助を初め娘や息子達を引つれて、海べの墓地に詣でた。丁度其日礦山から下つて來た叔父も亦、時ゝを連れた時造と一緒に、寡婦達のあとに續いた。

その墓塚の前に立つて、恭助は幾年ぶりかの氣持で、頭を下げた。父の愛撫に對する遠々しい感謝の氣持と、荒寥に近い孤獨の感が、彼のうちに動いてゐた。——それは、砂地に枯れた松葉がこぼれて、狹い區劃の中に古びた松の幹の蔽ひかゝつた、墓地である、こんもり高い墓塚の前に、二幹生い立つた玉椿の綠葉が繁り、朽ち傾いた花筒が捧げられてある。組み交はした松の幹と、すがれた其下蔭を越して、寂しい青を湛へた冬の海が眺められ、岸波の音が淒く響いて來る。悴子と辰夫とは、大人の人達に先立つて、その邊りを掃き清め花筒を直し、香と乏しい花とを、塚の前に捧げて、稍い涙を浮べてゐる。

寡婦と叔父とは、その墓前に長く長く膝まづいて、涙を垂れてゐた。時造も亦、嘗て生前に會ふ事のなかつた義父の

面影を偲ばうとしながら、神妙に掌を合せるのであつた。

寡婦は恭助と俊子と辰夫と、尚孫の時夫を引つれて、戻りの道には、しばらく海べの砂地に膝を下ろして、靜かな日さしを樂むやうに見えた。彼女は、自分でも思ひがけなく彼女と夫とが初めて此町に漂浪い着いた日の事を、遠い遠い記憶から思浮べてゐた。彼女の感情は、靜かな悦びにあるのか侘い悲しみにあるのか、自分でも分らなかつた、だがさうして靜かにしてゐると、自づと胸が一杯になつて涙が溢れて來るのであつた。

その日一日、彼女は輕くそして又虔ましやかに、人々の間にあつて、亡夫の在りし日の事や、まだM——町にゐて恭助の幼なかつた頃の話を話しては、靜かに樂むやうに見えた。そしては、ひとりになると、わけもなしに涙ぐましい氣持になつて來るのである。そして旅にゐる娘達の事や、生れて間もなく死んで了つた子の事などが、ふと、ふと、思出されて來る。彼女は、自分の氣持がどうして左樣なのか、自分でも知る事が出來なかつた。

『だが、さう長い別れと云ふのでもないんですからね、……』

恭助は、今日を善い機會に家ぢゆうの寫眞を取らうと言ひだした時造に、此麽ことを言つて笑つてゐた。だが、辰子も、俊子も、辰夫も、時造の其提案に欣んで同意を示すのであつた。——寡婦自身は、さう乘氣でもなかつたけれど、愈々撮ることに決まると、辰子や俊子に手傳はれて、衣裳の着ざまを直したりしながら又哀しく此處に居ない娘達の事を思ふのであつた。

恭助と時造に挾まれた、寡婦は、自分の膝の前に孫の時夫を置いて、羞らひながら其場の主座に据はつた。辰子も、赤子を膝にのせて、時造の脇手に腰をかける。そして、今日は多くの恥ぢを内に感じてゐる叔父も亦、羞らひながら、辰夫の背後に立つて、此一家の寫眞の端に加へられるのであつた。

『これで、純ちやんさへ揃へば、小母さんの三孫揃ふわけなのねえ、』

この一家の團欒を、羨むやうに立ち眺めてゐた、隣家の女が、辰子に此麼ことを言ふ。辰子は、その婉曲な言ひ方を少し厭ふやうに、愛想のない辟で領き返すのであつた。——彼女も亦、こゝに加はらない、妹達のことを思つて居たのである。

恭助の家を立つ日が來た。——

その日は、時造が又、時夫を連れて、C——の兄貴の病氣見舞に出かけることなので、家ぢゆう朝の間忙しい思をしなければならなかつた。——その二三日前に、C——の姉から、こんどはどうしてか、時造に、時夫や辰子を連れて兄の見舞に來て與れないか、兄も愈々六ケ敷いらしい、そして時造や辰子に會ひたがつてゐるから、と書いて寄越したのである。辰子も、一緒に行きたい熱心は強くあつたのだけれど、こんどは左樣するわけに行かなかつた。

氣の善い時造は、丁度恭助の立つ日が近づいてゐた事なので、日を繰合はせて、途中までも一緒に行かうと言ひ出した。恭助は、唯領いて、それを拒まうとしなかつた。——その前の日、叔父も叔母も、礦山から下つて、此家に泊つてゐた、彼等は又近いうちに、この家の裏に引移る話に決まつてゐるのである。

叔母も共手傳に加はつて、辰子や俊子が、旅立つ人の爲に、朝の用意に忙しい。

『まあ、兎に角、身體を大切にしてね。勉強もいゝけれど、身體をなくして了つては、……私も亦、あの方へ行けば、寄つてお會ひしますよ。……』時造が、杯をさしながら、恭助に言ふ。

『さうだ、なあ。全く、身體が大切ですからな、……』

一緒に別れの酒を祝つてる叔父が、濕つた口ばたを拭きながら、口挿む。

恭助は、今朝さう醉ひの廻らぬ冷たい顔をして、微笑んでゐる。

母の寡婦は、俊子を指揮したりしながら、まだ恭助の周りのものの用意に、心忙しいのである。

『まあ、母さん、それで善うございますわ。あとから又、送るものもあるんですから、』

辰子が此麼ことを言つて、母を撫める。

『でもねえ、――』

寡婦は、何か氣が濟まない。

辰子は辰子で、時造に、

『あなた、C――の姉さんとこへね、あれだけでいゝでせうか。……祝と見舞と重なつて、變なものねえ、……』と其麼心配をして居る。

『いゝさ。――仕方ないさ。』

時造は、もう眞赤な顔になつて、いゝ元氣である。――こんどは又、兄の病氣見舞に兼ねて、早産ながら子を産んだ兄の娘への祝もして來ねばならないのである。

好い着物を着せられて、矢鱈に嬉しい、伜の時夫は、親父や叔父達が食事を終るまもまどろしがつて、軒先を出たり入つたり、道角まで走り出して行つて、汽車の往來を氣にして居る。

『おい時夫、――停車場まで負んでつてやらうか。――』これもう顔の赤い叔父が、さう言ふけれど、時夫は、俊子の手に曳かれて歩く方がいゝのである。

辰子と、母の寡婦と叔母とが軒先に立つて、見送つてゐる。やゝ項垂れた恭助と、元氣な時造と叔父とが三人並んで

その跡から時夫の手を曳いた倹子や、兄の包みを抱へた辰夫が随つて行く。そのうちに、又何に氣づいたのか、何か言ひ殘した事があるのか、母の寡婦が、辰子の赤兒を脊に負つて、停車場まで小走りに跡を追つて行く。――まだ、さう急ぐ程もなく、汽車の時間には、悠くり間があるのであるが。

汽車の出るまで、辰夫と倹子と跡から馳けつけて來た寡婦とは、腰かけた恭助の脇に腰かけたり前に立つたりして、何話をするでもなく、親しさうに居めぐつて居る。寡婦は又、さうかと思ふと、時　の處へ行つて、稼業の上の話を取交はしたりする。叔父は、時夫をからかひながら、近づき惡いやうな素振りで、矢張り時々恭助の方へ近づいて來る。時造は其内、停車場前の方へ出かけて行つて、其日の新聞を求めて來たりしたが、其一枚を恭助の處へ置いて、自分は町の知り人との話に交はる。恭助は、氣のない樣に、新聞を翻してゐたが、ふと、妙な偶然で、妙なものを、其處に見出でゝ、そおつとそれから面を背けた。そして、新聞を叔父の方へ渡しやつて了ふのであつた。――それは、もう恭助の既に知つてゐる事實だつたけれど、彼の友人の久田が其新婦と居並んで、結婚の正裝で、其處に映されてあつたのである、その傍らに、華族で會社の重役である久田の親父の名や、非常な富豪の娘である新婦の一家のことも記されてあつた。

叔父は其新聞を手に取つて、同じ其記事に目を止めて、新婦の嫁入り道具が長持幾棹帶幾十本と云ふ、埒もない穿鑿の文字を拾つてゐる。そして、恐ろしい大事件の樣に、寡婦の處へ持つて行つて、その事件を報導したりするのであつた。……

汽車が着いて、ホームを出るまで、倹子も辰夫も、赤兒を負つた寡婦も叔父も、圍ひの柵にもたれ、頸を伸べて其處を去らなかつた。各自に、各自の親愛と孤獨の涙を眼に湛へて。――父の腕にだかれた時夫は、突き出した父の顔の下

からそれらの見送り人に向つて、いつまでも／＼愉快相に手を振りやまない。

恭助も亦、いつまでか窓に凭れて、人を見かへつてゐたが、人々の姿が見えなくなると、自分の席に戻らうとして、此も亦何故か涙ぐんでる時造とちらと視線をかち合せて、直ぐ靜かに、窓外に廣がる冬の野と其先に西を限つて連なる日をうけて露はな山脈に、眼を投げるのであつた。澄んだ冬の空は、寂しいながらに、又彼の心を惹くものゝやうであつた。（終）

（大正十・十月・五日）



青年の權利

正宗白鳥

妻の義理の伯母の孫にあたる正也が、緣談が熟して見合ひまでも濟んだ後で破談になつたのを悲しんで、「失戀だ〳〵」と自分で云つてゐるといふ噂を、晩餐の座で妻から聞かされた寺田は、同情するよりも頻りに興がつて笑つた。

「おれなぞは、見合ひは五度も十度もやつたものだが、此方で氣に入らなかつたり、先方で進まなかつたりして、ズン〳〵見合ひ流れになつたのだ。しかし一度の見合ひで直ぐそれに極つちまふよりは、相手をいく度も變へた方が面白いぢやないか。」

「だけど、寫眞よりも本物の方が餘程よかつたんださうですよ。先方では兩親が初めからいゝ緣だと云つて乘氣になつてゐたのだし、當人も大抵は兩親次第で否も應もなかつた筈だつたのですけど、見合ひが濟んだ後で、急にいやになつたらしいんです。それで、正也さんは女に嫌はれた〳〵と云つてしよげてるんですつて」

「あの男は醜い男ぢやないがなあ。……それで、相手の女は非常に容色がいゝんだらうか」

「どうですかねえ。……その女の人だつて、まさか正也さんの容貌が氣に入らないからつて拒絶した譯ぢやないんでせう。正也さんは學校の成績はよかつたのだし、品行はいゝし、元氣はよし、まづ缺點がない方なのだから、嫌はれるのは變ですよ。あのくらゐな人のお嫁さんになるのをいやだと云ふ女の人は、餘程氣位が高いんですね」

「女にでも男にでも好き嫌ひはあるから一概に云へないさ……しかし、見合ひに失敗して失戀騷ぎをするのは、正也らしくつて面白いね。あの男は今時の青年には似合はない正直なところがあるから。本當にさう感じるのかも知れないね。」

寺田は、正也には二三度會つたことがあるだけで、その人となりをよく、知つてゐるのではなかつた。全體彼れの接觸してゐる若い者といへば、身内の二三人に過ぎないので、現今の知識階級の青年の氣風を、彼れはよく理解してはゐなかつたのだが、ただ何となく、寺田自身の若かつた頃に比べて、今の青年は不正直で不眞面目で虚榮心のみ强くつて氣骨が無いと感じてゐたのであつた。

「あの男のやうに無邪氣で、キザなところのない青年は珍らしいよ」と、彼れは獨り極めにして、「近日あの男を家へ呼んで晩餐の御馳走でもしようぢやないか。お前から端書をおだしよ」

「それだと、豐ちやんも一緒に呼びませう」

妻の富子は、招待の日取りを夫と打合はせて、晩餐後机に向つて、それ〴〵に親しみのある文句を並べた二通の手紙を書いた。

正也は云ふまでもなく、豐子だつて此家へなら、手易く兩親の許しを得て遊びに來るに違ひないと、富子は極めて、早くから御馳走の献立などを考へてゐたが、意外にも、二人とも斷はりの返事を寄越した。そして、豐子の方は、風邪

がまだ癒りきらないから出られないと云ふのであつたが、正也の返事には、「……突然のお招きは有難う御座いますが、當分お宅へは罷出る譯にまゐりません。三田の誰れかから私の事をお聞きになつたのでせうが、私は格別しよげても、落膽してもゐないのですから、慰めて頂く必要は御座いません」と、疎々したことが書いてあつた。

富子は、興に乘じて多少からかひ氣味のある文字を挿んだ馴々しい手紙をやつたことを後悔しながら、獨りで顏を紅らめて胸を蕩かしたが、ふと思返して、今度は人の親切を無にした正也の態度を小面憎く思つた。

寺田はその手紙を讀んで、「直ぐにムキになつて突掛かつて來るところが正直なんだね」と云つて笑つた。

「正直だか何だか分つたもんぢやない。祖母さん子だから我儘なのですさ。お嫁さんを貰ひそこねたものだから、矢鱈に傍へあたるんですよ。」

折角の計劃が無駄になつた腹癒せに、富子は夫を唆かして帝劇を觀に行くことにした。寺田は氣まぐれに思立つた晩餐會が芝居見物に變らうとも、自分に取てはどちらでもよかつたので、快く妻の勸めに從つた。其後間もなく、豊子は遊びに來たが、正也は影も見せなかつた。平生妻の伯母の家との交際は極めて疎々しかつたので、寺田はその後の正也の行動を知る機會はなかつた、彼の事は全く念頭に浮ばなくなつて、その名を口にすることも耳にすることも全くなくつて數ケ月は過ぎた。

ところが、ある日の午后、寺田は銀座の床屋へ寄つて順番を待つてゐる間に、玻璃越しに外を見てゐると、ふと正也らしい人影が前を通つたので、急いで扉を開けて覗て見た。餘程行過ぎてゐたので、後姿だけでは明瞭に分らなかつたが、脊丈や步き振りがどうもそれらしかつた。彼れの同伴者にちがひない若い女と並んで步いてゐたが、その女だけは町の角を曲るまでに一度振返つた。後姿がスラリとしてゐるばかりでなく、振向いた時の目は遠目にも生々としてゐ

て、顔立が美しかつた。寺田は散髪をしながら、久振りに正也の事を思出してゐたが、そのせいだか、鏡に映る自分の顔がひどく老込んでゐるやうに見られた。頭の眞中がこの頃髪が薄くなつて、髯にも白毛の殖えて來たことなど、不斷はさして氣にしないことが、不思議に氣にかゝりだした。目に見えない腦の働きはまだ衰へてゐないと、自負すればしてゐられるものゝ、視力の衰へ齒の衰へ、食慾の衰へ、脚力の衰へなど、的確に身に迫つてゐる老の影は自分でも打消すことが出來なかつた。

床屋を出てから二三の用事を足して、神谷町の家へ歸つた時には、最早燈火が點いてゐた。寒い風に曝されて埃のはげしい街上を、電車や徒歩で半日以上も動き廻つたので、寺田は可成り疲勞してゐた。彼れは用事については妻によく話したが、正也を見たことは口に出さなかつた。食後には行火を書齋へ持込んで休息しながら、ちよつとした調べ物をしたり、手紙を書いたりしてゐたが、ふと思當つたことがあつたので、筆を投じて、調べ物や手紙はそつちのけにして、思當つたことの方へ心を注いだ。

「あゝさうか。……さうかも知れない」と、彼れは獨り合點をして獨りで微笑んだ。正也とその連れの女とを見た瞬間からの心中のこだはりがやうやく解けたやうであつた。あの女は吉川の末の娘であらう。年齢が丁度あのくらゐな筈だし、顔付が一番上の姉のたま子に何處となく似てゐた。(吉川といふのは、正也の祖母の姉の嫁いだ家で、その人は十數年前に亡くなつて、その養子もすでにいゝ加減な老爺になつてゐる)

寺田は二十年あまり前に、まだ娘盛りであつたたま子に時々會つてゐたことを思出した。結婚したばかりの時でありながら、その頃の彼れは、いろ／＼な女に目うつりがしてゐたので、たま子にも無關心で接してはゐられなかつた。新婦の富子がたま子と睦じく話してゐるのを、傍で見ながら、何故自分の生涯の伴侶があの女でなしにこの女に極められ

たのかと、浮かれ心で運命を呪つたこともあつた。

正也と吉川の末の娘とならば相應しい緣組である筈なのだが、吉川の家も祖母が死んで養子の世になつてからは、正也の家と極めて他所々々しくなつてゐるさうだから、これまでに兩家の間に緣談の糸口も開かれなかつたのであらう。しかし、平生親しく交つてゐない筈の二人の若い男女が、今日連立つて歩いてゐたのは何か譯があるに違ひない。親と親とが許して二人の緣が結ばれかけてゐるのなら、親類の誰れかゝら噂が富子の耳に入つてゐなければならぬのだが、今までにそんな噂の破片も傳つてゐないのによると、かの二人は親だちに秘密で遊び歩いたりしてゐるのかも知れない。

寺田は二人の間に秘密の戀が熟してゐることゝ獨極めにして、若い男女の影を追つてゐたが、それはさながら自分の若い時の影を追つてゐるやうなものであつた。

そこへ出拔けに襖を開けて入つて來た富子は、「あなた何を考へてゐらつしやるの?。ニヤ〳〵笑つたりなんぞして」と云つて不思議さうに寺田の左右を見廻した。

「そんな目をして見たつて、怪しい者は何もありやしないよ」と云つた寺田の顏には淋しい思出し笑ひが消えて、晴れやかな笑ひが浮んだ。

「さう云へば吉川の末つ子の名前は何と云つたつけな」と、彼れは興味をもつて訊ねた。

「けい子さんのこと?。……けいちやんがどうかしたんですか」

「あの家にや女の子が多いから、誰れが誰れやら、顏も名前もおれはよく覺えてゐないが、そのけい子といふ末つ子に、おれは會つたことがあるだらうか」

「無論會つてゐらるしやるわ。たまちやんが時々連れて來てたぢやありませんか。その頃はけいちやんが四つか五つ

か、まだ極く小な時分でしたよ。一度皆んなで赤城神社のお祭を見に行つて、お神樂を見てると、鬼のやうた面を被つた人が出て來たので、けいちやんが怖がつて泣出したことがあつたでせう。覺えてゐらつしやらなくつて？」

「それなら覺えてるよ。……姉に手を曳かれてヨチ〳〵歩いてゐた子があんなに大きくなつたのかなあ」

「何をさうひとりで感じてゐらつしやるの？。何處かでけいちやんに會つたんですか」

「そのけいちやんらしい人に今日途中で擦ちがつたのだ。……銀座の眞中で。……あるひは人違ひかも知れないが」

「へえ。ひとりで通つてゐたんですか」

「あゝ」

寺田は氣のない返事をした。そして、見た通り明らさまに妻に語るのを躊躇してゐた。正也とけい子との間が果して自分の想像してゐる通りであるか否か、自然に分つて來るまでは默つてゐたかつた。……若しも自分の推察が間違ひであるのなら尚更だが、想像が當つてゐるにしても、うつかり妻になど話して、親類から親類の耳へ傳はるやうだつたら、若い二人の迷惑になるであらうと氣遣はれたのであつた。がさういふ思遣りからばかりではなく、再び繰返すことの出來ない自分の若い昔を二人の上に見てゐるやうなので、口輕く座興見たいに妻の前に語る氣になれなかつた。

銀座で一目見たけい子の顏を思出してゐると、二十年前のたま子の顏があり〳〵と浮んで來た。目元がソツクリだつた。「あの二人連れは確かにけい子と正也とであつたのだ」と、彼れは自分で念を推して、若い日の幸福があまねくかの二人を包んでゐるやうに思つて、羨ましさ妬ましさをさへ感じてゐた。

それから一月あまり立つた。寒さがゆるんで梅も咲きだして、都會の濁つた空にも春の色がほの見えだした。血の氣が薄らいだためか、冬中寒さに弱つて風邪を引きがちであつた寺田は、温かい春の來るのを人一倍喜んでゐた。富子は

昔習つた日本繪の稽古を再びはじめて、師匠の所へもよく出掛けてゐた。

意外に正也の訪問に接したのはその頃であつた。正也は富子を訪ねて來たのであつたが、彼女が不在であつたので、直ぐに歸らうとしたのを、寺田は强いて引留めて、自分の書齋へ通した。

「久振りだね。今日は用事があつて來たのですか」と訊くと、

「別段用事があるつて譯ぢやないんですが……」と、正也は言淀した。

おれには打明けにくい用事でもあるのだらうと、寺田は察しながら、正也の職業や家族の近況について話を向けた。そして、話のうちに何氣ない顔して、

「君は先月の半ばころに銀座を歩いてゐませんでしたか」と、訊ねた。

「銀座へはよく行きます。銀座で私を御覽になつたのですか」

「遠くで見たのだからよく分らなかつたが、君には連れがあつたやうでしたよ。……一月の十二三日で寒い日でした」

「ぢや覺えてゐます」と、正也は微笑したが、少しも含羞んでなんかゐなかつた。

連れの女は吉川の末娘かと訊かうとしたのを、寺田は一先づ差控へて、顔を和げて、

「去年の秋頃君の結婚話があつたやうだが、その後どうなつたのです?。あれつきりで立消えになつたのですか」

「いや、あの話はどうも」と、正也は目を伏せて言淀んで、「全體形式的の見合ひなんかして、性質のよく分らない女と結婚するのは詰らないんですね。それに、私なぞ急いで結婚する必要はないんでせう」

「それはさうさ。君はまだ若いんだから、早くから結婚の束縛なんか受けないで、自由に好きなことをした方がいゝでせう。君は身體は丈夫だし、まだ生活の苦勞はないのだらうから、見る者聞く者が面白いにちがひない。君などは靑

春の權利を持つてる譯なのだ。……今日は君の樂んでるロマンチックな事件を一つ僕に聞かしてくれちやどうです。どういふ事件でも、僕は若い者の樂んでる事を非難すりやしないよ」

寺田は同じ年輩の友人などと無駄話をし合つてゐる時には、知らず〳〵現今の青年の氣風を非難するやうな口を利いてゐるのであつたが、正也と相對してゐる今は、若い者のする事を何事でも快く受入れる氣持になつてゐた。

寺田の打解けた態度を見て取つた正也は、心易げに、「いやあ、ロマンチックな事件なんか、僕にはありませんな」と、頭に手をやつて、わざと恐縮したらしい顏して笑つた。そして、「銀座であなたのお目に留つた私の連れの女は、私の友人の妹なんです。明治屋へ買物に行くといふから一緒に出て行つたゞけなのですよ」と言譯をした。

ハテナと、寺田は正也の返事に疑ひを持ちながら、「僕は何處かで見たことのある女のやうな氣がしたのですがね。見違へたのか知ら。……兎に角綺麗な人ですね」

「大井博治といふ代議士の姪なんです。容貌は何だけど、頭がラツフで、あまり感じのいゝ女ぢやありません」

「實は吉川の末つ子の何とかさんぢやないかと思つてゐたのです」

寺田は獨りでさう極めて、姉のたま子を連想して昔の夢を見てゐたことを滑稽に感じた。正也に秘密の幸福はなかつたのかと思つて見ると、正也の顏までも俄かに若い光を失つた平凡の顏に見えだした。

「さういへばあの女は、吉川のけいちやんにちよつと似てゐますよ」と、正也は新しい發見をしたやうに云つて、「でも、けいちやんは昔風の淑女見たいに因循してゐて、知らん人の前ではロクに口が利けないんださうです。それで、私などがたまにあの家へ行つても、近年は出て來なくなりましたよ、お父さんの監督も非常に八釜しいんださうです」

「あの家は以前は子供の教育がやりつ放しの方だつたが、近年は方針が變つたのかな」

お互ひの親類や知人の家庭の事を話題に上すと、正也がそれ等の家の事情によく通じてゐるので、寺田は驚いた。小山といふ軍人に嫁してゐるたま子がこの頃實家へ歸つてゐることまでも知つてゐて、舅と折合はないためなのだらうだなど云つた。

「公園の梅でも見に行かうか」と、寺田が誘ふと、正也は差迫つた用事を持つてゐるやうな口吻で斷つて、暇を告げた。

彼奴何のために來たのであらうか、通掛りに寄つたのか知らと、寺田は後で考へて見たが、この青年との半時間ばかりの對話によつて、何故だか彼れの心にいゝ感じは與へられてゐなかつた。

間もなく富子が歸つて來たので、正也の訪問を告げると、富子はふと險しい目付をして、「へえゝ」と空々しい受答へをした。

「あの男も以前會つた時よりや人間が違つて來たやうだ。輕游らしいところがあるね」と寺田は云つたが、その時は正也の身については夫婦とも話を進めなかつた。

それから四五日立つた。寺田が夕食後の散歩から歸つて來ると、三田の叔母さんと富子に呼ばれてゐるデップリ肥つた老婆が富子と對座してゐたが、二人の樣子があたり前ではなかつた。寺田はこの叔母さんにはあまり親しんではゐなかつたので、ちよつと挨拶すると自分の部屋へ入つて、散歩の次手に寄つた知合の骨董屋から買つて來た古ぼけた香爐をいぢくつたりしながら時を過してゐた。

しみじみ話込んでゐた叔母さんが歸つて行つたのは餘程立つてからであつたが、富子は買物をかねて電車道まで見送つて行つた。

寺田が煙草で睡氣を紛らせてゐるところへ、富子はそつと入つて來た。

「大變手間が取れたぢやないか。もう餘程おそいだらう」と、寺田は欠伸を洩らしながら、妻の顔を見上げたが、その昂奮した眼差しに氣づくと、今までの彼れの睡氣も俄かに消えて、ふと心も顔も緊張した。

「大變々々、いやになつてしまふ。……私が詳しくお話するから、邪魔をしないでしまひまで聞いてゐらつしやい」

富子はかう前置して話しだした。吉か凶か、近來耳にしない異つた事を聞かされることと豫想しながら、寺田は耳を澄ました。

「正也さんの事なんすがね。

あの人が此間訪ねて來た時に、私は不在だつたからよかつたのです。あの時家にゐたら、私も屹度あの人に騙されて迷惑してゐたにちがひないんです。それはお金を少しばかり貸して上げるくらゐなら構はないけれど、あの人に懸り合つちや、名譽を傷けられてしまうですからね。いつだつたか、あなたは、正也は今時の青年としては正直で無邪氣だなんて云つてゐらしつたけど、何が無邪氣なことがあるものですか。今夜の叔母さんのお話で、あの人の本心がスツカリ私にも分りましたよ。去年の見合ひをした時に一目であの人を嫌つた女の人は私たちよりも目が利いてゐたんですわ、吉川さんで、けいちやんでもよねちやんでも、正也さんにやる氣にならなかつたのも、伯母さんと仲がよくないためばかりぢやなかつたんでせう。

私があなたに隱してゐたのは惡かつたの。今夜こそ何でも一切云つちまひますわ。……あなたの思付で正也さんを呼んだのに、見合の失敗を冷かされるのはいやだなんて、いやみな返事を寄越して來なかつたでせう。あの後で間もなく、私はあの人に會つたんです。豐ちやんと葵館の活動を見に行つた時でした。聲を掛けられたから振向くと、正也さ

んが廊下に立つてニコ〳〵してゐる。

お一人？と云ふと、

えゝ、一人です

此處へよく入らつしやるの？

いや滅多に來ません。活動はあまり好きぢやないんです。先つきこの前を通りかゝると、あなたらしい橫顏が目についたから、私もつい入つて見る氣になつたのです。

それから、正也さんは此間のお詫なんかをして幕が開いても私を離れないし、私も見合ひの後の事を聞きたくなつたものだから、豐ちやんをほつといて、物賣場へ正也さんを誘つてコーヒーを飲むことにしたのです。

さうすると、あの人は出拔けに、

叔母さん、僕が心からお願ひしたいことがあるんですが、聞いて吳れませんか。親類が多くつても外の人には迂濶に話せないことなんですと云ふから、私は何の氣なしに、

えゝ、よう御座んすともと返事したのでした。見合ひをした女の人にまだ未練が殘つてるので、私にでも取做しを賴まうと思つてるんぢやないかと思つたのですが、その通りだつたのです。

飯田町の古瀨といふ耳鼻科のお醫者の娘で、正也さんが鼻の療治で入院してゐた時に、看護婦からよく噂を聞いてゐたし、自分も一二度見たことがあつたのですつて。娘さんの名前はみさ子と云ふんです。緣談の橋渡しをして吳れた人は、正也さんをその病院へ紹介した藤山といふ人で、古瀨さんとも知合ひなんださうです。

一通りさういふ筋道を話したあとで、正也さんの云ふには、

私も諦めたのだけど、おまけをつけて餘計なことを喋舌る者があるんで、親類中で私が笑ひ者にされるのが忌々しんです。それで、どうかして、誰れも知らない間に一度中止になつたこの緣談を復活させて、皆んなに見せつけてやりたくなりました。生命懸けでやりや其くらゐなこと出來なかないでせうからね。私から當人に直接にぶつゝかつて見りやいゝので、その方法もないことはないのだけれど、その前に叔母さんにお願ひして、あの女に會つて頂きたいと考へてゐるんです。

よう御座んすとも。(私は若い人の望んでる緣談を纏めて上げるのは善いことだし、自分でも興味があることに思はれたから、安受合に受合つたのでした)

それから先方の人に私が會つて話をつける方法を相談したのですが、正也さんは、この事は親類は云ふまでもなく、あなたにも云つてくれるな、成べくなら先方の兩親にも知らせないで、正也さんと私と、相手のみさ子さんと三人の間だけの事にして話を進めて見たいと云つて、私に堅く秘密を守る約束をさせたのです。活動寫眞を見てゐた時だから、私の頭も變になつてゐたのか、そんな詰らない約束をして面白がつてゐたのでした。

私は直ぐに古瀬のみさ子さんに宛てゝ、詳しい手紙を出したのですが、今になつて考へると、私も隨分輕卒だつたのです。一度も會つたこともなければ名前さへ聞いたことのなかつた人に、最初から打解けた手紙を出したのですもの。正也さんの性質や品行や學問や、家庭の事情までも、かう書いたら、どんな女でも心を動かすだらうと思はれるくらゐに、理想的に書上げたのです。それも、話を纏めるために誇張して嘘を書く氣になつたのぢやなくつて、筆を運んでゐると、ひとりでにそんな風に書けたのでした。さういふ青年が、あなたに戀焦れてゐるのですから、同情して下さい、あなたの方でお差支えさへなければ、私がどこかでお會ひして、打解けたお話をしたいと思つてゐますのです。い

かゝでせうと、私だちの身分も住所も正也さんとの關係もスッカリ書いて、ちつとでも怪しい者と思はれないやうに、充分に手紙に誠意を見せたのでした。

私には緣談のお取持をした經驗もないし、戀文見たいな者の遣取りをした經驗もなかつたのだから、さういふ手紙を書くのが珍らしくて面白かつたのです。

返事は來ることは來ました。でも極く簡單で、上べは叮嚀な文句を使つてゐても卒氣ないものでしたよ。私は何だか侮辱されたやうな氣がしましたが、その時は正也さんの心が察せられてしみ〴〵氣の毒に思はれたのです。これほどに思つてる男を嫌つてるみさ子さんは、全體どんな顏してゐるのか見てやりたいつていふ氣にもなつて、正也さんと話合せて、ある日古瀨さんの家の前でみさ子さんの出て來る所をよく見ました。美人といふほどぢやないけれど、脊のスラツとした品のいゝ見て氣持のいゝ女ですよ。正也さんも毎日お勤めに出てゐる筈なのに、その娘さんの事をよく知つてゐて、何時ごろに語學のお稽古に何處へ行つて何時ごろに歸つて來ると、知つてゐるのには、私も呆れたのですけど、そのためにあの人を笑ふ氣にやなれなかつたの。

ちや、あなたは、見合ひした後で、みさ子さんに手紙を出すとか、直接に話をしたことがあるんでせう。みさ子さんの通るのを途中で待受けて、後を隨いて行くくらゐなことはたび〳〵してゐたらしいのねと、訊ねると、

いや今までそんなことはなかつたのです。先方では私の顏を見たのは見合ひの時だけで、後にも前にも私に會つたことはない筈なのです。だから、當人が一概に僕を嫌ふといふのも變なのです。それで僕は今は意地になつても、あの人と結婚したくなつたのですから、叔母さんは最後まで僕の力になつて下さいと云つて、正也さんは女を惹寄せるためのいろ〳〵な狂言を仕組んで、目的のために手段を選ばないと云つてゐたのですがね。

でも、あんまり見つともないことしない方がよ御座んすよ。あなたのお嫁さんにはいくらでも候補者があるんでせうから、あの人一人にさう執着しなくつてもいゝぢやありませんかと、私も危かしい氣がしたから、注意したのですが、懸り合つた上は、どうかして緣を纏めて上げたいといふ物好きな熱心は持つてゐたのです。

ところがどうでせう。私は自分の名を騙られたのですよ。正也さんは、私ぐらゐな年恰好の女を私の身代りにして、みさ子さんを誘出したのですつて。今夜三田の叔母さんの話を聞いてはじめて分つたのですが、私こそいゝ迷惑ぢやありませんか。みさ子さんは今でもその身代りを私だと思つてるかも知れないから、早速手紙でも出して辯解しなきやなりませんわ。無論身代りの女は地道の人ぢやないんでせう。正也さんは大分前から惡い遊びもして、性質のよくないいろいろな人と交際してたらしんですもの。……みさ子さんが氣象がしつかりしてゐればこそ、間違ひがなくつて濟んで、表沙汰にもならなくつてよかつたやうなものゝ、若しも間違ひでもあつたとしたら、私だちは世間へ顏向けも出來やしませんよ」

富子はひとりでこれだけ喋舌つた。そして、もつと話續けようとしてゐたが、今までおとなしく聞いてゐた寺田も、最早沈默を守つてのみゐられなくなつて、

「だけど、お前が今までおれに隱してゐたのは可笑しいぢやないか。正也にたび〳〵會つてゐながら一言もおれに話さなかつたのは變だね。」と、咎めるやうに云つた。

「最初言ひそびれたものだから、それつきり云へなかつたのでした。」と、富子は輕く受流して、「三田の叔母さんの話が本當だとすると、早速正也さんに會つて、相當な謝罪をさせなければなりません。こちらがお人よしになつてると、この先どんな迷惑を着せられるかも知れないんですからね」

「お前の名を出られたりすれば、自然おれだつて迷惑する譯だが、どうもおれの腑に落ちないね。正也だつてさう輕卒に人の名を出つたりなんぞしまいし、第一お前の名が、女を誘惑するのに役に立つ譯はないだらうからな。お前は最初みさ子といふ女に手紙をやつたら、卒氣ない返事が來たと云つてゐたぢやないか。」

「だから、私だつて、正也さんがそんな酷い事をしようとは夢にも思つてゐなかつたのです、」富子は夫の尖つた顔に神經が惱まされだして、自由に口が利かれなくなつた。

「全體どういふ手段で、何處へ女を連出したのだらう?。お前はよく知つてるんぢやないか」

「それは正也さんかみさ子さんかに聞かなきやよく分らないんですわ。仲人をした藤山さんを間に立てて古瀨さんの方から、穩かに注意して來たゞけなのださうですから……古瀨さんでも、事を荒立てちや却つて娘さんの瑕になると思つて、強い事は云つて來なかつたらしいんです」

其夜は時間も遲かつたので、お互ひに言ひたいことも、一先づ胸に收めて措いて、二人は寢床に就いた。

寺田は何となく不愉快な思ひをしながら眠つたのであつたが、あくる朝雨戶の音に目を醒まして、障子に差してゐる春めいた朝の光を見ながら、睡氣醒ましの煙草を吹つてゐると、正也の不穩な所行までも羨ましいものゝやうに心に描かれだした。……散歩の途中などで澁皮のむけた若い女を見つけると後を隨けたり、友人の姉妹などに色文を送つたり、その他さまゞな不良少年じみた行ひをするのも、若い間だけの事だと思ふと、一概にケナす氣にはなれなかつた。

寺田が寢床を離れるまでに、富子は正也に宛てゝ不平を籠めた手紙を書いて出した。久しく疎遠になつてゐる伯母の家を訪ねて、直接に正也に會つて糺したかつたのだけれど、伯母をはじめ身內の者に自分がよく思はれてゐないらし

いのに氣おくれがして、行きかねたのであつた。

「今日は非常に温かい」

寺田は妻から顏を背向けて獨言のやうに云つて、寢卷のまゝ緣側に蹲んで庭を眺めた。猫の額ほどの庭にも木瓜が紅く膨みかけてゐて、其處に影をつくり日向をつくつてゐる柔かい春の光は、見てゐる彼れを唆かして、何かしら、懐こいものを思出させようとした。

「正也をまた晩餐に呼ばうぢやないか。今度は吉川の末の娘を一緒に呼ぶことにして」と、ふと思ひついて云ふと、

「あの人にはさう甘くしない方がいゝんですよ。それにけいちゃんなぞと一緒に呼んぢや、後で親類うちから詰らない疑ひなんか着せられて、また馬鹿な目に會ふかも知れないから、止した方がいゝんです」と、富子は憂鬱な返事をした。

「そんな疑ひなら構はないぢやないか。……お前も正也の戀愛騷ぎに關はり合つて面白かつたのだらう」

「どうしてです？」

さう訊返した富子の語調はあたりまへではなかつたので、寺田は

「まあいゝさ」と笑つて濟ました。

そして、その日二人は何となく調子の合はない思ひをして過した。寺田は自分だちの名前を正也に利用されたことは、むしろ、一つの興味ある滑稽事として見られるので、そのために正也を憎む氣にはなれなかつたが、富子が夫にも隱して、いゝ氣になつて、若い正也の女騷ぎに關はり合つて、遊んでゐたことを想像してゐると、何となくいやらしく感ぜられた。

折返して、富子宛ての正也の返事が來た。「……お叱りを蒙つて恐縮して居ります。實は先日お詫びをいたすためにお訪ねしたのでしたが、生憎御不在だつたので、殘念でした。あの時分は私の精神も少し混亂してゐましたので、愚かな事をして純良なる叔母さんのお名前を傷つけて申譯が御座いません。しかしそのくらゐなことは、早くから御存じなのを青年の權利としてお見のがしになつてゐるのだらうと、安心してゐたのでした。親類のうちのおせつかいな誰れかゝらお耳に入れたほどの惡辣な事をした譯ではありませんよ。憐れにも小生は大きな度胸はもつてゐないのです。たゞ、親類うちの平凡卑俗な他の人だちよりも、世間に信用のある寺田の叔父さん叔母さんのお名前を拜借した方が、遙かに有効だと思つたので失禮なことをいたしたのです。果して効果があつて、兎に角、かの女に會つて私の思つてゐることを述べることが出來たのは幸福でした。結果はよくなかつたのですが、あゝいふ經驗をしたのを今でも後悔してはゐません。まだしも諦めがつく譯なのです。いつぞや、彼女を獲るためにはどんな事でもすると、叔母さんを脅かしたことがありましたから、叔母さんは今度私の惡い噂を聞かれてお驚きになつたのでせうが、私は彼女を暴力で奪掠したのでもなければ、脅迫したのでもありません。さういふ事は空想ではたびたび描いてゐたのですが、それは空想から空想に終つたゞけで、實際は、叔母さんの名によつて、叔母さんの影法師列席の上で、語學の稽古返りの彼女を、あるカフエーの特別室へ招いたのに止まります。叔母の正體が側にゐなすつたら、私はあゝ自由に口が利けなかつたに違ひありません。いづれ、その會見の樣子や、彼女が私に對して何の感動をももつてゐなかつたことなどは他日詳しくお話してもよろしいのですが、私は何ケ月も時日の經過したあの時分のことをくどくどお話しするのは心が進まなくなつてゐるのです。……最近の私は、新しい幸福を樂しんで居ります。その方の話を聞いて下さいませんか……」

富子はこの手紙を讀んで、圖々しいのに呆れながらも、稍々心が晴れた。默つて寺田に手紙を渡すと、寺田は目早く

讀終つて、

「あの男はこんな事を書いて寄越すやうな人間なのかな」と云つて、數日前に會つた時の正也の目顏や言語を思起した。

そこへ抛出された手紙を挾んで、二人は互ひの老いた顏に苦笑を浮べた。



夢見る部屋

宇野浩二

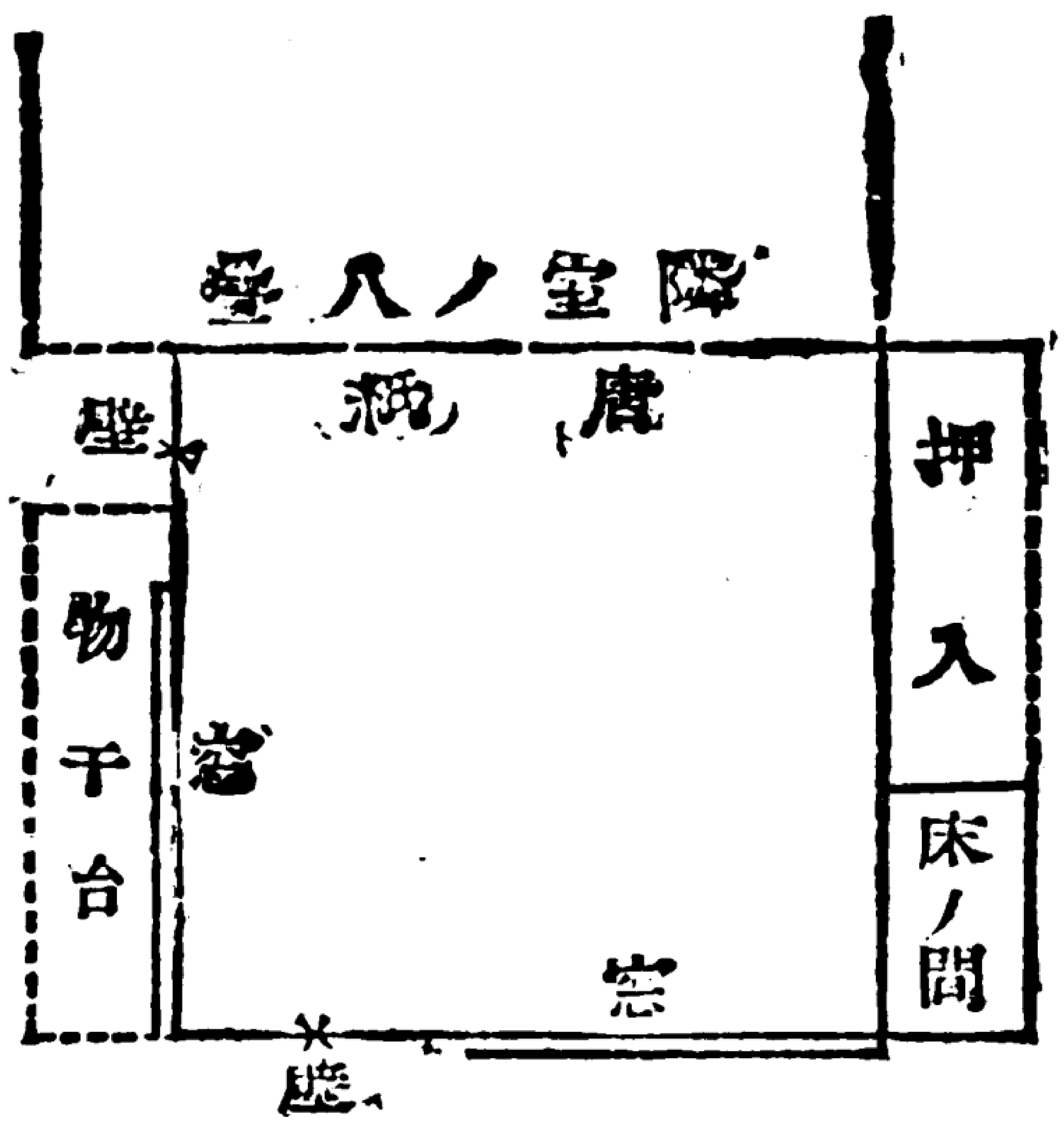
その日頃、私はしば〳〵私の部屋の、私の身のまわりを見廻しては、間斷なく溜息を吐いたり、舌皷を打つたり、無暗に煙草を吹かしたり、そして茶を飲んだり、それを詩人のやうに言へば、誠に靜心なく暮してゐたのであつた。

その私の部屋といふのは、鍵の手になつた二方は、いづれも半間の高さの壁になつてゐて、その壁の上には、同じく半間の高さの、障子の嵌まつた窓が附いてゐた、それが四疊半の部屋のことで、而も窓の部分はそれ〳〵一間の幅さであつたから、それのない部分にだけ、即ち半間のあひだだけ、壁は一間の高さを持つてゐる譯であつた。さて、別の一方は隣の、客間に使つてゐる八疊の部屋との境界になつてゐるので、そこには四枚の唐紙が嵌まつてゐた、そしてもう一つの一方は一間の押入と、殘りの半間は下宿屋に見るやうな床の間になつてゐたのであつた。

寛大なる讀者よ、諸君が若しこの脚本のト書のやうな描寫を今少し私に許すならば

その部屋の、隣室の八疊との境界の、四枚の唐紙と對して、窓を持つてゐる壁は、即ち往來に面してゐる譯で、障子を開くと、それの幅だけの簡單な欄干のある張出椽が付いてゐて、それを越して、そして屋根を越して、(その部屋は二階であつたから、)往來を見下ろすことが出來るのである。それに對して、左手が押入のある一面である、右手が即ち今一つの窓を持つた側であるが、その窓の障子の外側は物干臺になつてゐた、だから、その物干臺に出る爲には、人は何か足つぎの臺を持つて來て、而も半間の高さしかない窓を、魚の鰕のやうに身體を曲げなければならないのである。だが私は家の者に、無暗に私の部屋を通過されることを嫌つて、その物干臺は一切使用させないことにしてゐる、物干臺の向ふは隣家の板塀になつてゐた。

斯ういふ說明は徒らに讀者の欠伸を買ふに過ぎないであらうことを、私は心配しない譯ではないが、それにも拘らず、私は是非とも諸君にこの部屋の樣子を知つておいてもらひたい爲に、以上の說明だけでは如何にも他依りない氣がするので、左にその略圖をかいておきたいのである。



上の圖に依つて諸君も略々想像がつくであらうが、この部屋は東京の下宿屋の代表的な體裁を持つてゐるのである。元より私の家は山の手によくある、貧弱な借家の一つであるが、それにしてもこの部屋は、この家中での、最も下等な、下宿屋式のものであるのを、それを何故、この家では主人であるところの私が、わざ／＼撰んで自分の部屋にしてゐるか、と言ふには、そこに何かの理由がなければならぬのである。が、その譯は誠に簡單で、といふのは、この部屋が、私の家中で最も不便な位置にあることで、即ち物干臺さへ使用しないこ

とにすれば、誰もこゝへは、こゝへ來る目的の外には、例へば便所に行く爲とか、或ひは別の部屋に通ふ爲とかに、こゝへ闖入して來る恐れがないからである。もつと十分なことを言へば、隣の客間との境が、唐紙である代りに、廊下か何かになつてゐて、それが壁でゞもあつたならば、私はどんなに喜んだか知れない、そして、若しさうであつたら、この部屋は、今よりももつと、類型的な下宿屋の部屋の體裁を持つに違ひないのである、即ち、私は私の部屋が最も下宿屋の部屋に似ることを望むものなのである。

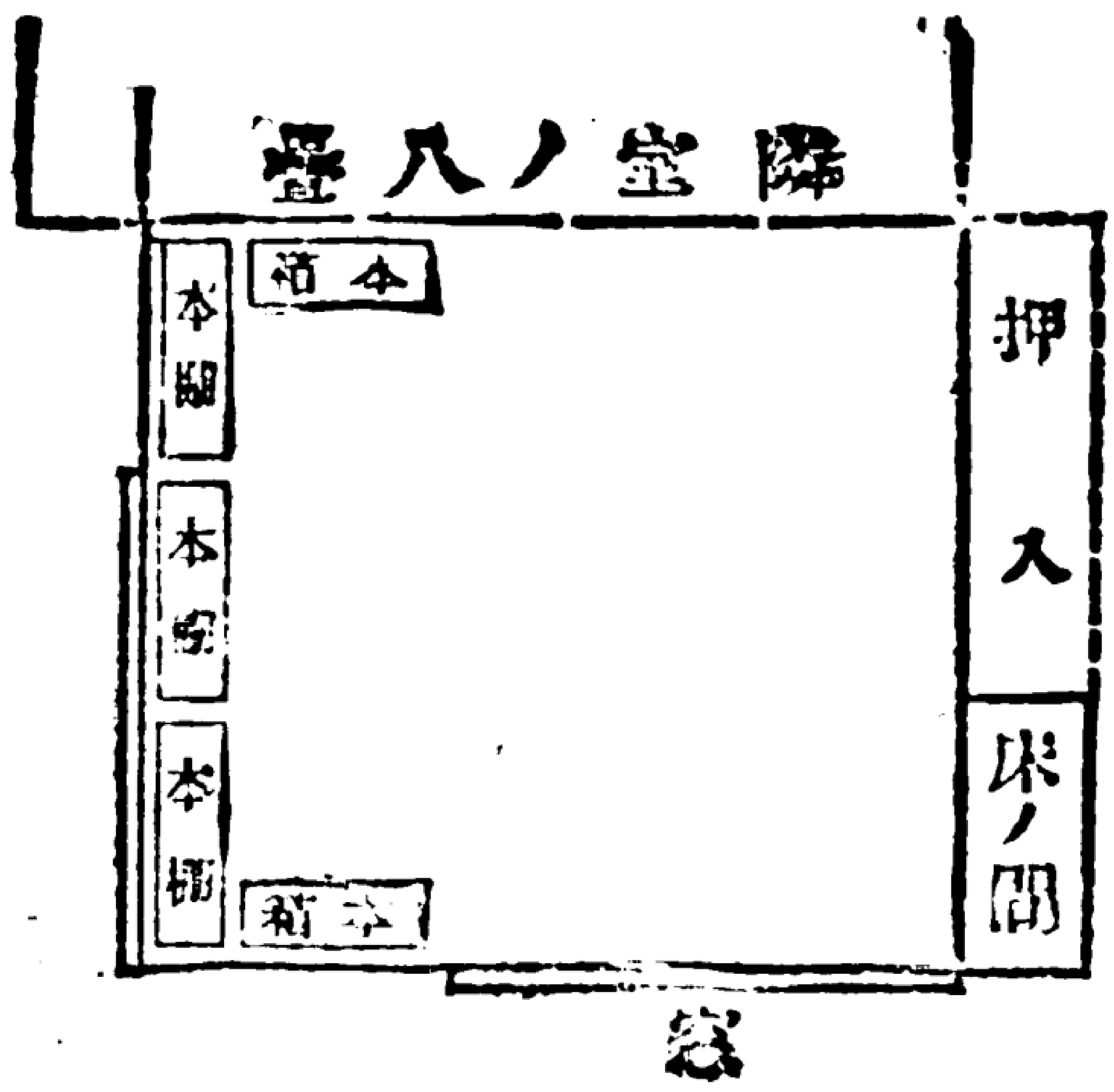
さうだ、この部屋の中で、私を最も惱ましたのは、この隣室との境の、四枚の唐紙であつた。それには、殊に不都合なのは、この隣室が客間であることであつた。何故ならば、境の唐紙をうつかり開けると、客間にゐる客に、私の部屋を覗かれることが、私の最も恐れるところだつたからである。それといふのも、私は不思議な性分の男で、何が故にそんな風な性分なのであるか、そして私自身にどんなに千度反省して、千度恥ぢたか知れないのであるが、それでゐてどうしても改めようといふ心掛には一度もなつたことのない、自分にも何とも合點の行かない妙な氣質を持つてゐたからであつた。それは、一口に言ふと、虚心坦懷(オープンマインデット)といふことの、反對の氣質であつた。それは私の極く少年の頃から、私に極めて顯著な氣質のものだつた一つの例話として、諸君は幻燈といふものを知つて居られるだらう、それは今日のやうに、活動寫眞などは全然なく、電燈さへ未だない時分のこと、ランプを入れるブリキの箱があつて、その箱の前に凸面レンズが附いてゐる、そのレンズの前に色々の硝子に畫いた繪を入れて、その前に又一二枚のレンズの附いた眼鏡のやうなものが仕掛けてある、それを暗がりの部屋に持つて行つて、そのレンズを白壁か、障子か、或ひは白い布に向けると、そこに先にレンズの間に嵌めた硝子の繪が擴大されて映るのである、さういふ玩具が子供の仲に流行した。他所(よそ)の子供たちはよく、今夜自分の家で幻燈を映すから、みんな見に來てくれとか、今夜は何某のとこに幻燈の會があるから見に

行かうとか言つて、互ひに誘ひ合つた。子供たちは誰でもそれ〴〵幻燈の機械を一つ位は持つてゐて、それを見せ合つては樂んでゐた、そして、私も稀には誘はれて、他所のを見に行つたことはあつた。ところが、私自身はといふと、私も無論それを持つてゐたのであるが、私は自分のを人に見せなかつたばかりか、もし私が家で映してゐるところを、他所の子に覗かれて見られでもしはしないかと恐れて、私はいつでも押入の中に這入つて、自分で一人で映して、一人で樂んだものである。それに、どういふものか、幻燈の時期といふと大抵夏のことに定つてゐたやうであつた、だから、窮屈な、何物とも知れぬ變な物の臭のする押入の中で、小さなブリキの箱にランプが這入つてゐるところの、幻燈機械の上に、乙の字の形に蔽さるやうに屈みがゝつて、一生懸命に自分で映して自分で見てゐると、あたりの空氣は釜の中のやうに蒸し蒸しするし、機械のランプの火照りの爲に腹から胸にかけて次第に暑くなつて來るし、そんな目に遭つて、私は身體中汗びつしよりになりながら、それでゐて何とも言へぬ愉快さと、安心さと、そして秘密な氣分とを樂んだものであつた。その爲に、親たちから、火の用心が危いとか、何といふお前は變屈な子だらうとか、色々言つてたしなめられるのであるが、しかし私は決してその不思議な癖を改めなかつた。今、私は幻燈を映すのは、大抵白壁だとか、障子だとかと言つたが、その頃私たちの間の流行として、それを映すために、半間四方位の匡になつた衝立のやうなものがあつて、その匡に白紙か白布かを張つたものがあつた。それを私は手製でこしらへて、その木の匡には、裝飾のつもりで自分で繪を畫いたり、繪を刻んだりして秘藏してゐた。その匡にしてさへが、自分ではそれが非常にいゝつもりなのであるが、もしそれを他所の子供が見て、可笑しいと言つて嗤つたり、拙いと言つて貶したりしやしないかと恐れたのでもある。又、それもみんながしたことであるが、自分で硝子に繪をかいて、その自分のかいた畫を映す時なども、私は折角自分の喜んでゐるものを、他所の子に見て嗤はれはしないかと恐れたのでもあらう。

　さういふ例を、私のこれ迄の生涯の中から取出して、擧げれば幾らでもあるが、くどくなるから省くとして、もう一つ、大人になつてからのさういふ例を擧げると、それは私が東京に出て下宿屋生活をしてゐた時のこと、私は不斷物を書くのにも、讀むのにも、すべて私が一人で自分の部屋にゐる時は、飯を食ふのでさへも、悉く寢床の中でしたものであつた。ところで、私は先に言つたやうな私の性分から、自分が讀んでゐる本とか、自分が何かの原稿を書いてゐることとかを、友達に知られるといふことが、どういふ譯か、自分でも隨分頭を惱まして屢々その理由を求めたが、結局分らなかつた位で、何といふことなく厭でならぬものだから、下宿の女中が來客を知らせて來ると、私は泡喰つて、何か惡い祕密事でもしてゐたかのやうに、その本や或ひは原稿紙やを隱したものである。だが、それがずつと親しい、そして屢々遊びに來る友達であつて、女中の案内を待たずに、つかつかと廊下を歩いて來て、私の部屋の戸をいきなり叩するやうな客であつて見ると、私は更にあわてなければならなかつた。それが本を讀んでゐる場合ならば、大急ぎで私はそれを自分の寢てゐる寢床の中に突込んだ、そしてそれが原稿の場合だとすると、私は咄嗟の間に有合はせた新聞か何かを上から被せておいて、それから這入つて來た客に見られぬように、被せた新聞ごと原稿を押入の中などに隱したものである。私はこの自分の、人に話せない妙な性分の爲に、どんなに私自身惱まされたか知れない、實際、それを知らない人で、私がさういふ事をするのをちらとでも發見するならば、事と場合とでは彼はどんなに私を誤解して、どんなに氣を惡くするか知れないのである、さう思ひながら、今だにこの妙な性分は私から拔けないのである。拔けないどころか、私は時々、誰かを訪問して、その人が私のそんな性分とは正反對に、例へば原稿や書物や、その外その人自身が日常直接親んでゐるものを、來る客が見ようと見まいと、客を通す部屋の中に縱横無盡に散らかしてあつたり、置いてあつたり、並べてあつたり、時とすると、「君、その邊にあるから、失敬だが、自分で探し出してくれ給へ、」などと言

ふ光景に接すると、實際、私は、何の誇張もなしに、私自身驚嘆して、呆然として、數分の間その時の主人の心理を漠然と考へて、さて、さて、何といふ羨ましい、快い氣質の人であらう！　と感嘆するのが常である。

さて、さういふ譯であるから、隣室との境の唐紙に就いて、私は、私の部屋の方から向つて、四枚のうちの最右端の一枚の外は、家の者にも命じて滅多に開けさせぬことにした。そして右側の壁に沿うて、高さ五尺餘、幅三尺の本棚を三箇、ぎつしりと並べた、それから、それと鍵の手に、即ち往來に面した一方の、壁にくつ附けて、一つの小さな本箱を置いた、もう一つそれと相對して、つまり三箇の本棚の列の別の端と鍵の手になる位置に、だから唐紙を背にして、別の小さな本箱を据ゑた。再び圖の助けを借りると、次のやうになるのである。



ところで、此三箇の本棚はこの家に引越して來ると共に、兎に角私自身で見立てゝ買つて來たもので、先づ普通の體裁のものであるが、これとても棚そのものは辛抱するとしても、元來が蓋のないものであるから、一と目でそこに並べられてある何々の本、何々の本、とその背に依つて知ることが出來るので「や、つまらないものを讀んでゐる男だな」とか「隨分舊時代の、古風な本を貯へてゐる奴だな。道理で……」とか「おや、かと思ふと、柄にもない、流行の思想問題などの本が並んでゐるぢやないか、時代に遲れない心掛かな？」とか、見る人々がそれ〴〵彼等自身の考に外ならぬことを、私の身に當て嵌めて推量するであらう、――だから、私の性分として、私は愈よそれを人に見られることを恐れるのである。まして、向ひ合つた位置に置いた二つの小型の本箱に就いては、これは私が殊に人に見られることを好まないものであつた、といふのは、その形が餘り

に有り觸れた、早稲田あたりの田舎者學生か、でなければ東京者なら中學生でも、今少し大型な、今少し氣のきいたのを持つてゐるに違ひないと思へるやうな、一つは例の觀音開きの硝子張りの蓋の裏に、青い輸出絹を掛けたもので、今一つはやはり小型の、和洋折衷とでも言ふのか、開ける爲には一々外す式の、木の蓋の附いたものである、それでも、双方とも、近頃出來のものである證據に、一番上の方が一寸したものを置く棚の形になつてゐるのである。つまりこの二箇の本箱などは、私自身のものとして、私だけが私の部屋において使つてゐる分には、何の不都合もないのであるが、これ亦私の性分として、先に言つた流儀で、斯ういふ幼稚なものを持つてゐるのを、人に見られることは、私には堪えられないことなのである。

實はこれ等は私が買つたものではないので、兩三年前結婚したところの、私の女房が持つて來たものなのである、私と結婚する前まで、田舎町の藝者として、又一軒の藝者屋の主であつたところの彼女は、小さいながらも、そんな二つの本箱に、何を入れて居たのであらうか？――言ふ迄もなく、清元とか、義太夫とか又端唄集とかの稽古本やら、諸商人の通の帳面やら、或ひは紀念の爲に取つてある、自分が昔他所の家へ抱えられた時分の契約書やら、又當時は自分が抱えてゐた藝者の書類やら、さては色男の手紙やら……それ等は多分、今唐紙を背にして居る方の、木の蓋の本箱に收められてゐたのでもあらうか、そして、もう一つのには、例へば悲哀小說「涙の物語」とか、家庭悲劇「何の何」とか、稀には新潮社發行「現代傑作選集」とか、恐らくそれ等も多分彼女自身が買つたのではなくて、時々客から貰つたものが溜つたところの、主に洋綴の本を入れたのであらう。そして私にとつて笑ひ事ではないことには、それは彼女が多分私と知つてから間もなくの頃であらう、私が小說家であつて、二三の小說の著のあるのを聞いて、これこそ或日彼女がそつと隣の驛の稍々大きな町まで出かけて行つて、自分で買つて來たものに違ひないのである、といふのは、私の昔著

した小説本の一冊が、その本箱の中に外の本類にまじつてゐたのを、これ等の本箱を私の家へ持つて來た當時私が發見して、それを彼女に聞くと、最早や女の三十歳にもなる彼女が、少しばかり顔を赤らめたことであつた。あゝ、それから、たつた三年の月日しか經たないのである。……

私は自分のなるべく好きな本を、その三つの本棚と、二つの小さな本箱とに並べて、殘りのものを同じ部屋の押入の中に入れた。それから……それから、もう一つ打明けることを忘れてならぬのは、この小さな部屋の中で重要な位置を占めてゐるところの、十何枚かの額椽に就いてゞある。それ等の大小の、不そろひの、人から貰つたり、自分で買つたり、又先に言つた女房が田舍から持つて來たりして溜まつた額椽、恐く大抵安物の額椽、――さやう、私の考に依ると、人はその持つてゐる一面の額椽からでも、その持主の趣味や敎養を他人に推量される恐がある。(と言ふのも畢竟、これはやつぱり私の心をもつて人の心を計つたものであるか。)兎に角、さう思ふと、到底そのうちの一面だつて、人に見せられないやうな種類のそれ等に、私は悉く山の寫眞を入れてあるのである、例へば日本アルプスの何々山とか、何々嶽とか、或ひは近江の伊吹山とか、伯耆の大山とか、さては歐洲アルプスのユングフラウとか、メンヒとか、アイガアとか、――それ等を私は私の四疊半の部屋の、額をかけ得る壁の空間といふ空間に、掛けてあるのである。そして、それだけでも未だ足りないで、額に這入り切らぬものや、或ひは餘分の額のないものやは、私は壁の空間といふ空間に張り付けた。これは、若しこの光景を誰かゞ見たら、どんなに人が笑ふであらうと思つて、私は時々誰もゐない部屋の中で自分と自分に赤面しながら、それ等の寫眞を一々剝がし、それ等の額を悉く取下ろして、さて、あれかこれかと迷つた末に、辛うじて中から三四枚を撰拔して、それだけを適當な位置に掛けることがある、しかし又二日三日と日が經つうちには、いつとなく又一枚掛け、又一枚張りして、壁の空間は元の通り悉く寫眞で埋まるのであつた。

私は性來健康も弱く、殊に歩くことが最も不得意であるが爲に、それ等の壁の數多の寫眞の中の、殆ど一つの山にさへ上つたことがない、それどころか、それ等の山の半分以上は麓からでさへ見たことがないのだが、私はせめて日本中の、私の日頃から憧れてゐる山だけは、機會のある毎に一度でも二度でも、麓からだけでも飽きる程眺めたいものだと常々希望してゐるものである、即ち、私は、毎日會ふことの出來ない戀人の寫眞のやうに、それ等の山の寫眞を目に觸れる限り集めて來て、さうして眺めることを無二の樂みとしてゐるのである。あゝ、私がこれ等の山の寫眞を眺めて樂む、その樂みの有頂天さを、どういふ言葉が說明することが出來よう！　數多い讀者の中には、せめて私の半分位の熱心さでも、この私の奇妙な樂みに同感する人がないであらうか？　實際、これは類がありさうで中々ないところの、そして又たま〳〵同感する人はあつても、その人の熱心さは私の十分の一にも足らぬ程の性質で、誠に私としては語り合ふ友のない孤獨の樂みのやうな氣がするのである。だが又、それは語り合はねばこそ、その樂みが七倍されるのかも知れない、それは兎も角、私がそんなに好きでありながら、自分でそれに上れないといふことは、私の憧憬の心持を尙一層深くするやうに見える、その爲かどうか、私が好んで集めるそれ等の山の寫眞は、山の第何合目の眺望とか、山の頂の光景とかいふものは殆ど少なくて、大抵麓から見た山の姿のものである。だから私は、實際にそれ等の山を目に見たことのあるどんな旅人よりも、恐らくそれ等の山々を故鄕に持つてゐる人々ほど正確に、それ等の山の姿勢を知つてゐると言つても、甚しい嘘はにならないと信じる位である。私は誓つて言ふが、これ等の言葉は、私にして見ると、幾ら言つても言ひ足らぬとこそは思ふが、寸分も誇張したものではない、否、私はどうかして誇張して言ひたいとさへ思ふのであるが、それが出來ないことを地駄々踏むほど殘念に思ふのである。「君はこの世の中で、何が一番好きだ？」と嘗て人に問はれた時、實際は私はそれに答へなかつたのであるが、實は心の中では卽座に「山と女と本、」と答へた。―

「あゝ、さうだ、この答をこんなに突然に、こんなに性急に洩らすのではなかつた、この言葉はもつともつと、私自身に就いて色々なことを述べた上でなければ、諸君に十分合點が行くやうにならなければ、だから、若しかするとこの小說の最後の行に來ても、言はない言葉だつたかも知れなかつた。

兎に角、さういふ譯で、私の部屋の壁といふ壁は、山の寫眞で埋まつてゐるのである。そこで、私は、一尺に二尺程の、小さい經机のやうな机を、部屋の中の邪魔にならない邊に、いつも番人のやうに放り出しておいて、私自身は往來に面した窓のある壁寄りに 朝も夜も敷き放した床の中に這入つて、物を書いたり、本を讀んだり、さて山の寫眞を眺めたり、空想したりして暮してゐるのである。人が來て、隣室の八疊に出て行く時とか、散歩その他の用事の外には。……ところで、先にも言つたやうに、如何にもこの部屋が、東京のさらにある下宿屋の一ト間にそつくりであることが、私にはそれが何となしに賴もしい氣さへされるのである。若しもこれが本當に下宿屋の一室であつたなら 普通の場合一と間以上持つことが出來ないのであるから、私はこんな風に安閑として、私の本棚や、木棚や、そして山の寫眞やらの中に、それ等を樂みながら寢てゐる譯には行かないであらう、何故と言つて、いつ何時女中の案內に依つて友達や知人が、この部屋に闖入して來るかも知れないのであるから、然し今は、客が來れば、何食はぬ顏をして、一番右の端の唐紙を、自分の身體が通れるだけの細目さに開けて、「や、今日は、」と顏を洗つたつもりで隣室に出て行けばよいのである、だが私はさういふ小心さがあるにも拘らず、私は一日のうちに何度となく、三年前までの私の下宿生活を懷しく思出すのが常であつた。そこでは、今の私の部屋のやうに、私の思ふまゝに、私の最も親み、愛するものを、遠慮なく坐右に侍らしておいて樂むことは、例の私の妙な性分から、許されなかつたが、それよりはもつと私の苦痛にまで、私は今隣室の八疊との境界の それも亦下宿の唐紙そつくりであるところの、出來合ひの借家の、有合せの唐紙の

模樣を見てゐると、今は友達ばかりではない、私を先生と呼ぶ本屋だとか、雜誌の記者だとか、未知の青年だとか、色々な人が日に何人か尋ねて來るところの、その隣室の八疊の客間を持つてゐることが、何とも言へぬ負擔に感じられてならぬのである。右手の押入の唐紙の模樣も、私が嘗て十度以上轉々した下宿屋の何處か一つには、必ずそれと同じ模樣のものがあつたに違ひないと思はれるやうなそれであり、さても、その隣の半間の床の間など、何といふ下宿屋造りの體裁であらう、その床の間の、少し風が吹く度に、僅な震動にさへも、ぼろ〱と砂のこぼれる茶色の壁に、もたせかけてある一挺の三味線がある。これは今から四五年前、私がへと〱になるまで困らされ、苛められたところのヒステリイの女房に別れて、あゝ、今日から愈よこの世に於いて俺一人になつた、自分の體か自分のものになつたといふ喜に、月に二十圓に足りない收入の爲に、風呂に行くこと、葉書を出すことさへ自由にならなかつた窮迫時代に、澁谷道玄阪のとある古道具屋で、それを買ふ爲に私はその家の前を五日間に二十度以上空しく歩いた、店に外の客のゐない時、太つた亭主が帳場に坐つてゐない時、別嬪の上さんが店番をしてゐない時、やつと十七八の小僧が一人店の道具類にハタキを掛けてゐた機會を覘つて、物を言はぬ先から顏を眞赤にして、息の窒まるやうな思でその値段を聞いて買つて來たものであつた。その店には五挺ばかりの三味線が、天井の一部分にぶら下げてあつた、その中に際立つて不恰好な、貧弱な三三味線に私は目星をつけて置いたのである。果して、それは値も安くて、三圓五十錢であつた。見ると、不恰好なのも無理はなかつた、と言ふのは、胴は普通の長唄三味線ので、棹は義太夫三味線のものなのである。「だが、よく鳴るさうですよ。何なら彈いて御覽なさい、音は非常によく出るとかいふことです、」と小僧は言つた。が、どうして、そんな私が、古道具屋の店先でそれを鳴らしたりなどする餘裕があらう。「さう、ぢや、貰つて行かう。小さくなるだらう、」と言つて、棹を胴から離して、二本に折つて、それを新聞紙に包んでもらつて、私は走るやうにしていそ〱と下

宿屋に歸つて來たのであつた。

下宿屋の私の部屋に着くと、私は部屋の入口に心張棒を支つて、早速三味線を組立て、調子を合はして、實はすつかりで四つか五つしか知らない端唄を、口の中で蚊のやうにうたひながら、爪彈きで、私自身にだけ聞える位の水調子で彈いて見た、ところが、果してあの古道具屋の小僧の言葉は嘘ではなかつたことに、妙にがらんとした音ではあるが、その不恰好さに不似合にも、中々よく鳴る三味線なのである。私はだん〳〵と調子に乘つてやつてゐるうちに、いつの間にか私自身にだけではなく、そして私の部屋中にだけではなく、私の隣の部屋にまでも聞える程の調子の高さで彈いてゐたと見えて、到頭隣室の客から抗議を申込まれたことがあつた。その頃、私がそんな體裁であつたから、止むを得ず親類に居候をしてゐて、一週間に一度位私の様子を見に來た母に、私はそれを見せて、これからどうか土曜日の午後か、日曜日かに來て、三味線を教へてくれと言ふと、彼女は呆れた顔をして、私たちがこんなに困つて、こんなに苦勞をしてゐるのに、……と、さうは彼女は口に出しては言はなかつたが、まあ、そんな呑氣なことを、と言ひながら、それでも流石に母の心で、下宿屋では成る程、土曜か日曜でなければいけないんだらうね、早くお前もせめて二間か三間のでも家を持つようになさい、そしたら誰に遠慮もなしに、毎日三十分か一時間づつでも教へて上げるから、と附加へて言つた。それから、私は日曜毎に母から習ふ外に、暇さへあると、否當時は暇の外のものを何にも持たなかつたことだつたから、始終町の古本屋を漁り廻つて、色んな人の著した、色々に違ふところの、三味線の譜本を十通り以上も集めて來ては、その不恰好な三味線に依つて、ぼろん〳〵と稽古に餘念なかつた。だから、私は間もなく譜本にある唄だけは忽ち上達してしまつたので、それ等の本が、著者に依つて譜の表はし方が違つてゐるばかりでなく、譜そのものさへ少しづつ違つてゐるのを、母に相談したり、自分で考へたりして、新たに自分で譜表を考案して書直すことに、興味を

持ち始めたりした。當事、私が少年時代から長年苦勞して身に覺えた藝と言へばそれより外にはなく、從つて唯それに依つての外衣食する道を知らなかつたところの？　小說はおろか、飜譯にしても、お伽話にしても一向賣れないにつけて、或日のこと、私はとある古本屋の店先で、西洋音譜でならば、長唄には悉く相當に完全な譜が出來てゐるのを發見して、なけなしの金でそれ等を集められるだけ集めて來て、毎日せつせとそれ等を私自身の發明にかゝる譜に改めては、微笑しながら、何と向ふ見ずな話ではあるが、私はそれならば、私自身の名の小說や、飜譯や、お伽話は駄目だらうが、或ひは本屋に買つてもらへるかも知れない、と眞面目に考へたものであつた。だが、所詮、この世に對しては唯考へ、思案し、躊躇し、溜息をつき、そして輕蔑する外に何の手出しもすることの出來ない私は、實は長唄の譜本も半途で止めて、毎日毎日の手持無沙汰に、この世にも自分にも愛想を盡かしながら、先にも言つた、胴が長唄、棹が義太夫、そしてひよつとすると糸は淸元のかも知れないところの、鵺のやうな三味線を朝夕撫でたり、鳴らしたり、手に取上げたりして慈しみながら、あゝ、どうぞどんな小さなぼろ借家でもいゝから、一軒借りて、日曜土曜の外にでも、誰に遠慮もしないで、この三味線が彈けるやうになつたら、といふことがその時分の私の唯一の願であつた。今、私は望み通り、ぼろ借家ながら一軒の家を持ち、三味線だつて、そんな長唄と義太夫との合の子の、片輪のものではなく、藝者であつた私の女房が持つて來た、三挺の完全な三味線を借りることも出來るのである、遠慮しながら母に教はらなくとも、大威張りで女房から習ふことも出來るのである、そして今更「瓢簞ばかりが浮き物か」や、さては「春雨」とか、「梅にも春」とかの、端唄の譜本をこしらへなくても、西洋音譜の長唄を研究しなくても、どうにか斯うにか、私には唯一の藝であるところの、小說やお伽話で衣食も出來るのである、されば、言ふ迄もなく、その合間々々には、日曜月曜の遠慮もなく、國に葬式でもある外は、勝手氣儘に三味線を鳴してもいゝのである。それが、何と、私は今は最早や

する氣がしないのである。今の私には母や、女房や、女中や、從弟の中學生や、すべて私の家の中に住んでゐる、私以外の人間が、丁度下宿屋での隣室の客のやうな氣がして、妙に氣が引けて、彼等の思惑なども考へられて、土曜日でも日曜日でも、一向氣持が開放されないのであつた。だから、辛うじて一日のうち、母と女房とが外の錢湯に行つてゐる一時間ほどの間に、女中と中學生とに外出の用事を言ひ付けて、そしてやつと三味線を取出す位の狀態である、だから、三味線を持つてでも、私は頻りに昔の下宿屋に歸りたい氣がしてならぬのである。

私が下宿住居をしてゐる頃――と言つても、私の下宿生活の最後の一年間といふものは、決して獨立した、一人前のそれではなかつたのだ、と言ふのは、私は每月每月定額の下宿料の半分位の收入しかなかつたので、大低二ケ月目位には、僅かな荷物や何かは置いてきぼりにして、そこを無斷で遁走しなければならなかつた、そして、その度每に、私は例の三味線だけを、始めて道玄阪の古道具屋から買つて持つて來た時のやうな體裁で、それを幾つにか解體して新聞紙包にして、こつそりと持つて逃げ逃げしたのであるが、今言ふ最後の一年には、最早やさういふ融通さへきかなくなつたので、或時は私と殆ど同程度位の貧乏な友達の下宿に轉がり込んだり、(金持の友達は誰もそんな私を置いてくれなくて、不思議なことには、却つて貧乏な友達が私を助けてくれたのであつた、)或時は又四十幾歲かになる、これ又貧乏で、每日新聞の職業案內を見て口を探してゐた、從兄の下宿に居候したりしてゐたのであつた。だから私は、遠慮の爲に、三度の食事は、あゝ、今朝は腹が妙に張つてゐて食ひたくないよとか、今日はどうも腹の具合が悪いからとか言つては、辭退しなければならなかつたし、或る時は又餘りむつつりした顏をして、坐り込んだり寢轉んだりばかりしてゐると、主人公の氣分を害するかと遠慮しては、用もないのに的もなく外に散步に出なければならなかつたし、元より好きなお菓子は主人公に客か何かが來た時の外は食べられなかつたし、そこらにある古雜誌といふ古雜誌は悉く讀み盡して、

而もいつも借りて來ては賣り飛すものだから、最早や誰のところへも借りに行けないし、貸本屋は保証金を置かなければ貸してくれないし、あゝ、神よ、せめて一日でも二日でも、自分一人で占領し得る部屋を持つて、一二冊の小説本と、二三冊の新刊雜誌を枕元にならべて、尚その上の願には、金つばか栗饅頭かを枕元に供へて、樂々と寢床の上に身を横たへることが出來たなら、神よ、それも私には許されない、過ぎたる贅澤でありませうか？ と、實際私は、せめて三日が二日でも、主人公に氣兼ねして的もなく外出したり、或ひは今日も亦唯侮辱の外には何れも報いられない定つて居る金策に、そわ〱と落着かぬ心持で外出したりすることから救はれて、一日樂々と自分の部屋を樂みながら、寢ころんで、讀書と空想とに耽りたい、とどんなに願つたことであらう。

今、その望は形に於いては私に許されたやうに見える、併しそれは心に於いては失はれたやうに見えるのである。實際、心の貧きものは福なり、と聖書にも書いてある通りである、あゝ、大神の攝理の公正さよ！ 今、私は三年前の下宿での望を、形に於いて遂げたのに、私の心は落着くどころか、三年前には夢にも知らなかつたところの、何といふのか、息詰まるやうな重苦しさ、追立てられるやうな苛々しさ、老人の皮膚のやうな乾燥さ、白湯のやうな味氣なさを、この平安なるべき私の部屋の中に感じるのである。そして私はしば〱私の部屋の私の身の廻りを見廻しては、間斷なく溜息をつき、舌皷を打ち、無暗に煙草をすひ、茶を飲んで、一體私が何を失つたのであるか、と思ひめぐらすのである。……さうだ、私はこの世に於いて、何よりも最も大事なものを失つて居たのであつた、私は夢を失つてゐたのであつた。

私は、或日は、朝起きると直に、時には午後になつてから、又別の日は日の暮れる少し前に、或ひはもう夜が大分更くなつてからでも、私はふと何ものかに追ひ立てられるやうに、或ひは又何ものかを探し求めに行くやうに、誠にあわ

たゞしく、的もなく我家を出るのである。私の家から町に出る爲には可成り長い道程を踏んで、公園を斜めに横切らなければならかなつた。それは元より馴れた道のことであるから、すつかりもう夜になつて居るのに、何の遠慮もなく、數人が締め殺されでもして叫ぶやうな、鋭い聲で西洋の歌をうたつて居るところの、硝子窓のふるへる音樂學校も、或ひは道を通る、スケッチ箱を片手にした、長髪の美術學生の群も、さては晴れた日曜日には、辞良な會社員の夫と、彼の貞淑な細君とが、兩方から十歳の子供の手を引張り合つて、動物園の門をくゞる光景も、私には最早や何の感興もないのである。近頃は又、來る春に開かれる大博覽會の建物の工事が、私の行く道の兩側の、彼方にも此方にも始まつて、昨日はまだ蟋蟀の籠のやうだつたものが、今日はもう悉く板壁が出來て居たり、行きには新しい板や古い板やを張つた、豚小屋の壁のやうなものであつたのに、歸りにはそれがすつかり桃色の化粧をして居たり、材木や砂利を積んだ車を、馬が首を前に突き出して、足を棒のやうにして引張つて居たり、手拭で頬被りをして、印判纒を着た運轉手の乘つて居る、貨物自動車が地響をさせて通つたり、一日一日と盛んな光景を現出してゐるが、それ等も亦、一向私の興味を呼ばぬのである。

しかし、或夕方、それは日の暮れる少し前のことであつたが、私はいつもの道を、動物園の前を通つて、精養軒の横手を、一直線に山下に出る大道に出て、何氣なくふと右手を見た時、――諸君はあそこの景色を知つて居られるか？――と言つて、實はそれは何でもないところで、それは精養軒の横から山下まで、ずつと櫻の木が一面に植はつた堤になつてゐるのであるが、唯一と所、精養軒の直横手のところで、不忍池の畔に下りる阪道がある爲に、そこだけ、櫻の列が切れてゐて、從つてその僅な間から下の不忍池のある低地から、彼方の本郷の高臺までちらりと見通せるやうになつて居る、私はその方を見て、はつとして立止まつたのである、といふのは、どうした譯であらう？　その櫻の木の切

れ目に、夕空を背景にして、遥かに本郷の高臺が眺められ、その下に不忍池が鉛色に、水面だけを微かに白く光らせて、實に大きな湖水のやうに見えるのである。おや！　こんなに不忍池は大きかつたか知ら？　と思つて、私は實際驚いて、目を見張りながら立止まつたのである、それは私の立つて居る公園の、即ち高臺の直に足下から、遥に遠くの本郷の臺の下まで、もつとも時刻が丁度物を微かに、大きく見せるかも知れない誰彼時のことでもあるが、何と私の愛する信濃の國の山の中の、湖水ほどにも大きく見えるのである、だが、こんな風にはつきりと、本郷の臺とか、不忍池の低地とかと書くと、私のその時の感じとは別々になつてしまふし、又聞く人々も嘘のやうに思へるかも知れない、兎に角、私は驚いて、目を見張つて、その間少なくとも一分間は立止まつたのである。しかし、私は漸く私の目のあやまりであることを發見しなければならなかつた。それは、やつぱり此頃工事を急いでゐるところの、精養軒の下の、そして不忍池の畔になるところに、建築中の博覧會の建物の一つがあつて、私が櫻の木の切れ目の間から、大きな湖水のやうに見たのは、それの蒲鉾型の、鼠色に塗られた屋根の一部であつたのだ、即ち不忍池はその向側にある譯で、その屋根がその池をも、その周圍の低地をも私の目から遮つて、辛うじて、彼方の本郷の高臺をそれの上に載せて居たのであつた。何の事だ！　とそれを知ると、私は少し馬鹿々々しくなつたが、直に私はもう一度先のやうに、それを湖水のやうに感じて見たいと思ひ返した。だが、一旦屋根と知つてからは、もうどうしても、わざと目を細めても、二三歩後に引返して改めて歩いて見たり、先の所より少し遠い所に離れて見たり、近くに進んで見たりしたが、最早や何としても屋根の外のものには見えなかつた。

だが、その翌日からは、私はその時刻になると、何は取敢ず、帽子を被り、ステッキを振つて、最も愛する者に會ひにでも行くやうに勇んで、私の部屋を出かけるのを常とした。そして、これは私の何の誇張でもないのであつて、實

際、私の道が精養軒の前の櫻の並木の通にかゝると、胸の動悸が微かに打ち始めるのを私は感じた。私の目は精養軒の角を曲ると共に、その向ふ側の、木の枝の網の疎らなところに、吸ひ寄せられたやうに、瞳を凝らしながら、一歩一歩と私の足の進むに從つて、それ等の木の枝の網が一層疎らになつて、終には段々とそこに空間が占領して來るのを、それが丁度池畔に下りる阪の上に當るところを、油斷なく見詰めるのである。その時 私はわざと目を閉ぢるか、でなければ道の反對の側を見ながらか、尙二三間歩いたと思ふところで、私は強ひて突然に「頭右！」にするのである。と果して、そこからは最早やはつきりと、木の枝の兩側に、或間隔をとつて、西空を見渡す空間を展開して居る。そしてその空を背景に遙か本郷の高臺が見えて、その下には夢のやうに、鼠色の湖水が廣がつて見えるのである、あゝ、確に山國の大きな湖水のやうに……。けれども、私がその幻影を樂む時間は、始めての日の半分にも、或ひは三分の一にも及ばなかつた、が、やつぱり時間にして十五秒や二十秒はあつたらうか、(そして十五秒、二十秒は、その時の私にとつて、短いと言へば元より餘りに短いが、然し又、相當に長いとも思はれるのである、)忽ち夢は破れて、それは工事中の博覽會の何々館の、蒲鉾型の屋根として私の目に現れるのであつた。午後、私はしば〳〵來客に接して居ることがあつたが、夕方のその頃になると、私は何とか彼とか用事をかまへては、客を連れて家を出ることにした、そして私は或時は友人であつたり、又別の時は唯の知人であつたりする客と共に、同じこの景色に接することがある。その時、私は私が一瞬間その建物の屋根を山の湖水と見て樂んで、その幻影が破れた後、一緒に歩いて居る客に向つて、「君、あそこを御覽なさい！」と言ふのが常であつた。「そら、池が今日は實に大きく見えるでせう？」と言つて、この建物の屋根を指さして見せると、どの人でも必ず一度は「なる程、なる程」と感嘆するのが常であつた。「どうしたんでせう、實に大きいですな。」「大きく見えるでせう。が、實はあれは池ではなくて、博覽會の建物の屋根なんですよ」と私が說明する

のと相手がそれに氣がつくのと、いつの時でも殆ど同時位であつた。そして彼等は異口同音に、「面白いですな。まつたくちらと見た時は、大きな湖水か何かのやうに見えますね、」と誰しも口を極めて感嘆するのである。それに依つても分る通り、これは決して私一人の、獨りよがりではないのである。さうだ、心なき人々でさへ、唯目前の、その一時欺かれる景色に感嘆するのである、まして、それに似る、遠い信州の山國の湖水に思出を持つてゐる私として、そんなにもこの景色を樂しむのは、何の無理からぬ次第なのであつた。

その精養軒の横手の、だら〱とした阪道を不忍の池の畔に下りて、少し後戻りしたところの邊に、東臺館といふ粗末な、一箇の西洋造りの建物があつた。マツチ箱を幾つも積み重ねたやうな、もう所々剝げ落ちた、鼠色になつたセメント塗りのその建物は、四階造りになつてゐて、それは外から見た窓の數の倍程の部屋を持つてゐて、その一つ一つを學生とか、獨身者の勤人とか、夫婦二人切りの家族とかに貸す爲のものなのである。いつも滿員で容易に明き間のある時に行合はすことがないので、私は四五ケ月前に名札を置いて申込んで、若しも明き間が出來て、そして私の申込順が廻つて來たら、通知してくれるようにと賴んでおいた事があつた。その時は、私は唯何といふことなしの物好きから、それに又、自分の家族の者の笑つたり話したりする聲の聞えるところでは、私のやうな性質の、そして私のやうな職業のものには、どうも落着いて勉强が出來ないといふ理由から、兎に角、何かなしにその部屋の一つを申込んでおいたのであつた。ところが、その頃、私に是非その部屋の一つを借りたい、もう一つの理由が起つたのであつた。それは私に隱れて會ひたい女が一人出來たのであつた。人も知る如く、この大きな東京の市內と言はず、近郊と言はず、至る所に數千軒數萬軒の、さういふ隱れて會ふ男女の爲の宿屋とか、料亭とかゞあることは私も知つてゐる。けれども私の性分として、門を這入ると定り切つた恰好の植込があつて、幾つかに曲つて玄關に通じる飛石があつて、「入らつしやいま

せし」と、日に何人となくさういふ客に接してゐる篩に、その度毎に迂散さうな目付で挨拶する女中があつて、……それ等のものは、實際一日に何人となくさういふ客を迎へて、その前からは妙に不自然な、職業的な態度で、目を反らすやうにして、その後からは警官のやうにぢろ〳〵と注目して、蔭では色々な取沙汰をして、そのうちに又他の客を迎へて又注意し、又忘れ……要するに、生きてゐる彼女等も亦、門や、植込や、飛石と大した變りがある譯ではないのだから、何の遠慮をすることも入らぬのではあるが、それが私にはどうあつても堪えられぬことなのである。恐らく私に死ぬ程好きな女があつても、彼女が私にさういふ種類の家に一緒に行つてくれるなら、あなたの言ふことを聞きませうと答へることに依つて、それで彼女は私を振ることが出來るに違ひない、私はたとへマリアとでも、ビアトリイチエとでも、グレエトヘンとでも、あの門ばかりはくゞる氣がしないのである。

さて、私の相手の女といふのは、誠に平凡な、だが、不思議と言へば不思議な女であつた。彼女は或る繁昌な、場末の、鐵道の踏切の傍の、煙草屋の看板娘であつた。何故私がそんな大勢の人目につく煙草屋の娘などと、さういふ仲になつたかと言ふことに就いては、詳しい話は枝道になるのと、長くなるのとで省くとして、始め私はこの女が、つい此間まで人の妾をしてゐたといふことを聞いてゐた。だが私には、彼女が妾であらうが、穢多であらうが、或ひは何かの化物であらうが、何の問ふところではなかつた、といふよりも、何方かと言ふと、寧ろ彼女が一應は世の中に輕く擦れてゐる方が、何等かの交渉が起つた時に、私の肩が樂に違ひないとさへ考へた程であつた。そして又、實際、彼女は始め私が少しばかり觀察したところに依ると、中々しつかりした、中々物分りのよい女のやうに思はれた、然し、それ等の何にもまして、最も私の心を引いたのは、彼女の容貌が、あの山國の湖水のほとりの小さな町の、藝者のゆめ子に似てゐるからであつた。恐らくこの塵の東京のまん中の、不忍池が又しても又しても山の湖水に見えるやうに、私には私

の目に觸れる女といふ女が、悉くとは言へない迄も、屢々あの山の女に似て見えてならぬのである。宵には、どうしてこんなによく似た女が二人あるのだらうとまで思へた一夜妻が、明くる朝見ると、その女の何處が彼女に似て見えたのであらう、と私は嘘でなく自分と自分の身を抓つて見て、頭をひねつたことも一度ならずあつた。或日私が友達と町を歩いてゐた時、一間程の距離を置いて行違つた男女の一組のその女の方が、――さういふ商賣の女のくせに、年に少し辨があるからでもあらうが、引詰め加減の束髮に結んで、田舍の女のことであるから、年より地味な大島の着物を襟を詰めて着てゐると、私はさういふ裝をした彼女を唯の一度しか見ないのだが、千度も見たやうにはつきりと覺えてゐることに、堅氣といふよりは尙一層堅氣に見える女であつた、――その女の方が、さういふ裝をした彼女そつくりなのである。適度に痩せてゐる、少しばかり脊の高い、俯向き加減の樣子さへ、私が寢た間も忘れることの出來ない彼女の面影そのまゝなのである。それなのに、彼女と並んで歩いてゐる連の、何と脊が低くて、箱のやうに太つてゐて、丈の短い着物の裾から、棒のやうな二本の足を出してゐる、不樣な恰好の男だらう、だが、彼女が男と歩く時には、屹度あゝであらうと思へるやうに、その男女は一尺程の間隔を置いて、並んで、殆ど會話しないで歩いてゐるやうに見えるのである。私は一緒に歩いてゐる友達に氣兼しながら、振り返り振り返り、見れば見る程彼女に似てゐるやうに思はれるので、「君、ちよつと、君、ちよつと、ちよつと待つてくれないか、ちよつと……」と彼に夢中で言つて、私はその男女の後を追つたことがあつた。私は幸にもその男女の姿を見失はなかつたが、しかし、どうしてもその前に廻つて、正面から彼女に打突かる勇氣が出なかつた、私の心の中では、それが似た人ではなくて、本當の彼女であるのを見出すのは恐いし、と言つて、どうもやつぱり彼女である筈がない、いつもこんな風に似た姿を見かけて、そして失望してゐるのである通り、今日もそれを繰り返すのであらうと思ふと、似た人である、ひよつとしたら彼女ではないかと想像してゐる

うちが花であると思へるのであつた。だが、到頭その一對はとある煎餅屋の前で、買物する爲に立止まつたのであつた。私は探偵と泥坊との心を二つ一人で兼ねたやうな氣持で、そこから五六間も手前のところで、あわてゝとある軒かげに身をひそめて、彼方を窺つたのである、幸に女の方が私に近い側で、その橫顔が見られた、そしてやつぱりどうやら私の思ひ違ひのやうに見えたのであるが、然し未だどうも似てゐるやうに思はれてならぬので、少しづゝ勇氣を出して近づいて行つた、段々人違ひであるといふことが確められて來ると、段々安心して私は近づいて行つたのであつた。そして言ふ迄もなくそれは人違ひだつたのであつた。――私と煙草屋の娘とのいきさつも丁度これに似てゐた、その娘を手に入れる迄の熱心さは、あの山の湖水の町にゐるところの、私の戀してゐる女に似た女を町で見かけて、若しやと思つてその後を附ける時の熱心さに比べる事が出來るであらう、そして、丁度それと同じやうに、後附けて行つた女が、似てゐるだけで、彼女そのものでないことが段々分つて來た時の、失望さと、そして此處まで來たからにはもう少し進行してやれと言ふ、やけに似た勇氣が又、その煙草屋の娘と段々近附いて、親しくなつて來た頃の氣持そのまゝであつた。推して、私が到頭その娘を自分の者とした時の氣持は、くり返して話さなくても、諸君の想像は間違はぬであらう。……

私はその娘を得て、心に甚だ迷惑しながらも、早速彼女から逃出す譯にも行かなかつた、彼女を後附けた熱心さに對しても、それの反動としてゞも、人は誰でもそんなにはつきりと一刀兩斷の處分を取れないものに違ひない。私は、そこで、彼女と共に、先に言つたやうな東京附近の、植込や飛石を持つた家の門をくゞれないものだから、一生懸命に夫婦のやうな體裁に構へて、出來るだけ離れた土地の山や海岸に出かけた、だが、彼女と並んで、夫婦の顔をして、知らぬ土地の宿屋の門をくゞるのも、結局私の閉口する氣持は緩和されないことを知らねばならなかつた、だから、私はた

つた二度しか、彼女とそんな風にして旅に出かけたことだつてないのである。更に私の打撃だつたことは、嘗に聞いた時は　それ迄人の妾をしてゐたといふ彼女が、たとへそれが嘘でないとしても、餘りに小娘のやうに初心なことであつた、考へて見るのに、恐らく彼女は妾などしてゐたものではないに違ひないのである。が、又、母一人娘一人の境涯として育つて來ただけに、隨分世故に長けた智慧を持つてゐることも實際であつた。そしてもう一つ私に打撃だつたことには、いつの間にか彼女は私とのことを母親に打明けてしまつたので、而も母親が彼女と私との仲を認めたと見えて、彼女の身體が餘りに自由で、彼女が餘りに私の思ふまゝになることであつた。彼女が思ひの外に餘りに初心なことや、そして彼女が餘りに私の思ふまゝになることが、それが私の心持に打撃であるといふことは、私自身にも一應は不思議でならないのであるが、それが實際、本當のことなのであつた。

だが、私は全く逃げることも出來ないのであつた。そして娘は頻りに私に會ひたいと言つて來るのであつた、それも無理はないので、私と彼女とはたつた二度、夫婦の樣に旅をした時の外、私たちは會ふ機會を持たないのである、彼女はその内少し暇になつたら、又何處かへ旅行でもしようと一寸逃れの手紙を出す私に、いゝえ、わざ／＼お金を使つて旅になど行かないで、母もさう申して居ります、どうか遠慮なく私の家に入らしつて下さいませ、と折返して言つて來るのである。私としては、たまに彼女に會ひたいと思ふこともないではないが、一見それしや上りのやうな恰好をした、それは彼女にいくら聞いても、父の名を現さないところを見ると、彼女といふ私生兒を生んだに違ひないところの彼女の母親の監視のもとに、あの人通りの多い踏切の傍の、煙草屋の軒をくゞることは、私の最も嫌ひな郊外の連込宿に行く程に、甚だ氣がすゝまないことであつた。でも、それをも強ひて斷るといふことが出來ないまゝに、私は、此頃はどうしても忙しくて身體に暇がないとか、もう一二週間したらとか、突然用事の旅に出なければならなくなつたので

とか言つては、一日一日とその日を延ばしてゐた折柄であつた。その時、思ひがけなく、先に何氣なく、殆ど氣まぐれに申込んでおいた東臺館の事務所からとして、明き間が出來たことを知らして來たのであつた。思ひがけなく、とは言つたが、實はその一二週間前から、彼女から會ひたいと申出て來て、それを逃れ逃れしながら、氣に掛つてゐたものだから、ふと東臺館に二三度出かけて、いつか、ずつと前から申込んであるのだが、明き間の私の順番は來ませんか、忘れてゐるのではないか、と事務所の六十歳近い老人に尋ねると、そんな筈はありません、申込んであるのなら、帳簿に載つてゐる筈ですから、と言つて調べてくれたところに依ると、間違ひなく私の名前と私の住所とは載つてゐて、而ももう少しで順番が廻つて來さうに見えたのであつた。が、老人は眼鏡越しに帳面と私の顏とを交る交る見ながら、こゝは容易に明かないところで、甚しい時は三ケ月に一室も明くことがない時もある、が、兎に角、廻つて來さへしたら、受附けてある順に依つて通知するから、との答であつた。私はもう二三人目が私の番であるのをそれで知つたものだから、その後、彼女の手紙を見るにつけて、思ひ出しては通り掛りに二度ばかりも同じ事務所を尋ねたのであるが、その度毎に帳面の順番は少しも進行してゐなかつたので、又殆ど斷念して、大方忘れてゐたのであつた。

　私は東臺館事務所といふ判を捺した、明き間通知の葉書を受取ると、それが女房の目に附きはしなかつたかと恐れながら、それを懷にして早速家を出たのであつた。私は私の親愛なる、通り馴れた道を、動物園の前を通つて、精養軒の角を、山下に通ずる大道に出たところで、それが又丁度夕方に近い時分のことで、途々私は私の爲に明けてくれた部屋に就いて、その部屋の樣子や、それを借りてからどうしよう、あゝしようと言ふことやを樂しく空想しながら、然しいつか道が精養軒の前に來掛つた時、忽ち私の思想は一變せざるを得ないのであつた。言ふ迄もなくそれは精養軒の横手の、櫻の木の枝の網が段々まばらになつて來て、その邊の空に擴がつて見えるところの、假想の大きな湖水の眺めに就

いて、忽ちその眺めに似た遠い山國の湖水に就いて、忽ちその湖水のほとりの町に就いて、即ちその町に住んでゐる私の最早や五年越しに戀してゐる女に就いて、私は胸に動悸を感じながら思出すのであつた。藝者をしてゐる彼女が、藝者といふ言葉から世間の人々が想像するどんな惡い型をも、從つてどんな彼女等に共通して見られる惡い心持も持つてゐない彼女は、そして又その町の藝者の中で最も品行の正しいに違ひない彼女は、それでゐて最早や四歳になる父なし子を抱えながら、噂に聞けば、今又腹に子を持つて七八ケ月になるといふ彼女は、因業な養母に苛められて、そんな大きなお腹をしながら、未だ客の座敷に出てゐるであらうか、それとも最早や稼業を止めて、暗い陰氣な家の茶の間の炬燵にあたりながら、生れて來る子の着物でも縫うてゐるであらうか、或ひは默つて、彼女の癖で、斜めに俯向いて、何か考へ事でもしてゐるであらうか……。その時、忽ち精養軒と櫻の木の列とが段々空き間を持つて來る間に、遙か本郷の高臺の下まで浸してゐる、大きな鼠色の湖水の景色が見えて、そして一分間の半分と經たないうちに、それが湖水でも、或ひは池でもなくて、建ちかゝつてゐる博覽會の建物の蒲鉾型の屋根であることが、私の目に曝露されるのであつた。私はちよつとの間、怒つたやうにその場に立ち縮んだ、そして欺かれた建物の方を眺めた、が、あきらめて、今日はいつものやうに山下の方へ向はないで、その精養軒の隣の阪道を下りて行つた。見ると、その蒲鉾型の屋根だけは、もう隨分前から出來上つてゐるやうに見えるにも拘らず、屋根の下の建物は、まだその外側に垣のやうに足場がこしらへてあつて、その壁の心になるらしい簾のやうなものが、所々四角な窓の部分を殘して、一面に張り廻されてあるのだつた。目指す東寧館はその建物を左に見て、半町と行かないところにあつた。

　まるで穴倉のそれのやうな入口を這入つて、一二間行つた突當りの左手の、丁度小學校の小使部屋のやうな恰好をした三疊の間の事務所の障子が、半分開いてゐて、中に例の老人がアルミニユームの辨當で、アルミニユームの箸をがちや

〳〵言はせながら、最後の飯の殘り粒を食つてゐるところへ、私は顏を出した。「や、御飯ですか、」と私は馴染のつもりで聲をかけたが、彼はもうそれで四度目に會ふのに、私の顏を忘れてゐるらしいので、私は今し方受取つた藥書を見せて、その部屋を見せてくれないかと言ふと、老人は食ひ終つた辨當箱を新聞紙で包みながら、「四階ですよ、かまひませんか、」と言つた。「結構です、」と私が答へると、「それに四疊半一間切りですよ、かまひませんか、」と老人は又言つた。私は一寸目をぱちくりさしてから、しかしもう一度「結構です、」と答へた。「そしてその內、外のが明いたら變へてくれるでせう？」と言ふと、「承知しました、」と老人は答へて、そして私を案內する爲に立上つた。「無論、その部屋だつて、水道と瓦斯とは附いてゐるんでせう？」と私が聞くと、「押入の中に附いて居ります、」と老人は答へた。そして私たちは下駄穿きのまゝでがたごとと階段を上つて行つた。成る程、何處の斯ういふ階段の上り口にでも、必ず、下駄のまゝで上るべからずと書いてあるのは故のあることで、私はその東霧館の階段を上りながら、自分と自分の足音の不調和に驚きながら、幾度も先に立つて歩いて行く老人の後から、「下駄のまゝで歩いてもかまはないんですか？」と正した程であつた。その階段を二階に上り切つたところで、私たちはその階段の部分だけ廊下を後戾りして同じ方向に、下の階段と並行してゐる三階への階段を上り、又同じやうにして、並行に四階へ通じてゐる階段を上つた。途々、老人は、四階は悉く一間切りの部屋であるが、二階三階は皆、八疊に四疊半とか、六疊に三疊とか言つた風に、それ〳〵二間になつてゐる、だから、四階は夫婦には狹過ぎるなどと言つた。私がこの前から彼を訪ねる每に、家はすぐ近くなのだが、騷々しいものだから、自分だけこゝを借りて、勉强室にしたいと話した事など、彼は全然忘れてゐたらしいのである。で、もう一度繰返しその事を話すと、彼は始めて聞いたやうに、「それなら階段が少し大變だが四階で十分でせう。御飯などどうするつもりです、家に食べにお歸りになりますか、それとも辨當でも入れさせますか？」と言つた。「さあ、どうしよう

かな?」と私は言つた。氣が附くと、どの部屋にも扉の直横手に、役所の受附口のやうな小窓が附いてゐて、それ等がみな目を開いだやうに木の戸を閉められてあつた、而もその小窓の外側には、窓の幅だけの小さな棚が附いてゐる、「あれは何ですか?」と老人に尋ねると、「あれですか、あれは差入口です。つまり郵便を受けたり、御用聞から物を受取つたり、又辨當を取つてゐる人に　辨當屋があそこの棚に辨當を置いて行つたりする所です、」と彼は答へた。

さて、四階の私の部屋がせめて私に氣に入つたことは、それが階段から一番遠い、奥の隅にあつた事であつた。これ迄の説明に依つて、略々諸君はこの建物の内部の模様を想像されたことと思ふが、それは一口に言ふと、最も舊式な和洋折衷の病院の建物に似てゐた。が、どんな舊式な病院の内部の方でもが、こゝよりはもつと光線に富んでゐるといふことが言へるであらう、そしてこゝには、そんな薄暗い階段の上り下りの口にも、廊下にも何の電燈も點つてゐないので、いきなり外から這入つて來たのでは、目が暗さに馴れる迄は歩くのさへ困難を感じる程であつた。ところで、私の部屋の入口の、多分ペンキ塗りらしい扉を開いて、老人に導かれてその中に這入つた時、更に私が驚いた事には、その部屋の中は、外の何の明取りもない廊下よりも少し明るいかと思へる程、やつぱり薄暗いことであつた、もつともそれはもう夜になる少し前の夕方だからでもあつたらう。扉と反對の、突當りの位置に、學校の教室のやうな、硝子障子の窓がついてゐるのであつたが、その窓の外には、多分隣家の窓とくつ附いて向ひ合つてでもゐるのだらうか、五寸程の幅の張出し椽が附いてゐて、その端に仕切りの板塀が立つてゐるので、外からの光線は間接にしか這入つて來ないのであつた、のみならず、それは甚だ不體裁なものでもあつた。さて、その左手には半間の高さの壁の上に、一間の幅さの、横に細長い押入が附いてゐて、その戸が唐紙の代りに、二枚の木の戸になつてゐるので、部屋の中の體裁を一層不好恰なものにしてゐた。「こゝに水道が」と言つて、老人はその押入の左側の戸を開いて見せ、「瓦斯は此方側、」と言つて

左側の戸を開けて見せた、首を突込んで見ると、水道栓のある方は亞鉛を張つた流し元の仕掛けになつてゐて、瓦斯の方は臺所のやうな板の間になつてゐるのである。そして、それと向ひ合つた側には、普通の唐紙の篏まつた、つまり蒲團や着物を入れる押入があつた、そして、その外には床の間も、違ひ棚も、何にもない、唯一面に汚れた白壁ばかりであつた、が、それも多分、見かけは木造の西洋館で、中に這入ると、殺風景な疊敷きの部屋になつてゐるところの、よくある病院の一室を諸君は想像することに依つて、その部屋の光景を頭に畫くことが出來るであらう。ところが、唯一つ、その部屋に風變りなものが一つあつた、それは床屋のそれのやうな、白い紙を張つた眞四角な四疊半の天井のまん中に、三尺四方ほどに切つてある四角な天窓であつた。それは屋根と天井の深さだけ、即ち一間ほど、四角な漏斗を倒まに置いた形で、上に至るほど細くなつて、結局尖端に一尺四方ばかりの硝子が篏まつてゐるのだつた。（中略）

「これや面白いな、これやふるつてるな！」と私は子供が珍しい玩具を見た時のやうに、譯もなしに喜びの聲を擧げながら、その明り取の窓の下に突つ立つて、その望遠鏡のやうな、高い硝子窓を見上げて叫んだ。

「どうです、この部屋でいゝですか？」と老人は私のそんな感動などには無頓着に、「もう日が暮れたから何ですが、晝間だと、この窓がありますから、相當に明るいですよ。」

「兎に角、この部屋を借りることにしませう。」と私は、そこで、言つたのであつた。

私は元の事務所に歸つて、相當な手附の金を預けて、「明日か明後日から來ます。」と言ひ殘して、東臺館を出た、その時は町はもうすつかり夜の景色になつてゐた。それから、私は數町の間、無意識で町を歩いた。實際、人が喜びの心持を形容するのに、足が地につかぬといふ言葉は嘘ではない。私は、始めて戀する人から戀の受納の手紙を貰つた時などはこんなでもあらうかと思へる程、何故そんな四階の、見すぼらしい部屋を借りることになつたといふ事が、それ程私

に嬉しいのであらう？　私は數町の間、大地が海綿になつたのかと思へるやうな足取りで、道の左右に、夜になつたにも拘らず、がたん〳〵と音さして工事を急いでゐる博覽會の建物にも、忙しさうに歩いてゐる往來の人々にも、殆ど全く無關心の狀態で、その不思議な部屋にどんな風に住まうか、といふ考で一ぱいになつて歩いた。少しづゝ心持が落着いて來て、いろ〳〵と考が纏まつて來ると、先づ第一に、私はその部屋に就いて、私の家の者に、つまり私や母や女房やにどんな風に辯解したものだらうと心配になつて來た。私のやうな職業のものであるから、その職業の爲に、靜かに、人を避けて、勉强したいから、と言へば、それだけで彼等に對して立派に理由になるには相違なかつた。そして私も道を歩きながら、一應はさうしようと考へた。が、直私はそれではいけないと考へたのであつた。家の者にそれを知らしては、いつ何時、私は彼等の來訪を受けなければならないか知れない、それをまで彼等に差止める譯には行かないのである。若し私が、あの煙草屋の娘とその部屋で會つてゐる時などは、突然家の者に來られては、どんなに狼狽しなければならないだらう。……だから、私は又別の方法を考へなければならなかつた。それには、又、私が每日の私の時間をそこで送る爲には、机とか、本箱とか、本とか、茶の道具とか、殊に又、私のやうに、たとへそこでは夜泊ることがないにしても、晝間でも、本を讀んだり、物を考へたり、原稿を書いたりするのに、悉く寢床の中でやりたい癖のあるものには、一組の夜具とか、すべて一人の人間が日常身の廻りに必要とするものを一通り、家の者の手を借らずに集めなければならぬ困難があつた。これはたつた一言女房に話しさへすれば、運搬の費用の外に金が入る譯ではなし、昨日まで私が親んでゐたものをそつくり持つて來ることが出來るのであるが、彼女に打明けないこととなれば、何から何まで買ひ集めなければならないのである、然しそれも仕方がない、と私は考へたのであつた、それからそれと、考へ又考へながら、私は、實際夢の中での出來事のやうに、行きつけのカフエーに寄らうとか、友達の家を尋ねようとか言ふことを少

しも頭の中に浮べないで、唯ふら〳〵と町を歩いたのであつた。その時、私は不思議なことに、自分がその東亞館の部屋を借りることになつた、最も近頃の原因であるところの、その女とそこで相引しようと豫想したところの、煙草屋の娘の存在に就いては殆ど思出さないことであつた。あの本と、あの本と、あの山の繪と、あの山の寫眞と、あの肖像畫と、あの肖像畫と、などと窃かに自分のこれ迄の部屋にあるもので、そこから持運んで來たいものを數へたり、どんな机を買はう、こんな本箱を求めようと空想したりしてゐるうちに、私はいつの間にかあの遠い山國にゐる、私の戀する女のことを　少年の持つやうなセンチメンタルな心持で考へてゐたのであつた。世にも戀といふものは不思議なものだと私は考へるのである、實際、不思議なものだ、自分の戀する相手を、自分の手に入れたら、自分の自由にすることが出來るやうになつたら、その途端にそれは消滅するものではないか、と私は考へるのである。幸にして、（敢て私は「幸にして」と言ふのである）私の戀する女は、彼女のやうな職業のものであるに拘らず、二人の子の母親でありながら、さて定つた夫といふものを持たず、それでゐて私とは不思議な運命の下に、友達とはなり得ても、所謂戀仲にはなり得ないやうな因緣になり、あまつさへ私たちの間は段々に遠ざからなければならぬことはあつても、近附くやうにならうとは思へない、――さういふ私との關係である、だから、私の彼女を戀する心持は、私の墓まで消えるとは思へないのである。この世の中に何人、私のやうな、斯ういふ戀をした人があらうか？女母なる彼女はこれからの一生を、多分子の愛だけに生きるであらう、私のことなど稀にしか思出さぬであらう、時として又、彼女の因業な養母に勸められて、幾人かの旦那を持つこともあるだらう、だが、それは私の戀に何の關係するものでもない。そんなら、諸君の戀といふのは何だ？　と諸君は呆れて問ふかも知れない。だが、私の思ふところでは、人はよく戀の終は結婚だといふが、戀の終は結婚より未だ手前である。それは戀人たちが接近した時が完全にその終なのである、言ひ換へると、戀といふも

のはこの世に「無きもの」を言ふのである。氣障な言ひ廻しをするやうだが、夢といふ字を私の字引で引くと、夢の別の名だと書いてあるのである。

その翌日一日、私は二三の出版社と雜誌社とに出かけて、幾らかの金を借り集めたり、そしてそれの許す範圍で、机とか、本棚とか、火鉢とか、その他の道具の内で、買へるものは買ひ、又金の都合の悪いものは丸某といふ、月賦でさういふ道具を賣つてくれる店に出かけて調べたり、蒲團は薬蒲團を一枚と、當分は上にかけるのを一枚で辛抱することにして、それを一枚とを、わざわざ日本橋まで買ひに出かけたり、するといつの間にか持つてゐた金を費ひ果たしてしまつたので、又別の雜誌社に借金に廻つたり、そんな風にして日を送つてしまつた。私たちが日常使つてゐる極く粗末な洗面器にしても、茶道具にしても、たとへ手拭一筋にしても、それ等はすべて取るに足らない安物の集りではあるが、今日のやうにいざ一時に集めようとなると、私のやうな所謂「叩き止んだら食ひ止まねばならぬ」流の、生活狀態から言へば一職人に過ぎない、その日稼ぎのものにとつては、中々容易ならぬ費えであることを嘆息しなければならなかつた。だが又、私一流の考を辯護して言へば、私のやうな氣質を持ち、私のやうな物の考へ方をするものにとつて、この世に完全に自分の持物として樂み得るものは、私の「思ふ事」即ち私の夢、即ち私の戀の外に、何一つないのである、現に私が私の家に持つてゐる女房だとて、火鉢だとて、机だとて、蒲團だとで、其等は確に私のものには違ひないのだが、然し決して完全に私のものであるとは思へない。あゝ、これは何といふ舊式なものゝ考へ方であらう、けれども、私の本當はさう考へるので、今私が東京館の四階の、私の秘密の部屋に持運ぶところの、安物の机と雖も、火鉢と雖も蒲團と雖も、それ等は完全に私のものであると言ひ得るに近いものだと考へると、私の喜は金錢には代へ難い思ひがするのである。

そして、その翌日から、私は毎日午後になると、時としては朝起きると直に、東華館の四階の私の部屋に出かけて行つた。これ迄から、さういふ行き場所が定つてゐなかつた時でも、私は勉强する時は大抵旅に出ることにしてゐたし、不斷の日は大抵一日のうちに一度は用があつてもなくても外出するのを日課のやうにしてゐたことだから、さうして毎日家を出かけるのに、家の者に對して何の辯解する必要も持たなかつた。私はいつでも外出する時に、その行先が自分に分つてゐる時ゐない時に拘らず、家の者には何にも言はないのが習慣であつた、そして又私は、先に幾度もくり返した私特別の性分から、たとへ掃除する時でも、家内の者に私の持物になるべく手を觸れさせないようにと言ひ付けてあつたので、私は自分の好きな本とか、好きな畫とか、寫眞とか、さういふ物を內所で東華館の私の部屋に持運ぶのにも何の困難をも感じなかつた。餘程形の大きなものとか、目につくものとかであつても、友達にくれるのだとか、人に貸すのだとか言へば、それでよいのであつた、だから、一週間後には、私のその四階の部屋は、これ迄の私の家の四疊半の私の部屋にあつたものの中の私に重要なものは悉く移轉して飾られてしまつた、留守の私の部屋の三つの本棚と、二つの本箱には、今でもやつぱり本が詰まつてゐるし、壁には山の寫眞の額も掛つてゐる、それ等は悉く換へ玉であるとを私の女房は知る由もないのである。唯一つ、私はこの秘密の移轉の際に、少なからず驚くべきことを發見した、と言ふのは、私はこの前女房に隱れて旅のついでにあの山國に廻つて、そこで私の道樂藝の寫眞に依つて寫して來たその町の景色のみならず、その頃は未だ腹に第二番目の子を持つてゐなかつたので、客の座敷に出て來る事の出來た藝者ゆめ子やの色々の寫眞(その中には彼女と彼女の一番目の子供とを一緒に寫したものもある)を、私は女房に見付けられない爲に本箱の本を入れて奥の方に紙に包んで隱してあつたのが、それが幾ら探しても幾ら探しても、なくなつてゐることであつた。

私はそれから念の爲に、女房の留守の間を窺つて、(私の女房と、その私の戀する女とは、嘗ては明筆の藝者であつた

私はそつと女房の色々な寫眞類をしまつてゐる、箪笥の引出しを調べて見た、その中には以前、未だ私たちの間がそんな三角のもつれた關係にならない時分に、ゆめ子にも、私の女房にも、どちらにも私が未だ單な〻客であつた時分に、そのどちらからも、その折々にもらつた二三枚づゝの寫眞があつて、それが今の私の女房の引出の中に這入つてゐる筈なのである、ところが、それを調べて見たところが、私の女房の方のはそこにあるのに、もう一人の女の方のは三枚あつた三枚とも、やつぱり幾ら探しても見當らぬのである。私は、そこで、始めてはつきりと、私が本箱の奥に隱してあつた、私自身が寫して來たゆめ子の寫眞が、女房にいつの日か發見された事を知つたのであつた、從つて、彼女は私が彼女に内所で、旅のついでに、嘗てはそこで十年も彼女が住んでゐたところ、然し、今は彼女には記憶にあることさへ好なまいところの町に、嘗ては彼女の仲よしの朋輩であつたところの、然し今は彼女の夫を誘惑すると見えるところの女に會ひに行つたことをも、亦同時に悟つたに違ひないのである。私は誰もゐない自分の部屋の中で、尻餅でもついたやうな恰好をして、自分と自分の顔が赤くほてつて行つたまゝ、回復しないやうな氣がした。多分、そんなに過激な性質を持たないところの、長い間この世の波にもまれた末、物事をあきらめる心と、何事にも平安を求める思とに充ちてゐる彼女は、それを發見しながら、發見したことを如何程か悲み、恨みながらも、私にそれを告げないのであらう。そして恐らくはそれ等の寫眞を破り捨てる事も得しないで、何處か、金輪際私の目のつかぬところに、反對に私から隱してしまつたのであらう、萬一そんなこともあるまいが、若しや私がその事を知つて、恥ぢる代りに、反對にあの寫眞を返せ、隱してゐるのだらう、出せ、と叫んだ時の用心に……。然し、無論、私もそんな風には出來ない男なのである。だから、彼女がさういふ寫眞を私が隱してゐるのを發見して、それを默つて隱してしまつたやうに、私も亦發見されたことを知つて、やつぱり默つてゐる外ないのであつた。幸にして、私の寫眞の箱の中にはそれ等の失はれた寫眞の、原

板のフイルムが殘つてゐるのを、私は探し出した。そこで、私はそれ等と共に、寫眞の引伸機械をそつと東京館の四階に運んで行つたのであつた。

その部屋の障子窓は、三尺と離れない外側に、隣家を覗いたり、覗かれたりしない爲に、仕切塀を持つてゐたので、晝間は隨分暗い思をしなければならなかつたが、そこには夜になつても木の戸がなかつたので、部屋の中を寫眞の現像などをする爲に暗室にする時には、それをすつかり蔽ふのは、厚い布切を張らなければならなかつた、もう一つ、例の不思議な天窓にも、硝子の外に戸がないので、大きな布切を張つて、光線を防がねばならなかつた。が、それ等の困難をおかして、私はその部屋を暗室にして、電球を赤いのに代へて、山で寫して來た女の、フイルムの原板のあるだけを紙に燒きつけたり、尙それだけではなくて、引伸機械をまん中に持出して、小さな原板から、壁に向つて任意の大きさに幻燈のやうに大きく寫しては、それをブロマイド紙に燒付けたり、毎晩々々私はさうして彼女の寫眞の原板を引伸しては燒付けることに從事した。そして彼女の寫眞を悉く終ると、今度は彼女の町の景色の寫眞を引伸し、それも終ると、その國の、即ち信濃の國の、私が寫して來た山の寫眞を擴大して壁に映して見た。引伸寫眞の實際を知らない人には、それがどんなことをするのか想像が付かぬかも知れないから、簡單に說明すると、それはつまり幻燈と同じものなのである。だから、引伸機械といふのも幻燈機械と略々同じもので、その機械の幻燈の畫を挾む場所にそれの畫の代りに、寫眞の原板を挾み込むのである、するとその畫が幻燈と同じく、映す者の任意の大きさに、即ち擴大されて壁に映し出されるのである。そこでその壁のところに、ブロマイドといふ寫眞の紙を何分間か張り付けておいて、これを藥で現像すれば、即ち擴大された寫眞を得られる譯なのであるが、私はもう一通り引伸して寫したいと思つてゐたものを悉く寫し終つてしまふと、次の晩からは寫すことは止めて、唯壁に幻燈の功果を樂むことだけにした。だから、私に子供のやう

な心になつて、私の戀する女の寫眞や、私の愛する町の寫眞や、私の好きな山の寫眞を、次々と壁に擴大して映しては、その樂みを何にたとへることが出來よう？　眞の暗の中の部屋で、元より私自身の外に誰が見てゐるものもなく、それどころか誰が私がそんなことをしてゐるかを知つてゐるものもなく、誰が突然這入つて來る恐れもない部屋の中で、完全に私の所有になつてゐる樂みを樂むことが出來るのであつた。晝は又晝で、今は誰に覗かれる恐れもなしに、さういへば私の家の部屋では、何といつても女房や女中やに見られて、批判されたり、賞められたり、或ひは心の中で嗤はれたりする憂ひがあつたのだが、私はその不思議な天窓と、硝子窓から這入つて來る薄暗い部屋の中の、壁といふ壁に日本地圖も張り付けることが出來る、山の女の肖像寫眞を十枚額に入れて掛けることも出來る、彼女の誰が父だかも知らない子の、殆ど實物大に近く引伸した寫眞を、壁の或部分に張付けて、小さな聲で「坊や、坊や」と呼んで見ても、誰に笑はれることもない、又、寫眞にはどんなにしてもうまく寫らないので、或る時そつと汽車の中の化粧室に這入つて、そこの窓を開けて私が寫生して來た甲斐の駒ケ嶽の畫を、小學生徒のやうな丹念さで大きく書き直して、それを額に入れて、柱にかけて樂むことも出來る、昨日は甲の畫を張り付け、今日は乙の寫眞の額をかける。それ等の中に、たつた一つだけ、始めて掛けた時から一度も外のとは變へないで、或る壁の一隅に掛けてある一つの寫眞の額があつた。それは誰が、ペンか、木炭か、毛筆か、何で畫いたとも知れない、一人の女のやうな横顏である、一見して、その畫家が、私の爲に、あの山國の私の戀する女を畫いてくれたとさへ思へる程、彼女の横顏にそつくりなのである。その畫の顏は、甚だしく前の方に傾いてゐる、それさへ彼女が始終俯向き勝で、而も丁度その畫ほどの傾斜で顏を伏せてゐる癖をそつくり現はしてゐると思へるのである、加ふるに、そのしやくれた顏立と言ひ、少しばかり大きな口元といひ、さてはその最も特長であるところの、何事か憂ひあるやうな眼付といひ、それは私がそんなに遠く離れてゐても、朝、目

を醒ました時とか、電車の吊革にぶら下つてゐる時とか、さては夜、寢床に這入つて目を閉いだ時とかに、ふと彼女を思出すと、私の心を掻きむしりさうになる迄、はつきりと私の頭に浮かんで來る彼女の肖像そのまゝなのである、それはさういふ畫を見たので、自然私が思ひ浮かべる彼女の顔がそんな姿態をとつてゐるのでは決してなくて、私が彼女を思ひ浮かべる時の顔に、その畫の姿態がそつくりなのである。不思議なことに、それは日本人を畫いた日本人の畫ではなくて、而も女の顔ではなくて、諸君のうちにも知つてゐる方が隨分あるだらうが、フランシス・トムソンといふ人の『フレンチ、ポートレーツ』といふ本の、第七十何頁だつたかに這入つてゐる寫眞版の挿畫なので、白耳義の詩人フェルナン・セベランといふ人の横顔なのである。私は以前、二十歳の文學青年だつた時、その本を愛讀したことがあつた、(讀み終ると直に賣つてしまつた)が、そんな挿畫に就いても、又その本の中のほんの數行しか占めてゐないセベランといふ詩人の事も、すつかり忘れてゐたのである、所が、二年程前、神田の古本屋で偶然その本を見付けたので、私自身の昔の思出を懷しむ餘りに、何氣なく買つて來たのであるが、その第七十何頁かを開いて、ふとその横顔の畫を發見した時、私は實際、本の頁を開いてゐる自分の手が著しく震へ出した程驚いたのである。全く、それ程、その肖像は彼女に似てゐるのである。私はそんなに彼女によく似てゐる泰西の詩人は、どんな傾向の人であらうかと思つて、その本文を貪るやうに讀んで見たのであつた。今、その本が手元にないので、はつきりと言ふことは出來ないが、何でもこの人は思出の爲に生きてゐるやうな詩人である、絶えず昔の夢が彼の想像を襲うつ、彼は沈默と月とを浴びた花園を逍遙し、自然の中に夢の美を見出す、彼は聲を擧げて歌はない、身振りをして物を言はない、誠に彼こそはコロオの風景の中をさ迷ふ青蒼めたラマルテイーヌの孫である、と。あゝ、コロオの風景の中をさ迷ふラマルテイーヌの孫! 斯ういふことを言ひ、斯ういふことを書く私も亦、ラマルテイーヌの孫ではあらぬか?……そこで、それは未だ私が自分の

家の四疊半の部屋にゐた時分の事であるが、私は早速その寫眞の雜誌の頁を本の中から引裂いて、それを本箱の木の蓋の上に張り付けて、寫眞機を持出して、それを立て續けに二三枚複寫したのであつた。そして現像して、中で最もいゝ原板を改めて引伸機械に入れて、大きく引伸したのである。それを額にして、私の四疊半の部屋の壁のまん中に掛けたのを、何氣なく、「おゝ、立派な額が掛りましたね、」と言ひながら、傍に寄つて覗いた私の女房の、その時の一瞬間の驚いた表情を私は忘れることが出來ない。「まあ！」と言つて、彼女は暫くつゞく言葉を失つて立つてゐた。あゝ、やつぱり私だけの目のせゐではなくて　あの女はこの詩人の肖像にそんなにも似てゐるのか、といふ喜ばしさと共に、又しても私の女房の心を亂したと思ふ心苦しさに、私も亦稍々暫くの間言葉なく立竦んでゐたが、やがて思ひ切つて彼女に、「どうしたんだ、そんな變な顏をして？」と言ふと、暫く未だ答がなかつたが、彼女はその時強ひて、明らかに強ひて笑ひ顏を作つて、「實によく似てゐますわね、あの人に！」と溜息と共に言つた。「あの人つて誰だい？」「御存知の癖に……ゆめちやんに。」「嘘言へ、これは西洋の詩人だよ。」と私は言ひ放つた。そして私たちはそれ以上その寫眞に就いては話し合はなかつた。さて、それはそれとして、今も尚私の家の四疊半の部屋に殘して掛けてあるが、私はこの東寥館の四疊半の部屋にも早速新たにそれを一枚引伸して、そして額に入れて壁に掛けたのであつた。

或日、それは私がこの部屋を借りてから彼れ此れ一ヶ月ほど經つてからのことであるが、それ迄にも私はその事を考へてゐなかつたのではないが、機會がなかつたので手を出さずにゐた、と言ふのは、私の家の四疊半の部屋の床の間に昔の片身の樣に、使ふ事なしに置いてある、あの澁谷道玄坂の古道具屋から買つて來た鶴の三味線である。これはもう私の家では、さうして私の部屋の半間の床の間に飾り物の樣にして置いてある外に、使はないばかりでなく、掃除の時などに邪魔になるので、その度毎に、「こんな物、いらないでせう、誰かにやるか、打捨つてしまひませうよ、」と女房や女中

には甚だ邪魔者扱ひにされてゐるものなのである、私にしても別に飾り物にしてゐる譯でもないのだが、まさか五味捨箱に捨てる譯にも行かず、使へば又實際よく鳴るのであるから、誰かこんな恰好の惡いものでもかまはない、三味線を欲しいといふ人があつたらくれようと思つてゐたのである、それを今、私が東濠館の部屋に置く爲に、家から持出すことは何の苦勞も入らない譯なのだから、思ひ付いたと共に早速實行してもよかつたのではあるが、その頃私は家を出る毎に、たとへ換へ玉を殘しておくとはいふものゝ、何冊かの本を持出すし、時には換へ玉のないものを持出すこともあるし、或時などは、「あなた、あれをどうなさいましたの？」などと女房に聞かれたこともあつた位だし、或ひは若しかすると、彼女は嘗て私が本箱の奥に隱してあつたものを、發見して知らぬ顏をしてゐたやうに、私が今何か秘密を行つてゐることを感ずいてゐるかも知れないとも思はれたので、私はその三味線を持出すことを 一日一日と延ばして辛抱してゐたのであつたが、到頭私は或日彼女に斯う言つたのである。「友達で三味線を一挺貸してほしいといふ者があるんだ、どんな惡いのでもいゝ、鳴りさへすればいゝと言ふんだから、あの俺の、化物三味線をくれてしまはうか？」「さうなさい、あれは恰好は惡いんですけど、本當に鳴るのはよく鳴るんですから……」と彼女は即座に讃成して言つた。「ぢや、あれを持ちいゝやうに、小さく纏んでおいてくれないか、何か箱か何かゞあるといゝんだがな？ 一見して三味線に見えるやうなものを、町を持つて歩くのは體裁が惡いから、」と私は言つた。そしてそれでも彼女に秘密を嗅ぎ出されはしないかと心配になつたので、思ひついて「いや、どうもやつぱり、あんなものを持つて歩くのは困るから、小包で送つてやらう、荷造りをしてくれ。少し新聞紙を澤山使つて、上から古い風呂敷でしつかりと包んで、それに荷札を附ければいゝ、どうせ市内だから、」と私は言つた。實は、私は何かの用心の爲に、東濠館の事務所に、住所は私の家方として、名前を假の名を僞造して報告してあつたのである、だから私は、女房がその三味線の小包をこしらへて持つて來る

と、その荷札に東京館内何の某と、何の憚るところなく認めて、それを市内小包として女中に郵便局へ持たせてやる事にしたのであつた。「おや近くなんですね、何なら、郵便でなしに、私が持つて參りませうか？」と女中がその宛名を見て言つた時、「さうだね、」と私はわざと首を傾けて、「いや、いゝよ、やつぱり郵便で出してくれ、」と命じた。その翌日、私がいつもの通り、例の穴倉のそれのやうな入口を這入つて行くと、丁度そこらを掃除してゐた事務所の老人が私を見かけて、「何某さん」と私の假名を呼びかけて、「あなたに小包が來て居りますよ、嵩が大きいので私の方へ預かつてあります」と言つた。私がそこに來てから、元より私を尋ねて來た人は一人もなく、私に郵便が來たことも一度もない、だから、その三味線の小包が私の第一の訪問者だつたので、それを老人は私に渡す時、何だか迂散さうな顔付をした。が、私は簡單に「有難う、」と一禮して、小包を受取ると、早々に四階への階段を上つて行つた。が、三つの階段を上つて行くうちには、いつの間にか老人に對した時の極りの惡さなどを忘れてしまつて、私は一刻も早く全く私の部屋であるところのその四疊半に這入つて、その包を解いて、中の三味線を組立てゝ、久しぶりでそれを遠慮なく彈いてそして唄つて見たいといふ樂みに、私の胸が波打つのを覺えた。

實際、私は心にどんな不平がある時でも、心配がある時でも、或ひは悲みがある時でも、一度その部屋の小さな扉を開いて、その片隅に引放しにしてある一枚の薄蒲團と、それにかけられた、私の持物の中では最も贅澤な縮緬友禪の掛蒲團と、二箇の本棚と、そして壁の隙間といふ隙間に張られ又掛けられてある、山と戀女との色々な寫眞や畫と、長火鉢と、土瓶と、外の景色の見晴らせない硝子窓と、そして晝は、晴れた日曇つた日、午前の時、午後の時、それ〴〵の時間と日とに依つて、色々に違ふところの、不思議な光線を投げる、例の四角な天窓を持つ部屋の中に一歩足を踏み入れると、その瞬間に一切のこの世の心勞が私の身體中から逃げ出してしまつて、全く別の私になることを見出すのであ

つた。實の間は、私はそこで自分のなりはひであるところの、小說の原稿を書くのであるが、そこへはどんな辣腕な雜誌記者でも這入つて來ることはないのであるから、私は悠々と仕事することが出來た。だが、實際を言ふと、さういふ仕事をすると、やつぱり月末の拂ひのことや、それが足りないだらうといふ事や、さてはもう月末に近い、うつかりしてゐられない、何處と何處との社に今月は借りに行かうなどといふ考に私は惱まされなければならぬ、あゝ、それを思ふと、一切さういふ心配なしに、この全く私の氣儘な部屋で、全く私の氣儘に、一ヶ月後に出來上るか、一年經つても出來上らないか、そんな事を少しも心配しないで、元々好き故になつた道なのであるから、自分の思ふまゝに原稿を書くことが出來たなら……と私は嘆息しなければならぬのである。さて、さうして夕方が來るのである。だが、私がその三味線の小包を持つてその部屋に這入つた時は、夕方より未だ大分前のことであつたが、私は早速その包を開いて、あゝ、何年振りで私はこの三味線をこんな風に撫で、こんな風に持ち、そしてこんな風に鳴らしたことであらう、不思議なことに、それは偶然に保存の場所がよかつたのか、それとも偶然にそんな風に巧く張れてあるのか、胴の皮は少しも捲くれてもなければ、裂けてもゐないのである。そして依然として長唄三味線の胴で、義太夫三味線の棹を無理につけたそれではあるが、依然として、不思議に妙によく鳴るのである。勿論それはいくらよく鳴るとは言つても、晴れの場所へ持出して、晴れの調子を出す時には使へないやうな、變な癖のある鳴り音ではあつた、が、元、長唄を專門にやつたのでも、義太夫を專門に習つたのでも、清元をも、歌澤をもこれと言つて筋立つて習つたこともない、唯少年がハモニカを吹くやうにそれを彈き覺えた私にとつては、それで何の不足もないのである。そこで私はざつと二時間近くも、自分の知つてゐる數のありたけを、自分のうたふ唄に合はして彈きつゞけた。どんな俗な、どんな下等なものでも、それが音樂と名のつく限り、世に音樂ほど人の心を夢中に誘ふものはない。私はその間にたつた一度、座を立つて、例の

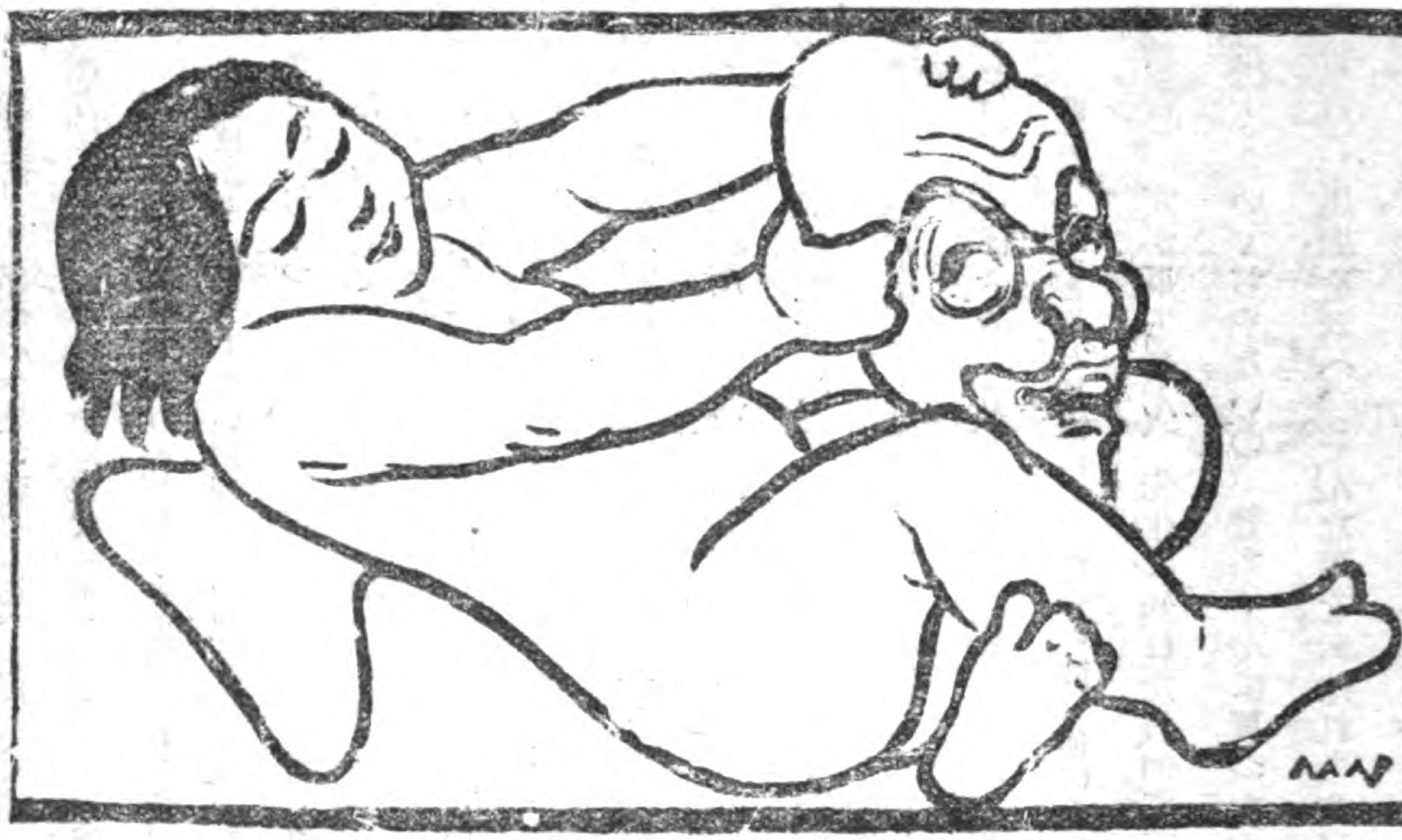
木の戸の付いた押入を開けて、そこの水道の栓から鐵瓶に水を汲んで、それを片つ方の瓦斯にかけて、茶を入れて飲んだ時の外、それを鳴らしながら、時の經つのを忘れた形であつた。そんな風な夢の狀態になると、私の周圍の壁にかゝつてゐる、歐洲アルプスの寫眞の額も、方々にピンで張り付けてある、私の好きな諸國の山々の寫眞や畫も、さてはフエルナン、セベランの肖像も、數枚の私の戀女の肖像寫眞も、すべては一つに溶けて、私の氣持は何と形容の言葉もない、甘い氣持に溺れるのである、つまり私も亦、完全にコロオの風景の中をさ迷ふ、ラマルティイーヌの青蒼めた孫となるのである。

いつも、私がさうして疲れて、そのまゝ蒲團の上にごろりと仰向けに寢そべつた時、忽ち私の目の注意を集めるのは、例の天井に四角に切開かれた、そして屋根と天井との深さだけの長さを持つて、屋根に至る程細まつて行くところの、丁度角型の幻燈の筒のやうな體裁を具へた、あの天窓であつた。それを下から見てゐると、煙突に丁度四角なそれがあるやうに、望遠鏡にも四角な筒のものがあると假定して、私が寢轉びながら下からその天窓を見上げるのは、丁度望遠鏡で天を覗いてゐるやうなものであつた。私は一時間以上も天を覗いて暮すことがあつた。そしてそれは大抵夕方か、或ひは夜のことであつた。聞くところに依ると、それは一年中で星を見るのに最も適當な頃だといふことであるが、如何にも、私の望遠鏡にも、その先が一枚の硝子である代りに、まるで水晶のレンズでも嵌つてゐるかと思はれる程、四角に切取られた深い紺青の夜空の中に、青いの、赤いの、大きいの、小さいの、さては遠いの、近いの、様々の星が何か子供の時分にそんなやうな玩具があつたやうに思へるが、それがどんな玩具だつたか思ひ出せない、實に不思議な、見てゐれば見てゐる程不思議な、綺麗な、燦爛とした光景を私に見せるのだつた。私はそれを見る爲に、部屋の中の電燈を消して見たり、又點して見たり、そして又寢轉んで見てゐる私の頭の位置を一寸ほどづゝ變へては、その望遠鏡に

違つた形を映して見たりした。或時は又、私はその眞四角な四疊半の部屋全體と、そのまん中に突出て附いてゐるその天窓とを想像して、恰もそれは天に向つて上向きに置かれてゐる幻燈機械のやうな氣がした、して見ると部屋の中の私自身や、本棚や、蒲團や、壁の數多の寫眞やが、一幅の畫となつて、その天窓のレンズを通して、空の何處かに映し出されてゐるのではないか、と言ふやうな氣さへして來るのである。

あゝ、諸君、最早や三十歳を數年前に過ぎて、この世の事に相當の分別も持つてゐる筈の私が、このやうな愚かしい事を樂むと言つて、又このやうな愚かしい事を考へると言つて、みだりに笑ひなすな、又この物語の中で、出て來る人物といへば、私の女房にしても、東京館の事務所の老人にしても、煙草屋の娘にしても、さては私の戀する山の女にしても、それ等の人々の風丰さへ傳へないで、唯々私の夢のやうな話や感想をだけしか話さないと言つて怒りなすな。それ等のことは又別の機會に讓つて、思はず長くなつたこの取止めない話を一先づ終らうとするのであるが、この話の中で可成り重要な人間のやうにして出て來たかの煙草屋の娘――彼女の爲に、東京館の四階の部屋を借りることを念いでおきながら、私は結局それを忘れたやうに、その後のことを諸君に話さなかつたのは、決して忘れたのではないのであるが、實は私はその私の隱れ家を彼女にも明かすことが惜しくなつてしまつたのである。家の者にもそれを秘密にするやうに、彼女にもそれを知られないように、……何故と言つて、たとへどんな事情の人にでも、その部屋を見られては、私の樂みは忽ち消滅してしまふからである。やがて、私のその部屋から、半町と隔たぬところに大博覽會も開かれるのである。いつからとなく、私が毎日自分の家を出て、かの精養軒の横手の、阪道の上に眺められたところの、私に大きな湖水と見える、博覽會の建物の蒲鉾型の屋根は、それがベニガラ色に塗り直されたり、その上に飾りのつもりでもあらうが、幾つも幾つも凸凹の塔のやうなものが出來たりして、最早やどんなに骨折つても、それは湖水と見えなく

なつた。そして噂に依ると、この東京館の部屋部屋は、近いうちにその間代が三倍とか五倍とかになつて、それで不服で引越して行つた人の部屋の後には、博覧會の關係者で、上京して來てゐる人たちに、一人づゝから高い間代をとつて、おまけに一つの部屋に三人も五人も宿泊させるといふやうな話もある、やがて朝となく晝となく、博覧會から打上げる煙火が、私のその夢見る部屋の硝子窓を震はすであらう。さて或は私の戀する山の女の消息がどうして私の耳に聞えて來たか？——第二番目の子を無事に生み落して、元の身體になつたなら、彼女も博覧會の見物に上京して來るであらう。さて又或日煙草屋の娘が、それが私自身であるとは知らないで、東京館といふ内にゐる何某といふ男に宛てゝ、これから私への手紙を送つてくれ、念の爲にその宛名を書いた封筒を上げておく、と私から言つてやつてあつたので、その假名の何某である私に書いて來た手紙が、どんなに私を驚かしたか、——さういふ事は、又別のところで書くとして、こゝでは私は話したく思はぬのである。されば私は、こゝではこの空に向つて置かれた幻燈機械のやうな恰好をした部屋の中で、その空に向つた望遠鏡めいた四角な煙突型の天窓を通して、私と私　部屋の有様を空に向つて映し出さうとするのであるか？　私は知らない。



戯曲

彼女の夫

―一幕―

谷崎潤一郎

人物

黒田　三十五六の男、文士

小夜子　黒田の妻、二十五六歳

瓜子　黒田と一緒に住んで居る不良少女、十八九歳

高村賛吉　瓜子の友達の不良少年、二十歳前後

河合　黒田の友人

鈴木　書生

時　現代

所　東京

舞臺面——部屋の中央に紫檀の机、瀬戸の火鉢、座蒲團二三枚。向つて左側の壁に接してライティング・デスク、廻轉椅子、紙屑籠。後方は床の間、その上手に二枚の襖。出入はその襖と右側の障子よりすること。

デスクの上に書きかけの原稿用紙がひろげてあり、床の間には書籍が亂雜に散らかつて居る。或る春の日の午後、瓜子がたつた今起きたばかりのだらしない細帶姿で、廻轉椅子に腰かけてぐるぐる廻りながら、高村贊吉と話してゐる。兩手で金の腕環を持ち、珍らしさうにいぢくつてゐる。贊吉は彼女の傍に、デスクに凭れて立つ。すつきりした洋服姿で、派手なネクタイにきらきら光るピンを刺してゐる。そして話しながら盛んに煙草を吸ふ。

(瓜子 腕環を視つめながら嬉しさうに) ぢや、これは餘つぽどいゝ物なの、

(贊吉) うん、性は確かだよ、シスターが外國に居る時分買つたんだから、物はいゝに違ひないよ。もう一つ素晴らしい奴があるんだけれど、彼奴はちよつと持ち出すのに工合が惡かつたもんだから、——

(瓜子) 此れだつて持ち出したら分りやしないの?

(贊吉) 分りやしないさ、——分つたつて別に困りやしないけれどね、

(瓜子 腕環を篏めて見る) どう? 似合ふかしら?

(贊吉) 素敵々々、非常だよ、洋服を着たら其奴がなけりやあどうしたツて駄目だ。——

瓜子、うつとりと見惚れて、自分の腕を伸ばしたり縮めたりして居る。

(贊吉) だか瓜ちやん、先生に知れたら何て云ふんだい?

(瓜子) いゝぢやないの、贊ちやんに貰つたつて云つたつて、——

(贊吉) 馬鹿を云へ、そんな事を云はれちや己が困るよ、

(瓜子 まだ夢中で見惚れて居る) いゝわ、そんなら外の人に貰つたつて云ふから、——心配する事なんかありやしな

いわ、

(贅吉)　困るなあほんたうに、お前はおしやべりだからなあ。

(瓜子)　贅ちやん、贅ちやんはそんなに黒田が恐いの？

(贅吉)　外の人ならいゝけれど、先生だけは困るからなあ、——

(瓜子)　恐いもんかあんな奴！

(贅吉)　さう云つたつて、お前と己とは關係が違ふからなあ、——お前は恐くなくつたつて己は困るよ、

(瓜子)　贅ちやんは今でも黒田を崇拜して居るのね？

(贅吉)　己あ先生は嫌ひぢやないよ、此の頃書く物はあんまり感心しないけれど、しかし矢つぱり好い所があるからな。……それに黒田氏は人が好いもんだから、顏を　ると濟まないやうな氣がするんだ。

(瓜子)　だけど、黒田だつてうすうす氣が附いて居るらしいのよ。うつかり怒つたりなんかすると、私が逃げると思ふもんだから默つてるんだわ。

(贅吉)　そりやあさうかも知れないな、實際己たちはあんまりづうづうしくし過ぎるからな、——さうだとしかし、猶更氣の毒になるぢやないか。

(瓜子)　柄にない事を云つてらあ、——向うがわさと知らない振りをしてるんだから、ちつとぐらゐづうづうしくしてやつたつて構やしないわ、——贅ちやんは何ね、黒田に怒られると文壇へ出られなくなるとでも、思つてゐるのね？

(贅吉)　さう云ふ譯ぢやないんだけれど、……、まあ、……その點もない事はないさ。

(瓜子)　だから贅ちやんは可笑しいツて云ふのよ、そんな心配をするだけ馬鹿だわ、——もう此の頃ぢや、文壇で黒田

の「く」の字も云ふ者なんか居ないぢやないの。此の間書いた「或る男の話」だつて、一體まあなんて拙いんだらう、どうしてあんなヒドい物が書けるんだか、……餘つぽどどうかしてるんだわ。全體何を書かうとしたんだかまるで分らないツて、誰かが雜誌で憤慨してゐたけれど全くさうだわ。その癖あれを書く時にや一生懸命で、あんな短ツかい物を何枚も何枚も書き損つて、やつと書き上げたんだから驚くぢやないの。もうすつかり、頭が惡くなつちやたのね。

（贊吉）そりやあ確かに、頭も惡くなつて居る。もう黑田氏も到底昔の俤はないさ、――だが何だぜ、頭を惡くした大半の原因は瓜ちやんにあるんだぜ。お前が先生をあんなにヒドクしちまつたんだぜ。

（瓜子）そんな事を云つたつて私や知るもんか、向うが私を可愛がるのが惡いんぢやないの。――（デスクの上にある原稿に眼をとめる）ちよいと、此れを見て頂戴よ、頭の惡いのに又何か書いて居るから、――

（贊吉）そりや何處の原稿だい？

（瓜子）來月の「東洋文學」へ出すんだつて。――どうせ又ロクな物ぢやありやしないわ。

（贊吉）何だい、まだたつた三枚しか書けてやしないぜ、

（瓜子）さうよ、でも此れだけ書くのに此の間から一週間もかゝつて居るのよ。

（贊吉）そんな事ぢや仕樣がないなあ、――そんなに書けないなら、ちつと書かずに居る方がいゝんだのになあ。

（瓜子）だつて、書かずに居りやお金が這入らないぢやないの。お金が這入らなけりや私黑田と一緒に居るのは眞ツ平よ。――今日だつて洋服が出來て來るんだから、拂つてやらなきやならないし、――

（贊吉）考へて見ると先生も可哀さうなもんだね、――けれどそんならその積りで、早く書かせなけりや締切に間に合やしないぜ。今頃やつと三枚しか出來てゐないで、全體どうする氣なんだらう。ひどく悠々としてゐるぢやないか。

(瓜子)　まだ此の外にも二つ三つ約束した所があるのよ、――今月は私いろんな物を拵へたもんだから、澤山書いて貰はなけりや追つ付きやしないわ、

(贊吉)　それはさうと、どうしたんだい先生は？　大分話が長いぢやないか。今日は會はないで歸らうかしら？

(瓜子)　歸るなら歸つてもいゝわ、――そして、夕方の六時に停車場で待つててくれない？　今一緒に行つてもいゝんだけれど、洋服が出來て來たら着て行きたいから。

(贊吉)　あゝ、……だが、會はないで歸るのも惡いやうだな、……お客は河合さんなのかい？

(瓜子)　えゝさうなの、――あの人が來るといつも長いのよ、二階へ上つたつきり何かこそこそ內證話をしてるんだから。――あの人は黑田の親友なのよ、どうせ私の惡口を云つて忠告でもしてるんだらう、聞かないだつて大概樣子は分つてるけれど、……

襖の向うに足音が聞える。贊吉急いで瓜子の傍を離れ、火鉢の所へ來て据わる。同時に襖を明けて黑田入り來り、二人を見てちよつと不愉快な顏つきをし、直ぐにさあらぬ態で眼を外らせる。瓜子は空惚けて腰かけたまゝ、デスクの上の花瓶の花をいぢくつてゐる。

(黑田　不安さうに室內を步きながら)　やあ高村君、お待たせしちやつたね、

(贊吉　頭を掻いて)　いゝえ、……別に何です、用ツて云ふ譯ぢやなかつたんですが、……

(黑田)　おい、瓜子、困つた事が出來ちやつたんだよ、……

(瓜子)　何？

(黑田)　今小夜子がやつて來たんだ、

(贊吉　ビツクリして)　えツ、奥さんが？

(瓜子) どうして此處が分つたんでせう？——河合さんが敎へたんぢやないの？

(黑田) いゝや、そんな筈はない、河合は決して云ふ譯はない、今もそれに就いて話してゐたところなんだが、あの男は僕に無斷でそんな事をする筈がないよ。

(瓜子) どうだか分つたもんぢやないわ、——で、どうしようツて云ふのよ？

(黑田 瓜子の後ろへ來て椅子の背に凭れる) 留守だつて云つたんだけれど中々歸らないもんだから、……仕方がないから河合が會ふ事になつたんだがね。

(瓜子) そんな事をしないだつて、……あなた會ひたけりやお會ひなさいな、折角訪ねて來たんだのに、御遠慮には及ばないわ。

(黑田) 僕は會つたつて仕樣がないさ、どう世話は極まり切つて居るんだから、云ふ事があるなら河合を通じて聞かして貰やあ澤山だよ、——ほんたうに馬鹿な奴だ、何も居所が分つたからつて、不意に尋ねて來なくつてもよささうなもんだ、そんな事をするから己は猶更イコヂになるんだ。

座が白けた氣味で三人とも沈默しつゝ、めいめい何かしら考へ込んでゐる。瓜子は不貞腐れの態度で、廻轉椅子の上で體を彼方へ捻つたり此方へ捻つたりする。贊吉は火鉢を抱へて小ひさくなつて居る。

障子から河合が這入つて來る。

(黑田 河合を見て) どうしたい？ 歸つたかい？

(河合 ヂロリと瓜子を一瞥して) いゝやまだだ、どうしても歸らないんだ、君が居なけりや歸るまで待つ氣で居るんだから、——

(黒田) 困つちやつたなあ、何とか云つて追つ拂つて貰へないかなあ、

(河合) さう云つたつてそりやあ無理だよ、君がどうしても會はないツて云ふなら、それもどうも仕方がないけれど、奥さんだつて斯うして居所を突き止めたからには、容易な事ぢや歸るまいと思ふ。兎に角うちへ上げて上げなけりやいけまいと思ふね。

(黒田 むツとして) 僕はしかし、今日は會ふ事は絶對に嫌なんだ、……會ふなら會ふで、會ふやうな方法を取るがいゝんだ。何の音沙汰もなしに突然此處へ訪ねて來るなんて、實際君馬鹿ぢやないか。始めツから僕を怒らせるやうなもんぢやないか。

(河合) 君はだから、――會ひたくなけりや會はないでいゝから、僕が會ふにしたところで、まさか玄關で立ち話も出來ないぢやないか。兎に角此方へ上つて貰つて、よく落ち着いて話をした上で、今日は一旦引き取つて貰ふやうに、僕からくれぐれもさう云つて見よう。それに奥さんの方にだつて、どんな用件があるのかも分らないから、――

(黒田) だけと君、上つたつきり歸らなかつたらどうするんだい?

(河合) そんな事はないよ、奥さんだつて剛情を張れば却て爲めにならないツて事は、分つて居らあね、きつと僕が歸すやうにするから大丈夫だよ、

(黒田) 君が請け合ふならそれでもいゝけれど、……何か面倒な話だつたらいづれ今度にしてくれるやうに、さう云つてくれ給へ。僕は今創作にかゝつて居るんだからね、嫌な事を聞かされると、仕事が出來なくなるんだからね。

(河合) よろしい、よろしい、分つたから君たちは二階へ行つてゝくれ給へ、

(黒田) 二階へ?――ぢや、此の部屋へ通すのかい?

(河合)　あゝ、此處の方がいゝぢやないか。二階は君、——瓜子さんの物やなんかが置いてあるから、工合が惡かないだらうか。

(黑田)　お蔭で僕は又仕事が出來やしない、——

ぶつぶつ云ひながら原稿をデスクの抽き出しに收める。瓜子不承不精に椅子を立ち上る。

(河合)　ぢや、いゝかね、連れて來ても、——

河合障子より去る。

(贇吉　モヂモヂして)　先生、僕は又伺ひますから、……

(黑田)　やあ、どうも大變失敬したね、——何なら君、遊んで居たつて構はないんだぜ。

(贇吉)　えゝ、ですけれど又……

(瓜子)　いゝぢやないの贇ちやん、一緒に二階へ入らつしやいよ、

(黑田)　どうせ仕事が出來ないんだから、話して行つてくれ給へ、君でも居てくれた方が却ていゝんだよ。

(贇吉)　ですけれど又、……又近いうちに伺ひます、(立ち上る)　大變お邪魔しました。

(黑田)　さうかね、それぢや又やつて來給へ。——あ、君　君、(障子の方から出ようとする贇吉を叫び止める)　此方から出てくれ給へ。

さう云つて、一と足先に椽から出て行く。贇吉が續いて出ようとするのを、瓜子眼くばせして引き止める。

(瓜子　小聲で)　いゝこと？——今夜六時よ、——

贇吉うなづく。兩人去る。

舞臺暫く空虚。やがて障子より河合と小夜子とが這入つて來る。小夜子は髷に結ひ、じみな銘仙の着物を着て居る。

（河合）さあどうか、──此方へ入らしつて下さい。

小夜子かすかに頷き、右の座蒲團に据わる。河合は紫檀の机を隔てゝ左に座し、ちよつと挨拶に困つてゐる。

（小夜子）あの……どうしても會つてはくれないのでせうか？

（河合）會はないと云つて居るんですよ、あなたが突然此處へ訪ねて入らしつたのが、ひどく氣に觸つたらしいんです。

（小夜子）それは私も氣が附いては居りましたけれど、手紙を出しても讀んでくれるかどうか分りませんし、もうあれッきり一と月にもなるもんですから、──

（河合）さうでせうとも、さう仰つしやるのは御尤もです、──

（小夜子）それに私、是非とも會はなけりやならない事もあるもんですから、──

（河合）奥さん、しかしあなたはどうして此處がお分りになつたんですね？　黒田君は僕が敎へたんぢやないかツて、疑つてゐるんですが、……

（小夜子）あの、實はもう餘程前から、うすうす氣が附いて居りましたの。でも今日までは、怒られるといけないと思つて知らない積りで居たんですけれど、……何だか私、……少し心配な事がございますので、口をきいてくれないまでも、せめて顔だけでも見たいやうな氣がしまして、……

（河合）心配な事ッて仰つしやるのは？

（小夜子）……黒田は此の頃、體の工合が悪いのぢやないでせうか？

（河合）さあ、──相變らず神經衰弱で、始終頭痛がして困るとは云つてますがね、──それに顔色も大分すぐれない

やうだけれど、別に此れと云つて、病氣と云ふ程でもないやうです。

(小夜子) あの、瓜子さんも此處に居らつしやるんださうですね、

(河合) え〻、――さうなんです、――それに就いて、僕は奥さんにお詫びしなけりやなりませんが、實は黒田君が斯うして此處に居ると云ふ事を、疾うに奥さんにお知らせしようと思つたことも、何度あつたか知れないんです。あなたにお目に懸るたんびに口元まで出て居たんだけれど、決して云つてくれるなツて固く口止めされてゐたもんだから、仲へ立つて本當に困つちまつて、――僕も實に辛かつたんですよ。

(小夜子) え〻もう、それはよく分つて居ますわ、それどころか始終いろいろ御心配ばかりおかけして、どんなにお世話になつて居るか知れないんですもの。――今日だつて私、あなたが居らしつて下すつたのでまあ好い鹽梅だと思つて、ほんたうにほつと致しましたの。

(河合) 實は何です、――僕も時々それとなく忠告はして居るんですが、――黒田君も今のうちに何とか徹底した態度を取らなけりや、藝術家として駄目になるばかりぢやない、人間としても駄目になつてしまひますよ。僕は全く、その點を心配して居るんです。此の頃書く物が餘り世間で評判がよくないのも、神經衰弱のせゐだとか、健康が勝れないからだとかツて、當人はさう云つて居ますけれど、僕に云はせればそんな事は抑も末の問題なのだ。……そりやあ勿論頭も惡くなつてるだらうし、體の工合もよくないのでせうが、そんな事も何も彼も、凡べての原因は現在の生活にあるんですよ。あ〻云ふ不徹底な、ふらふらした態度で以てい〻物が書ける筈はないんですから、――僕はいつもさう云つてやるんです、君の行き詰まつたのは君の態度が惡いからだ、うそがあるからだ、僕から見れば君は一箇の、氣の毒な僞惡者に過ぎないツて。――たとへば瓜子を可愛がつて奥さんを虐待すると云ふやうな事も、その事自身の善惡は別として、

黒田君はさう云ふ惡を平氣でいつ迄も押し通して行けるやうな、そんな强い人間ぢやないんですからね。上ッ面は强がつてゐるけれど、あれで非常に氣が小さい方ですからね。——だから僕はその點でもつと正直になれと云ふんです、淺はかな僞惡の態度を改めなけりや駄目だと云ふんです。そりやあ誰しも、世の中に完全な善人なんて者はあるもんぢやない、けれども君はなぜ正直に、君の持つて居る臆病な所や氣の小さい所を、さらけ出して見せないんだ、君は自己を欺いてゐるからいけないんだッて、僕はさう云つてゐるんです。……

（小夜子）それで、黒田はあなたに對して、何と云つて居りますでせうか？

（河合）そりや自分だつて苦しい事は苦しいッて云つて居ますよ。今のやうな中途半ぱな生活をして居ちやならない、どうかしなけりやあいけないッて事は分つて居るけれど、どうにも仕樣がないんだから仕方がないッて云ふんですよ。つまり瓜子が可愛いには可愛いけれども、さうかと云つて奧さんや子供を捨てゝしまつても構はないと云ふ、そこまでの勇氣はとても黒田君にはありやしないんです。

（小夜子）でも、そんならなぜ私に、たつた一と言「待て」と云つてくれないんでせう。私だつて黒田の性質はよく分つて居るんですから、たとへ今ではどんなに瓜子さんを愛して居ようと、「待て」と云つてくれさへすれば何年でも待つて居ますけれど、……可哀さうだから追ひ出さずに置いてやるんだとか、お前の方から出るッて云ふなら喜んで暇をやるとかッて、そんな風に云はれますと、ほんたうにその積りなのぢやないのかと思つて……

（河合）ほんたうに其の積りなら、何もあゝして苦しんぢや居ないでせう、……そんな事を云ひたがるのが、それが惡い癖なんです。瓜子と一緒になるとしたら、今はそれでもいゝか知れないが、年を取つてから淋しくはないかね、瓜子はあゝ云ふ女だからさういつ迄も對に食附いては居ないだらうし、さうなつたら、君は妻君もなし子供もなしで孤獨を

感じはしないだらうかツて、此の間も僕は話したんです。……

(小夜子)……(うなだれて、涙ぐんで聞いて居る)

(河合)……瓜子と黒田君とは年も大分違つてゐるし、それに瓜子の方でほんとうに黒田君を思つてゐるなら知らんこと、現に今でもあの高村と云ふ男と關係があつて、黒田君を欺いてゐるんですからね、——それも此れも黒田君が知らない筈はないんだから、そんな女の爲めに一生を棒に振ると云ふ事になりや、いくら何だつてそりやあちよつと考へますよ。だから口の先では强さうな事を云つたからツて、あなたや子供を捨てると云ふ氣には、決してなれやしないんです。そんならそれで、あなたの仰つしやるやうに「待つてくれろ」と云へばいゝんですが、——「自分は瓜子に迷つては居るけれども、いつか一度はお前の所へ歸つて行くから」と、正直に心の苦しみを打ち明ければいゝんですが、——其の一と言が奥さんの爲めにも黒田君自身の爲めにも、どんなに慰めになるか知れないんだのに、それを素直に云ふ事の出來ないのが、あの人の不幸なんです。

(小夜子)　きつと黒田は、私に泣かれるのが嫌なんですの、——あの人は私が泣けば自分もつい悲しくなつて、泣かずには居らないんですから。さう云ふ所を私に見られるのが辛いんですから。——「己はお前のやうな悲しい女は大嫌ひだ」ツて、よくそんなことを申しますの。

(河合)　あなたに會ふのが嫌だと云ふのも、つまり會ふのが恐ろしいんですよ。瓜子と一緒に居るなら居るで、それを兎や角云ふやうなあなたぢやないんだから、何も居所を隱す必要はないんだのに、會つて泣かれるのが恐ろしいもんだから、ついこんな工合になつてしまつたんぢやないでせうか。結局黒田君は僞惡の爲めに引き擦られて、知らず識らず心にもない惡を重ねて居るんです。そしてその結果一層苦しんで居るんです。……さう思ふと、惡いには惡いけれど、

寧ろ氣の毒な人ぢやないでせうか？　そりや奥様にしたつて随分苦勞をなすつたでせう、あなたのお身の上になつたらどんなに辛いだらうと、お察ししては居ますけれど、あなたもそれ程黒田君の性格がお分りになつて居らつしやるなら、まあもう少し、何も仰つしやらずにぢつと辛抱して居らつしやる方が、よくはないかと思ひますよ。なあにきつと長いことぢやありません。きつと黒田君はあなたの所へ歸つて來ます。第一こんな風にして居たら金が續きはしませんからね、さうなつたらあの女が大人しくして居る筈はないんですから。

（小夜子）それは分つて居るんですけれど、……（何事をか云はうとして躊躇する）

（河合）あなたも辛い事でせうが、黒田君も苦しんで居るに違ひない。――黒田君としてはその苦しみを出來るだけ苦しんだ方がいゝんです、それが貴い經驗になるんです。……

（小夜子）それは分つて居るんですけれど……（靜かに涙ぐみつゝ）私、待てと云はれないでも何年でも待つ積りで居たんですけれど、……もう一日も待つては居られない事が、……出來たもんですから、……

（河合　訝しみながら）ふん、……何か別な事件でも起つたんでせうか？

（小夜子）黒田は自分では知らないんですが、……あの人の體は、もうあと一年ぐらゐしか保たないんです、……

（河合　愕然として）なぜです其れは？……どうしてそれが分つたんです？

（小夜子）黒田のかゝりつけの青木と云ふ醫者がございますの、その方がゆうべ態々宅へ來て下すつて、その覺悟で居なけりやならないツて、さう云つてくれましたの

（河合）ですが、……どうしてそんな事に……急にそんな事になつたんです？　一體何の病氣なんです？　あの通り別に惡い所もないやうだけれど、……

(小夜子) それが分つたのはつい二三日前の事なんですの。――此の頃妙に體が痩せるもんですから、肺病にでもなつたんぢやないか、何處か内臓に故障があるんぢやないかと云つて、――黒田はあれで非常に神經質でして、體の事を始終氣にするたちですから、――そんな事を云つて、青木さんの所へ見て貰ひに來たんですつて。けれど青木さんが見たところでは、肺にも別に異狀はなし、何處も惡くはないやうだから、安心するがいゝツて云つたんださうですけれど、それでも兎に角氣になるからツて、エツキス光線で見る事になつたんですの、――

(河合) ふん、――さうしたら?――

(小夜子)――肺はやつぱり故障はなかつたんださうですが、――心臓の傍のところに、動脈瘤とかツて云ふものが出來て居るのが、偶然に發見されましたの。

(河合) 動脈瘤?――あゝ、それは助からない、

(小夜子) とても助からない病氣ださうでございますね、青木さんに聞きましたけれど、……

(河合) それで、醫者はどう云つてゐるんです?――もう一年しか保たないツて云ふんですか?

(小夜子) 動脈瘤ツて云ふ病氣は、別に苦しくも何ともないし、仕事をするにも差支へはないもんだから、當人は全く氣が付かずに居て、急にぱつたりと死ぬやうな事があるんだつて申しますの。それに黒田のは、出來所が非常に惡くつて心臓の傍の動脈に出來たんだから、まあ長くつて一年ぐらゐしか保たないだらう、――今日明日のうちにどうと云ふ事はないにしても、その時分になつたらいつどんな事があるか知れないから、今から其の積りで居なけりやいけないツて云はれましたの。――私、何だかまるで夢のやうな氣がしまして、――

(河合)――僕の親戚の者にも、動脈瘤に罹つたものがありましたね、醫者からもう二年しか生きないと云ふ宣告を下さ

れましたが、やつぱりちやうど二年目ぐらゐに死にましたつけ。――死ぬと云ふ事が、さうハツキリと分つて居るだけ厭な病氣です。一體何が原因で、あゝ云ふ病氣になるんだか知れないけれど、……

(小夜子) 黴毒から來る事が多いんださうでございますね、――黒田のもやつぱりさうだつて申しますの。

(河合) 黴毒?――あゝさうかも知れない、神經衰弱だの、頭が痛いのツて云ふのも、きつとそれが原因だつたのだ。――黒田君もあれほど體を氣にするんだから、早く其の方の手あてをすればよかつたぢやありませんか。

(小夜子) 自分でもそれは氣が附いて居て、注射をしたりした事もあるんですけれど、でも、その傍からあんな生活をして居るんですから、何にもなりはいたしませんわ。

(河合) まあ、過ぎ去つた事を悔やんだつて仕方がありませんが、……それぢあ黒田君は、自分では何も知らないんですね?

(小夜子) それでなくても神經質の方だから、當人には何も云はなかつたが、あなたにだけはお知らせして置くつて、青木さんは云ふんですの。……どうせ助からないくらゐなら、知らない方が幸福かも知れませんけれど、……

(河合) ……さう仰つしやればそれもさうですが、……

云ひながら沈鬱に考へ込む。小夜子もうなだれて、そつと涙を拭ふ。

(小夜子) 河合さん、あなたはどうお考へになりますの? いつそ黒田に知らした方がいゝとお思ひになるでせうか?

(河合) どうせ助からないものだから、知らしたつて無駄かも知れません、――しかし 助からないものだからして、猶更知らしてやる事が、私たちの義務でもある。――奥さん、あなたはどうお考へになるんです? 今日訪ねていらしつたのは、それを黒田君に云ふと云ふやうな、――ハツキリとは云はないまでも、それとなく知らせるとでも云ふやう

な、お考へではなかつたんですか？

(小夜子) 私、そこまで考へては居ませんでしたの、——ただあの、ゆうべ其の話を聞きましてから、何だか急に、顔が見たくなつたもんですから、——

(河合) 知らせるにしろ知らせないにしろ、孰方にしても私たちは辛いのです。その悲しみを避ける事は出來ないのです。ただ此の場合私たちが考へなけりやならないのは、孰方がほんたうに黒田君の爲めになるか、——黒田君自身の不幸を少しでも輕くするには、孰方の道を撰ぶがいゝかと云ふ事ですね。——假りに知らせないとしたところで、最後まで知らせずに置くべきものか、それとも或る時期が來れば、知らせないでは置けないやうになつて來るか、……

(小夜子) ですけれど若し、——どうせ知らせなけりやならないんなら、あと一年しかないのだと思ふと、一日だつて早い方がいゝやうな氣もしますの、——もう一と月か二た月と云ふ時になつて、——さうなつてから知らせるなんて、どんなに悲しいか知れませんから。

(河合) それはさうです、知らせるものなら今直ぐ知らせても、決して早過ぎはしないんです。——此れから先の一年と云ふものは、黒田君に取つても奥さんに取つても、貴い、大切な時ですよ。大切な時にしなければなりませんよ。僕はさうするのが、——今云ふと云ふ事は辛いには辛いけれども、——それが本當ぢやないかと思ひますがね。

(小夜子) 私だつてさうは思ひますけれど、——若し知らしたらあの人はどうなるでせう？それを知つたら、瓜子さんの事は思ひ切つて、——私を——私を愛してくれるでせうか？

(河合) さうならなけりやなりません、さうなるのが當り前です、あなたばかりか可愛い子供まであるんですもの。……一年の後に死が迫つて居る事は不仕合はせには違ひないが、その不仕合はせが黒田君をほんたうの人間に、ほんたうの

藝術家に、鍛え上げてくれると思へばせめてもの慰めぢやありませんか。きつと黑田君はあなたの所へ歸つて來ますよ、心からあなたの前に跪いて罪を謝しますよ、……奥さん、あなたは長い間苦勞をなすつた、しかしその苦勞が報いられない筈はありません、……

（小夜子　激しく泣きながら）でもさうなつたら、それが又悲しくはないでせうか、……私、ふだんはいくら嫌はれて居ても、せめて孰方かが死ぬ時には優しい言葉をかけて貰へるだらうかと思つて、……そればかりを樂しみにして、待つて待つて居たんですけれど、……黑田が急に力を落してそんな優しい人にでもなられたら、それが又どんなに悲しいか知れないと思ふんものですから、……いつそ云はないで居ようかとも思つたりして、……

（河合）そりや黑田君は、きつと力を落すでせう、もともと氣の弱い人なんだから、涙脆い男になつて、恐らく生れ變つたやうになるかも知れない、――それを見るのが悲しいと仰つしやるのは、あなたのお心持ちとしては無理もありませんが、だからと云つて、云はずに居ればあなたは永久に、黑田君の愛を取り返す望みはないんですよ、あと一年の月日しかないのですよ、――その一年の間に、あなたは出來るだけ、十年ぶりも二十年ぶりも黑田君を愛してお上げなさい、愛に依つて黑田君の不幸を救つてお上げなさい、黑田君があなたに心から感謝を捧げて、喜んで此の世を去れるやうにしてお上げなさい、それがあなたの取るべき道ぢやないでせうか？……

間。小夜子いよいよ激しく泣く。

（小夜子）いつそ私、こんな話を聞かなけりやよかつたんですが、……でもあの人が、エッキス光線で見て貰つたりしたと云ふのも、やつぱり蟲が知らせたんぢやないかとも思ひますの、……

（河合）さうですよ、きつと蟲が知らしたんですよ、打つちやつて置けば誰も最後まで氣が付く筈はなかつたんだ、若

しそんな事があつたとしたら、——黒田君が今のやうに此の家に居て、あなたにも會はず道雄君にも會はないで、そのまゝ行つてしまふやうな事があつたら、その時のあなたの悲しみはどんなでせう。……偶然それが分つたと云ふのは、まだあなたの運が好かつたんです。あなたの眞心が幾らかでも報いられたと云ふものです。いくら剛情な人間でも、一年先に死ぬ事が分れば、下らない惡黨がりや意地ッ張りなんかやつては居られませんからね、誰しも自分を欺いて居る女の傍で死ぬよりは、樂しい家庭に歸つて、可愛い子供や妻君の手に寄り縋つて死なうと思ふのが、それが人情ですからね、……奥さん、黒田君を取り返す時は今ですよ、今その時が來たんですよ、……

（小夜子）今までたつた一度だつて夫婦らしく暮らした事はなかつたのに、……やつと其の時が來たかと思へばあと一年しかないなんて、……それぢやあんまり、……あんまりあきらめが付かなくつて、……

（河合）奥さん、……お察し申します、……ほんたうにあなたはお氣の毒な方でした、無情ないとお思ひになるでせう、……ですが、一年と云へば短かい間ですけれど、しかし考へやうに依つては決して短かくはありません。黒田君が達者で長生きをしてくれれば、それに越した事はありませんが、誰にしたつて幸福な時と云ふものはさう澤山はないんですから、……

（小夜子）……どんなに私はいぢめられても構ひません、もつと黒田を生かしてやりたうございます！　今死んでしまつちや、あんまり可哀さうでございます！

やゝ長き間。小夜子、殆んど聲を擧げて泣く。

（小夜子）河合さん、どうぞ黒田に會はして下さい！……一と目でもいゝから會はして下さい！

（河合）よござんす、今僕が連れて來ませう、——いやだと云つても無理に引つ張つて來ますけれど、その話は僕の口

からは云はないで置きますから、——

襖をあけて、書生鈴木閾際に顔を出す。

(書生) あの、ちよつと失禮ですが、——

(河合 書生に) 何?

(書生) 何ですか此れを、——(手に持つて居た封筒入りの物を河合に渡す)

河合、默つて受け取り、封筒の文字を見て直ぐに手紙を引き出して讀む。手紙と共に三十圓の紙幣が出て來る。その間に書生去る。

(河合 紙幣を小夜子に示して) 會ふ譯には行はないから、此れをあなたにやつてくれろと云ふんです。……お金の事だと思つてるんですよ、まだ先月の分を差し上げてないんださうですね。

(小夜子) はい、もう二た月も溜つて居りますの。

(河合) 足らない分は後から送ると書いてありますがね……おや、今呼んで來ますけれど、兎に角此れは持つていらしつた方がいゝでせう。

小夜子、紙幣を受取つて帶の間に挾む。河合、手紙を丸めて袂に入れ、襖から出て行く。

長き間、小夜子は眼を泣き腫らして、ほつと力抜けがしたやうにうなだれてゐる。やがて再び悲しみがこみ上げて來たらしくしくしくと聲をすゝり上げる。——

靜かに襖が明いて、黑田が這入つて來る。ぬつと立つたまゝ、腹立たしさうに小夜子を見下して、暫く默つて居る。

(黑田) おい、何が己に用があるんだ!

小夜子、顏を上げてちらりと黑田を見、一層強く泣く。

(黑田) 泣くなら後でゆつくり泣け、——己あ貴樣の泣くのを見に來たんぢやないんだからな、

（小夜子）……

（黑田）え、おい、何が用があるんだよ、己あ今日は忙しいんだから、さういつ迄も相手になつちや居られないんだ、云ふ事がなけりやさつさと歸つたらよからう。

（小夜子）あなた、……どうか一遍うちへ戾つて來て下さい、……道雄もお父さんに會ひたがつてゐるんですから、……

（黑田）話つて云ふのはそんな事か？

（小夜子）いゝえさうぢやないんです、いろいろ聞いて頂かなけりやならない事があるんですから、一度歸つて來て下さい、……ねえ、あなた、お願ひですから、……

（黑田）いやだ、己あ貴樣と一緖に居るのは一日だつて不愉快だ、話があるなら今此處で云へ。

（小夜子　立つて居る夫の姿をまぢまぢと見上げながら）……此處では云へない事なんですから、……一度歸つて下すつてもいゝぢやありませんか。

（黑田　何となく彼女の凝視を恐れる表情）此處で云へないやうな事なら聞く必要はないんだよ。己あ貴樣が歸つてくれなんて云へば云ふ程歸らないんだぞ。一體貴樣、誰から聞いて此處の家へやつて來たんだ。よしんば此處が分つたからッて、誰の許しを得て來たんだ。そんな事をして己が氣持ちよく內へ歸れると思ふのかよ。己は第一、貴樣のさう云ふ遣り方が氣に喰はないんだ。

（小夜子）だつてあなた、もう二た月も何の音沙汰もして下さらないで……

（黑田　次第に昂奮する）そんな話なら聞かないでもいゝ！　澤山だから歸つてくれ！　さあ、歸れッたら！

間。小夜子の泣き聲が絶頂に達する。

(黑田)　又泣くのか、泣きさへすりやいゝと思つてる、――己あ忙しいんだから相手になつちや居られないんだよ！歸れと云つたらなぜ歸らないんだ！

つかつかと詰め寄つて足蹴にしようとする。同時に襖から河合が這入つて來る。

(河合　急いで小夜子を庇ひながら)君、止し給へ止し給へ！

(黑田　止められたので一層反抗的に)さあ歸れツ、歸れツたら！　剛情張り奴！

(河合)　まあさ、止し給へツたら！そんな手荒な事をしないだつて、口で云へば分るぢやないか。

(黑田)　いゝや、此奴あ口で云つたつて分らないからしてやるんだ！

(河合)　まあ、靜かに物を云ひ給へ、君のやうにさう頭から歸れ歸れと云つたつて無理ぢやないか。歸れなら歸れでもいゝが、――奥さんだつて折角斯うして訪ねて來たんだから、君も一度は歸るやうに、――それも何も、今日直ぐと云ふんでなくつても、兎に角近いうちに一度歸るやうにしたらどうだね。

(黑田)　僕は此奴が斯う云ふ態度を取る間はどうしたつて歸らないよ、結局腹が立つばかりで無駄な話なんだから。

(河合　小夜子に)奥さん、あなた何か、黑田君に仰つしやる事があると云ふのは？――まだお話しにならないんですね？

(小夜子)　はい、……(黑田を見て躊躇しながら)うちへ來て貰つて、ゆつくり話したいと思ふもんですから、……

(河合)　今日は黑田君も大分昂奮して居るやうだし、僕にも少し考へがありますから、(眼でうなづいて見せる)兎に角一旦お歸りになつた方がよござんすよ、ね、奥さん、何卒さうしてくれませんか、僕もそこまで御一緒に行きますから、

――

小夜子、默つて唯泣いてゐる。

（黑田）どうせ此奴の話なんて云ふなあ、聞かないだつて分つてるんだ、僕はさんざ聞き飽きたんだ。

云ひながら、デスクの方へ行つて椅子に腰かける。

（河合）ね、奥さん、さうして下さい、さう泣いたつて仕樣がないから、僕と其處まで御一緒に行かうぢやありませんか。――丈夫ですよ、考へた事もありますから、此の場は僕に任して下さい。僕がきつと、よく譯を云つて、二三日うちにお宅へ歸つて貰ふやうにしませうから。

（黑田）金が足りなきや送つてやると云つてるんだから、それで話は分つてるんだ、その上何もぐずぐず云ふ事はありやしないんだ。斷つて置くが二度と再び此處の家へやつて來たつて、己あ決して會はないからな、貴樣がそんなやり方をすりや、己は猶更歸らんからな。

（河合）黑田君、僕はそれぢや、そこまで奥さんを送つて行くから、――

（黑田）あゝ、――しかし君、そんな奴に係り合つてると際限がないから、好い加減にしといてくれ給へ。

（河合）奥さん、あなたも今日は、一と眼だけでも顏が見られればいゝと云ふ積りだつたんだから、後は僕に任して下さい。ね、表に出てからよく分るやうにお話しますよ、ね、何卒さうして下さい。……

小夜子泣きながら頷き、河合に促されて立ち上る。

（河合　黑田に）それぢや失敬、――

（黑田）あゝ、君ももう歸るのか？

（河合）うん、いづれ又やつて來る。

黑田、河合の後から出て行からとする小夜子の姿を、ちらりと偸むやうに見る、と、彼女の方でも振り返つて黑田を見る、黑田急いで顏を背ける。兩人障子より去る。

獨りになつてしまふと、黑田は椅子にかけたまゝ煙草を吸づて暫く考へてゐる。それから、煙草を灰皿に捨て、ほつと溜息をし、抽き出しから原稿を出し、書きかけの三枚の紙をぴらぴらとめくつて見て、頭を抑へながら讀むともなく讀んでゐる。ペンを執つて、新しい用紙へ二三行書いて見て、直ぐそれを皺くちやに丸めて、紙屑籠へ投げ捨てる。又ほつと溜息をし、こめかみをグリグリ揉みながら立ち上り、室内を二三遍歩き廻つた後、襖を明けてけたたましく書生を呼ぶ。

（黑田）おい！　鈴木！

（書生の聲）はあ

（黑田）コップに水を一杯持つて來てくれ、それからアスピリンと、

（書生の聲）はあ

黑田机の傍に据わり、頰杖をつく。書生が水とアスピリンの散藥と、オブラートとを盆に載せて持ち來り、机の上に置く。

（黑田）瓜子は何して居る？

（書生）二階でお休みになつておいでです、

（黑田）晝寢をしてるのか？

（書生）はあ、

書生去る。

黑田アスピリンをオブラートに包み、口に入れてコップの水を一と息に飮み干す、平手でぴたぴたと額を叩きながら、再び机の方へ

行つて椅子にかける。そして、大儀さうな様子で原稿を書き始める、二三行書いては煙草を吸ふ。

原稿がやつと十行ほど捗つた時分に、障子の方から書生が這入つて來る。

（書生）先生、「東洋文學」の笹川さんが入らつしやいました。

（黒田　ペンを動かしつゝ振り向きもせずに）ふん、通してくれ、

（書生）はあ、あのう、——今日は急いで居るので、お目に懸らないで失禮するから、原稿を渡して頂きたいつて仰つしやるんです。

（黒田）今書いてゐる所なんだから、渡せないツて云つてくれ、

（書生）すつかりお出來になつて居なければ、半分でもいゝツて仰つしやるんですが、……

（黒田　イライラして）駄目だつて、——實は二三十枚書けて居たんだけれど、昨日から又書き直したもんだから、まだやつと十枚ぐらゐしか出來てないし、そいつを持つて行かれちまつちや、先を書くのに困るからツて、さう云つてくれ給へ。

（書生）はあ

（黒田）それからあの、一昨日手紙でお頼みした物は持つて來てくれましたかつて、聞いて見てくれ、

（書生）はあ

書生出て行く。暫くして戻つて來る。其の間黒田はペンを擱いて、もどかしさうに煙草を吸つてゐる。

（書生）あのう、さう云つたんですが、十枚のうち一枚でも二枚でもいゝから頂きたいつて仰つしやるんです。

（黒田）そんな事を云つたつて無理だつて云つてくれ、

（書生）それからあのう、お手紙の話は承知して居ますけれど、全體で六十枚ぐらゐと云ふ御豫定だつたから、そのう

ち三十枚ぐらゐお出來になつて居たら、それと引き換へにお渡しするやうに社長から云ひ付かつて居るので、實は此處に持つて來て居ますがさう云ふ何では差し上げる譯に行かないつて云ふんです。——

(黑田 むつとして)ふん、

(書生)それで、もう締切には三日しかないんだから、明日の晩までに是非どうか徹夜してでも三十枚ぐらゐ書いて頂きたい、さうすれば兎に角明日の朝もう一遍伺ひますから、その時書けて居さへすれば差上げますツて云ふんですが、

……

(黑田)ふん、……

忌ま忌ましさうな顏つきで考へてゐる。

(書生)何て云ひませうか?

(黑田)ぢや、歸つて貰つてくれ、明日の朝來るなら來て見てくれろツて、

(書生)はあ、承知しました、

書生去る。

黑田、癇癪を押し沈めつゝ暫く煙草を吸つて考へ、やがて又不承無精にペンを執る。しかし神經が昂奮して一向捗らない樣子。二三行書いてはイキナリそれを滅茶苦茶に丸めて紙屑籠へ放り込み、五六度もそんな事を繰り返してから、ガツカリして再びぼんやりと考へ込んでしまふ。そして、原稿紙へ圓や三角や棒や英語や、いろいろな物を徒ら書きして、一杯に書き潰してしまふと、重苦しい息を吐きつゝペンを投げ捨て、額や後頭部を惱ましさうにグリグリと揉む。それから、重い病人がするやうに左右の掌を打ち返して、爪の色をぢつと見てゐる。だんだん憂鬱な眼つきになる。……と、ハツとして氣を取直し、急いでペンを摑み、摑んでから又ちよつと考へて、今度は割り合ひにすらすらと書始める。一氣に一枚書き終つて直ちに二枚目に移る。やつと油が乘つて來た樣子。殆んど夢中で書き續

けて居る。……

すらりと襖が明いて、瓜子が現はれる。洋服を入れたバンド・ボックスを抱へてゐる。

(瓜子) あなた、もう何枚書けて?

(黒田 熱心にペンを走らせつゝ) う、うん、……

(瓜子) 何枚書けたのよ?

バンド・ボックスを置いてツカツカと黒田の傍に進み、デスクに乗りかゝつて書き上つた原稿の枚数を調べる。黒田、ヂリヂリと焦ら立つのを堪へて、まだペンを動かして居る。

(瓜子) たつた四枚? さつきからまだ一枚しきや書けないの?

(黒田) う、うん、……

仕方なしに手を休める、が、依然として原稿の方へ眼をやつてゐる。

(瓜子 黒田の横顔を睨みつけながら) ちよいと! どうするの こんな事ツて! のろくさいのねえあなたは。――早くしてくれないぢや困るぢやないの。

(黒田) う、まあ默つてておくれよ、今大事な所だから。

(瓜子) 默つてたつて書けなけりや同じ事だわ、一體いつ迄に書き上るのよ。

(黒田) 今やつと書けさうになつて來たんだから、默つておくれ、ね、後生だから。

(瓜子) いやだわ私、いつ迄に書けるんだかハツキリ云つてくれなけりやいやだわ、――ねえ、明日の朝までにきつと三十枚書けるの?

(黒田) なぜ?

(瓜子) だつて、さっしなけりや東洋文學でお金をくれないッて云ふんぢやないの。今鈴木さんに聞いたわよ。

(黒田) 大丈夫だよ、此の調子だときつと書けるよ。

(瓜子) ふん、どうだかあてになるもんか、いつだつてさうなんだから。

(黒田) 兎に角出來るだけやつて見るから、靜かに筆を執らしておくれ、お前がそんな事を云ふと却て書けなくなるぢやないか。(子供の機嫌を取るやうに)ね、好い兒だから彼方へ行つてておくれ、書き上つたら何處へでも連れてッてやるから。

云ひながら、可愛らしくて溜らぬやうに彼女の肩に兩手をかけ、頬をさすつてやる。瓜子は妙なしなを作つて甘つたれる。

(黒田) お前はほんたうに子供見たいだね、明日お金をやるからいゝぢやないか、一日ぐらゐ後れたつて、——

(瓜子 だだつ兒のやうな口調で) 駄目よ、今日此れから音樂會へ行くんだもの、お小遣ひがなくつちや仕様がないわ。

(黒田) 此の間やつたばかりぢやないか。

(瓜子) あれツぽつち一日で使つちやつたわ、——それに今洋服も出來て來ちやつたし、——

(黒田) それぢや何だね、今夜は洋服を着て行くんだね、

(瓜子) 着て行くのはいゝけれど、洋服屋にお金をやらなきやならないぢやないの。——出來た時に五十圓て云ふ約束だつたんだもの。

(黒田) そりや宜お前、明日やるからツて云へばいゝやね、

(瓜子) そんならあなた云つて頂戴、私そんな事を云ふのは嫌だわ。

（黑田）僕が云はなくつたつて、鈴木に云つて貰つたらいゝ。――ね、さうおし。

（瓜子）だからあたし、さつきの三拾圓はやらないでくれッて云つたんぢやないの。小夜子さんの方こそ明日だつていいんだわ。

（黑田）さう云つたつてお前、やらなけりやあ歸りやしないよ。

（瓜子）ぢや、お小遣ひを頂戴よ、

（黑田）いくら？

（瓜子）拾圓か拾五圓、

（黑田）そんな事を云つたつて、今五圓しかないんだからそれだけ持つておいで。

（瓜子）五圓ぢや切符を買つてしまふと、あと三圓しか殘りやしないわ、どうするのよそれッぽつちで。

（黑田）だつてお前、ないんだから仕樣がないやね、そんな分らない事を云ふもんぢやない。（抽き出しを明けて、蟇口から五圓札を出す）さ、此れを持つておいで、それだけ持つて行かれると內は一文無しになるんだよ。

瓜子、澁々札を受取る。

（黑田）ね、好い兒だから今日は此れで我慢をおし、そして彼方へ行つておくれ。（云ひながら又頰をさする）お前が此處に居られると、僕は何にも出來ないんだから。

（瓜子）此處で洋服を着ちやあいけない？

（黑田）あゝ、そこへ持つて來てあるんだね、

（瓜子）漸く機嫌を直して嬉しさうになる）ほんたうに好い色けだわよ、見せませうか。

ボックスを明けて中から服を取り出し、體につけて見ながら、

(瓜子) ほら、——どう? 似合はない?

(黒田 黒はずウツトりとする) 似合ふよ、ほんたうによく似合ふよ、

(瓜子) 此處で着て見ちやいけない? あたしあなたに手傳つて貰はうと思つたのよ。

(黒田) だけど、此處には鏡がないから、彼方へ持つてつて着て御覽よ、あとで見て上げるから。

(瓜子) あなたもちよいと入らつしやいよ、いゝぢやないの? 五分か十分ぐらゐ、

(黒田 機嫌を損ねないやうにハラハラして) まあ……獨りで着て御覽よ、——ほんたうに忙しいんだから……

(瓜子) 此の間買つたエナメルの靴ね、あれを今日は卸さうと思ふの。此の洋服にはあれがよかなくつて?

(黒田) あゝあれがいゝね、それから帽子は?

(瓜子) 帽子もあの新しいのにするわ、——それぢや今直ぐ着換へて來るわよ、

(黒田) あゝ、着換へたら見せておくれ、

瓜子、洋服をボックスに收め、それを抱へていそいそと襖より去る。

黒田ほつとしたやうに再びペンを執つて稿を續ける、が、何となくソハソハして頭が亂れてしまつたらしく、五六行書くと手を休めて、煙草を吸つて居る。

瓜子が這入つて來る。洋服を着て贅吉に貰つた腕環を篏め、エナメルの靴を穿き、手に帽子を持つて居る。

(瓜子 ニコニコしながら、得意さうに直立して) どう? あなた、見て頂戴、

(黒田 ペンを擱いて、椅子のまゝぐるりと振り返る) 素敵だ、非常によく似合ふ、——その帽子を被つて御覽。(瓜子帽子を被る) さうやつてるとほんとに可愛いね、十六七にしきや見えないよ。

(瓜子　足の先を伸ばして見ながら)靴の恰好も中々いゝでしよ、――後ろはどう？(さう云つて今度は後ろ向い、

(黒田)後ろだつて惡かないよ、お前は肩つきがいゝからね。

(瓜子)あの、濟まないけれど、帽子へ此のピンを刺してくれない？

云ひがなハット・ピンを持つて黒田の傍へ行き、しなだれるやうに寄りかゝる。

(黒田)今刺さなくつたつていゝぢやないか。

(瓜子)だつて、もう出掛けるのよ。

(黒田　不審さうに彼女を視詰めて)もう？

(瓜子　空惚けながら)、さうよ、まあ兎に角刺して頂戴、――

黒田、仕方なしにピンを受け取り、立ち上つて刺してやる。

(瓜子　刺して貰ひながら)あなた私が居れば却て勉强が出來ないでせう、だから其の積りで少し早目に出かけるのよ。

(黒田　ピンを刺し終つて椅子にかけながら遠慮がちに尋ねる)お前此の腕環はどうしたんだい？

(瓜子)此れ？　此れは高村さんに貰つたの、――貰つちやいけない？

(黒田　微かに眉を顰らせる)いけないことはないけれど、……

(瓜子　ぐつと腕を黒田の鼻先に突き付ける)どう？　似合ふでせう、

云ひながら黒田の膝に腰かけ、その腕で彼の首をかゝへ、片手でデスクの抽き出しを明けて、中を掻き廻しつゝ獨り言のやうに、

(瓜子)いけないッたつて仕様がないわよ、もう貰つちまつたんだから。――

(黒田)お前そんな所を明けて何を搜して居るんだい？

(瓜子　抽き出しから黒田の金時計を取り出す)あなた、此れを二三日貸して頂戴な、
(黒田)どうするんだいそんな物を?
(瓜子　鼻を鳴らして甘つたれる)だつて、あたし五圓きりぢやとてもお小遣ひが足りないんだもの、ねえ、いゝぢやないの、明日お金が這入るんだから、共の間此れを何したつて、――
(黒田　まあ、それだけはお止しよ、入れちまふと中々出せないから、
(瓜子)大丈夫よ、きつと出すわよ、きつと、――ね、いゝでせう?
(黒田)お止しお止し、――此方へお出し、
瓜子の手にある時計を掴む。
(瓜子　奪ひ取らうとして手をもがきながら)よう、放してよ! 放してツたら!(どうしても放さないので忽ちつんとする)いゝわよそんなら、――けちんぼ! ほんとにけちんぼだわ、そんな事を云ふなら私いつ迄だつて此處を動きやしないから。さあ、勉強するならして御覽なさい。
いきなりデスクへ飛び上つて腰を掛ける、その拍子に原稿用紙が疊へ滑り落ちてしまふ。
(黒田　訴へるやうに彼女を見上げる)だけどお前、此れを入れるにしたところで、そんななりをしてお前が持つて行く積りなのかい?
(瓜子)えゝ持つて行くわよ、――工合が悪ければ高村さんに頼むからいゝわ。
(黒田　非常に不安な顔つきになる)高村に?
(瓜子)高村さんも音樂會へ行くつて云つて居たんだから、さうなれば私誘つて行くわ。――さあ、ぐずぐずしないで

出して頂戴よ、(手を差し伸べる)ね、好い兒好い兒、ほんたうに好い兒、

黒田、默つて時計を彼女に渡す。

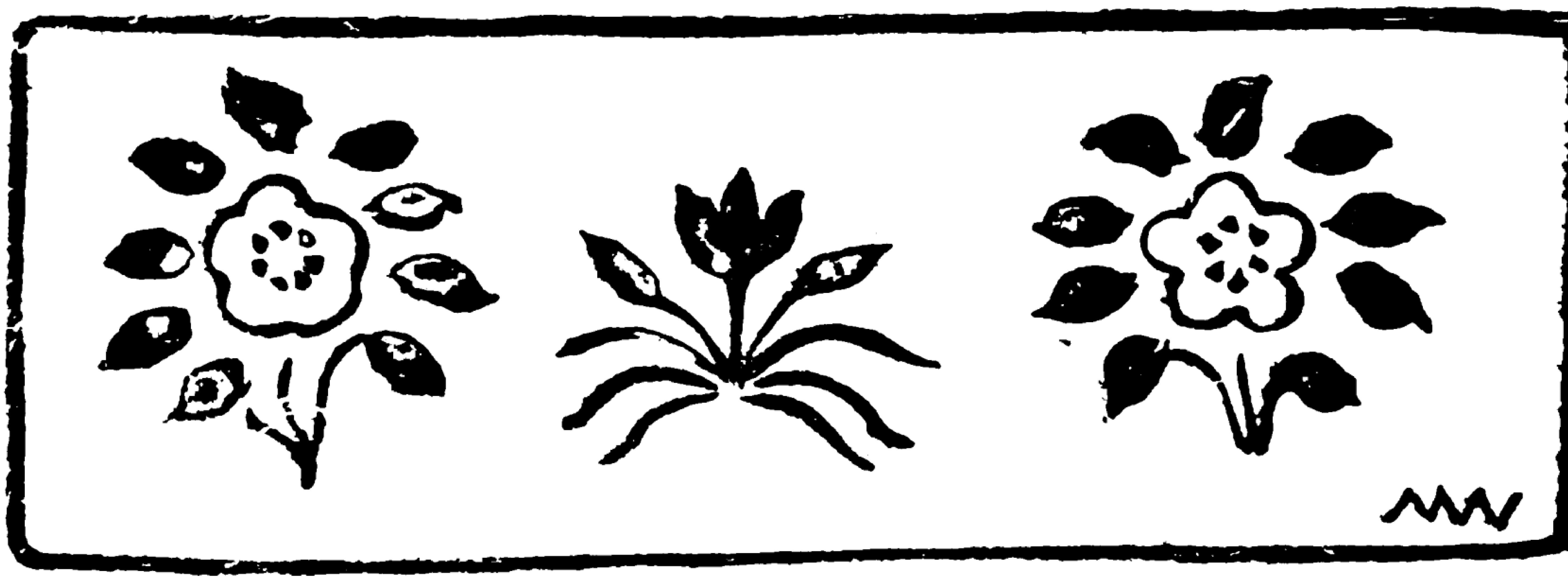
(瓜子) 有り難う、感心ねあなたは、だから私あなたが好きだわ、(飛び降りて彼を抱き締める)それぢや行つて來てよ
からね、その際にあなた出來るだけ書いて頂戴、書き上つたら一緒に何處かへ行きますからね、——

(黒田) 己はお前が可愛くつて仕樣がないんだ、お前の爲めなら己はどんな苦勞でもする。どうか己の心持ちを察して
おくれ、な、お願ひだから、——

(瓜子) えゝ分つてるわよ、だからあなたも黒田は駄目になつたなんて云はれないやうに、今度こそ一生懸命にいゝ物
を書いて頂戴、ね、分つて?——ぢや行つて來るわ。

云ひ捨てて樂しさうに、ひらりと身を翻して飛ぶやうにして袂より去る。黒田、力なげに落ち散つた原稿を拾ひ取り、デスクに向つて又暫く考へながら頭を採み、やがてペンを執り上げて極めて遲々たる速力で、二字三字づつ休み休み書きつゞけて行く。——靜かに幕が下りる。

(大正十一年三月稿)



後の日に

或は「續々その日暮しをする人」

佐藤春夫

「もしこんなものでもよかつたら持つて行つて下さい。私には、今なんにも出來なくなつてゐるのですから……」

さう言つて私は、たつた一枚しかない詩稿をその青年に渡した。

つれなかりせばなか〳〵に
そらにわすれてすぎなまし
そもいくそたびしぼりけむ
たもとせつなしかゝたもと

せつなさわれにつのるとき
きみをたのめるものからに

沾びてはかわくものなれば
けふいかにぞやそのたもと

——目をそれらの文字の上へさらして、私の原稿を受取つた青年は「後の日に」といふその詩を呟くやうに口ずさんでゐたが、それを懐に入れたから私は、もう彼が歸ることかと思つてゐた。さう思ふともう少しの間、彼にここで座つてゐてもらひ度いような氣がした。別に何といふ話はなかつたのだが私はただそんなふうに人なつつこくなつてゐたのである。ところがもう歸るかと思つたその青年——或る同人雜誌の編輯者であつたが——は、ちらと目を動かして窓外の墓地のある丘の方を瞥見して、その黑いまでに青い樹立へ雨あがりのはげしい日光が降りそそいでゐるのを見たからであらう——

「どうもひどく暑くなりましたね」

そんなことを言つて、立上りさうであつた體をもう一度座に落ち着けた。それから彼は一言二言詩といふものに就ての彼の意見を述べた。別に達見ではなかつたやうだけれどもしかし反對しなければならない事でもなかつたやうだつたから私はただ輕く贊成して置いた。それがまあ少し大業に言ふと間違ひの起りで、その青年はひきつづいてさまざまな文學の議論をするのであつた。藝術に就ての話は私の最も好むところである——いや、少くとも以前はさうであつた。しかし今の私には文學などはどうであつてもいいのだ。私は私の目の前でそのやうに元氣よく談論し出した青年を見て何だか少し腹立しくなつた。別に何といふ理由もありつこはない——何故かといふのにその青年は私の詩などを大變に讃めてゐてもくれるやうであつたから、ただ私はもうこの青年に歸つてもらひ度いと思つた——さつき彼が歸りさうにしたときもう少しここにゐてもらひ度いと思つた私が（！）である。私はそれほどまでに我儘でそれほどまでに氣まぐ

れであつた。さうしてその時の私の氣持に一番そぐふことはと云へば、一言も口を利かないでその靑年に私のそばに坐つてゐてもらひ度かつたのである。だがそんなことが相手に知れよう道理もなかつたと見えて、彼はやはりいつまででも文藝の話を、殆んどひとりで興に乘つて話してゐた。彼はなかなか上手な話手のやうであつた。私はただ時折「さうです」とか「え」とか「なるほど」とかそんな相の手を入れただけであつた。私と別だん深い知り合ひといふわけでもないこの相手はさういふ風な私を見て、私のことをさぞ温厚な先輩だと思つたことであらう。ところで私は、正直に言ふが彼のいふ言葉をその一くぎりだつて聽いてはゐなかつたのである。それ故、彼がえらい事を或は愚劣なことをその外の何を言つてゐたかを私はもとより少しも知らない。それくらゐならば私は彼にそのわけを言つてもう歸つてくれと言つた方がいいのかも知れないが、相手がせつかくそれほどまで——實際聞き手がどんなに無關心であらうと氣がつかないほどまでにそれほど熱心に語つてゐる話を、さうすげなく腰を折るといふことは私には出來ないことであつた。私は、相手の氣心を知らないこんな話手を持つたことを今日の災難とまああきらめて、彼の言ひたいだけを言はせるより外はない。そればかりか彼とても獨り言を言つてゐるわけではないのだから、しかもこの靑年といふのは私には多大の好意を寄せてもゐるらしいのだから、私も出來るだけは我慢をして彼の言つてゐるのを聞かなければならないだらう。

この人生のさまざまな場合——といつて別に何もものの本などで見た面倒なことなどを思ひ起すまでもなく、私の身の上に今までにふりかかつて來た出來事のうちの今まだ心に脈を打つてゐることをとつて見ても、今日のこれぐらゐの災難やこんな話相手の一人ぐらゐを我慢するのはまあ何でもない事ではないか——私は心のなかで、わざとさう誇張してその結局多少のユウモオ（？）をもつて、この熱心な話相手を我慢しようと努力したのである。——實際、私はもつともつとひどい相手にさへ我慢をして聞いたではなかつたか。その男は實に勝手放題を言ひたい存分な、どうかするとこ

ちらの言ひたい事を推測して先まわりして言つてゐるのじやないかと思へるやうなことまで言つてゐたやうではあつたが、私はそれをも默つて聞き流して來た。あまりと思つてその時私は言ひ返さうとしたが直ぐ言葉を呑み込んだ。私に挑戰したがつてゐた彼は、私がただ聞き流してゐるといふので私を卑屈だとまで言つた。なるほど「恨小非君子無毒不丈夫」とかいふ諺が本當なら、私はもしかすると卑屈であつたかも知れない。しかし私にはあれに敵對できるやうなそんなヴアルガアな言葉は言へなかつたのである。それといふのもその場に自分が愛してゐるかの女があゝして座つてゐたからに外ならない。さうして私は時々あの女の瞳のなかを見入つて、あの女の瞳が、今現にさまざまな臆測によつてさもその卑しい心事をあばき出したかのやうに言はれてゐるその私といふものを、一圖に無心に信じてゐてくれることを、さうして時々はことさらにさういふ表情で私をなぐさいてさへ居てくれるその瞳を認めることだけで、私はもうそれだけで澤山であつた。私はかの女が折角私の本當を知つてゐてくれる前で、何も理不盡な賣り言葉と敢て對抗するやうなそんな言葉で自分自身を傷けるには及ばないと思つたのである……。が、そんなことは今更どうでもいいことにしようではないか。さうさう、それよりは今私の目の前にゐるこの話相手の言ふことに耳を借さなけや――

「……が、ですね。たゞあなたの詩のなかには近代心といふものがなくつて、個性がどうも乏しくつて、それにあまり凝つてゐるのでパッションがぬけてしまつて、そのくせ甘くなつてゐるのではありますまいか。きちんと纏つてゐるといふ事は時には缺點になりますからね。」

その青年はどういふつづき具合からだか知らなかつたが、そんなことを言つてゐるところであつた。そこで私は本意なげに一言口を挾んだ――

「はあ、さうですね。――尤もその詩はそれや琴唄のやうなつもりなのですが。――いや、尤もその外の詩だつてやは

りそんなところもありますかな」

すると青年は私の言葉に對してやはり何かと言ひつづけるやうであつた。しかしその青年の言葉にともかくも受答へをした私は、それで一先づ三分なり五分なり彼に對する義務を盡すことが出來たかと思ふとほつとしたものと見えて私は又してももう何も聞いてはゐなかつた。ただ私は口のなかで自作の詩を幾度もくりかへして口誦んでゐた。が、それほどその自分が氣に入つてゐたものと思はれたくない。實はただ私は、この間の夜更けにそれを作つて以來わけもなく妙にそれが口についてしまつてゐるのであつた。さうして何がしらそれを口誦んでゐると、たとへば思ひあまつた時に一つ吐息をすればその瞬間だけでも胸がいくらかはくつろぐやうに、そんなつまらない詩ではあつたが、まあ吐息ぐらゐの値打は私にはあつた。それにしても一たいその詩には、私自身のなかの大へんな矛盾を意味してゐたことを、私はそれを口誦んでゐる今はもとよりそれを作りながらにもすでに氣がついてはゐた――今日このごろのかの女の氣持ちが果してどんなふうに變つて來てゐるであらうか、などと私は今さらそんなことを考へることは何もない筈であつた。私がすべきことはただ一途にかの女の幸福を望むことだけであつた。それの方がかの女にとつて幸福であるといふなら、私のことなどにたとへば夜あけ方に見たへんな夢のきれつぱしぐらゐに思つて忘れてしまつても私はかまはないと思つてゐる。もう一歩進めて、私のことなどを思ひ出す間もないほど幸福であれと言ふのがどうやら本當らしいけれども、私はここで嘘を言ひたくない。で、私は「その方が彼の女にとつて幸福なら」といふ條件のもとに、私は敢て自分が自分の愛するものから忘れられることをも厭はないと思つた。さういふ心のそこには、しかし、私の思つてゐる彼の女は私を決して忘れる筈はないといふ肚があつたからである。私はさう信じてゐる。理詰めにして見ても、あの時の私を忘れるやうな女であつて見ればたとひ私はかの女に忘れられ裏切られたとして、私の心がそのために暗憺となることは少

しもない筈である。何故かといふのに萬が一そのやうな眞價を知らない女をならば、その心を得ることが出來なかつたからと言つて、それを歎くことは馬鹿げてゐるからである。しかも私の信じてゐるかの女は、それこそ神聖な馬鹿とでもいふべき單純を持つてこそはゐるけれども、決して眞實を感ずることが出來ないやうな女ではなかつたからである。さうして私はといふに、私はかの女のためには私のやうなものとしての精一ぱいのことをして來てゐる。かの女の爲めに善くあれと思ひこそはしたが、かの女に憂き目を見せたやうなことは一度もしなかつたつもりである。そんなことを言つてこれがかの女に今更に知られて感謝されようなどと私は寸毫も思ふのではない。さうしてかの女が感謝すべきことは何もないのである――それはただ、言はばかの女自身の德とでも言つた方が適當だからである。さうして私にとつては、私がかの女のために善かれとのみ念じて、かの女の美德であるあの單純さを利用して少しでも自分を樂しませるそのためにかの女に憂き目を見せるやうなことをせずに濟んだといふことは、このことあるばかりで、私があの出來事をいつまでも自分の心の寶にすることも出來もする。かの女のそばに私がゐなければならない時に私はかの女のそばにゐた。私がゐない方がいいと言へば私はかの女のそばから去つて來た。私とかの女とが戀を語つたあの晩秋から次の早春への悲しくも短い半年ばかりではなく、私はその時よりは足かけ三年も以前から、決してその人に輕々しく傳げはしなかつたしまたそれほどに激しいものでもなかつたが、ともかくも私はかの女を心にいとしく思つてゐた――私が一の事を後に彼の女に話した時には、私がそれまでにかの女にむかつて決してそんなそぶりを見せなかつたしるしには彼の女が全くその事の意外なのに驚いたほどであつた。さうして、どうしてその時に早くその事を言つてはくれなかつたのかとも言つた。――私たち、私とかの女とがそんなことを言ひ合つたのは、しかし、決してその間に何の間違つた方法や順序によつてでもなかつたことは、たとひ私を惡しさまに思ふ人が何と思はうとも、私は自分で自分を信ず

ることが出來る。しかし、今となつて見ればそんなことを語り合つたことが私を苦しめてゐるではないか。しかし私はすべてをあきらめなければならない――。かの女のそばに私がゐた方がよかつた時にはそこにゐて、居なくなつた方がよかつた時には彼の女のために敢て立去つて來た私は、今日とてもかの女の心のそばに私の心が居る方がいいならばそこに居もしようし、居ない方がいいのであつて見ればかの女のこころのなかから私の心は拂ひ退けられても仕方はない。いやいや、それればかりではない、もしかすれば或は今になつて反つてかの女が私を惡しざまに思ひなしてゐないとも限らない。――ふと私は、かの女のことをそんなふうに思つたりすることも時にはないではなかつた。――「……友といへど、そはあす我名を忘るる人なるべく、さらずは我なき後には我をあし樣に罵る人なるべし。女といへど、そは我なき後にはあだし人の手枕に我上をおとしめて笑ひぐさとし、それもてその人のねたみ心を打消さむとする女なるべし」私は昔讀んでどうしてだか忘れずにゐるそんな句を、端なくも切なく時々思ひ起すことがあつた。試みに思ふがいい、あの時涙を光らせた大きな目で私の方を信じてゐることを無言のうちに私に告げたかの女も亦、今その夫とともに、その男が言ふと同じやうに私を惡しざまに思做し又口にも言つてはゐないとは限らないのである。だが、とさう私は私のふるへる胸のなかで私のこの堪えがたい荒れ果てた考へを開墾しなければならないとあせつた。なるほどかの女が私を惡しざまに言ふ。それは決してないとは限らない。しかし、しかし、それは決してかの女の本心ではない筈だ。と言つてしかしまた、心にもなくただ口さきで言つてゐるのでないともたしかである――正直なかの女はそんなことをする道理がないからである。かの女が言ふ以上は心からさう思ひ込んでからであらうが、しかしそれはかの女の本心からであらう筈もない。正直なだけに單純なかの女はぽつぽつと本心にもないとを思ひ込ませられるやうにされてゐるだけである。かの女が知らず知らずにも無意識にさうさせられてゐるその思ひちがひは、もし事實にあつたとして見たら、それは私と

かの女とが一目でも逢つて一言でも話をするといふ道を失つたことから來てゐるに過ぎない——ただそれだけの事だ。さうしてその道がどうして失はれたかといふとそれはただ極めてあいまいに奪はれただけである。——私は今ごくぼんやりしたことを書いてるが、全く私のかういふ心持ちをここへはつきり書かうためには、事はあまりに複雜して、然うまるでこしらへごとの道化悲壯劇のやうに複雜で、そのためには一個の三部作を要するであらう。この神のやうな半身の惡魔が舞臺監督をした演技のすべてを私はどうかしてうつし出して見たいものである。さうしてそれが私の藝術的製作になつてくれればいい。いや、そんな大げさなことよりもそれが思ふとほり書くことが出來たなら萬が一かの女がそれを見るやうなことでもあつた時に、私といふものの立ち場はもつとはつきりと解りもしよう。ただそれだけでもいい。しかし今の私のやうにかう心がくづ折れてしまつてゐては、この志が結局どうなることやらもわからない。現にあの出來事の大たいを頭のなかでちよつと考へつづけただけでさへも私の頭と心臟とは歪になつてつぶれさうな氣がするではないか。さうしてこの出來事はおもむろに私の全生涯を少しづつではあるが蝕んで、もう私を駄目なものにしてしまはないとさへもかぎらない。さうして私はもしさうなつたならば、私の心のなかにそんなに蟠つてゐる感情を、それこそとりとめのないさうし誰にても決して了解されない狂語で僅に言ふことが出來る以外に、それをどうして殘りなく吐露し盡すことが出來るだらうか。このすべての自分の苦衷を自分のなかに宿したきりで生涯を終るかも知れないといふ事を考へることは、それ自身も亦どうしても私には堪えがたい事である……

——讀者は定めし私があの青年、私の面前の客をいつまでも擲り放しておいて、自分のことばかりここへ書きつづけるのを讀者として咎めるかも知れない。實際、私は今ここで讀者諸君を思はずも置いてきぼりにしてしまつてゐたやうに、その時も全く私は、私の客のことなどは何時の間にやら些も關知せずに、ただもう自分自身のもの思ひのなかへも

ぐり込んでしまつてゐたのであつた。さうして私がその自分にふと氣がついて急に目を上げた時には、私の氣の毒なお客の方でも亦、ただもううわのそらなその兩手にいつから氣がついてゐたものか彼も默つてしまつてゐて、目を伏せて疊の上へ今落ちた煙草の灰を指さきで弄んでゐた今のさつきの私を、彼はぢつと見つめてゐたらしかつた。私の目と彼の目とは不意に視線の途中でぶつつかつた。彼は私に就てのあの噂をでも聞いてゐたのであらう。その目のなかに好奇心と憐憫とをごつちやに光らせてゐた——と、さう私は瞬間に見てとつた——

「ああ、蟬が啼き初めましたね。」

——私は實にその時、途方もないことを言つてしまつてゐた。それから言はばてれかくしに、立上つて西日の少し射さうとしてゐる、しかしそれ以上決して射し込まない事をよく知つてゐる窓の戸を少し引いた。それから再び座にかへつた時に、私は相手が意味もなくいくらか恐縮してゐるらしいのを見て言つた。——

「やあ、失敬でした。實は君の言ふことを少し聞き落してゐましたよ。ひよつと別のことが頭をかすめたものだから」

何とながい間、それはかすめたことだらうと客は思つたかも知れない。私は重ねて言つた「それに急に一層暑くなつたせゐか氣分が惡いやうな具合でしてね——」

「はあ、それはいけませんね」

「なあに、何でもないのです。ただこのごろ、運動が足りなかつたり、寢が足りなかつたり、そのくせ思ふことだけが多すぎるのですね。」

私は何氣なくさう言つてしまつてから、この男に用もない心持まで訴へてしまつたやうな氣がした。それといふのは私の少し吃るやうな早口が、その時、いかにも重い聲で出たからであつた。私はその言葉のつづきとして笑はうかと思

つたがそれがきつとわざとらしく響くだらうと思ふと笑へなかつた。「もう笑ふすべさへも忘れた」——そんな句がハイネにあつたやうに思つて、私はその句を味つて居た。

その夕方私はぐつたりと自分の部屋のなかへぶつ倒れて重苦しいことをぢつと考へてゐると、又一人客が來た。私は今日はもうこの上に客と對談する氣苦勞には堪えられなかつた。まだ日の暮れ切らない夏の夕方だが、私はそんなことをよそにしてひとり蒲團のなかにもぐつてゐたかつた。が、その客といふのは、旅にゐたり旅から歸つて來て後のあのさまざまなことで居所のわからない私を久しぶりに探しあてて、一週間ほど前にも來てくれたのだのに氣分が惡いと言つて會はずに歸したし、そのためであらう、今日遊びに來ることは三日ほど前から通知して來てもあつたし、その上わざ〳〵本鄕の方から遠くたづねて來たのだと思へば、私はどうもやはり會はないではゐられなかつた。私は彼を座敷へ通しはしたが困つた事に、この客といふのはまだ二十になるかならない少年で、もう三年越しの知り合ひだけれども殆んと無口で、書問の客とは反對に見るから內氣らしい吻を言ふにも顏が少し赤くなつたり、顏をまともに見られるとうつ向いてしまつたりするやうな性質であつた。その彼の氣質を私はまへから好もしく思つてゐたが、さて今日のやうな日に彼のやうな客を持つた私は、私の方で默つてゐれば彼の方でもいつまでも默つてゐて、この久しぶりのおとなしい少年が私にひどく氣を兼ねて默つて膝もくづさないで居るのを見ると、私の方で却つて氣づまりになつた。私は一さうこれは彼を外へつれ出して行つて一緒に散步するに越した事はないと思ひついた。一緒に散步をすれば客への義理もすむし、それに何か目につくものを話題にすることも出來るし、又勝手に物思ひをして居てもそれほどをかしくもない。私は彼をつれ出して散步に出た——しかし、私は出かける前からあまり氣がすすまなかつたのである。それは私にはその時小使錢がなかつたし、また小使錢もないから外へは出られないと思つてその二三日頃へは剃刀を當てなかつた。私

は洋服を着代へはしたが何かと自分で自分の影がうすいやうな氣がしてならなかつた。たつた一つその時、私にけふ散歩する甲斐があると思はれたのは一本のステツキであつた。それは一月ほど前に買つたのであるが、その後は雨つづきで殆んど散歩には出られなかつたし、ほんのまだ三度か四度持つて出ただけである。それは直徑七八分ぐらいで長さ四寸近くのオニツクスの握りのあるもので、この石の手ざわりはすべつこくてその上ひやりとする。この赤と乳白とのまだらのある半透明の石は黒檀とその光澤の調子がしつくり合つてゐて、それにそのつぎめにある金の金具の具合もよかつた。あまり氣取りすぎるやうでもあつたが私には氣に入つてゐた。そんな外形のことよりももつと大切なことにはこのステツキは、ステツキの第一の條件でありしかもステツキの製作人が得て全く無視してゐるところの重さの具合が實に申し分なかつた。或るステツキは全體にあまり重すぎる事がある。或るものは反對に輕すぎることがある。さりかと思ふと頭だけが重くつてそのためにそれを持つた手に妙に不安定な手ごたへを與へるものもある。ところが私のこの少し細すぎるやうなステツキは拇指と人差指とでつまんでゐると私の片手にそれこそ微妙な、これより一匁重くとも一匁輕くてもいけないといふほどの重さを感じさせて、それは手にものを持つてゐるといふ荷やつかいの代りに、自分の手は今こんないいものを持つてゐられるほど自由なのだとさういふ風に思はれるものであつた。まあ譬へて見れば、それはいい妻をもつて愛に依つて樂しい束縛を喜んでゐる男のやうなものではないだらうか――、自分の戀してゐる考へを忘れようと思つて、强ひて手のステツキの事を考察（？）してみたりしてゐた私は、またしても何時の間にやら、自分の考へが思ひたくない事の方へにぢり寄つて行つてゐるのに氣がつくのであつた。

「かうして歩いて見ても何も面白い事もないやうだね。何時だらう」

私は自分の考へを打切りたかつたから、そんなことを言つて自分の時計を出して見たりした。私の連れは私のその言

葉には「え」とか何とか答へたきりで、その若々しいむしろ子供〳〵した顔へどうしてだか美しい笑を一ぱいにうかべて歩いてゐた。銀座の大通りからすぐそれた横町のところに緣日があつた。私たちは私がさきに立つてその緣日の方へ歩いて行つた。そこに何の興味もあつたわけではない。ただ行きどころがなかつたので私はそつちの方へ足を向けて見たのだ。すると、ふと私の目に這入つたのは、その町並の夜店の一つに臺の上にコップへ浮べてゐる水中花であつた。このおもちやのまわりには人が集まつてゐなかつたのと、それにその細工ものの花がガラスのなかで瓦斯の光で美しくてらし出されてゐたので、私の目を何氣なく引いたのであらう。それとも私の頭のなかに深くかげを潜めてゐた意識が、突嗟に、私自身も氣がつかないほど突嗟に浮び出たのであつたかもしれない。といふのは私がその夜店の水中花を見た瞬間に、――「さうだ。あの時、あそこの茶箪笥の上にやつぱりこれがこんなふうに置いてあつたつけ」――私は氣がつかないでその夜店のそばへ立留つてしまつてゐたが氣がついて再び歩き出した――あの晩、あの茶箪笥の上におかれてあつたコップのなかに、多分晝間子どものなぐさみに浮かせたのがそのままであつたらう。やはりコップのなかにあれが浮いてゐた。そのあざやかな色の方へ私は泪がたまつて來た目をそらしたのだ。――その時には私とかの女とはもう自分たちの話は一切避けて、出來るだけ外の話をした。他人の噂ばかりした。それは外がわから見て、それらの人の生涯はきつとさびしいものだらうと思へる人たちの噂であつた。ふたりともしづかな壓えつけられてゐるやうな話聲のあとで、かの女は突然いくらかヒステリカルに言つた。「いえいえ、さびしい人は世の中に一人や二人ではないのですわ。ねえ、さうおぼえてゐらつしやい。皆さうです。私だつて、私だつてさびしいのです――今は大事にされて仕合せな妻の筈だのに、邪魔ものにされてゐたあの頃のほうがまだしも心に彈みがありました」かの女はさう言つたかと思ふと突然に大つぶな涙を長火鉢の灰のなかへぼたぼたと落した。その目を上げ、ぢつと私を見上げて私を見守つた。泣いた

時には一さう美しく〵どうやら靈活なものに見えるその目から私は自分の目をそらした。偶然に私の目が突き當つたところに、茶箪笥の上にコップのなかの水中花があつた。灯かげのよくとどかないうす暗い壁を背景にして、コップの水におつとりと沈みながら浮いたものは形がくしやくしやと私の目にうつつてただ赤と緑とがくつきり浮び出して見えるのを私はぢつと見据えて、いつまでも默つてゐた。柱時計が十時を打つた。私はもう歸らなければならないと思つて、しかしかの女の家の時計はひどく〵進むくせがあるのを私はよく知つてもゐたし、一分でも長くゐたいやうな氣がして、私は自分の時計を出して見た。「何分進んで居ます?」かの女は涸いたやうな聲でたづねた。「十五分前です」と私は答へた。「もう少しゐらつしやい――あなたの時計で十時まで。さうしたらお歸りなさい。」それつきり又ふたりはその十五分の間何も言はなかつた。私は私をなぐさめてくれるためにかの女が精一ぱいの範圍で言つてくれたあの言葉を心のなかでうれしく思つていいものかどうかを疑つた――私はかの女の幸福を願ふべきであるのに、私はかの女が私のためにたとひいくらかでも心を惱まされてゐて、愛せられる妻といふ仕合をうつろに思ふといふことを喜んでいいかどうかを考へなければならなかつた。しかしそれはただ理窟であつて、私の心はやはりこのさびしさも未だふたりで分け合つてゐると思ふことは言ふまでもなくうれしくない事ではない。それならば私は私のためにならかの女の不幸をも望んでゐることになる。何にせよ私は、私が今心に決めてゐるやうに、たとひすべての人々が心から私を歡迎してくれるにしてももう二度とこの家庭へ足を踏み入れないのがいいのだ。況んや、私はこの家庭でたとひ理窟や道理の上だけで迎へられても、かの女とその私に少しづつなづいて來てゐた子供とを除いた他の何人も私をやはり迷惑な客としてゐることは見え透いてゐる。實際、私はもうかの女の夫とも昔のやうにフランクな話題はなくなつた。それは私のせいでもあるし、また彼のせいでもあるし、その奇妙な二人がつとめて語つてゐる間にゐてかの女が立つ瀬がなささうに氣を揉んでゐるのを見

るのは決して私の樂しさにはならないし、されぱと言つて私が全く閑却されて、彼が私の面前でかの女に、昔とはうつて變つたやさしさを見せ又、かの女が彼に忠實に仕へてゐる妻であることをはつきりと見ることは、私にとつても幸福とすべき事であなりがら、私はやはりさうばかりは決して思はない。何にしても私はもう何時でもここに座つてゐない方がいい人間である。さうして見れば私は今夜かぎりもうかの女に會ひには來ない事になる。——その十五分は私のさういふ物思ひのうちに去つたやうである。私は立上ると、かの女も柱時計を見上げながら立上つて、先に立つて玄關の方へ私を送り出した。次の間の樣子に氣を引かれてゐたらしい若い女中が不意にうろたへたやうに玄關の電燈をひねつてくれたが……

「え？何ですか」

私は——ひとりで思ひ耽つてゐた私は、私と連れて歩いてゐるあの少年が、その時何か私に言ひかけたやうな氣がしてふりかへつた。少年は私が問ひかへした時、彼の方が反つてちよつと狼狽したらしく、いつものきまり惡るげな半分口のなかで言ふ言ひ方で言つた——

「いえ、別だん何でもないことで……ただ、大へん、かう、あなたは猫背で——あなたが歩くのをうしろから見てゐますと——。」

「ああ、その事か」私は氣輕るに言つた「それや昔から言はれるのです」——あの女もよく私の歩きぶりを眞似したりして私をからかつた事がある、Kもこのごろは一さうひどくなつたと言つた、と私は思ひ出しながら「この間もある友人がね。僕の歩き方を年よりのやうだといふのだ。人生の重荷で多分腰が曲つたのだらうと僕が言ふと、そんな抽象的なことがフィジカルな影響を與へるものか。しつかりし給へと言つて叱られたがね。何、これや昔からの僕のくせさ。

君は未だ知らなかつたかね。尤も君と一緒に歩くのは今夜が始めてだつたな。――粹だよ、かうすれば直るだらう。」

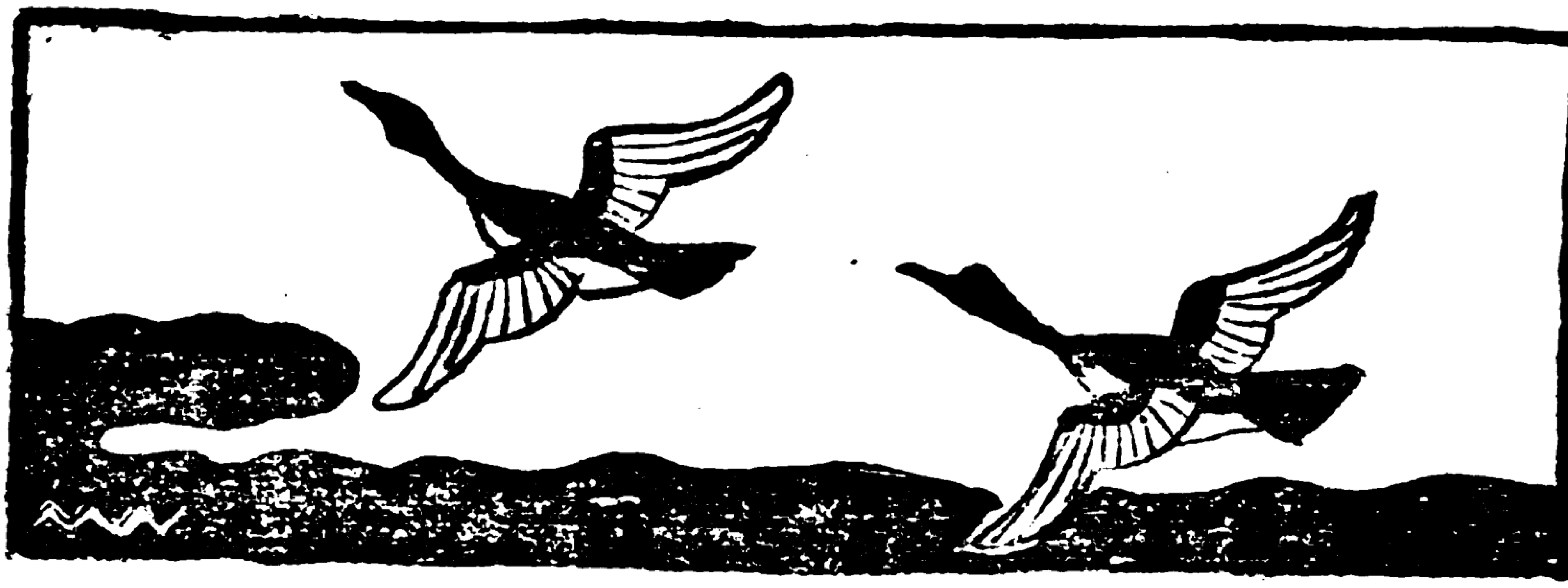
私は自分があんなことを思ひつゞけてゐる間に、いつのまにやらいつもの自分で注意してゐる姿勢をわすれて、見すぼらしい前屈みになつてゐたことに氣がついて、快活らしくそんなことを話しながら姿勢を直してくるりと向き直つた。

「つまらない歸らう。下町の緣日だから少しは美しい女でもゐるかも知れないと思つたのに何もありやしない。」人ごみのなかに籠のなかの草雲雀が啼いてゐるのを耳にしながら、私はそんなことをも言つてみた。全く私は町などを歩いて見ても、その夜などはしばらくぶりの天氣で大通りはひどい人出であつたのにうちひさす都大路にはひとりとして美しい女がゐないのを私はさびしいような氣がしたのも本當である。どれもこれもかの女のやうに美しくはなかつた。さうして私は私がかの女を完全に偶像準據にしてゐる以上、かの女がもう一人そつくり出て來ない以上はどんなに美しい者が出て來やうとも駄目に思ふだらうといふ自分に氣がついて、私はいつまでも愛戀の幽靈に憑き纏はれてゐるのが苦しかつた。それから脫け出さうと考へる矢さきに、たまたま少し美しいやうに思ふ人などを見かけることなどがあつても、しかし私は思ふのであつた――形の美しいのは直ぐにも見えるが心などは見えるものじやない。あんなに心の美しいさうしてそれがはつきり見えるのはもう外にはあるものじやない……

私は再びくるりと向き直つた。「君、人ごみの方はうるさいからやめよう。河岸の方の靜かなところを歩いて見よう」

或る長編小說の主人公赤木淸吉が書いたものとして、その長編小說の一部分をなしてゐるのが先日お目にかけた「その日暮しをする人」「續その日暮しをする人」及びこの「續々その日暮しをする人」といふ三つの斷篇である。さうしてこの最後のものにはまた二十枚ばかりつゞいてゐて、私なる赤木淸吉とこの青年とがさびしい河岸を歩いてゐると、あ

の内氣な青年が出し拔けに戀の話を初めて、その懷には今日出がけに受取つたといふ戀の手紙を忍ばしてゐたことや、彼等が再び人ごみの方へ出て來た時に、又しても物思ひに耽るやうな機會に出くわした赤木淸吉は、いつの間にか前屈みに步き初めてゐて、あの大へん氣に入つてゐるらしいステッキを引きずつて步いてゐるうちに、それを後からせかせか步いて來た人に蹴られて、そのオニックスの握が石甃の上でぽりと二つに折れてしまつたことや、その外何かにつけてさまざまの述懷があるが、或はもう少しくどくなりかかつたらうとも思ふし、又それを今寫し直して居る時間もないから省略することにした。が、それも御覽になりたいといふならば、私はまたいつか、その世にはまだ出ない長編小說のうちからそれらをも寫し出してお目にかけてもいい。



岩見重太郎（一幕）

—An Allegory—

菊池寛

人物

伊東亘。江州新田村に道場を開ける劍客、六十に近し。

村松平左衛門。伊東の高弟。同村の豪農。五十を越えたる老人。

村松平太郎。その子、伊東の弟子、年齢二十五六の若者。

下男重助。村松家の召使。
……實は天下の豪傑岩見重太郎——

赤星主膳
大日五郎左衛門
岡野新之丞
金谷三郎左衛門
長尾監物
吉長八左衛門
「六人組と稱する道場荒しの劍客。」

山崎七郎次。伊東の弟子。
その他重要ならざる人物多勢。

場　所
江州新田村。

時　代
豐太閤在世當時。

第一場

伊東亘の道場。拭き淨められたる板の間、正面に床の間があり、八幡大菩薩の軸がかゝつてゐ、その前に神酒が供へてある。正面の羽目板に、「兵法心得之事」「稽古日之事」など云ふ貼り紙がある。下手に木刀掛があり、木刀が幾本となくかゝつてゐる。幕開く。中央に道場の主、伊東亘が病氣の體にて衰弱した顏をして、坐つて居る。上手に、赤星大日以下、六人の武者。之れに對抗するやうに村松平太郎以下六人の弟子が坐つて居る。その背後に、多くの門人が堅唾を呑んで控へて居る。

伊東。(稍苦しげな呼吸)昨夜も申上げた通、折角お立ち寄り下されたに、拙者折惡しく病中にて、殘念ながらお相手いたしかぬる。未熟な門弟ども、とてもお相手にはなるまいが、一手宛御教授下さらば恐悦ぢや。

赤星。尾州清洲からの道中、江州の新田村には、神影流の達人、伊東亘殿が、道場を開かれ居ると聞き、樂しみにして參つたに、御病中とは殘念至極ぢや。お見受け申した所、血色も惡くはないが、御病中とならば、是非に及ばぬ。それ

各々方、仕度いたさうでは御座らぬか。御門弟方との仕合も、又一興で御座らうぞ。あはゝ……。

大日。(羽織を脫ぎ捨てながら)われ等が訪ね參る諸國道場の主、大抵は病氣、差支へ。でなければ、他出だ。あはあはゝゝ。

(門弟達氣色ばむ)

松村平太郎。何と云はるゝ。今一度申されて見い。

大日。幾度にても申す。われ等が訪ね參る諸國道場の主、多くは病氣、差支へ、他出だと申すのぢや。あはゝゝ。

村松。なに! 聞き捨てならぬ一言。然らば當道場の主、伊東先生が作病でもして、貴殿達との立合を避けられたとでも申すのか。

大日。左樣とは申さぬ。たゞ、今迄の例を申して居るのぢや、あはあはあは……。

村松。(口惜しがる)貴殿のお相手は、拙者所望ぢや。

大日。相手にとつて、不足ぢやが、望みとあらば、叶へて遣はす。

村松。何を!

(村松、憤然として立ち上らうとするのを、横に居る山崎三郎次が止める。)

山崎。村松氏、先づお靜まりなされい。それでは立ち合ひでなくて、喧嘩ぢや。武術の試合に遺恨があつてはならぬ。お靜まりなされい。

村松。とは申せ。

山崎。はて穩やかに、順番をお待ちなされい。

(村松、漸く座に返る。)

伊東。大日氏とやら、諸國道場の主、貴殿達がお尋ねになると、多くは、病氣になるとは、笑止千萬の話ぢや。この伊東一隆齋に於ては、年こそ寄つたれ、痩せ腕の皺を伸して、お相手仕る筈なれど、今年、卯月の始めより、中風の氣味にて、肝腎の右の腕が利かぬのぢや。作病とお蔑すみあらばあれ、八幡！この一隆齋には、毛頭邪しい處が、御座らぬ。拙者お相手仕つらいでも、門弟達には、未熟なれども、拙者の太刀筋が流れて居る。御廣言は措置て、先づお立ち合ひされい。それ、柳田、その方第一にお相手致せ。

赤星。面白い伊東殿のお言葉ぢや。然らば、お弟子達のお手の内、神影流の太刀筋を拜見致さう。吉長氏、貴殿先づお立ち合ひ下されい。

吉長。承知致した。

（吉長、柳田の二人、各々列を離れて、さし向ひ、一禮して立ち上り氣合を激しく打ち合ふ。柳田、籠手をしたゝかに打たれる。）

柳田。參つた。

吉長。これは失禮。あはゝ。

赤星。あはゝ。柳田氏とやら。仲々のお腕前ぢやが、まだ修業が、ちと足りぬとお見受け申した。切角、お勵みなされい。

（赤星、金谷三郎右衛門に目配せする。）

伊東。（稍興奮して）それ、近藤氏！

金谷。拙者お相手を。

（位を取つて、容易に動かない。暫く睨み合つた末、激しく數合の立ち合ひの後、近藤眉間を打たれる。）

近藤。參つた。

大日。金谷氏。何時も乍らの早業ぢや。天晴れ、天晴れ。

伊東。次は、山崎氏、心を靜かに、落付いて立ち合ひなされい。

山崎。はゝゝ。（木刀を持つて、前に出る。）

赤星。長尾氏、貴殿お出で下されい。

（二人、立ち合つた後、山崎、面を打たれる。）

山崎。參つた。

伊東。（激して、）佐々木氏、お出なされい。

赤星。岡野氏、貴殿お引き受け下されい。

（二人、數十合立ち合ひたる末、佐々木破れる。）

伊東。三田村氏、貴殿お出なされない、

（三田村、木刀を提げ、無言にて出て來る。）

赤星。お相手は、拙者が致さう。

（二人立ち合つたる末、又々三田村が破れる。）

赤星。神影流のお手の筋とは、これか。お見受け申せば、伊藤殿御高弟のやうぢやが、まだ、腕前はお若い。修業が肝腎ぢや。だが、中氣の先生のお稽古では、修業の程も心細い。

伊東。(無念の形相凄まじく、急き込んで、)村松氏。御身一人ぢやぞ！十三の年から、常道場で鍛へ上げた腕前を見せて呉れ。殘つたのは御身一人ぢやぞ。この一隆齋の流風が、興るも廢るも御身一人ぢやぞ。

村松。仰せには及ばぬ。摩利支天の化身にてもあれ、見事打ちひしいで見せ申す。いさ、大日氏、お出でなさい。

大日。(嘲笑し)あはゝ。御身最前から見受る處、百姓面ぢやな。鋤鍬持つ手で、木刀を持つて居る生兵法が、大怪我の元なのぢや。拙者の木劍で、頭の骨を打ち碎かれない前に、引き下つたがお手前の爲であらうぞ。

村松。なに、云はして置けば、樣々の雜言。多言は要らぬ。腕で來い、腕で。

大日。何を百姓の小悴め。

(二人、激しく立ち合ふ。平大郎、必死の勢ひにて打つてかゝる。長き激戰の後、平太郎、肩口を打たれる。平太郎、無言にて尙戰ふ。)

大日。參つたか。

村松。まだ。まだ。

大日。剛情な奴め。

(激しく立ち合つたる末、平太郎再び肩口を打たれる。)

村松。參つた。(漸く太刀を引く。)

(大日、更に踏み込んで、面を強く打つ。平太郎の額から血が流れる。)

村松。(額を抑へながら)無念ぢや。

大日。はて、よい氣味ぢや。その傷を紀念に、之れから兵法は廢して、百姓にせいを出すがよい。そんな生優しい刀の

振り方で、武士の身體が打てると思ふのか。
(平太郎、傷を抑へながら呻吟して居る。)
赤星。伊東氏、もう門弟の方は御座らぬか。
伊東。(無念を堪えながら)殘念ながら、免許の者は、これ丈で御座る。
赤星。其では、御門弟達に、流れて居ると云ふ貴殿の太刀筋は、これで御座つたのか。あはゝゝ。鳥無き里とは申し乍ら、斯樣な稽古で、劍道師範杯とは、片腹痛い事で御座る。お氣の毒乍ら、劍道指南の看板は拙者達申し請けて歸る。
村松。(傷の痛みを抑へ乍ら)餘りと云へば、理不盡な申し分。
赤星。異存があるなら、腕で來い、腕で。
(門弟達、殘念がる。)
大日。腕づくの異存なら、聞いてやる。でなければ、看板を貺して歸るは、武道の習ひぢや。
村松以下門弟達。何を!　(皆刀に手をかける。)
大日。赤星等。(刀を引き寄せ)面白い。拔くなら、拔いて見ろ。
(山崎七郎次、同僚達を宥める。)
山崎。早まつてはならぬ。刀を拔いてはならぬ。我々の腕前未熟の致す處、殘念乍ら仕方御座らぬ。刀を拔いて、身命を賭する場合でない。拙者にお任せなされい。
(尙、逸る門弟達を押靜め乍ら、大日赤星、の方へ來る。)
山崎。各々方のお腕前、揃ひも揃うてお見事なものぢや。當道場抔は、百姓鄉士共の悴が、ほんの片手間に武術修業を

致す處なれば、碌なお相手も致し兼るのは、始めから分つた事で御座る。さうお蔑みなされいで、當道場へ暫く御滯在、我々に一手二手の御教授を下されたい。失禮乍ら、御出立の節には、お草鞋代抔は、御不自由のないやう、我々にて御合力致す。

赤星。（忽ち態度を改め。）さう仰しやるなれば、お話がよく分つた。我々抔も、最初から喧嘩を買ひに參つたのでは御座らぬ。諸國修業の道々、琵琶湖見物の序に、二三日、お宿など願ひたくて罷り越したのぢや。其のお志で、至極滿足ぢや。大日氏。さつきから、いかい雜言を致したな。

大日。いかにも、ついした行き懸りから、喧嘩沙汰に相成り、大人氣なう存じ居つた。

山崎。早速の御承諾で、恐悦ぢや。其では何卒奥の離れの方へ。

村松。山崎氏、我等不承知で御座るぞ。

山崎。何故。

村松。我々ならば兎も角、病中の伊東先生を雜言致した方々と、同席は愚か。一手二手の教授抔とは、思ひも寄らぬ事ぢや。

赤星。え丶何を！

山崎。村松氏、拙者にお任せ下されい。貴殿の心中は察しる。が、こ丶の處は、拙者にお任せ下されい。先生は、御病中ぢや。肝腎の腕の利かぬ御病中ぢや。先生の御病氣に免じて、何事も御辛抱下されい。先生の御病中、萬一の事があつては、我々が相濟まぬ。

村松。いや、勘辨ならぬ。ものには、勘辨なる事と、ならぬ事がある。病中とは云へ、先生の御心中を察すればよい。

當道場が受けた耻は、我々の血によつて、雪ぐ外は御座らぬ。
山崎。さうなくてはならぬ處ぢやが、貴殿には、平左衛門と云ふ親がある。母御もある。その上、貴殿に、一人息子ぢや。伊東先生にも、お孃樣があり、奥樣がある。我々にも、妻子眷族がある。一旦、眞劍を拔くと、木刀の仕合のやうには參らぬ。一旦の怒りは、強いとに申せ、親の敵でもなく、深い遺趣遺恨があると云ふのでもない。少し勘忍して置くと、その額の傷痕が間もなく消えるやうに、間もなく消えるものぢや。こゝの處は、拙者にお任せなされい。御身の云ひ分は、後にて幾らでも聽く。
村松。いや、ならぬ。ならぬと申せばならぬ。たとひ、斬り死に致すとも、眞劍の立ち合ひを致す。
山崎。はて困つた。誰かある。誰か。村松殿の御親父を呼んで來い。
門弟の一人。さつき、小作の作藏が、走り歸りましたから、御子息の怪我を知り、直ぐと之れへ參るで御座らう。
他の一人。(立上りて、戸外を見乍ら)あゝ參られた。下男を連れ、土橋を渡つて來られるのは、慥かに平左衛門殿ぢや
赤星。腕づくなら腕づく、扱ひなら扱ひ、鬼の面なら鬼の面、菩薩の面なら菩薩の面、どちらでもお出しなされい。
大日。其小忰に、眞劍を拔かして見るのも一興ぢやらう。「參つたで」は濟まぬからな。
村松。おのれ!(眞劍を拔きかゝる。)
山崎。はて、お待ちなされい。御親父も見えると云ふに。
村松。とは云へ、口惜しう御座る。
(平左衛門、下男重助、實は岩見重太郎を連れて來る。平左衛門は、白髮を混へたる老人。重助は、六尺に近き偉丈夫。但し、顏は稍痴鈍な風をして居る。)

平左衛門。（道場へ這入り乍ら、急き込んで）平太郎いかゞ致した。

村松。父上、殘念で御座る。眉間を此の樣に傷けられた上、樣々の雜言を受けて御座る。その上に、當道場の看板を脫さうと云ふ理不盡な申し分。

平左衛門。いかにも。其で其方は如何致すと云ふのぢや。

村松。看板を取られては、先生の耻辱故、刀にかけても、渡すまじい所存を堅め申した。

平左衛門。尤もぢやが。（相手を見返し、相手が惡いと云つたやうな表情をする。）早まる處ではない。

山崎。流石は平左衛門殿ぢや。拙者も夫を申して居つたのぢや。先生御病中に萬一の事あつては、一大事ぢや。何も刀にかける許りが能ではない。通り雷は、……いや、この場は兎に角、圓く收めるに限る。いざ、赤垣氏、大日氏、奧の間へお通り下されい。

村松。父上迄が、そのやうな事を仰しやる！平太郎は無念で御座る。

大日。口惜しければ、拔いて來い。

村松。拔かいでか。（拔かうとする）

平左衛門。平太郎控へたがよい。

大日。あはゝゝ。弱い犬は、兎角吠えたがるものぢや。

平太郎。おのれ！

（平太郎、刀に手をかける。重助、末座より驅け出して。平太郎を止める。）

重助。若旦那、お待ちなされい。この重助にお任せなされい。いや、なに、そこのお武家達。

（赤星、大日等、屹となつて見返る。一座の者驚く。）

平左衛門。重助、控えい、お前が出る所でない。

山崎。下郎、下れい、無禮ぢや、下れい。

重助。いや、下らない。俺は、そのお武家達に用がある。聞けば、腕づくで、道場の看板を持つて行くと云ふ。面白い持つて行つて貰はう。

山崎。氣が狂つたか。控えい。

重助。いや、控えぬ。氣は狂つては居ない。

（重助を捕へようとしてかゝる山崎を、片手ではねのける。山崎、一間半ばかり、よろめいて倒れる）

重助。お武家達、返事がないのは不承知か。

大日。下郎と存じ、相手にしなければ、付け上り、雜言を放す。夫へ直れい。木刀で打ち殺して呉れる。

重助。面白い。打ち殺して貰はう。

（重助、前へ出る。）

平左衛門。重助、控えい。無禮ぢや。控えい。

重助。いや、默つて見て居て下されい。此麼御武家は、兩刀を手挾んだ丸太も同然だ。さあ打ち殺して見い。

大日。何を。

（眞つ向ふから打ち下す。重助、體をかはすと等しく、利き腕を捕へ、肩に擔いで板の間へ叩き付ける。大日、悶絶して了ふ。岡野、吉長、金谷の三人、木刀を取つて一齊にかゝる。重助、飛鳥の如く、身をかはし、三人を左右に取

つて投げる。みんな、打ち處が悪いと見え起き上れないで、苦しがつて居る。)

赤星。下郎、推參な。

(立り上りさま、打つてかゝるのを、直ぐ利き腕を捕へ、床に叩き付け、起き上るのを起さずに上から腰を掛ける、重助、赤星のたぶさを掴んで、頭を搖り動かし乍ら)

重助。貴様が、この連中の頭領だな。僅かの腕前を鼻に掛け、武術修業とは名のみ、諸國の道場を押し廻つて、金錢を强請り居る山賊にも等しい奴ゝ。斯様な未熟の腕前にて、道場を荒す抔とは片腹痛い、今日唯今、改心致さばよし、いやと申さば、此の儘に捻り殺すぞ。(咽喉を强く壓する。)

赤星。(苦しがる)許されい。許されい。謝まつた。謝まつた。

重助。本心か。

赤星。本心ぢや。

重助。本心ならば、許してやる。仲間の者を引き連れ、速刻當地を立ち去れよ。

赤星。畏まつた。

重助。ぢや許してやる。命冥加な奴ぢや。

(赤星這々の態にて起き上り、大日その他の者を起し、何か耳に口を付けて囁く。)

赤星。伊東先生、今日は、いかい失禮致した。御無禮の段、平に御許し下されい。當道場を荒す抔云ふ所存は、毛頭なかつたが、ついした言葉の間違から斯様な事になつて、誠に相濟まぬ。御緣があつたら又お目にかゝらう。

伊東。(さつきからの事件を、無言の裡に堪へ忍んで居たが、事件の急激な轉回に吻と安心したやうに、)何事も拙者病中

の故と御勘辨下されたい。

赤星。御挨拶痛み入る。門弟衆、さらばぢや。

（六人支度を整へて歸り去らうとする。）

重助。お武家達は、何方へ行かれる。

赤星。京へ参るのだ。

重助。うん、宜しい。

（六人、遺恨を含むやうな態にて、歸り去る。今迄、重助の武勇に感激して默然たりし門弟子共「わつ」と聲を立て乍ら、重助の傍に驅け寄る。）

門弟甲。はて、無雙の勇力ぢや。

門弟乙。人間業とは思はれぬ。

門弟丙。力倆と云ひ、兵法と云ひ、拔群ぢや。

平左衛門。（重助の前に進み出で乍ら）唐崎で御身の水死を助けた折から、お武家ではないかと疑つて居たが、斯様な豪傑とは夢にも存じ寄らなかつた段、平にお許し下されい。此上は、本名を名乘られ、拙宅に何時迄も御逗留下されい。

重助。いや、拙者は名も無い者ぢや。

伊東。いや、お隠しあるな。天下に聞えた豪傑に違いない。御名をお名乘り下されい、

重助。あはゝゝ、今は、是非に及び申さぬ。拙者の本名は、筑前名島の城主小早川隆景の臣下にて岩見重太郎兼相と申す者で御座る。

平左衛門。さては、御身が、信州風越山にて狒々退治をなされた岩見重太郎殿で御座つたか。知らぬ事とは申し乍ら、いかい失禮を致した。

伊東。御身のお蔭にて。當道場の看板も汚されず、恐悦に存ずる。何卒、當道場へ御滯在なされて、門弟達を御教授下されい。

（門弟達、驚いて重太郎を凝視する。）

平左衛門。私よりも、その儀平にお願ひ致します。

重太郎。御懇篤なる御願ひにては御座れども、先日、唐崎にて御身の爲に命を助かりたるまゝ、行く手を急ぐ身にては御座りしかど、何かな御恩報じを致さんと、かくは滯在致した、が今日の働きを貴殿への寸志として、明日にも當所を發足致したう御座る。其上、彼の六人の武者修行ども中途より立ち歸り、再び禍を致すやも計られざるによつて、拙者これより後を追ひ、京迄追ひ拂はうと存ずる。

平左衛門。深き御配慮の程忝けない。然らば、私にて衣服大小杯一通りはお揃へ致しませう。

（門弟ども酒肴を携へて出て來る。）

門弟甲。さあ岩見先生、何はなくとも一獻お過しなされい。勝祝ひで御座る。

重太郎。酒は拙者大好物で御座る。ずんとお注ぎ下されい。

（重太郎、二三杯立て續けに飲む。）

伊東。御見事、御見事。

重太郎。伊東氏へもお盃をさし上げる。お一ついかゞで御座る。

伊東。病中なれども、一つ過ごすで御座らう。（伊東受けて重太郎に返す。）

重太郎。次は、村松御父子。

（重太郎と村松父子との間に、盃の應酬宜しくある。）

伊東。門弟一同も、岩見先生の武勇に、肖るやう、お盃を頂戴致せ。

門弟一同。はつ。

（門弟、次ぎ〳〵に重太郎から盃を貰ふ。漸く酒宴らしくなつて來る。）

平左衛門。それでは、岩見先生、私親子は先生の明日御發足の用意も致し、平太郎が傷の手當ても致したら御座るによつて、一足お先へ失禮致す。

重太郎。お歸りなれば、身ども同道致す。（とは云へど、久し振りの酒に未練あるものゝ如し。）

平左衛門。先生は、ゆつくりとお過ごしなされい。まだ暮れ前で御座れば、八ツ時迄は、ゆつくりと、お過ごしなされい。

重太郎。ちやと申して、御主人達が歸るのに下男の重助が……。

平左衛門。いや、御冗談を仰せられますな。何卒その儘にゆつくりとお過ごしなされませい。

重太郎。然らば、今一二獻過ごしてから後より參るで御座らう。

平左衛門。然らば、御免下されい。

（平左衛門、平太郎と一緒に歸り去る。）

重太郎。久し振りの酒の味は格別ぢや。御門弟衆この大盃になみ〳〵とお注ぎ下されい。

（門弟、酒を注ぐ。重太郎、ぐつと飲む。）

門弟の一人。岩見先生。酒の肴に、武者修行中のお話が承りたい。

重太郎。うん、よからう。奥州での大蛇退治の話を致すかな、それとも、狒々退治の方に致さうかな。あは〻〻。

第二場

情景。第一場と同じ。唯、時が經つて居る。重太郎も門弟も、十二分に醉つぱらつて居る。夜は八ツに近し。

重太郎。（酩酊して、話に油が乘つて居る）おのれ怪物と、藤巻の一刀、拔き打ちに背中へ斬り付けると、ピーンと音がして跳ね返つた。失策つたりと、眞つ向ふから一刀浴せると、背骨に當つて折れて了つた。

門弟一同。うーむ（と堅唾を呑む。）

重太郎。これはと思ふ途端、怪物は、右の手に抱へて居た娘を捨て、振り返りさま、火焔の如き口を開いて飛びかゝつて參つた。刀が折れて得物を失ひ、流石の拙者も些か狼狽したと見え、右腕に噛み付かれたのは不覺ちやつた。が、噛み付かれたを幸ひに怪物の兩手を引つ掴み乍ら、傍の岩角へ力まかせに投げ付けた。

門弟一同。うーむ。

重太郎。起き上らうとする所を、のしかゝつて、拳を堅め眉間のあたりを、續けさまに五つばかり毆り付けると、流石の怪物も異樣な聲を出し乍ら、息が絶えた。

門弟の一人。はあ、成程。さて、その怪物の正體は。

重太郎。劫を經た狒々だ。

門弟の一人。して、身の丈は。
重太郎。六尺もあつたらうか。
門弟一同。(驚く)………
門弟の一人。して、その娘は。
重太郎。氣絕して居つたか、手當てを加へると、蘇生致した。
門弟他の一人。親達の喜びは。
重太郎。思ふても見るがよい。重太郎なかりせば、娘の命はないものぢや。あはゝゝ。
門弟の一人。御尤もで御座る。
門弟他の一人。先生の武勇によつて、助けられた者は、世に限りも御座るまいな。
重太郎。左樣に向ふさまに褒められると恐縮ぢや。が、義の爲めには、重太郎の劍は、何時にても鞘走るのだ。
(その時一人の百姓が、蒼くなつて驅け込んで來る。)
百姓。重助殿、いや違つた、岩見先生、大變ぢや、大變ぢや。
重太郎。うん、作藏か。何事ぢや、何事ぢや。
作藏。大變ぢや、大變ぢや。今、六人の武者修業者が、お宅へ斬り込み。大旦那樣も若旦那樣も敢なき御最期ぢや。
重太郎。夫では、平左衞門殿にも、平太郎殿にも、あの侍どもの手にかゝつたと云ふのか。
作藏。夫ばかりではない。下男が三人、女中が一人、深手を負ひました。
重太郎。おのれ、憎き六人の奴、重太郎が驅け付けて、一討ちに致して吳れる。

（重太郎。只一人、疾風の如く驅け去る。）

門弟の一人。我々も、かうして居られぬ。岩見先生にお助太刀申さう。

他の二三人。我々も續かう。

（六七人の門弟、驅け去り、後に五六人殘る）

伊東。（さつきから、重太郎の氣焔を微笑を含み乍ら聽いて居たが、）平左衛門殿親子が、横死を遂げたとは、いかにも氣の毒ぢや。右の手が利かぬが殘念ぢや。

山崎七郎次。（重太郎の出現以來、常に傍觀者の位置に立つて居たが）飛んだ事になつたなあ。圓く收めればよかつたのぢや。

伊東。當道場の事で、村松親子を殺させては拙者が申し譯が立たぬ。あゝ殘念ぢや、拙者に刀が取れぬのは。

（その時、下手から、第一場の六人の侍、銘々覆面して忍び寄り、伊東直に斬り付ける。伊東斃れる。殘れる門弟達、銘々刀を拔いて驅け向ふ。油斷に乘ぜられたので、手もなく斬り倒されて了ふ。）

（山崎七郎次、奮戰最も努むれども、及はず左の高股を斬られる。）

山崎。殘念！

（六人達、山崎を圍む。）

六人。最前の重助とやらは、いづれに居る。あの男の在所を云へ。在所を云へば、汝の命は助けてやる。

山崎。汝達が、平左衛門を討つたと聞き、唯今驅け付けて參つた。

赤垣。喰ひ醉つた處を、一討ちに致さうと思つたに、命冥加な奴ぢや。

大日。あの下郎を討ち漏したは殘念ぢやが、これから後を付けては、時刻が移る。村松親子、伊東直、それに門人の五六人も斃して置けば、我々の遺恨は晴れた。いざ立ち退かう。

赤星。村松の家で、百兩ばかり有り金を浚つて來た。

大日。手廻しのいゝ事ぢや。いざ參らう。

（重太郎、息を切らして飛び込んで來る。）

重太郎。待て！　待て！　（正面へ來て、伊東その他の死骸を見付ける。）汝等は、伊東氏をも手にかけたか。卑怯未練の犬侍、最前命を助けしは、汝等の惡心を翻させんとの情けなるに、忽ち仇をなす人非人奴。片つ端から、薙ぎ倒して呉れるから、さう思へ。

赤星。下郎よく來た。汝の一命を取りたさに、當道場を襲つたのぢや。取り逃して殘念だと思ひしに、我から名乘つて來る命の要らぬ夏の蟲奴。下郎、それへ、直れ。

重太郎。下郎とは、云はさぬぞ。村松の僕重八とは世を忍ぶ假の名、眞は、筑前名島の城主小早川隆景の家臣岩見重太郎兼相ぢや。

赤星以下六人。（驚く）うむー。さては。

（みんな、逃げ足が付く）

重太郎。この期に及んで、命を助からんとする卑怯者奴。逃げようとて、逃がすものか。一人一人は面倒だ。一度にかゝれ。

六人。是非に及ばぬ、

（六人、一齊に、重太郎にかゝるを重太郎、奮撃突戰し、六人を一太刀づゝに斬つて捨てる。）

（門弟村役人等、徐々に立ち歸つて、驚いて見物して居る。）

重太郎。（六人を斃し終り）もろい奴ぢや。

門弟共。天晴れのお手柄、驚き入つて御座る。

重太郎。夫にしても、村松父子の横死、伊東先生の横死、御愁傷に存ずる。みんな、かゝる犬侍共のなす業ぢや。拙者が、速座に敵を討つたのを、せめてもの心遣りとして下されい。

村役人の一人。佐和山の城主石田治部少輔の代官配下の者で御座る、悪人共を即座にお退治なされ、忝けなく存じますれど、御法により代官所迄、一應御同道下されい。

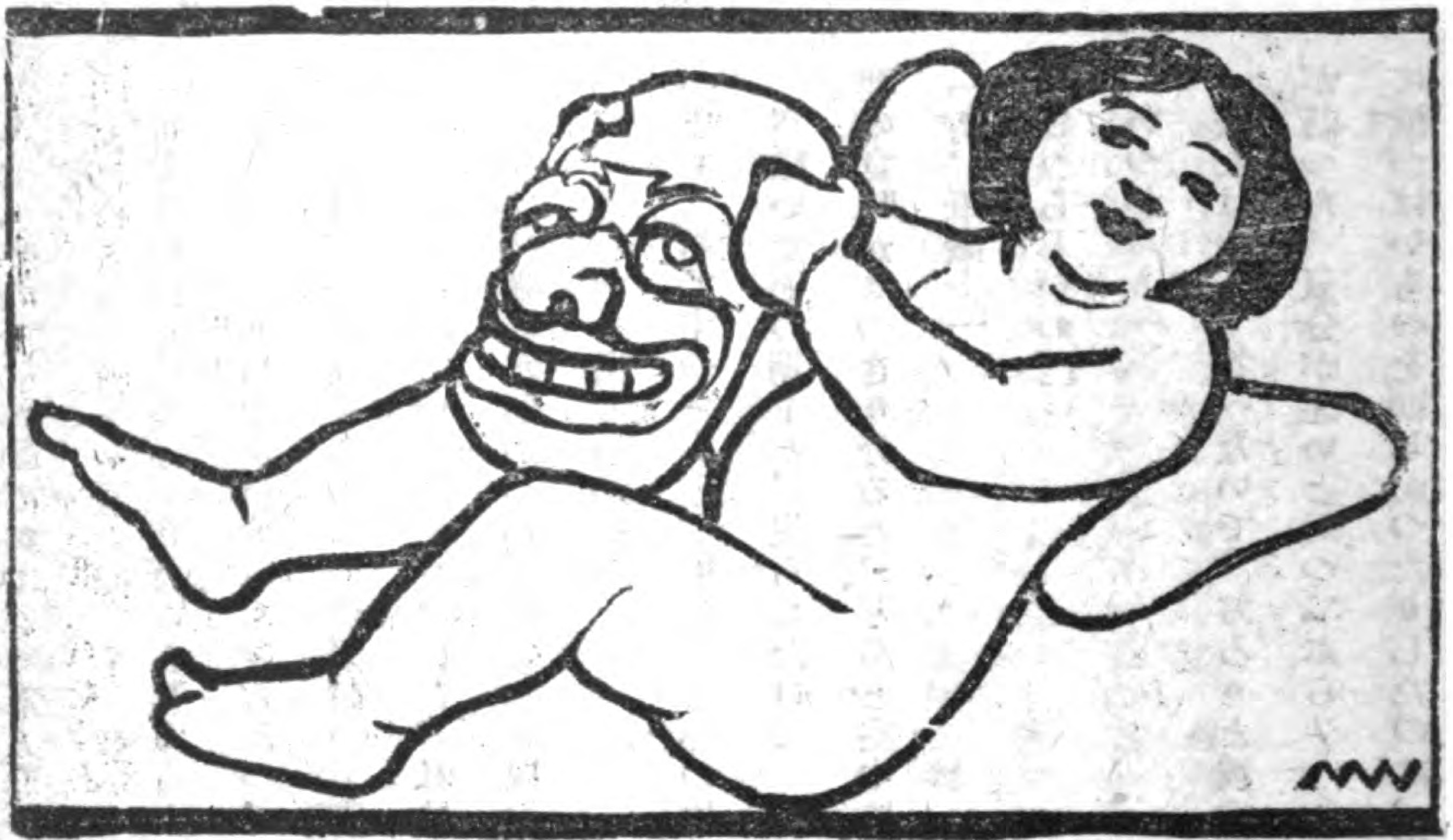
重太郎。（意氣揚々として）義によつて、六人の者を手にかけた者で御座る。何處なりとも、喜んで御同道致す。有難う御座る。

村人、門人共。古今無雙の豪傑ぢや。村松様、伊東先生の敵を、即座に討つて下された。忝けない、忝けない。

（重太郎が、揚々として立ち去るのを、後から賞讃の聲を浴せかける）

山崎七郎次。（深手の爲倒れて居たが、上半身丈やつと立つたり怨めしさうに、重太郎の後姿を眺める）馬鹿な侍だ。彼奴が居なければ、此麼事にはならないのぢや。彼奴が居なければ、誰も死ななくて濟んだのぢや。馬鹿奴！　あんなに威張つて歩いて居やがる。馬鹿！

（幕）



幻の彼方

豊島與志雄

一

岡部順造は、喧嘩の餘波で初めて秋子の嫉妬を知つた。

いつもの通り、何でもないことだつたが、冗談半分に云ひ爭つてるうちに、やたらに小憎らしくなつてきて、拳固と肱とで秋子をこづき廻した揚句、ぷいと表へ飛び出してみたけれど、初夏の爽かな宵の空氣に頭が落付くと、先刻からのことが馬鹿々々しくなり、秋子が可愛くなつて、また家に歸つてきた。額を脹らして長火鉢にしがみついてる彼女へ、變にむず痒いやうな心地で云ひかけた。

「何をしてるんだい。」

「知りませんよ。」

つんと澄した聲だつたが、もう刺を含んではゐなかつた。

順造は安心して火鉢の前に坐つた。あたらずさはらずのことを二三

言云つた。秋子がなほ言葉の上だけで對抗してくるので、僕が悪かつたよとも云つた、だから謝つてるぢやないかとも云つた。

「可愛さの餘りについ手荒なことをするんだよ。」

冗談だが眞面目だか自分でも分らないその定り文句で、彼は一切の片をつけたつもりでゐた。所がそれから二三分して、彼は秋子が涙ぐんでるのに氣付いて喫驚した。涙ぐんでる眼が鋭い光を放つてるのに、更に喫驚した。

「あなたはそゝでいゝでせうけれど、私は……私、たゞの身體ぢやないかも知れないと思つてる所ぢやありませんか。」

彼女は呼吸器が弱かつた。肺炎加答兒を病んだこともあるさうだつた。そのことだなと順造は思つた。

「ぢやあ熱でも出るのかい。」

「まあ、熱ですつて！……姙娠して熱の出る人があるものですか。」

突嗟いたその調子と、尖らした口と、險を持たした眼付とから、順造はちぐはぐな印象を受けたが、次の瞬間に、言葉の意味がはつきり分ると、どんと空中にはね上げられた心地がした。

「え、姙娠！」

「さゝらしいわ。」

「いつから？」

彼女は何とも答へないで、ぢろりと彼の顔を見やつた。もうずつと前からであること、確かであることを、その眼付が語つた。氣分が悪いと云つてぶら〳〵してたり、食慾が非常に減つたり、何事にも興味を失つて苛立つたり、しきりに酸つぱいものを欲しがつたりしたのは、考へてみると可なり以前のことだつた。

ほう、さうかなあ！といふやうな心地で順造は小首を一寸傾げたが、そのまゝ心が宙に浮んで、何處へ落付けていゝか分らなかつた。

彼は立ち上つて室の中を歩いた。縁側に出て兩腕を組みながら、其處に腰掛けて足をぶら〳〵さした。

長い間たつたやうだつた。秋子の方から彼の所へやつて來た。

「明日もお晴天のやうですわね。」と彼女は云つた。

實際、廣々とした夜の空には銀河が輝いてゐた。然しそんなことはどうでもいゝのだつた。取澄してる彼女の全身を、非難の塊のやうに順造は感じた。果して彼女は云ひ進んできた。

「あなたは、私が姙娠したのが御不滿なんでせう。」

「馬鹿なことを云ふな！」

一寸氣色ばんでみたが、それから却つて感傷的な氣分をそゝられて、彼は秋子を其處へ坐らした。彼女は逆らはなかつた。それを彼は更に自分の膝に抱いてやりたかつた。けれど……。

變挺な氣持だつた。――折にふれて漠然と胸に浮べたこと、夫婦生活の結果として何氣なく想像したこと、僕の所はまださうなど、平氣で友人等に答へながら、もしさうなつたらと後でぼんやり空想したこと、それとは全く異つてゐた。何だかから形體の知れないものが、眼の前に現はれてきたのだつた。秋子の腹の中に小さな卵が――幼蟲が宿つて、それがだん〳〵大きくなつてゆき、恐ろしい勢で外に飛び出し、それが一個の人間――自分の血を分けた子供……となる。そのことが實際に起りかけてるのだ。

「おい。」と彼は云つた。「お前は本當に姙娠してるのか。」

「えゝ、どうもさうらしいわ。」

彼女はその態度から聲の調子まで落付き拂つてゐた。

順造は椽からぶら下げてる足をやけにばた〳〵動かした。

「どうなすつたの?」

振り向いてみると、笑つてる彼女の眼がこちらを覗き込んでゐた。彼は輕蔑されてるやうな氣がして不愉快だつた。眼を外らして考へ込んだ。が、もう何にも考へることはなかつた。それにきまつてるとすれば、殘つてるのは今後のことだけだつた。さうだ!と彼は心のうちで叫んだ。

「姙娠ならそのまゝにしておいちやいけないぢやないか。醫者に診せてごらんよ。産婆にもかゝらなきやなるまい。何だつたかな……うむ、岩田帶とかもするんだらう。それから……。」

「そんなに慌てなくつても大丈夫ですよ。」

順造は氣勢をそがれてきよとんとなつた。それを更に頭から押被せられた。

「私たゞ一つ約束して頂きたいことがあるんです。あなたは何かと云へばすぐに私を打つたり叩いたりなさるけれど、たゞの身體ではないんだから、少しは遠慮なさるのが當り前ですわ。もしお胎の子供に傷でもついたら、どうなさいます?姙娠中は轉んでも危險だといふぢやありませんか。七ケ月か八ケ月目に、椽側から足を踏み外して落つこつたため生れた赤ん坊が、顔半分すつかり赤痣になつてゐた、といふやうなこともあるさうですよ。手の指がくつついてたり、足が曲つてたり、身體の方々に赤痣があつたり、……そんな子供を生んでも宜しいんですか。子供が大事だつたら、少しは私をも大事にして下さるのが當然ですわ。それとも、子供なんかどうでもいゝと仰言るのなら、私にだつて覺悟が

あります。」

暫く黙つてたが、順造はぞつと身を震はした。――馬鹿に大きな凸額の下に、頭の尖つた長い顔がついてゐた。細い線くちやな眼がどんよりと光つてゐて、鼻は押しつぶしたやうにひしやげ、よく合さらない薄い唇から、喰ひしばつた歯が二三本見えてゐた。頸から下は發育不完全で細そりしてゐたが、肩のあたりが急に太く逞しくなつて、骨立つた二本の長い手先には、指の代りに牛の蹄がついてゐた。腰部や足は牛の通りで、小さな尻尾までついてゐた。赤茶けた長い髪毛が頭にねばりついてゐて、全身には灰色の毛が生へてゐた。顔が人間で身體が牛だつた。生れて三日目に豫言をして死ぬといふ件だつた。それが、ぼろ〳〵の綿屑の上に、飲まず食はずで蹲まつてゐた。――その幻が順造の眼の前に浮んできた。何處かの見世物小屋で見物したのか、或は繪草紙か何かで見たのか、或は昔祖母の話に聞いたのか、或は夢の中で逢つたのか、何れとも思ひ起せなかつたが、その幻だけがいやにはつきりしてゐた。

もしそんなものが生れたら！……いやそんなことがあらう筈はなかつた。

「ぢや醫者に診て貰つたらどうだい。」と順造はぼんやりした顔付で云つた。

「それよりも、」と秋子は固執した、「これからはもう手荒なことはしないと約束して下すつて？」

順造はその方を顧みた。いやに眞劍なものが彼女の顔付に感ぜられた。まだ頭の隅に殘つてる先刻の幻が恐ろしかつただけに、俄に強い愛憐の情が起つてきた。彼はいきなり彼女の背に手をかけて、その肩を抱きしめた。

「約束するよ。何でもお前の云ふ通り約束する。」と彼は云つた。そして心の中では、お前が可愛いゝんだ、たゞお前が可愛いゝんだ、と云つてゐた。

暫くして秋子はほつと溜息をついた。

「何だか頼り無い約束ね。」

「お前は恐くはないのかい。」

二人の言葉は殆んどかち合ふくらゐに同時に出た。そして二人は、互に相手の意味を理解するのに一寸間がかゝつた。

それから默り込んでしまつた。

空の星がいやにぎら〲光つてくるやうに思はれた。順造は眼を伏せて庭の隅に澱んでる濃い闇を、見るともなく見守つてゐた。暫くすると、秋子がうつとりと星を眺めてるのに氣付いて、彼は或る一種の懸念に――聖なる恐れとでも云へるものに、突然囚へられた。

「お前は、」と彼は囁くやうに云つた、「お胎の子供に對して、どんな感じがする？」

秋子は默つたまゝ、微笑んで彼の方を見返した。そんな問に答へる必要はないといふ勝ちほこつた、それでゐて何處かに皮肉な挑戰的な調子を含んだ微笑だつた。が次の瞬間に、彼女はびくりと肩を聳かして、あなたは？と眼付で尋ねかけてきた。

彼はひよこりと立ち上つた。てれかくしに立ち上つたのではなかつたが、後で自分ながらさう感じた。

「姙娠なら冷えるといけないから、中にはいらう。ほんとに注意しなけりやいけない。」

けれど、何を云つてるんだ！といふ氣になつて馬鹿々々しかつた。すぐに寢た。秋子は茶の間で暫く愚図ついてゐた。

その晩彼は夢をみた。朝になると、どんな夢だつたかは思ひ出せなかつたが、大變目出度い夢だつたやうにも、またに不吉な夢だつたやうにも、考へやうによつてどちらにも感ぜられた。そして、朝日の光の中を會社へ出かけながら、オチニ、オチニ……といふ氣持で足を運んでいつた。

日出度くても不吉でも、そんなことは構はない。……オチニ、オチニ……幼い時小學校でやらされた通りのその步調が樂しかつた。けれど、俺は一體子供が可愛いゝのかしら？

それが問題だつた。

彼の心は浮々してゐた。浮々しながらどんよりしたものに蔽はれてゐた。曇り空の下の風見車(かざみぐるま)に似てゐた。それに自ら氣付いた時、彼は考へるのを止めた。兎に角生れてみなければ、まだ海のものとも山のものともつかないんだ！と結論した。

然し、さういふ風に凡てを未來に突き放しておくことは出來なかつた。

秋子はやがて産婆にかゝつた。

「もう五ケ月ですつて！」

彼女は一杯に圓く見開いた眼を輝かしてゐた。

「そんなになるのかい。」そして彼は一寸間を置いた。「五ケ月といへば、もうちやんと赤ん坊の形をしてるかしら？」

「えゝ、さうでせうよ、乾度。心臓の鼓動が聞えるくらゐです の。……鼓動の數が多いから、女の兒かも知れないんですつて。嫌ね。私男の兒がほしいんだけれど。でも、最初は女の方が育ていゝとかいふ話ですわ。」

彼女は、眼の縁に肉の落ちたらしいたるみが出來、脂氣と潤ひとを失つた顔の皮膚が總毛立ち、髪の毛の眞黑な艶が褪せてゐた。固く結えた帶の下に、充實した力で盛り上つてる腹が見て取られて、平素からわりに小さかつた背が、更に影薄くなつてゐた。痩せた薄ツぺらな胸から、僅かな力にもすぐに喘ぎさうな細い息が、忙はしげに出入してゐた。

そして、そのまゝの姿で、うつとりと胎内の何かを見守つてゐた。

胎内の何かを！としか順造には實感出來なかつた。玉のやうな子であるかも知れないが、また、件のやうな怪物であるかも知れなかつた。秋子は右の眼が左の眼よりだいぶ小さかつた。それが遺傳のうちに強調されて、鼬の右の眼と大入道の左の眼とを持つた子供となるかも知れなかつた。彼女の耳の下の黒子が、子供の額半面に擴がるかも知れなかつた。また彼自身も、自分で氣付かぬどんな缺點を持つてるかも分らなかつた。彼は試みに兩手を差伸してみた。どんなにしても、右の手の方が少し長いやうに思へて仕方なかつた。また彼は、大森林の中に迷ひ込んだ者の話を思ひ出した。森から出ようと思つて眞直に歩くつもりでも、必ずまた以前の所に戻つてくるさうだつた。目隱しをして廣場を歩かせられると、誰でも皆自然に曲線を辿つて、決して眞直に歩けないさうだつた。そしてみると、人間の足はどちらかが必ず短いといふことになりさうだつた。それが少しひどくなると、跛足になるの外はなかつた　その他、偶然の畸形はいくらでも想像出來た。指が一本足りないことゝ、頭がまる禿げであることと、片目、鼻つかけ、缺唇、躄……少し調子が狂へばもはや怪物だつた。

生れてみなければ分るものではない！

二人向ひ合つて話が途絶えるやうな時には、順造は知らず識らず秋子の腹部に眼をやつてゐた。其處に何かが孕まれて、もはや小さな心臟の音を立てゝるのだつた。

「だいぶ大きくなつたやうだね。」

咄嗟に云ひ捨てた言葉を口實にして、彼は手を差伸した。帶と着物と襦袢と、ぐる／＼巻かれた紅白の布、その下に、むつくりと脹らんでる腹が、押しても小搖ぎさへしさうにないほど、泰然と控へてゐた。その張りきつた根強さが、彼の指先から胸へぢかに傳はつた。彼は怪しい心の戦きを感じながら、とん／＼と叩いてみた。

「あら、いけませんよ、叩いては。」

醉めるやうにして眺めた秋子の眼付が、なほ彼の心を唆つた。指先から次には平手で、次には拳固で、力一杯に押しつくらをしてみたくなつた。

「お胎の兒に響くぢやありませんか。」

彼女は兩手で腹部をかばつて、一寸險のある顔付をした。その樣子が彼を依怙地にならした。冗談だか眞剣だか分らない氣持でぶつかつていつた。彼女は本當に怒りだした。

「玩具ぢやありませんよ。」

「だつて鳴らしたつていゝだらう。僕の……。」

僕の兒ぢやないか、と云はうとして彼は中途で言葉を切つた。勿論彼の兒には相違なかつたけれど、それよりも寧ろ、天地自然の芽ぐみ……豐かだ……といふ氣がした。その氣持が彼を、胎兒の側から、また秋子の側から、遠くへつき放してしまつた。彼はくしや〳〵にしかめた顔を、どういふ風に和らげていゝか分らなかつた。

「あなたみたいに我儘では、お父さんになる資格はありません。」と秋子は云つた。「も少し眞面目に考へて下さらなければ困るぢやありませんか。片山さんでも中野さんでも、奥さんが姙娠なさると、それは大切になすつたものですよ。毎日卵を二つと蒲燒を食べさせなすつたんですつて。私そんなものを食べたくはないけれど、それくらゐ大事にして貰うと、ほんとに幸福だと思ひますわ。あなたはまるで、私一人で勝手に姙娠したとでもいふやうな調子ですもの。」

然しそれは、順造に云はすれば、眼の置き所が違ふからだつた。彼にとつて直接に大事なものは秋子だつた。その秋子の腹の中に、何とも云へないものが——胎兒だとは分つてゐるが、實感としては仄暗い力強い根深い不氣味な、凡こ

を押しのけてむく／＼と脹れてくる生命が――宿つてるのだ。そのものに對して、秋子が全才を擧げて奉仕しやうとしてることが、彼にとつては、秋子をいつまでも掌に握りしめてゐたいだけに、小憎らしいほど秋子が可愛いゝだけに、一層氣持を脅かされる種となつた。

彼女にとつては、俺のことなんかはもうどうでもいゝのだ！

一寸した用事を賴んでも、彼女はなか／＼立ち上らうとしなかつた。特別に彼女に云ひつけた仕事も、長く放つたらかされてることが多かつた。その上彼女は、彼を反對に使はうとしてゐた。背が低いので、高い所にある物を取る時にはよく彼を呼んだ。

「餘り手を上に擧げるといけないんですつて。」

そんなに胎の兒が大事なら、姙娠を彼にうち明けるのだつて、もつとしみ／＼とした心でなせしなかつたのか。喧嘩のついでになんかは、餘り人を踏みつけにした仕業だつた。彼はそれを責めてみた。

「だつて、まだどうだか自分でもよくは分らなかつたんですもの。あなたが餘り呑氣だから、本當にさうだときまつてから、不意に喫驚さしてあげるつもりもあつたんですわ。それが、あの時はあなたが餘りひどいことをなさるから、つい調子で云つてしまつたのです。」

人を馬鹿にしたやうに、小さい方の右の眼だけで笑つてゐる、その様子が、順造は急に堪らなく可愛くなつた。いきなり飛びついていつて、兩肩に手をかけてぐん／＼押へつけてやつた。

「お止しなさいよ、苦しいから。」

彼はなほ力を入れた。彼女の小さなまるまつちい胸を、其處に押しつぶし、疊の上にごろ／＼轉がして、それから

兩腕で胸に抱きしめてみたかつた。肩の手を離して、上から押被さりながら、兩膝の下に手先を差入れて、坐つたまゝ持ち上げた。彼女は笑ひながら身を踠いた。踠くはづみに彼の手から滑つて、其處にどしりと落ちて倒れた。

彼はぼんやりつゝ立つたまゝ待つてゐた。が彼女は長く起き上らなかつた。しまひには肩ではあ〳〵息をしだした。心配になつて覗き込むと、彼女はがばとはね起きて身を退いた。

「あなたはそんなにお胎の兒が憎いんですか。」

冗談にしては餘りに聲の調子が落付いてゐた。姙娠前に、ふざけるつもりから喧嘩になつて、手荒くつき飛されたりなんかした後で、そんなに私が憎いんですか、と彼女はよく云つたけれど、上つ調子のその言葉は、攻撃的なだけで根深くはなかつた。それが今は、腹の底から彼に對抗しようとしてゐた。

「お前こそ僕が邪魔なんだらう。」と心にもない言葉が彼の口から出た。

その後では、何も云ふことがなくなつて默り込んだ。

姙娠した女を相手に喧嘩するものぢやない！

苦々しかつた。二人きりの時は、どんなに激しくいきり立つても、底をわつてみれば夫婦間の冗談にすぎなかつた。所がそれに胎兒といふ變なものが加はると、二人の心は笑ふにしても怒るにしても、同じ一つの火に燃えなくなつた。彼女はもはや彼を對手にしてはゐなかつた。

七ケ月、八ケ月……となると、腹が目立つて大きくなつた。彼女は前年の新婚當時のやうに、暑い盛りを海岸へ行かうとも云はないで、額には汗をにぢませながら、兩袖で胸部を蔽つて、室の眞中に悠然と坐つてゐた。たゞ一つの要求は女中を傭ふことだつた。その女中が漸く一人見付かると、家の中の用を殆んど凡て任せつきりにして、自分は赤ん坊

の着物などを、ぽつり／＼と縫ひ初めた。針を手にしたまゝ、何かをぼんやり思ひ耽つてることが多かつた。

順造はその後ろへ忍び足で近寄つていつた。両足の先を開き加減にして、臀をどつしりと床に据ゑながら、大きな腹をつき出し、痩せた薄つぺらな胸と肩とで息をしてる、その様子が可笑しかつた。

「何を考へてるんだい？」

彼は笑ひかけてゐたが、振り向いた彼女の沒表情な眼を見ると、その笑ひを顔に出すことも引込めることも出來ないで、中途半端な澁め顔をした。

「時々腹に瘤が出來るんですよ。赤ん坊が手か足かを伸してるのぢやないでせうかしら。こんなに固くなつて……。」

乳首が黒くなつて、顔が蒼白く色褪せてゐた。

「見せてごらん。」

はだけた胸から手を差込んでみたが、彼には何にも感ぜられなかつた。大きな山の裾野を思はせるやうな腹部が、押してもびくともしないほどの根強さで頑張つてゐた。

「まるで鐵の扉みたいだね。僕がノックしてみやう。中で返事をするかも知れない。」

冗談のつもりだつたのが、云つてしまつてから眞劍な怪しい氣持になつた。拒む彼女の手を押のけて、とん／＼と叩いてみた。

「いけませんよ。もし不具（かたわ）の兒でも生れたら責任を持つて下すつて？」

「お前でも、どんな兒が生れるか心配になることがあるのかい。」

「何を仰言るのよ。どんなに心配して大事にしてるか知れませんよ。一寸したことでも、どう障るか分らないんですか

ら。指が二本くつついてたり、耳が縮れてたりすることは、よく世間にあるぢやありませんか。」

「なあんだ、つまらない。」

「何がつまらなくつて？」と彼女は意氣込んだ。

彼はどう說明していゝか分らなかつた。が兎に角、彼女の心配は明るい淺い、形のはつきりしたものだつた。然し彼のは、暗い深い漠然としたものだつた。底のない不氣味さ。そんな感じが胎兒といふ考へを色づけてゐた。

秋子は急に苛立つてきた。默つてる彼の顏へ、尖つた聲の調子を投げつけた。

「あなたは私が姙娠したのを御不滿なんでせう。さうに違ひないわ。……度だつて喜んで下すつたことがあつて？」

「馬鹿な邪推をするもんぢやない。」

彼女は邪推でないと云ひ張つた。そんな考へ方をするのはいけない傾向だと彼は云つた。あなたの方がいけない傾向だと彼女は云つた。さう思ふのは誤解してるからだと彼は云つた。

「誤解ですつて？」と彼女は聲の調子を高めた。「それぢや、どうしてそんなに私のお腹を氣になさるの。思ひ切つてお叩きなさるがいゝわ、今にどんなことになるか分るから。」

捨鉢に腹をつき出してる醜い彼女の姿から、彼は惘然と眼を外らした。室の隅には、赤ん坊の小さな着物が、縫ひかけのまゝ放り出されてゐた。その可愛いゝ赤い色から、彼はぴしやりと頰邊を毆られた氣がした。淋しかつた。冷たくなつた心のやり場に迷つて、秋子の方へ屈み込んだ。

「僕が惡かつたよ。もういゝぢやないか。」

彼女は啜り泣いてゐた、と彼が思つたのは誤りで、肩で息を喘いでるのだつた。その肩に彼の手が觸ると、彼女はつ

ん（と）身を反らせた。」

「構はないで下さい！」

彼が何と云つても、彼女の機嫌は直らなかつた。機嫌が直ると、上から見下したやうな調子でくり返した。

「あなたは父親になる資格はありません。」

彼は何とも返辭をしなかつた。それに構はず彼女は、またぼんやりと考へ込んだ。

偶像を抱いてるのだ！

偶像崇拜者の排他的な執拗さが、彼女の態度のうちに現はれてゐた。凡ての仕事を打捨てゝ、たゞ胎兒のことばかりに專心してゐた。散歩の歸りに彼の袂に縋ることがあつても、それは昔のやうな心からではなく、轉んで胎内に激動を與へないためであることを、彼ははつきり感じた。背の低い足の早い小鳥のやうな彼女は消え失せて、大きな腹でどつしりと落付いて上目がちにあたりを見廻す彼女となつてゐた。

日に〳〵可愛い秋子が何物かに奪はれてゆくのを、順造はどうすることも出來なかつた。而も彼女を奪つてゆくその偶像は、固より胎兒ではあつたけれども、單にそればかりではなく、何だか陰慘な形體の知れない大きな力だつた。見つめてると、眼が眩むやうな氣がした。

誰を——何を——愛していゝか彼には分らなかつた。

秋子がぼんやり立つてると、彼はそつと忍び寄つて、彼女の兩膝を後ろから押してがくりとさした。坐つてる横を彼女が通りかゝると、ひよいと片足を投げ出して邪魔をした。一緒に次の室へ歩いてゆく時は、輕く彼女に足搦ひをかけてみた。そんな一寸したことにも、彼女はよく轉んだ。そしては怒つて、彼の悪戯を責めてきた。彼はそれを興に

抱きしめてやりたかつた。然し彼女は彼の擴げた腕に飛び込んで來なかつた。いつまでも頬を膨らしてゐた。それが、臨月近くなると、後で眼を濡ましてることがあつた。

早く日の光を、自分達……にではない、秋子の胎内のものに與へることだ！と順造は考へた。

二

秋子は、豫定よりも三週間ばかり早く産氣を催した。

その朝彼女は、今日一日會社を休んでくれないかと順造に頼んだ。前晩から樣子が變だつた。それでもなほ半信半疑でゐた。順造に留守を頼んで、女中を連れて錢湯に行つた。歸つて來て、それから晝食を濟すと、本當に陣痛が襲つてきた。女中が産婆の許へ走つた。

弱い中に鋭さを含んだ初秋の陽が、障子の下半分にぱつと射してゐた。秋子は布團の上に坐り、膝にのせた括枕によりかゝつて、障子の日向に寫つてる松の小枝の影を、ぼんやり見つめてゐた。

「どうだい、樣子は？」

順造は十分おきくらゐにくり返し尋ねた。その度毎に彼女はふり向いて、疑惑を含んだ眼付で見返した。何にも云ふことがなかつた。沈默のうちに、時々その大きな腹が波打つて、彼女は肩のあたりをねぢ曲げながら、眉根をしかめ齒を喰ひしばつた。心持ち引歪めた唇の間から、眞白な小さい齒並が覗いてゐた。

「寝たらどう？」

「この方が何だか樂のやうですから。」

痛みが去つて、ほつとして、彼女は縋るやうに微笑みかけてきた。順造はその腹部から眼を外らして、彼女の手を握りしめてやつた。

「しつかりおしよ。お前さへしつかりしてゐてくれゝば……。」

……他(ほか)のことはどうでもいゝ、といふ言葉が喉につかへた。果して他のことはどうでもいゝかどうか、彼は我ながら分らなかつた。大きな力が上から押被さつてきて、胸がわく／＼してゐた。

松の小枝の影が障子の桟を二つ進んで、も一つ他の枝影が出て來た頃、産婆が助手を連れてやつて來た。肥つた圓顔の上に小さな束髪をのつけ、大きな黒革の鞄を手にしてる様子が、變に道化じみてゐた。然しその言葉はしつかりしてゐた。

「まだ暫く間がございますよ。夜中過ぎか明朝になるかも知れません。たゞ私がついてゐますから御安心なさいませ。案ずるより産むが易いつて、全くでございますよ。」

けれど、電燈がともる頃になると、陣痛は可なり頻繁にまた激しくなつてきた。順造は大急ぎで食事を濟して、秋子の室を一寸覗いた。彼女は頭をぐつたりと枕に押しあてゝ、涙ぐんだ眼を異様に輝かしてゐた。彼はその眼から、自分自分を引きもぎるやうにして、鈎の手の廊下で半ば離室(はなれ)になつてる自分の室へ退いた。

もしかすると、秋子は死ぬんぢやないかしら？

ふと頭を掠めた考へが、次の瞬間には、す―つと何處かへ消し飛んで、ひつそりとなつた。彼は疊の上に寢轉んだ。起き上つて机に向つてみた。平素愛讀してるフランス革命史を、無理に六七頁讀み進んでみたが、更に興が乘らなかつた。それからまた寢轉んだ。耳を澄しても何も聞えなかつた。次第に頼り無い氣持になつた。長い時間がたつた。

彼は突然、ぢつとして居られない衝動に駆られた。かすかな音が何處からともなく傳はつてきた。よく耳を傾けると、唸り聲とも叫び聲とも息の音ともつかない、何か大きな聲が一塊になつてる響だつた。それが暫く間を置いて、地の下からのやうに底深く傳はつてきた。そして時々、氣合の聲か掛聲みたいなものが、その深い響に釘を打込んでいつた。

初まつたな！

さう思ふと、があーんと耳鳴りがした。それから一寸ひつそりとなつたが、此度は廊下の彼方の秋子の室全體が、麥酒瓶に息を吹き込むやうに、うーツ、うーツ……と唸り出した。それが間を置いては、次から次へと高まつていつた。耳にではなく、胸に傳はる響だつた。

彼は立ち上つた。廊下に出てみたが、急にぞつと身震ひがして、また室の中にはいつた。どうしていゝか分らないで、室の中を歩き出した。眞中にある机を足先ではねのけて、八疊の室の隅から隅へ對角線を、しきりなしに往き來した。隅でぐるりと一廻轉するのが、初めは何だか變だつたが、次にはそれが一つのリズムとなつた。とんと一つ調子を取るやうにぐるりと廻つて、それから眞直に平らな歩調となり、向ふの隅でまたとんと調子を取つた。彼方の室全體の恐ろしい唸りが、それと呼吸を合してきた。

生れるのかしら！

何だかゝう形體の知れない眞黑な力だつた。それがのたうち廻つて、張り切つて、裂けて、ぷつりと切れた途端に、猫の仔とも犬の仔ともつかない小ちやな、ころ／＼とした啼聲が、一つ甲高に響いた。次にまた少し低く三四聲響いた。それから、くちや／＼な靜けさになつた。

初めの啼聲に立ち竦んでゐた順造は、はつとして飛び上つた。廊下に出て向ふへ行かうとすると、廊下の茫とした薄

ら明りが、こちらを見守つてる死人の眼のやうに感ぜられた。彼はまた室にはいつて襖を閉め切つた。胸が高く動悸してゐた。

さは〳〵したどよめきが、彼方の室に起つてゐた。暫くして、先刻と同じ啼聲が此度は落付いた調子で響いてきた。それから後は、頭の加減かそれとも實際にか、めいるやうな靜けさになつた。

彼はぼんやり其處に腰を下した。頭の働きがぴたりと止つて、不思議なほど何にも考へられなかつた。

「旦那様、旦那様！」強い調子で向ふから呼んでる女中の聲に、彼は初めて我に返つた。

「お生れなさいました！」

髪を亂してる女中の赤い顔が、廊下の入口から一寸覗いてすぐに消えた。

彼は機械的に立ち上つた。非常に勇氣がいるやうな氣がして自ら自分を勵ましながら、半ば捨鉢に秋子の室へはいつて行つた。消毒藥の匂ひがぷんと鼻にきた。散らかつた室の中の有様が一度に眼へ飛び込んできて、何にもはつきり見て取れなかつた。兩の拳を握りしめたまゝ、秋子の枕頭と思はれるあたりに座つた。

「お目出度うございます。お坊ちやまでございますよ。」

彼は聲のする方へ頭を下げた。それを擧げようとする時、すぐ前の秋子の顔とぶつかつた。口許に力無い薄ら笑ひを湛へて、眼に涙ぐんでゐた。

「ごらんなさいませ。」と産婆は云ひ續けてゐた。「まる〳〵と肥つた、綺麗なお兒様ですこと。お手柄でございました。」

彼の脊筋がぞつとして、啜り泣きがこみ上げてきた。それを押へてるまに、眼の中が熱くなつた。

赤いメリンスの布團の襟から、圓めた眞綿を帽子に被つた小さな眞赤な顔が、少しばかり見えてゐた。

「ほんとに奥様はお強うございますよ。聲一つお立てなさらないんですもの。あんなに激しい陣痛を、よくお堪へなさいました。でも、陣痛がおつつけおつつけ激しくきましたので、時間が長くかゝらないでようございました。よく中途で陣痛が止つてしまうやうな方がありますが、それには困つてしまひますよ。奥様のはそれは激しくて、それをまたづつと我慢してゐらつしやるので、代りに私共がうん〳〵唸つてあげましたよ」

産婆は助手と顧みて、顏を輝かしてゐた。

順造は秋子の方を覗き込んだ。捲髪に取上げた先を麻で結へ、四五本のほつれ毛が額にこびりついてゐた。透き通るやうに蒼白い額の皮膚をたるまして、枕の上にがつくりとなつてゐた。疲勞の餘りに血走した眼だけが、僅かに生氣を示してゐた。

「大丈夫?」

「えゝ、」と出るか出ないかの聲で彼女は首肯いた。そして赤ん坊の方を、眼付でさし示した。

彼は不思議なものをでも見るやうな氣で、初めて赤ん坊の方を覗き込んだ。皺寄つた額、閉ぢた眼、小さな口、鼻だけがつんと高かつた。眞赤なぶよ〳〵の皮膚に、金色の産毛が透いて見えた。眺めてると、前から知つてる顏のやうな氣がしてきた。それがぢつと、何時までたつても動かなかつた。

生きてるのかしら?

指先で頰邊を一寸つゝつくと、生温いつるりとした感觸がした。喫驚して手を引込める間に、赤ん坊は唇のあたりをかすかに震はした。

「まだ餘りお觸りなすつてはいけませんよ。」と産婆から注意された。

「生きてゐますね。」と彼はうつかり云つてしまつた。

「生きていらつしやいますとも！」

「でも息をしてないやうだつたから……。」

産婆が聲高く笑ひ出し、秋子が口許に微笑を浮べたので、彼は漸く安心した。

女中が盥や上敷を片付けた頃、秋子は俄に腹痛を訴へだした。

「後産でございますよ。」と産婆が云つた。

順造は一寸其處につゝ立つてゐたが、産婆がまた何かの用意にかゝつたので、離れの自分の室へ逃げて行つた。

大丈夫だ、大丈夫だ！何がかは分らないでたゞさういふ氣持がした。

時計を見ると、十二時を少し過ぎてゐた。あたりが靜まり返つてゐた。雨の降るらしい音が一寸したので、耳を澄したがはつきり分らなかつた。窓を開いてみた。妙に空氣が稀薄に思へるやうな、澄み切つた靜かな夜だつた。空には星が一面に輝いてゐた。

彼はその星々を眺めた。空高く一際輝いてる星が一つあつた。それに眼を定めてると、冴え返つた光りが心の中まで沁み込んできた。星と人間の運命とを一緒にして考へた古人の思想が、嬉しく胸に蘇つてきた。人が生れるのは上潮の時だ、さういふことまで思ひ出された。

上潮だ、上潮だ！……星が光つてる！

嬉しさとも淋しさともつかないもので、胸が一杯になつた。

産の始末がすつかり濟んでしまつてから、彼は産婆と助手と一緒に、取つておきの鮨を茶の間で食べた。

「實は心配してをりましたんですよ。豫定よりだいぶお早くて、お兒さんの位置が骨盤まで下つてゐなかつたものですから、手間が取れはしないかと思つてゐました。それでも案外早くお生れなさいましたので、結構でございました。發育も充分でございますよ。」

産婆はそんなことを一人で饒舌つてゐた。順造はたゞ短い感謝の言葉を述べた。

産婆が歸つていつたのは、午前二時頃だつた。順造は女中を寢かして、一人起きてゐた。床へはいる氣がしなかつた。今晩はよくお眠りなさるが宜しうございますよ、と歸りしなに産婆が云つたその熟睡を、秋子はなか／＼得られないらしかつた。心身の疲勞にうち負けてうと／＼しながらも、暫くするとまたぱつちり眼を見開いた。そしては赤ん坊の方を氣にした。

「大丈夫だよ、」と順造は云つた、よく眠つてるやうだから。」

「さう。……あなたもお寢みなさいな。」

聲の調子が以前よりは、弱くはあつたが澄み切つてゐた。

蟲の鳴く聲が遠くに響いてゐた。

「ほんとによかつたね。」

順造が獨語のやうに低く云つた時、秋子はまたうと／＼としてゐた。一寸眼を開いて彼の顏を見たが、彼が默つてゐるのでまた眼を閉ぢた。

茶色の勝つた大きな布團と赤つぽい小さな布團と、二つの床を並べて寢てゐる母と子を、順造は何とも云へない心地で眺めた。恐れてゐた幻影の彼方から、輝かしい不思議な世界が開けてきたのだつた。新らしい一つの生命が生れ出て

ゐる——而も自分と秋子との子として！父親となり母親となることとは、一つの運命の扉が開けることとだつた。その扉が開けるためには、如何に大きな力がのた打ち廻つたか！二三時間前に、産婦の全身體が唸り出したあの恐ろしい氣配を、彼ははつきり思ひ出した。

それにしても、あるかなきかの息をしながら身動きもしないで、すや／＼眠つてる赤兒の存在が、可愛いゝといふよりも餘りに小ちやかつた。今迄どうして腹の中に居られたのだらう、そしてよくも生れられたものだ、と思へるくらゐの容積ではあつたが、その活力が、存在が、一つの運命を荷つてるとしては、餘りにちま／＼としてゐた。赤兒の存在とその運命とが、別々なものとなつて彼の心に映じてきた。

然しそれは一つのものである筈はない！

彼は不思議な氣持で、赤ん坊の方を覗き込んだ。眞綿の帽子を取ると、黒い細い髪毛が生へ揃つてゐた。先の尖つた馬鹿げて長い頭だつた。産毛を一塊もぢや／＼とさしたやうな眉の下に、閉ぢた眼瞼がすつと切れてゐた。額に皺が寄り、眼の縁がたるみ、脣が薄く、頤が殆んどなかつた。頬がふつくらとして、鼻が高かつた。その滑かで柔い頬を、指先でちよいとつゝつくと、顔全體がくしや／＼な澁面となつた。はつと思つてるまに、それがまた靜に元に返つた。

赤ん坊もまた疲れてるのだ。

「あなた、何をなすつてゐらつしやるの？」

振り向くと、秋子が眼を開いてゐた。咄嗟に彼は思ひ出して、眞綿の帽子を赤ん坊に被せてやつた。

「馬鹿に長い頭だね。」

秋子はたゞ微笑んだ。そして云つた。

「もうお寢みなさいな。」

「うむ。」

曖昧な返辭をしたまゝ、彼は腕を組んでぢつと坐つてゐた。蟲の聲がまた佽に響いてきた。聞くともなくそれに耳を傾けてるうちに、彼は底深い夢想に沈んでいつた。

「あな……!」

それが、彼を喫驚さした。

「なぜお寢みなさらないの。」

秋子が底光りのする眼で彼の方を見守つてゐた。彼は眼を外らして室の中を見廻した。凡てがひつそりとしてゐた。母と子との枕頭にいつまでも端坐してる自分の姿が、頭の中に浮彫となつて映つた。何とも云へないかすかなさはめきが、室全體を外から包んでゐた。

彼は突然恐ろしくなつた。背中が冷たくなつたのを強ひて立ち上つた。

「もう夜明けに近いかも知れない。」

さう云ひ捨てゝ彼は、秋子の視線から眼を避けながら。室の片隅に敷いてある布團へ、着物のまゝもぐり込んだ。眼をつぶると、暗い所へ引入れられるやうな心地がした。眼を開くと、先刻まではさうでもなかつたが、赤ん坊のため二重に覆ひをした電燈が薄暗かつた。……幾度も眼を開いたり閉ぢたりしてるうちに、いつのまにか眠つた。

然しよくは眠れなかつた。表を通る牛乳車の音に眼を覺した。次に眼を覺した時は、遠くに汽笛の音や汽車の響がしてゐた。それからはもう眠れなくなつた。そつと起き上つた。顧みると、秋子も赤ん坊もぐつすり寢込んでるらしかつ

た。

彼は一寸躊躇したが、やがて忍び足で縁側に出て、雨戸を靜かに開いた。冷かな空氣が薄すらと霧を湛へて、夜が白く明けてゐた。彼は大きく呼吸をした。それから煙草を吸つた。庭の隅の茂みの中に、何やら淡い色があつた。よく見ると、大きな枸杞の下垂れ枝が、薄紫の小さな花を一杯つけてるのだつた。

彼はその花に暫く見取れてゐた。心の奥から、第一の夜明だ！といふ聲が湧き上つてきた。

三

粘りつ氣の多い緊りの少い、何だか混沌とした全體だつたが、眼だけが神秘で美しかつた。ぼんやり見開いてる黒目に、外の光が奥深く映つて、僅かな微動にもちら〳〵と搖ぎ、それからまた靜まり返つた。その底から遙はな魂が覗き出してゐた。――それだけが彼の世界らしかつた。

順造は傍からぼんやり見守つてゐた。

産婆が毎日湯をつかはせに來た。室の中に上敷を擴げ、盥を置き、その中で湯をつかつた。衿を握りしめて肩にかついだ兩手と、くの字に曲げてる兩足とだけに、驚くほどの力が籠つてゐた。根本を堅く結へられてる赤い臍の緒が、湯の中にゆら〳〵としてゐた。その臍の緒に妖度フォルムが撒布され繃帶がされると、感じから云つても獨立した一個の存在だつた。顔を澁めて口で何かを探し求めてゐた。乳が出なかつたので砂糖湯を與へた。黒いころ〳〵の糞をした。淡褐色の液體を口から吐いた。生れる時に飲んだ汚物だそうだつた。乳が出るやうになつても、秋子のは盲乳だつた。乳首をもみ出して吸はせるのに、彼女は一生懸命になつてゐた。

順造は名前をつけるのに苦心した。いくら考へてもよい名前が浮ばなかつた。思ひ惑つたはてに、自分の順といふ字を取つて順一としてみた。するとそれが非常によくなつた。順といふ字も一といふ字も感じがよかつた。岡部順一と並べてみても惡くなかつた。それにきめた。

七夜に、奉書の紙に名前を書いて命名が濟んだ。產婆からいゝ名前だとほめられたのが、お世辭にせよ彼には嬉しかつた。麻で結へられた素燒の胞衣壺と、油紙の大きな汚物袋とが、妙に彼の氣にかゝつてゐた所へ、胞衣會社から來た男の手で持ち去られた。彼は區役所へ行つて出產屆をした。

萬事が濟んだ。順一は大抵眠つてゐた。秋子も晝となく夜となくうと／＼してゐた。食事と乳との時だけ、母と子とははつきり眼を覺した。

これでいゝのかな？

さういふ豫感が、自分の室に居る時、街路を歩いてる時、會社で執務してる時、ふつと順造の頭を掠めた。あなたには父となる資格がない、と云つた秋子の言葉は、思ひ出してもたゞ冗談だと卻けられたけれど本當に晴々とした喜びを一度も感じなかつたことが、暗い影を投げた。恐れたり安心したり感激したりしたけれど、それとは種類の異つたうち晴れた喜悅が、あつてもいゝ筈だつた。

不思議なのは、離れてると順一のことばかり氣になつたが、その室に足をふみ入れると、秋子の存在が順一を蔽ひつくしてしまつた。

俺には、順一より秋子の方が可愛いゝのだ！

さういふ氣持で彼は尋ねかけた。

「どうだい、身體の工合は？」
「えゝ。」
返辭だけをして、いゝとも惡いとも答へないで、彼女は痩せた頰に弱々しい微笑を浮べた。その頰にぽつと赤味のさしてることがあつた。
「熱があるんぢやないのかい。」
「いゝえ。」
髪の生へ際が薄く、額に一脈の淋しさを浮べ、頰の皮膚が蒼白く透き通つて見えた。それが美しかつた。
枕頭にぢつと坐つてるのが變だつたので、彼はよく椽側に屈み込んで、庭の黑い土を見守つた。秋子が起き上れるやうになりさへすれば、それでいゝと思つた。
「幾日すれば起き上れるんだい。」
「三週間ださうですけれど、そんなに寢てるのは退屈ですわ。」
その三週間が半分以上過ぎ去つた頃から、秋子は輕い下痢を催した。ビオフェルミンをのんだり食物の用心をしたりしたが、何の効もなかつた。然し大したことでもなさゝうだつた。
或る日、順造が會社から歸つて來ると、女中が頓狂な顏をして彼を玄關に迎へた。
「奥樣が大變でございましたよ。」
彼ははつとした。
秋子はうと〳〵眠つてゐた。彼が枕頭に坐り込んでも眼を覺さなかつた。彼はその額に手をやつた。燃えるやうに熱

かつた。驚いて手を引込める途端に、彼女は眼を開いた。

「どうしたんだい？」

彼女はぼんやりした眼付で彼の顔を探し求めた。それから微笑んだ。

「あなたでしたの。……私夢をみてゐた。」

「熱があるぢやないか。」

「さう？」

彼女はその朝から腹がしく／＼痛んでたさうだつた。然し陣痛は産後に屡々あつた。子宮が收縮する度に痛むのですから、痛むほど早く元に直るのですよ、と産婆が云つた言葉を彼女は思ひ出して、彼にも默つてゐたのだつた。所が午頃から激烈な疼痛がやつてきた。床の上に身をねぢつて苦しんだ。痛みが去るとねつとり汗をかいてゐた。それが頻繁にやつてきた。夕方になつて少し遠のいた。それからうと／＼眠つたさうだつた。

「腹の痛みはともかく、ひどく熱があるやうぢやないか。」

「さう？」と彼女はまた半信半疑の答へをした。熱を測ると彼は喫驚した。三十九度一分に上つてゐた。

先づ産婆を呼ぶことにした。女中が驅け出して行つた後で、彼は和服に着代へて食膳に向つた。秋子は何も食べたくないと云つた。それでも赤ん坊 乳をやつてゐた。

間もなく産婆が來てくれた。産婆にもよく分らなかつた。その紹介で、産科婦人科の坪井醫學士に頼むことゝした。近所の電話をかりてかけさせると、すぐに行くとの返辭だつた。

秋子はまた腹痛を訴へだした。産婆の指圖で、腹部に濕布をし、頭に氷嚢をあてゝやつた。痛みが去ると、彼女は

またうと〱してゐた。

すつかり夜になつてから、坪井醫學士が來てくれた。胸部の聽診の時に、以前呼吸器の病氣をしたことはないかと聞かれた。肺尖加答兒をやつたことがあつたね、と順造は秋子に尋ねた。秋子は首肯いた。然しその時もう醫學士は、腹部の診察にかゝつてゐた。產婆が側についてゐてくれた。子宮の內診の時に、順造は燈を外した。

診察が濟んで、女中が茶を持つてゆく時、順造はまたその室に戻つた。

「病名は今の所まだはつきりしませんが……明日まで經過をみたら凡そ確定するつもりです。」と醫學士は云つた。「然し熱が高い間は、兎に角授乳は控へといた方が宜しいでせう。」

明朝までに便を少量屆けてほしいと賴んで、醫學士は歸つていつた。

產褥熱！非常に恐ろしい病氣のやうに聞いてゐたその名が、順造の頭に閃いた。彼はそつと產婆に尋ねた。產婆はさうらしくはないと答へた。それでは窒扶斯かも知れなかつた。然しそれを產婆は一層はつきりと否定した。けれど彼女にも結局分らないらしかつた。

女中が牛乳と藥とを取りに行つてる間、產婆は殘つてゐてくれた。

腹痛が不規則に襲つてきた。秋子はもう身を踠きはしなかつたが、眉根に深い皺を寄せ齒をくひしばつてるので、それと知られた。

「苦しい？」

彼女は何とも答へないで、彼の顏をぢつと見返した。かすかに微笑を浮べようとしてるらしいのが、筋肉が引きつゝて泣顏になつてゐた。

産婆がしきりに秋子を慰めてくれた。しまひにその言葉が途切れると、順造は俄に不安な恐怖に襲はれた。室の隅に押しやられてる子供の方へ行つた。その寝顔を見て、また秋子の方へ戻つてきた。

女中が歸つてくると、牛乳は産婆が調合して、それから子供に飲ましてくれた。秋子の盲乳(めくらぢ)によりも一層安々と、護謨の乳首に吸ひついて、咽せるほど吸つてゐる子供の様子を、順造は涙ぐましい心地で眺めた。秋子も首を伸して、その方を眺めてゐた。

産婆は十一時が打つと歸つていつた。それを送つて門口まで出た時、順造は急に夜氣の冷さを感じた。空を仰いで冴えた星の光を見ると、秋も更けたといふ氣がした。彼は室に戻つて、思ひ出したやうに火鉢に炭をどつさりつぎ、水を入れた洗面器をかけて湯氣を立たせた。

秋子と順一との間に床を取らせようとすると、秋子は自分を眞中にしてくれと云つた。彼は女中と二人で秋子の床を室の眞中に引張つた。その後に自分の布團を敷かした。いつでも起き上れるやうに、着物のまゝ布團にはいつた。

秋子は腹痛が遠のいてゐた。その代りぐつたりしてゐた。

「氣分はどう？」

暫く返辭がなかつた。眠つてるのかなと彼が思ひ初めた頃、低いゆつくりした聲がした。

「いくらかいゝやうですわ。」

彼はもう話しかけない方がよいと思つた。彼女の額にのつてる氷嚢が、びくり〳〵とかすかに慄へるのを見て、その脈搏の數をはからうとした。ゆつくりした力強い脈搏のやうに感ぜられた。

このまゝ落付いてゆけばもう大丈夫だ！

それで安心して、疲勞のためにうと〳〵とした。

夜中にふと眼を覺すと、順一の泣聲が耳についた。秋子が半身を起して、襁褓を取代へてやつてる所だつた。彼はがばとはね起きた。それから牛乳を沸して飮ましてやつた。

順一も秋子も眠つた。彼も最後に眠つた。

翌朝、女中は坪井醫學士の許へ便を屆けた。午後診察に來るとの由だつた。

順造は食事を濟し、子供に牛乳をやり、それから庭に出て、狹い地面を歩き廻つた。霧を通して射す朝日の光が快かつた。植込の下枝の枯れたのを、ぽきり〳〵と折り取つてやつた。

十一時頃、坪井醫學士が不意に來診してきた。順造はどきりとした。醫學士は腹部の診察だけをした。

「結核性腹膜炎です。」

思ひもつかない病名に、順造はたゞ醫學士の顏を見守つた。醫學士は煙草に火をつけて、病人の顏を暫く見守つた。

「出來るだけ動かないやうにしなければいけませんね。」それから、病院にはいつてはどうかと勸めた。子供のためには乳母の必要があると命じた。不完全な牛乳は最も危險ださうだつた。

乳母の方は、ありさへすれば問題ではなかつた。入院の方は秋子がどうしても承知しなかつた。

「私子供の側で死にたいから。」と彼女は云つた。

「死ぬの生きるのといふほどのことではありません。入院して早く癒つた方がよくはありませんか。」

それでも秋子は承知しなかつた。順造の顏を懇願の眼付でぢつと眺めた。

順造は決心した。家でやることにきめた。看護婦を傭ふことは醫學士が引受けてくれた。順造は乳母が來るまで二人

ほしいと頼んだ。

「大丈夫だから、安心しておいで。」

秋子が强く首肯いたので彼は嬉しかつた。彼はすぐに桂庵へ行つた。赤茶けた髮の婆さんが出て來た。頭から足先までぢろ〳〵見られるので、可なり不快な氣がしたが、それを我慢して乳母を頼んだ。

「宜しうございます。心當りが一人ありますから、聞き合せてみませう。少し月が違いますけれど、牛乳よりはどんなにましだか分りませんよ。牛乳でおやりなさると……。」

牛乳と母乳との講釋が出さうになつたので、順造は至急に賴むと云ひ捨てゝ飛び出した。

空が拭つたやうに晴れて、日の光が冴え〳〵してゐた。そのぱつとした外光の中で、彼は突然云ひ知れぬ不安を感じた。驅けるやうにして歸つてきた。

午後、產婆が見舞つてくれた。結核性腹膜炎と聞いて眉を顰めた。順造は危險な病氣であることを直覺した。

夕方、看護婦が二人やつて來た。

秋子はまた激しい腹痛を訴へてゐた。食物を與へるとすぐに吐いた。日の暮れ方に、坪井醫學士が見舞つてくれた。注射が行はれた。暫くすると腹痛が止んだ。けれど秋子はぼんやりしてゐた。熱が九度八分に上つてゐた。たゞ待つより外はなかつた。然し待つた後で？

順造は不意に立ち上つた。家の中を方々見廻つた。何だかどの室をも綺麗に片附けて置かなければいけない氣がした。それから俄に、秋子の死の場合を豫想してることに氣付いて、これではいけないと思つた。考へを明るい方へ明るい方へと向けてそれに賴らうとした。

病勢は殆んど不可抗力を以て進んでゆくがやうだつた。前ほど激しくはないが然し持續的な腹痛が、時を定めず襲つてきた。秋子は眼をつぶり肉をくひしばつて、手先を震はせながらそれを堪へた。額に汗がにぢんで、眼が引吊つてると思はれることもあつた。さういふ努力に、産後の衰弱した身體は益々疲憊していつた。そして、それを補ふものは何もなかつた。食慾が一切なくなり、僅かな流動食を嚥下してもすぐに吐いた。藥もなか〱落付かなかつた。

翌日の十時頃彼女は、寝てるのが苦しいから坐つてみたいと云ひ出した。床の裾の方へ布團を積ませて、それによりかゝつて、坐つた。

彼女は暫く、障子の硝子から庭の方を見てゐた。それからふと思ひ出したやうに、坊やを連れて來てくれと云つた。順一の床は前晩から、離れの順造の室に移されてゐた。順造はそれを抱いて來た。

秋子は子供の顔をぢつと覗き込んだ。

「この兒は誰に似てるでせう？」

顔の輪廓が母親に似て眼から額が父親に似てる。」看護婦が答へた。

彼女は一寸微笑んで、それから後ろの布團へよりかゝつた。

その時順造は喫驚した。彼女のその姿が、分娩前の姿とそつくりだつた。眼の肉が落ち顔が蒼ざめてるのはまだいゝとして、薄つぺらな胸で喘ぐやうな息をし、その下に、大きく脹らんだ腹がどつしり落付いてゐた。岩田帯の代りに濕布の布がぐる〱卷いてあつた。其處を叩いたら、姙娠の時と同じ音がしさうだつた。

順造は眼を外らした。

「もう寝たらどうだい。」

「さうね。」

彼女はおとなしく順造の言葉に従つた。看護婦に手傳はして横にならうとする時、眼を見張り、頬を膨らませ、唇をきつと結んで、さし招くやうな手附をした、ぐ……ぐ……といふ音が喉から僅かに洩れて、その度々にびくり〳〵と肩を震はし。見張つた眼と差出した手先とで、早く〳〵と云つてゐた。順造には何のことやら分らなかつた。が咄嗟に看護婦が痰吐を差出すと、それにかぢりついてげぶりと吐いた。腐爛した悪臭がぷんと立つた。順一が生れた當時口ににぢませたのと同じ色をした、どろ〳〵の液體で、痰吐の半分以上もあつた。秋子はそのまゝ、枕の上にがつくりとなつた。

それからは、容態が目立つて悪くなつた、腹痛が襲つてくると、彼女はもう身體を引緊めるだけの力がないかのやうに、だらりと四肢を投げ出しながら、痛みに身を任せて、顔だけをくしや〳〵に澁めた。下痢の數が増し、嘔吐が日に一二回あつた。何れもひどい悪臭の液體だつた。腹が益々膨張してきた。九度五分前後の熱が續き、脈が百十近くにのぼつた。腹痛の合間には、昏眠に近い状態でうと〳〵してゐた。坪井醫學士は、診察を濟ますとたゞ默つて歸つて行つた。看護婦にドイツ語で一二言囁くこともあつた。

順造はもう何にも尋ねなかつた。順一と秋子との間を往き來した。看護婦は二人共悪くなかつた。一人は、てきぱきした言葉使ひをする、眼附のしつかりした大柄な女だつた。一人は、言葉に多少訛りのある、内氣な靜かな女だつた。秋子と順一とに、交代についてゐた。順一の方にくると、順一が眠つてる間一緒に眠つた。

順造は、晝間は精がつきたやうに、ぢつとしてるとすぐにうつら〳〵した。夜になると、頭のしんが張りきつて眠れなかつた。女中を早くから寢かして、看護婦と一緒に遲くまで、秋子の側についてゐた。

不吉な幻が浮んできた。

前年の夏、彼等は大きい硝子の容器に、金魚を二三匹飼つたことがあつた。その一匹が死にかゝつた。美しい龍金だつた。逆様になつて、大きな腹を水面に浮べながら、いつまでもぱく／＼やつてゐた。洗面器に鹽水を拵へて一晝夜ばかり入 て置くと、片 ぎが出來るくらゐに元氣になつた。それが一二日たつと、また仰向にひつくり返つた。さういふことを二三度くり返した。大きく脹れ上つた腹が固くなり、尾鰭の先が硬ばり、骨立つた頭に眼玉が飛び出してゐた。思ひ出したやうに四五度慌しく鰓を動かしては、またぢつと口を閉ぢた。死んだのかと思つて指先でつゝつくと、脹れた腹からつんと出てる鰭を動かして、ちよろ／＼と泳いだ。さういふ狀態が長く續いた。しまひには順造も秋子も、早く生きるか死ぬるかしてくれゝばいゝと思ふやうになつた。さう口に出してまで云つた。長く苦しめるのが可愛さうだつた。そして二人は、餘りその方を見ないやうにした。二週間ばかりたつた或る朝、金魚はもう動かなくなつてゐた。水から取り出してみると、あれほど固かつた大きな腹が、柔かくぶよ／＼になつてゐた。内部の臟腑が腐つてるらしかつた。

順造は怖ぢ恐れた眼付で、秋子の方を見やつた。大きく脹らんでる腹が、布團越しにも感ぜられる氣がした。日に僅かな水液しかはいらないで、而も多量の粘液を排出しながら、益々脹らんでくるその腹が、不氣味さを通り越して奇怪だつた。それをぢつと仰向に抱へて、彼女は熱と惡臭と疼痛とのうちに、うと／＼と眠つてゐた。蟀谷のあたりがぴく／＼震え、眼窩が陷入つて、眼玉が圓く飛び出てゐた。たゞ、頰から眉へかけた淋しみと、夜具の外へ投げ出してる手指とに、昔の面影が僅かに殘つてゐた。箇々の凹んだしなやかな細い指だつた。順造はその指先をそつと握つてやつた。

「あなた！」

聲に驚いて顔を擧げると、彼女は眼をぱつちり開いてゐた。

なに？と見返した眼付で彼は尋ねた。

彼女は何とも云はなかつた。眼玉だけが作りつけのやうに飛出してるその眼で、ぢつと彼の顔を眺め、それから天井の四隅を眺め、そしてまた薄い眼瞼を閉ぢた。

眠つてるのか覺めてるのか、見當がつかなかつた。夢現のやうに時々眉根をしかめた。

彼はいつまでも其處を去り得なかつた。考へつめて――何をだかは分らないでたゞ考へつめて、頭のしんが痛くなつた。思ひ切つて立ち上つた。

忍び足で室を出で、忍び足で離れの室へはいつた。看護婦の横に、順一が無心の寢顔を見せてゐた。順造はその枕頭に、また長く坐り込んだ。同じく陰慘な唸り聲ではあつたが、生産の時の張りきつた力の叫びとは違つて、滅入るやうな靜けさの冷たい唸り聲が、秋子の室から響いてくるやうな氣がした。その底から、彼女の大きな腹が眼の前に浮出してきた。

彼は恐ろしくなつて、所から布團を被つた。

朝早く、女中が竈の下を焚きつけてる間に、彼は押入から硝子の金魚入を取出して、それを裏口に持ち出し、塵箱の中へ力一杯に投げ入れて碎いた。

爽かな清い日だつた。彼は何物かに祈らずにはゐられない心地になつた。

秋子が回復してくれさへしたら！

然しその日も、同じやうに混沌たる影のうちに包まれた。

四

順乳は乳母のことを、頭の何處かにひつかゝりながらも、いつとはなしに考への外へ投り出しがちだつた。所が或る日、桂庵の婆さんが不意に若い女を連れて來た。

乳母だ、と聞いた時、順造は一寸面喰つた心地がした。どういふ風に應對していゝものか分らなかつた。兎も角も離れの室に通した。桂庵の婆さんと若い女とは、きちんと膝を合して坐つた。婆さんは室の中の樣子をぢろぢろ見廻した。若い女は顔を伏せてゐた。羽二重の帶に銘仙絣の對の着物羽織をつけ、髮を大きな束髮に結つてゐた、櫛を一本もさしてゐないのが、變に順造の眼に止つた。

「この人が乳母に出たいと申すのでございますが……。」と桂庵の婆さんは、看護婦が遠慮して出て行つた時云ひ出した。そして、奉公は初めてゞあること、身元も確かであること、乳は盗乳で分量も多いこと、産後十ケ月ではあるけれど、牛乳よりは子供のためにいゝこと、などをぱさ〳〵した而も丁寧な能辯で云ひ立てた。

「この兒です。」と彼はぶつきら棒に、室の隅に眠つてる順一を指し示して云つた。母親が産後の腹膜で惱んでるので、是非面倒をみて貰ひたいと、頭から押被せるやうな調子で賴んだ。

婆さんは坐を立つて、廊下へ女を呼び出し、暫く何やら囁いてゐた。それから順造の前に來て、給金を十七圓ほしいことゝ、二三日は目見のつもりでゐてほしいことゝを斷つた。

婆さんが歸つた後で、女は不器用なお辭儀をして云つた。

「よろしくお願ひ致します」

口先から出る聲で語尾が高くはつきりしてゐた。入江龍子といふ名だつた。大柄な立派な體格で、眼が大きくくるりとしてることだけを、順造は見て取つた。

彼は秋子の所へ行つて、乳母が來たことを知らせた。彼女は初め腑に落ちないらしかつた。それから、遠くを見つめるやうな眼付をして、漸く首肯いた。

「連れて來やうか。」

「えゝ。」

龍子は室の隅に坐つて、何やら考へ込んでゐた。それを順造は廊下の外から呼び出した。

彼女は病室にはいつて、程よい邊へ坐り、低く頭を下げて云つた。

「不束者でございますけれど……」

その挨拶を順造は、自分に對する先刻の挨拶よりは、遙かに立派であると思つた。

「お頼みしますよ。」と秋子は云つてゐた。「私はこんなですけれど、あなたが坊やの面倒をみて下されば、ほんとに安心です。」

順造は席を立つて、茶の間の方へ行き、次に庭へ出た。何だか氣持が落付かなかつた。看護婦が來た時とは全く別な感じ――家の中に女性が一人殖えたといふ感じが、妙に氣にかゝつた。

然しその感じは、やがて何處かへ飛び去つてしまつた。秋子の容態が次第に險惡になつていつた。

熱が九度以下にさがつて、脈搏が百十五にも及んだ。始終嘔氣があつて、僅かな流動食も咽に通り難かつた。そのく

せ、いつも喉が渇いてゐて、盛んに番茶の熱いのをほしがつた。煮立つて間もない熱いやつを、平氣で飲み下した。腹痛が長く續いて、泣くやうな唸り聲を立てた。痛みが去ると、ぐつたりしながらも、手足がだるくて堪らないと訴へた。前腕と足の腓腸部（ふくらはぎ）とを、始終さすつてやらなければならなかつた。そしては晝となく夜となく、頭と心臟部とに氷嚢をあて、腹部に溫濕布をし、足先に湯たんぽを入れてうと／＼してゐた。ともすると、膝から下がすぐに冷くなつた。

どうにも仕方のない狀態だつた。親戚や親しい知人の見舞客があつても、彼女は別に嬉しさうな顏もしなかつた。客が歸ると、僅かの言葉しか交さなかつたのに、非常に疲れを覺えてゐるらしかつた。

もし秋子が死んだら？

さういふ場合の豫想が、いつしか順造の頭に巣くつてきた。彼はそれに自ら氣付いて不安になつた。さりとて、彼女をそのまゝ長く苦しめるのは堪らないことだつた。が回復の望みは更に少なかつた。腹痛に唸りながら齒をくひしばつてる彼女の側に、彼は拳を握りしめた兩腕を組みながら、その大きな腹をぢつと睨みつけた。切り開いて中の何かを掴み出したら、といふやうな殘忍な考へまで起つた。

彼女は唸り聲をはたと止め、齒をぎり／＼喰ひしばつて、異常な力の籠つた兩手を、ぐつと肩の方へ持つて來た。見開いた眼が据つてゐた。痙攣を起したのだつた。

腹痛を我慢してるのか痙攣を起してるのか、見極めのつかないこともよくあつた。

「もう駄目でせうか。」と順造は坪井醫學士に尋ねた。

「今の所はまだ大丈夫のやうですが、然しあの通りの狀態ですからね……」

醫學士は多くを語らなかつた。然しその樣子は、殆んど望みのないことを語つてゐた。

もはや時期の問題だ！

然しその底から、絶望的な反抗の氣勢が、順造の胸に時々湧き立つた。俺がついてる間は死なせない、さう心に誓つた。そして彼は出來るだけ病室から去らなかつた。少しでも彼女の側を離れると、云ひ知れぬ不安に驅られた。夜もその室に寢ることゝした。

宿に行つて荷物を取つて來たい、そして一晩泊つてきたい、と龍子が申し出た時、順造は怒鳴りつけるやうな調子で云つた。

「君は歸つてくるんですか、來ないんですか。」

龍子は呆れたやうに彼の顔を見返した。

「はつきりしとかないと、僕は非常に困るんだから。」

「では、」と龍子は暫くして云つた、「荷物だけ持つてすぐに歸つて參ります。」

「あゝさうし給ひ。俥で行つたらぢきだらう。」

龍子が出て行つた後で、ねんねこにくるまつた順一を抱いて、離れの室の中を歩き廻つてゐるうちに、彼はふと先刻の龍子との應對を思ひ出して、我ながら可笑しくなつた。大きな聲で笑つてみたくなつた　が次に、何とも云ひやうのない憂欝に襲はれた。

秋子も順一も自分自身も、どうとでもなるやうになるがいゝ！

彼は床の上にごろりと寢轉んで　順一に腕枕をさして抱きながら、ぼんやり天井を眺めてゐた。暫くして順一がむづかると、機械的に立ち上つて、室の中をよいよいして歩いた。喜びも悲しみもないたゞ澄み切つた順一の眼が、この上

もなく淋しく思はれてきた。順一が眠るとそれを布團に寢かして、自分は疊の上にねそべつた。背筋や足先がぞく〳〵寒かつたが、身を動かすのも嫌だつた。

龍子が約束通りに早く歸つて來ても、まだ、秋子の氣分が大變いゝと看護婦に云はれても、彼は不機嫌に默り込んでゐた。

然し、實際秋子は氣分がはつきりしてきた。腹痛も非常に遠のき、痙攣も襲つて來なかつた。その晩遲くまで眼を開いてゐた。わりにしつかりした聲で、看護婦と話をした。

順造は枕の方に寢轉んで、雜誌を披いて二三頁飛讀みをしたり、ぼんやり天井板の木目を見守つたりした。凡てが不思議な氣がした。姙娠や分娩や病氣や乳母や看護婦や、現在眼の前の病室の事物までが、夢の中のことのやうに感ぜられた。そしてそれらが、永久に續く事柄のやうに思はれた。靜かな靜かな夜だつた。しいんとした中に蟲の聲がしてゐた。遠い昔の思ひ出が籠つてゐさうな夜だつた。秋子の大きな腹ももう氣にかゝらなかつた。たゞあるがまゝでよかつた。

けれど翌朝、朝日の光が椽側に當つてる頃、秋子がかすかな微笑を浮べたのを見た時、また彼女が平氣で鷄卵の黄味をすゝつたのを見た時、順造は思はず飛び上つた。

勝利だ、勝利だ！

何とはなしにさういふ氣がした。

秋子ははつきり眼を見開いてゐた。精神が澄み切つてゐるらしかつた。散らかつてる床の間の上を片附けてくれと云つた。敷布團が濕つてゐるから取代へてくれと云つた——そのことは看護婦になだめられて諦めた。この次から醫者にもつと

單舎を入れて貰ふやうに、醫者に頼んでくれと云つた。氷嚢の氷の角が痛いと云つた。今日は幾日かと尋ねた。

順一の泣聲が聞えると、此處に連れて來てくれとせがんだ。龍子がそれを抱いてきた。秋子はぢつと順一の顔を眺めた。それから眼を外らして、暫くすると、龍子にとも順一にともなく云つた。

「あちらで遊んでいらつしやい。」

けれども、二三時間たつて、順一の聲が聞えると、彼女はまた連れて來てくれと云つた。

「あなたみてきて下さいよ。」と順造に云ふこともあつた。

順造は立ち上つて、順一の方をみに行く風をしながら、茶の間に屈み込んだ。暫くぼんやりしてゐると、看護婦から呼ばれた。

「奥樣がお呼びでございますよ。」

順造は秋子の側にやつて來た。

「なに？」

「え？」と秋子の方から尋ねかけた。

それから一二分間して、秋子は獨語のやうな調子で云ひ出した。

「いやね、乳母(ばあや)に任せとくのは。」

順一のことに違ひなかつた。

「だつてお前が病氣の間は仕方ないぢやないか。」と順造は云つた「病氣がよくなりさへすれば、またどうにでもなるよ」

「どうにでもなるつて……生れてしまはなければ駄目ぢやないの？」

どうも調子が變だつた。順造は悄然と彼女の顔を見つめた。

「あなた、私の手を握つてゝ頂戴、それはひどくくるのよ」

順造が手を差出すと、彼女は異常な力でそれを握りしめた。かと思ふと、不意にその手を離して、室の隅を指し示した。

「どうしたんでせう。あんな大きな塵があるわ。だん〳〵大きくなるやうよ。」

その方を注意して見ると、一寸した糸屑が落ちてゐた。

それでも　彼女の樣子は落付いてゐた。氣分はと尋ねられると、大變いゝと答へた。

「ねえ、私がよくなるまでゐて頂戴」と看護婦に云つた。「みんな他處へ行つてしまつて、私一人になつて、それは心細かつたわ。……それとも、夢だつたかしら？」

彼女の世界の混亂してることが、わきからもよく見て取られた。それが二日續いた。順造は心の慄えを禁じ得なかつた。しつかりしてゐなければいけないと思つた。

その二日目の午後に、坪井醫學士は彼をわきへ呼んで云つた。

「どうも仕方がありませんね。……いつどんなことになるか分らない狀態ですから、もしお知らせなさる所がありましたら、今のうちに……。」

「そんなに惡いんでせうか。」

「まださし迫つてどうといふことはありますまいが、何しろ、輕い腦症を起してゐますからね。……そして、腦と同じ位に心臟にも打擊を受けてゐます」

順造は默つて頭を下げた。

然しどうも、それとはつきり信じられなかつた。精神が苦悶から脱して漸くうち勝ちかける頃に、興奮の餘り多少混亂することは、常識から考へても肯定出來た。またさういふ實例はいくらもあつた。秋子の場合もそれに違ひないやうに思はれた。あんなに疲憊しつくしてゐたのが、俄に元氣になつたのだつた。

彼は看護婦に相談してみた。

「左樣でございますね、脈はいくらかお惡いやうですけれど、食慾は增していらしたのですから……。」

然し結局の斷定は得られなかつた、

兎に角萬一の用意はしておかう、と順造は決心した。

秋子が病氣のことは、必要の所へは大抵知らしてあつた。彼の國許の母と弟とには、わざ〳〵出て來て貰ふにも及ばなかつた。で彼は秋子の國許の父へだけ電報を打つた。病が重いから叔父の家まで來いとした。叔父――東京に居る唯一の近い親戚――へは大體のことを速達郵便で知らした。縁遠い親戚が一つと秋子の親しい友人が四五あつたが、それには別に通知の必要はないと考へた。

それだけの考慮と處置とを取るのに、彼は落付いてる自分の心を見出した。然し大急ぎでやらなければならなかつた。秋子がしきりに彼を求めてゐた。

彼が一寸姿を見せないと、何處へ行つてたかと彼女は尋ねた。そしてぢつと彼の顏を見つめた。落ち凹みながら眼玉だけ飛び出して見える、凄い眼付だつた。底に曇りを帶びてうはべだけぎら〳〵光つてる、不氣味な眼の光だつた。その眼がぐるりと回轉して一つ所に据ると、誰か來たやうだから見て來いと云ひ出した。女中が居るからいゝと彼が答へ

ても承知しなかつた。彼が立ち上りかけると、すぐに戻つてきてくれと云つた。

玄關には誰も來てはゐなかつた。

さういふことが何度もくり返された。彼はしまひに馬鹿々々しくなつた。妻を少し歩き廻つて戻つて來た、「私、あなたをどんなに待つたか知れないわ。」と彼女は云ひながら、彼をすぐ側に引寄せて、その耳に囁いた「お腹が急に輕くなつたやうな氣がするのよ、そつと坐つてみませうか、內密でね。」

そして彼女は起き上らうとした。看護婦がそれを慌てゝ止めた。

「だつてもうお腹は小さくなつてるのに……。」

然し實際は、小さいどころではなかつた。その日の診察の時には、今にも張り裂けさうに脹れ上つて、皮膚がぴかぴか光つてゐた。鳩尾の所でくつきりと一線を劃して、それから上は肋骨が一枚々々浮出して見えてゐた。順造は見かねて眼を外らした。見舞に來てゐた叔母がその場に居合せないのを、幸と思つたほどだつた。

秋子はしきりに、身體の汚れを氣にしだした。夜着の襟から手を出して、手先が穢いと云つた。も少し病氣がよくなつて洗つてあげる、と看護婦に云はれると、此度は兩手を持ち寄つて、爪の中の垢をほぢくり初めた。何度も爪を返して、その裏表を長くあらためてゐた。額に垂れかゝるほつれ毛を、非常に氣にしてかき上げた。毛がかゝつてゐないのに、何度も額を撫で廻すことがあつた。氷嚢をのせる前には、必ず乾いた手拭で拭はせた。手指の爪の根本に白い部分が見えないからと云つては、病氣がそんなにひどいのだらうかと怪しんだ。

「大丈夫でございますよ。」と看護婦が答へた、

「さうね。お腹も輕くなつたやうだから。」

それでも彼女はやはり爪を氣にしてゐた。

明るみのない育いたやうな不安が、次第に順造の心に喰ひ入つていつた。何か不可抗的なものが、ぢり／＼と迫つてきた。

或る晩、彼女はどうしても起き上ると云つてきかなかつた。順造と看護婦とでいくら説き聞かせても、更に承知しなかつた。云ふまゝに任せるの外はなかつた。布團を積んでそれによりかゝつて坐らせた。

彼女はほつと息をついた。

「私こんな嬉しいことはない。もう癒つたのも同じね。」

不思議さうにあたりを見廻してる彼女の様子に、順造は涙ぐんだ。

「乾度癒るよ。」

あたりがしいんとしてゐた。

「あなた！」

秋子は突然高い聲を出した。眼を見開いて障子の方を見つめてゐた。彼はその視線を辿つた。……」ぞつと顫え上つた。

障子の硝子に人影が見えてゐた。眼玉ばかり大きな骸骨に似た顔が、さゝくれだつた亂髪に縁取られてゐた。それが細長い首の上にのつかつてゐた。その下の方に、レントゲンで見るやうな骨ばかりの細い手が、何かを抱いてる恰好に組み合されてゐた。抱かれてるのは大きく張り出した腹部だつた。――その全體の姿が、ぢつと室の中を覗き込んでゐた。

「おかしいわね。彼所にもあなたが坐つてる。」

「えー」

順造はまたぞつとした。瞬間に、硝子の人影は首を横にねぢ向けた。

「いや！二つになつちや。」

秋子が彼の方をぢつと見てゐた。

彼は漸く我に返つた。彼が見たのは秋子の影で、秋子が見たのは彼の影だつた。と分りはしたが、そのことが變に氣にかゝつた。

彼は立ち上つて、電氣の位置を變へた。

「これでもう、二つになることはないよ。」

いやに眞劍な氣持になつていつた。

「何だか薄暗いやうぢやないの。」と彼女は云つた。それから一寸間を置いた。「息苦しいから、戸を開けて下さらない？」

彼は彼女の手を執つた。冷たい手だつた。

「だつてまだ夜ぢやないか。」

「まだ夜は明けないの？」

彼はぢつとして居れなかつた。そんな筈はないけれど、夜明けかも知れないといふ氣がした。そして立ち上りかけた。

その時、恐ろしい音が起つた。ある限りの力を搾つて、堰き止めるものと突き破るものとが、ごつた返してる渦巻きのうなりが、ごーう、ごーう……と秋子の喉から洩れてきた。一瞬の餘裕も得られなかつた。彼は秋子の上體に飛びつ

いて抱きしめた。彼女の兩の拳が胸のあたりへ、徐々に上つてきた。眼が据つたまゝぐる〳〵と廻つた。大きな叫び聲がした。看護婦が注射器を取つて驅け寄つた。光つた針が皮ばかりの胸へづぶりと差された。がその時には、消え入るやうに凡てがひつそりとなつてゐた。

僅かな瞬間のやうでもあれば、長い時間のやうでもあつた。

順造は昏迷した眼付であたりを見廻した。いつのまにか、も一人の看護婦も龍子も女中も驅けつけてゐた。何やら相圖をしてる手附が眼に止つた。彼は靜に秋子を寢かした。

底知れぬ沈默が落ちて來た。秋子は心臟痲痺のために、冷たくなつてゐた。

五

どんよりとした重い水が、或は渦を巻き或は淀み或は瀬をなして、小止みもない力で流れてゆく、さういふ日々が續いた。順造は心の眼をつぶつて、その流れのまゝに身を任せた。叔父と叔母とが萬事を計らつてくれた。

三七日の頃から、順造は心身の疲憊に壓倒されながら、漸くはつきりと周圍を意識しだした。凡てが寂寥のうちに落付いてきて、彼の世界へまとまりだした。その世界が吹き曝しだつた。齒が一本拔け落ちた時、いくら口をきつと結んでも、何處からか冷たい風が喉元へ吹き込んでくる、さういふ淋しさが彼の胸へ喰ひ込んでいつた。

何を考へるともなくぼんやりして、室の中を片附けてゐると、戸棚の隅から、紙に包んだメリンスや羽二重の布が二三個出てきた。順一が生れて間もなく、親しい友から貰つた祝着だつた。貰つたまゝで忘れられてしまつてゐた。

彼は初めて眺めるやうな心地で、順一の顔を見守つた。長い頭がいつしか圓くなり、頬から口のあたりへまとまりが

出來、額の皺がなくなつて、ちらつく光の後を眼で追ふやうになつてゐた。頬にふつくらと肉がついてゐて、絹のやうにすべ／＼した皮膚だつた。

その顔を指先でつゝくと、すぐに口を持つてきて、あちらこちら探し廻つた。きよとんとした顔付をしたり、妙な澁め顔をしたり、大きく口を開いて泣き立てたりした。小指の先をくはへさせると、生温い粘り氣のある脣で、ちゆつ／＼と吸つた。しまひには焦れだした。

「お可哀さうですよ、そんなにからかひなすつては。」と龍子は云つた。

彼女は順一を抱き取つて乳をやつた。圓く張つた眞白な乳房が、順一の頬と同じくすべ／＼した皮膚を、惜しげもなく曝してゐた。

順造は喫驚して眼を見張つた。すぐ自分の側に餘りにまざ／＼と、彼女の存在が感ぜられた。秋子の死から葬式から其後の混雜の間に、順一を介して、彼女はいつのまにか彼と相接して立つてゐた。彼は適當の視距離を保つて彼女を見ることが出來なかつた。

大きな澄んだ眼だつた。瞳の輝きが目玉の表面に浮いて見え、同情と揶揄との間を一瞬に飛び越し得る眼付だつた。鼻が太くがつしりして、薄い脣が少しく反り返つてゐた。柔かみのある下眼瞼の頬に、いつも薄く白粉を塗つて、大きな束髮に結つてゐた。若々しさのうちに何處か緊りのない爛熟した肉附で、甘酸つぱい匂ひ——匂ひとも云へないほどの風味が、その全身に漂つてゐた。凡ての點で淸楚だといふ感じのする秋子とは異つて、鈍重なずつしりとした容積だつた。

或る大學生と戀してその子を孕みまでしたが、子供が生れると間もなく男に捨てられ、一人で子供を育てゝゐたけれ

ど、何時になつても先の見込がないので、厄介になつてる家――遠い緣故――の主婦さんに勸められて、子供を他家にくれてやり、自分は乳母奉公の決心をしたのだ、といふやうなことを彼女は語つた。

「私共樣に代つて、坊ちやまを立派にお育て致しますわ」と彼女は云つた。

そして實際、少しの手落もなく順一を守り育てながら、彼女は家事萬端のことを取締つてくれた。日々の食事のことから、順造の身邊の世話までやいた。襯衣が少し汚れるとすぐに取代へさした。外出の時には新らしい足袋を揃へておいてくれた。外で傘を取逃へてくると、仕樣がないと小言を云つた。

「ほんとに旦那樣は懶惰でゐらつしやいますね。少しお服裝に氣をつけなさらなければいけませんよ。……ふさいでばかりゐらつしやらないで、氣晴しにお出かけなさいましよ。……香典のお返しのことも、そろ〳〵お仕度をなさらなければなりませんでせう。……炬燵のお布團が穢くなつてゐますから、新しくお作り致しませうか。」

といふやうなことを、反り返り氣味の薄い唇で、彼女はてきぱきと云つてのけた。

順造はそれらの世話のうちに包み込まれ、眼の前を歩いでる彼女の肉體を見守りながら、心では過ぎ去つた影を追つてゐた。

カチン、カチン……と五六回くり返して、トン、トン、トン……と急な調子になつた。その時彼は、もつと大きな釘でしつかりと棺の蓋を打付けてほしいと思つた。出來るならば、彼女の死骸を鐵の箱にでも納めてしまひたかつた。

――カアン、カアン、カアン、カアン……と何時までも同じ單調な響だつた。それが讀經の聲の間から、絶え間なく湧き上つてきた。すぐ膝の前で力籠めて什金を叩いてる半白の僧侶が、鋭い響によく鼓膜を痛めないものだと、彼はその時不思議に思つた。――ガチヤリ、とたゞ一度の響だつた。胸の中に鐵の錘を投げ込まれるやうな殘酷な感じだ

った。その時彼は、緻の筋肉を引きつらして、閉め切つた火葬の竈の鐵の扉を見つめた。

その三つの音が、長く彼の耳に殘つてゐた。……骨揚に行つて、木の火箸の先で灰の中から、形のある遺骨を拾ひ出し、それを瀬戸の壺につめ、秋晴れの爽かた外光の中を、何とも云へない悲壯な清淨な氣持で歸つてきた、その同じ氣持を、何時までも保つてゐたいと願つてゐた、その下から、三様の音がともすると響いてきた。夜遅くぼんやりしてると、耳の底にこびりついてる音に、我知らず聽き入つてることがあつた。

彼は堪らない心地になつた。

如何に秋子を愛してゐたことか、そして、如何に愛し方が足りなかつたことか！

そして彼の心に浮んでくるのは、結婚當時の彼女の姿だつた。膝の上に抱きしめ、掌の中にまるめ込みたいやうな、小柄な淋しい可愛いゝ彼女だつた。小さく清楚にちまちまとまとまつてる彼女だつた。可愛さの餘りに小憎らしくなつて、こづき廻したこともあつたが……。

遺骨は折を見て國許の墓地に埋めるので、寺へ預けておくつもりだつたが、四十九日が過ぎると、順造はそれを家に持つて來て、押入の片隅を佛壇にしつらへ、其處へ丁寧に安置した。

「これ、坊やのお母ちゃんだよ。」

順一を抱いて來て、その前を往き來した。心持ち右と左とびつこの眼で、何處からかぢつと見られてる心地がした。

この兒を見守つてるのだ！

然し、順一に母親の務めをしてるのは龍子だつた。彼女は殆んど本能的な愛で順一を庇護してるかと思はれた。一寸順一が泣聲を立てゝもすぐに飛んで來た。おゝいゝ兒ちやん、いゝ兒ちやん、と云つて頬ずりをしてゐた。順一が風邪

の氣味だと、慌てゝ醫者へ俥を走らせた。歸つて來て、しどけない坐り方をしながら、順一を胸に抱きしめた。

「よかつたわね、何でもなくて。」

大きく揚羽蝶を染め出した羽二重の帯に、派手な小紋金紗の羽織をつけてゐた。方々へ香典返しをする折に、秋子のを形見分けとして貰つたのを、袖丈を縫ひ直した衣類だつた。順造は妙な氣持で彼女の姿を眺めた。

順一が少し熱を出すと、彼女は用を悉く女中に任せて、その枕頭につききりでゐた。

「自分の子供に逢ひたくはないかい。」と順造は尋ねてみた。

「いゝえ、もう他人にやつてしまつたものですから。」

「それでも始終考へ出すだらう。順一とどちらが可愛いゝ?」

「それはお坊ちやまの方ですわ。私坊ちやまを自分の兒の……自分の兒より幾倍可愛いゝか分りません。乳を上げてるばかりでなく、何だか深いご縁があるやうな氣がしまして……。」

さういふ彼女の氣持が、彼にはよく了解出來なかつた。ぢつとその顔を眺めてやつた。

「順一は仕合せだ。」

獨語の調子で云ひ捨てた彼の言葉を、彼女はよそ事に聞き流して、ぼんやり室の隅を見つめてゐたが、ふとしみ〳〵と云ひ出した。

「奥様はほんとにお仕合せでゐらつしやいました。旦那様のお腕に抱かれて息をお引取りなさいましたのですもの。……」

順造は物につき當つたやうな氣がして默り込んだ。秋子の臨終のことがまざ〳〵と記憶の中に蘇つてきた。その時彼

女が生きてゐた世界のことを思ふと、眼の前が眞暗なものに閉された。

秋子が生きてゐてさへくれたら！

同じやうな靜かな夜だつた。蟲の聲が聞えない代りに、しいんと凍りつくやうな底冷（そこびえ）が感ぜられた。眼の前の女が、順一の枕頭で看護してる女が、秋子であつてくれたら……とふと思つたのが、いやに氣分にこびりついてきた。龍子の何だかもや／＼とした過剩な肉體から、むづ痒いやうな反感と嫌惡と、また同時に好奇心とを喚られて、彼は不機嫌に默り込んでしまつた。

龍子も默り込んでゐた。寢てゐる順一の赤い顔が、靜かに靜かに皺を寄せて、それがしまひには無邪氣な微笑に變つた。

「あら、何が可笑しいんでせう。」そして龍子は順造の方を顧みた。「夢をごらんなすつてるのかしら……それとも胞衣（えな）に引かされてでせうかしら。」

順造はふいと立ち上つた。

夢をみてか、それとも胞衣に引かされてか……その微笑が、底知らぬ闇の中まで、秋子の死へまで、根を張つてゐた。

彼は恐ろしい場所をでも遁れるやうな心地で、離れの自分の室へはいつた。ことりとの物音もしなかつた。彼方の室に、龍子と順一とが居ることは分つてゐたが、分娩の唸りとも瀕死の唸りともつかない、暗い鈍い底力のある音が湧き上つて、腹だけ脹れ上つた骸骨の怪物が、影繪のやうに浮出してきた……

秋子ではない、秋子ではない！

秋子は押入の中の骨壺に、清淨な灰となつてはいつてゐた。

彼は押入の襖を開いた。香を焚いた。諸行無常……といふよりも寧ろ、凡て空なり、その香煙が靜に立ち昇つた。白布の結へ目を解き、箱を開き、壺の蓋を取ると、所々黝ずんだ灰白い遺骨が、八分めばかりはいつてゐた。

秋子、秋子！

身體中が冷たくなつて、髮の毛穴がぞーつとした。眞白な骨片を一枚取つて　齒でがり／＼とやつた。鹽辛い味がして口の中で融けて無くなつた。手に殘つてるのを、またがり／＼とやつた。唾液を飲み込むと、胸がむかついてきた。ぢつと押へ止めてるまに鎭まつた。しいんとなつた。

彼ははつとして飛び上つた。室の入口から秋子の眞白い顏が覗いてゐた。と思つたのは瞬間で、龍子の顏に變つた。それが石のやうになつて、こちらを見つめてゐた。

「乳母や！」

喫驚するほどの大きな聲が出た。

「何をしてゐたんだ！」

彼に飛びかゝつて、無我夢中で毆りつけた。彼女の身體がへな／＼になつて倒れたのを感じた。女中が驅けつけて來た。彼は腕を組んでぼんやりあたりを見廻した。横坐りに片手で身を支へながら顫えてる龍子と、呆氣に取られてつゝ立つてる女中と、……廊下の隅が暗薄かつた。

「散歩に行つてくる。」

云ひ捨てゝ置いて、袖からつき込んだ左手でぐつと腹を押へながら、わざとゆつくり構へ込んだ。金入を懐にし、煙草を袂に入れ、外套を着込み、帽子を被つて、外に出た。

寒い夜だつた。西の空に傾いてる月の面を掠めて、白い雲が空低くち切れ飛んでゐた。彼は明るい大通の方へ歩いていつた。風を捲き起して轟然と走り過ぎる電車の響と、何處までも續いてるレールの蒼白い輝きとが、夜更けの寒い街路に快かつた。彼は眞直にそのレールに沿つて歩み續けた。何もかも打忘れて大地の上に一人つゝ立つてる氣持だつた。提燈をつけ大きな荷物を積んで通り過ぎた怪しい荷車が、その氣持にぽつりと黑い影を落していつた。

下らないことにこだはる必要はない！

それでも、寂しい町並に、一軒の閉め殘つた硝子器具店が、ぎら〳〵した光りの亂射を投じてるのを見た時、彼はその中に石を投り込んでやりたくなつた。石を拾ふために屈まうとまでした。が、俄に馬鹿々々しくなつた。彼はほーつと大きく息をした。

歩き疲れると、眼に止つた相當のカフエーへはいつた。五六人の客が居た。その方へ背中を向けて、ウイスキーやカクテールの杯をちびり〳〵と嘗めた。煖爐の火がいやにかつと熱くて、そのくせ身體は溫まらなかつた。彼は強いて杯の數を重ねた。腹も空いてゐた。料理を三四品食べた。

電車が無くなつた頃、彼はぼんやりした醉心地で家に歸つて來た。寄せられてる玄關の戸を押し開いたが、誰も出て來なかつた。自分で締りをして、茶の間に通つた。火鉢に鐵瓶の湯が沸いてゐて、茶道具が揃へてあつた。茶をいれて飮んだ。

家中がひつそりしてゐた。鼠の音もせず、人の氣配もしなかつた。彼は變な氣持になつた。女中部屋を覗いてみると女中はぐつすり眠つてゐた。坐敷の方を覗いてみると……喫驚した。

龍子が、順一の枕頭に、石のやうに固くなつて端坐してゐた。

順一の病氣がひどいのかしら、それとも……

二三時間前のことが、眼にはつきり見えて來た。それを無理に彼は突きぬけようとした、つか〳〵とはいつて行つて順一の横に座つた。手を伸して額に觸つてみたが、生温かいだけで、熱はなささうだつた。

「様子が惡さうなのかい。」

「いゝえ。」と龍子は顏を伏せたまゝ答へた。

「どうしたんだい。」

返辭がなかつた。彼は暫く待つてから、火鉢の方へいざり寄つて煙草を吸つた。

「旦那様は、」と龍子は云つた。「坊ちやまがお可愛くないのでございませうか。」

何のことだかよく分らないで、その方を見返すと、龍子の眞劍な眼付に打たれた。彼はぎくりとした。

「私奥様から、坊やのことを頼むとくれ〴〵も云はれてをりますし、それに、自分の兒は他人にやつてしまつて、坊ちやまが何だか自分の兒のやうな氣がして、可愛ゆくてお可哀さうで、離れられませんけれど、いろ〳〵考へますと、やはりお隙を頂いた方が宜しいやうでございますから……。」

ゆつくりした言葉であつたがその調子が上ずつてゐて、いつもの彼女ではなかつた。彼はぢつとその顏を見つめてやつた。彼女は口を噤んだ。

「嘘だ。」と彼は叫んだ。「お前は僕に意見をするつもりなんだらう。」

彼女は顏色を變へた。

「何を仰言いますの。」

「さうだ、僕に殴られたのが口惜しいんだらう。」

「いゝえ。」きつぱり答へておいて、それから俄に彼女は身を捩はした。「恐いんでございます。恐くつて……恐くつて……。」

彼は息をつめた。ぞつとした。障子の硝子に映つてる電燈の影を見つめてゐると、眼の中が熱くなつてきた。涙が眼瞼を溢れた。それに自ら氣付くと、涙が後から〳〵湧いてきた。

「許してくれ、僕が惡いんだ。」

彼は龍子の手を執つた。がつしりした太い手だつた。それが力強かつた。彼女の方へ身を寄せると、彼女の方も進んできた。逞しいずつしりとした彼女の腕の中に、彼は我を忘れてもぐり込んでいつた。

「旦那様！」

口元の肉を引きつらして、泣いてるのか笑つてるのか分らない皺を刻みながら、眼の奥で微笑んでゐた。

底のない泥沼に陷つたのと同じだつた。彼は踠けば踠くほど、その勢に驅られて沒していつた。しまひには、自ら進んで絶望的に沒していつた。

翌朝、彼は離れの押入の中に、秋子の遺骨が出しつ放しになつてるのを見出した時、冷たい脂汗が額ににぢんだ。

それが夜になると、怪しい幻覺の形を取つてきた。

龍子の前を逃げるやうにして、離れの室にやつて來、窓の下に据えてる机に向ふと、丁度うしろが押入になつてゐた。

それがしきりに氣にかゝつた。いくら努力してもいつのまにかそちらへ注意を惹かれてゐた。音もしないですうつと襖

が開いて、白い布がはらりと解け、白木の箱や骨壺がまざ／＼と見えてきた。何か大きな力でねぢ向けらるゝかのやうに、首を徐々に振り向けてみると、押入の襖は閉まつてゐた。下半分がたゞ白くて、上半分に電燈の笠の影を薄暗く受けてゐた。

彼は怪しい衝動に驅られた。立ち上つて押入へ歩み寄り、骨壺を開いて、中の白いやつを齒でかぢつた。食鹽と灰とを混ぜて噛むやうな味だつた。不氣味な戰きが背筋を走つた。慌てゝ室の中を見廻した。誰も居ないのを見定めて、骨壺をしまつた。

また暫くすると、彼は同じ衝動に驅られた。立ち上つて押入へ歩み寄つた。總毛立つた顔をして眼を見据ゑてゐるのが我ながら不氣味に意識された。一寸立ち止ると、ぞつと竦んだ。

彼は堪らなくなつて室から飛び出した。廊下の曲り角が陰々として薄暗かつた。血の氣を失つた顔で龍子の前に現はれた。

それを龍子は待ち受けてゐた。

たゞ母性のみが持つてる大きな抱擁力だつた。子供をも大人をも本能的に抱き込む、鳥黐のやうな粘り氣のある力だつた。彼はほつと息をついた。

然し間もなく、忌はしい反撥の氣がむら／＼と彼の心に湧いた。彼は彼女を押しのけて立ち上つた。

眼に險を帶び、口元から頬へ皮肉な色を漂はせて、そのどつしりとした身體全體で、彼女は彼の方をぢろりと見やつた。

「あなたは後悔していらつしやるのね！

然し口ではさう云はなかつた。

「どうなさいましたの?」

彼は何と答へないで、室の中をのつそり——と意識した歩調で歩き廻つた。

「坊ちやまが……。」

彼女が聲を低めてるのが可笑しかつた。眼を覺したつて構ふものかといふ氣がした。わざとその枕頭を力足で歩いてやつた。

順一は眼を覺して泣き出した。龍子は慌てゝ乳を含ました。

「それごらんなさいませ。」

「むりに寢かしつけようとばかりしないで、少し抱いておやりよ」

彼女は默つて、順一が眠るまで待つた。それから彼の方へ向き直つてきた。

「私を憎んでゐらつしやるんでございませう。それなら、私出て行きます」

「出て行けと誰が云つた!」

理不盡な言葉を浴せかけてやつたが、彼女は反抗して來なかつた。下を向いたまゝ、髮の毛一筋搖がさないで、ちつと坐つてゐた。

錐で突いても突き通せない、ちいわりとした而も深い根を張つた重苦しい容積といふ感じだつた。彼が其處を立去つても、もう見向きもしなかつた。

彼は一人で苛ら立つた。

夜遅く眼を覺すやうな時には、心が冷たく悄えきつて、何となくあたりが見廻された。誰も居なかつた。八疊の室ががらんとしてゐて、孤獨な自分の姿をぽつりと浮び上らせた。彼はなほ室の隅々まで見渡した。誰かゞ隱れてゐるかも知れないといふ氣がした。

その誰かゞ、無意識に探し求めてゐる誰かゞ、實は秋子であることに氣付くと、彼は堪らない氣持になつた。

秋子、秋子！

障子の硝子に映つてる彼の影を見て、二つになつてはいや、と云つた彼女のことが、はつきり思ひ出された。

彼は布團から匍ひ出して、半身で伸び上つてみた。後ろに電燈の光を受けた眞黑な影が、薄すら映つてゐた。瞳を凝らすと、それが次第に濃くなつてきた。硝子のすぐ向ふまで寄つて來て、今にも室の中に飛び込んで來さうだつた。

妙だぞ、と思ふと同時に、彼はにぢり寄つてる自分自身が恐ろしくなつて、つと身を引いた。拭ふがやうに凡てが消えて、雨戸の白い板が向ふを限つてゐた。

かすかな……音とも云へない音が、何處からか響いてきた。彼は耳を傾けた。釘を打つ音、伏金の音、火葬窯の扉の音……でもなければ、分娩の唸り、瀕死の唸り……でもなかつた。何だか滅入るやうな　燒かれた骨が灰になつてゆくやうな……氣配だつた。自然と押入の方が顧みられた。そつと身顫ひがした。

ふら〳〵と立ち上つて廊下に出た。黑い影が掠め過ぎた。彼は顏色を變へた。不吉だ！といふ氣がした。向ふの室にはいつてみると、順一と龍子とが床を並べて寢てゐた。秋子が分娩した時の通りの位置だつた。

さういふことが幾度もあつた。

龍子もいつしか、彼の樣子に氣付いてゐた。

「此度めの骨壺がいけないんでございますよ。お葬式まで寺へお預けなさいましては?」

彼は取合はなかつた。

「私もう嫌でございますよ。恐くつて……戸を閉めてもはいられません。あんな所へ骨壺をお置きなすつて、どうなさるおつもりなんでせう?」

怒りを獨語の調子で呟いて、何かを見つめるやうな眼付をしてゐた。

しと〳〵と雨が降つて、今にも雪になりさうな宵だつた。

「ぢやあどうしろと云ふんだ?」

彼は突き放すつもりで、聲 調子を尖らせた。彼女はひるまなかつた。

「御自分でなさるのがお嫌でしたら、私が何處かへ片付けませう。」

彼は怒鳴りつけようとしたが、彼女の様子がいつになく眞劍だつた。まともにぢつと彼の眼の中を覗き込んできた。

「俺がするよ。」と彼は叫んだ。

龍子の勝手にさせてなるものか!

彼は或る懸念に囚へられた。離れの室へ走つて行つて、押入を開いてみた。骨壺はちやんと元の位置に在つた。彼はそれを兩手に抱へて、室の中をうろついた。本箱が眼に止つた。小さい方の箱の書物を投り出して、その後へ骨壺をしまつた。がちりと錠を下した。その音が胸に響いた。ぢつと眺めてるまに思ひついて、白紙を蓋の硝子一面に張 つけた。淸らかな明るみへ出たといふ感じがした。嬉しかつた。

彼は鍵を指先でくる〳〵廻しながら、龍子の所へ行つた。

「おい骨壺をしまつたよ。」

「え、何處に?」

「本箱の中。硝子に紙をはりつけたら、非常に清らかな感じがするやうになつた。」

彼女は薄い唇を尖らせ、眼の光を二三度ちら〱さした。それから上目がちに眼を見据え、唇を噛んだ。

「そんなに御大切になさるのでしたら、毎晩抱いてお寢みなすつた方が宜しうございますよ。」

彼は赫となつた。が、心の底から別の感情が、彼女の言葉に暗示された忌はしい感情が、熱を持つて浮び上つてきた。吸り泣きとも憤りともつかないものが、喉元にこみ上げてきた。

それが彼女にも反射した。彼女はいきなり片膝を立てゝ、彼の方へにぢり寄つてきた。

「私の身をどうして下さるおつもりですか。」

敵意の籠つた抱擁のうちに、彼は身を投げ出した。

今に見ろ、今に見ろ!

眼をつぶりながら、顫えてゐた。

六

三月の半ばに、順造は龍子の姙娠を知つた。

彼女は頭が重く痛いと云つて、ぶら〱してゐた。食慾が非常に減じた。總毛立つた蒼い顏色をして、何をやり出してもすぐに放り出し、眉根をしかめて黙り込んでゐた。朝は遲くまで寢て、晩は早く床にはいつた。うつとり夢みるや

うに考へ込んでるかと思ふと、急に眉根をしかめて苛ら立つた。白粉の匂ひを嫌がつて、脊服れのしたきい素顔のまゝでゐた。そして或る朝、食後間もなく、食べた物を皆吐いてしまつた。順造は漠然とした不安を覺えた。腹膜炎！さういふ考へが眞先に浮んだ。醫者に診せてごらんと切に勸めた。然し彼女はそれに從はなかつた。診て貰つても無駄だと頑張つた。二度目に食物を吐いた時、順造は叱りつけた。醫者の家へ行かなければ、僕が醫者を呼んで來てやる、とまで云つた。

「病氣ではございません。」と彼女は答へた。

「ではどうしたんだい。」

彼女は暫く考へてゐたが、低い聲で云つた。

「惡阻のやうな氣がします。」

「え、惡阻！」

順造は飛び上らんばかりに驚いた。

「本當かい？」

「えゝ、屹度さうに違ひありませんわ。」

眼を一つ所に定めて、心で胎内を見守つてる樣子だつた。

順造は初めの驚きが鎭まると、心がどしんと落付く所へ落付いた氣がした。彼女から顏を見つめられると、冷かな調子で云つた。

「じやあ身體を大事にしなけりやいけないよ。」

ふいに闇室の中に飛び込んで、暫くつゝ立つてるうちに、闇黒に眼が馴れてきて、ぼんやり物の影が見えてくる、その心地に似てゐた。

運命！とでも云へるものが、頭の上にぢかに感ぜられた。過去の全景が、影繪のやうに浮出してきた。秋子の儚い運命が、茫と燐光を放つてゐた。龍子の運命が、両端を闇に没してのたくつてゐた。順一の……。

星が光つてる！

あの時の感じが、胸の中に甦つてきた。それを如何に長く忘れてゐたことだらう！

順一はまる／＼と肥つてゐた。瞳の光が澄んでゐて、目玉の動きの遅い所が、秋子によく似てるやうだつた。鼻筋が通つて唇が心持ち歪んでゐた。笑ふ時左の頬に可愛い笑渦が出來た。ちよつ／＼と舌を鳴らしてみせると、につこり笑つた。何かに見とれながら、うぐん／＼と譯の分らない聲を立てゝゐた。いつのまにか赤味が取れて眞白な色になり、房々としたしなやかな黒い毛が、額に垂れて先を少し縮らしてゐた。圓つこい凸額だつた。

何を考へてるのかしら？

餘りに頼り無い小ちやな存在だつたのが、いつしかしつかり根を下して、自分の運命を荷はうとしてゐた。その存在と運命とが——以前別々なものとなつて順造の眼に映つたのが——一つに結び合されてるのを見て、彼は突然云ひ知れぬ愛着を感じ出した。

胸に抱き取つて、いつまでも庭を歩いてやつた。和やかな初秋の外光が、その顔にちら／＼映つてゐた。まぶしさうな澁め顔をしてるのが、たまらなく可愛かつた。

さういふ彼の様子を、龍子は不思議さうに眺めた。

「どうしてさう急に可愛くおなりなすつたのでせうね？」

その眼は皮肉な色に鋭く輝いてゐた。

お前が姙娠したせいだ！と彼は心の中で叫んだ。理屈ではなかつた。ぢかにさう感ぜられた。

彼は出來るだけ順一の側についてゐた。他の座敷に居る時順一の泣聲が聞えると、すぐに飛んで行つた。なぜ泣かせるんだ、と龍子を叱つた。順一が顏を澁めてると、おしこだ、襁褓を取代へてやれ、と龍子へ云ひつけた。一日置きには風呂を沸させて、自分で入れてやつた。

恐ろしい鬪ひが來さうな氣がした。

然し彼は、つとめて龍子へ滋養分を取らせた。毎日牛乳を二合は是非とも飲ませた。力のいる仕事は皆女中にやらせた。

何のためか、彼は自分でも分らなかつた。

二人で差向つてゐると、彼は知らず識らず龍子の腹部に眼をつけてゐた。

「まだ大きくなりはしませんですよ」

彼女は笑つた。がその笑ひは、中途でぴたりと止んだ。

「なぜそんなにお腹ばかり氣にしてゐらつしやいますの。」

「お前は恐ろしくはないのか。」

「え？なにが？」

何がだか、彼にもはつきりとは分らなかつたが、大きく脹れ上つた腹の幻が、それは姙娠の腹でもなく腹膜炎の腹で

もなく、たゞ怪しく張り切つてる太鼓腹が、頭の底に浮び上つてきた。

「大丈夫でございますよ。」

龍子はやゝあつて平然と答へた。

一度經驗したからだらうと彼は口の中で云つてやつた。

然し彼にとつては、それがなほいけなかつた。彼女の過去のことが氣になつたのではなく、秋子から相次いで彼女を姙娠さしてしまつたことが、自分の凡てに泥を塗るやうに感ぜられた。

順一をだけは保護してやる！

何とも云ひやうのない悲壯な氣がした。離れの室にぢつとしてゐても、順一のことが氣にかゝつた。ぼんやり見廻すと、白紙を張つた本箱が、妙に白々しく取澄してゐた。彼は堪らない氣持になつた。

落付いてゐなければいけない！

立ち上つて下腹に力を入れて、それから向ふの室に行つてみた。

「まあ、どうなさいましたの？」

龍子は一寸身を退いて、彼の顏を見つめた。

「どうもしないよ。」

自分ではそのつもりだつた。が彼女は、いつまでも彼の顏から眼を離さなかつた。

「ほんとに變なお顏をなすつてゐらつしやいますよ。」

彼はあはゝと大聲に笑つてやつた。ごろりと寢轉んで、天井を見守つてゐた。

何時までたつても何の物音もしなかつた。水の中にでも沈んだやうな氣持だつた。

龍子はふいに立ち上つた。

「一寸坊やを……。」

さう云ひ置いて臺所の方へ行つた。胸がむか〳〵してきたのだな、と彼は思つた。次の瞬間には頭の中が石のやうに固くなつた。張り切つた氣分であたりを見廻すと、障子の硝子や鏡臺の鏡や床の間の花瓶など、光を反射してる物の表面が不氣味に感ぜられた。

彼はぼんやり立ち上つた。寢てゐる順一を腕に抱き取つて、暫く歩いてみた。それからいつしか、離れの室へやつて來た。骨壺のはいつた本箱を見て、此處なら大丈夫だ！といふ氣がした。

長い間のやうだつた。

彼は俄にぞつと立ち竦んだ。室の入口から眞白な圓いものが覗き込んでゐた……龍子の顏だつた、と分つた瞬間に、

彼は大聲に怒鳴りつけた。

「はいつちやいけない！」

その途端に、彼女は一歩踏み込んできた。彼の眼に大きな魔物のやうな影となつて映つた。彼は飛びかゝつていつた。片手で突き飛し、足で蹴放した。室の外につき出して、襖を閉め切つた。

胸が高く動悸してゐた。何にも分らなかつた。動悸が靜まつてから、そつと襖を開いて見ると、もう誰もゐなかつた。

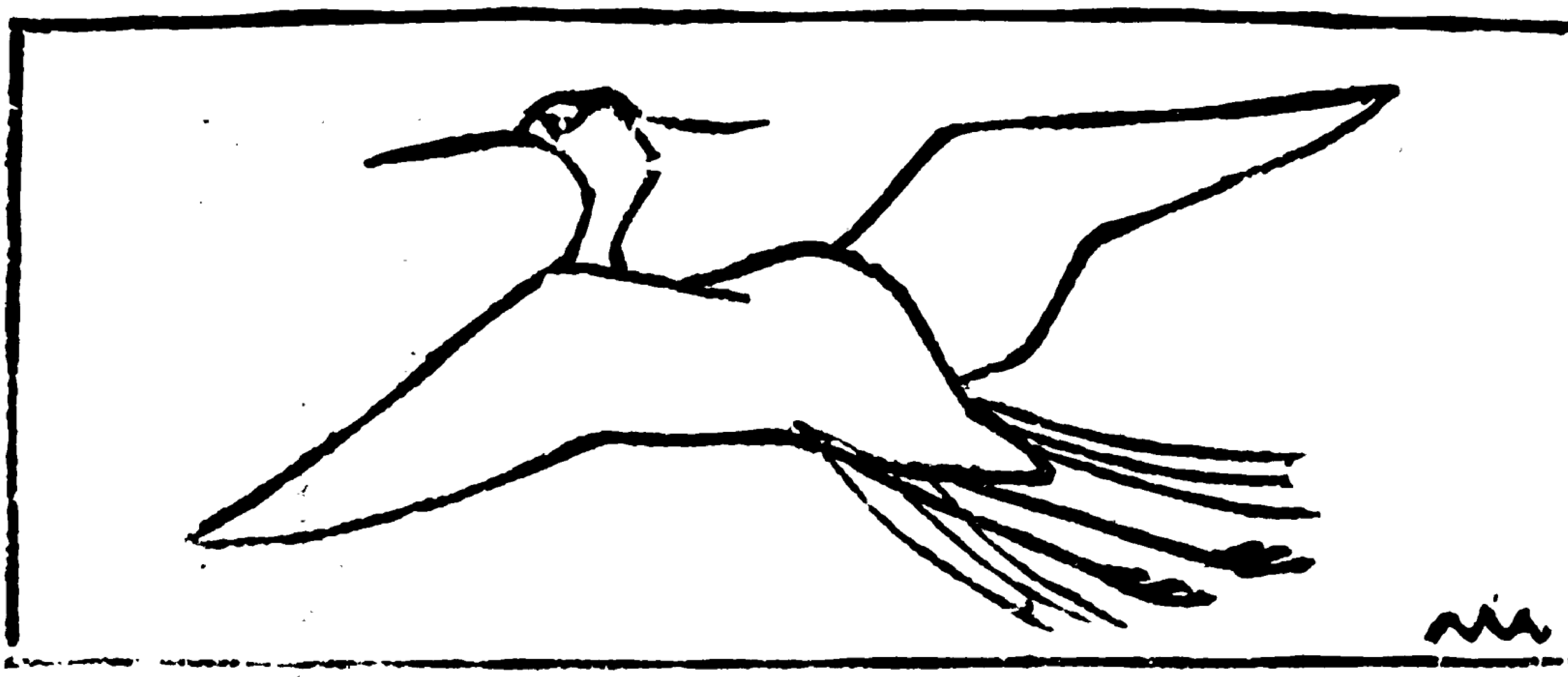
幻覺だつたのかしら？

ふとさう考へたのが初まりだつた。凡てが怪しく不思議に思へてきた。それからは、凡てが渾沌とした霧の中に包ま

れた。彼は何を爲してゐるのか自分でも知らなかつた。

室の眞中に坐つて、順一の顏をぢつと眺めた。それから、兩腕に力を籠めて順一を抱きしめた。腕の中がむづ〳〵とした。腕の位置を變へて、此度はその首を力一杯にしめつけた。ぐつたりとなつた死體を疊の上に寢かした。

本箱の抽出の中に短刀がはいつてゐた。彼はそれを取り出して、刃の光りをぢつと眺めた。一瞬間凡てが澄み切つた、廣々とした冴え返つた世界だつた。彼は頸動脈に見當を定めて、兩手でずぶりとやつた。冷りとした。



報恩記

芥川龍之介

阿媽港甚内の話

わたしは甚内と云ふものです。苗字は――さあ、世間ではずつと前から、阿媽港甚内と云つてゐるやうです。阿媽港甚内、――あなたもこの名は知つてゐますか？　いや、驚くには及びません。わたしはあなたの知つてゐる通り、評判の高い盗人です。しかし今夜参つたのは、盗みにはひつたのではありません。どうかそれだけは安心して下さい。

あなたは日本にゐる伴天連の中でも、道徳の高い人だと聞いてゐます。して見れば盗人と名のついたものと、少時でも一しようにゐると云ふ事は、愉快ではないかも知れません。が、わたしも思ひの外、盗みばかりしてもゐないのです。何時ぞや聚楽の御殿へ召された、呂宋助左エ門の手代の一人も、確か甚内と名乗つてゐました。又利休居士の珍重してゐた、「赤がしら」と稱へる水さしも、それを贈つた連歌師の本名は、甚内とか云つたと聞いてゐます。さう云へばつひ二三年以前、阿媽港日記と云ふ本を

書いた、長崎あたりの通辯の名前も、甚內と云ふのではなかつたでせうか？　その外三條河原の喧嘩に、甲比丹「まるどなど」を救つた虛無僧、堺の妙國寺門前に、南蠻の藥を賣つてゐた商人、——さう云ふものも名前を明かせば、何がし甚內だつたのに違ひありません。いや、それよりも大事なのは、去年この「さん・ふらんしすこ」の御寺へ、おん母「まりや」の爪を收めた、黃金の舍利塔を獻じてゐるのも、やはり甚內と云ふ信徒だつた筈です。

しかし今夜は殘念ながら、一々さう云ふ行狀を話してゐる暇はありません。唯どうか阿媽港甚內は、世間一般の人間と餘り變りのない事を信じて下さい。さうですか？　では出來るだけ手短かに、わたしの用向きを述べる事にしませう。わたしは或男の魂の爲に、「みさ」の御祈りを願ひに來たのです。いや、わたしの血緣のものではありません。と云つても亦わたしの刄金に、血を塗つたものでもないのです。名前ですか？　名前は、——さあ、それは明かして好いかどうか、わたしにも判斷はつきません。或男の魂の爲に、——或は「ぽうろ」と云ふ日本人の爲に、冥福を祈つてやりたいのです。いけませんか？——成程阿媽港甚內に、かう云ふ事を賴まれたのでは、手輕に受合ふ氣にもなれますまい。では兎に角一通り、事情だけは話して見る事にしませう。しかしそれには生死を問はず、他言しない約束が必要です。あなたはその胸の十字架に懸けても、きつと約束を守りますか？——いや、失禮は赦して下さい。（微笑）伴天連のあなたを疑ふのは、盜人のわたしには僭上でせう。しかしこの約束を守らなければ、（突然眞面目に）「いんへるの」の猛火に燒かれずとも、現世に罰が下る筈です。

もう二年あまり以前の話ですが、丁度或風の眞夜中です。わたしは雲水に姿を變へながら、京の町中をうろついゐました。京の町中をうろついたのは、その夜に始まつたのではありません。もう彼是五日ばかり、何時も初更を過ぎさへすれば、必人目に立たないやうに、そつと家々を窺つたのです。勿論何の爲だつたかは、註を入れるにも及びますまい。

殊にその頃は麻利伽(マリカ)へでも、一時渡つてゐるつもりでしたから、餘計に金の入用もあつたのです。

町は勿論とうの昔に、人通りを絕つてゐましたが、星ばかりきらめいた空中には、小やみもない風の音がどよめいてゐます。わたしは暗い軒通ひに、小川通りを下つて來ると、ふと辻を一つ曲つた所に、大きい角屋敷のあるのを見つけました。これは京でも名を知られた、北條屋彌三右衛門の本宅です。同じ渡海を渡世にしてゐても、北條屋は到底角倉などと、肩を並べる事は出來ますまい。しかし兎に角沙室(しやむろ)や呂宋(るそん)へ、船の一二艘も出してゐるのですから、一かどの分限者には違ひありません。わたしは何もこの家を目當に、うろついてゐたのではないのですが、丁度其處へ來合はせたのを幸ひ、一稼ぎする氣を起しました。その上前にも云つた通り、夜は深いし風も出てゐる、——わたしの商賣にとりかかるのには、萬事持つて來いの寸法です。わたしは路ばたの水天桶の後に、網代の笠や杖を隱した上、忽ち高塀を乘り越えました。

世間の噂を聞いて御覽なさい。阿媽港甚内は忍術を使ふ、——誰でも皆さう云つてゐます。しかしあなたは俗人のやうに、そんな事は本當と思ひますまい。わたしは忍術も使はなければ、惡魔も味方にはしてゐないのです。唯阿媽港にゐた時分、葡萄牙の船の醫者に、究理の學問を敎はりました。それを實地に役立てさへすれば、大きい錠前を扭ぢ切つたり、重い閂を外したりするのは、格別むづかしい事ではありません。(微笑)新しい盜みの仕方、——それも日本と云ふ未開の土地は、十字架や鐵砲の渡來と同樣、やはり西洋に敎はつたのです。

わたしは一ときとたたない內に、北條屋の家の中にはひつてゐました。が、暗い廊下をつき當ると、驚いた事にはこの夜更けにも、まだ火影のさしてゐるばかりか、話し聲のする小座敷があります。それがあたりの容子では、どうしても茶室に違ひありません。「凩の茶か?」——わたしはさう苦笑しながら、そつと其處へ忍び寄りました。實際その時は

人聲のするのに、仕事の邪魔を思ふよりも、數奇を凝らした圍ひの中に、この家の主人や客に來た仲間が、どんな風流を樂しんでゐるか？――そんな事に心が惹かれたのです。

襖の外に身を寄せるが早いか、わたしの耳には思つた通り、釜のたぎりがはひりました。が、その音がすると同時に、意外にも誰か話をしては、泣いてゐる聲が聞えるのです。誰か、――と云ふよりもそれは二度と聞かずに女だと云ふ事さへわかりました。かう云ふ大家の茶座敷に、眞夜中女の泣いてゐると云ふのは、どうせ唯事ではありません。わたしは息をひそめた儘、幸ひ明いてゐた襖の隙から、茶室の中を覗きこみました。

行燈の光に照らされた、古色紙らしい床の懸け物、懸け花入の霜菊の花、――圍ひの中には御約束の通り、物寂びた趣が漂つてゐました。その床の前、――丁度わたしの眞正面に坐つた老人は、主人の彌三右エ門でせう、何か細かい唐草の羽織に、ぢつと兩腕を組んだ儘、殆よそ眼に見たのでは、釜の煮え音でも聞いてゐるやうです。彌三右エ門の下座には、品の好い笄髷の老女が一人、これは横顏を見せた儘、時々涙を拭つてゐました。「いくら不自由がないやうでも、やはり苦勞だけはあると見える。」――わたしはさう思ひながら、自然と微笑を洩らしたものです。微笑を、――かう云つてもそれは北條屋夫婦に、惡意があつたのではありません。わたしのやうに四十年間、惡名ばかり負つてゐるものには、他人の、――殊に幸福らしい他人の不幸は、自然と微笑を浮ばせるのです。（殘酷な表情）その時もわたしは、夫婦の歎きが、歌舞伎を見るやうに愉快だつたのです。（皮肉な微笑）しかしこれはわたし一人に、限つた事ではありますまい。誰にも好まれる草紙と云へば、悲しい話にきまつてゐるやうです。

彌三右エ門は少時の後、吐息をするやうにかう云ひました。

「もうこの羽目になつた上は、泣いても喚いても取返しはつかない。わたしは明日にも店のものに、暇をやる事に決心

をした。」

その時又烈しい風が、どつと茶室を搖すぶりました。それに聲が紛れたのでせう。彌三右工門の内儀の言葉は、何と云つたのだかわかりません。が、主人は頷きながら、兩手を膝の上に組み合せると、網代の天井へ眼を上げました。その時です。わたしは突然彌三右工門の顏に、何處か見覺えのある氣がし出しました。太い眉、尖つた頬骨、殊に切れの長い目尻、――これは確かに見れば見る程、何時か一度は會つてゐる顏です。

「おん主、「えす・きりすと」樣。何とぞ我々夫婦の心に、あなた樣の御力を御惠み下さい。……」

彌三右工門は眼を閉ぢた儘、御祈りの言葉を呟き始めました。老女もやはり夫のやうに、天帝の加護を乞つてゐるやうです。わたしはその間瞬きもせず、彌三右工門の顏を見續けました。すると又風の渡つた時、わたしの心に閃いたのは、二十年以前の記憶です。わたしはこの記憶の中に、はつきり彌三右工門の姿を捉へました。

その二十年以前の記憶と云ふのは、――いや、それは話すには及びますまい。唯手短かに事實だけ云へば、わたしは阿媽港に渡つてゐた時、或日本の船頭に危い命を助けて貰ひました。その時は互に名乘りもせず、それなり別れてしまひましたが、今わたしの見た彌三右工門は、當年の船頭に違ひないのです。わたしは奇遇に驚きながら、やはりこの老人の顏を見守つてゐました。さう云へば威かつい肩のあたりや、指節の太い手の恰好には、未に珊瑚礁の潮けむりや、白檀山の匂がしみてゐるやうです。

彌三右工門は長い御祈りを終ると、靜かに老女へかう云ひました。

「跡は唯何事も、天主の御意次第と思うたが好い。――では釜のたぎつてゐるのを幸ひ、茶でも一つ立てて貰はうか？」

しかし老女は今更のやうに、こみ上げる涙を堪へるやうに、消え入りさうな返事をしました。

「はい。――それでもまだ悔やしいのは、――」

「さあ、それが愚痴と云ふものぢや。北條丸の沈んだのも、抛げ銀の皆倒れたのも、――」

「いえ、そんな事ではございません。せめては倅の彌三郎でも、ゐてくれればと思ふのでございますが、……」

わたしはこの話を聞いてゐる内に、もう一度微笑が浮んで來ました。が、今度は北條屋の不運に、愉快を感じたのではありません。「昔の恩を返す時が來た。」――さう思ふ事が嬉しかつたのです。わたしにも、御尋ね者の阿媽港甚内にも、立派に恩返しが出來る愉快さは、――いや、この愉快さを知るものは、わたしの外にはありますまい。（皮肉に）世間の善人は可哀さうです。何一つ惡事を働かない代りに、どの位善行を施した時には、嬉しい心もちになるものか、――そんな事も碌には知らないのですから。

「何、ああ云ふ人でなしは、居らぬだけにまだしも仕合せな位ぢや。――」

彌三右衞門は苦々しさうに、行燈へ眼を外らせました。

「あいつが使ひをつた金でもあれば、今度も急場だけは凌げたかも知れぬ。それを思へば勘當したのは、……」

彌三右衞門はかう云つたなり、驚いたやうにわたしを眺めました。これは驚いたのも無理はありません。わたしはその時聲もかけずに、堺の襖を明けたのですから。――しかもわたしの身なりと云へば、雲水に姿をやつした上、網代の笠を脱いだ代りに、南蠻頭巾をかぶつてゐたのですから。

「誰だ、おぬしは？」

彌三右衞門は年はとつてゐても、咄嗟に膝を起しました。

「いや、御驚きになるには及びません。わたしは阿媽港甚内と云ふものです。――まあ、御靜かになすつて下さい。阿

媽港甚内は盗人ですが、今夜突然参上したのは、少し外にも譯があるのです。——」

わたしは頭巾を脱ぎながら、彌三右エ門の前に坐りました。……

その後の事は話さずとも、あなたには推察出來るでせう。わたしは北條屋の危急を救ふ爲に、三日と云ふ日限を一日も違へず、六千貫の金を調達する、恩返しの約束を結んだのです。——おや、誰か戸の外に、足音が聞えるではありませんか？　では今夜は御免下さい。いづれ明日か明後日の夜、もう一度此處へ忍んで來ます。あの大十字架の星の光は、阿媽港の空には輝いてゐても、日本の空には見えますまい。わたしも丁度あゝ云ふやうに、日本では姿を晦ませてゐないと、今夜「みさ」を願ひに來た、「ぽうろ」の魂の爲にもすまないのです。

何、わたしの逃げ途ですか？　そんな事は心配に及びません。この高い天窓からでも、あの大きい暖爐からでも、自由自在に出て行かれます。就いてはどうか央々も、恩人「ぽうろ」の魂の爲に、一切他言は愼んで下さい。

北條屋彌三右エ門の話

伴天連様　どうかわたしの懺悔を御聞き下さい。御承知でも御座いませうが、この頃世上に噂の高い、阿媽港甚内と云ふ盗人がございます。根來寺の塔に住んでゐたのも、殺生關白の太刀を盗んだのも、又遠い海の外では、呂宋の太守を襲つたのも、皆あの男だとか聞き及びました。それがとうとう搦めとられた上、今度一條戻り橋のほとりに、曝し首になつたと云ふ事も、或は御耳にはひつて居りませう。わたしはあの阿媽港甚内に、一方ならぬ大恩を蒙りました。が、又大恩を蒙つただけに、唯今では何とも申しやうのない、悲しい目にも遭つたのでございます。どうか、その仔細を御聞きの上、罪びと北條屋彌三右エ門にも、天帝の御愛憐を御祈り下さい。

丁度今から二年ばかり以前の、冬の事でございます。ずつとしけばかり續いた爲に、持ち船の北條丸は沈みますし、抛げ銀は皆倒れますし、――それやこれやの重なつた揚句、北條屋一家は分散の外に、仕方のない羽目になつてしまひました。御承知の通り町人には、取引き先はございましても、友だちと申すものはございません。かうなればもう我々の家業は、うづ潮に吸はれた大船も同樣、まつ逆樣に奈落の底へ、落ちこむばかりなのでございます。すると或夜、――今でもこの夜の事は忘れません。或雨の烈しい夜でございましたが、わたし共夫婦は御存知の圍ひに、夜の更けるのも知らず話して居りました。其處へ突然はひつて參つたのは、雲水の姿に南蠻頭巾をかぶつた、あの阿媽港甚内でございます。わたしは勿論驚きもすれば、又怒りも致しました。が、甚内の話を聞いて見ますと、あの男はやはり盜みを働きに、わたしの宅へ忍びこみましたが、茶室には未に火影ばかりか、人の話し聲も聞えてゐる、そこで襖越しに覗いて見ると、この北條屋彌三右衞門は、甚内の命を助けた事のある、二十年以前の恩人だつたと、かう云ふ次第ではございませんか？

成程さう云はれて見れば、彼是二十年にもなりませうか、まだわたしが阿媽港通ひの「ふすた」船の船頭を致してゐた頃、あそこへ船がかりをしてゐる内に、髭さへ碌にない日本人を一人、助けてやつた事がございます。何でもその時の話では、ふとした酒の上の喧嘩から、唐人を一人殺した爲に、追手がかかつたとか申して居りました。して見ればそれが今日では、あの阿媽港甚内と云ふ、名代の盜人になつたのでございませう。わたしは兎に角甚内の言葉も、嘘ではない事がわかりましたから、一家のものの寢てゐるのを幸ひ、まづその用向きを尋ねて見ました。

すると甚内の申しますには、あの男の力に及ぶ事なら、二十年以前の恩返しに、北條屋の危急を救つてやりたい。差當り入用の金子の高は、どの位だと尋ねるのでございます。わたしは思はず苦笑致しました。盜人に金を調達して貰ふ、

――それが可笑しいばかりではございません。如何に阿媽港甚内でも、さう云ふ金がある位ならば、何もわざわざわたしの宅へ、盗みにはひるにも當りますまい。しかしその金高を申しますと、甚内は小首を傾けながら、今夜の内にはむづかしいが、三日も待てば調達しようと、無造作に引き受けたのでございます。が、何しろ入用なのは、六千貫と云ふ大金でございますから、きつと調達出來るかどうか、當てになるものではございません。いや、わたしの量見では、まづ賽の目をたのむよりも、覺束ないと覺悟をきめてゐました。

甚内はその夜わたしの家内に、悠々と茶など立てさせた上、嵐の中を歸つて行きました。が、その翌日になつて見ても、約束の金は屆きません。二日目も同樣でございました。三日目は、――この日は雪になりましたが、やはり夜に入つてしまつた後も、何一つ便りはありません。わたしは前に甚内の約束は、當にして居らぬと申し上げました。が、店のものにも暇を出さず、成行きに任せてゐた所を見ると、それでも幾分か心待ちには、待つてゐたのでございませう。又實際三日目の夜には、圍ひの行燈に向つてゐても、雪折れの音のする度毎に、聞き耳ばかり立てて居りました。

所が三更も過ぎた時分、突然茶室の外の庭に、何か人の組み合ふらしい物音が聞えるではございませんか？　わたしの心に閃いたのは、勿論甚内の身の上でございます。もしや捕り手でもかかつたのではないか？――わたしは咄嗟に　う思ひましたから、庭に向いた障子を明けるが早いか、行燈の火を掲げて見ました。雪の深い茶室の前には、大明竹の垂れ伏したあたりに、誰か二人摑み合つてゐる――と思ふとその一人は、飛びかかる相手を突き放したなり、庭木の陰をくぐるやうに、忽ち塀の方へ逃げ出しました。雪のはだれる音、塀に攀ぢ登る音、――それぎりひつそりしてしまつたのは、もう何處か塀の外へ、無事に落ち延びたのでございませう。が、突き放された相手の一人は、格別跡を追はうともせず、顔の雪を拂ひながら、靜かにわたしの前へ歩み寄りました。

「わたしです。阿媽港甚内ですよ。」

わたしは呆氣にとられた儘、甚内の姿を見守りました。甚内は今夜も南蠻頭巾に、袈裟法衣を着てゐるのでございます。

「いや、とんだ騒ぎをしました。誰もあの組打ちの音に、眼を覺さねば仕合せですが。」

甚内は圍ひへはひると同時に、ちらりと苦笑を洩らしました

「何、わたしが忍んで來ると、丁度誰かこの床の下へ、這ひこまうとするものがあるのです。そこで一つ手捕りにした上、顏を見てやらうと思つたのですが、とうとう逃げられてしまひました。」

わたしはまださつきの通り、捕り手の心配がございましたから、役人ではないかと尋ねて見ました。が、甚内は役人所か、盜人だと申すのでございます。盜人が盜人を捉へようとした、——この位珍しい事はございますまい。今度は甚内よりもわたしの顏に、自然と苦笑が浮びました。しかしそれは兎も角も、調達の成否を聞かない内は、わたしの心も安まりません。すると甚内は云はない先に、わたしの心を讀んだのでございませう、悠々と胴卷きをほどきながら、爐の前へ金包みを並べました。

「御安心なさい。六千貫の工面はつきましたから。——實はもう昨日の内に、大抵調達したのですが、まだ二百貫程不足でしたから、今夜はそれを持つて來ました。どうかこの包みを受け取つて下さい。又昨日までに集めた金は、あなた方御夫婦も知らない内に、この茶室の床下へ隱して置きました。大方今夜の盜人のやつも、その金を嗅ぎつけて來たのでせう。」

わたしは夢でも見てゐるやうに、さう云ふ言葉を聞いてゐました。盜人に金を施して貰ふ、——それはあなたに伺はないでも、確かに善い事ではございますまい。しかし調達が出來るかどうか、半信半疑の境にゐた時は、善惡も考へず

に居りましたし、又今となつて見れば、むげに受け取らぬとも申されません。しかもその金を受け取らないとなれば、わたしばかりか一家のものも、路頭に迷ふのでございます。どうかこの心もちに、せめては御憐憫を御加へ下さい。わたしは何時か甚内の前に、恭しく兩手をついた儘、何も申さずに泣いて居りました。……

その後わたしは二年の間、甚内の噂を聞かずに居りました。が、とうとう分散もせずに、恙ないその日を送られるのは、皆甚内の御蔭でございますから、何時でもあの男の仕合せの爲に、人知れずおん母「まりや」様へも、祈願をこめてゐたのでございます。所がどうでございませう、この頃往來の話を聞けば、阿媽港甚内は御召捕りの上、戻り橋に首を曝してゐると、かう申すではございませんか？　わたくしは驚きも致しました。人知れず涙も落しました。しかし積惡の報と思へば、これも致し方はございますまい。いや、寧ろこの永年、天罰も受けずに居りましたのは、不思議だつた位でございます。が、せめてもの恩返しに、陰ながら廻向をしてやりたい、――かう思つたものでございますから、わたしは今日伴もつれずに、早速一條戻り橋へ、その曝し首を見に參りました。

戻り橋のほとりへ參りますと、もうその首を曝した前には、大勢人がたかつて居ります。罪狀を記した白木の札、首の番をする下役人――それは何時もと變りません。が、三本組み合せた、靑竹の上に載せてある首は、――ああ、そのむごたらしい血まみれの首は、どうしたと云ふのでございませう？　わたしは騷々しい人だかりの中に、蒼ざめた首を見るが早いか、思はず立ちすくんでしまひました。この首はあの男ではございません。阿媽港甚内の首ではございません。この太い眉、この突き出た頰、この眉間の刀創、――何一つ甚内には似て居りません。しかし、――わたしは突然日の光も、わたしのまはりの人だかりも、竹の上に載せた曝し首も、皆何處か遠い世界へ、流れてしまつたかと思ふ位、烈しい驚きに襲はれました。この首は甚内ではございません。わたしの首でございます。二十年以前のわたし、――丁度

甚内の命を助けた、その頃のわたしでございます。「彌三郎！」——わたしは舌さへ動かせたなら、かう叫んでゐたかも知れません。が、聲を上げる所か、わたしの體は瘧を病んだやうに、震へてゐるばかりでございます。

彌三郎！　わたしは唯幻のやうに、倅の曝し首を眺めました。首はやや仰向いた儘、半ば開いた眶の下から、ぢつとわたしを見守つて居ります。これはどうした譯でございませう？　倅は何かの間違ひから、甚内と思はれたのでございませうか？　しかし御吟味も受けたとすれば、さう云ふ間違ひは起りますまい。それとも阿媽港甚内と云ふのは、倅だつたのでございませうか？　わたしの宅へ來た贋雲水は、誰か甚内の名前を假りた、別人だつたのでございませうか？　いや、そんな筈はございません。三日と云ふ日限を一日も違へず、六千貫の金を工面するものは、この廣い日本の國にも、甚内の外に誰が居りませう？　して見ると、——その時わたしの心の中には、二年以前雪の降つた夜、甚内と庭に爭つてゐた、誰とも知らぬ男の姿が、急にはつきり浮んで參りました。あの男は誰だつたでございませう？　もしや倅ではございますまいか？　さう云へばあの男の姿かたちは、ちらりと一眼見ただけでも、どうやら倅の彌三郎に、似てゐたやうでもございます。しかしこれはわたし一人の、心の迷ひでございませうか？　もし倅だつたとすれば、——わたしは夢の覺めたやうに、しげしげ首を眺めました。するとその紫ばんだ、妙に緊りのない唇には、何か微笑に近い物が、ほんのり殘つてゐるのでございます。

曝し首に微笑が殘つてゐる、——あなたはそんな事を御聞きになると、御哂ひになるかも知れません。わたしさへそれに氣のついた時には、眼のせゐかとも思ひました。が、何度見直しても、その干からびた唇には、確かに微笑らしい明みが、漂つてゐるのでございます。わたしはこの不思議な微笑に、永い間見入つて居りました。と、何時かわたしの顏にも、やはり微笑が浮んで參りました。しかし微笑が浮ぶと同時に、眼には自然と熱い涙も、にじみ出して來たの

でございます。

「お父さん、勘忍して下さい。——」

その微笑は無言の内に、かう申してゐたのでございます。

「お父さん。不幸の罪は勘忍して下さい。わたしは二年以前の雪の夜、勘當の御詫びがしたいばかりに、そつと家へ忍んで行きました。晝間は店のものに見られるのさへ、恥しいなりをしてゐましたから、わざわざ夜の更けるのを待つた上、お父さんの寢間の戸を叩いても、御眼にかかるつもりでゐたのです。所がふと閙ひの障子に、火影のさしてゐるのを幸ひ、其處へ怯づ怯づ行きかけると、いきなり誰か後から、言葉もかけずに組つきました。

「お父さん。それから先はどうなつたか、あなたの知つてゐる通りです。わたしは餘り不意だつた爲、お父さんの姿を見るが早いか、相手の曲者を突き放したなり、高塀の外へ逃げてしまひました。が、雪明りに見た相手の姿は、不思議にも雲水のやうでしたから、誰も追ふ者のないのを確めた後、もう一度あの茶室の外へ、大膽にも忍んで行つたのです。

「わたしは閙ひの障子越しに、一切の話を立ち聞きました。

「お父さん。北條屋を救つた甚内は、わたしたち一家の恩人です。わたしは甚内の身に危急があれば、たとひ命は抛つても、恩に報いたいと決心しました。又この恩を返す事は、勘當を受けた浮浪人のわたしでなければ出來ますまい。わたしはこの二年間、さう云ふ機會を待つてゐました。さうして、——その機會が來たのです。どうか不孝の罪は勘忍して下さい。わたしは極道に生れましたが、一家の大恩だけは返しました。それがせめてもの心やりです。……」

わたしは宅へ歸る途中も、同時に泣いたり笑つたりしながら、悴のけなげさを褒めてやりました。あなたは御存知になりますまいが、悴の彌三郎もわたしと同樣、御宗門に歸依して居りましたから、もとは「ぽうろ」と云ふ名前さへも、

頂いて居つたものでございます。しかし――しかし悴も不運なやつでございました。いや、悴ばかりではございません。わたしもあの阿媽港甚内に、一家の沒落さへ救はれなければ、こんな歎きは致しますまいに。いくら未練だと思ひましても、こればかりは切なうございます。分散せずにゐた方が好いか。悴を殺さずに置いた方が好いか、――(突然苦しさうに)どうかわたしを御救ひ下さい。わたしはこの儘生きてゐれば、大恩人の甚内を憎むやうになるかも知れません。……

(永い間の歔欷)

「ぽうろ」彌三郎の話

ああ、おん母「まりや」様! わたしは夜が明け次第、首を打たれる事になつてゐます。わたしの首は地に落ちても、わたしの魂は小鳥のやうに、あなたの御側へ飛んで行くでせう。いや、惡事ばかり働いたわたしは、「はらいそ」(天國)の莊嚴を拜する代りに、恐しい「いんへる」(地獄)の猛火の底へ、逆落しになるかも知れません。しかしわたしは滿足です。わたしの心には二十年來、この位嬉しい心もちは、宿つた事がないのです。

わたしは北條屋彌三郎です。が、わたしの曝し首は、阿媽港甚内と呼ばれるでせう。わたしがあの阿媽港甚内、――これ程愉快な事があるでせうか? 阿媽港甚内、――どうです? 好い名前ではありませんか? わたしはその名前を口にするだけでも、この暗い牢の中さへ、天上の薔薇や百合の花に、滿ち渡るやうな心もちがします。

忘れもしない二年前の冬、丁度或大雪の夜です。わたしは博奕の元手が欲しさに、父の本宅へ忍びこみました。所がまだ圍ひの障子に、火影がさしてゐましたから、そつと其處を窺はうとすると、いきなり誰か言葉もかけず、わたしの襟上を捉へたものがあります。振り拂ふ、又摑みかかる、――相手は誰だか知らないのですが、その力の逞しい事は、到

底唯ものとは思はれません。のみならず二三度揉み合ふ内に、茶室の障子が明いたと思ふと、庭へ行燈をさし出したのは、紛れもない父の彌三右エ門です。わたしは一生懸命に、掴まれた胸倉を振り切りながら、高塀の外へ逃げ出しました。しかし半町程逃げ延びると、わたしは或軒下に隱れながら、往來の前後を見廻しました。往來には夜目にも白々と、時々雪煙りが揚る外には、何處にも動いてゐるものは見えません。相手は諦めてしまつたのか、もう追ひかけても來ないやうです。が、あの男は何ものでせう？　咄嗟の間に見た所では、確かに僧形をしてゐました。が、さつきの腕の強さを見れば、――殊に兵法にも精しいのを見れば、世の常の坊主ではありますまい。第一かう云ふ大雪の夜に、庭先へ誰か坊主が來てゐる、――それが不思議ではありませんか？　わたしは少時思案した後、たとひ危い藝當にしても、兎に角もう一度茶室の外へ、忍び寄つて見る事に決心しました。……

「それから一時ばかりたつた頃です。あの怪しい行脚の坊主は、丁度雪の止んだのを幸ひ、小川通りを下つて行きました。これが阿媽港甚内なのです。侍、連歌師、町人、虚無僧、――何にでも姿を變へると云ふ、洛中に名高い盗人なのです。わたしは後から見え隱れに、甚内の跡をつけて行きました。その時程妙に嬉しかつた事は、一度もなかつたのに違ひありません。阿媽港甚内！　阿媽港甚内！　わたしはどの位夢の中にも、あの男の姿を慕つてゐたでせう。殺生關白の太刀を盗んだのも甚内です。沙室屋の珊瑚樹を詐つたのも甚内です。備前宰相の伽羅を切つたのも、甲比丹「ぺれいら」の時計を奪つたのも、一夜に五つの土藏を破つたのも、八人の參河侍を斬り倒したのも、――その外末代にも傳はるやうな、稀有の惡事を働いたのは、何時でも阿媽港甚内です。その甚内は今わたしの前に、網代の笠を傾けながら、薄明るい雪路を歩いてゐる、――かう云ふ姿を眺められるのは、それだけでも仕合せではありませんか？　が、わたしはこの上にも、もつと仕合になりたかつたのです。

わたしは淨嚴寺の裏へ來ると、一散に甚内へ追ひつきました。此處はずつと町家のない、土塀續きになつてゐますから、たとひ晝でも人目を避けるには、一番御誂への場所なのです。が、甚内はわたしを見ても、格別驚いた氣色は見せず、靜かに其處へ足を止めました。しかも杖をついたなり、わたしの言葉を待つやうに、一言も口を利かないのです。わたしは實際恐る恐る、甚内の前に手をつきました。しかしその落着いた顏を見ると、思ふやうに聲さへ出て來ません。

「どうか失禮は御免下さい。わたしは北條屋彌三右衞門の悴彌三郎と申すものです。——」

わたしは顏を火照らせながら、やつとかう口を切りました。

「實は少し御願ひがあつて、あなたの跡を慕つて來たのですが、……」

甚内は唯頷きました。それだけでも氣の小さいわたしには、どの位難有い氣がしたでせう。わたしは勇氣も出て來ましたから、やはり雪の中に手をついたなり、父の勘當を受けてゐる事、今はあぶれものの仲間にはひつてゐる事、今夜父の家へ盜みにはひつた所が、計らず甚内にめぐり合つた事、なほ又父と甚内との密談も一つ殘らず聞いた事、——そんな事を手短に話しました。が、甚内は不相變、默然と口を噤んだ儘、冷やかにわたしを見てゐるのです。わたしはその話をしてしまふと、一層膝を進ませながら、甚内の顏を覗きこみました。

「北條一家の蒙つた恩は、わたしにも亦かかつてゐます。わたしはその恩を忘れないしるしに、あなたの手下になる決心をしました。どうかわたしを使つて下さい。わたしは盜みも知つてゐます。火をつける術も知つてゐます。その外一通りの惡事だけは、人に劣らず知つてゐます。——」

しかし甚内は默つてゐます。わたしは胸を躍らせながら、愈熱心に說き立てました。

「どうかわたしを使つて下さい。わたしは必働きます。京、伏見、堺、大阪、——わたしの知らない土地はありません。

わたしは一日に十五里歩きます。力も四斗俵は片手に擧ります。人も二三人は殺して見ました。どうかわたしを使つて下さい。わたしはあなたの爲ならば、どんな仕事でもして見せます。伏見の城の白孔雀も、盜めと云へば盜んで來ます。「さん・ふらんしすこ」の寺の鐘樓も、燒けと云へば燒いて來ます。右大臣家の姬君も、拐せと云へば拐して來ます。奉行の首も取れと云へば、――」

わたしはかう云ひかけた時、いきなり雪の中へ蹴倒されました。

「莫迦め!」

甚内は一聲叱つた儘、元の通り歩いて行きさうにします。わたしは殆氣違ひのやうに、法衣の裾へ縋りつきました。

「どうかわたしを使つて下さい。わたしはどんな場合にも、きつとあなたを離れません。あなたの爲には水火にも入ります。あの「えそぽ」の話の獅子王さへ、鼠に救はれるではありませんか? わたしはその鼠になります。わたしは、

――」

「默れ。甚内は貴樣なぞの恩は受けぬ」

甚内はわたしを振り放すと、もう一度其處へ蹴倒しました。

「白癩めが! 親孝行でもしろ!」

わたしは二度目に蹴倒された時、急に口惜しさがこみ上げて來ました。

「よし! きつと恩になるな!」

しかし甚内は見返りもせず、さつさと雪路を急いで行きます。何時かさし始めた月の光に、網代の笠を仄めかせながら。――それぎりわたしは二年の間、ずつと甚内を見ずにゐるのです。(突然笑ふ)「甚内は貴樣なぞの恩は受けぬ」

――あの男はかう云ひました。しかしわたしは夜の明け次第、甚代の代りに殺されるのです。

ああ、おん母「まりや」様！　わたしはこの二年間、甚内の恩を返したさに、どの位苦しんだか知れません。恩を返したさに？――いや、恩と云ふよりも、寧ろ恨を返したさにです。しかし甚内は何處にゐるか？　甚内は何をしてゐるか？――誰にそれがわかりませう？　第一甚内はどんな男か？――それさへ知つてゐるものはありません。わたしが遇つた賓雲水は、四十前後の小男です。が、柳町の廓にゐたのは、まだ三十を越えてゐない、赭ら顔に鬚の生へた、浪人だと云ふではありませんか？　歌舞伎の小屋を擾がしたと云ふ、腰の曲つた紅毛人、妙國寺の財寶を掠めたと云ふ、前髪の垂れた若侍、――さう云ふのを皆甚内とすれば、あの男の正體を見分ける事さへ、到底人力には及ばない筈です。其處へわたしは去年の末から、吐血の病に罹つてしまひました。

どうか恨みを返してやりたい――わたしは日毎に痩せ細りながら、その事ばかり考へてゐました。すると或夜わたしの心に、突然閃いた一策があります。「まりや」様！「まりや」様！　この一策を御教へ下すつたのは、あなたの御慈みに違ひありません。唯わたしの體を捨てる、吐血の病に衰へ果てた、骨と皮ばかりの體を捨てる、――それだけの覺悟をしさへすれば、わたしの本望は遂げられるのです。わたしはその夜嬉しさの餘り、何時までも獨り笑ひながら、同じ言葉を繰返してゐました。――「甚内の身代りに首を打たれる。甚内の身代りに首を打たれる。……」

甚内の身代りに首を打たれる――何とすばらしい事ではありませんか？　さうすれば勿論わたしと一しよに、甚内の罪も亡んでしまう、――甚内は廣い日本國中、何處でも大威張に歩けるのです。その代り（再び笑ふ）――その代りわたしは一夜の内に、稀代の大賊になれるのです。呂宋助左エ門の手代だつたのも、備前宰相の伽羅を切つたのも、利休居士の友だちになつたのも、沙室屋の珊瑚樹を詐つたのも、伏見城の金藏を破つたのも、八人の參河侍を斬り倒したのも、

――ありとあらゆる甚内の名譽は、悉わたしに奪はれるのです。（三度笑ふ）云はば甚内を助けると同時に、甚内の名前を殺してしまふ、一家の恩を返すと同時に、わたしの恨みも返してしまふ、――この位愉快な返報はありません。わたしがその夜嬉しさの餘り、笑ひ續けたのも當然です。今でも、――この牢の中でも、これが笑はずにゐられるでせうか？

わたしはこの策を思ひついた後、内裏へ盜みにはひりました。宵闇の夜の淺い内ですから、御簾越しに火影がちらついたり、松の中に花だけ仄めいたり、――そんな事も見たやうに覺えてゐます。が、長い廻廊の屋根から、人氣のない庭へ飛び下りると、忽ち四五人の警護の侍に、望みの通り搦められました。その時です。わたしを組み伏せた鬚侍は、一生懸命に繩をかけながら、「今度こそ甚内を手捕りにしたぞ」と、呟いてゐたではありませんか？　さうです。阿媽港甚内の外に、誰が内裏なぞへ忍びこみませう？　わたしはこの言葉を聞くと、必死にもがいてゐる間でも、思はず微笑を洩らしたものです。

「甚内は貴様なぞの恩にはならぬ。」――あの男はかう云ひました。しかしわたしは夜の明け次第、甚内の代りに殺されるのです。何と云ふ氣味の好い面當てでせう。わたしは首を曝された儘、あの男の來るのを待つてやります。甚内はきつとわたしの首に、聲のない哄笑を感ずるでせう。「どうだ、彌三郎の恩返しは？」――その哄笑はかう云ふのです。「お前はもう甚内では無い。阿媽港甚内はこの首なのだ。あの天下に噂の高い、日本第一の大盜人は！」（笑ふ）ああ、わたしは愉快です。この位愉快に思つた事は、一生に唯一度だけです。が、もし父の彌三右エ門に、わたしの曝し首を見られた時には、――（苦しさうに）勘忍して下さい。お父さん！　吐血の病に罹つたわたしは、たとひ首を打たれずとも、三年と命は續かないのです。どうか不孝は勘忍して下さい。わたしは極道に生まれましたが、兎に角一家の恩だけは返す事が出來たのですから。……

東京帝國大學 内興學會編纂 東洋學藝雜誌 改題發展第一號

學藝

四月號

◇東洋學藝雜誌の改題に際して……理學博士 杉浦重剛
◇櫻の變化性……理學博士 三好學◇太陽の研究……理學博士 新城新藏
□ラインハルトの民衆劇場……文學博士 山岸光宣
◇機關車及工場の煙の害 林學博士 三浦伊八郎◇摘草 醫學博士 伊藤篤太郎
◇屍蠟の話 醫學博士 三田定則◇科學的常識の養成 理學博士 佐々木秀一
□女兒は父を愛し男兒は母を愛す……理學博士 山内繁雄
◇德島縣林村土柱の地質的觀察 理學博士 脇水鐵五郎◇門 工學博士 伊東忠太
□性は如何にして決定するか……獸醫學博士 增井清
◇冬眠より醒めた動物 理學博士 石川千代松◇石炭油 理學博士 小藤文次郎
□動物の腦から人の腦まで……醫學博士 杉田直樹

◇北樺太及黑龍江下流の民族……理學博士 鳥居龍藏
◇災害率と災害激率……法學博士 森莊三郎
◇春だけ汐干狩の出來る譯……理學博士 妹尾秀次

□歐米に於る天然生活……林學博士 上原敬二
◇植物病虫害豫防法 理學博士 白井光太郎◇植物の祖先 理學博士 武田久吉
□人の心はどの位まで觀察されるか……文學博士 桑田芳藏
◇電子的原子價說 理學士 柴田雄次◇淺間噴火概說 理學博士 大森房吉
□職業と個性と能率との關係……醫學博士 高峰博
◇花を手折る人の心 理學博士 草野俊助◇科學と思想 理學士 石井重美
◇蘭引に就て……杉浦重剛◇鳩の生活……黑田はつ江◇各學會記事……
□春霞と花曇り……理學士 岡富信一
◇臺灣紀行……理學士 江崎悌三◇發明と發見……◇帝國學士院記事……

發行所 東京京橋區疊町一 振替東京四九〇〇 東京社（定價一部五拾錢郵稅一錢五厘 半年二圓四拾錢）各地の書店にあり

畢竟或る廣告の申込みは謝絕す 中央公論社

中央公論大賣捌所

東京[illegible]	[illegible]
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價　金八拾錢郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾四錢
但支那を除く

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓貳拾四錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓四拾八錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號増刊號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾七圓六拾八錢の割さなれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

圓八拾錢

郵税金五錢

一誌代郵税は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるるを拒まず
一代金引替小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
　一金一圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十一年三月三十一日印刷納本
大正十一年四月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木西三

發行所　東京市本郷區本郷三丁目六番地
中央公論社
電話　小石川一四四
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

